放送大学開設予定授業科目講義内容

平成12年10月

第　18　版

放送大学学園

教務部教務課

目　　次

1．共通科目（一般科目）

番号		頁	開設年次	作成年度	ﾒﾃﾞｨｱ	単位
	（人文系）					
1	生活学入門－日常生活の探求－ ……	1	10	9セ	R	2
2	生活文化史（’９８）……	3	10	9セ	ＴＶ	2
3	生活と地球社会（’９９）……	5	11	10セ	R	2
4	世界の教育（’９８）……	7	10	9セ	ＴＶ	2
5	教育の方法（’９９）……	9	11	10	ＴＶ	2
6	教育心理学 ……（平成12年度限り閉講）	11	9	8セ	R	2
7	心理学入門 ……	13	9	8セ	ＴＶ	2
8	心理学史（’９８）……	15	10	9	ＴＶ	2
9	フロンティア人間科学（’９８）……	17	10	9セ	ＴＶ	2
10	現代人のための哲学（’００）……	19	12	11	R	2
11	西洋思想の源流 ……（平成12年度限り閉講）	21	9	8	ＴＶ	2
12	プラグマティズムと現代 ……（平成12年度限り閉講）	25	9	8	R	2
13	倫理学入門 ……（平成12年度限り閉講）	27	9	8セ	R	2
14	宗教への招待（’９９）……	29	11	10セ	ＴＶ	2
15	国語学概論（’９８）……	31	10	9	R	2
16	日本語表現法 ……（平成12年度限り閉講）	33	9	8セ	R	2
17	国文学入門（’００）……	35	12	11セ	R	2
18	近代詩歌の歴史（’９９）……	37	11	10	R	2
19	歴史学の現在 ……（平成12年度限り閉講）	39	9	8セ	ＴＶ	2
20	日本の文化と思想（’９８）……	41	10	9	ＴＶ	2
	（社会系）					
21	社会科学入門 ……（平成12年度限り閉講）	43	9	8	ＴＶ	2
22	法学入門（’００）……	45	12	11	ＴＶ	2
23	国家と人間－憲法の基本問題－（平成12年度限り閉講）	47	9	8	ＴＶ	2
24	政治学入門（’００）……	49	12	11	R	2
25	国際関係論 ……	51	9	8	ＴＶ	2
26	経済学入門（’００）……	53	12	11セ	R	2
27	社会学入門 ……（平成12年度限り閉講）	55	9	8	R	2
28	社会福祉入門（’００）……	57	12	11	ＴＶ	2
29	社会調査の基礎 ……（平成12年度限り閉講）	59	8	7セ	ＴＶ	2
30	経営学入門（’９８）……	61	10	9	ＴＶ	2
31	日本の経営・欧米の経営 ……（平成12年度限り閉講）	63	8	7	R	2
32	情報基礎管理学（’００）……	65	12	11	ＴＶ	2
33	日本の技術と産業の発展 ……	67	8	7	ＴＶ	2
34	科学と技術の歴史（’９９）……	69	11	10	ＴＶ	2
35	先端工学 ……（平成12年度限り閉講）	71	9	8	ＴＶ	2

		頁	開設年次	作成年度	ﾒﾃﾞｨｱ	単位
	（自然系）					
36	数学の歴史 ……	73	9	8セ	R	2
37	微積分入門Ⅰ（’９８）……	75	10	9	ＴＶ	2
38	微積分入門Ⅱ（’９９）……	77	11	10	ＴＶ	2
39	線型代数Ⅰ（’９９）……	79	11	10セ	ＴＶ	2
40	線型代数Ⅱ（’００）……	81	12	11	ＴＶ	2
41	確率論 ……（平成12年度限り閉講）	83	9	8	R	2
42	統計学 ……（平成12年度限り閉講）	85	9	8	R	2
43	物理の世界（’９９）……	87	11	10	ＴＶ	2
44	物理・化学通史（’９９）……	89	11	10セ	R	2
45	基礎化学（’９８）……	91	10	9	ＴＶ	2
46	物質の科学と技術開発（’９９）……	93	11	10	R	2
47	基礎生物学（’９８）……	95	10	9セ	ＴＶ	2
48	人間の生物学（’９９）……	97	11	10	ＴＶ	2
49	生物学の歴史 ……（平成12年度限り閉講）	99	9	8セ	R	2
50	病気の成立ちと仕組み ……	101	9	8	R	2
51	地球とその歴史（’００）……	105	12	11	ＴＶ	2
52	宇宙とその歴史（’００）……	107	12	11セ	ＴＶ	2
53	宇宙像の変遷と人間（’００）……	109	12	11	ＴＶ	2
54	科学実験法 ……	111	9	8	ＴＶ	2
平成13年度開設改訂科目						
	（人文系）					
	教育心理学通論（’０１）……	113	13	12	R	2
	現代アメリカ思想（’０１）……	115	13	12	R	2
	倫理思想の源流（’０１）……	117	13	12	ＴＶ	2
	歴史学の現在（’０１）……	121	13	12	ＴＶ	2
	（社会系）					
	立憲主義と日本国憲法（’０１）……	123	13	12	ＴＶ	2
	社会学入門（’０１）……	125	13	12セ	ＴＶ	2
	社会調査の基礎（’０１）……	129	13	12セ	R	2
	日米欧の企業経営（’０１）……	131	13	12	ＴＶ	2
	（自然系）					
	確率と統計（’０１）……	133	13	12	R	2
	生物学の歴史（’０１）……	135	13	12	R	2
	疾病の成立と回復促進（’０１）……	137	13	12	ＴＶ	2
	人体の構造と機能（’０１）……	139	13	12	ＴＶ	2

2. 共通科目（外国語科目）

		頁	開設年次	作成年度	ﾒﾃﾞｨｱ	単位
	（英語）					
55	英語Ⅰ（’９６）……（平成12年度限り閉講）	141	8	7	R	2
56	英語Ⅱ（’９８）……	143	10	9	R	2
57	英語Ⅲ（’９７）……	145	9	8	ＴＶ	2
58	英語Ⅳ（’９９）……	147	11	10	ＴＶ	2
59	英語Ⅴ（’９７）……（平成12年度限り閉講）	149	9	8セ	R	2
60	英語Ⅵ（’９９）……	151	11	10セ	R	2
61	英語Ⅶ（’９７）……（平成12年度限り閉講）…	153	9	8セ	R	2
	（ドイツ語）					
62	ドイツ語Ⅰ（’９８）……	155	10	9セ	ＴＶ	2
63	ドイツ語Ⅱ（’９８）……	157	10	9セ	ＴＶ	2
64	ドイツ語Ⅲ（’９７）……	159	9	8	R	2
65	ドイツ語Ⅳ（’９８）……	161	10	9セ	R	2
	（フランス語）					
66	フランス語Ⅰ……	163	9	8セ	ＴＶ	2
67	フランス語Ⅱ……	165	9	8セ	ＴＶ	2
68	フランス語Ⅲ（’９８）……	167	10	9セ	R	2
69	フランス語Ⅳ（’９８）……	169	10	9セ	R	2
	（中国語）					
70	中国語Ⅰ……（平成12年度限り閉講）・	171	9	8	R	2
71	中国語Ⅱ……（平成12年度限り閉講）・	173	9	8	R	2
72	中国語Ⅲ（’００）……	175	12	11	R	2
73	中国語Ⅳ（’９８）……	177	10	9	R	2
	（ロシア語）					
74	ロシア語Ⅰ……（平成12年度限り閉講）・	179	9	8	R	2
75	ロシア語Ⅱ……（平成12年度限り閉講）・	181	9	8	R	2
	（スペイン語）					
76	スペイン語Ⅰ（’９９）……	183	11	10	R	2
77	スペイン語Ⅱ（’９８）……	185	10	9	R	2
平成13年度開設改訂科目						
	（英　語）					
	英語Ⅰ（’０１）……	187	13	12	R	2
	英語Ⅴ（’０１）……	189	13	12	R	2
	（中国語）					
	中国語Ⅰ（’０１）……	191	13	12	ＴＶ	2
	中国語Ⅱ（’０１）……	193	13	12	R	2
	（ロシア語）					
	ロシア語Ⅰ（’０１）……	195	13	12	R	2
	ロシア語Ⅱ（’０１）……	197	13	12	R	2

3. 共通科目（保健体育）

		頁	開設年次	作成年度	ﾒﾃﾞｨｱ	単位
78	保健体育 ……（平成12年度限り閉講）・	199	9	8セ	ＴＶ	2
	体育実技 ……		—	—	—	1
平成13年度開設改訂科目						
	保健体育（’０１）……	201	13	12	ＴＶ	2

4. 共通科目（基幹・主題科目）

	（基幹科目）					
79	現代日本の教育課題（’９９）……	203	11	10	ＴＶ	2
80	現代日本の地方自治（’９９）……	205	11	10	ＴＶ	2
81	日本の自然（’９８）……	207	10	9	ＴＶ	2
82	現代生活論（’００）……	209	12	11	ＴＶ	2
83	認知科学（’００）……	211	12	11セ	ＴＶ	2
84	舞台芸術の現在（’００）……	213	12	11	ＴＶ	2
85	現代生物科学（’００）……	217	12	11	ＴＶ	2
	（主題科目）					
86	地球環境を考える（’９９）……	219	11	10	ＴＶ	2
87	共生の時代を生きる（’００）……	221	12	11	ＴＶ	2
平成13年度開設改訂科目						
	（基幹科目）					
	科学の思想と論理（’０１）……	223	13	12	Ｒ	2
	（主題科目）					
	現代社会とスポーツ（’０１）……	225	13	12	ＴＶ	2
	家族論（’０１）……	227	13	12	ＴＶ	2

5. 専門科目

	生活と福祉	頁	開設年次	作成年度	ﾒﾃﾞｨｱ	単位
	（生活一般）					
88	家族と生活ストレス（’００）	229	12	11	R	2
89	近代社会と人生経験（’９９）	231	11	10	R	2
90	生活者の経済（’００）	235	12	11セ	R	2
91	生活経営論 （平成12年度限り閉講）	237	9	8セ	R	2
92	消費者問題の展開と対応	239	10	9	R	2
93	日本人口論－高齢化と人口問題－	241	10	9セ	R	2
	（衣・食・住）					
94	衣・食・住の科学	243	8	7	R	2
95	現代モード論（’００）	245	12	11セ	ＴＶ	2
96	洗濯と洗剤の科学（’９８）	247	10	9セ	ＴＶ	2
97	着ごこちの追究（’９９）	249	11	10	ＴＶ	2
98	地域と食文化（’９９）	251	11	10セ	R	2
99	食物とからだ（’００）	253	12	11	ＴＶ	2
100	調理とおいしさの科学（’９８）	255	10	9セ	ＴＶ	2
101	食生活をめぐる諸問題（’００）	257	12	11	R	2
102	住まい学入門（’９８）	259	10	9	ＴＶ	2
103	世界の住まいと暮らし（’９９）	261	11	10セ	ＴＶ	2
104	日本における集合住宅計画の変遷	265	10	9	ＴＶ	2
105	新しい都市居住の空間 （平成12年度限り閉講）	267	9	8セ	ＴＶ	2
	（健康科学）					
106	医療・社会・倫理（’９９）	269	11	10セ	R	2
107	看護学概論 （平成12年度限り閉講）	273	9	8	ＴＶ	2
108	母子の健康科学（’００）	275	12	11セ	R	2
109	青年期の健康科学 （平成12年度限り閉講）	277	9	8	R	2
110	高齢者の心と身体（’００）	281	12	11セ	R	2
111	こころの健康科学（’９９）	283	11	10	R	2
112	脳と生体統御（’９８）	285	10	9	ＴＶ	2
113	発がんとその予防 （平成12年度限り閉講）	287	8	7	R	2
114	循環器科学（’００）	289	12	11	ＴＶ	2
115	薬の歴史・開発・使用（’００）	291	12	11	R	2
	（社会福祉）					
116	子ども家庭福祉論（’９８）	293	10	9	ＴＶ	2
117	障害者福祉論 （平成12年度限り閉講）	297	9	8	R	2
118	高齢者福祉（’９９）	299	11	10	R	2
119	地域福祉（’９９）	301	11	10	R	2
120	現代の貧困と公的扶助（’９８）	303	10	9	R	2
121	年金・医療保険論（’００）	305	12	11	R	2

		頁	開設年次	作成年度	ﾒﾃﾞｨｱ	単位
122	世界の社会福祉 ……	307	9	8	ＴＶ	2
123	高齢社会の生活設計 ……	311	8	7セ	Ｒ	2
平成13年度開設改訂科目						
	（生活一般）					
	生活の経営（’０１）……	313	13	12	Ｒ	2
	（健康科学）					
	看護学概説（’０１）……	315	13	12セ	Ｒ	2
	公衆衛生（’０１）……	317	13	12	Ｒ	2
	がんの健康科学（’０１）……	319	13	12	ＴＶ	2
	（社会福祉）					
	障害者福祉（’０１）……	321	13	12	Ｒ	2

発達と教育

	（教育学）					
124	教育的人間学（’９８）……	323	10	9セ	Ｒ	2
125	近代の教育思想（’９８）……	325	10	9	Ｒ	2
126	教育の歴史（’００）……	327	12	11	ＴＶ	2
127	教育社会学（’９８）……	329	10	9セ	ＴＶ	2
128	道徳教育（’９９）……	331	11	10	ＴＶ	2
129	幼児教育の社会学（’９８）……	333	10	9セ	Ｒ	2
130	現代社会の学力（’９９）……	335	11	10	Ｒ	2
131	教育の政治経済学（’００）……	337	12	11セ	ＴＶ	2
132	子どもと若者の文化 ……（平成12年度限り閉講）…	339	9	8セ	ＴＶ	2
133	変わる社会と大学 ……（平成12年度限り閉講）…	341	9	8セ	Ｒ	2
134	家庭・学校と地域社会（’００）……	343	12	11	ＴＶ	2
135	国際化と教育（’９９）……	345	11	10セ	Ｒ	2
136	メディアと教育（’９９）……	347	11	10セ	ＴＶ	2
	（心理学）					
137	知覚心理学 ……（平成12年度限り閉講）…	349	9	8セ	ＴＶ	2
138	認知心理学 ……（平成12年度限り閉講）…	351	8	7セ	ＴＶ	2
139	学習の心理学（’００）……	353	12	11セ	ＴＶ	2
140	発達心理学（’９８）……	355	10	9	ＴＶ	2
141	発達と学習（’００）……	357	12	11セ	Ｒ	2
142	乳幼児心理学 ……	361	9	8	ＴＶ	2
143	児童心理学（’９８）……	363	10	9	Ｒ	2
144	老年期の心理と病理（’９８）……	365	10	9セ	Ｒ	2
145	言語発達心理学（’９８）……	367	10	9セ	Ｒ	2
146	社会心理学－アジア的視点から－ ……	369	10	9	ＴＶ	2

		頁	開設年次	作成年度	ﾒﾃﾞｨｱ	単位
147	人格心理学（’００）……	371	12	11	ＴＶ	2
148	臨床心理学概説（’９９）……	373	11	10	Ｒ	2
149	児童の臨床心理（’９８）……	375	10	9セ	Ｒ	2
150	現代精神分析学（’００）……	377	12	11	Ｒ	2
151	カウンセリング ……（平成12年度限り閉講）…	379	8	7	Ｒ	2
	（教育・心理）					
152	生涯発達と生涯学習 ……	381	9	8セ	Ｒ	2
153	教育の中の言葉（’９９）……	383	11	10セ	Ｒ	2
154	生徒指導（’９９）……	385	11	10セ	ＴＶ	2
155	教育評価（’９９）……	387	11	10	Ｒ	2
156	心理測定法（’９８）……	389	10	9	ＴＶ	2
平成13年度開設改訂科目						
	（教育学）					
	子どもと若者の文化（’０１）……	391	13	12	ＴＶ	2
	（心理学）					
	知覚心理学（’０１）……	393	13	12	ＴＶ	2
	労働と生活の心理学（’０１）……	395	13	12	ＴＶ	2
	カウンセリング概説（’０１）……	397	13	12	Ｒ	2

社会と経済

	（法律学）					
157	日本の法システム（’００）……	399	12	11セ	Ｒ	2
158	法と裁判（’００）……	401	12	11セ	ＴＶ	2
159	民法（’９８）……	403	10	9セ	ＴＶ	2
160	家族法（’９８）……	405	10	9	ＴＶ	2
161	商法（’９９）……	407	11	10セ	Ｒ	2
162	行政の法システム入門（’９８）……	409	10	9セ	Ｒ	2
163	刑法学 ……（平成12年度限り閉講）…	411	9	8セ	Ｒ	2
164	経済法（’００）……	413	12	11	Ｒ	2
165	雇用と法（’９９）……	415	11	10	Ｒ	2
166	法からみる国際関係（’９８）……	417	10	9	Ｒ	2
167	現代法の諸相（’９９）……	419	11	10セ	Ｒ	2
	（政治学）					
168	日本政治史 ……	421	9	8セ	Ｒ	2
169	西欧都市の政治史 ……（平成12年度限り閉講）…	423	9	8	Ｒ	2
170	比較政治学（’００）……	425	12	11	Ｒ	2
171	第三世界の政治 ……（平成12年度限り閉講）…	427	8	7セ	Ｒ	2
172	現代アメリカの政治 ……	429	9	8	ＴＶ	2
173	国際政治（’００）……	431	12	11	ＴＶ	2

		頁	開設年次	作成年度	ﾒﾃﾞｨｱ	単位
174	日本政治思想史 ……（平成12年度限り閉講）・	433	9	8セ	R	2
175	近代国家と近代革命の政治思想（平成12年度限り閉講）	435	9	8	R	2
176	政治過程の比較分析（’９９）……	437	11	10	ＴＶ	2
177	現代日本の政治変動（’９９）……	439	11	10セ	ＴＶ	2
178	現代の行政（’００）……	441	12	11	R	2
	（経済学）					
179	現代の経済学 ……（平成12年度限り閉講）・	443	8	7セ	ＴＶ	2
180	金融論（’９９）……	445	11	10	ＴＶ	2
181	財政学（’００）……	447	12	11	ＴＶ	2
182	国際経済学 ……（平成12年度限り閉講）・	449	9	8	R	2
183	日本経済史（’９９）……	451	11	10	R	2
184	欧米経済史（’９９）……	453	11	10セ	R	2
185	経済学史入門 ……（平成12年度限り閉講）・	455	9	8セ	ＴＶ	2
186	経済社会の現代（’９８）……	457	10	9セ	ＴＶ	2
	（社会学）					
187	比較文明の社会学 ……	459	9	8	ＴＶ	2
188	メディア論 ……（平成12年度限り閉講）・	461	9	8セ	ＴＶ	2
189	コミュニティ論（’９８）……	463	10	9	R	2
190	逸脱の社会学（’９８）……	465	10	9セ	R	2
191	ジェンダーの社会学（’９９）……	467	11	10	R	2
192	都市空間の比較社会学（’９９）……	469	11	10セ	ＴＶ	2
193	環境社会学（’９９）……	471	11	10	ＴＶ	2
194	都市社会の人間関係（’００）……	475	12	11セ	R	2
平成13年度開設改訂科目						
	（法律学）					
	刑法（’０１）……	477	13	12	R	2
	（政治学）					
	ヨーロッパ政治史（’０１）……	479	13	12	R	2
	第三世界の政治（’０１）……	481	13	12	R	2
	日本政治思想史（’０１）……	483	13	12	R	2
	西洋政治思想史（’０１）……	485	13	12	R	2
	（経済学）					
	現代経済学（’０１）……	487	13	12セ	ＴＶ	2
	国際経済学（’０１）……	489	13	12	R	2
	経済学史入門（’０１）……	491	13	12	ＴＶ	2
	（社会学）					
	メディア論（’０１）……	493	13	12セ	ＴＶ	2

	産業と技術	頁	開設年次	作成年度	ﾒﾃﾞｨｱ	単位
	（経営学）					
195	経営学 ……（平成12年度限り閉講）・	497	8	7	ＴＶ	2
196	経営工学総論（’００）……	499	12	11	Ｒ	2
197	生産性科学入門（’９９）……	501	11	10セ	ＴＶ	2
198	生産経営論 ……（平成12年度限り閉講）・	503	9	8	ＴＶ	2
199	生産の設備化と経営（’９８）……	505	10	9	ＴＶ	2
200	産業と労使の関係（’９９）……	507	11	10	ＴＶ	2
201	マーケティング論（’９９）……	511	11	10セ	Ｒ	2
202	企業の経済学（’９９）……	513	11	10セ	Ｒ	2
203	社会の中の会計（’００）……	515	12	11セ	ＴＶ	2
204	管理会計（’９９）……	517	11	10	Ｒ	2
205	税務会計（’９８）……	519	10	9	Ｒ	2
206	現代ファイナンス入門（’００）……	523	12	11	Ｒ	2
207	不動産学の基礎 ……	525	9	8セ	ＴＶ	2
	（産業論）					
208	現代産業組織論 ……（平成12年度限り閉講）….	527	9	8セ	Ｒ	2
209	情報産業論（’００）……	529	12	11セ	Ｒ	2
210	ネットワーク産業論（’００）……	531	12	11	Ｒ	2
211	ベンチャー企業論 ……（平成12年度限り閉講）…	533	9	8	Ｒ	2
212	サービス産業論 ……（平成12年度限り閉講）…	535	8	7	ＴＶ	2
213	大地と人間－食・農・環境の未来－……	537	10	9	ＴＶ	2
214	農業経営 ……	539	9	8	Ｒ	2
215	発展途上国の開発戦略（’９９）……	541	11	10	Ｒ	2
216	都市・地域経営（’９９）……	543	11	10セ	ＴＶ	2
217	都市と生活空間の工学（’００）……	545	12	11	ＴＶ	2
218	環境アセスメント（’００）……	547	12	11	ＴＶ	2
	（工学・技術）					
219	エネルギー工学と社会（’９９）……	549	11	10	ＴＶ	2
220	電子技術と社会（’００）……	551	12	11	ＴＶ	2
221	情報工学（’９９）……	553	11	10	ＴＶ	2
222	プログラミング入門（’００）……	555	12	11セ	ＴＶ	2
223	産業人間工学（’００）……	557	12	11	ＴＶ	2
224	設計学（’００）……	559	12	11	ＴＶ	2
225	計測と制御 ……（平成12年度限り閉講）…	561	9	8セ	ＴＶ	2
226	21世紀への技術発展（’９９）……	563	11	10	Ｒ	2
平成13年度開設改訂科目						
	（経営学）					
	イノベーション経営（’０１）……	565	13	12	ＴＶ	2

		頁	開設年次	作成年度	ﾒﾃﾞｨｱ	単位
	（産業論）					
	現代産業組織論（’０１）……	567	13	12	R	2
	ベンチャー企業論（’０１）……	569	13	12	R	2
	（工学・技術）					
	材料工学と社会（’０１）……	571	13	12セ	ＴＶ	2
	バイオテクノロジー（’０１）……	573	13	12	ＴＶ	2
	情報工学と社会（’０１）……	575	13	12	ＴＶ	2

人間の探究

	（哲学）					
227	ギリシャ哲学（’９９）……	577	11	10セ	R	2
228	西洋近世哲学史（’９９）……	579	11	10	R	2
229	美と詩の哲学（’９９）……	581	11	10	R	2
230	現象学入門（’００）……	583	12	11	R	2
231	人生の哲学（’９８）……	585	10	9セ	R	2
232	宗教の哲学（’００）……	587	12	11セ	R	2
233	老荘思想（’００）……	589	12	11	R	2
234	仏教思想 ……（平成12年度限り閉講）…	591	9	8	R	2
	（文学）					
235	日本語の変遷 ……（平成12年度限り閉講）…	593	9	8	R	2
236	日本語教育概論 ……（平成12年度限り閉講）…	595	9	8セ	ＴＶ	2
237	書誌学（’９９）……	597	11	10	ＴＶ	2
238	上代の日本文学（’００）……	599	12	11	R	2
239	中古の日本文学 ……（平成12年度限り閉講）…	601	9	8セ	R	2
240	中世日本文学の風景（’００）……	603	12	11セ	R	2
241	近世の日本文学（’９８）……	605	10	9	R	2
242	近代の日本文学 ……（平成12年度限り閉講）…	607	9	8セ	R	2
243	清少納言と紫式部（’９８）……	609	10	9セ	R	2
244	徒然草の遠景（’９８）……	611	10	9	R	
245	中国古典詩学 ……（平成12年度限り閉講）…	613	9	8	ＴＶ	2
246	中国における小説の成立 ……（平成12年度限り閉講）…	615	9	8	R	2
	（史学）					
247	発掘された古代日本（’９９）……	617	11	10セ	ＴＶ	2
248	日本の古代 ……（平成12年度限り閉講）…	619	8	7セ	ＴＶ	2
249	日本の中世（’９８）……	621	10	9セ	R	2
250	日本の近世（’９８）……	623	10	9セ	ＴＶ	2
251	19世紀日本の歴史（’００）……	627	12	11	R	2
252	朝鮮の歴史と社会（’００）……	629	12	11セ	R	2
253	中国の歴史と社会（’９８）……	631	10	9	R	2
254	南アジアの文化を学ぶ（’００）……	633	12	11	ＴＶ	2

		頁	開設年次	作成年度	ﾒﾃﾞｨｱ	単位
255	イスラーム世界史 ……	635	9	8セ	R	2
256	古典古代の歴史（’００）……	637	12	11	ＴＶ	2
257	ヨーロッパの歴史 ……（平成12年度限り閉講）・	639	8	7セ	ＴＶ	2
258	ヨーロッパと近代世界 ……（平成12年度限り閉講）・	641	9	8セ	R	2
259	アメリカの歴史（’００）……	643	12	11セ	ＴＶ	2
	（美学・芸術論）					
260	芸術の古典と現代 ……	645	9	8セ	ＴＶ	2
261	イメージの歴史（’００）……	647	12	11	ＴＶ	2
262	西洋音楽の歴史 ……（平成12年度限り閉講）…	651	9	8セ	ＴＶ	2
263	日本音楽の基礎概念（’００）……	653	12	11	R	2
264	応用音楽学（’００）……	655	12	11	R	2
265	演劇を読む ……	657	9	8	ＴＶ	2
	（比較文化・地域研究）					
266	文化人類学（’００）……	659	12	11セ	ＴＶ	2
267	世界の民族（’９８）……	661	10	9	ＴＶ	2
268	博物館概論（’９９）……	663	11	10	ＴＶ	2
269	博物館資料論（’００）……	665	12	11	ＴＶ	2
270	博物館経営・情報論（’００）……	667	12	11	R	2
271	言語学（’９９）……	669	11	10	ＴＶ	2
	（外国の言語・文化・社会）					
272	ギリシャ・ローマ文学（’００）……	671	12	11	R	2
273	イギリス文学（’９８）……	673	10	9セ	R	2
274	ドイツ文学（’９８）……	675	10	9セ	R	2
275	フランスの文学（’９８）……	677	10	9	R	2
平成13年度開設改訂科目						
	（哲学）					
	仏教思想（’０１）……	679	13	12セ	R	2
	現代の哲学（’０１）……	681	13	12	R	2
	（文学）					
	日本語の歴史（’０１）……	683	13	12	R	2
	平安朝の文学（’０１）……	685	13	12	R	2
	近代の日本文学（’０１）……	687	13	12	R	2
	中国明清時代の文学（’０１）……	689	13	12	R	2
	（史学）					
	古代日本の歴史（’０１）……	691	13	12	ＴＶ	2
	ヨーロッパの歴史（’０１）……	693	13	12	ＴＶ	2
	ヨーロッパと近代世界（’０１）……	695	13	12セ	R	2
	（美学・芸術論）					
	西洋音楽の歴史（’０１）……	697	13	12	ＴＶ	2

	自然の理解	頁	開設年次	作成年度	ﾒﾃﾞｨｱ	単位
	（数学）					
276	応用数学（’９９）……	699	11	10	R	2
277	対称性の数学（’９８）……	701	10	9セ	R	2
278	解析学（’００）……	703	12	11	R	2
279	数学基礎論（’９９）……	705	11	10セ	R	2
280	計算の理論（’９９）……	707	11	10	R	2
281	データとデータ解析 ……（平成12年度限り閉講）・	709	8	7	R	2
282	統計の考え方（’００）……	711	12	11セ	R	2
283	カオスの数理と技術 ……（平成12年度限り閉講）・	713	9	8セ	ＴＶ	2
284	パソコンによる解析学（’９９）……	715	11	10	ＴＶ	2
	（物質科学）					
285	力学 ……（平成12年度限り閉講）・	717	9	8セ	ＴＶ	2
286	光と電磁場 ……（平成12年度限り閉講）・	719	8	7	ＴＶ	2
287	エネルギーと熱（’９８）……	721	10	9セ	ＴＶ	2
288	相対論（’９９）……	723	11	10セ	R	2
289	量子力学 ……（平成12年度限り閉講）・	725	9	8	ＴＶ	2
290	現代物理学 ……（平成12年度限り閉講）・	727	9	8	ＴＶ	2
291	物性物理学入門（’００）……	729	12	11	ＴＶ	2
292	物質の科学・量子化学（’９８）……	731	10	9	ＴＶ	2
293	物質の科学・反応と物性（９９）……	733	11	10	ＴＶ	2
294	物質の科学・有機化合物（９８）……	735	10	9	ＴＶ	2
295	物質の科学・分析（’９８）……	737	10	9セ	ＴＶ	2
296	化学熱力学 ……（平成12年度限り閉講）・	739	7	6	R	2
297	光と物質（’００）……	741	12	11セ	ＴＶ	2
	（生物科学）					
298	生命と物質 ……	743	9	8セ	ＴＶ	2
299	植物の生理（’００）……	745	12	11	ＴＶ	2
300	生態学（’９９）……	747	11	10	ＴＶ	2
301	分子生物学 ……（平成12年度限り閉講）・	749	9	8セ	ＴＶ	2
302	生物の進化と多様性（’９９）……	751	11	10セ	ＴＶ	2
303	動物の行動と社会（’００）……	753	12	11	ＴＶ	2
304	細胞生物学（’９８）……	755	10	9	ＴＶ	2
	（宇宙地球科学）					
305	太陽系の科学（’９９）……	757	11	10	ＴＶ	2
306	天体物理学入門 ……	759	9	8	ＴＶ	2
307	天体と宇宙の進化Ⅰ ……（平成12年度限り閉講）・	761	9	8	ＴＶ	2
308	天体と宇宙の進化Ⅱ ……（平成12年度限り閉講）・	763	9	8	ＴＶ	2
309	固体地球 ……	765	8	7セ	ＴＶ	2
310	日本列島の地球科学（’９９）……	767	11	10セ	ＴＶ	2

	頁	開設年次	作成年度	ﾒﾃﾞｨｱ	単位
平成13年度開設改訂科目					
（数学）					
データの科学（’０１）……	769	13	12	R	2
カオス学入門（’０１）……	771	13	12	ＴＶ	2
（物質科学）					
運動と力（’０１）……	773	13	12	ＴＶ	2
光と電磁場（’０１）……	775	13	12	ＴＶ	2
量子力学（’０１）……	777	13	12	ＴＶ	2
微生物機能に学ぶ化学（’０１）……	779	13	12セ	R	2
（生物科学）					
分子生物学（’０１）……	781	13	12	ＴＶ	2
（宇宙地球科学）					
宇宙の進化（’０１）……	783	13	12セ	ＴＶ	2
宇宙の観測（’０１）……	785	13	12	ＴＶ	2

＝生活学入門＝（R）

― 日常生活の探求 ―

〔主任講師：大久保 孝治 （早稲田大学教授）〕
〔主任講師：嶋﨑 尚子 （早稲田大学助教授）〕

全体のねらい

日常生活というものを客観的かつ新鮮な目でとらえること。そのためには、（1）日常生活の自明性を 疑ってかかること、（2）日常生活を記述・分析するのに必要な単語（専門用語）と文法（理論）を学習すること、（3）全体社会と個人生活との間の関係について常に考えることが大切である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	言葉 (1) 言葉と世界	たとえば、日本人にとって虹は七色だが、文化（言葉）によって虹は六色であったり、五色であったり、それ以下であったりする。人間と世界（事物）との間には言葉が存在する。人間は言葉というフィルターを通して世界を見ているのである。日常生活の探求を開始するに当たって、まず、この事実をしっかり把握しておく必要がある。	大久保孝治（早稲田大学教授）	大久保孝治（早稲田大学教授） 嶋﨑尚子（早稲田大学助教授）
2	言葉 (2) 名前	「あなたは誰？」と聞かれれば、われわれは自分の名前を答える。名前は自分という存在にとって不可欠の要素である。しかし、誰も自分の名前（本名）を自分で決めることはできない。当たり前のことのようでいて、これは重要なことである。命名という社会的行為をめぐって、そこにどのような規範が存在するのかを考える。	同上	同上
3	言葉 (3) 言葉と社会	言葉は社会構造と密接に関連している。言葉の文化をみることで社会構造の特徴を描き出すことができる。ここでは家族観、ジェンダー観をとりあげる。一方で言葉は社会の変化と呼応して変化する。言葉の収斂と多様化の２方向から考える。	嶋﨑尚子（早稲田大学助教授）	同上
4	身体 (1) 自然・身体・社会	身体行動は、自然なものでありかつ社会的所産である。生物的身体と社会的身体ある。われわれは社会化・文化化をとおして社会的身体へ変容していくのである。われわれの身体的行動の社会性を動作ならびに喜怒哀楽の表現か。	大久保孝治	同上
5	身体 (2) 「私」と身体	自己と自己の身体は重なり合い、人は鏡に映った自分（の身体）をみて「これが私だ」と確認する。身体は自己と「私」の境界線として位置づけられる。しかし身体の変容によってわれわれは自己と自己の身体とのズレを経験する。成長と老化の過程は、ズレの修正の過程でもある。	同上	同上
6	身体 (3) 身体・生命 ―その再生産―	女性の再生産行為は自然秩序の一部としてとらえられがちであるが、社会性、文化性を帯びている。出産場面みてもその社会性は明らかである。さらに近年の急速な人口生殖技術の発展により、身体のみならず生命の社会性が高められている。そうした現状を考えていく。	嶋﨑尚子	同上
7	メディア (1) 電話	特定の個人と特定の個人を双方向的に結びつけるメディアをパーソナル・メディアと呼ぶ。パーソナル・メディアの代表といえるものが電話である。電話の導入の歴史と最近の携帯電話の急速な普及について触れながら、対面的なコミュニケーションと電話による電話によるコミュニケーションの相違について考える。	大久保孝治	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	メディア (2) テレビ	不特定多数の人々に向けて一方的な情報の伝達をおこなうメディアをマス・メディアと呼ぶ。その代表であるテレビは、現代の生活に不可欠なほどに普及している。テレビが何を伝え、何を伝えないかを知ることは、テレビの受け手であるわれわれにとり重要なことである。	大久保孝治	大久保孝治 嶋崎尚子
9	メディア (3) 空間移動のメディア	モノや人の移動手段である輸送・交通メディアは、20世紀をとおして急速に進歩した。空間移動のメディアは、物質の流通にとどまらず時間統一、国家語成立、認知世界の拡大をもたらす。一方ではマイカーというパーソナルなメディアは、移動における空間的閉鎖性を高める。両者の展開を考える。	嶋崎尚子	同上
10	他者 (1) 「あなた」	他者関係の基本は２者間関係（ダイアド）にある。親子、夫婦、友人、恋人これらの２者間関係は、血縁、姻縁、友情、恋愛感情といった別個の縁によって形成され、その関係性も固有である。ここではこれらの関係のメカニズムの特徴について考察する。	同上	同上
11	他者 (2) 「彼・彼女」	他者との関係は直接的接触による場合でも、個人の生活や人生に与える影響に多少がある。深く関わる他者が「あなた」であるなら、部分的に関わる他者を「彼・彼女」と呼ぶことができる。接触者と関与者をキー概念に個人と他社との相互作用の質を考察する。	同上	同上
12	他者 (3) 「彼ら」	直接には接触しない他者、「名前のない他者」は社会規範の代理人としてわれわれ生活に関与している。「名前のない他者」の総質量は膨大であり、その重力によって社会空間は一定の構造を与えられる。「社会」とはそうした社会空間であり、近代社会は共同体と市場の二重構造から成立している。	大久保孝治	同上
13	時間 (1) 時計と手帳	時計と手帳は近代社会における時間意識の象徴である。近代社会は、時間に多大な価値を与えている。日常生活は、種々の時間をめぐる規範に従っている。また時間は人生の志向性の軸であり、未来志向性と現実志向性は人々の行動様式を規定する。時間志向性は「生き方」にほかならない。	同上	同上
14	時間 (2) 生活時間の構造	個人は資源として平等にもっている１日24時間という時間をどのような活動に配分しているのだろうか。生活時間研究は、1960年代以降、社会科学において活発に展開されている。ここでは研究の基本的な視点ならびに現代日本社会での個人の生活時間構造の特徴について考察する。	嶋崎尚子	同上
15	時間 (3) 年齢	年齢は基本的な社会的カテゴリーである。年齢規範、年齢階梯制など年齢を軸に多くの社会制度が成立している。同時に年齢はライフコースの軸でもある。年齢を軸にしたライフコースは近代人の特徴といえる。こうした２次元から近代社会における年齢意識・年齢差別を考えていく。	同上	同上

＝ 生活文化史（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：平井　聖（昭和女子大学教授）〕

全体のねらい

日本の生活文化は、中国大陸や朝鮮半島からの影響を受けながら築かれてきた。そして、この百年余は、欧米の文化を受け入れ続けている。そこで、日本の生活文化の基礎を築くのに重要な役割を果たした中国及び韓国の人々の生活をみながら、欧米の生活も併せ考えて、日本の住を中心とする生活文化とその特色について見直したいと思う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	はじめに	住居を中心とした日本の生活文化の基本的な性格を、中国ならびに韓国の生活文化と比較しながら考察するこの生活文化史のねらいである。住生活をさまざまな行為に分解したそれぞれの項目の意味や視点などについて説明する。	平井　聖（昭和女子大学教授）	平井　聖（昭和女子大学教授）
2	ねる－１	「ねる」という姿勢は、「すわる」姿勢と共に、住生活における基本的な姿勢である。また、眠るということは、起きていることと、生活時間を分ける重要な行為である。床に寝る、ベッドに寝るという２つの寝方、寝るための部屋などについて、歴史的経過を追う。	同上	同上
3	ねる－２	一般的に地面に何かを敷いて寝る方式から、床やベットに寝る方式に移行してきた。寝床から固定した床（ゆか）を作って寝るようになった地域、地面に床と呼ぶベッドを置いて寝るようになった地域など、現状と発展の様子を見よう。	同上	同上
4	すわる－１	地面に直接座る、床に座る、椅子に腰掛けるの３つの姿勢は、昼間の生活にとって重要である。この３つの姿勢に関し、座る場所と場面、そのための座具などについて考えると共に、生活習慣と住居のつくりの関係についても歴史的に考察する。	同上	同上
5	すわる－２	韓国と日本では、座るためと寝るために、板敷が発生した。一方、中国では寝るため座るために、家具である牀（床）が生まれ、早くから椅子に腰掛ける生活方式へ発展した。韓国・日本でも近代化にともなって、椅子式の座り方が普及しつつある。	同上	同上
6	たべる－１	椅子に腰掛けて、テーブルを囲む食事風景にたいして、韓国と日本では床に座り食卓を囲む光景もある。歴史的に見ると、日本では膳を運ぶ食事の習慣もあった。このような食事形式の変化は、日本だけではない。食事形式の移り変わりと、その背景について考える。	同上	同上
7	たべる－２	食事の場は、台所と分離できない関係にある。日本では欧米の影響を受けて、両者を一体に造るダイニングキッチンが、敗戦後急速に擴まった。その背景に、当時の住宅事情や家族観があり、調理用機器の発達があった。食べる場所と作る場所の関係について考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ゆあむ	日本では、ホテルで洋風バスと洋風の便器と洗面所がユニット化されている。一方、住宅では湯舟と洗い場のユニットで、便所、洗面所と洗濯機置き場が別につくられる。それぞれの国の入浴の習慣と浴室およびその周辺について考える。	平井　聖	平井　聖
9	もてなす－1	住宅を考えるとき、客を迎える作法・場所は重要な要素であった。玄関で客を迎える作法、座敷に客を迎える作法と、玄関、座敷の発生と変遷について、歴史的に考える。また、明治以降に生まれた洋式の応接間の役割についても考える。	同　上	同　上
10	もてなす－2	敗戦後の日本では、家庭で客をもてなす習慣が殆ど消滅してしまった。現在の中国および韓国で、客をもてなす場所と方法について聞き、日本との習慣の違い、それぞれの国の独自性について探る。そして、その成立の背景について考えよう。	同　上	同　上
11	くつろぐ－1	日本では、幕末までの暮らしと対照的に、明治維新以降は家族の暮らしが、クローズアップされるようになる。団欒と言う行為に対する意識が、住生活の中で次第に大きくなる。食卓を囲む食事とその後の団欒、そしてその場としての茶の間は、近代化の象徴である。	同　上	同　上
12	くつろぐ－2	近代化の波は、日本だけでなくおそかれ早かれ中国にも韓国にも押し寄せている。その中で、家庭生活にもっとも大きな変化をもたらしたのは、いずれの国でも家族が団欒するという行為であろう。中国、韓国および日本における、その実態を見よう。	同　上	同　上
13	たくむ	電気・ガスが家庭に導入されてから、家事の革命が始まる。同時に、自然に近い生活から人工の生活環境への道をたどりはじめる。この傾向は、第二次大戦後に加速の度を加える。中国、韓国、日本の事情を比較しながら、生活環境と生活文化について考える。	同　上	同　上
14	つたえる－1	中国・韓国・日本あるいはそれらの国を構成する多くの民族には、それぞれの伝統文化が存在する。生活環境の急速な変化の中で、伝承される生活文化と消滅した生活環境について検証し、生活文化によってつくり出された、家族を包む器である住居について考える。	同　上	同　上
15	つたえる－2	伝統文化による生活習慣だけでなく、近代化の中で獲得した新しい生活文化もある。それぞれの国あるいは民族によって事情は違うが、伝承され適が生活文化、新たに獲得した生活文化、これらを次の世代にどのように伝えていけばいいのであろうか。	同　上	同　上

＝ 生活と地球社会（’９９）＝（R）

〔主任講師：清野 きみ（北海道大学名誉教授）〕
〔主任講師：原 ひろ子（放送大学教授）〕

全体のねらい

現代生活の構造的要因が地球規模であり、また、日常的であることを意識する人が多くなった。しかし自己との関係において必ずしも、体系知、生活知にはなっているとはいい難く、とくに過剰消費を克服するライフスタイルの構築は、緊急課題といえよう。本講では生活者、生活の担い手が、次世代家族とその生活活動の持続可能な生活環境要因を深く理解するため、国際化、高齢化、少子化、食料問題、環境と平和、ジェンダーの視点から生活技術と文化の知見を述べる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	地球社会と生活構造	生活の質の向上を考えたとき、生活は学際的、総合的に捉えなければならない。転換期における生活の分析には、人の生命・生存・文化の総体として多角的なアプローチが望まれる。本章では、“21世紀は家族と女性の時代”といわれる構造的背景、高度テクノロジーが深く家庭に浸透している時代におけるライフスタイル、生活主体と支援、生活の再生と課題を述べる。	清野きみ（北海道大学名誉教授）	清野きみ（北海道大学名誉教授）
2	日常生活と経済システム	「豊な社会・日本」の実生活が存外に「貧困」であることを、身近な食生活の例でその実態を検証する。日本の食生活は海外依存型・資源浪費型であり、それは高い食費、不安定な食品を横行させている。しかも世界的な資源・環境問題も加速させている。	中嶋 信（徳島大学教授）	中嶋 信（徳島大学教授）
3	飢える世界と日本の課題	食料問題は人類全体が解決を迫られている課題で、地球上の人々が健やかに暮らすために、各国は食料生産の増大とともに、食料の配分や消費のあり方の改善を図っている。こうしたことから、「例外国家・日本」の食料・農業政策を 改革することが必要である。	同上	同上
4	共生型の経済システム	経済成長を最優先にする社会はさまざまな問題を激化させる。公共財政の危機、環境・公害問題、家庭生活のひずみ、国際的対立などの問題が従来型システムの破綻を物語っている。日本および世界の経済を調和的に発展できる経済システムに転換させることを考える。	同上	同上
5	国際化時代における生活の構築	国際的な経済のグローバル化は、人やものや情報の交流を促進している。日本でも海外生活者・成長者として経験をもつ人や、多様な文化的背景をもつ人の共住が進行していることから、異質な文化的規範を持つ人々が共存に向けてどのような生活を構築するかを考える。	原 ひろ子（放送大学教授）	原 ひろ子（放送大学教授）
6	高齢社会と生活の構築	高齢社会では、異なる世代がどのように共存するか。それは世帯、家族、親族、友人、職場、コミュニティにとっての課題であると同時に、生活者が社会政策のあり方にどう発言していくのかの課題でもある。また、個人は加齢とどうつきあうのか。これらを比較文化的に考える。	同上	同上
7	地球社会の中の子ども	武力紛争や貧困など経済的・社会的な事情から子どもらしい暮らしが保障されず、子ども時代を奪われている子どもたちがいる。一方、日本の子どもは恵まれているようにみえるが果たしてどうであろうか。地球社会に暮らす子どもたちの現状をみる。	中森千佳子（金城学院大学教授）	中森千佳子（金城学院大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	少子化社会の生活と子育て	少子化は高齢化とともに経済社会の発展にともなう共通した人口課題となっている。豊かさを求め、ライフスタイルの多様な選択が可能になる中で、子育てに何が起きているのだろうか。結婚観や子ども観の変化を軸に、少子化社会の子育てを考える。	中森千佳子	中森千佳子
9	消費社会における子育て	これからの子どもたちは国際化、高度情報化が進展する消費社会での生活が中心となろう。したがって、消費社会の生活者として、消費者としての学習は不可欠である。子どもの消費者としての発達を一例に、消費社会における子育てを考える。	同上	同上
10	環境とヒトの健康	ヒトは環境に影響を与えるとともに、それからさまざまの影響を受ける。本講ではヒトが快適に生活するための条件としての環境、労働衛生的問題、環境側の要因による疾病、公害、ヒト活動の究極の問題である地球レベルの環境問題について論じ、環境法制、国際協力などにも触れる。	近藤喜代太郎（放送大学教授）	近藤喜代太郎（放送大学教授）
11	持続可能な社会と身近な環境問題	温暖化、オゾン層破壊、海洋汚染などの地球環境問題は、つきつめてみれば私たちの日常生活と密接に結びついている。ごみ、水、エネルギーなど私たちの身近な環境問題を取り上げ、未来世代に対する私たちの義務と責任について考える。	荻原なつ子（東横学園短期大学講師）	荻原なつ子（東横学園短期大学講師）
12	持続可能な社会の市民の取り組み	地球環境問題を解決するには、「地球規模で考え地域で行動する」ことが最も重要である。現在国内外で様々な環境問題への取り組みが行われている。ここでは市民による具体的な環境活動の事例を通して、持続可能な社会の構築に向けての糸口を探る。	同上	同上
13	地球社会と生活設計	これまでの学習を踏まえ、環境や食料、開発などの諸課題から現代人に課せられた三つの課題を抽出し持続可能な社会に向けた視点を明確にその具体化としての取り組みを例示し、現代の日本人に求められている生活設計のあり方を提案する。	阿部治（埼玉大学助教授）	阿部治（埼玉大学助教授）
14	持続可能な社会と環境教育	持続可能な社会形成のために重要な役割を果たす環境教育について、国際的視点からその概要を整理するとともに、生涯学習としての環境教育のあり方についてモデルを提示し、併せて学校教育のあり方についても提案する。	同上	同上
15	ライフスタイル構築の課題－文化現象としての生活再考	生活文化の特性を踏まえ、地域におけるトータルな生活コミュニティの構築と再生のための諸課題を述べ、歴史と風土に根ざした生活文化づくりを環境意識と食術、生業から考える。	清野きみ	清野きみ

＝ 世界の教育（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：宮澤　康人（放送大学教授）〕
〔主任講師：小林　雅之（東京大学助教授）〕

全体のねらい

現代世界における教育問題の提示と分析を通して初心者の教育研究入門に資する。代表的なトピックを選び、それを典型的に、鮮明にあらわしている国をとりあげる。西洋の近代化がひきおこした世界のシステム化に対応する地球規模での学校化社会とそれの北と南の対照を軸にすえ、現代は異なった民族や文化の共存、人類と自然との共存が教育の課題となりつつある時代であることを示そうとする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代世界と教育	全体への導入部として、「近代世界システム」「学校化社会」「南北問題」などのキーワードを説明し、つづいて「教育問題」というときの教育の定義の仕方の諸相にふれ、さらに複雑多様な世界の教育問題を整理するための認識枠組としての類型化とが対比といった方法にふれる。	宮澤　康人（放送大学教授）	宮澤　康人（放送大学教授）
2	教育制度の概観	・世界各国の教育の普及水準を明らかにし、先進国、中進国、途上国の類型に分かれることを示す。 ・教育システムの基本類型として、単線型と複線型を示し、その具体的な国の例を取り上げ説明する。 ・各国の教育システムが共通にかかえている問題点と教育改革の焦点を説明する。	小林　雅之（東京大学助教授）	小林　雅之（東京大学助教授）
3	先進国における学校化社会と学歴	・先進国における学歴社会の現状を、ヨーロッパとアメリカ、日本を比較して検討する。 ・学歴社会の問題点を明らかにする。 ・学歴社会の成立の社会的要因を説明する。 ・学歴社会の今後の方向や解決への努力について具体的な事例をあげて説明する。	同上	同上
4	発展途上国における識字教育 －ラテンアメリカの場合－	識字は、個人の尊厳、権利を確立する上でも、また、社会の発展のためにも、第一級の重要性を持つ事柄とされている。発展途上国の学校教育制度は、教育拡大に貢献したが同時に、そこから脱落し、あるいは包接されない多数の人々をも産み出している。これらの人々に対し、様々な国や地域で、多様な識字教育が実践されている。本論では、識字教育の過去の歩みと現在の状況とをラテンアメリカを中心として解説する。	江原　裕美（帝京大学助教授）	江原　裕美（帝京大学助教授）
5	先進国における職業教育	・先進国における教育と職業の結びつきについて、例をあげて説明する。 ・先進国の職業教育の様々な独自の取り組みを、イギリス、スウェーデンなど具体的な事例をもとに検討する。 ・職業教育制度改革の例としてスウェーデンの総合制中等学校の例をあげ説明する。	小林　雅之	小林　雅之
6	発展途上国における職業教育 －ラテンアメリカの場合－	職業教育は発展途上国の「開発」を推進する上で、常に重要視されてきた。特に1960年代以降、開発のためのマンパワー供給が教育に期待されたことから、中等教育段階での職業教育は高等教育と共に、顕著な伸びを見せた。しかし、中等学校での職業教育の効果に対する疑問や債務危機を経ての時代の変化などが、職業教育の今後の在り方の検討を迫っている。ラテンアメリカを中心に途上国の職業教育について考える。	江原　裕美	江原　裕美
7	発展途上国における国民統合と学校教育 －多民族国家マレーシアを中心として－	アジアには植民地支配の遺産を引きずり国家形成に苦悩している国々が少なくない。ここでは多民族社会の典型とされるマレーシア他の東南アジア諸国を事例として取り上げ、国民統合と学校教育の問題について考察する。（1）国家形成と教育上の優遇措置（2）カリキュラムと試験制度にみる国民統合の問題などについて考察する。	西野　節男（名古屋大学助教授）	西野　節男（名古屋大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	先進国における国民統合と学校教育－欧米諸国の場合－	征服・植民地化等、近代社会の拡大によって生じた少数民族問題の諸相を、「南」「北」の対比を意識しつつ、主に欧米諸国を素材として、多民族多文化社会における国民統合と教育の問題として検討する。	中村　雅子（桜美林大学助教授）	中村　雅子（桜美林大学助教授）
9	逸脱行動と学校教育－薬物教育を中心に－	本講義は、欧米諸国とわが国におれる青少年の問題行動の傾向とその社会的背景を比較的に検討し、さらに近年青少年の間にあって最も深刻かつ重大な問題となりつつある薬物乱用の問題をとりあげ、病める社会の病理を明らかにするとともに、学校教育における薬物乱用防止教育の最先端を探る。	二宮　皓（広島大学教授）	二宮　皓（広島大学教授）
10	価値の教育と宗教－先進国の場合－	本講義は、イギリス、ドイツなど欧米諸国における価値の教育、とりわけ公教育における宗教の取り扱いと宗教教育の内容について検討する。またアメリカ合衆国における事例を中心として、宗教と公教育の関わりを紹介しながら、価値に関わる教育についての論争を検討する。	同　上	同　上
11	価値の教育と宗教－東南アジアのイスラーム教育を中心に－	世界的なイスラーム復興運動の動きはあらためて宗教と教育、そして価値の教育の問題に関心を呼びさました。東南アジアのイスラーム教育に主たる焦点をあてて（1）インドネシアの伝統的な宗教教育と近代学校制度（2）マレーシアにおけるイスラーム行政と教育の特質（3）宗教教育と道徳教育の位置と関連（4）教育のイスラーム化と価値の教育	西野節男	西野節男
12	国民意識と国際理解の教育－アメリカ合衆国とＥＵの場合－	多民族多文化社会の多様性にこたえようとする様々な教育プログラムを素材に、アイデンティティーと国境という問題に注目し、アメリカ合衆国の場合とＥＵ統合への動きを対比させて検討する。	中村雅子	中村雅子
13	国民意識と国際理解の教育－東南アジア地域の場合－	東南アジア地域は文化的・宗教的な多様性に富んでいる。国際理解の教育は国内の多民族性とその相互理解の延長線上に位置付けられると言ってもよい。（1）国民教育制度における民族・宗教・文化の位置づけと教育内容に見る多民族の扱いなど国内的な次元と（2）留学、教育協力など国際的な次元と交錯させて国際理解の教育について考察する。	西野節男	西野節男
14	留学生交流と教育の国際化	本講義は、諸外国の留学生交流政策を概観するとともに、わが国における留学生交流の政策と実態を概説し、さらに日本留学の特質と問題を検討することでもって、わが国の教育（大学）の国際化の課題と方向を探る。	二宮　皓	二宮　皓
15	地球環境と学校教育	終章として、地球上の人類全体と自然環境との共存の方途を見出すことが不可欠な課題となった現代において、教育に何が期待されているかを、以下の項目の下に考える。自然と人類の対立、環境倫理学の問題提起、環境教育の動向とその北と南、環境教育をめぐる争点。	宮澤康人	宮澤康人

＝教育の方法（'99）＝（TV）

〔主任講師：佐藤　学（東京大学教授）〕

全体のねらい

授業の具体的な事例を対象としながら、教育方法学の諸問題を、歴史的、心理的、社会学的に検討する。教えるとは、どういう行為なのか、授業において子どもと教師は、どのようなコミュニケーションを成立させ、何を経験しているのか。これらの検討を通して、これからの学校教育の役割と教師の使命についても講述したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	授業の世界へ	さまざまな授業の風景を提示しながら、教育方法学が扱う問題についてオリエンテーションを行う。	佐藤　学（東京大学教授）	佐藤　学（東京大学教授）
2	授業の様式(1)	小学校の実際の授業の様子を紹介し、授業における様式の特徴として、(1)「変容的様式」と(2)「模倣的様式」があることを示す。	同　上	同　上
3	授業の様式(2)		同　上	同　上
4	教育方法の歴史(1)	近代学校の成立と教授学、授業の定型の形成を提示し、今日の基本となっている授業の骨格について歴史的に検討する。モントリアル・システム、一斉授業の様式、日本における授業の成立。	同　上	同　上
5	教育方法の歴史(2)	学校の革新の中で追求されてきた教育方法の変化を、1910年代以降、今日までの改革の歩みの中で探る。 新教育の方法、個性化教育、単元学習、オープン・スクールなど。	同　上	同　上
6	教室という場所	教室という場所が、教師にとっても子どもにとっても、さまざまなディレンマに直面する場所であることを示す。あわせて、日米の教室の風景を比較し、教室における人間関係の組織、学習環境の違いについて考察する。	同　上	同　上
7	教室の出来事	授業の改革の実例を紹介し、教科学習において「わかる」ことの意味と、コミュニケーションを通じた学びのあり方について考察する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	授業を創る(1)	今、試みられている授業改革の努力を紹介し、教師が授業を創造するにあたって、どのような問題ととりくんでいるのかを示す。総合学習、共同学習など。	佐藤　学	佐藤　学
9	授業を創る(2)	前回にひき続き授業の計画・実施評価の過程を検討する。	同　上	同　上
10	学びの経験としてのカリキュラム	カリキュラムの意味、カリキュラム研究の状況について説明し、カリキュラムの改革についての研究が、どのように進展しているのかについて示す。	同　上	同　上
11	カリキュラムと単元の構成	教科の意味、総合学習の意義について紹介し、カリキュラム開発を学校と教室を基礎にして推進する方法について講述する。	同　上	同　上
12	授業研究の方法(1)	授業を改善するための研究方法が、どのように開発されてきたのかを概観し、行動科学の方法によるカテゴリー分析の実例を通して、授業の道程を科学的、分析的に見ることの可能性と限界について考える。	同　上	同　上
13	授業研究の方法(2)	行動科学の批判以降の新しい授業研究の流れを紹介する。 参加観察法による研究、ビデオ記録や物語の記録による質的研究の可能性を探る。	同　上	同　上
14	専門家としての教師	教職の専門性についての理論を講述し、今日の教師の専門性が、どのような現実にあり、どのような改善が求められているのかについて示す。 教師の仕事を職業的アイデンティティの追求と専門家共同体の形成という視点で分析し、教師が生涯をとおして学び成長する姿を紹介する。	同　上	同　上
15	改革の展望	授業とカリキュラムを中心とする学校改革の現状を紹介し、今後の教育方法学の課題について検討する。	同　上	同　上

＝教育心理学＝（R）

〔主任講師：永野　重史（放送大学教授）〕

全体のねらい

「教える」とはどういうことなのか、「学ぶ」とはどういうことなのか、という問題を心理学的に解きほぐして、問題の考え方の歴史や、理論のよりどころとなっている実証的な研究との関係を平易に説明することによって、術語の丸暗記で済ますことなく、育児や学校教育や社会教育の様々な問題を批判的に考えられる力を養う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	教育心理学とは何か	学校教育の心理学としての教育心理学の意義と歴史。常識的教育論と教育心理学とはどのように違うか。教育心理学のどういうところが信頼出来るのか。教育心理学は教育実践の役に立つのか。生涯学習時代における教育心理学の新しい課題は何か。	永野　重史（放送大学教授）	永野　重史（放送大学教授）
2	教育を考えるときの二つの立場	精神測定論的立場（客観的に測定できる諸能力を形成することが教育だと考える立場）と、発達論的立場（子供の発達を援助することが教育だと考える立場）の違い。行動主義的学習心理学と発達心理学の役割。行動目標の書き表し方における二つの立場の違い。	同　上	同　上
3	学習の心理学(1)	行動主義の学習心理学。外部から観察出来ることを研究するのが科学だと考えるところから生まれた行動主義。ねずみの訓練から見つかった学習原理。ソーンダイクの効果の法則とは何か。応用としてのプログラム学習や行動修正の技法とその問題点。	同　上	同　上
4	学習の心理学(2)	行動の変容が学習なのではなくて、ものの見方の変容が学習なのだとみる認知主義の学習心理学。歴史；ゲシュタルト心理学と構成主義の認識観。行動主義の学習理論と認知主義の学習理論における「誤り」の見方の違い。学習において「誤り」は無価値か。	同　上	同　上
5	発達の心理学(1)	発達心理学の歴史。年齢による発達の記述と学習因論・成熟要因論。どちらも子どもの主体性を無視。子どもの主体性に注目するピアジェの発達段階論の出現。ピアジェ理論の特徴。発達は普遍的な現象か。教育を考えるのに必要な文化と発達との関係。	田島　信元（東京外国語大学教授）	田島　信元（東京外国語大学教授）
6	発達の心理学(2)	発達における文化的、環境的要因を重視するヴィゴツキーとバフチンの発達理論。「発達の最近接領域という概念の教育的意味」（援助があるときの能力と独力でするときの能力）。大人との社会的交渉と社会的言語の役割。生涯学習と生涯発達の可能性。	同　上	同　上
7	動機づけの心理学	学習の意欲とは何か。動機づけの機能。快楽主義の思想。ホメオスタシスによる説明から知的要因の重視へ。外発的動機づけと内発的動機づけの違い。達成動機の測定方法と理論。期待一価値理論。ヒューマニスティックな心理学の立場。	永野重史	永野重史

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	能力観と学習意欲	学習者が、実体としての能力を考えているか発達する能力を考えているかの違いと学習意欲。挫折感、無力感などとの関係。自分が出来事の原因であるという見方と意欲。神経症的な生き方の問題点。「やる気を育てる教室」の実践。	永野重史	永野重史
9	人間観と教育(1)	人間は理性的動物であるか。人間は理性的動物であるという人間観によって学習者の能動性や自発性はかえって軽視されて、教師は知識や技能を教え込もうとするようになる。基礎的学習内容とは何か。学問の入門的知識から順に系統的に教えることは可能か。	同上	同上
10	人間観と教育(2)	人間の理性はきわめて限られているという人間観に関する証拠の数々。人工知能研究でわかったと人間の理性の限界。個人の理性か集団の理性か；限られた理性という人間観をとることによって、教えるということについての考え方はどう変わるか。	同上	同上
11	教育評価とは何か	学習者の成績を決めることだけが教育評価なのではない。教育をめぐる情報の収集と利用が教育評価である。指導の評価やカリキュラムの評価も必要。状況で変わる能力を評価できるか。いわゆる偏差値をめぐる諸問題。	同上	同上
12	記憶の心理学と教育	「単なる記憶」などと言ってもよいのか。知的活動の一側面としての記憶。思考と記憶とをはっきりと区別することがむずかしい。「記憶力」は、学習のための活動、学習者の知識態度、教材の構造と表現、評価のための課題などの諸条件で変わる（四面体モデル）。	同上	同上
13	知能と創造性の心理学	ビネーとゴールトンの知能検査、その教育への影響。知能指数で学力が予測できるか。風変わりな考えをすることを創造性とみた検査の欠点。多面的にとらえられるようになった知能。パーソナリティーや思考のスタイルとしてとらえられた創造性。	同上	同上
14	道徳性の心理学と教育	子どもはどのような点で道徳的か。道徳性の発達は多面的にみる必要がある。知的側面を重視するピアジェとコールバーグの道徳性発達論。道徳性の文化比較（性差）。道徳性の発達をうながす教育。	山岸明子（順天堂医療短期大学教授）	山岸明子（順天堂医療短期大学教授）
15	様々な学習指導の心理学的意味づけ	機械的学習と意味のある学習。発見学習と受容学習。意味のある受容学習における知識の再構成。能力心理学の思想と知識形成論。形式陶冶対実質陶冶論争と心理学的研究。学習の転移はどの程度まで可能か。	永野重史	永野重史

＝ 心 理 学 入 門 ＝（TV）

〔主任講師：相場　覺（放送大学教授）〕

全体のねらい

人間の心理は奥深く計り知れないものがある。しかし心理学はその解明に挑戦し多くの事実を見いだした。それは心理学者たちが常識や言い伝えに満足しないで独自の方法を考え出して人間の心理を多角的にとらえる努力をしたからである。それらの成果を展望しよう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	心理学とは	心理学は19世紀末に実験心理学として歩みはじめたが、それからさまざまな変遷を経て現在のような、広範な領域を持つもっとも先進的な学問の一つとなった。その軌跡を辿る。	相場　覺（放送大学教授）	相場　覺（放送大学教授）
2	感覚過程 ～その生理と心理～	われわれは外界のみならず、われわれの内部においてもさまざまな刺激に接している。それらの種類とその受容の仕方、そらにはその基礎をなす生理・心理的過程について概観する。	同　上	同　上
3	知覚 ～行動のための指針～	感覚により得られた情報をよりひろい範囲の時間と空間にわたって統合し、行動に役立つようにするのが知覚の働きである。その知覚のいくつかの側面を展望する。	同　上	同　上
4	情報の処理 ～環境情報の認知と利用～	環境の情報の入力と適応的な行動の出力の間の心的過程の仕組み、つまり人間の情報処理の特徴を、感覚情報の入力、入力情報の処理、処理情報の利用の段階に大別し、日常的な事例を援用しながら解説する。	松田隆夫（立命館大学教授）	松田隆夫（立命館大学教授）
5	記憶 ～人の中の情報と意識～	「記憶」は極めて身近なものだが、様々な側面があり多くの未解決の問題を持つ現象でもある。本講義では特に、自分の意識に上る記憶と上がらない記憶とをとりあげ、両者の相違と関係について、これまでの実験心理学および認知科学の成果を元に考えていきたい。	原田悦子（法政大学教授）	原田悦子（法政大学教授）
6	言語 ～ことばと心のメカニズム～	人間の言語使用を支えている心的メカニズムを対象とする。高速で自律的な音韻処理のためのメカニズム、文法処理のための言語知識とその習得、物語理解を支える常識的知識言語による芸術表現の心理基盤、の各トピックについて講義をおこなう。	往住彰文（東京工業大学助教授）	往住彰文（東京工業大学助教授）
7	思考 ～考え理解することのしくみ～	人間における推論、理解のメカニズムを対象とする。帰納、演繹などの推論形式と人間の日常推論との異なり、因果推論（帰属推論）の特徴とそれを支える常識的知識、アナロジーやメタファに基づく推論・理解の特徴、の各トピックについて抗議をおこなう。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	学習 ～経験が行動を変える～	我々は、人生経験を積み重ねることにより、自らの行動を大きく変化させてゆく。ここでは、そのような行動の変化を学習と呼び、その基本的なしくみについて紹介する。加えて、複雑な問題を解く場合などにみられるより高度な学習のしくみについても解説する。	高橋雅治（旭川医科大学教授）	高橋雅治（旭川医科大学教授）
9	行動 ～生まれながらの適応のしくみ～	「ロング・ショットでヒトをみる」というのが比較心理学の立場である。この分野の課題を紹介しながら、①行動と遺伝子との関係、②個体史初期の適応、③衝動の様相を取り上げて、環境への行動的対処にみられるヒトの独自性を明らかにする。	辻敬一郎（名古屋大学名誉教授）	辻敬一郎（名古屋大学名誉教授）
10	発達 ～発達に及ぼす文化の影響～	生物体である人間は、生誕以来、囲りの社会文化的環境との相互作用を通して成長・発達し、個人差・文化差を広げていくが、ここでは、そのしくみを理解するとともに一生涯を通じた発達の年齢差・個人差・地域差・文化差をどう捉えればよいかを考えてみる。	田島信元（東京外国語大学教授）	田島信元（東京外国語大学教授）
11	感情・情動 ～機制と臨床～	感情、情動、情緒などとよぶ心の働きは自分の中に生じる喜び、悲しみ、恐れ、怒りなどの主観的な経験である。更に感情は内分泌腺や内蔵反応による生理的変化も示す。このような感情に対する感情反応を測定する、また行動異常のメカニズムを追求する。	浜治世（文教女子大学教授）	浜治世（文教女子大学教授） 内山伊知郎（同志社大学助教授）
12	人格 ～性格の形成と理論～	人格・性格が、遺伝と環境によってどのように形成されていくかをまず概観する。次いで人格・性格という、複雑で、人間性そのものとでもいうべき事象を理解するための、現今の様々な理論について学び、人格・性格を総合的にとらえる道を学ぶ。	水島恵一（文教大学長）	水島恵一（文教大学長）
13	心理臨床 ～心の診断と治療～	神経症、非行、その他の心理的障害や児童の行動問題などの理解、その診断、治療、予防などを課題とする。とくに不登校、神経症などの具体例をとりあげ、その心理の理解（心理テストの利用を含む）、カウンセリングその他による治療を学ぶ。	同上	同上
14	社会心理学 ～社会と心のダイナミックな関係～	社会心理学には、社会環境の中で生きている人間の認知や行動などと研究する心理学としての側面と、そのような人間が相互に影響を与えあうことによって生まれるマクロな現象を分析する社会科学としての側面があるが、この両面の総合的な理解をはかりたい。	山岸俊男（北海道大学教授）	山岸俊男（北海道大学教授）
15	文化と行動 ～世界のなかの私達～	文化は私達の行動にどのような影響を与えるのか。異なった文化に属する人々の間の意志の伝達と交渉に文化はどのような影響を与えるのか。文化と行動について研究することの意義は何か。異文化の人とうまく付き合う方法は何か、などの問題について概説する。	マーク H.B. ラドフォード（グローバルパースペクディブコンサルタンツ　取締役） 相場覺	

＝ 心理学史（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：大山　正（元日本大学教授）〕
〔主任講師：上村　保子（千葉大学教授）〕

全体のねらい

現在の心理学の歴史的背景を辿りながら、心理学の主要問題を考察する。心理学の歴史的変遷を忠実に追うことよりも、現在の心理学の適切な理解を歴史的展望から得ることを重視する。心理学史を通して知る心理学入門の性格をもたせたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	心理学史の展望	心理学史を大まかに概観するとともに、その間に議論の対象となってきた主要問題、とくに研究の対象、方法、立場の変遷について述べている。つぎに、ギリシャ時代より近世に至る心理学的思想について概観する。	大山　正（元日本大学教授） 末永　後郎（日本大学講師）	大山　正（元日本大学教授） 末永　後郎（日本大学講師）
2	連合主義	連合主義は、観念と観念、感覚と観念などの間の結びつきを、多くの心理現象の基礎と考える、心理学の理論的立場である。その17世紀から19世紀に至る発展を述べ、ついで連合主義がその後の心理学にどのような影響を及ぼしたかを論じる。	大山　正 末永後郎	上村　保子（千葉大学教授） 一ノ瀬正樹（東京大学助教授）
3	感覚・知覚研究	17世紀から19世紀に至る色覚研究、空間知覚の研究の発展史と、その集大成であるヘルムホルツの研究と学説を、それらが心理学の発展に及ぼした影響について述べる。	大山　正	大山　正
4	精神物理学	フェヒナーの精神物理学の構想とその成果について述べ、その後の心理学への影響について論じる。	同上	同上
5	心理学の独立	心理学が独立の科学と認められる過程を、ヴントを中心に述べるとともに、ヴントの学説と彼がその後の心理学の発展に与えた影響について論じる。	同上	同上
6	19世紀末の心理学	19世紀末のヴント学派以外の動向、すなわちエビングハウスの記憶研究、キュルペらの思考研究を中心に、ヨーロッパにおける心理学の状況を述べるとともに、アメリカにおけるジェームズ、ティチェナー、ホールらの活動を展望する。	大山　正	上村保子 梅本　堯夫（京都大学名誉教授）
7	比較心理学	19世紀末の比較心理学の夜明け（ロマーニズ、モルガン）から古典的比較行動学（ローレンツ、ティンバーゲン、フリッシュ）を経て、現代の動物行動学、比較認知科学にいたる道筋をたどる。	長谷川寿一（東京大学教授）	長谷川寿一（東京大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	個人差の研究	19世紀に傑出した人物を研究したゴールトン、20世紀初めに知能検査を考案したビネ、それにギリシャ時代より関心がもたれていた性格の研究を取り上げる。	詫摩　武俊（東京国際大学教授）	詫摩　武俊（東京国際大学教授）
9	精神分析学	精神分析学は行動の動因として無意識を重視し、防衛機制や自我の構造について独自の理論を展開し、また心の深層の研究法として夢の分析を用い、これらを通して現代の心理学の発展に大きな影響を与える。フロイト、ユング、アドラー、新フロイト派を取り上げる。	詫摩武俊 織田　尚生（東洋英和女学院大学教授）	詫摩武俊 織田　尚生（東洋英和女学院大学教授）
10	ゲシュタルト心理学	連合主義からヴントの構成主義に受け継がれた要素主義の心理学を否定したゲシュタルト心理学について、その中心となったウェルトハイマー、ケーラーらの研究成果と主張を述べるとともに、その後の心理学への影響にも言及する。	大山　正	上村保子 鷲見　成正（日本女子大学教授）
11	行動主義	1913年にワトソンによって宣言され、その後の心理学に大きな影響を与えた行動主義とはどのような主張か。行動主義の主旨にそった行動研究の例として、パブロフの条件反射の実験と、ソーンダイクの試行錯誤実験などを中心に講ずる。	今田　寛（関西学院大学長）	今田　寛（関西学院大学長）
12	新行動主義	やや極端に過ぎたワトソンの行動主義が、1930年代になって科学論の変化にともなってより穏やかな新行動主義の主張に移行する。その主張はどのうようなものか、その具現者としてのハル、トールマン、スキナーなどの行動理論について講ずる。	同上	同上
13	認知心理学	現代の認知心理学は極めて学際的である。その源流を心理学、哲学、言語学、情報科学、神経科学にたずねる。また、1950年代後半に起こったいわゆる認知革命についてブロードベント、ミラー、サイモンなどの研究を通して概観し、現代に至る道筋を明らかにする。	大山　正 上村保子 御領　謙（千葉大学教授）	上村保子 御領　謙（千葉大学教授）
14	発達心理学	発達研究の源流から今日に至る発達心理学の歩みを辿る。主な内容：人間の成長・発達・エイジングに対する関心、18～19世紀の発達論、発達心理学の始まりと展開、1950年代からの状況、今日の発達心理学。	小嶋　秀夫（京都学園大学教授）	小嶋　秀夫（京都学園大学教授）
15	社会心理学	1908年はじめて社会心理学と名乗る２冊の書物が刊行された。しかし、社会心理学の問題はその時はじめて発見されたわけではない。さまざまな関心に基づく多様な研究によって今日の社会心理学研究の領域が形作られてきた。その問題史的展開を概観する。	永田　良昭（学習院大学教授）	永田　良昭（学習院大学教授）

＝ フロンティア人間科学（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：中島　義明（大阪大学教授）〕
〔主任講師：太田　裕彦（放送大学助教授）〕

全体のねらい

人間は文化や社会の中で学び、悩み、遊び、成長する極めて多面的な特徴を持つ存在である。このような人間の全体像を捉えるには、多視点からの総合的な理解が必要である。本科目では、現代社会において人間が直面する諸問題をテーマとして、人間科学のさまざまな知のフロンティアを紹介しながら、人間を立体的に理解することをねらいとする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	人間科学とは何か	社会・文化・パーソナリティを中核に広範な周辺諸科学との知のネットワークとしての人間科学のイメージと、その多様な方法論について概説する。	中島義明（大阪大学教授） 太田裕彦（放送大学助教授）	中島義明（大阪大学教授） 太田裕彦（放送大学助教授）
2	情報と人間	人間は言わば情報を「食べて」栄養素を吸収し、はじめて生存可能となるような生き物である。このような情報を人間の深い関わりについて考察を加える。	中島義明	中島義明
3	エラーと人間	人間の行動にとってエラーは大きな問題となる。しかし、エラーは人間の特性からして起こるべくして起こっているとも言える。このような視点からヒューマンパフォーマンスに関し考察を加える。	同上	同上
4	ゆとりと人間	人間にとってゆとりがいかなる意味をもつのかを人間の労働・余暇・遊びを通して考える。	太田裕彦	太田裕彦
5	生涯学習と人間	人間は死ぬまで新たな知識や創造を追求する生物である。それゆえ、生涯教育という視点が大事である。教育学者の視点よりこの問題に考察を加える。	山本慶裕（国立教育研究所室長）	山本慶裕（国立教育研究所室長）
6	ジェンダーと人間	現在社会において求められる男性・女性の役割や文化と歴史の中の男性と女性について考察を加える。	伊藤公雄（大阪大学教授）	伊藤公雄（大阪大学教授）
7	国際化と人間	現代社会において人間が直面している異文化理解や地球規模での共存の問題について考察を加える。	渡辺文夫（上智大学教授）	渡辺文夫（上智大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ボランティアと人間	ボランティア活動が開く新しい人間関係や社会変革力などについて考察を加える。	大熊由紀子（朝日新聞論説委員）	大熊由紀子（朝日新聞論説委員）
9	ニューメディアと人間	現代社会におけるさまざまなニューメディアの登場が人間の行動やライフスタイルにいかなる影響を及ぼしているのかについて考察する。	中島義明	中島義明
10	特殊環境と人間	現代社会ほど人間がさまざまな環境に進出しようとしている時代はかつてなかった。宇宙環境、高層環境等々に見られる人間の心理について考察を加える。	同上	同上
11	自然と人間	人間は自然をどのように認識しまたどのように自然に関わっているのかという問題を中心に取り上げ、自然を通じた人間の特性を考える。	太田裕彦	太田裕彦
12	いじめと人間	現代社会において「いじめ」の問題は深刻な様相を帯びてきている。この問題に関し、心理学的に考察を加える。	丹野義彦（東京大学助教授）	丹野義彦（東京大学助教授）
13	死と人間	人間は必ず死を迎える。死に直面した人間とその周囲の人間の心理に関し精神科医の立場より考察を加える。	柏木哲夫（大阪大学教授）	柏木哲夫（大阪大学教授）
14	記号的想像力と人間	世界に生きる人間を記号・表現・レトリックの交錯するただ中に探る。	菅野盾樹（大阪大学教授）	菅野盾樹（大阪大学教授）
15	人間科学の可能性	これまでの講義を立体的にまとめ、さらに複数の講師による討議も交えつつ、知のフロンティアとしての人間科学の可能性について考える。	中島義明 太田裕彦	中島義明 太田裕彦

＝ 現代人のための哲学（’００）＝（R）

〔主任講師：渡邊　二郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

本講義は、やさしい哲学入門である。哲学とは何かを、現代人の生き方と結びつけて示すのが、そのねらいである。科学技術の発達し、恐ろしい社会的諸事件の起こるこの転換期にあって、私たちは、どのように考えて生きたらよいのか。私たちは、現代における人間の生き方の根拠を問い尋ねてみようと思う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代とはどういう時代か	現代とは、歴史の転換期である。科学技術が急速に進歩し、地球上が狭くなり、人間生活の様相が激変し、伝統的価値が揺らいでいる時代である。ニヒリズムや悪がはびこり、自由と欲望がゆがんだ形で突出し、すべてが相対化し、多元性のなかで乱立している。	渡邊　二郎（放送大学教授）	渡邊　二郎（放送大学教授）
2	科学とは何か	現代を規定している近代科学の本質を、まず考え直してみたい。17世紀以来の科学革命とその現代における帰結、科学における合理と実証、仮説演繹法、その結果としての科学の蓋然性などを明らかにして、科学の意義と限界を見定めてみる。	同　上	同　上
3	技術の光と影	近代科学は必然的に工業化されて、技術的に応用されるという性格をもつ。この技術革新のなかに現代人の生活はおかれている。技術は一方で、人間生活に役立つ多くの効果をもたらしたが、他方では、環境問題など深刻な難問を残している。技術の光と影を追う。	同　上	同　上
4	自然の生命の大切さ	私たちは、この地球上で、生命を恵まれて文化を築き、社会生活を営んでいる、ひとつの生きものにすぎない。私たちを包む大きな自然の生命の営みのなかに私たちを位置づけないとき、私たちの生存は危うくされる。自然全体の生命の大切さを考え直す必要がある。	同　上	同　上
5	脳と心	自然のなかに物質的身体性をもって生きている私たち自身のあり方を考え直してみると、そこに身体と精神という問題が現れてくる。そのことをもっと端的に表すと、私たち人間のあり方は、すべて脳の機能に還元されるのか否か、心とは何かという問いが生ずる。	同　上	同　上
6	人間の内面性	人間において大切なのは、心の内面性である。意識とか、精神とか、理性とか、知情意とか、自我とか、人格とか呼ばれるものは、自己自身の内面に、本人自身によって自覚され、また形成されるべき、各人の大切な自己自身のことにほかならない。	同　上	同　上
7	生きる根拠	私たちが、この世で生きてゆくときに、心の支えとなるものは、各自の内面性の深い奥底から、やむにやまれぬ必然性においてわき起こり、強い要求として立ち現れる、内側の声に聞き従うところに生じてくる。ここに自己の本当の実存と愛が芽生えてくる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	悪の問題	しかし、それは、たんに自己の我執にみちた欲望や妄念の追求のことではない。我欲にはしり、他人を排除し、抹殺し、憤怒と破壊に突進し、エゴイズムの野望に駆られることは、悪である。人間のうちに潜む邪悪な罪責性を自覚することが必要である。	渡邊二郎	渡邊二郎
9	行為の規範	人間は、他人との共同存在のうちにある。そこにおのずと、自己と他者の間において守られるべき倫理と道徳の問題、つまり社会的行為の規範という問題が生ずる。これは、法の根拠への問いともなる。それは、人間における善と悪の原理を問い直す試みとなる。	同上	同上
10	人生の苦悩について	人間はたえず自己のうちの罪責性を悔い改め、日々新たに、人生を正しい軌道にのせて自己形成をなすべき努力を課せられた存在者である。あるべき本当の自己たるべく、一生涯、努力精進するのが、人間としての使命である。ここに人間のさまざまな苦悩が生ずる。	同上	同上
11	情念の問題	人間の大切な点は、たんなる知性のうちにはなく、むしろ感情と意志、つまり情意のうちにある。情意を本当に満足させえないとき、人間は不幸である。とりわけ大事なのは、意志である。意志の拡充と阻止に伴って、人間には多様な喜怒哀楽の気分と感情が生ずる。	同上	同上
12	死について	いかに努力精進しようとも、やがて人間は死ぬ。死という終わりにさしかけられた有限の人生のただなかを、いま私たちは生きている。この死という厳粛な事実に対して、私たちはどのように身構えたらよいのか。これは人生の生きがいや幸福の問題に関わってくる。	同上	同上
13	歴史のゆくえ	もちろん、私たちの個々人の一生を越えて、さらに人類の歴史は続く。いったい歴史の大きな流れは、どこから発し、どこへと向かっているのであろうか。歴史のなかでは、さまざまな悲惨な戦争、災害、悲劇が起きた。歴史のゆくえと意味はどこにあるのだろうか。	同上	同上
14	祈りと希望	私たちは、多くの社会的事件の起こるなか、歴史のゆくえをしかと見定められぬ状況のうちで、各人それぞれの持ち場で、より良い明日を願い、ささやかながら努力精進して生きている。そのとき私たちの心をみたすたものは、豊かな実りへの祈りと希望である。	同上	同上
15	神は存在するか	現代を生きる私たちの心の最も奥深いところで、私たちを捕らえて離さない問いは、この災いにみちた人間の生存の現実のなかに立てば立つほど私たちに迫ってくる「神は存在するのか」という問いであろう。私たちを救う神は存在するのか否かが、問題となる。	同上	同上

＝ 西洋思想の源流 ＝（ＴＶ）

〔主任講師：岩田　靖夫（聖心女子大学教授）〕

全体のねらい

西洋思想の源には、ギリシア人の合理的思考とヘブライ人の超越神への信仰がある。この両者は相対立しつつ相互に補い合い、西洋文化の基礎を形成してきた。それが、今や、科学技術文明の発展、自由主義的民主主義の政治形態の普及、「かけがえのなさ」という人間把握を中核とする人権思想の浸透などの姿の下に、現代世界文明の一つの大きな基礎になりつつある。この事態をその根源にまで遡り、この二つの根源の基本思想を明らかにすることが、本講義のねらいである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ギリシア人とはなにか（1） －自由と法－	ギリシア人をギリシア人たらしめたもの、ギリシア人を現代世界文明のある意味での定礎者たらしめたものはなにか。それは、人間がそれぞれ自由で平等な者であり、したがって、独立の自律的生活を営むべき者であることを、かれらが自覚した点にある。この自覚によって、かれらは独裁者による専制政治を打ち倒し、民主主義という政治形態を創造したのであった。この政治形態は、支配者の意志ではなく、法という客観的精神が社会の原理となることにより、可能となった。かれらの精神を貫流するこの自由と法の尊重を、ペルシア戦争などを材料にしながら考える。	岩田靖夫（聖心女子大学教授）	岩田靖夫（聖心女子大学教授）
2	ギリシア人とはなにか（2） －理性と本質への眼差し－	ギリシア人の理性主義は、哲学のみならず、文学、彫刻、建築などあらゆる文化領域に浸透している。それは、様々に変転する多様な現象に埋没せず、その底にそれらの現象を規定している本質を洞察しようとする姿勢である。この本質への眼差しが、哲学を生み、科学を生み、現代世界文明の一つの特徴である合理的精神の元となったのである。	同上	同上
3	ホメロス	ホメロスとは『イリアス』『オデュセイア』の二大叙事詩をいうが、これらはギリシア人の産み出した最古の文学作品であるとともに、ギリシア人の人生観の源泉を表すものである。これらを素材にして、ギリシア人にとり神とは何であったか、ホメロス的人間の霊魂観は何を意味したか、英雄的人生とはどういう生き方なのか、を考え、ギリシア的人間の人生に対する態度の原型を確かめる。	同上	同上
4	ギリシア悲劇	悲劇的人間観はすでにホメロスのうちにその原型を現しているが、それを発展させ比類なき文学へと結晶せしめたのがギリシア悲劇である。本講義では、その代表として、アイスキュロスの『縛られたプロメテウス』と『オレステイア三部作』、さらに、ソフォクレスの『オイディプス王』とをとりあげる。アイスキュロスはこの世界における正義の貫徹を固く信じていたが、この信念を前者では暴君ゼウスの倫理的敗北として、後者ではアルゴス王家の血塗れの凶行の果てし無き連鎖の中で貫徹されてゆく倫理法則の絶対性として、跡づけようとした。これに対し、ソフォクレスは、オイディプス王を素材にして、人間の意図的な努力がことごとく逆の結果を産み出してくるという恐るべきアイロニーを描いて、運命の圧倒的な力に対する人間の無力と諦念を語った。	同上	同上
5	ソクラテス以前の哲学（1）	哲学はミレトスのタレスが万物の根源を求めたときに始まった。この根源の探究の歩みをヘラクレイトスまで辿る。アナクシマドロスは、ハイデガーが存在の思索の初端として極めて重視した哲学者であり、また、ヘラクレイトスは、ニーチェが深い親近性を感じた哲学者であるから、これらの点にも触れて、ギリシア哲学と現代哲学との関連も考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	ソクラテス以前の哲学（2）	パルメニデスからデモクリトスまでを考察する。パルメニデスは存在の思索を最初に体系的に展開した哲学者であるから、その論理をやや詳しく辿り、ハイデガーとの関連も考える。エンペドクレスでは、「魂の堕落と浄め」などのオルフィズムの宗教思想を、デモクリストでは、唯物論的世界観の原型を考える。	岩田靖夫	岩田靖夫
7	ソフィスト	紀元前５世紀に起こったソフィスト運動はギリシア文化における啓蒙時代を現すものである。かれらは伝統的な宗教、道徳、政治などの基礎を洗い直し、これらに破壊的な批判を加えた。かれらの中の重要人物、「人間は万物の尺度である」と言ったプロタゴラス、存在の不可知論を説いたゴルギアス、「正義とは強者の利益である」と主張したトラシュマコスなどを取り上げる。	同上	同上
8	ソクラテス	ソクラテスは、哲学が「外部の自然」に向かっていたのを「人間自身の内面」へと向け変えた人、その意味で倫理学の創始者である。人間が考えるべきもっとも重要な問題は「いかに生きるべきか」の問いである、と言って、かれは善の探究に一生を捧げ、その結果処刑された。かれの立てた問いとこの哲学活動はなにごとを意味しているのか。	同上	同上
9	プラトン	プラトンは師ソクラテスの哲学的息吹を受け継ぎ、これを理論化した人である。ソクラテスの哲学的信念は不滅の霊魂の確信と固く結びついているが、プラトンは『パイドン』でこの確信に理論的支柱を与えた。また、『国家』では、ソクラテスの求めた正義の理念に具体的な形を与えた。これらの理論の骨組みと意味とを考察する。	同上	同上
10	アリストテレス	アリストテレスは真実の意味で理性主義の実りとしてのギリシア哲学の完成者であり、以後に続く万学の創始者である。このアリストテレスの体系から、自然と実体についての理論を取上げ、理性主義の世界観とは何であるかを簡潔に説明する。	同上	同上
11	旧約聖書へのいざない（1）	旧約文献特にモーセ五書の成立についての諸説と、ほぼ通説となっているところを述べる。文献の成立以前に伝承の集積があり、それについての諸説はさらに定説をさだめることは困難だが、それにも少し触れたい。それらの諸伝承は、東地中海地域全体の歴史と深くからみあっている。メソポタミア・エジプト・パレスチナ・ギリシア等の背景の内でのイスラエルの歴史の位置を、文献学・考古学がどのように推測するかを大まかに述べる。	坂口ふみ（清泉女子大学教授）	坂口ふみ（清泉女子大学教授）
12	旧約聖書へのいざない（2）	歴代志・列王紀・預言者たちは、イスラエルの苦難の歴史のうちで、原初のモーセ五書の宗教性を変化させ、深化させて行った。現実のイスラエルの歴史とのかかわりにおいて、その宗教性の特色と変貌性を述べたい。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
13	旧約聖書へのいざない（3）	イスラエル思想の発展の内で、エジプト・メソポタミア・ヘレニズム等のイスラエルと異質な思想の影響はみのがせない。知恵文学と呼ばれるものや、旧約の七十人訳などを材料として、それらの影響がイスラエル思想をたんなる一民族の思想から普遍性を持つ思想へと変えていくプロセスを描きたい。	坂口ふみ	坂口ふみ
14	旧約から新約へ	これまでの発展をふまえつつ、イエス・パウロにおいて、旧約思想がどのように変貌したか、その断絶と連続の相を描く。イエス・パウロの思想はそれぞれ異なった仕方で、旧約の経て来た変化・発展を鮮やかな形で新しい相貌・新しい体系へともたらしたものとみなされうる。	同上	同上
15	「自由で平等な人間」と「神の痕跡」	ギリシア的合理性とヘブライ的宗教性の根源的かつ相補的な意味を、現代の倫理思想において確認する。前者は、正義論の代表的哲学者ロールズの思想のうちに見られる、自由と平等の理念に基づく公平な社会の建設という思想である。後者は、ユダヤ人哲学者レヴィナスの思想のうちに見られる、他者へ無限の責任を負う者としての自己、他者への奉仕のうちに解体する自己、という思想である。これら両者は人間の生を織りなす二つの次元を指し示している。	岩田靖夫	岩田靖夫

＝ プラグマティズムと現代 ＝（R）

〔 主 任 講 師 ： 魚 津　郁 夫（熊本大学名誉教授）〕

全体のねらい

現代アメリカを代表する哲学思想プラグマティズムをとりあげ、その創唱者であるＣ・Ｓ・パース、それを全世界にひろめたW・ジェイムズ、さらに両者の思想を集大成したＪ・デューイなど、この流派の主要な哲学者の思想を概観したのちに、W・クワイン、Ｒ・ローティーなどによる新しい展開をたどり、プラグマティズムの現代的意義を考察する。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	プラグマティズムとは何か	1870年代のはじめ、パースのとなえた「プラグマティック・マクシム」がプラグマティズムの原点であることを見たのちに、その中心思想が、思想と行動の結びつきの重視にあることを指摘し、その名称がカント哲学に由来することを明らかにする。	魚津郁夫（熊本大学名誉教授）	魚津郁夫（熊本大学名誉教授）
2	パースにおける「探究」と真理	パースは、私たちの思考はすべて疑念から信念の確定にいたる「探究」であるとする。そうした探究の四つのパターンを検討し、パースの「実在」観と「真理」観を明らかにする。	同　上	同　上
3	パースの記号論	パース哲学のもっとも初期に展開された「直観主義の否定」と、そこから帰結する、あらゆる思考を記号によって媒介されたものとする「記号主義」を考察し、さらに晩年に展開された「記号論」を検討する。	同　上	同　上
4	パースのアブダクションと可謬主義	パースによれば、推論形式には演繹と帰納のほかに、アブダクションがある。科学的探究では、仮説をたてるのにアブダクションがもちいられるが、そこにはつねに誤謬の可能性がつきまとう。こうした「可謬主義」がパース哲学の根底にあることを指摘する。	同　上	同　上
5	ジェイムズの真理観	ジェイムズは、パースのプラグマティック・マクシムに独自の解釈をくわえて、真理論を展開する。本章では、いわば二重構造の真理説によって、科学的世界観と宗教的信条の両立をはかるジェイムズの試みを検討する。	同　上	同　上
6	ジェイムズの宗教観	宗教とは、個々の人間が孤独のなかにあって、神的な存在なるものとかかわっていることを自覚するときに生じる経験である、とジェイムズはいう。こうした立場から、ジェイムズによって記述された二つのタイプの宗教を検討する。	同　上	同　上
7	ジェイムズの根本的経験論と多元論	ジェイムズによれば、経験の原初的な形は「純粋経験」である。そこには主観と客観の区別はない。それはいわば心と物の交点であって、反省によって、外的世界と自我という二つの系列にわかれるにすぎない。こうした見解は、西田哲学につよい影響をあたえた。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ミードの社会的行動主義	ミードは、「社会的行動主義」の立場から、人間の意識は情報伝達という社会的行動のなかからうまれることを主張し、観察可能な社会的行動から、個人の内面的意識を解明することを試みる。したがって、個人の外的行動のみを対象とする行動主義は、社会と、個人の内面を無視するという二重の誤りをおかしている、という。	魚津郁夫	魚津郁夫
9	ミードのコミュニケーション論	ジェイムズの心理学の影響のもとに、ミードは行動を基礎にしてコミュニケーション理論を構築する。ここではミードにしたがって、たんなる「身ぶり」から、「有意味シンボル」としての「有声身ぶり」をへて、「言語」の成立にいたる道筋を検討する。	同上	同上
10	ミードの自我論	自分にたいする相手の態度や役割を自分のなかにとりいれることによって自我が確立される、という「役割取得」説にもとづく、独自な自我論の展開。社会と個人の関係も、同様の観点から論じられる。	同上	同上
11	デューイの道具主義	観念の意味を、その観念にもとづく「行為の結果」との関連においてとらえるパース以来のプラグマティズムの流れのなかで、デューイは、観念を問題解決のための道具とする彼独自の「道具主義」をとなえた。こうした基本的立場の展開をあとづける。	同上	同上
12	デューイにおける探究、真理、および宗教	デューイは論理学を探究の理論としてとらえる。探究とは、不確定な問題状況を、確定された状況へと、制御された仕方で転化させることである。探究は、すべて問題解決のための活動であり、五つの段階をへて、「保証された言明可能性」にいたる。	同上	同上
13	デューイと価値の問題	行為の基準として、普遍的価値にうったえる立場と、現実的享受を重視する立場との断絶を埋めることを試みる　デューイの価値論。さらに、芸術は、能動と受動からなる一つの統一的経験にひとしい、とする彼の芸術論。これらの二つの理論を検討する。	同上	同上
14	モリスとクワインの思想	モリスは、パースの影響のもとに、記号過程の研究を構文論と意味論と語用論の三部門にわけて記号論を基礎づけ、クワインは、オ・プラグマティズムの立場から、論理的経験主義の二つのドグマを指摘して20世紀後半の分析哲学に深刻な影響をあたえた。	同上	同上
15	ローティーのプラグマティズムとその批判 ―全体をふりかえって	プラグマティズムの特徴は、普遍的な本質を否定し、事実と価値の区別をみとめず、他者である探究者との意見交換による連帯を重視する点にある、とするリチャード・ローティの主張に焦点をあてつつ、プラグマティズムの現代的意義を考察する。	同上	同上

＝倫理学入門＝（R）

〔主任講師：宇都宮　芳明（北海道情報大学教授）〕

全体のねらい

倫理学とは、一言で言えば、人間の「人間らしさ」としての「人間性」を探究する学である。今回の入門では、西洋のこれまでの代表的な倫理学説をなるべく広範囲にわたって取り上げ、それらを紹介するとともに批判的に検討し、人間の「人間らしさ」がどこに成り立つかを考えていきたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	倫理学がたずねるもの	倫理学は「人間とはなにか」とたずねるが、そこでたずねられるのはたんなる生物としての人間ではなく、人間であるにふさわしい「人間らしい人間」であり、それを成り立たせている「人間性」（「非人間性」に対立する）である。	宇都宮芳明（北海道情報大学教授）	宇都宮芳明（北海道情報大学教授）
2	人間性について	「人間性」という言葉は、「人間らしさ」を意味するとともに、他方「人間としての本性」をも意味する。後者の意味での人間性についてはさまざまな見方があるが、ここではそれを、自然主義的な見方、歴史主義的な見方、実存主義的な見方に大別する。	同上	同上
3	自然主義（1）アリストテレスの倫理	人間は理性的動物であるという自然主義的な見方に基づく人間性の規定はギリシア古代に生じ、そこから理性的に生きることが人間らしい生き方とされた。では、理性的な生き方とはどのような生き方であろうか。アリストテレスの説について考える。	同上	同上
4	自然主義（2）エピクロスとストア派の倫理	ヘレニズム時代になると、エピクロスとストア派が登場した。今日エピキュリアンと言えば享楽主義者、ストイックと言えば禁欲主義者を指すが、こうした見方が正しいかどうかを検討し、またストア派から生じた自然法という考えについて触れる。	同上	同上
5	主我主義と主他主義	ここで少し視点を変え、倫理学説としての主我（利己）主義と主他（利他）主義の対立について考える。人間の行為はすべて主我的であるとする理論は正しくないし、逆に人間の「人間らしさ」はもっぱら他者の幸福を促進することにあるとする主他主義の主張にも問題がある。	同上	同上
6	自然主義（3）功利主義の倫理	18世紀末から、人間には幸福（快）を求める自然的本性があると認めた上で、「最大多数の最大幸福」をもたらす行為が正しいとする功利主義の考え（ベンサム、J.S.ミル）が生じたが、ここではこの功利主義の主張についてその内容を紹介する。	同上	同上
7	功利主義批判と義務論	功利主義の主張に見いだされる問題点を指摘し、功利主義を批判して、人間に課せられた「義務」を重視し、行為の正しさは幸福を結果することにではなく、義務を順守することにあるとする「義務論」の考えについて説明する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	カントの倫理学	義務を順守するようになるのは、人間の「善い意志」によると考えるのがカントであるから、ここではカントによる幸福主義批判に触れ、またカントの「善い意志」と「定言命法」の関係について説明し、人格のうちの人間性が目的自体として絶対的価値（尊厳）を持つとするカントの主張について考える。	宇都宮芳明	宇都宮芳明
9	歴史主義と倫理	人間に備わる不変の自然的本性よりも、人間性の歴史的変化を重視するのが歴史主義的な見方であって、ここから倫理が歴史的に相対的であるという主張が生まれる。ここではこうした歴史的相対主義の考えを紹介し、さらにその批判的検討を試みる。	同　上	同　上
10	実存主義と倫理	個々の人間のあり方をあらかじめ規定しているような人間の本質（人間性）の存在を否定し、人間にあっては個々の実存が本質に先立つとするのが実存主義である。ここではサルトルやハイデッガーを手掛かりとして、このような考えから帰結する倫理について考える。	同　上	同　上
11	人「間」と倫理	人間の「人間らしさ」が、人間と人間との「間」において成り立つことを指摘し、類としての人間の本質（人間性）は個々の人間のうちにあらかじめ内在しているのではなく、個と個の統一（私と汝の統一）において成り立つとするフォイエルバッハの考えを紹介する。	同　上	同　上
12	「私と汝」のその後の展開	フォイエルバッハによる「汝の発見」は、デカルトによる「自我の発見」に匹敵する思想史上の偉業と評価するひとがいる。ここでは現代において展開されているその後の「私と汝」の思想について概観し、それが向かう方向について考える。	同　上	同　上
13	役割関係と役割倫理	レーヴィットは、フォイエルバッハの「私と汝」の関係を「役割」もしくは「ペルソナ」の関係として再構成しようとした。現代では社会学のなかにも人間関係を役割関係として捉える見方があるが、このような視点からどのような倫理が導かれるかについて考察する。	同　上	同　上
14	和辻倫理学	日本の代表的な倫理学者である和辻哲郎は、倫理学を人と人との間の学である「人間学」と規定した。この考えは「私と汝」思想の延長線上に位置するとも言えるが、しかしここでは、主著『倫理学』で展開されている倫理について、さらに立ち入って検討することにする。	同　上	同　上
15	社会倫理と人類倫理	ベルクソンは愛のあり方に注目しつつ、道徳を「社会道徳」（「閉じた道徳」）と「人類道徳」（「開いた道徳」）に区別した。今日われわれに求められているのは人類道徳であるが、それと「私と汝」に基づく倫理とがどのように結びつくかを考える。	同　上	同　上

＝ 宗教への招待（’９９）＝（ＴＶ）

〔 主 任 講 師 ： 大 峯　顯（大阪大学名誉教授）〕

全体のねらい

死すべき命を生きる人類の生活と文化は、昔から人間と人間以上の実在との関係としての宗教を根本にして成り立って来たが、科学が発生してからは、この重要な基盤が動揺しはじめた。これは現代文明における深刻な根本の問題である。人間存在にとって宗教がなぜ必要かを明らかにして、宗教の再生の途を探りたい。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代日本と宗教	仏教の伝統が崩れてきた明治以後の日本社会は、真の宗教を失って世俗化し、いろいろな擬似宗教を経験してきたと言える。日本はおそらく世界中のどの国家よりも世俗化が進んだ非宗教的な社会だと外国人の目に映るようである。その実態を明らかにする。	大 峯　顯（大阪大学名誉教授）	大 峯　顯（大阪大学名誉教授）
2	民族宗教と世界宗教	宗教は民族宗教（原始宗教）と世界宗教（歴史宗教）の二つの類型に分けられる。両宗教のちがいを明らかにすることによって世界宗教の本質的な特質である現世否定と現世超越性を明らかにする一方、宗教研究の二つの立場である「宗教学」と「宗教哲学」について述べる。	同　上	同　上
3	現代人と死（その１）	現代文明社会に生きる人間の特徴は、死というものに対する異常なまでの拒否であると思われる。しかし、人間が死すべき存在である以上、死の問題を拒否することは、とりもなおさず人間を見失うことである。古代と中世の死生観の紹介。	同　上	同　上
4	現代人と死（その２）	近代から現代までの哲学にあらわれた死生観の紹介。	同　上	同　上
5	現代人と死（その３）	大乗仏教の死生観の紹介。	同　上	同　上
6	宗教の本質を問う（その１）	宗教といういとなみをそれ以外の人類のいとなみから区別する特質、宗教をして宗教たらしめるところのものが宗教の本質である。これを最初に問題にしたのが近代ヨーロッパに成立した宗教哲学であるが、現代の非宗教的な状況の中でもう一度この問題をあつかう。	同　上	同　上
7	宗教の本質を問う（その２）		同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	宗教と言葉	言葉が最も根源的な姿をあらわしてくるのは宗教においてである。キリスト教の聖書や禅仏教、浄土教の「名号」などにあらわれている言葉の諸相を明らかにして、人間にとって言葉とは何かという問題を考える。	大峯顯	大峯顯
9	日本人の自然観（その1）	日本の仏教や文芸の著しい特色は自然というものを親しい友として見ると同時に人間以上の聖なるものと見ている点にある。仏教の言葉で言えば、自然は仏であったり衆生（同朋）であったりする。日本人の自然体験の流れを具体的なテキストに即してたどる。	同上	同上
10	日本人の自然観（その2）		同上	同上
11	聖と俗（その1）	宗教とは人間と聖なるものとの関係だと言ってよい。しかし、人類の歴史の中で聖なるものの観念はいつも同じではなく、さまざま変貌を見せている。東西の宗教思想における聖のいろいろな姿をたどりながら、聖と俗との交渉を明らかにする。	同上	同上
12	聖と俗（その2）		同上	同上
13	宗教と哲学	宗教と哲学とは共に絶対的なものにかかわる人間のいとなみでありながら、同時にまた信仰と知性という正反対の面をもっている。この両方がどのように関係するかという問題をとりあつかう。	同上	同上
14	宗教と科学	今日すべての宗教が直面している最も深刻な問題は科学や科学技術との関係である。科学的な世界観は宗教的世界観と正反対のところがあるが、それにもかかわらず、人間精神の中で、この二つは何らかの仕方で統一されなければならない。その統一の途を探る。	同上	同上
15	生命とは何か	宗教は個人の願望とかイデオロギーではなく、各人の内にある生命それ自身の要求、生命が生命自身を自覚しようとするいとなみである。ライフ・サイエンスは生命を外から研究するのに対して、宗教は生命を生命自身の内から明らかにする。	同上	同上

＝ 国語学概論（’９８）＝（R）

〔主任講師：白藤　禮幸（帝京大学教授）〕
〔主任講師：杉浦　克己（放送大学助教授）〕

全体のねらい
世界各国との接触が日常的となった今日、私たちの「国語」は従来とは違った視点で見直し、より意識的になる必要があるのではないだろうか。そのような視点で国語の諸分野を概観し、我々の言語を対照的に捉えることを目的とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	国語とは、日本語の位置	我々日本人は私たちの言葉を国語と呼んできた。こう呼ばれることにはそれなりの歴史があった。その背景を考え、国際化の進んだ今、我々の言葉が、世界の中でどのような位置を占めているか、外国の言葉と対照的に捉えることの意義を考える。	白藤禮幸（帝京大学教授）	白藤禮幸（帝京大学教授）
2	国語の諸相	一口に国語といってもそれなりの時間的な長さと空間的な広がりを持っている。また、同時代のなかでも位相的に多面的な姿を示す。音声言語と文字言語、話し言葉と書き言葉、男性語と女性語、など国語のいろんな姿を見てみる。	同上	同上
3	国語の音韻	言語の最も基本的な要素は話し言葉の声である。国語のそれにはどのような単位があり、それがどのような仕組み、体系を成しているか、また、他の言語と比較した場合、どのような性質を持っているのか、を音韻の面から述べる。	同上	同上
4	漢字音	日本漢字音としての呉音・漢音などが何時どのようにして日本語の中に定着したか、漢字音が定着する過程で日本語に対してどのような影響を与えたか、漢字音の表記法（字音仮名遣い）にはどんな問題があるか、などについて考える。	沼本克明（広島大学教授）	沼本克明（広島大学教授）
5	国語の文字	国語の文字は、世界の諸言語と比較しても、文字に関して極めて特異な特色を持っている。表意文字の漢字、表音文字の片仮名・平仮名、その他、アルファベットやローマ数字など多種の文字を使っている。その背景と問題点を考える。	白藤禮幸	白藤禮幸
6	国語の表記	多種の文字を用いる国語の表記には、それ故の問題点がある。その表記の歴史的な変遷を概観し、仮名遣い、漢字制限、漢字仮名交じり、片仮名・平仮名の使い分け、句読点その他の記号の用法など、現代語の表記に関する問題点を考える。	同上	同上
7	国語の構造	現代日本語において、未来・現在・過去の時制はどのように表されているか。また、基準時間において、運動が継続中であるか、それとも既に完結しているかはどのようにして表されているか。現代日本語のテンス・アスペクト体系を諸言語や古代語と比較しながら考える。	鈴木泰（お茶の水女子大学教授）	鈴木泰（お茶の水女子大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	文語と口語	日本語において、活用は、何のために、どのようにして生れたか。そして、活用体系は古代語から近代語に移り変る中でいかなる変遷を辿ったか。そうした変遷の中で変らなかったものは何か。また、それによって日本語の表現はいかなる変化を蒙ったかを考える。	鈴木　泰	鈴木　泰
9	文章・文体	国語の文体を、歴史的な観点て主に表記面から、漢文とその訓読に由来する類と、和歌や女流日記等の平仮名文に由来する類に整理してその成立と発達を概説すると共に、現代の諸文体の特色とその役割をこれに関係づけて述べる。	杉浦克己（放送大学助教授）	杉浦克己（放送大学助教授）
10	敬語	敬意に基づく待遇表現としての敬語の基本的な役割の観点から敬語を分類整理し、その発達・変化を概説し、さらに現代では身内他人敬語・荘重語のように人への敬意ではなく場への配慮として用いられる敬語へと変化しつつあることを述べる。	同上	同上
11	国語の語彙	意味を表す最小単位として単語をとらえ、単語とその意味はどのようにとらえることができるかを、シソーラスや幼児の「万能語」などを例に概説し、単語はどのように習得され、どのように頭の中で整理されて用いられているかを考える。	同上	同上
12	和語・漢語・外来語	国語で用いられる語彙は、その由来によって大きくいくつかのグループに大別できることを述べ、それは単に由来のみでなく表記や文体等とも関係して、国語の実用上に大きな影響を与えていることを、実例を挙げながら概説する。	同上	同上
13	方言	日本には、そのせまい国土のわりには、土地によって言葉が違うという方言の差が著しく認められる。その方言の姿を音韻・語法・語彙について、いくつかの事例に基づき、土地・所による言葉の形の差を大きな視点で概観する。	小林　隆（東北大学助教授）	小林　隆（東北大学助教授）
14	国語研究の歴史	国語について、どのような研究がなされてきたか、我々の先人は、国語のどのような面に問題を感じてきたかを、中古以降の音韻・文字・語法の研究書を取り上げ、そこで論じられたことを概観し、あわせて国語の性質を考える。	白藤禮幸	白藤禮幸
15	国語の将来	国語の抱える問題点とその歴史的な背景を概説し、現代社会の多様化や情報化・国際化等と関連づけて具体的な国語政策や教育政策の現状と今後の方向を考える。	杉浦克己	杉浦克己

＝日本語表現法＝（R）

〔主任講師：清水　康行（日本女子大学教授）〕

全体のねらい

現代日本語の表現方法について、話し言葉・書き言葉の両面から、平易に解説し、受講者の言語に対する関心、知識を深め、日本語の運用力を高めることを目的とする。総花的な概説は目指さず、比較的限定された領域について、細切れの知識ではなく、基礎的事項を余裕を持って教授していきたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	日本語の現在	現代の日本語を取りまく状況を概観する。世界の中の日本語、日本の中の日本語の位置を押さえ、現代における日本語表現のあり方を考える。	清水康行（日本女子大学教授）	清水康行（日本女子大学教授）
2	日本語の音声的特徴	日本語の音声的特徴の概観。比較的単純な開音節構造を基本とすること、等拍性が重要であること等に触れ、表現上、留意すべき諸点を踏まえる。	同上	同上
3	日本語の文法的特徴	日本語の文法的特徴の概観。基本的文構造、文末決定性、運用面での文末の機能と実態に触れ、表現上の留意点に説き及ぶ。	同上	同上
4	敬語の基本	敬語論の概観。日本語の敬語の特徴と機能、その体系的把握について講じる。	菊地康人（東京大学助教授）	菊地康人（東京大学助教授）
5	適切な敬語	敬語の運用論。敬語運用上の諸注意を講じ、敬語の効果的使用、誤用について理解を深める。	同上	同上
6	日本語の現場（一）	職業的言語表現者であるアナウンサーをゲストに迎え、放送の現場における日本語の表現について考える。	清水康行	清水康行
7	文章語の特質	文章語と口頭語との基本的な性格差を論じ、文章語固有の特徴、表現上の留意点について概観する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	表記の理論	日本語の表記論の概観。表記の原理、法則性について講じる。	小野正弘（鶴見大学教授）	小野正弘（鶴見大学教授）
9	表記の実際	表記上の実際の諸問題に即しながら、表記と効率的な表現との関連について講じる。	同上	同上
10	句読法の問題	句読法の原理と運用について講じ、効果的な表現を得るため、句読法についての理解を深める。	清水康行	清水康行
11	文章構成の原理	文章構成法の概観。起承転結、序論・本論・結論などの文章構成原理について概観する。	同上	同上
12	文章構成の実際	効果的な表現となるための文章構成について実例を示しつつ考えていく。	同上	同上
13	日本語の現場（落語と日本語）（二）	プロの落語家をゲストに迎え、日本の代表的な話芸である落語における表現上の技法・特徴について考える。	同上	同上
14	定型表現の功罪	挨拶や手紙における定型表現を取り上げ、表現法としての重要さと陳腐さについて考える。	同上	同上
15	明日の日本語	日本語の今後について、特に表現手段と技法の問題に焦点を当てつつ考える。	同上	清水康行 菊地康人 小野正弘

＝ 国文学入門（’００）＝（R）

〔主任講師：堀　　信夫（名古屋女子大学教授）〕
〔主任講師：野山　嘉正（放送大学教授）〕

全体のねらい

国文学全般について、基本的な教養が身につくように基礎的事項や確定している知見を提供する。また、学問の基礎作業を手ほどきし、できるだけ先進的な問題関心についても紹介しながら、わが国の文化的特質について展望する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	国文学とは	導入部として、国文学の基礎的概念を規定しながら、この講義全体の構成について概説する。また国文学研究の成立や展開、さらには近代化の様子を概観する。なお、国文学史の全体像を明らかにするため、その時代区分の仕方についても、簡単に説明する。	堀　信夫（名古屋女子大学教授）	堀　信夫（名古屋女子大学教授）
2	上代文学（Ⅰ）	上代文学の研究は、国語学の発展と緊密に結びついている。これは国語全体に関連する事柄なので、この基本をしっかりおさえて上代文学を概観する視座を確認する。	神野志隆光（東京大学教授）	神野志隆光（東京大学教授）
3	上代文学（Ⅱ）	記紀万葉と一口に言われる習わしだが、代表的な作品について、上代文学ならではの特質を解明し、内容を略説する。また、漢文学や説話についても言及する。	同　上	同　上
4	平安文学（Ⅰ）	漢詩文・和歌・物語と展開していく時代の流れをわかりやすくたどり、それぞれの特質を解説するところから、平安文学全体の構造を探る。また、日記文学の本質についても、時代の特徴と関連させて考える。	鈴木日出男（成蹊大学教授）	鈴木日出男（成蹊大学教授）
5	平安文学（Ⅱ）	和歌と歌論・歌学、またそれに関連して歌謡の具体相を解説する。散文では物語文学と日記文学の関連や歴史物語の誕生に触れ、説話文学に言及する。締めくくりに『枕草子』と『源氏物語』について述べる。	同　上	同　上
6	中世文学（Ⅰ）	中世は非常に長い期間にわたっているので、まず、その領域と理解の仕方について述べる。次に、韻文・散文のそれぞれを概説し、さらに、この時代の特質である語り物と芸能に関しての初歩的なアプローチの方法を紹介する。	島内裕子（放送大学助教授）	島内裕子（放送大学助教授）
7	中世文学（Ⅱ）	前時代からの継承としての和歌・物語、及び『平家物語』などの軍記物語について解説し、また、中世に特有の韻文の本質・発展、説話集の多様化、『徒然草』などの随筆の盛行など多岐にわたる文学の諸相を概観する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	近世文学（Ⅰ）	時代の支配的思想が、仏教から儒学に移行し、庶民の生活レベルがアップしたこと、および文化の商品化が進行し、衆庶の意向が文学の動向に強い影響を与えたことを明らかにする。特にこの回では近世小説の変遷を概括する。	堀　信夫	堀　信夫
9	近世文学（Ⅱ）	新しく流行した俳諧文学の特質を明らかにしながら、伝統と革新という観点から、和歌文学との比較を試みる。また芭蕉の生き方や思想を中心に、近世俳階の特色を明らかにし、蕪村の芸術との相違点や、雑俳流行の積極的意義などに言及する。	同上	同上
10	日本漢文学の流れ	日本漢文学の簡略な定義をした上で、上代から平安へ、さらに中世の五山文学を経て、近世に達する日本漢文学の流れを概観する。近世においては、日本化と大衆化という観点から巨大な量の作品を分析解明する。	揖斐　高（成蹊大学教授）	揖斐　高（成蹊大学教授）
11	日本演劇	まず、演劇の本質から説き起こし、日本演劇の特性を述べる。次いで能・狂言に代表される中世の演劇について解説し、人形浄瑠璃と歌舞伎で頂点をきわめた近世演劇について考察する。	服部幸雄（日本女子大学教授）	服部幸雄（日本女子大学教授）
12	近代文学（Ⅰ）	明治以後急速に近代化の道をたどった文学の多様な姿を概観する。まず、詩人や作家が用いた文章について、その特質を考察する。次いで近代文学の全体をその傾向と内容からどのように包括的に理解すべきかを述べる。	浅井　清（帝京大学教授）	浅井　清（帝京大学教授）
13	近代文学（Ⅱ）	近代文学の事象から要請される研究上の観点について、その主題と方法に関する基本的な問題を具体的に解説する。これがまた、いわゆる鑑賞から研究への道を開くものであることをわかりやすく述べる。	同上	同上
14	近代詩歌	明治の新体詩と和歌俳諧とを軸にして、近世から近代への歴史的転換について考察する。この問題が遠く現代にまで影響を及ぼし、また日本人論や近代化論の原点になっていることを述べる。	野山嘉正（放送大学教授）	野山嘉正（放送大学教授）
15	結びに代えて	いわゆる戦後に論議をまきおこした第二芸術論を手がかりにして、短詩形文学の運命について考察する。また、戦前戦後の詩と比較しつつ今日にまで及び問題を考え、あわせて国文学の本質まで展望する。	同上	同上

＝ 近代詩歌の歴史（’９９）＝（R）

〔主任講師：野山　嘉正（放送大学教授）〕

全体のねらい

明治以後において詩歌の変革が避けられない大きな問題であったことを明らかにするのが目標。前代からの連続と断絶、変革の実際などを述べて、内部から近代詩歌の本質を解明する。さらに、散文・小説との関連に照明を当てて外側から近代詩歌のありかたを分析する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	詩歌の歴史の構想	ことばの定義と全体の構成、詩歌の内外を総体として考える。明治期に全領域の基本構造を見定め、さらに散文・小説まで視野に組み込んで考察する。	野山嘉正（放送大学教授）	野山嘉正（放送大学教授）
2	詩歌の変革	正岡子規1　第2回から6回まで子規を視点に据えて考える。前代の韻文・詩歌の状況と、そこから出発した子規のありかた、及び変革の不可避であったことを述べる。	同上	同上
3	文学としての詩歌	正岡子規2　明治二十年代文学を概観し、そのなかで詩歌が占めていた位置を考えながら子規の存在意義を見定める。	同上	同上
4	短歌形1－俳句	正岡子規3　子規の最も重要な成果である俳句革新の具体的な様相を追跡する。	同上	同上
5	短歌形2－短歌	正岡子規4　子規のもう一つの大切な仕事であった短歌革新について概説する。	同上	同上
6	歌俳の系譜1	正岡子規5　子規の理想がどの程度実現したか、または挫折したか、をできるだけ細かく観察し、併せて結社の展開の姿を略述する。	同上	同上
7	新体詩と短歌明星派1	明星派1　初期明星派が結成される過程と結社に対する考えかたを略述する。主な対象は与謝野鉄幹・晶子。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	新体詩と短歌 明星派 2－ 白秋と啄木	明星派2　詩歌の全域を自分の個性として構想した北原白秋と石川啄木について考える。	野山嘉正	野山嘉正
9	新体詩と短歌 明星派 3－ 白秋の全領域	明星派3　第8回に引き続き白秋の後半生に集中して詩歌の全領域への展開の具体的な事実を追跡する。	同上	同上
10	詩歌と小説 1 －近世から近代へ－	近世から近代へ　詩歌と小説の歴史的な位置関係の変化を観察する。併せて小説偏重の文学史を見直す。取り上げる主たる対象は坪内逍遙と北村透谷。	同上	同上
11	詩歌と小説 2 島崎藤村	島崎藤村と田山花袋　いわゆる〈詩歌から散文へ〉という図式を再検討する。二人それぞれの詩歌と小説に対する考えかたを考察する。	同上	同上
12	詩歌と小説 3 －『抒情詩』の詩人たち－	柳田国男と国木田独歩　柳田の散文の背景、独歩の内部の詩歌などを考え、詩歌と韻文の関連を論ずる。	同上	同上
13	詩歌と小説 4 森鷗外	森鷗外について－「啓蒙家」の姿を見せながら、他の追随を許さぬバランス感覚を持っている鷗外が、文学史で果した役割を詩歌を通じて考える。	同上	同上
14	詩歌と小説 5 夏目漱石	夏目漱石について－第一級の俳人、漢詩人であった面を強調することで漱石の本質を再検討する。	同上	同上
15	結び － 芥川龍之介からの一つの見通し	芥川龍之介を転回点に、明治大正期以後の詩歌について、本書の立場から展望する。	同上	同上

＝歴史学の現在＝（ＴＶ）

〔主任講師：福井　憲彦（学習院大学教授）〕

全体のねらい

歴史学は、この数十年来、大きな変化を経験してきている。それは歴史を見る目の変化であり、また史資料の種類や、それらを調べ考える方法の変化でもあった。現在の歴史学は、高校の教科書があたえるイメージとはちがうような歴史の姿を、さまざまに浮き彫りにしている。歴史学の現在を、具体例をたずねながら考えてみよう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	歴史の広がり	現在からの問いがあって、歴史ははじめてその姿を現してくれる。では現在、どのような問いがどのような観点から、いかなる方法をもちいて立てられているのだろうか。歴史学が対象とする広大な地平を、まずは眺めわたすことから出発しよう。	福井憲彦（学習院大学教授）	福井憲彦（学習院大学教授）
2	証拠としての史料／資料	過去の社会について調べ、考えるには、手掛りがなければどうしようもない。文字史料は重要だが、絵画や地図、道具や建物など、非文字資料もまた大切である。歴史への問いの性質と史資料との関係など、基本的なポイントをおさえる。	同上	同上
3	歴史における時間	時間といえば時計が示す時間だけを考えるのは、現代人の悪いくせである。歴史的な過去において人々は時間をどのように意識していたのか、そしていま歴史を問う場合に、どのような時間の尺度を、問題に即して立てればよいのだろうか。	同上	同上
4	「こころ」と「からだ」	たとえば、何を食べていたのかわからずして、食糧一揆は理解できるだろうか。衣食住の日常や人々の感性、身体感覚などについての問いは、決して瑣末なことではない。人々の生きる可能性や病気、医療や衛生観ともかかわる領域である。	同上	同上
5	死生観の変化	死を前にした人々の態度、死の受けとめ方は、歴史のなかで大きなリズムを刻むように変化してきた。ヨーロッパ史について明らかにされたその変化の歴史を素材にして、心性の歴史の捉え方や史料との関係についても考える。	同上	同上
6	家族の歴史的肖像	現在常識とされているような家族のあり方は、いつの時代にもあったわけではない。人類学の発想や手法から学んだ歴史人類学は、家族の歴史について多くの知見をもたらし、歴史における女性や子供についての問いを招くことにも貢献した。	同上	同上
7	歴史人口学が開拓した地平	第２次大戦直後からまずフランスで、ついでイギリスで、統計以前の時代についてを含む、出生、結婚、死亡の率を中心とした地道な人口動態の研究が開始された。使用された史料は何で、数量的研究はどのような成果をあげただろうか。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	人と人とを結ぶもの	人は、たがいにさまざまな関係を形づくりながら、社会を構成している。家族だとか、村や町の住民としてのまとまり、あるいは同じ職業や趣味の関係など、人と人とが結びあう形は、どのように変化し、社会のあり方や政治支配と関係していたのだろうか。	福井憲彦	福井憲彦
9	刷新された政治史の射程	政治の理解も変化した。狭い意味での政界や議会、あるいは戦争や外交だけではなく、政治支配の正当性がどのように成立していたのかも問題である。イメージやシンボルの操作をはじめ、象徴権力を含めた権力の仕組みが検討されている。	同上	同上
10	地域からの視線	しばしば歴史の考察は、ひとつの国を基本的な枠組として行われていた。しかし一国の内部には多様な独自性をもった地域があったのであり、国家形成は多くの場合それらを統合しようとしたものであった。地域からの視線は、差異を見つめる目である。	同上	同上
11	ネットワークと歴史	他の地域や文化圏とまったく無関係に成立した、地域や文化圏の歴史はほとんどない。ここでいうネットワークとは、複数の地域や国、あるいは文化圏や文明を結びつけてきた複合的な関係であり、物や人、情報の動きに着目した歴史の捉え方である。	同上	同上
12	輪切りの発想	交通や情報手段の発達した現代はもちろんのこと、それ以前にあっても歴史の展開は、同時代における地域世界の横のつながりを無視しては、十分に理解できないことがある。経済や外交だけでなく、宗教や思想がかかわる場合も少なくない。	同上	同上
13	他者を見る目と歴史	ある地域世界や文化圏に生きる人々は、他の地域世界や文化圏をどのような目で見ていたのだろうか。そこにはしばしば自分たちの欲望や優越感、あるいは劣等感といった心性が、暗黙のうちに反映していた。それは歴史の展開と大きな関係をもっている。	同上	同上
14	歴史の重層する都市	歴史の変化というものは、ある時点で断層が起こったように生じることもあるが、屋根瓦が重なるようにしてずれながら生じることも多い。巧みな空間構築の技術が読みとれるような都市の事例から、社会にとっての文化技術の伝承や記憶について考えてみる。	同上	同上
15	歴史と環境	人間社会と場所のかかわりは重要である。無限成長を夢見た工業化や科学技術の発展、それを支えた現代人の欲望は、地球環境に重大な危機をもたらした。では歴史の展開は、その舞台である環境とどのようなかかわりをもっていたのだろうか。	同上	同上

＝ 日本の文化と思想（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：大隅 和雄（東京女子大学教授）〕

全体のねらい

日本文化の特色を、文字の使用が始まり、仏教が伝来した頃から、現代に至るまでの歴史の中で解明することをめざす。社会の変化に応じて、日本人の生き方が変わり、それが、思想・文化としてどのように表現され、つぎの時代に受け継がれ、現代日本の思想・文化につながっているかを考える文化史にしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	日本文化史の見方	はじめに、文化の概念と文化史の見方を説明し、日本史の時代区分の中で、各時代の思想・文化のあり方を概観する。日本における思想・文化は、外来文化との接触と緊張関係の中で形成されてきたことに注目し、文化史の時代区分を考えてみたい。	大隅和雄（東京女子大学教授）	大隅和雄（東京女子大学教授）
2	神々の祭りと日本神話	近年、遺跡発掘が進展して、日本文化史の源流の解明が進んできたが、ここでは、国家の統一の動きの中でまとめられた『古事記』『日本書紀』の成立の経緯と、記紀神話の特色、神の性格と祭りについて説明し、日本文化の基層を考えることから始める。	同上	同上
3	仏教の伝来と受容	６世紀の半ばに、百済から仏像と経巻が伝えられ、仏教を通じて外来文化を受容する道がつけられた。仏教受容の進展を、飛鳥時代の文化の動向、律令国家の仏教統制、唐文化圏の仏教、南都仏教の教学、最澄と空海の活動の諸項目に分けて説明する。	同上	同上
4	律令制度と官人の学問	日本の国家統一は、隋・唐の文物を摂取することによって進められた。律令の編纂とその運用に必要な知識の性格と範囲、官人の学問と漢詩文について考え、この時代に摂取された唐代の文化が、日本文化の骨格として大きな役割を果たしたことを説明する。	同上	同上
5	かな文字の成立と国文学	官人や僧侶は、漢字漢文を学ぶかたわら、日本語の表記のためにさまざまな試行を続け、平安時代の半ばに、かな文字を成立させた。漢文の外に、和文が成立したことの意味を考え、豊かな国文学の世界が拓かれたことを説明し、国風文化とその伝統を考える。	同上	同上
6	仏教の革新と庶民への浸透	仏教は、貴族文化を支える役割を担っていたが、日本の社会に浸透して行く中で、土着の信仰と習合し、日本化の道を辿った。鎌倉時代の仏教革新運動の中で生まれた、新しい仏教の動向を説明し、日本の思想と文化の中で仏教が果たしてきた役割を考える。	同上	同上
7	公家と武家の文化	中世の公家は、前代の貴族文化を憧憬の対象とし、その継受者であることを主張し、武家は、公家文化の受容に努める中で、武家の立場を自覚するようになった。公家社会の年中行事と、その武家社会への伝播を手がかりに、中世の文化の特色を考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	芸能の成熟	中世に入って、庶民生活が向上し、貴族社会と大寺院の文化が、庶民の間にも伝播して行く中で、芸能の世界が拡大し、芸の洗練が進み、日本的な芸能が完成の域に達した。平曲などの語り物、舞と歌謡、能・狂言、絵解きと説話と絵巻、などについて説明する。	大隅和雄	大隅和雄
9	儒教とその日本化	中国の古典に関する知識は、貴族文化の支柱であったが、中世に入って、宋・元・明の学問が伝えられ、それまでの日本に存在していたい中国文化の再編が始まった。徳川幕府が重視した朱子学、それを批判した古学について説明し、日本の儒学について考える。	同上	同上
10	国学と洋学	儒学が武家の学問の基本とされる中で、日本の古典に関する学問が起こり、日本精神を重視して儒教や仏教を批判する国学が生まれた。本居宣長を中心に、国学の成立と展開を説明し、同じ頃に始まった、西洋の知識学問の受容と、洋学の成立、性格について考える。	同上	同上
11	町人文化とその思想	近世の日本では各地に都市が成立し、町人や各地の知識人を中心に、新しい都市文化が生み出され、新しい経済関係を背景にした都市生活の諸相が、小説や俳諧、浄瑠璃や歌舞伎、風俗画などの中に描き出された。元禄、化政時代を中心に説明し、その特質を考える。	同上	同上
12	知識人と西欧の思想	幕末、明治の日本人は、西欧の力を前にした緊張の中で、近代化の道を急ぐことになったが、その中で指導的な役割を果たした知識人が、多様な西欧の思想・文化の中で選択したものが何であったかを説明し、明治の日本の思想と文化の特質を考える。	同上	同上
13	日本中心の思想	政府主導の近代化の中で、旧幕臣などの知識人は、表面的な近代化を批判し、前代の日本中心思想を受け継ぐ人は、欧化に反対して、日本の伝統を守ることを主張した。日本中心主義の諸系譜について説明し、その国家観、歴史観などについて考える。	同上	同上
14	近代日本の諸宗教	近代の日本では、神信仰が国家を支える宗教とされ、神社制度が整えられた。いわゆる国家神道の成立過程、戦前の諸宗教の統制、戦後の政教分離、新宗教の活動について説明し、近代の日本人が、宗教に求めてきたものについて考える。	同上	同上
15	国際社会における日本文化	交通通信が急速な発展を遂げる中で、社会生活の世界的な共時性が生まれ、文化の国際化が進んでいる。そういう中で、私たちが、日本の伝統的な文化を理解し、日本文化の特質を外国人に紹介する、というのはどういうことなのか、問題を指摘し整理を試みる。	同上	同上

＝社会科学入門＝（TV）

〔主任講師：坂井　素思（放送大学助教授）〕
〔主任講師：岩永　雅也（放送大学教授）〕
〔主任講師：橋本　裕藏（放送大学助教授）〕

全体のねらい

社会科学とはどのような学問なのか。何を対象とし、どのような方法を用いる学問分野なのか。社会科学の各専門分野へと学習を進める前に、社会科学に関するおおよそのイメージを形作り、基礎的な準備を行うことが必要である。この講義では、社会科学とは何かを知るため、第一に社会を認識することの目的と意味を明らかにし、第二に社会科学の各専門分野に共通する研究上の技法を具体的に学習した上で、第三に政治法律、経済、社会の各分野での典型的な課題に関する研究例をを学ぶ。さらに、社会科学各分野個別の研究に関して理解を深めるだけでなく、さまざまな分野に分岐した社会科学的知識の総合化の可能性と具体的な方法についても展望する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	社会のなかの個人	わたしたちがはじめて社会科学というものに出会うのはどのようなときだろうか。交通規則になぜ従わなければならないのか、と考えるときだろうか。選挙の結果が気になるときだろうか。景気の先行きについて考えるときだろうか。なぜわたしたちは社会科学という学問を必要とするのか。その原点にあるものを見つめてみたい。	坂井素思（放送大学助教授）	坂井素思（放送大学助教授）
2	社会とは何か	社会科学が認識の対象とする社会について、とくに自然科学の対象である自然事象、人文科学の対象であるロゴスなどとの対比において、基本的な意味を明らかにし、さらにその構造と機能を検討する。	岩永雅也（放送大学教授）	岩永雅也（放送大学教授）
3	社会科学の系譜	社会科学は社会を知るための学問であるが、この章でこのような社会科学の系譜を辿ってみたい。社会科学的な知識がいかに形成されてきたのか、その起源と形成過程について考えることにする。このなかで、社会科学がこれまでどのような問題を対象としてきたのかを考察し、以下の章に進むための準備を整える。	坂井素思	坂井素思
4	問題の発見	ある社会現象に直面して、人はこれを是としあるいは非と考える。このとき各自の立場を漠然と表明したのでは、他者に自己の認識内容や問題意識を伝えることはできない他方、一個の社会現象も見方をかえると違った問いかけをしてくる。ここでは、社会事象を自己の問題として認識する方法を考える。	橋本裕藏（放送大学助教授）	橋本裕藏（放送大学助教授） 渥美東洋（中央大学教授） 土本武司（帝京大学教授）
5	認識のプロセス	社会事象の認識には、いくつかのレベルに分けられた種々の方法がある。すなわち認知レベルでの指標化と測定、解釈レベルでの追体験、再構成、あるいは比較レベルでの類型化等である。ここでは、社会科学的な事象認識のさまざまな形を整理しながら、その方法を学習する。	岩永雅也	岩永雅也
6	図書館の利用	「真理はわれらを自由にする」というのは、ある図書館のモットーである。この標語に現れているように、図書館は資料や情報の収集に終わるところではない。実はこのようなプロセスで、人は多くのことを学ぶのである。図書館は人と文献をミックスするところであると同時に、人間を文献から解き放つところでもある。	坂井素思	坂井素思
7	情報の収集	ある社会事象につき、問いを見つけたらこれを解決するために情報を収集する必要がある。情報がなぜ必要か、どんな情報を集めるべきか、どのように集めるか、集めた情報をどのように使うか。それらの点について考察する。	橋本裕藏	橋本裕藏

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	調査の技法	社会事象を正確に把握するためには、目的に適合した形態と内容を持った調査を行うことが必要である。適切な調査とはどのようなものか、どのように実施すればよいのか等、社会科学的な調査の概略を学習する。	岩永雅也	岩永雅也
9	論文の書き方	実際に小論文を書いてみる。このとき、何をどのように書くのかに留意する。論理の飛躍はないか、文献や資料を的確に用いているか、構成は適切か。これらの点にふれながら、論文と論文以外の書き物との違いがどこにあるのかを考える。編、章等の立て方、注のいれ方等にも言及する。	高橋和夫（放送大学助教授）	高橋和夫（放送大学助教授）
10	表現の技法	研究成果の表現形態は、論文に限定されているわけではない。口頭発表や映像を用いた表現やディスカッションの技法など、活字媒体以外のメディアを用いる表現方法について学習する。	岩永雅也	岩永雅也
11	政治学における研究	ここでは社会科学としての政治学についての事例研究を行う。特に、戦後政治の分野に題材をとって、倫理的、実践的事例を考察する。	川出良枝（東京都立大学助教授）	川出良枝（東京都立大学助教授）
12	法律学における研究	ある社会事象を法的視点から捉え、一定の論証を経て結論を導く過程を、実際の法律問題を素材にして示し、法学及び法律学、並びに法律関係諸領域の研究の仕方等を考える。	橋本裕藏	橋本裕藏
13	経済学における研究	経済学では、何をどのように知ろうとしてきたか。経済分野でみることのできる、問題発見、資料収集、結論の導き方などについて、ここで考えてみる。すべての経済学分野について観察することは到底できないので、ここではひとつの論文を取り上げて、その形成プロセスを追ってみることにする。	坂井素思	坂井素思
14	社会学における研究	社会学は、現実の社会事象をあるがままに経験的に把握し、その錯綜した複雑な現象形態の背後にある法則性や事象間の関連構造を明らかにすることを目的とする学問分野である。ここでは、古典的な研究成果を参照しつつ、実際的な社会学研究のモデルを展開する。	岩永雅也	岩永雅也
15	社会科学の目的	社会科学という学問が最終的に目指す「目的」には、どのようなことがありうるだろうか。社会科学研究はどのような意味で人間にとって「役立つ」といえるのか。この章では、社会科学の議論方法、結論を導く方法などを考察しながら、社会科学研究の効用について一緒に考えてみたい。	坂井素思	坂井素思 岩永雅也 橋本裕藏

＝ 法学入門（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：田中 成明（京都大学教授）〕

全体のねらい

法の基本的なしくみと主な機能、法の実現すべき目的・価値、法の運用方式とその担い手などについて、現代日本の法状況に焦点を合わせて説明し、法というものをどのように考え、どのように用いるべきかということを中心に、市民的教養としての法の理解を深めることをめざしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	法へのアプローチ	講義全体の序論として、一般の人々の法イメージ・法体験や法への期待と反発がどのようなものであるかを紹介・検討しながら、法というものの基本的な考え方、法学を学ぶにあたって心がけるべきことなどを説明する。	田中成明（京都大学教授）	田中成明（京都大学教授）
2	どのような法があるか	法学を学ぶにあたっての基礎的知識として、法の主な存在形態（法源）を概観した上で、公法と私法、民事法と刑事法、実体法と手続法、国内法と国際法など、法の主な種別について説明する。	同上	同上
3	法の機能	法の規範的機能の特質と法規範の主な種別を概観した上で、法システムの主な社会的機能を取り上げて、それぞれの機能や全体の相互関係をどのように理解すべきかについて説明する。	同上	同上
4	日本の法制度と法文化	世界の主な法系と法の継受について大陸法系と英米法系を中心に概観した上で、日本の法制度が中国法・大陸法・英米法の影響を順次受けて発展してきた過程を辿り、日本の法文化の特殊性論議を紹介・検討する。	同上	同上
5	法と強制	法における強制の意義と特質について一般的に説明した上で、刑罰による犯罪の事前抑止と事後処理という典型的な事例と、最近の法的サンクションの多様化の代表的事例とを対比しながら、現代法における強制の役割をどのように考えるべきかを検討する。	同上	同上
6	法と道徳	自然法論と法実証主義、法の外面性と道徳の内面性など、法と道徳の区別と関連に関する主な考え方を紹介した上で、法による道徳の強制、法的パターナリズムをめぐる最近の問題状況を、具体的事例を取り上げて検討する。	同上	同上
7	法と正義	主な正義観念と法との関係、法的正義としての「合法性」の特質を説明した上で、最近の正義論の動向を紹介しつつ、正義実現において現代法システムが果たしうる役割の可能性と限界を考察する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	裁判制度	典型的な法制度とされる裁判の歴史を概観し近代の司法的裁判の特質を説明した上で、現代日本の裁判制度の組織と活動について、その基本的構造と現況を紹介・検討する。	田中成明	田中成明
9	裁判の機能	裁判の政策形成機能を期待した現代型訴訟の続発、和解・調停などの裁判外紛争解決手続の活況という、裁判利用に関する二つの現代的現象を取り上げて、代表的な事例を紹介しながら、その意義や問題点を検討する。	同上	同上
10	法的思考	法的思考あるいはリーガル・マインドといわれているものの特徴を説明し、それに対する学問的・社会的などの批判・評価をどのように考えるべきかを検討する。	同上	同上
11	法の解釈と適用（I）	法の解釈と適用という、法を運用しその目的を実現する中心的活動について、その基本的な論理構造を説明した上で、具体的事例を取り上げながら、事実認定と法の解釈をめぐる主な問題を検討する。	同上	同上
12	法の解釈と適用（II）	同上	同上	同上
13	法学という学問	古代ローマ以来の長い歴史をもつ法律学の発展を概観した後、法政策学、法哲学、法社会学など、法に関してアプローチを異にする諸々の学問が生まれた背景とそれらの現況を説明する。	同上	同上
14	法律家	わが国における裁判官・検察官・弁護士などの法律家の組織や活動を概観した上で、法曹一元制，国民の司法参加，法曹養成制度などに関する改革論議を検討する。	同上	同上
15	法の考え方と用い方	講義全体のまとめとして、法というものの特質をどのように理解し、日本社会における法の役割をどのように考え、市民一人一人がどのような姿勢で法にかかわりあうべきかについて説明する。	同上	同上

＝ 国 家 と 人 間 ＝（ＴＶ）

― 憲法の基本問題 ―

〔 主任講師 ： 佐藤 幸治（京都大学教授）〕

全体のねらい

日本国憲法の諸規定について有機的・総合的に理解できるように工夫しながら、現代国家に生きる人間が「自由で価値ある生」を全うできるような制度の仕組みや運用のあり方を考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	国家・主権・憲法	(1) 国家と主権 (2) 国家と憲法 ― 立憲主義の展開 (3) 国民主権の意義 (4) 立憲主義と現代国家	佐藤幸治（京都大学教授）	佐藤幸治（京都大学教授）
2	法の支配と法治国家	(1) 法の支配と法治国家 (2) 法の支配と国民主権 (3) 日本国憲法と法の支配	同上	同上
3	国家・個人・集団	(1) 近代立憲主義における個人と集団 (2) 日本国憲法の集団観 (3) いわゆる「部分社会」論 (4) 集団の自治と個人の自由	同上	同上
4	個人の尊重と幸福追求権	(1) 基本的人権・個人の尊重・幸福追求権 (2) 幸福追求権と憲法の保障する各種人権 (3) 基本的人権の保障の限界 (4) 私人間における人権	同上	同上
5	プライヴァシーと個人情報の保護	(1) プライヴァシーの権利の意義 (2) プライヴァシーの権利の侵害と司法的救済 (3) 個人情報保護制度	同上	同上
6	法の下の平等	(1) 法の下の平等の意義 (2) 日本国憲法と法の下の平等 (3) 法の下の平等と家族生活 (4) 議員定数不均衡問題	同上	同上
7	内心の自由の保障	(1) 思想・良心の自由 (2) 信教の自由 (3) 学問の自由	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	表現の自由の保障	(1) 表現の自由の意義 (2) 表現の自由の保障とその限界 (3) 「知る権利」と情報公開制度 (4) 集会の自由の保障とその限界	佐藤幸治	佐藤幸治
9	経済的生活と良き生活環境	(1) 経済的自由の意義 (2) 経済的自由の制約 (3) 社会権の保障の意義	同上	同上
10	国会と立法権	(1) 国会の性格と地位 (2) 立法権の意味 (3) 国会の組織と活動 (4) 財政立憲主義	同上	同上
11	内閣と行政権	(1) 内閣の性格と地位 (2) 行政権の意味 (3) 内閣の組織と活動 (4) 独立行政委員会	同上	同上
12	地方の政治と住民自治	(1) 地方自治の本旨 (2) 地方公共団体とその機関 (3) 条例制定権とその限界	同上	同上
13	裁判所と司法権	(1) 裁判所の性格と地位 (2) 司法権の意味 (3) 裁判所の組織と活動	同上	同上
14	憲法の保障と違憲審査制	(1) 憲法の保障の意義 (2) 憲法の改正 (3) 違憲審査制	同上	同上
15	国際協和と平和の追求	(1) 国際協和と平和の追求 (2) 「国際協和」の法的側面 －98条2項－ (3) 「国際協和」の政治的側面 －9条－	同上	同上

＝ 政治学入門（’００）＝（R）

〔主任講師：阿部　齊（放送大学教授）〕
〔主任講師：久保　文明（慶應義塾大学教授）〕
〔主任講師：山岡　龍一（放送大学助教授）〕

全体のねらい

政治学の基礎概念とその相互の関連を明らかにすることで、政治学のより専門的な領域を学習するための出発点を提供したい。同時に、政治学の入門講義として、他の分野を学習する受講者にも、政治学のアウトラインがつかめるようにしたい。政治の世界に起こりつつある最近の変化にも留意する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	政治と権力	租税、教育、環境保全などの具体例を通じて、政治とは何かを明らかにし、政治の機能、権力の特性について論ずる。	阿部　齊（放送大学教授）	阿部　齊（放送大学教授）
2	代表制・議会・国会	民主主義国家と議会、代表制とその発達、地域代表と国民代表、二院制、議会の役割、議会と行政府、立法過程、議会の問題と課題などの諸テーマについて論ずる。	久保文明（慶應義塾大学教授）	久保文明（慶應義塾大学教授）
3	行政府・内閣・官僚制	行政府の活動、内閣総理大臣と内閣、官僚制の概念、公務員制度、立法国家から行政国家へ、官僚制の統制、大きな政府と小さな政府などの諸テーマについて論ずる。	同上	同上
4	選挙と選挙制度	政治参加と選挙、政治の大衆化とその意義、投票することの意味、選挙制度の諸類型、わが国の選挙制度改革などの諸テーマについて論ずる。	同上	同上
5	政党と政党制	政党の定義、名望家政党と大衆政党、政党の機能、政党制の諸類型、日本の政党政治などの諸テーマについて論ずる。	同上	同上
6	利益団体とその活動	現代の政治過程と利益団体、利益団体の活動様式、利益集団の政治的資源、公共利益団体、利益集団と政治体制などの諸テーマについて論ずる。	同上	同上
7	政治指導	政治的リーダーシップ、政治的リーダーの資質、政治的リーダーシップの諸類型、日本の政治的リーダーシップ、平等主義社会とリーダーシップなどの諸テーマについて論ずる。	阿部　齊	阿部　齊

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	地方自治と市民参加	地方分権と地方自治、団体自治と住民自治、固有事務と委任事務、首長と議会、住民運動と市民参加などの諸テーマについて論ずる。	阿部　齊	阿部　齊
9	社会福祉	夜警国家から福祉国家への転換を明らかにしたのち、社会問題と社会政策、社会保障制度の発展、高齢化社会の福祉政策、福祉国家と民主政治などの諸テーマについて論ずる。	同上	同上
10	民主主義	民主主義という政治原理が、西欧政治思想史のなかに登場してきた諸モデル（参加民主制、共和制等）を検討し、この原理が歴史的に蓄積してきたさまざまな思想を紹介する。その上で、いくつかの民主主義批判を検討し、民主主義政治の未来について考える。	山岡龍一（放送大学助教授）	山岡龍一（放送大学助教授）
11	自由主義	自由主義思想の諸類型を検討し、自律概念の解釈を中心にして、その整理を試みる。さらにJ．ロールズを中心とする現代政治理論の展開を、自由主義の原理をめぐる論争として再構成し、現代自由民主主義のあり方について考える。	同上	同上
12	現代のイデオロギー	イデオロギーとは何かということを、歴史的・概念的に検討し、その上で、現代におけるさまざまなイデオロギーを概説する。社会主義、保守主義、フェミニズム、エコロジズム、原理主義等が取り上げられる。	同上	同上
13	国家と市場	近代国民国家の生成と構造について検討し、この国家概念がいかに近代の「政治」概念を構成するうえで重要であったかを明らかにする。その上で、近年の世界経済の動向がいかにしてこの国家の役割を相対化しているかを考察する。	同上	同上
14	国際政治	国際秩序をどう捉えるかを明らかにしたのち、現実主義、相互依存論、世界システム論、国際秩序の歴史などの諸テーマについて論ずる。	阿部　齊	阿部　齊
15	日本の政治	明治国家の遺産、戦後の民主主義、保守政治の統治体制、政治改革、一党優位の政治から連合の政治へ、などの諸テーマについて論ずる。	同上	同上

＝国際関係論＝（TV）

〔主任講師：阿部　齊（放送大学教授）〕
〔主任講師：高橋　和夫（放送大学助教授）〕

全体のねらい

現代社会の特徴の一つは、その顕著な国際化である。資本や商品や情報は、国境を越えて流通し、人間の移動も日を追って自由化されている。今日の社会科学を学ぼうとするものにとって、国際関係に関する正確な知識は、不可欠になりつつある。また、市民の教養としても、国際関係の基礎的な知識は不可欠であろう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	国際社会の成立	ヨーロッパにおける国際社会の形成と発展を歴史的に追求するとともに、それが地理的に拡大されて、全世界が一個の国際社会を形成するに至った過程をたどりたい。また、ヨーロッパの国際社会の秩序と安定を可能にした諸要因にも言及する。	阿部　齊（放送大学教授）	阿部　齊（放送大学教授）
2	国家とナショナリズム	国際社会を構成する単位としての近代国家の特徴を明らかにするとともに、近代国家の史的変容の過程をたどる。　さらに民族の国家的独立と発展をめざす運動としてのナショナリズムの展開を追いながら、ナショナリズムが現代の国際関係において果たす役割を論ずる。	同上	同上
3	国際政治の展開／冷戦後の世界	冷戦後は地域紛争の時代であるとの通説に反論し、冷戦とは代理戦争という名の地域紛争の時代であったことを示す。また冷戦後の地域紛争の特徴を解説する。またＥＵの拡大に代表されるようなブロック化とバスク地方や北イタリアの独立運動に象徴されるようなマイクロ・ナショナリズムの台頭を検討する。	高橋和夫（放送大学助教授）	高橋和夫（放送大学助教授）
4	国際社会の法と秩序	国際法と国内法を比較しながら、国際法の特質を明らかにする。次いで西ヨーロッパにおける国際法の成立と発展をたどり、現代の国際社会の秩序を維持する上で、国際法が果たしている役割を明らかにする。	児矢野マリ（静岡県立大学講師）	児矢野マリ（静岡県立大学講師）
5	国際連合の機能	1996年12月に東京の国連大学で開催された日本の国連加盟50周年の記念シンポジウムの映像を利用しながら国連改革を考える。具体的には、日本が安保理の常任理事国に立候補している問題を検討する。映像にはガリ国連事務総長（当時）や小和田国連大使（当時）などが登場する。	高橋和夫	高橋和夫
6	ヨーロッパの国際関係	国際社会の発展の原点ともいうべきヨーロッパで、国際関係がいかなる特徴を持っているかを明らかにする。ヨーロッパ共同体の現状とその将来の可能性にもふれたい。	高柳先男（中央大学教授）	高柳先男（中央大学教授）
7	東アジアの国際関係	台湾に近い石垣島でのロケ映像を織り混ぜながら東アジアの国際関係を考察する。ポイントは朝鮮半島情勢の展望と中国の発展の国際的な波紋である。	高橋和夫	高橋和夫

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	アメリカの国際関係	アメリカ合衆国の伝統的対外政策ともいうべき独立主義と膨張主義の構造的関連を明らかにしながら、今日のアメリカ合衆国が直面する外交課題を検討する。さらに、アメリカ合衆国と対比しながら、カナダとラテンアメリカの対外関係の特質にも言及したい。	阿部　斉	阿部　斉
9	イスラム「原理主義」の挑戦	イスラム主義の台頭を世界的な様々な宗教の復興運動の一部と位置付け、その背景を解説する。特にアフガンと呼ばれる人々の存在に光を当てる。最後にイスラム世界との共存の道を探る。	高橋和夫	高橋和夫
10	南北格差と貧困	現代の国際社会にみられる最も重要な問題は、北側諸国の豊かさと南側諸国の貧しさとの間に横わる巨大なギャップである。南側諸国に貧困をもたらした原因を明らかにするとともに、貧困をなくすための国際協力の現状と課題を検討する。	阿部　斉	阿部　斉
11	人口問題と国際政治	人口増加に食料の供給が追い付かないのではとの議論がある。この議論とその反論を検討する。また発展途上国での人口増加が生み出す先進国への流入圧力を紹介し、最後に先進諸国の人口の高齢化が国際政治にどのようなインパクトを与えるかを日本を例にとって考える。	高橋和夫	高橋和夫
12	環境問題の国際化	今や環境問題は、国境を越えて拡大し、地球規模の問題になった。とくに深刻な問題である地球の温暖化、酸性雨、オゾン層の破壊などを生み出した原因を明らかにしながら、環境問題に対する国際的取り組みの現状と課題に迫る。	阿部　斉	阿部　斉
13	エスニシティと文化の多元化	冷戦集結後の世界における最も顕著な現象の一つは、民族紛争の深刻化である。民族問題を解く新しい基本概念であるエスニシティの意義を明らかにしながら、多民族社会を考える新しい視点としての多文化主義に言及したい。	川出良枝（東京都立大学助教授）	川出良枝（東京都立大学助教授）
14	戦争と平和	戦争の原因を追求し、平和の可能性を探る。戦争の形態変化を跡づけながら、戦争が現代の国際関係においていかなる位置を占めるかを検討する。さらに、戦争を抑制するものとして、安全保障、軍縮と軍備管理、核兵器の廃絶といった問題にも言及したい。	高柳先男	高柳先男
15	国際関係の多元化／新しいパラダイム	外交を国家が外務省を通じて排他的に行う時代は過ぎ去った。企業が、地方自治体が、ＮＧＯが、個人が国際関係に関与する新しい時代が始まっている。ＮＧＯやアメリカのミシガン州政府の東京事務所などの取材を織り混ぜながら、国際関係の多元化の状況を紹介する。	高橋和夫	高橋和夫

＝ 経済学入門（’００）＝（R）

〔主任講師：新飯田　宏（放送大学教授）〕

全体のねらい

現代の経済を分析するには、通常、家計・企業・政府などの各経済主体の行動を説明するミクロ経済学と、経済全体の動きを説明するマクロ経済学の理論が必要であるが、この経済学入門の講義では、これら２つの経済分析の基礎となっている経済学的な考え方を、現実の問題を例にしながら説明し、経済学的思考方法に慣れて貰うことを狙っている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	経済学とは何か	経済学がどういう学問であるかを３つの主要経済問題（What, How, For Whom）を例に説明する。次に市場メカニズムと政府部門の混在する混合経済を中心に、簡単な競争モデルの考え方を示し、機会費用などの費用概念，経済主体のインセンティブ，効率性について説明する。	新飯田宏（放送大学教授）	新飯田宏（放送大学教授）
2	相互依存の利益（交換と生産）	個人間にしろ、国家間にしろ、交換取引によって、相互依存の関係からお互いに利益が得られるのはなぜかを明らかにする。次いで比較優位の考え方から、貿易における相互依存関係が消費可能性を改善することを説明しつつ、比較優位の決定因を検討する。	同　上	同　上
3	価格の決定－需要と供給	市場を通ずる競争的資源配分は、市場の需要曲線と供給曲線によって決定され、需給の不一致は市場価格によって調整される。個人・企業の需要・供給曲線と市場の需要・供給曲線の関係，その形状と性質，両曲線がシフトする要因について説明する。	同　上	同　上
4	需要・供給分析の応用	需要・供給曲線の弾力性の概念を説明し、政府の間接税（又は関税）の課税効果を検討する。さらに、最低賃金制，上限価格規制の資源配分機能を分析する。	同　上	同　上
5	競争市場の効率性	消費者余剰，生産者余剰の考え方を中心に社会厚生（総余剰）を最大にする資源配分の効率性について説明し、関税賦課の場合と自由競争の場合を比較し、政府の市場介入の効果を分析する。	同　上	同　上
6	生産要素市場と所得分配	生産要素である労働，土地，資本の各サービス価格（賃金，地代，レンタル）の決定を説明し、所得分配の実証的・規範的な側面について説明する。	同　上	同　上
7	不完全競争の諸形態と産業組織	供給独占、複占、寡占、また独占的競争の概念を説明し、完全競争のモデルと本質的に異なる点が、どこにあるか、それぞれの資源配分における特徴を明らかにする。これらの分析に、産業組織論的接近方法の有効性について説明する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	政府の役割	市場メカニズムが効率的に機能しなくなる理由の１つは外部性の存在である。外部性とは何か。外部経済(不経済)によって、資源の最適配分が実現しない市場の失敗は、政府の介入によってどのように解釈されるのか。公共財の存在はなぜ資源配分を最適にしないのか。また、政府は失敗することはないのか、について説明する。	新飯田　宏	新飯田　宏
9	経済活動水準の測定	各産業部門間の財・サービスの流れを産業連関表によって説明する。次いで生産，分配、支出の３面等価原理を産業連関表で示す。物価水準の上昇と実質国民所得の関係を説明しつつ、物価指数(デフレーター)の役割を検討し、経済成長の意味を明らかにする。	同　上	同　上
10	ＧＤＰの決定と貯蓄投資の重要性	ＧＤＰ(又はＧＮＰ)がどのように決定されるのかを、45°線グラフで示し、貯蓄・投資の均衡の意味を説明する。次いで、乗数理論の意味を説明し、財政政策の役割を検討する。	同　上	同　上
11	失業(雇用)と賃金率	非自発的失業とは何かを労働市場の特質と関連づけて説明する。賃金の下方硬直性と非自発的失業の関係を論じ、名目賃金の下落と物価水準の下落が同時に発生した場合などを考える。また、失業の経済的損失をオークン法則を利用して説明する。	同　上	同　上
12	経済成長と技術進歩	潜在成長率と現実の成長率の関係を説明し、経済成長が生産能力の増大にあること、そして、生産性の上昇とくに技術進歩の重要性を実証的に示す。新技術が投資による新しい資本増加に具体化されることから、投資を可能にする貯蓄の役割を強調する。	同　上	同　上
13	貨幣の供給と需要	「貨幣とは何か」という古典的な質問から入り、貨幣の機能を明らかにしつつ、中央銀行を頂点とする銀行システムを説明し、通貨供給の増加・縮少のメカニズムを論じる。次いで、金融政策とインフレ(デフレ)の関係を説明する。	同　上	同　上
14	不況の経済分析と経済政策	総需要・総供給の考え方から、不況の経済分析を試みる。総需要の減少、総供給の減少(オイル・ショックなど)の場合と、物価下落と景気後退とが併存する場合とでは、何が基本的に異なるかについて簡単に説明し、財政・金融政策の効果について論じる。	同　上	同　上
15	オープン・マクロ経済学	外国貿易と国民所得の関係を説明し、為替レート(自国通貨と外国通貨の相対価格)の決定を、購買力平価説の考え方から説明する。購買力平価と現実為替レートの乖離の意味を明らかにし、購買力平価説の限界を示す。そこでは、内外価格差の考え方も説明される。	同　上	同　上

＝社　会　学　入　門＝（R）

〔主任講師：長谷川　公一（東北大学教授）〕

全体のねらい

「紛争」に焦点をあてながら社会学の基本的な考え方やものの見方、基本概念を理解し、現代の社会変動の動向を探る「社会学入門」であり、「現代社会論」である。紛争と社会構造、紛争の場、紛争解決を促進するための政策学を考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	20世紀の産業社会	20世紀とくに戦後の高度産業社会は「ゆたかな社会」を現実化したが、社会構造の変容にともなって、社会問題も貧困・失業・不況を中心とするものから大きく変化した。現代の対立・紛争および社会的危機の構造的源泉を概括する。	長谷川公一（東北大学教授）	長谷川公一（東北大学教授）
2	「和の文化」と日本社会	日本社会は長く「和を以て貴し」とすることが美徳とされ、異を唱えることは忌避されがちだった。利害対立の顕在化を日本社会ではどのようにして調整してきたのか、また近年の裁判に対する人びとの考え方の変化を考察する。	同　上	同　上
3	紛争研究と社会学	紛争に関する社会科学的な研究のなかで、社会学的なアプローチの特質はどこにあるのか。紛争・対立・競争をどのように定義すべきか。社会学理論の２つの基本的な立場である紛争モデルと均衡モデルの特長を整理し、それぞれの問題点を考察する。	同　上	同　上
4	紛争は社会にどのように役だっているか	争いや対立はゼロに近づくほどよいというわけではない。「雨降って地固まる」と言われるように、争いは社会の統合にも役立つ。争いはコミュニケーションの形式でもある。社会問題の関示機能はじめ、争いの様々な効用を考える。	同　上	同　上
5	紛争と法・裁判	裁判制度は近代社会に特有の争いの解決のしかたである。裁判の特質はどこにあるのか、法の役割は何か。ウェーバー、川島武宜らの議論を手がかりに、裁判と法による社会統制と秩序維持のメカニズムを考察する。	同　上	同　上
6	家族危機と時代・世代・年齢	1983年前後に家族危機論が高まったのはなぜか。時代効果・世代効果・年齢効果を峻別してとらえ、「団塊の世代」の女性たちに焦点をあてて、価値観が多様化しライフスタイルの選択肢がひろがった現代における新しい家族のあり方を考察したい。	同　上	同　上
7	ジェンダーをめぐる対立・紛争	女性と男性では社会的に期待される行為様式が異なっている。社会的文化的性差はとくに1960年代後半以降、男女間の社会的対立・紛争の焦点となってきた。女性学の問題提起をうけとめつつ、「女らしさ」「男らしさ」をめぐる争いを考察する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	組織における対立・紛争	目的達成集団としての組織は、効率性の追求か成員間の共同性の重視かという基本的ジレンマを抱えている。組織のリーダーに期待されるのは、組織内の利害調整と、効率性と共同性との間でバランスをとることである。	長谷川公一	長谷川公一
9	階層変動と階級対立の制度化	20世紀、とくに20世紀後半以降、階級間対立の制度化がすすんだが、階層間の利害対立はなお経済政策や福祉政策などをめぐる基本的な対立軸をなしている。	同上	同上
10	環境問題と紛争	公害問題は地域社会に深刻な対立・紛争をもたらした。近年環境問題の焦点はごみ問題などに代表される生活公害型のものに変化してきたが、それは大都市圏と過疎地、南北間、世代間での新たな利害対立を引き起こしつつある。	同上	同上
11	社会運動とNGO・NPO	パートナーシップやコラボレーションに焦点をあててNGO・NPOの特質を考察する。従来の告発批判型の住民運動・市民運動から、対案提示型のNGO・NPOへの転換による政策提案の可能性と意義を考察した。	同上	同上
12	ゲーム理論と協力行動の成立条件	囚人のジレンマとその応用的なゲームをとおして、合理的選択理論の特質を検討する。「反復囚人のジレンマ・ゲーム」における「協力行動」の成立条件と、「しっぺ返し」戦略の社会学な意味を考察する。	同上	同上
13	合意形成と公共政策の転換	紛争は社会システムの矛盾を顕在化させ、表現する。力による紛争の抑え込みには限界がある。上からの「合意調達」にかわって合意形成をはかるためには、市民参加型の制度形成と公共政策の転換がもとめられている。	同上	同上
14	紛争と秩序	「自己決定」をもとめる個人主義の進展は、既存の権威を相対化させ、現代社会に共通する正当性と統合の危機をつくりだしている。ホッブズ以来の自由と共同性のジレンマをめぐる諸説の検討をとおして、社会の秩序維持のメカニズムを原理的に考察する。	同上	同上
15	「共生」の時代をめざして	現代社会は、(1)自然と人間との、(2)異質な文化との、(3)都市と農村、中央と地方との、(4)社会的弱者との、(5)女性と男性との「共生」を課題としている。現代の諸紛争からどのように共生社会を展望しうるか、総括的に考察する。	同上	同上

＝ 社会福祉入門（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：岡本　民夫（同志社大学教授）〕
〔主任講師：三ツ木　任一（放送大学教授）〕

全体のねらい

社会福祉は人間の社会生活上に発生する諸困難を緩和解決するための政策、制度、援助活動、実践技術、運動などを指すが、本講では、その意義、概念、歴史、現状さらには当面の課題や将来展望について講述する。また、激変する現代社会と急速に進行する少子高齢社会のなかで、福祉問題と私たちの生活との関連を考えてみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	私たちの暮らしと社会福祉	現代社会における福祉問題の普遍化現象は福祉がすべての人々の生活課題であることを理解し、それらが自分自身の問題であると同時に社会問題として客観的に把握し、科学的に解明し、緩和解決に向けてどのような施策や活動が展開されているかを明らかにする。	岡本民夫（同志社大学教授） 三ツ木任一（放送大学教授）	岡本民夫（同志社大学教授） 三ツ木任一（放送大学教授）
2	社会福祉の概念	福祉の語源、言語の由来と変化、社会福祉における基本理念と定義及びその変遷など、社会福祉を考えていく上において把握しておくべき基本的枠組みについて、具体例をあげながら解説する。	岡本民夫	岡本民夫
3	社会福祉の歴史１（西洋の場合）	西欧における社会福祉の前身であるカリタス、慈善や博愛事業、社会改良など様々な援助活動の具体例を通じて、その源流を探り、今日の社会福祉との差異や関連性を明らかにして、社会福祉の普遍性とともに歴史性を学ぶ。	岡本民夫 永岡正己（梅花女子大学教授）	岡本民夫 永岡正己（梅花女子大学教授）
4	社会福祉の歴史２（日本の場合）	明治以降の社会福祉の前身というべき色々な援助救済活動を取り上げながら、日本の社会福祉の考え方、発展過程やその背景、実践活動の特徴、さらには現在の社会福祉とのつながりなどを明らかにし、社会福祉に関する歴史的認識を深める。	岡本民夫 永岡正己	岡本民夫 永岡正己
5	社会福祉の法制度	社会福祉を支える公式の対策として憲法第２５条の生存権理念を受けて、各種の法制度が制定実施されている。その根幹をなす生活保護法、児童福祉法、身体障害者福祉法、知的障害者福祉法、老人福祉法および母子及び寡婦福祉法など福祉六法を中心に関連法制度ついても論述する。	岡本民夫 河野正輝（九州大学教授）	岡本民夫 河野正輝（九州大学教授）
6	社会福祉の構造と運用	公私にわたる福祉施策の体系と具体的内容、さらには福祉財政及び運営管理のあり方について取り上げる。また、平成１２年から導入される介護保険や福祉の基礎構造改革による市場原理の導入が社会福祉に新たな局面を開くことにも言及する。	岡本民夫	岡本民夫
7	社会福祉の分野１	社会福祉は広範多岐にわたる範囲を対象とするため、捉える角度によって、色々な分野が構成され、さまざまな事業・サービスが展開される。本講では、児童福祉の現状・課題等について分析解明する。	岡本民夫 山縣文治（大阪市立大学助教授）	岡本民夫 山縣文治（大阪市立大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	社会福祉の分野２	障害児者福祉の理念・概念、歴史、現行施策をとりあげ今後の障害福祉に関するあり方と展望について具体的実践活動や事例をあげながら論述する。	岡本民夫 三ツ木任一	岡本民夫 三ツ木任一
9	社会福祉の分野３	社会福祉の重要な分野として老人（高齢者）福祉を中心にとりあげるが、老人の保健医療についても論述する。	岡本民夫 奈倉道隆（東海学園大学教授）	岡本民夫 奈倉道隆（東海学園大学教授）
10	社会福祉の方法・技術１	社会福祉問題をかかえる個人、集団、地域などその問題解決を具体的に図っていくために、それに対応する専門的な方法・技術（技能）が不可欠である。その基本的枠組み、関係のあり方、援助の原理、過程、手法、技術等を明らかにする。	岡本民夫	岡本民夫
11	社会福祉の方法・技術２	多様な福祉問題の緩和解決には色々な種類の専門的方法・技術が必要でるが、それらが現場でどのように応用され展開されているかについてとりあげ、各段階でどのような点に留意すべきかを具体的に論述する。	同上	同上
12	社会福祉の従事者	福祉事業やサービスには、制度，施設などの整備が前提となるが、これらを利用者に意味と価値あるものに具象化するには、高度な知識と技術をもった担い手である専門家の他にボランティア、住民、当事者の参加が不可欠である。そのあり方と実態を明らかにする。	同上	同上
13	社会福祉の教育	今日の福祉問題は多様化、複合化の傾向が強い。この課題に対処していくためには、高度で専門的な教育訓練と研修が必要であり、その体系と内容について解説する。また、国家資格制度についてもとりあげる。さらに、すべての人々を対象とする広義の福祉教育についてとりあげる。	同上	同上
14	社会福祉の関連分野	社会福祉は生活上の諸困難を研究・実践対象にするが、関連諸領域としての所得保障、医療、保健、労働、住宅、教育、司法、人権擁護など近接諸領域とどのように協力、連携していくかについて論述する。	同上	同上
15	社会福祉の課題と展望	少子高齢社会の進行と家族機能の変化、地域社会の変貌、社会経済の変動、国民の価値観や意識構造の変化などによって、既存の福祉施策では社会的要請に対応できなくなり、新たなシステムの構築が求められている。その課題と展望を含めた総括を行う。	岡本民夫 三ツ木任一	岡本民夫 三ツ木任一

＝社会調査の基礎＝（TV）

〔主任講師：岩永　雅也（　放送大学教授　）〕
〔主任講師：大塚　雄作（メディア教育開発センター教授）〕
〔主任講師：高橋　一男（　東洋大学教授　）〕

全体のねらい

社会調査は、社会のありさまを的確にかつ客観的に把握するための重要な手段である。この科目はまず社会科学研究における社会調査の位置づけについて理解したうえで、実際に調査を行なうための技法と調査の結果得られたデータの集計、分析、解釈の方法を学ぶことを目的としている。特に本講義では、量的調査だけでなく、質的調査にも十分ウエイトを置いて、より多面的な現実把握が可能となるように配慮している。また、調査結果の適切な表示の仕方についても学習する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	社会調査のすすめ	現実の複雑で非定型的な社会事象から、定量的あるいは定性的な変数を見い出し、その変量を測定する方法が社会調査である。ここではまず社会調査の意味を明らかにしたうえで、社会科学研究との関連について検討し、さらに現在の社会調査に至るまでの系譜にも言及する。	岩永雅也（放送大学教授）	岩永雅也（放送大学教授）
2	調査の諸類型	現在最もよく用いられる各種の調査をさまざまな観点から分類し、それらの特性を整理する。分類の観点としては調査の目的（記述と説明）、変数のタイプ（量的と質的）、そして調査結果の用途の三者をとりあげる。	同上	同上
3	調査票調査の設計	量的調査の中心は調査票を用いた調査である。ここではまず量的調査にあった調査テーマとはどんなものかを検討したうえで、その調査テーマにそった調査票調査の設計の方法について学習する。	同上	同上
4	調査票の作成	具体的な調査テーマにそくして実際に調査票を作成するプロセスを紹介し、調査票そのものについての理解を深めるとともに、さなざまな質問技法、ワーディングにあたっての種々の問題点などを学習する。	同上	同上
5	標本抽出と調査の実施	量的調査におけるサンプリングの意義と目的を明らかにする。特にランダムサンプリングの基本とその応用（系統・多段・層別等）について重点的に学習する。また、各種の調査実施方法（面接・郵送・電話等）についても、その内容と手法、留意点などを詳しく紹介する。	高橋一男（東洋大学教授）	高橋一男（東洋大学教授）
6	結果の集計	調査票結果の結果はさしあたり抽象的な数値や記号であって、そこから何らかの具体的な情報を得るためには集計が必要である。ここではまず広義の集計の内容を紹介し、さらに狭義の集計の手法について詳しく説明する。また標本の数値特性を示す代表値、変動値についても学習する。	岩永雅也	岩永雅也
7	統計的検定	対象とする集団の一部からランダムサンプリングによって得られた数量データ（標本）に基づいて集団全体（母集団）の数量的特徴を推論する方法としての統計的検定の基本的な考え方と手続きを紹介する。	大塚雄作（大学評価・学位授与機構）	大塚雄作（大学評価・学位授与機構）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	二変数間の関連	変数の間にどのような関連があるかを探るための方法とそこで用いられる各種の指標について学習する。具体的には、二群の標本の平均値の差のｔ検定、質的変数間の関連性を検討するためのカイ二乗検定、量的変数間の関連性をあらわす相関係数とその検定法などを紹介する。	大塚雄作	大塚雄作
9	探索的データ解析	社会科学の分野では、ランダムにサンプリングされていないデータを扱うことも少なくない。そのようなデータの特徴を有効に浮き彫りにするための手法として、探索的データ解析の考え方とその基本的な手続きを学習する。	同上	同上
10	多変量解析の概観	多くの変数間の関連性を概括的に捉えるために、多変量解析と呼ばれる一連のデータ解析法が開発されている。その例として、因子分析と重回帰分析の基本的な考え方とそれらの適用例を紹介し、多変量解析の一端に触れてみる。	同上	同上
11	インタビュー法	インタビュー法（聞き取り法）は、質的調査の最も基本的な手法である。まずインタビュー法の用いられる具体的　な状況や条件を整理し、さらに実際のインタビューの方法、留意点、結果のまとめ方などについて、実例を交えながら学習する。	高橋一男	高橋一男
12	生活史法	われわれの日常生活には、手紙や日記などの成文化された記録（ドキュメント）がふんだんにある。それらを通じて生活史（ライフ・ヒストリー）を記述するのが生活史法である。ここではフィールドでのインタビューなども交えて生活史研究の手法を紹介する。また、自分史にも言及する。	若林良和（高知大学助教授）	若林良和（高知大学助教授）
13	参与観察法	調査の対象となる集団の活動に調査者も実際に参加し、その集団成員と同じ視点から集団と活動について調査するのが参与観察法である。担当講師が長年フィールドとしてきた島の生産活動や人々の日常生活に参加して調査する様子を紹介しながら、参与観察法のエッセンスを講義する。	同上	同上
14	メディアの利用	現代はメディア社会であり、調査にもさまざまな形でメディアが関わる。調査の題材として、調査手段として、結果のプレゼンテーション手法として、メディアがますます重要になっている現状を紹介し、その意義を検討する。	高橋一男	高橋一男
15	調査結果の記述と表現	さまざまな調査結果をどのように記述し、表現したらよいか、表やグラフの有効な用い方とはどのようなものか、調査結果を説得力のある論稿にまとめるにはどのような点に留意すべきか、といった問題について検討する。	岩永雅也	岩永雅也 大塚雄作 高橋一男

＝　経営学入門（'９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：赤岡　功（京都大学教授）〕

全体のねらい

わずか数人で始めた企業が、よい製品を開発し世界的大企業となり、世界の進歩と人々の幸福な生活に大きな貢献をしている場合もあれば、巨大な企業が崩壊したり、活動を社会から批判をうけ苦悩している場合もある。こうした企業は、だれがどのように経営しているのだろうか。それを導く経営学とはどのようなものであろうか。松下電器、ＮＥＣ、トヨタ、日産、ホンダ、GM、フォードをはじめ欧米、日本、韓国、中国の数々の企業の実例を紹介しながら理論的理解を深める。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	企業の経営学	経営学の面白さと重要さをまず示す。経営の善し悪しによって、急成長し、社会から評判の高い企業群。あえなく消滅していく企業の例などをしめし、それと経営学との関係を示し、経営学の対象が企業をこえ広がってきていることおよび、経営学と他の関連諸学とくに経済学との関係の違いを説明する。	赤岡　功（京都大学教授）	赤岡　功（京都大学教授）
2	経営学の発展	経営学は工場の生産性をあげることだけに注目していた段階から、そこで働く人々の人間性や社会性の向上と調和させつつ、利益をあげ、企業成長を達成しうるものとして発展してきていることを、簡潔に分かりやすく興味がもてるように説明するようにつとめる。	同　上	同　上
3	世界の企業、日本の企業	経営学の主たる対象である企業がどのような形で存在しているか。欧米の企業群と日本の企業群、アジアの企業について概略を説明する。なお、この回では、街を走る自動車がほとんどフォードＴ型ばかりであったという事を示す貴重で必見すべき映像が紹介されている。	三戸　浩（横浜国立大学教授）	三戸　浩（横浜国立大学教授）
4	経営学の時代	歴史的な古典、バーリ＆ミーンズの所有と経営論を簡単に紹介し、日本企業グループを中心に企業のガバナンス、そこでの経営者の位置について述べる。本田技研工業の本田宗一郎氏、倉敷美術館等でも有名な倉敷紡績の大原孫三郎氏をはじめとする経営者を紹介しつつ経営者と企業経営を理解する。	同　上	同　上
5	企業倫理	経営学では、その理論構成の特質から、つねに企業の社会的責任論や企業倫理が論じられる必然性があり、最近では企業倫理論が大きな注目を集めている。そうした議論の内容背景、企業倫理が企業行動に作用する枠組を明らかにする。	赤岡　功	赤岡　功
6	企業目的	企業が利潤を無視し得ないのは当然であるとしても、現実の企業を導く目的については多くの学説が提起されている。そうした企業目的論の概略を説明し、現代の企業を導く企業目的について論ずる。	麻生　幸（千葉商科大学教授）	麻生　幸（千葉商科大学教授）
7	企業戦略	企業の目的を達成するためには、まず企業戦略が構想される。この戦略の善し悪しが企業の発展とともに、社会との相互作用のありかたをきめる。そうした戦略論の概略を現実に即して説明する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	企業戦略の展開	現代企業の戦略について、日本企業を中心に明らかにする。欧米、アジアでの展開をできるかぎり要領よく示す。	日置弘一郎（京都大学教授）	日置弘一郎（京都大学教授）
9	企業組織	戦略を遂行し、企業が行動するためには組織が適切である必要がある。そうした組織についての学説を紹介するとともに、現代における組織のあり方について説明する。とくに、1つ企業にコミットすることなく働きたいという人々こたえる組織を理論的に説明するとともに現在大変有名なミスミの組織について映像含め概説する。	太田肇（滋賀大学教授）	太田肇（滋賀大学教授）
10	作業組織	近年では、人間疎外を招くような効率性ばかり重視した組織ではなく、人々の成長をはかりつつ、その成長を利用して経営を発展させる作業組織が追求されている。そうした動向を明らかにする。	赤岡功	赤岡功
11	企業文化	日本経営の強さがアメリカで注目された近年において、組織だけではなく企業文化が注目されるようになっている。そうした企業文化についての論議とともに、欧米・アジア・日本との比較も試みつつ説明する。	日置弘一郎	日置弘一郎
12	モチベーション	人々は組織の中でどのように動機づけられ働くのか。これについては大変多くの研究があるが、そうした議論を概説するとともに、日本の労働者について説明する。	田尾雅夫（京都大学教授）	田尾雅夫（京都大学教授）
13	非企業組織の経営学	経営学は主に民間大企業を中心として展開されてきている。しかし、公共部門等も非民間部門のウエイトも高くなっており、経営学はこうした部門をも対象とするものとして拡張されてきている。そこで、公私組織とそこで働く人々について概説する。	同上	同上
14	21世紀型企業像を探る	ものを生産したり、サービスを提供する組織としては、いわゆる企業のほかに、ワーカーズ・コレクティブが、アメリカやスペイン等多くの国にみられる。そうしたワーカーズ・コレクティブの経営を説明する。21世紀に向けて企業では様々な新しい経営の試みが行われている。そうした定例を紹介しつつ、新しい時代の経営を考える。	小倉行雄（福井県立大学助教授）	小倉行雄（福井県立大学助教授）
15	経営学の未来	全体のまとめとして、新技術を開発・活用し、グローバルに、環境に創造的に適応している企業を展望し、経営学の現状と発展方向について述べる。さらに深く経営学を学ぼうとする人々に、経営学の学び方、研究の仕方について、できるだけ具体的に述べる。	赤岡功	赤岡功

＝ 日本の経営・欧米の経営 ＝（R）

〔主任講師：吉森　賢（横浜国立大学教授）〕

全体のねらい

日本と米英独仏の大企業の経営を、会社統治制度を中心としつつ企業所有構造、最高経営責任者、企業間関係、経営・マーケティング行動、文化的・歴史的背景などの基本的視点から比較することにより、各国の経営の特質と企業成果への影響を理解し、日本的経営の将来像を展望する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	比較経営の目的と方法	比較経営の目的、方法、技術、態度について述べる。	吉森　賢（横浜国立大学教授）	吉森　賢（横浜国立大学教授）
2	企業の所有構造	比較対象国における大企業を所有する主体（同族、法人、機関投資家、個人株主など）を概観する。バーリとミーンズによる所有と経営の分離および経営者支配が各国でどのように実現されているのかを考察する。日本において顕著な経営者支配の歴史的背景とその影響を理解する。	同　上	同　上
3	企業概念と経営成果	企業概念、すなわち企業は誰の利益のために経営さるべきか、に関する比較対象国における考え方を考察する。企業概念の違いが利害関係者間の関係や経営成果にどのような影響を与えるかを考察する。特にアメリカにおいては株主利益中心の企業概念が企業の国際競争力を低下させるという主張がなされている。この主張の妥当性を実証研究の結果により検証する。	同　上	同　上
4	会社統治制度（コーポーレート・ガバナンス）1	会社統治制度とは最高経営責任者による経営活動を監視し、これに助言を与え、その業績を評価し、場合によってはこれを解任、降格するための手続き、組織である。そのための方式を概観し、エージェンシー（代理）理論に基づき、なぜ最高経営責任者は監視さるべきか、を理解する。	同　上	同　上
5	会社統治制度 2 －株主総会	最高経営責任者の監視機関としての株主総会の機能はどの程度発揮されているのかを比較対象国について概観する。日本においては株主総会の形骸化が指摘されているが、その原因を考察し、主としてアメリカの事情と比較、検討する。	同　上	同　上
6	会社統治制度 3 －取締役会と最高経営責任者	最高経営責任者に対するもっとも重要な監視機関である取締役会の構造と機能を比較する。比較対象国における取締役会の構造をドイツの二層構造とその他諸国の単層型構造に分類し、それぞれの特質を比較する。ドイツについては労資による共同決定の制度と実態を概観する。	同　上	同　上
7	会社統治制度 4 －取締役会機能不全の原因	日本をはじめ比較対象国においては取締役会による最高経営責任者に対する監視機能は十分機能していない。その原因を取締役会会長職と最高経営責任者の地位の人的・機能的融合、取締役会役員の選出過程、他社役員の兼務、情報非対称性などの観点から分析する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	会社統治制度5 －外部監視	外部監視とは株式市場を通じての企業買収を中心とする最高経営責任者に対する監視方法である。これが日本、ドイツ、フランスではなぜ困難であるかを考察し、アメリカではなぜ盛んに行われるかを究明する。企業買収をめぐるアメリカにおける是非の論争と90年以降の状況を概観する。	吉森賢	吉森賢
9	会社統治制度6 －企業間関係・主力銀行	特に日本とドイツにおいては主力銀行が最高経営責任者への監視機能を果たし、両国における企業間関係の中心にあるのとされるのでその役割を理解する。主力銀行はなぜアメリカでは日独ほどの発達を見なかったのかを考察し、事例により経営に対する影響を検討する。	同上	同上
10	会社統治制度7 －企業間関係・企業集団と系列	日本における企業間関係は長期的取引関係、株式持ち合い、役員相互派遣、などに基づくが、その経済的合理性を準統合の観点から考察する。同様の企業間関係はドイツにも存在する。なぜアメリカでは少ないかを検討し、これが経営成果に与える影響を考える。	同上	同上
11	会社統治制度8 －会社統治制度の改善方向	これまでの会社統治制度に関する考察の総括として、日本に、ドイツ、アメリカ、イギリスおける会社統治制度についての改善方向を概観する。	同上	同上
12	最高経営責任者の特質	比較対象国における最高経営責任者はどのような人物であるかを、学歴、出身階層、実務経験、年齢、昇進経路、価値観、などの視点から概観し、それぞれの国の経営成果に与えたと考えられる影響を考察する。	同上	同上
13	経営行動・マーケティング行動	官僚制と情報共有、消費者行動と市場への態度、経営者の社会的威信、経営者能力、経営者対官僚の地位格差、会社の繁栄と個人の生活の質との均衡の観点から実態調査にもとづき考察する。	同上	同上
14	社会的価値観と企業家精神	比較対象国における国民の企業および企業利益に対する態度の変遷と企業家精神に対する影響を考察し、その違いを実態調査にもとづき検証する。またこれらが比較対象国の経営に及ぼした影響を考察する。	同上	同上
15	日本的経営の普遍的要素と展望	これまでの日欧米比較に基づき、日本的経営の特質の中で他の諸国にも妥当する要素は何か、また逆に欧米の経営から日本が学ぶめきものは何かを考察する。さらに日本的経営の光と影を従業員とその家族の生活の質および消費者厚生から評価する。日本企業の経営環境の変化を概観しこれへの適応の方向を展望する。	同上	同上

＝ 情報基礎管理学（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：高橋　三雄（麗澤大学教授）〕

全体のねらい

電子メールの急速な普及にともなって情報技術は企業管理者層にとっても身近なツールになった。情報技術は意思決定活動を支援する可能性を秘めている。かつてのＭＩＳ（経営情報システム）が果たし得なかった実戦的な情報技術活用がいま可能になろうとしている。この講義ではトップからミドル、ロアーそして一般社員にいたるまで、各層における意思決定活動をふまえながら、現在利用可能な情報技術について、パソコンソフトや周辺機器を具体的に話題にしながら講義する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	オフィスツールに見る意思決定支援	オフィスツールたとえばWORD（ワープロソフト）、Exel（表計算ソフト）などには文書作成や単なる表計算機能だけでなく、意思決定を支援する興味深い機能もみられる。あらためてオフィスツールを検討し、その中で意思決定支援を考える。	高橋三雄（麗澤大学教授）	高橋三雄（麗澤大学教授）
2	意思決定活動と情報技術	そもそも意思決定とは何だろうか。問題発見、代替案探索、代替案の評価／選択、実行案の実施、意思決定の再検討（レビュー）からなる各段階を具体的に検討するとともに、それぞれの段階でどのような情報技術支援が考えられるかについて、概観する。	同上	同上
3	データの収集と分析	インターネットは情報収集の重要なツールである。また、最近は会社四季報など各種データベースがCD－ROMの形で利用可能となった。さらに、業務処理目的で構築された社内のデータベースも、もっとも重要な内部データの源である。意思決定支援の出発点ともいえるデータ収集／分析を支援する情報技術について検討する。	同上	同上
4	データの収集と分析（その２）	同上	同上	同上
5	「データ」から「情報」を読み取るために	数値データから特徴（情報）を読みとるためには、検索／抽出機能が活躍する。また、データベースの階層構造にもとづいて任意のデータ範囲やレベルにわたってデータが参照できることが重要である。Excelの「アウトライン」や「ピボットテーブル」機能がその出発点である。さらにデータウエアハウスの基本機能の一つ、「OLAP（OnLine Analytical Processing）」もまた、本格的なデータの分析を支援する。さらに、膨大なデータを統計分析にもとづいて分析し、特徴を読み取る情報技術が「データマイニング」である。これら、パソコンから本格的なデータウエアハウスまで、「データ」を読み取るための情報技術をサーベイする。	同上	同上
6	「データ」から「情報」を読み取るために（その2）	同上	同上	同上
7	「情報」のコミュニケーションのために	企業の意思決定は個人的に行われるわけではない。関係者がいわばグループとして意思決定活動にかかわる。そしてそのさいに重要な機能がコミュニケーションである。情報をいかに伝えるか、そのためにたとえばプレゼンテーションソフト（PowerPointなど）が役立つし、プレゼンテーションを支援するハードとしてプロジェクタも急速に普及をはじめた。理解しやすい魅力的な情報はまた、文字や表だけでなく、イラスト、写真そしてやがては音声による解説やビデオ動画などが含まれた情報も見られるようになるだろう。PowerPointから先にどのようなプレゼンテーションが見られるか、その基本技術としてマルチメディア、オーサリングそしてCD－RやDVDなど情報の配布メディアも注目される。コミュニケーションや双方向という意味で電子メールやグループウエアが重要な役割を果たす。また、情報発信の場としてインターネット、イントラネットがある。ここではコミュニケーションに関わるさまざまな情報技術を具体的な実践を含めてサーベイしたい。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	将来を予測するためのツール	意思決定は過ぎ去った過去や現在ではなく、これから起こること、つまり将来に関わる。そして将来には不確実性が含まれる。将来をできるだけ見通すためにはどうしたらよいか、予測やシナリオライティングなどがその手段となる。そして統計分析ツールやシミュレーション、シナリオ分析などが使われる。ここでは需要予測やシミュレーション分析を話題にする。	高橋三雄	高橋三雄
9	将来を予測するためのツール(その2)	同上	同上	同上
10	代替案の探索と情報技術支援	解決すべき問題が明らかになれば、解決のための代替案を探索することになる。情報技術が直接、代替案を示してくれることは望むべくもない。人間（意思決定者）の創造的な思考が基本であることはいうまでもない。しかし、アイデアをまとめるために、また、複数の関係者のアイデアを融合するために情報技術が支援する可能性もある。いわゆる発想法やその支援である。KJ法などを例にしながら検討してみたい。	同上	同上
11	代替案の評価／選択のための情報技術	代替案がリストアップされれば、今度はそれらの評価が必要となる。評価は意思決定の目標、目的との関わりで様々な基準に基づいて行われる。また、立場の異なる複数の関係者の評価を統合(調整）するといった作業も必要だろう。評価基準として利益や費用そしてそれらに関わるリスク(不確実性)などが問題になる。評価においてもシミュレーションが有効であるし、また、資源制約の中で代替案の選択を行っていくために数学的計画法などのOR（経営科学）手法も有効である。具体的なソフトを例にしながら検討してみたい。	同上	同上
12	代替案の評価／選択のための情報技術(その2)	同上	同上	同上
13	実行案の実施	特定の案が実行案として選択されれば、計画にそって実行を図っていかなければならない。そのためにプロジェクト管理手法が有効となる。プロジェクト管理（資源や時間の管理)について検討したい。	同上	同上
14	意思決定支援のための注目される情報技術	マッピングあるいはGISと呼ばれる新たな情報技術の分野があらわれた。従来、環境問題とか都市計画などの面で応用されていたが、最近になってビジネスの世界、とくにエリアマーケティングとか店舗立地の意思決定分析にGISが応用されるようになった。また、データの多くも場所の項目を含んでおり、データを分析するためにも地図上に表示(ビジュアル化）することの意義は大きい。マッピングをはじめ、意思決定支援の領域において今後に注目される情報技術をトピックス的に話題にしたい。	同上	同上
15	意思決定支援のための注目される情報技術（その2）	同上	同上	同上

＝ 日本の技術と産業の発展 ＝（ＴＶ）

〔 主 任 講 師 ： 森 谷　正 規（放送大学教授）〕

全体のねらい

第二次大戦後の日本の技術と産業の発展についての概論を行う。大きな経済・社会の発展をもたらした技術を、この時代の技術進歩の特性、日本での進展の特質・他国との比較など多面的に分析して示し、技術の本質の深い認識と将来のあるべき姿についての見解を持てるようにする。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代技術の発展 (1)技術革新とその普及	第二次大戦前後にトランジスタ・ナイロン、原子力などの技術革新が生じたが、それらの革新技術がいかに広く普及し産業を発展させたかを明らかにする。同時に、在来型の技術、産業の果たした大きな役割も示す。	森谷正規（放送大学教授）	森谷正規（放送大学教授）
2	現代技術の発展 (2)エレクトロニクスの進歩と量産進展	技術革新後の技術進展としては、エレクトロニクスの引き続いた急速な進歩が大きく、他分野に広く浸透し、また、量産を急拡大させていったが、その状況を明らかにする。	同　上	同　上
3	現代技術の発展 (3)現代の技術の状況	高度な技術を取り込んだ量産製品が、安い価格によって世界中に普及し始め、ハイテク大衆化文明が伝播しようとしている状況を示し、一方で地球環境破壊など困難な問題も生じていることを明らかにする。	同　上	同　上
4	日本の技術と産業 (1)戦前の蓄積・戦後の復興	戦前の技術水準は、軍事技術を中心にかなり高いレベルにあり、その分野の技術者たちが戦後は自動車、鉄道、電機産業に入り活躍した。また、復興の過程で多くの新興企業が生まれて技術の発展に寄与した。	同　上	同　上
5	日本の技術と産業 (2)経済成長の時代	革新技術を始め多くの分野の技術導入によって、量産工業製品が急速に伸び、国内市場に加えて輸出市場が拡大して、高度経済成長を達成したが、その成長に果たした技術の役割を明らかにする。	同　上	同　上
6	日本の技術と産業 (3)技術強国への発展	生産技術力・技術開発力を高めてきて、一方、米国は主要産業が停滞状況に陥り、日本は技術強国といわれるようになったが、日本の強さは何であるかを明らかにする。	同　上	同　上
7	日本の技術と産業 (4)現代日本の技術・産業の諸問	技術強国となって、輸出が急拡大して大幅な貿易黒字が続いて激しい円高となり、海外生産に移行せざるをえず、産業空洞化、引いては技術空洞化のおそれが生じている。一方で、高度情報化技術では米国に対して遅れが大きい。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	技術のあり方の再考 (1) 技術の社会的役割	技術の社会全体に果たす役割を「産業」「家庭」「社会」に分けて、現代の技術が「産業」「家庭」に偏向し、その結果、社会的生活に多くの問題が残されている事実を明らかにする。	森谷正規	森谷正規
9	技術のあり方の再考 (2) 技術を動かすもの	技術発展が偏向しているその問題意識から、経済原理中心の技術発展のメカニズムとなっている現代の問題点を指摘し、より望ましい方向に発展させていくための政治とそれによる仕組みの重要性を示す。	同上	同上
10	技術のあり方の再考 (3) 技術を担う企業の人と組織	日本の技術はもっぱら大企業という巨大組織に支えられており、一方で人が中心であるベンチャー企業が生まれ育っていく風土に欠けている事実を明らかにし、これからの技術開発のおける人と組織のあり方を考える。	同上	同上
11	日本と各国との技術比較 (1) アジアとの比較	各国の技術を国民性、風土などから比較する「比較技術論」による分析法を示して、中国、韓国、台湾などアジアとの比較を行って、日本の技術との相違を明らかにする。	同上	同上
12	日本と各国との技術比較 (2) 米国、欧州との比較	鉄鋼、化学、量産機械、一般機械など産業による技術の性格の相違と「比較技術分析」を組み合わせて、日本と米国、ドイツ、イギリス、フランスとの技術指向の相違を明らかにする。	同上	同上
13	技術と産業の発展の方向 (1) より望ましい方向への技術	「技術進展のアセスメント」の考え方を示して、この20年の技術予測とその結果をもとに、より望ましい方向への技術進展はありえなかったのか、方向を正すいかなる対策がありうるのかを考える。	同上	同上
14	技術と産業の発展の方向 (2) 日本における創造性の発揮	技術における創造性をどうみるのか、多種多様な創造力についてのいくかの類を示して、日本における創造性発揮の特性と問題点を明らかにして、これからの創造へのあり方を考える。	同上	同上
15	技術と産業の発展の方向 (3) 日本の技術と産業の進む道	日本の技術が新たに進むべき道は「産業」「家庭」に加えて、「社会」さらに「人間」「自然」「化学」の領域であることを示して、それぞれの先進的な技術開発を紹介する。さらに「個の技術」から「場の技術」への転換を考える。	同上	同上

＝ 科学と技術の歴史（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：道家　達将（東京工業大学名誉教授）〕
〔主任講師：赤木　昭夫（放送大学教授）〕

全体のねらい

古典ギリシヤから現代までの科学と技術の歴史について、古代・中世・近代・現代の各時代における特徴的な歴史事例を選んで考察し、科学・技術の歴史の流れがどのようなもので、今後どのように展開されてゆくかを考える。科学の出発点は、何故と問うべき意義のある問題を見つけること、技術の出発点は解決すべき意義ある問題を見つけることである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	古典ギリシヤの壺	古典ギリシヤでは不思議な陶器が作られた。初期は赤い地肌に黒い絵だったが、のちに反転され黒地に赤い絵を焼きつけたものが作られた。この陶器の作り方を調べることで、古典ギリシヤ人の柔軟な思考力、彼らの高い技術（技能）と科学の成り立ちを考察する。	道家達将（東京工業大学名誉教授）	道家達将（東京工業大学名誉教授）
2	アリストテレスの生命論	現代科学の源流は、体系的なものとしては、ギリシヤに発する。なかでもアリストテレスは万学の父といわれ、とくに彼の動物学は際立っていた。生命はもとより自然を生成として捉え、生成を形相と質料の概念で説明した。彼の学の継承克服がその後の科学を形成した。	赤木昭夫（放送大学教授）	赤木昭夫（放送大学教授）
3	アラビアの錬金術	古典ギリシヤの科学の成果は、西欧ではなく主にアラビアに継承された。アレキサンドリアでＡＤ1～3世紀頃に生まれた錬金術は中世のアラビアで大いに発展した。その実状を考察する。	道家達将	道家達将
4	実験科学の誕生	12世紀頃、アラビアの科学・技術が西欧に伝わった。それをもとに16～17世紀にかけて、実験によって事実を探究する実験科学がガリレオやハーヴェーらによって盛んになる。ハーヴェーは血液が循環し、心臓がポンプであることを実験で示した。	同上	同上
5	デカルトの身心論	17世紀のフランスの哲学者・数学者デカルトは、中世スコラ哲学から脱するため、自明なことのみから探究を展開する「方法」を唱えた。人間を身と心の二つに分け、心が身を統御すると説明した。彼の身心二元論は後代に大きな影響を与えた。	赤木昭夫	赤木昭夫
6	紡績工場にみる産業革命	18世紀半ばのイギリスで始まった産業革命は、輸入綿花から綿糸を作る紡績機と、綿糸から綿布を作る織機に代表される作業機械の自動化、動力化による大量生産を起点とする。これを契機に、機械は人間、経済、社会に大きな力を及ぼすようになる。	同上	同上
7	化学工場にみる産業革命	産業革命の進展によって、化学工業も盛んになった。その内容はどのようなものであったか。その発展によって早くも公害が発生した。それはどのようにして解決されたか。今日につながる化学工業と、その要請で生まれた理論化学の発展などについて見てゆく。	道家達将	道家達将

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	細胞：観察と理論	顕微鏡で細胞が見られるようになった17世紀から、生命単位として細胞を位置づけるようになる19世紀半ばまでの観察と理論をたどる。それを通じて、技術と哲学と科学の関係（観察と技術的制約、観察にたいする理論的負荷）についてふりかえる。	赤木昭夫	赤木昭夫
9	生命化学への道	人間をふくめ、生きているということの仕組みをめぐって、19世紀半ばに論争が起こった。生命現象は生命力があるからだとする説と、分子・原子レベルの問題だとする説が対立し、実験を使って論争が繰り広げられ、近代的細胞生化学が成立してゆく。この講義では、主に、その前段階の、有機化学、染料化学工業が発展して医薬品が生み出され、伝染病克服につながった歴史を述べる。	道家達将	道家達将
10	ダーウィンの進化論	産業革命の進展のなかで、動植物の育種も盛んになった。なぜかくも多くの動植物がいるのか、またなぜ子は親に似るのかなどの問いにたいし、育種・進化・遺伝の仕組みをダーウィンたちが考えた。彼らの思索・行動・社会背景を考察する。	同上	同上
11	電気の科学と技術	ファラデーは、推理と実験の積み重ねで電流と磁気の働きを解明し、それをもとに発電機やモーターを発明した。彼の成果をマクスウエルが方程式にまとめた。またファラデーは科学の啓蒙でも大きな足跡を残した。彼の思考のプロセスを追跡する。	赤木昭夫	赤木昭夫
12	エネルギーとエントロピー	19世紀に熱機関の仕事と効率からエネルギーとエントロピーの概念が生まれた。20世紀に入って、エネルギーの存在形態としての量子、エネルギーと質量の統一を経て、自然の層的理解が深まった。それにはボルツマン、プランク、アインシュタインが貢献した。	同上	同上
13	コントロールとコンピュテーション	状態をつくり、状態を変える、それをコントロールすることで、歯車式、ついで電子式の計算機が作られた。その母体は、カードにしたがって模様を織り出すジャガード織機だった。計算機の可能性を追求したラブレス夫人とチューリングの役割を紹介し評価する。	同上	同上
14	複雑性への挑戦	20世紀後半になって、システム、サイバネティックスといった捉え方に始まり、気象のコンピュータ・シミュレーションによるカオス現象の解明などを経て、生命や経済などの複雑な現象を捉える試みが展開された。その経過と今後の方向を展望する。	同上	同上
15	日本の科学と技術の歴史－日本における近代科学・技術の出発	日本で、科学とりわけ近代科学がどのように育ってきたのか。生産活動の中で求められてゆっくり育ち、1774年の『解体新書』の出版を原点として急速に連鎖的に発展した。そうなった理由と、その展開過程を述べる。	道家達将	道家達将

＝先　端　工　学　＝（ＴＶ）

〔主任講師：道家　達将（東京工業大学名誉教授）〕

全体のねらい

今日ならびに未来にかけての産業技術、また人間が人間らしく生きていくために必要な諸技術を支えている先端工学について、例として14分野を選び、その研究の状況、研究成果、利用のされ方、問題点などを、各分野の最高・最先端をゆく研究者が、普通では見ることのできない研究や利用現場を見せつつわかり易く述べる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	総論	今日の技術と前近代技術（技能）を比較することによって、今日の技術が依拠している先端工学の特徴、技能の特徴、また先端工学がどのようにして形成されるかについて考える。	道家達将（東京工業大学名誉教授）	道家達将（東京工業大学名誉教授）
2	暮らしのなかの先端材料技術 －有機材料－	スキーやヨットのマスト、レーシングカー、大スパンの橋、また医用材料など身近なものを例に、最近の高分子材料が、強さも機能も非常に高度なものになってきている実際を見ながら、その秘密を解き明かす。	高久　明（東京家政大学教授）	高久　明（東京家政大学教授）
3	あすをひらくロボット技術 －機械工学－	日本の産業用ロボットのめざましい発展が述べられるとともに、最近では、製造業以外からも多彩なニーズが寄せられ、例えば、医療、福祉、ホームサービス用ロボットなど高度な知的機能が求められ、人間を支援してくれるロボット工学の研究状況などが述べられる。	梅谷陽二（豊田工業大学教授）	梅谷陽二（豊田工業大学教授）
4	太陽光発電 －電子工学－	今日、原子力発電の問題点・化石燃料による温室効果の問題などに対し、クリーンで無限のエネルギーを保障する太陽光発電について、その特徴と問題点、太陽電池の構造・種類・発電原理、そして、実用化されている現状と未来、宇宙発電などについて述べる。	高橋　清（帝京科学大学教授）	高橋　清（帝京科学大学教授）
5	明日をひらく光通信ネットワーク －電子情報工学－	今日の光通信技術は、レーザーが世に出た1960年に始まり、76年に波長0.85μm帯の、次いで、82年に1.3μmの第二世代システムが実用化され、95年頃からは海底ケーブルなどに光ファイバの最低損失帯にあたる1.55μmのシステムも実用化され始めた。本講義では、光ファイバ、光デバイス、光伝送システムなど光通信技術の基本について述べる。	伊賀健一（東京工業大学教授）	伊賀健一（東京工業大学教授）
6	これからの画像技術・ホログラフィー －光情報工学－	ホログラフィーは、光波の干渉性を利用し、物体からの光の波面を乾板上に干渉像として記録し、これに光をあて波面を再生する技術で、記録したものをホログラムと言い立体的に見える。1960年レーザーの発明で干渉性の高い光源が得られ実用化した。本講義では、ホログラフィーの原理と実用（３次元表示、カード等の偽造防止、立体印刷、精密計測、光学素子、立体ＴＶなど）について述べる。	辻内順平（東京工業大学名誉教授）	辻内順平（東京工業大学名誉教授）
7	パターン認識 －情報工学－	文字や音声を認識する働きは、一般にパターン認識と呼ばれている。パターン認識は、人間にとってはたやすいことであるが、電子計算機にとっては甚だ困難なことである。では、機械に文字や音声を識別させることはできないのか？できる。機械が手書きの数字や文字を読むのだ。どうしてそれが可能になったのか、まず「認識とは何か」から始めよう。	飯島泰蔵（北陸先端科学技術大学教授）	飯島泰蔵（北陸先端科学技術大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	心を測る －生体情報工学－	機械を使って人間の心を測ることなどできるのだろうか？本講義では、脳波を計測し、そのデータをコンピュータに解釈させることによって感情の動きを客観的な量的変化として表示できることを示す。それは複合した心理状態を、要素的なものに分解して表示することに始まる。映画や音楽を視聴する被験者とその時のデータを見ながら考えてみよう。	武者利光（㈱脳機能研究所代表取締役・東京工業大学名誉教授）	武者利光（㈱脳機能研究所代表取締役・東京工業大学名誉教授）
9	人口臓器と人口関節 －医工学－	医工学は、工学的手法を使って病気を治そうとする医療技術の科学である。本講義では、人工臓器と人工関節、とくに後者の人工股関節について、それを成功させるためには、1)材料の選択、2)形状とくに摩擦面設計、3)人体への取りつけ等が適切に行なわれる必要があり、とくに、2)について、しぼり膜ＥＨＬが行なわれるように設計すべきことを示す。	笹田直（千葉工業大学教授）	笹田直（千葉工業大学教授）
10	触媒・化学工業に欠かせない魔法の石 －応用化学－	触媒は今日とくに有機化学工業になくてはならぬ存在である。触媒の機能には、活性・選択制・寿命の３つがあるが、この講義では、重油からガソリンを得るときに使う流動接触分解用触媒が、反応上の要求にこたえるべく、いかに巧みな工夫がほどこされているか、また、自動車の排気ガス浄化触媒の活躍ぶりなどを例に触媒について述べる。	八嶋建明（東京工業大学教授）	八嶋建明（東京工業大学教授）
11	バイオテクノロジー －生物工学－	本講義では、生物光学の４つの基盤技術①遺伝子組換え②タンパク質工学③細胞工学④バイオプロセス工学を概説すると共に、耐アルカリ性・耐熱性酵素を加えた洗剤や、ホタルの光を出す酵素の遺伝子に細工したプラスミドを大腸菌に組みこんで、大気汚染物質に出会うと発光するバイオセンサ、また、神経細胞で小さな脳を作るなど多彩な例を挙げて生物工学の現状を述べる。	相澤益男（東京工業大学教授）	相澤益男（東京工業大学教授）
12	核融合エネルギー －エネルギー工学・その１－	核融合反応を地上でうまく制御しながら起させてエネルギーを得ることができれば、その燃料の重水素（Ｄ）が、海水中に150ppm程度の微量ではあるが存在するので、人類の10億年分くらいのエネルギーが保証される計算になる。本講義では、核融合反応の原理、核分裂反応との違い、実用化への難しさ、その開発の現状と展望など、岐阜県土岐市に建設中の文部省核融合研究所のＬＨＤの現場からの話も入れて論じる。	佐久間洋一（文部省核融合研究所助教授）	佐久間洋一（文部省核融合研究所助教授）
13	次世代発電システム・MHD発電 －エネルギー工学・その２－	ＭＨＤ発電は電気伝導制をもつ流体が磁界を横切って流れたとき起電力が生じるという原理を利用して、重油・石炭・天然ガスなどの高温の燃焼ガスを、超伝導磁石中を高速で通過させて発電する。従来の発電機よりエネルギー変換効率が良く、省エネルギーＣＯ2 排出量減少に役立つ。本講義では特に、東京工業大学のクローズドサイクルＭＨＤ発電実験装置に光をあてて論述する。	椛島成治（東京工業大学教授）	椛島成治（東京工業大学教授）
14	景観工学 －都市工学・その１－	「景」は「ものの姿」、「観」は「ひとの見方」、景観現象は景と観の関係で変化し、ひとの視知覚だでけなく心理や価値観とも関わるが、「景観工学」は景観現象を理解し、より良い景観の創り出し方を科学的に探究する学問である。19世紀西欧の産業革命期の自然や都市の景観の混乱による危機感が、ランドスケープ・アーキテクチュア（造園学）、アーバンデザインなどの概念や技法を生み、今の景観工学の基礎になった。本講義では、景観工学の基礎理論と手法を具体例を挙げて論じる。	小柳武和（茨城大学教授）	小柳武和（茨城大学教授）
15	安全で快適な都市づくり －都市工学・その２－	今日人間社会の主たる舞台となっている都市空間に焦点をあて、まず都市とは何か、都市の変容と都市問題発生のダイナミズム、都市空間の構成要素、現代都市問題の諸相等を概説する。次いで、都市問題の解決と都市の理想の追究のための都市の計画の立案について、思工と作業のプロセス、立案のための操作の対象と方法、案の評価方法等の現在の「技術の状況」を事例を交えて講術する。	渡辺貴介（東京工業大学教）	渡辺貴介（東京工業大学教）

＝ 数 学 の 歴 史 ＝（R）

〔 主 任 講 師 ： 長 岡　亮 介（放送大学教授）〕

全体のねらい

数学は、往古の昔より、人間の不思議な知的領域であり続けてきた。抽象的な概念を論じ、ときには「目に見えないもの」や「常識では理解できないもの」さえ扱いながら、「不可謬の論理」に基づいているがゆえに絶対的な厳密性と普遍的妥当性をもち、それでいて、現実の生活にも深い関わりをもってきた。

このような数学を、完成された学問体系として学ぶのは、能率の良い学習方法ではあるが、しばしば、受動的な姿勢を強いられ、数学の技術的側面にしか注意が行かなくなる憾みがないとはいえない。本講では、ギリシャ時代から近現代までの数学の形成の過程を、それぞれの文化状況において見ることで、数学の立場から、認識の歴史を考察していく。現代の科学文明を支える数学的思考の意味を再考する機会にしたい。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「数学の歴史」序論	数学を歴史的過程において考えることの意義と問題点について、やや広い視野で考察する。また、講義全体の計画を（「幾何学時代」「代数学時代」「解析学時代」「算術学時代」という分類の意味と合わせ）述べる。	長岡亮介（放送大学教授）	長岡亮介（放送大学教授）
2	幾何学時代の数学(1)	ギリシャ数学の特質をユークリッドの『原論』の第一巻を中心に論ずる。議論の素材は、今日「初等幾何」という名前で親しまれている図形に関する厳密な論証であるので、高等数学に経験のない人にも身近な話題であろう。	同　上	同　上
3	幾何学時代の数学(2)	ユークリッドの『原論』の第五巻の「比例論」に焦点を当て、ギリシャ数学が、通約不能量（無理量）のパラドクスを克服して連続体をどのように扱ったかを論ずる。	同　上	同　上
4	幾何学時代の数学(3)	アルキメデスの『放物線の求積につい』と『方法』を取り上げユークリッド『原論』の対照的な彼の数学（近世の微積分法的なアイデアと現代数学にも通ずる厳密な論証）を紹介する。	同　上	同　上
5	代数学時代の数学(1)	中世末期にスコラ学者の間で行われてギリシャ古典（特にアリストテレース『自然学』）の研究（ルネッサンス）における近代科学＝近代数学的特性の萌芽を見る。	同　上	同　上
6	代数学時代の数学(2)	中世アラビアにおける数学研究（特に方程式研究）を紹介する。	同　上	同　上
7	代数学時代の数学(3)	代数的記号法の発明と発達の歴史を紹介する。あわせて、近世イタリアにおける方程式の研究を述べる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	代数学時代の数学(4)	近代合理主義哲学の祖デカルトの数学と哲学を述べる。「我思う故に我在り」と、彼の数学との不可分の結びつきを考察する。	長岡亮介	長岡亮介
9	解析学時代の数学(1)	フェルマーによる新しい数学の開拓の様子を紹介する。カヴァリエリやケプラーの業績を素材に初期の無限小解析の方法論的特質を探る。また、ガリレオ・ガリレイの数学と力学を中心に新しい科学と新しい数学の結び付きを考える。	同上	同上
10	解析学時代の数学(2)	ニュートンの業績を中心に初期の微積分法の内容を紹介する。	同上	同上
11	解析学時代の数学(3)	微積分法が、自在に応用されて、新しい分野を切り開いていった様子を、オイラーの業績を中心に紹介する。	同上	同上
12	解析学時代の数学(4)	解析学時代の数学のパラダイムの変更が迫られる事件（振動弦論争）を紹介する。またフーリエによって導入された新しい手法（今日フーリエ級数と呼ばれているもの）を紹介する。	同上	同上
13	算術時代数学(1)	ラグランジュ、コーシ等、フランスのエコル・ポリテクニーク「数学教授」による数学の改革運動（解析学の厳密化）を紹介する。	同上	同上
14	算術時代数学(2)	ディリクレ、リーマンによるフーリエ級数の研究を中心に、19世紀半ばにおける数学の研究の方向転換を紹介する。	同上	同上
15	算術時代数学(3)	ワイヤシュトラースを中心とする「解析学の算術化」運動を紹介、あわせてカントルによる集合論の形成を歴史的な視野のもとで論ずる。	同上	同上

＝ 微積分入門Ⅰ（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：斎藤　正彦（湘南国際女子短期大学長）〕

全体のねらい

この放送授業は、まったくはじめて微積分を勉強する人のために、基礎的な部分をできるだけ丁寧に、わかりやすく説くものである。この授業と、これに続く「微分積分学Ⅱ」とで微積分の標準的内容がほぼカバーされる。

微分と積分とがひとつのことの裏表であることを強調し、両者をはじめから並行する形で扱う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	はじめに	直線の座標系 ―― 平面の座標系 ―― 座標系による図形の表現 ―― 空間の座標系 ―― 平均速度と瞬間速度 ―― 接線の傾きとしての微分係数 ―― 面積と区分求積法・定積分	斎藤正彦（湘南国際女子短期大学長）	斎藤正彦（湘南国際女子短期大学長）
2	微分係数・導関数・原始関数	はじめに ―― 微分係数 ―― 導関数 ―― 原始関数 ―― 面積関数としての原始関数	同上	同上
3	導関数・原始関数の計算 (1)	単項式 の導関数・原始関数 ―― 和と定数倍の導関数・原始関数 ―― 積と商の導関数	同上	同上
4	導関数・原始関数の計算 (2)	逆関数 ―― 逆関数の導関数 ―― 合成関数の導関数 ―― 置換積方法	同上	同上
5	三角関数	三角関数の復習 ―― 三角関数の導関数 ―― 部分積分法	同上	同上
6	逆三角関数	逆三角関数 ―― 逆三角関数の導関数 ―― 関数のarc tan xの級数表示	同上	同上
7	指数関数と対数関数 (1)	指数関数 ―― 対数関数 ―― 対数関数の導関数	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	指数関数と対数関数 (2)	指数関数の導関数 —— 対数関数の級数表示－部分分数分解	斎藤正彦	斎藤正彦
9	定積分の応用(1)	区分求積法 —— 極座標 —— 極領域の面積 —— 回転図形の体積 —— 回転図形の表面積	同上	同上
10	定積分の応用(2)	曲線の長さ —— 付録：曲率	同上	同上
11	微分法の諸定理	連続関数 —— 微分可能関数	同上	同上
12	極大極小と最大最小	極大と極小 —— 最大と最小	同上	同上
13	高階導関数	2階導関数と曲線の凹凸 —— ニュートン法 —— 組合せの数または二項係数 —— 高階導関数	同上	同上
14	テイラーの定理と多項式近似	テイラーの定理 —— 多項式による近似	同上	同上
15	関数の極限・テイラー展開	基本的な極限 —— 無限大・無限小の比較 —— テイラー展開	同上	同上

＝ 微積分入門Ⅱ（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：斎藤　正彦（湘南国際女子短期大学長）〕

全体のねらい

『微積分入門Ⅰ（’98）』の続きとして、級数（1～4）、偏微分法（5～8）、重積分（9～11）およびベクトル解析（12～14）を扱う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	数列	数列の定めかた――数列の極限――極限の定義の反省――極限に関する諸定理――実数の完備性（または連続性）	斎藤正彦（湘南国際女子短期大学長）	斎藤正彦（湘南国際女子短期大学長）
2	級数	級数の収束性と和――正項級数――交項級数	同上	同上
3	整級数	コーシー列――絶対値収束――整級数――収束半径	同上	同上
4	項別微積分	項別微積分――収束域の端点での様子	同上	同上
5	偏導関数	偏導関数――全微分――接平面――合成関数――平均値の定理	同上	同上
6	高階偏導関数・極大極小	高階偏導関数――極大極小	同上	同上
7	陰関数定理・平面曲線	陰関数定理――平面曲線	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	条件つき極値・最大最小	条件つき極値――開集合と閉集合――最大最小	斎藤正彦	斎藤正彦
9	方形上の積分	積分の定義――累次積分――積分範囲が有界でない場合――開方形の場合――微分と積分の順序交換	同上	同上
10	一般領域での積分	面積――一般領域での積分――体積――広義積分(1)――広義積分(2)	同上	同上
11	変数変換・曲面積	変数変換公式――曲面積	同上	同上
12	線積分・グリーンの定理	線積分――単純閉曲線・領域の境界――グリーンの定理	同上	同上
13	面積分・ガウスの定理	座標系の向き――曲面の向き――面積分――ガウスの定理――ベクトル解析の記号について	同上	同上
14	ストークスの定理	法線方向の微分――ガウスの定理（再）――パラメーター曲面――向きつきの変数変換公式――空間曲線に沿う線	同上	同上
15	反省と補足	微積分の基本定理――定積分の近似計算――無限小解析の基礎づけ――無限小量の使用について――微分方程式について――放射性物質の崩壊	同上	同上

＝ 線型代数Ⅰ（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：長岡 亮介（放送大学教授）〕

全体のねらい

数理科学諸分野の勉強を志す人に必要な線型代数の基本部分の確実な理解を主目標におきつつ、必ずしも技術的な知識だけにこだわらず、現代数学の方法論的特徴が実感できるような講義を目指す。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	講義の目標と流れ	線型代数という手法の数学的な意義について、概括的な解説をあたえる。講義全体に対する鳥瞰図的な把握を目標とする。	長岡亮介（放送大学教授）	長岡亮介（放送大学教授）
2	現代数学の方法(1)	現代数学は、高等学校以下の数学とは、かなり異なった叙述方法を採用する。ここで学生諸君の感ずる違和感を少しでも減らすために、現代数学の方法論的な特徴を概説する。	同上	同上
3	現代数学の方法(2)	現代数学で良く使う（とりわけ線型代数ではすぐに必要とする）基本概念を集合、写像を中心に解説する。	同上	同上
4	線型空間（数ベクトルの世界）	最も身近な2次元、3次元の数ベクトルの話題から、やや一般的なｎ次元数ベクトル空間の具体的な話題を紹介する。ｎ次元の数ベクトル空間を考える上で、連立一次方程式の知識が不可欠であることを理解する。	同上	同上
5	連立一次方程式から行列へ	初等的な解法の水準を超えて連立一次方程式の解法を理論的に見つめ直し、その解法の中に、行列とその演算が隠されていることを理解する。この立場から、連立方程式のもっとも基本的な解法を論ずる。	同上	同上
6	行列の代数学（行列の演算）	連立方程式を理論的に論ずるために必要となった行列についての基礎的な方法を体系的に論ずる。特に、行列についての和、積が、恣意的な規約としてではなく、理論的に自然な合理性をもって定義されていることを実感してもらいたい。	同上	同上
7	行列の基本変形（逆行列の計算）	行列に対して、“可逆な変形”とは何かを学ぶ。逆行列を求める実用的なalogorithmの一つを扱う。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	階級（rank）の概念	基本変形を通じて行列の階数を定義し、これが、連立一次方程式の方程式における解の自由度などに深く関係していることを明らかにする。	長岡亮介	長岡亮介
9	行列式の定義に向けて	行列の集合が持つ代数的な構造を具体例として、群論の入門的な議論を紹介する。それを受けて、置換と置換群、対称群、交代群の概念を講ずる。	同上	同上
10	行列式の概念	置換に基づく行列式のもっとも基本的な定義から始め、これに基づいて行列式の基本的な性質（多重線型性）を導く。	同上	同上
11	行列式の計算	実用的な行列式の計算法について具体的な列を通じていくつか実践的に学ぶ。	同上	同上
12	余因子行列の概念、Cramerの公式	逆行列に対する行列式の立場からのアプローチを紹介する。その副産物として、有名な連立一次方程式の解の公式を導出する。	同上	同上
13	行列と行列式論のまとめ	行列に関するこれまでの議論を演習を交えて振り返り、何がこれまでにできたか、この上に何がすぐにできるか、を考える。たとえば、行列の表す一次変換（線型変換）について考える。	同上	同上
14	抽象的なベクトルの理論	公理的なベクトルと線型空間の入門的な解説を行う。具体的なベクトルはまさにその具体的出現にすぎないこと、素朴には「方向」も「大きさ」もなさそうな数学的概念がベクトルの一種であることを理解する。	同上	同上
15	今後の課題と展望固有値	線型代数Ⅱで学ぶ、固有ベクトル、固有空間、行列の対角化、三角化と呼ばれる線型代数のもっとも重要な概念と手法についての概括的な展望を講義する。	同上	同上

＝ 線型代数 Ⅱ（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：長岡 亮介（放送大学教授）〕

全体のねらい

主として数理科学諸分野の勉強や研究を志す人のために、線型代数Ⅰ’99で講じた線型代数学の基本部分の理解を前提として、諸領域での応用を目指したやや発展的な講義を行う。放送授業においては線型代数学の理論的核心と方法論的特徴が見えるような講義を、他方、印刷教材においては内容的に整理したやや詳しく厳密な叙述を、心掛ける。したがって講義と印刷教材は一致しないところもある。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	講義の目標と流れ	「線型代数Ⅰ’99」で学んだ内容を概観し、解決された問題、未解決の問題を整理する。本講義に必要な予備知識が明らかになるであろう。また煩雑な計算に対するＣＡＳ（Computer Algebra System)を利用したアプローチも紹介する。そして抽象的な線型空間論に向かって、抽象代数の方法論的な準備を整える。	長岡亮介（放送大学教授）	長岡亮介（放送大学教授）
2	線型空間と計量線型空間	線型空間の公理的定義を与える。“ベクトル”の厳密な定義がここで明らかにされる。これととりあえずは区別された計量概念の導入を通して素朴に理解された「距離」や「角度」の概念を理論的にとらえ返す。さらに、抽象的な線型空間の概念を通じて実ベクトル空間以外の「不可能な」線型空間の概念を構想することの意義を理解する。複素数に関する初歩的な知識は冒頭でごく簡単にまとめる。	同上	同上
3	線型写像とその表現	「線型代数Ⅰ’99」で学んだように数ベクトル空間上の線型写像が行列で表現できることの復習から、一般の有限次元線型空間上の線型写像が基底によって定まることを講ずる。一般的な基底概念を理解するための準備として、基底の概念に暗黙に含まれていた“単位性”、“直交性”を概念的に定式化しておく。	同上	同上
4	基底の取り替えと線型写像	線型写像の表現は、基底により定まるはずであるから、基底を取り替えることによって、表現も変更を受ける。この変更の仕組みを把握する。	同上	同上
5	線型変換に関する不変性	線型変換与えられた線型変換によって“変らない部分”（線型変換についての不変部分空間）の概念とこれに対する表現行列の特性を見る。これによって固有値、固有ベクトルの概念を準備する。	同上	同上
6	固有値と対角化	固有空間と固有値の概念を不変部分空間からの自然な発展としてみる。もっとも基本的な応用として、対角化の問題（可能性の判定、計算手順）を主として実行列の範囲で取り上げる。	同上	同上
7	固有値問題の応用(1)	対角化の有効性を明らかにするために固有値問題の応用として、手始めに、線型差分方程式（漸化式）によって帰納的に定義された数列の一般項を求める計算や線型連立微分方程式への応用を取り上げる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	固有値問題の応用(2)	2次形式の概念を解説し、固有値の概念を通じてその分類ができること、それが、いわゆる2次曲線、2次曲面の分類へ応用できることを具体的に紹介する。	長岡亮介	長岡亮介
9	商空間、双対空間	商集合、双対性、同型性という現代数学のキー概念を線型空間を例にとって解説する。	同上	同上
10	エルミート行列とユニタリ行列	複素計量空間における共役変換の概念と正規行列の概念を紹介する。複素空間を考えることの理論的な優位性を明らかにする。	同上	同上
11	Jordanの標準形(1)	冪零変換、冪零行列を通じて、対角化することのできない行列について、これに準ずる、Jordanの標準形と呼ばれる、実用的に重要な概念を紹介する。	同上	同上
12	Jordanの標準形(2)	冪零行列の標準形からはじめて、Jordan の標準形を作るアルゴリズムを講ずる。	同上	同上
13	固有値問題の応用(3)	Jordan の標準形を踏まえて線型微分方程式や、2次曲面の分類などについてより広いアプローチを紹介する。	同上	同上
14	線型代数の応用(1)	線型計画法を中心に線型代数の応用を具体的に紹介する。	同上	同上
15	線型代数の応用(2)	情報理論などから線型代数の応用を具体的に紹介する。	同上	同上

＝確　率　論＝（R）

〔主任講師：馬場　良和（静岡大学名誉教授）〕

全体のねらい
確率論は、偶然現象を対象とした数学的理論である。現在では、数学一分野となっているが、この講義では、できるだけ具体的な問題と関連させながら、あまり数学的議論には深入りせずに、現象の理解を優先したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	確率論のはじまり	確率論の出発点となった「分配問題」を述べ、その解決を考える。その副産物として、樹（tree）、２項定理などに触れる。	馬場良和（静岡大学名誉教授）	馬場良和（静岡大学名誉教授）
2	組合せ計算	ある条件下での組合せの総数を数える問題。それをどのように計算で求めるかを考える。あとで必要になるスターリングの公式にもふれる。	同上	同上
3	確率とその計算規則	確率とは何か？また、それを求める計算規則を提示し、具体的な問題として「誕生日の問題」を考察する。	同上	同上
4	和事象の確率の公式とその応用	多くの事象の和事象の確率を計算する公式を導き、その応用として「一致の問題」を考える。	同上	同上
5	条件つき確率と独立性	確率論でもっとも重要な概念である事象の独立性と従属性について述べ、くじびきの問題を解く。	同上	同上
6	確率変数と確率分布	確率変数とその確率分布、平均値、分散などを述べ、具体的問題として宝くじの当選の確率、期待値などに触れる。	同上	同上
7	さまざまな確率分布（1）	離散的確率分布の代表として、２項分布、幾何分布、ポアソン分布について述べる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	さまざまな確率分布 (2)	連続名確率分布として、一様分布、指数分布、正規分布を考える。とくに一様分布が関係する数学的問題を取り上げる。	馬場 良和	馬場 良和
9	ポアソン分布	ポアソン分布が、「場所占め問題」や空間におけるランダムな点の分布問題において重要な役割をはたすことを述べる。	同 上	同 上
10	大数の法則	独立で同じ確率分布にしたがう確率変数の和の平均値は、もとの平均値の近くに集まってくる傾向があることを述べ、乱数についても触れる。	同 上	同 上
11	正規分布による近似	2項分布と正規分布の関係について述べ、その問題を一般化した「中心極限定理」に触れる。	同 上	同 上
12	ランダムウオーク (1)	直線上のランダムウオークの具体的問題として、「投票の問題」、「つり銭の問題」を考える。	同 上	同 上
13	ランダムウオーク (2)	ランダムウオークの問題として、原点への回帰問題、「リードの問題」を取り上げる。	同 上	同 上
14	ランダムウオーク (3)	リードの問題の続きと逆正弦法則を述べる。	同 上	同 上
15	ランダムウオーク (4)	ランダムウオークの原点からの乖離問題、破産問題、2次元ランダムウオークなどについて述べる。	同 上	同 上

＝統　計　学＝（R）

〔主任講師：長坂　建二（法政大学教授）〕

全体のねらい

統計学の基本事項を理解し、簡単な統計的推定と統計的検定ができるようになることを目標とする。このために、まず、記述統計学の分野（１章～４章）で、データの整理の手法、確率論の分野（５章～８章）から、確率の基礎と統計量の分布、そして、最尤統計量を中心とする統計的推定論と区間推定（９章～11章）、最後に、尤度比検定を中心とする統計的検定論と仮説検定を述べ、例題により、実際に統計手法に習熟することを目指す。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	データの整理	統計学で扱う変数とデータの概念を説明し、ＥＤＡで用いられる手法のうち、代表的な幹葉表示、要約表示（文字値表示）、および箱ヒゲ図により、データを整理する。	長坂建二（法政大学教授）	長坂建二（法政大学教授）
2	度数分布とヒストグラム	伝統的な記述統計学の手法である、度数分布の作成、ヒストグラムの書き方、累積度数分布とその性質や、分位値、さらに、データを視覚的に表現する、統計グラフについて述べる。	同上	同上
3	平均と偏差	通常最も用いられる、平均とその意味、関連して総和記号について述べる。次いで、偏差の概念から、データの散らばりを示す指標である、分散（標準偏差）の意味を述べ、データの基準化を説明し、応用として、偏差値についてインタビューする。	同上	同上
4	相関と回帰	2次元変数とそのデータをまず導入し、散布図、そして相関の概念を説明し、相関係数を計算する。次に回帰直線の方程式の求め方（最小自乗法）と、相関係数の意味を与え、因果関係との違いを考察する。	同上	同上
5	確率の計算	確率論入門として、標本空間と事象、事象の確率について、公理論的に導入する。さらに、独立試行と事象の独立は異なることを説明し、例を与える。また、応用として、ベイズの定理を示す。	同上	長坂建二 松原望（東京大学教授）
6	確率変数と統計モデル	統計学での変数の概念と、確率論により統計学を組立てるときに不可欠な、確率変数について説明し、確率変数の分布関数、密度関数を導入する。さらに、確率変数の平均、分散の定義を与える。	同上	同上
7	２項分布と正規分布	2項母集団を導入し、独立試行であるベルヌーイ試行から、2項分布が導入されることを示す。また、連続分布の代表例として、正規分布を挙げる。それらの性質を導くための手段として、確率母関数、特性関数を導入する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	統計モデルと統計量の分布	確率論での記法や概念を統計学に取り入れて、統計モデルを構築する。つまり、母集団と標本を確率論の言葉で表現し、標本の関数である統計量の分布を、正規母集団に対して求める。	長坂建二	長坂建二
9	統計的推定	統計的推定とは何であるかを概観し、望ましい推定量の求め方として最尤法を説明し、例を与える。また、区間推定の意味を述べ、厳密な標本分布が必要な小標本法と、極限定理を利用する大標本法を述べる。またさらに、確率天気予報に関して専門家の意見を伺う。	同上	同上
10	平均の推定	正規母集団の母平均について、分散既知の場合、および未知の場合の推定方法を述べ、区間推定の例を与える。また、２つの正規母集団の母平均の差の区間推定の方法と例を与える。	同上	同上
11	母比率と分散の推定	2項母集団の母比率の推定を、小標本法と大標本法の異なる方法を示し比較し、標本数が多いときの大標本法の利点を確認する。また、正規母集団の母分散、および、分散比の推定方法を述べる。	同上	長坂建二 松原望
12	統計的検定	統計的検定の枠組と、重要な２つの誤り、さらに検出力関数を導入して、望ましい検定方式、さらに、それを求める有力な方法である尤度比検定について、例を挙げて説明する。	同上	同上
13	平均の検定	検定には、片側検定と両側検定があること、そして、それぞれの場合の棄却域の形を説明する。次いで、正規母集団の母平均についての検定統計量を尤度比検定から導き、検定方法を与えると共に、母比率の検定方法を述べる。	同上	同上
14	分散、平均の差の検定と適合度検定	正規母集団の母分散と分散比の検定をまず説明し、それを適用した後に、母平均の差の検定ができることを示す。また、多項分布を導入して、適合度検定を、尤度比検定から導く。	同上	同上
15	相関係数と独立性の検定	2変数正規分布を導入し、2変数正規母集団の母相関係数０が独立の条件になっていることを注意する。相関係数の分布を求め、検定方法を説明し、離散変数の独立性の検定を、分割表の形で述べる。	同上	同上

＝ 物理の世界（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：阿部　龍蔵（放送大学教授）〕
〔主任講師：遠山　紘司（神奈川工科大学教授）〕

全体のねらい

日常生活と密接に関連した現象を通じて、その背後に潜む物理の原理や法則をできるだけやさしく、わかりやすく説明するのが本講義の目的である。数式が少々現れるが、それがわからなくても全体の理解には差し支えがない。理系の人はもちろんのこと文系の人にも物理の面白さ、重要性が理解していただければ幸いである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	乗り物の物理	自動車、新幹線、飛行機などの乗り物を題材として、力学の基礎的事項である速度、加速度について学ぶ。また、エアートラックの演示実験、コンピュータグラフィックなどを利用し、運動の法則、微分、ベクトルなどを説明する。	阿部龍蔵（放送大学教授）	阿部龍蔵（放送大学教授）
2	スポーツの物理	運動の法則の理解を深めるため各種のスポーツを考察する。ゴルフや砲丸投に現れる放物運動を説明し、またハイジャンプに対するモデル実験を紹介する。さらに、ハンマー投と関連し等速円運動を、力学的エネルギー保存則と関連しスキーのジャンプを考える。	同上	同上
3	圧力の物理	地球表面では大気の重さのために、人間を含めすべての物に約１気圧の圧力が加わっている。ここでは人の血圧について考えた後、１気圧よりさらに圧力を加えた場合と、逆に１気圧より減圧し、真空にした場合の日常生活との関連について学ぶ。	遠山紘司（神奈川工科大学教授）	遠山紘司（神奈川工科大学教授）
4	摩擦の物理	物体と物体との間には互いに運動をさまたげるような摩擦が働く。ここでは摩擦の種類とメカニズムについて述べた後、摩擦を積極的に利用する例として車のタイヤと路面の関係を、逆に摩擦を減らす例として潤滑やベアリングを摩擦係数の面から論じる。	同上	同上
5	温度と熱の物理	各種温度計の原理、温度の範囲（温度の下限）、極低温（超流動、超伝導）、物質の三態、臨界点などを中心として温度と熱について学ぶ。また、臨界点近傍の水（臨界水）の思わぬ応用例について述べる。	阿部龍蔵	阿部龍蔵
6	水と空気の物理	パスカルの原理、ボイル・シャルルの法則を紹介した後、車のエンジン（熱機関）を例として熱力学の初等的な事項を学ぶ。また、少々難しいかもしれないが、エントロピーの説明を行なう。	同上	同上
7	カメラの物理	光の性質のうち、幾何光学に関する部分を学ぶ。直進、反射、屈折について述べた後、それを応用したカメラ、顕微鏡、虫めがね、望遠鏡の原理、さらに近年、通信分野や医療分野で急速に利用が増している光ファイバーについて述べる。	遠山紘司	遠山紘司

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	太陽光の物理	光の波動性（偏光、回折）、屈折率、光の速さ、紫外線、赤外線、赤外線リモコン、可視光線、横波、スペクトルなどを題材に電磁波としての光について学ぶ。また、虹、色の三原色など色に関する事項を論じる。	遠山紘司	遠山紘司
9	電話の物理	携帯電話、ＰＨＳ、ラジオ（ＡＭ、ＦＭ）、ＢＳ放送、ＣＳ放送などを題材として電磁波の性質のうち、光より波長の長い領域である電波を中心に学ぶ。また、電波を発生させる方法、空中の伝わり方も論ずる。	同上	同上
10	楽器の物理	起きている時も、寝ている時も音は私たちの耳に届く。気持ちの良い音、いやな音もある。音には何か規則性があるのだろうか。 ここでは楽器の音を中心に音の性質、音のでる仕組み、聞こえ方、さらに人間の耳に聞こえない音などについて学ぶ。	同上	同上
11	単位の物理	物理量を扱うさい、単位の決め方は重要な意味をもつ。ここでは、長さ、重さ、体積、時間の単位の決め方を学び、また加速度、密度などの組立て単位についても考察する。 国際単位系（ＳＩ）を中心に日常生活、社会習慣と単位の関係についても考える。	同上	同上
12	宝石の物理	宝石のもつ硬さや美しい色は何に起因するのであろうか。宝石を形作っている原子の並び方である結晶構造を中心に、宝石特有の性質を学ぶ。 さらに、原子の並び方に規則性がない場合（非晶質）についても考える。	同上	同上
13	発電の物理	発電のためのエネルギーとして位置エネルギー（水力、揚水）、運動エネルギー（風力、潮力）、熱エネルギー（地熱、石油、ＬＮＧ、ゴミ）原子力エネルギー、太陽エネルギーがある。これらを通してエネルギーの変換を学ぶと同時に送電・変電について考える。	同上	同上
14	家庭の電気	家電製品、電子レンジ、モーター、電熱器、ＦＡＸなどの電気器具を題材として、電気の基本的概念である電圧、電流、抵抗、オームの法則、直流、交流、電力、実効値などについて学び、電気的な現象を支配する物理法則を論じる。	阿部龍蔵	阿部龍蔵
15	記録の物理	磁気記録（テープレコーダー、ＶＴＲ、フロッピーディスク、磁気カード）、光記録（光ディスク、ＣＤ）、光磁気記録（ＭＤ）など、それぞれの記録のメカニズムを通して、日常生活とのかかわりあいについて学ぶ。	遠山紘司	遠山紘司

＝ 物理・化学通史（’９９）＝（R）

〔主任講師：橋本 毅彦（東京大学教授）〕

全体のねらい

明治以来日本が導入した西洋近代科学とは何であるのかという問題設定の下、①古代中世の科学や中国科学との比較対照、②近代科学改革で起こったこと、③その後の科学研究の理論的発展と研究制度の整備、技術的応用、という３つの基本的テーマを歴史的に順次追いながら、その特徴・あり方を論説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序論	科学とは、どこでも動く機械ではなく、育つべき土壌を必要とする生命体のようなものであるという、お雇い外国人教師ベルツの言葉を手がかりに、日本が移入した西洋近代科学とはいかなるものか論説しつつ、講義の概要を説明する。	橋本毅彦（東京大学教授）	橋本毅彦（東京大学教授）
2	ギリシャ科学	近代科学の最も重要な源泉はギリシャ科学である。神話的な説明様式にとって代わって、論理的・整合的な説明が始まる。タレスの自然哲学に始まり、無理数の発見、パルメニデスのパラドックス、そしてアリストテレスの総合化によるギリシャ科学の完成を解説する。	同上	同上
3	中世の科学	ギリシャ科学は、アラビアを経由して、「12世紀ルネサンス」の時代に西欧ラテン世界に導入され、新しく登場した大学で講じられるようになる。ギリシャ科学は、キリスト教の枠組みの中でいかに変容され、独自の学問体系に組み込まれていったのか論じる。	同上	同上
4	中国の科学	ギリシャ以降の西洋の科学の発展と好対照をなすのが中国における科学の発展である。特に歴の作製と結びついた天文学のあり方に注目して、官僚的な中国科学の姿を紹介する。また中国で近代科学が生まれなかった理由に関して、問いかける。	同上	同上
5	コペルニクス革命	近代科学革命のハイライトは、コペルニクスによる地動説の提唱である。プトレマイオスの天動説とコペルニクスの地動説とを概略を説明し、その後の地動説への反応、またその継承発展をテイコ・ブラーエ、ケプラーなどを取り上げて説明する。	同上	同上
6	魔術的自然観	中世キリスト教世界において抑圧されていた各種の魔術・占星術は、ルネサンスの人間主義の登場とともに大いに流行する。小宇宙・大宇宙のアナロジーに代表される魔術的自然観を紹介するとともに、実験哲学を準備した「自然魔術」の歴史的意義を論説する。	同上	同上
7	機械論的自然観	アリストテレス的自然観、魔術的自然観にとって代わって近代科学の基礎概念として登場したのが、デカルトらによって提唱された機械論的自然観である。デカルトの著作を通じて、機械論のあらましを紹介し、その背景として、真空実験や精巧な機械の普及を解説する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ニュートンの宇宙論	ニュートンは、地動説に基づくケプラーの天文法則と、ガリレオの落下の法則に代表される地上の運動論とを、見事に総合し近代力学を作り上げ、科学革命を完成させた。錬金術や神学の研究にも専念したニュートンの科学思想の全体像を説明する。	橋本毅彦	橋本毅彦
9	ラヴォワジェの化学革命	フランス革命前夜にラヴォワジェは、新しい燃焼理論を打ち出すとともに、体系的な元素表を提案し、今日の化学の基礎を築いた。ラヴォワジェによるこの化学革命を、18世紀における化学技術の発展という背景を見ながら分析する。	同上	同上
10	ラプラス物理学	ナポレオン体制下のフランスにおいて、光・熱・電気・磁気などの物理現象に関して、古い光粒子説などに代わって新しい光波動論が提唱されるとともに、精緻な数学的物理理論が登場する。「第2の科学革命」とも呼ばれるこの時期の物理学の躍進を解説する。	同上	同上
11	電磁気学・古典物理学の完成	19世紀の英国では、ファラデー、ケルビン、マックスウェルらの物理学者によって、古典物理学の中核をなすことになる電磁気学が完成される。この事情を、これら英国物理学者が共有する独特の自然像や、大英帝国の電信網の発展に関連させつつ説明する。	同上	同上
12	有機化学の発達と企業研究所の出現	合成染料の開発を契機に、飛躍的発展を遂げた、19世紀後半の有機化学の発達を概観する。その基礎を築いたリービッヒの化学実験教育、パーキンの最初の合成染料の発明、そしてその後の科学研究のあり方のモデルともなる企業研究所に関して論じる。	同上	同上
13	量子力学の誕生	プランクによって提唱された量子仮説は、古典物理学の根底を覆し、ミクロの世界に関して全く新たな認識をもたらした。ボーアの原子構造論、シュレディンガーの波動力学、そしてハイゼンベルクの不確定性原理などを解説する。	同上	同上
14	原子物理学の発展と原爆開発	ミクロの世界の探究は、新しい素粒子の発見などを経て、核分裂の発見へと導かれる。この発見が、第二次大戦下にあって、いかに原爆開発へとつながっていったか説明する。また大戦中の米国で、科学者・技術者による兵器開発の研究がいかに組織されたかも見る。	同上	同上
15	巨大加速器と素粒子論研究	ＳＳＣといった巨大加速器に象徴される現代の巨大科学。加速器と検知器の発展の歴史を追うことにより、いかに素粒子研究が、巨大組織化されていったかを見る。サイクロトロンの発明、泡箱の発明、そしてＳＳＣの計画などについて論じる予定。	同上	同上

＝ 基礎化学（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：平川　暁子（放送大学教授）〕
〔主任講師：市村禎二郎（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

内容としては化学のごく基礎的な事項に限り、その科学的意味を理解することに重点をおいた講義とする。化学の基礎的な言葉や考え方を学び、日常体験する物質に関係する現象が化学の視点からどのように説明されているかを理解し、物質の存在と共に成り立っている生活のあり方・方法について考えるための材料とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	物質の世界と化学	化学は物質をしらべる学問である。物質に取り囲まれて暮らしてきた人間が物質をどのように理解しどのように利用してきたかを知り、生命の安全や自然の保全のために物質の理解が重要であることに気付く。 1）はじめに　2）物質理解の歴史　3）物質のなりたち	平川暁子（放送大学教授） 市村禎二郎（東京工業大学教授）	平川暁子（放送大学教授） 市村禎二郎（東京工業大学教授）
2	元素の性質と原子	物質の構成単位は原子である。原子の構造によって元素のさまざまな性質があらわれる。原子の構造が解明されてきた過程、現在の原子の理解、物質を扱うときの国際的な約束について学ぶ。 1）元素の周期律　2）原子の構造　3）電子配置 4）原子量とモル	同上	同上
3	分子	物質の多くは分子からなり、多種多様な種類の物質を作る。100種ほどの原子から作られている分子の種類は1000万種におよぶ。物質を取り扱うには分子の記述が必要である。 1）物質の表現と分類　2）化学式と構造式 3）分子の形	同上	同上
4	化学結合	分子は原子間の化学結合によって作られる。化学結合とは何か、化学結合の種類と規則性、物質の性質と化学結合との関係について学ぶ。 1）原子価と電子配置　2）結合の形成 3）物質の特徴と化学結合	同上	同上
5	化学変化	物質の変化には、組成が変わらない物理変化と変わる化学変化がある。化学変化の法則を知ることで物質の科学的理解が始まった。化学変化とは何か、その法則と表現法について学ぶ。 1）化学変化の法則　2）化学方程式　3）化学変化と熱	同上	同上
6	物質の三状態	物質は気体・液体・固体の状態で存在するが、温度や圧力によって状態は変化する。その法則性を学び、気体・液体・固体の特徴と物質による差異の理由を学ぶ。 1）物質の相　2）気体状態方程式 3）気体・液体・固体の特性と粒子の運動 4）分子の大きさと分子間力	同上	同上
7	混合物	自然界の物質は完全な純物質として存在することはなくほとんど混合物である。混合現象とは何か、混合成分の割合、混合による性質の変化について学ぶ。 1）混合と溶解　2）濃度　3）混合物の性質 4）分離と精製	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	水溶液と酸・塩基	溶液の中でも水溶液は我々の生活の中でとくに重要な役割をはたしている。酸・塩基・塩はイオンに解離して水に溶解する。イオンの濃度と水溶液の性質について学ぶ。 1）電解質の溶解　2）酸・塩基の反応 3）水素イオン濃度	平川暁子 市村禎二郎	平川暁子 市村禎二郎
9	有機化合物の性質	有機化合物は炭素を主体に10種類程度の原子からなるが、1000万種におよぶ化合物の中大半を占める。その理由、有機化合物の種類と各々の特徴を系統的に理解する。 1）有機化合物の特徴　2）炭化水素 3）官能基と化合物の特徴	同上	同上
10	有機化合物の反応	化学反応によって新しい有機化合物が合成され、優れた機能をもつ物質を使うことができるようになった。有機化合物の反応の規則性について学び、有用な物質を作りだす化学工業の工夫を知る。 1）有機化合物の合成　2）反応の種類　3）反応の機構	同上	同上
11	酸化と還元	一般に鉄が錆びる反応を酸化、錆を鉄にする反応を還元というが、酸化・還元はもっと多くの化学反応に関係している。酸化・還元反応の意味、それに密接にかかわる電気と化学反応の関係について学ぶ。 1）酸化・還元とは　2）金属のイオン化 3）電気と化学反応	同上	同上
12	無機化合物の性質	元素の大部分は無機化合物として存在する。無機化合物は古くから金属や塩として利用されてきたが近年は新しい無機機能性材料が作られている。さらに本章では元素変換に伴う諸現象について学ぶ。 1）無機化合物の特徴　2）遷移元素と不定比化合物 3）元素の変換	同上	同上
13	光と化学	地球上の自然現象は太陽からの光のエネルギーに支配されている。光と物質との相互作用、化学反応と光エネルギーの関係について学ぶ。 1）太陽光の利用　2）光と化学物質　3）光と生物	同上	同上
14	化学反応のしくみ	さまざまな化学反応について学んできたが、化学反応がなぜ起こるか、どのように進行するかについて考え、化学変化の本質を理解する。 1）化学反応のおこりやすさ 2）化学反応はなぜおこるか（化学平衡） 3）化学反応はどのように進むか（反応速度）	同上	同上
15	暮らしと物質の理解	人間活動の諸分野に、物質の科学が広く深く関連していることに気付く。物質現象の面白さとともに、現在と将来の暮らしのあり方として、物質を理解することの重要性に気付き関心を深めるための材料を提供する。 1）化学は Central Science である	同上	同上

＝ 物質の科学と技術開発（’９９）＝（R）

〔主任講師　：　平川　暁子（放送大学教授）〕
〔主任講師　：　道家　達將（東京工業大学名誉教授）〕

全体のねらい

今日そして今後の生活を支える素材には、これまでにない高度な機能を備えた新物質が利用される。その開発には、物質や方法についての基礎的・理論的研究、そして開発に固有の研究が必要である。資源・環境問題への配慮も要る。本講義では、これら最先端の開発研究に当ってこられた方々の苦心談を聞いて共に考えたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	持続可能な発展に向けて工業材料はどうあるべきか	製造業における「労働生産性」、「資本生産性」の追求が大量生産・大量消費を生み、その結果として大量廃棄・地球環境負荷の増大をもたらした。これからは持続可能な発展に向けて「資源生産性」重視へ考え方を変換しなければならない。	村田朋美（新日本製鉄㈱顧問、先端技術研究所元所長） 平川暁子（放送大学教授） 道家達將（東京工業大学名誉教授）	
2	無機物　（1） －鉄鋼材料日本の鉄はなぜ優れているか	鉄は古くて新しい。産業の基礎素材として日本の鉄鋼材料が世界を凌駕してきた理由を3視点から述べ21世紀への課題と展望に繋げる。放送教材では、主に自動車用鋼板について述べる。	阿部光延（新日本製鉄㈱顧問） 道家達將	阿部光延（新日本製鉄㈱顧問） 道家達將
3	無機物　（2） 高温超電導*材料 －材料開発はどこまで進んでいるか－	高温超電導材料は、電力貯蔵、輸送、エネルギー変換などの領域で最も期待されている材料技術である。①高温超電導特性発現の理論と材料技術の現状、②利用技術、利用システム開発の壁と対応策、③この材料を生かした未来技術と私達の夢。	橋本　操（新日本製鉄㈱先端技術研究所企画グループリーダー） 道家達將	
4	不定比化合物とその応用	①不定比化合物とは何か、その歴史的経緯、②鉄やウランなどの酸化物を例に遷移元素、欠陥構造、相図など話す、③固溶体の熱力学、④不定比化合物の物理的性質（ホッピング型半導体、イオン伝導、原子価と色など）、⑤機能性材料など役立つ不定比化合物、⑥高温超伝導*物質と不定比性等について述べる。	舘野　淳（中央大学教授） 道家達將	舘野　淳（中央大学教授） 道家達將
5	光　（1） 基礎特性	通信・情報処理・加工などの先端技術を支える光の基礎的特性について解説。すなわち波としての性質により引き起こされる反射・屈折・干渉・回折などの現象を説明する。自然界でのこれらの例についてもふれる。	大津元一（東京工業大学教授） 道家達將	大津元一（東京工業大学教授） 道家達將
6	光　（2） 限界の打破	波として光を考えると説明できない現象がいくつかある。これを説明するために、光をエネルギーの粒として扱う量子力学の必要性、その産物の一つであるレーザーの原理についてふれる。一方、波長よりも小さな光の粒を発生させるための近接場光学の原理とそれによる顕微鏡・光メモリ・原子の操作などの話題にもふれる。	同上	同上
7	光ファイバ技術の勝利	光ファイバ通信の原動力となった低損失光ファイバの開発の経緯を紹介し、合せて、技術開発のポイントや情報通信へのインパクトを明らかにする。	須藤昭一（ＮＴＴ光エレクトロニクス研究所研究研究企画部長） 道家達將	

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	炭素 (1) 炭素の構造と物性	炭素は人類が最も古くから利用してきた物質である。燃料や製錬など化学反応材料として用いられると同時に吸湿ろ過材・顔料・宝石研磨材など広く使われて来たが、今日の新素材としての炭素の利用は、炭素の構造と物性の研究の上に展開されていることを述べる。	大谷杉郎（群馬大学名誉教授） 平川暁子	大谷杉郎（群馬大学名誉教授） 平川暁子
9	炭素 (2) 炭素繊維の開発	炭素繊維は軽量で高強度・高弾性率・耐熱性等のすぐれた性質を持つ素材であって、宇宙開発から民生用までさまざまな面で使用されている。このような優れた性能をもつ炭素材料を得るまでの過程での研究開発戦略・問題点の解決方法などについて述べる。	同上	同上
10	ダイヤモンド膜の開発	ダイヤモンドは光の屈折率が高いことによる宝石としての価値だけでなく、原子全体が共有結合を作ることによる高い硬度と高い熱伝導性によって、きわめて優れた素材物質となる。このためにダイヤモンド膜が開発されているが、その開発の手段、問題点を述べる。	佐藤洋一郎（科学技術庁無機材質研究所総合研究官） 平川暁子	佐藤洋一郎（科学技術庁無機材質研究所総合研究官） 平川暁子
11	有機物 (1) 導電性高分子の発見	有機化合物にも電気伝導性を示すものがあることが知られて以来、金属に比べ重量・加工性・多様性等に優れた有機物を導電性素材として使用する試みが進められている。有機導電性物質の基本的な物性と機能と各種の有機導電性物質の特性・合成方について述べる。	松永孜（松永技術コンサルティング事務所代表） 平川暁子	松永孜（松永技術コンサルティング事務所代表） 平川暁子
12	有機物 (2) 導電性高分子を電極に用いたポリマーバッテリーの開発	現代の情報化時代に使われる機器には、軽量・高性能の電池が不可欠である。しかも天然資源の有効利用のためには繰返し充放電できる２次電池が求められる。はじめて実用化された有機ポリマーバッテリーの開発の方針・開発過程での問題と解決の経験を述べる。	同上	同上
13	有機物 (3) 分離膜の物性と機能	物質を取扱う際には混ざっているものを分離することが重要な過程である。しかもこの分離は選択性が高く時間的効率が高いことが望ましい。分離膜はこのために有効である。膜の分離機能はどのような物性によりあらわれるのか、機能性分離膜の作り方を述べる。	神澤千代志（通商産業省・物質工学工業技術研究所化学システム部長） 平川暁子	
14	有機物 (4) 分離膜の開発	海水から真水を得る分離膜、合成化学原料、ＣＯをとりだす分離膜等、それぞれの素材開発について述べる。	同上	同上
15	物質の科学と技術開発	以上の話を総括する。	道家達將 平川暁子	道家達將 平川暁子

注：超電導*、超伝導*の用語は、内容は同じで、英語としては、superconductivityであるが、日本では工学系は主に前者を、理学系は主に後者を使っており、担当講師のご意見を尊重してそのまま使うことにした。

＝ 基礎生物学（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：中澤　透（元放送大学教授）〕
〔主任講師：山田　晃弘（放送大学教授）〕

全体のねらい

生物科学の発展により、遺伝子のレベルから高次の神経活動、あるいは生態や進化など生物の多様性が明らかになりはじめている。生物現象を正確にとらえて生命の本質に迫るために、基礎的な生物科学を学ぶ。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生物の特徴	30億年以上にわたり発展を続けてきた生命体は、生命の基本的営みに必要なつくりを保持しながら、生命の多様化に対処するつくりを発達させた。このような非生命体にはみられない生物の特徴を学ぶ。	中澤　透（元放送大学教授） 山田晃弘（放送大学教授）	中澤　透（元放送大学教授） 山田晃弘（放送大学教授）
2	細胞 ～ かたちとはたらき	細胞は生物の基本単位である。いろいろな細胞には核をはじめ特有なはたらきの細胞小器官がある。細胞は分裂によって増殖し、細胞内部の情報伝達が機能調節を担当する。かたちとはたらきの関係を探る。	中澤　透	中澤　透
3	生体を構築する分子	生命の営みは生体を構築する分子のはたらきによっておこる。生体を構築する分子として、炭水化物、脂質、タンパク質および核酸のどのような構造が生体のはたらきの基盤になっているかを学ぶ。	山田晃弘	山田晃弘
4	代謝	生体構築分子は合成と分解をくり返し、生体の維持と成長に役立てている。このような代謝を触媒する酵素のはたらきについて、また代謝の進行に伴って出入りするエネルギーについて学ぶ。	同上	同上
5	遺伝と遺伝子の本体	メンデルの法則とその再発見がなされてから、遺伝子の本体がＤＮＡであることが証明されるまでの道筋を解説する。	東江昭夫（東京大学教授）	東江昭夫（東京大学教授）
6	遺伝子のはたらき	ＤＮＡの構造が解明されたことは生物学のいろいろな分野に大きな影響を与えた。この章では、遺伝暗号の解読、遺伝子のはたらき、および遺伝子操作法などについて解説する。	同上	同上
7	生殖	30数億年以前に出現した生物は、自分と同じ性質の子孫を残す生殖のはたらきによって維持されている。形質を受け渡す遺伝現象は生殖と深く関わること、生殖細胞の出現や性の決定の重要性などについて学ぶ。	中澤　透 山田晃弘	中澤　透 山田晃弘

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	発生	生殖細胞の卵と精子は受精によって発生を開始する。胚の細胞は分裂・増殖し、そして独特な分化が始まる。発生のプログラムは遺伝情報の発現によって進行し、形態や性質の多様性がつくりあげられることを学ぶ。	中澤　透	中澤　透
9	運動と神経のはたらき	動物の運動は筋肉や繊毛によって行われるが、それはどのような仕組みによるのだろうか。また、神経はどのようにして信号を伝えるのだろうか。動物の活動を理解する上で重要なこれらのことがらについて概説する。	高橋景一（国際基督教大学教授）	高橋景一（国際基督教大学教授）
10	感覚と行動	視覚と聴覚について脳のはたらきとの関連を紹介する。動物の行動に関しては、ミツバチの視覚行動やフクロウとコウモリの聴覚行動について考察する。さらに本能行動や刷り込みについても言及する。	青木　清（上智大学教授）	青木　清（上智大学教授）
11	ホルモン	内分泌系は神経系や免疫系と協調して、体内の環境を一定に保っている。その他にホルモンが動物の行動様式を定めたり、変態のめざましい形態変化を起こすなどの重要でおもしろいはたらきについても言及する。	川島誠一郎（全薬工業研究所長）	川島誠一郎（全薬工業研究所長）
12	植物の特徴	植物は太陽エネルギーを利用して合成した有機物を動物、菌類、細菌類などに供給し、地球上に広く発展した生態系の維持に重要な役割を果たしている。植物のもつ機能的特徴、構造的特徴と生育環境要因との関連について考える。	庄野邦彦（日本大学教授）	庄野邦彦（日本大学教授）
13	生態と環境	生物は地球上のさまざまな生態系で生活している。生態系の構造を学ぶにあたり、島の生態系に注目する。生物の水平分布や垂直分布と生態系との関連、さらに生態系におけるヒトの位置についても論ずる。	松本忠夫（東京大学教授）	松本忠夫（東京大学教授）
14	進化と生物の多様性	生物はすべて共通にＤＮＡからなる遺伝子によって、その機能と構造を規定されている。それにもかかわらず、生物に驚くほどの多様性をもたらしたのは進化である。進化の要因と生物多様化の道筋について概説する。	石川　統（東京大学教授）	石川　統（東京大学教授）
15	生物学の現状と将来	最近の生物学の発展によって、多様な生物の側面が明らかになっている。この章では将来につながる問題として４つの問題を取り上げている。生物進化には地球の進化や個体発生の検討が関連し、生物の多様性の確保には地球環境との関係を探り、バイオテクノロジーの問題点を把握し、そして宇宙生物学の可能性を明らかにするなどの諸問題があり、すべて見通しをつける必要がある。	山田晃弘 中澤　透	山田晃弘 中澤　透

＝ 人間の生物学（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：新井　康允（順天堂大学客員教授）〕
〔主任講師：近藤　洋一（群馬大学名誉教授）〕

全体のねらい

人間を客観的に見ようとする場合、われわれは自身が人間であるので、生物学的というより、ヒト固有のものとして考えがちである。ヒトを生物の一員として、医学、薬学、人類学などの範疇にとらわれず、もっと広く生物学的な立場で、できるだけ身近な問題を取り上げて考えてみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	人類の起源と進化	生物としての人間はどんな特徴を持っているのか。人間の進化の歴史で、何時、何処で、人類が誕生したのか。人類の起源と進化の問題を化石の最新の研究結果や最近の分子遺伝学の新知見を交えて学習する。	新井康允（順天堂大学客員教授） 近藤洋一（群馬大学名誉教授）	新井康允（順天堂大学客員教授） 近藤洋一（群馬大学名誉教授）
2	ヒトの身体の基本構造－細胞・組織・器官	ヒトの体はただ細胞が無秩序に集合しているのではない。細胞と細胞の産生物質が一定な配列と形態をなして集まっていて、いくつかの機能的な細胞集団－組織を作っている。ヒトの器官は（臓器）は機能に応じてこれらの組織がうまく組み合わさってできていることを理解する。	新井康允	新井康允
3	ヒトの性と生殖－生命の誕生を中心として	生殖は生物の最も基本的な機能であり、生物は生殖によって種の維持を図っている。生殖をになう生殖細胞と体細胞の違いや、ヒトの精子や卵子の出来かたの違い、そして、受精、着床、胎児の発生までの過程について理解する。	同上	同上
4	男と女の体はどのように作られるか－1	受精時の性染色体の組み合わせで、体の性は必ずしも自動的に決まるものではない。精巣ができるか、卵巣ができるかはＹ染色体上にある精巣決定遺伝子が働くかどうかによって決まる。最近、ＳＲＹという遺伝子が精巣決定遺伝子であることが判明した。その働きについて学習する。	同上	同上
5	男と女の体はどのように作られるか－2	体の性が決まるにはいくつかの関門があり、それぞれの関門に両性になるうる選択肢が用意されている。それを決定するのは精巣の２種類のホルモンである。なぜ、男子の子宮がないのかなどの問題や、行動的な性差－脳の性分化がどのようにして起こるかを学習する。	同上	同上
6	脳とニューロン－心のハードウェア	脳の構成成分である神経細胞（ニューロン）とグリア細胞の特性と基本的な働きについて学ぶ。心のハードウェアとしての脳を理解するうえで、脳の生後発生における、神経細胞の樹状突起や軸索の伸展とシナプスの増加による神経回路の複雑化の過程を理解する。	同上	同上
7	ヒトの脳－1感覚と運動の制御	ヒトの大脳皮質の機能の局在性があり、外界からの刺激情報がどのような経路を経て大脳皮質に到達し意識にのぼるか、また、大脳皮質の運動の指令がどのような経路で身体の運動を制御するのかを理解する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ヒトの脳－2 大脳皮質の進化と脳の左右差	ヒトの大脳皮質の新皮質、古皮質、原皮質の発達を動物と比較しながら、特に高次神経機能に関連のある連合野の働きについて理解し、脳の進化を考える。脳の高次機能には左右差のあるのがあり、ヒトの脳の機能的、形態的左右差の最近の知見に関して学ぶ。	新井康允	新井康允
9	免疫の役割－1 感染や障害と闘う	病気になる、あるいはその誘因があると体は治癒のための、あるいは防御のための行動を起こす。免疫反応はその一つである。障害を受けた細胞の処理、侵入した異物、微生物類の抗体による処理など生体防御の仕組みを学ぶ。	近藤洋一	近藤洋一
10	免疫の役割－2 私とあなたを見分ける－臓器移植の問題点	ヒトの体の構造や機能は遺伝子によって決められている。しかし、親からもらった遺伝子が同じでも免疫細胞には区別がある。他人の臓器は見分けられ、排除される。免疫は自他を区別する精緻な仕組みといえる。自己認識の仕組みを学び、免疫の意味を理解する。	同上	同上
11	体の調節の仕組み－1 ヒトのゲノムとバイオシグナル	ヒトのゲノム（全ＤＮＡ）には10万の遺伝子があり、体の形や細胞の基本的な機能を決める。この機能を有効利用するためには環境や体内の情報を知らせるホルモンやサイトカイン等のバイオシグナルが必要である。ゲノムとバイオシグナルについて学ぶ。	同上	同上
12	体の調節の仕組み－2 ホルモン群による成長と健康の維持	すべてのヒトの体は一個の受精卵から始まる。複雑な大人の組織を作り、成熟した体の健康を守るためには、バイオシグナルを効率よく使ってタイミングのあった調節が必要である。ホルモンやサイトカインはどのように働くのか？その仕組みを学ぶ。	同上	同上
13	調節の破壊によるヒトの病気－癌とエイズと糖尿病の生物学	癌は増殖の調節がきかなくなった自分の体の細胞集団である。エイズはウィールスによる免疫機構の破壊である。糖尿病は血糖の調節不能にある。どの様にしてこの様な破綻が起こるか、対抗する手段があるのか、生物学からみた病気の実体を学ぶ。	同上	同上
14	老化と死－最終過程の調節	老化は避けることのできない生命の最終過程と考えられている。アルツハイマー病の発生を中心に癌の多発や心身機能の衰えなどの老化現象と内分泌系、神経系、免疫系などのバイオシグナル機構の破綻の関係を学び、老化と寿命の原因を探る試みにも触れる。	同上	同上
15	自然環境と人間－環境汚染と環境ホルモン	人間が生活していくうえで自然環境との調和が大切である。人間の作った物質が環境を変化させ、それが地球上に住むヒトを含めた生物に重大な影響を与えるようになってきた。ＤＤＴ、ＰＣＢ、ダイオキシンなどのホルモンかく乱物質を１例として、この問題を考える。	新井康允	新井康允

＝生物学の歴史＝（R）

〔主任講師：横山　輝雄（南山大学教授）〕

全体のねらい

現代生物学における重要な概念である「進化」の概念が歴史的にどのように形成されてきたかを見ることを通して、人類文化全体の流れの中にそれを位置づけ、また生物学の性格が時代によってどのように変化したか、ラマルク、ダーウィン、メンデル等の代表的科学者の研究方法の特色、生命観の欧米と日本との違いについて明らかにしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生物学史における進化論	進化論は、現代生物学の中で重要な位置をしめているだけでなく、一般の人々も非常に関心をもつ領域である。それは、生命とは何かという本質的な問いにつながるものであり、そのため社会思想や宗教とも関連をもってきた。進化論の歴史を見ると、生物学全般に対する理解を深めることができる。	横山輝雄（南山大学教授）	横山輝雄（南山大学教授）
2	古代中世の生物学	古代ギリシアには、後に進化論的思考とされる考えも出ていたが、それは科学的というよりは思弁的な大胆な思索であった。古代の生物学においては、進化論的な考えは直接には見られないが、「存在の連鎖」とか「存在の階級」などの進化論にかかわる重要な概念がある。	同上	同上
3	近代の生物学	ヨーロッパにおいて近代科学が成立すると、機械論的生命観が生まれた。しかしそれは進化論を直接にはもたらさず、発生学や分類学における種概念がむしろ逆に静的定的自然観を強化した。	同上	同上
4	進化論の先駆者	18世紀には、E．ダーウィン、ビュフォン、ディドロなどの進化論の先駆者とされる人物が登場してきた。彼らの進化論は、当時の静的自然観と動的自然観の対立の中で、自然発生の可能性の問題などと結びついて展開された。	同上	同上
5	ラマルクと進化論	ラマルクにおいて進化論は、最初の体系的な展開をみた。彼の進化論は、通常「獲得形質遺伝説」として知られているが、それは彼の進化論の中心ではなく、「前進的発達傾向」が彼の理論の基本である。後に「ラマルク正義」と彼の進化論は違うものである。	同上	同上
6	ダーウィンと進化論　Ⅰ	ダーウィンは、『種の起原』によって進化論を確立した。その過程についてこれまで主にかれの『自伝』をもとにした叙述が普通であった。それに対して近年のダーウィン研究は、それと違った新たなダーウィン像を提出しつつある。	同上	同上
7	ダーウィンと進化論　Ⅱ	ダーウィン自身だけでなく、ダーウィンと同時代の状況についても、これまでの記述は、さまざまな点で訂正が必要になっている。ダーウィン説が『種の起原』出版後に科学者の中枢を占めたのは事実であるが、それは理論的説得力よりも、社会的要因によっていた。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	社会進化論	19世紀後半においては、進化論は生物進化論としてよりは、社会しんかろんとして一般に広がった。スペンサーがその代表者であり、文化進化論、宗教進化論などもあらわれた。その影響は、日本や中国にも及び、その時代の人々に大きな影響を与えた。	横山　輝雄	横山　輝雄
9	進化論と宗教	ダーウィンの進化論がキリスト教と対立し、「科学と宗教の闘争」がおこったとよく言われているが、必ずしもそう単純ではない。キリスト教の側で進化論を認めた人々が多くいたし、また進化論が必然的に宗教を否定するものでもない。	同　上	同　上
10	進化論と遺伝学	ダーウィンは自然選択説を打ち立てたが、遺伝については今日否定されている「混合遺伝」という考えをとっていた。メンデルの理論があらわれると、それは当初ダーウィンズムと対立するものと思われており、その両者の関係をどうとらえるかが問題になった。	同　上	同　上
11	進化総合説の成立	現代進化論の主流である進化総合説はダーウィンの自然選択説とメンデルの遺伝学を総合することによって成立した。それゆえもともとのダーウィンの考えと現代進化論は同じ部分だけでなく、異なった考え方をもとり入れている。	同　上	同　上
12	現代進化論の理論的諸問題	進化総合説は、第二次大戦後進化論の主流であったが、その後分子生物学や動物行動学などの知見とともに新たな展開が行われた。また断続平衡説などの議論も提出され、1970年代から再び進化論をめぐってさまざまな議論が行われるようになった。	同　上	同　上
13	社会生物学論争・創造説論争	アメリカを中心に社会生物学に関して、広い範囲の論争がおこった。社会生物学は現代における社会進化論であり、差別の正当化でという批判も出された。この論争と創造説をめぐる論争は、生物学と社会の関係を今日的にあらわにするものである。	同　上	同　上
14	日本における進化論	進化論は一方では、生物学としての各国の文化を超えた共通性をもつとともに、他方ではそれぞれの国や地域に応じた文化の中で解釈される。明治期から今日までの日本における進化論に対する態度の欧米と違う独自の性格について考える。	同　上	同　上
15	進化論史をかえりみて	進化論の展開を中心として、生物学史の流れをみてきたが、そこでは科学研究にさまざまな要因が介在し、またその成果は社会や文化に対しさまざまな影響を与えてきたことが示された。それらをふまえて、生物学史の意義を考える。	同　上	同　上

＝ 病気の成立ちと仕組み＝（R）

〔主任講師：鬼頭 昭三（兵庫大学教授）〕

全体のねらい

人生に病気はつきものである。病気についての概念とその変遷を述べると共に、健康と病気の区切りについて述べる。さらに病態と自覚症状との関係についていくつかの例をあげて説明を試みることにより、病気のメカニズムに対する理解を深めたい。病気に対するアプローチの仕方、医師と患者の関係も変わりつつある。病気の成立ちと仕組みを理解することにより、病気に立ち向かう姿勢を獲得することが大切である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	病気の概念とその変遷	かつては、病気とは自覚症状のあるものであった。現在では、かなり進行するまで自覚症状のない、それでいて予後のあるに病気が多い。人間の病気は時代と共に質的に大きく変わってきている。病気の概念の時代的な変遷について述べる。	鬼頭 昭三（兵庫大学教授）	鬼頭 昭三（兵庫大学教授）
2	病気の研究はどのようにしてなされるか	病気には様々な側面があり、それぞれの立場から研究が行われる。例えば、（1）その病気の原因を探る基礎医学的な研究。遺伝病の原因遺伝子を探る研究やその遺伝子をノックアウトして病気のモデルを作る研究など、（2）その病気を疫学的に調べる社会医学的な研究。病気の頻度や分布を知る研究など、（3）その病気の病態や治療にかかわる臨床的研究。症状発現のメカニズムの研究や最も適切な治療の選択の研究など、である。本講ではこれらの研究を具体的に例を挙げて学ぶことにする。	同上	同上
3	免疫の仕組みとその病気	免疫系は感染防御、がんの発生阻止、移植拒絶などの仕事をしており、それにはリンパ球、白血球、抗体、補体などが関与している。その欠陥があると、感染が血症化しやすくなり、がんの発生が増加する。薬剤や病気の中には免疫力を弱めるものがあり、そのような問題を起こす。一方不適切な免疫反応が生じるとアレルギーとか自己免疫病とかの病気が発生する。移植を成功させるには拒絶を起こす免疫反応を上手に抑える必要がある。	矢田 純一（東京医科歯科大学教授）	矢田 純一（東京医科歯科大学教授）
4	神経系とその病気	神経系の病気は難治である。神経細胞は障害を受けた後、突起を再び伸ばすことはあっても、喪失した細胞が再生することはない。この意味ではアルツハイマー病を予防したり、その進行を停止させる薬は将来開発される可能性があるとしても、現在ある症状を後退させる意味での治療薬というものは、将来とも理論的には存在しない。　本章では主な神経系の病気について概説しながら、その根底にある神経系そのものの特徴について述べることとする。	鬼頭昭三	鬼頭昭三
5	病気と分子生物学	近年の分子生物学の進歩は著しく、殊に遺伝子レベルでの生命現象の解明が進んでいる。臨床医学の分野にも分子生物学が広く導入され、明らかな遺伝疾患はもちろんのこと、癌や糖尿病などこれまで内的及び外的因子が複雑に関与すると考えられていた身近な疾患にも、その病態解明に対し、分子生物学的アプローチがなされている。又、病気の診断にも応用されているし、更に、遺伝子工学的手法に　より生産されている薬物もある。本章では、これらの医学・医療面への分子生物学の寄与について述べる。	三好 理絵（放送大学非常勤講師）	三好 理絵（放送大学非常勤講師）
6	症状が語る病態(1)	発熱と解熱の仕組み まず体温の恒常性はどのようにして保たれるのか。体温の産生と放散はどのように行われ、体温調節中枢はどのようなしくみでこの両者のバランスを保つのか。次に発熱の原因、発熱物質、発熱の型、発熱の功罪について解説し、解熱剤の作用点、発熱対策を考える。	本間 日臣（元放送大学教授）	本間 日臣（元放送大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	症状が語る病態(2)	息切れ、呼吸困執、チアノーゼ　これらの症状が発生する仕組みを理解するためにまず肺の機能解剖学、すなわち気管支・肺の構造と呼吸機能の概要を解説する。次で運動時の息切れ、老年期の息切れ、病気のための息切れのおこり方を考える。次に酸素の運搬を担当する赤血球ヘモグロビンの動態から、酸素不足状態を示すチアノーゼのおこる仕組みを説明する。	本間日臣	本間日臣
8	病気の原因	病気はその原因から、感染、欠陥障害、腫瘍、変性、代謝異常、中毒、免疫異常、奇形、機能性障害その他に分けられることも可能である。しかし、外因と内因は相互に影響し合うし、最も根本的な原因が不明な疾患も多い。例えば、感染や中毒などでは外因がより重要であるが、変性や先天性代謝異常では根本的な原因が不明であり、血管障害や腫瘍では内因、外因いずれもが、大きく影響する。最近は分子遺伝学や分子生物学的レベルからのアプローチも行われつつある。異常の点を総括して病気の原因について考えてみたい。	平井俊策（都立神経病院院長）	平井俊策（都立神経病院院長）
9	病気の診断	病気の診断というと一般には病名を同定すること、つまり疾病診断を指しているが、より広義には病変部位の診断、障害の程度の診断などが含まれる。特に部位診断は神経疾患の診断上、疾病診断と並んで大切である。診断は一般に、問診、診察、検査の結果を総合してつけられる。最近は検査の技術が飛躍的に進歩し、例えばＸ線ＣＴ、ＭＲＩ、ＰＥＴなどの画像診断や血液その他を用いる生化学的検査などの比重が大きくなっている。しかし、やはり効率的な検査と正しい診断の基礎として従来からの問診や患者さんを全体としてよく観察するための理学的診察の重要性は変わらない。最近の新しい検査法をも分かり易く解説しつつ、診断へのアプローチの方法を述べる。	同上	同上
10	病気の治療	病気の治療には、生活指導をも含めた一般療法、食事療法、薬物療法、手術療法、放射線療、物理療法ならびに一部これと重複するリハビリテーション、精神療法その他さまざまなものがある。生活指導や食事療法は治療法であると共に、病気の予防にとっても基本となるものである。リハビリテーションは一般の治療とは別に扱われる人もある。それによって生じた障害を対象としているからである。しかし、広義には治療に含まれる。最近はＱＯＬを重視した治療が行われる傾向にあるが、新しい方法によるアプローチをも含めた治療という問題を概説する。	同上	同上
11	治る病気と治りにくい病気	病気を治療の立場からみると、自然経過の間に治癒する病気、積極的な医学的治療を施すことによって治る病気（この中に痕跡を残すことなく治る病気と、何らかの後遺症害や欠損を残して治る病気が含まれる）、難治性の病気に分けることが出来る。近年、治療研究の焦点となっているのは、難治性の癌や内因性の神経疾患であり、この点を中心に述べる。	鬼頭昭三	鬼頭昭三
12	薬はどのようにして開発されるか	動物実験で種々の投与量の作用、各臓器に及ぼす影響、致死量などを検討。人における適正量を推測。この量の前後の量を健常上に投与し安全性を確かめる（第Ⅰ相）。ついで、適切と思われる量を患者に投与し、効果と安全性から適切な投与量を決定する（第Ⅱ相）。患者を対象とし適正と決められた投与量で既製の同種同効の薬剤の効果、安全を二重盲検法で調査し、有用性を確かめ、厚生省に提出、調査会の審査をパスすれば市販される。最後の調査（第Ⅲ相）はプラセボーと比較することがある。	大友英一（社会福祉法人浴風会病院長）	大友英一（社会福祉法人浴風会病院長）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
13	病気の分布とその将来像	この課目では病気の成立機序を種々の角度から総論時的にのべているが、「病気の分布とその将来像」の章だけが集団レベルの視点、すなわち病気をその発生母体となる集団との関連でとらえている。 このような分野は「疫学」とよばれ、近年、医学研究だけでなく、病気への対策とその評価の上で役割が増している。 そこで、改訂版ではこのような点に一層ふかく配慮し、資料を新しくして書き改める予定である。	近藤喜代太郎（放送大学教授）	近藤喜代太郎（放送大学教授）
14	病気と死	生物が有性生殖という遺伝子survivalの手段を獲得したとき、それと引き換えに死という宿命を背負った。病気は死につながる現象であることは言うまでもないが、今日の先進国では、大多数の人々にとって死因となるのは、いわゆる成人病である。 成人病の基本的原因は老化であり、老化それ自身、すくなくとも一次老化といわれるものは遺伝子によってプログラムされている。 老化、病気、死という避けることの出来ない基本的生物学的現象に対して、個人は、そして医学は何かできるのか？について考えることとする。	鬼頭昭三	鬼頭昭三
15	まとめ	病気そのものがかわりつつある。医学研究も日進月歩である一方、医療社会は社会的経済的要因の影響を大きく受ける。患者として病気になった時の対処の方法、医療を施す側の問題について、その将来のあるべき姿を論じてまとめとする。	同上	同上

＝ 地球とその歴史（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：濱田　隆士（放送大学教授）〕

全体のねらい

宇宙全体がら見れば、ゴミの様な微小な存在である地球。しかし、それは人間を含む生き物全てにとってかけがえのない生存の場を提供してくれる、巨大かつ偉大な存在である。この母なる地球は、いま科学の眼でどのように捉えられ、理解されているのか、そしてヒトはその地球にどのように関わっているのか。構成・歴史・現況を概観する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	宇宙の中の地球	地球は太陽系の中で水をたたえた唯一の惑星である。その太陽系は宇宙の中の銀河系に属する。日常われわれが意識する地球は巨大なスケールを持つものであるが、宇宙の中にあっては微小な存在である。このような宇宙の中における地球の位置づけを認識する。	濱田隆士（放送大学教授）	濱田隆士（放送大学教授）
2	地球の形成	太陽系の一惑星として誕生した地球の最も早い時期に関する諸説を紹介し、他の惑星との関連も、比較惑星学の立場から概観する。地球のもつ美しい成層構造の成立、大陸と海洋の出現など地球のメガフィーチュアをとらえ、海洋中心の水圏、大気圏等にも言及する。	同上	同上
3	地球観の移り変わり	地球に関する人間の関心の歴史をたどりながら、さまざまな地球観の成立とその背景を探る。他の天体の動きと地球の運動についての論争だけでなく、大地そのもの、海そのものの成り立ちや歴史の解釈、地球の年齢に関する推定の移り変わりなどにもふれる。	同上	同上
4	動く大地の認識	生活の場としての地球の大地が、あるいはそれを取り囲む海洋が、決して成立以来やすむことなく変動してきたことが、研究史を通じて明らかにされる。目で直接確認できない地中のできごとや、大過去での経過を探る地球科学の手法や考え方を示す。	同上	同上
5	地表の形態	地球に水と大気があり、太陽のまわりを公転しつつ、自転する球体であるために、表層部ではさまざまな営力による変形作用が進む。侵食と堆積により地形が形成され、地層が作られる。そして、地形は海底地形を含め、ダイナミックに時代変遷をとげてきたことを示す。	同上	同上
6	地層と時間	地球の歴史を数値時間で表現したいとする科学の願望がいかにして改良され、精度を上げてきたかを通観する。重力場における物質の配列－地層・岩層の形成、鉱物に含まれる放射性同位体が示す過去の時間の測定法をとりあげ、地球史編年の原理を理解する。	同上	同上
7	地球通史	46億年という長い地球史において、いくつかのキーエポックあるいはキーイベントをとり上げることにより、大局を通観する。地殻変動や火山活動、変性作用等のみならず、生命との相互作用と環境変遷を含め、地球カレンダーをつくり上げてみる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	生命の発展	水の惑星の特異な現象とされる、地球型生命の発現とその後の発展に焦点を当てて地球史を眺めてみる。地球生命は宇宙生命とどのような関わりがあるかにもふれる。進化という不可逆事象の結果が、化石という証拠に残されながら地球史を刻んでいく様をみる。	濱田隆士	濱田隆士
9	環境変遷史	地殻変動が不断に起こり、生命がその中で進化をとげていく以上、その相互作用系としての地球環境もまたさまざまな変容を遂げてきた。過去の地球環境の実態と、そこから推定される環境変動要因を、地球外部からの作用をも含めて考えてみる。	同上	同上
10	森林の歴史	生命史に大きな役割を果たしたのは、云うまでもなく植物界の核をなす葉緑素のもつ化学力である。地史にみる森林の変遷は、したがって地球大気の変遷史でもあり、そこに養われる動物界とも不可分の関係を持つ。恐竜の歴史もそこに位置づけられる。	同上	同上
11	サンゴ礁の歴史	葉緑体をもつ褐藻類を体内に共生させる造礁性サンゴ類は、まさに海中の森林に例えられる。そのうえ、CO_2を$CaCO_3$の形で、“岩石化”していくなど、サンゴ礁が地球史に占める意義を歴史的ならびに環境科学的な視点から明らかにしてみる。	同上	同上
12	文明と都市化	地球上に人類が誕生したのは、長い地球史のごく最近に過ぎない。その人類は、知的進化の先端に位置づけられ、二足歩行と脳の大化を背景に文明化を進めてきた。この作用が地球表層部に与えた地形的要素として都市化を眺めることは意義深い。	同上	同上
13	人為の役割	ヒト属が、際限のない欲望を満足させようとする生物進化の側面を持ってしまった以上、そこに、人類の地球システムに対する介入・干渉が始まった。人為の果たしてきた地球自然へのインパクト役は、地球型生命の中では特異なものであり、ヒトの生態的反地球型性格が見える。	同上	同上
14	地球環境問題	他意はなかったにせよ、人類の歩んできた文明化の道は、結果として、地球自然に対して大きな歪を与えることになった。CO_2増加と地球温暖化をはじめ、地球環境問題としてとり上げられる幾つかの事態を、地球史とヒトの特異性との接点として捉えて学んでみる。	同上	同上
15	ブループラネットの未来	地球環境問題を解決する力がなく、ヒトも地球も滅びる、とする俗説を超え、地球進化史と生物進化史の示す1つの流れを地球科学の立場から捉えてみる。ヒト社会の成り行きという近未来のみならず、プレート運動の結果おこる日本列島の形状変化まで考えてみる。	同上	同上

＝ 宇宙とその歴史（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：杉本 大一郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

天体と宇宙の構成および進化の歴史を論じる。個々の現象や天体の詳細よりも、宇宙や天体に関する概念、宇宙の見かたがどのように展開されているかについて、大局的な理解と描像を得ることを目的とする。宇宙認識の進んできた歴史的経過に従うよりも、現在の知識から見て再解釈し、科学として系統的に理解できる体系にまとめる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	コペルニクス的転回	それまでの地球中心説が太陽中心説に移って何が変わったのか。近代科学の始まりとどういう関係にあるのかを論じる。その後、ニュートンによる万有引力の法則の発見によって、天上の法則と地上の運動法則は統一された。	杉本大一郎（放送大学教授）	杉本大一郎（放送大学教授）
2	宇宙の物質	分光学を使った天体の観測によって、天体を構成する元素が同定され、地上の物質と天上の物質は同じ物であることが分かるようになった。その後、量子力学によって、原子の世界の成り立ちが解明され、天上と地上の物質は統一された。	同上	同上
3	星のエネルギー	放射性元素によって太陽系の年齢が 10 億年の桁に及ぶことが分かり、その間太陽を光らせ続けるものは原子核エネルギーしかないということになった。その後、恒星内部における原子核反応が解明され、恒星進化論が展開された。	同上	同上
4	物質世界の歴史	恒星内部での原子核反応は、同時に元素を合成する過程でもある。その解析によって、宇宙における元素の起源が恒星進化と関連づけて解明された。ただしヘリウムは膨張宇宙初期に合成されたものであることがその後に解明された。	同上	同上
5	銀河の世界	星や星団より上の階層として銀河がある。それは千億個ほどの星とガスからなる。直接には観測されない暗黒物質も銀河を取り巻いていると考えられる。宇宙には千億個ほどの銀河がある。それらは宇宙の大構造を作っている。	同上	同上
6	活動する銀河	銀河の中には激しく活動しているものがあり、電波などによって観測される。クェーサーなどの活動性を支えているのは、中心核にある巨大ブラックホールである。銀河どうしの衝突も星の爆発的形成に導く。その様子は赤外線で観測される。	同上	同上
7	世界の中心	コペルニクス以前は地球が世界の中心と考えられた。その後観測範囲が広がるにつれて、世界の中心は太陽、太陽系、銀河中心となり、地球の位置は相対化されていった。宇宙膨張が見出され、宇宙はどこにも中心がないということになつた。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	宇宙の果て	18世紀にオルバースは、宇宙に果てがないとすると夜空は無限に明るくなるはずだが現実はそうなっていないという、パラドックスを指摘した。この問題の解決には、一般相対性理論による宇宙論の展開が必要であった。	杉本大一郎	杉本大一郎
9	宇宙と相対論	相対性理論はしばしば、その展開の歴史を軸として語られるが、ここでは相対論の物理的意味を語り、概念構成として不思議だと思われやすいが実はそうではないのだということを説明する。こうして、宇宙論との関連を明確にする。	同上	同上
10	宇宙のはじまり	相対論的宇宙論は、宇宙が高温・高密度の状態からビッグバンをとおして始まったと言う。その様子は理論的に追求されると同時に、観測をとおして得られる証拠が求められる。こうして実証科学の対象になる。	同上	同上
11	宇宙の進化	宇宙が膨張するにつれて銀河等の構造が形成され、現在見るような秩序立った宇宙へ進化した。一方エントロピー増大の法則によると、系は熱平衡状態という熱的死の状態へ向かう。宇宙の場合について両者の関係はどうなっているかを論じる。	同上	同上
12	ハワイの天文台群	ハワイ島マウナ・ケア山頂には、各国の天文台がひしめいている。天体の、特に赤外線による観測条件が良いからである。そこでは、新しい技術が、望遠鏡の構造体にも、光学にもふんだんに開発され、使われている。その様子をロケによって紹介する。	同上	同上
13	すばる望遠鏡	日本の国立天文台は、マウナ・ケア山頂に、単一鏡では世界最大の光学・赤外線望遠鏡を建設した。1999年には試験観測から本格的観測へ移行する段階にあったが、その時すでに、新しい宇宙の観測を開き始めていた。その様子をロケによって紹介する。	同上	同上
14	電波天文学と高エネルギー天文学	銀河や星を電波、X線、ニュートリノなどで観測すると、観測バンドに対応して、それぞれ異なる側面の情報を得ることが出来る。それらは、低温ガス雲内の分子から天体の高エネルギー現象、恒星内部の直接観測に及ぶ。ロケをおりまぜて紹介する。	同上	同上
15	天文学の理論	まとめとして、天体や宇宙を研究する理論とその構成、その特徴、その意義、他の学問分野との関係などについて考察する。	同上	同上

＝ 宇宙像の変遷と人間（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：金子　務（大阪府立大学名誉教授）〕

全体のねらい

古代から現代に至るまで宇宙の姿を人々がどう捉えどう想像しどう観測してきたかを考えていく。とりわけ人間の逞しい想像力と鍛えぬいた推理力が、天上界と地上界をどうつないで宇宙像を確立してきたを洋の東西にわたり見ていく。日本の場合もつねに念頭にいれて、なるべく現地の史跡等の映像を駆使して検討する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	落下文明と古代の星座	人間が天上から落ちたというイメージは東西に共通する。地に蠢く人間が上昇へという反重力の技術を開発し、天空への思慕と想像力から、数々の神話や星座を思い描いてきた。混沌・複雑な宇宙の事物に秩序を与える試みである。	金子　務（大阪府立大学名誉教授）	金子　務（大阪府立大学名誉教授）
2	時間計測と暦法の問題	自然や宇宙のリズムや周期を捉え、その規則性と特異性を見つけて自然環境を予想し、自分の立つ世界を確認するために暦が発明される。東西における古来からの暦と天地にまたがる時刻法を調べ、時間認識と文明の高まりを見る。	同　上	同　上
3	空間認識と地図の発展	この地球や太陽を知るには、まず正確な空間認識と測量技術が必要になる。星図と対応して地上の航海図が大航海時代の展開には不可欠であった。地図を得るのに、天地にわたる緯度と経度の決定や投影術の技法が追求工夫された。	同　上	同　上
4	プラトンの問い「現象を救え」	火星等の惑星運動の不規則現象を神の図形の円運動からどう説明するか、このプラトンの問いから数学的天文モデルが生まれる。幾何学的なプラトン宇宙創生論や導円・周転円理論は、古代人による神々への回答と挑戦でもあった。	同　上	同　上
5	二重コスモス像の世界	アリストテレス自然学とキリスト教神学に結びついたプトレマイオス宇宙モデルは、月を第一天とする天上界と地球を含む月下界からなる。ダンテの『新曲』にもある像だ。マクロ・ミクロ両コスモスや錬金術の問題も考えていく。	同　上	同　上
6	コペルニクス革命は革命か	『天球の回転』（1543）がもたらした意義とその受容を見ながら、科学革命の意味と科学理論の優劣を考える。なぜ目視観測の第一人者ティコが別の天文体系を立てたのかを検討する。南蛮文化以来の日本の宇宙観の形成も考える。	同　上	同　上
7	ガリレオの望遠鏡と宗教裁判	振り子等から落下運動法則を確定したガリレオは、自作の望遠鏡を天上界に向け、木星の４衛星・金星の相変化・太陽黒点と自転等を発見する。『天文対話』から生じた真理をめぐるガリレオ裁判の意味と観測手段の革新性を問う。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ケプラーが聴いた天上の音楽	楕円軌道の発見等のケプラー３法則の成立を見てから、その宇宙モデルにおける新プラトン主義の影響を考える。ケプラーはティコのデータを駆使した理論家で新型望遠鏡も考案、宇宙の調和を天上の音楽と捉えた神秘家でもある。	金子務	金子務
9	ニュートンのリンゴと引力	反射望遠鏡で注目のニュートンは光学実験と並行して万有引力に想到する。リンゴの落下体験の意味を考えてから運動の３法則の成立を調べ、重力をめぐるフックとの先取権問題、錬金術趣向と神学への傾倒など意外な側面を見る。	同上	同上
10	無限宇宙複数世界論の勝利	この世界以外に別世界があるか否か、古代ギリシャの原子論はそれを肯定し、アリストテレスは否定した。18世紀にかけて宇宙は無限で複数世界あるとの見解がブルーノ、フォントネルらの支持で確立する。宇宙人論議が展開する。	同上	同上
11	宇宙の熱死を示すか「時の矢」	19世紀半ばに登場した熱力学は宇宙の熱機関モデルとその一方向への変化を示唆した。物理学に進化論がドッキングする始まり。エネルギーとエントロピー概念の意義を見ながら、人々を震わせた太陽や宇宙の熱死の恐怖を考える。	同上	同上
12	光の宇宙とアインシュタイン	世紀末の混沌の中から、20世紀になって光をめぐって相対性理論と量子力学が誕生する。非ユークリッド幾何学と結びついたアインシュタインの重力理論がもたらす解釈論議が、宇宙は静的か動的かといった根本課題に迫っていく。	同上	同上
13	ハッブルの後退する宇宙	パロマー山の巨大な光学望遠鏡を駆使したハッブルはついに、遠方の銀河が遠ざかることから、宇宙が膨張しつつあるかとを発見する。膨張宇宙論の誕生である。オルバース問題を解決しそれを支持した研究者たちと傍証データを見る。	同上	同上
14	宇宙探査とＥＴ問題	第二次大戦後に登場した宇宙ロケットと電波望遠鏡は、宇宙の直接探査を飛躍的に高めた。アポロ計画の有人月着陸・ボイジャーの太陽系探査等からは、ＥＴの存在を示すものはまだ見つかっていない。ＥＴの探査問題を検討する。	同上	同上
15	ビックバン後の最新宇宙論	量子論を基礎にした量子宇宙論の登場で、宇宙の創成と進化が論じられるようになった。ブラックホールからホーキング宇宙、インフレーション理論に至る現代宇宙論の科学的思想的諸問題を、研究者等の素顔もあわせて見ていく。	同上	同上

＝ 科学実験法 ＝（TV）

〔主任講師：兵藤 申一（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

自然科学の特徴である実験や観察について、その意義や視点、基本的な手法・技術・考え方・実験にまつわる注意事項・約束事項などを、なるべく事例に即しながら平易に説明する。物理学的な実験が主に扱われるが、化学実験や生物学的観察などが対象になっている部分もある。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	実験とはなにか	実験の前には予測が必要。再現性の問題。単純化分析と総合。定性と定量。	兵藤申一（東京大学名誉教授）	兵藤申一（東京大学名誉教授）
2	観察と整理	観察の大切さ。整理・分類・体系化。生物の分類。周期律の発見。	岡本 尚（横浜市立大学名誉教授） 平川 暁子（放送大学教授） 天野 誠（千葉県立中央博物館学芸研究員）	
3	単位と標準	量で表されるものと表せないもの。単位の統一。国際単位系。SI関連事項。化学てんびんの扱い方。質量標準と精密測定。測定関連用語。	兵藤申一	兵藤申一
4	大づかみな把握	自然科学者とコンセプト。グラフの描き方。対数方眼紙の使い方。有効数字。次元解析。	同上	同上
5	実験条件の整え方－物理的条件	実験条件の選び方や測定環境。具体例。低温の実現。高温の実現。伝熱や熱絶縁。真空排気。シールディング。	酒井 明（京都大学教授）	酒井 明（京都大学教授）
6	実験条件の整え方－化学的条件	海水から塩化ナトリウムを採取する計画。結合質量による原子量の決定。主成分の定量。不純物の定量。水の精製。実験の過程での汚染。不純物のタイプ。	石森達二郎（立教大学名誉教授）	石森達二郎（立教大学名誉教授）
7	測定系の構成(1)	熱膨張計。測定計の基本要素。検出と変換。直動変換。電位差計。変調変換。参照と刺激。信号の性質と信号の処理。指示と記録。	兵藤申一	兵藤申一

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	測定の構成(2)	生物機能の電子計測。差動変圧器を利用した成長計。検量線の作成。実験試料と計測への準備。	岡本　尚	岡本　尚
9	エレクトロニクスの活用	アナログ計測とデジタル計測の利点。デジタル信号の規則。アナログーデジタル変遷。コンピュータと計測システムの接続。ＰＩＤ制御。	酒井　明	酒井　明
10	危険の防止	整頓と準備の必要性。危険の大別。電気・高温・低温・高圧。ガラスについて。危険な物質。実験室からの廃棄物。	石森達二郎	石森達二郎
11	静的な現象の測定	適合計器の選択。データへの余分な寄与。ドリフト。分解能。	酒井　明	酒井　明
12	動的な現象の測定(1)	繰り返しの現象の基本。繰り返しの現象の測定。交流信号の検出。	同上	同上
13	動的な現象の測定(2)	非定常的な現象。単発現象の信号。単発現象の信号の計測。高速度写真。トリガー信号。	同上	同上
14	統計現象	ブラウン運動。ポアッソン分布。熱雑音とナイキストの定理。ゆらぎの積極的意義。	兵藤申一	兵藤申一
15	報告と発表	実験のまとめ。序論の心得。巨視型と微視型。原理の記述。パラグラフ。口頭発表の注意。	同上	同上

＝ 教育心理学通論（’０１）＝（R）

〔主任講師：永野　重史（放送大学教授）〕

全体のねらい

「教える」とはどういうことなのか、「学ぶ」とはどういうことなのか、という問題を心理学的に解きほぐして、問題の考え方の歴史や、理論のよりどころとなっている実証的な研究との関係を平易に説明することによって、術語の丸暗記で済ますことなく、育児や学校教育や社会教育の様々な問題を批判的に考えられる力を養う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	教育心理学とは何か	学校教育の心理学としての教育心理学の意義と歴史。常識的教育論と教育心理学とはどのように違うか。教育心理学のどういうところが信頼出来るのか。教育心理学は教育実践の役に立つのか。生涯学習時代における教育心理学の新しい課題は何か。	永野　重史（放送大学教授）	永野　重史（放送大学教授）
2	教育を考えるときの二つの立場	精神測定論的立場（客観的に測定できる諸能力を形成することが教育だと考える立場）と、発達論的立場（子供の発達を援助することが教育だと考える立場）の違い。行動主義的学習心理学と発達心理学の役割。行動目標の書き表し方における二つの立場の違い。	同　上	同　上
3	学習の心理学(1)	行動主義の学習心理学。外部から観察出来ることを研究するのが科学だと考えるところから生まれた行動主義。ねずみの訓練から見つかった学習原理。ソーンダイクの効果の法則とは何か。応用としてのプログラム学習や行動修正の技法とその問題点。	同　上	同　上
4	学習の心理学(2)	行動の変容が学習なのではなくて、ものの見方の変容が学習なのだとみる認知主義の学習心理学。歴史；ゲシュタルト心理学と構成主義の認識観。行動主義の学習理論と認知主義の学習理論における「誤り」の見方の違い。学習において「誤り」は無価値か。	同　上	同　上
5	発達の心理学(1)	発達心理学の歴史。年齢による発達の記述と学習因論・成熟要因論。どちらも子どもの主体性を無視。子どもの主体性に注目するピアジェの発達段階論の出現。ピアジェ理論の特徴。発達は普遍的な現象か。教育を考えるのに必要な文化と発達との関係。	田島　信元（東京外国語大学教授）	田島　信元（東京外国語大学教授）
6	発達の心理学(2)	発達における文化的、環境的要因を重視するヴィゴツキーとバフチンの発達理論。「発達の最近接領域という概念の教育的意味」（援助があるときの能力と独力でするときの能力）。大人との社会的交渉と社会的言語の役割。生涯学習と生涯発達の可能性。	同　上	同　上
7	動機づけの心理学	学習の意欲とは何か。動機づけの機能。快楽主義の思想。ホメオスタシスによる説明から知的要因の重視へ。外発的動機づけと内発的動機づけの違い。達成動機の測定方法と理論。期待一価値理論。ヒューマニスティックな心理学の立場。	永野重史	永野重史

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	能力観と学習意欲	学習者が、実体としての能力を考えているか発達する能力を考えているかの違いと学習意欲。挫折感、無力感などとの関係。自分が出来事の原因であるという見方と意欲。神経症的な生き方の問題点。「やる気を育てる教室」の実践。	永野重史	永野重史
9	人間観と教育(1)	人間は理性的動物であるか。人間は理性的動物であるという人間観によって学習者の能動性や自発性はかえって軽視されて、教師は知識や技能を教え込もうとするようになる。基礎的学習内容とは何か。学問の入門的知識から順に系統的に教えることは可能か。	同上	同上
10	人間観と教育(2)	人間の理性はきわめて限られているという人間観に関する証拠の数々。人工知能研究でわかったと人間の理性の限界。個人の理性か集団の理性か；限られた理性という人間観をとることによって、教えるということについての考え方はどう変わるか。	同上	同上
11	教育評価とは何か	学習者の成績を決めることだけが教育評価なのではない。教育をめぐる情報の収集と利用が教育評価である。指導の評価やカリキュラムの評価も必要。状況で変わる能力を評価できるか。いわゆる偏差値をめぐる諸問題。	同上	同上
12	記憶の心理学と教育	「単なる記憶」などと言ってもよいのか。知的活動の一側面としての記憶。思考と記憶とをはっきりと区別することがむずかしい。「記憶力」は、学習のための活動、学習者の知識態度、教材の構造と表現、評価のための課題などの諸条件で変わる（四面体モデル）。	同上	同上
13	知能と創造性の心理学	ビネーとゴールトンの知能検査、その教育への影響。知能指数で学力が予測できるか。風変わりな考えをすることを創造性とみた検査の欠点。多面的にとらえられるようになった知能。パーソナリティーや思考のスタイルとしてとらえられた創造性。	同上	同上
14	道徳性の心理学と教育	子どもはどのような点で道徳的か。道徳性の発達は多面的にみる必要がある。知的側面を重視するピアジェとコールバーグの道徳性発達論。道徳性の文化比較（性差）。道徳性の発達をうながす教育。	岸明子（順天堂医療短期大学教授）	岸明子（順天堂医療短期大学教授）
15	様々な学習指導の心理学的意味づけ	機械的学習と意味のある学習。発見学習と受容学習。意味のある受容学習における知識の再構成。能力心理学の思想と知識形成論。形式陶冶対実質陶冶論争と心理学的研究。学習の転移はどの程度まで可能か。	永野重史	永野重史

＝ 現代アメリカ思想（’０１）＝（R）

〔主任講師：魚津　郁夫（熊本大学名誉教授）〕

全体のねらい

現代アメリカ人の実際的な物の考え方の根底にある思想に光をあてる。とくに、どんな思想もそれにもとづいて行動した結果によってその意味や良否を判定するといった姿勢をとる、現代アメリカの代表的な哲学思想、プラグマティズムの展開が中心となる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代アメリカ思想の背景	現代アメリカ思想の背景として独立宣言の思想を検討し、さらに「知的独立宣言」を表明したと言われるエマソンの思想やソローの活動を明らかにする。また移民によって開拓された国の「人種のオーケストラ」とも言うべき文化的多元主義の背景をさぐる。	魚津　郁夫（熊本大学名誉教授）	魚津　郁夫（熊本大学名誉教授）
2	プラグマティズムの登場	自然科学の発展にともなう決定論的な思想と、人間の自主性をもとめる思想の対立からくる「十九世紀末の悪夢」の一例を、マーク・トウェインの小説「人間とは何か」に見る。こうした悪夢に立ちむかう思想としてジェイムズのプラグマティズムが登場する。	同　上	同　上
3	パースの「探究」と真理	ジェイムズによって全世界にひろめられたプラグマティズムの原型は、パースの「プラグマティック・マクシム」である。ここではパースの主張する「探究」について概観し、真理とは何か、実在とは何か、を明らかにする。	同　上	同　上
4	パースと記号論	あらゆる思想は記号によって媒介されたものであり、直接的な直観による認識はありえないとする、パースの基本的な考え方と、そこから展開された先駆的な記号論を検討する。	同　上	同　上
5	パースの「アブダクション」と可謬主義	推論には演繹（ディダクション）と帰納（インダクション）の他に、アブダクションがあることをパースは指摘した。アブダクションによって探究は進展するが、そこにはつねに誤謬の可能性がつきまとう。	同　上	同　上
6	ジェイムズと真理	ジェイムズは、パースのプラグマティック・マクシムに独自の解釈を加えて真理論を展開した。彼の企ては、科学的世界観と宗教的信条の両立をはかるところにある。	同　上	同　上
7	ジェイムズと宗教	宗教とは、孤独のなかにある個々の人間が、自分が神と思うものとかかわっていることを自覚したときの、その経験である、とジェイムズは言う。こうした立場からジェイムズによって記述された様々な宗教のありかたを検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ジェイムズの「純粋経験」と多元論	経験のもっとも基本的な形は、主観と客観が区別されていない「純粋経験」である。それはいわば心と物の交点である。こうした見解は西田哲学につよい影響をあたえた。	魚津　郁夫	魚津　郁夫
9	ミードの「社会的行動主義」と言語論	人間の意識はコミュニケーションという社会的行動のなかからうまれる。したがって社会的行動主義は、観察可能な社会的行動から、個人の内面的な意識を解明することを試みる。さらにミードはここから独自の言語論を展開した。	同　上	同　上
10	ミードと自我論	自分にたいする他人の態度や役割を自分のなかにとりいれることによって自我が形成される、という「役割取得説」にもとづく独自な自我論の展開。	同　上	同　上
11	デューイの「道具主義」と教育論	思想や観念の意味をその結果によって判定するパース以来のプラグマティズムの流れのなかで、思想を問題解決のための道具と考える、デューイの「道具主義」とその展開である教育論。	同　上	同　上
12	デューイと真理と宗教	デューイは論理学を「探究の理論」としてとらえる。探究はすべて問題解決のための活動であり、四つの段階をへて「保証された言明可能性」すなわち真理にいたる。さらに、彼の立場から展開された宗教論。	同　上	同　上
13	デューイと善と美	デューイによれば、善とは究極の固定した目標ではなく、それへとむかう過程にほかならない。また美とは、完結した経験のもつ特徴、さらに純化し強化したものである。	同　上	同　上
14	モリスの思想とクワインの思想	モリスはパースの影響のもとに、記号過程の研究をおこない、また仏教も視野に入れた独自の宗教思想を展開した。クワインはネオ・プラグマティズムの立場から、二十世紀後半の分析哲学に深刻な影響をあたえた。	同　上	同　上
15	ローティーのプラグマティズム――全体をふりかえって	ローティーは、心を、実在をうつす鏡と考える伝統的哲学を否定する。この立場では、哲学は文学と区別できず、科学でさえ文学のひとつのジャンルとなる。本章では、ローティーの主張を批判しつつ、プラグマティズムの現代的意義を考える。	同　上	同　上

＝ 倫理思想の源流（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：関根　清三（東京大学教授）〕

全体のねらい

西洋の倫理思想史の様々な潮流がそこに発する、ギリシアとヘブライの２つの源流に遡って、基本テクストを読解し、多様な思索に学びつつ、そこで何が問題となり、それが倫理学的にどのような意味を持つのか、について考察する。そのことを通して特に、愛・正義・超越・犠牲等、現代人の思索に挑む問題系の射程を見定め、特に「驚き」を基底に据えた倫理学の可能性について、何某かの展望を開くことを目指したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序論 ―「驚き」―	プラトン、アリストテレスが哲学の始めに「驚き」があることを指摘しているが、実践哲学としてのギリシアの倫理学もここに起点を持つだろうことを、様々なテクストを引きつつ、確認する。ヘブライの宗教倫理においても、「驚き」が鍵語となることについては、現代のユダヤ教哲学者ヘッシェルが、正当にも注目しているが、これについても、本論を先取りして、主要テクストを参照する。	関根　清三（東京大学教授）	関根　清三（東京大学教授）
	第Ⅰ部　古典ギリシアの実践哲学①ソクラテス前の哲学者たち（１）―イオニア学派	紀元前６世紀、ギリシアの植民地イオニアに、澎湃として出現した哲学者たち、タレス、アナクシマンドロス、アナクシメネスは、万物の無限な原理を探り、さらにはクセノファネスはその原理を擬人神観的に捉えることを批判し、ヘラクレイトスは万物を操る叡慮について思索した。それらは哲学の嚆矢であると同時に、超越への驚きに基づく知的探求を善とする倫理学の誕生を告げるものである。	同　上	同　上
2	② ソクラテス前の哲学者たち（２）―イタリア・トラキア学派	前5世紀のイタリア・トラキア学派では、憎しみが惹起する争いによる罪の意識とそれを償おうとする意志、更には愛の調和への復帰を語ったエンペドクレス、上機嫌や中庸の徳、さらには畏怖の重要性を指摘したデモクリトスが、倫理思想の上からは注目される。しかし両者に影響を与え、現代のハイデッガーに至るまで広汎な影響力を有する、パルメニデスの独創的な存在論も刮目に値する。	同　上	同　上
3	③ ソクラテスとプラトン（１）―ソクラテスからプラトンへ	プラトンの初期対話篇の主人公であるソクラテスと、中期・後期対話篇のプラトン自身の思想を分けて、それぞれを比較する。徳が幸福のために十分と考え、徳を知と同一視し、また霊魂不滅を信じたソクラテスに対し、徳は幸福に至る手段ではなく、また知識以上のものと考えたプラトンは、独自の正義論・愛論を展開する。また彼は霊魂不滅の信仰を論証しようと試みた。両者の比較を通して、倫理的な問答の真髄を探る。	同　上	同　上
4	④ ソクラテスとプラトン（２）―プラトンを中心に	プラトンにおける徳と正義、愛と快楽、霊魂とイデアといった中心問題を、中期の『国家』篇の読解を通し、適宜、中期の『パイドン』『パイドロス』『メノン』『饗宴』、後期の『テアイテトス』『フィレボス』その他の対話篇も参照しつつ、論ずる。	同　上	同　上
5	⑤ アリストテレス（１）―幸福と倫理的卓越性	以下3回にわたって、アリストテレス『ニコマコス倫理学』を読み解きつつ、ギリシア倫理学の到達点を見定める。先ずこの書の位置付けと構成を押さえた上で、プラトン倫理学との相違点を整理する。特にアリストテレスの視点からするプラトンのイデア論批判の妥当性を検討する。次に、善と幸福とは何か、から説き始め、最高善の指摘をもって結ばれる、『ニコマコス倫理学』全体の結構を俯瞰する。続いて倫理的卓越性（徳）論を整理する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	⑥ アリストテレス（2）－中庸と徳論	徳論の中心である中庸論とそれへの後世の批判、それらの評価について論じた後、勇気、正義、愛の三つの徳に絞って、その意味について考える。配分的・矯正的・相補的正義の解釈、自愛は総じて非か否かをめぐる議論等をめぐって、考察する。	関根　清三	関根　清三
7	⑦ アリストテレス（3）－知的卓越性と観照	まず倫理的卓越性に対する知的卓越性の諸相を、思慮（実践知）に焦点を合わせて論ずる。行為と責任、放埒と抑制といった問題圏から、独自の快楽論とその位置付けについて考察する。最後に、幸福としての観照をめぐるアリストテレスの結論部を分析し、プラトンとの比較、政治論への移り行きについて押さえる。またその理性尊重の基本姿勢とその包含する問題性、ギリシア的自由民の倫理からヘブライ的捕囚民への展望を開いて、第Ⅰ部の結びとする。	同　上	同　上
8	第Ⅱ部　古代ヘブライの宗教倫理 ⑧ 十戒（1） －第六戒から第九戒を中心に	第Ⅱ部の宗教倫理としてのヘブライ倫理についての論じ方をめぐって注意点を押さえた上で、旧約の第一部分「律法」から先ず十戒を取り上げる。殺人・姦淫・偸盗・偽証を禁ずる第六戒から第九戒をめぐって、ヘブライ語に遡った広狭二つの解釈の可能性を確認し、更にそれらが禁ぜられる根拠を探る。カントの定言命法からの根拠付けとヘーゲル以降の批判、和辻哲郎の信頼理解からの根拠付けとその当否について論ずる。	同　上	同　上
9	⑨ 十戒（2） －第一戒を中心に	前回見た和辻の第六戒以降の根拠付けは、第一戒から四戒、すなわち神関係の戒めを無視するところに、十戒解釈としては瑕疵が存することを指摘した上で、論者自身神関係の戒めを哲学的に解釈する可能性を模索する。それを踏まえて、和辻に代わる、十戒の根拠付けを試みる。倫理が突き詰めたところ、何らかの超越的原理と関わらざるを得ないことを、現代の象徴論などを考慮しつつ論じ、そこから古代の倫理に通底する「驚き」へと論じ進む。	同　上	同　上
10	⑩ 法集成 －「契約の書」「申命記法」「神聖法典」	「律法」中唯一の断言法たる十戒に対し、決疑法の代表的集成である、「契約の書」「申命記法」「神聖法典」の三つについて、倫理思想上の落穂拾いをする。捕囚民・社会的弱者へのアガペーの思想、愛敵の思想が、新約に先駆けて語られることに、注目する。	同　上	同　上
11	⑪ 知恵文書（1） －『箴言』	旧約聖書の第三の部分「諸書」中、倫理思想の上から逸することができないのは、所謂「知恵文書」である。その代表的三著『箴言』『ヨブ記』『コーヘレス書』について、以下三回にわたって学ぶ。『箴言』については、これを徳目表として読むというのが、論者の視点となる。しかもその錯綜した叙述を、ギリシアの『ニコマコス倫理学』の徳論との比較の視座を導入して、哲学的に整理しつつ読むというのが、ここでの方法である。そこから、ギリシア・ヘブライそれぞれの徳論に共通するものと独自のものの別も見えて来るはずである。なお『箴言』中にも愛敵の思想が顕著であることを、パウロと比較して付言する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
12	⑫ 知恵文書（2） －『ヨブ記』	『箴言』では基本的に応報信仰が保たれていたが、義人が苦しむ現実を前に、応報思想の破れを問題にした後期知恵文書が、『ヨブ記』である。キルケゴール、ユングなど後世の解釈を批判的に紹介した上で、『ヨブ記』作者のこの問題に対する独自の答えを読み解いて行く。	関根　清三	関根　清三
13	第Ⅲ部　ギリシア・ヘブライ倫理の帰趨 ⑬ ヘブライ宗教における応報倫理 －『コーヘレス書』を中心に	『ヨブ記』は例外的な義人の苦難を問題にしていたが、より一般的に応報の破れた現実を剔抉し、伝統的な信仰の革新を試みた最後期の知恵文書が、『コーヘレス書』である。全てを空、と断ずるその思想を、語の十全の意味でニヒリズムと規定すべきことを、ニーチェ・ハイデッガーのニヒリズム定義を参看しつつ論じた後、現代の哲学的に整理されたニヒリズム理解との比較において、『コーヘレス書』の迷路のようなテクストを読み解くことを試みる。特に倫理思想の観点から重要なのは、応報倫理の破れたニヒリズムを、個人のささやかな愉悦を楽しむことによって超克しようとする、コーヘレス独自の思想だが、そこには終始他者が忘れられていることも、他方限界として指摘せねばならない。	同　上	同　上
14	⑭ ヘブライの宗教倫理と贖罪思想 －預言者を中心に	応報の破れを率直に認めつつ、コーヘレスのようにエゴイズムに閉じこもることなく、他者関係に開いた新しい神の模索を、旧約の他のテクストに探って行くことが、ヘブライズムについての最終回である14回の課題となる。旧約中第二の部分「預言者」から先ずイザヤを取り上げ、彼の義の神とその限界、また歴史書と文学書からダビデのバテシェバ事件における愛の神の発見とその問題性を読み解いた後、義だけでも愛だけでもなく、両者の統合を贖罪思想において発見した、捕囚期の預言者第二イザヤに注目する。ヴェーバーの古代ユダヤ教理解を批判的に援用しつつ、第二イザヤこそ、応報倫理の破れを逆手に取って、却ってそこにこそ顕れる新しい神の働きを見出したことを確認する。それを踏まえて更には新約のイエスの十字架理解の系譜へと論じ進む。しかしこの贖罪思想の系譜こそ、カント、若きヘーゲル、またニーチェ、レヴィナスなどの諸家が激越な批判の対象とした、思想史上の争点でもあった。最後にそれぞれの視点からの批判と、贖罪思想からの応答の可能性を探る。	同　上	同　上
15	⑮ 愛と義をめぐるギリシア哲学の省察 ―アリストテレスに即しつつ	ヘブライの倫理思想の根本問題は、応報倫理の破れをどう解するか、という点に収斂したが、これに対するユダヤ・キリスト教の贖罪信仰からする解答を、より一般的な哲学の理性の言葉で敷衍するとどうなるであろうか。最終回は、『ニコマコス倫理学』に戻って、その行間にまで分け入りつつ、愛が贖罪にまで至り得、また至らざるを得ない事情について、何某かの展望を開き、あわせ哲学と宗教の相補的緊張関係について確認して、結びとする。	同　上	同　上
	結語と展望 －再び「驚き」をめぐって－	ギリシア・ヘブライの倫理思想に底流するものとして、序論で確認し、本論でも適宜注意を喚起して来た「驚き」をめぐって、その現代的意義について省察するのが、最後の課題となる。謙虚、謎解き、愛、超越など現代人に挑む問題系を包含する驚きという概念の、倫理思想にとっての豊かな可能性を示唆し、聴講者の思索への誘い水とする。	同　上	同　上

＝ 歴史学の現在（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：福井　憲彦（学習院大学教授）〕

全体のねらい

歴史学は、２０世紀末の数十年の間に、たいへん大きな変化を経験した。歴史についてどのような角度から、何を問うのか。その問いを解くために、どのような史資料を用い、いかなる方法によって調べ考え、どう叙述するのか。これらに関する研究の展開を、毎回トピックを立てて確認し、歴史を問うことの意味を考えてみよう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	社会史という問題提起	現在からの問いがあって、歴史ははじめてその姿を現してくれる。２０世紀後半における社会史という問いは、歴史の歴史の捉え方や歴史への問いの変貌を、大いに促すものであった。社会史の提唱を通じてどのような新しい可能性が開けたのか、考えてみる。	福井　憲彦（学習院大学教授）	福井　憲彦（学習院大学教授）
2	証拠としての史料・資料	何らかの手掛りがなければ、歴史について調べ、考えることはできない。今まで重要視されてきた文書史料は今後も基本だが、絵画や地図、道具などの非文字資料もまた大切である。歴史への問いの性質と史資料との関係など、基本的な理解の要点をおさえてみよう。	同　上	同　上
3	歴史の舞台としての環境	人類の歴史は空中楼閣で展開してきたわけではない。きわめて具体的な環境諸条件とのやりとりのなかに歴史はあり、また歴史の展開が環境を改変し、ときには破壊も引きおこしてきた。現在の深刻な環境問題を念頭において、歴史と環境とのかかわりを考えてみる。	同　上	同　上
4	時間の認識と時代区分	いつも時計があったわけではない過去において、社会は時間をどう捉え、秩序をたてていたのだろうか。それは、その社会の歴史の見方と、どう関係していたのだろうか。歴史の時代区分は、現在においてどのように考えることができるだろうか。	同　上	同　上
5	地域からの視線	今まで歴史の考察は、多くが一国を基本的な前提の枠組としてなされてきた。しかし国の内部には多様な独自性をもった地域があったのであり、国家形成はそれらを統合しようとしたものであった。地域からの視線は、歴史のどのような姿を浮び上らせるだろうか。	同　上	同　上
6	グローバルな歴史の捉え方	交通や情報手段の発達した現代はもちろん、過去においても歴史は、同時代における地域や国の相互連関ぬきには理解しがたい。複数の地域世界や文化圏、あるいは国家を相互に結びつけていた複合的関係に着目することで、歴史の捉え方はどのように豊かになるか。	同　上	同　上
7	歴史の重層する都市	歴史の変化は、ある時点で断層が起こったように生じる場合もあるが、屋根瓦が重なるように変化する場合もある。巧みな空間構築の技術が読みとれるような都市の事例から、歴史が重層している社会空間の厚みを捉え、そこでの社会生活の豊かな条件を考えてみる。	同　上	福井憲彦 ゲスト 陣内　秀信（法政大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	技術と社会	技術といえば科学技術のみを想起するのは考えが狭い。工業化以前の社会でも人々は、環境諸条件と対応して多様な道具を用い、さまざまな智恵を働かせて生活の改善を工夫していた。歴史的に伝承され磨かれた技術の質の高さ、それを支えた社会について捉えよう。	福井　憲彦	福井　憲彦 ゲスト 斉藤　洋一（信州農村開発史研究所主任研究員）
9	からだと病いと身体感覚	人間の身体に対するかかわり方、感じ方は、いつの時代でも同じだったのではない。病いのあり方も同様である。人々は、どれほどの生きる可能性をもち、病気にはどう対応していたのだろうか。病気への処方や身体感覚は、どのような変遷をたどったのだろうか。	同　上	福井　憲彦
10	「生と死」に向きあう心	生命の誕生や死を前にした人々の態度、それらの受けとめ方は、歴史のなかで大きなリズムを刻むように変化してきた。ヨーロッパ史について明らかにされたその変貌の歴史を素材にして、心性の歴史の捉え方や史資料との関係について考えてみよう。	同　上	同　上
11	歴史人口学が拓いた地平	第２次大戦直後からまずフランスで、ついでイギリスで、統計以前の時代を含む、出生、結婚、死亡の様相を中心とした地道な人口動態の研究が推進された。教区簿冊を中心史料とした数量的研究はどのような成果をあげ、新しい歴史の見方をどう開拓しただろうか。	同　上	同　上
12	比較というまなざし	特定の社会や地域だけ見ていたのでは、また特定の時代しか分からないとすれば、その社会や地域の歴史的特徴を論じるのは不可能だ。たとえば現在自明視されている事柄は、いつから成立したものだろうか。いくつかの具体例を取りあげて考えてみよう。	同　上	同　上
13	人と人とを結ぶもの	人は孤立しては生きられない。たがいに多様な関係を形成しながら歴史を織りなしてきた。家族や地域住民としてのまとまり、あるいは職業や趣味や志を同じくする関係。人と人とが結びあう形はどのように変化し、それは社会の仕組みや政治支配とどう関係したのか。	同　上	同　上
14	政治と文化の再考	政治史や文化史の理解の仕方は、最近大きく変化した。伝統的なそれらはどこに問題があったのだろうか。イメージやシンボル操作、表象の闘争、多様な差異への着目などを問う視点の刷新は、現在における政治や文化をめぐる変動と、どう関係しているのだろうか。	同　上	同　上
15	歴史と記憶または歴史と現在	歴史とは過去を記憶にとどめるための技法だろうか。記憶自体のあり方が、時代と社会に応じて多様なあり方をしている。現実に生じた歴史は変わりえないものだとしても、どの部分をどのように歴史像として描き、伝えるかは、現在の選択に基づいている。	同　上	同　上

＝ 立憲主義と日本国憲法（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：高橋　和之（東京大学教授）〕

全体のねらい

憲法の目的は、個々人が最善と考える生の選択を可能とするような社会の仕組みを実現することにある。その仕組みは、人権の保障・権力分立・国民主権・法の支配といった立憲主義の基本原理を基礎に組み立てられているが、それぞれの原理の意味と、それらが日本国憲法の中にどのように具体化されているかを学ぶのが課題。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	国家と憲法	立憲主義は、国家権力が憲法に従って行使されることを要請するが、そこで前提となっている国家とはいかなる性格の社会か、国家権力・主権とは何か、憲法とは何か等々の基礎的なコンセプトを説明する。	高橋　和之（東京大学教授）	高橋　和之（東京大学教授）
2	立憲主義の基本原理	近代立憲主義を構成する人権保障・権力分立・国民主権・法の支配の諸原理につき、その意味と相互の関係を説明し、それが現代においてどのように変化しているのか、変化の原因は何かを見る。その上で、日本における立憲主義の歴史を素描する。	同　上	同　上
3	人権の観念	人権という考えを基礎づけている人間観・社会観・国家観はいかなるものか、国家と人権はどのような関係に立つのか、人権にはどのような種類が分類されるのか等々、「人権とは何か」をめぐる諸問題につき説明する。	同　上	同　上
4	人権の適用範囲と限界	人権は、人が人としてもつ権利であるが、いついかなる場合でもその主張が認められるわけではなく、一定の状況・コンテクストにおいては認められなかったり、制限されたりすることが生じる。どのような場合に、いかなる理由で制限が生じるのかを説明する。	同　上	同　上
5	包括的人権と平等権	包括的人権：憲法が個別に列挙していない人権も、時代の要請に従って新しく認められることがあるが、その根拠となるのが包括的人権と呼ばれる。その具体例として、プライバシーの権利・自己決定権等を見る。 平等権：総則的性格をもつ人権としてここで説明する。	同　上	同　上
6	精神的自由権(1)	個人の内面における精神作用（考える・信じるなど）や、その外部への表現を保障する人権を精神的自由権と呼ぶが、そのうち、ここでは思想良心の自由・信教の自由・学問の自由を説明する。	同　上	同　上
7	精神的自由権(2)	表現の自由につき、内容規制・内容中立規制検閲・事前抑制、名誉毀損・プライバシー侵害、わいせつ・ポルノ規制、差別的表現、報道・取材の自由、知る権利・情報公開制などを説明する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	経済的自由権・人身の自由	経済的自由権：財産権、職業選択の自由・営業の自由等につき説明する。 人身の自由：主としては刑事手続において国家権力が逮捕・捜索などの強制力を行使する場合に守られるべきルールを指す。	高橋　和之	高橋　和之
9	参政権・社会権・国務請求権	参政権：選挙権・被選挙権の性質、定数不均衡、選挙運動の規制などにつき説明する。 社会権：生存権、教育を受ける権利、労働基本権。 国務請求権：請願権、裁判を受ける権利、国家賠償・国家補償請求権	同　上	同　上
10	国政のメカニズム（1）議院内閣制	議院内閣制の特徴を大統領制と比較しながら理解し、その上で現実の議院内閣制がどのように運用されるのかを、選挙制度や政党制のあり方と関連させて説明する。	同　上	同　上
11	国政のメカニズム（2）国会と内閣の組織・権限・活動	議院内閣制の枠組みの中で、国会と内閣がどのように組織され、どのような権限を分配され、どのように活動を行っているのかを説明する。	同　上	同　上
12	地方政治のメカニズム	国と地方公共団体の関係、相互の権限配分のあり方、地方政治の基本原則（団体自治・住民自治）、地方議会と長の組織・権限・活動等につき説明する。	同　上	同　上
13	法の支配と裁判所	法の支配を担保する役割を担う裁判所の組織・権限（司法権）、司法権の独立、裁判の公開などの問題を説明する。	同　上	同　上
14	憲法の保障と違憲審査制	憲法は、権力の担い手が憲法を遵守することを保障するメカニズムを組み込んでいるが、その代表的な制度が違憲審査制である。他方で、憲法の内容は時代の要請に応じて改正する必要も生じる。持続と変化の調和が大切であり、それを実現するための方法を説明する。	同　上	同　上
15	日本国憲法の普遍性と特殊性	立憲主義は西欧に発する考えであり、日本の伝統と対立する面をもつ。ここでは、一方で天皇制に象徴される日本的伝統とのあつれき・調和の問題、他方で、立憲主義そのものを越えようとする平和主義の問題を考察・展望して、本講義の締めくくりとする。	同　上	同　上

＝ 社会学入門（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：倉沢　進（放送大学教授）〕
〔主任講師：秋元　律郎（大妻女子大学教授）〕
〔主任講師：岩永　雅也（放送大学教授）〕

全体のねらい

社会学とはどのような学問なのか。何を対象とし、どのような方法を用いる学問分野なのか。社会学の諸分野における専門的な学習へと進むに先立って、学問としての社会学に関するおおよそのイメージを形作り、社会学の基本的な概念や基礎となる考え方について習得しておくことは必要不可欠である。この講義では、社会学とは何かを知るため、第一に社会学の来歴を通じて社会学という学問領域の意味と目的を明らかにし、第二に社会学の各分野に共通する基本的概念や研究上の技法を具体的に学習した上で、第三に各分野での具体的な現実課題に関する研究例を学ぶ。それらを通じて、社会学という学問分野に関する理解を深めるだけでなく、現実の社会に生起するさまざまな社会事象を認識し、分析し、さらに的確に理解していくための具体的な方法についても学習する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	社会学とは何か	社会学は何を対象とし、どのような方法を用いる学問かを概説する。また、社会学は、成立以来どのような理論的な展開をとげ、さらに経験科学として研究領域を確立してきたかをあきらかにしていく。	秋元　律郎（大妻女子大学教授）	秋元　律郎（大妻女子大学教授） 倉沢　進（放送大学教授） 岩永　雅也（放送大学教授）
2	社会学の方法	社会学の諸研究がこれまで用いてきた研究法について説明する。具体的には、帰納と演繹といった分析の基本的視座、調査と集計分析の手法、フィールドワークの方法等々を含む。	岩永　雅也（放送大学教授）	岩永　雅也（放送大学教授）
3	自我とコミュニケーション	社会は個々の人々の数限りない相互行為の結果として成り立っている。つまり人々の相互行為は社会の根源である。その社会的相互行為について、言語を介したコミュニケーション、日常性と場等の理論から考察する。	船津　衛（東洋大学教授）	船津　衛（東洋大学教授） 秋元律郎
4	集団と組織	相互行為が反復して行われ、それが他者によって期待されるようになると、そこに役割が発生し、それが固定化することで地位が形成される。ここでは役割と地位の集合体としての社会集団と組織について、基本的な学習をする。	船津　衛	船津　衛 秋元　律郎
5	文化と社会化	社会集団が成立しそれが秩序だって維持されるためには、規範が必要である。その規範と行為とその結果の集積が文化である。文化の本質と成り立ち、機能を明らかにし、併せて文化の個々人への内面化である社会化も検討する。	岩永　雅也	岩永　雅也 秋元　律郎
6	同調と逸脱	同調とは、基本的に規範に則した行動をとることである。ここでは、同調の諸類型とそれらの背景を学び、その上で非同調、つまり逸脱および無規範状況としてのアノミーについても概略学習する。	岩永　雅也	岩永　雅也

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	家族と社会	家族は人類のもっとも古い基礎的集団である。家族の成り立ちと諸類型、機能、変遷などについて学習を進め、現代社会における家族の意味を知り、併せて環境の変化により今後家族に生じると思われる変動も予測する。	野沢　慎司（明治学院大学教授）	野沢　慎司（明治学院大学教授） 倉沢　進
8	教育と市民社会	教育、特に学校教育は、近代社会における社会化の最も重要なファクターである。国家と公教育制度の成立の関わり、近代社会における学校教育の機能、社会集団としての学校の内部の諸関係、等々について考察する。	岩永　雅也	岩永　雅也
9	職業と階層	産業社会は、経済的関係を基礎とする階層社会である。階層の成り立ちと分化のメカニズムを検討し、併せて階層の最も重要な要素である職業について考察する。社会的平等・不平等にも言及する。	同上	岩永　雅也 秋元　律郎
10	地域社会と生活	コミュニティについての基本的な概念を紹介し、その成立の根底にある人々の連帯と疎外の諸条件を検討する。さらに、都市、農村といった地域集団の諸相についても概略的な解説を行う。	竹中　英紀（桃山学院大学助教授）	竹中　英紀（桃山学院大学助教授） 倉沢　進
11	エスニシティと国家	国家は最大規模の社会集団であるだけでなく、そこに民族とそれに関わる諸要素を伴っている点で、他の社会集団と大きく異なっている。ここでは、移民、国際紛争、民族問題等の視点から、現代における国家について考察する。	梶田　孝道（一橋大学教授）	梶田　孝道（一橋大学教授） 倉沢　進
12	大衆社会と政治	現代の大衆化と大衆社会の意味について概説した上で、大衆社会の特性、大衆操作の必然性とそのメカニズムをあきらかにしていく。さらに大衆社会特有の政治課題について社会学的に検討する。	秋元　律郎	秋元　律郎 岩永　雅也
13	メディアと大衆	まずメディアとは何かについて検討した上で、情報化社会といわれる現代社会のメディア状況を概観し、メディア、特にマスメディアの機能とその問題点をさまざまな角度から考察する。	岩永　雅也	岩永　雅也

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	現代社会と宗教	現代社会は原子化した孤立する大衆によって構成されている。そうした状況の下での連帯感の喪失は、宗教への最も強力な誘因となる。現代の宗教状況を、特に若者の宗教指向との関係で考察する。	谷　富夫（大阪市立大学教授）	谷　富夫（大阪市立大学教授） 倉沢　進
15	現代社会の諸相 -社会学に何ができるか-	現代社会に特徴的な諸現象に対して、社会学はどのように取り組むことができるのか、また、どのように関わっていくべきなのか、前回までの学習内容を踏まえて、社会と社会学との関わりを展望する。	倉沢　進	倉沢　進

＝ 社会調査の基礎（’０１） ＝（R）

〔主任講師：岩永 雅也（放送大学教授）〕
〔主任講師：大塚 雄作（大学評価・学位授与機構教授）〕
〔主任講師：高橋 一男（東洋大学教授）〕

全体のねらい

社会調査は、社会のありさまを的確にかつ客観的に把握するための重要な手段である。この科目はまず社会科学研究における社会調査の位置づけについて理解したうえで、実際に調査を行なうための技法と調査の結果得られたデータの集計、分析、解釈の方法を学ぶことを目的としている。本科目では、量的調査だけでなく、質的調査にも重点を置き、より多面的な現実把握が可能となるように配慮している。また、調査結果の適切な表示の仕方についても学習する。なお、昨今の情報化の著しい進展に鑑み、ラジオというメディア特性にも配慮して、サンプル・データ、分析ツール等の入った副教材CD-ROMも用意する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	社会を調査する	現実の複雑で非定型的な社会事象から、定量的あるいは定性的な変数を見い出し、その変量を測定する方法が社会調査である。ここではまず社会調査の意味を明らかにしたうえで、社会科学研究との関連について検討し、さらに現行の社会調査に発展してくるまでの系譜にも言及する。	岩永 雅也（放送大学教授）	岩永 雅也（放送大学教授）
2	調査の類型	現在最もよく用いられる各種の調査をさまざまな観点から分類し、それらの特性を整理する。分類の観点としては調査の目的(記述と説明)、変数のタイプ(量的と質的)、そして調査結果の用途の三者をとりあげる。	同上	岩永 雅也
3	調査票調査の設計	量的調査の中心は調査票を用いた調査である。ここではまず量的調査にあった調査テーマとはどんなものかを検討したうえで、その調査テーマにそった調査票調査の設計の方法について学習する。	同上	同上
4	調査票を作る	具体的な調査テーマにそくして実際に調査票を作成するプロセスを紹介し、調査票そのものについての理解を深めるとともに、さまざまな質問技法、ワーディングにあたっての種々の問題点などを学習する。	同上	同上
5	サンプリングと実査	量的調査におけるサンプリングの意義と目的を明らかにする。特にランダムサンプリングとその応用について学習を深める。また、調査票調査の実施方法を学習する。実際に行われている実査の諸類型（面接・郵送・電話等）について、その内容と手法、留意点などを詳しく紹介する。	高橋 一男（東洋大学教授）	高橋 一男（東洋大学教授）
6	集計と統計量	調査票調査の結果はさしあたり抽象的な数値や記号であって、そこから何らかの具体的な情報を得るためには集計が必要である。ここではまず広義の集計、ついで狭義の集計について各々詳しく説明する。また標本の各統計量(代表値、変動値など)とその記述法についても学習する。	大塚 雄作（大学評価・学位授与機構教授）	大塚 雄作（大学評価・学位授与機構教授）
7	二変数の関連	二変数間にどのような関連があるかを探るための方法とそこで用いられる各種の指標について学習する。具体的には、二群の量的データ間の相関係数やクロス表を基礎にした質的変数間の関連性の検討などを行う。	大塚 雄作	大塚 雄作

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	検定の考え方	対象とする集団の一部からランダムサンプリングによって得られた数量データ(標本)に基づいて集団全体(母集団)の数量的特徴を推論する方法としての統計的検定の基本的な考え方と手続きを紹介する。	大塚　雄作	大塚　雄作
9	検定の実際	検定の基本的な考え方を基礎において、実際の統計データに基づいた種々の検定方法とその考え方を学習する。具体的には、平均値の差異を検討するｔ検定や質的変数同士の関連性を検討するχ２検定などを学ぶ。	同　上	同　上
10	パソコンによるデータ解析	現在、実際の量的調査では、集計・分析・解析にコンピュータが用いられる場合が非常に多い。そこで、集計結果をコンピュータに入力し、集計・分析ソフトを用いて統計量を求めたり、各種の分析を行う方法を学習する。	山田　文康（静岡大学教授）	山田　文康（静岡大学教授）
11	多変量データ解析	多くの変数間の関連性を概括的に捉えるために、多変量解析と呼ばれる一連のデータ解析法が開発されている。その例として、因子分析と重回帰分析の基本的な考え方とそれらの適用例を紹介し、多変量解析の一端に触れてみる。	同　上	同　上
12	自由面接	自由面接(インタビュー)は、質的調査の最も基本的な手法である。まずインタビューの用いられる具体的な状況や条件を整理し、さらに実際のインタビューの方法、留意点、結果のまとめ方などについて、実例を交えながら学習する。	高橋　一男	高橋　一男
13	参与観察	調査の対象となる集団の活動に調査者も実際に参加し、その集団成員と同じ視点から集団と活動について調査するのが参与観察である。実際の生産活動や生活に参加し、調査対象者と同じ視点で調査する方法を紹介しながら、参与観察法のエッセンスを講義する。	同　上	同　上
14	メディアの利用	現代はメディア社会であり、調査にもさまざまな形でメディアが関わる。調査の題材として、調査手段として、結果のプレゼンテーション手法として、メディアがますます重要になっている現状を紹介し、その意義を検討する。	同　上	同　上
15	調査結果のまとめと表現	さまざまな調査結果をどのように記述し、表現したらよいか、表やグラフの有効な用い方とはどのようなものか、調査結果を説得力のある論稿にまとめるにはどのような点に留意すべきか、といった問題について検討する。	岩永　雅也	岩永　雅也

＝ 日米欧の企業経営（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：吉森　賢（横浜国立大学教授）〕

全体のねらい

企業統治はアメリカ、ドイツで発達し、日本においては続発する大企業の違法行動、重大な経営失策を背景として９０年代初頭から急速に注目を集め始めた問題領域である。この科目は日米欧５カ国の企業経営を企業統治と経営者の視点から比較し、日本企業の企業統治および経営者行動のあるべき姿を求めることを試みる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	企業統治とは	企業統治とはなにか、企業統治が注目される背景、それが企業経営に与える影響を考察し、それがなぜ企業経営の基本的問題であるかを理解する。また日米欧5カ国の比較をどのような方法で行うか、それが日本企業にとってどのような意義をもつのかを示す。科目全体の構成と内容について説明する。	吉森　賢（横浜国立大学教授）	吉森　賢（横浜国立大学教授）
2	企業はだれのものか－日本	企業はだれの利益のために経営さるべきか、に対する答を企業概念と定義し、日米欧においてそれがどのように異るかを歴史的に比較する。米英の株主利益中心の一元的企業概念、日本の全利害関係者指向の多元的企業概念、両者の中間にある独仏の二元的企業概念を対比し、日独仏の実態を比較する。最初に日本をとりあげる。	同　上	同　上
3	企業はだれのものか－アメリカ、イギリス	前回に続きアメリカとイギリスの企業概念の特質を考察する。両国において伝統的な企業概念がどのような批判を受けてきたかを概観する。	同　上	同　上
4	企業はだれのものか－ドイツ、フランス	日本と類似した企業概念を有するドイツ、フランスにおいて、それがどのような制度として動いているかを考察する。	同　上	同　上
5	企業はだれのものか－結論	5カ国比較の結論として各国の企業概念の特質、利点、限界の比較を行う。特にアメリカと日本の比較に焦点をあてる。	同　上	同　上
6	企業の所有・支配構造	日米欧における大企業を所有および支配する主体（同族、法人、機関投資家、個人株主、国家など）を比較する。バーリとミーンズによる所有と経営の分離および経営者支配が各国でどのように実現されているのかを考察する。日本において顕著な経営者支配の歴史的背景とその影響を理解する。	同　上	同　上
7	株主総会	株主総会は株主が直接に経営者から業績、利益処分、経営方針、役員構成などに関して報告、提案を受け、これに対して質問や批判を行う監視機関である。その監視機能がどの程度有効に発揮されているのかについて日米欧比較を行う。日本の株主総会の形骸化がの原因を考察し、米欧から学ぶものは何かを考察する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	取締役会－日本	経営者に対するもっとも重要な監視機関とされる取締役会の構造と機能を日米欧について比較し、それぞれの問題点と改善への取り組みを考察する。その第一回は日米欧の取締役会を単層型構造と二層型構造に分類し、続いて日本の取締役会の実態と執行役員導入を中心とする最近の改善対策を考察する。	吉森　賢	吉森　賢
9	取締役会－アメリカ	アメリカの取締役会の構造と機能を日本のそれと比較しつつその特質を理解する。取締役会会長とCEOの兼務、社外取締役の独立性、経営者の他社取締役の兼務、経営者の高額報酬などアメリカの取締役会の問題点を概観し、これらの解決への取り組みを考察する。	同　上	同　上
10	取締役会－イギリス	イギリスの取締役会の構造と機能の特質を理解する。取締役会機能の向上のために提案されたキャドベリ報告、グリーンベリ報告、ハンペル報告の内容を検討市、これら勧告の実施状況を考察する。	同　上	同　上
11	取締役会－ドイツ	ドイツの取締役会はその二層型取締役会により監視と業務執行の厳格な分離を規定する法律と監査役会における労資による共同決定制度により日米英には見られない大きな特質を有する。その制度の目的と実態を把握し、制度が目指した目的が実現されているかを検証する。問題点を考察し、改善の方向を概観する。	同　上	同　上
12	取締役会－フランス	フランスについては単層型取締役会と二層型取締役会の併存が法的に可能であるが、それぞれの実態と問題点を考察する。取締役会機能の改善のために作成されたヴィエノ報告１とヴィエノ報告2を考察する。	同　上	同　上
13	主取引銀行・企業間関係	日本とドイツにおける主取引銀行の役割を企業統治の視点から理解し、その利点と限界を考察する。また日独仏における長期的取引関係、株式持ち合い、役員相互派遣などに基づく企業間関係の経済的合理性を考察する。同様の主取引銀行と企業間関係はなぜアメリカでは少ないかを検討し、これが経営成果に与える影響を考える。	同　上	同　上
14	証券市場と企業支配市場	アメリカとイギリスにおいては株式市場を通じての企業買収とそれに伴う経営者更迭が経営者の無能、怠慢、違法行為に対する監視および制裁機能を発揮するとされる。この経営者監視方式の実態とその功罪を考察し、企業の競争力や長期的繁栄にいかなる影響を及ぼすかを考える。	同　上	同　上
15	経営者と経営者行動、まとめ	日米欧における経営者はどのような人物であるかを、学歴、出身階層、年令などの視点から概観する。最後にこの講義のまとめを行う。	同　上	同　上

＝ 確率と統計（’０１）＝（R）

〔主任講師：釜江　哲朗（大阪市立大学教授）〕

全体のねらい

確率の考え方に対する理解を深め、それが世の中でどのように用いられているかを参照しながら、基本概念や計算方法に習熟して行くことを目指す さらに、統計の考え方を学び、検定・推定の意味を理解しつつ、現実のデータの統計解析が行えるようになることをねらいとする.

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	確率の考え方と確率の用いられ方	確率をどう考えるかについての考察を行う. パスカル以来のさまざまな考え方を紹介するとともに、現在どういうところで確率が用いられているかを紹介する.	釜江　哲朗（大阪市立大学教授）	釜江　哲朗（大阪市立大学教授）
2	場合の数と確率	配列の数、組み合せ数を用いた場合の数の計算と、それに基づく確率の計算を例題を解く形で論じる. 組み合わ数に関する基本性質の復習も行う	同　上	同　上
3	確率事象とその計算法則	確率事象とは何かを説明し、それらの和や共通部分、排反事象の和の確率を論じる. 確率事象の間の関係が集合の場合と同様に、ベン図式で表されることと、確率と面積の類似性を用いて、確率の加法性を導く. また、条件付確率を導入する.	同　上	同　上
4	確率変数とその期待値、確率変数列の独立性	確率変数の概念を導入する. また、実数値確率変数の和や積、期待値・分散を論じる. 期待値の線形性を導く. また、独立確率変数の積の期待値について論じる.	同　上	同　上
5	離散確率分布	２項分布、ポアソン分布、幾何分布、超幾何分布を導入し、それらの実例、平均と分散を論じる	同　上	同　上
6	連続確率分布	一様分布、指数分布、正規分布を導入し、それらの実例、平均と分散を論じる.	同　上	同　上
7	大数の法則と中心極限定理	独立確率変数列についての大数の法則を導く. また、中心極限定理について説明し、その意味を具体例とともに論じる.	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ランダム・ウォークとブラウン運動	ランダム・ウォークの導入とランダム・ウォークに関する確率の計算をいくつか行なう。また、その極限としてブラウン運動を導く。ブラウン運動の応用も論じる。	釜江　哲朗	釜江　哲朗
9	統計の考え方と意味	統計学の歴史と統計についてのさまざまな考え方を紹介するとともに、今日統計学がどのように用いられているかを紹介する。また、母集団、母数、標本、統計量といった基礎概念を説明する。	同　上	同　上
10	仮説検定の考え方とその意味	統計的検定の定式化とその背後にある考え方。仮説、対立仮説、第１種過誤、第２種過誤、有意水準、検出力関数の意味や検定の良さの基準を論じる。また、わかりやすい具体例を紹介する。	同　上	同　上
11	推定の考え方とその意味	区間推定と点推定を論じる。不偏性、一致性、最小分散性等の推定の良さの基準を導入する。また、具体例をもとにこれらの意味を紹介する。	同　上	同　上
12	正規母集団に関する検定・推定	正規母集団における分散既知の場合の平均の検定・推定、分散未知の場合の平均の検定・推定、平均未知あるいは既知の場合の分散に関する検定・推定を論じる。これに関係して、t-分布、x^2-分布、F-分布を導入する。	同　上	同　上
13	適合度検定	x^2-分布を用いた適合度検定を具体例をもとに論じる。	同　上	同　上
14	分散分析	F-分布を用いた分散分析を導入し、母集団の同一性等の検定を行う。	同　上	同　上
15	最小２乗法	最小２乗法の意味を論じ、その解としての正規方程式を導く。これによる未知母数の決定と回帰分析を論じる。	同　上	同　上

＝ 生物学の歴史（’０１）＝（R）

〔主任講師：中村　禎里（立正大学教授）〕
〔主任講師：溝口　　元（立正大学教授）〕

全体のねらい

人類の生命についての理解や考えを、古代から現代まで歴史に辿り、生物学の成立と展開を学ぶ。生物関連諸科目を学ぶ際の基礎知識の提供、人類の知的遺産としての生物学の把握をも心がける。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	古代の生命観－アリストテレス、ガレノス	アリストテレスの思考枠、三段階の生命原理、身体各部の位づけと目的論、ガレノスの生理学説	中村　禎里（立正大学教授）	中村　禎里（立正大学教授）
2	解剖学のルネサンス－レオナルド・ダ・ヴィンチ	絵画における象徴表現から写実的表現へ、技芸職人から学者・芸術家へ、解剖学のルネサンス	同　上	同　上
3	近代科学成立時の生物学－1　ハーヴェイ、ボイル、ロウアーと生物学における実験	ハーヴェイによる血液循環の証明、分析－総合法、実験生物学の始まり、ロイヤル・ソサエティと呼吸の役割の解明	同　上	同　上
4	近代科学成立時の生物学－2　顕微鏡の発明と生命単位の探究	・近代科学の誕生と肉眼観察 ・顕微鏡の発明とレーウェンフック、マルピーギら顕微鏡学者の登場 ・フック「ミクログラフィア」と細胞の命名 ・顕微鏡の改良 ・生理学の状況	溝口　元（立正大学教授）	溝口　元（立正大学教授）
5	近代科学成立時の生物学－3　生物の発生とその仕組み	・前成説と後成説 ・ハルトゼーカーの精子論とヌックの卵子論 ・単為生殖、再生現象の発見 ・受精研究と自然発生の問題 ・後成説の定着と胚葉説の確立	同　上	同　上
6	19世紀の生物学－1　ダーウィン進化論の成立とその背景	・進化思想を生んだ背景 ・ダーウィンの先駆者たち－ビュフォン、キュビエ、ラマルク ・自然選択説をめぐるダーウインとウォーレス ・ハックスレー『自然における人間の位置』 ・ダーウィン説への批判	同　上	同　上
7	19世紀の生物学－2　細胞説、発酵論争、免疫学・微生物学の成立	・細胞説の確立－シュライデンとシュワン ・発酵をめぐる論争－リービヒとパスツール ・免疫学・微生物学の成立－パスツールとコッホ	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	19世紀の生物学－3　メンデルの遺伝の法則の発見	・メンデル以前の遺伝研究 ・メンデルの略歴と交雑実験 ・メンデルの遺伝の法則の特徴 ・変質の遺伝 ・ワイズマン「生殖質連続説」	溝口　元	溝口　元
9	20世紀初頭の生物学－1　メンデル以降の遺伝研究	・メンデルの遺伝の法則の再発見 ・モーガンの遺伝子説 ・モーガン以降の遺伝学 ・集団遺伝学 ・核酸研究への途	同　上	同　上
10	20世紀初頭の生物学－2　社会ダーウィニズムの登場と展開	・社会ダーウィニズムと優生学－ヘッケル、ゴルトン ・各国の優生思想とその実施 ・遺伝学と社会	同　上	同　上
11	20世紀初頭の生物学－3　実験研究の確立	・世紀の変わり目までの生理学－ミュラー、ベルナール、パブロフ、ロエブ ・ホルモン研究 ・実験発生学の誕生 ・臨海実験所の設立と展開	同　上	同　上
12	日本の生物学－1　幕末まで	・中国本草学の伝来 ・日本の本草学の自立－貝原益軒、稲若水、小野蘭山 ・ツンベルクの来日と西洋植物学との邂合 ・医学的知識の場合	同　上	同　上
13	日本の生物学－2　明治期以降	・お雇い外国人生物学教師－モースとホイットマン ・初期の動物学者たち－箕作佳吉、石川千代松、丘浅次郎、谷津直秀 ・初期の植物学者たち－伊藤圭介、矢田部良吉、三好学	同　上	同　上
14	20世紀後半の生物学－分子生物学の成立からバイオテクノロジーへ	・分子生物学の成立 ・二重らせんの発見－ワトソン、クリックとフランクリン ・遺伝暗号の解読 ・遺伝子組変え技術の登場と生物学の産業化 ・バイオテクノロジーと環境保全	同　上	同　上
15	現代の生物学－生物学の多様な拡がりと将来の方向	・現代の生命科学研究－アシロマ会議とエイズ研究 ・バイオエシックスの誕生 ・専門分化と新たな研究の展開	同　上	同　上

＝ 疾病の成立と回復促進（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：薄井　坦子　（宮崎県立看護大学長）〕
〔主任講師：竹中　文良　（日本赤十字看護大学教授）　〕
〔主任講師：川島　みどり（健和会臨床看護学研究所所長）〕

全体のねらい

私たちの日常の生活リズムは、疾病によって大きく乱れ、その影響は個人にとどまらず、家族や周辺の人々にまで及ぶ。そこで健康状態から疾病が成立するまでの変化のプロセスを、生活との関連においてとりあげ、疾病の構造や回復を促進するための生活調整上の方向性とその根拠について理解を深め、人々の生きる力を支援する能力の向上をはかる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	病むとはどういうことか	人間は、この自然界のなかで生きていく力を備えて生まれ、育まれて自立した生活を営み、やがて老いて死を迎える。その間に個人が受ける健康を脅かす力について理解し、病気は健康を脅かす力と自然回復力との力関係の結果としてあらわれることを学ぶ。	薄井　坦子（宮崎県立看護大学長）	薄井　坦子（宮崎県立看護大学長）
2	身体徴候と防御反応	日常多く見られる身体徴候として発熱、ここでは感染による発熱を取り上げ、身体内部の変化とその意味を探りながら、回復を促進させるケアの方向性を学ぶ。	佐藤　郁子（健和会臨床看護学研究所研究員）	佐藤　郁子（健和会臨床看護学研究所研究員）
3	病気に対する治療と看護	異常状態に対する診断・治療過程で、人々はさまざまな体験をする。その時々に生じる患者の反応に着目し、消耗を軽減でき、安定した気持で生活調整をはかれるように支援し、免疫力を高める看護の役割を理解する。	竹中　文良（日本赤十字看護大学教授） 薄井　坦子	竹中　文良（日本赤十字看護大学教授） 薄井　坦子
4	回復困難とみなされた事例への看護	医師が病名の診断をつけ、医学的には回復困難とみなしたとき、看護者はどのように患者にかかわっていくのであろうか。回復困難といわれた事例をとおして、医師の判断根拠となった身体内部の変化とその意味を理解したうえで、健康状態を高めるという観点から生活調整の方向性をみいだす考え方を学ぶ。	山本　利江（千葉大学助教授）	山本　利江（千葉大学助教授）
5	脳の機能が障害されたとき	脳疾患の中で特に脳血管障害は最も多い疾患の一つである。ここでは脳出血を例に、脳の機能、脳出血による脳の機能障害および回復を促進させるケアの方向性について学ぶ。	田中　裕二（日本大学助手）	田中　裕二（日本大学助手）
6	脳の精神機能の歪み	脳は、全身を統括する生理的機能と、感じる心や考える力を個別に分化させていく精神的機能とをあわせもっていて、それらの発達状態は、遺伝と環境と意思のからみ合いの結果としてあらわれる。したがって、私たちが脳の精神機能に歪みのあらわれた人々に接する時、その人の時代性や地域性や家族構成など環境との関連で見つめることによって患者の見え方が変わり、人間としての成長を促す関わりの方向性が見えてくることについて学ぶ。	薄井　坦子	薄井　坦子
7	生命の危機的状況	救命救急時に患者の身体内部で起こっている現象、特に虚血性心疾患に焦点を当てる。また慢性に経過した場合の身体内部との共通性と相異性も取り上げ、それぞれの観察ポイントとケアの意味について学ぶ。	川島みどり（健和会臨床看護学研究所所長）	川島みどり（健和会臨床看護学研究所所長）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	生命維持が困難となったとき	がんの進行によって生命維持が困難となった患者の身体内部の変化について理解し、ＱＯＬ(Quality of Life) を高めるための治療・看護のポイントとその意味について学ぶ。	竹中　文良 奥原　秀盛（日本赤十字看護大学助教授）	竹中　文良 奥原　秀盛（日本赤十字看護大学助教授）
9	食物摂取から排泄に至る過程の病気	細胞のつくりかえに不可欠な栄養素のとりこみに障害をもたらす病気の特徴と、その結果生じる悪循環をたち切るための生活調整のポイントとその根拠について学ぶ。	岡部喜代子（宮崎県立看護大学教授）	岡部喜代子（宮崎県立看護大学教授）
10	内部環境の調整が困難になった病気（１）	不調サインが表れにくい病気、ここでは肝機能障害の事例を取り上げ、身体内部で起こっていることを解きつつ、回復に向けた生活調整のポイントとその根拠について学ぶ。	川島みどり	川島みどり
11	内部環境の調整が困難になった病気（２）	ネフローゼ、腎不全の事例をとりあげ、生活のなかでの要因を探り、生活調整のポイントとその根拠について学ぶ。（腎臓）	花野　典子（宮崎県立看護大学教授）	花野　典子（宮崎県立看護大学教授）
12	運動機能を突然失った事例	下肢や上肢に機能障害をもつ事例をとりあげ、その内容構造の変化が日常生活に及ぼす影響を理解し、生活調整のポイントとその根拠について学ぶとともに、日常生活の質を向上させるための関わりを見出す思考のプロセスを示す。	大名門裕子（宮崎県立看護大学教授）	大名門裕子（宮崎県立看護大学教授）
13	日常生活の質を低下させる病気	現代医学でも未だ根本的な治療法が確立されていない病気に焦点を当て、その病気の成り立ちとＱＯＬを低下させる症状、快適な心身の状態を維持することで病状の進行を遅らせ、回復困難であっても前向きに生活できることを説明し、ＱＯＬを高める看護の視点と具体的な方法を学ぶ。	川島みどり	川島みどり
14	生命の連続性をつくりだす機能を妨げる病気	月経通の強い事例、子宮内膜症の事例をとりあげ、思春期の身体と心のつくられ方が女性のライフサイクルに及ぼす影響をとりあげ、健康に生きる上での性の重要性について学ぶ。	花野　典子	花野　典子
15	総　括	健康のよい状態が乱れた時の看護学的視点は、個別なその人や家族等をとりまく人々の生活の質を高めるために、どのような矛盾があらわれているかを見抜く思考のプロセスに、専門的知識・技術が重なって、関わり続ける意思が明確になることを確認してまとめとする。	薄井　坦子 川島みどり 竹中　文良	薄井　坦子 川島みどり 竹中　文良

＝ 人体の構造と機能（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：黒川　清（東海大学教授）〕
〔主任講師：菱沼　典子（聖路加看護大学教授）〕
〔主任講師：北村　聖（東京大学助教授）〕

全体のねらい

食事をすること、息をすること、トイレに行くことや話をすることなどは、毎日の生活の中で当たり前に行っていることである。これらの日常生活行動は、何のために、どのような仕組みで行われているのかを人体の機構から解説し、体に対する理解を深めることをねらいとする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生命と日常生活行動	一個の受精卵から人間が形作られ、誕生する過程を理解しながら、個体が外部環境と関係を保ちながら、内部環境を整え、細胞の活動を維持していくことを解説する。私達の日々の生活行動が、生命維持と関わっていることを理解させたい。	黒川　清（東海大学教授）	黒川　清（東海大学教授）
2	食べる（１）摂食	生命維持のために外界から食物をとり入れる営みについて解説する。空腹感や食欲、摂食の過程（咀嚼、味覚、嚥下を含む）、消化・吸収について、消化器系の名称、構造を含めて解説する。	菱沼　典子（聖路加看護大学教授）	菱沼　典子（聖路加看護大学教授）
3	食べる（２）消化管と消化腺	消化管の運動と消化腺の分泌活動について、自律神経とホルモンによるコントロールを解説する。便の排泄について、便意と排便行為までを解説する。消化管を例にして、自律神経系を概説することを含める。	佐伯　由香（長野県看護大学教授）	佐伯　由香（長野県看護大学教授）
4	食べる（３）栄養分の代謝	吸収された栄養分が細胞の代謝活動に使われる過程を、肝臓と膵臓の作用を中心にして解説する。肝機能障害や糖尿病など比較的身近かな疾病を例にして、病態から正常な機能の理解を深められるようにする。	谷亀　光則（東海大学講師）	谷亀　光則（東海大学講師）
5	生体の流通路－心臓と血管	外部環境との関係においておこなわれる栄養摂取、呼吸を終えたところで生体内の物質の流通路をとりあげる。心臓、血管系の構造とその役割を、流通路として認識できるよう、また、心臓収縮のメカニズムとその調節機構を解説する。	沓澤　智子（東海大学助教授）	沓澤　智子（東海大学助教授）
6	血圧	血圧について、血圧の意味、血圧の決定因子、血圧の調節機構を解説する。血圧は、一般社会でも、医療のなかでも生体情報として頻繁に用いられる。その意味と調節機構を理解し、高血圧の重要性と対策を考える。	谷亀　光則	谷亀　光則
7	血液	血液の組成および働きを解説する。赤血球は酸素を運び、白血球は生体防御に関わっている。また、血小板は止血に関わっている。これらの働きと、その機能が失われた場合の疾患にも少し言及したい。さらに、これらの血液細胞は共通の幹細胞から分化してくることを、骨髄における血球の産生と分化と共に解説する。骨髄移植について考えるとこれらのことが理解しやすい。	山本真千子（宮城大学教授）	山本真千子（宮城大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	自分を守る	免疫反応は細菌やウィルスなどの外敵から体を守るだけでなく、移植片の拒絶反応や、自己免疫疾患などでも重要な働きを演じている。この免疫機序の全体を理解するために、細胞レベルにおける自己認識と、他者の排除の機構、細胞性免疫と液性免疫の機序を理解し、自己免疫疾患や免疫不全症候群などの疾患についても基礎的な知識を得る。	黒川　清	黒川　清
9	息をする	換気・ガス交換にかかわる呼吸器の構造と機能について解説する。また呼吸と血液の酸塩基平衡のかかわりについても解説する。様々な肺疾患がガス交換のどの部位を障害するのか、この障害によってどのようなことが生体に引き起こされるのかにも触れたい。	北村　聖（東京大学助教授）	北村　聖（東京大学助教授）
10	トイレに行く	腎臓での尿の生成過程を、生体内の体液の調節の意義を含めて解説する。次いで、尿の排泄について、尿意を感じて排泄に至るまでの尿路の構造と機能を解説する。	北村　聖	北村　聖
11	見る・聴く・感じる	神経系の概要を講述し、神経系が生体の即時的な環境適応を可能にし、生体恒常性を維持する系であることを理解させる。ここでは感覚器系、とくに視覚、聴覚、体性感覚について「見る、聴く、感じる」という視点で詳述し、人間生活がいかに感覚系に依存しているかを考えさせる。	深井喜代子（川崎医療福祉大学教授）	深井喜代子（川崎医療福祉大学教授）
12	考える	神経系の概要を講述し、神経系が生体の即時的な環境適応を可能にし、生体恒常性を維持する系であることを理解させる。ここでは中枢神経系のはたらきを、「考える」という視点で詳述し、脊髄、脳幹、大脳皮質などの中枢神経系における情報処理過程を中心に解説する。また、睡眠の生理、脳死についても言及する。	深井喜代子	深井喜代子
13	動く	筋の構造と収縮のメカニズムについて解説する。また、運動における骨格と筋、関節の働き、これに伴う心肺系の反応およびその調節機構を解説する。	山本真千子	山本真千子
14	ホルモンとストレス反応	ホルモンによる調節について概要をおさえる。また、個体は常に刺激を受けているが、その刺激（ストレッサー）に対して、どのような調節をしているのかを概観する。	佐伯　由香	佐伯　由香
15	ケアへの応用	1～14回までに学習した内容が、自分の日常生活を再認識することに役立ったかどうかを問いかける。また、日常生活行動や子ども、高齢者、病者の世話をするのに、どうこれらの知識が生かされるか、例をあげて解説する。	菱沼　典子	菱沼　典子

＝英　語　Ｉ（'９６）＝（R）

〔主任講師：平賀　正子（立教大学教授）〕
〔主任講師：藤井　洋子（放送大学助教授）〕

全体のねらい
日本語と英語の比較に基づいて英語の難しさを考える。
英語の基礎的な文法を復習し、さらに効果的な学習方法を探る。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	はじめに	なぜ英語は難しいのかについて考える。この科目の概要を述べ、学習の仕方を説明する。	平賀正子（立教大学教授） 藤井洋子（放送大学助教授）	平賀正子（立教大学教授） 藤井洋子（放送大学助教授）
2	英語の音声	英語の発音、アクセント、リズムなどについて、どこが日本人にとって難しいのか、日本語の音の仕組みとも比較しながら説明を加える。	同上	同上
3	英文法の復	基本的な英語の文法について復習する。文型、文の要素、品詞などについて、日英語の比較を通して考える。	同上	同上
4	重要な品詞（1）－動詞	英語の動詞の種類、動詞に関係する時制、態などについて再検討する。	同上	同上
5	重要な品詞（2）－名詞、形容詞および副詞	英語の名詞と形容詞を再検討する。	同上	同上
6	語彙	いくつかの標準的な語彙の活用を中心に、語彙力の付け方を検討する。	同上	同上
7	日本語からみた英語（1）	日本語と英語の文の構造の違いを、「省略」という点から探る。日本語ではどのように省略がおこり、それがなぜ英語を学ぶときの難しさにつながるのかについて説明する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	日本語から見た英語 (2)	日本語と英語の文や表現の構造の違いを「曖昧さ」という点から探る。日本語に曖昧な表現が多いといわれているが、それが英語を学ぶとき、どのような影響を与えるのかについてのべる。	平賀正子 藤井洋子	平賀正子 藤井洋子
9	日本語にない英語の特徴 (1) －擬人法的表現	英語によくおこる無生物主語（擬人法）などの文法的な特徴を再検討する。	同上	同上
10	日本語にない英語の特徴 (2) － Itやoneを中心に	英語らしい語法を形作るitや oneを中心に文の構文的な特徴を再検討する。	同上	同上
11	難しい英文 (1) －長文	なぜ文は長くなるか検討し、難しい長文を易しく理解できるようにする。	同上	同上
12	難しい英文 (2) －省略文	省略はなぜおこるのかについて説明し、省略のある英文になじめるようにする。	同上	同上
13	難しい英文 (3) －丁寧文	英語にみられる英語や丁寧表現の特徴について説明し、理解を深める。	同上	同上
14	英語の常識	日常的な物事を英語でどのように表現するのか、知っていそうで知らない英語の表現を、文化的なことを含めて説明する。	同上	同上
15	まとめ	この科目で学んだことの総復習をし、知識を知識のまま終らせることなく、実際の英語の経験のなかで役立たせるにはどのようにしたらよいかについて、今後の学習の方向を示す。	同上	同上

＝ 英語Ⅱ（’９８）＝（R）

〔主任講師：霜崎　實（慶應義塾大学教授）〕

全体のねらい

さまざまな現代的なテーマを扱いながら、英語コミュニケーション能力の基礎を習得することを目的とする。毎回テーマを導入する英文を読み、語彙・表現・背景的知識を確認する。次に関連テーマについての対話文を通じ、口頭でのコミュニケーションにおいて語彙や表現を活用する方法を学ぶ。さらに、様々な機能表現を学ぶことによって、表現の幅を広げていきたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	Computer and Society	インターネットの普及にともなって、現代社会は急速にコンピュータ依存社会になりつつある。第１回目の今回は、コンピュータと私たちの生活との関わりをテーマとして取り上げる。	霜崎　實（慶應義塾大学教授）	霜崎　實（慶應義塾大学教授）
2	Recycling	私たちの生活はゴミと切り離すことができない。近年では使い捨て文化の蔓延でゴミが激増し、処理が追い付かない状況になっている。そこで、資源の再利用がますます重要となる。今回のテーマはリサイクル。	同　上	同　上
3	Wind Energy	毎日の生活に電気は必要不可欠である。しかし、水力発電用のダムは自然の生態を破壊する可能性があり、原子力発電には安全上の問題がある。今回のテーマは環境にやさしいとされる風力発電。	同　上	同　上
4	The Ozone Layer	物質文明の進展にともない私たちの生活は豊かになったが、地球環境はますます悪化しているとされる。今回は、私たちの日常生活で使われている化学物質によるオゾン層の破壊をテーマとして取り上げる。	同　上	同　上
5	Diet	健康は私たちの最大の関心事である。しかし、現代人はストレス・過食症・拒食症・肥満・アレルギー症など、さまざまな問題を抱えている。そこで今回は、健康とダイエットをテーマとして取り上げる。	同　上	同　上
6	Drinking	最近日本でのワインの消費量が増えているという。確かに、私たちのまわりにもワイン党の人が増えているが、一方ではビールや日本酒にこだわる向きも相変わらず多い。今回のテーマは飲酒。	同　上	同　上
7	Review (1)	今回は、第１回から第６回までの復習を中心に行う。具体的には、これまでに扱った語彙および慣用表現を再確認するのと同時に、重要な機能表現を含む対話文を新たに紹介する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	Smoking	最近ではようやく煙草を吸わない人への配慮が定着しつつある。レストランでも禁煙席を設けているところが増えているし、公共の交通機関でも禁煙が当然となりつつある。今回のテーマは喫煙を取り上げる。	霜崎　實	霜崎　實
9	Cellular Phones	携帯電話は便利ではあるが、問題点も少なくない。自動車運転中の使用は交通事故の危険をともなうし、電車やレストランの中での使用は他人の迷惑にもなる。今回のテー マは携帯電話。	同　上	同　上
10	Computer and Health	コンピュータにより必要な情報を短時間で検索し利用することが可能になった。しかし、長時間にわたるキーボードの使用は健康被害をもたらすという。今回は、コンピュータと健康がテーマである。	同　上	同　上
11	Working Women	近年女性の社会進出が目覚ましいが、まだ男女間の待遇 格差は依然として残っている。フェミニズム運動の盛んなアメリカにおいても事情は同じらしい。今回は働く女性の問題がテーマである。	同　上	同　上
12	Work and Leisure	ワーカホリックと呼ばれたのは一昔前のことで、私たち日本人も休暇を楽しむ余裕が持てるようになった。しかし、休暇をとれる期間は国によって事情が異なるようである。 今回のテーマは仕事と休暇。	同　上	同　上
13	Automobile Society	急激に「車社会」へと変貌した最近の日本では一家に２台の車を持つ家も珍しくはない。確かに生活は便利にはなったが、交通渋滞や交通事故の問題は深刻である。今回は車社会をテーマとして取り上げる。	同　上	同　上
14	Space	宇宙は神秘的であるがゆえに、魅力的である。しかし、 最近では惑星探査ロケットが送ってくる情報によって、少しずつではあるが神秘のベールが剥がされつつある。今回のテーマは、宇宙。	同　上	同　上
15	Review (2)	今回は、第８回から第14回までの復習を中心に行う。具体的には、これまでに扱った語彙および慣用表現を再確認 するのと同時に、重要な機能表現を含む対話文を新たに紹介する。	同　上	同　上

＝英　語　Ⅲ(’９７）＝（ＴＶ）

〔主任講師：平賀　正子（立教大学教授）〕
〔主任講師：藤井　洋子（放送大学助教授）〕

全体のねらい
標準的な速さの英語を聴いて理解する力を養成するとともに、語彙、文法、コミュニケーションの学習を通して、英語の総合力をつけることを目的とする。テレビドラマ２本を教材として用いる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	Snapshots: We're In This Together (1)	The Collino family, John, Mary, their children, Jennifer and Mark, and John's mother, Frances, respond to sudden announcement that John's employer is moving to another town. The family has to face a major decision about whether or not to move with the company from Pennsylvania to Florida.	平賀　正子（立教大学教授） 藤井　洋子（放送大学助教授） Victoria Muehleisen（早稲田大学助教授） Jerome Young（慶應義塾大学非常勤講師）	
2	〃 (2)	Mary and Jennifer have strong reasons for staying in the community. Mary's recent promotion makes it difficult for her to decide; but, she knows that she cannot support the family on her salary no matter how much the promotion means to her.	同上	同上
3	〃 (3)	Jennifer resists moving because she does not want to leave her school in her senior year. Mark, on the other hand, is positive about moving.	同上	同上
4	〃 (4)	There is conflict and disagreement concerning the possibility of a move, but each family member is able to express his or her concerns before a compromise plan is eventually worked out.	同上	同上
5	〃 (5)	The family celebrate their tentative solutions and begin to look ahead to their new lives. This drama shows how good communication skills can result in close family relationships.	同上	同上
6	The Gift of Amazing Grace (1)	“The Gift of Amazing Grace ”is the story of a close-knit urban family on the verge of making it big as a gospel singing group. The family, known professionally as the Wheeler Singers. has been selected to appear on the TV talent show“Future Faces.”	同上	同上
7	〃 (2)	As the first gospel group ever to appear on “Future Faces” the Wheeler Singers are a huge hit. Everybody in the family is excited about it except for Grace, a young teenager, who has no singing talent.	同上	同上

回	テ ー マ	内 容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	The Gift of Amazing Grace (3)	Although Grace secretly wants to leave the family, she loses her nerve to say it when she figures out that Aunt Faith still agonizes over her daughter's extrangement from the family. In the meantime, Silvertone Records is eager to produce a record by the Wheeler Singers.	平賀 正子 藤井 洋子 Victoria Muehleisen Jerome Young	
9	〃 (4)	Silvertone offers to produce a record, but on one condition. The record must include rock and pop music, sung in their style. The family members have mixed feelings about this.	同 上	同 上
10	〃 (5)	Grace worries about ruining the family's career. One day, she has to sing alone at the recording studio. Although she tries to do her best, she endsup running away in shame.	同 上	同 上
11	〃 (6)	Grace decides to leave the family and to live withher cousin Subaya, who has a separate life from the Wheelers. However, down deep both Grace and Subaya miss the family.	同 上	同 上
12	〃 (7)	The Wheeler Singers are worried that they may lose the " Future Faces " championship since they haven't found a pop song to sing on the next show.	同 上	同 上
13	〃 (8)	Both Morris, Grace's father, and Aunt Faith, Subaya's mother are heartbroken that their daughters have left them.	同 上	同 上
14	〃 (9)	Subaya has found that Grace has a talent for musical composition. Subaya and Grace take her new song to the Wheeler Singers at the studio, where they are reunited with the family to sing and win the championship.	同 上	同 上
15	〃 (10)	This entertaining drama underscores the need for people of all ages to grow and develop as individuals as well as family members.	同 上	同 上

＝英語Ⅳ（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：山内　久明（日本女子大学教授）〕
〔主任講師：グレアム・ロー（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

英語圏文化の原型としてのイギリスも、ボーダーレス化したといわれる現代においては、相対的個別の一つに過ぎないかもしれないが、イギリスの文化と社会のなかに普遍的価値を見つけ出すことを目指し、同時に日本との比較も視野におさめた英語学習。15章（回）からなる印刷教材、放送教材は、教育、コミュニティ、仕事の三分野に大別。各章はそれぞれのテーマを紹介する短いテクスト、現地取材のインタヴュー、さまざまの語学的演習、テーマに沿った短い文学テクストなどから成り立つ。特に読解と聞き取りに力点がおかれる。題して’Voices from Britain’。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	First School	On the early years of compulsory education at primary school from age five to eight, focusing on the child-centred education movement.	山内久明（日本女子大学教授） グレアム・ロー（早稲田大学教授）	山内久明（日本女子大学教授） グレアム・ロー（早稲田大学教授）
2	Sixth Form	On the final years of secondary education from age sixteen to eighteen, focusing on the issues of early specialisation and freedom of choice.	同上	同上
3	Ancient University	On the historical development and modern functions of Oxford and Cambridge Universities, focusing on the collegiate system.	同上	同上
4	New University	On the foundation and function of newer universities founded since the nineteenth century, with a particular focus on the post-war campus university.	同上	同上
5	Open University	On the creation and development of Britain's own ”University of the Air”, focusing on its contribution to the expansion of adult and continuing education.	同上	同上
6	House	On the development and structure of residential housing, focusing both on both socio-economic and cultural aspects.	同上	同上
7	Garden	On the physical and psychological functions of the modern domestic garden, emphasising its continuities with the formal public garden.	同上	同上

回	テ ー マ	内 容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	In the Country	On the economic and cultural function of the countryside in the past and today, focusing on its interdependence with the growing urbanised areas.	山内久明 グレアム・ロー	山内久明 グレアム・ロー
9	In the City	On the process of urbanisation, focusing on the presence of the past in the modern city, traditions of town planning, and the decay and renewal of the inner city.	同 上	同 上
10	In the Metropolis	On life in London in the past and today, focusing on the same three themes as in Unit 9 above.	同 上	同 上
11	Working from Home	On the increase in self-employment and the role of the home as a place of work, focusing on the situation of writers and artists.	同 上	同 上
12	Teacher	On the role of teacher in education and scholarship, focusing on career structure and socioeconomic status.	同 上	同 上
13	Doctor	On the role of the physician within the National Health Service, focusing on the General practictioner and the Local Health Centre.	同 上	同 上
14	Architect	On the role of the architect and town planner in the past and today, focusing on the relations between public and private initiatives.	同 上	同 上
15	British Voices on Japan	On interest in and studies on Japanese culture and society in Britain today, focusing on the views of several eminent British Japanologists.	同 上	同 上

＝英　語　Ｖ（’９７）＝（Ｒ）

〔主任講師：佐藤　良明（東京大学教授）〕
〔主任講師：内野　　儀（東京大学助教授）〕

全体のねらい
第二次大戦後のアメリカを代表する戯曲から、５作品を抜粋して読みます。俗語を含む多様な口語表現に慣れ、台詞と卜書きしかない戯曲の行間を読みとる力を養うことが語学的な目標です。その一方、演劇というメディアにからめとられた、戦後アメリカの精神史的変遷を知ることも学習の目的になるでしょう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	『セールスマンの死』（1）	Arthur Miller作の「Death of a Salesman」(1949)を３回にわったて読みます。１回目は幕開き直後、主人公のセールスマン、Willy Lomanが過去の幻想にひたる場面を取り上げます。さらに、物語全体の枠組みを解説しつつ、戯曲の読み方の基礎を学びます。	佐藤良明（東京大学教授） 河合祥一郎（東京大学助教授）	佐藤良明（東京大学教授） 河合祥一郎（東京大学助教授）
2	『セールスマンの死』（2）	２回目は、第１幕の幕切れ近く、生きがいを失って自殺を考えるWillyをめぐる、妻 Lindaと２人の息子BiffとHappyの場面を取り上げます。この作品の主要テーマである家族と資本主義、個人と社会といった問題を取り上げ、解説を加えます。	同上	河合祥一郎
3	『セールスマンの死』（3）	３回目は、全体の幕切れ近く、WillyとBiffの最後の対決の場面を取り上げます。もう一度作品全体の流れを把握するようつとめ、さらに、この作品のテーマとより広い意味での戦後アメリカ社会の問題との関係を、さまざまなレベルで考察します。	同上	同上
4	『欲望という名の電車』（1）	Tennessee Williamns 作の「A Streetcar Named Desire」(1947)を３回にわたって読みます。１回目は、作品の概説をまじえ、第１場で主人公のBlanche Deboisがニューオリンズの妹Stellaの家を訪ねてくる場面の、久々に再会した姉妹の会話を取り上げます。	同上	同上
5	『欲望という名の電車』（2）	２回目は、第６場。Stellaの家に居すわることになったBlanche。心身ともに疲れた彼女の前に、救いをもたらすかもしれないMitchという未婚の男が現れます。ここでは遊園地でデートをした後、深夜帰宅した２人の会話を取り上げます。	同上	同上
6	『欲望という名の電車』（3）	３回目は、第10場 この作品のもう一人の主人公、Stellaの夫Stanley Kowalskiと Blancheの幕切れ近くの対決の場面を取り上げます。作者Williamの劇作家としての特長や、 要望、女性、暴力、アメリカ南部といった、この作品のテーマについても解説します。	同上	同上
7	『フール・フォア・ラヴ』（1）	Sam Shepard作の「Fool for Love」(1983)を３回にわたって読みます。１回目は、幕開き直後の２人の主人公 EddieとMayの再会の場面を取り上げます。作品の概説を行ないにかなり特色あるShepardの劇作法についても解説し、こうした戯曲の読み方に慣れることを目指します。	佐藤良明 内野　儀（東京大学助教授）	内野　儀（東京大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	『フール・フォア・ラヴ』(2)	2回目は、作品の半ば近く、復縁を迫るEddieが怒って出ていき、舞台上に2人の幻想として存在するThe Old ManがMayを慰めるために、過去の回想を行なう場面を取り上げます。1回目から引きつづき、Shepard劇の登場人物や場面構成の特色について概説します。	佐藤良明 内野儀	内野儀
9	『フール・フォア・ラヴ』(3)	3回目は、作品の幕切れ近く、EddieとMayが、The Old Manをめぐる2人の決定的な過去を、それぞれまったく異なる物語として語る場面を取り上げます。作品のテーマは何かを考え、更に幻想、物語性、神話といった現代的な問題がこの劇とどうかかわるかを考察します。	同上	同上
10	『オレアナ』(1)	David Mamet作の「Oleanna」(1992)を3回にわたって読みます。1回目は、第1幕の幕開き近く、大学教授Johnの部屋にやってきたJohnと「女子」大生Carolの会話部分を取り上げます。沈黙と間が支配するMamet独特の台詞術に慣れることを目指します。	同上	同上
11	『オレアナ』(2)	2回目は、第2幕、「セクハラ」で大学当局に訴えられたJohnがCarolを説得しようとする場面を取り上げます。ここでは特に、2人の会話中にみてとれる第1幕での2人の関係の逆転に注目し、言語と権力という問題を考察します。	同上	同上
12	『オレアナ』(3)	3回目は、第3幕終盤の、JohnとCarolの最後の対決の場面を取り上げます。「セクハラ」で裁判所にまで訴えられて窮地に追い込まれたJohnとフェミニスト団体のバックアップを受け勝利を確信するCarol。さらに、この作品が同時代的に持つ意味について概説します。	同上	同上
13	『エンジェルズ・イン・アメリカ』(1)	Tony Kushner作の「Angels in America」第1部(1992)、第2部(1993)を3回にわたって読みます。1回目は作品の概要を解説し、第1部第1幕の第4場で、この劇の主人公PriorがゲイのパートナーLouisに、HIVウイルスに感染したことを告げる場面を取り上げます。	同上	同上
14	『エンジェルズ・イン・アメリカ』(2)	2回目は、第1部第3幕の2場で、Louisが友達で元ドラッグ・クイーンのBelizeに、Priorを見捨てた罪悪感をまったくちがう話としていいわけがましく語る場面を取り上げます。80年代アメリカで何が問題になっていたかが鮮明に伝わる場面。	同上	同上
15	『エンジェルズ・イン・アメリカ』(3)	3回目は、第2部第2幕の2場、予言者に選ばれたPriorのもとに天使が降臨する場面を取り上げます。ハルマゲドン、イデオロギーの終焉、ゲイ・パワーの台頭とアメリカ保守主義の復権といった同時代的問題をKushnerがどうこの作品に取り込んでいるかを概説します。	同上	内野儀

＝英語Ⅵ（’９９）＝（R）

〔主任講師：池上 嘉彦（昭和女子大学教授）〕

全体のねらい

私たちの日常生活の中で大きな役割を果たしている意味のやりとり — これを捉え理解するために、どのような概念や方法が用いられるのか、英語を中心に、そして日本語の場合との対照をも含めつつ、具体的な例に多く言及しながら考えてみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	日常の言語生活の中でのことばの意味	日常の言語生活の中で、私たちは意味に関わる多種多様の経験をしている。どのような出来事にどのような意味の問題が関わっているのか、導入として、以後の授業で取りあげる問題の多様性を確認する。	池上嘉彦（昭和女子大学教授）	池上嘉彦（昭和女子大学教授）
2	ことばの意味	ことばの〈意味〉ということで、私たちはどのようなことを諒解しているのであろうか。私たちはことばで、あるものを〈指す〉とか、あることを〈表わす〉とか言う。このような場合、〈意味〉はどう関わっているのか。〈意味〉の意味を考えてみる。	同上	同上
3	ことばの意味と辞書(1)	私たちはことばの〈意味〉を調べるために辞書を見る。しかし、辞書に記載の〈意味〉が不十分という経験をよくする。辞書に記されている〈意味〉とは何なのか、またそれとどうつき合えばよいのか — この点を改めて考え直してみる。	同上	同上
4	ことばの意味と辞書(2)		同上	同上
5	語彙の中の意味関係(1)	語の〈意味〉には似ているもの、似ていないもの、関係あるもの、関係ないもの、さまざまな場合がある。語と語の〈意味〉の間にはどのような型の関係が想定できるのであろうか。	同上	同上
6	語彙の中の意味関係(2)		同上	同上
7	文法と意味(1)	文法は一応身につけたはずなのに何かが旨く行かない — こういう経験をするのは、適切な言語運用は文法だけで決まるものではないからである。文法からもれるきめの細かい意味の問題、そして文法それ自体に深く浸透している意味の問題 — 文法と意味のインターフェイスを考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	文法と意味(2)	前頁のつづき	池上嘉彦	池上嘉彦
9	意味とコンテクスト (1)	現実の言語運用は、具体的な場面で具体的な思惑を持つ話し手、聞き手の間で行われる。そこではそれらの要因との関係で、ことばの意味はさまざまに変容され、駆け引きの対象にすらなる。そのようなレベルでの意味の問題を考える枠組を取りあげる。	同上	同上
10	意味とコンテクスト (2)		同上	同上
11	意味の変化(1)	ことばが時と共に変化するということは古い資料を見ればすぐ分かるし、現代でも進行中の変化を経験することがある。ことばの意味も例外ではない。一見ばらばらに見える変化にも、実はかなりの決まった方向性が認められるものである。	同上	同上
12	意味の変化(2)		同上	同上
13	意味の普遍性と相対性 (1)	違った言語で語の意味を較べてみると、似ているもの、似ていないもの、そして一見似ていながら微妙にずれているものがある。対応の仕方は出鱈目のようであるが、実はここでも意外と共通の制約の働いていることが知られている。	同上	同上
14	意味の普遍性と相対性 (2)		同上	同上
15	意味と文学	自明のことなのだが、文学が〈言語〉の芸術であるということは忘れられがちである。同じようにことばを素材としていても、何があるものを〈文学〉にし、あるものをさせないのであろうか。ことばを通しての芸術的創造性ということを考えてみる。	同上	同上

＝英　語　Ⅶ（’９７）＝（R）

〔主任講師：佐藤　良明（東京大学教授）〕
〔主任講師：柴田　元幸（東京大学助教授）〕

全体のねらい

1950年代から90年代まで、アメリカの社会と文化はどのように移り変わってきただろうか。小説作品とエッセイを行き来しながら（時々ポピュラー・ソングも挟んで）それぞれの時代の雰囲気を感じとっていく、ちょっとおしゃれなレッスンである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	50年代 (1)	John Cheever “The Enormous Radio” より。「豊かな社会」を実現したアメリカの高層アパートに暮らす夫婦の心理の綾を描き出す、短編の名手による秀作。	柴田元幸（東京大学助教授）	柴田元幸（東京大学助教授）
2	50年代 (2)	かつてフォークソング集会は、抑圧的な社会への異議申し立ての意味を担っていた。“We Shall Overcome” の歌を全米に広めたフォークシンガー、Pete Seeger の回想文を読む。	佐藤良明（東京大学教授）	佐藤良明（東京大学教授）
3	50年代 (3)	白人中産階級が繁栄を謳歌する一方で、黒人・ユダヤ系など少数派が文学を通して「声」を持ちはじめた。ユダヤ系の代表的作家 Bernard Malamud の叙情的な短編、“The First Seven Years” を読む。	柴田元幸	柴田元幸
4	50年代 (4)	George Toomer の青春メモワールBefore I Forgetより。テキサスの少年が「黒人」の音楽にどうやって引き込まれていったかを、誇張したユーモラスな文体で綴る、文化史的にも情報豊富な一篇。	佐藤良明	佐藤良明
5	60年代 (1)	激動の時代の過激な黒人指導者Malcolm X の演説は、どんな点が新しく魅力的だったのだろうか。ケネディ暗殺と同じ63年11月の講演 “Message to the Grass roots” を聞きながら彼のスタイルとメッセージについて考えよう。	同上	同上
6	60年代 (2)	Thomas Pynchon, The Crying of Lot 49の一節。60年代に登場した新しい世代の作家の中で最大の評価を得ることになったピンチョンの、重厚なイメージ世界に挑戦する。	柴田元幸	柴田元幸
7	60年代 (3)	ロック評論家Greil Marcusがウッドストックのコンサートを体験したすぐあとで、Rolling Stone 誌に寄せたルポ。躍動する文章の中に、時代が大きく動いていることの興奮が焼き付いている。	佐藤良明	佐藤良明

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	70年代 (1)	70年代の到来とともに、アコースティックなサウンドで私的な世界を歌うシンガー=ソングライターが人気を博した。James Taylor, Carole King, Jackson Browne 等について、歌詞の英語に触れながら、講師二人が対話する。	佐藤良明 柴田元幸	佐藤良明 柴田元幸
9	70年代 (2)	幼いころから山野を歩き、禅を修め、インディアンの心の世界を自分のものにしてきたGary Snyder。彼なら、西洋物質文明を批判する資格は十分ある。ピューリッツァ賞に輝いた詩集Turtle Island所収の講演“Wilderness”を読んで「エコロジー」の一歩奥を考えよう。	佐藤良明	佐藤良明
10	70年代 (3)	Jayne Anne Phillips, “Rayme”より。作者は「熱い」60年代から「冷たい」70年代にかけて青春時代を過ごした世代の女性。時代の空気が冷えていき、心が「解放」から「癒し」へと向かう流れを、あざやかにすくいとっている。	柴田元幸	柴田元幸
11	70年代 (4)	70年代なかば以降、選びぬかれた素朴な言葉を使って、小さな町に住む名もない人々の生活の一断面を切り取った秀作が多く書かれるようになる。そうした流れの代表的作家Raymond Carverの“The Calm”を読む。	同上	同上
12	80年代 (1)	Carverや村上春樹のように、読者の心を吸い取って流れるような物語が浮上してきたことと、Brian Enoらの「環境音楽」の登場とは同時平行的な現象のように思える。ＢＧＭを論じたJoseph Lanzaの快著Elevator Musicの中からＴＶシリーズ「ツイン・ピークス」の音楽を扱った部分を読んでみよう。	佐藤良明	佐藤良明
13	80年代 (2)	70年代に続いて静かで小さな物語が書かれる一方、世紀の終わりが近づくにつれて、もうひとつの20世紀、もうひとつの現代世界をまるごと夢見ようとする壮大なスケールの作家も出てくる。その一人、Steve Ericksonのデビュー作Days Between Stationsの一節を読む。	柴田元幸	柴田元幸
14	90年代 (1)	1950年代以降若者文化は基本的に「噪」の状態にあった。現代は違う。可能性の閉ざされた世界に生きる内向的な世代のスポークスマンとして登場した、Douglas CouplandのGeneration Xの一章を読んで、過剰なメディアの中を生きる心のありようを見つめてみたい。	佐藤良明	佐藤良明
15	90年代 (2)	すべての物語が語られてしまったように思える現代でも、“a good story”を求める気持ちは根強い。80年代に登場した物語の名手による、“a good story”そのものをテーマとした小品を読む。Paul Auster, “Auggie Wren's Christmas Story.” 古風な語り口に支えられた現代的な透明感を味わうことで、この講座を締めくくりたい。	柴田元幸	柴田元幸

＝ ドイツ語 Ｉ（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：新田 春夫（武蔵大学教授）〕

全体のねらい

ドイツ語の文法の基礎を学びます。各課ごとに少しずつドイツ語の文法法則を学び、次にそれらを使った基本表現を練習します。最後に、やさしいドイツ語で書かれたテクスト読み、それらが実際にどのような場面で使われるかを見ます。また、テレビでは、「ドイツ小劇場」でテクストの内容がドイツ人ゲストによって演じられています。このようにして、ドイツの社会と文化を知る鍵としてのドイツ語文法を体系的に、かつ、実際の運用の場との関連で学びます。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ドイツ語の音と文字 (1)	この課と次の課では、ドイツ語の発音とその文字による表記を学びます。まず、アルファベットを学び、それらを使って表される身近な略語の読み方を練習します。次いで、母音の発音を学び、単語による練習をします。また、テレビでは、ドイツ語の発音の耳慣らしに、ドイツのポップミュージックを聴きます。	新田春夫（武蔵大学教授）	新田春夫（武蔵大学教授）
2	ドイツ語の音と文字 (2)	ここでは、ドイツ語の子音の発音を学び、基本的な単語による発音練習をします。また、似たような語を発音し分ける練習もします。これらの学習を通じて、音声言語と文字言語との関係についても考えてみましょう。また、テレビでは、前回聴いたドイツのポップミュージックの続きを聴きます。	同上	同上
3	動詞の人称変化（現在） (1)	ドイツ語では動詞は１人称、２人称、３人称といった人称によって変化します。これを人称変化といいます。これは主語と動詞の語尾によって表されます。ここではその仕組みについて学び、基本的な動詞について練習します。また、テレビでは今回からドイツ人ゲストによる「ドイツ小劇場」が始まります。	同上	同上
4	名詞の性と格	ドイツ語の名詞には性、数、格の区別があります。ここではまず、性と格について学びます。性は語のグループ分けの為の文法的な区別であり、自然性とは必ずしも一致しません。格は、主語、目的語と言った、名詞が文中で果たす役割を表しています。これらの区別は主に冠詞の変化によって表されます。	同上	同上
5	動詞の人称変化（現在） (2)	動詞の中には、現在人称変化する際に、語尾だけでなく、一部の人称で、動詞の語幹の母音ａがウムラウトをおこしたり、また、ｅがi[e]に変化するものがあります。これらはたいてい日常的によく使われる重要な動詞ですので、これらについて練習をします。また、命令表現、要求表現についても学びます。	同上	同上
6	名詞の数	名詞には性と格の区別の他に、数の区別があります。数には、単数と複数の区別がありますが、複数形の作り方には、英語と異なって、何種類かがあります。ここではそれらのさまざまな複数形の作り方を学びます。また、日常生活に必須の、物の値段や時刻などの数量表現の練習もします。	同上	同上
7	人称代名詞 疑問代名詞 指示代名詞	代名詞も名詞の仲間です。従って、性、数、格の区別があります。しかし、それらは語尾変化ではなく、語形そのものが変化します。ここではそれらの語形変化と用法を学びます。また、疑問代名詞を使って、人にものを尋ねる表現の練習もします。さらに、不規則動詞wissen「知っている」の人称変化も学びます。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	冠詞類	dieser, jenerなどの語は定冠詞と同じ語尾変化をし、mein, deinなどの所有冠詞と否定冠詞keinは不定冠詞と同じ語尾変化をします。これらは定冠詞、不定冠詞と同様に、名詞の性、数、格を表示する機能を担っています。定冠詞、不定冠詞やそれらと同じ変化をする語の存在はとりわけ名詞の格表示の重要性を物語っています。	新田春夫	新田春夫
9	前置詞	前置詞は名詞、代名詞などの前に置かれて、それらが表す事物の位置・方向関係、時間関係、因果関係、手段などの意味を表します。ただ、どの場合にどの前置詞を使うかは言語習慣的な部分も多く、なかなか難しいこともあります。ここでは主要な前置詞の使い方について学び、具体的な場面での練習をします。	同上	同上
10	語順、否定表現	外国語の語順は必ずしも母語とは一致しないので、難しいものの一つです。しかし、ドイツ語の語順は、不定詞句で考えたときに、英語とは対称的で、むしろ日本語の語順に近く、あとは、文になったときの定動詞の位置だけが問題になります。ここではドイツ語の語順の基本原則について考え、その関連で否定語の位置を学びます。	同上	同上
11	分離動詞	ドイツ語文法で分離動詞と呼ばれるものは動詞が副詞や名詞など共に一つの新しい意味を持つようになった熟語表現ですが、従来、単語として扱われて来ました。ここではそのような分離動詞についてドイツ語の語順規則との関連で考えます。また、分離動詞には日常的にかなり頻繁に使われる重要な動詞が多く見られます。	同上	同上
12	再帰表現	他動詞の目的語が主語と同じ人称の代名詞である場合を再帰表現と言います。これは全体として自動詞表現であり、喜怒哀楽、関心などの感情表現が多く見られます。自動詞表現に他動詞を使うという発想も日本語には見られませんが、他動詞表現と比較しながら、一つの決まった表現として覚えましょう。	同上	同上
13	非人称表現	自然現象、心理状況、生理状態など、主語を特定しがたい場合は、esを主語とした表現を使います。これを非人称表現と言います。このような、日本語とは発想が異なった表現について練習します。また、テレビでは、今回から、ドイツ歌曲を鑑賞します。今回はモーツァルトの「春へのあこがれ」を聴きます。	同上	同上
14	形容詞(1)（付加語的用法）	ドイツ語の形容詞は名詞の前に置かれると語尾変化をします。それは冠詞と同様、名詞の性、数、格を表示するためです。ただし、定冠詞や不定冠詞などとの組み合わせによって語尾変化のパターンが異なります。ここではその仕組みを学びます。テレビで、今回鑑賞するドイツ歌曲はブラームスの「子守歌」です。	同上	同上
15	話法の助動詞(1)	話法の助動詞は本動詞が表す行為や出来事に関して、主語の能力、義務、許可、禁止などを表したり（客観的用法）、推量、命令、伝聞などといった話者の主体的判断を表します（主観的用法）。ここでは話法の助動詞の語形変化と客観的用法を学びます。テレビでの今回のドイツ歌曲はメンデルスゾーンの「歌の翼に」です。	同上	同上

＝ ドイツ語 Ⅱ（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：新田 春夫（武蔵大学教授）〕

全体のねらい

ドイツ語Ⅰに引き続き、文法の基礎を固めます。さらに、ドイツ語Ⅱでは、ドイツの歴史の発展に貢献した８人の人物とそれらの人が活躍した７つの都市について書かれたテクストを読み、ドイツの歴史、社会、文化に関する理解を深めることを目指しています。また、これらのテクストは、講義、インタビュー、新聞記事、日記、手紙など、さまざまな文体で書かれていますが、それらに特徴的な表現形式にも慣れて頂きます。テレビでは、ドイツでロケを行い、テクストで扱われている人物と都市の紹介をします。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	動詞の３基本形	不定詞、過去、過去分詞を動詞の３基本形と言います。不定詞からは現在人称変化、過去からは過去人称変化、過去分詞からは現在完了形や受動形が作られます。ですから、これらは動詞の変化体系の原形とも言うべきものです。ここでは、過去、過去分詞の作り方を学びます。また、今回と次回では言語学者、グリム兄弟とカッセルの町を紹介します。	新田春夫（武蔵大学教授）	新田春夫（武蔵大学教授）
2	時称 (1)	ドイツ語の時称には、現在、過去、現在完了、過去完了、の４つの区別があります。ここでは、過去時称における人称変化とその用法について学びます。また、現在形が未来の事柄も表すように、時称は必ずしも物理的な時間関係を表すわけではありません。このような文法規則としての時称と物理的な時間関係についても考察します。	同上	同上
3	時称 (2)	ここでは現在完了と過去完了の作り方、それらの人称変化および用法について学びます。ドイツ語では現在完了は過去形と同じく過去の事柄を表しますが、そこには過去の事柄についての捉え方の違いが表れています。そのような両者の違いについても考察します。また、今回と次回では、発明家でツァイス社の共同設立者、エルンスト・アッベとイェーナの町を紹介します。	同上	同上
4	動詞の結合価	動詞がとる目的語や副詞などの個数とそれら目的語の格は動詞ごとに決まっています。従って、それは日本語の場合に対応しているとは限らず、純粋に個別言語的な決まりです。これを動詞の結合価と言います。ここでは重要な動詞について結合価のパターンを学びます。これは正しいドイツ語の文を作るために極めて重要です。	同上	同上
5	不定詞、分詞	不定詞は名詞的に主語や目的語などとして、過去分詞、現在分詞は形容詞や副詞などとして使われますが、同時に本来の動詞としての性質から自らも目的語や副詞をとって複雑な内容の文を作ることができます。そのような不定詞、分詞の用法を学びます。また、今回と次回では、社会学者マックス・ウェーバーとハイデルベルクの町を紹介します。	同上	同上
6	話法の助動詞(2)	ここでは命令、伝聞、推量など、話者の主体的判断を表す形式を学びます。これらは話法の助動詞の主観的用法と呼ばれています。特に、推量表現は話者が自らの判断について持っている確信度によってさまざまな表現があります。また、werdenを使った、いわゆる未来形についても考察します。	同上	同上
7	形容詞 (2)（比較表現）	形容詞は名詞を修飾する付加語的用法、seinやwerdenと共に動詞句を形成する述語的用法、動詞を修飾する副詞的用法がありますが、これらのどれについても比較表現を作ることができます。ここでは比較級、最上級の作り方と用法を学び、また、その他の重要な比較表現を学びます。今回は教育家ルードルフ・シュタイナーとシュトットガルトの町を紹介します。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	受動表現 (1)	動詞が表す行為に関して、その行為者の側から捉えた表現が能動表現ですが、同じ行為を受け手の側から見たものが受動表現です。ここでは受動形の作り方と用法について学びます。また、今回と次回では、女性建築家、マルガレーテ・シュッテ＝リホツキーとフランクフルトの町を紹介します。	新田春夫	新田春夫
9	受動表現 (2)	助動詞werdenと過去分詞によって作られる受動表現は動作受動と呼ばれますが、ここでは、助動詞seinと過去分詞で作られる状態受動表現を学びます。また、これらの他にもいくつかの受動的意味の構文がありますが、それらについても学び、それらが担っている機能について考察します。	同上	同上
10	使役表現	使役表現は、他者になんらかの行為を実行させるという意味を表しますが、その他にも、その派生的用法として、容認、勧誘、受動、可能などの意味も表します。ここでは、使役表現の作り方とその用法を学びます。また、今回と次回は、ノーベル賞物理学者、ヴェルナー・ハイゼンベルクとゲッティンゲンの町を紹介します。	同上	同上
11	接続詞と複合文 (1)	一つの文の中に別の文を埋め込んで複合的な文を作ることができます。その場合、前者を主文、後者を副文と言います。主文と副文の関係を表すのが接続詞です。ここでは、両者の関係が時間、原因・理由、目的、手段などの副詞的関係にあることを表す接続詞を学びます。また、副文における定動詞は副文末に置かれますが、そのような語順の練習もします。	同上	同上
12	接続詞と複合文 (2)	引き続き接続詞と複合文を勉強します。ここでは、副文が主文の中で主語、目的語などの名詞的役割を果たす際の接続詞dassや疑問文を主文に埋め込む方法について学びます。また、これとの関連で不定詞句についても考察します。今回と次回では、女性哲学者ハンナ・アーレントとハイデルベルクの町を紹介します。	同上	同上
13	関係文	関係文も複合文の一つです。関係文の場合は、主文中の名詞（先行詞）を副文（関係節）が修飾しているという関係にあります。接続詞に相当するものが関係代名詞であり、これは先行詞を受けたものです。ここでは関係代名詞の語形変化と関係文の作り方を学びます。	同上	同上
14	接続法 (1)	これまで学んだ動詞の変化体系は直説法と呼ばれ、話者が事柄を事実であると捉えている場合の形式ですが、接続法は事実性に関しては中立や非事実として捉えている場合の形式です。ここでは、接続法Ⅰと呼ばれる形式を学びますが、主に要求文や間接引用に使われます。また、今回と次回ではジャーナリスト、ルードルフ・アウクシュタインとハンブルクの町を紹介します。	同上	同上
15	接続法 (2)	ここでは接続法Ⅱと呼ばれる形式を学びます。これは非現実の事態を想定する場合に使われます。また、これからの派生的用法として、丁寧な要請、控えめな主張など、表現を和らげる用法があります。これらは日常的にも頻繁に使われる重要な表現手段ですので、ほとんど慣用的な表現として覚えましょう。	同上	同上

＝ ドイツ語 Ⅲ（’９７）＝（R）

〔主任講師：石光 泰夫（東京大学教授）〕

全体のねらい

ドイツ語圏の文学、思想、エッセイなどのジャンルから含蓄深い文章をいくつか厳選し、そのひとつひとつについて数回ずつをかけながら、じっくりとドイツ語にひたってゆきます。その際、文法事項の確認はもちろんのことですが、主眼はあくまでもドイツ語のきわめてユニークな特質、そしてその特徴を生かしてはじめてえられるそのテクストの独特な味わいを感得するところにあります。一点一画もゆるがせにしないミクロな文法の理解から、歴史的・文化的な背景というマクロのレヴェルまで、言語の広大な宇宙を旅する読解という冒険を、この時間でともに体験してみることにしましょう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	独文解釈の入門的心得	吉本バナナの『キッチン』を独訳したものから二カ所ほどをとりだし、ドイツ語の文章の特異性を検討しながら、これからドイツで書かれた文章を読んでいくさいに注意すべき事項をいくつかあげる。	石光泰夫（東京大学教授）	石光泰夫（東京大学教授）
2	独文解釈のための文法事項を確認する（1）	ドイツ語のテクストでよくでてくる割には理解がゆきとどいていない接続法を詳細に解説する。	同上	同上
3	独文解釈のための文法事項を確認する（2）	例文を豊富にあげながら、接続法の説明を継続する。	同上	同上
4	独文解釈のための文法事項を確認する（3）	ドイツ語の文章のニュアンスを決定するほど重要な役割をしていながら、辞書などでその真の意味合いが確かめにくい不変化詞を詳述する。	同上	同上
5	独文解釈のための文法事項を確認する（4）	例文を豊富にあげながら、さらにいくつかの不変化詞をとりあげてそのニュアンスを解説する。	同上	同上
6	独文解釈のための文法事項を確認する（5）	ドイツ語は英語などとは決定的に異なる語順で文章を構成する。したがって語順にたいする繊細な理解は独文解釈においてきわめて重要であるのに、比較的かえりみられることがない。その語順をとりあげて詳述する。	同上	同上
7	独文解釈のための文法事項を確認する（6）	豊富に例文をあげながら、さらに語順を検討する。例文は、次回以降にむけて、少しずつ長いものを採用している。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	小説の文章を読む(1)	ケストナーの『エーミールと探偵たち』を読む。長い文章になれることが主眼。文脈を見失わない読み方をするよう心がける。	石光泰夫	石光泰夫
9	小説の文章を読む(2)	ヨーハン・ペーター・ヘーベルの愉快な掌編小説『ワカリマセン』を読む。語順の妙味などが発揮されているので、以前に確認したことを思い出しながら精読する。	同上	同上
10	小説の文章を読む(3)	同じくヘーベルの『思いがけない再開』を読む。これ掌編小説ながら、ドイツ文学全体のなかでも傑作に数えられるほどの文章なので、味わいを大事にして読むようにする。	同上	同上
11	小説の文章を読む(4)	オーストリアの作家アーダルベルト・シュティフターの名高い短編小説『石さまざま』のなかから「水晶」の一部を読む。これも大変に美しい文章である。いかにもドイツ語らしい言い回しもふだんにあるので、ドイツ語の面白さを味得してもらうことを主眼にする。	同上	同上
12	小説の文章を読む(5)	今回は一転して現代のもっとも問題性に富んだ作家カフカの有名な短編小説『起きてのまえで』を読む。文章は平易なので、内容をしっかりと考えるような読み方を工夫する。	同上	同上
13	思想の文章を読む(1)	フロイトの代表作『夢解釈』から、第7章冒頭を読む。全体が夢の記述なので、読みにくくはないはず。含蓄のある夢の記述から、深い意味を読みとれるよう努力する。	同上	同上
14	思想の文章を読む(2)	次回とあわせてハイデガーの「創造的な風景ーわれわれはなぜ田舎にとどまるか」を読む。ドイツを代表する哲学者の文章で、ドイツ語の特性が最大限生かされている。原語でなければ味わえないニュアンスを重点的に吟味する。	同上	同上
15	思想の文章を読む(3)	前回の続き。これが締めくくりになるので、このあとさらに長い文章にもアタックしていけるようなアドヴァイスもする。	同上	同上

＝ ドイツ語 Ⅳ（’９８）＝（R）

〔主任講師：幸田　薫（東京大学教授）〕

全体のねらい
さまざまな種類のテクストを読みながら、ドイツ語の読解力を身につけるとともに、ドイツ人の思考法やものの見方に学んでいきたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	・会話文：ドイツの印象、日本の印象 ・文法：単語の整理(1)	日本人とドイツ人の主任講師がそれぞれドイツと日本の印象を語り合いながら、自己紹介する。 文法：ドイツ語Ⅰ・Ⅱ（1997年度）にテキストに現れた単語を２回に渡ってまとめる。今回は単一語。	幸田　薫（東京大学教授） Gabriele Stumpp（東京大学外国人教師）	幸田　薫（東京大学教授） Gabriele Stumpp（東京大学外国人教師）
2	・インタビュー：ドイツの若者たち ・文法：単語の整理(2)	週間新聞 die Zeit (1996.8.23) の若者へのインタビューと投書を読む。 文法：前回に続き、単語の整理を行う。今回は派生語と複合語	幸田　薫	同　上
3	・ショートストーリー：過去への追慕 ・文法：主な文型　(1)	過去を振り返ることの必要性を考えさせる短い文章（Jürgen Becker: Früher war das ganz anders）を読む。 文法：ドイツ語の基本的な文型を整理し、読解に利用する方法を学ぶ。	同　上	同　上
4	・ショートストーリー：人間の適応力 ・文法：主な文型　(2)	人間がいかに過去を忘れやすいかを考えさせる短い文章（Maria Luise Kaschnitz: Zu House）を読む。 文法：前回に続き、基本文型について学習する。熟語的表現についても学ぶ。	同　上	同　上
5	・ショートストーリー：ドイツ的ウィット ・文法：時称の用法	前章は多少難しかったので、息抜きとしてウィット２題を読み、ドイツ的ユーモアについて考えてみる。 文法：現在、過去、現在（過去）完了、未来の時称が実際の文章でどの様に使い分けられているか調べる。	同　上	同　上
6	・説明文：環境先進国ドイツ ・文法：受動文	ドイツにおける環境問題への取り組みについて書かれた説明文を読む。（出典は、Tatsachen Deutschland, 1996） 文法：能動文と受動文の練習。	同　上	同　上
7	・説明文：民族のるつぼ中欧 ・文法：副文と語順　(1)	Luise Rinser の“Wer wirft den Stein ?”の一節を読み、ドイツにおける小数民族の問題を考える。 文法：不定詞句の練習を行なう。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	・随筆文：統一後のドイツ ・文法：副文と語順(2)	統一ドイツの社会的・経済的状況などに関するLeipzig 大学の Steffi Richter 教授へのインタビューを随筆文として書き直したものを読む。 文法：副文の構造と副文の種類について既習知識を整理する。	幸田　薫 Gerhard Stikel Steffi Richter (Leipzig 大学教授)	幸田　薫 Gabriele Stumpp
9	・小説：女性の時代 ・文法：副文と語順(3)	ドイツの代表的女流作家である Barbara Frischmuth の“Glück”の一節を読み、人口減少の続くドイツの事情を考える。 文法：副文　関する練習問題を行なう。	幸田　薫	同上
10	・小説：個人主義 ・文法：接続法(1)	ドイツのノーベル賞作家 Heinrich Böll の“Wie in schlechten Romanen”という短編の一節を読む。 文法：接続法の種類について既習知識を整理する。接続法Ⅱの練習をする。	同上	同上
11	・インタビュー：ドイツ語の現在と未来 ・文法：接続法(2)	国立ドイツ語研究所所長の Gerhard Stickel 教授に新しい正書法や言語変化の実態などについて聞く。 文法：接続法Ⅰについて練習する。	幸田　薫 Gerhard Stikel（ドイツ語研究所所長）	幸田　薫
12	・論文：ことばと思考 ・文法：文脈と文の機能(1)	Wilhelm von Humboldt のことばと思考に関する論文の一部を読み、具体的にドイツ語と日本語の思考がいかに異っているかを考える。 文法：文と文をつなぐ文法的手段について考える。今回は接続詞と指示語。	幸田　薫	幸田　薫 Gerhard Stikel
13	・報道文：インターネット ・文法：文脈と文の機能(2)	週刊誌 Spiegel(1996.11) の「インターネットが社会を変革する」と題する記事の一部を読んで、情報社会について考える。 文法：前回に続き、文と文をつなぐ言い替えなどの手段について考える。	同上	同上
14	・演説：技術時代 ・文法：テクストの構造	元大統領の Carl Friedrich von Weizsäcker の演説「人間の目的に役立つ技術」を読む。 文法：テクストの文法的・意味的・機能的な構成について学習する。	同上	同上
15	・新聞社説：戦後51年目 ・文法：テクストの機能	Süddeutsche Zeitung(1997.1.1) の社説「戦後51年目」を読んで、同じ様な立場にある日本と比べてみる。 文法：テクスト機能――テクスト全体の持つ目的――をまず捉えることによって、読解が容易になることを学ぶ。	同上	同上

＝ フランス語 Ⅰ＝（ＴＶ）

〔主任講師：増田 一夫（東京大学助教授）〕
〔主任講師：鈴木 啓二（東京大学教授）〕

全体のねらい
フランス語Ⅰ、Ⅱあわせて45分×30回を１つの全体としてとらえる。フランス語Ⅰでは、無理のないプログラム構成によって、コミュニケーション能力の獲得への基礎を学習する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	La belle histoire（うるわしき物語）	内容：アルファベット、名詞の性と数、不定冠詞、定冠詞、発音練習１	鈴木啓二（東京大学教授） 増田一夫（東京大学助教授）	鈴木啓二（東京大学教授） 増田一夫（東京大学助教授）
2	Rouge ou blano?（赤か白か？）	内容：主語人称代名詞、être動詞、avoir動詞、-er（第１群規則）動詞、部分冠詞、１～30までの数詞、発音練習２	同上	同上
3	Le jardin extraordinaire（魔法の庭）	内容：疑問文（イントネーション、est-ce que?）、否定文、il faut ＋不定詞とdevoir、動詞vouloir, pouvoir、発音練習３	同上	同上
4	Nos amis les betes（人類の友）	内容：on、否定疑問文とsiを用いた答え、名詞の複数形２、形容詞、tout、発音練習４	同上	同上
5	Attention! Peinture fraiche!（注意！ペンキ塗りたて）	内容：部分冠詞、du, de la、縮約形、du, des, au, aux、否定文中の部分冠詞、不定冠詞、国の名前	同上	同上
6	L'amour sans fil（糸の切れた愛）	内容：様々な動詞の活用（－－ir型動詞、aller, venir, sortir）近接未来、近接過去、31から100までの数字	同上	同上
7	Double surprise（二重のおどかし）	内容：疑問代名詞 qui, quést-ce qui, que, quést-ce queなど、疑問副詞、quand, où, pourquoi, comment など、疑問形容詞 quel	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	Lesintrus（闖入者）	内容：指示代名詞 ce, cetle, ces 所有代名詞 mon, ma, mes など、強調構文 cést, qui, cést, que	鈴木 啓二 増田 一夫	鈴木 啓二 増田 一夫
9	A vos ordres Mesdames!（お気に召すまま）	内容：非人称動詞、不規則動詞 faire, dire, prendre, pouvoir, vouloir, devoir, savoir＋不定詞、時刻	同上	同上
10	Un, deux, trois! Partez!（1. 2. 3. スタート!）	内容：人称代名詞の強勢形、ne...rien, ne...personne, ne...nulle partを使った否定文	同上	同上
11	Bas les masques（仮面を捨てろ）	内容：形容詞と副詞の比較級と最上級、指示代名詞	同上	同上
12	Dîner surprise（思いもかけぬ夕食）	内容：動詞の肯定命令形、動詞の否定命令形、代名動詞 s'appeler, se promener など	同上	同上
13	Les inspirations du créateur（創作家のひらめき）	内容：複合過去形（肯定形、否定形）、関係代名詞qui, que, oú, dontr	同上	同上
14	Le coeur á tout casser（とてつもない心臓）	内容：受動態（現在形、複合過去形）、様々な否定の表現（ne...plus, ne...jamais, ne...pas encoreなど	同上	同上
15	まとめテスト		同上	同上

＝ フランス語 Ⅱ＝（ＴＶ）

〔主任講師：増田　一夫（東京大学助教授）〕
〔主任講師：鈴木　啓二（東京大学教授）〕

全体のねらい

フランス語Ⅰにひきつづいて、生きたフランス語の習得をめざす。何本かのスケッチをもとに、様々な表現や文の構造を覚え、それが実際に応用できるようにする。授業では、発音の練習にも時間をさき、単なる一方的な知識の伝達に終わらないよう心がける。文法の説明は、フランス語Ⅰ．Ⅱ．全体で完結させる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	Bsisers volés（盗まれた口づけ）	関係代名詞　lequel, laquelle, lesquels, lasquelles. 前置詞＋関係代名詞	鈴木啓二（東京大学教授） 増田一夫（東京大学助教授）	鈴木啓二（東京大学教授） 増田一夫（東京大学助教授）
2	Une âme charitable（慈悲深い心）	目的語となる人称代名詞　me, te, nous, vous, le, la, les. など。	同　上	同　上
3	lemystére de la dane noire（黒礼の女の謎）	動詞の半過去形、大過去形	同　上	同　上
4	La filature（尾行）	中性代名詞　le , en, y	同　上	同　上
5	Les professinnels（仕事師たち）	faire, laisser, voir, entendre＋不定詞	同　上	同　上
6	Rira bien qui rira le dernire（最後に笑う者が勝つ）	直説法単純未来形および前未来形	同　上	同　上
7	Savoir recruter（リクルートのノウハウ）	条件法現在形、条件法過去形、所有代名詞	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	Drole de locataire （奇妙な下宿人）	現在分詞、n'importe quoi, n'importe qui, n'importequel	鈴木啓二 増田一夫	鈴木啓二 増田一夫
9	Les trois coups （三度の木追音）	ジェロンディフ、様々な諺、シラブルの数え方	同上	同上
10	Une armoire rebelle （言うことを聞かぬ戸棚）	接続法（1）	同上	同上
11	Ah les golies vacances （ああ美しきかなヴァカンス）	接続法（2）	同上	同上
12	Complexe d'Cedipe （エディプス・コンプレックス）	状況補語説における接続法、形容詞節における接続法、形容詞、auoun, chaque	同上	同上
13	Casting （キャスティング）	直接話法、間接話法、時制の一致	同上	同上
14	Le tournoi （馬上槍試合）	直説法単純過去形、複合過去と半過去の用法	同上	同上
15	まとめ		同上	同上

＝ フランス語 Ⅲ（’９８）＝（R）

〔主任講師：三浦 信孝（中央大学教授）〕

全体のねらい

受講生に中級から上級への橋渡しになるような総合的フランス語力の養成をめざす。素材としては18世紀から20世紀までのフランスの作家が日本について書いた文章を15選んで詳しく読む。従ってフランス人の日本像の変遷を辿るという比較文学比較文化的アプローチを重視する。実際の講義は協力者のM.フェリエと行い仏語を多用する。気晴らしを兼ねて毎回プレヴェール作詩のシャンソンを１曲聴く。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	18世紀啓蒙の世紀の日本像	「百科全書」とヴォルテール プレヴェールのシャンソン(1)	ミカエル・フェリエ（中央大学助教授） 三浦信孝（中央大学教授）	ミカエル・フェリエ（中央大学助教授） 三浦信孝（中央大学教授）
2	19世紀後半の日本像 (1)	ゴンクール兄弟とジャポニスム プレヴェールのシャンソン(2)	同上	同上
3	19世紀後半の日本像 (2)	ジュール・ヴェルヌの『80日間世界一周』 プレヴェールのシャンソン(3)	同上	同上
4	19世紀後半の日本像 (3)	ピエール・ロティの『お菊さん』 プレヴェールのシャンソン(4)	同上	同上
5	20世紀前半の日本像 (1)	詩人大使クローデルの日本 プレヴェールのシャンソン(5)	同上	同上
6	20世紀前半の日本像 (2)	「日本の一野蛮人」アンリ・ミショー プレヴェールのシャンソン(6)	同上	同上
7	20世紀前半の日本像 (3)	アンドレ・マルローの伊勢神宮 プレヴェールのシャンソン(7)	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	20世紀前半の日本像 (4)	ルロワグーランのアイヌへの旅 プレヴェールのシャンソン(8)	ミカエル・フェリエ 三浦信孝	ミカエル・フェリエ 三浦信孝
9	20世紀後半の日本像 (1)	マルグリット・デュラスとヒロシマの記憶 プレヴェールのシャンソン(9)	同上	同上
10	20世紀後半の日本像 (2)	ロラン・バルトと「記号の帝国」日本 プレヴェールのシャンソン(10)	同上	同上
11	20世紀後半の日本像 (3)	ユルスナールの「企業国家」日本批判 プレヴェールのシャンソン(11)	同上	同上
12	20世紀後半の日本像 (4)	レヴィ・ストロースの隅田川 プレヴェールのシャンソン(12)	同上	同上
13	20世紀後半の日本像 (5)	ニコラ・ブヴィエと日常の中の能 プレヴェールのシャンソン(13)	同上	同上
14	20世紀後半の日本像 (6)	イヴ・シモンと未来への旅 プレヴェールのシャンソン(14)	同上	同上
15	20世紀後半の日本像 (7)	フランソワ・ローの竜安寺石庭 プレヴェールのシャンソン(15)	同上	同上

＝ フランス語 Ⅳ（’９８）＝（R）

〔主任講師：保苅　瑞穂（獨協大学教授・東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

フランス語を読む能力を高めることを目的とする。そのためにさまざまな種類の文章にふれて、文法の知識を確実にすると共に言葉に対する感覚が身につくように講義を進めたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	アナトール・フランス『わが友の書』1	左記の本から作者の少年時代を回想した一節を取り上げる。やさしい単語と平明な構文で書かれた古典的な名文として有名な一節である。	保苅瑞穂（獨協大学教授・東京大学名誉教授）	保苅瑞穂（獨協大学教授・東京大学名誉教授）
2	アナトール・フランス『わが友の書』2		同上	同上
3	アンドレ・ジッド『田園交響曲』	半過去と単純過去を基調とする伝統的な小説における動詞・時制の使い方に注意すること。６回目のカミュの『異邦人』と比較して双方の異同を確かめること。	同上	同上
4	サン＝テクジュペリー『人間の土地』1	彼は『星の王子さま』で日本でも知られる飛行士の職歴をもった作家で、この一節は砂漠に不時着した２人の飛行士が死の直前に救われるクライマックスを描いたもの。緊迫した前半と救われた生命への讃歌である後半の対比の妙を味わうこと。	同上	同上
5	サン＝テクジュペリー『人間の土地』2		同上	同上
6	アルベール・カミュ『異邦人』	主人公ムルソーが太陽の照りつける海岸でアラブ人を射殺するいわゆる不条理殺人を描いた場面。カミュは小説の地の文に複合過去を用いることで小説技法に革新をもたらした。その点に注意してよんでみる。	同上	同上
7	アラン「散文について」	アランの『芸術論集』の中の散文論をよんで、散文の特徴について勉強する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	アラン 「詩と散文について」	詩を散文に比較して、詩の特徴について基本的な点を勉強する。	保苅瑞穂	保苅瑞穂
9	ポール・ヴェルレーヌ 『月の光』	８回目で取り上げた詩の勉強をふまえて、ヴェルレーヌの『月の光』をよむ。	同上	同上
10	デカルト 『方法叙説』	この本の冒頭部分をよむ。これは17世紀の文章であるが、現代文法の知識があれば少し古い文章でも十分によめることを知ること。また論理的な思考の展開をしっかりと把握すること。	同上	同上
11	ジャン＝ジャック・ルソー 「マルゼルブへの手紙」	これは18世紀のルソーの手紙の一節である。比較的長い文であるから、文の構造をまず正確に掴むこと。その上でルソーのゆたかな感性と散文の美しさを味わうこと。	同上	同上
12	スタンダール 『赤と黒』	スタンダールの簡素で、スピード感のある文章を味わうこと。	同上	同上
13	ギュスターヴ・フローベール 『感情教育』	フローベルは散文による文学表現に生涯にわたって骨身をけずった作家であったが、『感情教育』はその成果である。一語一語のことばの重みを感じとるように努めること。	同上	同上
14	マルセル・プルースト 『失われた時を求めて』１	フランス語による散文表現が長い伝統をふまえた上で、どこまで可能であるか。この小説ではそれがほとんど限界まで突きつめられている。各回の読解力をためすつもりで、挑戦してほしい。	同上	同上
15	マルセル・プルースト 『失われた時を求めて』２		同上	同上

＝中　国　語　Ⅰ　＝（R）

〔主任講師：傳田　章（放送大学教授）〕

全体のねらい

やさしいスキットを読みながら、中国語の発音と文法の基礎を学習する。文法は全体の枠組みを見通しての理解を心がけ、中国語Ⅰでは文の構成、品詞の機能、動詞を中心とした統語構造を学習する。平行して機能後を中心に基本語彙の習得をはかって、中国語Ⅱに接続する。２個学期で基礎課程を終える予定。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	発音　Ⅰ	四つの声調 単韻母(1)：　a，e 声母　(1)：　b，p，m，f 声母　(2)：　d，t，n，l	傳田　章（放送大学教授） 呉　念聖（早稲田大学講師）	傳田　章（放送大学教授）
2	発音　Ⅱ	声母　(3)：　zh，ch，sh，r 声母　(4)：　g，k，h 複韻母(1)：　ai，ei，ao，ou 複韻母(2)：　an，en，ang，eng 第三声の連続　　主語と述語	同　上	同　上
3	目的語	軽声　　声母(5)：　i，q，x 動詞と目的語 修飾語：　連体，連用，副詞 特殊疑問：　疑問詞疑問文 構造の重なり	同　上	同　上
4	補語　相　Ⅰ	声母(6)：　z，c，s 単韻母(2)：　zhi，zi の韻母 断定，動詞と補語：　動詞“是” 状況の相：　助詞“了”，“呢” “不”の声調変化	同　上	同　上
5	発音　Ⅲ	単韻母(2)：　i，i で始まる複韻母 単韻母(3)：　u，u で始まる複韻母 単韻母(4)：　ü，ü で始まる複韻母 韻母 o　　韻母 ê 選択疑問(1) 場面の提示(1)	同　上	同　上
6	語気　Ⅰ	限定修飾語(1)：　連体修飾語，助詞“的” 限定修飾語(2)：　名詞句代理 当否疑問：　助詞“嗎” 推量：　助詞“吧”	同　上	同　上
7	語気　Ⅱ	意志・勧誘：　助詞“吧” 感情の表出：　助詞“啊” 助詞“啊”の連声 文の三層構造	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	移動・授与	場所目的語：　存在，移動動詞“在”，“来”など 二重目的語：　授与動詞“給”など 形容詞述語(1) 人称代名詞　　指示詞・指示代名詞 “一”の声調変化	傳田　章 呉　念聖	傳田　章
9	数	韻母　ｅｒ 限定詞－助数詞構造(1)： 限定詞助数詞構造(2)：　名詞句代理 数詞　　基数と序数 末尾桁助数詞省略	同　上	同　上
10	相　Ⅱ	疑問数詞：　“几”と“多少” 完了相：　“Ｖ了” 未然：　副詞“没（有）” 状況の相と動詞の相	同　上	同　上
11	相　Ⅲ	持続相：　“在－ＶＰ”，“Ｖ着” 経験相：　“Ｖ過” 選択疑問(2)：　“Ｖ了没有？	同　上	同　上
12	動作量	動作量補語(1)：　“看一次” 動作量補語(2)：　“看一看” 動作量補語(3)：　“看一会儿” 動作量補語と目的語：	同　上	同　上
13	認定	動詞句補語を伴う動詞：　“能”，“要”など 動作量補語(4)：　“好一点儿”	同　上	同　上
14	思考・認識	文補語を伴う動詞：　“想”，“説”など 文目的語をとる動詞：　“知道”，“告訴”など 文補語と文目的語	同　上	同　上
15	目的補語	目的補語を伴う動詞(1)：　“請”など 動詞と補語，動詞と目的語： Ｖ－Ｏ，Ｖ－Ｃの整理 語句の結合：　統辞構造の整理	同　上	同　上

＝中　国　語　Ⅱ＝（R）

〔主任講師：傳田　章（放送大学教授）〕

全体のねらい

中国語Ⅰに接続して文法の基礎の学習を続ける。述語動詞句のやや複雑な形のものからさらに複文の接続関係に進んで、文法の大枠の学習を終える。発音についても、音節の仕組みや発話の際のアクセント・イントネーションなどに及んで整理された理解をはかりたい。中国語Ⅱで基礎課程の学習を終える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現象描写	存在の表現：　動詞“有” 現象描写：　“来了一个朋友” 場面の提示(2)・方位詞：　方位詞“上”，“里” 個体叙述と現象描写：　“雨住了”と“下雨了” 目的補語を伴う動詞(2)：　“有－O－Co”	傳田　章（放送大学教授） 呉　念聖（早稲田大学講師）	傳田　章（放送大学教授）
2	連用　Ⅰ	動詞句連用(1)：　“ＶＰ－来（／去）” 動詞句連用(2)：　“来（／去）－ＶＰ” 動詞句連用(3)：　“Ｖ着－ＶＰ”	同　上	同　上
3	連用　Ⅱ	前置詞句連用(1)：　前置詞“在” 前置詞句連用(2)・形容詞述語(2)：　前置詞“比” 主題としての動作対象など 事態の断定：　“（是）…的”	同　上	同　上
4	連用　Ⅲ	前置詞句連用(3)：　前置詞“从，到，離，給” 前置詞句連用(4)：　前置詞“跟”，“和” 前置詞句連用(5)：　使役表現，前置詞“叫”，“讓” 前置詞句連用(6)：　受身表現，前置詞“被” 前置詞句連用(7)：　前置詞“把”	同　上	同　上
5	連用　Ⅳ	包　括(1)：　前置詞“連” 包　括(2)：　“一点儿也…” 包　括(3)：　“什麼都…”	同　上	同　上
6	連用複合　Ⅰ	動作の評価：　“Ｖ得－ＡＰ” 結果の事態：　“Ｖ得－Ｓ” 動作結果複合(1)：　“ＶＲ”複合	同　上	同　上
7	連用複合　Ⅱ	動作結果複合(2)：　“Ｖ上来” 動作結果複合(3)：　“Ｖ得Ｒ”，“Ｖ不Ｒ” 動作結果複合(4)：　“Ｖ得了”，“Ｖ不了”	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	連用複合 Ⅲ	動作結果複合(5)： “V到” 動作結果複合(6)： “V住” 動作結果複合(7)： “V着” 動作結果複合(8)： “V在”	傳田 章 呉 念聖	傳田 章
9	連用複合 Ⅳ	動作結果複合(9)： “V上”などの補助動詞化 動作結果複合(10)： “A極了，A得很，A得多” 動詞の試行相： 動詞の重ね型 r 化	同上	同上
10	相 Ⅳ	起動相 ： “V起来” 継続相 ： “V下去” 経過相 ： “V過（…了）”	同上	同上
11	接続 Ⅰ	接 続(1)： “又…又…”など 接 続(2)： “一…就…”など	同上	同上
12	接続 Ⅱ	接 続(3)： “要是…就…”など 接 続(4)： “因為…所以…”など 選択疑問(5)： “X還是Y？”	同上	同上
13	接続 Ⅲ	不定称接続： “什麼…什麼…” 描写形容詞： 形容詞の重ね型 de（的）でくくられる描写修飾語 擬声語	同上	同上
14	補遺 Ⅰ	名詞句述語： “現在几点？” 過度の le （了）： “太…了” 承前疑問： “他呢？”	同上	同上
15	補遺 Ⅱ	不信疑問： “…？” 付加疑問： “…，好吗？” 文・節末の助詞に近い語句： “…的話など	同上	同上

＝ 中国語 Ⅲ（’００）＝（R）

〔主任講師：代田 智明（東京大学教授）〕

全体のねらい

現代中国作家の手になる散文･エッセイを、少し丹念に読解することで、基礎的な文法、語法をもう一度確認しながら、中国語の読みを中心に能力をアップさせたい。合わせて内容の面からは、諷刺やユーモアある文章、文化比較を扱った文章を読むことで、中国の人々の笑いや思考について、少しでも理解を深めたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属･職名）	放送担当講師名（所属･職名）
1	手紙の文字の書き方についての文章	基本的な文章の読み取り能力を身につける。文字のぞんざいな書き方のために、とんでもない読み間違いがおきたり、返信ができないという主旨を、ユーモアをまぜて述べた文章を味わう。典拠は、王力〈談談写信〉。	代田智明（東京大学教授）	代田智明（東京大学教授）
2	同上	1の続き	同上	同上
3	女性のファッションについて	やさしい文章の論理的展開をきちんとおさえる力を試す。女性のファッションについて、個性と自分の好みが大切であることを述べた文章。典拠は、張抗抗〈女人〝会〟不“会”穿衣服〉。	同上	同上
4	同上	3の続き	同上	同上
5	他人とのぶつかりをめぐる中国と西洋の違い	やや論理的な文章を、きちんと読み取る力を身につけることが目的。他人とぶつかることが西洋と中国では意味がことなることを述べて、文化の違いを明らかにした文章。典拠は、王蒙〈接触与碰撞〉。	同上	同上
6	同上	5の続き	同上	同上
7	ショートショートから	超短篇小説。一通の手紙を道の向かいにあるポストに投函してもらうよう恋人に託すが、彼女は交通事故に遭ってしまう。その手紙とは？	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	嫉妬をめぐるブラックユーモア	7の続き	代田 智明	代田 智明
9	イソップ物語のパロディ	諷刺的な文章を、語り手の視点を理解して、ともに笑いを共有できる力を養いたい。良く知られたイソップの寓話数編を選び、それに新しい解釈を施す。典拠は銭鍾書〈読伊索寓言〉。	同上	同上
10	同上	9の続き	同上	同上
11	身体障害者スポーツの意義について	少し硬い評論文でも読みこなす能力を身に付ける。作者は身体障害者だが、スポーツを通じて、限界に挑戦する人間の姿を確信する。その内容も味わいたい。典拠は、史鉄生〈体育 意志信心〉。	同上	同上
12	同上	11の続き	同上	同上
13	裸体をめぐる日中文化の違い	論理的な文章をきちんと読みとる力を、最後に仕上げたい。裸体をめぐる日中文化比較論。混浴がありアイドルのヌードがもてはやされる日本では肉体が自然と感じられるのに対し、中国では醜悪なものと感じている文化的ちがいを指摘する。典拠は、秦弓《中国人的徳行》。	同上	同上
14	同上	13の続き	同上	同上
15	同上	14の続き	同上	同上

＝ 中国語 Ⅳ（’９８）＝（R）

〔主任講師：木村 英樹（東京大学教授）〕

全体のねらい

中国語Ⅲに続いて講読の授業を行う。現代作家の短編小説２篇を題材とし、これまでに学習した基礎的な文法事項や表現形式の復習と整理を行いつつ、さらに難度の高い文法項目や表現法をきめ細かく学習し、機能語の意味などを注意深く読み取りながら、精緻な読解力の習得を目指す。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	『黄油烙餅』（汪曾祺作）を読む (1)	『黄油烙餅』（汪曾祺作）を読む。 毎回、１回を前後半に分ける。最初にネイティヴ・スピーカーによる１回分の前半部のテキスト朗読を聞き、次に内容解説（本分の読解・文法説明・語句解釈など）を行う。	木村英樹（東京大学教授）	木村英樹（東京大学教授）
2	同上（汪曾祺作）を読む (2)		同上	同上
3	同上（汪曾祺作）を読む (3)		同上	同上
4	同上（汪曾祺作）を読む (4)		同上	同上
5	同上（汪曾祺作）を読む (5)		同上	同上
6	同上（汪曾祺作）を読む (5)		同上	同上
7	同上（汪曾祺作）を読む (7)		同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	『小芳』（汪曾祺作）を読む (1)	『小芳』（汪曾祺作）を読む。 毎回、１回を前後半に分ける。最初にネイティヴ・スピーカーによる１回分の前半部のテキスト朗読を聞き、次に内容解説（本分の読解・文法説明・語句解釈など）を行う。後半部も同様の形式で、ネイティヴ・スピーカーによるテキスト朗読からはじまる。	木村英樹	木村英樹
9	同上（汪曾祺作）を読む (2)		同上	同上
10	同上（汪曾祺作）を読む (3)		同上	同上
11	同上（汪曾祺作）を読む (4)		同上	同上
12	同上（汪曾祺作）を読む (5)		同上	同上
13	同上（汪曾祺作）を読む (6)		同上	同上
14	同上（汪曾祺作）を読む (7)		同上	同上
15	同上（汪曾祺作）を読む (8)		同上	同上

＝ロシア語Ⅰ＝（R）

〔主任講師：川端　香男里（川村学園女子大学教授）〕

全体のねらい

ロシア語の基礎を基本的な単語・文型を反復練習させることによって習得させることを目的とする。入門編（1－5）基礎編（6－12）発展編（13－15）の3部構成とし、学習者にロシア語学習の成果を実感させつつ勉強をすすめるように工夫してある。詳細な文法表、単語集も附し、学習者の便宜に供することとした。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	文字と発音	基礎的な発音練習 アクセントとイントネーション アクセントのない母音の発音 文型「これはイヴァンです」	川端香男里（川村学園女子大学教授） 清水道子（東京大学助手）	川端香男里（川村学園女子大学教授） 清水道子（東京大学助手） 岡野エレナ（東京大学非常勤講師）
2	名詞の性	有声子音と無声子音 名詞の性 所有代名詞 文型「これはイヴァンですか？」	同上	同上
3	形容詞と動詞	所有代名詞、指示代名詞 形容詞硬変化 動詞現在人称変化 文型「私は読書をしています」 「あなたはロシア語が話せますか？」	同上	同上
4	名詞の格と動詞の過去	名詞の格（生格の用法） 活動体と不活動体 前置詞 動詞過去形 文型「昨日あなたは何をしましたか？」	同上	同上
5	名詞の与格・造格、動詞の未来形・命令形	名詞の格（与格と造格の用法） 不完了体と完了体 動詞の未来形 文型「ごらんなさい！きれいな鳥ですね！」	同上	同上
6	名詞の硬変化と軟変化、複数形	名詞と形容詞の変化―硬変化と軟変化 形容詞混合変化 名詞複数形 文型「これは和露辞典です」 「私は青が好きです」	同上	同上
7	形容詞・代名詞の複数形と格変化	形容詞、所有代名詞、指示代名詞の複数形。 前置格の用法。 －ся動詞。 文型「私はモスクワ大学の一年生です」 「私は父のことを考えています」	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	所有の表現、生格の用法	不定人称文、無主体文（無人称文） 所有代名詞、所有と所有の否定。 文型「私の娘はナターシャといいます」 「兄弟がおありですか？」 「どうぞよろしく」	川端香男里 清水道子	川端香男里 清水道子 岡野エレナ
9	無人称述語	月の名前。 曜日の名前。 無人称述語 文型「寒くないですか？」 「ぼくテレビ見ていい？」	同上	同上
10	動詞の体	完了体と不完了体 不完了体未来と完了体未来。 体の形成、勧誘の表現。 文型「以前彼はよく手紙をくれました」 「今この葉書を書いてしまいます」	同上	同上
11	運動の動詞	運動の動詞という概念。 定動詞と不定動詞。 接頭辞のついた運動の動詞。 文型「私は店へいくところです」 「毎日子供たちは学校へ通います」	同上	同上
12	形容詞短語尾形と造格の用法	形容詞短語尾形。 述語の造格。 形容詞、代名詞の造格、時刻の表現。 文型「今晩おひまですか？」 「私は教師になりたい」 「今、何時ですか？」	同上	同上
13	仮定法、生格の用法	仮定と仮定法。 数量生格　名詞・形容詞の複数生格。 文型「もし明日時間があったら、お宅へ遊びに行くのですが」 「一週間に何冊雑誌を読みますか？」	同上	同上
14	複数の対格・与格・前置格・造格、関係代名詞	複数活動体対格 複数与格、複数前置格、複数造格。 文型「どんな作家がお好きですか？」 「今私は都心にあるホテルに滞在しています」	同上	同上
15	比較級、最上級	年齢の表現。 現容詞・副詞の比較級と最上級。 福動詞、能動形動詞。 文型「兄は私より二歳年上です」 「本を読みながら彼女は泣いていた」	同上	同上

＝ロシア語Ⅱ＝（R）

〔主任講師：川端　香男里（川村学園女子大学教授）〕

全体のねらい

「ロシア語Ⅰ」を受けて、中級のレベルへと学習者を引き上げ、ロシア語の多様な側面を学ばせることを目的とする。「ロシア語Ⅰ」で学んだ基礎的なことをより確実にし、学習者が自立して勉強して行けるような手がかりを与えるようにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「ロシア語Ⅰ」の復習(1)	生格の用法（部分生格・否定生格）. 不定代名詞。 完了体と不完３体（ペアの形式）	川端香男里（川村学園女子大学教授）	川端香男里（川村学園女子大学教授） 岡野エレナ（東京大学非常勤講師）
2	「ロシア語Ⅰ」の復習(2)	数詞。 複数の生格。 無人称文(1)。	同上	同上
3	運動の動詞ー定動詞・不定動詞	動詞の定と不定。 定代名詞。 定動詞ー不定動詞	同上	同上
4	従属節	従属節（副文章）。 譲歩・認容文。 斜格の概念。	同上	同上
5	－Ｓｙａ動詞	受身文章のつくり方。 普遍人称文。	同上	同上
6	関係代名詞、命令法、比較級	関係代名詞の用法。 命令法。 比較級。	同上	同上
7	形動詞、副動詞	副動詞と形動詞の復習。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	最上級、時の表現	形容詞の最上級表現。 時の表現。	川端香男里	川端香男里 岡野エレナ
9	話法	話法。 被動形動詞。 否定代名詞。	同上	同上
10	関係副詞、同格(1)	関係副詞の用法。 同格表現―孤立附語（1）。	同上	同上
11	同格(2)	孤立附語（2）。 総話論について。	同上	同上
12	不定形	不定形の用法。	同上	同上
13	動詞の体の構成	抽象名詞の形成。 動詞のペアーの作り方。	同上	同上
14	ロシア語の文体(1)	新聞の文体、学術語文の文体。 句読法（1）	同上	同上
15	ロシア語の文体(2)	文学作品の文体。 接頭辞の用法。 句読法（2）	同上	同上

＝ スペイン語Ⅰ（’９９）＝（R）

〔主任講師：山口　羔正（放送大学助教授）〕

全体のねらい

近年外国語の学習の目標・方法も、単なる「訳読」中心から広くコミュニケーション全般の語学能力を高めることに重点が置かれるようになって来ている。本授業ではスペイン語を「ネイティブの国で初心者が学ぶ立場」から、平易な話し言葉を中心に基本的な表現を文法的な知識と共に学習していく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	滞在地到着時の表現	名前を言う 行き先を言う 人称代名詞主格 動詞ＳＥＲ	山口羔正（放送大学助教授）	山口羔正（放送大学助教授）
2	簡単な挨拶 朝食にて	朝食時挨拶を交わす 何を食べるか？ 冠詞、名詞 -ＡＲ・-ＥＲ規則活用動詞	同上	同上
3	住む家や品物を描写する	家の中を見る 私の持ち物 形容詞、指示形容詞 動詞ＥＳＴＡＲ、ＨＡＹ	同上	同上
4	自己について語る	自分・相手の事を話す -ＩＲ規則動詞 不規則動詞ＴＥＮＥＲ	同上	同上
5	目的地へ行く	大学へ行く バス・地下鉄を利用する 不規則動詞ＩＲ、ＳＡＬＩＲ 語根母音変化動詞1	同上	同上
6	入学手続き	事務の係の人との話し 不規則助動詞ＶＥＮＩＲ、ＶＥＲ 語根母音変化動詞2	同上	同上
7	外国人の友達と	国・言語・家族や授業などを話題にする 不規則動詞ＨＡＣＥＲ、ＤＡＲ 人称代名詞の目的格、数1	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	買い物	デパート・お店で必要な品物を求める 不規則動詞ＰＯＮＥＲ、ＯＩＲ 指示代名詞、所有形容詞	山口羔正	山口羔正
9	食事	大学のカフェテリアで昼食を取る、レストランにて 不規則動詞ＣＯＮＯＣＥＲ、ＳＡＢＥＲ	同上	同上
10	天候・暦	天気や月・日のことを話す 主語無しの表現 数2	同上	同上
11	時間	人と会う約束、仕事のこと 時刻の表現 不規則動詞ＰＥＤＩＲ，ＤＥＣＩＲ	同上	同上
12	趣味・好きなこと	趣味や好きなスポーツについて語る 動詞ＧＵＳＴＡＲ 不規則動詞ＪＵＧＡＲ	同上	同上
13	旅行をする	休暇でセカンドハウスへ 出張でホテルに泊まる 再帰動詞・再帰代名詞	同上	同上
14	日常生活の行動	日常の生活で用いる 再帰動詞の表現	同上	同上
15	健康・病気	健康な生活 医師の診察を受ける 薬を買う ＧＵＳＴＡＲ型の動詞、再帰動詞（続き）	同上	同上

＝ スペイン語 Ⅱ（’９８）＝（R）

〔主任講師：山口 羔正（放送大学助教授）〕

全体のねらい

スペイン語Ⅰで学習した動詞の現在形による表現を基礎として、それぞれの日常的な場に応じた語句を用いて基本表現を発展させる。文法的には、動詞の過去形と命令形を中心に学ぶが、スペイン語を習得するには動詞活用は避けて通れないので、各自練習に努められたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	出会い・別れの表現	パーティにて、いとまごいをする 会社を訪ねる 空港での出迎え・見送り、週末の別れ 再帰動詞の復習	山口羔正（放送大学助教授）	山口羔正（放送大学助教授）
2	人のことを尋ねる・話す	スペイン語の国・国民名、職業は？ どんな人か？ 現在分詞 過去分詞	同上	同上
3	自然・気候などを話す	展望台にて、天候の表現 田園での余暇生活 再帰動詞（続き）：受け身的用法、無人称的表現、 単人称動詞	同上	同上
4	比較の表現	身近な品物、家族・友人、町・地方について話す 大きな数を学ぶ	同上	同上
5	命令形を用いて 1	勉強・遊びの中で勧め・忠告、要求、命令等の表現を用いる tú、vosotrosへの命令	同上	同上
6	命令形を用いて 2	仕事・付合いの中で頼み、詫び、禁止等の表現を用いる usted, ustedesへの命令 否定命令	同上	同上
7	命令形を用いて 3	家の中で日常的に用いる表現 目的格人称代名詞を伴った命令 再帰動詞の命令	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	過去を話す 1	昨日行ったところ、スペイン語のパーティ 直説法完了過去： -AR規則動詞 不規則動詞１（leer/ir/ser）	山口　羔正	山口　羔正
9	過去を話す 2	先日何をしたか：同窓生の集まり、家に友人を招く 直説法完了過去： -ER/-IR動詞 不規則動詞２（estar/hacer/tener/venir）	同　上	同　上
10	過去を話す 3	子供のころの思い出、その時何をしていたか？ 直説法不完了過去	同　上	同　上
11	過去を話す 4	スペイン語の国での生活経験から：スペインで困ったこと、メキシコへ行った人 直説法完了過去：不規則形３ （poder/querer/poner/dormir） 直説法現在完了	同　上	同　上
12	過去を話す 5	対人関係を話題にする、仕事仲間のこと、友人の結婚 直説法完了過去：不規則形４ （decir/dar/pedir/saber）	同　上	同　上
13	複文による表現	今日の天気、展覧会へ行く、パソコンはむずかしい？ 文を名詞化するque／仮定・条件文のsi／時を表すcuando／理由・原因をしめすcomo、porque／譲歩のaunque等を用いた複文	同　上	同　上
14	未来の表現	勉強、仕事で／旅行に行く話しで意図、予定、推量等を表現する 直説法未来	同　上	同　上
15	関係詞による表現	買い物、訪問地での語らい、送られてきたもの 名詞を修飾する関係代名詞queの形容詞節／lo queの表現／関係副詞のdonde	同　上	同　上

＝ 英語Ｉ（’０１）＝（Ｒ）

－コミュニケーションのための文法－

〔主任講師：平賀　正子（立教大学教授）〕
〔主任講師：藤井　洋子（放送大学助教授）〕

全体のねらい

基本的な文法の知識を活性化させるために、英語の日常生活で使う表現を用いて学習する。従来コミュニケーションのための英語というと、文法的説明抜きに反復やドリルを通して覚え込み、運用するような教授法がとられてきた。それに対しこの科目では、両者の融合をはかる。つまり、コミュニケーションに最低限必要な文法をやさしい日常表現を通して学ぶことになる。こうしていわば生きた文法を身につけ、初歩的な英語が自由に使えるようになることがこの科目のねらいである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	はじめに	この科目の概要を述べ、学習の仕方を説明する。英語が分かる楽しさについて、最低限の知識の習得とその創造的な応用がいかに大切かについて考える。学習者の動機と学習スタイルの違いを踏まえて、どんな学習方法が効果的かを探る。	平賀　正子（立教大学教授） 藤井　洋子（放送大学助教授）	平賀　正子（立教大学教授） 藤井　洋子（放送大学助教授）
2	発音の基礎	英語の発音の仕組みを音声・アクセント・イントネーションなどについて説明する。その上で、コミュニケーションに欠かせない相づちとつなぎ表現を紹介する。	平賀正子 藤井洋子 Steve Redford（静岡大学助教授）	平賀正子 藤井洋子 Steve Redford（静岡大学助教授）
3	文法の基礎（１）	基本的な英語の文法について復習する。特に、文の種類・文の要素・品詞について説明する。	同　上	同　上
4	文法の基礎（２）	英語の文法にとって最も基本的な品詞である動詞と名詞について再検討する。動詞の種類、時制、相、態、名詞の種類と用法について述べる。	同　上	同　上
5	“I'm fine.” 自動詞	自動詞の代表であるbe動詞を始め、基本的自動詞について説明する。人や物の状態や様子の表し方を学ぶ。	同　上	同　上
6	“I want some tea.” 他動詞	基本的他動詞である動作を表す動詞を始め、さまざまな種類の他動詞について学ぶ。	同　上	同　上
7	“What can I do for you?” 疑問文	疑問文の仕組みと機能を学ぶ。物を尋ねる表現、依頼する表現、同意を促す表現などについて検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	"I don't mind." 否定文	否定文の仕組みと機能を学ぶ。Noの言い方、notを使う否定、副詞を使う否定などについて検討する。	平賀正子 藤井洋子 Steve Redford	平賀正子 藤井洋子 Steve Redford
9	"Please take care." 文命令	命令文の仕組みと機能を学ぶ。特に、pleaseの使い方、letの使い方について検討するとともに、疑問文の違いについても考察する。	同上	同上
10	"May I come in?" 助動詞	代表的な助動詞であるcan, may, must, will を中心に、助動詞の機能と用法を学ぶ。人間関係を円滑に営むために重要な「敬意」や「丁寧さ」をあらわす助動詞についても検討する。	同上	同上
11	"It's nice to meet you." 不定詞・動名詞	動詞を品詞変換し、名詞、形容詞や副詞の機能をもたせて表現する仕組みを学ぶ。特に、不定詞と動名詞について検討する。	同上	同上
12	"Do you know what time it is?" 名詞節・形容詞節・副詞節	やや複雑な文の仕組みを名詞節・形容詞節・副詞節という観点から検討し、長文の仕組みについて解説する。	同上	同上
13	"So do I." 省略	英語にみられる省略の仕組みについて検討する。日常生活で使う表現によくみられる省略について、基本的文法の知識をどのように活用したらよいかを学ぶ。	同上	同上
14	まとめと応用（1）	５章～１３章で検討した基本的文法の知識を会話という観点からまとめ直し、生きた文法として活用するための応用力を養う。	同上	同上
15	まとめと応用（2）	５章～１３章で検討した基本的文法の知識を会話という観点からまとめ直し、生きた文法として活用するための応用力を養う。	同上	同上

＝ 英語Ⅴ（’０１）＝（R）

〔主任講師：佐藤　良明（東京大学教授）〕
〔主任講師：河合　祥一郎（東京大学助教授）〕

全体のねらい
演劇・うた・物語にエッセイ、解説文を交えた多様な英語表現を扱いながら、表面的な文意を超えて、作者、演じ手、歌い手の「こころ」を読み聞く力を鍛えしようというコースです。テクストは主に古典として現代に生きるものを選びました。放送というメディアを生かしてナマの音を活用します。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	物語　(1)	ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』	河合祥一郎（東京大学助教授）	河合祥一郎（東京大学助教授）
2	物語　(2)	ルイス・キャロル『鏡の国のアリス』	同上	同上
3	ポピュラーソング(1)	夢幻の国のジョン・レノン	佐藤　良明（東京大学教授）	佐藤　良明（東京大学教授）
4	ポピュラーソング(2)	ビートルズと60年代少女	同上	同上
5	演劇　(1)	ジョージ・バーナード・ショー『ピグマリオン』	河合祥一郎	河合祥一郎
6	演劇　(2)	映画音楽『マイ・フェア・レイディ』	同上	同上
7	ポップ・カルチャー　(1)	プレスリーと現代社会	佐藤　良明	佐藤　良明

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	ポップ・カルチャー (2)	コカコーラと現代社会	佐藤　良明	佐藤　良明
9	ポップ・カルチャー (3)	マクドナルドと現代社会	同　上	同　上
10	演　劇 (3)	シェイクスピア『ハムレット』(1)	河合祥一郎	河合祥一郎
11	演　劇 (4)	シェイクスピア『ハムレット』(2)	同　上	同　上
12	演　劇 (5)	シェイクスピア『ハムレット』(3)	同　上	同　上
13	ポピュラーソング (3)	スティーヴン・フォスターの歌	佐藤　良明	佐藤　良明
14	ポピュラーソング (4)	カントリー音楽のさびしさ	同　上	同　上
15	ポピュラーソング (5)	サンプリング・ミュージック	同　上	同　上

＝ 中国語Ⅰ（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：傳田　章（放送大学教授）〕

全体のねらい

やさしい文のスキットを読みながら、発音と文法の基礎を学習する。文法項目は主語述語の結びつきから始めて接続関係まで、全体の中から偏りのないように主要な構文を抜き出して配列し、まずそれになれることを目標に学習を進める。１５回で完結して初歩的に文法の大枠が把握できるようにしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	玉仏寺の前で(1)	四つの声調 単韻母　a、e 複韻母　ai、ei、ao、ou 声母　d、t、n、l	傳田　章（放送大学教授） 呉　念聖（早稲田大学講師）	傳田　章（放送大学教授）
2	玉仏寺の前で(2)	複韻母　an、en、ang、eng 声母　zh、ch、sh、r 第三声の連続 主語と述語 ――― S－P 形容詞述語	同　上	同　上
3	玉仏寺の前で(3)	声母　g、k、h　　声母　z、c、s 声母　b、p、m、f　と単韻母　o 動詞と目的語 ――― V－O 動詞と補語、断定 ――― V－C、断定動詞 修飾語 ――― A－H、連体、連用、副詞	同　上	同　上
4	玉仏寺の前で(4)	軽声 声母　j、q、x　　韻母　er 特殊疑問 ――― 疑問詞 選択疑問（1） ――― 肯定否定並列 主述述語 ――― P（S－P）	同　上	同　上
5	玉仏寺の前で(5)	単韻母 i、ｉ で始まる複韻母 単韻母 u、ｕ で始まる複韻母 単韻母 ü、ü で始まる複韻母 状況の相(1) ――― 付加、完了をいう文末助詞 状況の相(2) ――― 持続をいう文末助詞	同　上	同　上
6	レストランを開業(1)	個別の語の声調変化 当否疑問 ――― 語気助詞 推量 ――― 語気助詞 意志、勧誘 ――― 語気助詞	同　上	同　上
7	レストランを開業(2)	限定修飾語（1） ――― 限定の助詞 限定修飾語（2） ――― 名詞句代理 限定詞助数詞構造（1） ――― D－M 限定詞助数詞構造（2） ――― 名詞句代理	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	レストランを開業 (3)	数詞 ——— 基数詞と位数詞 基数と序数 疑問数詞	傳田　章 呉　念聖	傳田　章
9	レストランを開業 (4)	完了相 ——— 未然 ——— 未然をいう副詞 持続相 経験相	同　上	同　上
10	レストランを開業 (5)	選択疑問（2） ——— 已然未然選択 動作量補語（1） ——— 回数 動作量補語（2） ——— 継続時間	同　上	同　上
11	桂林へ行く (1)	所在・移動動詞と場所目的語 授与動詞と二重目的語 認定動詞と動詞句補語	同　上	同　上
12	桂林へ行く (2)	存在の表現 ——— 存在動詞 個体の叙述と現象の描写 方位詞	同　上	同　上
13	桂林へ行く (3)	前置詞句連用（1） ——— 所在、目的点など 前置詞句連用（2） ——— 共同の相手、授与の相手	同　上	同　上
14	桂林へ行く (4)	動詞句連用（1） ——— 結果の評価 動詞句連用（2） ——— 結果の事態 動作結果複合（1） ——— ＶＲ複合動詞 動作結果複合（2） ——— 方位移動のＲ	同　上	同　上
15	桂林へ行く (5)	接続（1） ——— 副詞で 接続（2） ——— 接続詞で 選択疑問（3） ——— 対称選択	同　上	同　上

＝ 中国語Ⅱ（’０１）＝（R）

〔主任講師：傳田　章（放送大学教授）〕

全体のねらい

中国語Ⅰで学んだ主要な構文を復習しつつそれぞれをやや複雑な構文に進んで学習するが、個々の項目を切り離された形で扱うのではなく、より大きな枠組みのなかでの位置を確かめながら理解を深めるようにしたい。中国語Ⅱで基礎の文法学習を終える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	大学生の就職活動(1)	提示と説明 ――― 二つの陳述 構造の重なり ――― S－P、V－O、A－H 動詞の目的語と補語 ――― 陳述の違い	傳田　章（放送大学教授） 呉　念聖（早稲田大学講師）	傳田　章（放送大学教授）
2	大学生の就職活動(2)	感情の表出 ――― 語気助詞　a 語気助詞　a　の連声 文の三層構造	同　上	同　上
3	大学生の就職活動(3)	動詞の完了相の使われ方 動作の相と状況経過の相	同　上	同　上
4	大学生の就職活動(4)	末尾桁助数詞省略、端数 集合 事態の断定	同　上	同　上
5	大学生の就職活動(5)	動作量補語（３） ――― 試行 動詞の重ね型 動作量補語（４） ――― 性質量 動作量補語と目的語	同　上	同　上
6	青春を語る(1)	思考動詞と文補語 認識動詞と文目的語 文補語と文目的語	同　上	同　上
7	青春を語る(2)	目的補語を伴う動詞（１） ――― 使役動詞 目的補語を伴う動詞（２） ――― 命名動詞 目的補語を伴う動詞（３） ――― 存在をいう動詞	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	青春を語る(3)	動詞句連用（3） ——— 連用修飾 動詞句連用（4） ——— 方式と目的 後置句が補語となる場合	傳田　章 呉　念聖	傳田　章
9	青春を語る(4)	前置詞句連用（3） ——— 比較 性質と状態 形容詞の重ね型 描写助詞	同　上	同　上
10	青春を語る(5)	前置詞句連用（4） ——— 処置 主題としての動作対象など 前置詞句連用（5） ——— 使役 前置詞句連用（6） ——— 受身	同　上	同　上
11	村長選挙(1)	包括（1） ——— 前置詞で 包括（2） ——— 最小で 包括（3） ——— 不定称で r化	同　上	同　上
12	村長選挙(2)	R成分の派生義 動作結果複合（3） ——— 付着 動作結果複合（4） ——— 反転 結果への到達可能	同　上	同　上
13	村長選挙(3)	動作結果複合（5） ——— 起動過程 動作結果複合（6） ——— 継続過程 動作結果複合（7） ——— 経過過程 動作結果複合（8） ——— 複合形容詞	同　上	同　上
14	村長選挙(4)	動作結果複合（9） ——— 到達 動作結果複合（10） ——— 停止、固定 動作結果複合（11） ——— 所在、落着点 動作結果複合（12） ——— 的中	同　上	同　上
15	村長選挙(5)	名詞句述語 過度をいう助詞 気がかりをいう助詞 承前疑問	同　上	同　上

＝ ロシア語Ｉ（’０１）＝（Ｒ）

〔主任講師：佐藤　純一（創価大学教授）〕

全体のねらい

ロシア語の最初歩の「読み、書き、聞き、話す」４技能のバランスのとれた習得をめざす。各回の学習項目が過大にならないよう留意するとともに、重点事項はいろいろな形で反復履修できるよう工夫する。また、文法に偏らず、毎回の授業に日常会話表現の系統的な紹介と練習を含め、受講者の実際的な関心に応えたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	文字と発音（1）	母音字母１０、子音字母２１、記号字母２の大小活字体、それぞれの音価や機能と呼称、音節構造とアクセントの原理などについて、常用単語の綴りと発音の練習を通じて学習する。	佐藤　純一（創価大学教授）	佐藤　純一（創価大学教授）
2	文字と発音（2）	アクセントのない母音字母の発音、子音字母の発音の同化の規則と断定文のイントネーションを、重要地名・人名、常用単語、基本表現の綴りと発音の練習を通じて学ぶ。他に出会ったときの挨拶、別れの挨拶。	同　上	同　上
3	基本３文型と疑問文	１）ＸはＹだ、２）Ｘはここ・あそこだ、３）Ｘは～する、の基本３文型とそれぞれの疑問文、肯定と否定の応答をイントネーションの区別とともに学習する。他にお礼の言い方とそのお返し。	同　上	同　上
4	疑問詞のある疑問文	「誰、何、どこ」など主要疑問詞による疑問文をそのイントネーションとともに学ぶ。また、人称代名詞Я、ВЫ、ОН、ОНА、指示代名詞ЭТОの用法も含める。他に「お元気ですか」とその答え。	同　上	同　上
5	復習と応用（1）	１－４課の例文と説明の総復習。文法補遺、練習問題と応用問題（アルファベット、アクセント、イントネーションИＫ１，２，３，４、基本３文型、指示代名詞、人称代名詞、動詞現在３人称単・複、常用副詞、主要疑問詞）。他に「おなまえは？」とその答え。	同　上	同　上
6	名詞・形容詞・代名詞	名詞の性（男・女・中）と数（単・複）の区別、形容詞・所有代名詞の性数変化、人称代名詞の体系と用法について学ぶ。他に「おはよう」その他。	同　上	同　上
7	無人称文と無人称述語	「暑い・寒い・面白い・難しい」などのよく用いる無人称表現、義務・必要・許容・禁止などの意味を表す無人称述語、それらと用いる動詞不定形について学ぶ。他に「紹介しましょう」「はじめまして」。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	動詞の現在変化	動詞の現在規則変化（第１・第２）、他動詞と対格補語、名詞の格、名詞単数対格のいろいろ、男性活動体名詞の対格、注意すべき動詞と補語の用法について学ぶ。他に「ちょっとうかがいますが」。	佐藤　純一	佐藤　純一
9	位置・場所の表現	前置詞Ｂ／ＨＡと名詞の前置格、必ずＨＡを用いる名詞と地名、状態の動詞、動詞特殊変化（ЖИТЬ）、ＣＹ動詞について学ぶ。他にていねいな承諾の返事。	同　上	同　上
10	復習と応用（2）	６－９課の例文と説明の総復習。文法補遺、練習問題と応用問題（名詞の性・数・格、形容詞、代名詞、無人称文、無人称述語、動詞の現在変化諸タイプ、活動体名詞、対格と前置格、状態の動詞）。他に「すみません」「かまいません」など。	同　上	同　上
11	行く・来るの表現	限定動詞ИДТИとＥＸＡＴЬ、無限定動詞ＸＯＤＩＴЬとＥ３ДИТЬ、行く先を表すＢ、ＨＡ＋対格、乗り物を表すＨＡ＋前置格用法について学ぶ。他にものを頼むときのまえおき。	同　上	同　上
12	過去と未来の表現	動詞ＢЫＴЬの過去形、主要動詞の過去形、ＢЫＴЬの未来変化、合成未来の形と意味、動詞ＸＯＴＥＴЬとＭＯＣЬ、名詞類の与格について学ぶ。他にものの名や値段のたずね方。	同　上	同　上
13	所有の表現と数量表現	所有の表現とその否定、名詞の生格、人称代名詞の生格とＨＥＧＯ／ＨＥＥ／ＨＩＸ、否定生格の用法、数量表現と生格、数詞と名詞の結合の規則について学ぶ。他に歓迎の挨拶とそのお返し。	同　上	同　上
14	命令法	動詞２人称命令法の作り方、不定人称文。動詞特殊変化（－ＡＢＡＴЬ型）完了体動詞の意味について学ぶ。他に「調子はどうですか」。	同　上	同　上
15	復習と応用（3）	１１－１４課の例文と説明の総復習。文法補遺。練習問題と応用問題（移動の動詞、動詞の過去と未来、所有の表現、否定生格、数詞と数量表現、２人称命令法、名詞類の造格、格変化のまとめ）。他に別れの挨拶。	同　上	同　上

＝ ロシア語Ⅱ（’０１）＝（R）

〔主任講師：佐藤　純一（創価大学教授）〕

全体のねらい

ロシア語Ⅰで習得した各技能の可能なかぎりの向上・拡大をはかる。まとまったテクストの総合的な学習により語彙・表現・文法項目を系統的に学び、基礎的な読解と作文の能力の養成をはかるとともに、やや複雑なシチュエーションでの会話能力の習得をめざす。ロシア語能力検定４級合格を目標とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	形容詞の変化	テクスト1 Сейчас нет сливочного печенья.「いまクリームクッキーはありません」 テクストの詳しい説明とともに形容詞長語尾形の格変化の全体を学び、練習問題で実際の運用能力を身につける。会話の表現と応用（1）	佐藤　純一（創価大学教授）	佐藤　純一（創価大学教授）
2	時刻・時間の表現	テクスト2 Который теперь час？「いま何時ですか」 テクストの詳しい説明とともに時刻・時間の表現の主要事項を学び、練習問題で実際の運用能力を身につける。会話の表現と応用（2）	同　上	同　上
3	年月日の表し方	テクスト3 Сегодня у меня день рождения.「今日は私の誕生日です」 テクストの詳しい説明とともに年月日の表し方と順序数詞の形と用法について学び、練習問題で実際の運用能力を身につける。会話の表現と応用（3）	同　上	同　上
4	完了体と不完了体（1）	テクスト4 Максим решал задачу.「マクシムは問題を解いていた」 テクストの詳しい説明とともに動詞の完了体と不完了体の意味と用法の区別の要点を学び、練習問題で実際の運用能力を身につける。会話の表現と応用（4）	同　上	同　上
5	完了体と不完了体（2）	テクスト5 Без вас кто-то приходил.「お留守中に誰かに来ましたよ」 テクストの詳しい説明とともに動詞の完了体と不完了体の形態の対応や派生関係、意味・用法の違いについて学び、練習問題で実際の運用能力を身につける。会話の表現と応用（5）	同　上	同　上
6	比較級と最上級	テクスト6 Какое время года лучше？「どの季節がよりよいか」 テクストの詳しい説明とともに形容詞・副詞の比較級と最上級の形と用法のについて学び、練習問題で実際の運用能力を身につける。会話の表現と応用（6）	同　上	同　上
7	いろいろな格の用法	テクスト7 Его отец был крестьянином.「彼の父は農民だった」 テクストの詳しい説明とともに述語の造格、生格の用法を学び、練習問題で実際の運用能力を身につける。会話の表現と応用（7）	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	関係代名詞 который	テクスト8 Улица, которая носит имя Льва Толстого.「レフ・トルストイの名のついている通り」 テクストの詳しい説明とともに関係代名詞 который の形と基本的な用法を学び、練習問題で実際の運用能力を身につける。会話の表現と応用（8）	佐藤　純一	佐藤　純一
9	いろいろな関係代名詞	テクスト9 Тот, кто написал эту книгу.「この本を書いた人」 テクストの詳しい説明とともに関係代名詞 кто, что, какой、接続詞の что, какなどについて学び、練習問題で実際の運用能力を身につける。会話の表現と応用（9）	同　上	同　上
10	いろいろな従属複文	テクスト10 Они считали, что могут соперничать с богами.「彼らは神々と競争できると思った」 テクストの詳しい説明とともに名詞的従属文の主要タイプについて学び、練習問題で実際の運用能力を身につける。会話の表現と応用（10）	同　上	同　上
11	仮定法の形と用法	テクスト11 Если бы я был на вашем месте, я не пошёл бы в плавание.「私があなたの立場にいたら、航海には出ないだろう」 テクストの詳しい説明とともに仮定法の形態と意味・用法について学び、練習問題で実際の運用能力を身につける。会話の表現と応用（11）	同　上	同　上
12	能動形容分詞	テクスト12 Выход из создавшегося положения.「生じた事態からの抜け道」 テクストの詳しい説明とともに能動形容分詞の現在と過去の形態と用法を学び、練習問題で実際の運用能力を身につける。会話の表現と応用（12）	同　上	同　上
13	受動形容分詞と受動相	テクスト13 Разрушенный город Гернika.「破壊された町ゲルニカ」 テクストの詳しい説明とともに受動形容分詞の現在と過去の形態と用法を学び、練習問題で実際の運用能力を身につける。会話の表現と応用（13）	同　上	同　上
14	受動相と受動の表現	テクスト14 Сахаров был задержан и доставлен в прокуратуру.「サハロフは拘束され検察局に送致された」 テクストの詳しい説明とともに受動構文および ся 動詞や不定人称文による受動の意味の表現を学び、練習問題で実際の運用能力を身につける。会話の表現と応用（14）	同　上	同　上
15	副分詞その他	テクスト15 У русских не принято улыбаться.「ロシア人には笑顔は禁物」 テクストの詳しい説明とともに副分詞、ся 動詞の意味と機能などについて学び、練習問題で実際の運用能力を身につける。会話の表現と応用（15）	同　上	同　上

＝保健体育＝（TV）

〔主任講師：渡邉　融（放送大学教授）〕
〔主任講師：臼井　永男（放送大学助教授）〕

全体のねらい

この講義のねらいは、生涯スポーツの観点から、日常生活の中にスポーツ等の運動を取り入れて、生活の質の向上を図ろうとする際に必要な考え方と科学的な知識を提供することである。とくに、運動が身体に及ぼす影響をスポーツ科学的な見地から講義する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生涯スポーツの時代	スポーツという言葉の意味は国の数ほどあると言われるくらいに多義である。スポーツに対する考え方をいくつか紹介しながら、現代の「生涯スポーツ」の考え方、これを推進している民間運動や行政の具体的な展開状況、日本でのあり方等について講義する。	渡邉　融（放送大学教授）	渡邉　融（放送大学教授）
2	歴史の中のスポーツ	人間は今までに多くのスポーツを作り、楽しみ、捨ててきた。また、スポーツは単なる楽しみに止まらず、時代・社会によってさまざまな意味を伴って行われてきた。スポーツが人間にとって何であったかを、いくつかの例を取り上げながら見てゆく。	同上	同上
3	知っておきたいからだの知識	ヒトは、直立ならびに二本足歩行という他の動物には見られない特有の移動様式を持つ。このようなヒトのからだの構造と機能について説明し、スポーツを科学的に学習するうえに必要な、からだの基本的な仕組みについて概説する。	臼井永男（放送大学助教授）	臼井永男（放送大学助教授）
4	スポーツ活動への科学的アプローチ	走る・投げる等の身体運動（スポーツ）の分析と統合に関する科学的接近の概要を解説するとともに、身体運動の成り立ちを人体の構造的側面及びエネルギー伝達の側面から考える。	福永哲夫（東京大学教授）	福永哲夫（東京大学教授）
5	「筋力」発揮のメカニズム	ヒトが随意努力下で発揮する「筋力」の大小は、筋の太さ、組成や神経の働きにより影響され、また筋の活動様式により左右される。そのメカニズムについて説明するとともに、スポーツの成績を決定する要因についても解説する。	同上	同上
6	パワーアップトレーニングの科学	強い「筋力」をす速く発揮することにより高いパワーを得ることができる。パワーアップトレーニングの科学的メカニズムを説明するとともに、健康・体力つくりのためのトレーニング及びスポーツ競技力向上のためのトレーニングについても解説する。	同上	同上
7	持久的トレーニングの生理	ジョギングやマラソンなど、持久的運動をおこなった時の生理的機能について説明するとともに、持久的トレーニングによって生じる効果を、いろいろな角度からとらえてみる。持久力の測定法や、主観的・客観的指標についても学ぶ。	小林寛道（東京大学教授）	小林寛道（東京大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	運動と心拍水準	エアロビックダンス、ウォーキング、サイクリング、水泳など、いろいろな運動をおこなった時の酸素摂取量や心拍数の水準について調べてみる。年齢や体力水準の違いによって、それらがどのように変化するかを勉強し、健康増進のための運動負荷水準を探る。	小林寛道	小林寛道
9	持久的トレーニングの方法	年齢とともに体力がどのように変化してゆくのかをとらえるとともに、トレーニングが体力推移にどのような影響をもたらすかについて検討する。持久的トレーニングをおこなう場合の留意点や、暑さ対策、給水、栄養などについても勉強する。	同上	同上
10	たくみとスキル	自分の意志で行う身体運動の個人差を、我々は「強さ」と「巧みさ」という尺度を用いて評価している。巧みだと評価される動作の特徴を探り、そのような動作を可能にしている能力（スキル）について解説する。	大築立志（東京大学教授）	大築立志（東京大学教授）
11	脳と運動制御	巧みな動作は、神経系、特に脳の働きによって初めて可能になる。「体でおぼえる」とは実は「脳が覚える」ことである。脳を中心とした神経系と運動の関係を探る。	同上	同上
12	運動の上達	箸や鉛筆の使い方もスポーツの動作も適切な練習によって上達する。運動の上達とは脳・神経系のどのような仕組によってもたらされるのか。どのような練習をすれば「うまく」なれるのかについて考える。	同上	同上
13	スポーツの医学(1) けがと予防	スポーツという運動負荷は、われわれの身体に健康や体力の充実感を与える反面、重症事故や慢性障害もひき起こす。これらの事故の実態や応急処置・リハビリテーションの原則について解説する。	中嶋寛之（日本体育大学教授）	中嶋寛之（日本体育大学教授）
14	スポーツの医学(2) けがと処理	スポーツによる事故や損傷に関与するさまざまな要因について述べる。とくにスポーツをする人の個人的な身体要因は最も重要で予防の立場から内科的あるいは整形外科的メディカルチェックについて解説する。	同上	同上
15	身体障害者とスポーツ	近年、機能向上・回復のためだけでなく、身体障害者の間に、さまざまなスポーツを楽しむ機会が増えてきた。その意義について述べ、親しまれているいくつかのスポーツを紹介するとともに、障害の部位と程度の違いによる留意点について言及する。	臼井永男	臼井永男

=保健体育 （’０１）＝（ＴＶ）

－生涯スポーツへの誘い－

〔主任講師：渡邉　融（放送大学教授）〕
〔主任講師：臼井　永男（放送大学助教授）〕

全体のねらい

日常生活の中にスポーツ等の身体運動を取り入れて生活の質の向上を図ろうとする際に必要となる考え方と科学的な知識とを提供することを狙いとする。できるだけ多くのスポーツ実践の事例を紹介しながら、運動が身体に及ぼす影響をスポーツ科学的な見地から講義する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生涯スポーツの時代	今日では、スポーツの振興策が国あるいは国際的なレベルで「スポーツフォーオール」という名のもとに進められている。それはスポーツが人間の発達と社会発展に資すると考えられているからである。本章では、その考え方と具体的な展開の状況とを解説する。 （放送授業では、冒頭でこの科目の狙いと各章で取り上げる問題を紹介する。）	渡邉　融（放送大学教授）	渡邉　融（放送大学教授）
2	人間とスポーツ	人間は今日まで数多くのスポーツを作り出してきた。人々はそれらに対して単に楽しみだけでなく、様々に意味づけを施し、また、効用を期待してきた。本章では、それらから幾つかの例を拾い、人間にとってスポーツとは何かを考える。	同　上	同　上
3	スポーツ活動への科学的アプローチ	スポーツを実践するために知っておきたいスポーツ科学の基本的な事項について解説する。また、さまざまな身体運動における筋－腱－関節システムの働きを解説し、スポーツ動作の成り立ちについて考える。	福永　哲夫（東京大学教授）	福永　哲夫（東京大学教授）
4	筋収縮と筋力のメカニズム	筋力の大小は、筋の太さ、組成や神経の働きによって、またその活動様式によって左右される。このメカニズムについて解説する。	同　上	同　上
5	パワーアップトレーニングの科学	強い筋力を素早く発揮することによって高いパワーを得ることができる。このパワーを高めるためのトレーニングの科学的なメカニズムについて解説する。	同　上	同　上
6	呼吸・循環調節とスポーツ	さまざまな運動を行ったときに生じる生理的応答のうち、呼吸・循環系はとくに重要な役割を果たしている。 本章では、運動中の呼吸・循環系の適応について解説する。	臼井　永男（放送大学助教授）	臼井　永男（放送大学助教授）
7	持久的能力を高めるために	呼吸・循環系の機能を高めるために、持久的トレーニングが行われる。このトレーニングによって得られる効果とその評価方法、さらにトレーニングを行う場合の留意点についても解説する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	巧みとスキル	人間が自分の意思で体を動かすとき、その動きや動きの結果には必ず個人差が生ずる。その個人差を、我々は「強さ」と「巧みさ（上手さ）」という２種類の尺度を用いて評価している。上手だと評価される動作（キャッチ、的当て、フェイントなど）の特徴を探り、巧みな動作を可能にする体力要素（スキル）について解説する。	大築　立志（東京大学教授）	大築　立志（東京大学教授）
9	脳の運動制御	運動を引き起こす力は筋力によって発揮され、持久力のもとである酸素摂取能力は肺や心臓の性能によって決まる。これらに対して、スキルという運動の制御能力を決めるのは脳の運動中枢の性能である。巧みな動作は脳の正しい働きによって初めて可能になる。この時間は、運動と脳・神経系との密接な関係について学ぶ。	同　上	同　上
10	運動の上達	箸や鉛筆の使い方もスポーツも、適切な練習によって上達する。それは、脳の中にその運動のためのニューロン回路が形成されるからである。動作に習熟することを俗に「体が覚える」などと言うが、それは、実は「脳が覚える」ことなのである。今回は、運動の上達と脳の変化との関係、上手になるための練習の原理を学ぶ。	同　上	同　上
11	スポーツと栄養・休養	体内に蓄積できるエネルギーはすべて飲食によって賄われる。本章ではスポーツに必要なエネルギー補給のための栄養摂取について考える。 また、疲労回復のための休養のとり方についても解説する。	臼井　永男	臼井　永男
12	スポーツにおけるバリアフリー	障害の有無や年齢の高低に関わらず、社会のさまざまな場面で活躍し、またスポーツを楽しむ機会をもつ人が増えて来た。本章では障害者のスポーツ、高齢者のスポーツを取り上げその意義や目的について考える。	同　上	同　上
13	スポーツの医学（1） －スポーツの医学的効用と安全なスポーツ活動－	スポーツ・身体運動の効用は古くから知られていたが、現在の少子高齢社会では生活習慣病の予防をはじめ、健康の維持・獲得のため市民生活に欠かせない。しかし、スポーツ実施にあたってはあくまでも安全なスポーツ活動が前提で、そのためのメディカルチェックについて解説する。	中嶋　寛之（日本体育大学教授）	中嶋　寛之（日本体育大学教授）
14	スポーツの医学（2） －スポーツ損傷と応急処置・リハビリテーション－	スポーツによる急性あるいは慢性の外科的損傷・内科的損傷について解説するとともに、応急処置やその後のリハビリテーションについて原則的な考え方を解説する。	同　上	同　上
15	生涯スポーツの実践	ここまで各章で解説したこと、問題にしてきたことを総合して、生涯スポーツを安全に楽しく実施するには、如何にすべきかを考える。	渡邉　融	渡邉　融 臼井　永男 福永　哲夫 大築　立志 中嶋　寛之

＝ 現代日本の教育課題（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：麻生　誠（放送大学副学長）〕
〔主任講師：天野　郁夫（国立学校財務センター教授）〕

全体のねらい

今、日本の教育は大きな転換期にある。教育をめぐって、これまではなかったような広がりと深さを持つ問題が生じている。このような現状を的確に把握し、そこに至る歴史的背景を正しく認識した上で、これからの日本の教育のあり方を広い視野から展望し、現代社会における教育の意味を理解することが、本講座の目的である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	日本の教育－何が問題か	近代的な学校制度が作られてから一世紀余り、日本の発展を支え、国際的にも高い評価を得てきた教育が、今そのあり方を根底から問われている。日本の教育の何が今、問題なのか、日本の教育はどこから来て、どこへ行こうとしているのかを考える。	天野郁夫（国立学校財務センター教授）	天野郁夫（国立学校財務センター教授） 麻生誠（放送大学副学長）
2	教育と近代－日本の経験	問題の根底にあるものを探り当てるためには、まず、近代学校制度の出発点にさかのぼってみる必要がある。明治の初期になされたさまざまな選択が、日本の教育と社会に何をもたらしたのか、戦前期におけるその明暗を明らかにする。	同上	天野郁夫
3	戦後改革の意味－効率化と平等化	第二次大戦後、アメリカの占領下に日本の教育は大きな変革を経験する。「第二の教育改革」と呼ばれるこの学制改革がいかに明治以来の教育の構造を揺さぶり、一変させ、戦後日本の高度成長のための基礎を創り出したかを見ていく。	同上	同上
4	大衆教育の時代－豊かな社会へ	1960年代から80年代にかけて、教育と経済はともに高度成長を遂げ、豊かな消費社会と大衆教育の時代をもたらした。誰もが18歳まで、さらに半数近くが20歳になるまで教育を受けるようになった時代。その豊かさが教育の大きな転換をもたらした。	同上	同上
5	学歴社会－教育と職業の間	現代社会では、学校で受けた教育の水準と内容を示す学歴が、人々の職業や社会地位と深い関わりを持つ。日本社会がことさらに「学歴社会」と呼ばれるのは何故か。またそれは変革の可能性を持ちうるのかを考える。	同上	同上
6	受験競争－教育と社会の病理	進学をめぐる激しい競争は、戦前期から、日本の教育と社会の最も深刻な病理現象とされてきた。受験戦争はなぜ起こるのか、それは解決可能なのか、高校や大学入試をめぐるさまざまな改革努力に触れながら、将来への展望を試みる。	同上	同上
7	家族の変質－躾の崩壊	家族は学校と同様、日々成長していく子どもたちの最も強力な社会化装置である。家族の持つ社会化機能を原理的に理解した上で、戦後日本の家族が教育に果たしてきた機能を整理し、現代家族の深刻な変質について検討する。	麻生誠（放送大学副学長）	麻生誠

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	病んでいく心－真善美の教育は死んだか	これまでわが国の学校教育はシステムとして十全に機能してきたと言われてきた。だが今日、精神的な不調を訴え保健室へ逃避する子どもたち、あるいは不登校、いじめが増加している。これは何を意味しているのか。子どもたちの心の問題を考える。	麻生　誠	麻生　誠
9	増加する非行とその変質－無規範型非行の増加	逃避とは異なる形での社会システムからの離脱に非行がある。戦後日本の少年非行の動向をたどり、その傾向を把握した上で、現代青少年の逸脱状況と、その背景としての規範意識の変質について考察する。	同　上	同　上
10	男女共同参画社会への道－女性リーダー形成の障害	男女共同参画社会の現実が、国の政策として取り上げられてからはや5年が経過したが、実現への道はなお遠いと思われる。その中で教育が果たすべき役割は非常に大きい。だが現実には、日本の教育と職場とが手を結んで，女性の社会的参画を阻む場合さえある。	同　上	同　上
11	人権と教育－同和教育の実態とその課題	同和教育にそのテーマを絞って、大阪大学とラトガース大学との共同で行われた日米同和問題国際調査等の研究成果をもとに、人権教育の展開を教師と地域住民の役割を中心に考察する。	池田　寛（大阪大学教授）	麻生　誠
12	才能教育と学校－適能教育を構想する	戦後、エリート教育や才能教育は特に公教育の領域でタブー視され姿を消したが、最近、「教育上の例外措置」と言う形で才能教育が政策課題となっている。だがその力は微々たるものである。蔓延する受験才能教育に対し、公教育で望まれる才能教育の姿を追ってみる。	麻生　誠	麻生　誠
13	生涯学習社会のゆくえ－豊かな自己実現への道	生涯学習は今や時代の風潮ともいいうる現象である。しかしその実体は多種多様であり、とても一括りに論じられるものではない。生涯学習の今日的意味について、放送大学の10年の歴史を検討し今後の我が国の生涯学習の可能性を探る。	同　上	同　上
14	教師とその養成－生涯学習型教師の登場	教育の場での直接の実践者は教師であって、教師を通すことなしにはいかなる教育上の理想や改革も実現できない。戦前、戦後のわが国で教師の果たしてきた役割を学習し、現在の教師の置かれた状況とその養成はどう行われ、いかなる問題をはらんでいるのかを考察する。	同　上	同　上
15	第三の教育改革－自由化と個性化	80年代後半の臨時教育審議会以来、日本の教育は明治初期と第二次大戦後に次ぐ「第三の教育改革」の季節を迎えた。改革のキーワードは「自由化」と「個性化」。多くの困難な課題を抱えた現代日本の教育はどこに行こうとしているのかを考える。	天野郁夫	麻生　誠 天野郁夫

＝ 現代日本の地方自治（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：阿部　齊　（放送大学教授）〕

全体のねらい

地方自治は市民の日常生活に最も密着した公的活動領域である。しかも、従来の中央集権型の政治に代えて、地方分権型の政治が推進されている今日、地方自治の重要性は日を追って高まりつつある。この地方自治の領域に現れる諸問題は、日本の政治や社会が抱えている基本的な問題と密接に関連しているといえよう。この科目では、日本の地方自治の制度的な特徴を明らかにした後、具体的な政策問題の検討を通して、参加型地域社会形成の可能性を探りたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	地方自治と中央政治	地方自治と地方政治 明治国家の地方制度 日本的地方自治の特質 第二次世界大戦後の制度改革 地方分権と地域政治 地方自治の二層構造	阿部　齊（放送大学教授）	阿部　齊（放送大学教授）
2	首長の役割	首長主義 首長と議会の関係 首長の地位と役割 機関委任事務と自治体首長 行政指導と行政手続条例	同　上	同　上
3	地方議会	地方議会の機能 地方議会の構成と運営 地方議会と政党 地方議会と情報公開 地方議会の日米比較	同　上	同　上
4	住民と選挙	地方選挙の制度 地方選挙の現実 住民の権利 住民投票の可能性	同　上	同　上
5	地方財政	地方税制の仕組み 地方自治体の財政支出 地方交付税と国庫支出金 地方債の増発 地方財政の危機	同　上	同　上
6	都市計画	都市計画の意義 日本の都市計画 都市計画の現在 都市の空洞化	同　上	同　上
7	情報公開	情報公開と民主政治 行政部と情報公開 情報公開と地方自治 情報公開制の現状 プライヴァシーの保護 情報公開制の成果	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	性差別の是正	決定過程への女性の参加 積極的優遇措置 選挙と女性 女性と地方自治 フェミニズムの現在	阿部　齊	阿部　齊
9	環境保全	公害規制と地方自治 迷惑施設と環境保全 自然環境の保全 地球規模の環境汚染 地球環境問題と地方自治	同上	同上
10	地域福祉	高齢化社会の到来 少子化対策 在宅福祉とゴールド・プラン 介護保険制度の導入 高齢化と地域医療	同上	同上
11	教育行政	教育と政治 戦後教育改革 教育政策の保守化 自由民主党の教育政策 今日の教育制度の矛盾 教育の荒廃とその将来	同上	同上
12	文化行政	社会教育の役割 社会教育から文化行政へ 地域文化の振興 美術館と博物館	同上	同上
13	危機管理	警察行政の現状 消防行政の課題 防災体制の確立 阪神・淡路大震災の教訓	同上	同上
14	国際化への対応	相互依存の増大 自治体外交 内なる国際化 市民運動とＮＧＯ	同上	同上
15	自治体改革	団体自治と住民自治 地方分権の推進 地方分権推進委員会の勧告 勧告の意義 住民自治の推進	同上	同上

＝ 日本の自然（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：濱田　隆士（放送大学教授）〕
〔主任講師：中村　和郎（駒澤大学教授）〕

全体のねらい

自然の正しい理解のためには、事象や景観から受ける感動を大切にするのが基本となる。当科目では、ビジュアル世界に判り易い解説を付しながら日本列島とその周辺の気象・地形・生物等の多様性や特性を、個別アイテムの羅列とせずエコシステムに位置づけ、かつ人間生活と関わりを重視しながら紹介し、自然観の涵養に資する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	豊かな日本の自然	グローバルに見ると、豊かな緑に包まれた日本列島は、砂漠が広がる中緯度高圧帯に位置している。その厳しさを柔らげるのが海の存在であることを強調する。豊かさは地形の複雑さにも由来することをいくつかの事例をあげ、感覚的に日本の自然の多様性を学ぶ。	濱田隆士（放送大学教授） 中村和郎（駒澤大学教授）	濱田隆士（放送大学教授） 中村和郎（駒澤大学教授）
2	日本の大地	日本列島は激しい隆起地帯であり、険しい山に深い谷が刻まれ、大量の砕屑物が川によって運ばれ、平野を構築する。植生等の特徴や利用する人の知慧を探る。地勢を表わす地図化の手法や種類についても紹介する。	同上	同上
3	大地を作る地質と歴史	日本列島は、造山運動の激しい地帯の特色として、多様性の高い岩相・地層の帯状分布をもつ。岩石も鉱物も段数が多く、それらは形成時のさまざまな物理・化学環境を反映している。列島を造る大地の性質は、植生や動物相にも少なからぬ影響を持つことが示される。	同上	同上
4	日本列島の環境変遷	日本列島は、初めから列島であったわけでなく、プレートテクトニクスとしてのプレート運動に支配され、さまざまな気候帯を反映しながら現在に至っている。4億年前にサンゴ礁が発達し、以後くり返し温暖期が記録されている。関東地域に氷河期の影響も残される。	同上	同上
5	日本の川と文化	川を独立したユニットとして見る時代は終った。地球上の水循環の中に位置づけ、山と平野・海とを結ぶ物質移動の経路であることを認識しなければならない。森は川の源であるとする受け止め方があれば、人がそれらを利用する姿勢も自ずと方向が見えてくる。	大熊　孝（新潟大学教授）	大熊　孝（新潟大学教授）
6	日本をとりまく海と大気	列島をとり巻いて流れる黒潮と親潮は、ただ単に気温への影響が大であるばかりではない。豊かな海の幸が育ち、変化に富む植生を育み、気象・海象・気候が一連の環境変遷の主要因をなす。海・陸インターフェイスの重要性を強く指摘すると共に、生物の多様性にもふれる。	濱田隆士 中村和郎	濱田隆士 中村和郎
7	日本の土	大地の表層は、基本的に植生ひいては動物相を支配する大切な要素である。湿潤な気候や火山灰の存在は、日本列島の土の多様性を産み出し、豊かな自然環境を形成する正しく素地をなしている。人の生活様式は土の利用形態につながり、独特の文化を育てあげる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	森林の役割り	日本の森林は、ヨーロッパほどでないが最早原生の状態を留めている所が少い。山林の主体となる二次林や植林は、当然人と自然との相互作用として形成され、涵養されてきた。森林は生態の場だけでなく、大気の浄化を含め列島自然環境形成の主軸をなしている。	武内和彦（東京大学教授）	武内和彦（東京大学教授）
9	重要な里山の自然	里山という場と概念は、自然林と人の生活との接点において形成されてきた。里山は変化しつつある環境であり、生活文化の発祥の原点である。その里山も、国土の近代化政策により都市化という著しい変形を蒙り、激減に向いつつある実態に目を向ける必要がある。	同上	同上
10	日本の植物と昆虫	日本の野生生物は大きな生態的多様性を示すが、なかでも植物と昆虫との関り合いには注目すべきものが多い。里山という限定された環境下でのチョウと植物との関係を追いながら、自然界のシームレスなエコシステムの例を学び、その意義について述べる。	石井実（大阪府立大学教授）	石井実（大阪府立大学教授）
11	日本の鳥達	鳥は飛べる生き物でありながら、その分布や移動のパターンにはかなりの制約があることが知られている。鳥達の生き様に従って非常にバラエティに富み、不思議ともいえる知恵で子係につないでいることも多い。単純な共存とか闘争といった図式だけでは説明できぬ。	樋口広芳（東京大学教授）	樋口広芳（東京大学教授）
12	湿地と動物達	湿地や干潟という特定の環境は、一般にはマイナーな存在と見られがちであるが、エコシステムからみると、実は非常に大事な位置を占めている。鳥や魚、エビやカニ、昆虫など多くの小型生物にとってかけがいのないナーサリーゾーンであることを列証する。	同上	同上
13	火山・地震の災害	自然に恵まれた日本列島は、その反面自然の恐しさも同居させている。自然災害のうち、大地と関連して発生する日本列島にとっては避けられない地震現象に起因するものが少くない。それだけに、その国土に住む人々にとって火山・地震への理解を欠かせない。	伊藤和明（文教大学教授）	伊藤和明（文教大学教授）
14	気象災害の恐ろしさ	季節によって変わるグローバルな気圧配置の下で、さまざまの気象災害が日本列島を見舞う。災害は雨や風だけでない。冷害も、フェーン現象による大災の危険が常にある。地勢の複雑さと、人の住む領域拡大に伴う土地の変形や変質が災害に直結する例も多くなった。	同上	同上
15	日本の自然教育と自然観	豊かな自然に住めば、自然への畏敬や感謝の念は薄らぐという事実がある。日本では縄文－弥生を経て恵まれた自然環境が激減し今日の文明化を迎えている。その経緯での環境悪化をどのように捉え、今後に資するかが今厳しく問われている。地球的課題にも共通する。	濱田隆士 中村和郎 伊藤和明	濱田隆士 中村和郎 伊藤和明

＝ 現代生活論（’００）＝（ＴＶ）

－新しい生活スタイルと生活支援－

〔主任講師：松村　祥子（放送大学教授）〕

全体のねらい

経済のサービス化、情報化、人口の高齢化、男女の役割変化などが進む現代社会での生活は、形態や機能が多様化し、複雑で見えにくい。現代生活においては、社会的規制が弱まり個人の自由意志が尊重される反面、新たな生活難が発生し将来展望が持ちにくく、子どもから高齢者まですべての年齢層に生活不安が広がっている。この講義では日本人の生活を多角的に分析するだけでなく、個人や家族が持てる力を充分に発揮していくための生活課題と、社会的生活支援策の方向と方法を明らかにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代生活のしくみ	現代生活を内部的条件（個人や家族の生活意識、家事活動、家庭内耐久消費財）と外部的条件（商品市場、社会保障制度、生活共同施設）の枠組でみていく。生活形成は内部的条件より外部的条件に規定されるようになっており、生活の個人別化、省力化が進んでいる。この講義の全回を通して、アメリカ合衆国及びフランスの事例との比較をまじえて、現代日本人の生活の特徴を浮き彫りにしたい。 （トピックス）日米消費生活相談	松村祥子（放送大学教授）	松村祥子（放送大学教授）
2	生活欲求の不確定化	時代により、社会により変化する生活欲求の発生、充足形態、内容、水準は、個人や家族にどんな影響を与え、どのような生活問題を生み出しているか。生活欲求の作られ方、生活欲求を不確定にしている要因、世代間の生活欲求の葛藤などを経済発展や情報化との関わりの中で見ていく。 （トピックス）生活雑誌からみるライフスタイルの変化	同　上	同　上
3	生活手段の選択、入手	生活手段の数や種類は増加し、個人的に使用するものだけでなく、社会的に共同使用するものも数多い。企業や行政からの単方向的な生活手段の供給によって生じる個人や家族の生活における過剰消費や主体性・個性の減退傾向について検討する。 （トピックス）インターネット通販	同　上	同　上
4	生活手段の加工、配置	家庭内での生活手段の自給は少なくなり、購入した生活手段の加工や配置についても省力化が進んでいる。サービス経済の進展の下で加速化される家事活動の減少が人々の心身の健康、人間関係、価値観迄変容させている状況を示す。 （トピックス）子どもの食卓風景	同　上	同　上
5	見えない家計、制御しにくい家計	生活費は長期的に見ると大幅に上昇してきたが、個計化、金融化によって新しい不安定さが生じてきている。また、税金、社会保険料の負担と供給が増える中で、家庭内外の世代間関係も変化している。新しい家計管理の方法についても取り上げたい。 （トピックス）多重債務の増大	同　上	同　上
6	不規則な生活時間	労働形態の変化により、自由時間が増え、生活時間の夜型化が進んでいる。また、女性と男性では生活時間の配分・内容に格差がある。さらに地域の居住環境の不備が人々の生活時間共有を妨げている。時間使用の構造、時間の流れ分析、生涯時間配分から、現代日本人の生活の特色を見る。 （トピックス）生活時間の国際比較	同　上	同　上
7	生活空間の拡散	多くの生活活動は家庭の外で営まれるようになってきている。しかし、生活の安定のためには、拡大した生活の場での利便性の追求と私的空間での自己保存のための活動の両方が必要である。ゆるやかに開放された生活空間によって可能となる個人の自己実現と社会の連帯のあり方を検討する。 （トピックス）コレクティブハウジング	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	生活の価値観、目標の混乱	モノや金銭への執着や人間関係の稀薄化の促進によって作られた価値観は、国民総中流意識化や自己喪失感を強めた。さらに社会経済状況の激しい変動の下では、長期的生活目標を持ちにくく、刹那的で消極的な生活行動が多発している。生活の満足度は顕在化した生活欲求との相関だけでなく、潜在化した生活価値と生活実態との関係で測られることを示す。 （トピックス）ヤングアダルトの困難	松村祥子	松村祥子
9	生活の社会化	生活手段の商品化がすすみ、生活施設の共同利用や社会保障制度による社会連帯が強まっている。このような生活社会化はなぜ、どの様な形で進行しているのか。また、生活の社会化による生活の画一化、他律化、家庭機能の縮小について述べる。 （トピックス）生活協同組合の消費者支援	同上	同上
10	多元的な生活保障	個人や家族が自ら生活難に備えて貯蓄や保険などをする（自助）他に、一定の地域や集団での相互扶助（共助）、そして行政などの手で行われる公的生活支援（公助）が行われている。生活問題が多様化し、見えにくくなっている現在、必要とされる生活保障について考察する。 （トピックス）民間保険会社の活動	同上	同上
11	子どもの生活変化への対応	子どもは多くの消費や情報の機会に恵まれる一方、自然環境の悪化や、家庭や地域の子育て機能の低下の中におかれている。少子社会において、生活経験が豊かでパワフルな子どもの生活創造のための生活経営や社会福祉の実践例をみる。 （トピックス）フランスの子どものための余暇支援センター	同上	同上
12	男女の生活変化への対応	雇用環境や結婚観など、仕事と家庭をめぐる環境変化が著しい。失業率の上昇、リストラ、転職そして結婚難、子育てや介護問題などが従来とは異なる形や重さで生活に影響している。生活者の自衛策と社会的支援策の動向を分析する。 （トピックス）男女共同参画型社会に向けての諸施策	同上	同上
13	高齢者の生活変化への対応	生活歴の異なる４世代が共存する高齢社会では、個別家庭においても、社会全体としても世代間の生活行動の見直しが必要であろう。生涯生活時間の中での労働、余暇、消費の適正な配置と世代間の合意についての問題点を示し、解決への具体的な方策を探る。 （トピックス）アメリカのシルバー村	同上	同上
14	生活を支援する人と組織	現代生活において生じる金銭的、物質的、心理的、教育的課題に関して、トラブル防止や救援に携わっている人と組織について紹介する。特に米仏のソーシャルワーカー及びホームエコノミストの地域生活支援活動は我が国への導入が望まれるものである。 （トピックス）米仏の生活支援活動	同上	同上
15	生涯生活の充実のために	現代の生活不安に対処するためには、生活の自律を促す生活意識や生活技術の習得とともに、家族、地域、社会の様々なレベルでの連帯の強化と共同生活のしくみが不可欠である。長期化し、変化の波をうけることの多い現代生活のそれぞれの時期において主体的で積極的な生活形成を実現するための個人、家族の生活設計と社会的な生活政策、生活運動、生活教育の今後の課題を示す。	同上	同上

＝ 認知科学（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：相場　　覚（放送大学教授）〕
〔主任講師：西川　泰夫（北海道大学教授）〕

全体のねらい

心とは。意識とは。考えるとは。知性とは。知識とは。認識とは。心と機械の関係は。考える機械は可能か。心と脳の関係は。物質過程からいかに心は生成したか。心の謎に取り組む最新の心の科学を体系的に紹介する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	心の科学－認知科学の成り立ち	だれにも自明で自覚できるようにある心。それは、存在し多様な状態を示す。しかしそれ自体は見えない謎に満ちたもの。それを科学という観点から解き明かそうという最新の試みの諸前提や視点を紹介する。	相場　覚（放送大学教授） 西川泰夫（北海道大学教授）	相場　覚（放送大学教授） 西川泰夫（北海道大学教授）
2	心をとらえる－記号という観点から	形をもたない心にいかに形を与えることができるか。事象一般を記述する基本的な記号系は、物質、エネルギー、情報である。心の科学の基本的な記号系である情報をめぐり情報科学、情報理論、記号論などから考察する。情報を担う物理的記号系という観点からみた心。	西川泰夫	西川泰夫
3	心的表象系イメージ、象徴	心に形を与える機能を有する記号系でより自覚内容を反映したものにイメージや映像を主体とした感性記号がある。これらは、心的表象系と総称され自明性と確証性のないものである。その特性や基本構造を検証する。	相場　覚	相場　覚
4	心的発達と教育・社会化	心はどのように形成されるのか、心の成熟・発達過程を、心的表象系の組織化、体系化の観点から取り組む。ピアジェの行った発達過程の詳細な観察とそれを基に組み立てられた心の発達に内在する論理構造を紹介する。	同上	同上
5	言語と知識	世界知識を駆使した思考推論過程としての言語理解過程と言語精製過程の研究について紹介する。常識推論、感情推論、事例ベース推論などの各種推論と言語過程との関連が中心的話題である。語用論的問題へのアプローチも導入し、対話や言語コミュニケーションについての認知科学的モデルについても紹介する。	往住彰文（東京工業大学助教授）	往住彰文（東京工業大学助教授）
6	言語モジュールの性質とその獲得	心のモジュール性の理論を導入し、特に研究が進んでいる言語モジュールについての知見を紹介する。せいせい文法の成果とともに、理論言語学と人工知能との共同研究の成果も紹介する。また、幼児が言語能力を獲得する過程を通じて、言語の生物学的基礎についても言及する。	同上	同上
7	心的世界とその構造－視覚科学を通して	外的世界との出会いとその認識を可能にする基本的な機能を担う視覚系の仕組みと役割を、その現象面とその成立・獲得過程から現在、世界の最先端で精力的に研究活動を繰り広げる代表的な研究者たちの研究紹介を通じて行う。	相場　覚 西川泰夫	相場　覚 西川泰夫

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	感情－ 認知科学的視点から	感情のメカニズムについて、認知心理学的感情研究と、人工知能からのアプローチ、認知的文化人類学からのアプローチを紹介する。新しい感情研究として、自律エージェント（ロボット）の感情創発というアプローチも導入し、認知科学における新動向である、自律エージェントの行動設計というアプローチも体系的に紹介する。	往住彰文	往住彰文
9	心と脳（その１） 脳神経科学から見た心	心の物質基盤の中核は脳であることは現在の常識であろう。しかし、脳物質過程からいかに心が生成するかという論点はなお謎に満ちかつ未解決である。この点をめぐり繰り広げられている研究の最先端を紹介する。	相場覚	相場覚
10	心と脳（その２） 形式的ニューラル・ネットワークをもとに	脳過程を研究する上で、直接の脳を対象とすることに伴うさまざまな困難と制約をなるべく取り除くための工夫として導入されたモデル論的アプローチの最新の様子を紹介する。形式的ニューラル・ネットワーク・モデルや、非線型力学系モデルからのアプローチ。	西川泰夫	西川泰夫
11	応用認知科学 認知工学・印象の工学	認知科学の進展と共にその分野は拡大しており、その中でも応用的側面は多岐におよぶ。その一端を特に、日常で身近な現象への応用を試みる認知工学や印象の工学あるいは感性工学とよばれる領域での研究成果や具体的実践事例を紹介する。	同上	同上
12	比較認知科学－ 動物には心があるか，動物の知性とは	心を持つのは人だけであるという従来の信念は現在大きく揺らいでいると言って良い。コンピュータに知性を持たせる人工知能研究は大きな突破口となった。翻って人と同じ仲間の動物ではどうかという議論へと開かれる。	相場覚 西川泰夫	相場覚 西川泰夫
13	心をめぐる哲学的議論 -その背景と変遷	心を科学する認知科学における中心的テーマである心の概念は人類文明史において幾多の変遷と多様な心観の間で激しい論争が繰り返されてきている。それはもっぱら哲学における中心的課題であった。その推移を跡付けよう。	相場覚	相場覚
14	心の科学の基本的パラダイムの再吟味 -哲学的認識論と科学基礎論	心の科学が探求している心の仕組みと機能をめぐる基本的なパラダイムを整理し再考する。大きく対立する２つの立場、記号論・計算論と反記号論・反計算論と包括される主張点を吟味し新たな心の科学の地平と先端を展望する。	西川泰夫	西川泰夫
15	心の科学の新たな展開と展望	認知科学のこれからを吟味するに当たって現在新たな関心をよんでいる、複雑性の科学や心の哲学などを参照し、心の生成過程をめぐる新たな視点を紹介する。	西川泰夫 相場覚	西川泰夫 相場覚

＝ 舞台芸術の現在（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：渡邊　守章（放送大学副学長）〕

全体のねらい

演劇を単に言葉の演劇に限らず、舞踏劇・音楽劇を含めて広く舞台芸術として捉え、現代におけるその基底的な問題を、主として日本と西洋世界の記憶を参照しつつ考える。平成８年度開講の「舞台芸術論」と平成９年度開講の「演劇を読む」の成果を踏まえて、単なる演劇入門でも、演劇史の概説でもなく、現代の国際化の地平における舞台芸術の創造を受容の根拠を問い、その構造と作用を分析する。基幹科目として、舞台芸術に直接関わる専門家にも、また舞台芸術を受容する観客の側にも、現代において〈舞台芸術〉とその〈作業〉を考える際に、最も基底的な問題は何かを理解するための手立てとなるようにしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	舞台芸術の４要素	「舞台芸術」は何を指すのか。「演劇」との関係。対象の多様性。問題の多様性・多重性。日本における舞台芸術の特殊性。舞台芸術の基本的４要素（「演じる者」「見る者」「演じられる事」「演じる者と見る者を結ぶ空間」）。	渡邊守章（放送大学副学長）	渡邊守章（放送大学副学長）
2	劇場論（1）-劇場という空間	「劇場」には様々な様相がある。まずは舞台と客席を持つ建築として、その構造（舞台と客席、ロビーの関係）と舞台機構を、西洋世界と日本の記憶に関して分析する。具体的には、現代の劇場の基本をなす「イタリア式額縁舞台」の構造と機能のモデルを、その廃虚を用いたパリのブッフ・デュ・ノール劇場（ピーター・ブルックの拠点劇場）を出発点に、ガルニエのパリ・オペラ座とワーグナーのバイロイト祝祭劇場によって分析し、最初のプロセニアム舞台としてのファイルネーゼ劇場を考察する。そこからグローブ座とテアトロ・オリンピコを介してルネッサンスと古代へと遡り、それとの対比において、日本の伝統演劇の劇場の系譜学を企てる。	同上	同上
3	劇場論（2）-システムとしての劇場	劇場の現在を、ミラノ・ピッコロ座の３つの劇場（半円形の実験劇場、プロセニアム型の中劇場、オペラ劇場）を例に分析し、現代における劇場論がどのような発想の転換を経験しているかを検証する（ストレーレル演出の『リア王』の一場面と、総監督セルジオ・エスコバール氏のインタビュー。）その際、「システムとしての劇場」をよく理解させる例として、国立パリ・オペラ座の２つの劇場（ガルニエ宮とバスティーユ・オペラ）を取材し、総監督のユーグ・ギャル氏のインタビューを交えつつ、１９世紀後半と２０世紀後半とを代表するこの歌劇場を分析する。また、劇場は、単に舞台で上演される作品によってのみ機能しているわけではない。それは一つの＜文化装置＞である。現代における文化装置としての劇場を考える上で重要な＜場＝空間＞としてのフェスティヴルを、南仏エックスーアン＝プロヴァンスの音楽祭（総監督ステファン・リスネール氏のインタビュー）とアヴィニョン演劇祭（総監督ベルナール・フェーヴルーダルシェ氏のインタビュー）によって考察する。	同上	同上
4	俳優論（1）-演じる者の系譜	大きく分けて演技者の演技には、「再現＝代行型演技」と「直接的・身体技」という対比的な関係が認められる。それを舞台の表象としては「ドラマ」と「ショー」と言いかえてもさして間違いではない。具体的な舞台表象におけるその関係は、文化によって異なるが、日本にはこの対比構造が根強く続いている。田楽と猿楽の対比を出発点として、日本と西洋世界の俳優術の記憶を復元しつつ、演技の構造を考える。それは舞台作りの構造にも、劇作の構造にも深い関わりを持つ問題であり、きわめて現代的な知の地平を拓くからである。	同上	同上
5	俳優論（2）-俳優の形成	俳優を成立させる根拠は、文化と社会によって一様ではないが、「俳優という問題」の基本的な様相は分析しておく必要がある。また、演技者の養成＝教育は、前回に述べた演技の二つの系譜によって、それぞれ異なり得るが、それらの養成の実態と今日的な課題をフランスの国立高等俳優学校の例によって考察し、俳優の養成・教育の問題を考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	劇作論（1）－悲劇と言語	舞台で演じられるものを、「劇行動の作り」という意味で「劇作」と呼んでおくならば、それが文字化されて演劇作業の基底となるのが戯曲である。戯曲という言語表現の歴史で言えば、どうしてもヨーロッパのそれを論じておかなければならない。古代悲劇以来の「悲劇」という劇の書かれ方は、特にルネッサンス以降の西洋世界においては規範と考えられた時期が長いから、悲劇の問題は劇作論の基本として避けて通れない。悲劇を劇作のモデルとして、劇の構造と作用についての基本的命題を立てたアリストテレスによるモデル化の言説と、ルネッサンス以降の西洋演劇における「アリストテレス・モデル」の意味を考察し、悲劇の具体的な例として、フランス古典主義悲劇の代表作ラシーヌ作『フェードル』（渡邊守章演出）によって禁じられた情念の悲劇の構造と作用を分析する。	渡邊守章	渡邊守章
7	劇作論（2）－喜劇の身体	すでにアリストテレスの『詩学』に読まれる悲劇と喜劇の対比構造は、１７世紀フランス古典主義演劇において、劇作の二分法として制度化されるに至った。それは主題に関わると同時に、それ以上に、主題の扱い方に関わる。喜劇を特徴付ける「笑い」や、「笑い」の担い手あるいは惹起者である「道化」に焦点を当てて、喜劇の表象と技法における「身体」の問題を考える。１８世紀の即興喜劇コメディア・デ・ラルテを現代に蘇らせたとして名高いジョルジョ・ストレーレル演出のゴルドーニ作『二人の主人を一度に持つと』の舞台を例に取って、仮面・役柄・即興・身体の問題を考察する。	同上	同上
8	劇作論（3）－戯曲と演出	悲劇と喜劇の制度的二分法に先立つシェークスピアの『リア王』のストレーレル演出を例に取り、「王権と道化」の主題とその舞台的表象、演出における「間・テクスト性」と「引用のゲーム」を分析する。	同上	同上
9	伝統演劇の精髄(1)能の構造と作用	日本には、８世紀以来歴史的に相異なる時代に成立した舞台表象が歴史を生き延びて「伝統演劇」として現在も生産され受容されているという、世界でも例を見ない舞台の伝統が存在する。そのうちから、最も重要だと思われる１５世紀室町時代に成立した能・狂言と、１７世紀に町人階級の舞台表象として生まれた歌舞伎と人形浄瑠璃（文楽）について、現代の演劇作業の観点から、３回にわたって考える。９回目は能を取り上げ、能によって開かれた地平がどのようなものであったかを考える。具体的には『葵上』を「古式」の演出によって、能における「怨霊」の劇的演劇的表象の成立を考察し、観阿弥作『卒塔婆小町』によって「憑依と変身」の劇を、世阿弥作の『井筒』によって「複式夢幻能」の詩劇としての洗練を、同じく世阿弥『砧』によって情念の悲劇の能的表象を分析する。	同上	同上
10	伝統演劇の精髄(2)文楽と語り物	17世紀に成立し、18世紀に隆盛を見る人形浄瑠璃（文楽）は、世界に類のない優れた舞台芸術である。太夫と三味線、人形、人形遣いが舞台上に自分の作業を露呈しつつ独自の虚構空間を作り出していく。そのプロセスを、現代文楽を支える3人の人間国宝、人形遣いの吉田玉夫、大夫の竹本住大夫、三味線の竹沢団六のインタビューを交えつつ分析する。それは、この舞台表現の劇的言説を特徴付ける「語り物構造」を、現代の演劇作業の観点から読み直すことにも繋がる。（映像は『妹背山婦女庭訓』（「山の段」）『心中天網島』（「河庄」）『仮名手本忠臣蔵』（「判官切腹」）『菅原伝授手習鑑』（「寺子屋」。）「語り物構造」は、西洋世界の演劇理論を支配してきたアリストテレスの問題形成には全く欠けていた様相であるが、日本の伝統演劇においては、劇作術の上でも演技の上でも、能を初めとして極めて重要な要素を構成する。文楽について最も現代的な視点から書いたロラン・バルトの文楽論を一つのヒントとして、プレヒト以降の前衛演劇における「語り物構造」の戦略的意味についても考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
11	伝統演劇の精髄(3)歌舞伎の技法	歌舞伎は日本の伝統演劇のうち、その興行形態やスター・システムによって、現在でも最も多くの観客に親しまれているが、その舞台表象や表現の分析は必ずしも容易ではない。歌舞伎のイメージの原型として「かぶき者」（例は歌舞伎十八番の『助六由縁江戸桜』と和事の『廓文章』）、劇作と演技における「時代物」と「世話物」の対比構造（時代物の例は『義経千本桜』『鏡山旧錦絵』、世話物は『東海道四谷怪談』）、舞踊劇としての「所作事」（『積恋雪関扉』）の技法を考察し、更に現代の歌舞伎を理解するために、日本の近代化の地平で歌舞伎に起きた変容を、20世紀の名優六代目尾上菊五郎に焦点を絞って考える。「六代目革命」である（『鏡獅子』と『勧進帳』。）	渡邊守章	渡邊守章
12	演出技法－ジョルジョ・ストレーレルの世界	20世紀は「演出家の世紀」と呼ばれ、20世紀の演劇の歴史は、新作戯曲の歴史としては書くことは出来ず、演出家の作業を跡づけることが不可欠である。その際、演出の技法は、同時代の「前衛的な戯曲」の演出と「古典の読み直し」とによって測ることが出来る。7回目、8回目でも取り上げた20世紀後半の最も偉大な演出家ジョルジョ・ストレーレルの作品のなかでも名高いシェークスピア『テンペスト』とチェーホフ『桜の園』の画期的な演出を取り上げて、演出家が如何にテクストを読み込んで彼に固有の舞台表象を作り上げていくかを分析する。		
13	音楽劇の現在－オペラ・オペレッタ・ミュージカル	従来の西洋演劇史あるいはそれに基づく演劇論は、１７世紀以降のヨーロッパにおける「言葉の演劇」と「音楽・舞踏劇」との制度的分割を引きずって、言葉の演劇についてのみ論じることが多かった。しかしそのような１９世紀型の西洋美学の言説では、現代のように多様化した舞台芸術は論じられない。ヨーロッパ19世紀を代表する舞台芸術であるオペラが、20世紀後半にどのように読み直され、現代の舞台芸術として劇場に君臨するに至ったかを、バイロイト祝祭劇場100周年記念の『ニーベルングの指輪』（パトリス・シェロー演出、ピエール・ブレーズ指揮）によって分析し、同じ地平におけるオペレッタの新演出をジョルジュ・ラヴェッリの『メリー・ウイドー』によって見る。更に、現代における「音楽劇」としての「ミュージカル」の意味を、『キャバレー』の新演出とプッチーニ『ラ・ボエーム』の現代的書き直しである『レント』によって考察する。	同上	同上
14	舞踏劇の現在－バレエの変容	２０世紀は「ダンスの世紀」と呼ばれるほど、バレエや新しいダンスが舞台表象の全面に躍り出た時代であった。ロマン派バレエに発するクラシック・バレエが、なぜ現在でも人々の熱狂を呼ぶのか、また新しいバレエやダンスが、２０世紀後半の舞台芸術にもたらした変革は何であったのかを、スエーデンの振付家マツ・エックによるクラシック・バレエの技法と意味作用の読み直し（『白鳥の湖』『ジゼル』）を手掛かりに考えてみる。「ベジャール以後」の先駆的振付家（ジョン・ノイマイヤー、マツ・エック、ウイリアム・フォーサイス、ピナ・バウシュなど）と、クラシック・バレエの現場がどう切り結ぶのか、それをパリ・オペラ座の舞踊総監督プリジット・ルフェーヴル、若手ダンサーのバンジャマン・ペーシュ、オーレリー・デュポンのインタビューを挟んで、考察する。シルヴィー・ギエムの踊るマツ・エックと、パトリック・デュポンの踊るノイマイヤーは、こうした作業の身体的な位相をよく分からせてくれるだろうし、ウラディーミル・マラーホフの踊る身体は、ニジンスキーによってバレエにもたらされた革命のジェンダー的局面を理解する上で有効だろう。	同上	同上
15	舞台はどのようにして作られるのか－『フェードル』の軌跡	舞台芸術はすぐれて「集団的な創造作業」である。その中での「演出家」の作業はどのような歴史をもち、どのような根拠に基づいているのか。この局面に焦点を当てつつ、舞台創造の実際を具体的な事例に則して収録し、分析する。（1999年11月－12月に、ラシーヌ没後300年を記念して東京とパリで上演された「空中庭園」制作、渡邊守章訳・演出『悲劇フェードル』の稽古の記録。）舞台芸術の「作業論」の一例である。	同上	同上

＝ 現代生物科学（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：山田　晃弘（放送大学教授）〕
〔主任講師：中澤　　透（元放送大学教授）〕

全体のねらい

地球表面の限られた空間と厳しい条件のもとで、生命は発展してきた。そのために、生命体は、遺伝子の発現と複製を基本としたさまざまなしくみの工夫が必要であった。生命体のかたちつくり、いとなみ、個体の統制、個体の環境との対応、そして、生命体の発展により多様化した個体群を捉え、そのしくみを考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生命というシステム	生命は、個体の維持により保たれ、個体が限界に来ると、増殖によって継承される。個体は、環境の変化に対して、恒常性を保つしくみをもち、長期スケールでは、個体の変革によりこれを克服する。このように柔軟な生命のシステムを考察する。	山田　晃弘（放送大学教授） 中澤　透（元放送大学教授）	山田　晃弘（放送大学教授） 中澤　透（元放送大学教授）
2	発生と遺伝子	発生とは様々な細胞が分化し、統一のとれた個体に作り上げられる過程である。この発生過程を遺伝子発現の時間・空間的変化過程と見る立場から、初期発生に重点を置き、主としてショウジョウバエを例にとって講義する。	岡田　益吉（筑波大学名誉教授）	岡田　益吉（筑波大学名誉教授） 中澤　透
3	発生と形態構築	動物の発生過程において様々な器官が形成され、形態的、機能的に分化する過程では、細胞間あるいは組織間の複雑な相互作用を必要とする。これらの現象について、そこに関わる多くの物質や遺伝子に注目して講義する。	八杉　貞雄（東京都立大学教授）	八杉　貞雄（東京都立大学教授） 中澤　透
4	哺乳類の発生	哺乳類の発生は子宮内で進行する。胎児の様々な細胞を作るためには幹細胞が重要である。全能性をもつ受精卵と未分化幹細胞、卵子や精子を作る始原生殖細胞、神経系幹細胞、造血系幹細胞が存在する。最近は遺伝子導入動物や遺伝子破壊動物が作られて様々な研究に使われている。	中辻　憲夫（京都大学教授）	中辻　憲夫（京都大学教授） 山田　晃弘
5	植物の形態形成	植物の形態形成は遺伝子プログラムにより進行し、初期胚の発生は環境の影響を殆ど受けないが、発芽後の栄養成長、生殖成長の過程はさまざまな環境要因により支配される。形態形成の遺伝子発現に関わる環境要因、植物ホルモンの役割を学ぶ。	鎌田　博（筑波大学教授）	鎌田　博（筑波大学教授） 山田　晃弘
6	生物ではたらく構造	生物の形の基本単位は細胞である。細胞内外には膜、細胞小器官、細胞骨格や外部構造など多様であり、分子の特性に依存して一連の生物現象が進行する。分子としてはタンパク質だけでなく、遺伝情報に関わる分子もかたちとはたらきに関連する。	中澤　透	山田　晃弘 中澤　透
7	生体分子とその代謝	生命現象をつきつめると、生体内の分子のはたらきに帰せられる。これらの分子は生体内の化学反応（代謝）によって供給され、その動力となるエネルギーも代謝によって供給される。生体内の基本的代謝とその生体構造との結びつきを学ぶ。	山田　晃弘	中澤　透 山田　晃弘

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	細胞増殖と細胞周期	生物の発生と個体の維持あるいは世代を超えた種の持続の全ての基礎は、遺伝的に全く同じ情報を持った細胞を繰り返し作り出していくことにある。本章では、こうした細胞の複製を制御する分子システムについて概説する。	岸本 健雄（東京工業大学教授）	岸本 健雄（東京工業大学教授） 中澤 透
9	体内情報と調節	多細胞動物では細胞が調和と統制の取れた生理機能を営む。内部環境の恒常性を維持するために、細胞間で情報を授受して有機的な統合を行う制御システムを発達させた。ホメオスタシス、神経・内分泌・免疫系のクロストーク、細胞間情報授受の分子的仕組みについて述べる。	能村 哲郎（埼玉大学名誉教授）	能村 哲郎（埼玉大学名誉教授） 中澤 透
10	個体防御システムの成立	多細胞生物個体を構成する細胞は受精卵由来のクローンである。この講義では、個体を構成する細胞クローンの同一性を監視して侵入者を排除する生体防御の仕組みと、その究極の形である脊椎動物の免疫システムがどのように「自己と非自己」を見分けているかを概説する。	栃内 新（北海道大学助教授）	栃内 新（北海道大学助教授） 山田 晃弘
11	生物の行動をきめるもの	動物は動くが植物は動かない。これは食物の獲得法の違いによる。動くものと動かないもので、形はどのように違うのだろうか？ また、時間の速度は生きものによって変わる。形や時間が行動にどう影響するかを考える。	本川 達雄（東京工業大学教授）	本川 達雄（東京工業大学教授） 中澤 透
12	生態系の発展と生物	自然界の景観や清浄な大気と水は、長い地球の歴史の中で物質循環と生物活動の共進化が生み出した。この共進化の枠組みを紹介し、特に海と森林の生態系の特徴とその中の生物の生き方について紹介する。	和田英太郎（京都大学教授）	和田英太郎（京都大学教授） 山田 晃弘
13	生物多様性	小はバクテリアから大はクジラに至るまで、地球上にはきわめて多様な生物が生活している。このように多様な生物が共存する仕組みを紹介するとともに、近年生物多様性の減少が危惧されている熱帯雨林の生物の生活を、共生関係に注目しながら紹介する。	安部 琢哉（元京都大学教授）	安部 琢哉（元京都大学教授） 山田 晃弘
14	生物進化のプロセス	４０億年前に出現した生命では、ＤＮＡでなくＲＮＡが遺伝情報や代謝などの生物活動の主役であったと考えられている。このような生命の歴史を概観し、ゲノム多様化のプロセスや生物進化へのレトロポゾンの関わり等について講義する。	岡田 典弘（東京工業大学教授）	岡田 典弘（東京工業大学教授） 山田 晃弘
15	現代生物科学の方向	２１世紀には、ヒト等主要生物のゲノム全構造の解析を通じ、生命のしくみ、癌その他の難病治療への貢献、農作物の品種改良が進められる。一方、熱帯、深海の生態系の解明、宇宙への生命の発展も試みられよう。限りある地球資源のもとにヒトを含む生物の将来のあり方は如何にあるべきか、生物学の示唆は大である。	中澤 透 山田 晃弘	中澤 透 山田 晃弘

＝ 地球環境を考える（’９９）＝（ＴＶ）

〔主 任 講 師 ： 道 家　達 將（東京工業大学名誉教授）〕
〔主 任 講 師 ： 新 飯 田　宏（ 放 送 大 学 教 授 ）〕

全体のねらい

今日深刻な問題となっている、地域的公害からさらに拡大した地域規模での環境問題について、その現状・原因、そして解決策を、自然、社会、科学・技術等各方面から考察し、総合的な理解をめざすものである。

回	テ ー マ	内 容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	地球環境問題とは何か	今日起っている多様な地域環境問題について、概観し、その相互連関性を考察し、この問題をどのように捉えたらよいかを考える。	道家達將（東京工業大学名誉教授） 新飯田宏（放送大学教授） 阿部 齊（放送大学教授） 濱田隆士（放送大学教授）	
2	地球温暖化とは何か	化石燃料の大量燃焼から発生する地球温暖化は、なぜ地球環境に悪影響を及ぼすのかを明らかにしつつ、その自然科学的メカニズム、その予防策、国際的取組について説明する。そこでは、Sustainable development（持続可能な発展）の理念とは何かも明らかにされる。	新飯田 宏	新飯田 宏 濱田隆士
3	水の惑星・地球	地球は太陽系唯一の水の惑星である。水は生命を育み、豊かな自然をもたらし続けてきた。その地球の水環境が急速に悪化している。今回は、地球水システムの本質、水の持つ自然浄化力、川や海の機能、そして水環悪化の現状・原因と解決策を考える。	濱田隆士	濱田隆士
4	消えゆく森林	多様な生物が息づく熱帯雨林。アマゾンに焦点を当て、その開発による破壊の状況、大原生林消滅の危機的状況を見ながら、なぜそのようなことが行なわれるのか、その影響はどのようなものか、どうすればよいのか等を考える。	新飯田 宏	新飯田 宏
5	砂漠化はなぜ起きる	世界各地で砂漠化が進んでいる。そもそも砂漠とはどんなところなのか、砂漠化の原因は何か、解決策はあるのか等につき考える。 異常気象が循環システムの乱れであること、熱帯海域は「海の砂漠」であること、また都市化は砂漠と同義であることなども述べる。	同 上	同 上
6	拡がるオゾンホール	フロン、メタンによるオゾン層の破壊が極地だけでなく全地球上空に広がりつつある。代替フロンもオゾン層を破壊する。オーロラが語る環境破壊への警告などを聞きながら、地上の現実生活における解決策を考える。	同 上	同 上
7	生物多様性の保全	レッドデータブックの見方・読み方、「絶滅」についての正確な理解、生態的に反地球型生物と言える人間の問題について考え、種の多様性保全の意義について述べ、生態保存策と開発思考との矛盾について考える。動物の権利、野生生物はペットではない点にも論及。	阿部 齊	阿部 齊 濱田隆士

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	自然との共生～ビオトープとナショナルパーク	世界各国の環境保護政策について論じる。 バイソンを絶滅から救うために設けたとされるアメリカのナショナル・パークやドイツのビオトープなどを例として考察し、わが国における環境保護政策についても検討したい。	阿部　齊	阿部　齊 濱田隆士
9	エネルギー	今日私たちは、石油・石炭など化石エネルギーを大量に使用することで、利便さを発展させる反面、環境を悪化させつつある。環境悪化を招かないようなエネルギーの発生と利用はどうすれば可能になるのか。それには科学・技術だけでなく社会的問題の解決が要る。	新飯田　宏	新飯田　宏
10	自動車社会の功罪	20世紀文明の象徴である自動車の大量生産と利用は、プラスの面とともに、マイナスの面をもたらしている。その実態に迫るとともに、今後どのようにすれば、マイナス面の克服が可能となるのか、各方面から検討してみる。	同上	同上
11	廃棄物－サイクルとリサイクル	今日私たちは、自分たちの廃棄物の処理に悩んでいる。自然には、自然のエネルギーと物質の循環がある。人間の廃棄物がこの循環系に入るとどのようなことになるのかを見るとともに、人間や生物の安全が確保できるリサイクルシステムについて考える。	道家達將	道家達將 阿部　齊
12	人類と生態系	エコシステムと「エゴシステム」とも言える反地球型活動を行う人間によるシステムを対比し、エビ養殖とマングローブ林開発などに見られるような過剰生産・過剰消費の現状を調べ、人間がいかに地球生態システムを乱しているかを考え、解決策を論じる。	濱田隆士	濱田隆士 阿部　齊
13	日本の環境問題と政策	世界の中のとくに日本における環境問題・環境政策に焦点をあてて問題点と解決策を論じる。例として、ゴルフ場の問題、干潟・海浜の消滅など、また水俣病や自然保護の問題などについても検討したい。	阿部　齊	阿部　齊
14	環境政策と国民の取組み	まず、地域環境問題から地域環境問題へと基本的性格の変化に国民の意識が遅れいたことが情報の不確実性と重なって、環境対策を遅らせて来たことを明らかにしつつ、「持続可能な発展に向けて、産業・エネルギー・民生の各部門が、また政府がどう対応しつつあるか、またＮＧＯの役割についても検討する。	新飯田　宏	新飯田　宏
15	不確実な未来へ向けて	これまで論じて来たこと、また論じられなかったことを取り上げ、地球環境問題について総括したい。	道家達將 新飯田宏 阿部　齊 濱田隆士	道家達將 新飯田宏 阿部　齊 濱田隆士

＝ 共生の時代を生きる（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：江渕　一公（放送大学教授）〕
〔主任講師：酒井　豊子（放送大学教授）〕
〔主任講師：森谷　正規（放送大学教授）〕

全体のねらい

２０世紀における国民国家の発展と科学技術の進歩は、人類の生活に計り知れない恩恵をもたらすと同時に、世界大戦や環境破壊を含む人類史上未曾有の悲惨かつ深刻な問題もたくさん惹き起こした。今日、最も深刻な問題は、民族問題と（自然・社会）環境問題である。民族問題は人間どうしの文化的共生にかかわる問題であり、環境問題は人間と自然および社会との調和的関係にかかわる問題である。２１世紀への転換に際し、現代人は、人間と文化環境・社会環境・自然環境との関係を「共生」や「調和」の視点から捉えなおし、新しい世紀にふさわしい価値観と人間の生き方を確立することを求められている。この科目は、そうした課題に迫るために、人間の探究、生活と福祉、及び産業と技術の３つの専攻分野においてそれぞれに今日的関心を喚んでいる実際的諸問題を世界的視野の中でとりあげ、学際的アプローチを試みることによって、新しい時代における人間の生き方を追求しようとするものである。

	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	共生の時代を生きる人間の課題 －問題提起－	転換期を迎える現代人の課題は、人間と自然及び社会環境との関係を「共生」や「調和」の視点から捉えなおし、新しい時代にふさわしい価値観と人間の生き方を確立することである。「転換期」の意義と「共生」の概念を検討し、文化、生活、技術の３つの立場から、各回の課題を概観する。	江渕一公（放送大学教授） 酒井豊子（放送大学教授） 森谷正規（放送大学教授）	江渕一公（放送大学教授） 酒井豊子（放送大学教授） 森谷正規（放送大学教授）
2	多文化共生の社会	ヒト及び文化の地球的規模の流動化が進む現代の特色の一つは、世界各地に文化的モザイクが出現し、多文化共生社会が発展することである。ここでは、「ニューカマー」の外国人に焦点を合わせて、彼らと地域住民との共生の姿を、関東地域の「街づくり」運動と関連付けながら多面的に検討する。	江渕一公	江渕一公
3	「民族」と地域社会 －国家・行政・日常生活－	多文化共生社会の新しい動きをリードするエスニシティの動態は、国民国家の発展過程と密接な関連をもっている。この問題を「オールドカマー」に焦点を合わせ、そのエスニシティの消長過程並びに出身地とのネットワークに関連づけながら、主に関西地域の事例に基づいて検討する。	原尻英樹（放送大学助教授）	原尻英樹（放送大学助教授）
4	異文化間コミュニケーションとネットワーク	多文化共生社会における平和的、協力的関係は、異文化に対する相互理解・相互尊重の態度とコミュニケーション能力に支えられる。異文化間相互理解を促進するコミュニケーションをめぐる諸問題について、「アジアとの共生」の視点から在日ベトナム系住民の事例を中心に検討する。	川上郁雄（宮城教育大学教授）	川上郁雄（宮城教育大学教授）
5	多文化共生の社会と人間形成	ヒトの国境を越えての移動は、複数の文化にまたがって成長する子どもの増加を促す。日本では日本語力が十分でない子どもが急増し教育に様々な課題を提起している。多文化共生社会に生きる子どもの教育の現状を教育現場に即して検討し、日本の異文化間教育の現状と課題について考える。	佐藤郡衛（東京学芸大学教授）	佐藤郡衛（東京学芸大学教授）
6	障害者と高等教育	世界的な均等法の流れの中で現代の日本の状況、特に高等教育を視座の中心にすえて障害の問題を議論する。またインフォメーションテクノロジーの役割、先端生殖技術による障害者排除の思想など、科学の投げかける新しい光と影を含めて、バリアフリー社会への実現にむけて検討する。	広瀬洋子（メディア教育開発センター助教授）	広瀬洋子（メディア教育開発センター助教授）
7	少子化社会と男女共同参画	少子化は活力ある社会を維持する上で深刻な問題と認識され始めている。出産・子育て期の現状が人間としての生涯発達、自己実現を図る上で、マイナスのイメージを抱かせている結果であろう。ジェンダーギャップ、勤労条件、支援システムなど、少子化の要因を分析し、今後の課題を考察する。	原ひろ子（放送大学大学教授）	原ひろ子（放送大学大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	長寿社会とライフコース	寿命の伸長は個人の人生の長さを保証し、20年以上にわたる高齢期をもたらした。その結果「ヤング・オールド」という新たな人生段階が特化されてきた。ここではこの未知なる「ヤング・オールドをいかに生きるか」という課題について、世代間の共生という視点から考察する。	嶋崎尚子（早稲田大学助教授）	嶋崎尚子（早稲田大学助教授）
9	家族の共生を考える	近代社会にあって、家族は企業に丸抱えになるという形で世帯単の暮らしを営んできた。そこには企業に磁場をもつ家族の姿がある。企業中心社会から家族のライフスタイル化が生じるなかで、もはや家族＝世帯は自明ではない。企業中心社会以降の個人と家族の共生を考察する。	同上	同上
10	生活者優先の視点	生活者優先、生活者視点などといわれ始めてからすでに久しいが、生活者優先とはどういうことか。一方、産業界では、消費者優先の体制を充実させてきているが、消費者優先は生活者優先とどう繋がっているのか。真の生活者優先の視点を高めるための、生活者、消費者等の課題を考察する。	酒井豊子	酒井豊子
11	共生を目指す技術の時代へ	個々人の生活向上に大きく寄与してきた技術が、広く普及するとともに人間、社会、自然に重大な負の影響をもたらしている。また、これから豊かさを求めて工業化する発展途上国がもたらす影響も大きい。いよいよ共生を目指す技術へ進むべきであり、その方向を示す。	森谷正規	森谷正規
12	物質と人間、自然	生活に大きな恩恵をもたらした多種多様な新しい物質が、様々な不本意なかたちで人間、社会、自然に入り込んで、健康、環境の面で負の影響をもたらしている。これからは、負の影響を極力押さえるように物質の開発と利用を進めねばならず、そのあり方を探る。	東千秋（放送大学助教授）	東千秋（放送大学助教授）
13	エネルギーと人間、自然	生活における各種のエネルギー利用、車の利用が大気汚染、海洋汚染、地球温暖化など地球環境破壊の因となっていることを正しく認識して、その将来の重大問題化を防ぐために好ましいエネルギーの生産、利用のあり方を探らねばならず、その可能性を示す。	森谷正規	森谷正規
14	社会システムと人間	現代の社会は、交通、廃棄物処理、防災、福祉などの面で重大な問題を抱えており、さらに深刻化するおそれも強い。そうした社会問題に対して技術的な対応策は種々あるが、経済的、社会的な難題があり、進みがたい状況がある。その対応を進めるのは、社会全体の大きな課題である。	同上	同上
15	共生の時代の人間の生き方 －総括－	以上の各回における考察を踏まえて、３人の主任講師による総括と対談を行い、転換期の人間の生き方についてのこれからの課題と展望を明らかにする。	江渕一公 酒井豊子 森谷正規	江渕一公 酒井豊子 森谷正規

＝ 科学の思想と論理（’０１）＝（R）

〔主任講師：杉本　大一郎（放送大学教授）〕
〔主任講師：山田　　晃弘（放送大学教授）〕

全体のねらい

自然科学は個々の事象の集積で、それぞれ専門化されたものと思われていることが、しばしばある。しかしその原理とリテラシーには壮大な体系がある。これは科学の思想や科学的世界観としても興味深いものである。それが身につけば、ミクロからマクロの世界まで、物質・生命界から宇宙までをとおして、専門を超えて自然界の全容が見えてくる。また自然科学で磨かれた概念と論理には一般性があり、文化・社会的現象に対処する場合にも多いに参考になるものがある。これらの意味で自然科学には広く思想的にも実用的にも意義があり、この科目は文科系の学生にも理科系の学生にも興味を持ってもらえるものにしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	科学とそのはじまり	（最初にこの科目の主旨について主任講師が語る。） 近代科学はコペルニクス、ガリレオ、ニュートンの時代から本格的に始まる。デカルトは分析から始めてそれを総合する方法を提唱した。それは大きい成功を収め、現代科学技術の時代を作った。しかしこのような分析と総合が成功するためには重大な理論的前提がある。逆にその前提が満たされない世界には、まったく新しい方法論が要求されている。	長岡　亮介（放送大学教授）	長岡　亮介（放送大学教授） 杉本大一郎（放送大学教授）
2	物質観とその歴史	物質はそれ以上には分割できないものとして原子が考えられた。分子は原子が結合したものである。それが化学に発展した。その後、原子はさらに分割され、その構成要素として原子核が研究がなされるようになった。物質世界には階層構造があり、エネルギーの大きさの桁によって分類される。今では宇宙における物質世界の歴史まで分かっている。	杉本大一郎（放送大学教授）	杉本大一郎
3	生命観とその歴史	生命とは何か。古来、学問の広い分野で論じられてきた命題である。生物学史では、生命体は非生物とは異なる特異的存在とする生気論が、まず、提唱され、その後、生命のしくみが解明されると、生命体と非生物の間に本質的な差はないとする機械論が提唱されるようになったという。しかし、生物学における生命観をこのような二者に極論してよいものだろうか。生物学史を通して、この問題に光を当ててみたい。	山田　晃弘（放送大学教授）	山田　晃弘（放送大学教授）
4	生命システムとその特質	生命体というシステムは、細胞に含まれる遺伝子情報の発現によって個体を構築し、個体を維持し、遺伝子を複製することにより個体を伝承する。また、遺伝子を変異させて、環境の変化に適応した個体へ進化する。このように、生命体は、遺伝子レベルですべてを制御された存在に見えるが、一方で、発現された情報間のさまざまな相互作用があり個体の一層の安全と繁栄を計るため、生命体は試行錯誤を続けている。	同　上	同　上
5	情報取得のチャンネル	自然科学は自然界の成り立ちについて、情報を取得することから始まる。自然現象のいろいろな階層と対象に応じていろいろな情報取得の視点があり、学問のそれぞれのディシプリンを構成している。しかしそれは対象の外形によるものだけではない。情報取得の階層性はエネルギー空間や時間スケールによっても分類され、多様である。	杉本大一郎	杉本大一郎
6	科学における実証主義	科学における実証とは何か。それはどういう役割を果たしてきたか。実証されるべき事実の客観性は科学者集団や社会の間主観性とはどういう関係にあるか。科学を進める側の立場から、これらの問題を批判的に論ずる。	長岡　亮介	長岡　亮介
7	理論と実験	実験や観測はどのようにして理論化されるか。理論はどのようにして実験や観測を導くか。理論は単なる事実の集積ではない。理論は体系化されることによって、その理論を構成するのにキーとなった実験事実を含むと同時に、それを乗り越える。理論に使われる数理的リテラシーとその意義、その数学との違いについても考える。	杉本大一郎	杉本大一郎

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	法則とは何か	実験や観測をとおして得られたものの中で、何が「法則」たりうるのか。法則は観測者の視点を超えて成り立ち、その表現は座標変換に対して不変でなければならない。問題になるのは個別性と一般性、原因と結果の因果などである。一般性と言っても法則には適用限界とその階層性がある。因果については決定論以外の法則もある。	杉本大一郎	杉本大一郎
9	理論の階層性と包摂関係	法則と同様に理論にも適用範囲がある。例えば相対性理論の体系は、速度の遅い極限としてニュートン力学を包摂している。だからと言ってニュートン力学が不用になったり、ニュートンの時空概念が死んだりするわけではない。それぞれが適用範囲に適切な概念体系をもっている。同様なことは他のパラダイムの理論体系にも当てはまる。	同上	同上
10	ミクロの論理とグローバルな論理	個々の要素現象は相互に作用し合い、一つのシステム（系）という総体を構成する。システムのグローバルな振舞いは要素のミクロな論理の集積が決めるものではあるが、全く別もののように見えるのが、その主要な側面や着眼点になることが多い。また熱力学のように、ミクロな事柄の詳細が分からなくても総体の振舞を論じる体系もある。	同上	同上
11	地球という自然界の構成とその歴史	地球という自然界に関する理解の多くは、これまでほとんど地球上における現象の観測に基づいて得られていた。しかし最近は、科学技術の発達によって地球外からの情報が飛躍的に増大した。そしてすでに膨大な知識が集積されている地球の歴史についても、太陽系、銀河系そして宇宙全体からの知識と結び付け、より整合的な体系を作る方向への努力がなされている。そのような観点から、地球に関する知識について考える。	荒牧　重雄（日本大学教授）	荒牧　重雄（日本大学教授）
12	地球とその生命界	文明が発達し、ヒト中心の世界観が日常となった今日では、ヒト中心の生物界が地球上における全自然界のほんの一部にすぎないことを忘れがちである。生命体は、地球上の水の中で誕生し、進化して多様化した生態系にまで発展したが、地球上の極く限られた環境の産物に過ぎない。限界のある生物界を無視し、自然界の流れに対抗しようとするヒト文明社会のあり方についても考えて見たい。	山田　昇弘	山田　昇弘
13	自然界における変化と平衡および定常状態	自然界には非平衡状態が定常的に続いていることが多い。地球の環境や生命の存在はその典型である。線形代数の方法を用いた物理学の形式では、平衡状態から少ししか離れてい系が扱われてきた。しかし現実に生起する世界を扱うためには拡張された概念体系が必要となる。非線形・非平衡・開放系について考える。	杉本大一郎	杉本大一郎
14	進化と退化	空間と違って時間には流れの方向があり、過去と未来は区別される。閉じた系では時間の矢は、エントロピーが増大し、情報や秩序は崩壊していく方向に向いている。しかし現実の宇宙や自然界では、自発的に秩序や形態が形成されていくことがある。両者の関係はどうなっているのであろうか。これは社会の変化の問題とも関係するようである。	同上	同上
15	現代科学と社会	科学と技術は、人間が自然界をコントロールする方向に進められてきた。そして今や人類の活動が地球という有限の自然界を圧迫したり、生命界を含む自然界の基本的な流れに逆らうようにもなっている。21世紀に入ったいま、科学技術と人間社会・文化との関係を総括的に考え直してみる時期にある。その上で、21世紀の科学はどうあるべきかについて、専門分野の異なる4人の講師が討論する。	同上	担当講師全員

＝ 現代社会とスポーツ（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：渡邉　融（放送大学教授）〕

全体のねらい

現在、世界各国でスポーツの振興が社会発展計画の一環として取り上げられているので、その状況を概観する。次に現代日本におけるスポーツ実践の諸相を考察し、また、現代スポーツの一方の特徴である産業化、科学化の状況を一瞥する。そして、スポーツを我々の良き財産とするために、その問題点を探り、望ましい在り方を考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代スポーツの諸問題	まず、この科目で扱う「スポーツ」の意味内容がどのようなものかを明らかにし、ついで、２から１４までの各章で扱う諸問題を紹介する。	渡邉　融（放送大学教授）	全員
2	現代のスポーツ政策	スポーツは本来個人の私的かつ自由な活動領域に属するものであるが、現代では各国とも、国民の健康の維持増進、社会的連帯感の形成、国民経済の発展の観点からスポーツ振興政策を極めて重視するようになった。これらの政策の趣旨内容等を比較検討し、世界的な趨勢を探る。	池田　勝（大阪体育大学教授）	渡邉　融（放送大学教授）
3	現代のスポーツ組織	20世紀の各国社会に生じた最も顕著な変化は国際化と大衆化であった。スポーツの世界でもこの傾向は無視できない。本章では、この趨勢を高水準の競技スポーツと市民スポーツとについて一瞥し、今後の国際社会に適合したスポーツの国際組織の在り方を考える。また、国際化と大衆化の不可欠の帰結であるスポーツとナショナリズムの密接な関係についても考えたい。	阿部　齊（放送大学教授）	阿部　齊（放送大学教授）
4	子供とスポーツ	日本におけるスポーツの発達は、明治以来、学校制度に依拠するところが大きかった。しかし、近年の社会変動により学校のスポーツが曲がり角に立たされている。本章では、学校における部活動や学校外の各種スポーツクラブ等、子供達のスポーツ活動に焦点を当て、問題の所在を探り、望ましい姿を考える。	渡邉　融	渡邉　融（放送大学教授）
5	市民スポーツの盛況	市民マラソン、ウォーキングイベントの盛行と、その国際化・祝祭行事化は顕著である。一方、フィットネスクラブはファッション産業化し、また、数百種といわれるニュースポーツが簇生している。本章では、これらの新しい市民スポーツの有り様を探る。	同上	同上
6	地域社会とスポーツ	我が国では生涯スポーツの拠点として地域に根ざす総合的スポーツクラブの構築が期待されている。これは既存の学校施設等を活用した、多世代の成員からなる組織である。そこでは、地域住民の主体的な組織力・経営力が求められている。本章では、地域社会論から見た望ましいスポーツの姿を考える。	倉沢　進（放送大学教授）	倉沢　進（放送大学教授）
7	高齢社会とスポーツ	21世紀第２四半期には超高齢社会に突入することが予測されている。高齢者の身体的能力水準の向上と維持は高齢者の自立の前提であり、社会活性化の必須条件である。このような観点で、老年学から現代社会のスポーツ、高齢者スポーツのあるべき姿を考える。	柴田　博（桜美林大学教授）	柴田　博（桜美林大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	障害者とスポーツ	近年、障害者のスポーツに対する参加意欲は旺盛である。しかし、様々な障害があり、それへの対応は立ち遅れがちである。スポーツにおける「バリアーフリー」、「ノーマライゼーション」とは何か、障害者福祉論からスポーツを考える。	三ツ木任一（放送大学教授）	三ツ木任一（放送大学教授） 臼井　永男（放送大学助教授）
9	競技スポーツ	本章では、オリンピックスポーツ、興行としてのスポーツ等、高水準の競技スポーツの有り様と問題点、たとえば、スポーツ組織の運営、タレントの発掘・養成、フェアネスと社会的公益性の維持、競技者の権利等について考えていく。	渡邉　融	渡邉　融
10	スポーツと経済	国民のスポーツへの関心・欲求が一層高まり、それに呼応してスポーツ産業の広がりと雇用創出、地域経済の活性化などの経済的効果や健康の維持増進による医療費の節減効果なども認められるようになった。スポーツが国民経済に果たす役割について概説する。	池田　勝（大阪体育大学教授）	同上
11	スポーツとテレビ	スポーツの膨張と産業化はＴＶの出現と普及、多額のＴＶマネーによる所が大である。一方、スポーツはＴＶ番組の最高のソフトといわれ、メディアの寵児となっている。ＴＶとスポーツとの相互関係、その中でのスポーツの主体性と今後の有り様を考える。	杉山　茂（ｽﾎﾟｰﾂﾌﾟﾛﾃﾞｭｰｻｰ）	渡邊　守章（放送大学副学長） 杉山　茂（ｽﾎﾟｰﾂﾌﾟﾛﾃﾞｭｰｻｰ）
12	表象としてのスポーツ	身体競技の祝祭性、「スポーツする身体」の成立、現代メディアにおけるスポーツを見る「まなざし」とスポーツを見せる「仕掛け」等、表象文化としてのスポーツについて考える。	渡邊　守章	渡邊　守章
13	競技スポーツ－人間の限界への挑戦－	オリンピックや世界選手権等では、記録や技を競い合って人間の身体で表現できる限界への挑戦が続けられている。日頃の激しいトレーニングによって人間の身体はどのように変わって行くのか、またどこまで変わりうるのか、そうしたトレーニングをスポーツ医・科学がどのようにサポートしているのかを解説する。	浅見　俊雄（日本体育大学教授）	浅見　俊雄（日本体育大学教授）
14	競技スポーツとハイテクノロジー	スポーツのトレーニングや競技の現場ではハイテクノロジーが生み出した様々な用具や機器、設備が利用されている。陸上の100ﾒｰﾄﾙ競走一つを取ってみても、シューズ・走路・計時装置等、すべてハイテクで支えられている。安全性、トレーニング効率、競技成績などの向上や、競技会運営の合理化、機能化に貢献している様々な先端技術を見て行く。	同上	同上
15	スポーツを人類の良き財産に	ここまで見てきたこと、考えてきたことをまとめ、如何にしてスポーツを人類のよき財産にしてゆくかを話し合う。	渡邉　融	全員

＝ 家族論（’０１）＝（ＴＶ）

〔 主 任 講 師 ： 原　ひろ子（放送大学教授）〕

全体のねらい

「人間にとって家族とは何か」 「社会にとって家族とは何か」を根本的に考察し、整理することは人文科学・社会科学における肝要な課題である。この科目は、諸学問領域での家族論の成果を整理したうえで、変動期にある現代家族現象への学際的アプローチの手がかりを提供するものである。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「家族とは何か」における多義性	日本社会で一般的に考えられている「家族」といっても歴史的にまことに多様であった。しかし、地球の各地ではさらに多様な「家族」が存在する。人々は何を「家族」に期待し、何を「家族」に期待しないのであろうか。人々にとって「家族とは何か」を特に現在日本社会における諸問題から考える。	原　ひろ子（放送大学教授）	原　ひろ子（放送大学教授）
2	ヒトと人間の交差する場としての家族	人類社会のいずれの時代にも、家族は生物としてのヒトと文化をもつ人間が交差する場として機能してきている。「性と生殖」「加齢」「文化的価値の伝承」「世代間の葛藤と共存」「生者と死者の関係性」などの領域に関して諸社会を比較し、「家族」という場と「家族以外」の場に見られる上記の諸領域のさまざまな様相を考える。	原　ひろ子	原　ひろ子
3	家　族　と　法	家族制度の時代、第二次大戦後の高度経済成長の時代、女性の職場進出と社会の少子化・高齢者化が急激に進んでいる現在、それぞれに対応して家族の法制度が前提とする標準的な家族像・家族観は変化する。ここではその変化をたどり、家族と法のかかわりを考察する。	二宮　周平（立命館大学教授）	二宮　周平（立命館大学教授）
4	家族と社会政策	サラリーマン（雇用者）の夫に専業主婦の妻、郊外の団地暮らしで子どもは２人、そんな家族が「標準世帯」と呼ばれることが多い。サラリーマンの専業主婦世帯は、いつごろ、どのように「標準世帯」となったのか、そこに社会政策はどんな役割をはたしたのか。	大沢　真理（東京大学教授）	大沢　真理（東京大学教授）
5	企業社会と家族	企業社会の文化規範は、サラリーマンの働き方のみならず、彼らの家族成員としての在り様をも規定する。企業社会における家族政策、文化規範が、家族生活にもたらす影響について考える。合わせて、近年における変化についてもとりあげる。	嶋崎　尚子（早稲田大学助教授）	嶋崎　尚子（早稲田大学助教授）
6	人口の再生産と家族	かつてマードックは核家族論を展開するなかで、家族の基本的機能として性、生殖、経済、教育をあげた。家族の生殖機能、すなわち人口の再生産の場としての家族の位置付けは普遍なのか。人口生殖技術の発展という社会変動との関連で考える。	同　上	同　上
7	家族の発達と個人のライフコース	個人の家族的関係からなる家族はそれ自体、時間の経過のなかで変化する（家族過程）。一方個人のライフコースは、家族内の世代間関係ならびに家族過程と共時性と非共時性をもちながら進行する。家族のライフサイクル。モデルを題材に、個人のライフコースと家族過程との関連性を考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	歴史のなかの家族	近年の家族史研究は方法論的に急速な進化をとげ、歴史のなかで家族に関するドグマへの挑戦を続けている。近世日本の農民家族を具体例にしながら、実証的アプローチの方法とその成果を整理する。	嶋﨑　尚子	嶋﨑　尚子
9	変化する家族の機能	・家族研究の変化 ・近代家族の誕生 ・近代家族のゆらぎ	宮坂　靖子（奈良女子大学助教授）	宮坂　靖子（奈良女子大学助教授）
10	育児と生涯発達	・親イメージの変容 ・新しい父親研究 ・共同育児の実践	同　上	同　上
11	高齢者介護と老後問題	・少子高齢社会の到来 ・老後問題の発生 ・高齢者介護と家族	同　上	同　上
12	変わりゆく結婚	・日本における晩婚化・非婚化現象 ・晩婚化・非婚化の背景 ・社会制度としての結婚 ・現代日本における結婚の意義	善積　京子（追手門学院大学教授）	善積　京子（追手門学院大学教授）
13	脱「近代家族」への道	・ライフスタイルの多様化 ・近代家族の抑圧性 ・脱「近代家族」への課題	同　上	同　上
14	家族のアイデンティティ	「家族」を「集団」と考える人々と、「家族」を一人ひとりの人間をとりまく絆ないしはネットワークの集合体と考える人々がある。さらに「家族」を超えて生きようとする人々がある。また夫と妻という男女の対にもとづかない集団としての「家族」を形成しようとする人がいる。多様な考え方をする人々がどのようにして一定社会の中で共存していくのかを考える。	原　ひろ子	原　ひろ子
15	「社会の中の家族」の現状と未来	家族の未来、クローン人間の生成を含む生殖技術の展開は、人間の家族にどのような変化をもたらすのであるうか。生物の種としてのヒトが「自己家畜化」を推し進めることによって、「人間として生きる」が何を意味することになるのであろうか。さらに、地域社会、国家、国際関係などの社会的環境の中で家族がどのように変化するのかを考える。	同　上	同　上

＝ 家族と生活ストレス（’００）＝（R）

〔 主 任 講 師 ： 石 原　邦 雄（東京都立大学教授）〕

全体のねらい

ストレス社会とも呼ばれ、変化の激しい現代社会にあって、また、世紀の転換期の不透明さに不安が広がるなかで、人々は家庭や家族に「安らぎ」や「よりどころ」そして愛情を求めている。しかしながら、家族自体も変化している現実があり、人々の期待は容易に満たされるものとはいえない。この講義では、今日の家族が、さまざまなストレス状況にさらされ、ある場合には自らストレスを生み出しながら、それに立ち向かって生活していくありさまと、そこに働く諸要因についてとらえ、現代家族の弱さと強さを考えてみたい。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	Ⅰ．家族論入門 家族の問題性と家族の社会学	社会的事件が起こるたびに家族が問題にされる。核家族化、少子高齢化、女性の変化のなかで家族はどうなるのか。世紀の転換点で、人々は不安を抱え、家族をよりどころにしようとするが、家族自体にも問題が起きていそうだ。そこでのキーワードは、家族の個人化と多様化といわれている。家族の問題性を、社会学ではどのように捉えようとしているか。	石原邦雄（東京都立大学教授）	石原邦雄（東京都立大学教授）
2	変動する社会と家族	戦後５０年後を経て、日本社会も大きく変化してきたし、今日さらに変化しようとしている。産業化、都市化、民主化から更に、国際化、情報化、脱中心化への変化が進むなかで、家族のありようはどのように変化しつつあるだろうか。家族の、形態、機能、価値意識の面での変化を押さえておこう。	同　上	同　上
3	家族の内部過程と発達的変化	家族を捉えるには、いくつかの次元がある。ここでは、ミクロ社会システムとしての家族を、位座と役割の動態として捉える。更に、家族時間とも呼ばれる家族独自の変化過程であるライフサイクルと生活構造の展開を見よう。	同　上	同　上
4	Ⅱ．生活ストレスと家族ストレス 生活ストレスの捉え方	日常用語としても使われているストレスという言葉が、各種の学問領域で専門的に扱われていることを理解した上で、生活ストレスを捉えるモデルを考えよう。	同　上	同　上
5	家族のストレス論的な見方	ストレスモデルの家族への適用としての家族ストレス論とは、どのようなものであり、どのような背景のなかで成立し、発展してきたかをＲ．ヒルの業績を中心に概観する。	同　上	同　上
6	家族ストレス論の展開	ヒルによって確立された家族ストレス論の継承発展を、Ｈ．Ｉ．マッカバンの２重ＡＢＣ・Ｘモデルを中心に解説し、理論的な理解を深める。	同　上	同　上
7	Ⅲ．ライフイベントと家族危機 大災害の被災家族	家族ストレス研究で早くから取り組まれ、日本でも各種の研究が行われている、自然災害の場合を中心に、多くの家族を巻き込んだ、地域的な環境の急変にさらされた家族の場合を検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	不況・失業と家族の困難	これも家族ストレス論の成立に関連の大きかった、大恐慌や株価暴落のもとでの家族生活の困難と、それへの対応過程を、今日の不況とも重ね合わせながら見ていく。	石原邦雄	石原邦雄
9	難病・障害者と家族 －精神障害を中心に－	家族メンバーの一人が回復の困難な難病や障害を持つことになった場合、家族は扶養者としてどのようにしてその困難に対処していくか。精神障害を中心に研究例を見ながら考える。	同上	同上
10	Ⅳ．日常生活のなかの家族ストレス 職業生活と家族生活の葛藤	前の３つの章が生活の激変を扱っているのに対して、この後の章では、より日常的な状況の中で生じるストレス問題を考える。この章では、職業生活を契機に生じる家族のストレス状況として、単身赴任・海外赴任に関する研究例をもとに考えてみよう。	同上	同上
11	子どもの成長と家族関係の危機	家族のライフサイクル展開の主要な要素といえる子どもの成長発達は、これに伴う家族関係の変化とともに混乱を生じさせる、もっとも一般的な家族のストレス状況として押さえられる。	同上	同上
12	高齢者の扶養と家族ストレス	家族規範が揺らぐなかで、なお多くの家族が高齢者の扶養を実際に担っている。こうした世代間の扶養関係は、寝たきり、痴呆といった症状にとどまらず、親族関係も巻き込んで家族生活上の困難を生じさせる、大きな問題であり続けている。	同上	同上
13	夫婦関係のトラブル	離婚の増加、「家庭内離婚」など夫婦関係をめぐるトラブルは家族生活の基礎を揺るがすものである。欧米型の家族モデルを採用したが、必ずしも確立したとはいえないうちに、長寿化や女性の社会進出が進むなかで、夫婦関係の意味づけも、トラブルのありようも、変化している。	同上	同上
14	Ⅴ．展望と課題 理論上、実践上の課題	ストレスモデルで、家族生活の困難状況とそこでの動態を捉える試みは、どの程度成功したか。理論的に残されている課題はどのようなものか、また、家族に関する政策およびストレス状況下の家族への援助プログラムへの応用可能性はどのように考えられるか。	同上	同上
15	ストレス論から見たこれからの家族	家族が大きく変化しつつあり、家族の捉え方も多様化しているなかで、ストレス論による家族分析を通して、これからの家族像をどのように描けるだろうか。	同上	同上

＝ 近代社会と人生経験（’９９）＝（R）

〔主任講師：正岡　寛司（早稲田大学教授）〕
〔主任講師：嶋崎　尚子（早稲田大学助教授）〕

全体のねらい

近代社会は、前近代の伝統や生活様式を破壊し、そして別のさまざまに新しい生活様式をつくりだし、それらを制度化してきた。講義では、近代社会において広く普及した事柄を取り上げるが、その際とくに人びとが人生において経験する出来事のタイミングや出来事の配列に注目しながら、近代社会の特徴とその変化の趨勢を記述し、説明することに主眼をおくことにする。

講義では、近代人にあらわれた人生経験の特徴を、信頼できる時系列データ ―― 個人のパネルデータやコーホート法による出来事経験データ ―― によって明らかにしていく。そのデータは、アメリカ、ヨーロッパ、そして日本で長い年月をかけて収集された貴重な資料からなっている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	近代社会の生成と変容	最近100年間における人間生活ならびに人生の組織化にあらわれた変化は、これに先立つ数千年の間にあらわれた変化をはるかに凌ぐものであったかもしれない。たとえば、人間の平均寿命もこの間に著しい伸長をみせた。人生の延長は人びとにいったい何をもたらしたのか。	正岡寛司（早稲田大学教授）	正岡寛司（早稲田大学教授） 嶋崎尚子（早稲田大学助教授）
2	近代化とライフコース	人が時間のなかを生きるのではない。むしろ、人の経験が時間を作りだすのだ。近代人の精神的特徴は、その時間意識の強さ、厳しさ、そして重要さにある。近代社会に先立つ牧畜・農耕社会において、人びとは自然のサイクル時間を生きていた。産業社会は時間の正確な測定、時計の普及から始まった。現在では、時間は人びとにとって、貨幣にまさる価値をもっているかもしれない。それゆえ、人生の時間的組織化は誰にとってももっとも重要な人生課題である。	同上	正岡寛司
3	経済恐慌と子ども、そして家族	子どもは家族・家庭を介して全体社会・時代と接触する。子ども期における大きな歴史的出来事との遭遇は、子どもの生活をどのように変えるのだろうか。また彼らのその後の人生経験にどのような刻印を押すのだろうか。大きな外的圧力を受けたとき、子どもはどのように大人になっていくのだろうか。子ども期に大恐慌を経験した者たちの人生経験をとおして考えていく。	嶋崎尚子（早稲田大学助教授）	嶋崎尚子
4	学校キャリアと職業キャリアの選択	教育を受けることは、個人が近代社会において自らの人的資源を獲得するための経験である。教育経験がその後の職業選択の分岐に対して構造的にもたらす影響をイギリスのＮＣＤＳデータを用いて考察する。学校での位置は、その後の人生経験をどれほど広げるのか、あるいは狭めるのか、敗者復活はあるのか、構造上の位置の連結（パスウェイ）の揺らぎから考えていく。	同上	同上
5	近代青年の役割推移	青年期、あるいは／そして若者期が社会制度として成立し、そして世界的規模で広く普及したのは近代、とくに20世紀の現象である。青年期には達成すべき生活課題が含まれている。親の家族からの独立、学業あるいは職業訓練の修了、労働力への参入、そして結婚と家族形成である。本章では、期待される役割移行の順序と、その期待から外れた場合の社会的効果について考察する。	正岡寛司	正岡寛司
6	結婚の形成と解消	青年期あるいは／そして若者期を経過した若い成人は、配偶者をみつけて結婚し、やがて次の世代を再生産する。 このような世代間の再生産過程をとおして人間社会は時間的に継続していく。近代社会はこの社会的再生産過程に大きな転換をもたらした。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	人生の転機	人びとはその人生航路においていくどかの大きな軌道修正の出来事・状態（転機）を経験する。転機となる出来事はさまざまである。それらの中の１つに、自分自身が選択したのではない種類の社会的事件、たとえば戦争や経済的大不況によってもたらされる予期せざる変化や転換がある。戦争の効果はその時代を生きるすべての人びとになんらかの影響を与えるが、その時期を青年期において遭遇する若者たちは直接的に戦争に動員されていく。	正岡寛司	正岡寛司
8	働く母親の心理的福利と社会環境	20世紀、とくに第二次世界大戦以降における社会的変化のうち、もっとも顕著な趨勢の１つは女性の労働力参加、とりわけ乳幼児をもつ母親たちの就業参加である。若い母親たちの就業継続は家族における性別役割分担にいかなる変化をもたらしたか。また、若い母親たちの心理的な満足度は就業を継続することによってどのような影響を受けたか。そして、若い母親たちの満足度は国家政策の改善策によって高まったかどうか。本章では、スウェーデンのパネルデータを用いて若い母親および父親について考察する。	同上	同上
9	サラリーマンの昇進	近代産業社会においては、個人の職業キャリア（職業生活）は企業組織間・内の職位や職務の移動に特徴づけられる。終身雇用制・年功序列制雇用慣行システムを擁する日本企業社会にあって、サラリーマンはどのようにピラミッド型の職位・職務体系を移動していくのだろうか。大企業ホワイトカラー男性社員の人事管理データに基づいて、その日本固有のメカニズムを明らかにする。	嶋崎尚子	嶋崎尚子
10	家族時間の意味	基幹産業を支える多量なブルーカラーの労働者。彼らの職業生活は、家計経済の家族戦略に組み込まれた形で展開していく。近代社会の産業勃興の歴史は、ブルーカラー労働者と彼らの家族のライフコースにほかならない。アメリカ合衆国1830年代から１世紀にわたる紡績産業の盛衰と労働者・労働者家族の事例から産業勃興期におけるブルーカラー労働者と家族の人生経験をみていく。	同上	同上
11	中年期の親と子どもの離家過程	人生に組み込まれた生活段階のうち、子ども期、青年期、そして老年期についてかなり多くのことがわかっているが、中年期についてはあまり多くのことがわかっていない。「中年」という言葉が示すように、その意味は人生の中程の期間をあらわしているだけで、その内容は明確でない。本章では、子育てと親の介護という２つの重大な社会的役割を遂行しながら、しかも自身に身体的・精神的な変化の兆候があらわれ始める中年の親、とくに母親を取り上げる。	正岡寛司	正岡寛司
12	定年退職と家族の生活段階	定年退職後はそれまでの成人期を通して生活の中心的領域を占めてきた職業生活に別れをつげることの第１歩である。出来事としての定年退職、そしてその前後のキャリアのありようは、家族の生活段階（家族時間の進行）と共時性をもつ。働くこと（仕事）と愛すること（家族）という近代社会の人生テーマが結実し、収穫される時期である。ホワイトカラー・サラリーマンのデータから考察していく。	嶋崎尚子	嶋崎尚子

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
13	人生後期への移行	近代における２つの側面における劇的な変化、すなわち個人の寿命の著しい伸長と福祉国家の形成とは、高齢者の生活に劇的な変化をもたらした。しかしだからといって、パーソナルな面における世代間関係のニーズと欲求が低下しているわけではない。定年退職をした子どもたちが超高齢の親たちの介護にあたるという現象も稀ではなくなった。	正岡寛司	正岡寛司
14	高齢者のライフスタイルと未亡人期への移行	高齢者のライフスタイル、および既婚女性の未亡人期についてパネルデータを用いて考察する。その際、とくに先行要因が現在のライフスタイルにいかなる影響を及ぼしているかに焦点を合わせる。また、人生の最後に必然的に訪れる死は、死にゆく当人のみならず残された家族や友人にとっても危機的移行であるとみなされる。死に方にも近代社会は大きな影響を及ぼした。	嶋崎尚子	嶋崎尚子
15	ポストモダンと社会文化的ライフコース	近代社会における人生経験過程への具体的な研究を詳細に考察することからえられた成果ならびに残された課題を提示する。とりわけ日本における今後の研究展開の方向性と可能性を探っていく。	同上	正岡寛司 嶋崎尚子

＝ 生活者の経済（’００）＝（R）

〔主任講師：御船 美智子（お茶の水女子大学大学院助教授）〕

全体のねらい

個人が経済社会と関わる際、労働者、消費者、債権、債務者、納税者・社会保障受給者など、さまざまな経済的側面をもつ。貨幣経済の中では経済人として行動したり、家庭や地域の生活を営み経済活動をする。個人の生活と経済との関係を認識し、経済社会において生活者が主役となる経済のありかた－生活経済を検討する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生活者の経済－何のための経済発展か	経済発展が必ずしも生活の豊かさの実現につながらないのはなぜか。従来の経済指標を整理し、それが何を示す指標なのか、経済成長政策と生活の豊かさはどのような関係かを明らかにし、持続可能な豊かな生活を実現する経済のあり方と、その条件を検討する。	御船美智子（お茶の水女子大学大学院助教授）	御船美智子（お茶の水女子大学大学院助教授）
2	生活・くらしと経済	生活・くらしとは何か、生活の主体、構造、要素、プロセスを概説する。また、生活の経済的側面を抽出し、生活と経済の関係を相対化する。生活の豊かさとは何か、ものの豊かさと心の豊かさを対立的にとらえる考え方は妥当かを検討する。	同上	同上
3	現代社会と経済主体としての生活者	現代経済の構造と特徴を示し、生活者が経済主体となる条件を考える。また、生活者は複雑化する経済社会からどんな影響を受けているのか、生活者の行動がどのように経済社会のあり方を方向づけているのかを、経済構造・循環の中に位置づけて明らかにする。	同上	同上
4	生涯生活とリスクと経済	生涯にわたり生活資源、生活リスクをどのようにマネージメントするのか、資源管理の方法を概説する。貨幣管理に関わる収入と支出、資産・負債高の定義と分類、内訳、各の意味と関連をとらえ、フローとストックの概念、関係、経済取引、貯蓄の役割を把握する。	同上	同上
5	個計・個人の経済と家計・家庭経済	個人は自ら経済活動をするとともに世帯を形成して共同生活を営む。複数の個人が、なぜ、どのように家計・家庭経済を形成するのか、家計や家庭経済の構造と変化を示す。家庭経済内部の個人間の経済的平等とは何か、ジェンダー、家族共同性との関係を検討する。	同上	同上
6	政府・財政と国民・市民	生活と財政との関係を現実的、理論的に整理し、最低生活保障、福祉国家における国民と財政との関係強化を検討する。また納税、社会保険料納付、社会保障給付受給、社会福祉サービス等をめぐる問題点を探り、中央・地方政府や財政と国民・市民のあり方を考える。	同上	同上
7	市場と物価・利子率	生活者にとってのものやサービスの価格、お金の「値段」について考える。価格決定のメカニズム、消費者物価指数の対象や仕組み、消費者物価の推移、消費者物価地域差指数、制度への利用、内外価格差の考え方、利子率の種類や決定のメカニズム、推移を示す。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	消費社会と生活者の消費	消費とは何か、消費構造を把握し、生活者ニーズと消費と関係、消費の意味、位置づけを検討する。消費のメカニズム、消費の環境や条件、サービス化などの消費の動向、消費に関わる問題点を整理し、持続可能な消費社会のあり方、実現のための制度を考える。	御船美智子	御船美智子
9	金融と生活者	個人は様々な金融商品やサービスを購入したり、消費者信用や、ローンを利用したり、経済取引の決済手段として金融との関係を深めている。国際化する金融市場、自己責任原則の下での、新しい金融の在り方、そこでの生活者、取引の主体性について考える。	同上	同上
10	住宅、教育・扶養の経済	生活者の空間的基礎である住宅、次の世代育成のための教育は、生活経済上、重要な課題であり、その経済的負担が最も大きい。住宅水準、教育水準、住宅費と教育費の現状を把握し、住宅費や教育費に関する政策や制度的仕組みの在り方を検討する。	同上	同上
11	贈与・受贈と儀式・文化の経済	市場とは異なる仕組みの中で行われてきた贈与・受贈の慣習や儀式・文化は生活経済上重要な課題である。交際費、結婚や葬儀の市場の拡大、家族、価値観の多様化、市場、慣習の変化による新しい方向性などの現状と問題点を検討し、経済との関わりを考える。	同上	同上
12	生活者と労働と家事	仕事、労働、家事、ワーカーズ・コレクティブの活動、ボランティアなど、個人の働き方とその組織、環境の多様性、問題点を示す。個人が働く理由、社会的な意味、ペイドワークとアンペードワークの違いを明らかにし、職業とジェンダー、働く条件などを考える。	同上	同上
13	ボランタリー経済と生活者	生活に関わる経済は、市場経済、公共経済だけでなくボランタリー経済が重要な役割をはたしている。ネットワーク、コミュニティ、共同性、相互性、ＮＰＯなどボランタリー経済の基礎概念を整理する。また実例を検討しその問題点、制度的枠組みを考える	同上	同上
14	情報と経済社会	生活における情報の意味を明らかにし、なぜ情報化が進むのか、どのように情報化が進展しているのか、情報化の進展はどのような情報経済社会を形成しているのか、その問題点と解決のための制度を検討し、生活者のための情報経済社会の在り方を考える。	同上	同上
15	生活環境と経済	生活環境と経済の関係、生活者の立場からみた環境問題を整理し、その構造、要因を示す。また、生活環境問題を解決するための制度と経済のあり方、生活者の行動、それを支える考え方や、環境家計簿など具体的な取り組みを検討し、生活者の経済を展望する。	同上	同上

＝生活経営論＝（R）

〔主任講師：清野　きみ（北海道教育大学名誉教授）〕

全体のねらい

生活は人間の実践領域であり、生活文化の領域である。各人が生活文化の創造的な担い手となるためには、自己の生活管理能力を高め、生活経営上の不安要因を科学的に、客観的に認識できることが鍵となる。本講では、生活経営上のリスクに焦点をあて、健康、家計、孤立、事故などにみる日常的課題を明らかにし、自己と家族の生活技術を高め、外部環境に働きかける新しい生活スタイルを提言する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生活経営のねらいと課題	生活経営は、生活管理と生活設計を包括し、家庭経営・生活管理と類似の領域を対象とした新しい生活科学である。人間にとって根元的な生活経営とは何かを追求し、主体的に生活を組織し事故に対処する生き方を考える。	清野きみ（北海道教育大学名誉教授）	清野きみ（北海道教育大学名誉教授）
2	生活環境と生活の教育	生活環境醸成の諸条件について、生活主体と生活手段（技術・資財）の総合としての生活実践を中心に、生活経営能力育成のプログラムを考える。その際、我が国の生活教育の源流にたちかえり、今日の生活の教育にいかに活かせるかをみる。	同上	同上
3	生活診断とライフヒストリー	生涯生活設計の記録に、家庭における日常的なライフヒストリーが用いられる。ここでは、生業別、地域別、世代別、行事（家庭）別にそれらを整序し、生活経営目標と生活のしかたに必要とされる生活診断の諸相を探る。	同上	同上
4	家族の多様化と新たな生活文化の創造	今日の家族多様化の動向を明らかにし、家族多様化が意味する生活リスクの増大に対して、「安心」に焦点を当てた新たな生活文化の創造を探る。	木田淳子（大阪教育大学助教授）	木田淳子（大阪教育大学助教授）
5	性別分業型家族から生活共同型家族へ	日本の家族に今日なお根強くあるところの性別役割関係によって、生活経営上どのような問題が生じているかを考察し、それらを克服する方向として、生活共同型家族を展望する。	同上	同上
6	開発途上国の家族の生活経営	開発途上国では生活のみならず、生産の場においても家族という単位が重要な位置を占めている。わが国と比較して、こうした形態の家族の生活環境と生活経営の特色を述べる。	河合明宣（放送大学助教授）	河合明宣（放送大学助教授）
7	母子保健と生活経営	妊娠・出産管理の主体および場が、地域・家庭から医療機関へと移行したことに伴い生じた様々な問題を検討し、これからの妊娠・出産管理の望ましい姿を生活者の立場から考察する。	山越成美（千葉県立農業大学校専任講師）	山越成美（千葉県立農業大学校専任講師）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	妊娠期間における主婦の家事労働	妊娠中の専業・就業主婦の家事労働の実態調査結果をもとに、妊娠が招来する身体的・精神的変化の家事労働遂行に及ぼす影響を避妊時と比較しながら明らかにする。	山越成美	山越成美
9	妊娠と労働管理	妊娠時に推定されるエネルギー代謝率の含意を明らかにすることを通して、妊婦の労働遂行許容範囲のスケールとしての、避妊時エネルギー代謝率の適用性について検討を加える。	同上	同上
10	高齢期の生活経営－自覚的健康感と健康状態－	現代は、人生50年時代の生活から人生80年時代の生活へと急速に変化している。それに伴い、個人においても社会全体としてもさまざまな生活問題が懸念されるが、人生80年時代のより良い生活を構築するには、高齢期の生活経営が緊要な課題である。	遠藤マツエ（作陽学園くらしき作陽大学教授）	遠藤マツエ（作陽学園くらしき作陽大学教授）
11	高齢期における孤立意識	一般に、高齢者の生活問題は病気、貧困、孤独に集約されると言われるが、なかでも主観的な孤独意識の把握は、高齢期の生活経営を人生の円熟期になるように図るうえで、重要な課題である。日常生活における生活行動を通して孤独意識とその緩和を考える。	同上	同上
12	高齢者の日常的な健康管理	高齢者が幸せな生活を営むには、健康であることが極めて重要である。健康は、生活者と生活者を取り巻く環境との相互作用の過程に現れる状態であるので、日常生活における高齢者の生活意識や生活態度の積み上げ過程を通して、高齢期における生活経営を考える。	同上	同上
13	事故と生活経営	事故とは安全に対するリスクであり、正常な生活が損なわれる事態の発生をいう。現代では高齢化・サービス商品化・債務・情報化などが、事故に繋がることが多い。生活基盤を失う地震災害はもっと恐ろしい。地震災害と生活の集結そして再生をとりあげる。	清野きみ	清野きみ
14	家庭援助サービスと生活経営	長命化・少子化の一側面として単身の世帯が増えていくが、他方、在宅介護の中核となるホームヘルパーの家事援助が注目される。事業内容を検討しながら、受け手の側にたつサービスとは何かを考える。	同上	同上
15	生活課題と生涯学習	生活を科学することは、文化を学び、文化を創り、社会と人間における文化価値を創造することにつながる。21世紀の生活の課題とは何か、ひとりの人間の出来ることは何か、その可能性をゲストを交えながら最大限追求してみたい。	同上	同上

＝ 消費者問題の展開と対応＝（R）

〔主任講師：小木 紀之（名古屋経済大学教授）〕

全体のねらい

消費者問題の解決は一朝一夕に可能な問題ではなく、行政、企業、消費者のそれぞれの積極的な対応が要求される。この科目は「消費者は真に守られているか」を視点に消費者問題の本質を理解し、消費者が健全な消費者主導型の経済社会を実現させていくための消費者の役割、企業、行政の責務について考えたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	新しい消費者像を求めて	21世紀の新しい消費者像を模索し、自立する消費者のあり方を学ぶ。	木村立夫（東京経済大学教授）	木村立夫（東京経済大学教授）
2	消費者問題の課題と展望	消費者問題とは何か、消費者問題が発生してきた経済社会的な背景、主要な消費者問題、消費者の権利、新しい消費者問題の潮流などを中心に消費者問題の全体像を学ぶ。	小木紀之（名古屋経済大学教授）	小木紀之（名古屋経済大学教授）
3	消費者運動の歴史と展開	消費者問題解決の一側面を担う消費者運動のあゆみ（歴史と展開）を、日本・アメリカ・その他と対比させながら消費者運動の役割を学ぶ。	同上	同上
4	消費者行政の展開	消費者保護はなぜ必要なのか。国および地方自治体の消費者行政の仕組み、消費者保護基本法の理解を通じて、今後の方向性を探る。	同上	同上
5	消費者問題と消費生活関連法（1）	消費者問題に対応する消費者法にはどのようなものがあるか。情報公開と消費者・製造物責任法を中心にその課題を探る。	中村年春（青森大学教授）	中村年春（青森大学教授）
6	消費者問題と消費生活関連法（2）	安全・商品選択・適正な商取引と法律、訪問販売・通信販売・割賦販売と法規制、表示・警告、景品、広告と法規制など身近な消費者法を考える。	同上	同上
7	企業の社会的責任と消費者対応	メセナ、フィランソロピー、企業ボランティアなどの企業の社会貢献活動の実態と企業のあるべき社会的責任の課題を検討する。	木村立夫	木村立夫

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	企業の販売戦略と消費者	高度大衆消費社会における企業の販売戦略は、時として消費者不在のマーケティング活動を促す。消費者にとってのマーケティングの意味を学ぶ。	木村立夫	木村立夫
9	流通政策の展開と消費者	わが国の流通構造は、近年大きくその姿を変化させてきている。わが国の商取引・商慣行、国際化の進展、規制緩和などの中で、消費者志向型の流通政策のあり方を探る。	小木紀親（日本福祉大学助教授）	小木紀親（日本福祉大学助教授）
10	高齢化社会の進展と消費者対応	わが国における高齢化の進展は、消費者としての私たちの生活を様々な形で変化させてきている。具体的には、雇用・年金、健康・福祉、教育・文化、住宅・生活環境と高齢化の問題を検証する。	井上崇通（明治大学教授）	井上崇通（明治大学教授）
11	情報化社会の進展と消費者保護	マルチメディアの進展は、私たちの消費者としての環境を劇的に変化させてきている。生活のボーダレス化の持つ利便性と問題点を検討するとともに、今日、論議されている電子商取引についても取り扱う。	同上	同上
12	資源・環境問題と消費者	環境問題は、地域的な問題であると同時に世界規模の問題としても論議する必要がある。地球に優しいライフスタイルの確立に向けて、省資源、省エネルギー、ごみ問題等、わが国および各国の具体的な取り組みについて学ぶ。	同上	同上
13	サービス経済化と消費者問題	豊かさの象徴と言われるサービス経済化現象について学ぶ。サービス化の進展は、一方で消費者の支出構造に影響を与え、他方では雇用機会の変化をもたらしてきている。これらの側面についての知識を得る。	同上	同上
14	消費者教育の課題と展望	消費者教育の理論について学習し、学校・企業の消費者教育の意義を学ぶ。	小木紀親	小木紀親
15	消費者生活相談の現状と課題	多様化、複雑化する消費生活相談の現状と企業と消費者の接点に立って活躍する、消費者生活コンサルタント、消費生活アドバイザー、消費生活相談員、ヒーブ、ACAPの役割を学ぶ。	小木紀之	小木紀之

＝日本人口論＝（R）

－高齢化と人口問題－

〔主任講師：清水　浩昭（日本大学教授）〕

全体のねらい

人口高齢化の問題は、日本のみならず世界における現下の最重要課題であるといわれている。そこで、本講座では、世界人口の高齢化の動向を念頭におきながら日本社会における人口高齢化の特徴と問題点を人口学的な視点から概説することにしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	日本人口論の到達点と課題	日本の人口学が今日までに蓄積してきた研究成果を紹介するとともに、高齢化問題研究の意義を明らかにする。	清水浩昭（日本大学教授）	清水浩昭（日本大学教授）
2	人口分析の方法とその特徴	人口学は人口現象を対象にして研究を展開している学問であるが、この学問にみられる研究方法の特徴を明らかにする。	同上	同上
3	人口高齢化研究の意義と高齢化の人口学	今、何故、人口高齢化について研究しなければならないのか。また、人口高齢化は、どのような人口学的条件の変化によって生ずるのかを明らかにする。	同上	同上
4	人口高齢化の現状と将来	人口高齢化の国際比較を行うとともに、日本の人口高齢化の特徴と問題点を全国レベルと地域レベルの二つの側面から明らかにする。	同上	同上
5	結婚と出生－晩婚化・少産化の動向と高齢化問題	人口高齢化をもたらす要因の一つである出生率低下の趨勢を結婚・出産期女子人口の減少（普通出生率の低下）、有配偶出生率の低下、夫婦の「有子少産」の出生行動の定着化に焦点をあてて考察する。	中野英子（聖泉短期大学教授）	中野英子（聖泉短期大学教授）
6	死亡－長寿化の動向と高齢化問題	人口高齢化をもたらす要因の一つである死亡率（寿命）の趨勢について概観するとともに、死亡率の低下（寿命の伸長）がもたらす影響の問題を日本人のライフサイクル、ライフコースの変動に焦点をあてて考察する。	高橋重郷（国立社会保障・人口問題研究所人口動向研究部長）	高橋重郷（国立社会保障・人口問題研究所人口動向研究部長）
7	移動－高齢者移動の動向と高齢化問題	日本の人口移動は、若年層を中核としているが、最近、高齢者移動も微増しつつある。このような人口移動の動向をふまえて、移動構造の変化が高齢化にどのような影響を与えているかを浮彫りにする。	山崎光博（秋田県立農業短期大学教授）	山崎光博（秋田県立農業短期大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	家族－核家族化の動向と高齢化問題	日本の人口動向を家族に焦点をあてて検討すると、核家族化の進展という問題が浮彫りになってくる。この核家族化の進展が高齢化問題といかなる関連を有しているかを概観する。	渡邊吉利（国際医療福祉大学教授）	渡邊吉利（国際医療福祉大学教授）
9	労働力－労働力の中・高年化と高齢化問題	寿命の伸長は、高齢期における非労働力期間を長くし、長い高齢期における新しい役割構造が必要となってくるものと思われる。このような動向をふまえて、労働力の中・高年化の問題と高齢化とのかかわりあいを就業行動・労働力の再配分等との関連で考察する。	中野英子	中野英子
10	結婚と出生構造の変化と地域の高齢化問題	日本社会における高齢化問題を地域的な視点でみると、地域によってその現れ方は多様である。そこで、この問題を結婚・出産期女子人口の地域性、出生行動・結婚行動の地域性に焦点をあてて考察する。	同上	同上
11	死亡構造の変化と地域の高齢化問題	人口移動と死亡率低下の地域差は、人口構造（人口高齢化）の地域的多様性をもたらすことになった。このようにして生じた世代間人口の地域的多様性とそれに伴う世代間ギャップの問題を死亡率の動向に焦点をあてて考察する。	高橋重郷	高橋重郷
12	移動構造の変化と地域の高齢化問題	人口移動が地域の高齢化に与える影響の問題を高齢化先行地域と高齢化後発地域に焦点をあてて考察するとともに、そこに内在する問題点を浮彫りにする。	山崎光博	山崎光博
13	家族構造の変化と地域の高齢化問題	日本の核家族化現象を地域的な視点でみると、地域差が存在している。この地域差の問題を日本の家族文化の多様性との関連で明らかにするとともに、核家族化の地域差が地域の高齢化問題とどのように関連しているかを考察する。	渡邊吉利	渡邊吉利
14	労働力構造の変化と地域の高齢化問題	労働力構造の変化は、地域の高齢化問題に様々な影響を与えている。そこで、この問題を労働力の中・高年化、女子化と就業構造の地域性、女子の就業行動の変化に焦点をあてて考察する。	中野英子	中野英子
15	高齢化問題とその対応策	人口高齢化の進展は、様々な問題を惹起した。そこで、この問題を解決するために今日までどのような対応策が提示されてきたかを概観し、本講座のむすびとしたい。	清水浩昭	清水浩昭

＝ 衣・食・住の科学 ＝（R）

〔主任講師：酒井　豊子（放送大学教授）〕
〔主任講師：本間　博文（放送大学教授）〕

全体のねらい

衣食住という語が日常生活を代弁する概念として使われるほど、衣服、食物、住居は生活の重要な要素である。ここでは、生活主体としての人と、生活手段としての衣・食・住とのかかわりに関する科学の成果と現状を概観し、物が充足した現代における、生活者の視点に立った人と物のかかわりの科学の課題を考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	衣・食・住に関する科学的視点	衣・食・住の生活は、特別な科学的知識がなくても誰でも営むことができる。衣・食・住を科学することには、どういう意味があるのだろうか。この講義への導入として、衣・食・住の科学の意義と目的を考察し、本講義の狙いなどを述べる。	酒井豊子（放送大学教授）	酒井豊子（放送大学教授） 本間博文（放送大学教授）
2	衣・食・住の科学と周辺諸科学	生活事象の研究は、自然科学、社会科学、人文科学の諸領域にわたる多くの科学とかかわり、これらの手法を取り入れながら実生活の認識に立った総合的視点が要求される。衣・食・住の科学の周辺諸科学とのかかわりと独自性について考察する。	本間博文（放送大学教授）	本間博文 酒井豊子 今井悦子（放送大学助教授）
3	食の文化―歴史学的・比較論的アプローチ―	食生活は、風土、社会構造等に影響されながら連綿と受け継がれてきた。その長い歴史の中で、築かれてきた食の文化について、時間軸（歴史学的）および空間軸（比較論的）を切り口とした研究事例を紹介する。	今井悦子（放送大学助教授）	今井悦子
4	栄養学発展の歴史	人が健康を維持・増進していくためには、第一に必要な栄養が充足されなければならない。ここでは、栄養素および栄養と人の健康との関係についての研究事例を、その進歩を中心に紹介する。	同上	同上
5	食品の科学と技術―その発展の軌跡―	食品は多様な成分の集合体である。科学の進歩とともに成分バランスを巧みに整え品質を高める技術が次々と誕生した。最近ではバイオテクノロジーを応用した新食品も登場している。研究法を紹介しながら発展の軌跡を辿り、食生活と食品とのかかわりを考える。	荒井総一（東京農業大学教授）	荒井総一（東京農業大学教授）
6	食生活の構造―その現状を考える―	戦後のわが国の食生活は、社会の激変に伴って、他国に類を見ないほど著しく変化した。ここでは、社会の構造やその変化と食生活との関係についての研究を紹介し、現代の食生活を考察する。	今井悦子	今井悦子
7	衣服製作の科学と技術	われわれの用いる衣服は既製服がほとんどである。多くの人の体型・サイズに適合した、仕立てのよい既製服の生産には、既製服サイズの整備と縫製工程の高度化が重要なポイントである。この章では、身体計測とパターンメーキングならびに縫製の科学と技術の跡を辿る。	酒井豊子	酒井豊子

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	衣服素材の多様化	この一世紀足らずの間に衣服の素材は種類・量とも飛躍的に増加した。化学繊維は天然繊維模倣の時代から、新しい機能性追究の時代に入っている。時代を追いながらこれらの繊維・繊維製品について理解を深めるとともに、新しい製品開発の方向について概観する。	酒井豊子	酒井豊子
9	服装の心理	衣服は人の外観を構成し、内面を表出する。ここでは、衣服の選択・着装など、衣生活にかかわる人の行動を、着る人のパーソナリティー・価値観・態度などと、社会の慣習・規制、文化水準などとの関係において研究する被服心理学の研究方法・成果などを紹介する。	小林茂（共立女子大学教授）	同上
10	洗濯を取りまく科学	洗濯は手洗いから洗濯機へ、洗剤は石けんから合成洗剤主流へと変化した。洗濯は汚れを除去するのが主目的であるが、同時に衣服に損傷をもたらすこともある。洗濯排水の環境問題も無視できない。これらの洗濯にかかわる諸事象について研究の取り組みを紹介する。	酒井豊子	同上
11	生活科学と住居学	日本の伝統的な住まいは、欧米はもとより中国大陸や朝鮮半島とも異なる独特の様式を生み出して今日に至っている。主に住まいの歴史に関する研究成果の紹介を通して、わが国の住文化の特徴を考える。	本間博文	本間博文
12	高齢社会と住居学	住まいは住生活の容器であるといわれる。この意味で住まいの第一義的機能は、さまざまな外的危険性や不敵切な状況に対し、適切なシェルターを用意することである。構造的安定性、物理的環境調整等、自然科学的手法が住居学にいかに取り入れられているか紹介する。	同上	同上
13	住まいの安全性	住まいは家族生活の基礎的な単位空間である。住まいの変化は家族生活の変化によるが、反面住まいが家族生活を規制することもあり得る。このように、住居学は社会科学的方法を取り入れ、さまざまな知見を得ているが、本章はその一端を紹介する。	同上	同上
14	快適な住まい	わが国は、生活大国への移行を迫られているが、中でも住宅事情の改善はその中核となるものであろう。しかし、住まいの改善は関連諸分野が複雑に関係し合っており、容易ではない。総合的な判断に基づいた問題解決の実例を紹介する。	同上	同上
15	衣・食・住研究の課題	14回までの講義を概観し、衣・食・住の科学の成果と、日常生活に対する位置付けを確認し、生活者の立場に立った研究の今後の課題を考察する。	酒井豊子 本間博文	酒井豊子 本間博文 今井悦子

＝ 現代モード論（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：酒井　豊子（放送大学教授）〕
〔主任講師：北山　晴一（立教大学教授）〕

全体のねらい

モードは、単に衣服デザインの形態上の主張ではなく、人が自らの身体をいかに把握し、他者との関係の中でいかに表現するかの問題である。本講義では、なぜ衣服を着るかという基本的な問いからはじめて、近代の消費社会のなかでいかにしてモード現象が発生したかを考察する。さらに、19世紀後半のフレデリック・ワース以来の代表的なデザイナーの足跡をたとることで、20世紀モードがいかなる問題軸を中心に展開され人々の生活に浸透していったかを検証する。そしてこれからのモードがどのような方向へ向かうことになるかを検討したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	なぜ衣服を着るのか	衣服の機能に関する3つの立場（生理学、人類学、社会学）からの説明を紹介しつつ、現代人にとっての衣服がおもに社会的な機能を軸にすえているとの理解を深め、モード現象の意味を考えるうえで何が重要であるかを検討する。ファッション、モード、流行などの用語についてもふれる。	北山晴一（立教大学教授）	北山晴一（立教大学教授） 酒井豊子（放送大学教授）
2	近代消費社会の誕生	モード現象が人々の社会生活に浸透するためには、第1に人々の生活水準が生存維持の段階から人生享受の段階へと上昇すること、第2に人々の身体感覚が2つの方向（内面的身体と身体の他者性の発見）で広がりを獲得すること、第3の要因としてメディア化社会の進展が必要こと、等について考察する。	同上	同上
3	現代モードの源流	パリは現代モードの発祥地といわれるが、どのような経緯でそうなったのか、19世紀後半の巨大消費都市パリにおける衣服をめぐる諸状況（既製服の誕生、デパートの発明、流行の一般化など）を、当時の社会的、文化的、経済的、技術的な変化を確認しながら考察する。	同上	同上
4	20世紀モードの問題軸	何が20世紀モードの中心軸だったか。モード現象が平等志向社会の出現とそこにおける差異化への欲求に支えられていること、近代モード現象の進展のなかでどのような差異が消滅し、どのような差異が主張されるようになったかといった問題を、階級とモード、性差とモード、身体の束縛と解放などの事柄を軸に考察する。	同上	同上
5	20世紀モードの冒険者たち（1） フレデリック・ワースとオートクチュールの発明	前半でオートクチュールの歴史と現在を簡単に紹介したのち、19世紀後半（第二帝政期）のパリで活躍しオートクチュールの創始者とされるフレデリック・ワースの生涯と仕事を詳細に辿ることにより、当時のパリ市民と「上流階級」の衣生活の模様、オートクチュール発生の歴史的条件、現代的意味等を調べる。	同上	同上
6	20世紀モードの冒険者たち（2） ポール・ポアレとジャポニズム	20世紀モードはポール・ポアレとともに始まるといわれる。ワース流の豪華絢爛だが重いフォルムを排してなんとかして女性の身体のシルエットと動きを表現する必要から、ポアレはコルセットを必要としないドレスをつくるにいたった。ポアレとジャポニスムへの関心、アメリカ市場の開拓についてもふれる。	村田仁代（大分大学助教授）	北山晴一 村田仁代（大分大学助教授）
7	20世紀モードの冒険者たち（3） マドレーヌ・ヴィオネと永遠のドレス	マドレーヌ・ヴィオネは20世紀モードを造形面で革新した。シャネルほど知名度はないが、現代デザイナーたちがヴィオネに言及するのはなぜなのか。流行に距離をおき女性の身体をもっとも美しく見せる永遠の衣服美を求めたヴィオネの意匠の革新性と両義性について考える。特徴的な一枚布活用についてもふれる。	北山晴一	北山晴一 酒井豊子

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	20世紀モードの冒険者たち（4） ガブリエル・シャネルと女性服	ジャージースーツの発案者として20世紀の女性服の原型をつくったガブリエル・シャネルは、女性服に機能美と自由な感覚をもたらした。シャネルの生涯と仕事を紹介しながら、スポーツモード、女性と仕事、モードの両義性、ブランドの意味等について考える。同時代のスキャパレリらについてもふれる。	北山晴一	北山晴一 酒井豊子
9	20世紀モードの冒険者たち（5） クリスチャン・ディオールとモード産業	クリスチャン・ディオールは、モード現象を社会の重要な活動として認識させたという意味で20世紀後半のもっとも代表的なデザイナーである。あらゆるフォルムの実験者として、伝統的なエレガンス（女性美）の演出者として、またプレタポルテの推進者として、さらにはブランド産業の確立者としての生涯を考察する。	同上	同上
10	20世紀モードの冒険者たち（6） 三宅一生らと新しい服、新しい身体、新しい素材	1980年代から多くのデザイナーたちが目指してきた方向は、ジェンダーの枠から自由でありかつセクシュアルな衣服、あるいは身体性を制約しない衣服、逆に身体性に制約されない衣服、ときには第2の皮膚とも形容される衣服、いいかえれば究極のモードを求めることだった、こうした方向性の具体化の例を検討する。	同上	同上
11	ブランドの力	「ブランド」はモードに求心力と遠心力を与えるモード現象の根幹にかかわる事象である。パリやミラノに本拠をもつブランドの発生、戦略、特性などを「イメージ」をキー概念にすえた対項目（製品とイメージ、消費とイメージ、欲望とイメージ）の分析を通して明らかにする。にせブランド問題にもふれる。	同上	同上
12	社会規範と自由とモード	モード現象は社会規範と自由との間のダイナミックな均衡のうえに成立する。したがってモード現象はつねに社会規範の強化と自由の拡張を求める2つの側からの批判にさらされる。モードを拒否するさまざまの議論（瑣末の拒否、衣服の手段化、消費批判、エスタブリッシュ批判など）や行動（服装規制、パンク、ストリートファッションなど）を紹介する。	同上	同上
13	異性装の過去とゆくえ	現代モードは多様化したかにみえるが、近代以前にくらべると形態、色、素材の面で男女の性による拘束は、最近多少緩和されつつあるが、いぜん強い。それは性差の維持が、近代社会を支える重要な柱のひとつだったからである。古今東西の異性装の歴史と意味を検討することを通して、これからの異性装の可能性をさぐる。	村田仁代	北山晴一 村田仁代
14	芸術・遊び・夢としてのモード	着られるためにあるという限定を外すことで衣服の可能性はどれほど広がるか。造形作品としての衣服は着られることを目的とせず、ショーのための衣服は日常の用には適さない。ことさら醜いことを主張することで美しい衣服、逆説（倒錯、パロディ）としての衣服も存在するこうした試みがモードの可能性を広げることを考える。	北山晴一 村田仁代	北山晴一 村田仁代
15	モードの力、モードの社会学	モード現象は身体、衣服、欲望の3つの「社会的」要素に支えられている。われわれ現代人はこの3つの要素を美しい身体、美しい衣服、美しい生き方といった用語に置き換えて理解しようとする。しかし現代モードの最大の課題は、この美しさの意味を問うことなのである。現代モードはまた、文明と自然の狭間に生起する問題（健康、環境、自由、幸福など）との関連においても考察されなければならない文明論上のテーマでもある。	北山晴一	北山晴一 酒井豊子

＝ 洗濯と洗剤の科学（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：阿部　幸子（青山学院女子短期大学教授）〕

全体のねらい

伝統的な技法に代わり、今日の洗剤と洗濯機による洗濯方法が一般化したのはこの半世紀のことであり、近年の科学技術の発展に負うところが大きい。本講座では衣類の洗濯を主題とし、洗剤の特性や洗浄のメカニズムを明らかにすると共に、洗浄力評価法や、実際の洗濯条件、さらには、洗濯と環境との関わりなどについて考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	水と洗濯	大昔から、人は水辺での洗濯を行ってきたが洗濯の方法は軟水地域と硬水地域では異なっていたと思われる。そこでまず、洗濯に及ぼす水質の影響について考察する。また、汚れの成分には各種の物質があるが、汚れ成分と水による除去性について取り上げる。	阿部幸子（青山学院女子短期大学教授）	阿部幸子（青山学院女子短期大学教授）
2	洗剤とは	洗剤は、水による汚れの除去を一層促進するために添加される配合製品で、界面活性剤を主剤に各種のビルダー（アルカリ剤、イオン交換剤など）および補助剤（酵素、再汚染防止剤など）が配合されている。界面活性剤の洗浄作用とビルダー作用について考察する。	藤井富美子（徳島文理大学教授）	藤井富美子（徳島文理大学教授）
3	洗剤作用のメカニズム－１　ぬれ	洗濯はぬれることからはじまる。洗浄過程の第１段階であるぬれは、繊維などの基質表面の空気が洗浄液で置き換えられる過程であり、界面自由エネルギーを用いて記述できる。ここでは、ぬれの定義、ぬれの尺度、表面ぬれ、浸透ぬれなどについて述べる。	田川美恵子（金沢工業大学教授）	田川美恵子（金沢工業大学教授）
4	洗剤作用のメカニズム－２　分散作用	凝集した状態で付着している汚れを洗剤液中で洗う場合、まず凝集粒子が分散する形で部分的に取り除かれ、最後の段階で繊維に直接付着している粒子が除去されることが多い。この過程を、広義の分散現象としてとらえ、コロイド安定性理論によって説明する。	同上	同上
5	洗剤作用のメカニズム－３　乳化	人体皮脂を主体とする油汚れで汚染された衣類を洗剤水溶液に浸すと、界面活性剤の吸着により油汚れと水との界面張力が低下し、僅かな機械力で油汚れは微粒子になり水中に分散除去される。この現象を乳化とよび、乳化が有効に生ずる条件について考察する。	藤井富美子	藤井富美子
6	泡沫と洗浄	洗剤水溶液中での気泡は、汚れの除去には寄与しないが、洗剤の洗浄力の有無を判定する一つの目安となる。気泡の集積である泡沫は、シャンプーやカーペットの洗浄のほか、工業的に古紙の再生に利用されている。生活におけるさまざまな泡沫の効用について述べる。	同上	同上
7	洗浄における酵素の作用	洗剤には、タンパク質分解酵素、脂質分解酵素、でんぷん分解酵素、繊維素分解酵素などが複合配合されており、それぞれの酵素の基質になる汚れに作用して、汚れを除去されやすい状態に変化させる。そのメカニズムと効果について考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	汚れ除去と漂白・増白	しみ汚れや黄ばみなどは、洗剤の界面化学的な働きによっては除去されない。色素を除去するには漂白剤を、黄ばみの除去には蛍光増白剤が用いられ、これらが洗剤中に配合されている場合も多い。漂白や増白の原理、効果的な処理方法等について述べる。	片山倫子（東京家政大学教授）	片山倫子（東京家政大学教授）
9	汚れ除去と機械作用	一般に、洗浄においては、汚れの付着力を低下させるために洗浄剤を添加し、さらに攪拌などにより物理的な力が加えられる。洗濯液の流動や、布地の変形・衝撃力などさまざまな形での機械力が考えられるが、代表的なものを取り上げ概説する。	田川美恵子	田川美恵子
10	洗浄力の評価	洗剤をどのように使ったらよいのか、例えば洗剤濃度や洗浄温度などを知る、あるいは洗剤を選びたい、などの場合に洗浄力評価が必要になる。いくつかの方法が考えられているが万能なものはない。洗浄力試験の考え方と試験法の現状について述べる。	阿部幸子	阿部幸子
11	洗濯の方法	伝統的な洗濯の方法には、たたく、踏むなどの操作を行うものや、煮洗いなどがあり、これらの方法の合理性について検証された研究がある。また、今日では洗濯機が普及し、新しいタイプのものも開発されているが、これらの特徴について概説する。	同上	同上
12	洗濯の条件	洗濯では、洗濯物の量を基準にして水の量を決め、水量に対して洗剤の投入量が決まる。洗剤には標準使用量が表示されているが、コンパクト化が進むにつれて使用量が少なくなってきている。洗剤濃度や洗浄温度などの洗濯条件はどのようにして決めるのだろうか。	同上	同上
13	すすぎと脱液	すすぎによって除去すべき物質は、洗濯物から離脱した汚れと、洗剤とである。ここではすすぎのメカニズムについて述べる。また、脱液の必要性やその効果的な方法についても概説する。	同上	同上
14	乾燥	洗濯物の乾燥には、自然乾燥と人工乾燥とがあるが、いずれの場合にも、乾燥時間は水分の量、温度、湿度、風速、洗濯物の表面積に依存する。衣類乾燥機による各種繊維製品の乾燥例をもとに、乾燥のメカニズム、乾燥方法とエネルギー効率などについて考える。	片山倫子	片山倫子
15	洗濯と環境問題	近年、生活排水による水質汚濁が問題になっているが、洗濯排水については、洗剤による汚濁負荷量、界面活性剤の生分解性や水棲生物に対する安全性などが問題となる。これら環境にかかわる問題点を取り上げ、これからの洗剤と洗濯のあり方について考える。	阿部幸子	阿部幸子

＝　着ごこちの追究（'９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：田村　照子（文化女子大学教授）〕
〔主任講師：酒井　豊子（放送大学教授）〕

全体のねらい

健康で快適な衣生活を実現・維持するうえに重要な衣服等の着心地について、衣服の構成・構造や、素材の性能についての認識と、人の体系・寸法や感覚・生理の理解に基づいて科学的に追求し、着心地の良さを、人間と衣服の感覚的・生理的適合の面から明確にする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	着ごこちのよさとは	衣服に期待されるさまざまな機能を概観し、その中における着心地の位置づけを考察する。着心地を人の感覚との対応において追究する科学の範囲と内容について概説する。	酒井豊子（放送大学教授） 田村照子（文化女子大学教授）	酒井豊子（放送大学教授） 田村照子（文化女子大学教授）
2	衣服と皮膚　①肌ざわりと着ごこち	肌触りに関係する衣服の要因とその評価法を概説する。また衣服の汚れ吸収性と衣服の快適性との関連について触れる。	丹羽雅子（奈良女子大学長）	丹羽雅子（奈良女子学長） 酒井豊子
3	衣服と皮膚　②安全性をめぐる諸問題	衣服による皮膚障害、皮膚アレルギー、衣服のダニ、衣服による紫外線防御等、衣服と皮膚の安全性を巡る諸問題を取り上げ考察する。	酒井豊子	酒井豊子 田村照子
4	衣服と身体寸法	個人個人の身体寸法に適合した衣服製作の基本概念、体型・寸法の把握方法、体型分類、ならびに、既製服サイズの現状について概説する。	松山容子（大妻女子大学教授）	松山容子（大妻女子大学教授） 酒井豊子
5	衣服圧と身体拘束	衣服による身体拘束の指標となる衣服圧のメカニズムと測定方法について述べ、衣服圧が身体に及ぼす悪影響や振動抑制、血液循環促進等の作用について考察する。	田村照子	田村照子 酒井豊子
6	ヒトの体温調節機能	着心地のよさを、人間の温熱生理的適合性の視点から理解する基礎として、温冷感受性、皮膚温調節、発汗調節などヒトの体温調節の仕組みについて概説する。	同上	同上
7	衣服による体熱放散調節	衣服による保温と放熱の機構を考察し、暑熱・寒冷環境下での快適な着心地について、衣服の素材、形、着方などの面から考察する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	衣服と水分蒸散	不感蒸散や汗の放散に衣服がどのように関わるかを理解し、水分移動に関し快適な着心地を確保する衣服素材の性能について理解を深める。	田村照子	田村照子 酒井豊子
9	環境適応と衣服	特殊環境を含むさまざまな環境条件下における、快適衣服内気候形成のための衣服の選択と着装について考察し、気候・風土と密接に関わって成立してきた衣服・服装の実例を世界の民族服の中から検証する。	道明三保子（文化女子大学教授）	道明三保子（文化女子大学教授） 田村照子
10	着ごこちの耐久性	着用・洗濯の繰り返しによる衣服性能のさまざまな変化を着心地の劣化、あるいは、着心地性能の維持という視点から考察する。	酒井豊子 丹羽雅子	酒井豊子 丹羽雅子
11	身体ハンディキャップと衣服	病床にあるときの衣服、身体の不自由に対応した衣服等について、さまざまな事例を見ながら、着用者にとって、あるいは、介護者にとって快適で便利な衣服を考察する。	酒井豊子	酒井豊子 田村照子
12	寝ごこちのよい寝衣・寝具	脳波等の生理反応による眠りの質の観察と、保温、透湿、体圧分布などの面から、快適な眠りを得るための寝具・寝衣の役割と条件を考察する。	田村照子	田村照子 酒井豊子
13	スポーツと衣服	さまざまなスポーツの分野で、ウエアの改良が記録の更新に貢献している。スポーツウエアにおける素材・形・寸法などの工夫の例を取り上げる。	酒井豊子	酒井豊子 田村照子
14	快適な履物	解放性履物、閉塞性履物などのタイプ別に、歩行補助道具としての機能性と、通気性保温性などの観点から快適性について考察する。	眞家和生（大妻女子大学専任講師）	眞家和生（大妻女子大学専任講師） 酒井豊子
15	着ごこちの追究－今後の課題	人間の活動の広がりに対応して衣服に期待される安全性、快適性の考え型と、資源・環境問題、情報化、国際化、高齢化などに対応した今後の方向について考察する。	酒井豊子 田村照子	酒井豊子 田村照子

＝ 地域と食文化（’９９）＝（R）

〔主任講師：石川　寛子（武蔵野女子大学短期大学部教授）〕

全体のねらい

日常営まれる食生活は、地域によって用いる食材、調理・調味の仕方、供食形態等に相違がある。また日本各地には、郷土食として長く伝承されて来た独特のすぐれた食物が数多い。こうした地域が生み育んだ食文化を通して、地域間の相違、特色、変化を学び、地域と食文化との関わりを理解することが本教科のねらいである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	地域と食文化との関わり	食の文化は時代、階層、地域によって、それぞれ異なった特徴を示すが、なかでも食生活が営まれる地域の気候や風土、産物等との関わりや影響が大きい。そこでこれらの実態を示しこれにより独自の、独特の文化が生まれることを認識させ、本教科の意義と目的を講義する。	石川寛子（武蔵野女子大学短期大学部教授）	石川寛子（武蔵野女子大学短期大学部教授）
2	主食の変遷と地域性	日本の主食は、古くから米が中心であったといわれているが、その種類や形態は、時代、地域、階層により異なっている。時代によるちがいを学ぶとともに、近世、近代を中心に地域による主食の種類・形態のちがいをその特徴およびその形成要因について考える。	江原絢子（東京家政学院大学教授）	江原絢子（東京家政学院大学教授）
3	粒食の地域性（米・麦・雑穀）	日本において日常食の中心となった「飯」は、米・麦・雑穀などを粒のまま利用したもので、このような形態を「粒食」とよぶ。各地域で伝統的に食べられてきた粒食について日常食、行事、儀礼食における特徴とその食べ方を学び、地域の特性を考える。	同上	同上
4	粉食の地域性	穀類の摂取については、米を中心にした粒食と小麦を中心にした粉食に大別される。粉食においては、パンと麺がその大部分を占め、全国的に画一化している。しかし、調理の仕方や食べ方には地域の独自性がみられる。こうした地域性や主食における粉食の地位について考察する。	三田コト（長野県短期大学名誉教授）	三田コト（長野県短期大学名誉教授）
5	芋食の地域性	自生のやまいもと稲作以前に伝来したさといもを儀礼食とする地域は多い。さつまいもとじゃがいもは江戸時代救荒食品として広まり、前者は西日本の食糧供給の安定化に貢献し、後者は洋風料理と共に普及した。生食の他、保存・加工の地域特性について考える。	大坪藤代（長崎女子短期大学助教授）	大坪藤代（長崎女子短期大学助教授）
6	豆利用の地域性	日本の食における豆の利用は、特に大豆において多彩であり、重要である。普遍的に分布する豆腐に対して、未熟大豆の食用が東日本に偏在する如く、その利用の仕方に地域性が認められる。大豆を主にしながら、豆利用の地域性について解説し、考察する。	本間伸夫（県立新潟女子短期大学名誉教授）	本間伸夫（県立新潟女子短期大学名誉教授）
7	野菜果物摂取の地域性	日本列島の南北への広がりと多様の気候のもとで、それぞれの風土に適した野菜・果物が栽培されてきたが、水分多く軟質のため輸送・貯蔵に不適であるので、産地での消費が原則であった。野菜・果物摂取の地域性を風土、生産、消費の立場から解説する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	魚食の地域性	四面を海に囲まれ、また河川・湖沼に恵まれたわが国では、古くから各地に水準の高い魚食文化が展開している。これについてまず漁獲の地域性を解説するとともに、各地の代表的な魚貝名産品をいくつかとりあげ、その分布状況を地域的に考察し、また魚食の実態を通してその地域性について検討する。	石川寛子	石川寛子
9	肉食の地域性	肉食禁忌の長い歴史を持つわが国では、摂食形態の地域性は薄い。とはいえ、明治の解禁時の農耕家畜の種類や、中国との交流等が反映し、肉の種類に地域性がみられる。また外国の料理を伝統的な調理法で適応させ、独自の発達をしたありさまをみる。	大坪藤代	大坪藤代
10	味付けの地域性	日本料理の味つけは、みそ、しょうゆなど発酵性調味料が中心となっているが、その使い方には地域による特徴がみられる。うどんなど麺類の味やみその味の違いなど地域による味つけの特徴的事例をあげながら、その地域分布と要因などについて考える。	江原絢子	江原絢子
11	茶菓子文化の地域性	中世以降、各地の美しい風物、器物を模した煉物、焼物、半生物等、銘菓が続出し、同時期の「茶の湯」の発達と「一服の茶」の伸展にともない、全国に広まった。この菓子と茶の二つの消費状況を検討するとともに茶の名産地と地域別特徴、そして各地の菓子が織りなす文化の地域性について検討する。	石川寛子	石川寛子
12	餅の地域性	日本において餅は、古くから、さまざまな種類の、さまざまな形態の餅が生活の中にとり込まれてきた。ここではケの日、ハレの日の餅の形状と目的、そして食べ方を通して暮らしと餅のかかわりを考察し、また地域性豊かな各地の餅を紹介してその分布、そしてその伝承の実態を検討する。	同上	同上
13	すしの地域性	現在わが国でみられるすしには豊富なバリエーションがあり、郷土料理として認識されているものも多い。ここではそれらを例示しながら、日本におけるすし文化の多様性や地域性を紹介するとともに、そうした現状を生み出すに至った背景について考察する。	日比野光敏（市邨学園短期大学助教授）	日比野光敏（市邨学園短期大学助教授）
14	漬けものの地域性	日本における日常食の基本は、飯・みそ汁・漬けものであった。漬けものは、各地域でその産物を塩や酢で漬けて保存食としたのが始まりである。その後、調味料の発達につれて調味漬けや旬の野菜の浅漬けなども惣菜化してきた。地域の特産品もあり、地域と関わりも検討する。	三田コト	三田コト
15	地域振興と食文化	21世紀の食生活は、それぞれの地域に住む人々が、地域の特性を充分に踏まえ、知恵と努力によって創造し伝承してきた独自性の強い食べ物を大事にしながら、その同質化に努力し社会性を高めることを理解し、地域振興との関わりについて考察する。	石川寛子	石川寛子

＝ 食物とからだ（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：野口　忠（東京大学教授）〕
〔主任講師：今井　悦子（放送大学助教授）〕

全体のねらい

食物を摂取することは、人が生命を維持し、成長し、健康で日々の生活を営むためには必須の行為である。本科目は、基礎知識として食物に含まれる成分としての栄養素を理解させた上で、消化・吸収され体内に取り込まれた栄養素がどのように代謝され、エネルギーや栄養素としての働きを果たすのかを解説する。すなわち、健康を考える上でもっとも基本となる、食物を食べたときからだはどう応答するのかを理解することを目的とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	食物の役割	始めに、多様化、外部化等の言葉で表現されている近年の食生活の特徴を概観する。続いて食物摂取と人のからだとの関連について成分等の観点から解説し、その理解を深める。	今井悦子（放送大学助教授）	野口　忠（東京大学教授） 今井悦子（放送大学助教授）
2	炭水化物とは	炭水化物はもっとも摂取量の多い栄養素であり、エネルギー源としての供給率も最大である。食物に含まれる炭水化物について、どのような食物にどのような構造で存在し、調理や加工によりどのように変化して摂取されるのか等を解説する。	同上	今井悦子
3	脂質とは	脂質の摂取量は年々明らかに漸増しており過剰摂取に注意が促されている。また量だけでなく、質についても近年注目されている栄養素である。食物中の脂質について、その構造や特性、質についての近年の研究等を解説する。	同上	同上
4	タンパク質とは	生命現象の根幹を司る様々な体タンパク質は、必要なアミノ酸の一部が体内で合成されないため食物から摂取する必要がある。タンパク質とはどのような構造、特性をもつのか、食物中にはどのようなものが存在し、どう変化して摂取されるのか等を解説する。	同上	同上
5	ミネラルの役割	今日本人にはいくつかのミネラルの摂取不足や過剰摂取が指摘されており、また精製した食品の摂取量増加とともに微量元素の不足が懸念されている。ミネラルの体内での様々な働きと、次第に明らかになってきた微量元素の働き等を解説する。	同上	同上
6	ビタミンの役割	ビタミンは、生体内の代謝を含む様々な生理現象に潤滑油的な働きをしており、微量でも必須の栄養素である。近年、いくつかのビタミンが健康や老化との関係で注目されている。主なビタミンの生理作用について解説する。	同上	同上
7	食物の消化と吸収	炭水化物、脂質、タンパク質は高分子化合物であるため、消化器官で順次消化されることにより初めて体内に吸収され、栄養素としての働きをすることが可能となる。様々な食物が人の体内に取り込まれる機構、すなわち消化と吸収の仕組みについて解説する。	野口　忠（東京大学教授）	野口　忠

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	主要栄養素の代謝	食物の中で大きな部分を占める炭水化物、脂質、アミノ酸について、それらを摂取すると体内でどのような経路で代謝されるかを解説する。	野口　忠	野口　忠
9	タンパク質の代謝－1	食物中のタンパク質の栄養価の測定法、栄養価に影響をおよぼす因子について理解を深め、食品の必須アミノ酸含量と栄養価の関係を学習する。	同上	同上
10	タンパク質の代謝－2	からだの中でのタンパク質の合成の機構、分解の機構の基本を解説する。さらに体タンパク質の合成・分解はどの様に調節されているのかを学ぶ。	同上	同上
11	代謝の適応と臓器の役割	栄養条件が変化したときからだはどのように適応するのか。その機構を、絶食に陥った場合を中心に学ぶ。また、からだの中の諸臓器の間には、代謝の上でどのような相互関係があるかを解説する。	同上	同上
12	ホルモンの役割	食物を摂取することによって起こるからだの変化においてホルモンがどのように関与するかを、ホルモンについての基礎的知識、ホルモンの作用機構などを基盤にして解説する。	同上	同上
13	エネルギーの代謝	炭水化物、脂質、タンパク質については、物質としての代謝という側面のほかに、われわれにエネルギーを与えるという側面がある。エネルギーを与える物質としての食物の役割を理解させるとともに、からだはどのようにエネルギー代謝を行い、またそれを調節しているのかについて解説する。	同上	同上
14	食品機能の新しい視点	食品には、栄養素としての機能である1次機能、色、味、香りをもっという2次機能に加えて、からだの代謝を調節するという3次機能があることが近年の研究で明らかにされた。この3次機能について、例をあげて解説する。	荒井綜一（東京農業大学教授）	荒井綜一（東京農業大学教授）
15	これからの食生活	これからの食生活についてどのようなことを考えていく必要があるのか、また、世界的に食生活についてどのような勧告があるのか等、諸国のdietary guideline、recommended dietary allowance、adequateintake等の概念を示しながら考える。	野口　忠	野口　忠 今井悦子

＝ 調理とおいしさの科学（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：島田　淳子（昭和女子大学教授）〕
〔主任講師：今井　悦子（放送大学助教授）〕

全体のねらい

食物摂取は人の生命維持に必須であるとともに、潤いや満足感をもたらす生活の営みである。満足感に大きく関わるのはおいしさであり、おいしさを創造するのに必要不可欠な工程が調理である。ではおいしさとは何か。調理中の食材の変化とおいしさはどのように関わっているのか。この講義では、これらに関する科学の基礎と最新の研究成果を、さまざまな切り口から解説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	調理とおいしさの科学	地球上ではさまざまな民族が日々さまざまな調理をしている。調理操作や調理による食材の変化には全世界に共通する普遍性があるが、でき上がった料理とそのおいしさは文化圏によって大きく異なる。調理学は、文化としての調理とおいしさを、自然科学、感覚心理学など多彩な学問を駆使して科学する、新しく学際的な学問であり、本章では調理学の最新の成果を取り入れたこの講義の特徴を総括する。	島田淳子（昭和女子大学教授） 今井悦子（放送大学助教授）	島田淳子（昭和女子大学教授） 今井悦子（放送大学助教授）
2	おいしさの構造と官能評価	人は、感覚器官の全てを動員して食物からの情報を脳に送り、そこで心理状態、生理状態、記憶等を統合しておいしさを評価する。おいしさを感じる複雑なメカニズム、おいしさの表現、人を測定機器としておいしさを総合評価する官能検査の実際などについて解説する。	今井悦子	今井悦子
3	味の科学の最先端	おいしさの中心となる味。味覚情報はどのように脳に伝達されるか、味の嗜好と人種や民族とは関係があるのか、味の嗜好と人が生存するために必要な栄養摂取とは関係があるのかなど、食行動に大きく影響する味の科学について最新の研究成果を中心に解説する。	鳥居邦夫（味の素中央研究所基礎研究所主席研究員）	鳥居邦夫（味の素中央研究所基礎研究所主席研究員）
4	テクスチャーの探求	口ざわり、舌ざわり、噛みごたえ、のどごしなどさまざまなことばで表現されるテクスチャーは味とともにおいしさに大きく関与する。テクスチャーの制御は、調理操作のポイソトの一つであるといえる。複雑なテクスチャーとその実態に迫ろうとする機器評価の試み、そしてその成果を解説する。	今井悦子	今井悦子
5	伝統技術とその科学 －うま味を引き出す日本人の知恵－	おいしく調理するために人類はさまざまな技術を育ててきた。そして今、これらの伝統技術に隠された合理性が科学の光によって照らし出されている。世界語となった“UMAMI”の発見、うま味を引き出す日本の伝統技術の科学を中心に解説する。	下村道子（大妻女子大学教授）	下村道子（大妻女子大学教授）
6	米 －粘りにこだわる日本人－	米は、日本人の食生活においてもっとも基本となる食材である。ジャポニカ種の米でふっくらと炊きあげたご飯のもつ粘りは、日本人が共有するおいしさであるが、地球レベルでみるとこれをおいしいと感じる民族は少数派に属する。このおいしさを創り出すために必要な米の性質と調理条件に関する研究成果を解説する。	島田淳子	島田淳子
7	小麦粉 －多様な料理を生み出す穀物の魔術師－	小麦粉から作られる料理の種類の多さとテクスチャーの多様性は、他の穀物の追随を許さない。この秘密はユニークなたんぱく質グルテンにある。グルテンを中心とする小麦粉調理の最新の科学について解説する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	魚・畜肉 －複雑なおいしさをもつ食卓の主役－	たんぱく質源として、伝統的に日本人の食卓で主役を果たしてきた魚と、現代の食生活の中で一躍トップに踊り出てきた畜肉。おいしさの秘密は共に複雑なうま味と独特のテクスチャーである。うま味を引き出し、テクスチャーを制御する調理のコツを科学する。	下村道子	下村道子 今井悦子
9	卵 優れた多機能食材	生では液体で、加熱により固体に変化する性質は卵独特のものである。また、卵白は優れた起泡剤、卵黄は優れた乳化剤とそれぞれ異なる機能をも合わせもつ。これら多様な機能を利用した卵料理の基礎にあるさまざまな科学を解説する。	今井悦子	今井悦子
10	野菜 －期待される生理機能と鮮度－	野菜は昔から、食卓に彩りを添える脇役として欠くことのできない食材である。近年、野菜中のビタミンや食物繊維の生体に果たす機能が見直され、注目されるようになった。野菜の保存および調理による変化にスポットをあてて解説する。	畑江敬子（お茶の水女子大学教授）	畑江敬子（お茶の水女子大学教授） 今井悦子
11	砂糖 －知られていない多彩な機能－	調理における砂糖の主要な役割は、甘味を付与する調味料としての働きであり、またその親水性の高さを利用した保存料としての働きである。さらに、砂糖は加熱の程度により様々に様態を変え、視覚的なおいしさに寄与している。このような砂糖のもつ多彩な機能の科学について解説する。	今井悦子	今井悦子
12	加熱の原理とおいしさの決め手	加熱は調理の主要操作であり、加熱の方法により仕上がった料理のもつ性質は全く異なったものになる。各種加熱の原理を分子レベルで解説し、おいしさとの関わりや最近話題の遠赤外の効果などについて最新の研究成果を紹介する。	飯淵貞明（和洋女子大学教授）	飯淵貞明（和洋女子大学教授） 今井悦子
13	理のもう１つの担い手 －調理器具－	調理の担い手は人である。そして、欠くことのできないもう一つの担い手が調理器具である。古くから調理の必需品であった包丁、一方最新の電化製品、電子レンジや多機能を売り物にした炊飯器などの理論と構造、また、調理器具の材質の違いがおいしさにおよぼす影響などを解説する。	同上	同上
14	現代の食生活の担い手 －新食品をどう利用するか－	この数十年の間に日本の食は大きく変化し、加熱するだけで食べられる食品が簡単に入手できるようになった。新しい食材や最新の調理加工技術等について、また、日本人の食卓にどのようなものがどのような経路で登場するかを解説する。さらにこれらの賢い利用法を考える。	田村眞八郎（農林漁業金融公庫技術参与）	田村眞八郎（農林漁業金融公庫技術参与） 今井悦子
15	理とおいしさを考える －未来への課題－	21世紀へ向けて世界は一層変化し、生活の利便性や快適性はさらに向上しつつある。しかし一方において、人類と地球環境の共生の危機が叫ばれている。このような中での食に関する研究を紹介し、生活者の立場から、未来への課題について考えてみる。	島田淳子 今井悦子	島田淳子 今井悦子

＝ 食生活をめぐる諸問題（’００）＝（R）

〔主任講師：豊川 裕之（(財)循環器学研究振興財団理事）〕

全体のねらい

食と生活を取り巻く諸問題は種々の側面を持つが、中でも食品衛生、ダイエット、廃棄物そして流通・販売などの問題は注目を惹く、しかし人間の側の考え方の問題も無視できるものではなく、その対応も含めて、ひろく取り上げたい。人工環境が肥大化して、人間が徒に自然を取り戻すことに夢中になっていると自然の猛威が心配。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	食と生活	結論。食生活を生活全般の中でとらえて、食文化を考える。すなわち、食に関して、「人間が作った側の人工環境」を論じる。母なる自然という考え方と同時に、自然の猛威から人類を守る手段としての食生活の文化を明らかにする。	豊川 裕之（(財)循環器学研究振興財団理事）	豊川 裕之（(財)循環器学研究振興財団理事）
2	食と栄養学	「ビーフステーキに栄養があるか？」「カロリーは栄養素の一種か？」を論じて、「栄養素密度」について説明し、食事療法の基本を述べる。明治の文豪の実は陸軍軍医の森鷗外が説く「飽食」についての記述を引用して、現代における食生活の盲点を衝く。	同上	同上
3	栄養学の理論体系	栄養学の理論を、少々理屈っぽいが説明する。栄養素ではなく「食品」を構成要素とする「食物消費構造」、「食物消費の2次元空間図」などを用いて具体的に説明する。	同上	同上
4	食中毒の発生状況と問題点	食中毒が発生している状況を説明し、病理性大腸菌O157のような新たに注目された食中毒から、極く普通に見られる食中毒までを解説する。	丸山 努（麻布大学教授）	丸山 努（麻布大学教授）
5	食品の安全はどのように保たれるか	どのようにして食品の安全を保つかを、ＨＡＣＣＰの考え方をも説明しながら、その仕組みや行政機構などについて解説する。また、流通過程での取り扱い方にも問題があるので、その点についても論述する。	同上	同上
6	食品はどのように流通・販売されるか	流通・販売ルーとには、いろいろな道があって、それぞれが特色を持っている。食に関する健康ニーズ、手軽さニーズ、楽しみニーズを受けて、これに応える企業側の対応が流通機構の大きな変革を促進させている。	山口貴久男（㈱生活行動研究所所長）	山口貴久男（㈱生活行動研究所所長）
7	国際化する日本の食生活	日本型食生活が見直されて久しい、しかし、それが流動しており、徐々にエスニックや欧米の食事に影響されており、どのような型でそれが起こっているかを論ずる。食材料も輸入ものが多く、その点についても詳しく述べたい。	豊川 裕之	豊川 裕之

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	手作り料理と家庭料理の調理の伝承	手作り料理が減って、お惣菜やファースト・フード、レトルト食品などが増えて来る中で、手作り料理を家庭と家庭の調理がどのように伝承されているかを論ずる。	杉田　浩一（文教大学女子短期大学部講師）	杉田　浩一（文教大学女子短期大学部講師）
9	スポーツとダイエット	スポーツをする上で食事上の注意と、体重減量などのダイエットなどが無定見に行われていくことが多い。それらの基本となることを論ずる。	殖田　友子（㈱ミューズ・スポーツ栄養ネットワーク・代表取締役社長）	殖田　友子（㈱ミューズ・スポーツ栄養ネットワーク・代表取締役社長）
10	高齢者の食べ物と食生活	高齢者に見られる嚥下障害や五官の衰えなどを考慮する食事のあり方、および高齢者の生活上の問題点を考慮して生きる喜びを念頭においた食事を述べる。	豊川　裕之	豊川　裕之
11	食生活と廃棄物	食生活の変化がゴミ処理に影響を及ぼしている。ゴミは何故発生するのか、発生源ではどんな対応が求められているのか、食生活がゴミの量や質に与える影響、ゴミ問題解決の手段、および家庭から排出されるゴミの処理の実態などについても解説する。	田中　勝（国立公衆衛生院教授）	田中　勝（国立公衆衛生院教授）
12	食べ物をめぐる迷信	世の中にはいろいろな迷信がある。また、迷信とはいわなくても、かなり科学的根拠があるように思える――実はそうではないのだが――“迷信”めいたこともある。それらを具体的に説明して行きたい。酸－アルカリ性食品の例は恰好のものである。	豊川　裕之	豊川　裕之
13	栄養素で食生活を論ずることの問題点	特定保健用食品をはじめ食品から限りなく薬品に近寄った食品がある。また、「不老長寿の妙薬」のように特定の効用を期待する食品もある。その本質は何か、ということを説明する。	同　上	同　上
14	日本人の食生活を栄養疫学の視点から視ると	第3章で取り上げた「栄養学の理論体系」を基にして、栄養疫学の考え方を説明する。とくに、近代科学の一翼を荷負う医学における問題点を一、二とりあげて論ずる。	同　上	同　上
15	食生活と健康づくり	昭和60年と平成2年との2回にわたり「健康づくりのための食生活指針」が厚生省より発表された。その作業に携わった者として、その考え方を正確にとらえ、理解することを試みる。	同　上	同　上

＝ 住まい学入門（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：本間博文（放送大学教授）〕

全体のねらい

住居は生活空間つまり物体であり、住み手の生命の安全を保障し、外部の自然を調整し人間の生存に適当な環境を創り、家族生活の基盤としての役割を果たし、生命の生産そして再生産の中核となる場を提供してくれる。一方居住とは人間が生活空間を媒体として展開する行為の総体であり、空間との関係において成立する。「住まい学」は、物（住空間）と人（行為）とを有機体のような不可分の関係として対象化しようとするもので、本講義では住むことの意味と課題、そして今後の展望について様々な角度から概観しようとするものである。併せて放送大学の住居関連科目の入門科目として構成されている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	住まい学のめざすもの	本講義の目的、対象、視点、範囲について概説し、「住まい学」と名づけた本講義の狙いについて解説する。	本間博文（放送大学教授）	本間博文（放送大学教授）
2	和風と洋風	明治以後の欧米の住まい（洋風）がわが国の住まいにいかなる影響を与えたか、それに対して日本の住まい（和風）の伝統がどのように受け継がれたか。現代の日本の住まいの特徴、そして今後の動向を予測するために、異なった文化的な土壌のもとで形成された二つの住文化と現代の住まいとの関係を考える。	内田青蔵（文化女子大学教授）	内田青蔵（文化女子大学教授）
3	和風の系譜	我々が和風の住まいとしてイメージする住宅の様式が確立するのはそれほど古いことではない。せいぜい江戸時代後半のことである。それ以前の日本人の住まいは、それぞれの時代にいかなる様式で、どのような過程を経て今日のような形に移行したのかを概説する。	同上	同上
4	洋風の系譜	幕末から明治初頭にかけて居留地を中心に建設されたいわゆる「洋館」は、わが国の住宅に様々な影響を与えた。幾多の紆余曲折を経て昭和初頭に「中廊下式住宅」と呼ばれる都市の中流階層の新しい住宅様式として定着することになるが、その間の経緯を概観する。	同上	同上
5	現代の住まい	わが国の現代の住まいはどのように特徴づけられるのだろう。第二次大戦後の新しい民法に保証された近代的な家族制度のもとで、それに見合う住空間の模索が盛んに試みられ、昭和30年前後に「公私室型住宅」として確立する。そして今日まで基本的にはこの型を受け継ぎながら、様々な変化も認められる。現代の住まいについて考察する。	同上	同上
6	規模算定と空間の組み立て	家族生活の場としての住居は、家族の様々な行動を保証するための適正な空間が用意されなければならない。政策として提案された住宅の規模に関する指標を検討し、適正規模を算定するための試案を提示する。	本間博文	本間博文
7	家族生活と平面型	子供の空間、あるいは老人室などの領域などが住空間の中でどのように扱われているのか、あるいは変化しつつあるか。住宅誌に掲載された平面型などを参照しながら家族生活と居住空間との関係を分析する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	集合の住まい	今やマンション、公営住宅などの集合住宅は都市部を中心としてごく一般的な居住形態として日本の社会に定着している。同時に集合の住まいが抱える様々な課題も顕在化しつつある一方で課題解決のための新しい集住空間も提案されている。こういった集合の住まいに関する最近の動向を紹介する。	本間博文	本間博文
9	新しい供給方式	わが国では土地は原則として私有地であり、高騰する土地を個人の努力で購入し、その上に住宅を建てるといった方式がごく一般的である。結果として住宅は土地も含めて資産であり、その価格はきわめて高価である。良好な借家も皆無に近い。しかし近年このような状況を打開する新しい住宅供給方式が提案され、具体化しつつある。その様子を紹介する。	同上	同上
10	風土と住まい	わが国の気候風土は、四季折々の変化に富んだ美しい自然を生み出してきたが、そのような変化に富んだ自然条件を制御し、快適に暮らすことはきわめて困難である。結局「住まいは夏を旨とするべし」という家造りの基本は反面で冬を諦めるということでもある。風土と住まいの伝統について概説し、今後のあり方を考える。	同上	同上
11	環境共生	最近の環境調整技術は、わが国の変化の大きい気候条件を制御し、四季を通して快適な屋内環境を提供できるところまで到達しつつある。しかも人工的なエネルギーを浪費することなく、自然のエネルギーを活用することによって省エネルギーを図り、なおかつ快適な環境を作り出そうとするものである。新しい環境共生技術の現状を紹介する。	同上	同上
12	災害と住居 Ⅰ	地震発生のメカニズムと日本が「世界有数の地震国」といわれる所以を述べ、地震発生の実態を紹介する。また在来の耐震構法、設計法の歩みを概観し、日本の伝統的住まいと木造家屋に見られる先人の知恵を学ぶ。	長橋純男（千葉工業大学教授）	長橋純男（千葉工業大学教授）
13	災害と住居 Ⅱ	地震時における構造物倒壊、非構造部材の落下および家具の転倒移動等による人的被害について、阪神・淡路大震災の事例を概観する。更に、「安全な居住空間」を提供する建築物として最近大いに注目されている免震構造を紹介する。	同上	同上
14	災害と住居 Ⅲ	震災時における生活と安全に関わる諸問題として、情報伝達（安否・被害・余震・生活関連等の情報）、避難場所、仮設住宅における生活、被災者の心のケア、罹災世帯、罹災家屋への公的支援、及び地域防災計画について述べる。	同上	同上
15	これからの住まい	本講義のまとめとしてこれからの住まいがどのように変化していくかを予測する。そしてそれが果たして望ましいものであるか、もしそうでなければどのように修正するべきか、将来の住まいの方向について展望する。	本間博文	本間博文

＝ 世界の住まいと暮らし（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：服部　岑生（千葉大学教授）〕

全体のねらい

世界の人口の大部分が都市に住む時代である。講義の中心は、世界の都市居住の実態－住まいと暮らし－から、その都市居住の理想と今後の姿を求める講義とする。主な特徴は、以下である。

1）　地球上には、様々な形の都市の住まいがある。都市住宅の先進国である欧米の住まいと暮らしに焦点をあてて、その実態と、立地環境、歴史・文化による違いを、住まいの豊かさとして紹介する。

2）　未来の住まいに必要な条件について、多様性、生活、文化や環境の観点から、その取り組みの事例を取り上げ解説する。

3）　都市居住の対極にある未開や辺境の住まいについての講義を組み合わせて、住まいのあり方の過去と未来、世界と日本を対比して考える。

4）　授業の資料としては、現地取材ビデオ映像や写真映像などのビジュアルな情報やインタビュー・フィルムを用い、平易で魅力的なものにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	住まいの豊かさ	イギリスの住まいと街の事例（プレーズハムレットの環境、ハルの環境・生活）を通して、豊かさ、人々の日常生活の豊かさを語る。その中で住まいが暮らしに対して持つ役割を考える。さらに、講義の目的を述べ、世界の住まい－例示、中国ヤオトン・イエメンの高層住宅－、特に都市住宅・住宅地の様子、歴史を概観にしながら、これからの住まいの課題と条件を紹介する。	服部岑生（千葉大学教授）	服部岑生（千葉大学教授）
2	東南アジアの住まいと暮らし	アジアの辺境地域の各地には、いまだ十分に紹介されていない風俗を維持する住まいの伝統がある。その風俗と生活共同体を前提にした暮らしと住まい・集落の様子を学ぶ。それらと忘れられた日本の伝統とのつながりも示唆する。	畑　聰一（芝浦工業大学教授）	畑　聰一（芝浦工業大学教授）
3	南欧の住まいと暮らし	同様にエーゲ海などの島嶼の各地には、いまだ十分に紹介されていない風俗を維持する住まいの伝統がある。その風俗と生活共同体を前提にした暮らしと住まい・集落の様子を学ぶ。それらの都市住宅・住宅地への示唆を学ぶ。	同上	同上
4	歴史の中の住まいとインテリア	ヨーロッパの都市住宅とその住宅地の構成を、伝統的な住まい（イギリス・シングルトンの民家村）、イタリアの古代住宅の史跡（ローマ・オステイア）などの住まいの事例について、現地写真や図例を中心に、住まいを歴史的に解説し、その多様性が現在に伝えられていることを概説する。また、ヨーロッパの住まいのインテリアの伝統についても、暮らしを視覚的に紹介（ノビララの住まい）する。特に、歴史文化、気候環境などと住まいの形の発祥の関係、住まい方と民族性などの関連について、論ずる。	服部岑生	服部岑生
5	都市住宅地のはじまり－集合と単位	都市の住まいは、多様な単位と群という集合でできている。その単位は、都市の集積のために、コンパクトで高密である。群としての住まいは、その配置（集合形成）に、人々の社会生活を表現する。これらについて、イタリアの古代都市の集合住宅の史跡（ローマ・オステイア）、スペインの歴史都市（グラナダとその周辺）、パリの中世のイメージを残す街区（サンポール街区とドーミニールの集合住宅）、バルセルナの計画的に作られた街区（セダーによる計画街区）などを例に、都市の住まいおよび、その集合のパターンを楽しく紹介する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	欧米の都市住宅地－囲み配置の住まい	ロンドンの都心部にたまたま計画された中庭のある街区の生活のすばらしさを紹介し、囲み型の意味や歴史を考える。20世紀初頭の中庭型街区づくりの動きを代表するウイーンのマルクスホフと同時期の半開放型のラベンホフ住宅地を事例に現地取材し、共同体になっていく居住地の生活をかいま見る。現代の囲み型住宅地の流行において、その代表例ストックホルムのスカルブナック住宅地を訪問し、そのライフエリアづくりの特徴を学ぶ。	服部岑生	服部岑生
7	楽しい様々な住まい－集合住宅の展開	ローマ時代からの集合住宅の歴史を概観する。はじめに、集合住宅の成立要因を、古代ローマの集合住宅遺跡を示し、解説する。特に、近世に発見された集合住宅は、どのような経緯で典型的なフラットの平面計画や住棟計画に至ったかについて、英国の20世紀初頭のタウンハウス（ロンドン）、近年の都市ビラ型集合住宅（ベルリン）、メゾネット住宅（コンビュジェのヘマルセイユ・ユニテ、ニューヨークのルーズベルトアイランド、1199住宅）、環境に配慮したグリーンハウス（ベルリン）、さらに住棟の多様性として、植物をデザインに取り入れたベルリンの集合住宅、現代の構法を駆使した奇抜なロッテルダムの集合住宅など多様な発展を、現地取材（パリ大学エルブ教授のインタビュー）、写真で説明する。	同上	同上
8	楽しい様々な住まい－カントリーハウスからデザインハウスへの展開	欧米の独立住宅の歴史を、イタリアの都市に建てられた宮殿住宅パラッツオ、イギリスの歴史的なカントリーハウスの大豪邸を手始めに、小型の都市住宅の試みであるブリーズ・ハムレット（18世紀、ブリストル近郊）近代の都市住宅の始まりといわれる赤い家（ロンドン）、コルビュジェのサポイ邸を紹介するとともに、大規模なものから小規模なものへの変遷の経緯を考察する。欧米のあこがれの住まいは、貴族の理想の住宅であったカントリーハウスから、都市居住者のホワイトカラーたちが求めた独立住宅へと展開した系譜である。最後に、マイヤーのアテニュームを典型とする、白色で連続空間を構成する現代住宅のデザインの特色から、デザインハウスの行方を考えたい。	同上	同上
9	郊外住宅地の形－田園都市からニュータウンまで	ヨーロッパの20世紀の郊外住宅地の歴史を概観する。特に英国の田園都市（イギリス中部の田園地帯、バートンなど）、最初のニュータウン（ロンドン近郊のウエルイン・ガーデンシティー）、現代のニュータウン（ドイツ、ニュータウン）までの歴史を概観し、都市と郊外住宅のかかわり、その結果としての郊外住宅の計画の特性を考察する。ドイツのニュータウンの歴史について、ブレーメン芸術大学キルシェンマン教授にインタビューする。特に、第二次世界大戦後、住宅復興のために欧米で大量に建設されたニュータウンの集合住宅は、今や耐久性の寿命が終り、再生を待っている。年を取った住まいの運命と今後の課題（イギリスのシェフィールド）について、シェフィールド市建築家A．ベアード氏にインタビューする。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
10	都心住宅地の形ータウンハウスからインフィルハウスまで	欧米の都心住宅地の歴史を、健康、復興、再生、可変などの価値観の変化として、概観する。まず、ロンドンのタウンハウスの紹介を行い、パーティーウォールによるインフィル住宅の意味について考察する。次に、都心の高層集合住宅として、バービカン（ロンドン）やルーズベルトアイランド（ニューヨーク）を紹介し、防御的な配置計画とその内部に取り込んだアメニティ施設によるライフエリアの確立という特徴を明らかにする。パリのビッテ教授の生活（ビッテ夫人の紹介）により、都心の喧噪の裏に、静かで上品な生活が展開していることを学ぶ。さらに、都心住宅地は、多くの場合伝統的で古い住宅地であるが、その継承を、住民参加で環境共生住宅を創造した、ベルリン103街区の事例を、インタビューする。さらにニューヨークの古い地区での伝統を継承する住宅計画の様子を紹介し、現代の傾向とされる、居住者参加による住まいづくりを学ぶ。	服部岑生	服部岑生
11	アメリカの住まいー郊外の理想	ヨーロッパからの移住に起源を持つ、アメリカの都市住宅の理想は、20世紀のはじめに郊外移住のブームとなった、それによって生まれた郊外住宅を、解説する。まず、アメリカの生活と住宅史の源流を、インヂアナ・ニューハーモニーのヒストリック村を訪ね探る。ここで、開放的な住宅と住宅地の構成やコミュニティの理想を理解する。次に現代でも理想の姿を維持するニューヨーク近郊の街を訪ね、住宅地の構成や暮らし、町の運営の様子をインタビューする。最後に、ニューヨーク郊外に住むオダムスさんの家族に、日本に住んだ経験からの比較評価を含め、アメリカ人の住まいに関する考え方、引っ越し観などをインタビューする。ここでは、アメリカ人の住まいの理想の条件が、郊外に関わっていることが明らかになる。	同上	同上
12	アメリカの住まいー高層プールとスーパーのある生活	もうひとつのアメリカの住まいの典型として、特に超高層住宅の住まいに焦点をあてる。ニューヨーク、シカゴには数多くの世界一高い超高層住宅があり、アメリカの定番の住宅となっている、そのような高層住宅の作りと暮らしを探る。事例は、高層集合住宅の始まりとされるニューヨークのルーズベルトアイランド、ダコダハウス、同じく1199プラザ、シカゴのジョンハンコックセンターなどビデオの現地紹介と多数の写真による。ここでは、超高層住宅で生活する居住者や管理者のインタビューを行う。	同上	同上
13	未来の住まいー街の住まい	コルビュジェのマルセイユのユニテは、生活施設を内蔵しコミュニティーとして自立する住まいであった。このような自立型の集合住宅の起源は、古くユートピア思想とともにあり、その事例をロンドンのドルフィンスクエア住宅を訪ね、インタビューを通して紹介する。現在ではさらに助け合って住む住まいが、高齢者の集合住宅やコレクティブ住宅（スエーデン、ファルドクナッペン）など、多様に見られる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	未来の住まい－挑戦する住まい	失われつつある豊かな自然とともに暮らす、実験プロジェクト、バイスフイアⅡは、地球という自然の意味を明らかにする実験であった。人間の未来を支える自然、地球に優しい、要するに持続し、循環する住環境づくりの挑戦を紹介する。サンフランシスコ近郊のデービス市の、エコーシティーの試み、オランダのエコロニアの試みは、いずれも、自然に優しい住まいのプロジェクトである。また、すでに建設されてしまった都市は、再生されて新しい世代を受け入れていかなければならない。そのために、コミュニティー・アーキテクチャーの試みがきわめて重要であり、イギリスの先進的な組織の活動を紹介する。	服部岑生	服部岑生
15	世界と日本－ゆとりある住まいを求めて	まとめとして、単位の住まいについて、科学技術や工業生産技術の進歩より、従来の住まいづくりの条件であった、自然条件が克服され、またより高度に環境条件が制御されていく時代となった。このような技術がもたらす未来の住まいと平均化する実態の住まいを対比して、住まいの課題を考察する。さらに、集合としての都市住宅地について、今後の居住地の生活の変化、コミュニティーの変化の課題や、閉鎖型の再認識、日本の伝統的な路地を内蔵する街区などフィジカルな課題を確認する。	同上	同上

＝ 日本における集合住宅計画の変遷＝（ＴＶ）

〔主任講師：髙田　光雄（京都大学助教授）〕

全体のねらい

わが国の集合住宅の歴史は第二次世界大戦前の同潤会のアパートに始まるが、本格的に供給され、都市域における一般的な住宅形式として認知されるようになったのは、戦後のことである。

50年足らずではあるが、わが国の社会情勢の急激な変化に対応して、集合住宅も様々な変遷を経て今日多様な表現をとりつつある。この間の経緯を明らかにし、変化がいかなる要因によるものかを探る。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	概説	集合住宅計画の変遷	髙田　光雄（京都大学助教授）	髙田　光雄（京都大学助教授）
2	戦前および戦後復興期　(1)	集合住宅団地の誕生 －同潤会アパートを中心に－	服部　岑生（千葉大学教授）	服部　岑生（千葉大学教授）
3	戦前および戦後復興期　(2)	住宅で街をつくる試み －古市中団地－	冨江　伸治（筑波大学教授）	冨江　伸治（筑波大学教授）
4	戦前および戦後復興期　(3)	高層化の夢 －晴海高層アパート－	初見　学（東京理科大学教授）	初見　学（東京理科大学教授）
5	高度経済成長期(1)	マンションという商品 －第一次マンションブーム－	高井　宏之（三重大学教授）	高井　宏之（三重大学教授）
6	高度経済成長期(2)	大規模団地とニュータウン －千里ニュータウンを中心に－	杉山　茂（大阪市立大学助教授）	杉山　茂（大阪市立大学助教授）
7	高度経済成長期(3)	高層集合住宅街区の建設 －広島基町高層住宅と芦屋浜高層住宅－	森保　洋之（広島工業大学教授）	森保　洋之（広島工業大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	第一次石油ショック以降 (1)	低層集合住宅の復活 －水戸大番池団地とタウンハウスの隆盛－	小林 秀樹（建設省建築研究所住宅計画研究室長）	小林 秀樹（建設省建築研究所住宅計画研究室長）
9	第一次石油ショック以降 (2)	地域性を活かした集合住宅 －地域型公営住宅－	志田 正男（東北工業大学教授）	志田 正男（東北工業大学教授）
10	第一次石油ショック以降 (3)	集合住宅計画への住まい手参加 －コーポラティブ住宅「ユーコート」－	定行まり子（日本女子大学講師）	定行まり子（日本女子大学講師）
11	安定成長期からバブル経済崩壊まで (1)	都市内居住と複合化 －大川端・神谷－	石倉 健彦（住宅・都市整備公団係長）	石倉 健彦（住宅・都市整備公団係長）
12	安定成長期からバブル経済崩壊まで (2)	街区と集合住宅 －ベルコ・リーヌ南大沢－	小柳津醇一（芝浦工業大学教授）	小柳津醇一（芝浦工業大学教授）
13	安定成長期からバブル経済崩壊まで (4)	住まい手の個性とインテリア －内装自由設計の集合住宅－	沢田 知子（文化女子大学教授）	沢田 知子（文化女子大学教授）
14	展望 (1)	住まい手と住まい	園田眞理子（明治大学専任講師）	園田眞理子（明治大学専任講師）
15	展望 (2)	「いえ」と「まち」の関係	髙田光雄	髙田光雄

＝ 新しい都市居住の空間 ＝（ＴＶ）

〔主任講師：渡辺　定夫（工学院大学教授）〕
〔主任講師：服部　岑生（千葉大学教授）〕
〔主任講師：本間　博文（放送大学教授）〕

全体のねらい

本講義では主として大都市圏を取り上げ、都市に居住する空間とはどういうものかを考える。大都市域でも市域の７割は住宅地域である。欧米の実状、わが国の変遷を概括した上で、都市における新しい居住者像やコミュニティの動向、管理といったソフト側の条件と、性能、日照、オープンスペース居住環境、土地利用といった空間側の条件について現状と今後の動向を掲示する。

あわせて現在取り組まれている先進的な事例を取り上げ、どの様な居住形態、所有形態が望ましいのか、住宅の類型、土地利用の類型に分けて考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	新しい都市居住の空間づくり	本科目は都市型住宅、住宅地の新しい枠組みは何かを、計画・設計、住宅供給、管理、更新の４つの視点から考察する。新しい動向や提案あるいは具多的な事例を紹介し、既存の学問分野の枠にとらわれることなく今後の都市居住の空間づくりの方向を見据えた計画課題や政策課題を探る。	渡辺定夫（工学院大学教授）	渡辺定夫（工学院大学教授）
2	欧米の都市住宅地	主に欧米の都市住宅地の変遷を紹介し、住宅・オープンスペースの配置の考え方など住宅街区の構成手法などを学ぶ。	服部岑生（千葉大学教授）	服部岑生（千葉大学教授）
3	日本の都市住宅地Ⅰ～日英住宅比較～	住宅需給構造の変遷を欧米と日本を比較し、それぞれの特長を明らかにする。	三宅醇（豊橋技術科学大学教授）	三宅醇（豊橋技術科学大学教授）
4	日本の都市住宅地Ⅱ～三大都市圏比較～	東京、大阪、名古屋の三大都市における住宅需給構造の変化を比較し、それぞれの都市の抱える固有の問題を明らかに、今後の政策課題を考える。	同上	同上
5	都市人口と住宅需給構造	これからの大都市における人口構造から住宅の需給予測を行い、需給構造に対応した都市型住宅の将来像を展望する。	同上	同上
6	新しい都市居住者像	都市居住の主体的な条件としての都市居住者像を素描し、地域や社会との関連の中で、それぞれの居住者に対応する住宅像を探る。	本間博文（放送大学教授）	本間博文（放送大学教授） 園田眞理子（明治大学講師）
7	新しい住宅供給方式	公共ならびに、民間の供給する都市型住宅の新しい流れを紹介するが、とりわけ定期借地権という供給方式に着目しそれを応用した事例を具体的に紹介する。	本間博文	本間博文 小林秀樹（建設省建築研究所住宅計画研究室長）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	都市型集合住宅の実験	ＮＥＸＴ21と名付けられた大阪市内に建設された実験集合住宅を紹介し、その基本となる２段階供給という新しい住宅供給システムのコンセプトを明らかにする。	高田光雄（京都大学助教授）	高田光雄（京都大学助教授）
9	集合住宅の管理	マンション管理の問題、区分所有法などを中心として、阪神大震災の被災住宅の再建などにも論及し、都市型住宅としてのマンションが抱える維持管理ならびに更新に関する諸問題を考察する。	梶浦恒男（大阪市立大学教授）	梶浦恒男（大阪市立大学教授）
10	都市住宅の住戸計画	集合住宅の住戸の意味とその計画条件の設定を通して都市型住宅とはそもそも何であるか、それが満たすべき成立条件を明らかにする。	服部岑生	服部岑生
11	都市住宅の住棟計画	集合住宅の住棟を取り上げ、その構成の仕方、群として環境を形成する方法、ハードの耐久性とソフトの面からのメンテナンスなどを考慮して、その成立条件を考える。	同上	同上
12	新しい住宅開発	千葉市幕張地区に建設が進行しつつある新しい都市型集合地を取り上げ、居住者の日常生活や評価を通して更地における都市型住宅地の計画条件を考える。	篠崎道彦（芝浦工業大学助教授）	渡辺定夫 篠崎道彦（芝浦工業大学助教授）
13	既成住宅地の再編	既成市街地における住宅地の更新過程を、数少ない具体事例を取り上げ、そこでの実践をトレースすることにより計画上の諸問題を明らかにする。	野澤康（工学院大学助教授）	渡辺定夫 野澤康（工学院大学助教授）
14	住宅団地の建替	第二次大戦後の早い段階に建てられた住宅団地の更新問題を取り上げ、具体的な事例を紹介し、計画上の諸問題を明らかにする。	服部岑生	服部岑生
15	既成市街地の再生と都市 住宅のあり方	14回の講義を通して、わが国での都市住宅地の諸問題を総括し、これからの新たな方向を探り、計画条件、政策課題を探る。	渡辺定夫 服部岑生 本間博文	渡辺定夫 服部岑生

＝ 医療・社会・倫理（’９９）＝（R）

〔主任講師：近藤 喜代太郎（放送大学教授）〕
〔主任講師：藤木 典生（福井医科大学名誉教授）〕

全体のねらい

医学生物学の進歩は医療の向上の原動力であるが、さまざまの社会的影響をもたらし、法・倫理にかかわることも少なくない。技術的進歩の恩恵とともに被害を受けるのも患者であり、医療は患者の立場をいつも考えなければならない。この科目では患者の権利を基本的な観点として、医療・医学と患者および社会との接点に起こる多岐にわたる問題のなかから、とくに大切な15課題をとりあげ、技術的進歩が本当に人々の役に立つには個人・医師・医学者・社会・行政はどうすべきかを考える。しかし回数の関係で医療制度・医療経済・社会保障などの問題には触れない。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	医学・保健・医療と社会の接点	医学は病気を中心とするヒトの生物学であり、学理の探究をめざした体系をもっている。一方、保健医療は国家のしくみで、法令・予算・施設・専門職・科学技術などの要素からなっている。医学と保健医療は車の両輪で、その進歩は国民の幸福を増すが、ときに好ましくない問題が起きることも少なくない。第１回では医学・医療と社会にはどんな接点があり、どんな問題が起きているかを知るための序説とする。	近藤喜代太郎（放送大学教授）	近藤喜代太郎（放送大学教授）
2	医療の倫理と患者の権利	医療と社会の接点を考える上で根幹をなすのは倫理である。これは古い課題ではあるが、近年、医療技術の進歩と国民の意識の変化によって新しい段階に入っている。生命の始期と終期の問題は別の回に論じられるが、医療の場ではその他にも生命権と治療決定をめぐって多岐にわたる問題が起きる。本講義ではそれらを巾広く展望し、患者の権利と自己決定権をいかに守り、よい医療をいかに提供するかを考える。インフォームド・コンセントにかかわる問題はとくに大切なので次回でのべる。	星野一正（京都女子大学教授）	星野一正（京都女子大学教授）
3	インフォームド・コンセント	医療の倫理を考える上で基本となるのは「患者の権利」と「インフォームド・コンセント」（ＩＣ）である。ＩＣはアメリカで生まれた法概念で、医療とその過誤を裁く上での基本となり、日本では「説明と同意」と訳されることが多い。「説明」とは病気の性質・予後、さまざまな検査・治療・薬剤などの効用とリスクなどについて、患者が知る権利に応えることで、それに基づいて患者が自己決定した「同意」を受けて医療を行う。この講義では、ＩＣをめぐるさまざまの問題を述べ、日本に適した提言を行う。	同上	同上
4	医療の自己規制と倫理委員会	医療は患者と医師の個別的な契約による行為ではあるが、移植、受精卵技術、輸血拒否、遺伝子治療など、倫理問題の起きやすい医療行為については、担当医のみに任せず、病院があらかじめその内容を審議し、好ましくない事態から患者と医師を守ることが必要とされている。これが「倫理委員会」で、日本でも各大学に普及し、各分野の教授、法律家などが参加し、申請に基づいて医療の内容を検討し、大学病院としての責任を果たしている。一般病院や地域への普及は今後の課題であり、医療以外にもヒトを被験者とする治験などにも施設内または第三者による評価が必要となることが多い。	武部啓（近畿大学教授）	武部啓（近畿大学教授）
5	生命技術と倫理	ヒト・ゲノム計画は、遺伝子診断・治療としてゲノム多様性といった遺伝医学への応用の他に、体外受精などの生殖医学、クローン研究などの発生生物学、行動のメカニズムなどの科学の分野で輝かしい進展をとげてきた。反面、多岐にわたる倫理的・法的・社会的問題点を惹起してきた。本講義ではこれら背景を展望した上で、その倫理的考察を行ない、あるべき理念を検討したい。	藤木典生（福井医科大学名誉教授）	藤木典生（福井医科大学名誉教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	遺伝医学と倫理	遺伝子は個人の所有物であるだけでなく、家族と共有するものである。最近、技術の進歩によって比較的容易にそれぞれの個人に特有の遺伝情報を解析できるようになった。これらは遺伝性疾患にとどまらず、人生後半に起こる生活習慣病の診療にもさまざまの恩恵をもたらしたが、複雑な人文的問題をもひき起こした。本講義では生命倫理の基本に従って、医療としての遺伝医学の正しいあり方を考える。	松田一郎（重症心身障害児施設江津湖療育園園長）	松田一郎（重症心身障害児施設江津湖療育園園長）
7	脳死と移植	昭和42年の和田手術から平成9年の「臓器移植法」までの永い年月、脳死がヒトの死かどうか、脳死移植の可否をめぐる国家的な論争がつづき、脳死者からの臓器移植でしか救命できない患者が外国に行くなどの事態がつづいた。脳死をめぐる問題は、医学の技術的進歩がきわめて広範な分野に反響を呼んだ事例として他に類をみない。この講義では、この問題を広く回顧し、立法に至った経緯をのべ、日本文化との係わり合いにも触れる。	中山太郎（衆議院議員）	中山太郎（衆議院議員）
8	死の医学	病気の治療を目的とした医学にとって、死に至る病気は、ともすれば医学の敗北とみなされがちである。しかし最近、ホスピスや緩和ケア、安楽死・尊厳死などに対する社会の関心が高まり、いわゆる「死の医学」の重要性が叫ばれるようになってきた。この講義はそれらについてのべ、日本にふさわしい終末医療のあり方についても考える。	柏木哲夫（大阪大学教授）	柏木哲夫（大阪大学教授）
9	医療のシステム	医療は診察と治療とからなるが、すべての医師がすべての病気を正しく診療、治療できるのではない。良質で適切な医療はさまざまな技術・能力を組み合わせることで確保される。本講義では良い医療を保障できるシステムを築くにはどのようなデザイン・運用・監視・教育・人事などが必要であるのかを説明、例示する。	信友浩一（九州大学教授）	信友浩一（九州大学教授）
10	医療政策と情報公開	行政のあり方は国民生活に大きな影響がある。日本は乳幼児死亡率が世界最小、寿命が最長であり、それには行政も大きく貢献した反面、薬害エイズのように行政ミスによる事件も起きている。本講義では、医療政策はどうあるべきか、情報を公開し、国民も参加した政策をいかに確立すべきかを考える。	同上	同上
11	障害児をもつ親	患者の障害の告知、親としての障害の受容などの問題について実例を紹介しながら講義する。重症の障害をもつ新生児の選択的治療停止や、親による治療拒否などの倫理的な問題、患者団体のあり方など、患児の近親からみたさまざまの問題に触れる。	玉井真理子（信州大学医療技術短期大学部講師）	玉井真理子（信州大学医療技術短期大学部講師）
12	医学研究と社会	医学の進歩のためには研究が欠かせないが、研究の美名のもとになんでも許される訳ではない。遺伝子組換え、クローン技術などは5，6回で論じられるので、本講義ではヒトを被験者とする研究、ヒト集団を対象とする疫学調査、治療法を比較するコントロール化臨床試験、動物の愛護と実験などに触れ、研究の利益と不利益の釣衡を考える。	近藤喜代太郎	近藤喜代太郎

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
13	薬をめぐる問題	薬は両刃の剣と言われる。病気を治すために使った薬が、予想もしない副作用を招くこともある。不適切な薬剤行政は薬害エイズのような不幸をもひき起こす。薬は治療には欠かせない手段であるが、企業にとっては商品でもある。この講義では薬に関する行政のあり方、科学的・倫理的に望ましい開発、医療に当たって、証拠に基づいた適正な薬剤の選択を行うにはどうすべきかなど、薬をめぐる多くの問題を考える。	別府宏圀（東京都立府中療育センター副院長）	別府宏圀（東京都立府中療育センター副院長）
14	日本・アジアの社会と生命倫理	本講義ではアジア的生命倫理の特殊性について考える。欧米がヒューマニズムと人権の理念に基づく生命倫理を推進しているのに対し、アジア的コミュニタリアニズムは欧米の受けとめ方と異なる点が少なくない。本講義ではこれから21世紀に向けての地球的倫理を構築するための東西の生命倫理の融合の道を探りたい。	坂本百大（青山学院大学名誉教授）	坂本百大（青山学院大学名誉教授）
15	医療と国際協力	国際協力というと、開発途上国への援助の面からしか考えられていない。本講義では医療を国際的視野で考え、人間として基本的医療を受ける権利を有することから、医療資源の適正配分の考え方を述べる。医療資源は人的資源、物的資源、社会経済的資源に分けられるが、それらの適正配分と国際協力について考える。	岡崎勲（東海大学教授）	岡崎勲（東海大学教授）

＝看護学概論＝（TV）

〔主任講師：ケイコ・イマイ・キシ（香川医科大学教授）〕

全体のねらい

看護を学び、その分野で活躍したいと思う方や、すでにその分野におられる方が、新しい時代のニーズに対応するよう、看護科学の概念を把握し、他の医療専門家達と共同をし、または独自な専門職として、発展していくための人間学としての看護理論、技術、考え方、看護に影響する文化の価値観についての紹介。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	看護科学序論	看護は人間を対象とする科学であり、そして技術、芸術である。人間の健康上の問題の反応が何であるか調べ、つきとめ、計画的に処理をし、評価する。医療チームの一員としての共同作用、又は看護科学の概念にもとづき人間的なケアを行うことの記述。	ケイコ・イマイ・キシ（香川医科大学教授）	ケイコ・イマイ・キシ（香川医科大学教授）
2	ライフサイクルからみた看護	健康状態は生から死まで、病気や障害がなくてもたえず変化している。発達段階、疾病の予防、健康教育、病気障害、リハビリのためのケア、死にゆく人とその家族のケア等についての記述。	同上	同上
3	環境と人間の相互作用	健康に影響する環境には外面的、内面的なものがある。物理的、化学的、生物学的、社会的、家族的、文化的なものから、心理的なものなど、人間と環境の相互作用がいかに、個人、家族、地域集団の健康上に影響をおよぼしているかを理解し、看護のケアを考える。	同上	同上
4	家族と看護	人間が生まれてから社会で一人前の成人になるまで、何らかの形で家族の影響を受けている。現代の家族は複雑で変形が多いが、個人のケアをする場合も家族を理解すると問題が明らかになりやすい。また、個人の健康上の問題で、家族のケアが必要になるという説明。	同上	同上
5	文化と看護	看護ケアの心髄は文化の中にある。看護を専門職として行う者は、その国の文化を理解し、地域の特徴、特に健康に関する考え方や価値観、風習、習慣を把握した上で、科学的なアプローチをとることの必要性を説明する。文化の相対性と普遍性についての影響の説明。	同上	同上
6	コミュニケーションと看護	人間のケア、看護ケアをするために、言語的、及び否言語的コミュニケーションの理論、知識、技術を学び、背後にある文化の意味するものを理解することにより、人間の健康上の問題の看護ケアをすることが大切であるということの説明。	同上	同上
7	健康上の反応と看護	健康と疾病をはっきりとわけることはむずかしい。人間の生態活動はたえず変化して、人間の健康状態はいろいろな刺激に対しての反応として現れ、変化をおこしている。　その変化の例として、成人病、救急な病気や障害、リハビリ等についての看護の対応。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	死と看護	死を学び生を生きる。健康の維持、回復の過程をとらずに疾病、障害、事故又は老衰で死に行く人に対する看護ケア、及び、その家族のケアについて説明する。死のケアをするために地域社会における文化、風習を知り、総合的医療組織、ホスピス等の説明をする。	ケイコ・イマイ・キシ	ケイコ・イマイ・キシ
9	看護の倫理と法律	看護は科学であり技術であるというが、対象が人間であるために、看護を実践していく時に倫理的観点をこころえる必要がある。つまり、プライバシーを守るとか、インフォームドコンセントについて、医療過誤について、看護はどういう対処するかの説明。	同上	同上
10	看護の技術	看護を科学的に実践するためには、人間の健康上の反応を検査し、データを集め、分析、分類し、問題を発見し、看護処理をするために計画をたて、計画を実行し、評価する。 この過程を看護過程と呼んでいる。ここではフィジカルアセスメントの技術が必要である。	同上	同上
11	看護の理論と実践	何故看護に理論が必要であるかを説明し、看護の知識体系をつくってきた理論が、看護の実践、教育、サービス、研究にどのような相互作用を与えてきたかを説明する。看護理論の例をあげ、説明を加える。	同上	同上
12	看護と看護研究	主な歴史的な研究の流れを説明し、看護研究の目的、意義、方法、結果、考察等について説明する。看護研究は看護実践にどうむすびつけるかを説明。	同上	同上
13	アメリカの看護	1946年以後、日本の看護の発展は米国の看護の影響を受け、現在にいたっている。二つの国は文化の相違を持ちつつ、看護において、人間のケアにおいて普遍的なものを見いだそうという努力がみられている。ここでアメリカの看護の紹介をこころみる。	同上	同上
14	地域社会における看護の役割	新しい日本の医療政策と制度、新ゴールドプランのなかで看護はどのような影響を受け、国民の健康を守り、維持し、増進し、ケアをし、患者の養護者として活躍するのであろうかの説明。	同上	同上
15	21世紀の看護	看護教育の大学化が進み、教育のレベルアップ、医療科学技術の進化、産業文明の高度化とストレス、高齢化社会という変化の中で、新しい役割を持ったナースプラクティショナー、ナース・スペシャリスト、ナース事業家など、200種類の新しいナースの役割が生まれた。	同上	同上

＝ 母子の健康科学（’００）＝（R）

〔主任講師：日暮　眞　（東京家政大学教授）〕
〔主任講師：近藤 喜代太郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

健康科学には年齢特有の問題も多いが、放送大学では限られた枠の中で母子と高齢者に関する科目をそれに当てている。母と子の保健問題は互いに関連しており、おなじ科目で講義することとしている。日本は「多産多死・感染症社会」から「少産少死・成人病社会」に移行し、世界でもっとも進んだ保健先進国となっている。本科目ではこうした状況でもなお未解決な問題、新しく生じた問題などに重点をおいて、母子の健康科学をめぐる重要問題を15課題選んで講義する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	これからの母と子の課題	近年子どもを巡る環境は急速な変化を生じ、それらは少産少子・育児環境（社会・人間関係・情報等）の変化・国際化など、多岐に亘っている。本講義ではこれらの変化が母子にどのような影響を及ぼしているかを分析し、対応策を考察し、全体の序論とする。	日暮　眞（東京家政大学教授）	日暮　眞（東京家政大学教授）
2	母と子の健康の状況	主に統計と疫学を駆使して、母性と学齢期までの子どもの心身の健康の現状をのべる。子どもはもっともよわい社会の構成員であるが、日本の乳幼児死亡率は世界最低である。これは日本の社会の先進化、母子保健行政、医療など、母と子を守る仕組みがかなり満足すべき水準にあることを示しているが、残された課題も少なくない。この講義では3回目以降の序説をかねて主な問題を述べる。	近藤喜代太郎（放送大学教授）	近藤喜代太郎（放送大学教授）
3	妊娠と分娩	今日の日本は、高度な先進医療と人類がかつて経験しなかった少産少死の時代を迎えつつある。母子の健康を考えるとき、周産期・新生児死亡の著減、不妊治療の飛躍的上昇、腎臓移植後の妊娠など、多くの合併症を持った妊娠例の増加があり、新たな視点を持って臨むことが必要となってきた。母体死亡率はなお高い。妊娠成立やその維持機構、分娩発来機序についてはまだまだ不明な点があるが、新しい知見が次々に発見されている。	福岡秀興（東京大学助教授）	福岡秀興（東京大学助教授）
4	妊婦の心とからだ	本講義では妊娠が母体の心身にとのような変化をおこすかを学ぶ。もっとも大きな変化は子宮におき、成長する胎児をはぐくみ陣痛によって娩出する準備が進む。内分泌をはじめすべての臓器が多少とも変化するが、分娩によって復元する。感情不安定、挙子への期待と不安、うつなと心の問題も多く、周囲の支援が大切である。	佐々木　茂（日本医科大学永山病院産婦人科）	佐々木　茂（日本医科大学永山病院産婦人科）
5	妊婦の異常と流早産	「お産は女の寿命定め」という諺があるように、妊娠・出産は女性の心身に重大な影響を及ぼす。本講義では異常妊娠・妊娠高血圧・妊娠中毒症などの妊娠に固有の異常、分娩の異常、てんかん、糖尿病などの合併症と妊娠との関係、さまざまの原因による流産と対策について論ずる。	進　純郎（葛飾赤十字産院院長）	進　純郎（葛飾赤十字産院院長）
6	リプロダクティブヘルス・ライツ	多くの女性が出産の間隔や産む子供の数を自由に選択できず、その結果、多産の奨励、あるいは危険な中絶で命を落としている。妊娠、出産、中絶などにかかわる女性の健康を重視し、さらに、子供を産む産まないの自己決定権の他、生涯にわたって女性自身の健康を主体的に守って生きる権利をリプロダクティブヘルス・ライツという。その促進にむけて、どのような医学的ケアと情報の提供が必要かを産婦人科医の立場から考察する。	島本郁子（奈良県立医科大学看護短期大学教授）	島本郁子（奈良県立医科大学看護短期大学教授）
7	胎児から新生児へ	子宮内で母体から酸素や栄養素の供給を受けていた胎児は、出生を境に呼吸し栄養素を摂取するなど自立した生活が必要になる。子宮外生活への適応は、ヒトの一生の中で最も大きな変化であり、多くの異常がこの時期の適応障害によって生じる。この劇的な変化について解説する。	多田　裕（東邦大学教授）	多田　裕（東邦大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	子どもの成長	出生から成人に至るまでの各時期の成長の特徴を、全身的ならびに器官ごとの観点から解説する。また、日本人の発育の年次推移について議論する。さらに、成長の正常と異常や、その判断の方法について、計測方法、発育基準とのてらし合わせ方も含め解説する。	加藤則子（国立公衆衛生院母子保健学部乳幼児保健室長）	加藤則子（国立公衆衛生院母子保健学部乳幼児保健室長）
9	子供の栄養	子どもの栄養状態は過剰栄養状態が問題視されるようになり、肥満、高血圧症等のリスクをもつ子どもが増加してきている。その背景として、単なる食物の過食や偏りばかりではなく、摂食のリズム、食習慣の不規則性や家庭・社会の問題などが子どもの食生活に影響している。栄養問題を子どもの生活すべてを包含した視点から検討する。	坂本元子（和洋女子大学教授）	坂本元子（和洋女子大学教授）
10	母子の生活と環境	近年の母子を取り巻く環境はめまぐるしく変化しつつある。本講義では母子の健康生活により密着した立場から、環境を(1)生物学的環境（母子感染、食中毒など）(2)物理・化学的環境（環境汚染物質の母子への影響など）(3)社会学的環境（住環境の変化による健康影響、事故の現状と対策、育児環境、遊びなど）に分けて、母子の健康生活と影響の関連性を述べ、その問題点と対策について論じる。	織田正昭（東京大学大学院助手）	織田正昭（東京大学大学院助手）
11	子どもの心の病い	不登校をはじめとして、心身症、いじめ、非行、行為障害など、子どもの心の病が近年強く関心を集めている。子どもの心の問題には、親子関係や家庭環境、学校環境、子どもを取りまく社会環境の問題が影響している。本講義では、これまでの知見に基づき、子どもの心の病の理解と対処、そしてまた予防について学習する。	吉田弘道（(財)東京都精神医学総合研究所臨床心理研究部門主任研究員）	吉田弘道（(財)東京都精神医学総合研究所臨床心理研究部門主任研究員）
12	子どものからだの病い	日本の乳児の死亡率は1000人当たり4.3と世界で一番低く、子どもの死は稀である。乳児期で問題になるのは乳児突然死症候群で、乳児死亡の約10%を占めている。乳幼児の病気は日常茶飯事にみられるかぜ症候群がもっとも多く、子どもの伝染病がときおり流行を繰り返す。過去に比べて増加してきているものにアレルギー疾患がある。乳児期のアトピー性皮膚炎、幼児期から発症することが多いのは気管支喘息である。最近話題になっているのは「生活習慣病」の幼児期からの予防である。	中村敬（恩賜財団母子愛育会日本子ども家庭総合研究所情報担当部長）	中村敬（恩賜財団母子愛育会日本子ども家庭総合研究所情報担当部長）
13	母と子の保健行政	母子保健は、大正当時、出生千人に対して180以上あった乳児死亡率を減少させることを目的としてスタートした。その後、乳児死亡率は年々減少し、平成9年には3.7となり、世界で最も低率となっている。その一方で、出生率の急激な低下、疾病構造の変化、核家族化等、母子を取りまく環境は大きく変化している。超少子化の現状をふまえ、今後の母子保健のあり方を論じる。	住友眞佐美（東京都衛生局健康推進部母子保健課長）	住友眞佐美（東京都衛生局健康推進部母子保健課長）
14	予防接種	平成6年、予防接種法に昭和51年以来の大改正が行われ、予防接種は集団接種から個別接種による個人防衛に変わった。その結果接種率の低下が心配されているが、予防は治療に勝ることを広く理解しなくてはならない。21世紀を迎え、一国の感染症対策は世界的視点なしには成り立たないという共通認識が必要となった。平成6年（1994年）3月にWHOは「ワクチンと予防接種への世界計画」を発足させた。この分野の今後についても考える。	渡邉言夫（杏林大学名誉教授）	渡邉言夫（杏林大学名誉教授）
15	学校保健	社会の変化に伴い、学校教育の在り方が種々論議され、その影響は学校保健の領域にも及んできている。このような時期にあって、児童生徒等の健康を保ち、かつ推進するにはなにを考慮すべきなのか、特に、学校・家庭・地域が連携して取り組むべき課題は何なのかなとに重点を置き、講義を進めてみたい。	衛藤隆（東京大学教授）	衛藤隆（東京大学教授）

＝ 青年期の健康科学 ＝（R）

〔主任講師：鬼頭 昭三（兵庫大学教授）〕

全体のねらい

この科目では年代順の健康科学の一部として青年期を論ずる。青年期ことに18才から20才の間は人間の肉体も、脳の機能もピークに達しその状態が続く時代である。しかし、環境の変化、拡大によって、こころの歪もおこりやすい。青年期の健康科学を主として生物学的な面を中心としてその社会的、心理的な面も加味しながら解説することとする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序論	青年期は人間の機能のピークに達する時期であるが、社会人としての経験、判断力は、未熟な時期である。このような青年期の特徴をふまえて青年期の心身の健康が環境の拡大に伴ってどのような影響を受けるかを述べる。	鬼頭昭三（兵庫大学教授）	鬼頭昭三（兵庫大学教授）
2	男のからだと女のからだ	男性と女性のからだには、いろいろな違いがある。骨の形や筋の発達にも性差がみられるが、生殖器の差異はもっとも目立つ。その違いを解剖学的、生理学的に説明するとともに、どのようにしてその違いができるのか、生殖器の発生と発達を解説する。また、受精から胚子の器官形成、胎児の発育、分娩にいたる妊娠の経過とその異常について述べる。さらに、半陰陽などの性分化の異常についても触れる。	安田峯生（広島大学教授）	安田峯生（広島大学教授）
3	男の脳と女の脳	性ホルモンの働きにより男女にからだの性差がつくられるが同時に脳にも差が生じる。そのため脳のある部位では、神経細胞の表面に存在する蛋白分子に違いがみられまた神経回路網にも差が起こる。この脳の差に加えて社会的な因子が加わり男女間の心理的・情動的な性差が表れるのである。本章で生物学的な立場から脳の性差を述べ、お互いの理解を深めることを目的とする。	三好理絵（放送大学非常勤講師）	三好理絵（放送大学非常勤講師）
4	青年期のこころ	人生というものは、どの段階をとってみてもそれぞれにかなり特徴的な状況・状態がみられるものである。青年期の心というものを、そういった観点から眺めてみて、どんな事柄が指摘されるのかについて考えてみる。そしてそれらがこころの健康について、どんな意味をもったものかを併せて考えてみる。	小倉清（クリニック おぐら院長）	小倉清（クリニック おぐら院長）
5	青年期と甘え	甘えというものは、人間の一生を通して、ずっとみられる心理な側面の一つであるといえよう。もちろんそれがみられる年齢によって、甘えの型やその意味は微妙に異なることになろう。そこで青年期という、特殊な時期にみられる甘えにはどんな意味をもちうるのか、どんな問題を提起しうるのか、などについて一定の考察を試みる。	同上	同上
6	青年期の食生活	青年期は成長と成熟とを合わせ持つ複雑な時期である。また肉体的・精神的に将来を決定する重要な時期でもある。この特性に焦点を合わせ、幼児期から成人への流れの中で栄養の位置づけを考えていきたい。栄養の摂取は食欲に従って摂れば必要にして十分の種類と量が摂取出来るはずである。しかし青年期における心理・社会・家庭状況により食欲が正常に働かないことにより問題が起こる。食欲調節機構の疾患もこの時期に起こりやすい。	金澤康徳（自治医科大学教授）	金澤康徳（自治医科大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	青年期と睡眠	睡眠についての研究は非常に広く行われている。ここでは青年期における睡眠の意義やその特徴について考えてみる。特に睡眠中の成長ホルモンの分泌について、その生物的な意味について考えてみる。更にはこの時期における睡眠中の心理的な動きについて考えてみる。	小倉　清	小倉　清
8	酒とタバコの問題点	有史以来の人類の嗜好品である酒とタバコは依存性があるために、その摂取は継続的・日常的となり生活習慣の一部となり易い性質を持つ、青年期に「大人のしるし」として飲物や喫煙を始めると、飲酒習慣、喫煙習慣となって一生継続することが多い。青年期にこれらの嗜好品に接するに当っては、それぞれの生体へ及ぼす影響と功罪とをあらかじめ十分に承知しておくことが大切である。	本間日臣（元放送大学教授）	本間日臣（元放送大学教授）
9	青年期とカー・バイクライフ	大部分の青年が二輪・四輪を好きなことは事実である。車を運転するスピード、緊張感、仲間との連帯感、そういった感覚を若者が欲しているのだろうか。しかし、彼らは恐らく車を高速で運転しているときの生理学を良く知らない。高速になり、座席が低い程スピード感のために視認出来る視野が狭くなること、他に注意を向ける余裕がなくなること、いくら反射神経が早くても対処し切れない場合があることなどについて、医学、生理学的に説明する。	谷島一嘉（日本大学教授）	谷島一嘉（日本大学教授）
10	青年期とスポーツ	青年期のスポーツを生涯スポーツとの関連で考える。中高年期における身体活動度が高いことは、成人病の予防や寿命の延長につながり、生涯スポーツの必要性が言われている。しかし、実際のスポーツ習慣のある者の率は低い。青年期は体力的には最高の能力を発揮できる時期であり、スポーツ活動の成熟期であり、生涯続けられるスポーツとしてとらえる必要がある。一方、スポーツの障害面についても注意が必要である。	川久保清（東京大学助教授）	川久保清（東京大学助教授）
11	青年期の薬物乱用	青年期にしばしば見られるシンナーや睡眠薬などの乱用は、そのまま成人期の本格的な薬物乱用（覚醒剤や麻薬の依存）へと発展することが多い。青年期に特有の自己の不確実性や対人関係の未熟性などが、自己破壊的な薬物乱用の根底にある。また、薬物の乱用とアルコールの乱用とは相互に関連しあっていることも知られている。本章では青年期に始まる薬物乱用の実体とその対策について述べる。	仙波純一（放送大学教授）	仙波純一（放送大学教授）
12	青年期の心身医学	青年期は思春期と成人期の移行間としてとらえられ、その時点での心身の発達はめざましいものがある。とくに心の面では自我同一性の獲得が重要となり、不安が身体化ないし行動化してあらわれやすい。 心身症としては摂食障害（神経性食欲不振症、神経性大食症）、過換気症候群および過敏性腸症候群などが好発し、ストレス関連障害として適応障害などもみられ、その他神経症性障害などもみとめられる。	筒井末春（東邦大学教授）	筒井末春（東邦大学教授）
13	青年期の病気	青年期は、人生の中では病気の少ない時期である。心身症を含めた精神医学的な異常、外傷などの外因性の病気が高い頻度を占める。一方では飽食の時代の反映として、高脂血症、高血圧症、動脈硬化症などの後年、成人病発生の基礎となる病態が青年期に増加しつつあることが注目されている。青年期の病気の現状とその将来像について述べる。	鬼頭昭三	鬼頭昭三

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	青年期の心の病気	青年期には身体の急速な成長や性の成熟が見られ、それに伴い精神面では感情の不安定化や自我感情の亢進などが見られるようになるように、青年期は心身ともに不安定な時期である。青年期には、自己同一性をめぐる神経症が発症したりするほかに、精神分裂病や躁うつ病気などのいわゆる精神病が初発しやすい時期でもある。また神経症も、周囲に対する問題行動となって表れやすい。この章では、青年期によく見られる心の病について解説する。	仙波純一	仙波純一
15	まとめ	青年期は、疾病の罹患率は少ないが、青年期の生活習慣がそのまま、青年期以後にもたらされるため、健康な人生を送るための重要な時期である。しかし、各自の健康意識は高くない。理想に燃えた青年が自己尊重の精神に基づいて自らの健康をケアすることが必要である。	鬼頭昭三	鬼頭昭三

＝ 高齢者の心と身体（’００）＝（R）

〔主任講師：折茂　肇（東京都老人医療センター院長）〕
〔主任講師：近藤　喜代太郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

日本はすでに高齢社会となっている。放送大学では高齢者の生活、福祉など、社会的な側面についてはかなり広汎に講義されているが、本科目は医学の立場から高齢者の心と身体をめぐって、15題の重要課題を選んで講義する。加齢とともに心身の衰えがおき、一部の高齢者にはさまざまの疾患がおきるが、その理解と対応には若齢者とは異なる視野を要する。本科目ではこの面を重点をおき、高齢者の心身の現状、医療の問題点などを明らかにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	老化のメカニズム	老化は万人におこるものであるが、その起こり方、進み方をみると個人により千差万別であることに驚かされる。これは、個体が誕生し、成熟する過程と著しい対照をなす事実であり、老化がいかにして起こるのかを理解するためには、なぜこのような個体差が生じるのかを説明することができなければならない。	石川冬木（東京工業大学教授）	石川冬木（東京工業大学教授）
2	高齢者の身体機能	加齢変化に関する研究が進むにつれ、人間の老化を局所的にではなく、全身的に評価できるようになった。また、病気の有無ではなく、生活機能の自立度で健康を定義する概念も確立され、その結果、老化は直角型に進行することが明らかになりつつある。	柴田博（桜美林大学教授）	柴田博（桜美林大学教授）
3	高齢者の心と病気	老年期には精神の座である脳の老化の進行に伴って、精神機能も少なからぬ影響をうける。記憶力・思考力・判断力が徐々に低下し、複雑な問題を扱ったり、理解することが次第に難しくなる。性格にも多少とも変化が現れる。老年期には健康・職業・役割・収入・配偶者・友人・住み慣れた環境などさまざまな面での喪失を体験し、そのために不安・抑鬱状態に陥ることが少なくない。記憶力・思考力・判断力などの低下が著しくなると痴呆の状態になる。	西村健（甲子園大学教授）	西村健（甲子園大学教授）
4	いきがいと健康	高齢者のライフスタイルが多様化してきており、高齢者自身が自ら直面するライフスタイルをわがものとして「生きがい」をもって生活することが心身の健康を保つ一助となる。「生きがい」活動には「友人・知人の会合」「趣味・スポーツ」「社会奉仕・社会参加」等があげられ、コミュニティ活動を通して行うことが健康保持につながることになる。	五島雄一郎（東海大学名誉教授）	五島雄一郎（東海大学名誉教授）
5	高齢者の栄養	高齢者は低栄養状態に陥る危険性が高く、その危険因子を把握し、栄養評価を行うことが必要である。老化機序には栄養が関係している。高齢者に高率にみられる動脈硬化の発症にも栄養が関係しており、ＬＤＬの量を増加させる因子と、ＬＤＬの酸化変性に影響を及ぼす因子があげられ、抗酸化物が重要である。	板倉弘重（国立健康栄養研究所名誉所員）	板倉弘重（国立健康栄養研究所名誉所員）
6	高齢者の病気の特徴	高齢者の病気の特徴として、1）多臓器に疾患が併発、2）症状の非定型化、3）長期ケアを要する障害と痴呆、うつの増加、4）薬害が起こりやすい、5）低栄養、感染症の増加、6）福祉との関わり合いか深い、7）終末期医療などの点が問題となる。本講義ではこのような面から第7～10回の基礎となる問題をのべる。	小澤利男（東京都老人医療センター名誉院長）	小澤利男（東京都老人医療センター名誉院長）
7	循環器の疾患	「ヒトは血管とともに老いる」といわれるように、血液循環は生命活動の源泉であり、高齢者の健康を保つには血圧の上昇と動脈硬化の進行を如何にして抑制するかが鍵になる。本講義では心筋梗塞、脳血管障害などを中心にその予防のためのライフスタイルと薬物治療の意義について述べる。	尾前照雄（国立循環器センター名誉総長）	尾前照雄（国立循環器センター名誉総長）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	感染症とがん	高齢者の感染症では肺炎、尿路感染、褥瘡感染、敗血症などが問題となり、また新型インフルエンザが流行すれば犠牲者が多数出ると懸念されている。一方、大多数のがんは年齢の指数函数として増加し、ホルモンの影響をうける前立腺癌は50歳代から急増し、乳癌は40歳代でピークを示す。本講義では高齢者の感染症とがんをめぐる重大問題を判りやすく解説する。	島田馨（東京専売病院長）	島田馨（東京専売病院長）
9	神経系の疾患	日本人の死因と罹患因の20%。ＡＤＬ低下の1/2は神経疾患に起因し、その大半は高齢者におき、脳血管障害と神経変性疾患が圧倒的に多い。本講義では高齢者に多発する主な神経疾患の特徴と予防についてのべ、痴呆、寝たきりなど要介護状態についても触れる。	近藤喜代太郎（放送大学教授）	近藤喜代太郎（放送大学教授）
10	骨と関節の疾患	高齢者では骨疾患としては骨粗鬆症、関節疾患としては変形性関節症が多発し、そのために自立が障害され、ＱＯＬが著しくそこなわれる。骨粗鬆症は骨量が減少し骨が脆くなった病気で、大腿骨頚部、脊椎、橈骨の骨折を起こしやすいのが特徴である。変形性関節症は脊椎、膝関節などに多発し、痛みや歩行障害を来たし、高齢者を大いに悩ませる。	折茂肇（東京都老人医療センター院長）	折茂肇（東京都老人医療センター院長）
11	高齢者と薬	高齢者の服薬後の血中濃度の推移（薬物動態）の特徴とその機序について中年との違いを述べ、服薬上の注意点を示す。高齢者に多く服用される睡眠薬、消炎鎮痛薬、抗血栓薬、抗菌薬、降圧薬などについて、その使用法、副作用など、高齢者の薬物療法をめぐる問題を解説する。	蔵本築（東京都老人医療センター名誉院長）	蔵本築（東京都老人医療センター名誉院長）
12	高齢者医療のあり方	高齢者の病気は成人のそれとは著しく異なるので、効果的な医療を行うには戦略が必要である。1）高齢者のＱＯＬを第一義的に考えた医療：これまでは延命のための医療が中心であったが、これからは高齢者のＱＯＬを第一義的に考えた、自立機能障害（disability）の予防を最終目的とした医療が中心となるべきである。2）高齢者医療ではチーム医療が必須：高齢者は一人で多くの病気に罹患している場合が多いので、専門を異にする各診療科の医師及びコメディカルが協力して、最も適切と考えられる医療を行うべきである。3）高齢者医療では地域連携システムの確立が必須：各地域に於いて高齢者医療に関わる病院、診療所、かかりつけ医がお互いに協力して高齢者医療を行う体制を確立する必要がある。	折茂肇	折茂肇
13	看護介護・福祉～在宅ケアと介護保険制度を中心として～	高齢化が進み寝たきり等の要介護者が増えている。医療の流れもキュアからケアへ、更にホスピタルケアからホームケアの方向へと動いている。2000年から介護保険が導入されるが、よい介護には保健・医療・福祉の連携が不可欠である。21世紀は介護の時代といわれる。在宅ケアを中心として看護・介護・福祉のあり方について述べる。	山口昇（公立みつぎ総合病院・御調町保健医療福祉管理者）	山口昇（公立みつぎ総合病院・御調町保健医療福祉管理者）
14	高齢者の死	「畳の上の大往生」で天寿を終えるのが理想としても、多くの高齢者は障害のために在宅・施設ケアを経て、高齢者医療施設などで死を迎える。本講義では医療・社会・家族などの面から現在の日本の高齢者の死の実情に触れる。「介護保険」の導入（平成12年）から5年後に施設のあり方が見直されるといわれるが、国民が「長生きして良かった」「手を尽くして親を見送った」と実感できるように死を看取れる施設が必要である。	近藤喜代太郎	近藤喜代太郎
15	長寿社会と高齢者の自立	長寿社会となって高齢者も自立し、社会・家庭での役割を果たすことが期待される。エイジレス社会とは年齢で輪切りにされず、各自の能力と意思に応じて役割が与えられる、開かれた、やわらかい社会を指すが、そのような社会を構築するには行政はじめ、社会の側の努力だけでなく、個人の生活と心身の自立が大切である。	同上	同上

＝ こころの健康科学（’９９）＝（R）

〔主任講師：仙波　純一（放　送　大　学　教　授）〕
〔主任講師：高橋　祥友（東京都精神医学総合研究所副参事）〕

全体のねらい

現代社会は、情報量の増大、価値基準の多様化、家族形態の変化など、ひとむかし前と比べて急速に変化しつつある。このなかでおびやかされているわれわれの心の健康を考える。心の健康を援助する仕事にたずさわる人との役割についても紹介する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代における心の健康の意義	現代社会で、心の健康を保つことがどうして必要なのか、またそれを得るためにはどのように注意し、努力してゆくべきかについて概観する。以下の章のねらいについて説明する。	仙波純一（放送大学教授）	仙波純一（放送大学教授）
2	心の病気　(1)精神分裂病	精神分裂病は精神障害のうちで最も重要な疾患のひとつである。その推定される原因、症状、経過、および治療法（リハビリテーションも含む）について解説する。	同上	同上
3	心の病気　(2)気分障害	気分障害とは、従来、躁うつ病と呼ばれてきた病態をさしている。その原因、症状、経過、治療法などについて解説する。ストレスの多い現代社会において、心の健康を保つための具体的な方法についても触れていきたい。	高橋祥友（（財）東京都精神医学総合研究所副参事）	高橋祥友（（財）東京都精神医学総合研究所副参事）
4	心の病気　(3)不安障害	不安障害は、以前神経症とよばれていたものの大部分を占めている。各種の不安障害の症状や治療法などについて解説する。	仙波純一	仙波純一
5	心の病気　(4)人格障害	人格障害は、極度の人格の偏りのために、当人自身が苦しんでいたり、あるいは社会的に問題が起きている状態を指している。さまざまなタイプの人格障害があるが、講義では最近話題になることの多い境界性人格障害を中心に取り上げる。	高橋祥友	高橋祥友
6	心の病気　(5)アルコールと薬物依存	現代社会の高度発展・多様化・国際化とともに、カルチュラル・ラグをきたし、人間の心はとまどいをみせ、アンビヴァレントな状況にある。いっときの癒しを求めて、アルコールや薬物をのむが、いつしか依存していくようになり、嗜癖・乱用へとつき進んでしまう。さまざまな社会的問題（病気）をひき起こし、精神的に混乱（病気）し、身体的病気となり、顕在化する。治療的には身体的、精神的、社会的にトータルな治療・ケア・教育が必要である。	榎本稔（榎本クリニック院長）	榎本稔（榎本クリニック院長）
7	精神科医療における精神科医の仕事：その1	現代の精神科医療においては、精神科医、看護者、臨床心理士、ソーシャルワーカーといった多分野の専門家がチームを作って、心の問題を抱えた人の治療にあたっている。そのような現状の中での精神科医の役割について解説する。	高橋祥友	高橋祥友

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	精神科医療における精神科医の仕事：その2	引き続き前回の内容について取り上げる。なお、放送では、2人の精神科医による対談を通じて、実際の現場での精神科医の役割やさまざまな問題点、そして将来への展望などについて話し合う。	高橋祥友	高橋祥友
9	精神科医療における臨床心理士の仕事：その1	仕事の第1は、評価・査定である。対象の年令は、乳幼児から老年までと幅広く、内容的には、発達、知能、人格、作業能力などを、心理検査などの様々な媒体を用いて、評価・査定する。また、個人とその家族との相互作用も対象となることがある。	溝口純二（（財）東京都精神医学総合研究所臨床心理研究部門主任研究員）	
10	精神科医療における臨床心理士の仕事：その2	仕事の第2は、心理療法・カウンセリングである。対象の年令は、この場合も乳幼児から老年までと幅広く、内容的には、個人の抱えている精神的な苦痛に対して、心理的な援助をおこなう。また、家族の働きかけをおこなうこともある。	溝口純二	溝口純二
11	精神科医療における看護婦（士）の仕事：その1	病院を含めた地域社会の中で、精神障害者及び家族のケアとその自立を支えるための援助のあり方について、精神科看護に携わってきた立場から論じる。また、地域の諸資源を活用するために必要な他職種との連携について述べる。	田中美千佳（（財）東京都精神医学総合研究所主任研究員）	田中美千佳（（財）東京都精神医学総合研究所主任研究員）
12	精神科医療における看護婦（士）の仕事：その2 －精神科看護からの発展	精神科看護からの発展領域として、リエゾン精神看護について論じる。筆者は、がん患者を対象として個人カウンセリングやサポートグループを実施しているが、その実践を紹介することを通して、心の問題を抱えた身体疾患患者の看護について考察する。	廣瀬寛子（戸田中央総合病院カウンセラー）	廣瀬寛子（戸田中央総合病院カウンセラー）
13	精神科医療におけるソーシャルワーカーの仕事：その1	我国において、精神科ソーシャルワーカー（以下ＰＳＷと略す）が精神医療の中で、どのような役割を担ってきたのか概括し、そこから現在の状況、及び今後の課題についてふれてゆく。	大原美知子（（財）東京都精神医学総合研究所技術課主任）	大原美知子（（財）東京都精神医学総合研究所技術課主任）
14	精神科医療におけるソーシャルワーカーの仕事：その2	現在ＰＳＷの仕事は単に医療内にとどまらず、地域精神保健分野をはじめとして、多岐にわたり、その活動先が広がってきている。それらの具体的仕事を述べながら「精神障害者の支援」とは何かを考察する。	同上	同上
15	現代社会で心の健康を保つには	以上の章をまとめ、いくつかの残されている課題を追加する。全体をながめて、これからわれわれが社会の中で生きてゆくにあたって、心すべき事柄について考える。また放送では、地域の精神保健についてゲストにお話していただく。	仙波純一	仙波純一

＝ 脳と生体統御（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：仙波　純一（放送大教授）〕

全体のねらい

脳は生体のすべての機能を制御する中枢である。脳を理解するには、分子生物学・神経系の機能・精神活動という異なった次元からの多角的なアプローチが必要である。この講義のねらいは、さまざまな分野での脳研究の現状を述べ、困難であるが最も魅力的な脳の機能を学ぼうとするものである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	脳概論	脳科学を学んでいくには、まず脳の形態を知らなくてはならない。脳の構造とその名前などの巨視的なレベルから、脳を構成する細胞、神経細胞の形態と神経伝達などの微視的なレベルまで、脳の形態を中心に学ぶ。最後に脳の系統発生や個体発生などについて学習する。	仙波純一（放送大学教授）	仙波純一（放送大学教授）
2	脳の情報伝達Ⅰ	脳はからだの内部や外部からの情報を受けて、それに応答する。この情報の処理を担うのが神経細胞である。神経細胞どうしがどのように情報を伝えているかを、シナプスでのできごととして説明していく。まず、神経伝達物質と受容体について学習する。	同上	同上
3	脳の情報伝達Ⅱ	神経細胞が情報を受け取ると、さらに細胞内部に情報を伝え、それに対する応答として、何らかの生理学的な反応がひきおこされる。これを細胞内情報伝達系といい、近年急速に解明が進んでいる分野である。最近の知見を交えて紹介していく。	同上	同上
4	脳の分子生物学	最近、分子生物学の導入による医学研究の進歩には眼をみはるものがある。基礎神経科学、神経内科学の領域でも、遺伝子工学的手法を利用した研究成果が次々と得られている。主なものとしては、前章で述べた情報伝達機構が遺伝子レベルでとらえられるようになったことである。又、遺伝性神経疾患の遺伝子解析により病因遺伝子の同定が進んでいることである。更に、多因子疾患への遺伝子解析のメスも入れられている。	三好理絵（放送大学非常勤講師）	三好理絵（放送大学非常勤講師）
5	脳の可塑性と神経細胞脳死	脳の可塑性とは、脳が外的影響を受けた結果、その機能状態が持続的に変化する性質のことをいう。神経細胞は再生しないが、脳は固定的なものではなく、その可塑性は広い範囲にわたってみられる。遺伝子を介する長期効果も脳の可塑性の一部である。可塑性と神経細胞死は、情報伝達機構の上でも機能の上でも、密接に関連しあっている。可塑性を通じて、脳の機能を考えるのが、本章の目的である。	鬼頭昭三（兵庫大学教授）	鬼頭昭三（兵庫大学教授）
6	脳の画像診断	「生きた脳の働きをなんとか外から眺めることはできないか」という科学者の望みは、最近の核技術や工学技術で可能になり、そのうちのいくつかはすでに脳の病気の診断にも使われている。この章ではいくつかの脳の画像化の技術を紹介していく。	仙波純一	仙波純一
7	脳と知能	人の人たる所以は知能の基本である記憶が言語機能などと結びつき、さらに、大脳連合野での制御、統合を受け、必要に応じて古い記憶は連合野に蓄えられるなどのプロセスを経過して、結果において、バランスのとれた行動を形成する点にある。海馬を中心とした記憶機能について、分子生物学のレベルでの研究も進んでいる。これらの点について概説的に述べることにする。	鬼頭昭三	鬼頭昭三

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	脳と情動	ヒトの怒り・驚き・喜びなどの強い感情は情動とよばれ、単なる主観的な感情だけでなく、表情や身ぶり、動悸や発汗などの身体の症状を伴う。この情動は脳のうちの辺縁系とよばれる部位が関与している。この脳内の情動に関する機構を学習していく。	仙波純一	仙波純一
9	脳と運動	我々が体を動かすという行為のための信号は、大脳皮質の運動領（運動野、運動前野、補足運動野からなる）から錐体路を通して脊髄、末梢運動神経、筋肉へと送り出される。そして、小脳はこの運動性伝導路の制御を司るコンピュータであり、大脳基底核は、小脳による運動の制御に、更に制御を加える役割を演じていると考えられる。我々が微妙な運動ができるのはどのようなメカニズムによるかについて述べる。	鬼頭昭三	鬼頭昭三
10	脳と感覚	感覚は、神経系の最も基本的な入力機能として、外的、内的環境からの情報を取り入れ、運動系との連動を通して、脳による生体統御の最も基本的な部分を営んでいる。感覚には、体性感覚、内臓感覚、複合感覚、特殊感覚などがあり、その情報伝達の様式もそれぞれの感覚に特異的である。感覚機能は、言語機能、脳の高次機能との連関により、人に特徴的な発達をしている。これらの点について解説する。	同上	同上
11	脳とホルモン	脳とホルモンの関係を研究する学問を神経内分泌学という。最近の脳研究の中でも注目を集めている領域の一つである。ホルモンは男女の脳分化を支配する。古典的には視床下部が脳におけるホルモンの支配中枢とされてきたが、近年、海馬がさらに視床下部よりも上位の脳におけるホルモンの最高中枢として研究の対象になっている。ホルモン様物質が脳で生合成されることも知られてきた。神経内分泌学の現状について述べる。	同上	同上
12	脳と薬	障害された脳の細胞の機能を補うために薬物が使われる。この薬物の基本的な機能は、神経伝達に対する作用で説明できる。脳に働く薬物は治療薬だけでなく、依存をひきおこすような薬物もある。これらの薬物の作用機序を学習していく。	仙波純一	仙波純一
13	脳と生物リズム	ヒトを含む生物には睡眠覚醒に代表されるように、活動にリズムを持ったものが多い。このリズムは脳によって自律的に生み出されていて、外界と相互作用することによって生物の活動は営まれている。生物リズムの統御器官としての脳を取り上げる。	同上	同上
14	脳の進化と発達脳科学の歴史と現状	脳は、生体統御の中心であり、全身のホメオスターシスの維持から高次機能に至まで、複雑でかつ重要な多くの機能を担っている。本章では14章までの間に取り上げられなかった点を補足しながら、脳科学の現状と将来について述べ、まとめとする。	鬼頭昭三	鬼頭昭三
15	脳とこころ	こころは脳の機能であることは明らかであるが、それではこころの働きとは何かという問いに対する答えは難しい。この最後の章では、いたずらに思弁的になることを避け、神経科学の立場からこの答えをどのように考えているかを紹介したい。	仙波純一	仙波純一

＝ 発がんとその予防 ＝（R）

〔主任講師：　山本　　雅（東京大学教授）〕
〔主任講師：　鬼頭　昭三（兵庫大学教授）〕

全体のねらい

がんは遺伝子の病気である。身体をつくっている一つ一つの細胞の中のがん関連遺伝子が様々に変異して、つまり遺伝子に傷が生じて、がんが発生する。何故遺伝子に傷がつくのか？がん関連遺伝子とはどのようなものなのか？最近の分子腫瘍学から得られた知識を背景に、病理学、疫学的観点からがんについて学び、最後にがんの予防について考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	発がん概論	煙突掃除夫の陰嚢がんの記述をはじめとするがん研究を歴史的に振り返りながら、化学発がんに関する研究、ウイルス発がんに関する研究を紹介し、そのような研究の一つの到達点としての分子腫瘍学に基づく発がんの原理を解説する。	山本　雅（東京大学教授）	山本　雅（東京大学教授）
2	遺伝子とがん(1)	RNA腫瘍ウィルスの発がん能が、ウイルスが有しているがん遺伝子に起因することがわかって以来、発がんを遺伝子のレベルで説明することが可能となってきた。そしてヒトのがん細胞では複数のがん原遺伝子、がん抑制遺伝子が変異しており、そのような変異遺伝子が共同してがんを作成していることが分かってきた。第２章から第４章では、がん遺伝子、がん原遺伝子、がん抑制遺伝子について、その機能を発がんとの関連に注目しながら解説する。	同　上	同　上
3	遺伝子とがん(2)		同　上	同　上
4	遺伝子とがん(3)		同　上	同　上
5	細胞増殖の調節	分子生物学の発達により癌抑制遺伝子の実体が急速に明らかになり、現在、癌抑制遺伝子の研究は癌の基礎研究のうちでも最も hotな研究分野となっている。本講義では、癌抑制遺伝子の産物による細胞増殖の調節機構について基礎から最先端の話題までを紹介する。	秋山　徹（東京大学教授）	秋山　徹（東京大学教授）
6	ウイルスと発がん(1)	がんウイルスは感染・増殖し、果てにはがんを起こす。白血、肝臓がん、子宮がんの原因ウイルスなどについて、人から人への感染、増殖の様式、がんを起こす機構について分子レベルで解説し、予防を含めて今後の問題について述べる。	吉田光昭（東京大学教授）	吉田光昭（東京大学教授）
7	ウイルスと発がん(2)		同　上	同　上
8	がん病理の基礎	病理学とは、病気のなり立ちの解明を目的とする研究領域である。患者さんから切り取られた病変組織を取り扱うこと、顕微鏡などをもちいて形態を観察することなどが病理学でよく使われる技法である。がんが、この病理学という立場でどのようにとらえられるか解説する。	森　茂郎（東京大学教授）	森　茂郎（東京大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
9	遺伝性のがん	遺伝性のがんの原因となっている遺伝子は大別して次の３種類に分類される；（１）癌抑制遺伝子（APC・家族性大腸腺腫症など）；（２）がん抑制遺伝子（RET・多発性内分泌腺腫瘍症２型）；（３）DNA修復遺伝子（遺伝性大腸がんなど）である。	中村祐輔（東京大学教授）	中村祐輔（東京大学教授）
10	がんの遺伝子診断	がんの遺伝子診断は（１）がんができる危険を予知するもの；（２）便や尿を用いてがんの存在を遺伝子レベルでみつけるもの；（３）がんがどの程度の悪性か、あるいは薬剤や放射線に有効かどうかを判定するなどの３つの目的に大別される。	同上	同上
11	がんの疫学	我国では、がん頻度の第１位は胃がんから肺がんに変わるなど、環境因子の変化に伴ってがんの疫学的な動態は活発に動いている。がん疫学は遺伝素因と外的環境との関わりを示す意味で重要である。外的因子からみた疫学調査と平行して、内的な立場から見たハイリスク遺伝子の分布とその評価、同定に関する研究もがんの疫学の新しい方向である。がんの疫学の持つ意味と現状について述べる。	鬼頭昭三（兵庫大学教授）	鬼頭昭三（兵庫大学教授）
12	がんと環境因子	発がんは長い時間をかけて、多段階を経て進行する複雑なプロセスである。幾重にも張り巡らされた防御反応をくぐり抜けてがんが成立する過程で、外的環境因子が、がん遺伝子、がん抑制遺伝子などに与える影響が大きな役割を演じている。この環境因子のうちで、食物および嗜好品の占める意味が大きい。食物と嗜好品を中心とした外的環境因子の立場から、がんの予防について論じる。	同上	同上
13	消化器のがんとその予防	高齢化社会の到来とともに消化器のがんの罹患率、死亡率が増加している。この要因として食生活を中心としたライフスタイルの関与が挙げられる。特に、食塩と胃がん、喫煙と食道がん、胃がん、アルコールと食道がん、食物繊維、脂肪と大腸がん等である。そのほか、近年肝がんに対する肝炎ウイルスの濃厚な関与が判明した。本稿では、これまでのライフスタイルと発がんの関連性の報告のうち確立され知見のもとに、実現可能な消化器がんの予防につき記載したい。	吉田豊（弘前大学長）	吉田豊（弘前大学長）
14	呼吸器のがんとその予防	肺がんは、タバコなど（外因）と癌遺伝子・抑制遺伝子（内因）が組合わさって出来る。タバコのみに出来易い肺がんとタバコのみでない人に出来易い肺がんが分かっている。予防については禁煙が大事だが、食事なども影響するらしい。	川上義和（北海道大学教授）	川上義和（北海道大学教授）
15	発がんの研究と健康科学	発がんのメカニズムは分子生物学の普及、進歩に伴って、DNAの修復機構の研究など、めざましい発展が見られる領域である。一方我々は、日常発がん物質に囲まれて生活している。発がんの分子メカニズムを知ることは、３人に１人ががんで死亡する日本社会で、最も今日的な教養の１つである。本章では発がんのメカニズムの研究の現状と将来を述べ、それが日常の健康科学の中にどの様に取り入れられるかについて論ずることとする。	鬼頭昭三 山本雅	鬼頭昭三 山本雅

＝ 循環器科学（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：藤島正敏（九州大学名誉教授）〕
〔主任講師：近藤喜代太郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

健康科学を学ぶ上で心臓・血管の構造・機能と主な疾患を知ることはきわめて必要である。放送大学では限られた枠のなかで、臓器別の科目は脳と心臓のみである。前者は動物性機能、後者は植物性機能の代表である。心筋梗塞と脳血管障害を合わせると日本人の第一死因となる。この科目では15回の1/3を循環器素の正常な働き、2/3を臨床的問題に当てて、心臓・血管とその疾患について主要な点を学ぶ。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	循環器科学への序論	本科目では心臓・血管など、循環器の構造・機能、主な罹患機序について学ぶ。科目数の限られた放送大学では脳と並んで、特定の臓器に焦点を当てた数少ない科目である。第1回では、循環器に関する科学的認識に焦点に当てながら、後につづく14回の序説とする。	近藤喜代太郎（放送大学教授）	近藤喜代太郎（放送大学教授）
2	心臓・血管の働き	心臓から送り出された血液は動脈血管を通って各臓器に運ばれ、臓器からは静脈血管を通って再び心臓に返ってくる。正常な循環を保つために、心臓や動脈・静脈血管にどのような仕組みが備わっているかを概説する。	竹下彰（九州大学教授）	竹下彰（九州大学教授）
3	循環調節	循環系は生命維持に不可欠な内部環境の恒常性を維持する最も重要なシステムである。そのため循環系は心臓や血管などの物理的な流れを導くハードウエアーと、その流れを合目的に神経性・体液性あるいは構造的な対応を経て制御する調節系（ソフトウェア）で構成されている。本講義では調節系に的を絞り、どのような原理で循環が調節されているのか、分かりやすく解説したい。	砂川賢二（国立循環器センター研究所循環動態機能部長）	砂川賢二（国立循環器センター研究所循環動態機能部長）
4	血圧調節とその異常	生体には血圧を一定に調節維持する機構があり、これには多くの因子があるが大別すると神経性調節、体液性因子（ホルモンなど）、腎性調節の3つに分けることができる。これらの血圧調節因子の異常により血圧の異常（高血圧・低血圧・血圧変動など）が生じる。	後藤淳郎（東京大学助教授）	後藤淳郎（東京大学助教授）
5	高血圧症	高血圧を早期に発見し、適切な対策を講ずることにより高血圧性の心臓・血管病変を予防できる。本講義では高血圧に関する主な問題、とくに重症度に応じた生活習慣の是正、降圧薬の服用、合併症に対する治療などを学び、その科学的な根拠と有用性に関する成績を紹介する。	江藤胤尚（宮崎医科大学教授）	江藤胤尚（宮崎医科大学教授）
6	弁膜症と先天性疾患	日本胸部外科学会の学術調査によると1996年度のわが国の心臓大血管手術総数は約34700例であった。先天性心臓病の手術は8438例で、手術生存率は94.9%であり、心臓弁膜症の手術は7654例で、手術生存率は95.9%であった。本講義では最近の心臓外科治療の傾向、進歩について述べる。	安井久喬（九州大学教授）	安井久喬（九州大学教授）
7	不整脈	不整脈は心臓の刺激生成異常、刺激伝導異常あるいは両者の組み合わせによって生じ、不規則な脈拍、頻脈、徐脈などの形で現れる調律異常である。明らかな原因がある場合とない場合とがあり、症状と重症度とが必ずしも一致しなかったり、まったく病的意義のないものから突然死の原因となる極めて危険なものまであり、臨床的に多様な病態を示す。	矢野捷介（長崎大学教授）	矢野捷介（長崎大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	動脈硬化と臓器障害	「ヒトは血管とともに老いる」といわれているが、日本の死因統計によれば、死因のなかで虚血性心疾患、脳血管障害を合わせた群がもっとも多い。血管の障害は、その原因が多岐にわたっているが、今回は動脈硬化によって惹起される臓器障害を中心に組み立ててみたい。	北　徹（京都大学教授）	北　徹（京都大学教授）
9	冠循環とその異常	冠循環は酸素消費量のもっとも大きい臓器のひとつである心臓の栄養を司っており、生命の維持に極めて重要である。他の臓器循環と異なり心臓は拡張期に灌流される点が特徴であり、また血圧の生理的変動によっても一定の循環が得られる自己調節機構を備えた特殊な循環システムである。その破綻は虚血性心疾患の原因となる。	堀　正二（大阪大学教授）	堀　正二（大阪大学教授）
10	虚血性心疾患	虚血性心疾患は、心臓の栄養血管である冠動脈の動脈硬化により引き起こされる病気である。狭心症、心筋梗塞が代表的なもので、西欧化した食生活と高齢社会の到来により増加しつつある。診断、治療の進歩は著しいが、予防が可能な生活習慣病でもある。	山口　徹（東邦大学教授）	山口　徹（東邦大学教授）
11	心不全	最近、心不全の病態に対する考え方、診断・治療が大きく変貌した。従来、心不全は心血行動態の異常に基づくとされ、その治療もジギタリス、利尿薬に加え、血管拡張薬、強心薬が用いられた。しかしながら、一時的に心機能を改善しても必ずしも生命予後は改善しなかった。心不全では全身の神経・体液性因子が活性化し、その程度は心不全の重症度、予後とも相関する。現在、不全心筋保護のために活性化している神経・体液性因子を抑制するという新たなコンセンプトへの展開が図られている。	北畠　顕（北海道大学教授）	北畠　顕（北海道大学教授）
12	高血圧と腎障害	本態性高血圧では高血圧が持続すると腎の細小動脈に硬化が起こり、腎硬化症と呼ばれる。この血管病変がレニン分泌を亢進し、高血圧を更に進行させる。慢性糸球体腎炎でも正常血圧例に比し高血圧例では腎生存率が悪く、高血圧が腎機能障害のリスクファクターになっている。	阿部圭志（仙台社会保険病院院長）	阿部圭志（仙台社会保険病院院長）
13	脳循環とその異常	体重の2.2%にすきない脳組織へ、心臓が送り出す血液量（心拍出量）の15%が流れ込み（脳血流量）、全身消費量の20%の酸素を脳は消費する。脳血流は神経や化学因子によって調節され、血圧、動脈硬化、脳活動によって変動する。脳血流量が正常の半分以下になると脳は虚血に陥り、さらに低下すると梗塞を生じる。	藤島正敏（九州大学名誉教授）	藤島正敏（九州大学名誉教授）
14	脳血管障害	脳血管障害は出血性（脳出血、くも膜下出血）と虚血性（脳梗塞）に分けられ、脳梗塞はさらに3つの臨床カテゴリー（アテローム血栓性梗塞、ラクナ梗塞、心原性栓塞症）に分けられる。治療、再発予防に当たってはそれぞれの病型毎に対応しなければならない。本講義では脳梗塞に重点をおいてこれらを解説する。	山口武典（国立循環器センター病院長）	山口武典（国立循環器センター病院長）
15	循環器疾患のリスクと予防	循環器疾患はつねに死因の上位を占める。脳出血、脳梗塞、心筋梗塞など代表的な循環器疾患の危険因子（リスク）は年齢、高血圧、糖尿病、高脂血症などであるが、リスクは時代とともに変わる。疾病の予防にはリスクの管理と生活習慣、とくに食生活の是正が不可欠である。本講義では一般住民を対象にした久山町研究のデータを紹介し、循環器科学の結びとする。	藤島正敏（九州大学名誉教授）	藤島正敏（九州大学名誉教授）

＝ 薬の歴史・開発・使用（’００）＝（R）

〔主任講師：津谷　喜一郎　（東京医科歯科大学助教授）〕
〔主任講師：仙波　純一　（放送大学教授）〕

全体のねらい

薬により恩恵がもたらされる一方で、開発や副作用の問題などで、大きな社会的な問題も生じている。この科目では、対象を医療専門家以外におき、一般の学生が薬と社会に関わる問題を学ぶことを目的とする。薬の歴史、現在の薬の開発、薬の効果の評価、臨床試験の倫理、副作用情報の扱いなどは、どのようになされているか、また今後どのようにしていけばよいのかなどについて考えていく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序説	薬は「草煎り」との説があるように植物起源のものが主体であったが、現在は化学合成薬が主体である。1990年代には「開発資源を節減し、良い薬を迅速に社会に」を目指した国際協調会議（ＩＣＨ）のもとに、薬の開発の世界は大きく変わろうとしている。	佐久間　昭（東京医科歯科大学名誉教授）	佐久間　昭（東京医科歯科大学名誉教授）
2	天然物から薬品へ－薬の歴史（1）	洋の東西を問わず、薬は天然物の簡単な加工品で始まり、経験、選別、伝承の反復で薬のリストができた。東洋の薬は総合的、マクロ的認識、西洋の薬は分析的、ミクロ的認識のもとに育まれてきた。その差は19世紀後半の西洋での有機化学誕生で明白となる。	同上	同上
3	薬理学から臨床薬理学へ－薬の歴史（2）	有機化学は天然物を離れての、近代西洋医学の薬の創製を可能とし、最近では生物工学も薬の開発を助けている。1872年に薬効の論理性と客観性を与えるべく、シュミーデベルクが薬理学を提唱したが、ヒトでの臨床薬理学はかなり遅れて1940年代に始まる。	同上	同上
4	ランダム化と試験デザイン－薬の臨床試験（1）	「エビデンスにもとづく医療」（evidence-based medicine:EBM）の世界的な流れの中で、エビデンスを「つくる」臨床試験に対する関心が高まっている。本講では、臨床試験の基本的構成要因である研究デザインを中心に、比較試験、ランダム化、バイアス、解析の方法などについて、解説を行う。	津谷喜一郎（東京医科歯科大学助教授）	津谷喜一郎（東京医科歯科大学助教授）
5	プラセボと倫理－薬の臨床試験（2）	臨床試験は目の前の患者を実験対象に使い、その結果を将来の多くの患者に用いるという、通常の医師患者関係とは異なる性格をもつ。本講では、まず、エンドポイント、プラセボなどについて述べ、ついで臨床試験の倫理の歴史について解説する。	同上	同上
6	非臨床試験－薬の開発（1）	新薬のヒトに対する投与に先立って、毒性、薬効、体内動態などについて特徴づけをすることを前臨床試験という。個体の毒性、生殖発生毒性、依存性、抗原性、変異原性、がん原性について試験する。臨床試験開始後に行うものも含めて非臨床試験ともいう。	永田　傳（スミス・クライン・ビーチャム製薬・研究開発本部長）	永田　傳（スミス・クライン・ビーチャム製薬・研究開発本部長）
7	治験－薬の開発（2）	新薬の厚生省承認のために必要なヒトでのデータを作成するために行われる臨床試験は、治験といわれる。新薬の効果と安全性について評価する。厚生省令「医薬品の臨床試験の実施の基準」、いわゆるＧＣＰに沿って行われる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	国際化時代の臨床試験－薬の開発（3）	ある薬が、ある病気に有効・安全であるとの検証には、適切な対照薬とその薬との比較が原則で、ランダム化二重遮蔽試験が原則的に必要となる。すでに海外成績があれば、遺伝的、環境的要因を勘案し、妥当ならば日本に利用すべしとの方針が出されている。	佐久間　昭	佐久間　昭
9	市販後調査－薬の開発（4）	厚生省の承認後も、臨床試験に引き続き安全性の調査が行われる。承認前に見られなかった有害事象（副作用）が見られるか、承認前見られたものの発生頻度に変化がないかを調査する。得られたデータにより薬の添付文書の内容を改訂したり、使用を制限することがある。	永田　傳	永田　傳
10	薬の適正使用－P drug－	医薬品は適応に従って適切に選択し、正しい用量・用法で使用することによって、はじめてその真価を発揮する。医師は絶えず学習し、自分が使いこなせる薬（Personal Drug）の幅を広げながら、個々の患者に最適の薬を選ぶ必要がある。	別府宏圀（都立府中養育センター副院長）	別府宏圀（都立府中養育センター副院長）
11	医薬品の情報	医薬品に関する情報環境は大きく変わりつつある。コンピュータ技術の進歩により、医師は豊富な医薬品情報を診療に生かせるようになったが、同時に、患者に対する情報提供（説明）の義務も増大した。	同　上	同　上
12	医薬品のプロモーション	医薬品はヒトの健康を守るための手段であると同時に、商品でもある。メーカーが提供する医薬品情報はときに宣伝と区別がつきにくいことがあるが、命に関わる商品であるだけに、これを取り扱う者には高い倫理性が求められる。	同　上	同　上
13	薬と国際保健	世界には豊める国もあれば貧しい国もある。また地域によって問題となる病気は異なっている。さらに人々の健康観、疾病観も多様である。こうした、現実の世界の保健状況の中で、医薬品はどういう位置を占め、どういう役割を果たしているのか、また果たすべきなのかを、ＷＨＯの活動を含めて解説する。	津谷喜一郎	津谷喜一郎
14	薬の乱用とその対策	医薬品は本来病気を治すという目的で使われる。しかし、睡眠薬・鎮痛薬・抗不安薬などは多幸感や意識変容状態を求めて乱用されることがある。乱用は、薬と人をとりまく文化や社会という面からとらえられなければならない。ここでは、薬物がなぜ、またどのように乱用されるか社会的な側面から述べる。	仙波純一（放送大学教授）	仙波純一（放送大学教授）
15	まとめ	最後の章として、今まで述べられなかった薬物をめぐる種々の問題を補足し、その対策を述べる。	仙波純一 津谷喜一郎	仙波純一 津谷喜一郎

＝ 子ども家庭福祉論（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：髙橋　重宏（日本社会事業大学教授）〕

全体のねらい

「ウェルフェア」から「ウェルビーイング」へという新たな理念、「児童福祉」から「子ども家庭福祉」へという新たなフレームワークから児童福祉を教授するためのテキストとして編集した。テレビの特徴を生かし、目で見て学ぶ子ども家庭福祉論としたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ウエルフェアからウエルビーイングへ	「子ども家庭福祉」は、国連子どもの権利条約を基調に既存の児童福祉論を再構築して展開する。例えば「子どもの権利擁護サービス」という用語は、伝統的な児童福祉のテキストには登場しない。具体的には、①学習のねらい、②ウエルビーイングとは、③改正児童福祉法、④伝統的な「児童福祉」と新しい「子ども家庭福祉」、⑤子ども家庭サービスとは、⑥家族と家庭、家庭養育機能、⑦各回の紹介と担当講師の紹介などについて学ぶ。	髙橋重宏（日本社会事業大学教授） 山本真美（日本子ども家庭総合研究所研究員）	髙橋重宏（日本社会事業大学教授） 山本真美（日本子ども家庭総合研究所研究員）
2	子どもの権利に関する条約	国連の子どもの権利に関する条約について解説し、新たな理念、子どもの権利擁護サービスのあり方について学ぶ。・ウェルフェアからウェルビーイングへ ・こどもの権利擁護（子どもの権利ノートなど）	髙橋重宏	髙橋重宏
3	児童福祉のあゆみ	(1)明治期以降児童福祉法成立までの法律および実践の紹介 (2)児童福祉法による児童福祉の実施体制の紹介 (3)戦後の児童福祉の展開 (4)児童福祉から児童家庭福祉への転換	山縣文治（大阪市立大学助教授）	山縣文治（大阪市立大学助教授）
4	子ども家庭福祉の新潮流	平成２（1990）年６月のいわゆる「1.57ショック」以降、急速に加速しつつある児童福祉改革の動向について、政府、関係団体等による各種報告書をもとに整理し、児童福祉改革の展望について考察を進める。	柏女霊峰（淑徳大学教授）	柏女霊峰（淑徳大学教授）
5	児童福祉実施体制	児童福祉に関する基本法及び関連法の概要を押さえるとともに、児童福祉行政の実施主体、児童相談所等の主たる実施機関、児童福祉施設、児童福祉の費用、施策体系等について解説する。さらに、児童相談所の活動に焦点をあて、児童福祉実施体制の課題及将来展望について考察する。 ＜構成＞　行政機関、審議機関実施機関（児童相談所、福祉事務所、保健所、児童委員等） 措置制度（児童福祉施設入所のしくみ） 児童福祉施策体系、費用	同上	同上
6	児童福祉施設	児童福祉法に基づく児童福祉施設の現状と課題について検討する。 ①児童福祉施設の種類と内容 ②児童福祉施設の展開（戦後の数値） ③児童福祉施設の運営 ④児童福祉施設の実践 ⑤児童福祉施設の今後	山縣文治 山本真美	山縣文治 山本真美

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	保育制度とひとり親家庭へのサービス	・わが国の児童福祉施策の中心となってきた措置制度による認可保育所による支援サービスの経緯と現状、今後の方向性について検討する。 ・母子を中心としてきたひとり親（母子・父子）家庭への支援サービスの経緯と現状、今後の方向性について検討する。 (1)制度の概要とその変遷 (2)現在の動きと今後の方向性	山縣文治 山本真実	山縣文治 山本真実
8	母子保健と障害児童への支援	昨今、地域サービスにおける保健と福祉の統合への動きが高まりつつある。健常児および障害児に対する保健と福祉の連携の現状を具体的な事例を用いて示す中から、解決しなければならない課題を明らかにし、今後の展開方向を検討し学習する。	安梅勅江（国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所研究員）	安梅勅江（国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所研究員）
9	保護を必要とする子どもの福祉	保護を必要とする子ども、子どもへの不適切な関わり（虐待・ネグレクト）について概説し、子どもの権利擁護サービス、子どもと親へのトリートメントの実態を紹介しながら、虐待・ネグレクトを予防するための啓発・教育のあり方を探る。	髙橋重宏 柏女霊	髙橋重宏 柏女霊
10	子ども家庭福祉とソーシャルワーク実践	子ども家庭サービスを支えるヒューマン・パワーを紹介し、ソーシャルワーカーに焦点を当てつつその専門的な援助技法について検討する。	髙橋重宏	髙橋重宏
11	多様な子ども家庭サービス	従来は「保育に欠ける子」という考え方に代表されるように、健全育成に支障がある状態にある場合や具体的なケアを必要とする子どもや家庭に対してのみ支援サービスが提供されてきたが、社会の変化や生活の多様化に伴って生じた新しいニーズへの対応も求められている。多様なサービス発生の背景とその実態について紹介する。 ①多様な子ども家庭サービス出現の背景 ②多様な子ども家庭サービスの種類 ③多様な子ども家庭サービスの実践 ④多様な子ども家庭サービスの今後	山縣文治 山本真実	山縣文治 山本真実
12	海外の子ども家庭サービス： デンマーク　①	ＥＵにおける子どもと家庭施策のモデルとなっているデンマークの施策体系、サービス供給の実態などを、子どもと家庭に対する支援策の基盤となる社会的背景・動向、考え方や成り立ちなどを踏まえながら紹介する。	髙橋重宏 山本真実	髙橋重宏 山本真実
13	海外の子ども家庭サービス： デンマーク　②	第２回目は個別サービスの状況を取り上げ、就学前や学齢期の子どもと家庭に対するサービスの提供状況、今後の政策的見通しなどを把握する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	海外の子ども家庭サービス：カナダ　①	オンタリオ州における子どもの権利擁護サービス・システム（子ども家庭アドボカシー等）と子ども保護援助協会の活動、イン・ケアにある子どもの生活（グループホーム）、ペープ資源センターの活動等を学習する。	髙橋重広	髙橋重広
15	海外の子ども家庭サービス：カナダ　②	子どもへの不適切な関わり（虐待とネグレクト）の実態の解説と、子どもと親へのトリートメント機関とその内容を学ぶ。	同上	同上

＝障害者福祉論＝（R）

〔主任講師：三ッ木　任一（放送大学教授）〕

全体のねらい

1981年の国際障害者年を契機として、わが国の障害者をめぐる社会的状況は大きく変化し、障害者施設もかなりの進展をみた。また、1993年の障害者基本法の制定は、障害者施策のあり方に更なる変革を促している。

障害があることが社会的不利にならない社会を実現するために、いま何をなすべきかを問い直してみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	障害者福祉の動向	国連による「障害者の福祉宣言」の採択、それに引き続く国際障害者年、国連・障害者の10年の実施は、わが国の障害者福祉を大きく進展させた。「障害者基本法」の制定は更なる変革を促している。この間の動向を概観する。	三ッ木任一（放送大学教授）	三ッ木任一（放送大学教授）
2	障害者福祉の理念	人権の尊重、リハビリテーション、ノーマライゼーション、自立生活、自立と社会参加の促進など、障害者福祉に関わるさまざまな理念を概観しながら、これからの障害者福祉がよりどころとする理念について検討する。	同上	同上
3	障害者福祉の対象	障害者福祉の対象は、身体的または精神的な機能障害を持ち、そのために日常生活や社会生活で困難を抱え、その困難を解決、軽減するために社会福祉の援助を必要とする人々のことである。この方向への近年の発展を整理しつつ、今後の課題を検討する。	佐藤久夫（日本社会事業大学教授）	佐藤久夫（日本社会事業大学教授）
4	障害者福祉の制度	わが国の障害者福祉の法・制度の体系は、障害種別毎に定められており、サービス供給のシステムも異なっている。主要な法・制度を概観しながら、福祉サービスの格差を是正する方策について検討する。	三ッ木任一	三ッ木任一
5	障害児の療育と教育	医学の進歩により障害者像が大きく変わろうとしている中で、早期療育や学校教育はどのような進展を遂げているのであろうか。その現状や課題を概観しながら、卒業後の社会参加を踏まえた教育のあり方を検討する。	石渡和実（東洋英和女学院大学教授）	石渡和実（東洋英和女学院大学教授）
6	障害者の在宅福祉	障害者福祉サービス体系の中で、地域での生活を支えるさまざまな福祉サービスの成立過程と現状を紹介し、今日特に注目されている地域福祉と在宅福祉との関係を整理しながら、今後の課題を検討する。	中野敏子（明治学院大学教授）	中野敏子（明治学院大学教授）
7	障害者の施設福祉	障害者福祉サービス体系の中で、従来最も中心的に展開されてきた「施設」という形態を利用した福祉サービスの成立過程と現状を紹介し、施設改革の動向を踏まえながら、今後の課題を検討する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	障害者の雇用	「障害者の雇用の促進等に関する法律」への改正後、雇用状況がどのように変化してきたかを障害種別に概観する。また、重度障害者や高齢障害者への新しいサービスの動向にも触れ、雇用に関する課題と解決策を検討する。	石渡和実	石渡和実
9	障害者の福祉的就労	授産施設や作業所をめぐる最近の動向、精神障害者へのサービス、雇用への移行を目指した援助などについて概観する。また、より重度な障害者の日中活動の保障など、「職業観」の変化を踏まえた新しい流れを検討する。	同上	同上
10	障害者の地域活動	障害者基本法では、法の目的として障害者の自立と「あらゆる活動への参加」の促進を掲げている。地域で市民としての生活を繰り広げる上で不可欠なさまざまな社会参加の現状と課題を検討する。	中野敏子	中野敏子
11	障害者の社会行動	障害者、家族、関係者による組織的な取り組みは、障害者福祉を推進させる原動力となった。親の会活動、自立生活運動などの経緯と現状を概観しながら、当事者の果たすべき役割について検討する。	三ッ木任一	三ッ木任一
12	障害者の生活環境	障害者福祉の基盤は、それぞれの住まい、居住空間であり、近隣、地域であるといえる。生活しやすい、バリアフリーの住まいづくり、まちづくりの経緯と現状を概観しながら、生活環境整備のあり方を検討する。	同上	同上
13	諸外国の障害者福祉	1981年の国際障害者年以降、障害者問題を世界の共通の課題として取り組もうという気運が高まり、1993年のアジア太平洋障害者の10年の開始とともに国際交流がいっそう盛んになりつつある。欧米、アジア諸国などの障害者の生活と障害者福祉の状況を紹介する。	佐藤久夫	佐藤久夫
14	障害者福祉のマンパワー	障害者福祉には、社会福祉職員、介護福祉職員、理学療法士、作業療法士など多くの種類の専門職員や、障害を持つ当事者、家族そしてボランティアなどが関わっている。これらのマンパワーの状況と援助方法、チームワークなどについて検討する。	同上	同上
15	障害者福祉の展望	めまぐるしく転変する社会的状況において、障害者福祉は何をめざして進めばよいのか。これまでの学習を総括して、主要な課題とその解決への指針を検討し、21世紀に向けての障害者福祉のあり方を展望する。	三ッ木任一	三ッ木任一

＝ 高齢者福祉（’９９）＝（R）

〔主 任 講 師 ： 直 井 道 子（ 東京学芸大学教授 ）〕
〔主 任 講 師 ： 山 田 知 子（埼玉県立大学助教授）〕

全体のねらい

高齢社会の到来は、社会の在り方のみならず、ひとりひとりの生活・人生の在り方をも根本から問い直すことを迫っている。本講義では、今日の我が国の高齢者の生活実態と高齢者の生活を支える福祉等の施策の実状をふまえながら、利用者主体の高齢者福祉のあり方を追求する。すべての人の高齢期を生き生きとしたものにするために、どのような社会的努力が必要であろうか。21世紀の新しい高齢者福祉を展望する。

回	テ ー マ	内 容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	高齢社会の進展	第１部　現代社会と高齢者 日本社会の高齢化はいつごろから、どのように進んできたのだろうか。今後、どのように少子化・高齢化が進行するのだろうか。それが日本社会にどのような影響をもたらすのかを考察する。	直井道子（東京学芸大学教授）	直井道子（東京学芸大学教授）
2	歴史の中の老い	老い（高齢化）は、生物学的な現象だと思いがちであるが、老いを社会がどう意味づけるかによって、高齢者の役割や生き方は異なっていることを知る。特に、近代化によって老いの意味づけがどう変化してきたかを考察する。	同 上	同 上
3	高齢期の心と身体	歳をとるということは、心や身体がどのように変化していくことなのだろうか。日常生活における注意点などを考えると同時に、福祉サービスを考える上で必要な日常生活自立度などの概念について学習する。	杉澤秀博（東京都老人総合研究所研究員）	杉澤秀博（東京都老人総合研究所研究員）
4	高齢者と家族	従来、多くの高齢者は、子どもと同居して老後の問題を解決してきたが、それがどうして困難になってきたのか。夫婦関係や別居子との関係を含めて、社会の変化と関連づけて検討する。	直井道子	直井道子
5	高齢期の社会・経済生活	収入源と生きがいという二つの視点から、高齢期の就労の現状を明らかにする。また、引退後の生計のたて方や消費生活の現状、生きがいを求めての学習、余暇活動にも目をむけつつ、心豊かな老後の実現にむけての方途を探る。	同 上	同 上
6	高齢者と人権	第２部　高齢期の生活支援策 高齢者の人権はどのような理念にもとづいて、守られようとしているのだろうか。高齢者をめぐる法制度について憲法、世界人権宣言、国連行動計画や老人福祉法等を概観しながら考える。	河野正輝（九州大学教授）	河野正輝（九州大学教授）
7	高齢者と医療、介護保障	高齢期の健康を守る制度としての医療保障、介護保障の現状を示し、そこでの問題点と課題について述べる。	同 上	同 上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	高齢者と雇用・年金・生活保護	高齢期の経済生活の基盤である雇用の現状及び年金制度について述べる。また、高齢者の最低生活を守る生活保護の現状と課題についても考える。	河野正輝	河野正輝
9	高齢者と住環境・まちづくり	豊かな高齢期の生活基盤である住宅に焦点をあてる。高齢者はどのような住宅に住み、どのような課題をかかえているのか、安心して住み続ける居住条件とはなにか、住宅改造やまちづくりの視点を含めて考える。	児玉桂子（日本社会事業大学教授）	児玉桂子（日本社会事業大学教授）
10	高齢者保健福祉(1)施策の展開	老人福祉法から介護保険法にいたる戦後の高齢者をめぐる福祉施策の流れを追いながら、どのような社会経済的状況のなかで、わが国の高齢者福祉等の施策は展開されてきたのかを概観し、今日的な政策課題について検討を加える。	山田知子（埼玉県立大学助教授）	山田知子（埼玉県立大学助教授）
11	高齢者保健福祉(2)高齢者生活支援サービスの体系	高齢者の生活を支える保健福祉等のサービスについて在宅・施設福祉等サービスの現状を福祉現場の実態分析を含めて概観し、サービスの種類、量と質について考察する。	同上	同上
12	高齢者保健福祉(3)保健・医療等と福祉の連携	在宅、施設を問わず、豊かな高齢期の生活を支えるための福祉や保健等のサービス体制をどう構築するか、保健と福祉・医療の連携、相談体制のあり方等について考える。介護保険法に基づく要介護認定、介護計画立案からサービス提供という流れを追いながら、高齢者の生活自立を支えるサービス提供のあり方を考える。	同上	同上
13	消費者としての高齢者の保護・高齢者の当事者運動	高齢者福祉の新しい展開のために高齢期は身体的低下のみならず、精神活動の低下にみまわれることもある。消費者としての高齢者をどう守るかについて検討する。また、高齢者自身がみずからの権利を守る活動・運動を展開する動きもある。高齢者自身の活動・運動を取り上げながら、当事者運動としての可能性を考える。	同上	同上
14	福祉人材の確保と方策	ソーシャルワーカー、ケアワーカーといった福祉の人材の確保、養成について考える。高齢社会を支える福祉従業者はどのような環境のもとで働いているのだろうか。その多くは女性である。女性労働としての福祉労働の問題点を賃金、労働時間、雇用形態といった側面より考え、これからの人材の確保・養成のあり方をさぐる。また、専門福祉労働の周辺を支えるものとして、住民参加型サービスの担い手やボランティアについてもふれ、より質の高い人材を確保するために何が必要であるか考える。	同上	同上
15	21世紀の高齢者福祉の展望と課題	超高齢社会に立ち向かい、すべての人の生き生きとした高齢期の生活を創り出していくためには、生産第一主義、効率主義一辺倒の社会システムを生活・人間中心のシステムへ転換していく必要があるのではないだろうか。そのための変革の視点を家庭生活、教育、労働といった側面より考える。今日の高齢者福祉が抱える課題と解決のための方策を探る。	直井道子 山田知子	直井道子 山田知子

＝ 地域福祉（’９９）＝（R）

〔 主 任 講 師 ： 大 橋　謙 策（日本社会事業大学教授）〕

全体のねらい

地域福祉は社会福祉における新しいサービス提供システムであり、実践方法である。地域福祉は社会福祉における地方分権化を前提として、居宅における自立生活を支援する在宅福祉サービスを軸に、地域住民の参加を得て福祉コミュニティを形成する実践である。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	社会福祉の変容・発展と地域福祉の実体化	・社会福祉の歩みと地域福祉 ・高齢化社会の進展と家庭介護の社会化 ・障害者の自立運動とノーマライゼーション ・子どもの発達保障と子育て支援のあり方	大橋謙策（日本社会事業大学教授）	大橋謙策（日本社会事業大学教授）
2	1990年社会福祉改革と市町村地域福祉の時代	・社会福祉三法体制から六法体制へ ・1990年社会福祉関係八法改正と地域福祉の時代	同　上	同　上
3	地域自立生活の保障と地域福祉の考え方	・社会福祉の目的と自立生活のとらえ方 ・地域福祉の考え方と展開のあり方	同　上	同　上
4	在宅福祉サービスの考え方と構成要件	・在宅福祉サービスの考え方と入所型社会福祉施設 ・在宅福祉サービスの構成要件	同　上	同　上
5	在宅福祉サービスの供給のあり方と供給組織	・在宅福祉サービスの供給のあり方 ・在宅福祉サービス供給組織	同　上	同　上
6	在宅福祉サービスとインフォーマルケア	・在宅福祉サービスの発展 ・住民の社会福祉意識 ・新しいライフスタイルの構築と「ゆとり型社会」の創造 ・高齢者の生きがいと社会参加	同　上	同　上
7	地域福祉の主体形成と福祉教育	・福祉教育が必要とされる背景 ・福祉教育の発展と地域福祉の主体形式 ・福祉教育の理念	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ボランティア活動の理念と活動の構造	・ボランティア活動の歴史的発展 ・ボランティア活動の構造	大橋謙策	大橋謙策
9	地域福祉推進体制 (1) 社会福祉協議会の理念と課題	・社会福祉協議会の歴史的変遷と区市町村社協の位置 ・区市町村社協の現状と今後の課題	同上	同上
10	地域福祉推進体制 (2) 民生委員・児童委員制度	・社会福祉にかかわる「制度ボランティア」 ・民生委員制度の歴史と法的根拠 ・民生委員の現状	同上	同上
11	地域福祉推進体制 (3) 地域福祉推進の財源と共同募金活動	・21世紀高齢社会における国民負担のあり方と地域福祉の推進 ・共同募金の歴史と今日的課題 ・国民負担のあり方と地域福祉推進における民間財源の確保のあり方	同上	同上
12	社会福祉施設と地域福祉	・「施設の社会化」論の変遷 ・施設の社会化と地域化 ・社会福祉施設の地域配置と住民参加	同上	同上
13	地域福祉実践の方法とコミュニティソーシャルワーカーの資質	・社会福祉のパラダイム転換とコミュニティソーシャルワーカーの位置 ・コミュニティソーシャルワークの展開過程とコミュニティソーシャルワーカーの機能	同上	同上
14	地域福祉計画のあり方と策定方法	・地域福祉計画論の発展段階と今日的位置 ・老人保健福祉計画と社会福祉行政の計画化 ・地域福祉計画づくりの視点と枠組み	同上	同上
15	諸外国の地域福祉の歩み	・近代社会福祉制度の原点としてのイギリスにおける地域福祉の変遷 ・アメリカの地域福祉の発展	同上	同上

＝ 現代の貧困と公的扶助（’９８）＝（R）

〔主任講師：杉村　宏（法政大学教授）〕

全体のねらい

社会保障制度の根底を支える公的扶助について、その成り立ちと現代社会における役割を考える。わが国の公的扶助は生存権を保障する生活保護制度であるが、この制度の役割や現状を、国民の生活問題としての貧困と関連させて考えていきたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「現代の貧困と公的扶助」の課題 －この講座のねらいと考え方－	この講座のテーマを「現代の貧困と公的扶助」とした理由について、貧困問題と公的扶助の現状と関わらせて説明し、あわせてこの課題を考察するための視角を提示する。	杉村　宏（法政大学教授）	杉村　宏（法政大学教授）
2	公的扶助とは何か －社会保障における公的扶助の位置と性格－	公的扶助は社会保障制度の重要な構成部分であるが、「社会保障の父」といわれたビヴァリッジの計画における位置付けを手がかりに、社会保険との違いと関連、および所得保障にとどまらない公的扶助「実践」の課題について検討する。	同　上	同　上
3	近代公的扶助の形成 －貧困・貧困観の変化と救済制度－	公的扶助制度の源流である救貧法の成り立ちと機能をイギリス救貧法の歴史を例に検討する。また19世紀末の労働者生活における貧困の原因究明を通じて、救貧制度が改良されていった経過を概観する。	同　上	同　上
4	戦争と社会保障 －人間観の転換と生存権の具体化－	私たちは20世紀の前半に２度の大戦を経験したが、その反省と教訓の上に「人間らしく生きる」権利としての生存権を獲得したと言える。失業と貧困を克服するための「戦争国家」と「福祉国家」の争点を考える。	同　上	同　上
5	戦前日本の救貧制度 －わが国の救貧制度の歴史的性格－	明治維新以後、太平洋戦争の終結までのわが国の救貧制度のあゆみとその特徴を、「恤救規則」と「救護法」の性格に則して考察し、その問題点をさぐる。	同　上	同　上
6	生活保護制度の目的と基本原理	わが国の生活保護制度は、生存権を保障することをその目的にしており、そのための基本原理を規定している。原理の背景と今日の社会状況における意義と問題点を考える。	同　上	同　上
7	生活保護制度のしくみと行政の役割 －柔軟な構造を生かす行政の責任－	生活保護法は、その実施に当たっての原則も規定しているが、それは極めて柔軟な構造を保障するものとなっている。こうした制度を生かすための行政の役割と責任について検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	国民生活と生活保護基準	生活困窮を測るものさしとしての生活保護基準の変遷を、国民生活の変化と関連させて考察する。また生活保護基準による生活の問題点と賃金水準や社会保障給付水準との関連性についてもあわせて検討する。	杉村　宏	杉村　宏
9	生活保護行政の動向と被保護層－保護人員・世帯の推移と問題点－	生活保護制度は国民生活に密接に関連しているから、その動向は社会・経済の変化に敏感である．生活保護行政の変遷と生活保護を受けている人々の動向を概観し、生活保護行政の現状を考える。	同上	同上
10	要保護層の生活実態と生活保護 (1)母子世帯の現状と生活保護	生活保護を受給しているか否かを問わず、保護を要する状態にある人々＝要保護層の生活と生活保護の現状を考える。とくに近年「女性の貧困」が社会問題化しているが、母子世帯に焦点をあててその現状と生活保護における問題を検討する。	同上	同上
11	要保護層の生活実態と生活保護 (2)ホームレスの生活実態と生活保護行政	最近大都市圏で「ホームレス」が社会問題化しているが、こうした人々に代表される不定住的貧困層の実態と生活保護の関係を、わが国の社会福祉の歩みとかかわらせて考察する。	岩田正美（日本女子大学教授）	岩田正美（日本女子大学教授）
12	生活保護の施設福祉	生活保護は、在宅における所得保障の側面とともに、施設における社会福祉サービスの提供も行なっている。社会福祉施設の原点となっている保護施設の現状と課題を考える。	同上	同上
13	ケースワーカーのしごと (1)生活保護における社会調査	生活保護に携わるケースワーカーの主なしごとは、生活に困窮する人々の生活の場におもむき、保護の要否や程度、生活の建　て直しにむけて何が必要かを調査し、援助することにある。調査の意義や方法、留意点ついて考える。 （生活保護行政の一線で活躍しているケースワーカーにインタビューをする）	杉村　宏	杉村　宏
14	ケースワーカーのしごと (2)ケースワーカーの専門性	ケースワーカーの実践に必要とされる専門性について、現職のケースワーカーとともに考え、現状での問題点と今後のあるべき姿をさぐる。	同上	同上
15	生活保護の今後の課題	生活保護制度が、現代社会における公的扶助にふさわしいものとなるためには、今後解決していかなければならない課題がある。公平で公正な生活保護の実施のために改善すべき課題を検討する。	同上	同上

＝ 年金・医療保険論（’００）＝（Ｒ）

〔主任講師：木村　陽子（奈良女子大学教授）〕

全体のねらい

年金と医療保険制度の概要とわたし達の生活とどうかかわるのかを理解する。次に、少子・高齢社会において、年金や医療保険の構造改革が必要とされる背景として、経済社会の変化、家族の変容も含めた年金・医療保険の抱える問題点を指摘する。最後に、先進諸国の共通の経験をもとにして構造改革の方向を考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	年金編－ 公的年金制度と高齢者家計	高齢者家計における年金の役割を就労収入やしおくり、貯蓄との関係を述べる。時系列でみると、年金収入が高齢者家計において大きな割合を占めるようになり、一方で就労収入が低下した。	木村陽子（奈良女子大学教授）	木村陽子（奈良女子大学教授）
2	年金編－ 年金の構造改革はなぜ必要か	世紀の転換期にあたって、先進諸国の年金や医療制度の構造改革、およびその背景として、財政問題、世代間の不公平、労働や貯蓄にたいする無視できない影響等を説明し、次になぜ年金が強制加入かを述べる。	同上	同上
3	年金編－ 日本の年金制度の概要	日本の年金制度の概要－社会保険方式で運営されること、国民年金の被保険者の種類、年金の種類、給付構造や拠出構想について述べる。	同上	同上
4	年金編－ 年金の財政問題と年金積立金の運用	年金の財政は、高齢化率が約25％となる2015年、約33％となる2050年を前に1999年の制度のままでは、日本の年金財政は保険料率が34％となってしまうことを示す。次に、年金積立金の自主運用問題について説明する。	同上	同上
5	年金編－ 世代間の公平、世代内の公平	年金制度における公平の問題について述べる。後続世代ほど負担に対する給付の割合は小さくなり、マイナスの事態も生じること、また世代内の公平については、所得の低い人が不利になる場合もあることを述べる。	同上	同上
6	年金編－ 年金と老後の就労、貯蓄	年金制度が老後の就労にいかなる影響を及ぼすのか、また年金が貯蓄に及ぼす影響について説明する。	同上	同上
7	年金編－ 転換期にある企業年金	企業年金が老後所得保障の柱となるために必要な受給権の保護－受給権の付与、ポータビリティ、支払い保証制度、税制について述べ、次に確定給付年金と確定拠出年金について説明し改革の方向を述べる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	年金編－ 女性と年金	先進諸国では1970年代より女性の年金権の確立が問題となってきたこと、次にわが国の現行制度の問題点を指摘し、改革の方向を述べる。	木村陽子	木村陽子
9	年金編－ これからの年金制度	先進諸国の年金改革も紹介しながら、わが国の年金制度がどうあるべきなのか、企業年金および税制との関係も含めて述べる。	同上	同上
10	医療編－ 各国の医療制度	先進諸国において、国民所得にしめる医療費の割合は無視できない高さであること、医療制度の供給体制や医療保険の態様が国によって違うこと、そしてなぜ公的医療保険が必要かを述べる。	同上	同上
11	医療編－ わが国の医療保険	わが国の医療保険が職域保険と地域保険に分れていること、健康保険と国民健康保険の給付内容、保険料、財政調整などについて説明する。次いで、退職者医療制度、老人保健制度について説明する。	同上	同上
12	医療編－ 医療保険の沿革と医療費の3要素	これまでの大きな制度改革を中心としてわが国の医療保健の沿革を述べ、次に医療費の3要素である受給率、1件当たり日数、1日当たり医療費を説明し、医療需要はどのように決まるのかについて述べる。	同上	同上
13	医療編－ 高齢者医療	1997年では70歳以上の高齢者1人当たり医療費は、70歳未満の1人当たり医療費の5倍強である。高齢者医療が増大した理由と対策を述べ、次に医療と代替することが大きい介護保険について述べる。	同上	同上
14	医療編－ 医療と介護	さまざまな医療保険からの財政調整を主とした現行の老人保健制度がこのままではなりゆかないことを述べる。先進諸国の例も述べる。	同上	同上
15	医療編－ 望ましい医療保険制度	公的保険を維持しつつ、21世紀の望ましい医療制度とは何か、供給体制や診療報酬、薬価、一部負担金、監査体制等に今後のあり方を述べる。	同上	同上

＝世界の社会福祉＝（TV）

〔主任講師：松村 祥子（放送大学教授）〕

全体のねらい

世界中の多くの国で児童、障害者、高齢者、低所得者等に対する社会福祉活動が公私の領域で実施されている。産業化によって拡大した生活問題の緩和の為に社会福祉的方法を使うことは、20世紀の社会的合意と言える程広く多様に普及してきた。本講義では各国の問題状況の把握と福祉方法・課題の国際比較をし、我々が直面している福祉改革の大波を乗り切る方向を探りたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	世界の社会福祉の現状	広い意味での社会福祉制度を何らかの形で有する国は約150ヵ国に達している。先進工業諸国では、介護や保育等に代表される社会福祉サービスがすべての人々の広範な生活領域で不可欠なものになっている。開発途上国では、飢餓や疾病等に対する社会的援助が強く求められている。相互依存の高まる国際社会の中で、地域的固有性と国際連関性を併せ持つ社会福祉の現状を世界地図の上に示したい。	松村祥子（放送大学教授）	松村祥子（放送大学教授）
2	世界の社会福祉の歩み	長い歴史の中で積み重ねられてきた社会的生活支援の為の実践活動は、一般的には選別的で治安維持的なものから普遍的で権利擁護的なものに変化してきている。19世紀末から20世紀初頭の欧米諸国から広がった「近代的社会福祉」の理念、対象、方法等が何故、どんな経路で、どのような変容を伴いながら世界中に広がったのか。社会福祉の世界史年表から検討してみたい。	同上	同上
3	アメリカの社会福祉	自立援助型といわれるアメリカの社会福祉の特色を、歴史と社会の全体像の中から描き出す。経済規模、人口数、文化的多様性等で世界有数のアメリカでは、人種問題、エイズ患者の発生、薬物中毒の蔓延、暴力の過激化等の社会福祉課題が増大している。社会福祉政策のみならず実践技術レベルでも新しい方策が要請されている状況を明らかにする。	平山尚（東京福祉大学教授） 武田尤（テネシー大学研究員）	平山尚（東京福祉大学教授）
4	スウェーデンの社会福祉	社会福祉の世界的最前衛としてのこの国では、どのようなプロセスで高い質量の社会福祉活動が生み出されてきたのか。スウェーデン社会の構造とそこに暮らす人々の生活文化等も含めて検討したい。高福祉高負担型の福祉施策は、福祉サービスに対する社会的責任と個人の権利意識に支えられ、社会福祉の内実を豊かにしてきたが、現在では、経済や政治状況の変化とどう調和させていくかの課題解決も不可避となっている。	外山義（京都大学教授）	外山義（京都大学教授）
5	フランスの社会福祉	フランスの社会福祉活動の実働はアソシアシオンといわれる非営利組織によって担われている。年金、医療、家族手当の運営機関である社会保障金庫や行政組織とともにユニークな体系の中で多元的で柔軟性のある社会福祉が実現されている。「社会的連帯」をキーワードとするフランスの状況を、20世紀初頭からの高齢化の進展や第二次大戦後のヨーロッパの国際的地位の変化をも視野にいれながら示してみたい。	松村祥子	松村祥子
6	タイの社会福祉	全人口の27%が貧困状態（1988年タイ政府統計）にあり、低所得者への援助活動はタイの社会福祉の中心課題である。特に急激な経済開発の影響を受けた農村地帯では、経済的貧窮だけでなく棄児や虐待等の児童問題、また売春や海外出稼ぎ等の女性問題そして家族的にも社会的にも安心できる生活支援を受けられない高齢者、障害者問題が拡大している。伝統的な生活様式の崩壊が進み、それに代わる新しい生活保障が未確立な中で模索される社会福祉の現状と課題を考究する。	高嶺豊（国連障害者問題担当官）	高嶺豊（国連障害者問題担当官）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	日本の社会福祉	国民所得水準の上昇の陰で、人々の生活不安は高く、特にこれからの高齢社会への危惧は老後生活への不安を80％の人がもっている（1989年総務庁調査）ことからも分かる。第二次大戦後50年間に急速に発展した日本の社会福祉は、国際的にみるとどんな水準にあり、どのような特徴を持っているのだろうか。他の先進工業国と比べると、貧弱な児童手当や家族依存型の在宅福祉、そして厳しい資産調査を伴う公的扶助等の「後進性」と全国一斉に取り組まれている老人保健福祉計画などの「先進性」が混在する状況とその問題性を浮き彫りにする。	松村祥子	松村祥子
8	子どもの成長と社会福祉	生涯の基礎形成期である子ども時代のあり方は、それぞれの社会特性の象徴でもある。児童観の変遷をみると、子どもを親の私物視したり、未来の労働力としてのみ期待したりする段階から、子ども自身の成長・発達を第一義として家族と社会が協力する段階へと移行してきている。しかし各国の児童福祉の実際の状況は、「子どもの最善の利益」　からはほど遠い施策や活動も少なくない。ここでは保育サービスなどの比較を中心に各国の共通点と相違点をみてみたい。	同上	同上
9	高齢者、障害者と社会福祉	先進工業国のみならず、世界中の多くの国で人口の高齢化が進んでいる。高齢期の生活費の確保や介護ニーズへの対応の仕方は、各国の高齢者観によって異なっている。また障害を持つ人の自立と社会参加を促進するための社会的支援策も施設福祉から在宅福祉、地域福祉へと広がってきている。 各国の高齢者、障害者への社会福祉活動の大きな推進力となった国連国際年の影響等も含めて、世界的動向を考察したい。	同上	同上
10	貧困と社会福祉	多くの国の社会福祉は、貧困対策ことに生活物資の欠乏による生活破壊を予防したり緩和することから始まったといっても過言ではない。先進工業国では、経済開発による一般的生活水準の上昇によって絶対的貧困は減少する傾向にある。しかし階層間の貧富格差や地域間で異なる貧困問題（過疎、過密地区の貧困や、国際的関係によって引き起こされる貧困等）が拡大している。日本の生活保護制度に相当する最低生活保障システムの各国の状況について検討する。	同上	同上
11	家族、地域と社会福祉	社会福祉の形態や機能は、家族、地域の生活相互扶助力と大きな関係がある。世界の家族の状況はその規模（平均世帯人員２人から７人の幅）と所在（都市人口割合90％から５％の差）だけみても多様性に富んでいることが分かる。概して産業化が進むと家族間、地域間の生活相互扶助力は低下し、社会福祉等の社会的生活支援策が拡大する。しかし実際には各国の生活文化や社会政策のあり方も影響し独自の関係を生み出している事等を示しながら、それぞれの国の問題点と課題を明らかにする。	同上	同上
12	医療と福祉の連携	すべての人の「健康で文化的な生活」を目的にする社会福祉活動にとって、保健医療の充実は基礎的条件である。また、疾病予防や早期回復のためには適正な社会福祉活動が不可欠である。人々の生活の中では車の両輪ともいえる医療と福祉が、縦割り行政や関連職間の連携不足のために、サービスの欠落、重複、過剰等種々の問題を発生させている。何故連携が必要なのか、どのような形の連携が望ましいのかについてアメリカの事例を参考に述べてみたい。	平山尚	平山尚

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
13	社会福祉と生活環境	「施設ケアから在宅ケアへ」というのが、近年の社会福祉の方向となっている。「住み慣れた家で暮らし続けたい」という高齢者や障害者の希望も強く、又社会的保護を要する子どもにとっても安全でプライバシーの保てる生活環境としては個別住居が望まれている。社会福祉サービスの供給拠点としての施設と在宅それぞれの特徴を点検しながら、供給サイドと利用サイド双方の社会福祉環境形成のあり方を追求したい。	外山　義	外山　義
14	社会福祉の組織化	多くの自由主義諸国では、民間社会福祉と公的社会福祉は平行して存在し、相互補完的にその役割を果たしてきた。第二次大戦後のヨーロッパ諸国を中心に社会福祉の基礎的部分での公的責任性や専門性が強調されてきたが、1980年以降は民活化やボランティア活用の推進が一つの流れとなっている。 財政難、マンパワー不足、組織運営の非効率性等を克服するために試行されている各国の福祉改革の状況を示しながら、利用者にとっての最良の途を探りたい。	松村祥子	松村祥子
15	今後の社会福祉の課題と展望	社会福祉が真に人々の生活支援策として機能するためには、国際的に普遍化された課題と各国固有の社会状況から生じる課題の双方向的取組みが必要であろう。また、公的福祉施策のフレームと社会福祉活動実践の方法・技術がお互いに密接な連絡を取りながら、同時にそれぞれが自律した活動体系の下で発展しなければならない。本講義で取り上げた各国、各領域の社会福祉状況を踏まえて今後の方向を展望する。	同上	松村祥子 平山　尚 外山　義

＝ 高齢社会の生活設計 ＝（R）

〔主任講師：本間 博文（放送大学教授）〕
〔主任講師：松村 祥子（放送大学教授）〕

全体のねらい

生活水準の向上、社会保障の発達、医学の進歩などによってもたらされた「個人の長寿化」と「社会の高齢化」は、人間の能力と活動の可能性を広げ、人の生き方や社会のあり方を変化させている。高齢社会では、絶対的にも相対的にも急増する高齢者への対応にとどまらず、社会経済の総合的なシステムの転換も含めた全国民的課題としての生活設計が必要とされている。

本講義では、高齢社会の諸相をできるだけ正確に描写し、そのような社会において、各世代の人はいかなる生活課題を有し、その解決のためにはどんな生活設計が必要であるのか。そのための情報を可能な限り適切に提供することをめざしている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	高齢社会とは	高齢人口の増加と年少人口の減少を特色とする高齢社会では、生活様式の個人別化や多様化が進み、それに付随して現れる様々な生活問題への個人的、社会的対処が必要となってくる。特に、生産・開発主義優先の高消費型社会から、自然と人間生活の調和をはかる新しい生活原理と社会システムが求められている。	松村祥子（放送大学教授）	松村祥子（放送大学教授）
2	高齢者とは	加齢変化の内で萎縮性退行性の性格を持つものを老化という。遺伝子的にプログラムされた一次性老化と、環境化因子などによって左右される二次性老化に分けられることが多い。脳という肉体の老化の結果として心理的精神的変化が起こる。細胞、組織、臓器、個体にとっての退行性の機能低下としての老化は、高齢に至って初めて現れるものではなく、ヒトでは20才の頃一斉にスタートし、その後絶えず進行するプロセスである。その結果としての高齢者の肉体的、精神的変化について述べる。	鬼頭昭三（兵庫大学教授） 仙波純一（放送大学教授）	鬼頭昭三（兵庫大学教授） 仙波純一（放送大学教授）
3	家族生活	高齢社会における長寿化と少子化の現象が個人の家族的関係のあり方にもたらす変化として、①親子関係の長期化（半世紀にわたる親子関係）、②家族内における親子関係の単純化（特定化）、③家族関係の多世代化の３点をとりあげ、諸統計をもとに述べる。また未婚化・子どもをもたない夫婦の出現との関連から家族外生活者の増大についてもふれる。	嶋崎尚子（早稲田大学助教授）	嶋崎尚子（早稲田大学助教授）
4	家庭経営	生涯発達、自己実現に資する家庭経営上の課題を、①生活標準化作用を受けやすい高齢世帯、②就労引退と家庭経営、③高齢者介護サービス、④世代の違いによる自己形成力（家庭経営技術と生活目標）、⑤世代間・次世代間平等からとりあげる。	清野きみ（北海道教育大学名誉教授）	清野きみ（北海道教育大学名誉教授）
5	社会参加	高齢者の社会参加について、就労・地域活動という面から考える。高齢者の就労実態、シルバー人材センターや老人クラブの活動、高齢者協同組合などの新しい取組を紹介しながら、高齢者自身が地域社会の新しい担い手としてどう社会とかかわっていくか、これからの高齢者の社会参加のあり方を考える。	山田知子（埼玉県立大学助教授）	山田知子（埼玉県立大学助教授）
6	衣生活	衣服は人の外観を造るものであるところから、人々の商品選択には、衣服の外観的品質に重点が偏りやすい。快適な生活の創造に向けての商品選択や消費者要求のあり方について、衣生活を中心に考える。	酒井豊子（放送大学教授）	酒井豊子（放送大学教授）
7	食生活	高齢社会において、特に高齢者は健康であることが老後の幸せの鍵になるといっても過言ではなかろう。健康で長寿を全うするためには青年・成人期、いや発育期からの適切な食生活が不可欠である。この章では、健康な高齢期を迎えるために大切な、発育期からの食生活設計を概説する。	今井悦子（放送大学助教授）	今井悦子（放送大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	住生活	高齢社会における諸問題のかなりの部分が、住まいの問題に起因するといって過言ではない。そして住まいの問題は、結局のところ高齢者家族のあり方と密接な関わりを持つことも自明である。住まいを通して今後の高齢者の家族の動向を考察し、その結果に基づいた住宅改善の方向を探る。	本間博文（放送大学教授）	本間博文（放送大学教授）
9	余暇活動	①余暇と余暇活動の意味づけ、②余暇活動の実態、③高齢者と余暇活動（実態と希望）、④高齢者と運動（老化と運動、高齢者のトレーナビリティ）、⑤高齢社会におけるスポーツ	渡邉融（放送大学教授）	渡邉融（放送大学教授）
10	医療	老年期になると、心身ともどもいろいろな病気にかかりやすくなる。統計的にみても、ガンや心筋梗塞による死亡が増え、脳では脳梗塞や老人性痴呆などが始まり、一部の疾患については、現在でもその進行が不可逆である。本章では老年期に特徴的にみられる疾患とそれに対する医学的な対策を述べるだけでなく、社会的な観点から医療あるいは福祉制度としての老人医療を考えてゆく。	仙波純一	仙波純一
11	社会福祉	高齢社会の社会福祉は、高齢者の福祉にとどまるものではない。だれもが必要に応じて福祉サービスの受け手になることからも、すべての国民に共通する生活課題なのである。エンゼルプラン、新ゴールドプラン、障害者プランを中心として、生活者自身が主体的に参加する、権利としての社会福祉のあり方を検討したい。	三ツ木任一（放送大学教授）	三ツ木任一（放送大学教授）
12	生まれる	高齢社会は高齢者だけの問題ではない。社会全体が成熟し、変容していく過程で、高齢者の比率が高まるという現象が顕在化してくる。新しい生命を、社会としてどのように保障するのか、わが国の今後の社会に与えられた重大な課題である。	古谷博（昭和女子大学講師）	古谷博（昭和女子大学講師）
13	生きる	人生１００年８７万３６００時間を、人間の発達と生活の安定のためにどう配分すればよいのだろうか。生活費、生活時間、生活空間、生活意識の変化をたどりながら、我々の置かれている生活環境の特徴を明らかにするとともに、そこで生きることの積極的意味を考察してみたい。	松村祥子	松村祥子
14	死からみた生	人は、死を意識しながら生きている唯一の生物である。細胞の死、固体の死はそれぞれ固体の保持、種族の維持の為に必要な合目的現象である。主として生物学的立場から、細胞死及び固体死の持つ意味について論じ、それを基盤として、ヒトの死のもつ社会的、文化的意義についても論じる。	鬼頭昭三	鬼頭昭三
15	高齢社会の生活設計	高齢社会を暗くて、展望の持てない深刻な社会が到来すると考えるのは間違いである。各回の講義内容を踏まえて、日常生活の各分野にわたって普段から目標を立て、自助努力を怠ら、なおかつ充実した公的な支援体制を整備することによって、国民等しく豊かな老後を過ごすことが出来るような未来社会のあり方を考える。	松村祥子	鬼頭昭三 本間博文 酒井豊子 松村祥子

＝ 生活の経営（’０１）＝（R）

〔主任講師：原　ひろ子（放送大学教授）〕

全体のねらい

生活を単に家庭生活として据えるのではなく、人間の営み全般として据える。その上で、生活の主体である個人が、まわりの人々や組織、さらに国家や国際社会との関わりにおいて、自らの生活をどのように組み立てていくか大きな変動の時期とされる２１世紀前半を生きて行く上でどのような発想の転換が必要なのかを考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生活とは	ヒトという生物が文化をもって社会に生きる人間として主体的に生活を営む際に、年令や一人ひとりのおかれている状況に応じて、「自分」とどう折り合うのか、まわりの人間とどう折り合うのか、職場、団体、そして国家とどう折り合うのか、思想との折り合いは？	原　ひろ子（放送大学教授）	原　ひろ子（放送大学教授）
2	人間の「生活」の多様性（1）	衣・食・住・人間関係・自然とのつき合い方、超自然とのつき合い方、「時間」をどう生活の中に位置づけるのか。カナダ北方の狩猟採集生活者カショーゴティネの１９６０年代の実態をもとに１９６０年代の多くの日本人の生活との対比で考える。	同　上	同　上
3	人間の「生活」の多様性（2）	性別は越えられないものなのか。日本に生まれれば「日本人」として育っていくものなのか。「境界線」を越える生活は成り立つのか。「境界線」を越える生活を経営するということはどういうことなのか。	同　上	同　上
4	生活における「時間」とその意味	「時間」という資源は、万人に同じように機能するものなのであろうか。太陽、月、星の動き、潮の満ちひき、季節の移り変わり、天候や、個人毎の暦のあり方などと、グリニッチ天文台を基準とする近代的時間の流れと「労働時間」とお金との関係について考える。	御船美智子（お茶の水女子大学助教授） 原　ひろ子	御船美智子（お茶の水女子大学助教授） 原　ひろ子
5	生活における「お金」とさまざまな価値	「価値」は多様な基準ではかることができる。しかし、２０世紀末の日本では、「価値」をお金によってはかることが優勢になってきた。いわゆる「生活設計」といえば、生活費をどう確保し運用するかということのみと考えられるようになってきた。そこを問う。	同　上	同　上
6	生活における職業	生活の糧としての職業なのか、職業そのものは人生の目的なのか？職業をもたない子ども、主婦、高齢者、障害者、病者、ホームレスなどさまざまな状況にある人々にとって「職業がない」ということはどういうことなのか。職業というものを多様な生活者から見る。	上村　協子（東京家政学院大学助教授） 原　ひろ子	上村　協子（東京家政学院大学助教授） 原　ひろ子
7	家庭と家族親族	「家庭」とは近代の産物といわれる。「家族・親族」はヒトの発生以来、存在しているものとされる。このような個人としての人間をとりまく人間関係の絆や桎梏と人びとは多様なつき合い方をしている。今回は単身者にとっての家庭についてを考える。	原　ひろ子	原　ひろ子

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	生活における趣味	趣味は余暇の活用なのか、趣味は人生の目的ないしは生活の中核でありうるのか。人々の生活の中で趣味・職業・家庭が、どのように営まれていくのかについて考える。	原　ひろ子	原　ひろ子
9	生活の経営と地域社会	子ども会、町内会、老人会や住区協議会などに参加することだけが、生活の経営における地域社会の位置づけであろうか。自らの暮らす地域社会のあり方を、それぞれが、防災、資源の循環、シビルミニマム、景観、地域行政間政治との関連で自らの生活課題としてみる。	萩原なつ子（東横学園女子短期大学助教授） 原　ひろ子	萩原なつ子（東横学園女子短期大学助教授） 原　ひろ子
10	ボランティア活動／ＮＧＯ活動	自らが生活する地域社会の内外で、あるいは国際的な場でボランティア活動やＮＧＯ活動に参加する人々が増えている。時には、「世のため人のため」として行うこれらの活動が家庭崩壊を導くこともある。日本社会の中でのこれらの活動の位置づけと生活を考える。	同　上	同　上
11	政治参加と生活の経営	地域住民としてさまざまな施策の受益者であること、住民協議会などで政策決定過程に対する発言者となること、さらに政策決定に参加していく立場をとることなどについて、どのような現象が見られるのか、そしてそれが生活の経営とどう関連するのかを考える。	大海　篤子（立教大学アジア地域研究所研究員） 原　ひろ子	大海　篤子（立教大学アジア地域研究所研究員） 原　ひろ子
12	生涯設計	老年期までの人生をどう生計するのかという個人の立場と同時に、この領域の課題を社会政策にどのように反映させていくかという政治参加の課題が含まれる。さらに生涯設計には自らの加齢についてのみならず、家族・地域・職場における次世代育成も含まれる。	上村　協子 原　ひろ子	上村　協子 原　ひろ子
13	危機管理と生活の経営	家族の病や死、災害、経済恐慌のみならず資源の枯渇、環境問題など、目に見えにくく身体で感じとりにくいようにしのび寄る危機に対して、一人ひとりの一生を越えた次世代やそのあとの世代に対する責任をも含めて、危機管理を考えていく。	原　ひろ子	原　ひろ子
14	国際化時代と生活の経営	「日本に生まれれば日本人に育つ」という前提ではなく、異質なものの共存を可能にするような生活の経営は、私たちの心の姿勢に修正を迫るものである。さらに家族・親族のあり方、職場のあり方、地域社会のあり方、ＮＧＯ／ボランティア活動のあり方も変るだろう。	同　上	同　上
15	まとめ：次世代の育成と生活の経営	２１世紀は、２０００年に生まれた人々だけでは終わらない。私たちがどのような生活の経営を行うかは、次世代のあり方、次々世代のあり方に深く影響を及ぼす。生活の経営は自分自身や、自分の家族や、自分の職場・団体の人々のためだけでなく、未来のためでもある。	同　上	同　上

＝ 看護学概説（’０１）＝（R）

〔主任講師：佐藤　禮子（千葉大学教授）〕

全体のねらい

学習者が、看護学の主たる概念や諸理論に関わる先進的知識を幅広く獲得し、実践の科学である看護に対する理解を深め、自らの看護観を確かなものにしていくことを意図している。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	看護の本質となるもの	看護は、人が幸せにして健康な生活を営むことができることを目指す、生物－心理－社会的存在としての人間の健康生活に焦点を当てた働きをなす実践の科学である。このような科学的看護の本質について理解を深めるために、看護のｋｅｙ概念についてと看護実践とその基盤について詳述する。	佐藤　禮子（千葉大学教授）	佐藤　禮子（千葉大学教授）
2	看護学発展の方向性	今や看護学は独自の学問分野として専門分化しつつある。今後の方向性の基盤ともなる医療の高度化や機能分化、人々の健康水準と求める健康の質、および社会経済状況と将来にむけた要請に対応しつつ、他の学問分野の成果をも取り入れながら発展する過程について述べる。	吉本　照子（千葉大学教授）	吉本　照子（千葉大学教授）
3	生涯発達過程にある看護の対象	人間は誕生してから死ぬまでに生涯発達の過程にあり、看護はあらゆる発達過程にある人々を対象とし、発達過程に応じた適切な看護を提供することを目標とする。対象の生物的・心理社会的発達と健康・疾病との関連について述べる。	岩﨑　弥生（千葉大学助教授）	岩﨑　弥生（千葉大学助教授）
4	健康を保つメカニズムと看護	健康とは何か、そして健康を保つために看護はどのような役割を果たしうるのかについて解説する。これにより健康のあらゆるレベルに対する看護の役割、機能について考察する。	宮崎美砂子（千葉大学助教授）	宮崎美砂子（千葉大学助教授）
5	環境との相互作用がもたらす健康問題	健康を支えるための環境づくりが地域、国、地球レベルで進みつつある。その基盤をなす概念として、物理化学生物的・社会的な外部環境と個人の内部環境、環境の変化と人間の適応の相互作用、適応困難としての健康問題を主に述べる。	吉本　照子	吉本　照子
6	事象・事実に基づく看護過程の展開	看護過程は問題解決のアプローチであり、看護する者が対象のためにケアを計画し、提供するための系統的な方法である。看護過程の５段階（アセスメント、診断、計画、実施、評価）を説明し、看護過程を用いることの利点について述べる。	齋藤やよい（群馬大学教授）	齋藤やよい（群馬大学教授）
7	看護技術の意味	看護実践は対象との関わりの中で発展させていくものであり、対象にもっとも適した看護実践には、看護する者のしっかりした看護観とともに科学的根拠に基づいた看護技術が要求される。具体例とともに看護技術の意味と看護の実践力について説明する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	関わりと看護技術	看護は人と人との関わりの中で実現され、看護する人もされる人も関わりの中で変容する。看護する者が、全体的存在として看者と共にあることの意味を述べ、そのような関わりを含む看護技術を説明する。	岩﨑　弥生	岩﨑　弥生
9	セルフケアを育てる看護	健康問題を解決し、健康を増進するために、人はさまざまな社会資源を活用し、セルフケア能力を育み、実践している。慢性疾患患者のセルフケアを例に、セルフケアを遂行するために必要な要件と、それを支える看護活動について説明する。	齋藤やよい	齋藤やよい
10	患者を含む一単位としての家族への看護	患者を含めた単位としての家族を看護の対象とする意義・必要性を概説し、個人の健康回復・維持に果たす家族の役割と家族成員の病気が家族全体に及ぼす影響、並びに家族を対象とした看護の方法を説明する。	岩﨑　弥生	岩﨑　弥生
11	在宅療養を支える看護	在宅療養者及びその家族を支えるために、地域社会で機能している看護の諸活動の現状について説明する。また在宅療養を支える看護をさらに充実・発展させるための課題について述べる。	宮崎美砂子	宮崎美砂子
12	他職種との連携・協働における看護の役割	保健医療福祉の発展と効率化、対象のニーズの多様化に対応するために、職種間の連携が重要になっている。チームの形成と目標設定および役割分担にむけて他職種の資格制度を概観し、看護の調整的役割と責任性、期待されるリーダシップや指導的役割について述べる。	吉本　照子	吉本　照子
13	地域住民と共働する看護	人々は、地域生活共同体の一員として、多様な人とつながりを持ちながら生活している。人々の健康や生活の豊かさを追究するために、看護が創出してきた、地域住民と共働する看護活動の方法及び意義について説明する。	宮崎美砂子	宮崎美砂子
14	人の死と看護	人の死とはについて、生物学的な死の概念から導入し、人の死と死に行くことについて理解を深め、特に、人が人生途上において、突然に死に直面せざるをえない事態に陥った時の苦悩する人々および死に逝く人々にかかわる看護の働きについて説明する。	佐藤　禮子	佐藤　禮子
15	看護における倫理	倫理とは何かという基本的な意味について、および専門職としての看護実践を導く判断の基盤であり道徳的な意思決定を行う時の行動の指針ともなる、倫理的な原則について説明する。また日々の看護実践における倫理的問題を理解するための講義展開を行う。	同　上	同　上

＝公衆衛生（’０１）＝（R）

〔主任講師：近藤　喜代太郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

公衆衛生は健康をまもる社会のしくみであり、日本では憲法25条などで国が義務づけられている。公衆衛生は法制度、経済、施設、専門的マンパワー、科学技術の５大要素から成り、単なる学理ではないが、この科目では学理に重点をおいて主な問題を学ぶ。ただ、この科目とほぼ同時に開講されている「母子の健康科学」「高齢者の心と身体」「こころの健康科学」「医療・社会・倫理」にも公衆衛生的な問題がとり上げられており、それらとの重複を避けて立案されている。今日、公衆衛生と医療は国の制度そのものである。日本の制度はその管理的性格で世界的に知られ、疾病制御、平均寿命の延長などの成果が著しい反面、薬害を反復するなど、危機管理では遺憾な点もある。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序論と予防の考え方	この章は全体の序論であり、公衆衛生の概念、歴史、主な分野、法令・制度の枠組みなどとともに「予防」という考え方について学ぶ。	近藤喜代太郎（放送大学教授）	近藤喜代太郎（放送大学教授）
2	保健・医療の制度	保健・医療制度は複雑であるが、それを理解しないと日本の医療を理解し、また実務を行なう上で大きな支障をきたす。そこで本章ではできるだけ分かりやすく現実の状況に照らして、制度とその背景、問題点などを解説する。	池上　直己（慶應義塾大学教授）	池上　直己（慶應義塾大学教授）
3	疫学と厚生統計	制度としての公衆衛生の基盤のひとつは厚生統計である。また学理としての予防医学は必要なあらゆる方法を駆使するが、その根幹にあるものは疫学である。本章では公的制度となった厚生統計と疾患の集団レベルの定量的研究の方法としての疫学について学ぶ。	近藤喜代太郎	近藤喜代太郎
4	感染症　Ⅰ	公衆衛生における感染症対策の原則と実際の状況を解説する。本章では総論的な事柄を中心とし、感染の成立条件、感染症新法の概要、日本における対策の現況、サーバランスなどについてのべる。	稲葉　裕（順天堂大学教授）	稲葉　裕（順天堂大学教授）
5	感染症　Ⅱ	全章にづづいて、主な感染症について、その原因、疫学、臨床、対策についてのべ、近年注目されている新興・再興感染症にも触れる。	同　上	同　上
6	生活環境の保健	生活環境を規定する主な原因についてのべ、都市化および都市の生活環境と、そこにすむ人々の健康問題とその解決について包括的に論ずる。	高野　健人（東京医科歯科大学教授）	高野　健人（東京医科歯科大学教授）
7	環境保健　Ⅰ	私共の生活環境は様々な要因によって規定されているが、その重要な因子として物理的要因が挙げられる。その主なものは騒音、振動、放射線、温熱条件などである。これらは生活の快適性を失わせるのみならず、一定のレベルをこえた場合、人の健康にも様々な影響を与える。これらの様相を概観する。	二塚　信（熊本大学教授）	二塚　信（熊本大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	環境保健Ⅱ	２０世紀に入り、農薬、医薬、プラスチックなど、きわめて多くの科学物質が生み出され、多くの分野に利用されて生活が豊になった反面、地球的規模で環境汚染の原因となってきた。これら環境汚染物質の有害性、あらたに問題となりつつある環境ホルモンについて解説する。	小泉　昭夫（京都大学教授）	小泉　昭夫（京都大学教授）
9	産業保健　Ⅰ	産業経済の歴史を見ると、結核対策、急性産業中毒対策、じん肺対策など、労働者の重篤な健康障害の対応が主であった時代から、近年の産業構造や業務態様の顕著な変化に伴い、作業関連疾患の重視、予防から積極的健康増進に発展している。ここでは、産業保険の意義、労働衛生行政、作業環境管理、作業管理について学ぶ。	清水　英佑（東京慈恵会医科大学教授）	清水　英佑（東京慈恵会医科大学教授）
10	産業保健　Ⅱ	Ⅰに引き続いて、労働衛生３管理の３番目として健康管理についてその進め方を理解すると同時に、物理的・化学的要因によるさまざまの職業性疾患を学ぶ。さらに、最近問題となっているメンタルヘルス、女性労働、深夜業等についても学ぶ。	同　上	同　上
11	食品の保健	食品はすべての国民がいつも摂取するものであり、その安全性は公衆衛生のひとつの基幹である。本章では有害物質、有害微生物などによる食品汚染の実情、食中毒、食品の管理、流通などの法規制についてのべ、「森永毒ミルク事件」最近の「雪印牛乳中毒事件」などを例として危機管理の命題としての食品衛生にも触れる。	近藤喜代太郎	近藤喜代太郎
12	学童と青年の保健	ヒトの生理学的・解剖学的機能は２０歳前後に完成され、その時期は身体的疾病が生涯でもっとも少ない時期である。しかし、生活習慣病（成人病）の初期段階がこの時期において少なからず観察される。全国の国立大学保健管理施設が協力して実施した「健康白書2000」の資料に基づいて、学生の健康状態および生活習慣病の予防について講義する。	佐藤　祐造（名古屋大学教授）	佐藤　祐造（名古屋大学教授）
13	生活習慣と疾患	生活習慣とは長期間つづく個人の生活特性であり、食事、酒・タバコ、運動、社会生活、休養、安全習慣などをふくむ。保健先進国では環境側のつよい病因が制圧され、人生の途中死亡が減じ、その分、生活習慣のようなよわい病因が有力となり、長くなった寿命のため、臨床的影響を生ずるようになった。それが「生活習慣病」であり、その対策にはどんな習慣がそんな病気を生ずるかの機序を解明し、予防政策と個人のセルフケアに応用することが大切である。	近藤喜代太郎	近藤喜代太郎
14	健　康　管　理	長くなった生涯にわたる健康を保つためにはケルフケアによって自らの健康を保持増進する必要がある。しかし、個人の力の及ばない部分は法律と制度に基づいて「健康管理」を行なうようになっている。生まれてから死ぬまで多くの法令に基づいて公的な健康管理制度がある。この講義では公的な健康管理のしくみと問題点をのべるが、生活習慣病対策など個人の努力が欠かせない分野も多い。	鈴木　庄亮（群馬大学教授）	鈴木　庄亮（群馬大学教授）
15	歯　の　健　康	咀嚼機能をつかさどる口腔の健康を生涯にわたって維持することは、健全な成長や生活習慣の予防、高齢者の呼吸器感染や「生活の質」の低下を防止する上で不可欠である。全身の健康状態との関係を主に、口腔衛生、歯科疾患の予防のための公衆衛生的な配慮についてのべたい。	新庄　文明（大阪大学講師）	新庄　文明（大阪大学講師）

＝ がんの健康科学（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：小林　博　（（財）札幌がんセミナー理事長・北海道大学名誉教授）〕
〔主任講師：近藤　喜代太郎（放　送　大　学　教　授）〕

全体のねらい

がんはもっとも重要な健康問題のひとつである。すでに圧倒的な第１死因であるが、心臓病、脳卒中の減少がさらにつづくなかで、近い将来、いっそう重大化すると推測される。がんの学理は長足の進歩をとげ、発がんの機序は分子レベルの問題となり、がん素因の予知にも大幅に応用されている。がんはライフスタイルの改善や環境制御によって予防ができ、早期発見すれば完治または相当の延命が可能になっている。がんの問題は研究面では総合科学ともいうべき巨大な存在となっただけでなく、患者個人はもとより、社会・国家にとっても大きな課題となっている。
この科目では限られた枠ではあるが、こうした視点に立ち、今日のがん科学のエッセンスを伝えようと試みる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	がん科学への序説	がんは生命の根源にも迫る、巨大で包括的な医科学のテーマであるだけでなく、ひろく自然科学全体にわたる問題をはらんでいる。さらに、がんは人文社会学においても重要なテーマになっている。第１章ではがんを健康科学の立場から記述し、14章の枠組みを概説する。	小林　博 （財）札幌がんセミナー理事長・北海道大学名誉教授） 近藤　喜代太郎 （放送大学教授）	
2	発がんの仕組み	第１章では１個の細胞ががん化し、がん組織に発展するまでの学理をのべる。発がんは１個の細胞におきた遺伝子の変化から出発する。本章では「多段階発がん説」をめぐる諸事実をのべ、それに影響するさまざまの外因・内因、家族性発がんとがん体質の問題、成立したがん細胞の運命とがん組織の成立についてのべる。	北川　知行 （(財)癌研究会癌研究所長）	
3	がんの生物学	がん細胞は増殖力が旺盛で、死ににくく、血管新生を促進するので、無制限に増殖する。また運動性が活発で、近くの組織に侵入し離れた組織にも転移する。近年、がんに関する生物学的研究によって、これらの現象の仕組みがわかってきた。	葛巻　暹 （北海道大学遺伝子病制御研究所教授）	
4	がんの疫学	疫学は発生率、有病率、死亡率を通じて、がんの動向を定量的に示し、種々の集団調査によって、その要因についてきわめて有用な情報をもたらした。本章ではこれらの問題について主な知見をのべる。	近藤　喜代太郎	
5	食品・嗜好品とがん	食物および喫煙などの嗜好ががんの発生に密接に関与していることが疫学的に明らかにされた。米国の死亡資料で食物が３５％、喫煙が３０％が原因を占めると推定され、１次予防対策、食生活の改善と喫煙対策が重要であることが指摘されている。飲酒のがんに対する寄与度は喫煙に比べて小さく、約３％と推計されている。最近、緑茶とコーヒーのがん予防作用が示唆されている。	富永　祐民 （愛知県がんセンター研究所長）	
6	感染症・ストレス	感染症とがんは本来まったく別のものであるが、ある種の慢性感染症はがんの原因となる。また精神的ストレスもがんの原因または因子になるようである。本章では今まであまり注目されていなかった、これらの要因のいくつかについてのべることとする。	小林　博	
7	がん遺伝子	正常の細胞をがん細胞に変える遺伝子を、がん遺伝子という。また正常の細胞ががんにかわることを抑制している遺伝子をがん抑制遺伝子と呼ぶ。がんは、がん遺伝子とがん抑制遺伝子の異常によって起こることがわかってきた。 本章ではこれについてのべ、がんについて分子レベルの理解をすすめる。	葛巻　暹	

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ライフスタイルと1次予防	がんは脳卒中、心臓病、糖尿病などとともに「生活習慣病」と呼ばれている。疫学的研究から食生活、喫煙、飲酒、運動などのライフスタイルが発がんに密接に関与していることが明らかにされた。がんの1次予防には、禁煙、節酒、食生活上の注意（特に、塩辛い食品と動物性脂肪の摂取抑制、生野菜・緑黄野菜・果物類および繊維にとむ食品の頻回摂取、バランスのとれた食事）、適度な運動などが重要である。	富永　祐民	
9	がん検診と2次予防	がん検診は2次予防対策と位置づけられ、症状の発現以前の早期の段階でがんを発見し、早期に治療することにより、がん死亡を予防することを目的としている。胃・子宮・肺・乳房・大腸の各がん検診について、わが国の現状と問題点、さらに今後の展望をのべる。	辻　一郎 （東北大学助教授）	
10	老化とがん	老化とがん化の仕組みには共通するものが少なくない。とくに細胞の染色体末端によるテロメアは細胞の老化とともに短小化するが、その働きを押さえるテロメラーゼを出すがんの細胞は老化することなく永遠に生き続ける。本章はこの分野の最近の知見をのべる。	田原　榮一 （広島がんセミナー理事長・広島大学名誉教授） 田原　栄俊 （広島大学講師）	
11	主ながんⅠ（呼吸器ほか）	長い間日本のがんを特徴づけてきた胃がんを抜いて、肺がんはがん死のトップになっている。本章では肺がんの成因、診断、病理、治療の現状を概説したい。	田原　榮一 （広島がんセミナー理事長・広島大学名誉教授）	
12	主ながんⅡ（消化器ほか）	消化器がんの多段階発生の分子機序、遺伝子診断、さらにはがん医療における分子病理診断の重要性についてのべる。	同　上	
13	がんの臨床Ⅰ－診断	がんは自覚症状がはっきりしてからでは治療効果が低いため、早期診断が大切である。本章では検診にかかわる問題は9章にゆずり、早期徴候とその意義、X線CT、MRI、生物学的マーカー、細胞・組織診断など、主な診断手段についてのべ、近年発展している遺伝子診断とがんのリスク評価も触れる。	垣添　忠生 （国立がんセンター中央病院長）	
14	がんの臨床Ⅱ－治療	がんの治療はめざましく進歩している。本章では、外科療法、放射線療法、抗がん剤による療法など、既存の治療とその限界についてのべ、遺伝子治療の試みをはじめ、最先端の進歩にも触れる。	同　上	
15	がんの臨床Ⅲ－がんに悩む人々	予防・治療が進歩したとはいえ、末期がんは恐るべき性格をもっている。本章ではがんの告知、家族への対応、家族性がんの遺伝相談、ホスピスなど、がんをめぐる人文的問題をのべ、国家・社会の努力にも触れる。	同　上	

＝障害者福祉（’０１）＝（R）

〔主任講師：三ツ木　任一（放送大学教授）〕

全体のねらい

戦後５５年の間にかなり進展してきたわが国の障害者福祉は、平成の社会福祉改革の最中で新たな変革を迫られている。どんなに障害が重くても、必要な援助を受けながら、地域で主体的に生活できる、ノーマライゼーションが実現した社会をつくるために、私たち一人ひとりがいま何をなすべきかを問い直してみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	障害者福祉の動向	わが国における障害者福祉の進展の経過を概観するとともに、障害者基本法、障害者プランを中軸として推進されてきた近年の障害者施策の実施状況、新たな社会システムに対応した障害者施策の再構築のあり方にについて検討する。	三ツ木任一（放送大学教授）	三ツ木任一（放送大学教授）
2	障害者福祉の理念	人権の尊重、リハビリテーション、ノーマライゼーション、自立と社会参加の促進など、障害者福祉の基本理念の本来の意味を概観しながら、私たち自身の意識や福祉サービスの現実とのギャップ、そしてそのギャップを埋める方策について検討する。	同上	同上
3	障害者福祉の対象	障害者福祉の対象は、身体的または精神的な機能障害があるために日常生活や社会生活で困難を抱え、その困難を解決、軽減するために社会福祉の支援を必要とする人たちである。わが国の対象者の範囲を示しながら、対象者の認定に関わる課題を検討する。	赤塚　光子（立教大学助教授）	赤塚　光子（立教大学助教授）
4	障害者福祉の制度	わが国の障害者福祉の法・制度は、障害種別毎に定められ、教育、雇用など多岐にわたる関連法・制度が生活全般を支援する仕組みとなっている。これらを概観し、法の対象者との関係を含めて、今後の課題を検討する。	同上	同上
5	障害をもつ子どもの療育と教育	医療の進歩により、障害をもつ子どもの重度化・重複化が進む中で、療育・教育は大きな変化を求められている。軽度の障害をもつ子どもや「障害」という概念に当てはまらない子どもの問題も注目されている。今後の療育・教育はどうあるべきか、国際的動向も踏まえて検討する。	石渡　和実（東洋英和女学院大学教授）	石渡　和実（東洋英和女学院大学教授）
6	障害をもつ人の在宅福祉	障害をもつ人の地域生活を支える在宅福祉サービスの整備の過程を振り返りながら、現行のサービスを概観する。さらに、ライフサイクルを通した支援、障害種別や地域による格差、供給システムのあり方など、今後の課題を検討する。	赤塚　光子	赤塚　光子
7	障害をもつ人の施設福祉	わが国の障害者福祉は、施設福祉を主流とした時期を経て現在に至っているが、今もなお施設が果たしている役割は大きい。この経過と現状を示しながら、施設の役割の整理、施設改革の方向性など、今後の課題を検討する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	障害をもつ人の雇用・就業	障害をもつ人の就業状況はどうなっており、雇用促進のための法・制度や対策はいかに取り組まれてきたかを概観する。また、障害種別の就業状況と課題について、欧米での雇用対策と比較しながら検討する。	丸山　一郎（埼玉県立大学教授）	丸山　一郎（埼玉県立大学教授）
9	障害をもつ人の福祉的就労	現在１０万人以上の障害をもつ人が就労している授産施設や小規模作業所の実態を概観し、一般の雇用・就業が困難な重度の障害をもつ人にとっての働く意義や働く機会を確保する方策などについて検討する。	同　上	同　上
10	障害をもつ人の地域活動	障害をもつ人が生活、人生の質（ＱＯＬ）を高めるためには、日常生活において他の住民と同様に地域社会の諸活動に参加することが不可欠である。スポーツ、文化、芸術などの諸活動への参加状況を概観し、今後の課題を検討する。	同　上	同　上
11	障害をもつ人の社会行動	国際障害者年以降、自立生活運動をはじめとする障害者自身の社会行動が、障害者福祉のあり方を大きく変えてきた。政策決定への参加・参画、福祉サービスの新たな担い手、さまざまな地域活動など、その流れと今後の課題を検討する。	石渡　和実	石渡　和実
12	障害をもつ人の権利擁護	権利擁護（advocacy）という概念は、社会福祉の根幹をなすもので、障害者運動の進展の中から確立されてきた。権利擁護に関わる当事者、関係者の活動を概観し、社会システムの変化の動向を踏まえて、今後の課題を検討する。	同　上	同　上
13	世界の障害者福祉	障害をもつ人は、世界の人口の１０％、６億人を超えるといわれている。他の人々と同様の生活の実現が取り組まれている国から、まったく顧みられていない国まで、障害者福祉の状況には大きなギャップがある。欧米とアジアの国々の障害者施策の状況を紹介する。	丸山　一郎	丸山　一郎
14	障害者福祉のマンパワー	障害者福祉には、社会福祉職、介護福祉職、医療技術職など多種多様な専門職員、障害を持つ当事者、家族、ボランティアなどが関わっている。これらのマンパワーの状況を概観しながら、効果的なチームワークのあり方について検討する。	三ツ木任一	三ツ木任一
15	障害者福祉の展望	めまぐるしく移り変わる社会的状況において、障害者福祉は何をめざして進めばよいのか。これまでの学習を総括して、主要な課題とその解決への指針を検討しながら、２１世紀の障害者福祉のあり方を方向づける。	同　上	同　上

＝ 教育的人間学（’９８）＝（R）

〔主任講師：和田　修二（佛教大学教授）〕

全体のねらい

教育的人間学は、第二次大戦後にドイツ語圏を中心に興った教育の哲学的人間学的な研究である。本講では、教育学の発展との関連で、教育的人間学の必要性を明らかにすると共に、子どもの人間学的な研究を起点として、人間学的にみた教育の根本問題を論述する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	日常の教育と教育学	教育の原型は何か、学問としての教育学の自立が遅れたのはなぜかを省察する。	和田修二（佛教大学教授）	和田修二（佛教大学教授）
2	教育学の展開	教育学はどのような性格の学問として出発し、どのような展開をとげたかを論述する。	同上	同上
3	教育的人間学の課題と方法	教育的人間学の代表者と目されているドイツの O. F. ボルノーの所説を中心に、教育的人間学の課題と方法について述べる。	同上	同上
4	子どもの人間学の必要性	戦後、子どもの人間学的研究を進めたオランダの M. J. ランゲフェルトに注目し、子どもの人間学を中核とした統合的な教育的人間学を構想する。	同上	同上
5	子どもとは何か	子どもを「まだ小さな人間」と考えることによって、人間と子どもに対するわれわれの見方にいかなる変革と新たな展望が生まれるかを考える。	同上	同上
6	発達の意味と条件	子どもが発達するとはいかなることかを、子どもの経験に即して省察し、発達の意味と発達の動因、個々の子どもの発達の分析と援助の要点を述べる。	同上	同上
7	両親と家庭	子どもにとって「親がいる」「家庭がある」とは何を意味するか。また、それとの対比で、われわれが「親になる」ことの意味と、「親である」ことの責任と課題は何かを考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ものとからだ	子どもにとって自分のからだと自分のまわりの物がどのような意味とはたらきをもつかを省察する。	和田修二	和田修二
9	しつけと遊び	しつけと遊びが子どもにとってなぜ大切かを考える。	同上	同上
10	学校生活の意味	今日の子どもにとって学校とは何かを省察し、学校改革の今日的課題を考える。	同上	同上
11	教師とは何か	生徒のねがいと教師の課題、教師の成長と教職の病理について考える。	同上	同上
12	言語と教育	人間にとって言語とは何か。子どもの言語能力はどのように形成されるかを省察し、基礎学力としての言語教育の今日的課題を論究する。	同上	同上
13	道徳と教育	人間にとって道徳とは何か。子どもの道徳教育が成功するための条件は何かを問い、価値不確定な時代における教育者の倫理について考察する。	同上	同上
14	生涯教育	人が互いに影響し合いながら生涯にわたって生成すると考えたとき、それぞれの世代がどのような異質の生を生き、自他に対していかなる教育的な課題と責任があるかを概観する。	同上	同上
15	国際化と伝統	国際化との連関で伝統を再考し、ポストモダンに向けて日本の文化的な使命を考える。	同上	同上

＝ 近代の教育思想（’９８）＝（R）

〔主任講師：宮澤 康人（放送大学教授）〕

全体のねらい

現代日本の教育制度や教育理論の基本的枠組が作られるうえで、西洋近代の教育と教育学は大きな役割を果した。その背景にある西洋近代の教育思想に含まれる基本的概念や理論を、近代に生きた思想家の個性から切り離さずに学ぶ。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	教育思想とは何か	全体の序論として、教育思想をどのようにとらえるか、教育思想なるものが成立する条件は何か。西洋近代において、教育思想が社会思想、政治思想などから独立してくることなどを説明する。	宮澤康人（放送大学教授）	宮澤康人（放送大学教授）
2	近代の教育の思想の特徴	３章以下の個々の思想家の思想に入るまえに近代の教育思想のきわだった一般的特徴にふれ、それが近代の社会と文化の独自性によって作られた、教育主体と学習主体、大人と子供の間の葛藤を克服しようとする課題を負っていることを明らかにする。	同上	同上
3	モア－ユートピアと教育－	近代の教育思想の特徴の一つに、そのユートピア性がある。といっても、（暗黙の裡にであれ）思い描かれるユートピアと教育の関連は、さまざまなものがあり得る。ここでは、「ユートピア」という造語の発祥の場トマス・モア『ユートピア』（１５１６年）の中で、教育がどのような位置を占めたかを明らかにしようとする。ユートピアは教育社会として構想されざるを得ず、教育はユートピアであり続けることを課せられる。	寺崎弘昭（東京大学助教授）	寺崎弘昭（東京大学助教授）
4	コメニウス－人間と社会の改造のための術－	近代教育学、とりわけ教授学の祖ともいわれるコメニウスの思想を次の項目に従って説明する。コメニウスへの関心、コメニウスをめぐる時代状況、教育の役割と教育可能性、教授学と汎知学。	金子茂（中央大学教授）	金子茂（中央大学教授）
5	ロック－習慣形成と近代社会－	近代教育思想は当然にも、フィクションとしての近代社会と相伴ってその姿を現す。それらの関連を体現したものとして、市民社会理論家であると同時に教育論者であったジョン・ロック（1632～1703年）があげられる。その教育論は、習慣形成を通じて生涯学習主体のエートスを育むことに向けられるものであったが、その基底に「懲治」を捉えることによって、近代市民社会の周縁を不断に中心へと還流させることを保証しようとするものであった。	寺崎弘昭	寺崎弘昭
6	ルソー－子どもの発見－	ルソーの『エミール』の主題は、彼自身の言うところによれば「大人になる前の子どもというものはどのような存在であるか」を明らかにし、それにふさわしい教育のあり方を考察することであった。この主題の意味を、ルソーの時代認識とそこから導かれた人間観を分析することによって明らかにする。	森田伸子（日本女子大学教授）	森田伸子（日本女子大学教授）
7	コンドルセ－進歩の思想と教育－	コンドルセの公教育思想は、フランス啓蒙思想の特徴をそなえつつ、革命の動乱のなかであらわとなったブルジョワ社会の矛盾に対して応えようとする実践的な問題意識に貫かれたものであった。彼の公教育思想の歴史的意味を、こうした背景と波の進歩思想と関係づけつつ考察する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ペスタロッチ－「技術」としての教育と教授－	成人として生活していくうえで必要なことを、子どもたちが子どもなりに大人の社会生活に参加するなかで、自然に、みようみまねで学んでいく。これが教育のもっとも素朴な形だろう。しかし近代の教育思想はそのような素朴な教育がもはやなりたたなくなったときに誕生したのだった。何をどのように教えるのか。それは自覚的に取り組まなければならない課題となったのである。近代教授学の創始者として知られるペスタロッチが、この問題をどう考えたのか。それをここではたどってみたい。	鳥光美緒子（広島大学助教授）	鳥光美緒子（広島大学助教授）
9	ヘルバルト－教授による教育	「学者」としてのヘルバルト、「教育」と「教授」、教育的教授、学問しての教育学、『一般教育学』の構造、人格の客体的部分と主体的部分、といった事柄について説明する。	金子茂	金子茂
10	フレーベル－幼児教育の意味と方法－	幼児教育の重要性は、今日しばしば指摘されている。早期からの知的教育が推進される一方では、幼児期にこそ、知識中心主義的な学校教育とはちがった自由な「本当」の教育が必要だし可能なのだという声もある。幼児教育理念の創始者であるフレーベルは、幼児期とその教育の意味をどのように考えていたのだろうか。彼は子どもたちに何を、どのような方法で教えようとしたのかという問題を中心に、彼にとっての幼児教育の意味について考えてみたい。	鳥光美緒子	鳥光美緒子
11	ミル－父と子の葛藤と自立の教育学－	近代社会は、近代情愛家族を析出することによって、思春期の子どもと親の葛藤を顕在化させた。こうした父子間葛藤をくぐり抜け、現実化した近代社会との対峙の中で社会論・教育論を紡ぎ出したのが、ジョン・スチュアート・ミル（１８０６～１８７３年）である。父ジェイムス・ミルによる被教育体験を経て、自由教育論・＜公衆(the public)＞形成論へと子ミルが自立してゆくプロセスを追う。	寺崎弘昭	寺崎弘昭
12	マン－コモン・スクールの思想－	19世紀のアメリカ合衆国において公教育制度の確立に貢献したホーレス・マンの思想を中心として、コモン・スクール運動の背景にある学校教育の「義務」「無償」「中立」の諸原則に関して、その近代教育思想史における意味を解説・検討する。	松浦良充（明治学院大学教授）	松浦良充（明治学院大学教授）
13	ライン－国民教育の理論化の試み－	明治中期の日本の教育界に圧倒的な影響を与えたヘルバルト派を代表するラインの理論は、ヘルバルトの「教育的教授」の理論を国民的規模での学校制度が普及する状況において具体化することであった。そこに至る経過を略述する。	金子茂	同上
14	デューイ－成長そのものとしての教育－	20世紀のアメリカ合衆国における進歩主義教育運動に関して、ジョン・デューイの思想を中心に、進歩主義批判の思想も含めて、この磁気の教育論争に関して、その近代教育思想史における意味を解説・検討する。	松浦良充	松浦良充
15	教育思想の近代から現代へ	結びの章として、20世紀以降の現代教育思想に対して近代の教育思想をどう位置づけたらよいかを次のごとく展望する。近代の帰結としての現代、現代という時代区分とその特徴、教育と教育思想における近代と現代、現代と教育思想への視点。	宮澤康人	宮澤康人

＝ 教育の歴史（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：佐藤　秀夫（日本大学教授）〕

全体のねらい

この講義のねらいは、日本の教育の問題性をその歴史に即して根源的に考えてもらうための素材を提供することにある。ただし、歴史講義の例に多い、ある時間軸に沿って概説していくという形式をとらず、特徴的な問題領域別に史的流れを説明していく方式をとりたい。取り扱う時期は、現在の日本の教育の骨格が形成された、明治維新から第二次大戦前後までの近現代を主とするが、必要に応じてその前後に及ぶことがある。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	教育の歴史とは	教育の歴史を学ぶ意味はどこにあるのか。人間にとっての学習の自発性と強制性の発端（「学」と「教」のちがい）、「学校」の発生と社会身分制との関係、日本の教育の時期区分論、具体的なコトやモノに即して教育を考えるなど、講義の導入をはかる。	佐藤秀夫（日本大学教授）	佐藤秀夫（日本大学教授）
2	明治維新と教育	非欧米文化圏での初の「改革・開放」の実験となった明治維新により、日本の教育の近代は始まる。その状況を1870年代～1880年代の特徴的な事実に基づいて説明する。御雇教師、留学生派遣、「学制」、「教学聖旨」をめぐる教育論争、「改革・開放」を可能にした近世日本の文化条件など。	同上	同上
3	教育勅語の成立	教育の「欧米化」と「国民化」との狭間で天皇の権威に依拠した教育勅語の形成史を、通説への批判とともに明らかにする。教育勅語の内容構成の特徴とその問題性、およびそれがその後の教育界に与えた影響などを説明する。	同上	同上
4	学問と教育の制度化	国家制度としての近代学校の枠組みの形成過程を、学問と教育の未分化から分離の定着という視点より考察する。初等教育の単一化と中等教育以上の分岐化の成立事情、学歴による社会階層の改編、ジェンダーと学校、平等と競争の関係などを解説する。	同上	同上
5	学校と空間	学校には一定の空間が必要である。その空間の設定における日本の特徴を解明する。黒板と教壇、学校の立ち机と手習塾の座り机、一足制の大学と二足制の小学校、小中学校になぜ運動場があるのか、廊下をめぐる南北論争、など。	同上	同上
6	学校と時間	学校教育は一定の時間の制約の中で進行する。その時間の制約における日本の特徴を解明する。授業日指定と休日指定（通年授業制）、学年の始終期（四月制と九月制）、夏休みの問題、修業年限は何によって決まるのか、など。	同上	同上
7	教科書とは(1)	日本における近代教科書の形成過程を、教科書概念の検討、教科書制度の変化、とくに国定制成立にみる戦前文部省の教科書規制の強化などを解説する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	教科書とは(2)	前回に引き続き、文部省の教科書政策の変動に起因する教科書内容の変化、および「モノ」としての教科書の社会史を説明する。	佐藤秀夫	佐藤秀夫
9	鉛筆、ノート、謄写版	学習用具の変化が近代教育の方法改革を下支えしていった過程を検討する。学習用具としての毛筆と鉛筆、試行錯誤を許す鉛筆と消しゴムのセット、雑記帳と大学ノート、文集づくりの武器だった日本創作の謄写版などを、教育方法の改革と学習負担増大の両面から考えていく。	同上	同上
10	服装と教育(1)	服装のもつ社会規範性と内面拘束性に留意しつつ、学校での服装規制がなぜ生ずるのかを考える。軍服をモデルとしたユニフォーム、男子中等学校以上の場合をここでは扱う。	同上	同上
11	服装と教育(2)	服装規制に現れた教育規制の具体例として、女学生の通学服装と女性教育観との相関関係を検討する。最初の女学校での服装ユニ・セックス化、儒教主義徳育重視と和装回帰、国家主義の登場と洋服化・女袴、体操の重視とセーラー服の定着、など。	同上	同上
12	試験と選抜	近代学校に必然化した学習成果の評価法と、上級学校進学のための選抜の史的特徴を分析する。定期試験の結果による席次決定・落第・進級・飛び級の発生、考査の意味、通信簿、そして入試競争の激化とその影響など。	同上	同上
13	教育での「外」と「内」(1)	国家統合の過程で新たに包摂した少数民族などマイノリテイへの教育を先行例として、台湾・朝鮮などにおいて植民地教育が開始された。植民地の子どもたちにとって、学校教育を通じた立身出世の道はどのように開かれていたのか、あるいは閉ざされていたのか。植民地の教育制度に即して考える。	駒込武（お茶の水女子大学助教授）	駒込武（お茶の水女子大学助教授）
14	教育での「外」と「内」(2)	植民地の教育は文化統合の手段であり、その武器とされたのは日本語教育である。植民地に対する日本語教育強化の史的問題性を、最初の植民地である台湾の事例に則して説明する。	同上	同上
15	象徴と教育	国家・国民を初め、集団構成員としての統合や連帯を意識させるために、標旗・標章・歌曲などに表現させた象徴についての教育は、学校においても重視されている。しかしその抽象度が高いほど、「見えざるイデオロギー」教育に結果することがある。ここでは旗章を中心にして、象徴を教育に用いる場合の問題性を考察する。教育の自由と集団性との史的関係を考察して、本講義の結びとする。	佐藤秀夫	佐藤秀夫

＝　教育社会学（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：天野　郁夫（国立学校財務センター教授）〕
〔主任講師：藤田　英典（東京大学教授）〕
〔主任講師：苅谷　剛彦（東京大学教授）〕

全体のねらい

教育現象についての実証科学としての教育社会学について概説する。教育は個人にとっても社会にとっても、その成長・存続・発展の要に位置する重要な社会的営みであり、社会生活のあらゆる側面と関連している。そのような教育の形態・構造・機能、個人と社会にとっての意味、教育と社会との関連などについて、教育社会学はどのように考察してきたかを概説し、そのなかで教育社会学の理論と方法について説明する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	教育社会学とは	教育社会学とはどのような学問であるかについて概説する。それは教育に関わる諸現象を社会的に研究する学問と定義されるが、その対象の捉え方、社会学的方法、基本的概念について説明する。また、日本の教育社会学の特徴についても簡単に説明する。	藤田英典（東京大学教授）	藤田英典（東京大学教授）
2	社会化と社会統制	個人が文化を習得し社会の成員になっていく過程を社会化という。それは、社会が世代を越えて再生産される過程でもある。この二重性をもった社会化の過程はどのように構造化されているか、その構造化の様式は社会によってどのように異なるかについて考える。	同上	同上
3	家族・地域の教育	高学歴化や産業化・都市化・情報化の進展にともなって、教育環境はどのように変化してきたが、それにともなって子どもたちの生活と成長の過程はどう変化してきたか、社会化の担い手としての家族・地域の人間関係はどう変化してきたか、といった問題について考える。	同上	同上
4	情報化社会の教育	コミュニケーション・メディアの変化は生活様式と文化は生活様式と文化空間をどのように変えてきたか、とくに情報化と消費の高度化の進展は青少年の意味世界をどのように変えてきたか、成長の過程と教育の課題はどのように変化してきたか、といった問題について検討する。	同上	同上
5	教育問題の社会学	「学校の荒廃」が言われて久しいが、青少年の非行・逸脱や、教育に関わる諸問題はどのように変化してきたか、その変化は社会環境の変化とどのように関連しているか、教育社会学はそれをどのように据え、どのように解明してきたか、といった問題を検討する。	同上	同上
6	学校制度の社会学	組織的な教育の場である学校が、どのようにして生まれ、産業化の進行とともに発展をとげ、現在のような巨大な制度へと成長するに到ったのかを歴史社会学的にあとづけることにより、学校制度の基本的な構造を明らかにする。	天野郁夫（国立学校財務センター教授）	天野郁夫（国立学校財務センター教授）
7	カリキュラムと教育的知識	学校は、古い世代から世代へと文化を伝承していくための、専門的な機関である。どのような文化や知識が、選ばれ分類され、序列づけられるのか。教育的知識の選択・配布・序列づけと社会との関係について考える。	苅谷剛彦（東京大学教授）	苅谷剛彦（東京大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	学校の組織と文化	学校は、教師集団、生徒集団からなる社会的組織である。それぞれの集団は、ものの見方や考え方を共有することで、教師文化、生徒文化を形成している。学校の組織としての特徴、教師文化と生徒文化の形成のメカニズム、それが教育過程に及ぼす影響について考える。	苅谷剛彦	苅谷剛彦
9	教育過程と教室空間・学校空間	教育という社会的行為の最小単位は、教師と生徒、ないし生徒同士の相互作用である。教師の期待効果、生徒のグルーピングの学習への影響、さらにはそれらの相互行為を外枠として規定している教室空間、学校空間の特徴について考える。	同上	同上
10	学校の社会的機能	学校で行われる様々な活動は、社会との関わりで見たときに、どのような役割を果たしているのだろうか。学校における諸過程が、人材選抜機能、社会化機能、正当化機能を果たしていることについて検討する。	同上	同上
11	高等教育の社会学	初等教育から始まった学校教育の発展の波が中等教育をへて高等教育の段階へと及んでいく過程で、高等教育の中核的な機関である大学の重要性が増すとともに、性格が変化し、学歴社会を出現させ、さまざまな問題を生み出していることを明らかにする。	天野郁夫	天野郁夫
12	階層・学歴・職業	現代社会の主要な制度のひとつとなった学校が、その階段的な構造のゆえに、いかに人々の能力（業績）による評価と選抜の機構として機能し、人々をさまざまな、職業に代表される社会的な地位に配分していくかを説明する。	同上	同上
13	教育改革と学習社会	現代社会の巨大化した学校制度が、その内部に、また社会の諸制度との関連でさまざまな問題を抱えるようになり、それがくり返し改革の動きを生んでいること、そのなかから学習社会の実現が改革の重要な目標として浮かびあがっていることをのべる。	同上	同上
14	教育社会学の技法	教育社会学は経験科学のひとつである。理論は実証研究によって強化され、実証研究は理論によって枠組みを与えられる。教育社会学において、実証研究の基礎となる調査の方法と研究テーマとの関係を中心に、データの収集と分析の方法について考える。	苅谷剛彦	苅谷剛彦
15	教育社会学のパラダイム展開	教育社会学研究の発展過程を概観し、機能主義、葛藤理論、方法的経験主義、解釈的アプローチ、社会史的／歴史社会学的研究など、主要なパラダイムの特徴と最近の研究動向について検討し、教育社会学における理論と方法および今後の課題について考える。	藤田英典	天野郁夫 藤田英典 苅谷剛彦

＝ 道徳教育（’９９）＝（ＴＶ）

〔 主 任 講 師 ： 木 原 孝 博（倉敷市立短期大学長）〕
〔 主 任 講 師 ： 大 西 文 行（横浜市立大学教授） 〕

全体のねらい

道徳教育を単に学校教育に位置づけて考えるだけでなく、学校教育を取り巻く地域的、社会的、文化的環境との相互作用的、共同的な観点から、考えることを目的にする。道徳教育の目的は、道徳性、すなわち人間の自・他相互の福祉の向上に資する傾向を形成することです。

回	テ ー マ	内 容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	道徳教育と教育学	ペスタロッチ、ヘルベルト、デューイ、マカレンコなどの道徳教育理論を解説する。教育的目的論から道徳教育を論じる。	木原孝博（倉敷市立短期大学長）	木原孝博（倉敷市立短期大学長）
2	道徳教育と教育社会学	教育社会学者の道徳教育理論ないしは社会化理論を解説する。	同 上	同 上
3	道徳教育と心理学	道徳性の形成、発生のメカニズムについて心理学的な面からの研究から道徳教育を考える。アイゼンクバンデューラなどの道徳性の形成、道徳的行動、道徳的情意形成について理論と道徳性の個別性についての人格理論を解説する。	大西文行（横浜市立大学教授）	大西文行（横浜市立大学教授）
4	道徳教育と発達心理学	道徳性の形成、発生のメカニズムを発達的側面からの研究から道徳教育を考える。コールバーグ、ホフマン、セルマンらの道徳性の発達についての研究から道徳教育を考える。	同 上	同 上
5	道徳教育と文化人類学	文化による価値、道徳的価値の多様性について学習し、多様な価値体系での道徳教育について考える。	木原孝博 大西文行	木原孝博 大西文行
6	家庭教育と道徳教育	道徳性の発達の基盤となる家庭での親子関係の相互作用での道徳性の発達の過程について学習する。	大西文行	大西文行
7	地域教育と道徳教育	学校での道徳教育は、学校と地域共同体との密接な連携でなされることが必要である。地域共同体と連携し道徳教育を実践しているアメリカのボストンでの実践を中心に考える。	同 上	同 上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	生涯教育と道徳教育	幼児期、幼児期、少年期、青年期の発達課題とその解決を通して人格が形成されていくプロセスを明らかにする。	木原孝博	木原孝博
9	国際化社会と道徳教育	従来の国という概念を超えた概念が広がっている。国際化である。他国についての理解とともに、他国と主体的、共同的に対処する必要がある。国際化社会での道徳教育に実態の観察を通して道徳教育のあり方を考える。	大西文行	大西文行
10	多文化社会と道徳教育	現在我が国は、アメリカやカナダのように未だ多民族、多文化、多宗教の国ではないが、9章で論じられたように、近い将来そのような状況を迎えることになる。そのような状況での道徳教育のあり方を、タイ、中国およびカナダの実践を比較しながら通じて考える。	同上	同上
11	情報化社会と道徳教育	情報技術の発達に伴い、多様な価値、道徳的価値を含んだ情報を処理することが求められてくる。情報処理能力の形成の観点から道徳教育のあり方を考える。	同上	同上
12	学校教育と道徳教育　(1)	学校教育の仕組みを領域と機能の視点から分析、教科指導と教科外指導、学習指導と生徒指導の役割を明確化しながら、学校教育の仕組みの中に道徳教育を位置づける。各国の文化型のちがいによる学校教育のあり方、道徳教育のあり方のちがいに着目する。	木原孝博	木原孝博
13	学校教育と道徳教育　(2)	わが国の道徳教育の歴史を辿りながら、「道徳」の時間を特設して道徳教育をする事の意味を明確にする。	同上	同上
14	道徳の時間の実践例　(1)	「教科のなかでの道徳教育」と「道徳の授業」を取り上げ、それぞれのメリット、デメリットを明らかにする。	同上	同上
15	道徳の時間の実践例　(2)	「道徳性発達」理論に基づいた道徳の時間の実践を取り上げ、それぞれのメリット、デメリットを明らかにする。	大西文行	大西文行

＝ 幼児教育の社会学（’９８）＝（R）

〔主任講師：萩原　元昭（江戸川大学教授）〕

全体のねらい

今日、幼児の能動性、有能性や人とのやりとりの能力に関する新たな知見が、幼児教育のパラダイムの転換を招き、家庭、地域や幼稚園、保育所のカリキュラムや方法、環境構成の見直しが求められている。本講では、幼児の遊び、生活の場である家庭、園、地域を、個性形成のコミュニケーション体系として把え社会学的に考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	幼児の発達への社会学的アプローチ	幼児の発達の特性を、能動性、有能性や人とのやりとりの能力の形成として捉え、異なる個性を持つ幼児一人ひとりの心理的要求に適応するaccommodation systemの形成のにない手としての保育者・教師と幼児の二者関係、知識習得の方法など社会学的に究明。	萩原元昭（江戸川大学教授）	萩原元昭（江戸川大学教授）
2	家庭環境	幼児の最初の社会化の場としての家庭において、父親の育児参画・加の必要が訴えられている割合には少ない現状もあってか、母親の育児不安を解消するための手段として、園が地域の子育て支援センターとして家庭を支援するしくみの必要性が期待されている。	同上	同上
3	遊びとメディア	幼児の生活のほとんどが遊びであり幼児は遊びを通して多くのものを学ぶ。その遊びもマルチメディアの発展に伴い、テレビゲームを初め電子メディア遊びが盛んになり、新しい幼児教育の問題を生み出している。問題点を具体的に取り上げながら課題を明かにする。	森楙（広島修道大学教授）	森楙（広島修道大学教授）
4	幼児の仲間関係	発展的視点を含めて幼児期の仲間関係の特徴をふまえた上で幼稚園・保育所という集団保育施設が幼児の仲間関係の形成に果たす役割について考察する。園生活における幼児の仲間関係について、観察事例をもとに、遊びや保育形態、園環境などとの関連から捉える。	青井倫子（愛媛大学講師）	青井倫子（愛媛大学講師）
5	保育所の生活環境	保育所は子どもが生活時間の多くを過ごすところであるので、安全で情緒の安定した生活のできる環境を整えることが大切である。その中での遊びの指導を通して心身の健康の基礎や豊かな感性、表現力などを育成するのである。このような保育環境の重要性を考察する。	栃尾勲（立正大学教授）	栃尾勲（立正大学教授）
6	幼稚園の生活環境	幼稚園教育は「環境を通して行う」といわれているように、どのような環境のもとで、どのように生活を展開するかが重要となる。幼稚園の生活環境について、心身の発達、関係性の発達、表現力の発達という視点から、何が大事になるのかを考えてみる。	柴崎正行（東京家政大学教授）	柴崎正行（東京家政大学教授）
7	保育内容の社会学	保育内容構成の原理として収集型から統合型への変化を、領域「絵画製作」「音楽リズム」の廃止、それに代わる、領域「表現」の創設という例示で考察すると同時に、幼児の興味・関心に基づく指導計画の作成過程について考察を加えてゆく。	萩原元昭	萩原元昭

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	幼児の保育方法と環境構成	幼稚園や保育所における保育方法は、時代の変化に伴って変わりつつある。日本において保育方法がどのように変化してきたのかを論ずると共に、そこでの保育者の役割についても明らかにする。特に現在の保育における環境構成の意義と内容については詳しくふれる。	柴崎正行	柴崎正行
9	日本の幼児教育文化	幼稚園や保育所では、幼児を意図的・組織的な集団単位に組み込んで保育活動を展開する。幼稚園で編成される集団単位の種類とその編成原理、それらの集団単位を前提に展開する保育者と幼児の間の相互作用の様相から、日本の幼児教育の文化的特質を考察する。	結城恵（群馬大学助教授）	結城恵（群馬大学助教授）
10	幼児教育実践の研究	保育者自身が行なう園内研究、保育者以外の者が幼稚園や保育所をフィールドとして行なう研究など、幼児教育実践の研究の意義や方法また限界などについて研究をする際の視点の持ち方や保育者－幼児－研究者の相互の関係なども視野に入れて考察する。	青井倫子	青井倫子
11	園と家庭・地域との相互支援	いじめ問題や不登園問題にあえぐ幼児にとり家庭の父母と園の保育者とが相互に支援しあうシステムを意図したさまざまな連携方法について、例示しながら考察してゆく。その際統合的視点として、幼児一人ひとりの心理的要求に適応する視点の重要性について論ずる。	萩原元昭	萩原元昭
12	地域における子育て支援センターの役割	子育ての伝承や見聞が希薄化する中で、保育所や幼稚園に対して地域の子育て支援センターとしての役割が要請されている。子育て環境の変化と地域の子育て相談、親同士の交流等について、子どもに視点を合わせながら、その実態と課題を考察する。	栃尾勲	栃尾勲
13	プレイ・パーク	ロンドン郊外にあるホーランドパークの中にあるプレイパークを訪れ、幼児にとって魅力のあるプレイパークの条件を、社会学的視点からアプローチし、明らかにすると同時に、プレイリーダーの役割や幼児の生活環境の安全性などの関連とで究明する。	萩原元昭	萩原元昭
14	マルチ・カルチャリズムに基づく幼児教育	外国籍幼児の増加に伴い、保育者と幼児・親とのデスコミュニケーション、異文化としての幼児・親との接触による園の多文化など日本の幼児教育のパラダイム転換のひきがねにもなっている現状について考察する。マルチ・カルチャリズムの視点から園保育を論及。	同上	同上
15	幼児教育思想とその社会的背景	子どもの生活と遊びを大切にしようとする現在の保育文化は歴史的遺産と背景をもっている。幼児教育の思想と実践を歴史的な展開の中でたどるだけでなく、当時の社会におかれた幼児や親の生活の状況などその社会的背景についても考察してゆく。	林信二郎（埼玉大学教授）	林信二郎（埼玉大学教授）

＝ 現代社会の学力（’９９）＝（R）

〔主任講師：駒林　邦男（岩手大学名誉教授）〕

全体のねらい

現代日本社会における学力をめぐる問題状況について論じ、日本の子どもたちの学力は、どうなっているのか、「日本型」高学力の弱点はどこにあるのか、「日本型」高学力を支える授業の特質は何か、子どもたちの人生にとって学力はどんな意味をもっているか、そもそも、「学力」とは何か、いま、どのような学力観、授業が求められているか －これらの論点について、具体的な例をあげて講義をしたい。なお、1990年代後半の教育改革論議における学力問題についても論じる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「学校化・情報化・消費化」社会の中の子どもたち	講義の方針と概略を説明する。現代日本の子どもをめぐる社会を「学校化・情報化・消費化社会」状況ととらえ、戦前から1960年頃までの子どもの生活（家庭・地域・学校の中の生活）と比較する。	駒林邦男（岩手大学名誉教授）	駒林邦男（岩手大学名誉教授）
2	学力をめぐる社会状況	過熱する学力競争の社会的背景と過熱化の経緯について、具体的な例をあげながら述べ、学力競争に子どもたちを向かわせる親の心理についても考えていく。	同上	同上
3	「学校からの逃走」と、「学（校）歴信仰」	1970年代以降の「教育荒廃」、「子どもたちの学校からの逃走」という事態に対する臨時教育審議会、1990年代後半の中央教育審議会などの対応を取り上げるとともに、社会の「学（校）歴信仰」をめぐる問題について論じる。	同上	同上
4	学力観概史	1872年は「学事奨励に関する被抑出書」から今日に至るまでの学力観の変遷を、明治以来の教育理念の変化と関連させながら論じる。	同上	同上
5	「新しい学力観」、その問題点	「新学力観」、特に「関心・意欲・態度」の重視について述べ、3点にわたって、「新学力観」の問題点を指摘する。	同上	同上
6	学校知、学校知地学力	普通「学力」と呼ばれているのは「学校知学力」である。「学校知」とは何かを明らかにすることによって、社会的通年としての学力の「制度化・公定化部分」の基本的性質（基礎可能性、規範性）について論じる。	同上	同上
7	「日本型高学力」と、それを支える授業の特質	国際的学力調査（ＩＥＡ）、文部省学力調査のデータによって、日本の子どもの学力の高さを示す。この高水準を支える授業は、知識注入型授業であることを、放送担当者が行った調査結果に基づいて具体的に説明する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	「日本型高学力」の問題点	学力の地域差・階層差、断片的知識の量とそれらの知識の意味的関連についての理解の質と著しい跛行、理解のドロップアウト学力の「剥楽」、子どもたちの「勉強・学力観」について論じる。	駒林邦男	駒林邦男
9	伝統的構造の一斉授業	高学力を支えてきた「伝統的構造」の一斉授業とはどんな授業かを、評価の特徴、学びの組織化の特質、一斉授業と学びの個別性との構造的摩擦について説明する。	同上	同上
10	学校化された学び特異性	具体的生活の中での学びとの対比によって、学校知の学び（「学校化された学び」）の人工性・迂回性を浮かびあがらせる。	同上	同上
11	学校知学力の特性	「学校知学力」の基本特性が「非・ヴァナキュラー性」であること、すなわち受験手段性・依存性、「学校課題」性であることについて論じる。	同上	同上
12	隠れたカリキュラム、「日常知」	「もう一つの学力」としての「隠れたカリキュラム」を教育学的に定義し、学校知学力の対極にある「日常知」について、さまざまな角度から論じる。	同上	同上
13	子どもにとっての学校・学び・学力（一）	具体的データを使って、子どもの授業実感について探り、「学びの疎外」状況の拡がりについて述べる。	同上	同上
14	子どもにとっての学校・学び・学力（二）	高校生の学びの現状 － 学校離れ、学力離れ観について紹介し、また、高校生の否定的自己認識（自己過少評価）について述べる。	同上	同上
15	教育「改革」と昏迷の中の学力問題	14回の講義を整理する。「まとめ」として、現在の教育改革の動向との関係の中で、学力問題について論じる。	同上	同上

＝ 教育の政治経済学（’００）＝（ＴＶ）

〔 主任講師：金子 元久 （東京大学教授）〕
〔 主任講師：小林 雅之 （東京大学助教授）〕

全体のねらい

教育を経済現象との関連で捉えることによって、教育システムの構造や機能を理解することを目的とする。「教育は経済・社会およびそれらの変化とどのような関係にあるか」ということをマクロに把握することが最大のねらいである。このため、講義全体を、教育と社会・経済発展、経済現象としての教育、しごとと教育、教育の政治経済学の4つのトピックに分けて説明する。特に、現在の日本の学校教育、とりわけ高等教育を理解することが目的であるが、そのために歴史比較や国際比較も行う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	教育と経済を見る眼	・教育と経済・社会の関わりについて、簡単な図式をもとに解説する。教育がなければ社会は成り立たない、逆に社会がなければ教育は成り立たない、という関係を説明する。 ・この科目を通じて、現代社会と教育の接点のどこが問題か、学生に考えてもらいたい問題とアプローチの方法を説明する。 ・各回の内容の簡単な紹介をする。	金子元久（東京大学教授） 小林雅之（東京大学助教授）	金子元久（東京大学教授） 小林雅之（東京大学助教授）
2	教育と社会・経済発展 (1) ～教育と社会発展の歴史～	・教育と社会システムの関連をとらえるマクロな図式を提示する。 ・中世から近代、現代にいたる教育システムの発展を説明する。 ・その結果生じた現代の教育システムの特徴や問題点を説明する。 ・生涯学習など現代の教育システムの変化への動きとその背景を概説する。	小林雅之	小林雅之
3	教育と社会・経済発展 (2) ～近代日本の教育と社会～	・近代以前の教育、特に江戸時代の教育の特徴を簡単に説明する。 ・これと対比することで明治の教育改革の考え方とそれによって生じた教育システムの拡大を解説する。 ・社会的選抜と教育的選抜の結びつきによる学歴社会システムの成立と発展を概説し、その戦後への遺産についてふれる。	同上	同上
4	教育と社会・経済発展 (3) ～世界の教育と社会～	・社会経済発展と教育の関連を、世界各国について比較する。ＧＮＰと就学率の関連などを図で説明する。 ・発展途上国がかかえる問題点を、国際会議などの報告書をもとに紹介する。 ・途上国の例をとりあげ紹介する。（資料映像、ロケ）	金子元久	金子元久
5	経済現象としての教育 (1) ～教育と「市場」メカニズム～	・教育を経済的な現象として捉える見方を、「教育機会市場」と「労働市場」の2つの市場モデルをもとに説明する。 ・教育機会市場の構造と変化を具体的に説明する。 ・学卒労働市場の構造と変化を具体的に説明する。 ・２つの市場の関連を説明する。	同上	同上
6	経済現象としての教育 (2) ～社会的投資としての教育～	・教育を社会的投資と見る見方を説明する。識字率と就学率や近代化との関連などを例にする。（映像） ・経済発展と教育との関連を、人的能力政策を例に説明する。 ・経済学理論として人的資本論の登場の背景を説明する。（映像、または写真） ・人的資本論の骨格をわかりやすく説明する。	同上	同上
7	経済現象としての教育 (3) ～個人的投資としての教育～	・人々の進学行動を人的資本論の立場から経済学的に説明する。（映像、または写真） ・個人的な投資に対する利益の算出方法を具体的に提示し、収益率により進学行動を説明できることを具体的に示す。 ・教育だけでなく、人間行動の理論としての人的資本論について簡単に紹介する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	しごとと教育(1) ～産業・職業の変動と教育～	・職業と教育の関連をマクロに捉え、具体的なデータに基づいて、両者の関連を説明する。 特に戦後日本について、分析した結果を図やグラフでわかりやすく提示する。 ・学歴獲得と社会移動の関係について機能主義的な一般モデルを提示する。（映像）	小林雅之	小林雅之
9	しごとと教育(2) ～学歴と就職～	・特に、日本では教育と職業が密接な関係を持たない理由を説明する。 ・職場で要求される知識や技術と学校教育の対応などミクロな教育と職業の対応について説明する。 ・人的資本論に批判的な経済学的・社会学的理論による教育と職業の対応関係の捉え方を紹介する。 ・日本の終身雇用制と内部労働市場化による学卒一斉採用方式について説明する。（映像）	同上	同上
10	しごとと教育(3) ～女性の職業と教育～	・女子の労働参加と高学歴化との関連を捉える見方を紹介する。 ・女性と職業の関連について、日米の相違を比較する。（映像） ・今日の女性と職業の問題点と教育の関連を論ずる。	同上	同上
11	教育問題の政治経済学（1） ～戦後日本の教育～	・戦後日本における教育の量的拡大を紹介する。それに対する政策的課題を提示する。 ・高度成長のための手段としての教育と教育需要の急激な拡大の関連を説明する。 ・教育の拡大とその歪みの増大、社会問題化した教育の例をあげる。 ・それに対する教育政策として、自由化、多様化、個性化など国際社会の中での社会資本としての教育のありかたを説明する。	金子元之	金子元之
12	教育問題の政治経済学（2） ～教育と社会階層～	・教育と社会階層の関連、それをむすぶものとしての社会学的、経済学的な要因に関する研究を紹介する。 ・教育の機会均等に関する様々な議論と問題点を紹介する。 ・現代日本における教育の機会均等を具体的に評価する。 ・教育の機会均等にむけた奨学金や授業料などの政策を紹介する。	同上	同上
13	教育問題の政治経済学（3） ～教育における政府の役割～	・教育における政府の役割と市場メカニズムの関連について、様々な理論を紹介する。 ・新自由主義の思想など、政府の教育への介入が必ずしも自明でないことを説明する。 ・教育制度のコントロールと政府の関連、その問題点を説明する。 ・政府の教育支出について、日本の特徴を国際比較によって具体的に解説する。 ・高等教育への政府補助を例に、政府と教育に関する現在の問題点を解説する。	同上	同上
14	教育問題の政治経済学（4） ～教育改革の動向～	・臨時教育審議会や大学審議会、中央教育審議会などの議論をもとに、教育改革の方向を解説する。 ・中等教育の改革について、業者テストの廃止や総合制などの動きを紹介する。（映像、ロケ） ・高等教育の改革について、教育改革などの動向を紹介する。（映像）	同上	同上
15	日本の教育と社会の課題	・教育改革とその問題点について総括的に論じる。 ・世界の教育改革の動向と日本の改革を比較する。 ・教育の生産的機能と選抜配分機能という観点から、教育と経済・社会の関連をまとめる。	同上	同上

＝ 子どもと若者の文化 ＝（ＴＶ）

〔主任講師：本田　和子（聖学院大学教授）〕

全体のねらい

現代の文化は、子どもや若者によって不断にリフレッシュされているが、それは、一方では、伝統文化の変容に連なり、世代間の葛藤の原因ともなっている。本講義は、それら今日的な問題に焦点を合わせ、彼らの文化の解析を通して逆照射される「文化の継承し変容、およびその創造」について考えていきたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	文化と若い世代	全体のねらい。および、「文化」「子ども」「若者」などの用語の定義と説明。 次回以降の内容の概略。	本田和子（聖学院大学教授）	本田和子（聖学院大学教授）
2	文字と映像の文化(1)	文字が文化をリードした時代から、映像の時代へ、さらに電子メディアの時代へと、社会の中心媒体が変化すると同時に、大人と若い世代との関係も変化を余儀なくされている。このことに言及し、現代における「文字文化」の位置を考える。	同上	同上
3	文字と映像の文化(2)	「教科書」と「児童文学」は、従来、子どもに関連する出版文化の代表的存在であった。現在は、「子どもが本を読まなくなった」と言われる一方で、「ヤング・アダルト」という新ジャンルが勃興している。今回は、それらについて考察する。	同上	同上
4	文字と映像の文化(3)	文字に代わって、先ず子どもの世界を席巻したのは漫画文化である。それらは、1960年代にはテレビと結び付いてアニメ文化を形成する。ここでは、子ども向けアニメを取り上げつつ、映像文化について考える。	同上	同上
5	身体文化の中の子どもと若者（1） －甲子園神話と「若者」像－	からだを動かして遊ぶことは、子どもや若者にとってどんな意味を持つか。それらは、伝統的社会から現代に向けて、どのような変貌を遂げたか。	清水諭（筑波大学講師）	清水諭（筑波大学講師）
6	身体文化の中の子どもと若者（2） －規格化される子どもの身体と精神	遊びとスポーツの同質性と異質性。 遊びからスポーツへという変化は、子どもや若者に何をもたらしたか。	同上	同上
7	身体文化の中の子どもと若者（3） －自然の中での遊びと身体－	スポーツ・イベントとして、運動会や甲子園大会などを取り上げ、その意味と変遷を探る。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	「もの」の文化史(1)	現代は、人の暮らしに大量の「もの」を提供し、子どもの生活も「もの」と不可分である。これらの現象の解明に当たって、先ず、子どもの世界を特徴づける玩具・遊具に焦点を合わせる。	本田和子	本田和子
9	「もの」の文化史(2)	現代の子ども・若者の世界には、従来の意味での玩具・遊具の範疇に入らないものが、生活の快適化のために取り込まれている。個室に用意されたテレビ・ラジオ、電話器・パソコンなど。これらは、彼らの生活に何をもたらしたのだろうか。	同上	同上
10	「もの」の文化史(3)	伝統的生活観を欠如からの発想とすれば、現代の若い世代のそれは充足からの発想と言い得る。充足を目指して不足を補うために行動が開始される状態と、何も必要としない状態から何らかの動きが開始される状態の違いを考える。	同上	同上
11	都会の中の子どもと若者 (1)デパートのなかの子どもと若者	現代の都市空間のなかで、盛り場と呼ばれる歓楽の中心は、若者によって形成されたとも言われる。この経緯を踏まえつつ、現代の都市と彼らの関係に焦点を合わせ、その特性について論及する。（遊園地論を含む）	吉見俊哉（東京大学助教授）	吉見俊哉（東京大学助教授）
12	都会の中の子どもと若者 (2)映画館のなかの子どもと若者	新しいメディア空間の形成に関する貢献と関与は、若い世代が先行世代を凌駕している。これらニューメディアにかかわる彼らの生態に注目し、その意味するものについて考える。	同上	同上
13	新しい言語と新しい現実 (1)情報メディアと若者	コンピューターは、もう一つの言語として、私どもの生活に不可欠の道具と化した。それに熱中する少年・少女たちをどう考えるかは、避けて通り得ない現代の課題である。コンピューターリテラシイの発達について、ゲストと対談する。	本田和子	本田和子
14	新しい言語と新しい現実 (2)地球環境問題と若者	コンピューター世代の生きる場所は、従来の現実世界とは異なり、新しく生成される架空の現実であると言われている。しかし、情報網を通じて遭遇する新しい現実の一つとして、地球環境問題が浮かび上がっているが、それらと若者のかかわりを巡って、ゲストとの討論を試みる。	同上	同上
15	現代文化と子どもと若者 －展望と課題－	急変を続ける現代文化の中で、子どもと若者はどのような役割を担い、どのように自身の世界を形成していくのだろうか。それらに関して、私ども大人の責任は何か。現状を整理しつつ、今後の課題を考える。	同上	同上

＝ 変わる社会と大学＝ （R）

〔 主任講師 ： 牟田 博光（東京工業大学教授 ）〕

全体のねらい

第二次世界大戦後50年以上を経て、大学教育を中心とした高等教育は大きな転換期にある。明治維新や終戦・占領といった社会の大変動に伴って行われた改革とは違い、平時において、変わる社会に対応して変化していく様はこれまでに見られなかったことである。戦後を中心として、大学がこれまでどのように変化し、これからどのように変化しようとしているかについて理解を深める。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	大学の発展	大学の歴史は中世にさかのぼる。大学の慣習の中にも当時の伝統を引き継いでいるものもある。さらに、大学は各国の社会経済的事情によって様々な発展を遂げた。日本の大学の発展に関係のある事柄を中心に、大学の発展過程をたどる。	牟田 博光（東京工業大学教授）	牟田 博光（東京工業大学教授）
2	進学率の変化と高等教育計画	戦後、大学進学率は順調に伸びてきたが、昭和50年頃から15年間ほどは停滞から減少傾向を見せた。しかし、その間、専修学校は拡大した。高等教育計画が実施に移されたのもこの時期である。進学率がこれからどう推移するかも重要な関心事である。	同 上	同 上
3	大学の配置と進学移動	地方在住の子弟が都会の大学に進学する場合などに、進学に伴う地域間移動が顕著である。進学移動は大学入学希望者の地域分布と大学の地域配置のアンバランスによってかなりな程度説明可能である。大学の地域配置は政策による影響が大きい。	同 上	同 上
4	大学教育の大衆化	大学進学率が増加することは、一部のエリートだけではなく、誰もが大学に行けることを意味する。当然、大学はどうあるべきかに関する考え方、教育の中身、学生生活などにも変化が見られる。大学教育の大衆化の行方、影響について考える。	同 上	同 上
5	大学改革とカリキュラムの変化	設置基準の大綱化によって、各大学のカリキュラムは各大学が自由に編成できるようになった。大学改革の歴史的経緯もふまえながら、一般教養的科目と職業的専門科目のバランス、カリキュラムの改善などについて説明する。	同 上	同 上
6	自己点検・評価	多くの大学で自己点検・評価が行われている。この動きは我が国だけのものではない。各国の動向もふまえながら、なぜこのようなことが一般的に行われるようになったか、各大学で具体的にどのような自己点検・評価を行っているか、それらがもたらす政策的意味は何かについて考える。	同 上	同 上
7	入学試験のあり方	入学試験のありかたは大学の問題であるばかりでなく、受験勉強を通して、高校以下の教育にも影響を与える。なぜ今のような入学試験制度ができたのか、他の国ではどうやっているのか、日本では今後どのように改善していくことが可能かについて示す。	同 上	同 上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	大学の高度化	大学が高等普通教育化しても、一部の大学では高い研究機能を維持することが要求される。大学における研究機能は大学院に移っていく。さらに大学院は研究者の養成の場であると共に、高度な職業人養成の場としての役割もはたさなければくなってきた。	牟田博光	牟田博光
9	受益者と負担区分	大学教育によって、教育を受けた個人だけではなく、大学が存立する地域社会、あるいは国全体としても大きな利益を受けている。一方、大学を運営するには多くの財源が必要である。個人や国、地方公共団体が費用を分担して負担することになるが、どのような割合で負担すれば良いかについては議論のあるところである。	同上	同上
10	卒業後の進路	大学へ進学する目的の一つは、大学での学習を基礎として、実社会で活躍できる足がかりをつけることにある。大学における職業能力の開発は大きな課題である。大学の専門と職業の関連がどのように変化しているか、職業への準備教育はどうなるか、というった問題を明らかにする。	同上	同上
11	高等教育の多様化と柔軟化	大学以外にも大学レベルに相当する教育・訓練・研究施設がある。単位互換制度、連携・併任制度、学位授与機構の活動などにより、大学との関連も強まっている。大学と大学以外の高等教育機関の違いは何か、様々な高等教育機関がどのように共存していくのかなどについて考える。	同上	同上
12	新しい通信技術の利用	衛星放送、光ファイバー、高性能コンピュータなどの技術革新を教育に導入することにより、新しい形の大学教育が可能になりつつある。これらの技術を大学教育に実際に 利用しているケースを紹介し、大学の技術的未来像を明らかにする。	同上	同上
13	遠隔高等教育の可能性	日本だけではなく、他の先進国や発展途上国にも放送大学のような遠隔教育大学が増えてきている。それぞれ設立の経緯は異なるが、同じ様な特徴も見受けられる。海外の遠隔教育の実態と比較することにより、日本の放送大学の将来について考える。	同上	同上
14	大学の国際化	国際化の波は大学にも押し寄せている。多くの大学、大学院で留学生の数が増え、授業を英語で行うところも出てきた。留学生を引き受けるだけではなく、国際研究交流も盛んになった。発展途上国に出かけて、その国の大学のレベルアップに貢献している教官も増えた。大学は教育に関する政府開発援助の前線となってきている。	同上	同上
15	学習社会と大学の未来	職務上の知識の更新や、生き甲斐を求めて多くの成人が学習を続ける学習社会が長期的には到来すると考えられる。そのなかで大学がこれからどのような役割を果たしていくべきか、大学の未来について考える。	同上	同上

＝ 家庭・学校と地域社会（’００）＝（ＴＶ）

－地域教育社会学－

〔主任講師：岡崎　友典（放送大学助教授）〕

全体のねらい

人間の成長・発達といった社会的な作用（教育）を中心的に担う学校と家庭そして人間の共同生活の場面としての「地域社会」との関係を、生涯学習・教育の視点から明らかにする。特に学校・家庭が地域の諸組織・機関との連携協力により、どのような形で地域社会形成の担い手（主体）を生み出しているかについて、地域の教育を社会学の手法を用いて研究してきた「地域教育社会学」の研究成果をもとに考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	地域社会の変動と教育（導入）	第二次世界大戦後の我が国の地域社会の変動と教育の関係について、地域開発政策の展開過程に即して、その特徴と教育上の課題を提示する。 教育環境としての地域と「家庭・学校」との関係について、研究上の枠組みを提示し、また具体的な事例を通して全体の構成を紹介する。	岡崎友典（放送大学助教授）	岡崎友典（放送大学助教授）
2	家族周期と教育の課題－ライフステージ別学習－	ライフスタイルが大きく変容する我が国の家族の生活を、家族類型別にライフステージに即した学習課題を、家族周期と個人のライフコースに視点から考察する。	同上	同上
3	家庭の福祉と教育の役割－高齢社会の家族－	家族のもつ機能について、福祉と教育の視点から明らかにする。とくに児童と高齢者にとって、家族が果たす役割について具体的な場面に即して考察する。	同上	同上
4	家族・親子関係と世代の交代 地域間・世代間の交流－	家族規模の縮小と形態の変化に伴い、家庭のもつ養育・教育機能に変化が見られる。次世代を育てるために地域社会が果たす役割について、山村留学の実践と郷土芸能の伝承形態の事例を通して検討する。	同上	同上
5	学校の統合・新設と学区－開かれた学校と地域－	近代の公教育の学校の成立と発展の歴史をたどるとともに、人口の分布変動に伴う学校の統合と新設の問題を通して、地域社会にとって学校が果たす役割について考察する。	同上	同上
6	学校と地域社会の連携・協力－地域教育の創造－	学校教育の目標を達成するための教育実践に、地域がいかなる役割を果たせるか、また地域住民の生活をより豊かにするために、子どもだけでなく大人に対して学校が担える役割は何かについて、連携・協力といった視点から明らかにする。	同上	同上
7	ＰＴＡと地域住民組織－大人の教育責任－	教職員と保護者でによって組織されるＰＴＡを、子どもを媒介に成立する成人の学習組織と捉え、さらに保護者が地域社会の中堅世代として地域社会形成に主要な役割を担うといった視点から、大人の教育責任について検討する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	生涯学習機関としての学校－学校の再生－	急激に変動する社会、また寿命の延長により、人々の生涯にとって学校の果たす役割・意味は多様に変化している。義務教育を含め生涯学習に学校が果たす役割、とくに教育内容について、学校の再生といった角度から検討する。	岡崎　友典	岡崎　友典
9	人材の養成と移動－職能形態の過程－	社会人としての能力とくに職業人としての能力（職能）形成が、学校教育を土台としてどのような過程を経てなされるについて、義務教育学校終了後の個人のライフコースに沿って具体的な形態・内容について検討する。	同　上	同　上
10	地域社会の再編と新旧住民の交流	急激な人口の分布変動にともなって、地域住民の構成が大きく変化している。地域社会のもつ人間形成機能（教育）は、住民の人間関係を基盤として発揮されるといった視点から、住民の交流・融和がどのような形で図られているかについて考察する。	同　上	同　上
11	地域社会の活性化と教育事業(1)	地域社会がその社会的・自然的条件を生かして「自治体」としての活性化を目指して、全国各地で貴重な実践がなされている。その(1)では、都市と農村の交流事業が、地域社会の教育機能を最大限に利用して行われている事例を分析する。	同　上	同　上
12	地域社会の活性化と教育事業(2)	その(2)では、定住人口と交流人口を確保することにより、地域の産業を活性化させるうえで、教育の果たす役割について検討する。	同　上	同　上
13	地域文化の創造と継承(1)	地域社会の人々の生活文化がどのような形で創造されまた継承されるかを、二回に分けて考察する。その(1)では生活文化の概念を明示し、地方自治体レベルで地域文化を創造・継承させるためにどのような施策・態勢が考えられるか、伝統工芸をの事例を通して検討する。	同　上	同　上
14	地域文化の創造と継承(2)	その(2)では、地域の「産業」と「文学」が地域文化とどのように経過をたどって形成されてきたかについて、家具製造業と文学記念館の事例を通して検討する。	同　上	同　上
15	学習社会の成立と教育の課題（まとめ）	全体のまとめ。現代社会を学習社会といった社会類型として捉えるとき、地域社会でなされる教育がどのような形態をとるかについて、各回で提示した市町村レベルでの事例を要約し、今後の研究上の課題を提起する。	同　上	同　上

＝ 国際化と教育（’９９）＝（R）

〔主任講師：佐藤　郡衛（東京学芸大学教授）〕

全体のねらい

21世紀は、トランスナショナルという国境をこえた人の動きが盛んになり、否応なく異文化との共生を迫るようになる。教育も例外ではなくトランスナショナルな動きに対応し、異なった文化をもつ人との共生が大きな課題になろう。国際化の進展により異文化共生という新しい課題が提起され、そのための教育をどのように構想するかが問われるようになっている。それは、19世紀以降前提にしてきた国民教育という枠組みから、「地球人」といった普遍的な価値や意義をもつ教育への転換を迫っている。本講座は、こうした視点から国際化に伴い必然化する日本の異文化間教育にかかわる諸問題について考察することを課題にする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	国際化社会における教育	近年、「トランスナショナル」な動きが急速に進行している。こうした状況の中で、複数の文化間にまたがる教育現象が日常的におこっている。複数の文化の狭間で生じる教育を異文化間教育というが、本章では、この異文化間教育について概説する。ついで、その方法論や研究課題について考察する。	佐藤郡衛（東京学芸大学教授）	佐藤郡衛（東京学芸大学教授）
2	日本の教育の国際化	本章では、日本の教育改革を国際化という視点から跡づける。特に、異文化間にまたがる教育に対して、国と地方自治体がどのような施策を展開してきたかを探るとともに、その問題点と今後の課題について考察する。	同上	同上
3	日本における異文化間教育の進展	本章では、日本の異文化間接触の現状を概観し、その多様性について明らかにする。そして、異文化接触、異文化適応をとらえる枠組み、文化をとらえる視点について考察する。	同上	同上
4	海外子女教育	国際化の進展とともに、海外で育つ日本の子どもが増えている。この子どもたちは海外子女とよばれるが、その就学形態は日本人学校と現地校に分けられる。本章では、海外で生活する子どもの異文化接触、異文化適応の特質を就学形態別に考察する。	同上	同上
5	帰国子女教育	本章では、帰国子女の実態と帰国子女教育の政策、実践の推移を考察する。ついで、帰国子女の自文化復帰について学校文化との関連で検討し、その問題点を明らかにする。そして帰国子女教育の今後の課題を展望する。	同上	同上
6	在日外国人子女教育	本章では、最近、急増している外国籍の子どもをとり上げる。まず、外国籍の子どもの異文化適応の特質について考察する。ついで、外国人の子どもの教育を異文化共生という視点から考察し、その課題について明らかにする。	同上	同上
7	外国人留学生	本章では、急激な増加を続けている外国人留学生をとり上げる。留学生が日本で直面している問題点を明らかにする。そして、留学生の異文化適応に焦点をあて、異文化適応を支援するための様々な試みについて考察していく。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	在日外国人学校・国際学校	本章では、日本にある外国人学校、国際学校をとり上げる。日本に在留する外国人のための学校は、特定国の子どもを対象にした外国人学校と、どの国の子どもにも門戸を開放している多国籍の子どもからなる国際学校に分けられる。それぞれの実態と問題点を明らかにするとともに、日本の教育制度との関連で、今後の課題について考察する。	佐藤郡衛	佐藤郡衛
9	異文化間教育におけるアイデンティティ	異文化間教育で重要なテーマの一つにアイデンティティの問題がある。本章では、アイデンティティをめぐるこれまでの研究を概観する。社会的アイデンティティ、文化的アイデンティティの形成、そして、関係性としてのアイデンティティの形成というこれまでの研究の動向について考察する。	同上	同上
10	異文化間コミュニケーション	異文化間コミュニケーションは、異文化への適応過程や異文化間教育における二文化の相互作用の過程の中心的テーマである。本章では、異文化適応スキルの習得におけるコミュニケーションの役割、異文化間コミュニケーションにおけるステレオタイプ化の問題などについて考察する。	同上	同上
11	異文化接触と言語発達	本章では、異文化接触と言語について取り上げる。異文化間教育では、第二言語の習得が大きな課題になるが、その教育の現状と課題について考察する。特に、日本の外国人子女を対象にした言語教育の取り組みについて具体的に検討する。	同上	同上
12	国際理解教室	本章では、国際理解教育の日本における発展の軌跡を跡づける。日本の国際理解教育は、多様化の道を歩んできたが、1990年代にはいり統合化の動きが出ている。そうした動向について明らかにするとともに、今後の国際理解教育の課題について展望する。	同上	同上
13	教育における国際交流	国際化の進展は、国際交流活動を活発化させる。本章では、高等学校を中心とした教育国際交流活動、学校の国際交流活動、教員の国際交流、そして地域における国際教育交流をとり上げ、現状と問題点、そして今後の課題について考察する。	同上	同上
14	グローバルな教育への取り組み	本章では、グローバルな教育の取り組みとして、開発途上国への教育援助・協力をとり上げる。まず、教育援助・協力の歩みを概観する。ついで、文化という枠組みから教育援助・協力について考察する。そして、異文化間教育という視点から教育援助・協力について考察する。	同上	同上
15	国際化教育の課題 ― 日本の異文化間教育の展望 ―	本章では、これまでの講義のまとめとして、国際化と教育との関連をどのようにして把握するかという研究上の課題について考察する。異文化間教育研究の方向性、今後の研究の進め方、そして、実践のあり方について明らかにする。	同上	同上

＝ メディアと教育（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：白鳥　元雄（聖徳大学教授）〕
〔主任講師：高楽　康雄（江戸川大学教授）〕

全体のねらい

教育は、教える者と学ぶ者相互のコミュニケーション過程である。教育の場面で使われるメディア － 基幹的媒体である音声言語を初め、文字・活字・映画・電波・コンピュータなど、それぞれのメディアが産みだされた歴史的・社会的文脈と教育との関わりを考察し、現在の問題としてメディアの受容と活用の方法を探る。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	情報化とメディア	・オリエンテーションとして、1970年代以降の社会の急激な情報化 － 情報量の巨大化とメディア技術の高度化・と多様化による情報の質の変化 － について考察する。 ・教育とメディアの関係をデールの「経験の円錐」とその展開によって捉える。	高楽康雄（江戸川大学教授） 白鳥元雄（聖徳大学教授）	高楽康雄（江戸川大学教授） 白鳥元雄（聖徳大学教授）
2	「言語」というメディア	・生物進化の歴史の中で獲得されたヒトHomo sapiensの基幹的なコミュニケーション・メディアとしての音声言語の特性を考察し、特に、ことばを「聞く」という行動を分析してメッセージの受容に何が必要かを考える。	遠藤　榮（元帝塚山学院大学助教授）	遠藤　榮（元帝塚山学院大学助教授） 白鳥元雄
3	文字と学校	・文字の誕生は、文明にとって画期的な発明であった。ヒトの営為が時間と空間を超えて伝達・蓄積され新しい世界が開かれた。視覚メディアである文字の特性を考察する。 ・また文字の誕生は、その技術に習熟させるための訓練機関 － 「学校」の誕生を促した。	同上	同上
4	グーテンベルク革命	・文字の文化の象徴としての「図書館」、そして12世紀から続々誕生する「大学」。その時代的雰囲気の中でグーテンベルクの活版印刷術が発明される。後に F.ベーコンがいうように、それは火薬・羅針盤と並んで、全世界の外観と状況を一変させた。	白鳥元雄	白鳥元雄
5	教科書と体験	・コメニウスの「世界図絵」の特徴と意義を教育の大衆化との関係で捉える。 ・日本の教科書の変遷を学校教育の思想との関係でたどる。 ・直観教授の伝統と直接経験を重視する教育思潮を考察する。	高楽康雄	高楽康雄
6	掛け図と黒板 － 教育の大衆化のなかで	・教育のメディアのひとつとして学校の建築様式と施設について開智学校を例に考察する。 ・近代学校の特徴的な方法である一斉教授のメディアとして重要な黒板の利用をみる。 ・一斉教授に効果的な視覚的メディアである掛け図を考える。	同上	同上
7	新聞	・明治期、日本の新聞 － 特に「小新聞」は漢字にルビをふることによって、文字に弱かった階層にまで市場を広げ、同時に人々の識字力を高めた。新聞は教育を目指したメディアではないが、「現在」を伝える強力なメディアとして、今も教育の場で教材性をもつ。	白鳥元雄	白鳥元雄

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	映画はなにをもたらしたか？	・映画の発明とわが国への導入の経過をふりかえる。 ・初期の映画への教育界の対応の否定的な立場と肯定的な立場を解説する。 ・積極的な映画への取り組みとして、成城学園の事例を紹介する。	高柴康雄	高柴康雄
9	ラジオとテレビ	・ラジオの発明と教育への活用 ― アメリカの事例から考察する。 ・わが国でのラジオ放送にみられる社会教育のメディアとしての応用を歴史的に跡づける。 ・ラジオからＴＶへ ― 「テレビ学校放送」の発展と学校教育の改革との関係について考える。	高柴康雄 遠藤榮	高柴康雄 遠藤榮
10	テレビと子ども文化	・1960年代に入ってＴＶは急速に普及した。何のスクリーニングも経ずに子どもの生活圏に入ってくるＴＶはさまざまな影響を与える。20世紀後半子ども文化の中心的存在となったＴＶとその周辺のビデオやＴＶゲームなどを含め、その影響力と教育力を検証する。	白鳥元雄	白鳥元雄
11	博物館再発見	・資料（メディア）の集積と展示による博物館の教育活動を実例により考察する。 ・館内・館外でのイベントへの発展を紹介する。 ・博物館の新しい展開 ― 「見る博物館」から「さわる・試す博物館」「バーチャル・ミュージアム」へ ― を紹介する。	高柴康雄	高柴康雄
12	コンピュータの登場	・戦後間もなくコンピュータが発明され、単なる自動計算機械から情報処理機器へ、さらに人間の思考をシミュレーションしたり、機械を制御したりするようになる。ここでは、コンピュータのもつ本質的な仕組み、メディアとしての発展・変容について紹介する。	永野和男（聖心女子大学教授）	永野和男（聖心女子大学教授）
13	学習環境としてのコンピュータ	・コンピュータの導入は、教育現場に大きな変革の衝撃を与えている。教師の教材提示だけでなく、子ども自身が道具としてコンピュータを使い、情報活用能力を高める実践も行われている。学習の場でのコンピュータの役割を、実践も紹介しながら考察する。	同上	同上
14	情報ネットワークと教育	・インターネットの普及によって、コンピュータはコミュニケーションの窓口としての機能が期待されている。時間と空間を超えたコミュニケーションは教育の構造を大きく変える。情報ネットワークが教育にどのような変革をもたらすのか、事例を紹介し考察する。	同上	同上
15	新しいリテラシー	鼎談 ・情報社会に求められる「リテラシー」とは何かを考察する。 ・コンピュータ・リテラシーの必要条件を考える。 ・映像を読み解く力、批判的読解と自己表現の力をどのように育てるかを検討する。	高柴康雄 白鳥元雄 永野和男	高柴康雄 白鳥元雄 永野和男

＝知覚心理学＝（TV）

〔主任講師：相場　覚（放送大学教授）〕
〔主任講師：鳥居　修晃（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

人間における知覚活動は、そのほかのすべて心的活動のもととなる極めて重要な機能といえる。そこには神経生理学的基礎過程から高次の認知的精神過程までを含む複雑な機構が関係し、それらを理解することによって、われわれは人間の精神活動に一層深い洞察を得ることができよう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	感覚・知覚・認知	感覚と知覚と認知はともに密接に関連しあっている。これらの間の関係を考察し、それぞれの働きと特徴を概観する。	相場　覚（放送大学教授） 鳥居修晃（東京大学名誉教授）	相場　覚（放送大学教授） 鳥居修晃（東京大学名誉教授）
2	知覚研究の方法	知覚研究のためには数多くの研究法が開発されて来た。そのあるものは心理学とおなじ位の歴史を持ち、またあるものは最近になって使われはじめた。それらを解説し、知覚研究の進展との関係をみる。	同上	同上
3	視覚（1） 明るさ・色	視覚のもっとも基本的な属性である明暗の知覚と色彩視について、それらの日常の経験との関連について考察し、またそれらの働きを担うメカニズムについての最新の理論を解説する。	相場　覚	相場　覚
4	視覚（2） 形・立体視	形には平面図形の形状と立体の形態とがある。平面図形のうちには輪郭線図形と面図形とがある。これらの平面図形の形をひとはどのように知覚するかという問題について論述し、次に、立体の形に関してはその見方が視点に依存して異なることを中心に考察する。	鳥居修晃	鳥居修晃
5	視覚（3） 運動視	われわれの視覚的世界は運動する事物に満ちている。またわれわれも動きながら物を見る。したがって運動の知覚はわれわれの生存に欠く事の出来ない機能である。そのメカニズムと生物学的な意義を論ずる。	相場　覚	相場　覚
6	開眼 手術後の視知覚	先天性の視覚障害の人たちが開眼手術を受けた直後、どのような視覚体験をするかという問題を取り上げて論考する。次に、手術後、色・形の視知覚ならびに事物の認知活動がどのような過程を経て増強・形成されていくかという問題を中心に考察を進める。	鳥居修晃	鳥居修晃
7	聴覚（1） 聴覚の基礎	聴覚の基礎として、音の物理的性質と聴覚の属性との関係について、コンピュータ・グラフィックスを用いて説明する。マスキング実験などを通じて聴覚の基礎的モデルの1つである臨界帯域の概念について概説し、さらに聴覚の動特性について例をあげて紹介する。	難波精一郎（宝塚造形芸術大学教授）	難波精一郎（宝塚造形芸術大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	聴覚（2） 音楽・音声 騒音	音楽の演奏表現に大きく関与する高さ、大きさ、音色の時間的変化についてデモ実験により説明する音声の知覚に及ぼす諸要因について合成音声を用いて紹介する。騒音の人間に及ぼす影響について例示し、音環境のアセスメントの重要性について概説する。	難波精一郎	難波精一郎
9	触覚	触覚については、触覚器官の代表であるヒトの手を主題とし、その触情報処理メカニズムについて解説する。まず、触情報を受容する皮膚機械受容単位の種類と機能を述べ、次にそれらの情報から主観的な触感覚がどのように産出されるかに言及する。	宮岡徹（静岡理工科大学助教授）	宮岡徹（静岡理工科大学助教授）
10	痛覚	痛覚については、その出現・抑制に心理的側面が極めて重要であることが知られている。そこで、末梢的な痛神経系の解説は基本的な事項に止め、トップダウン的な痛覚御機構について詳しく述べる予定である。	同上	同上
11	空間認知	空間認知に関する研究の流れを跡づけ、次に両眼・単眼による立体視、距離が異なる同一対象の大きさの知覚の問題を取り上げる。ギブソンのきめの勾配、ジュレッツのランダムドットステレオグラムに関しては具体例を示して解 説を加える。	鳥居修晃	鳥居修晃
12	味覚・嗅覚	味やにおいの知覚について、閾値、感覚的強度、味・においの分類に関する学術的知見を学び、特にこれらの感覚に特徴的な快不快と前述の知覚との関係、またそのような快不快が形成される過程やその要因について考える。	斉藤幸子（通産省工業技術院生命工学工業技術研究所研究室長）	斉藤幸子（通産省工業技術院生命工学工業技術研究所研究室長）
13	時間知覚	時間は普段はあまり意識されない。そして意識されたとしても時と場合によってそれは全く異なって把握される。それらを規定する要因は何か。また時間知覚の生物学的基礎は何か、などについて概観する。	相場覚	相場覚
14	知覚の計算理論	計算機の発達にともなって、人間の知覚機能を計算機によって模擬させる試みが多くなされた。それらを概観し、それがわれわれの知覚機能の理解にどのように役立っているかを考察する。	同上	同上
15	知覚研究の応用感覚代行	知覚の研究が応用面にどのように活用されているかについて論じる。先天性盲人ないし早期失明者における視覚の障害状況について解説するとともに、それらの人たちに視覚以外の感覚系を通して視覚情報を伝達する試み（感覚代行技術）について紹介する。	鳥居修晃	鳥居修晃

＝ 認 知 心 理 学 ＝（ＴＶ）

〔主任講師：小谷津　孝明　（日本橋学館大学長）〕
〔主任講師：星　　薫　　（放送大学助教授）〕

全体のねらい

認知心理学とは意味づけて知る、共感的に知る、創造的に知る、ことの心理学である。伝統的な科学的心理学の枠組みからすれば、知覚、記憶、学習、理解、思考、推論、問題解決、等が主題となるが、本講では素材を実験室的心理学内のみならず日常経験や文学・芸術あるいは文化人類学等の領域にも求め、従来とかく認知特性の要素的・機械論的研究に終わりがちであった点を反省し、出来るだけ人間および人間心理の全体像を、発達成長的側面も加味しながら、浮かび上がらせるよう努力したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	認知心理学とは何か	認知とは何か。感覚と知覚とどう区別されるのか。記憶や知識との関連はどうか。心理学の歴史の中でまた計算機科学など関連諸学において認知がどのように論じ研究されてきたかについて概述し、現在および将来の認知心理学のあり方について展望する。	小谷津孝明（日本橋学館大学長）	小谷津孝明（日本橋学館大学長） 星　薫（放送大学助教授）
2	「もの」の認知	“もの”の認知は物理的実在の単なるコピーではない。対象性、外在性、関係性を把えることがその本質である。その対象性の認知（同定）が知識なくしては成立しないこと、その知識との照合のメカニズムの基礎的なモデル、枠組の効果、補完・分節・平滑化といった能動的処理外在性の認知を支える内的メカニズムと投射機能等について述べる。	同　上	同　上
3	「こと」の認知	認知はしばしば意味・概念・エピソードなどにおよぶ。それは“こと”の認知である。対象が複数個集まればそこに関係性が認知される。「部分と全体」の関係はゲシュタルト心理学の主題だ。また、“こと”の認識が“生”に対してもつ深い関わりについて「目と目の世界」というテーマで話したい。	同　上	同　上
4	注意のはたらき	特定対象への予期的注意は意識を明瞭にし、認知を鋭敏化し、焦点化し、思考・判断・決定へのレディネスを高め、そして対処反応を速める。一方、新奇のもの、変化するもの、主体との関わりの強いものなどは特に注意を向けていないときにも認知されやすい。これらのメカニズムについて論じる。	同　上	同　上
5	記憶の世界(1)	認知した結果は記憶され、その後必要に応じて検索・想起され、次の認知に資する。その記憶の仕組みについて、情報処理的視点から、短期記憶と長期記憶、精緻化とスキーマ、意味記憶とエピソード記憶、意味ネットワーク、想起の再構成性等のサブテーマを設定し、構成的に概説する。	同　上	同　上
6	記憶の世界(2)	記憶の想起の仕方と精神障害の視点から４種類の記憶を分類し、それらの重層性と神経生理学的解体・精神医学的解体について述べる。左脳・右脳と機能局在説や老人性健忘症などについては、“人間の実存”という視点からも論じることにしたい。	同　上	同　上
7	学習と動機づけ	私たちは時には人に教えられ、時には自らの経験を通して、知識を習得し、知識間の関連を見つけて整理し、さらには考え方をも学んでゆく。この学習の形成過程と学習行動を積極的・効果的に自発・促進させる動機付けのメカニズムについて論じる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	思考と問題解決	思考とは問題解決に際して行われる知識の操作であるが、それはしばしば形式論理よりも生活経験に基づく実際知識や直感に依拠し、結果は誤りや曖昧さを伴いやすい。その実相を知り、対処の方策を考える。また、インターネットを通じてのグループ問題解決など最新の研究についても紹介したい。	小谷津孝明	小谷津孝明 星　薫
9	知的理解とスキーマ	談話・文章・諺・資などを素材として、それぞれの理解の仕方とそれをそのように方向付けるもの、①フォーカシング：特定の述語・題・詞書など、②枠組み：スキーマ・スクリプトなど、③連想・類比・メタ認識など、について論じる。	同　上	同　上
10	共感的理解と主客融合の視点	人と人との“間主観的理解”ほど人の共存・実存にて重要なものはない。それは相互の身体的・言語的・感性的表現を通して意図や気持ちを知的・共感的に理解することを要請する。伝承や文学芸術作品を素材にして、記憶とも関連させながら述べる。	同　上	同　上
11	感情、情動、そしてこころの原風景	幼児期に経験したシーンの記憶のうち成人してからの認識の仕方のありようを大きく支配しているものがある。これを原風景と呼ぶ。それには陽性的なものと陰性的なものがあるが、後者の典型は“トラウマ”であろう。感情と感動の問題として論じたい。	同　上	同　上
12	こころの構図を描く	これまで主として“こころの機能・働き方”について考えてきた。行動主義のように、こころを非実体的なるが故に心理学の対象とすることに反対する立場もあったが、この辺で“機能を産み出す構造”に力点を置き“こころ”の構図を描くことにする。	同　上	同　上
13	カウンセリングと認知の機能	“うつ”の治療法として最近注目されている“認知療法”を軸に、二三の代表的なサイコセラピーについて、特に知的・情動的認知の視点から述べ、さらにそれぞれが人間のこころをどのように見てきたか－つまり人間観－について考え、認識を深める。	同　上	同　上
14	思いやりと看護のこころ	人を思いやるということは、自己中心的思考から他者中心的思考に変わることである。それを媒介するものはその人の憂うべき身体的、精神的状況に対する共感的理解だ。それは愛他心、ｱﾙﾄｳﾙｲｽﾞﾑの基底でもある。これらを看護の問題と絡めて論じる。	同　上	同　上
15	認知心理学的自己実現のすすめ	自分があるべきと思う最高の自分を実現して行くこと、私たちはそこから身を引いていすぎはしないか。日々を生き生きと生きるために、現在の自己を見つめなおし、ありたいと願う最高の自己を生きるにはどうしたらよいかについて考えたい。	同　上	同　上

＝ 学習の心理学（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：今田　寛（関西学院大学長）〕

全体のねらい

われわれは毎日さまざまな行動を行って環境に適応しているが、その殆どが経験を通して学習されたものである。本書では学習の諸現象、その根底にある基本法則、さらにそれらの法則の応用・利用の実際について講ずる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	学習とは	われわれは環境に適応するためのいろいろな仕組みをもっている。あるものは生得的なものであるが、多くは生まれてからの経験を通して学習されたものである。学習とは何かを考え、本書で取り上げるテーマを紹介する。	今田　寛（関西学院大学長）	今田　寛（関西学院大学長）
2	初期経験の効果、経験の繰り返しの効果	学習は生まれた直後から始まり、ほぼ生涯つづくものであるが、生後間もない頃の経験はその後の適応過程に特別の意味をもつ。初期学習の重要さについて考え、普通の初期経験の欠如がもたらす不可逆な障害について論ずる。また単なる経験の繰り返しの効果についても論ずる。	同上	同上
3	古典的条件づけ	環境内の刺激間の関係の学習の問題として古典的条件づけ、あるいはパブロフ型条件づけについて述べる。また古典的条件づけの基本的諸現象について論じ、それから導き出される法則について講ずる。	同上	同上
4	オペラント条件づけ(1)	適応にとって刺激間関係の学習も重要であるが、反応の仕方を変えることによる適応も重要である。反応学習の原型としてソーンダイクの試行錯誤実験に始まるオペラント条件づけの研究と、それから導出される法則について講ずる。	中島定彦（関西学院大学専任講師）	中島定彦（関西学院大学専任講師）
5	オペラント条件づけ(2)	オペラント条件づけにおける三項随伴性について講じる。刺激による行動の制御ならびに行動と強化子の出会いの取り決めである強化スケジュールについて述べる。	同上	同上
6	回避と罰	環境の中にはそれへの接近を促す対象（快刺激）と、それからの回避・退却を促す対象（不快刺激）が存在するが、本章では不快刺激から回避したり、それに近づかない行動の学習について論ずる。	今田　寛	今田　寛
7	学習における生物的制約	各種の動物が生まれながらもっている制約条件のために、学習成立のための条件が充たされた場合であっても、どのような刺激間にも、またどのような反応でも学習されるわけではない。このような生物的制約について講ずる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	条件づけの臨床的応用	学習の諸原理を臨床場面に適用する試みを行動療法、あるいは行動修正法と言うが、本章ではそのような試みのいくつかについて具体的に述べると共に、それを通して学習の基本原理の理解を深める。	久野能弘（中京大学教授）	久野能弘（中京大学教授）
9	観察学習	これまでの章では、学習者が学習するべき行動を実際に「なすことによって学習」する場合を問題にした。しかし人は他者の行動を観察することによっても多くのことを学習する。本章はこの観察学習の問題を講ずる。	春木豊（早稲田大学教授）	春木豊（早稲田大学教授）
10	記憶の過程	記憶は、学習のみならず人間の行動全般を支える重要な機能である。記憶はいくつかの過程に分割出来るが、まずその区分について解説し、さらに情報を取り込む過程である符号化の働きについて説明する。	浮田潤（関西学院大学助教授）	浮田潤（関西学院大学助教授）
11	知識と学習	人間の持つ知識の構造と仕組みについて、現在提唱されているモデルなどを解説する。また外界の情報を理解したり、新しい情報を知識に付け加えたりする過程において、既有の知識がどう関わるかについて説明する。	同上	同上
12	言語の獲得	人間は、生後の比較的短期間の間に急速に言語を獲得する。その過程を概観し、さらにそれを可能にしている要因について解説する。また言語が人間の全般行動にどのように関わっているかについても考える。	同上	同上
13	概念と推理	概念について、いくつかの考え方を紹介した後、概念の学習に関して、概念達成実験を例にとり説明する。また概念について、プロトタイプ、自然概念、概念の階層構造などについて説明する。また概念が用いられる過程としての推理については、機能推論、演繹推論、因果推論、転導推理、仮説推理について論ずる。	嶋崎恒雄（関西学院大学助教授）	嶋崎恒雄（関西学院大学助教授）
14	問題解決と学習	問題解決の問題が歴史的にどのように研究されてきたかを、学習理論史との関連で説明する。また問題解決に影響を及ぼす要因について例を挙げて説明する。	同上	同上
15	運動技能の学習	パソコンのキーボードを叩いたり、各種スポーツの技能なども、経験による行動の変化であり、その意味で学習されるものである。本章では効率のよい技能学習の方法や、それを支える理論について論ずる。	今田寛	今田寛

＝ 発達心理学（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：小嶋　秀夫（京都学園大学教授）〕
〔主任講師：三宅　和夫（北海道大学名誉教授）〕

全体のねらい
人間の生涯にわたる心理学的発達の姿を、乳幼児期から老年期に至る重要な問題を取り上げて概観する。発達的変化に関係する個体側の条件とともに、個体がかかわる環境条件に注目する。発達の姿の学習に加えて、学際的視野、日常生活の中での発達の視点の意義などを具体的に学ぶことを通して、発達心理学への理解を深める。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現在の発達心理学	発達心理学の現状を概観する。それがどのような問いに答えようとする学問であるかを述べ、発達心理学の役割を学際的視野、社会的役割、日常生活との双方向的つながりの点から説明し、全15回の構成を示し導入とする。	小嶋秀夫（京都学園大学教授）	小嶋秀夫（京都学園大学教授）
2	発達研究の歩み	発達心理学の先駆けとしての発達研究にかんたんに触れた後、過去100年にわたる発達心理学の歩みを辿る。代表的な理論と理論家たち、発達心理学が用いる主な方法を説明する（縦断法・横断法、時代差を含む）。	同上	同上
3	ヒトから人へ	人間の初期発達を題材にしながら、発生・発育と発達についての理解を深める。時間軸に沿った変化には遺伝的なものと、環境に影響されるものがある。種としてのヒトがどのようにして社会的な人になるのかを、それらの相互作用の中で考える。	河合優年（三重大学教授）	河合優年（三重大学教授）
4	種々の機能が働き始めるとき	人間の種々の機能はいつ頃から働き始めるのかを、個々の機能系について、前回との関連から検討する。聴覚系、運動機能、さらに視覚系を扱う。	同上	同上
5	発達を作り出すもの	かなり早い時期から発達する個々の機能系が、相互にどのように関連しているのか、それがどのように発達を作り出すのかを考える。ここでは運動能力と認知機能、母子関係の成り立ちと後の発達について触れた後、他領域における発達研究の意味を述べる。	同上	同上
6	乳幼児の社会的発達	子どもは生まれて間もなくから母親を初め家庭内の人々とのかかわりの中で育って行く。やがて家庭外の子どもやおとなとの交渉を持つようになり、子どもの社会的世界は拡大して行く。このような過程を通じての社会的発達について、縦断的・生態学的に考察する。	三宅和夫（北海道大学名誉教授）	三宅和夫（北海道大学名誉教授）
7	乳幼児の情緒的発達	発達において情緒が担う役割を、乳幼児期に情緒表出がどのように社会化して行くか、親子の情緒的コミュニケーションの在り方が後年の羞恥心、罪悪感、道徳性などにどのようにかかわるかの検討を通して説明する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	認知機能の発達	ここでは、ピアジェの発達論やそれを裏付けるような実験データ、最近の認知発達理論に基づく新たな知見を述べる。その中で幼児期とは異なる児童期および青年前期の知的特性を浮き彫りにしたい。	丸野俊一（九州大学教授）	丸野俊一（九州大学教授）
9	社会性の発達	ここでは道徳性、愛他行動、自己の発達などを中心に述べる。その中で児童期から青年期前期における現実自己と社会規範（価値観）にもとづく理想自己のずれ、時間的展望などについて講義する。	同上	同上
10	個人差に応じた教育	ここでは認知スタイルやＡＴＩを中心に知的機能の個人差、創造性を育む教育形態などについて考える。また、今後社会的に必要になってくる自分の考えを自己主張できる態度・技能を育むために、教育環境や家庭環境はいかにあるべきかについても講義する。	同上	同上
11	大人になること世代をつなぐこと	大人は子どもを世話する存在となる。成熟した人間は、他者から必要とされることを必要とするからである。自己を確立し大人になることと次世代を育てることを関係付け、アイデンティティ、ジェネラティヴィティ（世代性）というエリクソンの概念を深める。	山田洋子（京都大学教授）	山田洋子（京都大学教授）
12	人生半ばの危機を越えて	もう若くない自分に向き合い、老いと死、人生の有限性を自覚し始めるのが中年期である。人生後半は必ずしも下り坂ではなく、中年期は内なる心の声に耳を澄まし、個性化の道を歩み始めるときであることを実際に示す。	同上	同上
13	人生サイクルと人生の物語り	人は自分の人生の物語りを誰かに語りたいと思い、また、自分の人生をより大きな生の循環系と重ね合わせて意味づけたいと願う。肉声で語られる日常の例を基に、ライフ・サイクルと人生を物語る意味について考える。	同上	同上
14	生涯発達の中での老年期	老年期の研究者をゲストに招いて、老年期に見られる心理的変化の特徴を把握するとともに、エイジングの個人差を生む生物学的・環境的・個人史的要因を探る。この時期を含めて、生涯発達をどう考えるかを説明する。	小嶋秀夫	小嶋秀夫
15	発達心理学の課題と将来の展望	前回までの講義を通じて、発達心理学研究が今日までに大きな進歩を遂げてきたことが理解されたであろうが、それがどのくらい現実の社会的問題の解決に貢献しているかについて考え、さらに今後進むべき方向について検討する。	三宅和夫	三宅和夫

＝ 発達と学習（’００）＝（R）

〔主任講師：永野　重史（放送大学教授）〕

全体のねらい

心理学では、「発達」とは、年齢の変化とともに行動や認識の仕方が変わることであるのに対して、「学習」とは、経験の影響によって行動や認識の仕方が変わることであるというように一応の区別を立てたうえで、それぞれの現象について研究するのが「発達心理学」、「学習心理学」であるとしている。しかし、何も経験しなくても、ある年齢に達すれば一定の行動が現れるということはないし、何歳であっても、適切な経験が与えられれば必ず目指す行動を起こすことができるということもない。「学習」と「発達」はいったいどういう関係にあるのか、どこが違うのかという問題について深く考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	学習心理学と発達心理学(1)	学習心理学では、学校の教科の学習はほとんど扱わない。動物が芸を覚えるときの学習も、人間の学習も、根本の原理は同一だと考えて、動物（特にネズミ）の学習について研究する。発達心理学は、ビネーが知能検査の作成に際して考えた精神年齢を重視し「何歳になると何ができるか」という問題に関心をもつ。その限りでは、学習心理学と発達心理学の間に関係は少ない。	永野重史（放送大学教授）	永野重史（放送大学教授）
2	学習心理学と発達心理学(2)	心理学と文化人類学をくらべると、心理学が極め出て独特の考え方をもっていることがわかる。フランツ・ボアズという人類学者は「（人類学者からみれば）生活の諸条件から独立していて、それから影響を受けないような精神の存在など考えることはできない。実験心理学が初期の段階で不毛であったのは、環境条件の影響を受けないような心が存在すると仮定する理論にもとづいて研究したからである」と言ったが、心理学のこの傾向はその後も続き、ついに、行動主義に走った。	同上	同上
3	発達段階（1）	教育の世界では、心身の発達段階を考慮して適切な教育課程を編成し、指導する、ということがいわれる。発達段階という言葉のかわりにレディネス（準備状態）という語が使われたこともあった。例えば文字の読みを教えるためには、学習者が精神年齢10歳半の精神発達の段階に達していなければならないと言われた。だが、1960年の『教育の過程』でブルーナーは、ピアジェの認識発達段階説をもとに、年齢にかかわりなくどんな内容でも指導できるという考えを発表した。	同上	同上
4	発達段階（2）	ブルーナーが注目したピアジェの認識発達段階説とはどういうものか。「発達とは精神構造の変化だ」とはどういう意味か。例をあげて説明したうえで、現在では、ピアジェの調査方法がかならずしも適切なものではなく、調査の方法を工夫すれば、幼児の知的能力はかなりすぐれたものであることが判り、ピアジェが年齢を指定して発表した「発達段階説」も大幅に修正しなければならないことがわかってきたことについて述べる。	同上	同上
5	発達と教育	「発達段階を考慮して教える」という表現は、年齢とともに自然に発達するのを待って適切な時期に指導するという意味にとられやすい。確かに、精神年齢に合わせて教材を選ぶという方法は、この方針に合う。だが、ワトソンのように年齢に伴う発達を否定して、学習ですべてをつくりあげることができるという学者もいた。ブルーナーのように、認識の構造が変わるのが発達なのだから、どの年齢でも、その子の認識構造に合わせた学習をすると考えることもできる。発達と教育の関係について学説は様々あり、「発達段階を考慮して教える」と言っただけでは、何をしてよいのかがわからない。	同上	同上
6	能力はどこに存在するのか(1)	どうして学校はつらい所になるのか。原因のひとつに、能力が増すことが学習だ「能力」をつくる「生産」が教育だという見方がある。この見方に立つと、良い教育をおこなうためには、まず能力の到達目標を決め、どういう教育的体験を用意するかを考え、最後に到達度を評価するという手順が決まる。だが、見聞きし、体験している間に、世界を理解し、人間関係を広げていくのが学習だという考え方もありうる。この考え方をとると、学習も発達も違ったものに見えてくる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	能力はどこに存在するのか(2)	知能検査を発明したビネーは、能力は個人の中にあるのだと考えていた。ピアジェも自然観察とテストの中間型の臨床的質問によって子どもたちのものの考え方を明らかにしようとしたが、質問がヒントとなってしまうことを注意ぶかくさけた。これに対して、ヴィゴツキーは、ヒントによって正しく考えられるのは、そこまで子どもの認識発達が進んでいるためなのだと考え、大人の援助を発達のきっかけだとみた。さらに、丸の絵を描いて計算したり、メモをみて説明することも、その子の理解だと見れば、子どもの能力は、頭の中だけでなく子どもの外にもあるということになる。	永野重史	永野重史
8	心理学と個人主義	学問は、客観的で普遍的な理論から成り立っていると考えられることが多いが、実際には学問も文化環境の中で形成される。子どもがうまく発達するか否かの原因を個人（親または子）に求める傾向も、何事にも原因を求める実証主義的探求、西欧の伝統である個人の道徳的責任観、個人としての完成とその結果としてできあがる個人の責任能力の育成こそが育児や教育の第一の目標だとする個人主義の考えなどが発達心理学に大きな影響を及ぼしている。研究の単位が個人としての子どもになるのもその表れ。	同上	同上
9	新しい人間観－個人主義を超えて	世の中は孤独な個人が集まっているわけではなくて、世界はどうなっているか、人の心はどのように動くか、どのような責任をもっているかについて共通の理解や信条をもっていることを前提とする「つきあい」の中に自分を置いて生活している。そのような自己を相互作用的自己という。最近の心理学では人間をそのような存在と見る傾向が強い。人は、生まれるとすぐ、自己中心的でなく、社会的であり、世界についての知識は個人の直接体験からよりは、周囲のひとびととの話し合いや代理体験から得ている。そのために、感情・認識・行為はばらばらのものではなく不可分のものとして働くようにできているとみるのが、新しい人間観である。	同上	同上
10	発達の学習説	ワトソンは発達などということをもとださなくても、学習の理論を応用するだけで、お好み通りの子どもを育てると宣言した。また、あることを学ぶとその学習がほかのことにも転移（波及）するという考えも出て、転移の可能性についての研究も盛んにおこなわれた。否定的な見解もおおかったが、現状では、学習の転移は認められているのか。それによって「発達」の現象を理解することはできないか。	同上	同上
11	学習の発達	学習という変化と発達という変化を区別して、学習心理学と発達心理学をわけているが、学習の仕方がだんだんに洗練されるということ、つまり、学習の発達という現象があるのではないか。それは、どのような変化なのか。	同上	同上
12	学習原理の普遍性	学習心理学では、動物の種をこえて、普遍的な学習原理が存在するかのように説くが、ネズミの学習とヒトの学習ははたして同じなのか。違うのではないか。同じようにして、1歳児の学習と10歳児の学習も違うのではないか。違うから、発達の研究が必要になるのではないか。年齢ごとの能力一覧表をつくるのが発達心理学なのではないだろう。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
13	複雑な精神現象の発達	道徳性の発達とか、自我の発達というのは、何が変化することなのか。「道徳性」とか「自我」などというひとまとまりの実体が存在するのか。心理学者は複雑な精神現象の発達を研究する際に、いったい何を調べるのか。	永野重史	永野重史
14	生涯発達	かつては、人生の上り坂の時期の変化をあつかうのが発達研究だった。最近では、生涯発達心理学という言葉が盛んであるが、物忘れがひどくなっても発達すると言えるのか。生物学では以前から、発生の中には部分的退行過程を含めていたし、不可逆的であれば、退化も発生現象とみなしていた。生涯発達心理学はどのような見方をとるのか。小学生と社会人では、与えられている課題が違うのに、能力の優劣をくらべることはできるのか。	同上	同上
15	学習と発達の関係	最終回として、学習と発達とは不可分のものであり、現在では、従来の学習心理学と発達心理学が、どちらも限られた立場から限られた現象を取り扱っていたので、教育に対してもいろいろと有害な提言をおこなってきたことを反省する動きが強いことを説明し、今後の学習研究、発達研究を展望する。	同上	同上

＝乳幼児心理学＝（TV）

〔主任講師：三宅　和夫（北海道大学名誉教授）〕
〔主任講師：内田　伸子（お茶の水女子大学大学院教授）〕

全体のねらい

出生より小学校入学までのおよそ６年間における子どもの心理的発達について一方において近年の研究の成果にもとづいた新しい知見を具体的に提示し、他方において社会、家族をめぐる変化を踏まえて乳幼児保育のあり方などについても検討する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	乳幼児期の発達の重要性	この20年ほどの間に乳幼児期とりわけ生後２～３年間における子どもの発達についての心理学研究が急激に発展してきた。それがどのような理論の進歩によるのか、またどのような社会的背景のもとで起きたのかについて考察する。	三宅和夫（北海道大学名誉教授）	三宅和夫（北海道大学名誉教授）
2	発達初期の子どもの能力	かつて乳児は無力な存在として扱われ心理学の研究もあまりこの時期のことを取り上げていなかった。ところが近年の研究は乳児がすばらしい能力をもつ能動的な存在であることを明らかにした。このことについて具体例をあげて説明する。	同上	同上
3	気質と行動発達	出生後間もなくの子どもにはその行動的特徴において個体差が見られる。それらは生得的な基礎をもつものであるが、養育者に少なからぬ影響を及ぼす。ここでは気質についての研究を紹介しそれが乳幼児の行動発達にどのようにかかわるかを考察する。	同上	同上
4	情動の発達	情動の機能主義的考え方を中心に、乳児期の情動発達の問題を解説する。乳児の情動は、単に親に対する信号としてだけ働いているのではなく、自分自身の状態や行動を制御する働きをもつ。そのような情動制御の研究を紹介する。情動表出の日米比較研究も紹介する。	氏家達夫（福島大学教授）	氏家達夫（福島大学教授）
5	母子システムと愛着の発達	およそ生後１年間に、母子は互いに相手に適応し、強い情緒的絆＝愛着を形成する。その適応過程には、母親自身の経験や子どもの特徴、母子を取り巻く社会状況などが関わっている。愛着の発達を、それら要因間のダイナミックシステムとして考察する。	同上	同上
6	世界を捉えるしくみ －認知機能の発達	子どもは乳児期を通して外界を認識する枠組を形成していく。事物の認識、生物概念や数概念、数を操作する仕方や出来事を因果的に捉え、自分自身の行動をモニターしたり制御できるまでを実証研究を踏まえて検討する。	内田伸子（お茶の水女子大学大学院教授）	内田伸子（お茶の水女子大学大学院教授）
7	ことばの生まれる道筋 －言語機能の発達	言語は人とやり取りする手段として人との関係を作る働きをする。また認識や情動、意志と絡み、イメージの形成や認識を深める手段となる。言語機能の発達を踏まえて、ことばの習得が子どもの発達とどう関わるか考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	対人関係の発達	家庭における人間関係の中で父子関係と兄弟関係に特に焦点をあてて検討する。また、夫婦関係や家庭の外のネットワーク（祖父母や近隣の人々）の子育てに対する影響についても併せて考える。	臼井博（北海道教育大学教授）	臼井博（北海道教育大学教授）
9	社会的認知の発達	かつて幼児といえば、自己中心的に思考し行動すると考えられてきたが、こうした幼児観は近年急速に塗り替えられてきている。幼児が他者や、自分の生活世界についてどのように理解しているのかについて検討する。	藤崎春代（帝京大学助教授）	藤崎春代（帝京大学助教授）
10	遊びの構造	「遊べない」子どものことが問題視されるほど、子どもにとって遊びは重要な活動と考えられている。なぜ遊びは子どもにとって重要なのか、あるいはそもそも遊びの中で子どもは何を行っているのかについて考察する。	同上	同上
11	メディアからの学び	日本の子どもは、誕生直後からテレビに接し、その後も絵本やテレビゲーム、そして最近ではコンピュータなど多様なメディアに囲まれて生活している。子どもはメディアとどのようにかかわり、何を学んでいるのかについて概観する。	同上	同上
12	反抗期と自律の発達	反抗期は、自律の発達と関係づけて理解されることが多い。しかし、反抗は自動的に自律を生み出すのではない。反抗を自律をへと結びつけていく親との相互作用を通して、子どもは自律的反抗を発達させる。その発達の様相を日米の母子を比較しながら明らかにする。	氏家達夫	氏家達夫
13	日本の幼児教育実践の特徴	日本の幼児教育の実践を特徴づける保育者の子育ての目標、子どもの発達についての見方、教育の方法についての信念とこれらの信念が実際の保育の方法にどのような形で反映されているのかを考える。	臼井博	臼井博
14	読み書き能力の獲得	幼児期の終わり頃までには、子どもは読み書きの世界への第一歩を踏み出す。読み書きを媒介にして子どもの世界は「今」「ここ」を超えて広がるようになる。読み書きの獲得の基盤、読み書きの獲得過程について考察する。	内田伸子	内田伸子
15	乳幼児期から児童期へ	乳幼児期から児童期にかけての発達的な連続性と変化について、またそれに対するさまざまな影響要因について考える。その中で乳幼児期の経験の発達的な意味や発達的な課題についても検討する。	臼井博	臼井博

＝　児童心理学（’９８）＝（R）

〔主任講師：無藤　隆（お茶の水女子大学教授）〕

全体のねらい
小学校期を中心に一部中学校を含めて、その時期の子どもの心の発達とその現代的背景についてまとめる。学校教育への意義を考えたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	児童期の発達の考え方	基本的な発達の理論、特に、ヒアジェ、ヴィゴッキー、エリクソンなどの考えを述べ、幼児・児童・青年の時期の対比を行う。	青木多寿子（岡山大学講師）	青木多寿子（岡山大学講師）
2	幼児から児童へ	幼稚園・保育園から学校に移行する際の発達的変化と、学校への適応の問題を述べる。	無藤　隆（お茶の水女子大学教授）	無藤　隆（お茶の水女子大学教授）
3	言葉の発達と教育	言葉によるコミュニケーションや文字の獲得についてまとめ、国語教育への意義を述べる。	青木多寿子	青木多寿子
4	数量的理解の発達と教育	幼児から児童期の数量概念の発達と教育的意義を述べる。	同　上	同　上
5	科学的認識の形成	自然科学的認識の形成を素朴概念という観点からまとめ、理科教育への意義を述べる。	同　上	同　上
6	体験学習と表現力と感性の発達	幼児教育、生活科教育、総合的学習、さらに造形や音楽　等の表現の学習の特徴を述べ、その発達的意味を整理する。	無藤　隆	無藤　隆
7	友人関係の広がり	児童期の同年齢の子ども同士の関係の発達と教室での様子を述べる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	道徳性と価値観の発達	道徳性や価値観、さらにその背景としての社会的対人的認識について述べる。	青木多寿子	青木多寿子
9	自己の成長と人間関係	自己認識の広がりとそれが友人関係や教師との関係とどう関わるかを述べる。	伊藤美奈子（お茶の水女子大学助教授）	伊藤美奈子（お茶の水女子大学助教授）
10	メディアとの関わり	読書、テレビ、テレビゲーム等のメディアとの関わりを現代での遊びの変容との関連で述べる。	無藤　隆	無藤　隆
11	現代の家庭と子ども	児童期の親子関係の特色とそれが現代の変化の中でどうなっているのかを述べる。	同　上	同　上
12	児童から思春期へ	小学校から中学校への制度的変化と思春期を迎えることが絡まっての大きな発達的変化について述べる。	伊藤美奈子	伊藤美奈子
13	問題行動の諸相	問題行動の分類を行った上で、特に、不登校と、いじめについて述べる。	同　上	同　上
14	子どもの問題行動をどうとらえるか	子どもの心の問題の顕在化の兆候と、それについて子ども自身、また親や教師や専門家がとらえる見方の違いやその意味を述べる。	同　上	同　上
15	今、先生に求められること	不登校の事例に基づき、子どもの心のあり方とその抱える「問題」の発達的意義を述べる。	同　上	同　上

＝ 老年期の心理と病理（’９８）＝（R）

〔主任講師：竹中 星郎（大正大学教授）〕

全体のねらい

老年期にみられる精神症状や痴呆を理解するためには、人間関係や生活の変化などがどのような意味を持つかを考えることが必要である。そのためには老年期心性の特徴を現実の状況との関連でとらえ、認識することが大切となる。それをふまえて、老年期にみられる多彩な精神症状について事例を通して具体的に考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	老年期の心理的特性をめぐる問題(1)	老年期とは「生きる空間の狭溢化」が避けがたい状況である。心身の衰えや人間関係、役割などの喪失は老年者を限られた人間関係や生活空間に閉じこめることになる。さまざまな喪失体験と孤独および孤立が老年者にどのような意味を持つかを考える。	竹中星郎（大正大学教授）	竹中星郎（大正大学教授）
2	老年期の心理的特性をめぐる問題(2)	人生の最終段階に人格の発達はあるか、そして老年期ににおける性格変化の諸形態を臨床的に整理する。また老年期は死が現前化するがそれをどう受けとめているかを考える。そして喪失体験や孤立、および性格の問題をふまえて老年者に課せられる適応、不適応を考える。	同上	同上
3	老年期の心理学(1)	老年期に生じる身体的、感覚知覚的、認知的変化について概観し、これらの変化を経験することで高齢者がどのように自己像を変化させ、人格的に変化する可能性をもっているかという問題を、生涯発達の視点から考察する。	星薫（放送大学助教授）	星薫（放送大学助教授）
4	老年期の心理学(2)	老年者は好むと好まざるに拘らず、多くの環境変化を経験させられる。仕事からの引退、祖父母役割、余暇時間の増加、住み慣れた場所からの移転、施設への入所、身近かな者との死別、自らの死の自覚などの問題について概観し、今後の老年期のあり方を考える。	同上	同上
5	老年期の精神病理(1) 妄想－１	老年期の精神科臨床では妄想が最も多く、症状も多彩である。精神病の素因や特定の性格との関連より、人間関係や生活の不安葛藤で生じそれを反映してテーマは現実的である。盗られ妄想の臨床を通して、老年期妄想の特徴、精神分裂病や作話との相違を論ずる。	竹中星郎	竹中星郎
6	老年期の精神病理(2) 妄想－２	思春期青年期の妄想の代表的疾患である精神分裂病は老年期にどのような経過をとるか、高齢発症はあるかなどを臨床的に考察する。また「分裂病的」といわれる迫害妄想が、高齢者ではうつ病や心因により生じることが多く臨床症状の特徴を整理することが大切である。	同上	同上
7	老年期の精神病理(3) 妄想－３	老年期に多くみられる接触欠損妄想症と「幻の同居人」妄想について、老年期心性から考察する。また老年期では痴呆とみなされることが多い人物誤認と家族否認の老年期の特徴を論ずる。そして身体面だけで受けとめられがちな慢性体感幻覚症の事例を紹介する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	老年期の精神病理(4) うつ病	さまざまな喪失体験に遭遇する老年期は、抑うつ的心理が根底に流れている。しかしうつ病を仮性痴呆ともいうように老年者では痴呆との鑑別が重要である。また老年者ではせん妄や不安焦燥、コタール症候群が多い。そして身体的管理が重要になるなどの特徴がある。	竹中星郎	竹中星郎
9	老年期の精神病理(5) 神経症圏	老年者をとりまく状況は神経症的傾向を再燃させうる。またさまざまな身体病やその不安は心身症的な色彩を強める。強迫症者は自己の完全性を保ちがたい老年期には脆く、身体的不調に心気的退行を増幅する。なかでも介護者を悩ませることが多い強迫と心気症状への対応を論ずる。	同上	同上
10	老年期の精神病理(6) 人格障害、異常行動	老年期は生活空間が狭まり人間関係が濃密になる。そのため人格の問題が顕在化する。そのことを妄想型人格障害の事例を通して考察する。また脳病変部位の症状として人格変化が生じる。そして老年期の適応形態の特異なものとして無感情、人格のスプリットを紹介する。	同上	同上
11	痴呆の臨床(1)	痴呆は老年期の最大のテーマのひとつであるが、妄想やうつ病なども含めて「ぼけ」といわれるように、その認識は不十分である。医学的特性をふまえて痴呆性疾患の臨床症状を論じ、非痴呆性疾患との鑑別に触れる。とりわけアルツハイマー病について論じる。	同上	同上
12	痴呆の臨床(2)	せん妄は脳の急性症状であるが、痴呆と区別されずに適切な治療や対応が怠かにされる。また、痴呆患者ではせん妄が多く、鑑別とその成因の理解は治療や痴呆の進行を止めるうえで重要である。さらに夕方症候群とＲＢＤについて臨床例を示して考察する。	同上	同上
13	痴呆の臨床(3)	痴呆老人の精神症状や異常行動の大半は知的障害者の心理的反応ととらえられる。事例を通してその心理的プロセスを考え、それをふまえて医療や福祉の現場の看護や介護の問題を検討する。痴呆老人のターミナルケア、尊厳死について具体的に考える。	同上	同上
14	高齢者医療について	一般病院や老人病院（治療型）での精神科コンサルテーションが必要な患者は30%前後である。そこには身体病や薬による精神症状や慢性疾患や後遺症に対する医療の問題も含まれている。老人医療の多様な形態を紹介して医療のかかわりとその限界を論じる。	同上	同上
15	高齢者福祉と医療	老人ホームや在宅介護を支えるために医療はどのような役割を担い、立場をふまえるべきかを具体的な実情に即して考える。また施設入所や入院にあたって老年者に対するインフォームドコンセントや痴呆老人の人権の問題、および財産保護のための成年後見制度について紹介する。	同上	同上

＝ 言語発達心理学（’９８）＝（R）

〔主任講師：内田　伸子（お茶の水女子大学大学院教授）〕

全体のねらい

読み、書き、話す営みは人間生活において基本的な営みである。乳児期から喃語や片言で母親と「会話」を始めるし、幼児期のはじめから、子どもは新聞・雑誌を読む大人の姿に興味をひかれ、やがて文字に目をとめるようになる。たえず他者とあるいは自分自身と語り、活字文化に触れる中で、人は自分の世界を広げ、まとまりのある意味世界を構築していくようになる。人間にとって基本的な、読み、書く、話すという営みについて、最新の発達心理学、認知心理学、教授学習の心理学の知見を踏まえ、さらに、ことばの生理学などの最新の成果に基づいて、ことばと人間の関わりについて考察を進める。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ことばと人間	ことばは世界認識の手段であり、人とやり取りする手段でもある。言語はどのようにして出現し、また獲得されていくのかについて言語獲得に制約を与える生物学的基礎を明らかにするとともに、人間にとってのことばを獲得するということの意味を考える。	内田伸子（お茶の水女子大学大学院教授）	内田伸子（お茶の水女子大学大学院教授）
2	会話の発達	会話は、話し手と聞き手がかわりばんこに発話をすることによって成立する。このような相互作用のパタンは、授乳の過程にも見いだすことができるという。――この章では、会話の発生、発達の過程をみていく。	仲眞紀子（東京都立大学助教授）	仲眞紀子（東京都立大学助教授）
3	絵本との出会い	今日では乳幼児向けの絵本が数多く発行され、子どもは早ければ0､1歳台から絵本と出会っている。絵本の読み聞かせを通して子どもは「本を読む」ことを経験し学んでいく。この章では、乳幼児期における読み聞かせがどのように行われているのか、また絵本を読むことが子どもの発達に与える影響について考える。	秋田喜代美（東京大学大学院助教授）	秋田喜代美（東京大学大学院助教授）
4	物語行動の発達	ことばは象徴機能を基礎にして成立し、人とのやり取りの手段として、また内的なモデルを構成する手段となり、しだいに、まとまりのあるディスコース（文章）が生成されるようになる。ことばから文章までの発達過程を物語産出という面から考察する。	内田伸子	内田伸子
5	読み書き能力の獲得	自分で考えていること、人に伝えたいことを文字で表現できるようになることは、生後１年して二足歩行ができるようになることと同じくらい大きな出来事である。読み書きを媒介にして、子どもの世界は「今」「ここ」を超えて広がる。この文字の世界に子どもが足を踏み入れるのはきわめて早い。本章では幼児期から就学期までの読み書き能力の獲得過程について具体的資料に基づき考察を進める。	同上	同上
6	文章の理解過程	私たちは日常生活の中で、本や教科書、新聞、雑誌、電化製品やコンピュータの取り扱い説明書など数多くの文章を読んでいる。読んでいてわかりやすい文章もあればわかりにくい文章もある。こうした時に、私たちの心の中ではどのような処理が行われているのだろうか。文章を読むとはどのような心理過程であるのかについて、認知心理学の代表的研究を紹介しながら考えていく。	秋田喜代美	秋田喜代美
7	読みの発達と教育	児童期を中心に読みに関して何が発達するのか、また読みや読書行動を促すにはどのような教育的働きかけを行うのがよいのかについて考察する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	作文の発達と教育	子どもはかなり早くから文字を読んだり書いたりする。しかし、自分で考えたことを文字で自由に表現することができるまでにはしばらく時間がかかる。本講では作文の発達について焦点をあて、作文過程でどのような精神活動に従事しているかについて考察するとともに、書くことを通して認識の深まりを助ける教育のあり方について考える。	内田伸子	内田伸子
9	読書行動の発達	読むことの心理過程についての考察（第6講・第7講）を踏まえ、読書という生活の中の一つの行動として読むことを捉え、年齢に伴う変化と環境が読書に与える影響について考える。	秋田喜代美	秋田喜代美
10	会話の発達を支えるもの	人は生まれおちた瞬間から相互交渉をもつべく方向づけられていることを学んだ。だが適切な社会的、言語的環境になければ話ことばは育たない。どのようなはたらきかけによってことばは育つのかについて考察する。	仲真紀子	仲真紀子
11	話しことばの特徴	話しことばは原初的な言語活動である。ここでは話ことば全般について、書きことばと比較しながらその特徴を考察する。話ことばに伴う身振り動作についてもふれる。	同上	同上
12	会話の情報処理	発話を理解するには、文字どおりの意味が分かるだけでは不十分である。推測される背後の意味（含意）や発話の意とをも知る必要がある。本講座で発話の理解がどのように行われるのかを検討する。	同上	同上
13	聴こえとことばの生理学	聴く・話す・読む・書くの神経機構を解説する。外界の情報を取り込む器官である聴覚器官のしくみとその働きについて理解を深め、さらに外界に働きかけるときの主要器官である発声・発語器官のしくみとその働きについて講ずる。	進藤美津子（広島県立保健福祉短期大学教授）	進藤美津子（広島県立保健福祉短期大学教授）
14	聴こえとことばの障害	話しことばが作りだされ、さらに、それが情報として受け手に伝わり、理解される過程、いわゆる“ことばの鎖”をつくりだす神経機構のどの部分に働き異常が起こったときに、どのような障害が生じやすくなるかについて取り上げる。	同上	同上
15	言語治療	言語治療の現場から子どもから大人まで、具体的症例をあげ、治療の方法と回復の過程について解説する。これを踏まえて、ことばを失うことが人間生活にとってどういうことかを理解し、ことばが人間生活においてどのような意義があるかについて考える。	同上	同上

＝社会心理学＝（TV）
－アジア的視点から－

〔主任講師：山口　勧（東京大学教授）〕

全体のねらい

日本人の社会的行動について考えること。特に、アジアの中の日本という視点から、実証的な研究結果に基づいて、比較文化的に考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	アジアの社会心理学へ	全体の枠組みを提示する。	山口　勧（東京大学教授）	山口　勧（東京大学教授）
2	方法論・固有文化心理学	相関的方法、実験的方法の解説および文化に固有な心理学の必要性について解説する。	同上	同上
3	個人主義－集団主義	個人主義・集団主義の国際比較について解説する。	同上	同上
4	自己－文化心理学的アプローチ	相互独立--相互協調的自己観において日本人と西洋人との間に顕著な違いがあることを解説する。	北山　忍（京都大学助教授）	北山　忍（京都大学助教授） 山口　勧
5	文化の継続性について	文化がどのようにして維持されるかについて考える。	嘉志摩佳久（オーストリア・LaTrobe University教授）	嘉志摩佳久（オーストリア・LaTrobe University教授） 山口　勧
6	集合性の理論--グループ・ダイナミックス	人間の集合体を一つの全体としてとらえ、理論的に考察する。	杉万俊夫（京都大学教授）	杉万俊夫（京都大学教授） 山口　勧
7	日本人の社会的行動1「コントロール観」	日本人およびアジアの人々のコントロール観について解説する。	山口　勧	山口　勧

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	日本人の社会的行動 2「信頼」	日本人の信頼感の特徴に付いて、アメリカと対比させながら解説する。	山岸俊男（北海道大学教授）	山岸俊男（北海道大学教授） 山口　勧
9	日本人の社会的行動 3「甘え」	日本人に特徴的とされる「甘え」の現象について解説する。	山口　勧	山口　勧
10	日本人の社会的行動 4「紛争解決」	日本人およびアジア人の社会的葛藤の解決法について、西洋人のそれと対比させながら、解説する。	大渕憲一（東北大学教授）	大渕憲一（東北大学教授） 山口　勧
11	中国人の社会的行動 1「中国文化における対人関係のダイナミックス」	日本人と同様に集団主義的と考えられる中国人の集団行動の特徴について、日本やアメリカとの対比をしながら解説する。	Kwok Leung（香港中文大学教授）	Kwok Leung（香港中文大学教授） 山口　勧
12	中国人の社会的行動 2「中国文化における体面	中国人にとって重要とされる体面の問題について解説する。	同上	同上
13	韓国人の社会的行動 1「恨」	韓国人を理解するために重要と考ええられている「恨」について解説する。	Uichol Kim（韓国中央大学校助教授）	Uichol Kim（韓国中央大学校助教授） 山口　勧
14	韓国人の社会的行動 2「我々意識」	韓国人が強く持つ「我々意識」を、日本人や西洋人のそれと比較しながら解説する。	同上	同上
15	文化間のコミュニケーション・まとめ	同じ様な文化を持つ、さまざまな勝ちを共有するようにみえるアジアの人々の間でも、コミュニケーションの難しさは存在する。この点について考え、全体のまとめを行う。	渡辺文夫（上智大学教授） 山口　勧	渡辺文夫（上智大学教授） 山口　勧

＝ 人格心理学（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：鈴木　乙史（聖心女子大学教授）〕
〔主任講師：佐々木正宏（國學院大学教授）〕

全体のねらい

人格には、多くの人が関心をもっているが、その複雑で多面的な性質から、理解は容易でない。人格心理学では、まず、人格とは何かを取り上げ、また、基礎理論として、精神分析、現象学、行動主義の三大アプローチを紹介する。さらに、人格と発達、人格と適応の諸問題を詳述する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「人格」とは	「人格」とはどのようなものなのかについて論じる。人格と類似した語に、性格があるが、その説明も行い、差異を考察する。さらに個人差についても取り上げる。	佐々木正宏（國學院大学教授）	鈴木乙史（聖心女子大学教授） 佐々木正宏（國學院大学教授）
2	「人格」理解の方法	人格理解の方法として、面接、生育史に関する情報を得る家族アセスメント、心理検査などの具体的方法を概説する。次に、心理検査に関して性格検査と知能検査について解説し、最後にまとめとしてテスト状況やテスター・被験者関係について取り上げる。	大貫敬一（東京経済大学教授）	大貫敬一（東京経済大学教授）
3	人格理論(1)精神分析的アプローチ	フロイトが創始した精神分析のアプローチについて概説する。無意識や、エス、自我、超自我の三者から成る人格の構造や、防衛機制について述べ、さらに、精神分析療法についても、人格やその変化とのかかわりの点から取り上げる。	佐々木正宏	佐々木正宏
4	人格理論(2)現象学的アプローチ	現象学的アプローチについて概説する。とくにロジャースの自己理論における経験や自己概念、及びそれらの関係を述べ、さらに、彼の創始したクライエント中心療法における人格変化のとらえ方を述べる。	同上	同上
5	人格理論(3)行動主義的アプローチ	研究対象を行動とする行動主義のアプローチについて概説する。その基礎をなしている古典的条件づけや道具的条件づけについて述べ、不適応行動を除き、適応行動を獲得することを目指す行動療法についても取り上げる。	福田幸男（横浜国立大学教授）	福田幸男（横浜国立大学教授）
6	人格理論(4)類型論・特性論・状況論	古典的な類型論・特性論だけでなく、新しい考え方を含めて論じられる。また、状況論を紹介することによって、行動の一貫性が存在するかどうかの論争と性格との関連性を論じる。	若林明雄（千葉大学助教授）	若林明雄（千葉大学助教授）
7	人格と発達(1)生得的特質の影響	人格発達のスタートとなる生得的特徴である気質について論じ、それが発達するにつれて、どのように人格発達に影響するのかを考える。また気質以外の生得的・遺伝的な特質について、人格発達に関連させながら論じる。	清水弘司（埼玉大学教授）	清水弘司（埼玉大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	人格と発達(2) 対人関係の発達	乳幼児期に母親（代理）との相互作用により形成される愛着（アタッチメント）は、後の対人関係形成に強い影響を与える。愛着の形成プロセスと、初期の愛着の質が後にどのように発達するのかが対人関係の発達の中で論じられる。	清水弘司	清水弘司
9	人格と発達(3) 自己・自我	人格の中心にあると考えられる自己の発達について論じる。自己の機能、自己の形成、自己コントロール、自己意識など多様な側面に焦点をあてながら考えていく。	鈴木乙史（聖心女子大学教授）	鈴木乙史（聖心女子大学教授）
10	人格と発達(4) ライフサイクル	人格は一生を通して発達していくと考えられている。成人期、老人期にも焦点をあてながら、人間の一生と人格の発達と変化について論じる。	同上	同上
11	人格と適応(1) 正常と異常 神経症と精神病	正常と異常、健康と病気、適応と不適応の概念に関して概説する。次に、神経症と精神病概念の歴史的変遷と現在の分類について概説する。最後に、実例として不登校などの現代の心理的諸問題を取り上げて考察する。	大貫敬一	大貫敬一
12	人格と適応(2) ストレス対処	人と環境の関係を扱うストレスを取り上げる。生理学的ストレス論から心理学的ストレス論への発展の経緯を述べ、さらに、心理学的ストレス論において重視される、認知的評価、情動中心の対処、問題中心の対処について説明する。	佐々木正宏	佐々木正宏
13	人格と適応(3) 別離体験	適応が難しい体験の中でもとりわけ重大なものと考えられる別離体験に焦点を合せて論じる。とくに、フロイトの対象喪失の考え、幼い子どもの母親との比較的短期間の別離体験、おとなの愛する人との死別体験について述べる。	同上	同上
14	人格と適応(4) 家族・社会・文化	人間は社会的存在でもある。個人の人格は家族のあり方や文化・社会の特質によって大きな影響を受ける。家族システム論の考えや文化とパーソナリティ研究などを論じていく。	鈴木乙史	鈴木乙史
15	人格の成熟と変化	全体のまとめをおこなう。人格の恒常性と変化、成熟した人格論などを材料にして、人格の形成と変化、適応と不適応について考察する。また、変化の技法としてのカウンセリングについてもふれる。	同上	同上

＝ 臨床心理学概説（’９９）＝（R）

〔主任講師：馬場　禮子（東亜大学教授）〕

全体のねらい

臨床心理学の基本的理論と方法、社会に向けて果たすべき課題について概説する。理論的な基盤を押えつつ、平易にまた臨床の実際が伝わるように記述し、図表などを加えて視覚的に捉え易くする。概説すべき内容は大量なので、テキストでは必要な項目にすべて触れておき、説明の不足はラジオ放送で補って内容の充実をはかる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	臨床心理学とは何か	①定義　②実践の内容－心理アセスメント、心理療法、コミュニティ援助、それらに関する研究　③領域と対象－教育、医療、司法、その他において、乳幼児から成人、高齢者まで、健常者も病者もが対象であること。　④歴史－米国と日本を中心に。	馬場禮子（東亜大学教授）	馬場禮子（東亜大学教授）
2	臨床心理学の理論的背景　(1)心理学の諸領域	人格、発達、社会、学習、認知などの心理学がどのように臨床心理学の基礎理論としての役割を持つのか、臨床心理学との関連においてこれらを解説する。	青木紀久代（お茶の水女子大学助教授）	青木紀久代（お茶の水女子大学助教授）
3	臨床心理学の理論的背景　(2)医学の諸領域	精神医学、心身医学（心療内科学）、小児科学、高齢者医学などの理論と基礎知識を臨床心理学との関連で、特に臨床心理学にとって必要なものに焦点づけて解説する。精神薬理も含む。	大野　裕（慶応義塾大学講師）	大野　裕（慶応義塾大学講師）
4	臨床心理学の理論的背景　(3)精神分析学と分析心理学	両学の人格理論の部分を、臨床心理学の基礎理論という位置づけで解説する。無意識仮説、心的構造論などを比較の形で出すか、別個にするか、検討を要する。	永井　徹（東京都立大学助教授）	永井　徹（東京都立大学助教授）
5	臨床心理アセスメント　(1)アセスメント総論	①心理アセスメントとは何か（導入、動機づけ、秘密義務を含む）　②面接と検査があること、両者の関係　③アセスメント面接について　④テストバッテーについて　⑤アセスメントのまとめ方と伝え方。	馬場禮子	馬場禮子
6	臨床心理アセスメント　(2)知能検査と質問紙法	まずどのようなものがあるかを羅列（表示）し、原理について簡単に触れ、代表的なものについて解説する。知能検査はウェクスラー法を重視。質問紙はねらいの異なるものを選ぶ。放送授業にそなえて検査用紙を提示しておく。	黒田浩司（茨城大学助教授）	黒田浩司（茨城大学助教授）
7	臨床心理アセスメント　(3)投映法	投映法の原理、分類法（どれか1つ）、代表的なものを概説。紙幅から、きわめて概略的な説明しかできないので、各検査についても原理を重視し、解釈法の細部などは放送授業とする。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	心理療法 (1) 心理療法総論	①心理療法とはなにか（相談、カウンセリングにも触れる）②方法－各学派（表示）、各設定（個人、集団、家族）、各手段（会話、行動、芸術表現など） ③対象－乳幼児から高齢者まで、精神的障害者から健常者まで含むこと。	馬場禮子	馬場禮子
9	心理療法 (2) 精神分析的心理療法	①原理 ②方法－対象と方法について。児童治療、成人個人、集団、家族、芸術表現療法のそれぞれについて精神分析的観点と方法を解説する。	同上	同上
10	心理療法 (3) ユング派心理療法	同上の内容でユング派心理療法の対象別の方法を解説。	永井徹	永井徹
11	心理療法 (4) クライエント中心療法	同上の内容でクライエント中心療法の対象別の方法を解説。	馬場禮子	馬場禮子
12	心理療法 (5) 認知・行動療法	同上の内容で認知・行動療法の対象別の方法を解説。	大野裕	大野裕
13	コミュニティ援助 (1) 危険介入とコンサルテーション	①コミュニティ援助の領域と方法の総論（図表） ②リエゾン・コンサルテーション（学校臨床、高齢者援助を含む） ③危機介入 ④予防活動－以上順序は偏光ありうる。	黒田浩司	黒田浩司
14	コミュニティ援助 (2) 育児と親への援助	①意義と実際－親子（母子）関係の重要性、援助の可能性 ②対象－親、保育者、など ③障害児の治療教育。	青木紀久代	青木紀久代
15	臨床心理学の研究法	調査研究、事例研究について解説する。それぞれの難しさ、留意点にも触れる。卒論研究にも生かせるように配慮する（例えば資料の作り方、論文のまとめ方など）。	同上	同上

＝ 児童の臨床心理（’９８）＝（R）

〔主任講師：上野　一彦（東京学芸大学教授）〕

全体のねらい

今日、子どもを取りまく家庭、学校、社会環境は複雑化し、さまざまな問題行動や心理的な不適応を引き起こすケースも多く見受ける。そうした児童の心と行動のメカニズムを明らかにし、行動の改善や不適応の軽減を目的とする発達支援へのニーズはますます強くなってきている。ここでは臨床心理学的観点からの児童、ならびに関連する諸要因の理解とアプローチの仕方を紹介した後に、具体的な適応・発達に課題をもつ事例を通して、現代に生きる子ども像について学び、考えてみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	児童の臨床心理とは	問題行動・不適応の基本的理解、発達障害と適応障害、臨床心理学の歩みと児童理解に関する基本的アプローチについての概観的な紹介をする。	上野一彦（東京学芸大学教授）	上野一彦（東京学芸大学教授）
2	児童と発達環境	児童期を中心に、子どもの発達について概観をする。昨今の子どもたちの特徴、家庭、学校、地域社会など、子どもを取り巻く環境の変貌などを視野に入れ解説する。	松村茂治（東京学芸大学教授）	松村茂治（東京学芸大学教授）
3	行動の理解とアプローチ	児童の問題行動・不適応行動がどのような心理的メカニズムで生じてくるのかについて、防衛・適応機制に触れるとともに、現代の学習理論からの解説と行動論的なアプローチの応用について述べる。	小林正幸（東京学芸大学助教授）	小林正幸（東京学芸大学助教授）
4	発達援助とカウンセリング	子どもの心の発達理解のために必要なポイントについて述べながら、子どもと親のためのカウンセリングやその他の心理的援助について解説する。	佐野秀樹（東京学芸大学助教授）	佐野秀樹（東京学芸大学助教授）
5	子どもの対人関係とソーシャルスキル	子どもの社会的行動の発達と、その領域で出現する対人関係に関わる問題について学ぶ。仲間関係と、そこで習得するソーシャルスキルについて、集団生活の大切な場である学級に焦点を当てる。	松村茂治	松村茂治
6	臨床アセスメントⅠ －発達と能力－	児童理解のためのアセスメントとして、生育歴、発達検査、知能検査などを中心に発達の押さえ方と種々の能力検査の利用について述べる。	上野一彦	上野一彦
7	臨床アセスメントⅡ －行動とパーソナリティー－	行動やパーソナリティのアセスメントを行うための方法について述べる。子どもと親を援助するために必要な面接法、観察法、パーソナリティ検査などにも触れる。	佐野秀樹	佐野秀樹

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	不登校	近年増加の一途をたどる不登校について、その社会的背景や要因、発生のメカニズムについて考える。その上で予防と対処法について、児童の状態像に応じたアプローチの仕方について述べる。	小林正幸	小林正幸
9	いじめ（暴力）	一頃激しかった校内暴力が表面的に沈静化した後、いじめの問題が表面化してきた。ここではいじめの特徴とこの問題に対処していくための具体的方策について学ぶ。	松村茂治	松村茂治
10	こころの不適応	児童に多くみられる心の問題から生じるさまざまな不適応行動を取り上げる。神経症、心身症のほか、チックなど神経性習癖、さらには対人恐怖を背景とする引っ込み思案などにも触れ、その理解と対処法について紹介する。	小林正幸	小林正幸
11	発達の遅れとかたより	知的発達障害（精神遅滞）・自閉症・言語障害ほか、発達に遅れや偏りをもつ児童に対する基本的理解と本人と親への発達支援と心理教育サービスについて述べる。	上野一彦	上野一彦
12	学習障害とその周辺	軽度の発達障害への援助ニーズが高まってきている。なかでも、近年、急速にその対応が注目されつつある学習障害（LD）とその周辺の問題について、学校教育との関わりに中で述べる。	同上	同上
13	現代の家庭と家族	時代とともに、家族がどのように変化してきたか。さらに現代の家庭と家族の特徴について述べる。子育ての不安や児童虐待などにも触れ、これからの育児、家庭家族のあり方についてカウンセラーの立場からまとめる。	小林正幸	小林正幸
14	学校と教育臨床	学校で起こるさまざまな問題に対処するために、スクールカウンセラーなどが機能し始めた。こうした対応がより効果を上げるために必要な学校の組織や教師の機能と専門的な援助のあり方について学ぶ。	松村茂治	松村茂治
15	児童臨床心理の明日を考える	児童をめぐるさまざまな発達・適応の諸問題を、激動する時代的、文化的背景の中でどのように理解し、対処していけばよいのか。これからの児童臨床心理の課題について、総合的に考察しまとめとする。	上野一彦	上野一彦

＝ 現代精神分析学（’００）＝（R）

〔主任講師：牛島　定信（東京慈恵会医科大学教授）〕

全体のねらい

精神分析学が興ったのが19世紀末である。その後、単なる神経症の治療法に止まらず、広く人間理解のための理論と技法としての地位を確立するに至り、20世紀の思想界に大きな影を落とすことになった、一方、そのなかで精神分析そのものも影響を受けて、さまざまな理論的発展をしていることも忘れてはならない。このコースでは、それを踏まえて、精神分析の始りからその後の発展をたどることにしたいと思う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	フロイトの生涯と精神分析	Freud Sの生い立ちと人生が精神分析の理論と技法にどのような影を落としているかを明らかにする。	牛島定信（東京慈恵会医科大学教授）	牛島定信（東京慈恵会医科大学教授）
2	無意識について	無意識がどのような過程を経て発見されたのか、無意識世界へ至るにはどのような方法があるのか、無意識はどの様な性質をもっているのかを明らかにする。	上別府圭子（東京慈恵会医科大学臨床心理士）	上別府圭子（東京慈恵会医科大学臨床心理士）
3	性欲論	Freud Sが小児性欲論を提示して、学問の世界にさまざまな波紋を投げかけたが、Freud Sの性欲理論とはどのようなものであり、どのような理論的展開をしたのかを明らかにする。エディプス・コンプレックスとそこから導き出された精神性的発達などを展開する。	生地新（山形大学講師）	生地新（山形大学講師）
4	パーソナリティ論	Freud Sがエス、自我、超自我という人格論を展開するまでに、局所論、力動論、エネルギー論などの視点が展開され、自我の防衛活動に関する詳細な論述がなされている。それらを踏まえて、欲動論に根ざした人格論から、同一性、偽りの人格などの概念が出現するに至っている。それらを概観する。	福井敏（福岡大学講師）	福井敏（福岡大学講師）
5	神経症論	最初、幼児期の外傷を原因と考えたFreud Sは、空想説（エディプス・コンプレックス）、さらには不安信号説へと発展した。その後、エディプス葛藤を越えて、前エディプス的不安のあり様にまで論及するようになった。その経過をたどる。	生地新	生地新
6	精神病論	フロイトの分裂病論はシュレーバー症例に垣間みることができ、さらにうつ病については「悲哀とメランコリー」に伺うことができる。その後、さまざまな理論的展開がなされた。現在どのような理論の展開があるのか展望する。	松木邦裕（福間病院精神科医長）	松木邦裕（福間病院精神科医長）
7	精神分析療法	Freud Sが自由連想法を導入して、精神分析療法が完成されたといわれるが、人間理解の基本にエディプス・コンプレックスがあったことは間違いない。その後、エディプス期以前の心性を見据えた治療技法の開発などがなされている。治療法の変遷をも含めた解説をする。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	フロイトの患者たち	さまざまな理論の展開の基盤になっているのはFreud Sの臨床経験であることは間違いない。Freud Sにはどのような症例が残されているのか。その概略を解説してもらう。	松木邦裕	松木邦裕
9	文化論・社会論	Freud Sは、精神分析理論を人間理解だけに限らず、社会文化的側面にまで応用して、さまざまな文化論、文芸論、社会論を展開している。これらを含めた解説をしてもらう。	川嵜克哲（学習院大学助教授）	川嵜克哲（学習院大学助教授）
10	フロイト以降の発展	Freud Sの精神分析学の確立の後、自我心理学、対人関係論、対象関係論、自己倫理学等さまざまな理論的発展がなされて今日に至っている。これらの概要を解説する。	福井敏	福井敏
11	女性分析家の貢献	Freud Sのエディプス・コンプレックスは男性優位の社会での視点からの発想であるという批判がある。面白いのは、その中で、女性分析家の活躍は決して見逃せないところである。これらの人たちの理論や精神分析における貢献について解説する。	上別府圭子	上別府圭子
12	精神分析的発達理論	Freud Sの精神性的発達論の後、自我心理学、対象関係論などの出現によって、精神分析的発達理論がさまざまに展開されて今日に至っている。ことに、最近の幼児観察から得られた発達理論には、古典的精神分析ではみられない現実感がある。幼児期からの精神発達論は精神分析学の根幹をなす部分であるだけに、概観しておくことは大切であろう。	同上	同上
13	ユングの個人心理学	Freud Sからの離反後、ユングは独自の理論を発展させ、個人心理学なる学派を形成した。フロイト心理学にない境地を展開するに至っている。現在の人間理解に、古典的精神分析とは違った趣があるだけに、ここでユング心理学を学んでおくことは意義あることである。	川嵜克哲	川嵜克哲
14	わが国の精神分析事情	精神分析学はさまざまな発展を示したが、それがわが国ではどのような発展なり展開なりをしているのか。導入のいきさつから、自我心理学、更には今日の対象関係論に至るまでの解説を行う。	牛島定信	牛島定信
15	現代社会における精神分析の位置	ほぼ100年の経過のなかで、現代の人間理解に精神分析学がどのような貢献をしているのかを展開する。	同上	同上

＝カウンセリング＝（R）

〔主任講師：水島　恵一（文教大学長）〕

全体のねらい

カウンセリングのあり方を、その理論、過程、方法を含めて、具体的な事例を引用しながら考えていく。相談助言や心理指導的カウンセリングについて簡単にふれたのち、心理療法的カウンセリングを中心にしながら、その中で起こる心の動き、人格統合の過程に重点をおく。また関連した特殊な理論や技法についても述べ、集団、家族、地域の中でのカウンセリングについても述べる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	カウンセリングのさまざま	心の悩み、ストレス、行動問題に対して、今日カウンセリングは、多くの機関、施設で行われており、その他日常生活の場面でも必要とされている。そのいくつかの例からカウンセリングをまず広くとらえる。	水島恵一（文教大学長）	水島恵一（文教大学長）
2	相談・指導とカウンセリングの沿革、定義	カウンセリングは、心理的な相談助言、心理的指導から始まり、次第に心理療法としての色彩が強まってきた。その歴史、日々行われている相談や指導の実態からして、カウンセリングとは何かを考える。	同上	同上
3	自己表現と自己洞察	心理療法的カウンセリングとして、自己を表現し、洞察していくことが、いかに心の治療ないし再統合に結びついていくかを考察する。また体験過程としてのとらえ方についても学ぶことにする。	同上	同上
4	心の動きとメカニズム	精神分析的見方からして、治療的カウンセリング過程の進行に対して働く抵抗や自己防衛のメカニズムついて学ぶ。ついでいわゆる「転移」や「治療的退行」とよばれる心的過程について考察する。	同上	同上
5	カウンセラーのあり方	カウンセリングが効果的に進展していくためには、カウンセラーの共感と、相手を無条件に尊重する態度が必要である。そうしたあり方がいかに相手に作用するか、またカウンセラーとしての訓練について述べる。	同上	同上
6	人格・臨床心理学的理論	治療的カウンセリングのもとになっている人格・臨床心理の理論を概観する。フロイトの精神分析、ユング、アドラー、新フロイト派の分析理論をはじめ、有機体理論、ロジャース、その他の人間学的理論を含む。	同上	同上
7	カウンセリングの理論	前回の理論をふまえ、ロジャースのクライエント中心カウンセリングの理論、精神分析的カウンセリングの理論、および行動カウンセリングの理論を３本柱として考察する。行動療法、認知療法、その他の理論を含む。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	遊戯療法、イメージ・芸術療法	カウンセリングの特殊な技法ないし関連領域の理論・技法として、まず子どもに対する遊戯療法について述べる。次いで成人までを含んだ非言語的領域の療法として、イメージ・芸術療法を概観する。	水島恵一	水島恵一
9	論理療法とマイクロカウンセリング	カウンセリングの動向のひとつ折衷主義には、統合主義（ねりあん方式）と選択主義（つぶあん方式）のふたつがある。前者の代表例は論理療法、後者のそれがマイクロカウンセリング。このふたつを介して今後のカウンセリングを展望したい。	國分康孝（東京成徳大学教授）	國分康孝（東京成徳大学教授）
10	交流分析とゲシュタルト療法	伝統的カウンセリングの限界を乗り越えようとするところに、交流分析やゲシュタルト療法の属する第三勢力の意義がある。これら新興勢力からカウンセリング界は何を学ぶことができるか。これに答えるつもりで論議したい。	同上	同上
11	グループアプローチ	グループには一対一の面接には見られない人間の成長促進機能がある。特に今日のようにカウンセリングの対象が健常者を含むほどに拡大してくると、時間経済的にもグループを用いたカウンセリングは必要になる。グループエンカウンターが代表例である。	同上	同上
12	家族システム理論と家族療法	家族を生態系の一つのシステムとみる立場から、個人および家族の精神病理を把握し、さまざまな心理療法的な取組が行われている。構造派、戦略派などの家族療法のおもな理論モデルをめぐって基本的な考え方および技法の特徴について概説する。	岡堂哲雄（文教大学教授）	岡堂哲雄（文教大学教授）
13	家族のためのブリーフ・セラピー	家族療法発展のなかで登場したブリーフ・セラピーは、問題の原因究明ではなく解決の仕方を変化させる技法による短期集中療法である。本講では、ブリーフ・セラピーの理論モデルをめぐって基本的な考え方および技法の着眼点について解説する。	同上	同上
14	危機の理論とコミュニティ・アプローチ	心理面の危機に直面する個人や人々への援助には、適時に的確な介入が求められる。それには、カウンセリングの理念が地域社会に普及することが必須である。本講では、コミュニティ・アプローチの基本的な考え方および介入技法の要点について講述する。	同上	同上
15	総括と人間性の問題	さまざまなアプローチを総括し、広く現代社会のさまざまな場面で行われるカウンセリングの人間的意義を考察し、それが深層心理とともに人間の実存、存在の根本問題にまでかかわる点を考察する。	水島恵一	水島恵一

＝ 生涯発達と生涯学習 ＝（R）

〔主任講師：麻生 誠（放送大学副学長）〕
〔主任講師：堀 薫夫（大阪教育大学助教授）〕

全体のねらい

人間の発達は生涯にわたって継続するものである。だが人間の発達は生物的な意味での成熟と異なり、自然の過程で実現していくものではない。それぞれの発達段階やライフコースのなかで生ずる多種多様な難問を学習の力によって解決していきながら人間的発達を獲得していくものなのである。生涯学習こそ生涯発達にとって不可欠な過程なのである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生涯学習の理念	生涯学習は人びとの生涯にわたる発達を完成させるために、その全生涯を通して個性的・社会的・職業的な人間発達を保障せんとする理念的営みである。 これらの多種・多様な学習活動のうち、あるものは教育の仕組みのなかに組み込まれて生涯教育としてシステム化される。他のものは、余暇活動のように自由な学習者の手にゆだねられる。生涯にわたる発達、学習、教育の相互関係を包括的にとらえ、生涯学習の理念を明確にしよう。	麻生 誠（放送大学副学長）	麻生 誠（放送大学副学長）
2	生涯発達論の背景と展開	今日、人間の生涯発達やエイジングに関する文献の量が急増してきている。生涯発達論のルーツを発達心理学と老年学の歴史から学び、今日の生涯発達論がどのような研究領域と課題を設定しているのか、それに注目していこう。	堀 薫夫（大阪教育大学助教授）	堀 薫夫（大阪教育大学助教授）
3	生涯発達とライフコース	我々の生涯にわたって歩む人生は、社会や文化によって意味づけられている。年齢段階や年齢規範の問題を手がかりとして社会によって意味づけられた我々の生涯（ライフコース）の問題を考えてみよう。	同上	同上
4	生涯発達と発達課題	我々は、人生のさまざまな節目で達成が期待される発達上の課題に出会い続ける。とくに成人期以降の心理・社会的発達課題に焦点を当てて、我々のかかえる発達課題がどのようなものであり、その解決に生涯学習がいかに貢献するのかをみつめていこう。	同上	同上
5	成人期における知的能力の変化	我々の学習する能力は、30代、40代、50代とどう変化していくのであろうか。成人を対象とした知能検査の具体的な結果をふまえながら成人期における知力の変化と知恵の深まりの問題を考えてこう。	同上	同上
6	高齢者教育の可能性	生涯学習の完成期は高齢期である。では、高齢者の学習にはどのような特徴があるのであろうか。また、その援助のポイントはどのあたりに求められるのか。具体例などもまじえながら、高齢者教育の可能性を探ってみよう。	同上	同上
7	成人の特性を活かした教育学（ｱﾝﾄﾞﾗｺﾞｼｰ）の構想	これまで、そして今日の教育学の主流は、子ども…学校教育学である。しかしおとなの学習を援助していくには、おとなの特性を活かした教育学を構想していく必要がある。この可能性を探ってみよう。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	成人の学習要求と生涯学習の方法	学校を出てからの成人は、どのような学習の内容に関心をもち、どのような方法での学習に関心をもっているのであろうか。このテーマに関するいくつかの調査の結果を見ながら、成人の学習要求と学習方法を構造化してみよう。	堀　薫夫	堀　薫夫
9	生涯学習とマルチメディアの利用	大量の教育情報をスピーディーに社会のすみずみまで運ぶことのできる放送は、生涯学習にとって必要欠くべからざるメディアである。さらに最近では各種のニューメディアが加わり生涯学習の情報メディア環境は大きく変わりつつある。これらのメディアが生涯学習にもたらすメリットとデメリットを考えてみよう。	麻生　誠	麻生　誠
10	日本の生涯学習のルーツを探る	日本人は、生涯学習に対して一般に好意的である。このような日本人の学習好き・教育好きはどのような伝統的価値観に支えられているのか。そのルーツを江戸時代の在野の儒者・中江藤樹の思想と実践に探ってみよう。	同　上	同　上
11	欧米諸国の生涯学習	アメリカ、イギリス、スウェーデンなどの先進諸国の生涯学習を比較しながらそれぞれの国の生涯学習の特徴をとらえ、わが国の生涯学習に対する教訓を学んでいこう。	堀　薫夫	堀　薫夫
12	生涯学習の谷間	わが国は高学歴社会となり、国民の平均的学歴水準は大きく上昇した。そしてこの国民の高学歴化を背景とした生涯学習論が唱えられるようになった。だがその中で170 万人と言われている義務教育未修了者の問題が忘れられようとしている。生涯学習社会の谷間とも言うべき彼らの存在のなかに生涯学習の原点を探ってみることにしよう。	麻生　誠	麻生　誠
13	地域社会と生涯学習	私たちの生活は、生活圏としての地域社会を基盤として営まれている。このような地域社会のなかで、住民たちに対してどのような学習機会が提供されているのであろうか。特にそのなかで、学校や公民館、図書館、博物館などが果たす役割を考えながら、生涯学習の地域システムを構想してみよう。	同　上	同　上
14	生涯学習の体系と行・財政問	生涯学習論に最も欠けているのは、行・財政論といわれている。まさに生涯学習論のアキレス腱である。生涯学習理論を実現しようとすれば、行・財政は、質的・量的観点からどのような方向に変わらなければならないかを検討してみよう。	麻生　誠 堀　薫夫	麻生　誠 堀　薫夫
15	生涯学習社会の可能性と課題	日本の生涯教育の柱は、学校教育・社会教育・職業訓練の三つである。これら三つの柱の生涯学習能力を検討するとともに、これらがどのように関係づけられていけばよいのか考えてみよう。三つの柱を基本とした生涯学習機会のゆるやかな統合という観点に立って将来を展望してみよう。	同　上	同　上

＝ 教育の中の言葉（’９９）＝（R）

〔主任講師：永野　重史（放送大学教授）〕

全体のねらい

「国語」以外の教科におけることば、学力テストと言葉の関係、文章読解、など、具体的な話題を考えることによって、「教育の中の言葉」にどのような問題があるか、また、問題を解決するためには、「言葉」というものをどのようにとらえなければならない。かということがわかるようにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	教育の中の言葉（問題の所在）	講義内容ぜんたいの紹介。英語のブロック報告書「生活のための（生涯のための）言葉」と教育。	永野重史（放送大学教授）	永野重史（放送大学教授）
2	言語と思考　(1)	貧しい階層の子ども達の知的発達の原因としてあげられた言語生活の特徴。その改善のためにとられた方策。	同　上	同　上
3	言語と思考　(2)	言語が人の思考を左右するという考え方。ベンジャミン・ワーフの言語相対性仮説とその心理学的検証。	同　上	同　上
4	言語と思考　(3)	リテラシーの効用。文字のない文化と文字のある文化。文字をつかってものを書くことが人々の知的能力を高めるという説の検討。	同　上	同　上
5	「言語」とは何か	幼児の母語の獲得の様子と学校の国語の学習とを比較しながら、「言語」についての考え方を整理する。ラングとパロール。「言語音が集まって語となり、語が集まって文となる。」という見方の検討。	同　上	同　上
6	「国語」という教科は道具教科か	「言語教育はすべての教育学習の基礎だ。」という考え方の検討。外国語のイマージョン教育。「カリキュラムぜんたいを通しての言語教育」という考え方。	同　上	同　上
7	学力テストと言葉	教育評価のための指導目標の記述。「要目かす論」。唯言語主義（バーバリズム）を育てるテスト。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	社会・数学・理科の学習と言語	生活知と科学知とのつながり。外国人に「将軍と天皇はどうちがうか」とたずねられて。「円のまんなか」ではいけないか。「円の中心」でいいか。言語相対仮説をあらためて考える。	永野重史	永野重史
9	言葉のつかいかた(1)	モリスの「話しのタイプ」。マンドとタクトと反響語。「言葉のお守り的使用法」	同上	同上
10	言葉のつかいかた(2)	一般意味論の運動。言語学上の意味論との違い。一般意味論の主張。	同上	同上
11	字引と辞書	意味の説明とは。ソシュールのチェスのたとえ。良い辞書とは。個人にとっての言葉の意味。子どもがつくる辞書。	同上	同上
12	文字表現の読みと正書法	「正しい読み方」とは何か。音読みと訓読み。正書法。	同上	同上
13	文章の理解	文章の意味は書き手のものか、読み手のものか。三つの要素（言語、機能、状況）。	同上	同上
14	文章をつくる	こどもの作文とおとなの作文。感想文と科学論文。パラグラフ構成の指導。	同上	同上
15	言語観の拡張	認識の道具としての記号・数式・表・グラフ・コンピュータ。言語の分析から文化の分析へ。エティック的見方とイーミック的見方。	同上	同上

＝ 生徒指導（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：秦　政春（大阪大学教授）〕

全体のねらい

いま学校のなかで、もっとも困難をきわめているものが生徒指導だといわれている。そうした生徒指導に関する実態を明らかにするとともに、現実に子どもたちがどんな非行・問題行動をおこしているのか、そしてその背景にどんな事情があるのか検討する。そうした検討をふまえて、生徒指導の今後のありかたを探っていきたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	Ⅰ．生徒指導の実際 生徒指導の理念と実際	生徒指導の理念が、子どもたちのよりよい人間形成をはかるものであることはいうまでもない。しかし、実際には非行防止、非行対策の名のもとに「管理的」な色彩がますます強まっている。こうした実態のもつ問題状況を明らかにする。	秦　政春（大阪大学教授）	秦　政春（大阪大学教授）
2	体罰に依存する教師	「管理的」生徒指導の基本的なものが体罰である。教師の体罰は学校教育法で禁止されているにもかかわらず、現実にはこれがかなり多い。ここでは、教師の体罰に関する実態を明らかにするとともに、これによってもたらされる悪循環について検討を加える。	同　上	同　上
3	校則（生徒心得）による管理	体罰と並んで校則（生徒心得）も、「管理的」生徒指導の1つである。これについてはよく「校則問題」というかたちで話題になっているが、これの実態、とくに規定の内容やどのように運用されているのかという点を中心にして検討を加える。	同　上	同　上
4	校則（生徒心得）の曖昧性	校則が「管理的」生徒指導の1つとはいっても、これ自体に教育的意味がないわけではない。むしろ、これが運用される場合に、これの性格の曖昧さのなかで問題が生じることが多い。簡単にいえば「心得」か「規則」かといった問題である。この点について検討を加える。	同　上	同　上
5	Ⅱ．非行・問題行動の実態 非行・問題行動に関する推移	昭和50年前後の「戦後第3のピーク」と呼ばれた少年非行の急増した時期以降、現在にいたるまでつぎつぎと子どもたちの問題行動が多発している。いじめ、不登校、校内暴力といった具合である。こうした推移を明らかにするとともに、その背景を検討する。	同　上	同　上
6	いじめ問題と子ども	昭和61年頃に急激に「鎮静化」したと思われていたいじめ問題は、実際には継続してきており、かつてより悪質な行為もみられるようになってきた。ここしばらくのいじめ行為の推移を明らかにするとともに、どういった背景からいじめが生じているのか検討する。	同　上	同　上
7	子どもたちのいじめ行為の特質	子どもたちのいじめ行為の特質をひと言でいえば「集団による弱者いじめ」ということになる。ここでは、いじめという行為の特質を考えるとともに、いかなるパターンや形態をもってこの行為が成立しているのか検討を加える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	不登校問題と子ども	いじめと並んで、不登校問題も大きな社会問題・教育問題としてクローズアップされている。しかも、不登校児童・生徒の数は、年々増加傾向をみせている。こうした量的な推移に加えて、質的にいかなる変化がみられるのか、その原因もあわせて検討する。	秦　政春	秦　政春
9	Ⅲ．子どもたちの状況 子どもたちのストレス	いまの子どもたちは、とても疲労しておりストレスがたまっている。しかも、これによってさまざまな症状がでている。なかには、極端な身体的不調や異常行動をとるケースも少なくない。こうした実態を明らかにするとともに、これの影響について考える。	同　上	同　上
10	ストレスと非行・問題行動	子どもたちのストレスは、たんに症状がでているというだけではない。これによって、さまざまな非行・問題行動に結びついていくことも少なくない。たとえば、ストレスの有無は、いじめ行為にも密接に関係がある。原因→ストレス→問題行動の関係を検討する。	同　上	同　上
11	子どもたちの規範意識	子どもたちの規範意識は、確実に崩れてきている。ささいな校則違反、服装違反ならともかく、明らかな反社会的行動、逸脱的行動に対しても「絶対にしてはいけない」という割合が低下してきている。こうした規範意識の崩れの背景を探ることにしたい。	同　上	同　上
12	Ⅳ．生徒指導を阻害するもの 教師のストレス	いま学校では、子どもたちにストレスがたまっているというだけではない。教師にもかなり厳しいストレスがある。そして、子どもたちと同様にさまざまな症状がでている。ここでは、こうした教師のストレスの原因、実態、その影響について明らかにする。	同　上	同　上
13	教師のストレスによる悪影響	教師のストレスは、確実に子どもたちに対して悪影響をおよぼしている。たとえば、子どもたちに「やつあたり」をするといった具合である。これに対して、子どもたちはまたストレスを感じ、教師に反抗するといった悪循環がある。こうした構造を明らかにする。	同　上	同　上
14	教師集団の人間関係の崩れ	生徒指導は、ひとりひとりの教師が個別的に行なうのでは限界がある。教師集団の連携や協力体制が不可欠の条件である。ところが実際には、あまり連携や協力体制がとれていない。こうした教師集団の組織化を阻害する要因がどこにあるのか明らかにする。	同　上	同　上
15	Ⅴ．生徒指導の今後 組織的でゆるやかな生徒指導	今後、どのような生徒指導のありかたを求めていけばよいのか。1つは、教師集団の連携や協力体制を基本にした組織的な生徒指導であり、いま1つは「管理」を脱却したゆるやかな生徒指導である。こうした生徒指導の実現に関する可能性を探っていく。	同　上	同　上

＝ 教育評価（’９９）＝（R）

〔 主 任 講 師 ： 梶 田　叡 一（京都ノートルダム女子大学長）〕

全体のねらい

教育における評価の問題について、いくつかの基本的な視点から考えてみる。とくに、学校での日常的な見とりや見きわめ、テストや成績づけなどのあり方を、子どもの学習や成長とのかかわりで原理的な地点から検討してみたい。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	教育評価のはたらき	評価は、学校といった組織的な教育形態において、古今東西を問わず行われてきた。教育においてなぜ評価が必要となるのか、学ぶ側、教える側、管理運営する側それぞれにとっての意義を考えてみる。	梶 田 叡 一（京都ノートルダム女子大学長）	梶 田 叡 一（京都ノートルダム女子大学長）
2	測定から評価へ	評価は客観的科学的ではなくてはならないという発想がある。しかしこれを押し進めていくと本当に大事な面が見落とされ、表面的なつまらない面ばかりが重視され評価されるという落とし穴に落ちる。この意味で1930年代のタイラー等の主張を振り返り、現代の評価論の大前提を考えてみる。	同　上	同　上
3	教育の目標と評価	教育に当たっては目標が体系的に設定されるが、その目標がまた評価の視点や基準となる。目標の明確化のためには、ブルーム等の『教育目標のタキソノミー（分類体系）』が有名であるが、こうした仕事の意義について考えてみる。	同　上	同　上
4	行動目標論の克服	子どもの学びや育ちを外的客観的に見ていくため、行動目標の考え方が提唱されてきた。しかし今や行動目標論は原理的に乗り越えられている。子どもの学びや育ちを本当に問題にするためには、内面を見落とすことはできないのである。こうした視点に立って、達成目標・向上目標・体験目標の考え方を述べる。	同　上	同　上
5	内面の育ちの把握	学びや育ちの現実を見てとるためには、関心や意欲や理解の状況など内面世界の読み取りが必要となるにしても、これは非常に困難な課題である。内面を洞察する上での手がかりを学校で具体的にどのように得られるか、授業とのかかわりを中心に考えてみる。	同　上	同　上
6	相対・絶対・到達度評価	子どもの学びや育ちを評価する際、他の子どもと比べて見る（相対評価）か、教える側の内的基準による判断に任せる（絶対評価）か、何らかの到達基準に達しているかどうかを見る（到達度評価）か、といった違いがある。それぞれの意義と問題点について考えてみる。	同　上	同　上
7	形 成 的 な 評 価	得点や成績は、学びや育ちの「結論」であるかのように受け止められがちである。しかし本来それは、長い道のりの中でのラップタイム（途中計時）でしかない。教育におけるあらゆる評価は中間的かつ一時的なものであって、次の段階に役立って初めて意味を持つ、という形成的評価の考え方について検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	自己評価	学びと育ちは、最終的にはその人自身によって評価され、その人自身の次の段階に向けての努力を引き出し、支えるものでなくてはならない。自己教育を基礎づけるものとしての自己評価でなくてはならないのである。こうした自己評価の具体的あり方について考えてみる。	梶田叡一	梶田叡一
9	学習指導と評価	学習指導を有効かつ適切なものにするため、具体的にどのような場で、どのような評価活動を行い、それをどのように生かしていけばいいのか、さまざまな場合を例にとって考えてみる。	同上	同上
10	学力テストの論理と問題点	学力を客観的な形で測定するために工夫されてきたテストの構成と結果処理の考え方について検討する。特に旧来の集団標準にもとずくテスト（ＮＲＴ）と最近の到達基準にもとずくテスト（ＣＲＴ）とを比較する。さらに、高次の知的能力を測定するための工夫を見る。	同上	同上
11	知能検査を考える	20世紀初頭ビネによって考案されて以来、長い間にわたって「頭の良さ」を測る道具として用いられてきた知能検査はどのような論理に立つものであろうか。またその検査結果の表示法として用いられてきたＩＱ（知能指数）が今日なぜ信頼されなくなってしまったのであろうか。ＩＱ神話の成立と崩壊について考えてみる。	同上	同上
12	指導要録と通知表	学校での成績は、指導要録（学籍薄）と通知表に記入され、当人や親に対して権威を持ってきた。現在それはどのような形式・内容であるのか。その背後にある基本的な評価観は何であるのか。これまでの様式・記入法の変遷を見ながら検討する。	同上	同上
13	入学試験と進路指導	現在の入学試験や進路指導のあり方に偏差値教育と呼ばれるようなゆがみが生じているという指摘がある。過熱した受験準備体制の中では子供の発達そのものにもゆがみが現れざるをえない。これを是正するため、どのような入学者選抜方法を用いるか、どのような進路指導をしていくか、大きな課題である。この問題についていくつかの方向から考えてみる。	同上	同上
14	評価する側の眼	評価する側も人間である。固定観念を持って見てしまったり、背光効果や寛容効果などのゆがみが忍び込んでしまったりしがちである。しかし、自分の眼にどのようなゆがみの可能性があるかを認識することによって、そのゆがみに振り回されて非教育的な態度や決定を取ってしまうことも少なくなる。この問題について特に主要な点を検討する。	同上	同上
15	評価される側の心理	テスト不安など評価される場に身を置くことによって生じる心理的な効果についても考えておかねばならない。また、誉められたり叱られたりすることの効果の問題もある。評価される側がその評価によってどのような心理的影響を受けるか、いくつかの点から考えてみる。	同上	同上

＝ 心理測定法（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：繁桝 算男（東京大学教授）〕

全体のねらい

心理学における測定の重要性がよく分かることを出発点とし、実際の測定方法、及び、それを支える理論について知ること、ついで、これらの測定から得られる心理学的知見について認識を深めることを目標とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	心理学研究法と測定	心理学研究における測定の重要性を説明する。実験によって得られるデータを分散分析によって分析し、研究の課題に答えるプロセスと、調査によって多変量データを得、多変量解析によって知見を得るプロセスを考察する。	繁桝算男（東京大学教授）	繁桝算男（東京大学教授）
2	知的能力の測定理論	創造性を含め知的能力の構造を因子分析によって探究する。I.Q.の歴史を批判的に概括し、知能テストの将来を展望する。	同上	同上
3	知能テストの実際	知能テストの実施の方法を示し、教育場面における知能の測定値の利用の仕方を説明する。	大六一志（武蔵野女子大学講師）	大六一志（武蔵野女子大学講師）
4	パーソナリティ・テストの測定理論	性格の測定の代表的な測定法、すなわち、質問紙法、投影法、作業検査法等代表的な測定法を紹介し、それらの違いを説明する。	丹野義彦（東京大学助教授）	丹野義彦（東京大学助教授）
5	パーソナリティ・テストの実際	認知療法を中心として、心理測定法が臨床現場にどう役立っているかを説明する。	同上	同上
6	社会的態度の測定	サーストン法とリッカート法による社会的態度を測定するための調査紙構成の方法を具体的に説明する。	繁桝算男	繁桝算男
7	精神物理学的測定法	物理的量と心理量との対応関係を探る。調整法、恒常法等伝統的な測定法について説明する。	佐藤隆夫（東京大学教授）	佐藤隆夫（東京大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	一対比較法	心理量を測定する有力な方法、一対比較法の理論と具体的手続きを説明する。	繁桝算男	繁桝算男
9	興味と適性の測定	適性と興味を測定するテストの現状を説明し、進路指導におけるテスト資料の利用の仕方を実例に即して説明する。	西村純一（東京家政大学教授）	西村純一（東京家政大学教授）
10	テストの信頼性と妥当性	測定値の性能を記述する議論、特に測定値の信頼性と妥当性についてその理論的基礎と応用例を紹介する。	繁桝算男	繁桝算男
11	多次元尺度法	変数間の類似性行列から、変数を多次元的に図示する多次元尺度法について、心理学的応用例を通じて説明する。	前川眞一（大学入試センター助教授）	前川眞一（大学入試センター助教授）
12	公理論的測定論	公理論的なアプローチを説明し、心理量の測定はそもそも可能なのかに関する問に答える。	繁桝算男	繁桝算男
13	因子分析と共分散構造分析	潜在する因子を抽出する因子分析と、さらに、これらの潜在因子間の因果関係をモデル化する共分散構造分析（構造方程式モデル）について例を用いながら、そのコンセプトを説明する。	同上	同上
14	項目反応理論	学力の測定において、モデルを通して、正誤データから、真の学力の推定値を得る方法について説明する。	前川眞一	前川眞一
15	意思決定と測定	意思決定の規範理論及び主観確率と効用の測定の具体的な方法を説明する。	繁桝算男	繁桝算男

＝ 子どもと若者の文化（’０１）＝（ＴＶ）

〔 主 任 講 師 ： 本田　和子（聖学院大学教授）〕

全体のねらい

変化のスピードが世代交替の速度を上回るとき、社会には世代間の葛藤や混乱が生じると言われる。こうした現状を踏まえて、若い世代の文化を理解し、新たな関係を構築することが、本講義のねらいである。

回	テ　ー　マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	文化のテクストとしての子どもと若者	・文化をどう捉えるか　・子どもと若者の文化は何を語るか	本田　和子（聖学院大学教授）	本田　和子（聖学院大学教授）
2	活字と映像（その１）	・活字文化の近代	同　上	同　上
3	活字と映像（その２）	・映像の跳梁と世代葛藤	同　上	同　上
4	音楽する世代	・変貌する音楽環境	同　上	同　上
5	演劇とパフォーマンス（その１）	・演技する世代	同　上	同　上
6	演劇とパフォーマンス（その２）	・演じる遊びとその快感	同　上	同　上
7	身体文化と子どもと若者（その１）	・近代化と身体への関心	清水　諭（筑波大学講師）	清水　諭（筑波大学講師）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	身体文化と子どもと若者（その２）	・遊び・スポーツ・イベント	清水　諭	清水　諭
9	ものの文化史（その１）	・おもちゃ革命と子どもたちの現在	本田　和子	本田　和子
10	ものの文化史（その２）	・変化する暮らしと子どもと若者	同　上	同　上
11	電脳時代の遊びと文化（その１）	・激変するコミュニケーション環境と人間の遊び	西村　清和（埼玉大学教授）	西村　清和（埼玉大学教授）
12	電脳時代の遊びと文化（その２）	・機器の発達と遊びの変貌	同　上	同　上
13	パーソナル・コミュニケーション	・コミュニケーション状況の変化と子ども・若者の生活	本田　和子	本田　和子
14	異文化体験と他者認識	・海外旅行とボランティア活動　・伝統の発見と回帰	同　上	同　上
15	現代文化と子どもと若者	・少子化社会の光と影　・若い世代に何を期待するか	同　上	同　上

＝知覚心理学（’01）＝（TV）

〔主任講師：相場　覚（放送大学教授）〕
〔主任講師：鳥居　修晃（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

人間における知覚活動は、そのほかのすべて心的活動のもととなる極めて重要な機能といえる。そこには神経生理学的基礎過程から高次の認知的精神過程までを含む複雑な機構が関係し、それらを理解することによって、われわれは人間の精神活動に一層深い洞察を得ることができよう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	感覚・知覚・認知	感覚と知覚と認知はともに密接に関連しあっている。これらの間の関係を考察し、それぞれの働きと特徴を概観する。	相場　覚（放送大学教授） 鳥居修晃（東京大学名誉教授）	相場　覚（放送大学教授） 鳥居修晃（東京大学名誉教授）
2	知覚研究の方法	知覚研究を目的として数多くの研究法が開発されて来た。そのあるものは心理学とおなじ位の歴史を持ち、またあるものは最近になって使われはじめた。それらを解説し、知覚研究の進展との関係をみる。	同上	同上
3	視覚（1） 明るさ・色	視覚のもっとも基本的な属性である明暗の知覚と色彩視について、それらと日常の経験との関連について考察し、またそれらの働きを担うメカニズムに関する最新の理論を解説する。	相場　覚	相場　覚
4	視覚（2） 形・立体視	形には平面図形の形と立体の形態とがある。平面図形のうちには輪郭線図形と面図形とがある。これらの平面図形の形をひとはどのように知覚するのかという問題について論述し、次に、立体の形態に関してはその見え方が視点に依存して異なることを中心に考察する。	鳥居修晃	鳥居修晃
5	視覚（3） 運動視	われわれの視覚的世界は運動する事物に満ちている。またわれわれも動きながら物を見る。したがって運動の知覚はわれわれの生存に欠く事の出来ない機能である。そのメカニズムと生物学的な意義について論ずる。	相場　覚	相場　覚
6	空間認知	空間認知に関する研究の流れを跡づけ、両眼・単眼による立体視の問題ならびに、距離が異なる同一対象の大きさの知覚の問題を取り上げる。ギブソンのきめの勾配、ユレッシのランダムドットステレオグラムに関しては具体例を示して解説を加える。	鳥居修晃	鳥居修晃
7	開眼手術後の視知覚	先天性の視覚障害の人たちが開眼手術を受けた直後、どのような視覚体験をするかという問題を取り上げて論考する。次に、手術後、色・形の視知覚ならびに事物の認知活動がどのような過程を経て増強・形成されていくかという問題を中心に考察を進める。	鳥居修晃	鳥居修晃

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	聴覚（1） 聴覚の基礎	聴覚の基礎として、音の物理的性質と聴覚の属性との関係について、コンピュータ・グラフィックスを用いて説明する。マスキング実験などを通じて聴覚の基礎的モデルの１つである臨界帯域の概念について概説し、さらに聴覚の動特性について例をあげて紹介する。	難波精一郎（宝塚造形芸術大学教授）	難波精一郎（宝塚造形芸術大学教授）
9	聴覚（2） 音楽・音声 騒音	音楽の演奏表現に大きく関与する高さ、大きさ、音色の時間的変化についてデモ実験により説明する。また音声の知覚に及ぼす諸要因について合成音声を用いて紹介する。騒音の人間に及ぼす影響について例示し、音環境のアセスメントの重要性について概説する。	難波精一郎	難波精一郎
10	触覚	触覚については、触覚器官の代表であるヒトの手を主題とし、その触情報処理メカニズムについて解説する。まず、触情報を受容する皮膚機械受容単位の種類と機能を述べ、次にそれらの情報から主観的な触感覚がどのように産出されるかに言及する。	宮岡徹（静岡理工科大学助教授）	宮岡徹（静岡理工科大学助教授）
11	味覚・嗅覚	味やにおいの知覚について、閾値、感覚的強度、味・においの分類に関する学術的知見を学び、特にこれらの感覚に特徴的な快不快と前述の知覚との関係、またそのような快不快が形成される過程やその要因について考える。	斉藤幸子（工業技術院生命工学工業技術研究所研究室長）	斉藤幸子（工業技術院生命工学工業技術研究所研究室長）
12	知覚の脳内機構	最近の脳神経科学の著しい進展により知覚の諸々の側面と密接に結びついた脳内の過程がTPETやｆMRTより明らかにされつつある。それらの知見とそれらが知覚研究に対してもつ意義を解説する。	相場覚	相場覚
13	時間知覚	時間は普段はあまり意識されない。そして意識されたとしても時と場合によってそれは全く異なって把握される。それらを規定する要因は何か。また時間知覚の生物学的基礎は何か、などについて概観する。	同上	同上
14	知覚の計算理論	計算機の発達にともなって、人間の知覚機能を計算機によって模擬させる試みが多くなされた。それらを概観し、それがわれわれの知覚機能の理解にどのように役立っているかを考察する。	同上	同上
15	知覚研究の応用感覚代行	知覚の研究が応用面にどのように活用されているかについて論じる。先天性盲人ないし早期失明者における視覚の障害状況について解説するとともに、それらの人たちに視覚以外の感覚系を通して視覚情報を伝達する試み（感覚代行技術）について紹介する。	鳥居修晃	鳥居修晃

＝労働と生活の心理学（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：越河　六郎（松蔭女子短期大学教授）〕
〔主任講師：星　　薫（放送大学助教授）〕

全体のねらい

人間は、誰でも働くことが要請されており、社会生活は、まさに「働くこと」を中心に展開されているとみてよいであろう。職場の生活がある、家庭の生活、また地域の生活という分類も出来るが、そこには必ず「仕事」が含まれている。

本講義では、労働科学・応用心理学の知見をベースにして、これらの「労働生活」における心的過程を考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	応用心理学、労働科学の展開	「働く人間のために真に合理的な労働と生活の条件を求める」。これが労働科学の目標である。時代的背景をふまえて、応用心理学の領域における問題の所在を提示する。	越河　六郎（松蔭女子短期大学教授） 星　　薫（放送大学助教授）	越河　六郎（松蔭女子短期大学教授） 星　　薫（放送大学助教授）
2	フィールド研究の方法 (1)観察と測定	仕事の場面や生活の状況について考察する、または研究するとき、まず、問題事象の実態を捉えること（情報の収集）が基本である。行動観察の方法、特にタイムスタディ（作業時間研究）の意義と方法を概説する。	同　上	同　上
3	フィールド研究の方法 (2)質問法と検査法	外から見えにくい心の動きを探る方法としての、質問法（面接、質問紙）、評定尺度法および、検査法（性格検査、適性検査）について述べる。	同　上	同　上
4	職場の環境(1)物理的条件と作業	人間工学の立場から、作業場面の空間的設計・設備、照明、振動，音響等、物理的条件と作業者との関係（効果・影響）について概要を述べる。また、アメニティ（快適性）の評価にもふれる。	同　上	同　上
5	職場の環境(2)社会的側面	採用条件、職階制度、業務量と配置人員数など、人事・組織上の問題を含め、職場環境の社会的な側面とモラールとの関連を考察する。	同　上	同　上
6	労働と休養(1)勤務スケジュール	勤務形態、勤務スケジュール、労働時間の設定と「勤務外の時間」との関係など、生活時間構成の「まともさ」を考える。生活時間の具体的な調査法、余暇の問題も取り上げる。	同　上	同　上
7	労働と休養(2)労働負担の調査	仕事（作業）による心身への負担を調べる方法として、「主観的評価法」を中心に概説し、労働時間と休養時間とのバランスを考察する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	労働生活への適応過程	就職後の適応努力の段階的経過について考察する。大別すると、身体的適応、技能習得といった技術的適応、そして、組織への適応（社会的適応）の問題である。	越河　六郎 星　薫	越河　六郎 星　薫
9	障害者の職業適応	職場で働く身体障害者の作業支援システムについて考察する。労働能力の開発、リハビリテーションの問題にもふれる。知的障害者に関しては、「作業の特徴」に関して概説する。	同上	同上
10	年齢と労働能力	個人の年齢段階に伴う作業能力の推移について述べる。また、高齢者人口の増加にもかかわらず、高齢者の労働参入は我が国では進んでいないが、高齢者の就労に必要とされる配慮についても考察する。	神作　博（中京大学教授） 星　薫	神作　博（中京大学教授） 星　薫
11	労働と安全	労働に伴う災害・事故の問題を取り上げる。不注意、ミスといった人為的な側面だけでなく、システム上の問題も含めて、職場の安全管理のあり方を考察する。交通安全に関しては、交通心理学の知見を述べる。	同上	同上
12	労働と健康	職場における健康管理のあり方について考察する。現状では、病気・医療を中心とした健康管理であって、いわゆる「健康」の管理ではない。産業心理学の立場から「メンタルヘルス」管理を中心に考察を述べる。	越河　六郎 星　薫	越河　六郎 星　薫
13	労働生活の具体像(1)	製造業・農業に携わっている人たちの労働・生活場面を捉え、その職務特性とライフスタイルとの関連を考察する。	越河　六郎 星　薫 神作　博	越河　六郎 星　薫 神作　博
14	労働生活の具体像(2)	情報処理（システム設計、管制業務）運転業務に携わっている人たちの労働・生活場面を捉え、職務特性とライフスタイルとの関連を考察する。	神作　博 星　薫	神作　博 星　薫
15	労働生活の具体像(3)	人間を対象とする、サービス業（客室業務員）、ケアワーク（看護、介護、保育）に携わっている人たちの労働生活場面を捉え、職務特性とライフスタイルとの関連を考察する。	越河　六郎 星　薫	越河　六郎 星　薫

＝カウンセリング概説（’０１）＝（R）

〔主任講師：馬場　謙一（放送大学教授）〕
〔主任講師：橘　　玲子（放送大学教授）〕

全体のねらい

カウンセリングについてその方法や理論、効果などを含め、具体的事例にふれながら概説する。心理的援助であるカウンセリングの基本にあるクライエント・カウンセラー関係を重視し、そこに起こる心の動きや成長の過程を考える。この講義では特定の学派に立つものではないが、しかし重要な理論については学習する。なお、カウンセリングが望まれる新しい領域にも若干ふれることにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	第１章　カウンセリングとは	心の悩みやストレス、問題行動に対して、カウンセリングは行われる。誰が、どこで、どんなカウンセリングを行っているかを本講義の全体の章と併せて述べ、今後カウンセリングが要請される分野などを示す。	橘　玲子（放送大学教授）	橘　玲子（放送大学教授）
2	第２章　カウンセリングの歴史と定義	カウンセリングはどのようにして生まれ、発展してきたか、また助言、指導、ガイダンス、心理療法とは、どんな違いがあるか、日本での発展も含めて述べる。	馬場　謙一（放送大学教授）	馬場　謙一（放送大学教授）
3	第３章　カウンセリングの方法	カウンセリングに先立って知っておくべき知識（精神医学、無意識の理論など）があること、カウンセリングの具体的な進め方、目標を設定することの大切さ、目標や対象による進め方の違い、などについて論ずる。	馬場　禮子（東亜大学教授）	馬場　禮子（東亜大学教授）
4	第４章　カウンセラーの態度	基本的な態度（ロジャースの提言を紹介しながら解説する）、自己開示と隠れ身、態度に関する注意事項（救済願望、いわゆる逆転移の解説）、カウンセラーの成長について述べる。	同　上	同　上
5	第５章　カウンセリングの準備	面接の始め方、インテーク面接、症状や生活史の聴取とクライエントの心の理解、アセスメントと見立て（診断）について述べる。	馬場　謙一（放送大学教授）	馬場　謙一（放送大学教授）
6	第６章　カウンセリングの約束	カウンセリングを始めるにあたっては、場所・時間・料金などを話し合って、合意しておく必要がある。面接構造の安定性は、カウンセリングの進展にとって重要である。	滝口　俊子（京都文教大学教授）	滝口　俊子（京都文教大学教授）
7	第７章　カウンセリングの過程	カウンセリングはどのように進行するか、その過程でどのような現象が起きるか、防衛や抵抗、転移や逆転移などについて述べる。	馬場　謙一	馬場　謙一

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	第８章　カウンセラーの応答（1）	カウンセリングには傾聴、受容、共感が大切である。クライエントの語ることにカウンセラーはどう受け止めて返していくのか、明確化や直面化など技法的な解説をする。	橘　玲子	橘　玲子
9	第９章　カウンセラーの応答（2）	実際のカウンセリングにはカウンセラーがどう対応したらよいか苦しむ場面がでてくる。クライエントの質問、沈黙、自殺のテーマ、などなど、代表的な現象を取り上げて考える。	同　上	同　上
10	第１０章　カウンセラーの訓練	心に関わるカウンセリングという任務には、自らを鍛え続けてゆく意欲が不可欠である。訓練には、事例について詳細に指導を受けるスーパーヴィジョン、ケースカンファレンス、ロールプレーなどの方法がある。	滝口　俊子	滝口　俊子
11	第１１章　カウンセリングの理論（1）フロイド、ユング、ロジャース	代表的な心理療法の理論からカウンセリングの参考になるところを紹介する。フロイドの理論から心の働き方と転移、抵抗の概説、ユングの理論から無意識論、治療的態度の概説、ロジャースについては４章の補足をする。	馬場　禮子	馬場　禮子
12	第１２章　カウンセリングの理論（2）行動療法と認知療法　その他の理論	不安や抑うつに対する援助としての行動療法・認知療法、および、環境（人間関係も含む）との相互作用を分析し、そこにかかわる戦略を考える理論としての応用行動分析・システムアプローチについて、解説する。	神村　栄一（新潟大学助教授）	神村　栄一（新潟大学助教授）
13	第１３章　非言語的カウンセリング	カウンセリングにおいては、クライエントの非言語的世界への共感を要する。また、非言語的方法（遊戯療法、箱庭療法、表現療法など）を併用することも、カウンセリングを促進させることがある。	滝口　俊子	滝口　俊子
14	第１４章　グループ・アプローチ	カウンセリングはグループを対象に行われることがある。集団の力学が働き、人間の成長を促進する働きがあるが、逆に危険性もある。集団カウンセリングの適応や方法、などを概説する。	橘　玲子	橘　玲子
15	第１５章　コミュニティ・アプローチ	コミュニティにおける対人援助、たとえば危機介入、犯罪被害者・被災者のＰＴＳＤ（外傷後ストレス障害）、家庭教育支援（家庭内の暴力）、学校教育相談活動などである。ここでのカウンセリングの利用を考える。	神村　栄一	神村　栄一

＝ 日本の法システム（’００）＝（R）

〔主任講師：六本 佳平（放送大学教授）〕

全体のねらい

近代化のために輸入した日本の法システムが、今日の開かれた流動社会に適しい制御機能を果たしているか。歴史的背景・社会的諸因子・文化的思惟構造と関連づけて調査データによって実態分析し、近代西洋型法システムの利点と限界の観点から考察し、改善の方向を論じる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	法システムと法過程	法システムは、個々人の価値や利害を社会に統合する装置のひとつであり、拘束力ある実定法規範体系と、その適用・実現のための機構からなる。社会構成員がこれを主体的に活用する法過程として、紛争処理・法役務・裁判・強行・規制等がある。	六本佳平（放送大学教授）	六本佳平（放送大学教授）
2	法文化	法システムは、歴史的に伝承された文化的与件の中で働く。法制度が立法で形成・改変され、人々が争いを起こし、法機構を利用し、裁判所が紛争を処理する諸過程に、日本文化は浸透する。文化とは何か、文化は変わるか、文化を測定・比較できるのか？	同上	同上
3	紛争	法システムが働くさいに直接の対象となる紛争の概念と過程を解明する。紛争処理の社会的過程を、当事者が手持ちの資源や第三者を動員して目的を達する過程として捉える。その中で紛争の法的処理の持つ意義、そのための制度を明らかにする。	同上	同上
4	法使用	個人や組織に生じる法律問題は、社会構成員の法システムに対する需要を表す。法律問題のさまざまの種類、およびその解決のために法システムが提供する手段(法律相談・弁護士・裁判所など)が使用され、またはされない社会的諸条件をデータで見る。	同上	同上
5	紛争処理	法システムの下での紛争過程は、原理的に、法的基準に志向した交渉の過程であり、裁判外の非公式処理から裁判による公式処理にいたる連続的な過程として捉えられる。泣き寝入り・示談・弁護士交渉・調停・和解・判決等にいたる社会的諸条件を見る。	同上	同上
6	法律家	弁護士は、法律問題を持つ個人や組織に法役務を提供する専門職業家である。日本の弁護士制度、その歴史的背景、職業としての社会的特色、法役務の種類、法システムにおける役割、弁護士の職業組織、職業倫理、職業行為を規定する社会的諸条件を見る。	同上	同上
7	法役務1	弁護士の事務所組織・共同経営化・補助員などの業務・経営体制が弁護士による法役務過程に及ぼす影響を見る。日本の弁護士が扱う業務および顧客層のデータ分析から、社会関係や社会過程を法的に制御する機能が十分果たされているかを問う。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	法役務2	弁護士の法役務を補完する司法書士・弁理士等の法律関連職業、企業法務員、諸種の法律相談機関、また法使用の機会均等を図る法律扶助制度の現実の機能を見る。弁護士役務の供給量を規定する法曹養成制度の問題点、その改革をめぐる状況を分析する。	六本佳平	六本佳平
9	裁判制度	法的争点に最終決定を下す裁判官と裁判制度を取り上げる。日本の裁判制度の歴史的背景、裁判官職業の特色、キャリア裁判官制と法曹一元制との得失を論じ、陪審に代る日本の特徴である調停やその他の準裁判を含めた争訟処理体系についてデータで見る。	同上	同上
10	民事裁判	日本の裁判所は紛争の法的処理による社会制御機能を十分果たしているか。訴訟事件とその処理様式、近年の事件数の急増をデータでみる。和解処理の要因、判決との分岐点、取立事件の処理、現代型訴訟の特色、判決の司法行動分析等を論じる。	同上	同上
11	刑事裁判と規制	警察による犯罪の抑止・摘発の過程、および行政による法発動によって社会を法的に整序する規制過程を取り上げる、担当組織の人員その他の資源、事件認知の方法、強行・規制対象との関係、実効性確保のための社会的諸条件等をデータで見る。	同上	同上
12	法と社会変動1	実定法規範体系の内容を社会の変化に従って変える必要がある。また、実定法の変更によって社会のあり方を望ましい方向に変化させることが試みられる。この法と社会との相互作用が円滑に運ばれるための条件を、家族・農家相続に関するデータで見る。	同上	同上
13	法と社会変動2	前回と同じ問題を、不動産の賃貸借・雇用男女均等法について見る。新しい権利や規範が形成される社会的背景と過程、立法のための政治過程、それが実定法機構によって社会に貫徹される諸条件、社会の中に根づいている生きた法との交錯等を論じる。	同上	同上
14	法と社会学的理論	人間の社会的行為の性質、規範現象の性質と意義、法システムの一般的な構造と社会制御機能、近代法の利点と限界、法と社会・権力構造、未開法以降の法システムの形態発展、法の文化的多様性、現代法の特質等について、社会科学的な法理論を概観する。	同上	同上
15	日本の法と社会	講義全体を総括し、日本の近代法システムの歴史的形成・発展、日本の法と社会についての学説の展開、グローバルに開かれた社会形成における法の役割、日本の法文化、法に関する経験的研究の課題等について展望する。	同上	同上

＝ 法と裁判（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：青山 善充（東京大学副学長）〕
〔主任講師：井上 正仁（東京大学教授）〕

全体のねらい
現代社会における法と裁判の基本的仕組み、理念および問題点を平易に解説し、あわせて民事裁判および刑事裁判の当面する諸問題を学生とともに考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	人間の社会と法	「社会あるところ、法あり」といわれる。法とは何か、それは何を目的としているかを考え、実定法の体系を概観する。	青山善充（東京大学副学長）	青山善充（東京大学副学長）
2	日本における法と裁判制度の近代化	日本は明治維新後、西洋の法を継受し、近代的な司法制度を作った。その後、第2次大戦直後、憲法を初めとする法の根本変革を経験し、現在また大変革期を迎えている。法と司法制度の変遷を振り返る。	同上	同上
3	司法権の機能と裁判所の種類・役割	三権のうち司法権は、立法権や行政権に対してどのような機能を果たすことが期待されているか。司法権を担う裁判所にはどんな種類のものがあり、それぞれの裁判所はいかなる役割を果たしているか、を考える。	同上	同上
4	裁判を受ける権利と裁判の公開	憲法は、国民に「裁判を受ける権利」を保障し、裁判の公開を要請している。裁判を受ける権利とは、具体的に何を意味するのか、裁判の公開の目的は何か、現在どのようなことが問題になっているかを見る。	井上正仁（東京大学教授）	井上正仁（東京大学教授）
5	国民の司法参加	国民の司法参加にはどのような形態があるか、日本ではどこまで行われているか、そのメリット・デメリットは何か、を諸外国の例と比較しながら考える。	同上	同上
6	民事紛争とその解決方法	民事関係の紛争には、どんなものがあるか、どのような方法で解決されるか、裁判による解決とそれ以外の解決では、どのように違うか、を考える。また、裁判手続や強制執行の流れも、ここで見ておく。	高橋宏志（東京大学教授）	高橋宏志（東京大学教授）
7	市民生活と調停および裁判	日常生活の中で市民は様々な法的トラブルに出会う。その解決方法として、民事調停・家事調停および訴訟（とくに少額訴訟手続）を見てみる。また、近時増えている個人破産の問題も考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	企業活動と裁判	企業活動の多面的・国際的展開に応じてこれをめぐる法的紛争が国内的にも国際的にも増加している。その解決手段として裁判を取り上げる。また国際商事紛争の解決手段としての仲裁を考える。	伊藤　眞（東京大学教授）	伊藤　眞（東京大学教授）
9	行政活動と刑罰	国や地方公共団体の行政活動の違法性が裁判で争われる場面が増えてきている。そこで、取消訴訟を例にとって、行政裁判とは何か、その問題点はどこにあるかを考える。	同上	同上
10	犯罪と刑罰	犯罪とは何か、刑罰はなぜ科せられるのか、という基本問題を踏まえつつ、現代における刑法の存在意義とその機能を検討する。	佐伯仁志（東京大学教授）	佐伯仁志（東京大学教授）
11	犯罪と捜査	犯罪捜査手続を概観したうえで、その当面する問題につき、検討する。	井上正仁	井上正仁
12	犯罪と裁判	起訴から公判、裁判に至る手続を概観したうえで、その当面する課題につき、検討する。	同上	同上
13	少年非行と法	少年非行・少年犯罪とそれに対する法制度上の対応につき、近時の少年法改正問題などにも言及しつつ、検討する。	川出敏裕（東京大学助教授）	川出敏裕（東京大学助教授）
14	法律家の役割	弁護士を中心としつつ、裁判官や検察官を含め法律家の役割・責務を見てみる。	井上正仁	井上正仁
15	法律家の養成	司法試験や法曹教育、それと大学での法学教育との関係などにつき、検討する。	青山善充 井上正仁	青山善充 井上正仁

＝民　　法（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：奥田　昌道（京都大学名誉教授）〕

全体のねらい

民法（財産法）の内容を、人と財産をめぐる法的規律という視点から捉えてみる。できるだけ日常生活に関わりのある身近な問題を念頭におきながら、民法（財産法）の全体像が浮かび上がるようにつとめる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	民法とは何か	(1)　民法とはどのような法か。わたしたちの生活関係のうちのどの部分をどのように規律するのか、(2)　成文法としての民法（民法典）の生い立ちとその後の変遷、(3)　民法に関係の深い法律について、概説する。	奥田昌道（京都大学名誉教授）	奥田昌道（京都大学名誉教授）
2	民法のしくみ	民法（民法典）は、総則、物権、債権、親族、相続の５編から成るが、その内容を「人と財産をめぐる法的規律」という視点から概観する。	同　上	同　上
3	人と法律との出会い	人は出生から死亡にいたるまで、民法とどのように関わるかを、(1)胎児、(2)出生、(3)未成年者、(4)婚姻、(5)死亡、のそれぞれにつき概説し、特に、意思能力・行為能力の不完全な者についての財産の保護・管理のための制度について説明する。	同　上	同　上
4	法人をめぐる法律問題	民法は人（自然人）のほかに、ある種の団体や一定の目的に捧げられた財産（財団）に法人格を認める（法人）。このような法人制度の意義、および、法人の設立、管理運営、活動に関する法的規律について概説する。	同　上	同　上
5	財産の保護と民法	(1)　民法上、財産とは何か。財産と財産を構成する権利（財産権）との関係はどのように捉えられるか、につき考察し、(2)財産ないし財産権の法的保護の仕組みを、民法（実体法）と民事手続法の両面から概説する。	同　上	同　上
6	物権取引をめぐる法律問題	民法は、有体物（不動産と動産）の上に成立する所有権を中心に物権に関する法的規律を定めている。その概要を説明し、不動産物権変動に関して特に重要な公示（登記）の問題、取引の安全の問題について概説する。	同　上	同　上
7	所有権の法と占有の法	民法は、所有権の法のほかに、占有の法（占有制度）を定めている。それは何故か。占有制度には多様な役割・機能が担わされている。その概要を、実体法と手続法の両面から説明する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	契約自由とその規制	民法は、私人間（個人対個人、企業対企業、企業対個人）における経済的生活関係（取引関係）の形成を原則として、当事者の自己規律（契約）に委ねている。そのメリットとデメリットを考察し、法はそれにどのように対処しているかを概説する。	奥田昌道	奥田昌道
9	代理制度について	さまざまの契約の締結、その交渉や契約の実現（履行）の際に、代理人その他の他人（第三者）が介在する場合が多い。これらのうち、代理制度についての法律上の規律を概観し、特に重要な問題や留意すべき事項を取り上げる。	同上	同上
10	売買契約に関する法的規律	日常生活の中で最もポピュラーな契約である売買契約を取り上げ、契約の成立から履行に至るまでの間に、および、履行が終わったのちに、現れてくるさまざまな問題について、民法はどのような規律をしているかを概説する。	同上	同上
11	不動産利用の法律関係	建物所有の目的で他人の土地を利用する法律上の手段として、地上権を取得する方法と賃借権を取得する方法とがある。建物の利用の場合は賃貸借契約による。これらに関する民法および借地借家法の規律を概説する。	同上	同上
12	時効制度について	民法は、時効制度を設け、所有の意思をもって一定の期間、他人の物を占有する者に所有権の取得を認め（取得時効）、一定の期間、権利を行使しない者に権利の消滅を認める（消滅時効）。この制度の存在理由などを中心に、時効制度を概観する。	同上	同上
13	物的担保制度と人的担保制度	主として金銭債権の履行確保の法的手段として民法が用意しているのは、物的担保制度と人的担保制度である。前者は、抵当権、質権、仮登記担保などであり、後者は保証制度である。これらの諸制度の要点を概説する。	同上	同上
14	不法行為制度の概要	個人や法人＝企業、それらの被用者の加害行為により、また、他人の支配下にある工作物等の瑕疵により、人身損害や財産上の損害を被った場合の法的救済制度を定めているのが、不法行為法である。まず、その概要を説明する。	同上	同上
15	特殊不法行為について	個人や企業の被用者・従業員の加害行為の場合の使用者の責任、責任無能力者の加害行為の場合の法定監督義務者の責任、企業設備や工作物の設置・保存の瑕疵による損害発生の場合の所有者・占有者の責任、製造物責任などにつき概説する。	同上	同上

＝ 家族法（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：泉　久雄（専修大学名誉教授）〕

全体のねらい

家族法は、私たちの保族生活である夫婦、親子の生活関係（それに相続を含めて）を対象とした法の世界であるが（民法典では、親族法と相続法といっている）、保族生活は人類の生存に不可欠であり、人類生存の基礎である。そういった認識の下に、現行家族法の描く家族関係の全体と理想像を追及したいと思う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	(1)現行家族法の理念と構成 (2)家族法の基礎的概念	現行家族法は核家族を念頭において個人の尊厳と両性の平等を理念として、その上に夫婦・親子の関係を規律していることを明らかにする。 次に、家族法の基礎的概念である、血族と親族関係を説明する。	泉　久雄（専修大学名誉教授）	泉　久雄（専修大学名誉教授）
2	婚姻　(1) 婚約 婚姻の成立	婚姻の成立をめぐる問題を一括説明する。第１に婚約をめぐる法律問題、第２に婚姻の成立要件、第３に成立要件に違反した婚姻の効力＝無効・取消を説明する。	同　上	同　上
3	婚姻　(2) 婚姻の効力	氏とか貞操義務といった婚姻の一般的効力と夫婦財産制（婚姻生活をめぐる財産関係）を説明する。民法は夫婦の財産関係について別産制を採っている。別産制の長所と欠点は何か、その解決策は？といった問題にもふれたい。	同　上	同　上
4	離婚　(1)	離婚は当事者に再婚の可能性を保障する制度であるが、わが国の離婚制度がヨーロッパとちがった道を歩んで来たことを明らかにし、ついで、統計を使いながら、今日の離婚の全体像と離婚法の構造および特色を説明する。	同　上	同　上
5	離婚　(2)	民法に規定する離婚の方法、協議離婚と裁判離婚を（めぐる問題を）説明し、続いて離婚の効果（親権者の決定とか財産分与など）を説明する。	同　上	同　上
6	内縁	内縁の判例法はわが国特有の法領域であるが、どうしてそうなっているのかを判例の変遷をたどって説明し、ついで内縁判例法の現状を説明する。内縁以外の男女共同生活（同棲）にもふれたいと思う。	同　上	同　上
7	親子　(1)	親子関係には実親子と養親子があり、実親子は婚姻によって出生した嫡出子と婚姻外の子、非嫡出子がある。人工生殖子もある。こういった親子関係の成立をめぐる問題を説明する。通常、教科書では、実子、養子として説明されている部分である。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	親子(2)親権	子の監護教育を民法は親権という表題のもとに一括して規定しているが、親権は子の身上監護（子育て）と財産管理の二分野から成っている。それを説明し、親権の剥奪にもふれたいと思う。	泉　久雄	泉　久雄
9	扶養	広く扶養というときには、夫婦間の扶養（婚姻費用の分担）、未成熟子の扶養（養育ないしその費用の支出）、それ以外の親族間の扶養の三種を含む（私的扶養という）が、私的扶養と公的扶助との関係から始めて、親族間の扶養を説明する。	同　上	同　上
10	現行相続法の基礎と特色	現行相続法は諸子均分相続制と配偶者相続権の強化（それに遺言の自由を加えてもよい）を柱として組立てられているが、それはどういう理由によるのか、明治民法の家督相続の理念、相続制度の歴史などを引合いに出しながら説明する。	同　上	同　上
11	相続人	相続人には血族相続人と配偶相続人とがあるが、その相続順位を説明し、ついで相続権剥奪制度である、相続欠格と相続人の廃除制度を説明する。続いて相続の仕方（相続の承認・放棄）に進み、最後に相続人不存在の場合の遺産の行方を説明する。	同　上	同　上
12	相続の効力	生命侵害に対する損害賠償請求権の相続と、保証債務の相続を通して、相続が故人の遺産を承継する制度であることを明らかにする。祭祀財産の承継にもふれる。次に、遺産分割をするまで、相続した遺産の管理がどういう形で行われるかを説明する。	同　上	同　上
13	遺産分割	遺産分割の前提となる各相続人の相続分を説明し、ついで遺産分割の二つの方法、協議分割と審判分割について注意すべき問題点を説明する。	同　上	同　上
14	遺言(1)	遺言が死後行為（遺言者の死亡によってはじめて効力が生ずる）であることを述べ、続いて、遺言の内容を明確にするために定められている、遺言の方式（仕方）を説明する。遺言の撤回にもふれる。	同　上	同　上
15	遺言(2)	遺言による財産処分、遺贈をめぐる問題を説明し、遺留分との関係にふれる。最後に、遺言を実現する方法である、遺言の執行を問題にする。	同　上	同　上

＝商　　法（’９９）＝（R）

〔主任講師：森本　滋（京都大学教授）〕

全体のねらい

公開会社の実態を前提に、株式会社の設立・管理運営機構・資金調達さらには合併等の組織再編にかかる商法と証券取引法の規制および企業取引活動に関する基本的な法制度を概説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序論	株式会社、とりわけ、公開会社の組織の基本構造の概要（商号・商業帳簿・機関等）と公開会社にかかわる基本的な法規制（商法・証取法・独禁法・経済法等）を解説する。	森本　滋（京都大学教授）	森本　滋（京都大学教授）
2	経営管理機構その一（株主総会）	公開会社の株主の法的地位を説明した後、株主総会の招集手続・議事運営・権限、および、株主代表訴訟等の株主の監督是正権について解説する。	同上	同上
3	経営管理機構その二（企業経営）	取締役の法的地位を整理した後、取締役会制度と代表取締役および業務担当取締役について検討する。	同上	同上
4	経営管理機構その三（経営コントロール）	公開会社の健全かつ効率的な経営を確保するために、商法が規定する経営コントロールないしチェック機構（取締役会・監査役・会計監査人）の概要を示した後、決算手続における経営チェック・システムについて説明する。	同上	同上
5	企業結合法	公開会社の合併・営業譲渡、分社化としての子会社設立、さらに、持株会社の設立について、商法・証券取引法、さらに、独禁法の規制の概要を解説する。	同上	同上
6	資金調達	公開会社の資金調達方法としての新株発行と社債の募集について、商法と証券取引法の発行開示規制を合わせて解説する。	同上	同上
7	計算・監査・公開（企業会計法）	公開会社の計算・監査・公開制度を、資産の評価と合わせて解説する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	商法と証券取引法	公開会社の組織に関する体系的な法規制としての、商法と証取法および開示の関係を整理した後、証券業者にかかる証取法の規制内容について解説する。	森本滋	森本滋
9	閉鎖会社法	中小規模の株式会社と有限会社の管理運営（同族会社の法的問題）について解説する。	同上	同上
10	銀行と企業	銀行（金融機関）が、企業の組織活動および取引活動に対してどのような役割を果たしているか、とりわけ、企業の資金調達と手形・小切手取引における銀行の役割を説明し、銀行法についても解説する。	同上	同上
11	約束手形の一生	企業取引における決済手段としての約束手形について、銀行取引と関連付けて解説する。	同上	同上
12	企業取引と民法・商法	企業取引にも取引にかかる一般法である民法が原則として適用されるが、商法は民法の特則ないし特別規定を定める。この商法の特則の解説を通して企業取引の特色を明らかにする。なお、消費者保護の問題についても簡単に触れる。	同上	同上
13	問屋・運送業・倉庫業	企業の取引活動を補助する補助商として、問屋・運送業・倉庫業等がある。これらの補助商にかかる商法の特則と関連業法について触れた後、貨物引換証についても簡単に解説する。	同上	同上
14	保険と代理商	保険制度について概説した後、生命保険を巡る最近の法的問題（変額保険・団体保険等）について、代理商・保険ブローカー制度と併せて検討する。	同上	同上
15	まとめ	これまでの講義内容をまとめたあと、今後のわが国の企業法制の在り方について検討する。	同上	同上

＝ 行政の法システム入門（’９８）＝（R）

〔 主 任 講 師 ： 阿 部　泰 隆（神戸大学教授）〕

全体のねらい

行政法は、行政の手を通じて「公共性を実現」するための重要な法制度である。毎日の新聞には、「犬も歩けば棒に当たる。君も歩けば、行政法に当たる。」というほど、多数の行政法上の問題が掲載されている。それは一見きわめて断片的であるが、その構造的特色を明らかにし、その不合理性と改善策を提言する。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	行政法の存在理由と変革期における行政の法システム	毎日の新聞に出てくる行政法の存在理由を、特に民刑事法との関連で分析・分類し、その基本的な原則を明らかにする。それとともに、規制緩和、市場原理の重視、法治行政化、行政手続、情報公開、地方分権などに簡単にふれて、今日国民と行政の関係が大変革の時期にきていることを説明する。	阿部泰隆（神戸大学教授）	阿部泰隆（神戸大学教授）
2	行政の監督システム　その１	行政の大きな任務は民間活動の監督である。それは基本的には経済介入手法と経済不介入手法に分けられる。これまでの護送船団型監督から市場原理に基づく監督へ移行する必要があるとともに、監督自体もいきすぎたり、不十分であったりするので、効率的なシステムに切り替える必要がある。その仕組みの基本と、規制のいきすぎ、不十分な規制の改善策の動向を学ぶ。	同　上	同　上
3	行政の監督システム　その２	行政の監督手法である許認可と私権の関係、不法行為と行政規制の関係を学ぶとともに、金融不祥事、脱税、薬害、違反建築などに見るように必ずしも十分に機能していない監督手法の改善策を工夫する。 また、濫用され気味な行政指導を法治行政に適合するようにルール化する。	同　上	同　上
4	行政上の強制実現・制裁のシステム	行政規制に違反した場合とられる強制手法として、代執行や刑事制裁、また、税金のような行政上の負担の強制徴収のシステムが必ずしも機能しない現状を明らかにし、その改善策などを解明する。	同　上	同　上
5	サービス・事業システム	行政による公共サービスの体系について、国民の利用権、費用負担、組織形態、民営と公営の関係などを明らかにする。 特に、行政の事業の簡素化、土木工事システムから民間の補完、監督手法への転換を提案する。	同　上	同　上
6	土地利用規制のシステム	日本の都市はなぜ貧相か、なぜ自然環境を守れないかを開発自由の原則によって説明し、秩序あるまちづくり、公平な受益と負担の関係を基本とした土地利用の法システムを提案する。	同　上	同　上
7	経済的手法・補助手法	人間を権力ではなく、金で動かす経済的な手法は、ゴミ収集の有料化、障害者雇用納付金・雇用調整金などにみるように新しいものであるが、通行課徴金など、今後の活用可能性は広い。また、金銭を支給する補助金も、適切に活用されるように改善策を考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	情報の収集管理保護システム	行政が情報を適切に収集し、保護し、管理して公開し、かつ、プライバシーを保護するように、情報の総合的なシステムを作っていく必要がある。情報公開は行政と市民の関係を、恩恵の関係から権利義務の関係へと改善し、行政改革の一環でもある。	阿部泰隆	阿部泰隆
9	事前手続	行政処分をするときは、事前に言い分を聞いたり、理由を提示したりして、間違いが少なくなるようにする必要がある。これを定める行政手続法の仕組みを明らかにし、それが行政と市民の関係の改善に寄与することを示す。	同上	同上
10	住民参加	行政が活動するとき、関係する住民の意向をどのような方法で反映すべきか。これまでの制度は行政の一方的執行と住民の一瞬の参加によって特徴づけられてきたが、住民参加を強化するとともに、そのいきすぎを防止する方法を考える。	同上	同上
11	行政はどこが行うのか	地方分権の流れとその課題を明らかにするとともに、中央政府の行政改革、公務員制度の改革を念頭において、行政の組織の仕組みを考える。	同上	同上
12	損失補償法	土地収用、土地区画整理などのような、公共のために財産権を制限・剥奪する法制度と補償のシステムを説明する。これは損得無しの制度であるが、実は機能しにくいので、適正補償のために、上乗せ補償、ゴネ損方式を提案する。	同上	同上
13	国家賠償法	エイズ、水俣、学校事故などを例に、公権力の違法・有過失の行使、公物営造物の設置管理の瑕疵を理由とする国家賠償法の解釈問題を扱う。さらに、震災の被災者など、国家賠償と損失補償の射程外の生活支援、冤罪の犠牲者など、いわゆる国家賠償の谷間の救済を考える。	同上	同上
14	行政訴訟	違法な行政活動に対する救済の解釈問題を考える。争点は、誰が争えるか、どの行為を捕まえることができるのか、どのような訴訟形式なら許容されるのか、判決の効力はどこまで及ぶかといった法技術的な点にある。この制度は必ずしも機能していないので、行政訴訟制度の改善策にも及ぶ。	同上	同上
15	行政への不服申立てと行政の監視	1．行政不服申立て 税金への不服などを例に、行政への不服申立ての仕組みを考える。また、不服申立ての仕方を教える教示の例を示して、制度の不十分さと改善策を考える。 2．行政の監視 会計検査院、行政監察、地方公共団体の監査委員などの監査の不備を検討し、外部監査や行政監視院法案など、その改善の方向を探る。官官接待を明らかにした住民訴訟にもふれる。	同上	同上

＝刑　法　学＝（R）

〔主任講師：大谷　實（同志社大学教授）〕

全体のねらい

刑法の目的は市民生活の安全の確保による社会秩序の維持にあるということを基調として、犯罪の原因および現在の犯罪の実態を踏まえながら、刑法の体系に即して重要な問題を取り上げ、刑法と犯罪対策との関係を明らかにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	犯罪防止と法	先進諸国家の犯罪の情勢と我が国の犯罪の実態を検討したうえで、犯罪がもたらす害悪を示し、その防止の必要性を説き、さらに、犯罪原因論と犯罪防止システムとの関連を概観し、刑法もそのシステムの一環であると主張する。	大谷　實（同志社大学教授）	大谷　實（同志社大学教授）
2	刑法・刑罰の運用	現行刑法の背景を概観して、刑法が定めている刑罰の体系と種類を説明したうえで、刑の執行猶予や仮釈放を説明し、実際に刑罰が使われる場合は少数であることを、明らかにして刑法が犯罪防止に果たす役割と限界を論ずる。	同　上	同　上
3	刑法の任務	刑罰による犯罪抑止と人権侵害との関係を明らかにし、刑法では特に効率性と同時に正義性が問われるゆえんを論ずる。次に、正義性との関連を踏まえながら、犯罪成立要件である構成要件該当性、違法性、責任の内容を検討する。	同　上	同　上
4	罪刑法定主義と構成要件	犯罪防止と人権保障の調和を図ることが刑法の運用で最も重要であることを説き、その調和のためには、罪刑法定主義に立脚した構成要件論を展開する必要があるという認識から、近年有力となってきた実質的犯罪論を批判する。	同　上	同　上
5	個人法益に対する罪	個人の尊重を価値の根源とする社会では、個人の利益〔法益〕の保護が最も重要であるという観点に立って、生命、自由名誉・信用および財産などの個人の利益を侵害する犯罪を概観し、重要な論点を取り上げる。	同　上	同　上
6	社会法益に対する罪	社会の利益と個人の利益との関連を検討した後、社会の利益を侵害する犯罪を概観し、たとえば、コンピュータに関連する犯罪など現代的な犯罪について検討するとともに、財産的情報の保護についての立法問題にも言及する。	同　上	同　上
7	国家法益に対する罪	社会の利益と国家の利益の区別を明らかにし、国家の利益を侵害する犯罪を概観する。特に、収賄罪などの公務員の職務に関連する犯罪について、やや詳しく検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	犯罪の成立要件	個々の構成要件に共通する一般的な犯罪成立要件としての構成要件、違法性、責任の相互関係を説いてから、構成要件に該当すると原則として犯罪が成立し、犯罪成立阻却事由は、犯罪認定上例外的に検討すれば足りることを明らかにする。	大谷　實	大谷　實
9	実行行為と因果関係	構成要件該当性に関して問題が生ずる不作為犯、間接正犯及び未遂犯を中心に実行行為の態様を検討する。特に、近年有力となってきた結果発生の危険ある行為を実行行為と解する見解にメスを入れて、あるべき危険概念を提言する。	同　上	同　上
10	故意と過失	故意と過失を構成要件要素とする立場から、それぞれの内容と両者の限界線を明らかにする。次に、故意の裏の議論である事実の錯誤について検討し、最後に、過失の内容を明らかにする。	同　上	同　上
11	未遂犯と共犯	共犯の処罰根拠の問題を軸にして正犯と共犯の違いを明らかにし、共同正犯、教唆犯および幇助犯の成立要件を吟味した後、共犯の特殊問題として、①共犯と身分、②共犯の中止・離脱について検討する。	同　上	同　上
12	正当行為と安楽死・尊厳死	正当行為（法令行為、業務行為、その他の正当行為）を説明し、被害者の同意と自己決定権との関連について論じたうえで、安楽死及び尊厳死は自己決定権の尊重という観点から違法性を阻却すると主張する。自救行為、義務の衝突、許された危険にも触れる。	同　上	同　上
13	正当防衛と緊急避難	正当防衛と緊急避難の意義・要件を説明し、両者の相違点を明らかにした後、特に正当防衛について、防衛行為の相当性、正当防衛の意思を詳しく検討して、その結論が緊急避難にも波及することを明らかにする。	同　上	同　上
14	精神障害と犯罪	精神障害犯罪者の処遇の現状と保安処分について検討した後、心神喪失・耗弱は責任阻却・減軽事由であるとする立場から、責任能力を概観し、原因において自由な行為の問題点を整理する。	同　上	同　上
15	違法性の意識の可能性と期待可能性	違法性の意識の不在在及び期待可能性の不存在は責任阻却事由であるとの前提から、違法性の意識の可能性について故意および刑法38条三項との関連を論じ、最後に、期待可能性の判断の内容及び基準について検討する。	同　上	同　上

＝ 経済法（’００）＝（R）

〔主任講師：根岸　哲（神戸大学教授）〕

全体のねらい

市場経済体制の下で国家が経済的規制を行うための法である経済法は、主として、独禁法、各種事業法および通商法から構成されているが、その基本法は独禁法であることから、独禁法の内容と現実の機能の解説に講義の中心を置きつつ、それと関連づけながら各種事業法と通商法の近年の動向についても明らかにしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	経済法とは何か	市場経済体制ないし自由経済体制の下で国家が経済的規制を行うための法を経済法と総称しているが、経済法は、主として、公正かつ自由な競争を促進するための規制を行う独禁法、競争が適切に機能しない事業分野で競争制限的な規制を行う各種事業法、および公正かつ自由な通商を促進するための規制を行う通商法から構成され、その基本法が独禁法であることを解説する。	根岸　哲（神戸大学教授）	根岸　哲（神戸大学教授）
2	第二次大戦後の経済法の展開	第二次大戦後、占領政策として経済民主化政策が実施され、独禁法が経済憲法としての位置づけを与えられ民間主導型の経済運営を基本とすることが意図されたものの、現実には、昭和40年代までは政府主導型の経済運営を基本とし、国内産業を保護しつつ国際競争力を強化することを意図とした競争制限的な規制や行政指導が広範囲に活用され、占領政策の意図が現実化しだしたのは、政府規制の緩和と独禁法の強化を本気で実行せざるを得なくなった平成元年に開始された日米構造問題協議を待たなければならなかったことを解説する。	同　上	同　上
3	独禁法の目的と規制概要	経済法の基本法である独禁法の目的が「公正かつ自由な競争の促進」によって「一般消費者の利益の確保と国民経済の民主的で健全な発達の促進」を図ることにあり、独禁法は、その目的を実現するために、私的独占、カルテルを典型例とする共同行為、不公正な取引方法など事業者または事業者団体による競争制限的な行為や状態に規制を加え、専門的規制機関として公取委を設けていることを解説する。	同　上	同　上
4	共同行為の規制（1）	独禁法制定以来違反事件として取り上げられた行為のうち最も多いのは、価格カルテル、入札談合などの競争制限的な共同行為であり、競争制限的な共同行為は事業者によって行われることも事業者団体によって行われることもあるが、ここでは主として事業者による競争制限的な共同行為である不当な取引制限（3条後段・2条6項）の要件について具体例を取り上げて解説する。また、広い意味において共同行為の規制に含まれる、寡占企業による価格の同調的引上げの理由報告徴収制度（18条の2）もここで取り上げる。	同　上	同　上
5	共同行為の規制（2）	競争制限的な共同行為は事業者団体によって行われることも多く、不当な取引制限との関係に言及しつつ事業者団体による競争制限的な共同行為に対する独禁法の規制（8条）について解説するとともに、価格および供給量の制限に係る競争制限的な共同行為を実行した事業者および事業者団体の構成事業者に対して課される課徴金納付命令制度について解説する。	同　上	同　上
6	不公正な取引方法の規制（1）	独禁法違反事件して取り上げられる行為として競争制限的な共同行為に次いで多い不公正な取引方法は、公正な競争を阻害するおそれ（公正競争阻害性）がある行為であって公取委が指定する行為である（19条・2条9項）ので、公正競争阻害性の要件と公取委による不公正な取引方法の指定内容の概要について解説する。	同　上	同　上
7	不公正な取引方法の規制（2）	公取委による不公正な取引方法の指定には一般指定と特殊指定とがあり、このうち一般指定には16の多様な類型の不公正な取引方法が含まれているが、このうち重要な不当な取引拒絶、不当廉売、ぎまん的顧客誘引、不当な利益による顧客誘引、不当な抱き合わせ、不当な排他条件付き取引、再販売価格維持行為、不当な拘束条件付き取引、優越的地位の濫用、競争者に対する不当な取引妨害を取り上げ具体例に即して解説する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	独占・集中の規制（1）	独禁法は独占・集中に対する規制として、私的独占の禁止（3条前段・2条5項）、独占的状態に対する措置（8条の4・2条7項）、合併・営業譲受・株式保有・役員兼任等の企業結合に対する制限（第4章）を定めているが、まず、前二者について具体例を取り上げて解説する。	根岸　哲	根岸　哲
9	独占・集中の規制（2）	独禁法による企業結合の制限は、事業支配力の過度集中を防止する持株会社の制限（9条）、大規模事業会社の持株の総額制限（9条の2）および金融会社の持株制限（11条）と、一定の取引分野における競争を実質的に制限することとなる株式保有、役員兼任、合併、営業譲受等の禁止とに分けられるが、両者について具体例を取り上げて解説する。	同　上	同　上
10	知的財産権と独禁法	特許権、ノウハウ、著作権等知的財産に対する一定の独占的利用権を与える知的財産権と公正かつ自由な競争の促進を目的とする独禁法との関係について基本的にとのように捉えるべきかを検討するとともに、マイクロソフト事件、パチンコ機製造特許プール事件、プレステーション用ソフト中古販売制限事件等の具体例を取り上げて解説する。	同　上	同　上
11	独禁法の執行・実現	独禁法違反に対する措置として、行政措置としての排除措置命令と課徴金納付命令、刑事罰、および損害賠償請求等の民事救済が用意され、いずれの措置の発動においても公取委の役割が大きい公取委中心主義が採用されていることから、それぞれの措置の内容と発動実績を明らかにするとともに、公取委の組織と権限の特色について解説する。	同　上	同　上
12	独禁法と国際問題	企業活動の国際化の進展に伴い外国企業による外国での競争制限的行為によって自国市場の競争に悪影響を及ぼす事態が生ずることがあり、この場合自国の独禁法を外国企業の行為に適用できるかという域外適用の問題がでてくること、そして一方的な域外適用を回避するためにＯＥＣＤを通じた多国間の相互通告・協議・調停や. 二国間の独禁法協力協定が利用されていること、さらには独禁法の国際的ハーモナイゼーションや国際独禁法の制定の動きがあることを解説する。	同　上	同　上
13	規制産業（1）	独占性と必需性とを根拠に競争が適切に機能しないとして参入・退出規制、設備規制、料金規制など包括的な公益事業規制に服してきた電気事業、ガス事業、電気通信事業、運輸事業等の事業分野も、近年、規制緩和と競争導入という大きな変化を経験しているが、各事業分野ごとにその内容、根拠、問題点について解説するとともに、将来展望を試みる。	同　上	同　上
14	規制産業（2）	電気事業、ガス事業、電気通信事業、運輸事業等の事業分野では、程度の差はあるものの、いずれも競争と規制との適切な組み合わせ方についての模索が試みられているが、その模索の試みが各種事業法と独禁法との関係にどのように現れているのかについて具体例を取り上げて解説する。	同　上	同　上
15	通商法とGATT／WTO	国際通商（貿易）については、公正かつ自由な通商のルールを確保するための国際機構であるＧＡＴＴ／ＷＴＯ体制の下にあり、日本もその枠内においてダンピング（不当廉売）規制、補助金付き輸出に対する相殺関税賦課、緊急輸入制限（セーフガード規制）などを行っていることから、このような輸入規制とＧＡＴＴ／ＷＴＯルールとの関係について解説する。	同　上	同　上

＝ 雇用と法（’９９）＝（R）

〔主任講師：諏訪 康雄（法政大学教授）〕

全体のねらい

労働者と使用者との間に成立する労働関係は、信頼と対立の契機を内包している。労働法は主として対立の契機への対応を主眼としつつ、全般的な利害調整規準を提示する法領域である。労働市場をめぐる法、個別的労働関係をめぐる法、集団的労働関係をめぐる法の三者を中心に構成される労働法の構造と機能について解説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	労働法とは何か？	労働法の特徴について概説する。その過去と現在を眺めて、労働法の誕生のいきさつ、その後の発展と果たしてきた役割、現時点におけるその姿などをめぐり、簡単な考察を加える。ここでは、欧米諸国で発展してきた労働法とその理論が中心となる。	諏訪康雄（法政大学教授）	諏訪康雄（法政大学教授）
2	日本の労働法	明治末期ころかせ労働立法が現われはじめた日本では、その後、労働法がどのように発展してきたかを概説する。とりわけ欧米諸国と相当に異なる社会経済状況のなかで、どのような特徴を有するに至ったかを、立法、判例および法理の各面から考察する。	同上	同上
3	採用と法	労働関係の成立は採用に始まる。この採用をめぐり労働法はどのような利害調整規準を用意してきたか。採用プロセスの流れに沿って法的な問題点を説明し、労働法が用意した問題解決手法を考察する。採用、内定、試用期間などが中心となる。	同上	同上
4	配置と法	採用された労働者は、初期研修などを経たうえで、しかるべき職務に配属される。使用者の配置の権限は人事権と呼ばれる一連の権限の核となるものの一つである。配置、配置転換、転勤、出向、転籍などをめぐって、労働法がどのような判断の仕方をするかを見る。	同上	同上
5	服務と法	労働者は職務を誠実に行なうことを要求される。使用者の指揮命令権のあり方を中心にして、服務をめぐる法的問題点を説明する。服務規定、懲戒処分などの論点にも及ぶ。ともすれば無限定な服務要求が出がちななかで労働法はどういった限界づけを行うのか。	同上	同上
6	労働時間と法	労働時間、休日、休暇などをめぐる法規制のあり方を中心に説明する。これらの問題は労働者の労働義務の範囲を確定し、人間的な働き方を確保するうえで、非常に重要な点である。時間短縮などの動きとその達成手法との関係についても言及する。	同上	同上
7	賃金と法	労働者が働いたことに対する報酬は、経済的なものにとどまらない。働く喜び、人間的成長などが指摘される。だが、賃金、賞与、退職金などがまるで期待できないのでは、働く喜びも何もない。労働法は賃金についてどういった法規制をするか考察してみる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	安全衛生・労働災害と法	安全で衛生的な環境で働けることは、労働関係の基本中の基本である。たが、必ずしも理想どうおりにいってない例が多くある。労働災害と職業病の予防としての安全衛生の確保ならびに発生した場合への対処として、労働法はどのような対応策を用意しているか。	諏訪康雄	諏訪康雄
9	退職と法	労働関係の終了原因には、退職、解雇、死亡などがある。この退職などをめぐっては、労使間の利害が激しく衝突することも少なくない。労働法が用意する利害調整規準をめぐって考察する。日本型と呼ばれる判例法理のあり方についでも検討を加えよう。	同上	同上
10	労働組合と法	個人では使用者と十分な交渉ができない労働者に対して、法は団結して交渉力を高める道を用意する。労働組合の結成と運営、団体交渉、争議行為、労働協約など、労働組合法を中心として法領域について説明する。集団的労働関係法、労使関係法の考察である。	同上	同上
11	非典型雇用と法	パートタイム労働、派遣労働、契約労働といった新しい働き方が広がってきている。フルタイムで長期に雇用されて働くという典型雇用とは異なる世界の拡大は、労働法にどのような課題を提起し、法はどのような解決策を形成してきているのだろうか。	同上	同上
12	機会均等と法	雇用機会を均等に用意させるため法が規制を加えるようになってきている。日本では男女間の機会均等が中心だが、外国では人種、年齢などでの差別を禁止し、しかも雇用以外へもこれを広げる動きも顕著である。なぜ均等法なのかを含め検討する。	同上	同上
13	雇用政策と法	労働法は労働市場を前提として存在する。しかし、より狭義の労働市場法として、職業紹介、職業能力開発、雇用保険などの法制が存在する。これらは国の雇用政策の基礎をなし、その連用に関係するという意味で、雇用政策法とも呼ばれる。ここを検討する。	同上	同上
14	苦情・紛争と法	社会あるところに利害の対立は不可避で、それを処理すべきルールとルール運用手続きが不可欠である。労働法における苦情・紛争の処理システムはどのようになっているかを考察する。とりわけ日本の労働法の特徴を説明したい。	同上	同上
15	労働法はどうなるのか？	労働法の未来について考える。労働市場の変化、社会経済の変化のながで、労働者像が変わってきている。労働関係も違いを見せてきた。これから21世紀に向かって、労働法はどのような課題を担い、どのように変遷していくことだろうか。	同上	同上

＝ 法からみる国際関係（'９８） ＝ （Ｒ）

（主任講師：筒井　若水（早稲田大学教授））
（主任講師：道垣内正人（東京大学教授））

全体のねらい

国際的な法律問題について、国家、国際組織を主体とする国際（公）法的側面と個人・企業を主体とする国際私法的側面から、総合的に講義する。全体の法的枠組みを理解した上で、具体的事例をみてゆく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	国家・個人からみた国際的法律問題	国際社会の法規律は、伝統的に国家間の規律であった。こんにちでも、個人・企業の活動は、国際社会の法規律ではなく、国家のそれによって規制されている。ここでは、まず、通常、国際（公）法といわれる伝統的な国家間の法規律を取り上げ、それがどのように展開してきたかを概観する。	筒井若水（早稲田大学教授）	筒井若水（早稲田大学教授）
2	国内法と国際法の関係	国際法は慣習と条約にわかれるが、前者については、国内法と同様に扱う国が多い。条約は政府が締結することが多いが、当然に、国内法となるかどうかは、議会の法律締結権との関係で問題となる。国家が国際法に拘束されるのは当然であるが、個人は、結局、国際法とどの様な関係に立つのか。日本の場合を中心にみる。	同上	同上
3	個人・企業からみた国際的法律問題	個人・企業の国際的活動に対する一国の法規制はどこまでできるのか（域外適用の問題）と、個人・企業の間の国際的法律問題はどのように処理されるのかとに分け、全体像を概観する。	道垣内正人（東京大学教授）	道垣内正人（東京大学教授）
4	国際私法の考え方	個人・企業間の国際的法律問題については、各国の私法が統一されていないことを前提に、どこの国の法律を適用するかを決定するという方法が用いられている。この国際私法の考え方、仕組みを講義する。	同上	同上
5	条約の締結と履行	国家間の関係は、新たに、条約を結ぶことによって開かれる。これまでに、どうような関係が築かれてきたか。条約は、常に、対等の立場から合意されるのか。条約の約束が履行されなかった場合、どのようなことになるのか。具体例を交えて説明する。	筒井若水	筒井若水
6	国家領域への排他的主権（日本の領土と係争点）	領土のない国家は存在しないが、領土の範囲には変動がある。その範囲をめぐっては、時に、深刻な争いとなる。日本の領土の変遷と、現在の係争地点につき、その法的論点と、解決の方法について、考える。	同上	同上
7	国際法の規制領域の拡張変質（宇宙と海洋）	人類の活動分野とともに、国際法の規制領域も拡大した。上空、宇宙は新規の領域であるが、伝統的な海洋も、利用法の多様化から、規制の内容が激変した。これらの規制には、一方で、利用に伴う危険に対しても、有効に対処していることが求められる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	人権の国際的保障	法の最終目的は、人類の福祉にある。国際法による人権の保障も、いわば、この最終目的にせまるものである。第２次大戦後、多くの人権条約が結ばれてきたが、実施のための国際的な場は、どの程度発達しているのか、また、国家は、政策全体に、人権保障をどのように位置づけているか。実情をふまえて考察する。	筒井若水	筒井若水
9	国際連合（国際機構）と国際社会の発達	国際社会は、国家間の社会とされてきたが、19世紀後半から、国際機構（組織）を抜きにしては、考察できないものとなった。平和の問題にも、国際連盟、国際連合という世界的機構がかかわってきた。国際連合にこんにち何が期待され、加盟国はどのような義務を負うのか。日本と国際連合のかかわりを中心に、考察する。	同上	同上
10	法と正義による国際紛争の解決	国際社会も紛争は避けられず、その解決を、力ではなく、法と正義によるためには、裁判が最適である。国際裁判は、かねてより仲裁裁判として行われ、今日では、国際司法裁判所も存在する。係争国の合意による等、司法としての限界の一方で、国際裁判が、国際法の発展に貢献してきた足跡をたどる。	同上	同上
11	経済の調和ある発展と国際法	第二次大戦後の自由主義復活の試みと、途上国発展のための「新国際経済秩序」、さらには、GATTから世界貿易機構への改組により、経済の調和ある発展が試みられてきたあとをたどる。更に、欧州共同体の代表する地域統合の動きなど、経済活動と国際法とのかかわりをみる。	同上	同上
12	国際取引をめぐる法律問題	貿易取引、国際金融取引、外国投資などをめぐる法律問題を扱う。契約、債権譲渡、担保物権などの準拠法の決定が問題となる。また、どの国の裁判所に訴えるか、一国の判決は他の国でも効力を有するのかなどの国際民事手続法上の問題も扱う。	道垣内正人	道垣内正人
13	国際不法行為をめぐる法律問題	国際線の航空機の墜落事故、外国製品の欠陥による事故、外国のメディアによる名誉毀損などをめぐる準拠法決定、国際民事手続法上の問題を扱う。たとえば、外国法上認められる懲罰的損害賠償を日本でどのように扱うかなどが問題となる。	同上	同上
14	国際結婚・離婚をめぐる法律問題	国際結婚の成立（婚姻適齢や届出などの問題）、夫婦財産制、離婚をめぐる準拠法決定、国際民事手続法上の問題を扱う。たとえば、重国籍や無国籍の場合、一方の常居所が知れない場合、アメリカのような州によって法律が異なる国に国籍を有する場合などが問題となる。	同上	同上
15	国際親子関係・相続をめぐる法律問題	親子関係の成立（嫡出・非嫡出の問題や養子縁組など）、親子間の法律関係（親権者の決定や親権の内容など）をめぐる準拠法決定、国際民事手続法上の問題を扱う。国境を越えて連れ去られた子の取り戻しや相続の問題にも触れる。	同上	同上

＝ 現代法の諸相（’９９）＝（R）

〔主任講師：水野 忠恒（一橋大学教授）〕

全体のねらい

「法学出門」ともいうべき講義である。最近の社会問題となっている先端的法領域で、ようやく学問的体系化がなされつつあるもの、未だそこまで行っていないもの、合計5つを選び、新進気鋭の学者が分担して行う、「オムニバス講義」である。全体を通ずる特色は、公法・私法といった従来の学問体系に囚われない領域である点にある。今回は、租税法（水野：一橋大学）、社会保障法（岩村正彦：東京大学）、知的財産法（玉井克也：東京大学）、環境法（大塚直：学習院大学）、消費者法（大村敦志：東京大学）という内容である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	租税法①－租税の基本原則－	税制改革論議の基礎におかれるべき租税の原則、特に公平負担の原則をとりあげ、個人の租税負担の基準となる所得、消費、財産のそれぞれの特質について論じたのち、所得の概念について考える。	水野忠恒（一橋大学教授）	水野忠恒（一橋大学教授）
2	租税法②－所得課税－	所得概念の論議ののち、個人所得税の理論について、法人の所得税である法人税の課税の根拠ならびに法人税のあり方について検討する。いわゆる配当二重課税の調整という問題が法人税の中心的課題である。	同上	同上
3	租税法③－消費課税－	所得税に対する批判として注目を集めるようになった消費支出税の論議を検討したのち、間接税としてのわが国の消費税とそのモデルである付加価値税について説明する。	同上	同上
4	社会保障法①－高齢化社会と社会保障法－	高齢化社会の到来によって、医療保障、日常生活の支援などを行う社会保障法はその重要性をますます増しつつあるが、他方で大きな変容を迫られている。私達の生活を支える社会保障法が高齢化社会において果たす機能とその変貌を考えたい。	岩村正彦（東京大学教授）	岩村正彦（東京大学教授）
5	社会保障法②－医療保障法と年金法－	社会保障法の中核をなす社会保険法を取り上げる。国民の医療へのアクセスを保障する健康保険法、国民健康保険法等の医療保障法と、老後の所得保障を行う国民年金法、厚生年金保険法等の年金法を概観し、これらの法分野の抱える問題点と今後の課題を考察する。	同上	同上
6	社会保障法③－社会福祉法－	高齢者や障害者などに介護、必要な器具の供与、施設への入所といった便宜を提供する社会福祉法を概観する。とりわけ老人福祉の分野に着目して、現在押し進められている施設の充実、福祉労働力の増強、老人医療との連携などの政策や介護保険を中心に考察を加える。	同上	同上
7	知的財産法①「情報」と法律	知的財産法、知的所有権法などといわれる分野は、経済的価値のある情報を法的な側面から考察するものと言える。現代社会における情報の価値という観点から、知的財産法の全体について、大きな枠組みを概観する。	玉井克哉（東京大学教授）	玉井克哉（東京大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	知的財産法② 創作の保護	知的財産法が保護する情報のうち、主要なものは、創作的価値のある情報である。そうした観点から著作権法や特許法などについて解説する。現代社会において発生した新たな問題についても、言及したい。	玉井克哉	玉井克哉
9	知的財産法③ 営業標識の保護	知的財産法には、経済的価値のある情報を保護する法制度のほか、ブランドやマークについて保護する法制度も含まれている。そうした制度としての商標法と不正競争防止法について解説し、現代的な問題にも触れる。	同上	同上
10	環境法①	環境法に関して、その生成の歴史、特色、基本原則、体系、環境規制の手段等、総論というべき分野について解説する。その中で、環境計画、環境影響評価、汚染者負担原則にも触れたい。	大塚直（学習院大学教授）	大塚直（学習院大学教授）
11	環境法②	環境規制・整備・保全に関する法律に関し、重要と思われるものを摘出して説明する。具体的には、大気汚染・水質汚濁、廃棄物処理・リサイクル、野生鳥獣の保護等を中心として述べる。	同上	同上
12	環境法③	環境に関する民事訴訟及び行政訴訟の問題点を概観すると共に、公害に関する費用負担についても説明する。なお、地球環境問題についても言及したい。	同上	同上
13	消費者法① －消費者法とは何か	消費者と法との関わりについて導入的な説明を行う。消費者問題とはいかなるものか。消費者法が必要とされるのはなぜか。実際には、消費者法はどのように形成されてきて、今日、どのような問題をカバーしているのか。	大村敦志（東京大学教授）	大村敦志（東京大学教授）
14	消費者法② －行政の側から見た消費者法	消費者法を行政の側から見る。行政は消費者問題に対応するために、どのような法的手段を用いているのか。安全性や取引条件に関する規制行政、独占の排除などの競争規制、教育・情報提供などのサービス行政について説明する。	同上	同上
15	消費者法③ －消費者の側から見た消費者法	消費者法を消費者の側から見る。肉体的・経済的な被害を受けた消費者が救済を受けるためにはどうすればよいか。また、行政に働きかけることによってあるいは自主的な活動によって、積極的に消費生活のあり方を変えていくことはできないか。	同上	同上

＝日本政治史＝（R）

〔主任講師：坂野　潤治（千葉大学教授）〕

全体のねらい

1871年の廃藩置県から1940年の大政翼賛会成立の直前までの、約70年の戦前日本政治史を、保守・中道・革新の政治体制構想の三つ巴の対立の歴史として描く。戦前日本の政治史を単なる経済的利害の対立としてではなく、自由主義、民主主義、社会主義、国家主義、ファシズムなどの思想対立の歴史として見直したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	立国過程 I －「強兵」「富国」「民主化」－ （1871～1877）	1871年の廃藩置県で軍事力と収税値を掌握した明治政府は、今後の方針をめぐって三つのグループに分かれた。西郷隆盛らは民族主義を強調して、朝鮮、台湾をめぐって清国との対決を主張し、大久保利道は上からの工業化を、木戸孝允は上からの民主化を重視した。	坂野潤治（千葉大学教授）	坂野潤治（千葉大学教授）
2	立国過程 II －「開発」か「民主化」か－ （1878～1881）	1877年の西南戦争で民族主義派を鎮圧した明治政府は、上からの工業化を重視するものと、上からの民主化を優先するものに分裂し、その間隙をぬって下からの民主化運動が全国的に盛んになった。この三つ巴の対立が1881年の政変で終了するまでを検討。	同上	同上
3	立国過程 III －憲法発布と大同団結－ （1887～1890）	1881年の政変で、保守的な立憲君主制論が勝利すると、下からの民主化派の左派は直接行動に出て鎮圧された。しかし、1887年頃から大同団結運動と呼ばれる下からの民主化運動が再び盛り上がり、1890年の第１回総選挙まで藩閥政治を脅かした。	同上	同上
4	立国過程 IV －自由党の転向－ （1890～1894）	1890年に最初の議会が開かれてから1893年２月の天皇の詔勅が出るまで、藩閥政府と衆議院の多数を占める民党との正面衝突が続いた。しかし、1893年から94年にかけて、最大党派の自由党内で現実主義派が力を増大し、第２次伊藤内閣と妥協した。	同上	同上
5	明治立憲制の展開 I －立憲政友会の成立－ （1895～1900）	伊藤内閣と自由党との妥協は、日清戦争以後さらに進み、伊藤博文を総裁とする立憲政友会に自由党も合流した。この過程で自由党は、与党として国家予算を支持基盤に散布する利益政治を確立した。積極政策と呼ばれたこの路線は政友会の一枚看板となっていく。	同上	同上
6	明治立憲制の展開 II －明治憲法の三つの解釈－ （1906～1912）	天皇主権を語った明治憲法にも、詳しく検討すれば解釈改憲の余地はあった。穂積八束は文面通りの天皇親政論を、美濃部達吉は天皇機関説と呼ばれた国家主権説を、北一輝　は天皇機関説を再解釈して、「天皇・国民共同主権説」を唱えた。	同上	同上
7	大正デモクラシー I －大正政変－ （1912～1914）	立憲政友会の結成に対抗して、軍部・枢密院・貴族院らの権威主義勢力は元老山県有朋の下に結集した（山県閥）。この二元的政治対立は、両勢力が交互に政権に就くことによって調和の道を見出した（桂園体制）。この体制に対して大正初期に国民運動が起こった。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	大正デモクラシーⅡ －吉野作造と原敬－ （1915～1921）	日本で最初の本格的政党内閣として有名な原敬内閣（1918～21）は、二大政党制にも男子普通選挙制にも反対する保守的な政党内閣であった。このような保守的な政党内閣を一貫して批判したのが、民本主義者吉野作造であった。	坂野潤治	坂野潤治
9	大正デモクラシーⅢ －政党政治の成立－ （1925～1930）	1925年の男子普通選法の成立以後、1932年の5.15事件までは、戦前日本唯一の政党内閣時代として知られている。この時代の前半期を、保守政党政友会と自由主義政党憲政会二民政党の対立の時代として描き直すことが、ここでの課題である。	同上	同上
10	軍部独裁への道Ⅰ －政党内閣時代の終焉－ （1931～1932）	1931・32年の両年は、政党政治の危機の時代として知られている。大恐慌による経済危機と満州事変による対外危機と軍人のテロによる政治危機の三つの危機に対して、政友会と民政党とがどのように対応したのかを両党の相違を重視して分析する。	同上	同上
11	軍部独裁への道Ⅱ －立憲独裁、協力内閣、憲政常道－ （1932～1936）	5.15事件から2.26事件までの約４年間、斎藤実と岡田啓介の挙国一致内閣が続いた。この過渡期に、民政党や社会大衆党は職能代表制を加味した立憲独裁を、民政党と政友会の少数派は政・民連携による協力内閣を、政友会主流は政友会単独内閣を構想した。	同上	同上
12	軍部独裁への道Ⅲ －無産政党の進出と軍部の反撃－ （1936年）	1936年2月20日の総選挙で、保守的な政友会が敗北し、自由主義的な民政党と社会民主主義的な社会大衆党が勝利した。国民は政治の自由化民主化を求めたのである。しかるにそのわずか６日後に起こった青年将校のクーデターで、歴史はまた一歩右傾化した。	同上	同上
13	軍部独裁への道Ⅳ －政党の反撃と日中戦争の勃発－ （1937年）	2.26事件で反乱軍を鎮圧した陸軍主流派は、同時に政治に対する発言力を一層増加した。広田弘教、林鉄十郎両内閣の下での陸軍の議会無視に対して国民は1937年４月の総選挙で政友・民政・社大の三党に投票して議会制度支持の態度を表明した。	同上	同上
14	東亜新秩序と政界再編 －日中戦争下の内政と外交－ （1937～1940）	総選挙の結果を軍部と議会の勢力均衡と判断した近衛文麿は、政権担当を決意した。しかし、内閣成立の１ヵ月後ちに起こった日中戦争により、内閣は軍部の意向を抑える力を失った。二転、三転する日中戦争の性格変化の結果、近衛内閣は退陣した。	同上	同上
15	総括 －イギリス・モデルの登場、展開、崩壊－ （1871～1940）	1879年に福沢諭吉が『民情一新』を著わしてイギリス型の二大政党制の導入を提唱して以来、1931年に民政党の第２次若槻内閣が退陣するまでの約50年間、イギリス自由主義は日本政治の到達目標であった。この事実の日本政治史上での意味を検討する。	同上	同上

＝ 西欧都市の政治史 ＝（R）

〔主任講師：田口　晃（北海道大学教授）〕

全体のねらい

ヨーロッパにおける国民国家の揺らぎは、ＥＵの方向だけでなく、地方分権の方向にも進んでいる。そこで、本講義では、より小さい地方的政治単位である都市に焦点をあて政治史をふりかえってみたい。各時代の代表的都市を次々に取り上げる一方、一つの都市ウィーンについては全時代を通して光をあてる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	講義のねらい 分析視角・講義の方法	政治の中でも支配構造、共同体のあり方、公共性の性格に焦点をあわせ、古代、中世、近世、現代という五つの時代区分を用いて都市の政治史を見る。 又、都市研究の意味についてもここで考える。	田口　晃（北海道大学教授）	田口　晃（北海道大学教授）
2	アテーナイの民主政	古典古代ギリシャの諸都市の中からアテーナイをとりあげ、まず、その歴史をかいつまんで論じる。次いでアテーナイ民主政の構造を、ポリス共同体の特性、公共性の特異なあり方に光をあてることで、浮き彫りにする。	同　上	同　上
3	共和政ローマ	前半で都市ローマの成長を概観した上で、主として共和政時代のローマについて、アテーナイとの比較を念頭におきつつ、その政治構造を把える。後半ではローマ帝国内の周辺都市のあり方を論じ、ウインドボナ（ウィーン）にも言及する。	同　上	同　上
4	中世都市	中世都市の成立、発展を諸学説と地域差に着目しながら展望し、次いで共同体としての中世都市の権力構造を、対外関係と内部構造に分けて検討する。そして、古典古代とは異なった性格の公共性の出現、公共性の第一次構造転換を論じる。	同　上	同　上
5	中世都市としてのチューリッヒとウィーン	中世都市の具体例としてチューリッヒを中心に、自治都市の展開を見る。さらに、一時期自治都市となりながら、すぐに自治権を失ったウィーンを取り上げ、あわせて中世都市の自治とは何かを考える。	同　上	同　上
6	近世都市の展開－イタリアの場合	近世は自治都市が最後の輝きをみせた時代である。この章では近世都市の一つのグループをなすイタリア諸都市の自治運営と公共政策を概観し、具体例としてフィレンツェの政治構造とその変遷をみる。	同　上	同　上
7	近世都市の展開－アムステルダム	ここでは、北方の近世都市の代表として、アムステルダムを取り上げ、オランダ共和国の独立と関連させながら、その特異な統治構造と独自の都市計画及び、公共政策を論じ、都市の可能性を考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	バロック都市	近代国家の登場とともに、都市は統一体、一つの全体であることをやめ、上位に立つ国家に組みこまれる。そして公共性を独占する君主の御座所のみがバロック都市として光り輝くことになる。ヴェルサイユを中心にそうした事情を見よう。	田口　晃	田口　晃
9	バロック・ロココ都市としてのウィーン	トルコ軍に備えた城壁の強化、バロック都市の建設、啓蒙専制君主の登場と続く中で、ウィーンは拡大し、整備される一方、ハプスブルク帝国の首都とは言え、帝国行政の画一的な下部単位の一つにすぎなくなる。	同　上	同　上
10	19世紀の都市改造－パリ－	産業革命で都市が工業の中心になると、人口集中と都市の生活条件の劣悪化が進み、民衆反乱も発生する。そこで、多くの都市で改造が試みられる。中でも大掛かりだったのはパリとウィーンである。この章では第二帝政時代に行われたパリの大改造を見る。	同　上	同　上
11	19世紀の都市改造－ウィーン	19世紀中葉ウィーン市政は「小さい政府」論の立場をとる自由主義勢力の手中にあって不活発だった。対照的に帝国首都としては、皇帝の発意によって市壁が撤去され、リング大通りが建設される。そこには様々な様式の公共建築物と豪華な民間住宅が建ち並ぶ。	同　上	同　上
12	自由主義都市社会主義田園都市－ロンドンの変遷	世紀後半になると、都市の生活条件の改善が喫緊の課題となる。上・下水道、街区照明、交通等の整備を自治体が率先して行ったものがいわゆる「都市社会主義」である。又、田園都市論も起こる。この章では発祥の地イギリスのロンドンを扱う。	同　上	同　上
13	ウィーンの都市社会主義	世紀末に大ウィーンが作られ、そこに抬頭した小市民層中心の「キリスト教社会党」がK．ルエーガーを市長におし上げる。彼はガス・電力事業の市営化と交通網の整備、長大な上水道の建設、あるいは福祉の萌芽的施策等に、借款に頼りながら、成果をあげた。	同　上	同　上
14	戦間期ヨーロッパ政治と都市－ベルリンの場合	両大戦間期のヨーロッパは激しい政治対立を経験した。その中で都市がどのような位置を占めたか、ヴァイマール共和国の首都ベルリンについて検討してみよう。又、オーストリア共和国の政治対立の中での、いわゆる「赤いウィーン」の成立過程も見ておきたい。	同　上	同　上
15	「赤いウィーン」の実験	社会民主党市政が行った、ウィーンにおける実験的な政策を、財政、教育、福祉、住宅等について概観し、国内対立に基因するその崩壊も見た上で、市政における公共政策の歴史的意味を探り、現代都市の諸問題を考える一助としたい。	同　上	同　上

＝ 比較政治学（’００）＝（R）

〔主任講師：眞柄 秀子（筑波大学助教授）〕
〔主任講師：井戸 正伸（茨城大学助教授）〕

全体のねらい

本コースの目標は、比較政治学の基本的枠組みを理解することである。理解を深めるために、戦後の先進諸国（おもに西ヨーロッパ）および新民主主義国の政治を、特に政治制度と最近20～30年間の政治変容に焦点に当てて考察する。また同時に先進各国の政治経済のグローバル化に関しても検討する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	比較政治学とは何か？	比較政治学とは、政府と社会の関係について理論化し、各国の実際を調べる学問です。比較政治学の発掘を、アーモンドによる構造機能主義アプローチの提唱とそれへのヨーロッパ、第三世界からの批判として概観する。	眞柄秀子（筑波大学助教授） 井戸正伸（茨城大学助教授）	眞柄秀子（筑波大学助教授）
2	政治制度（1）：議会制と大統領制	デモクラシーの二つのタイプである大統領制システムと議会制システムについて、その違いと長所、短所について述べる。	井戸正伸	井戸正伸（茨城大学助教授）
3	政治制度（2）：議会	世界各国の議会はいかなる構造か、またいかなる機能をはたしているか、検討する。	同上	同上
4	政治文化	クロスナショナルな比較政治研究において中心的位置を占めてきた各国の政治文化について述べる。	同上	同上
5	政治体制（1）：非民主的体制	非民主的体制とは何か？非民主的体制として、全体主義体制、権威主義体制、スルタン主義、ポスト全体主義を検討する。	同上	同上
6	政治体制（2）：現代民主政	現代におけるデモクラシー（民主政）とはいかなる特徴をもつのか。現代においてデモクラシーが在立するための社会・経済的条件とは何か。現代民主政にはいかなるタイプがあるのか。	同上	同上
7	デモクラシーへの移行	先進各国は非民主主義体制から民主政へ、いつどのような経路をたどって移行したのかを、シュミッター／オドンネルらの枠組みを用いて考察する。また、さまざまな移行論に関して検討する。	眞柄秀子	眞柄秀子

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	デモクラシーの確立	各国のデモクラシーは、いかなる条件を満たせば確立されたとみることができるのだろうか。また、デモクラシーの確立とは、果たして本当に可能なのだろうか。さまざまな研究者の議論を検討し、民主化の問題の中心に迫る。	眞柄秀子	眞柄秀子
9	政党と政党システムの変容	西ヨーロッパを中心に、政党および政党システム研究の流れを概観する。特に「亀裂」と政党アイデンティティに関するリプセット／ロッカンらの理論の意味を再検討する。	同上	同上
10	政党システムの力学	M．デュヴェルジェとG．サルトーリの議論を中心に、各国の政党システムがどのように分類されるかを検討する。また、いかなる要因が政党システムに危険をもたらすかも検討する。	同上	同上
11	利益集団システム	政治過程で利益集団はいかなる役割を果たしているのか。代表的な利益集団システムとして多元主義とユーポラティズムの特色を概観する。	井戸正伸	井戸正伸
12	福祉国家の発展と危機	戦後西ヨーロッパにおいて福祉国家がいかにして発展してきたのかを、主要政治アクターの戦略と選択という視点から考察する。また、先進国の福祉国家をいくつかのパタンに分類し、どのような要因が各国福祉国家の質的相違をもたらすのかを考える。	眞柄秀子	眞柄秀子
13	福祉国家の再編	先進社会の福祉国家が、脱工業化時代を迎えて、いかなる問題に直面しているのか、また、各国でいかなるアクターがどのように福祉国家を再建しようとしているのかを、スウェーデン・イタリア・イギリスなど具体的な事例を参考にしながら検討する。	同上	同上
14	グローバリゼーションと欧州統合	欧州連合（ＥＵ）が第二次大戦以後、発展してきた歴史的経路を概観する。欧州連合を構成する主要機関を紹介し、欧州連合における政策形成・執行のあり方を見てゆく。	井戸正伸	井戸正伸
15	新しい政治への潮流	先進各国における脱工業化の潮流のなかで、ジェンダー・エコロジーなどの新しい争点がどのようなインパクトをもっているのかを考える。また、女性・若者・市民運動・外国人などの新しいアクターの出現と政治の変化について検討する。	眞柄秀子	眞柄秀子

＝ 第三世界の政治 ＝（R）

〔主任講師：高橋 和夫（放送大学助教授）〕

全体のねらい

中東、アフリカ、ラテン・アメリカ、インド亜大陸の政治の理解のための知的枠組みと基礎的な情報の提供を目指す。同時に比較政治と地域研究の立場から第三世界の政治の理論的な分析を目指す。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	第三世界への招待	第三世界研究に長年かかわってきた三人の講師が、研究上の難しさや喜びなどを語りながら、それぞれの専門地域を紹介する。エスニック音楽なども流れて、気分はもう第三世界。	高橋和夫（放送大学助教授）	高橋和夫（放送大学助教授） 勝俣誠（明治学院大学教授） 孤崎知己（専修大学助教授）
2	中東という世界	中東の全体像を紹介する。またイラン出身のモハマッド・ナギザデ明治学院大学教授をゲストに招いて、西アジアの人々が日本をどう見ているかを尋ねる。	同上	高橋和夫
3	クルド人とは	クルド民族の紹介とイランのクルド問題を解説する。クルド問題を考える上でも、イランの将来を展望する上でも必要不可欠な知識である。	同上	同上
4	トルコのクルド	トルコのクルド人の反政府ゲリラ組織ＰＫＫの基地を取材したジャーナリストの勝又郁子さんをゲストに迎え、トルコのクルド問題を紹介する。	同上	同上
5	イラクのクルド	イラクの将来を考える際のカギとなるイラク北部のクルド問題を紹介し、その将来を展望する。	同上	同上
6	アフリカの政治(1)	アフリカと言う地域を解説する。	勝俣誠（明治学院大学教授）	勝俣誠
7	アフリカの政治(2)	帝国主義の時代のアフリカの政治を論ずる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	アフリカの政治 (3)	独立以後のアフリカの政治を論ずる。	勝俣誠	勝俣誠
9	インド亜大陸の政治 (1)	インドと言う地域を紹介する。	佐藤宏((特)アジア経済研究所主任調査研究員)	佐藤宏((特)アジア経済研究所主任調査研究員)
10	インド亜大陸の政治 (2)	帝国主義の時代のインド亜大陸の政治を論ずる。	同上	同上
11	インド亜大陸の政治 (3)	独立以降のインド亜大陸の政治を論ずる。	同上	同上
12	ラテン・アメリカの政治 (1)	ラテン・アメリカと言う地域を紹介する。	孤崎知己(専修大学助教授)	孤崎知己
13	ラテン・アメリカの政治 (2)	戦前までのラテン・アメリカの政治を論ずる。	同上	同上
14	ラテン・アメリカの政治 (3)	戦後のラテン・アメリカの政治を論ずる。	同上	同上
15	比較と分析	各地域を比較し、地域研究、第三世界研究、そして比較政治のもつ問題点を考える。	高橋和夫	勝俣誠 高橋和夫 孤崎知己

＝ 現代アメリカの政治＝（ＴＶ）

〔主任講師：阿部　齊（放送大学教授）〕
〔主任講師：久保　文明（慶應義塾大学教授）〕

全体のねらい

アメリカの政治は、グローバルな視点に立っても、あるいは、日本との関係で考えても重要な意味を持つ。アメリカの政治について正確な理解を持つことは、政治学の重要な課題の一つである。ただアメリカの政治には、日本や西欧の政治と比較しても、ユニークな面が多い。その理解のためには、体系的な学習が必要とされよう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	合衆国憲法	合衆国憲法の制定過程とその基本原理を明らかにする。アメリカが世界で初めて成文憲法を制定したことの意義を説明し、次いで、合衆国憲法の基本原理である権力分立の意味に言及する。さらに憲法修正の手続きと主要な修正条項にもふれたい。	阿部　齊（放送大学教授）	阿部　齊（放送大学教授）
2	連邦制と地方自治	アメリカの政治における連邦制の意義を理解するために、アメリカの州と日本の都道府県とを対比する。連邦法と州法の違いにもふれたい。また、地方自治体の政府が、日本の市町村と異なり、多様性を持つことを明らかにしながら、地方自治体の特質を検討する。	同　上	同　上
3	大統領	ヨーロッパの大統領制と比較しながら、アメリカの大統領制の特徴を明らかにする。大統領の権限、副大統領の地位にふれた後、大統領が統括する行政部を概観する。具体的には、各省庁の構成、大統領府の機能、独立行政機関の役割など言及したい。	同　上	同　上
4	連邦議会	連邦議会の二院制が両院対等というユニークな特徴をもつことを説明した後、委員会を中心とした法案の審議過程をとりあげる。さらに、議員が地域代表的な性格を持つため、国民代表的な立場に立つ大統領と議会との間には、不断の対抗関係があることにふれる。	久保文明（慶應義塾大学教授）	久保文明（慶應義塾大学教授）
5	最高裁判所	最高裁判所の違憲立法審査権が持つ政治的意義を明らかにした後、政治的に重要な意味を持った判決、たとえば、ドレッド・スコット判決ニューティール立法に対する違憲判決、ブラウン判決などをとりあげる。最近の最高裁の保守化にも言及したい。	阿部　齊	阿部　齊
6	選挙と選挙制度	まず、大統領選挙と連邦議員選挙の制度を説明し、次いでアメリカの選挙の特徴ともいえる有権者の登録制度と予備選挙をとりあげる。さらに、最近棄権率が増大していることの意味を探りながら、政治全体のなかで選挙が持つ意味が変わりつつあることにふれる。	久保文明	久保文明
7	政党と政党政治	アメリカの政党制の特徴とされる二党制とローカリズムについて説明した後、今日の二党制を構成する民主・共和両党を概観する。次に、両党の支持基盤を分析し、支持基盤再編成としての「決定的選挙」にふれる。最近の脱政党化の傾向に言及したい。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	利益集団とその活動	アメリカの政治における利益集団の役割を明らかにした後、利益集団の代理人として活動するロビイストをとりあげる。また、利益集団の政治活動として大きな意味を持つＰＡＣにもふれたい。さらに、最近重要性を増している公益集団にも言及する予定である。	久保文明	久保文明
9	政策決定過程	アメリカの政策決定過程において、大統領、行政部、連邦議会、政党、利益集団などが果たす役割を明らかにする。さらに、最近その影響力が注目されているシンク・タンク、政策争点ごとに形成されるイッシュー・ネットワークにも言及したい。	同上	同上
10	人種とエスニシティ	アメリカの特徴の一つは、人種的民族的に多元的なことである。黒人の政治的発言権の増大は、アメリカの政治に大きな影響を与えてきたが、最近では新しいタイプの黒人政治家の台頭が注目される。また、スペイン系アメリカ人の急増も無視しえぬ意味を持つ。	阿部　齊	阿部　齊
11	女性	アメリカでも性別格差は歴然と存在しているが、1960年代以降、積極的優遇措置などにより、雇用面では格差はかなり是正された。しかし、政治における男女格差は依然として厳しい。格差是正の方策と女性政治家の可能性などを考える。	同上	同上
12	福祉政策と貧困	アメリカの福祉国家の歴史的形成の過程をたどり、今日の社会保障制度の概要を明らかにする。さらに、福祉政策との関連で、アメリカの貧困の原因、現状、対策などを検討したい。	久保文明	久保文明
13	外交	まず、アメリカ外交の特徴とされる孤立主義、膨張主義、イデオロギー第一主義などを説明し、次にアメリカ外交の文脈のなかで、冷戦の意味を究明する。さらに、冷戦終焉後の国際政治への対応を湾岸戦争や「新世界秩序」構想などを手掛かりとして検討する。	阿部　齊	阿部　齊
14	政治文化	アメリカの政治に内在する政治的原理を検討する。協和主義、民主主義、自由主義、立憲主義、革新主義、平等主義といった諸原理をとりあげ、ヨーロッパと比較しながら、アメリカ的特質を明らかにする。最近の新自由主義と保守主義の関連にも言及する。	同上	同上
15	現状と課題	ニューディールの時代にアメリカの政治は大きく転換し、「大きな政府」のもとで社会改革を進める政治が新しい伝統になった。しかし、80年代以降、潮流は変わり、保守主義が支配的になっている。こうした現状を踏まえて、90年代を展望する。	久保文明	久保文明

＝ 国際政治（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：高橋　和夫（放送大学助教授）〕

全体のねらい

世紀が変わる時期の国際政治の見取り図を提示する。そこでは詳細なミニアチュールのような記述ではなく、墨絵のような太いタッチで分析の構図が描かれる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	テレビと国際政治	湾岸戦争やベトナム戦争のテレビ報道を材料に、テレビ映像が国際政治に与える影響を考える。	高橋和夫（放送大学助教授）	高橋和夫（放送大学助教授）
2	メディアの風景	ロンドンのBBCのテレビ・センターでのインタヴューを使いながら、急速に変化する映像メディア業界を紹介し、その意味を分析する。	同上	同上
3	スーパー・パワーの世界戦略	アメリカの世界戦略の変遷を概観し、その外交の特徴を論じる。東京第一学習センターの教室での公開講座である。	同上	同上
4	ヨーロッパ合衆国の夢	ブリュッセルとベルリンでのロケの映像を背景に、20世紀におけるドイツ問題から説き起こし、ヨーロッパの統合運動を振り返り、その将来を展望する。	同上	同上
5	007の独立運動	エジンバラの風景の中で、スコットランドの独立運動を紹介し、その特殊性と普遍性を対比する。	同上	同上
6	マイクロ・ナショナリズムの挑戦	カタロニアやイタリア北部の独立・自治運動に代表されるような先進工業諸国でのエスニック集団の「小さなナショナリズム」を紹介し、その意味を検討する。	同上	同上
7	東アジアのパワー・バランス	与那国島と根室という南北の国境から、東アジアにおける国際関係の変化を見る。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	立ち上がった巨象インド	日本との関係に視点を置きながら、インドの情勢をインドで解説する。	高橋和夫	高橋和夫
9	ターレバンの勝利、パキスタンの憂鬱	パキスタンとアフガニスタンの情勢を紹介する。	同上	同上
10	大量破壊兵器の恐怖	ドイツのVロケット基地を訪れ、大量破壊兵器と長距離ミサイルの拡散の問題を論じる。	同上	同上
11	イスラム／脅威か、共存か？	ロンドンのイスラム教徒の現状を紹介しながら、文明の衝突論を批判する。	同上	同上
12	イラン・イスラム体制の変貌	イランのイスラム体制の変遷を振り返り、その将来を展望する。	同上	同上
13	国際政治の中のエネルギー問題	エネルギー資源に占める石油の位置を再確認し、中東と中央アジアのエネルギー資源を巡る情勢を鳥瞰する。	同上	同上
14	環境保護の政治力学	ロンドンのグリーン・ピース事務所でのインタヴューを混じえながら、環境保護運動の歴史を振り返る。また環境を巡る政治の特徴を論じる。	同上	同上
15	国際関係のパラダイム・シフト	多国籍企業やＮＧＯなどの活動が、国家を中心とする国際関係の枠組みに修正を迫っている。国家の役割を再評価しつつ現状を分析する。	同上	同上

＝ 日本政治思想史 ＝（R）

〔主任講師：平石　直昭（東京大学教授）〕

全体のねらい

主に徳川時代（西暦17世紀～19世紀半ば頃）の約二百五十年間の政治思想（広義）を扱う。①各時期の歴史的背景と関連させて主な観念の変化を跡づける。②代表的な思想家の内在的な理解と今日的な意味の導出に努める。③一般的な概説よりは、新しい見方や論点の提出に重点をおき、学生が自分の頭で考える参考にする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	キリシタン禁教の思想	はじめに講義全体の構成について概観したのち、今日の主題に入る。全国統一をめざす武士政権がどんな理由からキリシタン禁教と弾圧に至ったかをみる。秀吉段階と家康・秀忠段階の違いの分析に重点をおき、とくに崇伝執筆の追放文を重視する。	平石直昭（東京大学教授）	平石直昭（東京大学教授）
2	天道思想の諸相	近世初期における幕府権力の自己正統化の施策（家康の国家的守護神化）をみたのち、当時の支配的な言説だった「天道」思想が様々な観念の折衷としてあったこと。またそれが担っていた思想的な課題（キリシタン神学との対抗など）を分析する。	同上	同上
3	新儒学の受容と構想	理学や心学など、新儒学の体系的な導入や構想の努力を、松永尺五、中江藤樹に即してみる。とくに一般庶民層まで包摂した普遍的な教説として儒教が強調された理由、尺五における二つの「気命」の区別、藤樹の「なりはひ」論などが分析される。	同上	同上
4	儒学思想の展開	近世前期における儒教をとりまく客観状況の変化（寺請制の一般化など）をみたのち、儒教古典や宋明学研究の進展と自分の生きる日本の現実への理解の深化の中で、儒教思想が再定式化されてゆく諸相をみる。蕃山の朝幕関係論、素行の士道論などが扱われる。	同上	同上
5	仁斎学の基本構成	前期儒学の最高の達成として伊藤仁斎の儒学についてみる。陰陽と仁義の区別、性と道徳の区別など程朱学的な天人相関論の否定とともに「天道福善禍淫」の再定式化がもった意味、またその古義学の方法や論孟中心主義について分析する。	同上	同上
6	仁斎の鬼神論／徂徠の古文辞学	仁斎の鬼神・卜筮論の分析を通して、彼が三代聖王と孔子を区別し、政治と道徳の二領域を峻別していたことをみる。ついで仁斎学を継承しつつ独自の儒学を構築した近世中期の儒者荻生徂徠にうつり、今回はその古文辞学という方法論を時代背景との関連で分析する。	同上	同上
7	徂徠学の基本構成	近世思想史の転回点に立つ徂徠学を、その主要な側面に即して分析する。仁斎以上に徹底した天人相関論の打破、天の不可知化、聖人信仰、道の聖人制作説と窮理観の関連、聖人が建てた仮構としての鬼神観、「物」としての六経と「道」の区別、「格物致知」論などを扱う。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	石門心学論	近世中期における庶民層の社会的自覚の高まりを示すものとして石田梅岩の思想を扱う。一世代前の西川如見らの町人エトス論との比較、「市井の臣」論における藤樹や徂徠との比較、商業利益の正当化にみられる特徴、道徳・職業を共に天命で正当化する思想など。	平石直昭	平石直昭
9	経世思想の展開	太宰春台・海保青陵に即して、徂徠の経世思想が近世中期～後期にかけてどう変容していったかをみる。商品経済に対する三者の対応の仕方の違い、春台に現われる利己的人間像の青陵での展開、商品売買を引照基準とした天理観の提出、世襲制批判の論理などをみる。	同上	同上
10	徂徠学の影響の諸相	徂徠学が近世後期の思想界に与えた影響の諸相をみる。古文辞学の方法が蘭学や国学など儒学以外の分野に与えた影響、その「天地自然」の不可知観が、三浦梅園の自然哲学や本居宣長の国学、吉益東洞の古医方を促した面、また民俗学的関心の高まりを導いたことなど。	同上	同上
11	本居宣長の国学	契沖以来の歌学と荷田春満の皇国学が賀茂真淵で合流し宣長学の形成を準備する過程を概観したあと、初期宣長に即して、儒教に代る全体的思想像の基礎を彼がどう作っていったかをみる。主に契沖、真淵、徂徠からの影響や示唆　がどう組合わされているかを分析する。	同上	同上
12	西洋像の変遷	近世中期における特徴的な西洋像を新井白石、荻生徂徠、伊藤東涯、西川如見、西川正休についてみる。ついでそれらの西洋像が、近世後期に蘭学を介した理解の深化により修正変容される様子を前野良沢、杉田玄白、本多利明らに即してみる。	同上	同上
13	「鎖国論」とその影響	19世紀初頭に邦訳されたケンペルの「鎖国論」がいかに日本の鎖国策を正当化しているかを検討する。ついで幕末期に本書が日欧双方にとって議論の共通ベースになった経緯を考察し、「鎖国論」が日本の開国を促した皮肉な事情を分析する。	同上	同上
14	西欧の衝撃と日本の開国	日本・中国・朝鮮という東アジア三国のうち日本がいち早く近代化に着手した歴史的条件として、儒教の社会的存在形態の違い、支配エリート層のエトスの違い、旧体制の構造的相違、世界秩序像の相違などに即して、比較の見地から検討する。	同上	同上
15	幕末政治思想論	幕末の儒教的思想家をとりあげて、儒教的価値の多様性と多義性が西洋文明に対する評価の相違をうんだ事情を明らかにする。その上で後期水戸学の「国体」論、佐久間象山の自然科学観とその国民教育の必要論、横井小楠の０議輿論思想を近代日本と関連させてみる。	同上	同上

＝ 近代国家と近代革命の政治思想 ＝（R）

〔主任講師：松本　礼二（　早稲田大学教授　）〕
〔主任講師：川出　良枝（東京都立大学助教授）〕

全体のねらい

市民革命と近代国家を導き、またそれについて考察した政治思想の諸相を、18、19世紀の歴史過程に即して論ずる。思想と時代の現実との関わりを重視するが、後代に引き継がれる思想史上の問題も考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	政治思想における近代	政治思想における近代の意味を考えることを通じて、講義の対象と視角を定め、全体の見通しを与える。	松本礼二（早稲田大学教授）	松本礼二（早稲田大学教授）
2	社会契約説（1）～ホッブズとロック	近代国家の構成原理をなす社会契約説の源流、ホッブスとロックの政治理論をイギリス革命の現実との関わりの中で考察する。	同上	同上
3	貴族の自由とイギリス人の自由～モンテスキュー	自然権理論と並んで革命に根拠を与えた歴史思想の展開と権力分立論とをモンテスキューを中心に考察する。	川出良枝（東京都立大学助教授）	川出良枝（東京都立大学助教授）
4	啓蒙の政治思想～フィロゾーフとアンシャン・レジーム	啓蒙の政治思想の意味を、個々の思想家というより、共通する思考様式に注目し、フィロゾーフの立場に関する知識社会学的考察を加えて考える。	松本礼二	松本礼二
5	社会契約説（2）～ルソー	ホッブスやロックの契約論を批判的に摂取すると同時に「文明社会」の根底的批判を企てたルソーの政治思想を考察する。あわせて17･8世紀における社会契約論の意味を総括し、その後の批判、20世紀末におけるその再生についても考える。	同上	同上
6	革命のイデオロギー～ペインとシエース	アメリカ革命とフランス革命とを直接に導いたパンフレット『コモン・センス』と『第三身分とはなにか』を中心に、革命のイデオロギーを考察し、あわせてこの二つの革命の共通性と相違点を考える。	同上	同上
7	アメリカ建国の思想～ジェファソンと『ザ・フェデラリスト』	アメリカ革命と建国の思想を独立宣言起草者としてのジェファソン、そしてマディソン、ハミルトン、ジェイの書いた『ザ・フェデラリスト』を中心に考察する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	反革命の政治思想～バークとド・メストル	フランス革命を徹底的に批判して近代保守主義の原点をなしたバーク、これを受けてさらに急進的な反革命の理論を展開したド・メストルの思想を検討し、近代革命の意味を裏側から検証する。	松本礼二	松本礼二
9	ヘーゲル哲学と近代	近代革命とその帰結としての立憲国家に歴史哲学の見地から評価を加え、近代精神を総合したヘーゲル哲学の政治思想における意義を検討する。	同上	同上
10	自由主義の政治思想～コンスタン，ギゾー，J.S.ミル	近代革命の原理を継承する反面、フランス革命の現実への批判から権力と自由との緊張関係を19世紀の状況の中であらためて問題にした自由主義の思想を英仏の代表的思想家に即して検討する。	同上	同上
11	近代民主制と自由～トクヴィル	産業化と大衆化の文脈におけるデモクラシーの問題点をアメリカをモデルに考察したトクヴィルの政治思想を、そのフランス革命論ともあわせて検討する。	同上	同上
12	社会主義と無政府主義	1848年を分水嶺とするヨーロッパの革命運動の中で生まれ、市民社会と近代国家に疑念を提出した思想として社会主義と無政府主義を考察する。	川出良枝	川出良枝
13	女性解放の思想	自由、平等という近代革命の原理にもかかわらず、ブルジョア社会の現実において男女の性差が社会的に固定化される傾向を批判し、今日にまで問題を投げかけているフェミニズムの問題を歴史的に考察する。	松本礼二	松本礼二
14	バジョットと『イギリスの国家構造』	選挙法改革による大衆民主主義状況の到来を早熟的に予想する中で、イギリスの政治的支配構造の分析を通じて20世紀の政治学を先取りしたバジョットの著作を検討する。	同上	同上
15	20世紀の政治的経験と近代の反省	大衆化と組織化が頂点に達した20世紀の歴史的経験、全体主義や二つの世界戦争を経て、近代の語原理がいかなる反省を迫られてきたかを展望し、全体のしめくくりとする。	川出良枝	川出良枝

＝ 政治過程の比較分析（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：大嶽　秀夫（京都大学教授）〕
〔主任講師：野中　尚人（学習院大学教授）〕

全体のねらい

本講義は、日本とフランスの戦後政治を相互にかつ総体的に比較することをつうじて、政治過程の分析を具体的に行おうとするものである。両国には、戦後における厳しいイデオロギー対立、官僚主導の経済成長などの共通性と、議会や統治機構の上での相違性がある。これらの論点の検討をつうじて、政治過程の比較分析を試みる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	イデオロギー対立の構造：フランス	第一部　歴史的アプローチ フランス革命に始まるといわれるフランスにおける左右の厳しい対立が、戦後どのように再生産されたかを、ドイツによる占領とレジスタンスの遺産、労使関係の展開、東西冷戦、植民地独立への対応などの争点をつうじて、検討する。	大嶽秀夫（京都大学教授）	大嶽秀夫（京都大学教授）
2	イデオロギー対立の構造：日本	フランスの例と比較しながら、日本における左右のイデオロギー対立がどのように形成され、展開されたかを検討する。とくに、労使関係、再軍備と平和運動、東西冷戦、アジアにおける冷戦などの争点が日本の国内政治をどう特徴づけることになったかを検討する。	同上	同上
3	戦後の高度経済成長：フランス	1950－60年代にヨーロッパで最も目ざましい経済成長を遂げたといわれるフランス経済において、政府の高級官僚（テクノクラート）の果たした役割や、それを支えた政治指導、とくにドゴールの役割を検討する。また、財界・政府の役割についても検討する。	同上	同上
4	戦後の高度経済成長：日本	1950－60年代における日本の高度成長を、大蔵省、通産省などの果たした役割や、日本型市場の構造などから説明する議論を検討する。そしてフランスとの比較において、敗戦を契機とする政治文化の変化の重要性如何という問題に考察を加える。	同上	同上
5	民主化から自由化へ：フランス	1968年の5月革命の与えた、社会的、経済的、政治的インパクトを検討し、そこから生まれてきた左翼・リベラル優位のシステムから、ミッテラン政権の誕生を経て、やがて市場競争を再導入する試みが登場するまでの過程を分析する。	同上	同上
6	民主化から自由化へ：日本	60年代末の地方自治体における革新首長の登場から、オイル・ショックを経て、労働運動が変質し、さらに、行政改革の名でネオ・リベラリズムが登場し、官と民との関係の再調整や福祉の見直しが行われていった過程を分析する。	同上	同上
7	世紀転換期のフランスと日本	1980年代中期に中曽根首相とシラク首相の下に、民営化など新自由主義政策が導入されたあとの日本とフランスの、一見したところ対照的な展開を跡づける。とくに労使関係、福祉政策、政党の再編、対外的経済政策に焦点を置いて検討を加える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	政治過程の全体的構図	第二部　構造的アプローチ 半大統領制と議院内閣制、あるいは大統領と総理大臣との比較や、内閣、与党、議会、行政官僚制など、主たる政治制度・アクター間の関係を検討することを通じて、政治過程の全体的な見取り図を描く。	野中尚人（学習院大学教授）	野中尚人（学習院大学教授）
9	議会と立法過程	立法過程の実態、委員会の運営の仕方などに関して、憲法構造との関連を念頭に置きつつ比較検討し、内閣提出法案の優越性や審議の形骸化についてまとめる。また、議会内での討議のあり方と議員の能力・キャリアパターンとの関連性についても検討を加える。	同上	同上
10	行政官僚制の構造と機能	行政組織の構造、官僚のリクルートメント、昇進の制度などを比較検討する。日仏両国の行政官僚制は、ともに強力で、「組織指向性」という共通性を持っているが、他方で、内部調整の仕組みや組織管理、また「政治」との関係の点で異なっていることを分析する。	同上	同上
11	政党と政党システム	自民党による一党優位性の継続が与野党間関係や自民党の内部システムにどのような影響を与えてきたのかを分析する。また自民党とフランスのＲＰＲとを比較しつつ、政党の内部組織、人事の仕組み、政策過程の特徴などについて検討する。	同上	同上
12	選挙	日仏両国の選挙制度について概観した上で、公認決定の仕組みなども比較分析する。日本の「二世議員」とフランスの「落下傘候補」現象の比較が興味深い。さらに、選挙制度と政党システムとの相関関係、選挙をめぐる人的資源の動員の仕組みについて検討する。	同上	同上
13	政治的リーダーシップ	フランスの大統領と日本の首相との政治的リーダーシップのあり方の違いを、与党との関係、議会との関係、スタッフのリクルートメントといった構造的側面から検討する。リーダーシップの強弱やスタイルが歴史制度的に規定されていることも論じる。	同上	同上
14	政策決定のパターン	合意形成のあり方と、エリート・リーダーへの委任の形態を日本とフランスの間で比較検討する。トップ・リーダーの役割、総合調整の仕組み、政党による政策過程への関与のパターン、行政官僚制からの影響力行使のパターンなどについて分析する。	同上	同上
15	1990年代の政治変動	日本における93年の自民党単独政権から連立政権への移行、フランスにおけるコアビタシオンの頻繁な出現など、90年代に入って日仏両国の政治は大きく変動しつつある。こうした変動の意味を構造的・歴史的に捉えて分析する。	同上	同上

＝ 現代日本の政治変動（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：山口　二郎（北海道大学教授）〕

全体のねらい

1993年以降の戦後日本の政治システムの大きな転換をあとづけ、変化の原因を探るとともに、これからの日本政治のあるべき方向性について考察する。政党政治、官僚制と行政改革、地方政治の新たな動き、市場参加など様々な側面から変化を浮き彫りにしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	55年体制崩壊の虚像（1） －連立政権の意義と限界	1993年政変の過程を振り返り、なぜこの時期に自民党単独政権が崩壊したのかを明らかにする。そのうえで、細川政権以降の連立政権が何を変えようとし、なぜ政治の転換に失敗したかを考察する。そして、残された課題が何であるかを考える。	山口二郎（北海道大学教授）	山口二郎（北海道大学教授）
2	55年体制崩壊の虚像（2） －政党再編の夢と挫折	自民党単独政権の崩壊と同時に、政権交代可能な政党システムの必要性が叫ばれたが、自民党に代わる政党が生まれていないのはなぜだろうか。政党再編成論を振り返り、なぜ政党再編の試みが挫折したか、なぜ無党派層が増加したのかを考える。	同上	同上
3	55年体制崩壊の虚像（3） －選挙制度改革がもたらしたもの	小選挙区比例代表並立制は、日本の制度をどのように変えたのか。政治改革の目玉として導入された新しい選挙制度を検証する。そして、政治改革の意義を再検討し、さらなる改革の課題について考える。	同上	同上
4	社会党の消滅	55年体制の一翼を担ってきた社会党は、なぜ政党再編の渦の中で消滅しようとしているのか。その歴史的役割をふまえ、土井ブームから村山政権、新党運動の挫折の過程を検証しながら、社会党の消長について考える。	新川敏光（北海道大学教授）	新川敏光（北海道大学教授）
5	利益団体と政治（1） 労働組合と政治	長年革新勢力を支えてきた労働組合は、経済構造の変化の中で、その政党的役割をどのように変えようとしているのか、労働基準法改正、社会保障制度改革などの政策事例を検証しながら考える。	同上	同上
6	利益団体と政治（2） 経済界と政治	長年保守政党を支えてきた経済界は、経済構造の変化の中でその政治的役割をどのように変えようとしているのか、規制緩和、財政再建、景気対策などの政策事例を通じて検証する。	同上	同上
7	官僚支配の動揺と変化	エイズ薬害事件、福祉汚職、金融不安と大蔵省など官僚制の失敗がなぜ90年代中頃に噴出したのか。組織的要因、政策的要因を掘り下げて考える。そして、官僚制による行政と行政責任のあり方について検討する。	山口二郎	山口二郎

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	行政改革と言う課題の浮上	1996年総選挙を契機に、行政改革が政権の公約となったが、なぜこの時期に行政改革が必要なのかを考える。そして、1997年の行政改革会議の議論を振り返り、行政改革に対する取り組みの仕方について検証し、真の改革課題についても考察する。	山口二郎	山口二郎
9	福祉国家の再構築	日本型福祉政策は、行政改革、財政危機の中でどのように再構成させているのか。また、高齢社会の到来の中で、どのような対応が行われているのかを検討する。	新川敏光	新川敏光
10	社会保障システムの再編	介護保険の導入、年金制度の改革、医療保険における負担の強化など、目まぐるしく動く社会保障政策について検討し、なぜ改革が必要か、改革をめぐる政治力学はどのようなものかを考える。	同上	同上
11	公共事業と政治	政治と公共事業の関係について整理し、政治・行政改革の中での公共事業改革の必要性について考える。また、財政再建によって公共事業がどのように影響を受け、それが政治にどのような影響を及ぼすかを検討する。	山口二郎	山口二郎
12	地方政治の新たな展開	官僚接待などの矛盾の噴出によって地方政治がどのように変化したかを追跡し、情報公開や行政改革を推進する新しいリーダーの登場の過程を分析する。また、新潟県巻町、沖縄、岐阜県御嵩町などの住民投票運動の背景についても検証し、地方における新たな民主主義の可能性について検討する。	同上	同上
13	分権改革の意義と可能性	地方分権委員会答申の意義と分権改革の今後の展開について考察する。また、21世紀のあるべき地方自治の姿についても考えてみたい。	同上	同上
14	日本の対外政策の変化	安保再定義を契機とする日米安保体制の変質の過程を検証する。また、地球環境問題、アジア経済の安定化など新たな課題に対する日本の対応を検討しながら、これからの日本の対外政策の座標軸について考える。	同上	同上
15	日本型民主主義の特質と今後の行方	21世紀の日本の民主主義のあるべき姿について考える。	同上	同上

＝ 現代の行政（’００）＝（R）

〔主任講師：森田　朗（東京大学教授）〕

全体のねらい

近年、日本の政治行政システムは大きく変わりつつあるが、現代の複雑な行政の実態を正確に理解し、その問題点を分析して改革の処方箋を書くことは容易ではない。この講義では、とくに行政改革を支える新しい行政理論に焦点を当てて、行政現象を理解するための概念と分析枠組について平易に解説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「行政」とは何か？－現代国家における行政活動	「行政」概念を理解し、そのイメージを示すために、具体的な事例を紹介する。それを手がかりとして、複雑な行政現象を理解するために必要な「制度」「組織」「活動」のという要素について説明し、それらの関係を明らかにする。	森田　朗（東京大学教授）	森田　朗（東京大学教授）
2	行政国家の成立	現代行政学が対象としているのは、政府活動が飛躍的に拡大し、立法権、司法権に対して行政権が優越した行政国家である。この章では、行政国家が、どのようにして成立し、発展してきたかを、社会経済的発展の側面および政治制度の変容の側面に着目して論じる。	同　上	同　上
3	行政学の発展	行政国家の成立とともに、その拡大した行政活動の分析を目的として行政学が誕生した。ここでは、主として現代行政学が誕生し発達してきたアメリカ合衆国を中心に、行政学の学説の変遷と現代福祉国家の課題について論じる。	同　上	同　上
4	行政改革	福祉国家の発展は、他面において、行政改革の世界的な潮流を作り出した。この章では、行政改革の基盤をなす「小さな政府」の考え方を紹介するとともに、これまでの改革の働きを「新公共管理論」について論じる。	同　上	同　上
5	現代の政府体系	現代における国家、中央政府、地方自治体、立法・行政・司法の三権、行政機構等の基本的な制度構造を「政府体系」と捉え、その現代における変容の姿と今日的課題について論じる。	同　上	同　上
6	内閣制度と政官関係	現代国家における民主主義と行政活動の関係を考察するためには、内閣制度の分析が不可欠である。比較の視点から、日本の内閣制度の特質を明らかにするとともに、現在進められている行政改革における内閣機能の強化にのあり方について論じる。	同　上	同　上
7	地方自治と分権改革	地方自治の制度は、今日の行政現象を理解する上できわめて重要な要素である。日本の地方自治制度の特質について論じる。地方分権推進委員会による勧告を中心に地方自治制度の分権改革の内容について述べ、今後の地方自治制度について展望する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	行政組織の基礎理論（Ⅰ） ――官僚制の理論	従来の行政学の主要なテーマは官僚制であった。現代の官僚制論の原点をなすマックス・ウェーバーの官僚制論について紹介し、それをめぐる様々な理論展開と初期の組織理論について述べる。	森田　朗	森田　朗
9	行政組織の基礎理論（Ⅱ） ――現代組織論	まず、組織の行動を「決定」と促える視点を示し、情報システムの構造を明らかにし、組織の病理について触れる。情報システムという視点から、現代組織論の枠組と組織管理の諸問題について論じる。	同　上	同　上
10	日本行政組織と行政改革	日本の行政組織の特質と意思決定のあり方および調整の方式について論じ、行政改革による省庁統廃合の実態を行政組織編成の観点から考察する。	同　上	同　上
11	公務制度と人事システム	官僚の行動様式という観点から、キャリアシステムを含む日本の公務員制度の特徴を明らかにし、これからの公務員制度に求められる要素と今後の改革のあり方について論じる。	同　上	同　上
12	行政活動と政策	現代の行政は、その多様な政策執行活動によって特徴付けられる。ここでは、現代の行政活動が社会システムを制御する機能を果たしている点に着目して、「政策」の概念、政策のもつべき性質、行政活動の評価のあり方等について考察する。	同　上	同　上
13	政策過程	行政活動を、政策課題の発見から、政策案の作成、決定、そして執行という一連の過程として捉えることによって、複雑な行政活動を理解し分析するための視点を提供する。ここでは、とくに政策過程の構造と課題の設定から正式な政策決定に至る過程を考察する。	同　上	同　上
14	政策の執行と評価	前章を承けて、この章では、正式に決定された政策が執行され、現実の社会に行政機関が働きかける過程を考察する。一定の制度的枠組のなかで、行政官がどのように決定行動を行っているかを論じるとともに、政策評価について考察する。	同　上	同　上
15	行政責任と参加 －21世紀の行政学	これからの行政は、民間企業との協力やＮＧＯ、ボランティアの参加なくしてはなりたたない。この章では、これからの公共サービスの特質について論じるとともに、多様な参加の形態とともに行政責任（アカウンタビリティ）のあり方について考察し、これからの行政学を展望して、最後に、その可能性と課題について論じる。	同　上	同　上

＝現代の経済学＝（TV）

〔主任講師：嘉治元郎　（元放送大学副学長）〕
〔主任講師：新飯田宏　（　放送大学教授　）〕

全体のねらい

急激に変化している世界経済に対応して、現代の経済学も新しい発展を遂げつつある。この講義では、現代経済学の共有財産になっている基礎理論をできるだけ正確に説明し、現在重要性を増している問題のいくつかをとりあげて、経済学がいかなる解答を興し得るのかを示すことにしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代経済学の体系	現代の経済問題を説明する学問体系として、現代経済学がどのような分析方法をとっているのかを概説する。具体的には、理論モデルの性格、ミクロ分析とマクロ分析、実証的経済学と規範的な経済学、などの経済学の諸分野について説明する。	嘉治元郎（元放送大学副学長）	嘉治元郎（元放送大学副学長）
2	家計の行動	家計の選好を示す無差別曲線を用いて、消費者行動、労働供給、貯蓄行動について説明する。	新飯田宏（放送大学教授）	新飯田宏（放送大学教授）
3	企業の行動	利潤を最大化しようとする企業が、どのように産出量をを決定し、生産要素の需要量を決定するかを説明する。	同上	同上
4	競争市場の均衡と有効性	完全競争市場の均衡がどのような性格を持ち、役割を果しているのかを交換、生産、消費者主権の観点から説明する。	同上	同上
5	不完全競争と産業組織	市場構造のタイプにしたがって、独占・寡占・独占的競争のモデル分析を説明し、完全競争市場における成果と比較する。独占禁止法との関係についても明らかにされる。	同上	同上
6	市場の失敗と公共政策	いわゆる市場の失敗といわれる事例（外部性、公共財、自然独占）について説明し、公共政策による資源配分の改善の可能性について説明する。また情報の不完全性に基づく市場の失敗と、政府の失敗についても触れる。	同上	同上
7	経済循環と国民所得	一国経済の活動水準がどのように測定されるかについて説明し、GDP（GNP）をめぐるマクロ経済の循環図式と、マクロ経済学の主要課題が何かを明らかにする。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	国民所得水準の決定	いわゆる有効需要理論にしたがって、総需要と総供給の一致から、国民所得水準が決定されるモデルについて説明する。乗数理論、オープン・マクロの経常収支の決定についても触れる。	新飯田宏	新飯田宏
9	貨幣と利子・所得	国富を構成する実物資産と金融資産の経済活動における役割を説明しつつ、貨幣量と利子率の関係を明らかにする。貨幣市場の需給均衡を通して所得と利子率がどのような関係にあるかをＬＭ曲線によって説明する。	同上	同上
10	消費・投資と利子率	消費関数（ケインズ型短期消費関数とライフサイクル型長期消費関数）と投資関数について説明し、財市場の均衡条件からＩＳ曲線を導き、ＩＳ・ＬＭ両曲線によって所得を利子率の同時決定のメカニズムを説明する。	同上	同上
11	財政政策と金融政策	経済安定化政策として利用される両政策の手段について説明し、財政政策と金融政策の効果をＩＳ・ＬＭ曲線によって比較検討する。	同上	同上
12	インフレーションと失業	貨幣供給・ＧＮＰ・物価の関係を明らかにしつつ、オークン法則・フィリップス曲線について説明する。インフレ予想と自然失業率、スタグフレーションの関係も明らかにされる。	同上	同上
13	国際収支と為替レート	経常収支に対する３つの考え方を説明し、それぞれに対応する経常収支調整政策を紹介する。一体、経常収支の調整に国際協調は必要かどうかについて説明する。	同上	同上
14	経済成長	国民経済の供給能力が増大する要因を説明し、成長率の不安定性を明らかにする。	同上	同上
15	景気循環	景気循環の型と周期についての通説を紹介し、景気循環発生のメカニズムを説明する。ついでケインジアン・マネタリスト、最近の新ケインズ派の景気循環についての考え方を比較することで、マクロ経済についての各学派の意見相違の核心を検討する。	同上	同上

＝ 金融論（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：岩田規久男（学習院大学教授）〕

全体のねらい

金融は私たちに預金をはじめとする貯蓄手段を提供するとともに、企業等に対しては資金を調達する手段を提供している。これらの金融活動は、国内総生産や雇用量や物価などのマクロ的な経済変数への影響を通じて、私たちの生活に大きな影響を及ぼす。この講義では日本の金融制度の仕組みを解説しつつ、金融活動をめぐる諸問題を説明する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	貨幣と決済システム	私たちの経済では、お金（貨幣）が様々な取引の決済手段として用いられている。貨幣が決済手段として機能するためには緻密、かつ安定した決済システムが存在しなければならない。第1回は日本の決済システムの仕組みについて説明する。	岩田規久男（学習院大学教授）	岩田規久男（学習院大学教授）
2	貨幣の貸借と資金の運用・調達	個人や企業の中には、一方に貨幣が余っているものが存在し、他方に貨幣が不足しているものが存在する。第2回は貨幣の貸借の仕組みと日本全体の貨幣の流れについて説明する。	同上	同上
3	金融機関の役割	貨幣の貸借には様々な取引費用がかかる。この取引費用をできるだけ小さくして貨幣が貸し手から借り手にスムーズに流れるようにするのが、各種の金融機関の役割である。第3回は金融機関の役割を情報の不完全性という視点から説明する。	同上	同上
4	日本の金融機関と貨幣の流れ	日本の金融機関の種類、各々の金融機関の機能の相違、及び、貨幣が各種の金融機関を通じてどのように流れるかを説明する。	同上	同上
5	銀行と貨幣の供給	貨幣を定義したうえで、貨幣は日本銀行と民間銀行とによって供給されること、及び両者の関係について説明する。	同上	同上
6	貨幣の需要と利子率	利子率とは何かを説明した後に、貨幣のさまざまな機能に着目しつつ、貨幣の需要と利子率との関係を説明する。	同上	同上
7	利子率の決定	利子率は、第5回で説明した銀行による貨幣供給と、第6回で説明した個人や企業の貨幣需要とを等しくするように決定されると考えられる。第7回はこの流動性選好説と呼ばれる利子率決定理論を説明する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	利子率と投資	利子率は、企業の在庫投資や設備投資及び個人等による住宅投資に大きな影響を及ぼす。第8回はこれらの投資がどのようなメカニズムを通じて利子率に依存するかを説明する。	岩田規久男	岩田規久男
9	金融政策の手段	日本銀行による金融政策は貨幣の供給量や利子率に影響を及ぼし、利子率は企業等の設備投資に影響を与える。第9回は金融政策の手段にはどのようなものがあるかを説明する。	同　上	同　上
10	ケインズ・モデルにおける金融政策の効果	代表的マクロ経済モデルのひとつであるケインズ・モデルを用いて、金融政策が国内総生産や雇用量や物価に及ぼす影響を説明する。	同　上	同　上
11	古典派モデルにおける金融政策の効果	もう一つの代表的マクロ経済モデルである古典派モデルを用いて、金融政策が国内総生産や雇用量や物価に及ぼす影響を説明し、ケインズ・モデルと比較する。	同　上	同　上
12	国際金融と金融政策	為替レートと貿易とを考慮して、金融政策が為替レートへの影響を通じて国内総生産や物価にどのような影響を及ぼすかを説明する。	同　上	同　上
13	新しい金融取引	1980年代半ば以降から、金融先物、オプション、金融スワップなどのデリバティブと呼ばれる新しい金融取引が盛んになった。第13回では、これらの新しい金融取引の仕組みとその機能を説明する。	同　上	同　上
14	金融自由化－金融ビックバン－	金融システムの安定を図る金融規制は、規制がいきすぎると金融の非効率を招く。第14回は80年代の初め以後進められてきた金融自由化と、2001年に完成予定されている金融バックバンについて説明する。	同　上	同　上
15	金融規制と金融システムの安定	経済の安定にとっては、金融システムが安定していることが重要である。金融システムの安定を図る手段としての金融規制や預金保険機構等の仕組みについて説明する。	同　上	同　上

＝ 財政学（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：宮島　　洋（東京大学教授）〕
〔主任講師：井堀　利宏（東京大学教授）〕

全体のねらい

現代社会における財政の役割・制度・経済的影響は極めて複雑である。本講義では、政府の範囲と構成、公共支出・予算、租税・公債、社会保障等に関する平易な制度分析と経済分析を通じて、現代財政の仕組みと経済的機能を解説する。その際、急速な高齢化、国際化、情報化等の経済社会の動向と財政との相互関係を重視したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	財政学とは何か	財政学ではどのような内容の講義をするのか、実例を取り上げながら、これからの講義の構成を説明する。	井堀利宏（東京大学教授）	井堀利宏（東京大学教授）
2	予算	財政制度の中心的な役割をもっている予算について、日本の制度を念頭に置きながら説明する。また、予算ができるプロセスについてもふれる。	同上	同上
3	政府支出	政府の経済活動の役割を、支出面から説明する。財政の果たすべき機能を取り上げるとともに、日本の政府支出の概要を説明する。	同上	同上
4	政府収入	政府収入の中心である租税の概要を説明する。また、公債発行の制度的側面にもふれる。	同上	同上
5	地方財政	日本の地方財政制度の概要を説明する。地方交付税の役割や地方税の構成などもふれる。また、地方分権のあり方も取り上げる。	同上	同上
6	財政政策	財政政策の考え方を、マクロ経済の安定化政策を中心として説明する。また、戦後日本の財政政策の流れについてもふれる。	同上	同上
7	公債発行	公債発行がマクロ経済にどのような影響を与えるかを説明する。また、公債発行と世代間の負担の関係についてもふれる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	社会保障	財政支出に占める社会保障の比重は大きい。日本の公的年金の概要を説明するとともに、高齢化社会での社会保障の問題点にふれる。	井堀利宏	井堀利宏
9	租税体系	経済や公共部門の発展に伴う租税制度の歴史的推移、日本の租税制度の特色、租税負担率の国際比較、課税ベースと納税義務者による租税の分類、公平・中立・簡素という租税制度の評価基準などについて説明する。	宮島洋（東京大学教授）	宮島洋（東京大学教授）
10	所得税	国際的にも租税制度の柱である個人所得課税の仕組み（課税所得、税率構造等）、負担構造、税務行政、経済的影響等を説明する。さらに、国際化、高齢化、情報化等を背景とした、最近の所得税改革の論議を紹介する。	同上	同上
11	法人税	日本の租税制度において比重の高い法人課税について、課税の根拠、所得税との関係、課税利潤の算定方法、企業組織や投資・資金調達への影響等を説明し、併せて、経済の国際化に伴う国際課税の動向を紹介する。	同上	同上
12	消費税	消費課税の種類や特徴を指摘した後、主に付加価値税（日本の消費税）について、歴史的な推移、課税ベースの定義、税率構造、納税・徴税の仕組み、経済的な影響、負担の特徴、国際貿易上の取扱いなどを説明する。	同上	同上
13	資産税	金融資産や実物資産のフローとストックの関係をまず明らかにし、続いて、資産の保有・移転に関する租税に焦点を当て、その租税制度における役割、課税の仕組み、経済的な影響について説明する。	同上	同上
14	公共財	市場では必ずしも適切に供給されない公共サービスである公共財の理論を説明するとともに、市場経済における政府の役割をまとめる。	井堀利宏	井堀利宏
15	今後の財政問題	21世紀を展望したときの日本の財政問題を説明する。公共部門の規模と役割、公債発行の大きさ、社会資本整備のあり方、国際化、高齢化社会の財政問題などを論ずる。	同上	同上

＝国際経済学＝（R）

〔主任講師：嘉治　元郎（元放送大学副学長）〕

全体のねらい

国際経済学の主要な内容について解説し、世界経済の現状について理論的に分析を加える。このことを通して、わが国の国際社会における地位と役割を明らかにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	国際経済学とは何か	国際経済学の対象 対外経済取引 対外取引の種類 対外取引と国際通貨 通貨の交換と為替レート 国際収支とその表示	嘉治元郎（元放送大学副学長）	嘉治元郎（元放送大学副学長）
2	国際貿易の理論	貿易活動の目的 比較生産費説 自由貿易の利益	同上	同上
3	自由貿易論	今日の世界貿易体制 自由貿易論の基本原理 自由化に伴う摩擦 貿易自由化とそれに対する反対論	同上	同上
4	保護貿易論	保護貿易政策 自由貿易理論の諸前提 幼稚産業の保護 経済的安全保障への配慮	同上	同上
5	国内経済と対外経済関係	開放巨視モデル　総需要と総供給　政府購入 家計の消費　企業の投資　封鎖巨視モデル 輸入の説明　輸出の説明　貿易乗数の理論	同上	同上
6	貿易外収支	貿易外収支とは何か　サービス取引の特長 サービス需要の増大　金融活動の国際化 貿易外収支と生産要素の国際移動	同上	同上
7	国際資本移動	貿易収支の実態　直接投資　延払信用　借款 証券投資　短期資本収支　国際資本移動の原理 国際投資に伴う危険　自発的収支と調整的収支	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	経済発展と対外経済関係	経済発展の諸段階　国際収支の段階的変化 若い債務国　成熟した債務国　若い債権国 成熟した債権国　世界諸国の実績 貯蓄・投資と国際収支	嘉治元郎	嘉治元郎
9	国際金融の理論	国際金融とは何か　国際通貨とは何か 国際通貨の役割　現実の国際通貨 国際通貨としてのドル　国際通貨の適量	同上	同上
10	国際金融の機構	国際金融のシステム　システムの崩壊 システムの再建　戦後国際経済システムを支える組織 国際通貨基金（International Monetary Found） 国際復興開発銀行（世界銀行） 国際金融システムの調整	同上	同上
11	外国為替の理論	為替レートとは何か 為替レートの表示法 外国為替の需要・供給 為替レートの長期的変化	同上	同上
12	国際収支の均衡	国際収入の均衡とは何か 収支均衡化のメカニズム 金本位制の自動調整機能 経済政策による国際収支の調整 国内均衡と国際均衡の同時達成 為替レートの変動と国際収支	同上	同上
13	労働力の国際移動	生産要素の国際移動 労働の国際移動の誘因 国際的な賃金格差 労働力の国際移動の実績 労働力の国際移動の経済効果 第二次大戦後の労働力の国際移動	同上	同上
14	国際経済の現状	世界経済の分析方法 貿易マトリックス（貿易行列） 国際資本移動の分析 南北関係 東西関係 世界経済の一体化と国際経済学	同上	同上
15	日本経済と世界経済	戦後における日本経済の発展 Ⅰ　援助と特需の時期　朝鮮動乱と特需 Ⅱ　重化学工業化達成の時期　軽工業から重化学工業へ Ⅲ　貿易黒字、円の為替レート上昇の時期　貿易収支と為替レート Ⅳ　経済大国への移行の時期 Ⅴ　債権国の役割を果たすべき時期	同上	同上

＝ 日本経済史（’９９）＝（R）

〔主任講師：原　朗（東京国際大学教授・東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

近現代日本経済の歴史的展開を部門別に概観することに力点を置く。前近代の日本経済を概観したのち、戦前の近代日本における産業貿易・金融財政・社会階級構造と恐慌・戦争の意義を検討し、戦後の現代日本における高度成長と景気循環・対外経済関係を分析して、最終的には世紀転換期日本の課題を自覚することを目標とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	前近代の日本経済	古代・中世・近世の日本経済を考察する。旧石器時代・縄紋時代の原始的共同体、弥生時代における農耕共同体の成立・貢納制社会への移行と古墳時代・律令制国家・院政期・鎌倉期・室町期・戦国期など荘園制社会の諸段階、幕藩制社会の成立と展開を概観する。	原　朗（東京国際大学教授・東京大学名誉教授）	原　朗（東京国際大学教授・東京大学名誉教授）
2	資本制社会への移行	幕末開港の影響と倒幕運動の展開、明治新政府の成立と明治維新期の諸変革（地租改正・秩禄処分・殖産興業）、紙幣整理と小生産者の分解（日本型の原始的蓄積）、企業勃興による産業革命の開始、自由民権運動と天皇制国家の成立などを概観する。	同　上	同　上
3	近代日本の産業貿易構造	軽工業部門における輸出産業の発展（紡績業・製糸業）と鉱山業（石炭・銅）、重工業部門の展開（重工廠・製鉄業・造船業）、農業部門と工業部門との関連、産業諸部門間の関連と貿易構造、商業その他諸部門の比重、植民地との関連などについて概説する。	同　上	同　上
4	近代日本の金融財政構造	明治新政府の財政経済政策、産業革命期の銀行分業体系成立、日清・日露戦争の軍事財政と戦後経営、第一次大戦期の金融と財政、1920年代の経済政策体系、1920年代以降の金融財政構造と諸恐慌との関係などについて概説する。	同　上	同　上
5	近代日本の社会階級構造	資本制部門での労資関係と賃労働の状態、労働争議・労働運動の展開、農業部門での零細自作農と地主小作関係、寄生地主制と小作争議、社会政策と調停法体制、中間層の広範な存在、資本家団体と地主団体・産業組合、財閥資本と独占体制などについて概説する。	同　上	同　上
6	近代日本と恐慌	1890年恐慌、日清戦後第一次・第二次恐慌、日露戦争後恐慌、日露戦後の景気循環、1920年戦後恐慌、1920年代の「慢性的不況」、1927年金融恐慌、1929～31年昭和恐慌などについて概説し、景気循環と恐慌が近代日本の経済と社会に与えた影響について概説する。	同　上	同　上
7	近代日本と戦争	産業革命と日清・日露戦争ならびにその戦後経営、台湾・朝鮮における植民地支配の展開と南満州の半植民地化、第一次世界大戦と対華二一ヶ条要求・西原借款、シベリア出兵、ワシントン軍縮、山東出兵、張作霖爆殺事件、ロンドン軍縮、中国東北への侵略につき概説する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	日中全面戦争期の日本経済	日中全面戦争と統制経済への移行、物資動員計画、外貨不足問題、国家総動員法、物動計画改訂、価格統制の展開、日米通商航海条約の廃棄、第二次欧州大戦、日独伊三国軍事同盟、北部仏印進駐、独ソ開戦、南部仏印進駐、対日資産凍結などにつき概説する。	原　朗	原　朗
9	アジア太平洋戦争期の日本経済	アジア太平洋戦争と戦時体制の強化、軍需生産の動向、労働力の動員、戦時下の農業、「大東亜共栄圏」の経済的実態、南方占領地からの物資略奪、中国占領地と植民地の支配、戦時末期の増産政策、船舶不足問題、戦時経済の崩壊などについて概説する。	同　上	同　上
10	被占領下の戦後変革	アメリカ初期対日占領政策の形成、財閥解体・労働改革・農地改革、財政改革・地方行政制度改革、賠償問題、敗戦後の経済危機、傾斜生産方式の採用、冷戦と占領政策の転換、ドッジラインとインフレ収束・統制撤廃・労資関係の再編などについて概説する。	同　上	同　上
11	戦後日本の景気循環	朝鮮特需ブームとその反動、景気回復と54年不況、神武景気、鍋底不況、岩戸景気、公定歩合政策・財政政策と景気循環、転型期不況、オリンピック景気、1965年不況、いざなぎ景気など、景気循環の動向に即して概説する。	同　上	同　上
12	戦後日本の高度成長	重工業化の進展、エネルギー革命、環境汚染の発生、企業集団の投資競争、経済の二重構造、大型合併の続出、設備・機械の大型化、モータリゼーションの進行、コンピュータ社会の到来、ＭＥ革命の開始などについて概説する。	同　上	同　上
13	高度成長期の社会的変化	労働力需要の増大、生産性向上運動と労働運動の転換、農工格差の拡大、農業基本法制定、労働力不足への転換、新労務管理方式、農業の衰退、労働組合運動の再編成、地球環境問題などについて概説する。	同　上	同　上
14	戦後日本の対外経済関係	貿易自由化と賠償支払い、輸出貿易と市場開拓、貿易摩擦と資本輸出、国際通貨危機、列島改造論、変動相場制移行、第1次石油危機への対応、高度成長の終焉、低成長への調整期などについて概説する。	同　上	同　上
15	世紀転換期の日本経済	第2次石油危機と長期不況、日米通商摩擦の激化、プラザ合意と円高不況、円高好況への転換、経済大国化、バブルの発生と崩壊、1997年金融危機、世紀転換期日本の課題などについて概説する。	同　上	同　上

＝ 欧米経済史（’９９）＝（R）

〔主任講師：藤瀬 浩司（愛知淑徳大学教授）〕

全体のねらい

現代社会は資本主義という社会システムから成り立っていますが、この講義では資本主義の経済発展を、イギリス産業革命から現在までの約2世紀を中心に考察します。資本主義の発展に見られる大きな枠組みや流れに重点を置き、またとくに資本主義を構成する国民国家と世界経済という2つの要素に注目したいと考えます。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	Ⅰ．歴史社会としての資本主義 共同体社会と資本主義	資本主義は16世紀に登場し、イギリス産業革命によって成立した歴史社会です。これ以前の歴史社会は共同体という関係を基礎とした、資本主義とは異なった社会システムでした。共同体社会の基本的性格とともに、完成された市場経済としての資本主義の特徴を考察し、さらにその構造と変動に関する予備概念を説明します。	藤瀬浩司（愛知淑徳大学教授）	藤瀬浩司（愛知淑徳大学教授）
2	資本主義社会の誕生	14世紀半ばから15世紀に西ヨーロッパでは市場経済の発展を伴った封建社会の解体が始まります。15世紀末の地理上の発見によって資本主義は急速に展開し、ヨーロッパを中心とした世界経済が生成します。こうした世界経済の分業体制、中心諸国の経済発展や経済政策、さらにイギリス産業革命の前提条件を検討します。	同上	同上
3	Ⅱ．19世紀資本主義 イギリス産業革命	イギリス産業革命によって資本主義は本格的に展開を開始します。産業革命の過程、最初の産業革命としての特徴、イギリスの産業や社会、また世界経済に対する影響を考察し、さらに同時期のフランス革命など欧米の諸変革を検討します。またイギリス産業革命を起点とする19世紀の資本主義発展の段階と局面を概観します。	同上	同上
4	イギリス資本主義の成熟	19世紀中葉イギリスは自由貿易政策に転換します。これとともに、労働、企業組織、金融などの面で制度改革が進みます。イギリス資本主義は19世紀の第3四半期に大きく成長し、世界の工業、商業、金融の中心としての地位を確立します。自由貿易と平行する制度改革、イギリス型産業組織と金融組織について検討します。	同上	同上
5	資本主義世界の拡張－工業化の第２の波	運輸革命と自由貿易体制は19世紀第3四半期の世界経済の拡張をもたらしました。この回の講義では、こうした世界経済の拡張に中で、西ヨーロッパの国々やアメリカ合衆国が工業化を進め、それぞれの資本主義を確立し、そしてイギリスを核とした資本主義世界の中心を形成する過程を考察します。	同上	同上
6	周辺経済の分極化－周辺工業化と周辺従属地域	中心諸国の政治的経済的拡張は、地球上の広範な地域を世界経済の中に組込み、旧周辺地域を含めて新しい分業体系を創り出します。一連の周辺諸国は欧米に対抗して工業化を実現しようとし、また他の地域は世界市場向けにもっぱら原料や食糧を供給する地域に転化されます。周辺的工業化と周辺従属地域の特徴を考察します。	同上	同上
7	19世紀末大不況	1873年の世界恐慌以後約4半世紀は通常大不況と呼ばれている時期です。しかしこの時期は景気循環の「不況」ではありません。世界的に価格や利子率は低水準に留まりましたが、経済成長は鈍化したものの持続していました。大不況期の構造変動を、生産方法における変化、世界市場の再編成、社会・政治的動向について検討します。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	Ⅲ．20世紀資本主義 20世紀資本主義発展の特徴	20世紀の資本主義は19世紀に見られた資本主義とは異なった特徴を持っています。20世紀資本主義は曲折を経ながらも、アメリカにリードされアメリカを中心に構成されていった資本主義です。その構造や特徴を概括するとともに、最近の統計的整理に基づいて全体の時期を2つの段階と4つの局面に区分します。	藤瀬浩司	藤瀬浩司
9	大型企業体の出現	19世紀末から新鋭産業において一連の大型企業体が出現します。大型企業体は大量生産・大量流通により低コストを実現し、巨大な市場を創出していきます。こうしたタイプの企業体が成長し、様々な分野を支配していく過程が、20世紀資本主義の発展の原動力になります。大型企業の特徴と社会経済への影響を検討します。	同上	同上
10	世界経済の拡張と国際金本位制	世界経済の稠密化の中で、20世紀初めに世界経済の新たな構造が現れます。第1に中心機能が、金融の中心と工業生産の中心に分化し、第2に周辺的工業国が形成され、最後に世界的規模で原料・食糧供給地が開発形成されます。こうした構造の特徴、その上に成立する多角的貿易決済システムや国際金本位制を考察します。	同上	同上
11	帝国主義と戦争	二つの世界大戦は列強諸国の帝国主義的対立を原因としています。植民地帝国のイギリスやフランスに対抗して、多くの後発国は自身の支配地域を獲得しようとしました。こうした対立の根源、支配地域における独立運動や反帝国主義運動、社会主義との関連、新しい選択としてのウイルソンの政策構想について検討します。	同上	同上
12	両大戦間期経済と大不況	第一次大戦後ヨーロッパの経済回復は遅れ、また農業諸国は原料・食糧の供給の過剰に悩まされましたが、アメリカはその資本輸出によって世界経済をともかく維持し、国内経済の繁栄を享受していました。この回は、1920年代経済の特徴とアメリカを起点とする大不況の発生過程を考察します。	同上	同上
13	アメリカ体制の成立－大不況克服の道	アメリカのニューディール、ドイツのナチズムなどの大不況克服の試み、また戦時経済から戦後改革にいたる経済・社会政策、さらにはアメリカを中心とした戦後の国際的政治経済体制の形成を考察することによって、第2次世界大戦後の経済発展を支える制度や政策がいかに創出されたかを考察します。	同上	同上
14	資本主義の黄金時代の光と影	20世紀の第3四半期に多くの資本主義国が高水準の経済成長を達成します。アメリカ型の生産方式が西欧や日本に広がり、新しい分野を支配してゆき、同時に国家は経済成長のため総合的手段を講じました。しかし国際的には発展途上国問題や社会主義経済の行詰まりが発生しました。黄金時代の構造と問題点について検討します。	同上	同上
15	成長国家の終焉と新しい時代のはじまり	黄金時代の経済成長は、1960年代末から70年代にかけて悪性のインフレーションの進行と戦後国際金融システムの崩壊によって終わります。従来の制度や政策が有効制を失い戦後の国際体制が大きく変化する過程を考察するとともに、情報革命、経済のグローバル化、アジア経済の成長など新しい資本主義の方向を展望します。	同上	同上

＝経済学史入門＝（TV）

〔主任講師：根岸　隆（青山学院大学教授）〕

全体のねらい

経済学が発展してきた歴史を学ぶことにより、現代の経済学についての理解を確かめることを目的とする。現代経済学の観点から経済学の歴史を考察し、また、わが国の学者による研究成果にもできるだけ言及したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	経済学史をなぜ学ぶのか	主流派である新古典派のほかに、さまざまな学派が存在する現代経済学の状況について述べ、なぜ経済学の歴史を学ぶのかを考える。	根岸　隆（青山学院大学教授）	根岸　隆（青山学院大学教授）
2	経済学のあけぼの	経済学のあけぼのである重商主義（マーカンテイリズム）と重農主義とを概観する。ことに、後者におけるケネーの「経済表」に注目する。	同　上	同　上
3	A・スミスと「諸国民の富」	重商主義を批判、「諸国民の富」により古典派経済学を創始したアダム・スミスについて概説する。ことにその経済成長論について検討し、マルサスの批判にも言及する。	同　上	同　上
4	リカードの巨視的分配論	古典派経済学の代表的理論家であるリカードの経済学、ことに資本家、労働者、地主の諸階級間の分配に関する理論を検討する。	同　上	同　上
5	比較生産費説	国際貿易に関するリカードの比較生産費説について概説する。英国、ポルトガル、服地、ワインをめぐる有名な数値例についての疑問を検討し、さらにリカード理論による交易条件（国際的な財の交換比率）の決定可能性について考察する。	同　上	同　上
6	J．S．ミルと賃金基金説	古典派経済学の殿将であるJ．S．ミルの経済学を概観する。古典派経済学における賃金基金説の意義をあきらかにし、ソートンの批判に対してミルがそれを放棄したわけを検討する。	同　上	同　上
7	マルクスと「資本論」	古典派経済学を継承しながら資本主義の歴史性を主張したマルクスの「資本論」を概観する。等価交換をつうじて資本が労働を搾取するというなぞを解明する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	利潤率低下法則	マルクスの利潤率低下法則を概説し、それを否定するわが国の柴田・置塩の定理を数値例によって解説する。	根岸　隆	根岸　隆
9	古典派経済学と限界革命	古典派経済学のまとめとして、現代経済学にとってその意義を検討する。さらに、1870年代における古典派経済学に対する限界革命、新古典派経済学の誕生について概説する。	同　上	同　上
10	クールノーの数理経済学	クールノーの先駆的な独占理論、寡占理論、完全競争理論についてのべ、その考え方が現代経済学におけるゲームの理論のそれにつながることをあきらかにする。	同　上	同　上
11	ワルラスと一般均衡理論	市場経済の原理を求めて新古典派経済学の中心的な理論である一般均衡理論を展開したワルラスと、その後継者であり厚生経済学の基本定理（競争的資源配分の最適性）に関する重要な概念を提示したパレートの経済学を説明する。	同　上	同　上
12	ジェボンズと裁定行動	ワルスラとはことなった方法で市場均衡を解明したジェボンズとエッジワースのアプローチ、ことに有名なエッジワースのボックスダイアグラムについて説明する。	同　上	同　上
13	メンガーとオーストリア学派	メンガーにはじまるオーストラリア学派の現代的意義を論じる。また、ベーム・バヴェルクとシュンペーターの資本利子に関する論争など新古典派経済学にたいする貢献について検討する。	同　上	同　上
14	マーシャルとケンブリッジ学派	実際の経済問題を解明するための分析用具を開発したマーシャルの経済学、ことに消費者余剰分析による経済厚生論を概説する。	同　上	同　上
15	ケインズの「一般理論」	ケンブリッジ学派の自己批判であり、現代マクロ経済学の出発点であるケインズの「一般理論」を概説する。また、ケインズと経済学史の関係についても考察する。	同　上	同　上

＝ 経済社会の現代（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：坂井　素思（放送大学助教授）〕

全体のねらい

今日の経済社会には、どのような現代的特徴があるだろうか。経済社会の現代性について考える。とくにこの講義では、このような特徴が顕著に観察される「消費社会」の問題に焦点をあてることにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	消費社会とはどのような社会か	消費社会とは、人びとの消費が共通の様式を整えるような社会である。消費が社会全般の現象として観察されるところに特色が見いだせる。消費社会の変遷について考えてみたい。	坂井素思（放送大学助教授）	坂井素思（放送大学助教授）
2	消費とはどのような活動か	消費は、人びとの欲求やテイストを実現する活動である。このような欲求についての考え方や、テイストについての理論を見ていきたい。とりわけ、現代の趣味理論について、注目してみる。	同上	同上
3	人はなぜ消費を行うか	消費とは財を購入して、それを使用することである。この活動は主として家計によって行われるが、この章ではその家計消費の特徴について考える。	同上	同上
4	消費と必需の考え方	人はなぜ財を求めるのか。必需や標準という考え方のなかにみられる消費の規準について、考えてみる。このとき、エンゲル法則や、標準パッケージなどの意味についても注目してみたい。	同上	同上
5	所得水準と消費の関係	財を求める理由について、マクロ経済要因を中心に考察する。生産によってもたらされる所得が、消費に与える影響についてみる。このなかで、消費性向や、デモンストレーション効果などの、所得の及ぼす作用についてみていく。	同上	同上
6	贅沢消費はなぜ生ずるか	消費概念のなかで、必需と並んで重要な、贅沢の概念について考える。このなかで、絶対的欲求と相対的欲求の関係、禁欲と浪費などの問題点について考察する。	同上	同上
7	サーヴィス消費はなぜ増大するか	消費社会の現代的な特徴のひとつは、サーヴィス消費が増大しているところにある。消費にみられるサーヴィス経済化について考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	余暇消費のパラドックス	サーヴィス消費のなかでも、とくに際立った特徴を示すのが、余暇に使われる消費である。現代の余暇活動について考察する。	坂井素思	坂井素思
9	消費社会のなかの流行現象	流行現象のなかに、消費活動の現代的特徴を観察する。流行のメカニズムと消費との関係、流行の模倣過程などの点について、考えることにする。	同上	同上
10	消費社会の大衆性	今日の消費の大きな特徴は、大量消費という点にある。これが生じたのはなぜか。その基本的な原因を考えてみたい。	同上	同上
11	広告と消費社会	企業のマーケッティングの役割について考察する。広告や宣伝が、消費活動に与える影響についてみていく。	同上	同上
12	ブランドとグッドウィル	デパート・スーパーマーケット・小売店などの流通業が消費社会で果たす役割について考える。この産業で発達してきたさまざまな販売技術について見ていく。消費者に対して産業がもつ、さまざまな営業権について考える。ここでは、ブランドや商標などについて考察する。	同上	同上
13	消費社会の文化	消費文化について考える。このなかで、キッチュやパスティシュなどの動きについて見ていく。	同上	同上
14	消費社会と環境	消費活動の増大とともに、深刻な問題となってきているのが、消費によって生ずる、廃棄物の処理などの環境問題である。環境にかかるコストについて考える。	同上	同上
15	産業社会と大衆消費社会	消費社会と産業社会の接点について考察する。産業社会の在り方と、消費活動がどのように関係してくるのかについて考える。消費社会の示す現代的な特徴を整理・検討して、将来の課題について、問題提起を行う。	同上	同上

＝ 比較文明の社会学 ＝（ＴＶ）

〔主任講師：米山 俊直（ 大手前女子大学長 ）〕
〔主任講師：吉澤 五郎（聖心女子大学キリスト教文化研究所室長）〕

全体のねらい

文明は文化と並んで重要な社会理解の鍵になっている。この講義では、伝統的な文明あるいは文明史の諸説を紹介。検討しながら、現代の地球上に認められるいくつかの文明の現象をとらえて、具体的に検証することを通して、「諸文明の時代」とよばれる現代社会の動向とそのゆくえを考えようと試みる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	文化と文明	文化と文明の概念を規定し、この科目の目指すものを明らかにする。ことに将来の地球文明のあり方をさぐるという意図を明示する。	米山俊直（大手前女子大学長）	米山俊直（大手前女子大学長）
2	日本と文明	日本文明史の総体的な意味と展望について、中国化や西洋化などの文明変動をとらえながら、地球文明における課題を考える。	吉澤五郎（聖心女子大学キリスト教文化研究所室長）	吉澤五郎（聖心女子大学キリスト教文化研究所室長）
3	歴史と文明	歴史と文明の多様な営為と新しい知的転換の道程を、『歴史の研究』の著者トインビーの世界史像と、西欧文明の歴史的検証を通して解明する。	同上	同上
4	地球と文明	梅棹忠夫の『文明の生態史観』の枠組みと、情報化時代のその展開を紹介・検討する。	米山俊直	米山俊直
5	科学と文明	伝統的な科学史像をこえる「世界の科学」の観点から、人類史を読みかえる独自の構想と、「地球環境問題」への指針を示す。	伊東俊太郎（麗澤大学教授）	伊東俊太郎（麗澤大学教授）
6	宗教と文明	文明史における一神教・多神教の様相と、紛争要因としての宗教をあとづけ、さらに西欧の一神教的デモクラシーに対するアジアの多神教的デモクラシーの抵抗を究明する。	山折哲雄（白鳳女子短期大学長）	山折哲雄（白鳳女子短期大学長）
7	都市と文明	都市と文明の歴史的考察を通して、「伝統的都市」と「近代都市」の断絶の諸相、さらに問題解決のモデルを追求する。	桐敷真次郎（東京都立大学名誉教授）	桐敷真次郎（東京都立大学名誉教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	移動と文明	「動くものとしての人間」（ホモ・モビリタス）という視点から、諸文明の形成をあとづけ、イスラム・ネットワークの将来性を語る。	片倉もとこ（中央大学教授）	片倉もとこ（中央大学教授）
9	日本語と文明	文明のキーワードである文字の発明を概観しながら、「外国語としての日本語」の位相と文明の連関を、留学生のインタビューをまじえて検討する。	佐々木瑞枝（横浜国立大学教授）	佐々木瑞枝（横浜国立大学教授）
10	芸術と文明	音楽と美術をめぐる文明間の交流と、西欧的な価値観の偏見を是正し、西欧とアジア双方向の触合による新たな芸術創造の息吹を描写する。	藤井知昭（中部大学教授） 吉田憲司（国立民族学博物館助教授）	藤井知昭（中部大学教授） 吉田憲司（国立民族学博物館助教授）
11	戦争と文明	戦争と文明との関連について、原初的な農耕と武装の関係をはじめ、戦争発生の季節的分散や経済循環との係わりをつきとめ、さらに２１世紀文明の戦争回避の可能性と新しい方向性を考察する。	猪口邦子（上智大学教授）	猪口邦子（上智大学教授）
12	経営と文明	広義の経営学の立場から、生産様式と社会システムの変化をたどり、さらに文明移転の様相と今後の新しい方向づけを試みる。	日置弘一郎（京都大学教授）	日置弘一郎（京都大学教授）
13	海と文明	世界史を海洋史観の立場から見直し、とくに近代工業文明として浮上する２つの海洋勢力・イギリスと日本の勃興と、今後の「太平洋文明」を展望する。	川勝平太（国際日本文化研究センター教授）	川勝平太（国際日本文化研究センター教授）
14	情報と文明	現代の「情報化社会」の成立をはじめ、情報の成立およびコンピュータの新しい可能性を多面的に追究しながら、高度文明社会との関連性と課題を検討する。	杉田繁治（国立民族学博物館教授）	杉田繁治（国立民族学博物館教授）
15	諸文明の時代	「諸文明の時代」の難問を中心に、「文明的世界システム」の基本的視角から、生態系と文明系が共生する新しいパラダイムを提示する。	神川正彦（国学院大学名誉教授）	米山俊直 神川正彦（国学院大学名誉教授）

＝メディア論＝（TV）

〔主任講師：吉見　俊哉（東京大学助教授）〕
〔主任講師：水越　　伸（東京大学助教授）〕

全体のねらい

私たちは、現代の急速なメディア状況の進展と、それに伴うコミュニケーションや文化の混沌とした変化を、どのようにとらえていけばいいのであろうか。この講義の目的は、そのような認識枠組みを手に入れるために、近代社会とメディアがいかなるかたちで相関し、展開してきたかについて、歴史社会的検討を加えることにある。17、18世紀における印刷術と書物の普及から20世紀末のサイバースペースの展開にいたるまでの状況を、ほぼ時代順に検討していく予定である。社会や人間を捨象して情報技術の可能性ばかりを説く議論からも、情報技術やメディアのあり方を固定化した議論からも距離を取りつつ、情報技術、メディア、社会、人間の相互連関をなるべく幅広い視野の下で語っていくことを心がけたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	メディア論の視座	一連の講義の目的や視点の置き方、進め方のスタイルなどについて、説明を加える。その上で近年注目されつつあるメディア論という領域が、どのような背景の中から登場し、なにを課題として取り組んでいるかといった点について、なるべく広い視野のもとで座談会形式で明らかにしていく。	吉見俊哉（東京大学助教授） 水越　伸（東京大学助教授）	藤竹　暁（学習院大学教授） 吉見俊哉（東京大学助教授） 水越　伸（東京大学助教授）
2	印刷革命と活字の文化	印刷術の発明とその社会的影響について論じる。活版印刷の発明がいかなる歴史的文脈のなかで起き、宗教改革やルネッサンス、科学革命などとどのように結びついていったのか。印刷術は人間の知識や読書のあり方をどのように変えたのか。されでもなお、19世紀に到るまで、活字文化と口承の文化はどのような関係を保っていたのか。できるだけ多くの図版資料を使いながら、これらの点について解説していく。	吉見俊哉	吉見俊哉
3	鉄道と電信がつなぐ国土	電信網と鉄道網は、相互に密接に結びつきながら、近代国民国家の均質的な時間と空間の広がりを可能にしていった。18世紀から19世紀にかけて、どのような情報と交通のシステムが電信や鉄道に先行していたのかも紹介しながら、とりわけ19世紀を通じ、電信と鉄道がどのようにして近代国民国家の骨格を形づくっていったかを論じる。	同　上	同　上
4	近代ジャーナリズムの展開	市民社会とブルジョア文化の発展のなかで、新聞を中心とする近代ジャーナリズムが果たしていった役割と変容に焦点を当てる。英仏では1830年代あたりから、日本でも日露戦争以降に進行するジャーナリズムの商業化についても考える。また、日本については、草創期の新聞や姿や瓦版から新聞への展開についても言及したい。	同　上	同　上
5	電話の誕生と声の文化	19世紀後半から、電話や蓄音機からラジオに到る声の複製技術が次々に誕生する。ここでは、人間の声を複製していこうという考え方がどのような技術のイメージと結びつきながら発展してきたのか。初期の電話や蓄音機を19世紀の人々はどのように受けとめ、どのようなメディアとして社会化していったのかについて論じる。	同　上	同　上
6	パノラマ・写真・映画	電話や蓄音機が、人間の身体性を聴覚次元で複製していったとするならば、写真や映画は、視覚次元で身体と環境の大規模な複製化を進めた。ここでは写真から映画の発明までの映像技術の発展過程をたどりながら、人間の視覚性の変容とイメージの自立化のプロセスについて論じたい。パノラマやジオラマなどの同時代の技術にも言及する。	同　上	同　上
7	無線からラジオへ	19世紀末から20世紀前半期にかけての時期に、無線技術がはらんでいた多様な可能性を再検討するとともに、その中から、さまざまな社会的条件と大衆の欲望のもとで、ラジオ放送というマスメディアとしての在り方が突出して発展してきた過程とそれが他のメディアにもたらしたインパクトについて、内外の博物館、アーカイブなどを利用しつつ明らかにする。	水越　伸	水越　伸

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	テレビの登場と視聴者文化	ラジオと同等の歴史を持つテレビジョン技術がどのように展開し、結果としてラジオ放送の発展版として位置づけられるようになったか、確立したテレビの中にはラジオや映画など既存のメディアのいかなる部分が受け継がれ、いかなる部分が新しくはじまったか、そしてこのメディアをめぐる視聴者増とその文化的特性について論じていく。内外の博物館、アーカイブなどを利用し、テレビの技術、番組、社会的な影響過程について跡づける。	水越　伸	水越　伸
9	マスメディアの確立	おもに第二次世界大戦以後の世界において、新聞、テレビ、出版などのマスメディアは安定して発展を遂げ、国家、あるいは資本の論理のもとで体制的に確立し、いわゆる独占集中化が進行していった。この発展過程に反比例して、我々が関わることのできるメディアの多様性は失われていくことになる。ここでは、おもに日米における新聞、テレビの事例を取り上げつつ、これらの実態を検証していく。	同　上	同　上
10	メディアとしての広告	ラジオやテレビ、大衆雑誌などのマス・メディアは、その成立時から資本主義の市場戦略と結びついていたが、1920年代以降のアメリカにおいて、巨大な広告産業を成立させ、そのコマーシャリズムによって大衆文化を組織していく。ここではとりわけ20世紀のコマーシャリズムの進展との関係において、今日のメディアの意味を考える。	吉見俊哉	吉見俊哉
11	メディア論の現在	この回の講義には、中間まとめの意味を持たせ、討論形式でメディア論の現代的展開の状況を明らかにしていく。マスコミュニケーション論からメディア論への連続性と非連続性、マクルーハン、イニスをはじめとするトロント学派の再評価の状況、広義のカルチュラル・スタディーズの中での位置づけ等を中心に議論を進める予定である。	吉見俊哉 水越　伸	藤竹　暁 吉見俊哉 水越　伸
12	メディアとしてのコンピュータ	パーソナル・コンピュータ（ＰＣ）は、それまでの近代的産業社会の組織活動を支えてきた大型、中型コンピュータとは一線を画し、1970年代のカウンター・カルチャーの影響を色濃く受けて出現した。ＰＣの展開過程を、市民社会と産業資本の力学関係のもとで、歴史的に再検討をしていくとともに、当初それまでのマスメディアなどとまったく異質であったものが、いかにして互いに接近、融合しつつあるかを明らかにする。	水越　伸	水越　伸
13	新しいメディア表現者の台頭	コンピュータ・ネットワークの中に展開するサイバースペースは、電話、テレビなど従来のメディア文化の特性を継承しつつも、新たなメディア空間として、1990年代以降我々の社会や身体に多様な影響を与えつつある。この新たなメディア空間をめぐって巨大メディア資本が繰り広げる政治経済的攻防と、そこに立ち現れる新たなメディア表現者たちの生態を追いつつ、公共圏としての可能性と	同　上	同　上
14	メディアのグローバル化と日本	これまで支配的だったマスメディアは、程度の差はあれ国民国家の枠組みと合致して体制的に確立していた。しかし、近年の情報技術の展開の中でその体制が急速に変容し　つつある一方、新たな権力関係も現れつつある。おもに1980年代半ば以降に生じた、いわゆるグローバル・メディアの展開を、内外の取材をもとに跡づけるとともに、その中での日本の位置づけについて論じる。	同　上	同　上
15	メディア論の構図	15回の講義のまとめをおこなう。また、討論形式で、メディア論の展開の意味を、広く19世紀的な学問体系の変容の中に位置づけ、科学技術論、都市論、公共圏論、リテラシー教育などとの関係性を明らかにし、今後の課題を浮き彫りにしていく。	吉見俊哉 水越　伸	藤竹　暁 吉見俊哉 水越　伸

＝ コミュニティ論（’９８）＝（R）

〔主任講師：倉沢　進（放送大学教授）〕

全体のねらい

コミュニティの概念――古典的コミュニティと現代的コミュニティ――についての基礎的な理解をすること、高度成長後の日本社会の社会目標としてのコミュニティという問題提起について理解することを目的とする。あわせて現在日本各地で進められている多様なコミュニティ活動の事例を紹介し、地域社会と市民活動の関連についての考察を行う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	コミュニティ論を始めるに当たって	ヨーロッパの社会的現実の中で実態として存在した牧歌的コミュニティとはどのようなものであったかを解説すると共に、コミュニティ論の概観を行う。さらに日本の実例をもとに講義の全体像を示す。意味空間としてのコミュニティ、共同生活と共同経験、コミュニティ・アイデンティティがキーワード。	倉沢　進（放送大学教授）	倉沢　進（放送大学教授）
2	コミュニティの概念	社会学におけるコミュニティの代表的な概念規定であるマッキーヴァーのコミュニティとアソシエーションの対比、及びエコロジー的な概念であるパークのコミュニティとソサイアティの対比を説明する。コミュニティ概念の整理。地域性と共同性。	同　上	同　上
3	コミュニティ問題の登場	牧歌的コミュニティの衰退が、都市化の過程で生じたこと、公衆衛生や社会福祉の領域におけるコミュニティ・オーガニゼション、都市計画領域で近隣住区の考え方が社会的技術として形成されたことを理解する。高度経済成長にともない、コミュニティ問題が日本社会の課題として浮上し、国民生活審議会でコミュニティが取り上げられた背景。	同　上	同　上
4	都市的生活様式とコミュニティ	社会目標としてのコミュニティとは何を意味するかを理解する。伝統的な地域社会における相互扶助システム、都市的社会における専門処理システム相違と相補的関係、２つのシステムの組み合わせによる新しい最適システムとしてのコミュニティの意味を考える。	同　上	同　上
5	伝統的な地域社会と町内会	欧米のコミュニティに対比される日本の地域社会の特徴を理解する。“むら”の社会と都市における町内が取り上げられる。それぞれどのようなものであったか、欧米のコミュニティとどのように違うかなど。	同　上	同　上
6	町内原理とその変容	なぜ町内会が日本の９割以上の世帯を組織しているのか、町内原理が日本文化の基底にあることの意味を考える。町内原理とは何か、町内会の組織のあり方の特徴、自治体行政とのかかわり、末端行政補完機能。さらにその変容の契機としての地域共同管理、町内会の文化変容の可能性。	同　上	同　上
7	行政と住民	なぜ日本では町内会が行政と住民をつなぐというしくみが維持されているのか、［行政―町内会―住民］というシステム（日本）と［行政―Vs―住民］というシステム（イギリス）とを対比して考える。第３の方法の吟味。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	コミュニティ意識	都市化と共に地域社会について無関心・無気力・無責任になったとされる住民の意識の実態について、データをもとに考える。市民意識の類型、その中でのコミュニティ・モデルなど。	倉沢　進	倉沢　進
9	コミュニティセンター	1970年代のコミュニティ行政の主要な産物：全国に１万余建設されたコミュニティセンターは今日の地域社会でどのような役割を果たしているか。武蔵野けやきコミュニティセンターでの住民リーダーとの対話を素材に、コミュニティ・センターのあり方、行政ないし自治体と地域住民の果たす役割について考える。	同　上	同　上
10	自己充実活動の展開	コミュニティ活動は、自己充実活動、奉仕活動、問題解決活動に分類される。その中で自己充実活動の意味を考える。趣味学習スポーツ領域のコミュニティ活動は80年代以降遊び心をキーワードとして展開していることを、徳島県の村芝居白百合座でのインタービューをとおして考える。加えて親交的コミュニティ、自治的コミュニティの意味に触れる。	同　上	同　上
11	問題解決活動の展開	コミュニティ活動は、自己充実から次第に問題解決活動へと発展する。ゴミ問題に取り組む住民活動を取り上げ、町づくり住民活動について考える。受益圏と受苦圏という概念を用いて、住民活動の展開を考える。	同　上	同　上
12	地域社会の条件	現在の日本の地域社会のあり方の問題点。日本の地域社会の中で学校の持つ意味と役割を、アメリカのコミュニティ教育の実験との対比の中で考える。学校区の持つ意味、とコミュニティレベルの自治組織。	同　上	同　上
13	異文化とコミュニティ	これまで同質的な住民で構成されていた日本の地域社会も次第に異質な人々を包含するようになった。外国人労働者など、異質な人々との共生の町は、どのようにして形成されるか。インタービューを通して考える。	同　上	同　上
14	盛り場とコミュニティ	盛り場とコミュニティは相いれない存在だろうか。巣鴨の地蔵通りを例として、盛り場のコミュニティ機能について考える。キーワードとして第３空間の考え方を吟味する。コミュニティ概念が社会変動に応じて拡大してゆく方向を探る。	同　上	同　上
15	コミュニティの展望	コミュニティ論全体のまとめ。地域社会の条件について改めて考える。青い目で見た日本のコミュニティのインタービューを交えて考える。 コミュニティの主要な機能である安全、コミュニティを成立させる条件の一つ、コミュニケーションメディアの役割。そして鍵を握る住民意識の方向など。	同　上	同　上

＝ 逸脱の社会学（’９８）＝（R）

〔主任講師：清永 賢二（日本女子大学教授）〕
〔主任講師：岩永 雅也（放送大学教授）〕

全体のねらい

どのような社会あるいは集団も必ず何らかの規範体系を持っている。そうした規範体系が成員に要求する行為や状態から一定限度以上外れた行為または状態を逸脱とよぶ。逸脱の範疇に含まれる行為、状態は、日常的な問題行動から犯罪まできわめて多様であるが、本講義ではそうした逸脱をただ単に形態的に整理して解説するだけでなく、規範との関係を常に考慮しながら、逸脱の持つ社会的意味を考察していく。特に、逸脱を「あるべからざる異常なもの」と見る立場の対極に立ち、通常の社会事象と同様に発生の要因とメカニズムあるいは社会的影響などを考察する。また、近年の逸脱の実態と傾向を把握し、その現代社会における意味についても検討を加える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	規範と逸脱	逸脱を定義し、逸脱論の基本的視座を提示する。特に社会や集団の支配的な文化・規範との関連で、逸脱の位置づけを試みる。さまざまな逸脱の形態を分類し、類型化を試みる。さらにこれまでの逸脱研究の系譜も概観する。	岩永雅也（放送大学教授）	岩永雅也（放送大学教授）
2	社会的変動と逸脱	デュルケムのアノミー、ショウ、マッケイらの社会解体などの概念を手がかりに、規範によって秩序と均衡が保たれている社会の中に逸脱が生じる要因とメカニズムを、個人と社会とのつながりという側面から検討する。	同上	同上
3	社会的緊張と逸脱	均衡状態にある社会の規範が弛緩した状況下で生じる、いわば‘非日常的な’逸脱に対し、‘日常的な’逸脱はむしろ社会的規範と個人的願望の間の緊張が高まった状況のもとで生じる。社会的緊張の強弱と逸脱との関連を探る。	清永賢二（日本女子大学教授）	清永賢二（日本女子大学教授）
4	逸脱文化の学習	現実の社会はグランド・セオリーが前提とするような単一文化社会ではなく、中心的な規範とは異なる多くの下位文化が存在する。逸脱的下位文化もその一つである。ここでは逸脱的文化の学習が逸脱を生むメカニズムを考察する。	岩永雅也	岩永雅也
5	ラベリング	逸脱する主体の側から逸脱を考察する逸脱論に対し、そうした行為を逸脱と規定して逸脱者を作り出す社会の側が持つ機能に焦点をあてたのがラベリング論である。社会が必然的に逸脱を作り出す、という観点から逸脱を俯瞰する。	同上	同上
6	逸脱研究の現状	1970年代以降、ラベリング論は理論的にも実践的にも閉塞状況に陥った。ここでは、現在の逸脱論の二つの潮流である、実践的立場からのラベリングと実証主義との融和、およびラベリングをさらに先鋭化した構築主義的アプローチの二者を中心に、ラベリング以降の逸脱論を検討する。	同上	同上
7	家族内規範と逸脱	家族は社会の中で最も基本的な規範単位である。近年における家族およびそれを取り巻く環境の変化が、家族内の規範構造にいかなる変化をもたらし、どのような逸脱を生んでいるのか、家族の社会化力に焦点を当てて分析する。	木村涼子（大阪女子大学助教授）	木村涼子（大阪女子大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	性と逸脱	「性」は逸脱の多くの部分に何らかの形で関わりを持っている。性に関わる逸脱には、レイプのような重大犯罪から日常的なセクハラまで著しい多様性があるが、その現状と根底に通流する社会的な意味について検討する。	木村涼子	木村涼子
9	学校と逸脱	学校は単に知識や技能を提供する場ではなく、日常生活を通じて社会の新たな構成員としての子どもに、何が正当で何が逸脱かを刷り込んでいく巨大な規範装置である。いじめなども含め、今学校で生じている逸脱を考察する。	清永賢二	清永賢二
10	都市空間と若者	都市は若者を引き付ける。都市の限られた空間には、その場限りのアノミーな雰囲気・気分が充満している。日常社会では逸脱とされる行為もそこでは普通に行われる。彼らの都市空間での行動を通じ青少年の逸脱の本質を探る。	同上	同上
11	逃避的行動	逸脱的行為は多かれ少なかれ他の社会構成員を害するものであるが、逃避的行動は自損的である点で逸脱の中でも特異である。自殺、家出、ホームレス、薬物依存など、さまざまな逃避的行動の意味と現状を分析する。	岩永雅也	岩永雅也
12	ホワイトカラーの逸脱	サザランドは、本来支配的規範の枠内にあるために最も逸脱から遠い存在と考えられていたホワイトカラー層にも、独自の様式と背景を持った犯罪や逸脱的行動があることを明らかにした。わが国でも近年増加しつつあるホワイトカラーの逸脱について検討する。	西村春夫（国士舘大学教授）	西村春夫（国士舘大学教授）
13	集団的逸脱と組織	ある種の犯罪の多くは、やくざやテキヤなどの逸脱集団との何らかの関わりによって生じるといわれる。さまざまな形態を持つ逸脱集団の構成と成立の背景、社会的機能などについて考察する。	同上	同上
14	逸脱の動向	犯罪、非行といった逸脱の量的な変化は、決して一様ではない。犯罪や非行の量的な動向を歴史的に検討し、さらにその傾向を国際的に比較することによって、わが国の逸脱の性格と特徴を時系列的に把握する。	清永賢二	清永賢二
15	逸脱をどう見るか	社会に規範が存在する限り、逸脱は不可避である。われわれの生きる近代社会が、一方で逸脱を逸脱として定義付けながら形成しつつ、他方ではそれを減少させようと統制に努めるのはなぜか。前半の理論編、後半の実証編の両者をふまえ、逸脱現象の見方、考え方を展望する。	同上	同上

＝ ジェンダーの社会学（’９９）＝（R）

〔主任講師：江原　由美子（東京都立大学助教授）〕
〔主任講師：山田　昌弘（東京学芸大学助教授）〕

全体のねらい

この講義は、ジェンダーの視点から現代社会をとらえ直し、よりよい社会生活・社会関係のあり方についての考察を深めることをねらいとする。前半においては、性別という現象への分析力を高めることを主眼とした講義を行い、その後、家庭・職場・福祉・政治などの社会生活諸領域の考察を行う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ジェンダーとは	ジェンダーという言葉について説明を行い、ジェンダーという言葉が現在どのような意味で使用されているか、またその背景にはどのような問題があるのかを概説する。	江原由美子（東京都立大学助教授）	江原由美子（東京都立大学助教授）
2	女らしさと性役割	「女らしさ」というものが、どのように性役割（家事・育児役割）と関連しているかについて考察する。女性の性役割についてのこれまでの研究を概観し、性役割を役割取得していく過程における「女らしさ」という美意識・価値観との関わりを追う。	江原由美子	江原由美子 山田昌弘（東京学芸大学助教授）
3	男らしさと性役割	女らしさが問題になると、その対極にある「男らしさ」にも注目が集まる。最近は、男性学を銘打つ研究も現れ、「男らしさ」研究が盛んになりつつある。従来の男らしさはどのように捉えられたかを考察し、「男性解放」について考える。	山田昌弘（東京学芸大学助教授）	江原由美子 山田昌弘
4	トランス・ジェンダー、トランス・セクシュアル	同性愛・性転換など、「セクシュアリティー」の領域で、従来の男性・女性の枠組みを越える現象が話題になっている。これらの人々の意識や運動などを考察することを通じて、根本的なレベルでのジェンダーを理論化する。	同上	同上
5	恋愛・結婚	多くの人は、恋愛・結婚において、自分の性別を身近に感じ始める。人を好きになり、一緒になるという時にもジェンダーが関係していくる。恋愛対象、恋愛関係、配偶者選択にかかわるジェンダー現象を探究する。	同上	同上
6	リプロダクション－子産み・子育て	出産期は、夫婦関係・男女関係におけるもっとも大きな危機の一つである。出産をめぐる男女の意識のズレ、子育てをめぐる夫婦の葛藤をジェンダーとの関連で考察する。生殖医療の問題にも言及する。	江原由美子	江原由美子 山田昌弘
7	家事とジェンダー	家事は従来女性の担当とされてきた。家事に込められる意味、特に「家事は愛情表現である」という意識が、女性への家事の押しつけに繋がっている。家事は、歴史的にどのように成立し、女性に割り当てられて行ったかを明らかにする。	山田昌弘	江原由美子 山田昌弘

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	職場とジェンダー	職場もジェンダーと無縁な場ではない。性別による職業や職位・職務の相違が、どのようにジェンダーと関連しているのかを明らかにする。女性職と性役割の関連性、近代官僚制と「男らしさ」との関わりなど。	江原由美子	江原由美子 山田昌弘
9	セレモニーとジェンダー	固定的なジェンダー関係は、伝統的な慣習の中に埋め込まれている。しかし最近では、伝統にとらわれないセレモニーも模索されている。結婚式とお葬式、お墓の問題などをとりあげ、その中にみられる新しいジェンダー関係の模索を考察する。	江原由美子 山田昌弘	江原由美子 山田昌弘
10	セクシュアリティーと家族	男女の性意識、性行動は、大きく異なるといわれている。通常、男性の性欲は自然で攻撃的であり、女性の性欲は受動的といわれている。セクシュアリティーのジェンダー差の意味と、男女関係に与える影響について論じる。	山田昌弘	江原由美子 山田昌弘
11	女性に対する暴力	最近、レイプなどの性暴力や、ドメスティクバイオレンス（夫から妻への暴力）が、社会問題化している。これらの問題を追うなかで、「男性の攻撃性」「女性の受動性」など従来のジェンダー観をとらえ直すことを試みる。	江原由美子	江原由美子 山田昌弘
12	性の商品化	買売春問題は、非常に多岐にいわれたる社会的要因と非常に深い心理的問題とを伴っている。買売春問題を一つの手がかりとして、現代社会において様々な形をとる「性の商品化」現象を、ジェンダーとの関連性において考察する。	同上	同上
13	介護とジェンダー	ケア（介護・看護など）の担い手の大多数は、家族の中でも外でも女性である。ケアの場面で女性が期待される理由を、「さわること」のジェンダー的意味の考察を通じて明らかにする。高齢化が進む中で、介護における男女平等とは何かを考える。	山田昌弘	江原由美子 山田昌弘
14	セラピーとジェンダー	最近、心の悩みやセラピー（心理療法）に対して関心が集まっている。その中で、従来のセラピーのやり方が、男性中心に偏っているという批判も出てきた。そこで、フェミニスト・セラピーを紹介しながら、臨床場面におけるジェンダー問題を考察する。	同上	同上
15	ジェンダー政策と未来	従来女性政策と呼ばれてきた領域で、男性を対象とする政策の必要性が主張されてきている。ジェンダー政策のこうした新たな動きは、ジェンダー秩序を変えることができるのか。望ましい本来とは何かを展望する。	江原由美子	江原由美子 山田昌弘

＝ 都市空間の比較社会学（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：倉沢　進（放送大学教授）〕

全体のねらい

都市社会学という学問がどのような都市的現実、都市の実際の問題状況から生まれ出たのか、空間構造に焦点をあて都市社会学の展開を見る。1～7は、理論とその理論を生んだ都市－パリ、シカゴ、ボストン、メリダ（メキシコ）という展開の舞台で、シカゴ学派都市社会学とそれに対する批判・反批判の流れを検討する。8～10は、ヨーロッパ、東アジア、東南アジアの都市の特色を、それぞれのキーワード（広場、風水、バザー）に即して示す。11以下は日本の都市、特に東京を中心として、その社会・空間構造と変動を明らかにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	14番目のパリ	G.Simmelの見たパリ、14番目屋の話を導入として、都市社会の意味を考える。 これを受けて都市の概念規定を吟味する。	倉沢　進（放送大学教授）	倉沢　進（放送大学教授）
2	20世紀初頭のシカゴ	都市社会学を生んだ20世紀初頭のシカゴがどのような都市であったか。 アメリカの歴史、農村社会から工業社会への変動と、その中でシカゴが果たした役割。 またこの状況が都市問題の噴出をもたらしたこと。	松本　康（名古屋大学教授）	倉沢　進
3	大都市の同心円構造	ループと呼ばれる都心地区、周辺のスラム街などシカゴを彩る空間の紹介。 バージェスの同心円理論。貧乏な人はなぜ地価の一番高いところに住むか、の問いかけを手がかりに同心円構造の形成を観察する。	同上	同上
4	ベースマップと人間生態学	シカゴ学派都市社会学の形成の歴史。 都市問題の研究の方法としての社会問題基礎地図はどのような環境で生まれたか。 指導者パークと人間生態学方法。	同上	同上
5	ボストンの社会文化生態学	歴史の散歩道を手がかりに、ボストンという都市の歴史上の位置を理解する。 ファイアレイの研究したボストン都市の3つの事例地区を見る。 歴史的都市の類型と、同心円構造を歪曲する社会的要因の相互関係。 イーストエンドから、ストリートコーナーソサイアティ研究－ギャング社会関係。	倉沢　進	倉沢　進
6	アーバニズムと都鄙連続体	シカゴ学派都市社会学の大成物ワースのアーバニズム理論の紹介。 その成立とかかわったレッドフィールドのユカタン半島4つの地域社会の研究。 民族社会と都市社会の連続体概念。	同上	同上
7	前産業型都市とメキシコ都市の変容	アーバニズム図式に対する批判。その一つのショウバーグの前産業型都市都市の類型。 貧乏な人はなぜ郊外に住むか。シカゴモデルと異なる空間構造の説明要因。 前産業型都市と植民都市。変容を説明する理論－アーバニズム。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	広場とヨーロッパ都市	広場を中心に持つヨーロッパの中世都市。その空間構造と社会構造。 M. Weberの市民都市論を映像と共に吟味する。 あらためて中世市民都市と、近代大都市。	倉沢進	倉沢進
9	風水の東アジアの都市	中国の風水思想と都市 朝鮮におけるその変容 ソウルの空間構造	吉田光男（東京大学教授）	倉沢進
10	市場と東南アジアの都市	途上国社会と首位都市 バンコクの都市形成 市場 新中間階層とスラム居住層	松薗祐子（いわき明星大学助教授）	倉沢進
11	日本都市の類型	宮処と市をキーワードとする古代都市。 城下町、宿場町など近世の都市類型と、明治以降の都市発展の連続性と断絶性。 倉沢の発展類型－伝統消費型都市の類型。鈴木の産業都市。	倉沢進	倉沢進
12	都心と郊外	日本都市社会学の第一世代 都会人の社会的性格	同上	同上
13	山の手と下町東京の社会地図	セクター型の具体的実態としての山の手と下町の分化。 ドーアの下山町。 社会地区分析の方法、因子生態学の発展、ロンドン社会地図、東京社会地図の方法。 東京の社会地図・ソウルの社会地図	同上	同上
14	アーバニズム現論の展開	都市的生活様式 下位文化理論	同上	同上
15	世界都市化東京	グローバリゼーションの概念。グローバリゼーションと世界都市の形成。 青いバナナとベソト。世界都市形成の社会的結果。 空間構造へのその反映。	同上	同上

＝ 環境社会学（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：鳥越 皓之（筑波大学教授）〕

全体のねらい

三つのねらいがある。ひとつは具体的な事例を通じて環境を社会学的に分析する方法論の理解。二点目は、環境社会学的切り口で、環境や環境問題がどのようにみえてくるかを明らかにすること。三つ目は、環境について身近に感じるとともに、自分も考えみよう、あるいは環境をよくする活動に参加をしてみようと思ってもらえること。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	環境社会学とは	環境社会学的な考え方がどのようなものであるかを理解してもらうことをねらいとする。方法論的な討議は抽象的になりやすいので、ゴミを例として自分との距離（部屋のなかにゴミを散らかすと気になるが、遠い島の産業廃棄物には関心が薄い）の問題を通じて、私的なこと社会的なことを考える。また、国の文化の違いが環境政策にも影響することを述べる。	鳥越皓之（筑波大学教授）	鳥越皓之（筑波大学教授）
2	環境問題とエコシステム	生態学の成立がエコロジカルな運動を起こすきっかけになり、アメリカに国立公園をつくらせるなど、自然環境保護運動がたかまった事実を述べる。ただ、生態学のエコシステムの考え方と人間を要素とする社会システムの考え方とを合体させた有効なシステム論が現状では存在しない。それが環境政策にも反映して、具体的な施策としては両者を空間的に分けて、そん間を線引きをして生態域（自然域）、人間域（社会域）とに区分する方法がしばしばとられる。白神山地の森林とイリオモテヤマネコ（西表島）を例に人と自然との関係について考える。	同上	同上
3	森・川・海－コモンズ	村の空間をイメージするとよい。人びとの家や耕地の外側に広がる森や川や海は独特の使われ方をされてきた。それをコモンズ（入会）とよぶ。そこは人びとの共同利用地となっていた。この全くの自然ではなく、また田や畑のように人間の手によって強く改変された自然でもない、ちょうど中間に位置するのがコモンズである。イギリスなどヨーロッパの荒蕪地に春になると薄紫の花をつけるヒースの野原などがコモンズの典型である。	同上	同上
4	農業と自然	人びとは農地をとりあえず自然の一部とみなしているが、自然を遠慮なく人間の思い通りに変形させてしまったのが農業である。とはいえ、人間にとって農業は不可欠である。この農業の問題点は近代化の名の下に、化学化（農薬、化学肥料）と過度な機械化が行われたことである。結果的に農民の窮乏化、また消費者の健康の問題などを引き起こしている。農民からつくる楽しみを奪ったことも問題であろう。この近代化の批判から起こった有機農業について現場からの声をきく。	同上	同上
5	生活環境に焦点をあてる	「生活環境主義」というモデルをつかって環境問題の理解を試みる。それはエコロジー論（自然環境主義）とも近代技術が最終的には環境問題の解決に寄与するとみなす近代技術主義とも異なって、人びとの生活のシステムを軸において分析する方法がある。具体的には森林保全の問題を生活環境主義から解釈のしなおしをする。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	住民は環境を自分で決められるのか	環境保全を考えるとき「住民の主体性」がたいへん大きな役割をはたす。この住民の主体性を軸にして、住民の課題を問題とする。住民はいつも相互に連帯するわけではない。相互に意見を異にして対立することもある。また、住民は生活を積み重ねることによって「生活権」とでもよべるものをもつことにもなる。住民の環境創造的な試みもとりあげる。	鳥越皓之	鳥越皓之
7	社会的ジレンマとしての環境問題	汚水を流すことや、タバコのポイ捨てのように、自分一人ぐらいが注意を怠っても別にどうということはないにもかかわらず、そう思って全員が行うととんでもないことになる現象を社会的ジレンマとよぶ。社会的ジレンマ論を使いながら、多様な環境問題のあり方を考える。	同上	同上
8	ゴミとリサイクル	ゴミとはそもそも何を意味するのか、「もったいない」という価値観はないのだろうか、というような点から考えはじめ、リサイクルの活動の分析をし、新しいライフスタイルの模索をする。	同上	同上
9	開発計画と加害者・被害者	加害者および被害者がもっている多様な側面を開発計画とかかわらせながら分析をする。日本の伝統的な公害をあつかう預定であるが、視野を東南アジアにも広げることによって、それが現代のグローバルな課題であることを示したい。	同上	同上
10	公共事業と地元の利害	原発などが典型であるが、公共事業はたんに公共のためによくなるというのではなくて、たいへんつよく地元の利と害がからんでいる。オリンピックがおこなわれた長野を事例として出そう。また、エネルギー論にまで言及できればと思っている。	同上	同上
11	歴史的環境保全の運動	明治期に建てられた西洋建築を守る運動、また歴史的に由緒のある橋を保全する運動、さらには町並みの全体を保全する運動など歴史的環境保護運動の対象は広い。これがいわゆる文化財保護とどのように異なるかを検討しつつ、その結果や可能性を考える。具体的には沖縄の竹富島を対象としてとりあげたい。	同上	同上
12	景観の形成	歴史的環境保護の延長上にくらしの景観をとりあげたい。奈良の明日香に視点をすえながら地域の活性化にとりくんでいる姿を紹介する。	同上	同上
13	環境ボランティアとＮＰＯ	阪神淡路大震災後、ボランティアとＮＰＯが注目されるようになった。かれらがどのような活躍をし、それが現代社会でどのような意味をもつのかを考える。オルタナティブ社会という新しい社会論の可能性を検討する。行政との関係にも言及する必要があろう。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	内発的発展論とコミュニティ・ビジネス	内発的発展とは地域内部からの力で発展を行うことである。外部資本の導入がしばしばその地域の未来の発展をそこなうという考えから、地元（とくに若者）が集まって地域の発展を考え「地元のための」ビジネスを模索する。その可能性を問いかける。	鳥越皓之	鳥越皓之
15	政策と実践	全体のまとめを行う。地元の小さなコミュニティをキチンともっていることが環境保全にとって大切なことを事例を通じて説明をする。人間がコミュニティ（共同性）をもつ意味、将来の可能性についても言及する。	同上	同上

＝ 都市社会の人間関係（’００）＝（R）

〔主任講師：森岡 清志（東京都立大学教授）〕

全体のねらい

この講義のねらいは、都市社会が人間関係にどのような影響を与えているかという点を中心に、都市社会学、家族社会学、階層研究にまたがる諸知識を提供し、パーソナルネットワークに関する理解を深めることにある。社会を理解する上で、身近な人と人とのつながりを理解することが重要なことを伝えたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	都市社会の特質と人間関係	都市という集落の特質、そこから生ずる共同生活の営み方（都市的生活様式）がどのような人間関係をつくりだすか、この点に関するこれまでの学説を整理しつつ紹介し、人間関係に注目することがどのような意味をもつかについても講義する。	森岡 清志（東京都立大学教授）	森岡 清志（東京都立大学教授）
2	社会的ネットワークとパーソナルネットワーク	人間関係に注目する先行研究の中から社会的ネットワークという概念が誕生し、さらにその中から人と人とのつながりに着目するパーソナルネットワーク研究が盛んになってきた過程と、これらの研究における基本的な説明論理について講義する。	同上	同上
3	アーバニズムと社会的ネットワークの理論	都市は人間関係をどのように変えるのか。ワースのアーバニズム理論とフィッシャーの下位文化理論を対比させて、都市に住むことが社会的ネットワークをどのように変えるのかについて考える。 アーバニズム理論、ネットワーク構築における構造的制約と生態学的（地理的）制約	松本 康（東京都立大学教授）	松本 康（東京都立大学教授）
4	北カリフォルニアのパーソナルネットワーク	大都市の社会生活が、郊外や小さな町の社会生活とどのように異なるのか。フィッシャーの北カリフォルニアでの調査結果を参考に、アメリカ合衆国における親族・近隣・仕事仲間・友人関係などについて検討する。 ネットワークに関する下位文化理論の仮説と北カリフォルニア調査の知見	同上	同上
5	現代日本の都市居住とパーソナルネットワーク	現代日本の大都市圏では、どこにどのような人が住んでいるのか。そこでの社会生活の特徴はどのようなものか。またその要因は何か。日本都市におけるパーソナル・ネットワーク研究の成果を踏まえて考える。 都市の社会空間構造、都心居住と郊外居住、性別・年齢・職業・移動歴とパーソナル・ネットワーク	同上	同上
6	都市化と親族関係	パーソナルネットワークの中で近親者の親族ネットワークは都市化が進展しても依然として重要である。日本の親族関係の特質と、都市化に伴う変容について講義し、パーソナルネットワークと社会とのつながり、個人の生活とのつながりを理解させる。	森岡 清志	森岡 清志
7	現代の都市家族	現代都市家族の特徴について、ワースのアーバニズム論やパーソンズの孤立核家族論を紹介し、それに対するサスマンやリトワック（修正拡大家族論）などの反論を検討する。日本の都市家族研究にも触れる。	野沢 慎司（明治学院大学教授）	野沢 慎司（明治学院大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	都市家族とネットワーク	家族内部の人間関係は家族外の関係のネットワークの構造と関連しているとみるボットと後続の研究を取り上げ、その意義と問題点を論じる。コミュニティ解放論に依拠する新しい見解と比較する。	野沢慎司	野沢慎司
9	連帯的なネットワークと家族	家族に対するネットワークの構造的影響について、調査事例を取り上げ、親族、職場、地域社会などにおけるネットワークが連帯性を帯び、現代日本の夫婦関係に影響を及ぼす傾向を論じる。	同上	同上
10	解放化するネットワークと家族	ネットワークが空間的、構造的に解放化すると、家族が意識的にネットワークを維持・管理・動員する主体となる傾向を増す。それが家族のライフスタイル化や個人化とも関連することを論じる。	同上	同上
11	階層とネットワーク	職業、収入、教育程度などを規準とする社会階層の違いによって、個人の持つパーソナルネットワークの特性には様々な違いがみられる。それらを説明する個人属性的要因および社会構造的要因に言及する。	中尾啓子（東京都立大学助教授）	中尾啓子（東京都立大学助教授）
12	地位達成とネットワーク	個人が社会的地位を達成する過程で、パーソナルネットワークはいろいろな機能を果たしている。ここでは主に、職業的地位達成において知人や友人が与える影響を、理論的に考察し、実証研究を紹介しながら探求する。	同上	同上
13	小集団のネットワーク	人々が属する職場や友達同士の小集団の人間関係は、様々な構造的パターンがみられ、それらが集団や成員の特性を表している。小集団における関係のパターンを追究する方法、ソシオメトリーを紹介し、それを用いた実証研究を例にとって人間関係の構造に言及する。	同上	同上
14	高齢者のパーソナルネットワーク	高齢者の生きがいを支えているものは何か。生きがいの一つとして主観的幸福感をとりあげ、これを規定する要因の一つに友人関係があることを述べ、高齢者の生きがいと友人関係の関連について考察する。また友人関係の特質についても講ずる。	森岡清志	森岡清志
15	パーソナルネットワーク研究の課題	パーソナルネットワーク研究の成果を整理するとともに、今後の研究課題について説明する。親しい人びとに限定されたネットワーク研究の問題点や、ライフコースとネットワークの変化の関連を追求する必要などについて講ずる。	同上	同上

＝ 刑法（’０１）＝（R）

〔主任講師：西田 典之（東京大学教授）〕

全体のねらい

刑法とは犯罪と刑罰に関する法である。本講義では、まず、刑罰の目的、刑法の役割、罪刑法定主義などの基本的論点を踏まえたうえで、犯罪の一般的成立要件を解説する。そのうえで、刑法典各則の主要な犯罪およびコンピュータ犯罪、総会屋への利益供与罪、インサイダー取引等の証券犯罪などの現代型の犯罪について解説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	刑法とはなにか。	刑事事件と民事事件の区別や各種の制裁の区別から、刑罰を制裁とする刑罰法規の意義や種類を明らかにするとともに死刑、懲役、罰金などの刑罰の内容を解説する。	西田 典之（東京大学教授）	西田 典之（東京大学教授）
2	刑法はいかに実現されるか。	刑法という実体法の実現手続である刑事裁判のプロセスについて簡単に説明する。あわせて、微罪処分、起訴猶予、執行猶予制度などの非刑罰的処理についても言及する。	同上	同上
3	刑罰の目的	広報刑、予防刑、改善・教育刑などの刑罰の本質をめぐる論争を紹介し、刑罰の目的についての考え方を検討するとともに、これと関連する犯罪観の対立である「学派の争い」について解説する。	同上	同上
4	刑法の機能	人権・自由保障機能、法益保護機能、社会秩序維持機能など、さまざまな刑法の機能についての考え方を紹介し、現代社会において刑法の果たすべき役割について検討する。なお、罪刑法定主義についても一部言及する。	同上	同上
5	罪刑法定主義	近代刑法の基本原則である罪刑法定主義について、その意義、内容を説明し、あわせて、刑法の解釈のあり方について検討する。	同上	同上
6	犯罪論の構成	犯罪成立の一般的要件である構成要件該当性、違法性、有責性という段階的構造についての基本的な考え方を説明するとともに、刑法典の構成について解説する。	同上	同上
7	構成要件とはなにか	構成要件というう概念について解説し、あわせて、その重要な内容である因果関係論、不作為犯論、法人処罰について検討する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	違反性	実質的違法性の考え方とそこから導かれる違法阻却の原理について説明したのち、正当防衛、緊急避難、正当業務行為などの違法阻却事由について説明する。	西田　典之	西田　典之
9	有責性	責任の要件である責任能力、故意、過失について解説したのち、事実の錯誤、禁止の錯誤、違法の意識の問題について検討する。	同　上	同　上
10	未遂・共犯	未遂犯および共犯について、刑法典の規定を説明し、関連する諸問題である不能犯、中止犯、共謀共同正犯などについて検討する。	同　上	同　上
11	生命・身体・自由に対する罪	殺人罪、傷害罪、逮捕・監禁罪、脅迫罪、誘拐罪などについて解説し、あわせて、臓器移植法、人質強要罪などに言及する。	同　上	同　上
12	財産に対する罪	窃盗罪、強盗罪、詐欺罪、横領罪、背任罪などの財産犯の体系および個別的内容について解説するとともに、カード犯罪、情報犯罪などにも言及する。	同　上	同　上
13	社会的法益・国家的法益に対する罪	放火罪などの公共危険罪、文書偽造罪、収賄罪などについて解説し、あわせて、テレフォンカードの偽造、コピーによる文書偽造などの問題についても言及する。	同　上	同　上
14	コンピュータ・カード犯罪	昭和62年に新設された各種のコンピュータ犯罪について、その導入の必要性や内容を説明し、平成11年に成立した不正アクセス禁止法についても解説する。また、クレジットカードの偽造の問題にも言及する。	同　上	同　上
15	経済犯罪	商法罰則における総会屋への利益供与罪、証券取引法におけるインサイダー取引や株価操作の罪などについて、その実態や解釈上の問題点などを解説する。	同　上	同　上

＝ヨーロッパ政治史（’０１）＝（R）

〔主任講師：田口　晃　（北海道大学教授）〕

全体のねらい

冷戦期を通じたヨーロッパの政治史を、各国の政治構造に着目しつつ、概観する。その際、ヨーロッパの政治経験の多様さを知って貰うために、英、仏、独、ソ以外の小国にも言及するとともに、ヨーロッパ統合問題も射程に入れたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	分析視角と２０世紀前半ヨーロッパの政治対立	最初に第二次世界大戦後のヨーロッパ政治を通観するための分析視角と認識枠組みを検討し、更に戦後政治の理解の前提となる２０世紀前半の政治史を国民国家と階級対立の絡み合いとして概観する。	田口　晃（北海道大学教授）	田口　晃（北海道大学教授）
2	ヨーロッパにおける冷戦	ヤルタ会談、ポツダム会談からトルーマン宣言、マーシャル・プランを経てNATO,WTOの軍事同盟網のへ対決と激化する米ソ東西対立の過程を追い、その歴史的、政治的意味を考える。	同　上	同　上
3	東欧の新体制	ソ連の勢力圏内に組み込まれた国の中からポーランドを、またソ連の影響下から自立した例としてユーゴスラヴィアを取り上げ、比較しながらスターリン体制化の進んだ東欧の多くの国と、ユーゴスラヴィアの独自路線とを考察する。	同　上	同　上
4	西欧の復興と右旋回（１）イギリス	長年にわたる議員内閣制と二大政党制の中で初の労働党安定政権が登場し、重要産業国有化と福祉国家化を経験したイギリスを扱う。植民地独立により、対外的影響力は減少するものの、保守党政権復活後も福祉国家は定着する。	同　上	同　上
5	西欧の復興と右旋回（２）フランス	内外の混乱から不安定な第四共和制。アルジェリア問題をめぐる危機を終息させるためドゴールは大統領権限の強い第五共和制憲法を導入。フランスの栄光をめざす独自の外交防衛政策も展開した。	同　上	同　上
6	敗戦国の運命（１）ドイツ	西側に属することで独立を認められた西ドイツ。「奇蹟」と謳われた経済の急速な復興とアーデナウアーの宰相民主政、民主主義の定着過程に着目しよう。	同　上	同　上
7	敗戦国の運命（２）イタリア、オーストリア	冷戦構造の中で保守派のキリスト教民主党が一党優位制を確立したイタリア。ドイツに先駆けて、中立を条件に、二大政党による大連立政権の手で占領から解放されたオーストリア。二国を取り扱う。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ソ連の変化と東欧の反応	スターリン死後のソ連内部の東の間「雪解け」とフルシチョフ改革を検討する。また、フルシチョフによるスターリン批判とその影響。とくにハンガリー反乱に光を当ててみたい。	田口　晃	田口　晃
9	中立国の政治　スウェーデンとスイス	ここでは二つの中立国６０年代の平和と繁栄に光を当てよう。社会民主党主導の福祉国家スウェーデンと４党政権で安定した質実国家スイスである。そうして両国の中立政策も比較検討してみたい。	同　上	同　上
10	７０年代の構造変動スペインとオランダ	長く続いた独裁体制から民主政へというスペイン政治の変革と多極共存型民主政が文化変容とともに解体したオランダを並べて、位層の異なる構造変動を論ずる。	同　上	同　上
11	世界市場の荒波の中でサッチャーのイギリスとミッテランのフランス	７０年代石油危機以後の経済的停滞と世界市場の自由化の進展への対応例としてイギリス、サッチャー保守党政権による「小さい政府」の実験とその成果、およびミッテラン大統領率いるフランス社会党政権の「大きい政府」からの方針転換についてふれる。	同　上	同　上
12	東欧の体制変動とソ連の解体	７０年代危機から転換を模索した西欧に対し、旧態依然のソ連東ヨーロッパは８０年代後半ゴルバチョフの登場から一気に急変を遂げる。そして８９年の連鎖的「革命」と冷戦の終結へと至るのである。	同　上	同　上
13	西側への影響ドイツとイタリア	冷戦の終結は、西ヨーロッパでも様々な変化を呼び起こした。ドイツの統一という積年の難題に答を出すとともに、イタリアにおいては大がかりな政治再編を引き起こしたのである。	同　上	同　上
14	国民国家のゆくえ（１）ユーゴスラビア解体とベルギー再編	冷戦終結と進むヨーロッパ統合の中で国民国家は試練と変容を遂げる。ここでは民族対立を現象化させて解体したユーゴスラヴィアの例と地域的連邦制と言語集団の分権という二重の連邦制によって再編されたベルギーの例を取り上げる。	同　上	同　上
15	国民国家のゆくえ（２）古い政治と新しい政治	最後にまとめて安全保障問題とヨーロッパ統合を概観する。同時に従来の国民国家がヨーロッパの政治の中でどのような位置を占めているかを、行政国家、福祉国家と小さい政府やＮＰＯ、あるいは労働運動の変容と環境をめぐる新しい市民運動などとの関連で論じる。	同　上	同　上

＝ 第三世界の政治（’０１）＝（R）

〔主任講師：高橋　和夫（放送大学助教授）〕

全体のねらい

第三世界が経験している地域紛争の代表例であるパレスチナ問題を取り上げる。全ての地域紛争は、それぞれの地域の実情を反映して特殊である。しかし同時に第三世界に共通した要素によって普遍的な面も有している。共通の要素とは、たとえば大国の関与であり、ヨーロッパからの入植者と先住民の対立である。こうした要素ゆえに、一つの地域の紛争を語る事が他の地域の問題を語ることにつながる。『第三世界の政治』とのタイトルの下でパレスチナ問題を語るのはこうした意図からである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	パレスチナへ	パレスチナを巡るシオニストとパレスチナ人の抗争の起源からイスラエルの成立までの歴史を振り返る。そのハイライトは第一次中東戦争とパレスチナ難民の発生である。	高橋　和夫（放送大学助教授）	高橋　和夫（放送大学助教授）
2	戦うユダヤ人国家	第二次、第三次中東戦争を中心に中東状勢を歴史的に検証する。	同　上	同　上
3	アラブ世界の反撃	パレスチナ解放闘争の発生、そして第四次中東戦争と石油危機を論じる。	同　上	同　上
4	イスラエル社会の変貌	イスラエルの政治を建国以前から牛耳ってきた労働党の1977年の選挙での敗北の背景を考える。その理解の鍵は、イスラエル社会のエスニック構成の複雑さと変化である。	同　上	同　上
5	レバノン戦争の構図	イスラエルのレバノン侵攻を論じる。	同　上	同　上
6	ペレストロイカの影で	1985年3月にソ連の最高権力者となったゴルバチョフは国際政治の基本的な枠組みを変えた。その中東への影響を解説する。	同　上	同　上
7	インティファーダ	1987年に占領地で発生した民衆の一斉蜂起は、パレスチナ問題を封じ込めてきた国際政治の枠組みを揺すぶった。その衝撃を振り返る。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	湾岸戦争	湾岸危機と湾岸戦争が中東和平プロセス開始の伏線となった。その意味を考える。	高橋　和夫	高橋　和夫
9	和平プロセスの構図	何故に、これ程までパレスチナ側に不利な和平が始まったのか。との問題意識から和平プロセスを考える。	同　上	同　上
10	ラビン／その栄光と暗殺	パレスチナ人との和平の過程でラビンと言う人物の果たした役割は限りなく大きい。それゆえラビンの暗殺は和平プロセスの停滞につながった。そのラビンの重さを考える。	同　上	同　上
11	停滞する和平	ラビン暗殺後に行なわれた1996年の選挙を検討し、その後の和平の停滞を解説する。	同　上	同　上
12	スフィンクスの謎／シリアのアサド大統領	ハーフェズ・アサドと言う人物の作り上げたシリアの支配体制を紹介する。	同　上	同　上
13	革命はビートルに乗って／アラファト	パレスチナ人の指導者アラファトの生涯を跡付けながら、パレスチナ民族主義の過去と未来に思いを巡らす。	同　上	同　上
14	アメリカ／中東で一番重要な国	中東で圧倒的な存在感を誇るアメリカの中東政策を規定する国内要因に光を当てる。	同　上	同　上
15	取り残されしもの	難民の帰還の権利のように、和平プロセスの過程から切り離され、取り残されつつある問題に光を当てる。	同　上	同　上

＝ 日本政治思想史（’０１） ＝（R）

〔主任講師：平石 直昭（東京大学教授）〕

全体のねらい

主に徳川時代（西暦17世紀～19世紀半ば頃）の約二百五十年間の政治思想（広義）を扱う。①各時期の歴史的背景と関連させて主な観念の変化を跡づける。②代表的な思想家の内在的な理解と今日的な意味の導出に努める。③一般的な概説よりは、新しい見方や論点の提出に重点をおき、学生が自分の頭で考える参考にする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	キリシタン禁教の思想	まず講義全体の構成と時期区分を示す。ついで徳川社会の特徴をのべたのち、主題に入る。全国統一をめざす武士政権がどんな理由からキリシタン禁教と弾圧に至ったかをみる。秀吉段階と家康・秀忠段階の違いを分析し、とくに崇伝執筆の追放文を重視する。「神国」観念の歴史的な変化にもふれる。	平石直昭（東京大学教授）	平石直昭（東京大学教授）
2	天道思想の諸相	近世初期における幕府権力の自己正統化の施策（家康の国家的守護神化）、当時の支配的な言説だった「天道」思想が担っていた思想的な課題（キリシタン神学との対抗など）、新興儒学の代表者である惺窩や羅山について分析する。	同上	同上
3	新儒学の受容と構想	理学や心学など、新儒学の体系的な導入や構想の努力を、松永尺五、中江藤樹に即してみる。とくに一般庶民層まで包摂した普遍的な教説として儒教が強調された理由、尺五における二つの「気命」の区別、藤樹の「なりはひ」論などが分析される。朱子学の理気論についても概説する。	同上	同上
4	儒学思想の展開	近世前期における儒教をとりまく客観状況の変化（寺請制の一般化など）をみたのち、儒教古典や宋明学研究の進展と自分の生きる日本の現実への理解の深化の中で、儒教思想が再定式化されてゆく諸相をみる。蕃山の朝幕関係論、素行の士道論などが扱われる。関連して『葉隠』に即して、武士のエトスの変容をみる。	同上	同上
5	仁斎学の基本構成	山崎闇斎の朱子への傾倒と対照しながら、前期儒学の最高の達成として伊藤仁斎の儒学についてみる。陰陽と仁義の区別、性と道徳の区別など程朱学的な天人相関論の否定とともに「天道福善禍淫」の再定式化がもった意味、またその古義学の方法や論孟中心主義について分析する。	同上	同上
6	仁斎の鬼神論／徂徠の古文辞学	仁斎の鬼神・卜筮論を分析し、彼が三代聖王と孔子を区別し、政治と道徳の二領域を峻別していたことをみる。また伊藤東涯における歴史意識の変容にふれる。ついで独自の儒学を構築した近世中期の儒者荻生徂徠にうつり、今回はその古文辞学という方法論を分析する。	同上	同上
7	徂徠学の基本構成	近世思想史の転回点に立つ徂徠学を、その主要な側面に即して分析する。仁斎以上に徹底した天人相関論の打破、天の不可知化、聖人信仰、道の聖人制作説と窮理観の関連、聖人が建てた仮構としての鬼神観、「物」としての六経と「道」の区別、「格物致知」論などを扱う。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	石門心学論	近世中期における庶民層の社会的自覚の高まりを示すものとして石田梅岩の思想を扱う。一世代前の西川如見らの町人エトス論との比較、「市井の臣」や商業利益の正当化にみられる特徴、道徳・職業を共に天命で正当化する思想など。安藤昌益のユートピア思想にも言及する。	平石直昭	平石直昭
9	経世思想の展開	徂徠の制度改革論を紹介したのち、太宰春台・海保青陵に即して、彼の経世思想が近世中期～後期にかけてどう変容していったかをみる。商品経済に対する三者の対応の仕方の違い、春台に現われる利己的人間像の青陵での展開、商品売買を引照基準とした天理観の提出、世襲制批判の論理など。	同上	同上
10	徂徠学の影響の諸相	徂徠学が近世後期の思想界に与えた影響の諸相をみる。古文辞学の方法が蘭学・国学や富永仲基の仏典批判など儒学以外の分野に与えた影響、その「天地自然」の不可知観が、三浦梅園の自然哲学や本居宣長の国学、吉益東洞の古医方を促した面、また民俗学的関心の高まりを導いたことなど。	同上	同上
11	本居宣長の国学	契沖以来の歌学と荷田春満の皇国学が賀茂真淵で合流し宣長学の形成を準備する過程を概観したあと、初期宣長に即して、儒教に代る全体的思想像の基礎を彼がどう作っていったかをみる。主に契沖、真淵、徂徠からの影響や示唆　がどう組合わされているかを分析する。平田国学にも言及する。	同上	同上
12	西洋像の変遷	近世中期における特徴的な西洋像を新井白石、荻生徂徠、伊藤東涯、西川如見、西川正休についてみる。ついでそれらの西洋像が、近世後期に蘭学を介した理解の深化により修正変容される様子を前野良沢、杉田玄白、本多利明らに即してみる。	同上	同上
13	「鎖国論」とその影響	19世紀初頭に邦訳されたケンペルの「鎖国論」がいかに日本の鎖国策を正当化しているかを検討する。ついで幕末期に本書が日欧双方にとって議論の共通ベースになった経緯を考察し、「鎖国論」が日本の開国を促した皮肉な事情を分析する。	同上	同上
14	西欧の衝撃と日本の開国	日本・中国・朝鮮という東アジア三国のうち日本がいち早く近代化に着手した歴史的条件として、儒教の社会的存在形態の違い、支配エリート層のエトスの違い、旧体制の構造的相違、世界秩序像の相違などに即して、比較の見地から検討する。洋学者による西洋事情の紹介にもふれる。	同上	同上
15	幕末政治思想論	幕末の儒教的思想家をとりあげて、儒教的価値の多様性と多義性が西洋文明に対する評価の相違をうんだ事情を明らかにする。その上で後期水戸学の「国体」論、佐久間象山の自然科学観とその国民教育の必要論、横井小楠の公議輿論思想などを近代日本と関連させてみる。	同上	同上

＝ 西洋政治思想史（’０１）＝（R）

－視座と論点－

〔主任講師：川出　良枝（東京都立大学助教授）〕
〔主任講師：山岡　龍一（放送大学助教授）〕

全体のねらい

政治とは何か、特に、より善き政治とは何であり、それはどうすれば実現可能か、といった問いを、西洋政治思想の歴史を振り返ることで検討する。本講は思想の歴史的継承や文脈に留意しつつも、むしろいくつかの重要な論点を選び、その理解を通じて、西洋政治思想史の現代的意義を明らかにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	西洋政治思想とは何か	西洋政治思想史の流れを概観し、その学習の方法と意義を考える。	川出　良枝（東京都立大学助教授） 山岡　龍一（放送大学助教授）	川出　良枝（東京都立大学助教授） 山岡　龍一（放送大学助教授）
2	統治の諸形態	いかなる統治の形態が理想であり、また、現実に建設可能であるかという問題は、政治学という学問を古典古代のギリシアに成立させた最も本質的な原動力であった。当時において展開された政体論を紹介し、さらにそれが近代においてどのように受け継がれ、変貌を遂げたかをみていく。	川出　良枝	川出　良枝
3	法の支配	法の支配の思想を古代ギリシアにまでさかのぼりつつ、その展開を、自然法思想、立憲主義、法実証主義等に留意しつつ描く。	山岡　龍一	山岡　龍一
4	信仰の共同体	キリスト教思想の政治思想への影響を、人間観、権力観、共同体のイメージ等を中心に概観する。	同　上	同　上
5	権力	政治秩序はデ・ファクトな物理的強制力によって維持されるという発想が前面に押し出されたとき、近代の政治思想は離陸したと言われる。代表的な権力国家論をマキャベリやボダンの思想に探るとともに、ホッブズの登場により、個々人の合意によって国家に権力を委譲するという社会契約説の論理が成立したことの意味を探る。	川出　良枝	川出　良枝
6	所有権	所有権をめぐって、自由、私的所有の弁護、人格、市民社会等の問題がいかにして論じられてきたかを探る。	山岡　龍一	山岡　龍一
7	寛容と多様性	宗教的寛容を端緒に、寛容思想がいかにして発展してきたかを考察し、異質な価値を容認または肯定する思想が生まれてきた展開を描く。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	権力批判の論理	近代国家による権力の独占が進むにつれ、強大化した国家権力をいかにすれば制限できるか、という問題が立てられる。それは、一方では、支配の正統性を問い、正統性なき権力には抵抗すべきであるという抵抗権の議論として展開される。他方で、いかなる権力も必然的に堕落するという認識の下で、権力相互の均衡と抑制によって、権力の暴走を抑制すべきであるという権力分立の発想も生み出される。	川出　良枝	川出　良枝
9	個人の利益か、公共の利益か	私的欲望の追求は、必然的に公共精神の衰退を招くのか。個人の利益と結びつかない公徳心や愛国心はあり得るのか。政治に関わる市民（公民）の徳性をめぐる議論は、政治学にとって重要な問題であり続けた。市民の徳を高く評価する共和主義の伝統を概観するとともに、ある意味ではそれと真っ向から対立する１８世紀の文明社会論を検討する。	同　上	同　上
10	参加と統合	近代デモクラシーの成立過程で大きな画期となったのは、ルソーの一般意志論（人民主権論）の登場である。それにより、すべての人民の政治への直接参加が、政治的統合にとって不可欠であることが示される。しかし、ルソーの構想がそのまま実現することはなく、実際には、間接参加型（代表制）民主制が定着する。その一方で、ナショナリズムによって、人民（国民）を統合しようという新しい試みが急速に発展し、議論の主流を占めるようになる。	同　上	同　上
11	個人の尊厳	近代啓蒙思想が生んだ抽象的個人主義を一瞥し、それに対抗して生まれてきたロマン主義的個人の観念がもつ政治的意味を考え、「人権」思想の現代的可能性を検討する。	山岡　龍一	山岡　龍一
12	社会的連帯の基礎	資本主義の急速な発達がもたらした貧困や搾取、地域共同体や家族の変貌、男女や民族の間の差別といった社会問題がクローズアップされるにつれ、国家の役割の見直しが様々な形で訴えられるようになる。	川出　良枝	川出　良枝
13	正義と善	特に「公正／権利」と「効用／善」という観点に留意しつつ、正義論の展開を古代ギリシャから現代まで概観する。	山岡　龍一	山岡　龍一
14	政治と教育	善き政体に不可欠な善き市民の形成という問題が、政治思想史においてどのように論じられてきたかを概観する。	同　上	同　上
15	政治と歴史	国家や文明の盛衰に何らかの意味づけをなし、現代の意味を問い直すとともに、未来への指針を探ろうという「歴史」の叙述は、政治思想の一つの課題であった。古典古代の独特な時間意識からキリスト教の歴史意識、近代の「進歩」史観や唯物史観、保守主義の時間意識、社会ダーウイニズムの「進化」論、ヘーゲルに発する「歴史の終焉」論などを概観する。	川出　良枝	川出　良枝

＝現代経済学（'01）＝（TV）

〔主任講師：新飯田　宏　（　放送大学教授　）〕

全体のねらい

急激に変化している世界経済に対応して、現代の経済学も新しい発展を遂げつつある。この講義では、現代経済学の共有財産になっている基礎理論をできるだけ正確に説明し、現在重要性を増している問題のいくつかをとりあげて、経済学がいかなる解答を興し得るのかを示すことにしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代経済学の体系	現代の経済問題を説明する学問体系として、現代経済学がどのような分析方法をとっているのかを概説する。具体的には、理論モデルの性格、ミクロ分析とマクロ分析、実証的経済学と規範的な経済学、などの経済学の諸分野について説明する。	新飯田　宏（放送大学教授）	新飯田　宏（放送大学教授）
2	家計の行動	家計の選好を示す無差別曲線を用いて、消費者行動、労働供給、貯蓄行動について説明する。	同　上	同　上
3	企業の行動	利潤を最大化しようとする企業が、どのように産出量をを決定し、生産要素の需要量を決定するかを説明する。	同　上	同　上
4	競争市場の均衡と有効性	完全競争市場の均衡がどのような性格を持ち、役割を果しているのかを交換、生産、消費者主権の観点から説明する。	同　上	同　上
5	不完全競争と産業組織	市場構造のタイプにしたがって、独占・寡占・独占的競争のモデル分析を説明し、完全競争市場における成果と比較する。独占禁止法との関係についても明らかにされる。	同　上	同　上
6	市場の失敗と公共政策	いわゆる市場の失敗といわれる事例（外部性、公共財、自然独占）について説明し、公共政策による資源配分の改善の可能性について説明する。また情報の不完全性に基づく市場の失敗と、政府の失敗についても触れる。	同　上	同　上
7	経済循環と国民所得	一国経済の活動水準がどのように測定されるかについて説明し、GDP（GNP）をめぐるマクロ経済の循環図式と、マクロ経済学の主要課題が何かを明らかにする。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	国民所得水準の決定	いわゆる有効需要理論にしたがって、総需要と総供給の一致から、国民所得水準が決定されるモデルについて説明する。乗数理論、オープン・マクロの経常収支の決定についても触れる。	新飯田宏	新飯田宏
9	貨幣と利子・所得	国富を構成する実物資産と金融資産の経済活動における役割を説明しつつ、貨幣量と利子率の関係を明らかにする。貨幣市場の需給均衡を通して所得と利子率がどのような関係にあるかをＬＭ曲線によって説明する。	同上	同上
10	消費・投資と利子率	消費関数（ケインズ型短期消費関数とライフサイクル型長期消費関数）と投資関数について説明し、財市場の均衡条件からＩＳ曲線を導き、ＩＳ・ＬＭ両曲線によって所得と利子率の同時決定のメカニズムを説明する。	同上	同上
11	財政政策と金融政策	経済安定化政策として利用される両政策の手段について説明し、財政政策と金融政策の効果をＩＳ・ＬＭ曲線によって比較検討する。	同上	同上
12	インフレーション（デフレーション）と失業	貨幣供給・ＧＮＰ・物価の関係を明らかにしつつ、オークン法則・フィリップス曲線について説明する。インフレ予想と自然失業率、スタグフレーション、デフレスパイラルについての関係も明らかにされる。	同上	同上
13	国際収支と為替レート	経常収支に対する３つの考え方を説明し、それぞれに対応する経常収支調整政策を紹介する。また、経常収支の調整に国際協調は必要かどうかについても説明する。	同上	同上
14	経済成長	国民経済の供給能力が増大する要因を説明し、均衡成長経路の安定性、および貯蓄率・技術進歩率の影響について明らかにする。	同上	同上
15	景気循環	景気循環の型と周期についての通説を紹介し、景気循環発生のメカニズムを説明する。ついでケインジアン・マネタリスト、最近の新ケインズ派の景気循環についての考え方を比較することで、マクロ経済についての各学派の意見相違の核心を検討する。	同上	同上

＝ 国際経済学（’０１）＝（R）

〔主任講師：大山　道広（慶應義塾大学教授）〕

全体のねらい

経済原論の初歩的な知識を有する学生を対象として国際経済学の基本的な内容を講じる。国際分業、貿易政策、国際金融に関連する伝統的な理論を解説し、その現代的な展開に言及する。これらの理論が現実の国際経済にいかにかかわっているかについても理解を深めるため事例やデータをあげて説明したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	国際経済学の課題と方法	グローバリゼーションの時代にあっても、国際経済の最小単位としての国民経済の意義は失われていない。国際経済学は国家間の経済取引を分析する。国際貿易理論はその実物的側面に、国際金融理論はその金融的側面に光をあてる。その概要について述べる。	大山　道広（慶應義塾大学教授）	大山　道広（慶應義塾大学教授）
2	国際貿易の均衡	国際貿易理論の目的は、財・サービスの国際経済取引の決定要因とその経済的意味を解明することである。そのため、貨幣を捨象し、経常収支が均衡するような「長期均衡」に焦点を絞る。国際貿易理論の基本的なモデルを示し、貿易均衡の概念を説明する。	同　上	同　上
3	国際分業と労働生産性	国際貿易は、各国が比較的得意とする財の生産に特化した分業、すなわち国際分業に基づいて行われる。ここでは、労働生産性の国際的差異によって国際分業を説明するリカード・ミルの比較生産費説をとりあげ、比較優位、貿易利益の概念を明らかにする。	同　上	同　上
4	国際分業と要素賦存	希少な生産要素は労働のみではない。労働、資本などの生産要素の賦存状況は国ごとに異なっており、このこともまた国際分業の重要な根拠となる。ヘクシャー・オリーンの国際貿易モデルを解説し、国際分業、国内所得分配への含意を示す。	同　上	同　上
5	国際分業と収穫逓増	産業に収穫逓増の現象が見られるとき、比較優位の差異がなくても国際分業が行われ、貿易利益が得られる。収穫逓増に加えて製品差別化の概念を導入することにより、現代の国際貿易に重要な地位を占める産業内貿易を説明する。	同　上	同　上
6	経済成長とトランスファー問題	経済成長のスピードは国によって異なり、先進国と途上国の格差が問題になっている。これまで学んできた国際貿易の基本モデルを用いて、各国の経済成長や国際的な所得トランスファーが国際貿易にいかなる影響を及ぼすかについて検討する。	同　上	同　上
7	国際投資と技術移転	国際貿易はいわゆる商品貿易に限られるものではない。資本や技術も貿易の対象となる。国際投資は資本サービスや技術の貿易をひきおこす。ここでは、間接投資によって生じる資本移動と直接投資に起因する技術移転について、その要因と効果を検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	貿易政策の理論	政府が実施する経済政策を国内政策と貿易政策に分類し、その政策手段を説明する。貿易政策の代表的な手段である関税政策に注目し、それが国際交易条件、国内価格、ひいては国内所得分配に及ぼす効果を見る。これに基づいて輸入数量制限の効果を類推する。	大山　道広	大山　道広
9	資源配分と保護貿易	自由貿易論はいっさいの保護貿易政策の撤廃を主張する。その経済学的な根拠は、一定の条件のもとで自由貿易が世界の資源を最も効率的な利用を保障するという命題によって与えられる。これに対する保護貿易論の根拠を紹介し、批判的に検討する。	同　上	同　上
10	保護貿易の政治経済学	自由貿易論にしても保護貿易論にしても、単純に経済学的な根拠だけで理解できるものではない。そこには、国内の所得分配に関わるさまざまな政治的要因が絡んでいる。最近の保護貿易の政治経済学的分析について解説する。	同　上	同　上
11	国際金融と国際収支	実物的な財・サービスの国際移動が実現するためには、国際決済、すなわち代金の受け払いが必要である。国際金融を含む国際経済取引の総合的記録体系としての国際収支表の見方を解説する。最後に、国際収支の均衡とは何かを明らかにし、不均衡の調整メカニズムについて述べる。	同　上	同　上
12	為替レートの理論	各国はそれぞれ独自の通貨を発行している。異なる通貨間の交換比率、すなわち為替レートがいかに決定されるかは、国際金融の基本問題のひとつである。伝統的な購買力平価説、最近のストック均衡理論など、為替レート決定の諸学説を解説する。	同　上	同　上
13	マクロ経済と国際的連関	国際経済のマクロ的連関は、マクロ経済学のモデルに為替レート決定の理論を組み込むことによって分析できる。簡単な国際経済のマクロモデルを設定し、財政金融政策が為替レートや内外経済に及ぼす効果と国際収支の調整過程を考察する。	同　上	同　上
14	地域経済統合	最近の地域経済統合の「第２の波」に注目し、その動向を概観する。地域経済統合は、自由貿易地域、関税同盟、経済同盟など種々の形態、段階のものがある。地域経済統合のの理論的理解の基礎となる関税同盟の理論を説明する。	同　上	同　上
15	国際協調と貿易・金融体制	国際経済関係が緊密になるにしたがって、さまざまなレベルで国際的な政策協調が必要ととされるようななった。その基本的な理念を明らかにし、ＧＡＴＴ／ＷＴＯの生成、その経済的意義を論じ、国際通貨制度の過去・現在・未来を展望する。	同　上	同　上

＝ 経済学史入門（’０１） ＝（ＴＶ）

〔主任講師：根岸　隆（青山学院大学教授）〕

全体のねらい

経済学が発展してきた歴史を学ぶことにより、現代の経済学についての理解を確かめることを目的とする。現代経済学の観点から経済学の歴史を考察し、また、わが国の学者による研究成果にもできるだけ言及したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	経済学史をなぜ学ぶのか	主流派である新古典派のほかに、さまざまな学派が存在する現代経済学の状況について述べ、なぜ経済学の歴史を学ぶのかを考える。	根岸　隆（青山学院大学教授）	根岸　隆（青山学院大学教授）
2	経済学のあけぼの	経済学のあけぼのである重商主義（マーカンテイリズム）と重農主義とを概観する。ことに、後者におけるケネーの「経済表」に注目する。	同　上	同　上
3	Ａ・スミスと「諸国民の富」	重商主義を批判、「諸国民の富」により古典派経済学を創始したアダム・スミスについて概説する。ことにその経済成長論について検討し、マルサスの批判にも言及する。	同　上	同　上
4	リカードの巨視的分配論	古典派経済学の代表的理論家であるリカードの経済学、ことに資本家、労働者、地主の諸階級間の分配に関する理論を検討する。	同　上	同　上
5	比較生産費説	国際貿易に関するリカードの比較生産費説について概説　する。英国、ポルトガル、服地、ワインをめぐる有名な数値例についての疑問を検討し、さらにリカード理論による交易条件（国際的な財の交換比率）の決定可能性について考察する。	同　上	同　上
6	Ｊ．Ｓ．ミルと賃金基金説	古典派経済学の殿將であるＪ．Ｓ．ミルの経済学を概観する。古典派経済学における賃金基金説の意義をあきらかにし、ソートンの批判に対してミルがそれを放棄したわけを検討する。	同　上	同　上
7	マルクスと「資本論」	古典派経済学を継承しながら資本主義の歴史性を主張したマルクスの「資本論」を概観する。等価交換をつうじて資本が労働を搾取するというなぞを解明する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	利潤率低下法則	マルクスの利潤率低下法則を概説し、それを否定するわが国の柴田・置塩の定理を数値例によって解説する。	根岸　隆	根岸　隆
9	古典派経済学と限界革命	古典派経済学のまとめとして、現代経済学にとってその意義を検討する。さらに、1870年代における古典派経済学に対する限界革命、新古典派経済学の誕生について概説する。	同　上	同　上
10	クールノーの数理経済学	クールノーの先駆的な独占理論、寡占理論、完全競争理論についてのべ、その考え方が現代経済学におけるゲームの理論のそれにつながることをあきらかにする。	同　上	同　上
11	ワルラスと一般均衡理論	市場経済の原理を求めて新古典派経済学の中心的な理論である一般均衡理論を展開したワルラスと、その後継者であり厚生経済学の基本定理（競争的資源配分の最適性）に関する重要な概念を提示したパレートの経済学を説明する。	同　上	同　上
12	ジェボンズと裁定行動	ワルスラとはことなった方法で市場均衡を解明したジェボンズとエッジワースのアプローチ、ことに有名なエッジワースのボックスダイアグラムについて説明する。	同　上	同　上
13	メンガーとオーストリア学派	メンガーにはじまるオーストラリア学派の現代的意義を論じる。また、ベーム・バヴェルクとシュンペーターの資本利子に関する論争など新古典派経済学にたいする貢献について検討する。	同　上	同　上
14	マーシャルとケンブリッジ学派	実際の経済問題を解明するための分析用具を開発したマーシャルの経済学、ことに消費者余剰分析による経済厚生論を概説する。	同　上	同　上
15	ケインズの「一般理論」	ケンブリッジ学派の自己批判であり、現代マクロ経済学の出発点であるケインズの「一般理論」を概説する。また、ケインズと経済学史の関係についても考察する。	同　上	同　上

＝メディア論（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：吉見　俊哉（東京大学教授）〕
〔主任講師：水越　伸（東京大学助教授）〕

全体のねらい

私たちは、現代の急速なメディア状況の進展と、それに伴うコミュニケーションや文化の混沌とした変化を、どのようにとらえていけばいいのであろうか。この講義の目的は、そのような視座を手に入れるために、私たちの社会とメディアの関係について歴史社会的な展開、現代的な状況、理論的なアプローチの３つの側面から検討を加えることにある。すなわちここでは、まず１７、１８世紀における印刷術と書物の普及から２０世紀末のサイバースペースの展開にいたるまでを、社会や人間を捨象して情報技術の可能性ばかりを説く議論からも、情報技術やメディアのあり方を固定化した議論からも距離を取りつつ、情報技術、メディア、社会、人間の相互連関のなかでたどっていく。同時に２０世紀末のメディアの状況を、デジタル化やモバイル化、グローバル化やメディア環境化といった諸々の動きとをかかわらせながら考えていく。さらにまた、そうしたメディアをめぐってこれまでなされてきた諸々も学問的なアプローチについて紹介していく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	メディア論とは何か	イントロダクション。これからメディア論において何を、どのように学んでいくのかを示す。メディアの歴史、メディアの理論、メディアの現在を３つの柱としてテーマを解説していく、吉見と水越の対論形式。	吉見　俊哉（東京大学教授） 水越　伸（東京大学助教授）	吉見　俊哉（東京大学教授） 水越　伸（東京大学助教授）
2	活字メディアの時代	印刷術の発明にはじまり、その印刷術を用いてどのようなニュース・メディアが誕生していったかを歴史的に明らかにする。日本や西欧諸国の具体的な活字メディアを手がかりに、メディア論的な視点から、ジャーナリズムの発展をとらえ返す。	吉見　俊哉	吉見　俊哉
3	映像文化のはじまり	パノラマや写真の時代から映画の時代への展開課程や、１９世紀における視覚の革命的変化、映画が発明家たちが想定したものとは異なる方向で大衆的に発展していった過程などを、歴史的素材を手がかりに論じていく。	同上	同上
4	電話する社会の誕生	電話と蓄音機が、声を複製するメディアとしてどのように登場し、いかにして人々にイメージされてきたのか。またそれがどのように変化していったのかを考察する。ラジオのような電話や電話交換手の話、おしゃべり的な電話の利用など、当時の日常的なメディア現象を取り上げていく。	同上	同上
5	オーディエンスのいる場所	ラジオやテレビが一般の家庭空間の中に、どのようにして浸透してきたのか。その中でこれらのメディアの家電的なイメージが形成されてきたプロセスや、そのプロセスとジェンダーの関わりなどを中心に、ラジオとテレビを受けとめていった社会の変化を明らかにする。	同上	同上
6	日本型マスメディアの確立	マスメディアの政治経済的体制、構造について学んでいく。第二次世界大戦以降、日本のマスメディアは国民国家の枠組みと不可分に発達してきたが、ここではとくに民間放送の発達過程を素材としつつ、その特色と現代的課題を浮き彫りにしていく。	水越　伸	水越　伸

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	メディア論の系譜Ⅰ	メディア論に大きく関わる、行動主義的、機能主義的なコミュニケーション論、マスコミュニケーション論の系譜を２０世紀思想史の広い文脈の中でとらえ返していく。おもに２０世紀前半からアメリカで勃興したマスコミュニケーション論と、その日本での展開課程について、当時のラジオ、テレビといったメディア状況と関わらせながら跡付け、メディア論との連続性と断層を対談形式で探っていく。	水越　伸 吉見　俊哉	水越　伸 吉見　俊哉
8	メディア論の系譜Ⅱ	マスコミュニケーション論に対抗するメディア、コミュニケーションに関する議論の流れを明らかにしていく。アドルノらの文化産業論的、政治経済学的な議論、マクルーハンらのメディア技術をめぐる議論、そして英国カルチュラル・スタディーズなどについて、対談形式で探っていく。	吉見　俊哉 水越　伸	吉見　俊哉 水越　伸
9	メディアとしてのコンピュータ	第二次世界大戦前後から登場したデジタル式コンピュータの発展と変容の過程を、おもに社会的、文化的観点からとらえなおしていく。巨大コンピュータの時代から、６０年代以降のパーソナル・コンピュータ、インターネットの展開などについて、さまざまな社会的要因のダイナミズムの中で明らかにしていく。	水越　伸	水越　伸
10	巨大メディア資本の展開	８０年代以降、欧米で顕著になってきたメディアの産業化、それに伴う巨大メディア資本の出現と現代的状況を明らかにしていく。巨大メディア資本の展開が、グローバル化、デジタル化の中で、人々のメディア意識や文化様式にどのような影響を与えるかに注目する。	同　上	同　上
11	メディアリテラシーの回復	メディアリテラシーは、人々が批判的にメディアを読み解き、能動的にメディアで表現していくための能力を意味し、９０年代以降、世界各地の学校教育や市民運動、メディアの中で注目されてきている。デジタル情報化が進む現代において、私たちがいかにしてメディアとの関係を取り結んでいけばよいか、メディアリテラシーの観点から考察していく。	同　上	同　上
12	新しいメディア表現者の台頭	９０年代以降、新しいメディアの勃興とともに、従来のマスメディア事業体とは異なる領域から、人々がさかんにメディア表現活動を始めている。このことを、メディアリテラシーの獲得、社会文化の変容などと関わらせて明らかにしつつ、具体的な事例を通じて、その可能性と課題を論じていく。	同　上	同　上
13	ネットワーク化するメディア社会	メディアの環境化、ネットワーク化が進む社会の中で、市民と国家、地域の関係性が大きく変わりつつある。ここではメディア・ネットワークに媒介された具体的な市民活動を取り上げつつ、私たちの社会における個人、共同体、メディア、コミュニケーションなどのあり方の変化について、探っていく。	吉見　俊哉	吉見　俊哉

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	グローバル情報化と文化複合	１９８０年代以降のグローバル情報化のプロセスを、メディア論の視点から考察していく。ここではとくに、香港の映画、ポップスなどエンターテイメント産業の発達と、アジアのメディア文化の変化に注目し、関係者などへのインタビューを素材として対談形式で授業を進める。	吉見　俊哉 水越　伸	吉見　俊哉 水越　伸
15	メディアの過去・現在・未来	まとめの回。メディア論に対する歴史社会的、現代的、そして思想的なアプローチのあらましを復習する。またインターネットやグローバリズムなど現代的な課題について検討を加える。２１世紀初頭を生きる私たちにとって、メディア論とはなにか、メディアといかに関わっていけばよいかなどについて、対談形式で探っていく。	水越　伸 吉見　俊哉	水越　伸 吉見　俊哉

＝経　　営　　学＝（ＴＶ）

〔主任講師：森本　三男（白鷗大学教授）〕

全体のねらい

経営学とはどのような学問であるか、何を問題にするかを明らかにする。ここでいう経営学は、企業を対象にした実践科学である。実践とは理論と実際を統合する主体的行為、平易にいえば当事者の立場に立ってみることをいう。実践科学としての経営学では、企業の構造と行動がどのような行為原理に立っているかを明らかにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	経営学の性格と課題	経営学が社会科学の一部であることは明白であるが、その対象や性格については、見解が分かれている。ここでは、組織体一般ではなく企業を対象にする経営学について、その性格（実践科学）と課題（構造と行動に内在する原理の解明）を説明する。	森本三男（白鷗大学教授）	森本三男（白鷗大学教授）
2	企業形態と企業体制	企業のために用意されている法的制度を、企業法律形態、略して企業形態という。代表的企業形態は株式会社であるが、それは元来成長した企業のための制度であるにもかかわらず、そのようには利用されていない。そのため、実態の発展を企業体制として問題にする。	同上	同上
3	現代企業の特質	現代企業とは、単に現代に存在する企業という意味ではなく、成長・発展をとげて経営的に高度と見なされる段階に到達している企業をいう。それは、所有と経営が分離し、経営上の自主性をもち、１個の社会的制度として環境主体に責任を負う存在となっている。	同上	同上
4	現代企業の構造	現代企業は、組織・人間的側面（経営組織）と計数・資本的側面（経営経済）をもつ。またそれは、動的には、投入・産出システムとして生産を行い、環境適応を通じて成長・発展する構造をもつ。そのためには、関係者の貢献を配合し、成果を配分する必要がある。	同上	同上
5	経営理念と経営文化	経営行動を通じて実現しようとする思想・信条・哲学を、経営理念という。それは、目的の価値的側面である。それには、儒教などの伝統色の強いものと、企業の制度的存在を反映した現代的なものとがある。経営理念を基底とした各企業の個性が、経営文化となる。	同上	同上
6	経営者の役割とコーポレート・ガバナンス	経営行動の核は経営者である。経営者は、イノベーションを推進し、経営理念を実現させるリーダーシップを発揮し、関係者の利害を調整して成果を配分しなければならない。現代企業の経営者は機関となっているから、そのあり方が役割に適合している必要がある。	同上	同上
7	経営の目標	目的の具体的状態を示すものを経営目標という。その内容と数は、企業の発展と共に多様化する。つまり単一目標から多目標に移行し、後者では目標体系が形成される。また、これと共に目標の達成水準は、極大化原理から満足化原理へと変化する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	経営戦略 (1) 製品・市場戦略	現代企業の特色は、戦略を軸にした経営すなわち戦略的経営を行うことにある。経営戦略の中で最も重要なものは、企業がどのような製品・事業についてどの市場で活動するかを選択することである。このような製品・事業戦略の策定について、枠組みを紹介する。	森本三男	森本三男
9	経営戦略 (2) PPM	製品・市場戦略を前提にして、各種の個別戦略が策定される。まず必要なものは、特定の製品・市場に関する競争戦略である。その他必要に応じて、リストラ（事業分野再構築）、リエンジニアリング（事業遂行方法の再形成）、企業の買収、戦略的提携をはかる。	同上	同上
10	現代企業と経営組織	組織構造に関する代表的な類型を、組織形態という。組織は戦略を遂行するためのシステムであるとの観点に立てば、特定の戦略には特定の組織形態が適合していなければならない。このような適合についての考え方と現実の展開について、説明する。	同上	同上
11	現代企業と経営経済	経営の経済現象に関する原理をまとめたものに費用理論がある。それにも伝統的な収益法則的費用理論と、現代的 な適応的費用理論とがある。両者の中から環境適応的操業，利益管理のための損益分岐点に関する部分、規模や範囲の経済に関する部分などを説明する。	同上	同上
12	経営の国際化	経営の国際化は、資材・製品の輸出入に始まり、経営資源そのものの国際的移動である現地生産（直接投資）からグローバル経営へと進展する。このような国際化は、企業の組織や管理にこれまでにない問題を生じさせる。それらを経営文化に関連させて検討する。	同上	同上
13	意思決定と情報	すべての経営行動は、意思決定を契機として展開される。行動の良否は意思決定によって左右される。各種意思決定の方向を整合させ、意思決定の質を高めるには、そのプロセスと技術の解明が欠かせない。また、それに関連して情報という資源が問題となる。	同上	同上
14	生産性と付加価値	生産のために必要な関係者の貢献を持続的に確保するには、彼らに誘因を提供しなければならない。その源泉は、資源の効果的使用による成果である。そこで生産性の向上が問題になる。生産性にはいろいろな指標があるが、付加価値が成果指標として最適である。	同上	同上
15	企業の社会的責任	社会的制度となっている現代企業は、各種の利害者集団（顧客、株主、従業員、取引先、地域社会など）の多様な期待にこたえなければならない。その内容は、法的責任、経済的責任のみでなく、それを超えた自発的な社会貢献にまで及び、遂行の評価も問題となる。	同上	同上

＝ 経営工学総論（’００）＝（R）

〔主任講師：辻　正重（青山学院大学教授）〕

全体のねらい

経営工学は企業を代表とする「目的をもった組織」の経営問題を対象として、意思決定やシステム設計などを合理的に行うための汎用的な問題解決技術学である。本講はそのような立場で講義する。また入門書としてなるべくやさしく、そして総論としてなるべく広く経営工学を概観する。さらに日常生活における問題解決にも役立つよう講義する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	経営工学入門　1	経営工学とは、いかなる学問なのかを理解してもらうために、どのような問題をどのようにして解決していくのかを、簡単な問題とその解決事例を通して解説する。問題事例は、第3章以降で展開される基礎になる。	辻　正重（青山学院大学教授）	辻　正重（青山学院大学教授）
2	経営工学入門　2	1章を踏まえて、経営工学的な問題解決法で重要な 1）モデル、2）解決のいろいろなアプローチについて解説する。そしてモデル、アプローチを含めて問題解決の一般的な手順について解説する。	同　上	同　上
3	経営工学の発展	テーラー・システム、フォード・システムを出発点としたアメリカでの経営工学の展開、ＴＱＣ、ジャストインタイム、ＴＰＭ、小集団活動を中心とした日本での経営工学の展開を述べる。	熊谷智徳（名古屋工業大学名誉教授）	熊谷智徳（名古屋工業大学名誉教授）
4	経営の成り立ち	企業の特色、企業の経営について解説した後、企業の目的(利潤目的、社会目的)、企業の活動(階層的多重サイクル)、経営システム（組織構造、制度、情報システム）について概観する。	辻　正重	辻　正重
5	企業構造創造サイクル	企業ライフ・サイクルとプロダクト・ライフサイクルの関係を説明し、企業の構造を決める長期的ビジョン、企業理念、事業コンセプト、企業分析、環境分析、事業展開戦略等々の戦略策定の手順・方法を解説する。	同　上	同　上
6	マーケティングと製品開発	企業の構造的枠組みの下で、企業環境の動向、市場ニーズを把握しながら、技術開発、製品開発を行うが、そこでの課題と問題解決の考え方、解決のプロセス、解決方法を解説する。	同　上	同　上
7	工場計画と生産準備	オペレーショナルな生産活動が行われる前段階として工場計画、工程設計、生産準備、物流システム設計など枠組み作りが行われるが、そこでのそれぞれの課題と解決方法を解説する。	玉木欽也（青山学院大学教授）	玉木欽也（青山学院大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	生産管理	生産管理の目的、生産計画と統制、資材材管理の目的、在庫管理、統合的生産管理システムの狙い、ＪＩＴ、ＭＲＰ、製販物統合化管理システムなど、生産管理の課題と解決方法を解説する。	玉木欽也	玉木欽也
9	品質管理	品質管理における顧客や品質の基本的な考え方と最近の品質管理の動向について概説する。その上で、品質管理における問題解決の方法としてＱＣストーリを説明し、ＱＣストーリでよく利用される手法を解説する。	石津昌平（青山学院大学助教授）	石津昌平（青山学院大学助教授）
10	価値的管理	企業の目的と財務諸表との関係を説明した後、日常業務活動と価値的管理（経営分析、利益計画、子算・原価管理）、製品開発と価値的管理（ＶＡ）、企業構造創造と価値的管理（投資法定法）を説明する。	辻正重	辻正重
11	信頼性工学	信頼性工学につて概説する。その中で信頼性の3大要素である（1）耐久性、（2）保全性、（3）設計信頼性について、その考え方と定量化、作り込みの方法を解説する。	鈴木和幸（電気通信大学助教授）	鈴木和幸（電気通信大学助教授）
12	プロジェクト管理	プロジェクト・マネジメントの目的・課題、プロジェクト・マネジメントの対象、プロジェクト組織、プランニングとＷＢＳ、ＰＥＲＴ、プロジェクト・コントロールとパフォーマンス・メジャメントなどについて解説する。	辻正重	辻正重
13	経営情報システム	経営情報システムの展開、ＥＤＰＳ、ＭＩＳ（経営情報システム）、ＤＳＳ（意思決定支援システム）、ＥＳ（専門家システム）、ＥＳＳ（経営トップ支援システム）、バーチャル・コーポレーションなどを解説する。	同上	同上
14	情報システム設計法	情報を上手に表現し、効率よく処理するための基礎要素であるデータ構造についてアルゴリズムとともに解説する。またこれらデータの管理方法としてのデータベータについて、その設計法を中心として述べる。	坂元克博（青山学院大学助教授）	坂元克博（青山学院大学助教授）
15	数理的方法	問題が数学的なモデルとして扱える場合に、確定モデルの典型的な例として線形計画モデルを取り上げ、その定式化と解法について説明する。次に不確定モデルの代表として待ち行列理論について言及する。	同上	同上

＝ 生産性科学入門（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：小林　和生（帝京科学大学助教授）〕

全体のねらい

生産性の視点から我が国の国際社会における地位を理解するとともに、生産性概念を追及する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生産性科学の誕生と課題	生産性科学の誕生の由来、系譜について概説し、なぜ今生産性が重要であるか述べる。とりわけ経済学と生産性科学の違いに焦点をあて、この学問の課題を明確にする。	小林和生（帝京科学大学助教授）	小林和生（帝京科学大学助教授）
2	生産性科学の対象と方法－その1	生産性科学の対象である産業社会の理論的規定を与える。すなわち、人間－人関係と人間－自然系の交差構造として産業社会が構成されていること。またその構造の詳細を明確にする。	同上	同上
3	生産性科学の対象と方法－その2	多元的要因が複雑に関連して形成されている産業社会の分析のためのフレームワークとしてのＳ－Ｆスキームについて解説する。	同上	同上
4	国民の豊かさ	生産性概念の根本である国民の豊かさを規定する。そのもとで、その測定指標として国民経済福祉を定義する。	同上	同上
5	国民経済福祉の変化とその要因	国民経済福祉の変化の要因分析体系を示し、わが国の国民一人当たりのＧＤＰの変化とその要因を分析する。	同上	同上
6	国民経済生産性と部門生産性	生産部門別の生産性の変化と国民経済生産性の関連について分析する。	同上	同上
7	企業生産性と付加価値	付加価値概念を考察する。そのもとで国民経済の構成単位である企業の主体性と国民経済への寄与について明らかにする。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	付加価値生産性と総生産性	企業水準へ生産性概念を展開するうえで、付加価値労働生産性は限界がある。より収益性に密接な概念である総生産性について解説する。	小林和生	小林和生
9	付加価値労働生産性格差の形成とその要因	企業間は付加価値労働生産性の格差が生じる原因を追求する。	同上	同上
10	総生産性と収益性	企業の収益性変化の要因分析枠組を示す。	同上	同上
11	資源・環境問題と生産性	資源・環境問題のあり方と、生産性向上運動への示唆について考える。	同上	同上
12	国民の豊かさの国際比較－その1	国民の豊かさを国際比較するための準備として、通貨の換算問題について考察し、国際比較の枠組みを示す。	同上	同上
13	国民の豊かさの国際比較－その2	統計資料を活用して、国民経済福祉、国民経済生産性および部門レベルの生産性の国際比較を行う。	同上	同上
14	プロダクティヴィティ・スキーム	生産性推進運動体系であるプロダクティヴィティ・スキームの歴史的展開と生活の質（ＱＬ）について説明する。	同上	同上
15	情報化社会と生産性	産業の情報化にともなう産業社会の今後のあり方と生産性について考察する。	同上	同上

＝生産経営論＝（TV）

〔主任講師：熊谷　智徳（名古屋工業大学名誉教授）〕

全体のねらい

生産は価値の産出である。これによる社会への寄与を永続させていく生産経営について価値への条件である品質と時間とコストの本質を探り、それを生み出すシステムの構造を体系的にとらえる。日本が発展させた世界的生産経営方式の特質を明らかにする。とくに中国の工業とアジア工業圏の進展において、日本企業の国際展開と創造語術開発の生産の重要性に視点をおく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	経営と生産	経営の目的、利潤目的と社会目的、主観目的と客観目的、経営理念、価生産、生産価値条件・品質Q・時期D・コストC	熊谷智徳（名古屋工業大学名誉教授）	熊谷智徳（名古屋工業大学名誉教授）
2	品質と時間とコスト	品質の総構造、機種品質・使用性・社会性・信頼性・改造性、市場期と品質変化。リードタイムの構成、ジャスインタイムの原理、生産コストの構成と低減。	同上	同上
3	生産システムの成り立ち	生産システムの性能と社会性と変化、工程と作業と管理、設備と労働、自動化、開発と就職と転職。	同上	同上
4	工程と作業	工程視点、工程のなりたち、工程のQDC能力、工程設計と分析	同上	同上
5	生産経営の成り立ち	価値条件QDCとシステム要素MFWと管理過程PDOSの3元マトリックスの構成生産経営と生産管理、開発、製造、マーケティング	同上	同上
6	生産経営の発展	発展の構造、20世紀前半期のアメリカの発展、テーラーシステム・フォードシステム、20世紀後期の日本の発展TQC、JIT、TPM小集団活動	同上	同上
7	生産経営の変化	産業社会変化、工業貿易ライフサイクルと貿易摩擦、市場ライフサイクル、立地寿命と空洞化。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	品質とＴＱＣ	製品開発と経営、製品開発の体制、自動販売機の新製品開発の実際。総合的品質管ＴＱＣ	熊谷智徳	熊谷智徳
9	製品開発と自動化	長期市場力の製品開発による高度自動生産自動車要素機能品の開発と自動生産の実際、食品製品開発と自動生産の実際。	同上	同上
10	ジャストインタイム生産	ジャストインタイム生産の発展、フォードの同期生産、トヨタのジャストインタイム生産の実際。	同上	同上
11	生産と設備	生産システムの設備化の進歩、管理の自動化、設備の開発と就役の開発と転化、保全管理、ＴＰＭ。	同上	同上
12	生産と人間	技術開発、労務保全、作業の人間性向上日本の労働倫理の検証と革新。	同上	同上
13	中国の工業化と日本工業	中国の工業化の進展、アジア業圏と日本の役割。中国への欧米企業の進出。 実例：上海のフォルクスワーゲン（独）社	同上	同上
14	野本工業の中国展開	モーターサイクル日系企業の実際（重慶）。 日本の中小企業の中国展開の実際、品質と原価の中国生産経営の問題点と向上方策。	同上	同上
15	経営と社会	生産経営の社会性課題の構成、日本に於ける内的社会性の優位と外的劣位の構成、将来方向。	同上	同上

＝ 生産の設備化と経営（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：熊谷　智徳（名古屋工業大学名誉教授）〕

全体のねらい

設備管理は、基盤管理である。基礎を良くすれば、品質・時間・コストの良い成果が結果づけられる、という思想に基づく管理である。それは戦略から日常保全に至るまで、多元な構造をもっている。本講は、狙いを設備経営の体系化においた。生産と経営からとらえることである。それは、実践者が経営における仕事の位置をとらえ、進路を見い出すのに役立つ。そして論理の基礎を与えることと、応用力を高めることにねらいをおいた。技術革新の設備の適正な開発と、生産への活用を意図している。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	設備	設備とシステムは、用役への性能をもち、性能を発揮する構造をもち、性能と構造が就役によって変化する。変化への適応が保全である。	熊谷智徳（名古屋工業大学名誉教授）	熊谷智徳（名古屋工業大学名誉教授）
2	経営と生産と設備	設備は生産のために、生産は経営のために、経営は社会のためにある。社会寄与の経営目的に対して、生産システムと設備の開発と運営は、一貫して合目的に進めなければならない。	同上	同上
3	生産経営と設備管理の発展	今世紀前半は主にアメリカで、後半は日本も発展に寄与してきた。発展の法則と21世紀の方向を探る。	同上	同上
4	設備経営と設備管理	開発から生産就役、次代転化の設備生涯、累代生涯に対する設備経営。就役過程の保全としての設備管理。	同上	同上
5	製品開発と設備開発	生産経営の開発段階は、製品開発に始まって設備開発に終る。市場への価値産出の製品開発の方策と設備開発。	同上	同上
6	保全	設備とシステムの内的劣化への発現保全、外的変化への改良保全。信頼性、保全性、可動性。	同上	同上
7	保全作業	保全作業の人依存性。保全の品質・時間・コストの構造、作業の分析と改善方法、現地作業の特徴と問題点、生体的悪条件と精神的好条件の特質。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	技能開発	保全の高技能者には10～20年を要する。基本技能養成、ＯＪＴ、評価、処遇。設備革新と技能生涯開発。	熊谷智徳	熊谷智徳
9	事例研究　1	自主保全。生産変化への設備適応。ＪＩＴ適応の設備システム。製品と生産革新の設備革新。半導体生産の先端設備体制等の事例と論理。	同上	同上
10	事例研究　2		同上	同上
11	事例研究　3		同上	同上
12	事例研究　4		同上	同上
13	労務保全	仕事への能力向上と人への仕事の好適化。その均衡実現のＱＷＬ（仕事人生の質）の、現業職の向上と管理専門職の方策。	同上	同上
14	生産経営革新のＴＰＭ	設備化の下に日本で発展したＴＰＭ（総合的生産保全）が、生産経営革新へ進む方向と内容。	同上	同上
15	設備化と社会性	公害、環境、景観破壊、リサイクルなど高度工業化による社会性問題の構造、日本の問題点、将来方策。 身体障害者の生産工場（放送）。	同上	同上

＝ 産業と労使の関係（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：神代 和欣（放送大学教授）〕

全体のねらい

現代社会は、企業社会であり、雇用社会である。多くの人は、企業に雇用され、一定のルールに従って働かなければならない。他方、企業は市場の競争に耐え、利潤を上げなければならない。そこに労使の葛藤が生まれる。葛藤の解決には、経済の論理や労働の取引に関する法の枠組みを理解し、労使の経験に学ぶ必要がある。国際比較の視点も欠かせない。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	企業の発展と雇用社会	A．サラリーマン社会（雇用社会の主役：企業とサラリーマン。職業の自由と失業の危険） B．「使用者」とは誰か（管理職の役割） C．離職・発言・我慢（契約の自由と職業選択の自由、労働条件の最低限規制、離職と発言、我慢と忠誠）	神代和欣（放送大学教授）	神代和欣（放送大学教授）
2	工業社会から情報社会へ	A．産業革命とペティ法則（工業化、需要の所得弾力性、就業構造の変化） B．ホワイトカラー化（脱プロレタリア、ホワイトカラー） C．情報通信革命（第三次産業革命、ＭＥ革命、デジタル革命）	同上	同上
3	モノづくりのシステム	A．テイラー・システムとフォード・システム（資本と経営の分離、テイラーの科学的管理法、フォードシステム） B．ホーソン実験と人間関係論（労働者のやる気を起こさせる法） C．トヨタ生産方式（ジャスト・イン・タイム、協力企業との長期的取引関係）	同上	同上
4	雇用関係	A．職業選択と採用の自由（職業選択の自由、企業の採用・解雇の自由） B．雇用形態の多様化（非正規雇用の拡大、「終身雇用」解雇権濫用の法理、長期雇用の経済的合理性、有期雇用パートタイム雇用、派遣労働） C．飴と鞭（労働規律、能率刺激の方法、解雇と懲戒処分）	同上	同上
5	生産性の向上と成果配分	A．付加価値を生み出す（粗付加価値と純付加価値、ＧＮＰ、付加価値を増やす方法） B．技術革新（生産性向上の方法、第二次世界大戦後の主な技術革新、技術進歩の意義） C．成長成果の配分（「合理化」反対争議の頻発、生産性向上運動、成果配分の原則、労働分配率）	同上	同上
6	キャリア形成	A．採用と配置（新規就業者、新規学卒就職者、教育投資、採用の自由、離職者） B．教育訓練と技能形成（企業内技能養成と内部昇進、ホワイトカラーのキャリア、出向・転籍） C．査定と昇進（年功序列から能力主義へ、年功賃金の修正）	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	労働と余暇	A．週40時間労働制（標準労働日、変形労働時間制、みなし労働と裁量労働制） B．所得と余暇の選好（ミクロ経済学の労働供給理論、労働時間短縮の理論的基礎） C．労働時間短縮の推移（労働時間短縮の国際比較、残業時間、年次有給休暇）	神代和欣	神代和欣
8	報酬の体系	A．賃金とは何か（労働の需要、労働の供給、均衡賃金率） B．賃金制度（賃金形態、賃金体系、年功賃金の修正、定年延長と年功制度の改革、大競争時代への対応、年功賃金の修正はどこまで進んだか、賞与） C．退職金・企業年金（退職一時金、企業年金）	同上	同上
9	労働組合との関係	A．民主的労使関係の枠組み（市民法と団結禁止、市民法から労働法へ、産業民主主義、労働組合の法的保護、正当な争議行為、争議行為、争議行為の制限、不当労働行為） B．対立と協調（労働運動とイデオロギー、漸進的改良主義、組合分裂、労使協調、労働組合組織率の低下） C．職場の労使関係（企業別組合の特色、個別的労使紛争処理）	同上	同上
10	日本的雇用慣行	A．日本的雇用慣行とは何か（語源、起源、その経済的合理性） B．日本的雇用慣行修正の方向（長期雇用のメリットとデメリット、日本的雇用慣行修正の方向、修正の実態） C．賃金・処遇システムの変化（年功賃金の修正、退職金制度の見直し）	同上	同上
11	団体交渉の経済的効果	A．労働組合の交渉力（労働供給の制限、労働需要曲線の位置、需要の価格弾力性、労働需要の弾力性、マーシャルの4条件） B．春闘方式（ベースアップと定期昇給、春闘相場の形成生産性基準原理、賃金関数） C．人員整理・合理化その他の交渉事項（団体交渉事項、主要な労使交渉の争点の推移、21世紀の労使課題）	同上	同上
12	男女の雇用機会の均等	A．女性の職場進出と性差別（欧米の女性解放、男女雇用機会均等法の成立） B．女子労働者の保護と平等（戦後改革とその限界、判例の積み上げ、均等法の概要、改正男女雇用機会均等法の概要、結婚・育児による仕事の中断・引退） C．男女賃金格差（裁判による是正、わずかしか縮小しない男女賃金格差、パートの賃金）	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
13	高齢化社会の労使課題	A．人生80年時代の生き方・働き方（高齢化、少子化の進展、定年制と高齢者の雇用機会） B．老後の所得保障（老後の所得源泉、所得代替率、わが国の公的年金制度、社会保険方式と保険料負担、年金の水準） C．高齢者医療と介護（医療保険制度、老人医療、介護保険）	神代和欣	神代和欣
14	大競争時代の労使の在り方	A．貿易摩擦の激化と海外現地生産の拡大（変動為替相場制への移行、わが国の国際競争力の増大と輸出品目の構成変化、対米貿易摩擦の激化と日本企業の対応、海外現地生産の拡大、国際調達の増加） B．雇用機会の海外流出（海外雇用の増加と国内雇用の減少、海外直接投資の雇用効果） C．産業空洞化は避けられるか（空洞化の定義とその要因、モノづくりの人材育成、エンジニアリング・ソフトウエアの活用、マクロ経済の回復と成長）	同上	同上
15	外国人労働者問題	A．バブル時代の人手不足（最初の引き金、改正入管法、外国人労働者の就労実態） B．到来する若年労働力の不足時代（加速する若年人口の減少、価値観の変化、経済成長の見通し） C．増加する国際労働移動とその対応（規制を強化するアメリカ、苦悩する西ドイツ、ＥＵの域内移動、アジアの人口圧力）	同上	同上

＝ マーケティング論（’９９）＝（R）

〔主任講師：田村　正紀（神戸大学教授）〕

全体のねらい

マーケティングは、顧客創造を担当する企業活動である。マーケティング活動がどのように展開されるのか、また、その活動の市場における有効性はどのように決まるか。この講義の狙いは、この問題に答えるための、マーケティングの基本的な考え方と知識をできるかぎり実践的に講義することである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	マーケティングとは何か	マーケティングという企業活動は、どのような課題を担って生まれてきたのか。その誕生の社会経済的条件を展望しながら、マーケティングにおける、企業と市場のかかわり合いを図式化する。	田村正紀（神戸大学教授）	田村正紀（神戸大学教授）
2	マーケティング発想の3つの視点	マーケティングの導入によって、市場を見る企業の視座はどのように変わるのか。それを流通機能の代替性、顧客需要の異質性、個別市場の構想、の3つの視点から明らかにする。	同上	同上
3	マーケティングの基本戦略	マーケティングの基本戦略は、マーケティングの基本指向であり、かつマーケティング活動の基本形式である。最終顧客指向、ブランド化、流通組織化という基本戦略を取引概念との関連で講義する。	同上	同上
4	マーケティング意思決定過程	マーケティング意思決定過程は、マーケティング活動の展開様式を企業内で決めていく過程である。この過程は、市場機会の分析、標的市場と市場目的の設定、マーケティング計画の策定からなる。	同上	同上
5	マーケティング・ミックス：製品と価格の決定	マーケティング諸活動の集まりは、マーケティング・ミックスと呼ばれる。マーケティング・ミックス決定の内、製品と価格の決定が、どのような決定問題を含んでいるかを展望する。	同上	同上
6	マーケティング・ミックス：経路と販売促進の決定	マーケティング・ミックスの決定は、経路と販売促進の決定も含んでいる。製品をどのような販売を通じて流通させるのかが販路決定問題である。販売促進決定は、広告、パデリシティ、流通サポート、販売部隊の決定を含む。	同上	同上
7	ブランド化戦略の有効性	ブランド化戦略は、市場細分化や製品差別化から構成される。市場でのブランドのポジショニング、知覚品質と価格の関連を手がかりに、市場で成功するブランド化戦略のポイントを探る。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	流通組織化戦略の有効性	流通組織化戦略は、垂直統合、流通系列化、製販同盟などから構成させる。これらの戦略の市場での有効性が、どのような市場要因（競争、需要、製品特性など）の影響を受けるのかを検討する。	田村正紀	田村正紀
9	製品ライフサイクルとマーケティング戦略の有効性	すべての製品は、導入、成長、成熟、衰退という製品ライフサイクルを描く。製品ライフサイクルが以上の段階を経過するにつれて、マーケティング戦略をどのように変えていく必要があるかを明らかにする。	同上	同上
10	営業の役割	マーケティング計画の実施は、営業による個々の顧客との個別取引を通じて行われる。営業が個別顧客との取引において、マーケティング活動をどのように実施統合しているかという観点から、営業の役割を明らかにする。	同上	同上
11	営業部隊の管理	営業部隊の管理問題は、営業マン数、営業努力の製品別・地域別分配などの活動水準だけでなく、営業マンの行為を対象にした人員管理の側面がある。この側面について、結果統制と過程統制の２つの管理儀式を比較検討する。	同上	同上
12	機動営業	過程統制や結果統制だけでは、市場の多様化とその変化の加速化に対応できない。新しい営業様式としての機動営業が必要になる。機動営業を支える、営業の分権化、戦場構成、情報武装、顧客信頼などを検討する。	同上	同上
13	市場発展と戦略構想力	市場は絶えず変化している。その変化の中でも、過去からの飛躍を含んだ断絶的変化が生じることがある。この種の構造変化を含んだ市場の長期的変化が市場発展である。市場発展の中で、存続するには戦略構想力が必要になる。	同上	同上
14	リーダー地位の優位性の形成と消滅	企業は市場地位によって、リーダー、挑戦者、追随者、ニチャーなどに分けられる。市場発展の成長期には、リーダーの地位が、競争優位性を生み出すが、市場が成熟するにつれてそれが消滅する。そのメカニズムを探る。	同上	同上
15	挑戦者の戦略：競争ゲームのルール転換	市場発展の犠造変化期には、企業の盛衰が激しくなり、業界の再編が起こる。このような構造変化の過程で、次代のリーダーになる企業の戦略構想には、どのような特徴が見られるか。その戦略構想力の内容を探る。	同上	同上

＝ 企業の経済学（’９９）＝（R）

〔主任講師：黒澤　昌子（明治学院大学助教授）〕

全体のねらい

企業とは、生産要素を投入して生産活動を行い、生産物を市場で供給する経済主体である。本科目の焦点は、社会経済的法則性の中にある企業活動の展開のルールにある。企業を主体としたミクロ経済学の基礎的理論を、それらの日本への応用を含めて学習する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	本講義の一般的枠組みと狙い	「企業という主体の活動に寄与する経済学」という本科目の対象と方法、及び全体の流れを概説する。特に、資源の希少性やそれに由来する機会費用の概念、さらには市場を介した資源配分のシステムとそのメカニズムへの展望と共に、本講義で意図している幾つかの独自性に触れる。	黒澤昌子（明治学院大学助教授）	黒澤昌子（明治学院大学助教授）
2	消費者選択の理論	消費者行動の分析は、企業行動分析の大前提となる。本章では、消費者行動のメカニズムと需要の創出の基礎、及び所得変化が需要に与える影響などについて考察する。	同上	同上
3	需要の分析と予測	財の価格などの与件の変化が個人需要並びに市場需要に及ぼす影響を詳しく分析する。企業の意思決定において不可欠な、弾力性という概念とその測定・予測の方法について考察する。	同上	同上
4	生産の基礎理論	企業は、産出物と生産要素の量、及びそれらをいかに効率よく最小費用で生産するかを決定しなければならない。本章ではそのメカニズムの基礎理論を考察する。	同上	同上
5	費用の分析	生産の理論を経済価値の空間に移すときの第1歩が、費用の分析である。本章では長期と短期における生産量と費用の関係を分析し、最適な産出物と生産要素の量を決定するメカニズムを考察する。	同上	同上
6	市場メカニズム	希少な資源の配分の基盤となるのが市場における需要と供給の相互作用である。本章では価格調整のメカニズムを中心として、完全競争における生産・資源配分の効率性の概念、効率性を妨げる市場における与件の変化とそれらの基本問題などを、実際例を取り上げながら考察する。	同上	同上
7	不完全競争：独占と値付け	完全競争以外の市場構造のなかでも、特に独占市場について学習する。さらに、価格差別と、事業部門における移転価格などのメカニズムとその重要性についても考察する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	不完全競争：寡占と非価格競争	寡占市場における企業の戦略的行動のメカニズムを、簡単な例を踏まえながらゲームの理論を用いて学習する。さらに、寡占における非価格競争のなかでも、特に広告・宣伝による差別化競争と、独占的競争について学ぶ。	黒澤昌子	黒澤昌子
9	投資決定メカニズム	現在価値の概念を紹介し、確実性下、あるいは不確実性下における投資決定のメカニズムを学習する。	同上	同上
10	不完全情報	情報の非対称性がある場合に生じる逆選択やプリンシパル・エージェント（モラルハザード）問題と、その解決策などについて考察する。	同上	同上
11	外部性	企業活動に付随する環境破壊、公害などは外部不経済の典型的な例であり、イノベーションは外部経済をもたらす例である。これらの現象をもたらす外部性の理論的考察と共に、具体例に即した実践的課題、たとえば政府の役割についても言及する。	同上	同上
12	労働市場	各種の投入資源のうちで独特な性格を持つものが労働力である。伝統的なテーマである労働の需要と供給の理論、及び賃金決定のメカニズムについて考察する。	同上	同上
13	人的資本論	前章で学んだ理論を応用しながら、人的投資の経済学的分析の基礎を考察する。高等教育の人的資本形成の推移とその役割や、企業の労使関係における人的資本形成の問題点について、米国および日本での研究業績をもつゼムスキー教授と対談する。企業内訓練を中心とした人材育成の実態と問題点に関してここで展開される議論は、今後の我が国の在り方への展望を与える上に役立てられるに違いない。	同上	同上
14	収益性と生産性	これまで展開されてきた理論を企業経営の成果分析の場で実践上の問題として考察する。それの第1として、生産性と収益性の測定の問題を考える。	同上	同上
15	国際競争力：日・米自動車貿易	前章の講義を国際貿易関係の上に展開する。この水準になるとミクロ経済学の諸概念と、マクロ経済学、さらには経済学の境界を越えた領域との媒介的な考察にもはいることになる。	同上	同上

＝ 社会の中の会計（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：三代澤 経人（立命館大学教授）〕
〔主任講師：齋藤 正章（放送大学助教授）〕

全体のねらい

企業の会計を中心に、会計とはどのようなものか、その全体的な仕組みと社会的な意味連関を検討することによって、現代社会における企業会計の役割の重要性とこれにともなう問題点を明らかにすることを課題とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	会計の社会的なひろがり	会計は多様な経済主体のもとで行われる活動＝社会的な行為であること、またそこに共通に認められる課題を明らかにするとともに、企業における会計の特質と、会計学上従来、企業会計が重視される根拠を検討する。	三代澤経人（立命館大学教授）	三代澤経人（立命館大学教授） 齋藤正章（放送大学助教授）
2	会計の職能と方法(1)	企業の会計について、その課題・機能をより具体的に明らかにするために、第3回とともに企業会計の基礎的な方法とその領域を検討する。第2回はその1として、簿記、すなわち複式簿記を取り上げ、その働きを過程的に整理する。	同上	三代澤経人
3	会計の職能と方法(2)	第2回に続き、企業会計の課題・機能をより具体的に明らかにするために、基礎的な方法である原価計算と企業予算について、経営の過程とのかかわりで紹介しつつ、その働きを過程的に整理し、財務会計と管理会計の区分に言及する。	同上	齋藤正章
4	企業の管理と会計	会計は企業の運営＝管理の必要上行われるから、まず、これを直接的な課題とする会計領域、すなわち管理会計に関して、その基本的な仕組みを紹介しつつ機能内容を再検討し、経営管理との関係を明らかにする。	同上	三代澤経人
5	財務会計と管理会計	外部報告会計として意義づけられている財務会計実務について、粉飾決算をはじめ、会計制度上適正とされる会計の実際的なあり方とその機能内容を再検討し、財務会計と管理会計との関係を明らかにする。	同上	同上
6	会計の過程と社会的な体系	会計は財務会計と管理会計とに区分されているが、本来、両者は全体として1つのものである。そうした会計の基礎的な機能を過程的に把握するとともに、会計をとりまく社会的な諸要素とその関連を整理する。	同上	同上
7	会計の法的規範と会計原則	今日の会計は商法、税法をはじめとする法的規範とその規制のもとに展開している。会計の社会的な規範としてどのようなものがあり、企業の会計実務とどう関係し、また、どのような意味をもつのかを明らかにする。	同上	齋藤正章

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	企業会計原則とその論理	わが国の企業会計原則について、会計規範としてのその性格、原則の内容と、とくに企業会計原則にもられた基本的な会計思考ないし会計の論理を明らかにすることとし、あわせて、「一般に認められた会計原則」の性格について考える。	三代澤経人	三代澤経人
9	財務諸表のしくみとその分析	企業会計原則にもとづく財務諸表（損益計算書、貸借対照表）の内容・構成と、その基本的な計算原理を具体的な資料をもとに説明し、また、財務諸表から何がわかるか、財務諸表の基礎的な分析方法を明らかにする。	齋藤正章（放送大学助教授）	齋藤正章
10	公認会計士監査と証券市場	大企業は、証券取引法および商法（監査特例法）の規定によって、公認会計士による監査が義務づけられている。公認会計士とはなにか、監査法人の状況、会計士監査の意義と方法を明らかにし、問題点に言及する。	三代澤経人	三代澤経人
11	会計の国際化と会計基準	多国籍企業をはじめとして、企業活動が国境を越えて営まれることによって、会計の国際的な展開が進んでいる。そこで国際化に伴う会計問題、国際会計基準と会計基準の国際的調和化、わが国会計基準の対応等について見てゆく。	同上	同上
12	情報化の進展と会計の変容	情報化の進展を、とくにコンピュータ・システムの利用とこれによる情報処理能力の増大に焦点をあて、管理会計領域を中心としたコンピュータ利用の状況と、会計上どのような変化が進みつつあるのかなどの点について明らかにする。	齋藤正章	齋藤正章
13	現代会計の展開と国民生活	会計、とりわけ企業運営に直接かかわる管理会計の計算要素には、人々の日常生活に深くかかわるものが少なくない。商品の価格や給料・賃金、労働時間などはその好例であろう。会計のあり方がこれらにどのように作用するか検討する。	三代澤経人	三代澤経人
14	環境問題と環境会計	公害問題をはじめ、とくに1980年代後半以降深刻化した地球温暖化、オゾン層の破壊等々の地球規模の環境問題の進行にともなって展開されている、環境保護にかかわる環境会計とその動向について明らかにする。	同上	同上
15	会計の社会化と社会関連会計	戦後、産業公害、製品の安全性、物価問題などを契機として企業の社会的責任が厳しく問われるなかで、企業の社会的貢献度を測定し報告する社会責任会計あるいは企業社会会計とその研究の展開がみられる。企業の利益とのかかわりでその動向を考える。	齋藤正章	三代澤経人 齋藤正章

＝ 管理会計（’９９）＝（R）

〔主任講師：古川　浩一（岩手県立大学教授）〕
〔主任講師：佐藤　宗彌（横浜市立大学教授）〕

全体のねらい
管理関係は、経営管理に必要な、様々な価値情報を提供するための方法である。本講では、そこで用いられる価値情報の性質、管理会計で利用される諸方法を概説し、それらがどのように応用されるかの概略を示す。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	管理会計の意義と役割	効果的な経営管理のためには、客観的な情報が必要である。管理会計は、そのような情報を価値によって提供する。本章では、このような役割を持つ管理会計の意義について述べる。	古川浩一（岩手県立大学教授）	古川浩一（岩手県立大学教授）
2	会計制度による価値情報	本章では、企業などの組織体における会計制度が作り出す会計情報の特色と作成方法を説明する。営利企業においては、財産計算と損益（利益）計算を同時に行う複式簿記の理解が、企業分析や意思決定にとり非常に重要である。	佐藤宗彌（横浜市立大学教授）	佐藤宗彌（横浜市立大学教授）
3	経済的価値に関する情報	経営管理は経済的行為でもあるので、そのために、経済的な立場での情報を必要としている。この章では、管理会計で用いられる経済的な情報の特質を述べる。	古川浩一	古川浩一
4	原価計算の考え方と方法　(1)	原価計算とは、製品やサービスを作り出している企業で、どれ位のコストが発生するかを把握する計算方法である。その目的として、原価計算基準では、財務諸表作成目的、原価管理目的、予算編成目的など5つを挙げている。	佐藤宗彌	佐藤宗彌
5	原価計算の考え方と方法　(2)	原価計算は、目的に応じて色々な計算方法がある。本章では財務諸表作成（決算）目的に役立つ実際原価計算の手続きとその考え方を、いろいろな計算例をとりあげ説明する。	同上	同上
6	生産活動の革新と原価	製品を製造するにはどのような作業と、どのような生産要素があるのか。また新技術と革新的な生産方法の採用により、原価はどのように変化するかを実例をまじえて考察する。	同上	同上
7	原価情報とコストマネジメント	製造コストを管理するためには、生産方法や作業時間、生産要素の価格を標準化し、標準原価を設定し、実際原価との差異によりどの作業が原価管理（原価削減）の焦点かを知る必要がある。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	原価低減と原価企画	わが国の製造企業は、1970年代から激しい原価切り下げ競争を行ってきた。そのためのさまざまな活動を検討し、製造現場から製品開発段階までの原価切り下げ活動を述べる。	古川浩一	古川浩一
9	経営管理における収益－費用の情報		同上	同上
10	セグメント別収益－費用の把握	多角化、多国籍化した企業においては各セグメントごとの決算やグループ全体の連結決算が必要になる。とくに事業部、子会社、海外合併会社の利益管理や業績評価を適切に行うことが益々重要になっている。	佐藤宗彌	佐藤宗彌
11	振替価格と企業間関係	我が国では、最終メーカーに対して多くの部品製造企業が部品を納入している。この章では、長期的に関係を持つ企業間、あるいは企業内の部門間で問題となる振替価格を取り上げる。	古川浩一	古川浩一
12	プロジェクトの経済性評価	多額の資本の支出を伴う投資プロジェクトの評価に当たって、経済性の検討が重要な課題。	同上	同上
13	海外事業の管理会計	海外での生産・販売の段階まで進んだ国際企業にとって、為替変動、インフレーション、金利格差、カントリーリスクへの対処が大切になる。このような環境変動下での海外事業の利益計画や原価管理をどうするか考察する。	佐藤宗彌	佐藤宗彌
14	業績評価と経営監査	企業の業績評価には企業全体の評価、各部門の評価、個々の管理者、従業員の評価、グループ全体の評価、各グループ企業の評価などがある。また監査役や外部・内部の監査人は、法律の順守、社会的責任などを考慮して、企業の評価を行う。	同上	同上
15	管理会計の現代的課題	この章では、これまでに学んできた管理会計の諸課題を要約し、それらが今日抱える問題点を探るとともに、その将来を展望する。この章の放送授業は、座談会形式で行う。	古川浩一 佐藤宗彌	古川浩一 佐藤宗彌

＝ 税務会計（’９８）＝（R）

〔主任講師：武田　隆二（大阪学院大学教授）〕

全体のねらい

税務会計は、主に企業に課せられる税金の中で最も基本的で重要な法人税について勉強する教科である。法人税は、企業の稼得した当期利益をベースに算定される課税所得に対して課せられる税金であるから、この講座では、課税所得がどのように算定されるのかについて、講義することを課題とする。企業利益は企業会計で、課税所得は税務会計で扱われるわけであるから、税務会計は企業会計を基礎として成り立っているといえる。その意味では、税務会計の勉強は、財務諸表論の延長の上で、企業の生きた経理実践と密着した形で、課税所得を「会計」と「法」の論理をもって解明することを狙いとしている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	法人税の仕組み	本論に入る前に、税務会計の前提にある税金の意味、税金の種類と分類、法人税法の構造、法人税の仕組み、帳簿の備え付け義務等の基本的な問題について説明する。	武田隆二（大阪学院大学教授）	武田隆二（大阪学院大学教授）
2	税務会計の制度的基礎	税務会計は、法人税法という法律制度の上に成り立つ会計領域である。しかも、商法の決算を前提として課税所得の計算が行われる。このような法律と法律との間の関係を、一般に「確定決算主義」と呼んでいる。 しかも、確定決算主義の基礎には、「一般に公正妥当と認められる会計処理の基準」を前提とするという考え方が存在する。 そこで、この講では確定決算主義および課税所得計算の構造の解明を中心に、税務会計全体の「制度の仕組み」を説明したい。	同上	同上
3	所得概念と課税所得概念	企業課税は、「所得課税」の形態をとる。従って、税務会計の中心概念は、「所得」である。この講では、所得概念をめぐる「所得源泉説」と「純資産増加説」との相違を説明し、この二つの考え方が会計学上の「当期業績主義」と「包括主義」という損益計算に関わる二つの立場に通ずるものがある点を明らかにすることが課題である。 現行の法人税法上の所得概念が、純資産増加説に基づく所得概念を基礎として、現実には、「修正された給付能力ある所得」としての性格をもつものであることを明らかにする。	同上	同上
4	益金概念と損益概念	現行の法人税法上の「益金概念」と「損金概念」が、どのように定められているのか、その特徴点を描き出すとともに、企業会計上の収益概念と費用概念とどのような点で違いがあるのかについて説明する。	同上	同上
5	債務確定主義の特質	法律上最も安定した状態が、債権・債務の確定である。税法も法律であるから、課税所得計算の基礎には、「債権の確定」や「債務の確定」をもって収益・費用を認識するという考え方が、横たわっている。 この講では、損金計算の基礎とされる「債務確定主義」の条件について説明し、企業会計上の「発生主義」とどのような点で違いがあるのかについて明らかにしたい。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	権利確定主義の特質	課税所得の計算における積極要素としての「益金の額」は、「損金の額」の場合と同様に、法的に最も安定的になった状態である「債権の確定」をもつて計上される。 この講では、税務上の「権利確定主義」か、会計学上の「実現原則」とどのような関連にあるかということを明らかにし、権利確定主義の特徴を描き出してみたい。	武田隆二	武田隆二
7	棚卸資産の税務処理	企業の経済活動において「収益財」として役立つ「棚卸資産」が、使用材としての固定資産とどのような違いがあるのか、棚卸資産の取得原価をどのように算定し、また、どのように期間に配分するのかについて説明する。 さらに、原価計算上の予定価格と実際原価との食い違いにより生ずる原価差額について、その調整問題をその基本に従って説明したい。	同上	同上
8	有価証券の税務処理	有価証券の範囲、原価集合問題（取得原価の計算の問題）、株式分割があった場合に問題となる「身代り株式」の取得価額の付け替えの問題、原価配分法（有価証券の評価方法）と評価替え（低価法の適用、評価減の適用）等の諸問題について解説する。	同上	同上
9	固定資産の税務処理	「使用資産」としての「固定資産」をめぐる税務処理問題について説明する。固定資産の範囲、原価集合（取得価額の決定）、減価償却制度の特色、資本的支出と収益的支出、評価替え、特別償却等について説明する。	同上	同上
10	圧縮記帳の税務処理	繰延課税の方法としての「圧縮記帳」の本質とその特徴について、国庫補助金、保険差益、交換差益等の具体的な事項を取り上げて、その会計処理の方法について解説する。	同上	同上
11	繰延資産の税務処理	「繰延資産」は、期間損益計算を適正にするために認められた計算擬制的資産としての特質をもつものである。 この講では、資産としての本質は何か、その範囲、償却の方法並びに商法上・税法上記められた繰延資産の具体的内容について概観するとともに、その処理法について講義する。	同上	同上
12	引当金・準備金の税務処理	「引当経理」の本質を先ず明らかにし、続いて、税法上の債務確定主義の例外として認められた税法上の六つの「引当金」を中心に解説するとともに、租税特別措置法上の「準備金」の特徴について関説する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
13	資本等の金額と利益積立金額	会計学上、利益は一定の「資本の余剰」として規定される。税務上の所得金額も、資本余剰としての性格をもつものであるから、所得確定の前提としての「資本等の金額」についての税法の規定を解説する。 また、企業会計原則の場合と同様に、「資本等取引」と「損益取引」とが明確に区別されなければならない。 税法上の「利益積立金額」が、企業会計原則上の「利益剰余金」や商法上の「剰余金」と区別される点はどこにあるかについて説明したい。	武田隆二	武田隆二
14	リース取引の税務処理	近年著しい発展をみた「リース取引」について、リースの仕組みや税法で定めるリース取引の意義について解説するとともに、賃借人側の会計処理並びにリース会社側の会計処理について、その特徴的となる点について関説する。　他に、リースの特殊形態としてのレバレッジド・リースについても説明したい。	同上	同上
15	企業会計と税務会計との差異	企業会計（企業利益）と税務会計（課税所得）との「差異」が、どのような「原因」で発生するのか、その原因を類型化して示すとともに、その差異がどのような「形態」で、さらにどのような「効果」を伴うものであるかについ　て明らかにするとともに、最近の問題である「税効果会計」について、その要点を解説したい。	同上	同上

＝ 現代ファイナンス入門（’００）＝（R）

〔主任講師：大塚　宗春（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

現代ファイナンスの基本である資金の調達と運用が現実の企業でどのように意思決定されているか、また、それが私たちの生活にどのように関わっているかについて理解することを目的とする。全体を基礎編と応用編に分け、基礎編では資金の調達と運用の理論を学ぶ。応用編では最近のトピックを踏まえ、具体的な問題を検討する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代ファイナンスの意義と課題ーイントロダクション	本講義全体の鳥瞰図ともいうべき内容の回で、学生に何をこの講義で学ぶかをファイナンスの意義と課題に照らして講義する。	大塚宗春（早稲田大学教授）	大塚宗春（早稲田大学教授）
2	現在価値と将来価値	キャッシュ・フローの現在価値への割引計算を中心に、異なる時点に生起する複数の成果を評価する方法について解説する。	同上	同上
3	財務諸表分析（1）	企業の経営活動の結果である損益計算書や貸借対照表をどのように読むかを解説する。ここでは損益計算書や貸借対照表にどういった内容が示されているのか、具体的には資産・負債・資本、収益・費用の内容について概説する。	同上	同上
4	財務諸表分析（2）	ここでは、前回の内容をうけて、企業の経営の分析を主として比率分析を中心とした分析手法により行う。	同上	同上
5	資金の調達と金融制度…株式による資金調達	資金の流れを資本市場とかかわらせて把握するとともに、株式発行による資金調達について具体的に述べる。	阿部圭司（高崎経済大学助教授）	同上
6	資金調達の諸形態…社債等による資金調達	社債、転換社債、新株引受権付社債などによる資金調達を述べるとともに、日本企業の資金調達の傾向などを解説する。	同上	同上
7	資本コストと資本構成	資金調達手段のコストである資本コストをいかに算定するか、企業の資本構成（負債と自己資本の割合）の違いが資本コストおよび企業価値に影響するかについて述べる。	齋藤正章（放送大学助教授）	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	キャッシュ・フローの管理	企業の資金繰りの管理を中心にキャッシュ・フローの管理を学ぶ。ここでは売掛金、運転資本の管理にも言及する。	齋藤正章	大塚宗春
9	投資意思決定の理論	企業における実物投資の決定のための財務的な基準を中心に述べる。投資からもたらされる将来のキャッシュ・フローが確実に予測できるという確実性を前提に、投資価値評価方法を学ぶ。	大塚宗春	同上
10	ポートフォリオ選択理論	分散投資の理論であるポートフォリオ理論を金融資産への投資例を用いて説明する。そして、リスクとリターンがどのような関係にあるかを学ぶ。	葛山康典（早稲田大学助教授）	同上
11	β(ベータ)と資本資産価格評価モデル	前回のポートフォリオ理論を受けて、証券の収益率とリスクの関係を示す資本資産価格モデル（ＣＡＰＭ）を解説する。さらに、リスクの尺度（ベータ）についても説明を行う。	同上	同上
12	デリバティブによる為替リスクの管理	今回から応用に入る。為替リスクの管理を題材としてリスク管理手法としてポピュラーな為替予約、先物取引、オプション取引等の金融派生商品を説明する。	大塚宗春	同上
13	財務面から見た組織形態のあり方	企業の組織形態のあり方を財務面から検討する。社内金利や社内資本金を利用した事業部制、カンパニー制、金融持ち株会社について述べる。	同上	同上
14	資本市場の効率性とファイナンス情報	ファイナンス情報が資本市場の効率性にいかなるインパクトを及ぼしているかについて述べる。具体的には、その影響を株価との関係で実証した研究成果をもとに解説する。	阿部圭司	同上
15	ファイナンスの今日的課題	前回までにふれることのできなかった問題や今後重要となると思われる問題を今日的課題として解説する。	大塚宗春	同上

＝ 不動産学の基礎 ＝（ＴＶ）

〔主任講師：高辻　秀興（麗澤大学教授）〕
〔主任講師：前川　俊一（明海大学教授）〕

全体のねらい

急激な都市化の過程を経て形成されたわが国の都市は必ずしも健全な環境にあるとはいいがたく、まだ多くの整備課題を残している。土地を有効に利用しつつ良好な市街地環境を築こうとすると、不動産の開発と管理に関する系統的な知識が必要となる。この講義は、都市計画、法学、経済学、経営学、政策学の側面から立体的に不動産の開発と管理に関する基礎知識を述べようとするものである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	不動産と国民生活	不動産学の領域 不動産をめぐる問題と課題	高辻秀興（麗澤大学教授）	高辻秀興（麗澤大学教授）
2	都市化と土地・住宅政策の変遷	復興から高度成長期(1950 ～ 1973 年) 地方定住期(1974 ～ 1986 年) 地価高騰から今日まで（1987年～）	同上	同上
3	地価形成の理論と不動産の評価	土地の財としての特徴と土地市場 地価の形成 土地評価の必要性と問題点	前川俊一（明海大学教授）	前川俊一（明海大学教授）
4	経済活動と地価の変動	地価の長期的変動と国民経済 地価の決定と変動 地価水準の妥当性	同上	同上
5	不動産金融と税制	わが国の住宅問題 不動産（住宅）金融の現状と問題 不動産（住宅）税制の現状と動向	田中啓一（日本大学教授）	田中啓一（日本大学教授）
6	不動産と不動産所有法	不動産法の対象と体系 所有権の絶対性とその制限 区分所有法	丸山英気（千葉大学教授）	丸山英気（千葉大学教授）
7	不動産利用法	不動産利用法権 民法および建物保護法・借地法 借地借家法 定期借地権	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	都市計画と土地利用規制	土地利用規制の必要性 都市計画の内容と事業・誘導・規制 市街化区域等の区域区分と開発許可制度 用途地域制・密度・形態制限 地区計画制度	高辻秀興	高辻秀興
9	不動産取引と登記	不動産取引と登記の歴史 不動産売買のプロセス 不動産登記法 不動産登記のコンピュータ化の現状と課題	相馬計二（相馬司法事務所代表）	相馬計二（相馬司法事務所代表）
10	不動産の流通と管理	不動産流通の重要性と課題 不動産管理の課題と対策	田中啓一	田中啓一
11	不動産開発の企画と経営	不動産投資と資金調達 不動産開発の企画と投資分析	前川俊一	前川俊一
12	住宅の需要と宅地開発	住宅需要の発生要因 住宅・宅地供給の動向と課題 住宅地開発の手法	高辻秀興	高辻秀興
13	商業・事務所・工業の立地と開発	商業立地 事務所立地 工業の立地需要と用地供給	同上	同上
14	都市再開発と環境整備	都市再開発の背景と目的 再開発基本計画と市街地再開発事業 民間再開発の課題とプロセス 事業手法	同上	同上
15	不動産開発の外部影響評価	不動産開発の外部影響 開発影響評価の方法 外部影響評価の課題	小野宏哉（麗澤大学教授）	小野宏哉（麗澤大学教授）

＝ 現代産業組織論 ＝（R）

〔主任講師：武蔵 武彦（千葉大学教授）〕
〔主任講師：廣瀬 弘毅（福井県立大学助教授）〕

全体のねらい

現代社会をみるためには、産業の視点が不可欠である。しかし一口に産業といってもさまざまな態様をしており、簡単に理解することはできない。本講義では、産業が中心的な役割を果たしている現代経済を読み解くひとつの視点を与える「産業組織論」を平易に説明する。また、ケース・スタディとして現実の産業の分析も行う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	市場組織と産業組織論	現実の経済の歴史的な変化を念頭に置きながら、産業組織論の成立過程を振り返る。そうすることで、産業組織論の目的や視点、分析方法の特徴を理解する。特に、後に展開される章との関係で、産業組織論の固有の課題を掲示する。	廣瀬弘毅（福井県立大学助教授）	廣瀬弘毅（福井県立大学助教授）
2	市場組織と経済厚生	産業組織論の分析方法を理解するための準備として、完全競争市場と独占市場の特徴を理解する。次に、市場がうまく機能しているかどうか（経済厚生）を量るためのツールとして、余剰分析を理解する。そして、市場の構造と経済厚生の関係の重要性を示す。	同上	同上
3	産業組織論の分析法	産業組織論の伝統的な枠組について概説する。市場構造が市場行動を規定し、ひいては市場成果を生みだすとする考え方について多角的にとりあげ出来るだけ平易に解説する。	武蔵武彦（千葉大学教授）	武蔵武彦（千葉大学教授）
4	寡占理論	現実の市場は完全競争でも独占でもない場合がほとんどである。それは寡占であり、企業と企業の相互依存性に特徴がある。この様な寡占企業の価格設定行動を中心に詳しく解説を加える。	同上	同上
5	独占禁止政策	アメリカを例にとって、独占禁止法政策の歴史的な変遷をたどる。その中で、独占禁止政策が持つ問題点をいくつかの判例を見ながら理解する。最後に、日本の独占禁止政策の運用の特徴点を指摘する。	廣瀬弘毅	廣瀬弘毅
6	鉄鋼業	日本鉄鋼業の戦後復興期から高度成長期さらに現在への足跡を辿り、日本産業に果した役割りと構造を見ると共に、最近顕著になっている電炉メーカーや輸入品に対抗した構造変革にふれる。さらに大手５社内のシェアー変化に伴う日本鉄鋼業の地盤の激変に言及する。	村田修造（神戸大学講師）	村田修造（神戸大学講師）
7	石油化学産業	化学・石油化学産業を概観し、キャッチ・アップ主体の産業政策と産業組織論による分析を行う。特に、産業政策と結びついた市場行動の市場構造と正負の市場成果への影響を解析する。また、原料問題を国際比較の中で論じ、併せて同産業の国際化問題を見ていく。	斯波正輝（元昭和電工㈱有機化学品営業部長）	斯波正輝（元昭和電工㈱有機化学品営業部長）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	半導体産業	半導体産業の産業組織論的概説を試みる。 歴史を概観し、次に市場構造として産業の特徴、市場行動として企業の特徴的行動、市場の成果として企業利潤率の傾向について述べる。公共政策の影響にも触れ、政府の産業育成策、貿易摩擦に伴う政府間協定を述べる。	中里裕臣（元丸紅ハイテック㈱半導体事業部技師長）	中里裕臣（元丸紅ハイテック㈱半導体事業部技師長）
9	自動車工業	自動車産業は20世紀の産業である。それは、アメリカで発展し、急速に寡占化した。日本は戦後、国の保護の下で発展し、やがて世界市場を脅かすほどになった。その実態とそれが日本経済に持っている意味、日米経済関係に与えた影響等を考える。	伊東光晴（福井県立大学教授）	伊東光晴（福井県立大学教授）
10	消費財産業	代表的な消費財産業として、トイレタリー（石けん・洗剤）産業を例に見る。メーカー間で商品の実質的な差が比較的小さい産業の場合には、広告による差別化などが特徴的な競争形態となる。その上で、問題点などを探る。	廣瀬弘毅	廣瀬弘毅
11	ネットワーク外部性と新しい競争	最近、新しい競争の形態として話題になっている「ネットワーク外部性」の問題を取り上げる。簡単なモデルを提示し、この外部性が持つ特徴が、電気通信やパソコンのＯＳ間競争、フォーマット間競争など、多くの場面で重要な鍵となっていることを示す。	同上	同上
12	公益事業規制とコンスタビリティ理論	固定費が非常に大きく規模の経済性が働くような産業における「公益事業規制」の必要性を理解する。その上で、最近の規制緩和の理論的な根拠の一つとなったコンテスタビリティ理論を理解する。次に、その例として、アメリカの航空輸送産業を紹介する。	同上	同上
13	シカゴ学派とオーストリア学派	主流派のハーバード学派の産業組織論の対抗勢力として存在するシカゴ学派と、イデオロギー的に非常に異なるオーストリア学派を採り上げ、各々どの点が対立しているのかを明らかにする。そうすることで産業組織論の持つ問題点（特に政策面）の理解を深める。	同上	同上
14	産業政策と戦略的貿易政策	日本とアメリカの間をはじめとして、最近の国際的な経済摩擦の背景となっている考え方の一つに、戦略的貿易政策がある。規模の経済性や学習効果などの要因を考慮に入れることで、この考え方を理論的に説明し、あわせて危険性も指摘する。	同上	同上
15	これからの産業組織論	以上の講義を振り返って、ここまでの議論を総括し、残された課題を示す。さらに、ゲーム理論や取引費用の経済学、内部組織の経済学など最近の活発な理論的な進展などを紹介し、今後の産業組織論の発展について考える。	同上	同上

＝ 情報産業論（’００）＝（R）

〔主任講師：西村　吉雄（(株)日経ＢＰ編集委員）〕

全体のねらい

情報産業という概念の整理から始め、前半では情報産業におけるタテからヨコへの構造転換に伴うネットワーク分業について述べる。次にヨコ型情報産業における研究開発の進め方として「この指とまれ」モデルを提案する。最後に工業社会から情報社会への転換を、産業構造の転換との関連において議論する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	情報産業論の系譜	第1回目では、情報産業という概念の誕生と、産業の情報化という考え方との関係、脱工業化やサービス化、ソフト化、ネットワークなど、関連概念との関係を整理し、本講義の方針や予定を述べる。	西村吉雄（(株)日経BP編集委員）	西村吉雄（(株)日経BP編集委員）
2	タテからヨコへ（1） －コンピュータ産業の構造転換	1980年代後半にコンピュータ産業のビジネス構造は大きく転換した。1社が部品から最終製品までとりしきるタテ型から複数企業の連携によるヨコ型に変わる。オープン・ネットワーク時代への転換でもある。	同上	同上
3	タテからヨコへ（2） －メディア産業の構造転換	タテからヨコへの転換はコンピュータ産業にとどまらず、あらゆる情報産業に及びつつある。この回にはメディア産業の構造もタテからヨコに変わりつつあることを示し、マルチメディア現象との関係を考える。	同上	同上
4	タテからヨコへ（3） －半導体産業の新しいビジネス・モデル	情報産業にとっての最重要の技術基盤はこれからも半導体集積回路である。この産業でもヨコ型のネットワーク分業が進展して新しいビジネス・モデルが次々に登場し、日本企業も対応を迫られている。	同上	同上
5	タテからヨコへ（4） －生産システムのオープン化	ネットワークを介したヨコ型のオープンな分業は、製造業の生産システムにも及ぶ。半導体の生産を例にとってこの転換の意味を考えるとともに、自動車産業などへの展開の可能性をみる。	同上	同上
6	標準インタフェース、収穫逓増、ネットワーク	ヨコ型のネットワーク分業では標準インタフェースが不可欠である。この種の標準インタフェースを介して協力し合う産業では、ネットワーク外部性と呼ばれる一種の収穫逓増原理が働くことを示す。	同上	同上
7	情報産業における研究開発（1） －リニア・モデルから「この指とまれ」モデルへ	ヨコ型構造の情報産業では、研究開発から生産・販売までのすべてを1社で秘密裏に行うリニア・モデルは不可能で、開発方針を公開して賛同者を募る「この指とまれ」モデルが有効であることを提唱する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	情報産業における研究開発（2） －研究開発における工業と情報産業の違い	工業製品の研究開発において大きな役割を果たしてきたリニア・モデルと中央研究所が情報産業では妥当せず、産学共同研究やベンチャーの役割が大きくなることを示す。特許の役割の変化にも触れる。	西村吉雄	西村吉雄
9	情報産業における研究開発（3） －大学の役割の変化	日本の工業化の全盛期には大学の役割は均質な人材の研究にあり、大学における研究への期待がは低かった。情報産業ではこれが高まる。ヨコ型の情報産業における大学への期待と、大学側の変革の動きを紹介する。	同上	同上
10	70年代の構造転換（1） －工業化から情報化、ポスト工業化へ	日本の産業構造は1970年代に大きく転換した。鉄の生産量や原油の輸入量が漸減に転じるなか、半導体の生産は急増する。製造業人口比率の減少も始まる。この構造転換から、ポスト工業化、情報化を考える。	同上	同上
11	70年代の構造転換（2） －階層格差の拡大	工業化から情報化への転換と同期して貧富の差の拡大が日本でも始まったことを指摘する。米国のデータとも比較しながら、その原因が、情報化・ポスト工業化への転換と連動していることを示す。	同上	同上
12	70年代の構造転換（3） －女性の時代とポストモダニズム	工業化の時代には働く女性の数が減り、情報化の進展とともに、それが増えていることを、長期的な歴史データから明らかにする。またトップレスやポスト・モダニズムなどの文化現象と産業変化との関係にも触れる。	同上	同上
13	高齢化と人口減少 －ネットワーク社会のワークスタイル	21世紀の日本は急速に高齢化しながら人口減少に向かう。核家族のなかの成人男性だけを雇用という工業社会型から、高齢者を含む拡大家族がネットワークを介して共働するというワークスタイルへの転換が起こり得る。	同上	同上
14	メディア・ルネサンス －ネットワーク社会のライフスタイル	メディアのヨコ型化はメディア秩序の解体と再構築をもたらす。隣の人と同じ番組を観たかった工業社会人に対して、隣の人とは違う番組を観たい情報社会人向けのメディアではネットワークが最適なインフラとなろう。	同上	同上
15	大異を認め合いながら小同で協力しよう －ネットワーク社会の協力スタイル	自立分散した小集団がネットワークを介して協力するのが、産業・仕事・暮らしのこれからのスタイルだ。目的は違っても協力することが双方に有益となるように「大異を認め合いながら小同で協力」しよう。	同上	同上

＝ ネットワーク産業論（’００）＝（R）

〔主任講師：直江　重彦（中央大学教授）〕

全体のねらい

この講義では、今日の社会生活の重要な基盤となっている公益事業と呼ばれる産業についての実態を紹介するとともに、その経済的社会的特性について解説し、公共政策上の諸課題について検討する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	概　論 1 公共事業の誕生と発展	今日の社会生活の基盤となっている様々なサービスの中に公益事業と呼ばれる産業がある。近代社会の形成とともにシビルミニマムとして普及してきた公益事業のその誕生から今日までの発展を、産業社会の発展と成熟と言う視点から概観する。	直江重彦（中央大学教授）	直江重彦（中央大学教授）
2	概　論 2 公共事業の経済学的特徴	公益事業は自由主義経済において長い間例外的に政府の強い規制の下で発展してきた。その理由は公益事業が提供するサービスの特性とその生産構造のネットワーク性に求められるが、ここでは特に経済学的に見て、何故規制が必要とされてきたかを解説する。	同　上	同　上
3	概　論 3 公共事業政策	公益事業に伝統的に課せられてきた公共規制について概観する。特に今日公益事業改革の主要課題とされている料金規制と参入規制を中心に、その経済的意味や社会的役割とそこから導かれる公益事業政策の問題点を紹介する。	同　上	同　上
4	概　論 4 公共事業規制とその変革	公益事業に課せられてきた公共規制にも様々な問題があり、今日多くの国でその改革が進められているが、特に改革の主たる対象となっている料金規制の問題点とされる効率性に焦点を当て、その経済学的理由と各国で試みられている改革の方策を紹介する。	同　上	同　上
5	概　論 5 公共事業政策の課題	今日の公益事業は、規制緩和の流れの中で民営化や事業分割、競争の導入と言った様々な制度改革がなされている。これらの改革に伴い新しい公正競争条件の整備やユニバーサルサービスの確保と言った課題が発生している。ここではそれらの課題を概観する。	同　上	同　上
6	各　論 1 電気通信事業	公益事業の一つである電気通信事業は公益事業改革の中心的存在であり、ここではＮＴＴの民営化と我が国の電気通信産業規制の実態を紹介する。さらに今日の情報化時代の中でこの産業は関連産業との融合化が始まっており、産業と政策の問題点と課題を解説する。	同　上	同　上
7	各　論 2 放送とインターネット	放送産業は通信技術の発展とともに高度化が進んでおり、様々なメディアで放送サービスは提供されるようになっている。放送産業の内部構造も変化しており、産業規制の改革が進められている。特にインターネットの登場と関連づけて変革と課題を紹介する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	各論 3 郵便事業と宅配事業	郵便事業はその誕生以来、国家独占で提供されてきたサービスではあるが、多くの先進国でその改革が始まっている。特に近年発展してきた宅配事業との競争の中で様々な問題を露呈し、民営化や事業分割が改革方策として採用されている実態を紹介する。	直江重彦	直江重彦
9	鉄道	鉄道は陸上交通の独占的な地位を占めてきたが、道路交通や航空の発達により交通機関間の競合が生まれている。本講では、交通ネットワークと輸送構造の変化を概観した後、自然独占と経済的規制、鉄道整備と費用負担、民営化等事業形態の変化について考察する。	山内弘隆（一橋大学教授）	山内弘隆（一橋大学教授）
10	航空	航空産業では、アメリカの国内航空規制緩和（1978年）以降、他の国でも競争導入が進んでいる。本講では、まず航空産業における公的介入の根拠について論じ、規制緩和による市場構造の変化、コンピュータ予約システム等新しい競争戦略について検討する。	同上	同上
11	交通インフラストラクチャー	多くの交通サービスは道路、空港、港湾等の交通インフラストラクチャーを前提として成立している。本講では、交通インフラストラクチャーの特性を論じるとともに、無料開放を原則とする道路整備、利用者負担となっている空港整備について具体的に論ずる。	同上	同上
12	電気事業	電気事業の市場構造の特徴や政府の規制の枠組みを解説し、事業の活性化と消費者利益の増進を図るためにどの様な規制改革が必要かを明らかにする。また電気産業が新たな取り組みを期待される課題としてさらなる経営効率化と地球環境問題への対応を取り上げる。	山谷修作（東洋大学教授）	山谷修作（東洋大学教授）
13	ガス事業	ガス事業が直面する最大の課題は、内外価格（英国の3倍）と内々価格差（地域間で約3倍）の縮小である。料金低廉化に向けて取り組むべき諸施策を紹介する。またクリーンエネルギーとしての天然ガスの普及促進についても検討する。	同上	同上
14	上下水道事業	‘安かろう不味かろう、高かろう美味かろう’の世間常識が通用しない財、それが水道水である。としの水道事業は水源の遠隔化、水質の悪化、異常気象による渇水に直面し、供給コスト増を招いている。上下水道の料金低廉化とサービス向上のための方策を検討する。	同上	同上
15	まとめ	これまでの公益事業の経済理論と実態についての講義のまとめとして、公益事業がどの様に変貌していこうとしているのか、その課題としての効果と公正のバランス、それを実現するための公共規制のあり方、さらには市民の参加に不可欠な情報公開を取り上げる。	直江重彦	直江重彦

＝ ベンチャー企業論（’０１）＝（R）

〔主任講師：藤川　彰一（（株）ジャフコ産学連携チームシニアーマネージャー）〕
〔主任講師：柳　　孝一（　早　稲　田　大　学　教　授　）〕

全体のねらい

21世紀はベンチャー企業の時代であると期待されている。ベンチャー企業とは何かから始まり、ベンチャー企業の現状を日米の比較をしながら明らかにする。さらにベンチャー企業を支援するベンチャーキャピタル等についてもふれながら、ベンチャー企業について、体系的な理論、知識、見識を身につけてもらうことがねらいである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ベンチャー企業の時代へ	ベンチャー企業の定義を示し、中小企業との違いを明らかにする。産業構造が大変革する中でなぜベンチャー企業が注目されるのかを明らかにする。さらに既存の大企業や中小企業が、新規事業への多角化のために起こす、企業革新型ベンチャーについても言及する。	柳　孝一（早稲田大学教授）	柳　孝一（早稲田大学教授）
2	日本のベンチャー企業の歴史	戦後生まれたソニーや松下電器もベンチャー企業から出発した。今まで日本では、３回のベンチャーブームがあった。今回は95年に制定された「中小企業創造法」が契機となっている。今までの歴史をふりかえりながら、今後の展開方向を探りたい。	同　上	同　上
3	ベンチャー企業経営論（Ⅰ）（構造的アプローチ）	ベンチャー企業は、新規事業への挑戦を行うためリスクが高い。リスクを下げるためには成功したケースから、体系化された経営理論を構築し、それを学ぶ必要がある。まず成功時点に立って、当該企業の主要成功要因を集め一般化して「四面体理論」を形成した。	同　上	同　上
4	ベンチャー企業経営論（Ⅱ）（成長ステージ別アプローチ）	ベンチャー企業は、昆虫の“変態”に例えられるほど、成長ステージごとにマネジメントを変革する必要がある。成長ステージ別に変革するには、経営要素の内容を変えると共にウエイトも変化させなければならない。その変革の力は、経営資源の自己回転力による。	同　上	同　上
5	米国のベンチャー企業の歴史	第二次世界大戦後、米国に輩出したベンチャーの代表企業を紹介する。革新的な技術、新しいコンセプト等に基づいて起こされた企業の殆どがベンチャーであったことを明らかにする。	藤川　彰一（（株）ジャフコ投資開発チームシニアーマネージャー）	藤川　彰一（（株）ジャフコ投資開発チームシニアーマネージャー）
6	米国のベンチャー活躍の現状	1990年代に入って、ベンチャー企業への投資が飛躍的に拡大した。その背景とベンチャーが活躍するインターネット分野の歴史と具体的な企業を紹介する。インターネット以外の分野のベンチャーについても説明する。	同　上	同　上
7	米国のベンチャーキャピタル	米国でベンチャー企業の発展を支えた最大の要因の一つであるベンチャーキャピタルの歴史を紹介する。また、ベンチャーキャピタルの資金フローのしくみ、ベンチャーキャピタリストとベンチャー企業の関係をも明らかにする。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	日本のベンチャーキャピタル	日本のベンチャー企業の資金調達の現状を紹介する。日本のベンチャーキャピタルの歴史を記し、ベンチャーファイナンスに占める役割を明らかにする。米国との比較から、21世紀のベンチャーキャピタルの方向をしめす。	藤川　彰一	藤川　彰一
9	ベンチャー企業の現状	ベンチャー企業が期待されるにしたがって、多くのベンチャー企業が生み出されてくる。全体として、どのような事業や業種、業態が多いのか。又支援制度との関係や問題点なども明らかにしたい。またインターネット関連等最先端の働きも紹介してみたい。	柳　孝一	柳　孝一
10	ベンチャー企業の経営者	ベンチャー企業の成功要因で最も重要なことは、起業家の能力、すなわち「起業力」ということになる。ここでは、ベンチャー企業で成功した経営者の能力を分析し、これからの起業家に役立つ内容としたい。起業力を身につけるにはどうするかについても含めたい。	同　上	同　上
11	ベンチャー企業と株式公開	ベンチャー企業にとっての株式公開の意味－メリットと義務－を明らかにする。日本のベンチャー企業の株式公開に大きな役割を果たしてきた店頭市場の歴史を紹介する。90年代末の新しい市場の動きをしめす。	藤川　彰一	藤川　彰一
12	ベンチャー支援政策・制度	90年代後半に打ち出されたベンチャー支援政策の概要をしめし、制度について説明を行う。また、ベンチャー企業にとって，支援制度の活用の方法と注意点を明らかにする。ベンチャー支援制度だけではなく、社会全体の変革の必要性についても記す。	同　上	同　上
13	日本のベンチャー企業 ケーススタデイ	最近注目されているベンチャー企業について業種等を考えながら３社ほど取り上げ、ケーススタデイを行う。起業の動機、成功要因、起業力の自己評価、経営的な危機、支援制度の活用等について、可能であれば、起業家の話を直接聞きながら構成したい。	柳　孝一	柳　孝一
14	米国のベンチャー企業のケーススタディ	米国でベンチャー企業が活躍しているインターネット関連の企業をとり上げ、その起業から公開、その後の成長の歴史を紹介する。	藤川　彰一	藤川　彰一
15	ベンチャー企業の将来	21世紀の日本経済の突破口は、相変わらず見えていない。突破口のひとつがベンチャー企業の輩出である。政府、地方自治体、大学、民間等の支援制度も整って来た。大企業の人員削減から起業家になる人や、大学生の意識も変わって来ている。将来への展望を述べる。	柳　孝一	柳　孝一

＝ サービス産業論 ＝（ＴＶ）

〔主任講師：伊東　光晴（福井県立大学教授）〕

全体のねらい

国内総生産のなかば以上が、わが国では第３次産業である。第２次産業も、サービス化が進んでいる。にもかかわらず、これらを対象とする学問分野は未だ確立していない。農業分野と対照的である。この放送では、第３次産業をふくむサービス産業を公共政策との関連で考えていきたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	サービス産業の重要性と経済のサービス化・情報化	サービス産業の重要性。そのウエイトの増大。第２次産業の情報化，サービス化。ソフトウェアの重要性。価格はどうしてきまる。産業構造の相互関係。産業間の立体的相互関係。	伊東光晴（福井県立大学教授）	伊東光晴（福井県立大学教授）
2	電話事業の形態化	1980年代後半に、アメリカ最大の株式会社ＡＴＴは長距離通信と市内通信との分離を命ぜられ、イギリスの電々公社も日本の電々公社も株式会社され、イギリス、アメリカにくらべ日本の民営化はどのような特徴をもっているのであろうか。	同上	同上
3	電話料金論	電話産業は公社形態から株式会社に変わったとはいえ公益事業であり、政存現制を受けている。この場合、電話料金の水準と体系を決定する理論はどのようなものであろうか。	同上	同上
4	情報化社会の現在と将来	電話における技術革新は社会を大きく変えた。東京国際金融市場の成立も、バブルの発生と崩壊も、それは無縁ではない。その将来は、はたしてバラ色であろうか。	同上	同上
5	医療経済の特徴	先進国は一様に医療問題が経済問題化している。その基礎に何があるのか。通常の市場とちがって、患者と医者との間には知識の偏在があり、消費者主権はほとんど存在していない。技術革新も特異である。経済理論の通念への挑戦としての医療市場について考える。	同上	同上
6	日本の医療問題	医療保険の問題点は何か。診療所から病院へのシフト。病院へのシフト。病院の経営難。医科と歯科の対比、看護婦不足、等々。日本の医療問題の現状を考える。	同上	同上
7	続日本の医療問題	医科と歯科、医療行為の分解、新しい看護老後問題との関連等を考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	流通と小売業	小売業には、個人商店、専門店、百貨店、スーパー・マーケット、コンビニエンス・ストア、通信販売などいろいろの形態がある。その経営上の特徴を考える。	伊東光晴	伊東光晴
9	流通政策	流通過程に対する国の政策は、小零細店の保護、育成、消費者保護、流通の合理化等多種多様でるが、90年代に入って、ガットにかわる世界貿易機構（ＷＴＯ）の発足とともに、その国際的側面が加わった。また県、市町村の政策としては、商圏の拡大、商業集積再開発等、地域振興政策が大きな柱となっている。	同上	同上
10	流通業の経営戦略	流通業の経営戦略 流通業の商慣習、それを破壊する動き、大阪商法と京都商法、なぜスーパーがお客を吸引するのか、生鮮食品の安売り構造。	同上	同上
11	戦後の交通問題と経済理論	戦後交通経済学の地位は高まった。それは従来の経済学の前提をこえる多くの問題が、この分野であらわれ、経済学の発展に寄与したからである。この問題を外部性、公共財ないし準公共財、収穫進増産業の三つを基礎とする「市場の失敗」との関係で考える。	同上	同上
12	国鉄経営の破綻と運輸政策　Ⅰ	国鉄貨物の衰退、大都市交通線の黒字減、幹線経営の破綻、地方交通線の赤字等、国鉄経営を破綻させた要因を考える。	同上	同上
13	国鉄経営の破綻と運輸政策　Ⅱ	前講につづき、国鉄経営を破綻させた人員構成のアンバランス、公営という名の国営企業体質を考え、ＪＲへの転換とその後の５年間の経営を見ていく。	同上	同上
14	交通政策における受益と負担	大手私鉄の料金、航空料金、空港・港湾利用の受益と負担、道路利用の受益と負担、混雑現象等について考える。	同上	同上
15	サービス産業再論	サービス産業は、個々の業種ごとに、独自の特色がある。いくつかの事例をとりあげ、ついで経済成長にともなうサービス産業の発展と、生産性上昇率格差等にあらわれる製造業との関係を考える。	同上	同上

＝ 大 地 と 人 間 ＝（ＴＶ）

－食・農・環境の未来－

〔 主 任 講 師 ： 祖 田　修（京都大学教授）〕

全体のねらい

人類はその生存のために食料を不可欠とする。それを担うのが農業生産である。しかし農業生産技術の発展は、他方で環境破壊の面も持っている。また一方では飽食と大量廃棄をしながら、他方では飢餓と栄養不足も深刻だ。このような世界農業・日本農業の現実をふまえ、高度文明社会における大地と人間という視点より農業を考える。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	文明史の中の農業・農村	現在の農業および食生活は多くの問題をかかえている。それは高度文明社会に特有の問題である。農業のあり方と行方は、今後の人間社会のあり方を決定づける意味をもつことを指摘する。	祖田　修（京都大学教授）	祖田　修（京都大学教授）
2	飽食社会への道－日本の食生活	日本は食料を大量生産－大量消費－大量廃棄する、飽食社会のただ中にある。そして大量輸入も飽食を支えている。こうした飽食の陰にある問題を究明する。	古沢広祐（國學院大学教授）	古沢広祐（國學院大学教授）
3	飽食を支える農業の発展と技術	日本の食生活を支えているのは、大量生産、周年生産といった農業技術の発展である。しかしその技術は同時に、環境問題や食の安全性をそこなう大きな問題をもつものであることを指摘する。	同　上	同　上
4	食生活と農業を結ぶ	上記のような、食生活と農業生産に所在する問題をのりこえる道は、生産者と消費者がその事実を見つめ、相互に協力して新たな食と農の関係を築いていく以外に道がないことを明らかにする。	同　上	同　上
5	農産物貿易の経緯と現実	農産物の貿易は、国家間・地域間の過不足を補い、無いものを交換しあうという意味で不可欠で有意義なことである。しかしあまりにも外部依存を深めると、種々の問題も起る。こうした農産物貿易の現実と、国家間の交渉経過を追う。	八木宏典（東京大学教授）	八木宏典（東京大学教授）
6	貿易自由化と日本農業の展望	近年日本は貿易自由化を押し進め、大幅に農産物自給率は低下している。日本農業の将来を切り開くにはどうすればよいか。その経営経済的条件を探る。	同　上	同　上
7	揺らぐ循環と共生の大地 －アフリカ農業・農村の現実	発展途上国ではなお急速な人口増加が続いている。それを補う食料生産の拡大がなければならない。過酷な条件の中で、アフリカ諸国は農業生産の発展方向を模索している。その実態を紹介する。	祖田　修	祖田　修

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	掠奪される大地 －新大陸農業と環境問題	日本はアメリカという新大陸型農業国に大きく食料を依存している。しかしアメリカ農業自体も掠奪農業化し、限界に直面しつつあるといわれる。その現実と可能性はどうか。	八木宏典	八木宏典
9	失われゆく大地と森林 －森林破壊と砂漠化の現実	人口増加と工業化によって、森林は急速に縮小しているといわれる。また既存の農地も塩害や砂漠化などを引き起しているところも多い。農業と環境の複雑で困難な関係に迫る。	河合明宣（放送大学助教授）	河合明宣（放送大学助教授）
10	激動する大地 －中国農業・農村の行方	中国は世界人口の４分の１を占める。この中国の工業化、農業生産についての考え方は、世界の食料問題を大きく決定づける意味をもつ。激動する中国の農業と農村の実態を明らかにする。	同上	同上
11	保全される農業と環境 －ヨーロッパの農政の動向	ＥＵ諸国は、農業と工業の調和、農業と環境の調和を考え、次第に農産物自給率を高める傾向にある。そうした政策の方向と内容を紹介し、日本の方向を考える。	同上	同上
12	大地と人間をめぐる文明の対立 －人類と地球永続のための世界農業再編	これまで問題にしてきたように、食糧の確保、環境の保全は、現在地球的規模で考えざるをえなくなってきた。それは人類と地球との永続的関係を探る必要性を提起している。その関係の再編方向を探る。	古沢広祐	古沢広祐
13	現代文明の病根と再生	現在の食生活、農業生産、環境の問題は、現代文明の到達点と帰結を現わしている。このような諸問題の原因は何か、そのあるべき姿への再生の条件は何か。こうした点について文明史的視点より論ずる。	井上ひさし（作家）	井上ひさし（作家）
14	日本文化と米	日本の自然と農業のありようは、永年の農民の知恵も蓄積した日本文化の基底をなしている。その事実と意味を検討し、考える。	富山和子（立正大学教授）	富山和子（立正大学教授）
15	大地と人間の未来 －都市と農村を結ぶ	これまでの14回の講義を総括し、21世紀に向けての大地と人間の未来について、都市と農村の関係を中心展望する。	祖田修	祖田修

＝農　業　経　営＝（R）

〔主任講師：西村　博行（近畿大学教授）〕

全体のねらい

わが国の農業は家族を中心とした経営組織で営まれてきた。自然的あるいは社会・経済的な諸条件の下で形成されてきた経営の構造と形態を理解し、今日の農業経営が直面する課題として、地域と農業経営の関連、企業形態の経営の模索、そして期待される生産組織とサービス事業の展開のあり方を検討する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	事業としての農業の営み	農業は工業や商業と同じように、国民経済の一部を構成する産業である。その農業生産を担う経営は組織体として、生産財の購入、生産物の生産と販売などの活動を行い、その過程で意思決定をしていく。農業経営の構造と運営は商・工業のそれらとどう異なっているか。	西村博行（近畿大学教授）	西村博行（近畿大学教授）
2	経営の構造と組織	農業経営は幾つかの生産部門から構成されている。多角的な経営と専業化した経営では、それぞれがどんな有利性と不利な問題点をもつか。経営活動を有利に展開するためには、経営の組織化で必要な工夫はどうしてきたのだろうか。	同上	同上
3	経営の規模と集約度	一般の企業経営と同様に、農業経営でも経営の大きさを測る尺度として、規模という用語がある。では何で測るのか。大規模経済の有利性とはどういうことなのか。一定の経営規模であっても、資本や労働の投入の仕方で特徴が見られる。その限界はどうなっているか。	同上	同上
4	農業経営の分析・診断・計画	経営の成果と資源の効果的な利用をどう測るか。経営の管理と運営の内容を分析し、その実績を診断する方法を考える。経営の計画はどこに着眼して作成するのか。	同上	同上
5	経営管理と情報	農業経営者の行動は一般企業の経営者の行動と比べ、どこが異なっているか。農産物の販売を工夫したり、資金を有効に活用し、経営の組織化を図ることは大切な経営戦略である。情報の利用、教育と普及のもつ役割を考える。	同上	同上
6	稲作経営	わが国の農業を特徴づけているのは水田利用の稲作である。その稲作経営の形態や規模の拡大はどうなっているのだろうか。また、経営の生産性や収益性の高さはどれ位の水準だろうか。	同上	同上
7	野菜作経営	一口に野菜と言っても様々な種類があり、それらの栽培方法も多様である。幾つかの野菜について施設や露地を利用した経営を紹介しながら、経営計画をたて、収益の大きさや収益性の高さを試算してみる。経営部門の編成をどう変えることが合理的であろうか。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	花き作経営	生活の水準が向上し、その内容が豊かになると、どの国でも花などの観賞用植物の栽培が盛んになってくる。経営の形態も専業的または複合的な家族経営から、企業経営として法人化された営みもある。経営の収益や投資の採算はどうなっているのだろう。	西村博行	西村博行
9	果樹作経営	わが国は国土面積が狭い割に、多種類の果樹が栽培されている。永年性の植物である果樹については単年性植物の野菜の場合と違った経営方法と経営計算の仕方が必要になる。	同上	同上
10	菌茸経営	栽培の過程と形態は複雑で、経営の生産性と収益性は生産対象とする菌茸の種類によって異なる。菌の培養から大規模な生産まで、そして生産物の販路は海外までというように、生産から販売へ至るまでの過程が林間での採取に頼っていた往時とは大きく変貌した部門である。	同上	同上
11	大家畜経営	乳牛を飼養し、主として牛乳を生産する酪農経営と、肉資源を生産する肉用牛飼養経営をとりあげる。後者について、更に、繁殖経営と肥育経営をとりあげ、技術的にも経営的にも違いがあることを学ぼう。	同上	同上
12	中・小家畜経営	豚を飼養する経営には、繁殖豚を飼養して子豚の生産を目的とする繁殖経営と、子豚を他の経営から導入して肉豚の肥育を専門化して行う経営や、これらを同一の経営で行う一貫経営がある。鶏については採卵とブロイラーの養鶏経営をとりあげて学んでみよう。	同上	同上
13	立地と経営の編成・組織化	農業は自然条件や社会経済条件により、生産部門の構成・形態・規模・集約度などに差異がもたらされる。経営の立地要因とは何か。また、生産行程の一部を他へ任せたり、他の経営と組織を組んだりしている。それら生産、組織と地域との関連はどうなっているか。	同上	同上
14	企業的経営～法人化～	今日の農業経営が直面する競争条件では、企業法人形態を選択することが１つの方途と考えられ、政策としても採り上げられるようになってきた。その法人化の利点と課題は何であろうか。そして、そこにはどのような問題点があるのだろうか。	同上	同上
15	農業サービス事業体	農業経営は個別の経営体としてだけではなく、地域の資源や社会組織と深く関わりあっている。そして、個別の経営体ではできないサービスを補完したり、代行したり、地域へ広く供給するまでにもなった。それらのサービスはなぜ必要になり、どんな形で与えられているのか。	同上	同上

＝ 発展途上国の開発戦略（’９９）＝（R）

〔主任講師：河合　明宣（放送大学助教授）〕

全体のねらい

経済開発の目標と戦略は、歴史、社会制度、政治体制、資源賦存、地政学的位置等に規定される。これらを視野に入れ、南アジア７ヵ国（インド、パキスタン、バングラデシュ、スリランカ、ネパール、ブータン、マールディーヴ）の開発戦略の特徴を国別に考察する。南アジア諸国についての具体的理解は、日本の援助や南アジア地域と日本との協力関係の今後の在り方を考える材料となろう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	南アジアの多様性と地域の統合	ネパールとブータンを除けば、南アジア諸国はイギリス植民地統治から独立して誕生した。各国は、植民地統治の歴史を開発戦略策定の初期条件とさざるをえなかった。植民地統治期に形成された経済、政治、国家機構の特色について概観し、あわせて本科目の対象とする南アジア地域の概況説明を行う。	河合明宣（放送大学助教授）	河合明宣（放送大学助教授）
2	発展途上国の農業開発戦略	工業化が外国資本や援助によって推進された場合は、圧縮された産業構造の高度化が達成されるが農工間の格差は急速に拡大する。南アジアを事例として、経済発展と農業・農村の変容とその結果もたらされた変化の意味を考える。	同上	同上
3	多元的・混合経済的開発 インド　(1)	多言語、多民族、多宗教・カーストが交錯するインド社会の実態をふまえて、議会制民主主義国家形態のもで遂行されてきたインドの経済開発戦略の特質について、多民族の国民的統合課題とかかわらせて、産業政策の展開に焦点をあてて考察し、あわせて経済開発の成果と問題点について論及する。	西口章雄（同志社大学教授）	西口章雄（同志社大学教授）
4	経済改革の現状と諸問題 インド　(2)	1991年7月以降、米ソ冷戦体制の崩壊と共に、インドの経済開発戦略も大転換を遂げた。インド経済の世界市場への統合を目指して、マクロ経済安定化・構造調整政策が経済改革の名の下で着々と実行されてきた。ここでは同改革の特徴・内在的諸問題・展望について考察する。	同上	同上
5	「社会主義型」開発戦略下の農業政策 インド　(3)	インドの経済開発戦略における農業政策の展開を跡づける。農業生産力の向上と社会的公正の達成がどのように調整されたか、工業化のために農業部門がどのような役割を担ったかについてインドの特徴をまとめる。	河合明宣	河合明宣
6	経済開放政策下での農村改革 インド　(4)	1960年代後半に開始された「緑の革命」によって、食糧自給の見通しがついたとはいえ、農村の所得格差や地域格差は拡大している。多数の貧困線以下層の存在、人口増加、環境の悪化等にどう対処するのか。問題点と解決の方向を探る。	同上	同上
7	軍部・官僚支配の開発戦略 パキスタン　(1)	国連開発計画によれば、1994年のパキスタンの1人当たり所得は430ドル、貧困層は12%で、生活水準は南アジア諸国のなかでも上位にあるのに、成人識字率37%など社会開発の遅れが目立つのはなぜか。その原因を独立後のパキスタン政治に対する軍部・官僚支配とその下で実施された開発戦略に探る。	浜口恒夫（大阪外国語大学教授）	浜口恒夫（大阪外国語大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	経済発展と構造的不均衡 パキスタン (2)	独立後の工業化の結果、国内総生産に占める工業の割合は25％で農業と同比率となり、輸出構造も工業製品が主となった。農業増産で食糧自給もほぼ達成された。しかし膨大な財政赤字や国際収支赤字など構造的不均衡を抱え込んだパキスタン経済の実態を捉える。	浜口恒夫	浜口恒夫
9	若い独立国の自立の課題 バングラデシュ (1)	1971年に独立したバングラデシュは、一国の経済運営と国民統合のための物的及び人的資本の蓄積が乏しく、軍人政権の交代を繰り返す不安定な政権が続いた。地方行政改革を中心に従属的経済構造からの脱却の模索を跡づける。	河合明宣	河合明宣
10	農村開発における環境問題と在地の技術 バングラデシュ (2)	バングラデシュでは、新しい乾季稲作が環境を大きく変え、それに呼応するかのように砒素中毒、マラリアの蔓延等、誰もが予想しなかった問題が生じている。人々を豊かにするはずであった緑の革命の長期的実践の結果である。豊かさをはき違え、短期的成長の罠に囚われたのだろう。今こそ在地に生きてきた人々の知恵と技術が求められている。環境問題の視点から農村開発戦略を具体的に考察したい。	安藤和雄（京都大学助教授）	安藤和雄（京都大学助教授）
11	ヒマラヤ山間地の開発課題 ネパール	ネパールは1950年代から混合経済体制下で5か年計画を中心に開発戦略を立ててきた。間もなく第9次5か年計画が実施されるが、その狙いと裏腹に経済は伸び悩み、従来主産業であった農業も生産の構造的基盤が揺るがされている。この問題点を考察する。	ケシャブ・ラル・マハラジャン（広島大学助教授）	ケシャブ・ラル・マハラジャン（広島大学助教授）
12	開発と自然保護の戦略 ブータン	ブータン王国は、ヒマラヤ山脈の南に位置している。ブータンは、今日まで急速な近代化を望まず、伝統的な生活を大事にしてきている。ブータンのこのような姿勢は、工業化に代表される近代化のもたらすメリットとデメリットを考えさせるよい例である。	栗田靖之（国立民族学博物館教授）	栗田靖之（国立民族学博物館教授）
13	社会福祉、社会開発重視の開発戦略 スリランカ、マールディーヴ	スリランカとマールディーヴは、ともに南アジア諸国中一人当たり国民所得や社会開発の点で一、二を争う国である。70年代末以降政府主導型経済開発から経済自由化、外資導入へと転換したスリランカ経済の変貌と問題点を明らかにする。マールディーヴは珊瑚礁からなる小国で、独立以来対外経済開放政策をとり、漁業近代化と観光業の開発を進めてきた過程を説明し、その問題点を指摘する。	古賀正則（明治大学教授）	古賀正則（明治大学教授）
14	南アジアの開発戦略	インドは、東西冷戦体制のもとで非同盟中立の立場を取り、社会主義型社会の建設を目標として内向きの経済開発戦略を採用した。パキスタンは、対外依存、民間資本、大地主重視の開発を進めた。アセアンやＮＩＥＳとの比較を念頭に、第二次大戦以降の開発戦略の展開を概観し、各国の主要な特色や南アジア全体の流れを考察する。	河合明宣	河合明宣
15	南アジア地域と日本	政府開発援助や経済開放政策下での外国資本投資は、経済開発戦略に大きな影響力を与える。外的インパクトによる経済構造の調整は、国内に様々な摩擦を引き起こす。地方分権等の行政機構の改革や農民や地域住民レベルでの新しい動きに注目し、市民レベルでの国際協力や交流活動にも触れて南アジア地域と日本との関係の在り方を考える。	同上	同上

＝ 都市・地域経営（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：小泉　允圀（　明海大学教授　）〕
〔主任講師：岡崎　昌之（福井県立大学教授）〕
〔主任講師：林　　亜夫（　明海大学教授　）〕

全体のねらい

21世紀を向かえ、我が国の都市や広く地域の活力を維持し、また地域の活性化を維持していかなければならない。そのためには新たな制度や地域に分散している様々な資源を有効に利用し、着実に政策を実施していく経営的視点が必要である。このような視点に立ったときどのような問題があるか、制度的、財政的あるいは地域的制約を通じて明らかにしながら、問題解決の方策や技術を探究することを目的とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	都市・地域経営学の必要性	21世紀をむかえた日本の都市、地域の活力を維持あるいは活性化していくために、都市や地域の資源を有効に利用するという経営的視点が必要である。3人の講師の間でのディスカッションを通じて、経営的視点とは何か、現実の問題は何かを議論し、問題解決の制度的、技術的論点の明確化を行う。	小泉允圀（明海大学教授） 岡崎昌之（福井県立大学教授） 林　亜夫（明海大学教授）	
2	都市経営の視点と方策	わが国で「都市経営」に関する議論がどのようになされてきたかその歴史的経緯をまず整理し、次いで都市経営が目指す方向や視点をどのように考えるか、また都市経営の具体的対象領域としてどのようなものが有り、現実にどのような方策が採られているか整理解説する。	小泉允圀	小泉允圀
3	地方財政のしくみとその運営	地方財政の特色をふまえ、まず国と地方との財政関係について概括的に整理し、次いで地方財政のうち市町村財政を着目し、そのしくみや財政運営上の原則について述べ、都市・地域経営における財政問題の重要性について理解を深める。	同　上	同　上
4	都市・地域計画の役割とその立案過程	都市・地域に関する様々な計画は、都市や地域を経営・管理する上で重要な役割を果たしている。また、複雑化する社会状況の中で、自治体や企業体にとって合理的意思決定として欠くことができない。それ故、各種計画の役割とその立案過程について解説する。	同　上	同　上
5	生活環境整備とその経営	いずれの都市、地域にとっても住民の生活環境をより豊かに、快適に整備してゆくことが求められている。そこで、生活環境整備をより積極的に推進して行くための諸方策について、制度面や財政面から検討を加え、今後の整備のあり方について考察を加える。	同　上	同　上
6	地域経営の視点と方策	地域外の力に安易に依存することなく、地域に内包された力を基本に、地域の可能性を長期的な視点で追求するという、地域経営の原点をいかに実現していくか。地域資源の活用、整備拡充、規制排除等、具体的な地域経営の方策を検討する。	岡崎昌之	岡崎昌之
7	過疎化の進展と対応策	過疎化、高齢化により日本の国土の荒廃が進んでいる。中山間地域、豪雪地域、離島等々の条件不利地域での農林業をはじめとする産業振興の行方も不透明である。こうした地域の実像を明確にしつつ、条件不利地域への対応を日本国内、海外の事例から模索する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	都市農村交流と地域経営の担い手	高速道路や新幹線等の社会的基盤がほぼ整ってきた今日の社会では、人々の移動性も高まり、地域の定住人口に加えて、その地域を訪れる交流人口も視野に入れて地域経営を考えることが必要になった。またそうした交流を支える地域経営の担い手も重要である。	岡崎昌之	岡崎昌之
9	地域の経済的振興－特産品開発、刊行、新しい産業振興	地域の資源と技術を活用する身近な特産品開発の産業振興、その特産品や景観、地域の歴史文化を活かした観光振興をいかに着実に展開していくか。また空洞化しがちな日本の地域にいかに新しい産業を根づかせるか。地域に視点をおいた産業構造の新しい枠組みを考える。	同上	同上
10	地方公営企業と公社	都市、地域での様々な公共・公益サービスを供給する主体として地方公営企業や公社、そして第三セクターといった組織が存在する。これら組織の性格と機能を明らかにしながら、その効用と問題点を分析する。	林亜夫	林亜夫
11	都市・地域経営手法－シミュレーション	都市、地域の動態を把握し、将来の予測あるいは都市、地域政策の結果の影響分析を行い、計画や政策を評価するために様々な計算機モデルが構築される。この章では、一つのシミュレーション手法を取上げ、このような手法の有効性と問題点を理解する。	同上	同上
12	都市・地域経営手法－都市・地域計量分析	都市、地域の人口動態、経済、財政の構造を計量経済学の手法を用いてモデル化し、地域政策の結果の影響分析や将来予測を行う手法論を具体的に修得する。実際のモデルの構築方法から始めて、モデルの検証や利用の仕方を学ぶ。	山口誠（豊橋科学技術大学教授）	山口誠（豊橋科学技術大学教授）
13	都市・地域経営手法－地理情報システム	都市、地域の現況や動態を計算機上の電子地図の上に落とし、様々な都市、地域の態様や政策的影響を計算機の地図上で効率よく分析、解析する手法ＧＩＳの基礎を学習する。さらに、このＧＩＳを用いて政策の土地利用等に与える分析例を学習する。	川口有一郎（明海大学助教授）	川口有一郎（明海大学助教授）
14	広域行政	市町村の行政区域を越えて公共サービスを供給する広域行政機構について、その制度的性格さらにその効用と問題点について、経済学、財政学さらには都市・地域経営上の視点から学習する。	林亜夫	林亜夫
15	市町村合併	市町村を統合し一つの行政区域にする市町村合併について、その傾向と目的、さらに広域行政との比較において、その効用と問題点を経済学、財政学さらには都市・地域経営上の視点から学習する。	同上	同上

＝ 都市と生活空間の工学（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：阪本　一郎（明海大学教授）〕

全体のねらい

人々の生活は多様な行動で成り立ち、それらが営まれる生活空間は道路や建物などの物的基盤によって機能する。人類はその歴史の中で、良質な生活空間を獲得するためにさまざまな努力と試みを行ってきたが、いまだにその質は人々の期待から遠く離れた水準にあり、その改善は重要な社会的課題としてあり続けている。この課題に応えることがどのような意味で難しく、社会のいかなる選択を必要としているかという点について、主として社会技術の側面から示すことが本講義のねらいである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	都市と田園 －2つの生活空間	対照的な生活空間である都市と田園を対比することにより、それぞれの特性を明らかにする。さらに田園の魅力と都市の魅力の源泉について述べる。	阪本一郎（明海大学教授）	阪本一郎（明海大学教授）
2	生活空間としての田園	田園から都市へ、地方都市から広域中心都市へ人口が移動し、従来の生活空間の維持が困難になった状況に、政府・自治体がどのように対処してきたかを概観するとともに、田園居住の可能性を検討する。	同上	同上
3	都市と郊外 －生活空間の拡散化	都市の郊外化といわれる現象が世界的に進行し、生活空間の拡散化が生じている。この現象を紹介するとともに、それがもたらす社会的不利益の大きさを述べる。	同上	同上
4	都市と郊外 －居住地の選択	人々の自由な居住地選択が都市の郊外化をもたらしている。社会条件の変化が人々の選択にどのように作用するかを考察する。	同上	同上
5	郊外開発抑制の試み －居住地の制限	都市をコンパクトに保つためのさまざまな試みがなされてきた。グリーンベルトを採用したイギリスや日本の試みを概観する。	同上	同上
6	都市空間制御の現実	都市空間を人為的にコントロールしようとする試みは、現実社会の中でしばしば変形を余儀なくされる。線引き制度の変形の過程を検討し、人為的制御の難しさを示す。	同上	同上
7	優れた生活空間の基本要素	優れた生活空間であるための物的な条件を検討する。特に都市においては人々の高密な活動が相互に摩擦を生じやすいため、厳しい条件が必要になること、その実現に市場が十分には機能しないことを述べる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	日本の土地利用規制による生活空間の質確保	日本では生活空間の質を確保するためにゾーニングという方法を採用してきた。その歴史的な展開を概観し、良質な生活空間の実現に成功していない理由を示す。	阪本一郎	阪本一郎
9	欧米の土地利用規制による生活空間の質確保	それぞれ異なる方法で土地利用規制を実施しているアメリカ、ドイツ、イギリスについて、規制方法を紹介し、良質な生活空間の実現方法としての性能を検討する。	同上	同上
10	私権の制限と社会の支持	土地利用規制は土地所有権の制限を意味するため、しばしば強い反対を生じ、有効な規制を実施できないことになる。いかにして社会の了解と支持を得て有効な規制を可能にするかを、イギリスやアメリカのケースをとりあげながら考察する。	同上	同上
11	都市基盤の構築	良質な生活空間を実現するためには開発の制限だけでなく、道路、公園などの社会基盤施設の建設が必要である。日本ではどのようにこの課題に取り組んできたかを概観し、基盤構築上の課題を述べる。	同上	同上
12	都市再開発―負の遺産の解消と社会変化への対応	貧困な都市基盤の故に生活空間として種々の問題を抱えた市街地、社会が変化する中で新しい要請に応えられない市街地、これらの地区の再開発について歴史的に概観し、そのあり方や実現方法について述べる。	同上	同上
13	開発の担い手と費用負担	良質の生活空間を実現するためにはこれに貢献する開発が必要となる。誰がそのような開発の担い手となるか、誰がその費用を負担するか、どのようにして開発を誘導するかといった点を検討する。	同上	同上
14	都心空間の再生	都市中心部から居住者が居なくなる空洞化現象、郊外のショッピングセンターとの競争に敗れ活力を失いつつある中心商業地、これらの問題を抱える都心部の再生をいかにして図るか、また何故再生が必要かを述べる。	同上	同上
15	生活空間のサステナビリティ	環境問題で注目されている持続可能性は、生活空間の長期的な維持を考える上でも重要な概念である。これまでに提案された生活空間を持続可能性の観点から検討し、未解決な点を考慮する。	同上	同上

＝ 環境アセスメント（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：原科　幸彦（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

持続可能な発展は世界の環境政策のキーワードであり、環境アセスメントはそのための基本的な手段である。計画などの人間行為の意思決定において透明な形で環境配慮を行うことがアセスメントの本質である。方法論的にはシステム分析が基礎であり、透明性を高める工夫が環境先進各国で行われているが、我が国はこの点で欧米に遅れている。米国よりも我が国に近い状況である先進国として欧州諸国の事例も多く紹介して、アセスメントのあり方について考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	持続可能な発展	人間活動と環境（スイス）、東京とニューヨークの土地利用比較（空撮）、環境問題の変遷、ＮＥＰＡ リオの地球サミット、持続可能な発展、環境基本法、環境と開発の対立を超えて調和へ、環境共生都市（Freiburg）、環境共生型の住宅地開発 アセスメントは人間行為の意思決定への環境配慮の手続き	原科幸彦（東京工業大学教授）	原科幸彦（東京工業大学教授）
2	環境アセスメントとは何か	環境に配慮した人間行為の選択、判断形成の透明化、環境配慮の説明責任、情報公開と住民参加 政策分析としてのシステム分析、科学的・民主的手続き、代替案の比較検討：Mission Bay、横浜市青葉区の道路作り アセスメントの手続き	同上	同上
3	コミュニケーションの方法	アセスは情報交流のツール、コミュニケーションが基本 アセス法による手続き、対象事業の選定、方法書、準備書と評価書、文書による方法と会議による方法、 説明会（神奈川県の事例） 公聴会（川崎市の事例） 問題点と改善方法	同上	同上
4	検討範囲の絞り込み	検討範囲の絞り込み（スコーピング） 代替案の列挙、評価項目の選定、影響範囲の確定、調査の方法、現状把握、予測の方法、予測モデル、予測の前提、評価の方法	原科幸彦 村山武彦（福島大学助教授）	原科幸彦 村山武彦（福島大学助教授）
5	予測手法（1） 自然関連項目	環境汚染：大気汚染、悪臭、水質、土壌汚染、地盤沈下、騒音・振動、パソコンの活用事例 自然環境：貴重な動植物の保護、生態系の変化	村山武彦	村山武彦
6	予測手法（2） 社会関連項目	社会環境：景観の変化（予測システム）、街並みと自然景観、人と自然の触れ合い、身近な緑の保全、コミュニティ、文化財、歴史的環境、廃棄物 地球環境：温暖化効果ガス	同上	同上
7	環境影響の評価	項目別の評価、定性的評価と定量的評価、評価関数、評価結果の表示 解釈（総合評価）、相対評価、Dr.Therivelのコメント、重みづけ 総合評価の例、Jackson, Wyomingの下水処理場の評価例、誰の重みか、単一指標は必要か	原科幸彦	原科幸彦

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	日本の制度の歴史	我が国の制度成立の経緯、歴史と背景、環境汚染と自然保護 国の制度と自治体の制度 地方自治体の制度化、川崎市の条例アセス、東京都・神奈川県・名古屋市等個別法等による制度化、法制化の失敗と閣議アセス 環境影響評価法の成立、環境基本法、第20条：環境影響評価制度の推進	原科幸彦	原科幸彦
9	日本の現行制度	環境影響評価法の特徴 これまでの実績 最近の事例：藤前干潟の埋め立て事業（アセス結果と事業計画の意思決定） 恵比寿ガーデンプレース(NGOの力とフォローアップ) アセス法の活用と問題点	同上	同上
10	欧米のアセス制度と事例	欧州でも事業アセスが中心、代替案の比較検討は行う、 欧州とアメリカの制度 日本との比較：計画との連動、住民参加、情報公開 アセスの具体事例 イギリスの事例：英仏海峡トンネル オランダの事例：アムステルダム近郊の住宅地開発 (Mr. Verheem)	同上	同上
11	積極的な住民参加	我が国は不十分な住民関与、住民参加には情報公開が不可欠 欧米に見る積極的な住民参加の事例 Mission Bay開発のアセス事例 我が国における新しい動き 狛江市のごみ中間処理場建設計画 横浜市青葉区の住民参加による道路作り	同上	同上
12	アセスメントと紛争	アセスメントによる環境紛争の発生 紛争解決の方法、裁判よりも話し合いで、調停（mediation） 紛争解決の事例 Seattleの道路建設 Jackson, Wyomingの下水処理場建設	同上	同上
13	戦略的環境アセスメント	環境配慮した人間行動の管理、東京とロンドンの土地利用比較（空撮）、累積的影響の除去、成長管理、土地利用計画が必要 Strategic Environmental Assessment(SEA)、Dr. Therivel 世界の動向：Dr. Sadler、ＥＵの動向 ＳＥＡの事例：地域計画の例、イギリス、Kent County, UK, Prof. Banister 政策の例、オランダの廃棄物処理10ヶ年計画	同上	同上
14	環境計画とアセスメント	環境基本計画：京都の環境計画を事例に ＣＯＰ3のフォローアップ（京大・内藤正明教授） 歴史環境の保全と近代化、京都駅ビルと南禅寺の対比、路面電車の活用 環境と調和したZurichの交通システム 地域の総合計画が必要、計画への参加、早期段階での環境配慮	同上	同上
15	アセスメントの今後	地球環境問題への対応（Think Globally, Act Locally） 地球規模の視野で、日本の海外援助と環境配慮 世界はＳＥＡ的アプローチ：世界銀行の環境配慮 環境との共生を目指して こうもりの飛行シミュレーション、Prof. Schmid 計画制度と環境配慮の運動：イギリスの例、Prof. Hall と Mr. Zetter	同上	同上

＝ エネルギー工学と社会（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：牛山　泉（足利工業大学教授）〕

全体のねらい

エネルギー工学と現代社会の関わりをいろいろな視点から明らかにする。国内外のエネルギー事情や地球規模での環境問題を調べ、次に、エネルギー技術や環境問題の歴史をたどる。さらに、エネルギー技術と現代社会の現状を学んだ後、エネルギー工学と持続可能な社会の構築に向けて将来のあるべき姿を展望する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	エネルギーと現代社会	現代社会の経済活動は化石燃料を中心とする大量のエネルギー消費により支えられているが、これに伴なう環境問題が顕在化している。これら経済、エネルギー、環境のトリレンマについて考察する。	牛山　泉（足利工業大学教授）	牛山　泉（足利工業大学教授）
2	世界のエネルギー事情	世界の一次エネルギー消費量とエネルギー資源の埋蔵量とを比較し、国際的なエネルギーの需要と供給の現状を明らかにすると共に、エネルギー資源がいつまでもつのかについて考察する。	同　上	同　上
3	日本のエネルギー事情	日本国内における近年のエネルギー需要と供給の動向を明らかにし、産業、民生、運輸の各部門のエネルギー消費やエネルギー転換部門の現況について調べる。また、経済成長とエネルギー消費についても考える。	同　上	同　上
4	地球環境問題とその解決策	地域規模での環境問題を分類し、地域環境問題とエネルギー消費の関係を調べる。また、温暖化や酸性雨の問題と二酸化炭素排出量の現状を明らかにすると共に、問題解決の対策を考える。	同　上	同　上
5	エネルギーの社会学	エネルギー問題と現代社会の関係を概観した上で、エネルギーと国際政治、エネルギーと環境との調和、エネルギーの安全保障、さらには、エントロピーと世界観などについても言及する。	同　上	同　上
6	エネルギー工学の技術史	エネルギー工学のうちで主に動力技術に焦点を絞り、水車や風車のような自然エネルギーの利用から、熱エネルギーから動力を取り出す蒸気機関や内燃機関、さらには電気エネルギーについても述べる。	同　上	同　上
7	エネルギー技術と環境問題の歴史	エネルギー資源とその利用技術の歴史を木材・木炭の時代から石炭への転換、さらには石油文明の時代へとたどり、これらに伴なう大気汚染などの環境問題についても明らかにする。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	エネルギー技術と日本の産業社会	日本における産業、民生、運輸の各部門におけるエネルギー需要の変遷と現状について明らかにし、エネルギー供給の側からは、石油、石炭、ガス、電力の産業構造とその動向について調べる。	牛山　泉	牛山　泉
9	エネルギー交換の技術	現代社会の産業・経済活動を支えているエネルギー技術のうちで、エネルギー変換の工学について焦点を絞り、力学、熱、化学、電気、光・放射の各エネルギーの変換について概括する。	同　上	同　上
10	原子力発電システム	現代のエネルギーシステムの中で賛否両論のある原子力発電について、世界の原子力発電の現状、原子力発電のしくみと燃料サイクルについて学び、原子力利用の安全性と経済性について考える。	同　上	同　上
11	自然エネルギー利用技術	環境に優しいクリーンなエネルギー源である自然エネルギーの利用技術を、太陽光・太陽熱、海洋熱、地熱などの熱や光と、水力、風力、波力なでの液体エネルギー、さらにはバイオマスとに分けて概説する。	同　上	同　上
12	エネルギー評価	エネルギーの有効利用を考える上で、エネルギーの適正な評価が不可欠である。そこでエクセルギーという概念を導入して、資源と環境を再評価すると共に、エネルギーの利用効率を評価する。	同　上	同　上
13	省エネルギーとエネルギーパス	現代社会における省エネルギーの取り組みについて明らかにすると共に、エネルギーの消費構造を調べ、ソフトエネルギーパスの選択によるエネルギーの有効利用の可能性について考察する。	同　上	同　上
14	開発途上国とエネルギー問題	開発途上国における人口爆発とこれに伴なう食糧不足やエネルギー不足が深刻化している。持続可能な開発のための途上国援助をエネルギー及び環境問題の視点から提案する。	同　上	同　上
15	エネルギー工学と持続可能な社会	エネルギー問題と環境危機について再認識すると共に、環境と調和する将来の持続可能な社会のあり方を提案し、これに果すべきエネルギー工学の役割りや目標について考える。	同　上	同　上

＝ 電子技術と社会（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：後藤 尚久（拓殖大学教授）〕

全体のねらい

18世紀末の産業革命ではエネルギーと交通が飛躍的に発展したが、現在の情報と通信に関する産業の発展はこれに対応しているという。本講義では、情報と通信の発展の歴史にはじまり、現在この産業を支えている電子技術のポイントを解説するとともに、電子技術の発展が社会に当てるインパクトを展望する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	情報と通信のビックバン	エネルギーと交通の手段が飛躍的に発展した18世紀末の産業革命は、情報と通信が急速に発展している現在に似ている。エネルギーが情報に、交通が通信に対応するため、今後、情報通信がどのように発展するかを、産業革命の結果から予測する。	後藤尚久（拓殖大学教授）	後藤尚久（拓殖大学教授）
2	電気通信の基礎	電気通信の基礎と特長を簡単に解説する。線路を用いたモールス通信を例にして、光速で情報が伝送できることを示す。通信容量を増やすための周波数多重通信の発明、さらに、ＦＤＭＡ、ＴＤＭＡ、ＣＤＭＡなどの通信方式をとり上げる。	同上	同上
3	電波の有効利用	電波を利用する無線通信や放送では、電波を放射する範囲が重要である。そこで、衛星放送、ＶＨＦテレビ放送、携帯電話、ＰＨＳなどのシステムで、電波を放射する範囲（セル）の大きさと、電波の有効利用の関係を考察する。	同上	同上
4	電磁波と周波数	電気信号の周波数は、有線通信、無線通信ともに重要な役割を果たしている。無線通信では、人類共有の財産といわれる周波数の有効利用が重要である。電磁波と周波数の関係を解説し、最近の「電磁波は危ない」という風潮にコメントする。	同上	同上
5	電話の歴史	電話は、現在最も広く利用されている情報通信技術であるが、その仕組み、技術的な進展の経緯と将来動向について説明する。さらに、二人の人間が遠隔地間で会話するという電話の特性から発生する技術的問題について論じる。また、この技術が社会に受け入れられるまでにどのような議論があったかについても言及したい。	伊澤達夫（NTTエレクトロニクス㈱代表取締役社長）	伊澤達夫（NTTエレクトロニクス㈱代表取締役社長）
6	光ファイバー通信	光ファイバー通信技術は、現在最も多くの情報を送受信できる技術である。その技術の基本的な原理、能力の限界について述べる。さらに、この通信技術に使われる主要部品である光ファイバーや半導体レーザなどについて概説する。また携帯電話のような無線通信技術と比較してこの技術がどのような位置づけにあるのかについても言及する。	同上	同上
7	第2世代の光ファイバー通信	光ファイバーの原理は19世紀後半に発見されたが、どのような経緯を経て通信に使われるに至ったかについて背景にある関連技術も含め概説する。さらに、講師らが開発した光ファイバーの作り方について説明する。また、この技術から派生した光のプリント配線板とも言える光回路部品についても説明したい。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	マルチメディア社会の将来像	無限と言って良い程大きな通信能力を持つ光ファイバ通信ネットワークが発展すると、将来の情報通信はどのように変貌する可能性があるか大胆に予測してみたい。また、そのために必要な技術的背景の現状について説明する。さらにその進展が、他の技術にどのような影響を与えるかについても言及したい。	伊澤達夫	伊澤達夫
9	トランジスタの誕生とシリコン技術の進展	新しい原理に基づく進行波管等を創出し、真空管エレクトロニクスがまさに絶頂期を迎える時に、トランジスタは誕生し、素材をゲルマニウムからシリコンに変えて、今世紀後半のエレクトロニクス大発展の主役となる。	大見忠弘（東北大学教授）	大見忠弘（東北大学教授）
10	電子回路から超ＬＳＩへ	正負の電荷を持つホール、電子を自在に発生する半導体を用いたトランジスタは、夢のスイッチといわれるＣＭＯＳ回路を誕生させ、直結型回路構成超ＬＳＩにより、今日のコンピュータ時代の隆盛を築いた。	同上	同上
11	超ＬＳＩの生産方式	1cm^{2}程度のチップ内に、7～10億個程度のトランジスタ等を集積化する超ＬＳＩは、ゴミや水分、分子状、原子状・不純物にきわめて敏感であり、エントロピーゼロすなわち、汚染やゆらぎ、変動がない生産方式を要求する。	同上	同上
12	知的機能を備えたシステムへ	今のコンピュータは機能向上とともに使用者に大量の訓練を要求する。人に優しい誰にでも使える21世紀型コンピュータワールドを目指して、知的機能を備えた対話型システムへの挑戦が今世界中で展開されている。	同上	同上
13	情報の記録の過去と現在	情報の記録再生の意義と歴史から各極メモリの形態までを概説する。特に光メモリについてはＭＯなどの具体例についても述べ、ＤＶＤにも触れる。これらのメモリの出現による社会の変革について指摘する。また、大きな通信情報システムのなかで大規模メモリが使われている例、現状などについても述べる。	大津元一（東京工業大学教授）	大津元一（東京工業大学教授）
14	光によるメモリ技術	2010年の社会が要求される情報の記録再生について、最近調査された技術予測を紹介する。この内容をもとに、まず、近未来型のメモリ技術、特に光メモリ技術について述べる。ホログラフィックメモリ、記録再生用の青色レーザの開発などについて触れた後、ＳＩＬ技術について述べる。	同上	同上
15	情報の記録の将来	前回の内容に呼応し、将来のメモリ技術、特に光メモリ技術について述べる。そのうち急展開が見られている近接場光技術について、原理と実際を述べる。この技術はさらに計測、加工に、さらには原子の操作加工へと発展することを指摘し、21世紀の基盤技術となり得る可能性を論じる。	同上	同上

＝ 情報工学（’９９）＝（ＴＶ）

〔 主 任 講 師 ： 都 倉　信 樹（大阪大学教授）〕

全体のねらい

情報工学で扱う事項は非常に広く深くなっている。この講義では、その入門として、この分野の基礎的な概念と基本的な知識とともに、この分野の考え方を伝えることを目指す。(http://tokweb.ics.es.osaka-u.ac.jp/)

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	コンピュータ	情報工学の対象分野の全体像の簡単な概観とこの講義の全体構想にふれる。応用事例としてバーコードを取り上げる。	都倉信樹（大阪大学教授）	都倉信樹（大阪大学教授）
2	情　　報	情報とは何か、データ、コード化などの概念を、身の回りの情報についてみていく。情報量の比較、アナログとディジタル。	同　上	同　上
3	データの表現	データの表現法について考える。各種の符号を紹介し、２進法についてやや詳しく扱う。	同　上	同　上
4	回　路　素　子	コンピュータは電気で動くこと、その構成要素を簡単にみていく。	同　上	同　上
5	組合せ回路	2値関数、ゲート、2値関数の簡単な性質、回路の解析法、標準形、関数の実現法、簡単化、回路例などを通じ、原理的にいかなる2値関数もゲート回路で実現できることを示す。	同　上	同　上
6	データの加工	論理演算、シフト、2進数の加算、減算の方法と、それらの機能を果たすＡＬＵについて、説明する。	同　上	同　上
7	記　　憶	記憶装置について、ＩＣメモリ、磁気記録、フリップフロップなどを説明し、レジスタと順序回路の話に至る。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ＣＰＵの構成(1)	計算の手順と、コンピュータの命令について導入的な説明を行う。	都倉信樹	都倉信樹
9	ＣＰＵの構成(2)	アドレシングモードの概念を説明する。ＣＰＵの構成と命令について説明する。	同上	同上
10	コンピュータの仕組み	ＣＰＵの制御の方法を考える。外部バスとのデータのやりとり、入出力と割り込みについて述べる。	同上	同上
11	割り込み	割り込みとその処理、内部割り込みについて説明する。	同上	同上
12	オペレーティングシステム	ＯＳの役割、コンピュータの使用形態、入出力管理、ファイル管理、プロセス管理等について、簡単な説明を行う。	同上	同上
13	コンピュータと通信	通信とはどういうことか、通信の実際、そして、特にデータ通信について、考える。	同上	同上
14	ネットワーク	ネットワークのさまざま、ネットワークプロトコルの下位置から順に説明する。特に、多重アクセス方式についてややくわしく説明する。	同上	同上
15	情報化社会	情報化社会の状況と課題について、考える。	同上	同上

＝ プログラミング入門（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：都倉 信樹（大阪大学教授）〕

全体のねらい

プログラムを作ることは、苦しさとできあがったときの感激の両方を味わうことである。苦しさをできるだけ軽減し、よりよいプログラミングをするための方向を見出すことを目指す。
(http://tokweb.ics.es.osaka-u.ac.jp/)

コラム　齊藤明紀（大阪大学大学院基礎工学研究科講師）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	プログラミング	1.1 なぜプログラミングか 1.2 プログラムとプログラミング 1.3 ソフトウェア開発	都倉信樹（大阪大学教授）	都倉信樹（大阪大学教授）
2	プログラムの構成要素	2.1 いくつかのプログラムの形 2.2 処理の記述 2.3 プログラムの要素 2.4 処理手順の記述	同上	同上
3	プログラム言語	3.1 言語の概観 3.2 言語の構成要素 3.3 文 3.4 データ型 3.5 その他	同上	同上
4	構文の記述	4.1 拡張ＢＮＦと文脈自由文法 4.2 構文図 4.3 具体構文と抽象構文 4.4 正規表現	同上	同上
5	探索 1	5.1 配列 5.2 データの性質を知る 5.3 キーを持つデータの探索	同上	同上
6	探索 2 文字列探索	6.1 文字列型、テキスト 6.2 文字列探索 6.3 Knuth-Morris-Prattの方法	同上	同上
7	ソート 1	7.1 キーの順序 7.2 ソート法 1 7.3 アルゴリズムと評価	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	再帰	8.1 変わった計算 8.2 手続き・関数	都倉信樹	都倉信樹
9	ソート 2	9.1 マージソート 9.2 クイックソート	同上	同上
10	木	10.1 集合、表 10.2 抽象データ型	同上	同上
11	式	11.1 電卓 11.2 変わった式 11.3 式の計算	同上	同上
12	アセンブラ	12.1 アセンブラの仕様 12.2 アセンブラの設計	同上	同上
13	コンピュータのシミュレータ	13.1 COMET 13.2 シミュレータの設計	同上	同上
14	時間の扱い	14.1 時間を知る 14.2 マウス 14.3 表示 14.4 シミュレータ 14.5 実時間システム	同上	同上
15	さらに、学ぶために	15.1 補足 15.2 さらに学ぶために 15.3 参考書	同上	同上

＝ 産業人間工学（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：池田　良夫（愛知工業大学教授）〕

全体のねらい

現代産業社会で生産性の向上は必須であるが、そのために人々の労働安全、衛生、福利が犠牲となってはならない。人間工学は、所与の環境条件が人間の機能に整合するように環境の整備または設計に関する学際的技術体系である。本講座は働く人々の活動とその場に焦点を当て、人間工学の知見と応用を講述し、生産性向上にも役立つことを紹介する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	産業システムの構成と講座概要	産業システムは人間と労働をめぐる広義の環境とで構成される。環境は狭義の環境条件と機械設備と仕事・手続きなどで構成される。このシステムは効果的・効率的で、人にやさしいことが望ましい。人間と環境とを整合する概念を概説し、講座の概要を紹介する。	池田良夫（愛知工業大学教授）	池田良夫（愛知工業大学教授）
2	ディスプレイ機能と情報処理系	人間と環境との相互作用で、ディスプレイは環境側から人間の感覚器官に受容される刺激や情報をさし、狭義には情報を提供する機器・表示器をさす。表示機器と人間の感覚・知覚・認知機能の特性とその能力とに適合したディスプレイの設計について概説する。	同上	同上
3	ヒューマンエラーとその低減・防止方策	人間はエラー（ミス）をする動物である。それが引き金となり、大事故を招くこともある。エラーの根元はヒューマン・ディスプレイ・インターフェイスの不適合にある。エラーとは何か、どのような種類のものがあり、それを未然に防ぐ対策を検討する。	小松原明哲（金沢工業大学教授）	小松原明哲（金沢工業大学教授）
4	コントロール機能と制御系	コントロールは人間側からの働きかけに対する環境側の受容部分で、狭義には機械器具の制御操作系をさす。そこでは、人間の制御・運動機能と狭義な作業姿勢とに配慮した使いやすいコントロールへの設計がある。	池田良夫	池田良夫
5	職場・職務の設計と設備保全	科学的管理法の原理と生産管理システムの概要を説明し、ディスプレイとコントロールと人間機能と周辺環境とを効率的・効果的に配置することを述べる。また、設備性能維持のために保全が不可欠なので、設備保全への諸問題にもふれる。	同上	同上
6	職場環境の改善とＩＬＯトレーニングマニュアル	学校給食調理現場や中小企業での取り組み経験をもとに、職場環境改善の課題領域と改善プロセスについて解説する。職場環境改善にとって有効なＩＬＯのトレーニングマニュアルやアクション型チェックリストなどをとりあげて、職場での応用方法について検討する。	酒井一博（(財)労働科学研究所所長）	酒井一博（(財)労働科学研究所所長）
7	生産性向上のための作業改善と産業人間工学	企業間の競争は厳しい。中小企業の多い総菜製造業を例に、生産性向上のための作業改善について、産業人間工学的視点から解説する。特に、作業能率の向上をめざすあまり、作業者の安全と健康の視点が見落とされがちであるが、その視点を含め、コストも考慮したい。	岸田孝弥（高崎経済大学教授）	岸田孝弥（高崎経済大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	高齢化労働と人間工学的対策	中高年労働者（年令45～65歳）を対象とした職場管理のすすめ方を中心として講義する。あわせて、労働と密接な関連性を有する生体諸機能の加齢変化を概説し、これらの変化を考慮した産業社会の人間工学的対策のあり方についても概説する。	神代雅晴（産業医科大学教授）	神代雅晴（産業医科大学教授）
9	労働時間・勤務制と人間工学	私たちが産業界で働く上で労働時間や勤務制の問題は最も基本的な事柄のひとつである。過大な労働時間や交替勤務による生理的・心理的な影響をとりあげながら、適正な働き方について考える。	酒井一博	酒井一博
10	熟練技能と人間工学	自動化が進む製造業においても、機械の調整、製品の試作などに熟練工がその腕を振るっている。また、伝統工芸等は、職人の技に支えられている。産業を支える熟練の技を紹介し、その人間工学的課題としての技能継承や、ＣＡＤなどによる技能作業支援について検討する。	小松原明哲	小松原明哲
11	労働とストレス	ストレッサーとストレスとの関係について生理学的な知見から概説し、労働の局面に限定して労働負担＝労働ストレスの観点から職場でのストレス現象を取り上げる。労働ストレスの発現メカニズムとその対処法を概説し、ＩＳＯ／ＪＩＳ関連用語の定義を解説する。	神代雅晴	神代雅晴
12	製品開発の人間工学	製品利用者に「安全」で「使いやすい」モノ作りの研究も重要な課題である。「対話型システムの設計原理」や「機械・安全」などの国際規格も出来つつあり、使いやすさを保障する社会的要請がある。事例を通じて、製品開発への人間工学の適用を検討する。	小松原明哲	小松原明哲
13	ＰＬ（製造物責任と産業人間工学	ＰＬ法が成立し、実施され、ＰＬという言葉が定着しつつある。しかし、各種の製品を作る企業側の対応と消費者の受け取り方には、まだミスマッチの場面が多い。使用者の不注意という言葉で片づけられているものの中に、トラブルの本質が隠されているようである。	岸田孝弥	岸田孝弥
14	緊急時の人間行動と産業人間工学	人間はいろいろな場所で働いている。今まで製造業の現場での安全については多くの研究がなされてきた。今回取りあげるサービス産業や鉄道業には、顧客という生産現場では表されない要因があり、突然の事故や災害にどのように対応すればよいかを考える。	同上	同上
15	人間工学の他産業への応用	今まで、製造業を主体的な話題としてきたが、人間工学の体系は他の産業におけるヒューマン・マシン・システムにも適用できることを概説し、最後に労働安全衛生のマネジメント（ＩＳＯ１６０００）の側面にふれて、本講座を総括する。	池田良夫	池田良夫

＝ 設計学（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：吉川 弘之（放送大学長）〕
〔主任講師：冨山 哲男（東京大学教授）〕

全体のねらい
設計とは工業製品や建築物だけでなく、人間に備わる普遍的な能力である。現代文明はこの設計の営みの結果、築きあげられたといっても過言ではない。この設計を理解するための学問が設計学であり、実例を通じて設計の本質に迫ることが狙いである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	設計とは	いろいろな工業製品だけでなく、設計は人間に備わる普遍的な能力であり、日々の行動においても設計は重要な役割を果たしている。実際の設計のさまざまの例を通じて、設計行為の役割を理解する。	冨山哲男（東京大学教授）	吉川弘之（放送大学長） 冨山哲男（東京大学教授）
2	設計の歴史	人工物の設計の歴史は、設計が人間の創造行為である以上、設計者の意図を反映してきた。また人工物の発展してきた歴史の中で、突然変異的な発明であっても、時代背景や当時の技術を色濃く反映していることを論じる。	同上	同上
3	人工物の進化	設計の進化を歴史的な発展過程で考察すると、技術的な進化、社会的進化、設計技術そのものの進化の3つの軸を反映してきたことが分かる。また、成功例だけでなく失敗例をも理解することが重要である。	同上	冨山哲男
4	製品ライフサイクル	工業製品のコンセプトの誕生から実際に設計・生産され、使用され、最後に廃棄、リサイクルされる一生のことを製品ライフサイクルという。自動車を例にして、ライフサイクルの中での設計の果たす役割を理解する。	同上	同上
5	工業製品の設計過程	工業製品のライフサイクルのうち、設計過程をさらに細かく理解する。どのような製品であっても、設計過程は共通することが多い。また、コンカレントエンジニアリングや計算機の利用など、実際の設計現場で取り入れられている技術を理解する。	同上	同上
6	設計とモデル	設計は「要求から仕様へ」の、属性、挙動、機能に関する情報が次第に詳細化されていく過程である。これらの情報を表現する方法は「モデル」と呼ばれ、設計に関わる情報を作成・伝達するためには欠かせない。	同上	吉川弘之
7	設計図面	設計に関する情報の伝達手段として有効な図面について、JIS製図規格をもとに解説する。また、簡単な機械要素を例に、製図法と加工法との関係を講義する。最後に計算機によるCAD製図について紹介する。	同上	冨山哲男

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	いろいろな設計	設計の様相を紹介する。設計段階（概念設計、基本設計、詳細設計など）、設計スタイル（発明、新規設計、再設計）などの違いを説明する。設計は最適性、信頼性、安全性が重要であり、常にコストとのトレードオフであることを論じる。	冨山哲男	冨山哲男
9	設計学	設計学とは設計を理解することを目的とした学問であるが、対象が人間の行為であるだけに、他の工学とは少し方法論が異なる。まず、設計を実験的に扱う実験設計学を紹介し、設計知識は集合演算的な操作が行われていることを述べる。	同上	同上
10	一般設計学	一般設計学は、公理論的集合論に基づく設計の理論である。まず、人間が持つ設計知識に関する公理を導入すると、設計知識を位相空間として集合論的に扱うことができる。また、公理から設計に関する定理を導出することができる。	同上	吉川弘之
11	設計における推論	推論には基本的に、演繹、帰納、アブダクションの3種類があると言われている。その中でも設計では、C.S.Peirceが提唱したアブダクションが重要な役割を果たしている。さらに、アナリシスとシンセシスについて述べる。	同上	同上
12	設計支援システム（1）	CAD（Computer Aided Design）は現代の工業では欠かせない設計支援技術である。計算機上に幾何形状を表現するための技術として、曲線・曲面の方程式、データ構造などについて述べ、幾何モデル・プロダクトモデルなどの技術を紹介する。	同上	冨山哲男
13	設計支援システム（2）	CADで作成した幾何形状は、その後のプロセスで利用される。その例としてCAE（Computer Aided Engineering）、CAM（Computer Aided Manufacturing）、CIM（Computer Integrated Manufacturing）などのシステムについて紹介する。	同上	同上
14	設計の新しい役割	日本経済の戦後の発展において、設計技術がどのような役割を果たし貢献してきたのかについて講義する。そして、特に製造者責任、地球環境問題などを中心に、設計の今後の課題について述べる。	同上	同上
15	まとめ	本講義のまとめを行う。設計学とは、産業界で実践されている設計活動と、設計の結果としての人工物に関する理解を決めるための学問である。また、計算機による高度な設計支援を実現するための基礎的な学問でもある。	同上	吉川弘之 冨山哲男

＝計　測　と　制　御＝（ＴＶ）

〔主任講師：森　　政弘（東京工業大学名誉教授）〕
〔主任講師：森田矢次郎（拓殖大学教授）〕
〔主任講師：中野　道雄（拓殖大学教授）〕

全体のねらい

希望通りの結果を得ようと対象になっているものに働きかけることを制御という。制御を行うためには、まず対象を知らなければならないし、制御を行った結果を把握しなければならない。このためには計測が不可欠となる。本講義では、社会における計測と制御の学問・技術の適用状況の解説を背景に、計測と制御に必要となる基礎事項を説明し、産業における顕著な応用例を紹介する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	計測と制御の役割	すべてのものごとは、制御なしには所要のはたらきを現わすことはできない。そして制御のためには、計測が不可欠である。計測はまた制御以外にも、人間の知識欲を満たすためなど、人間の重要な行為でもある。ここではこれから学ぶ計測と制御を概観する。	森　政弘（東京工業大学名誉教授）	森　政弘 高瀬國克 森田矢次郎 香川利春 中野道雄
2	計　測　と　は	人類誕生以来今日まで、ものを測るということは、その内容、手段、規模を次第に豊富にしながら行われてきた。ここでは計測の始まり、基本原理、方法、使われる機器やシステムの形態、トレサビリティ、情報と計測などを述べる。	森田矢次郎（拓殖大学教授）	森田矢次郎（拓殖大学教授）
3	計　測　技　術	計測の対象は計器によって測られ、人間にとって理解しやすい数量として変換される。対象に触れて変換を行う計器の部分をセンサというが、この章では具体的なセンサをいくつか取り上げて説明し、その応用について述べる。	同　上	同　上
4	測られる対象とセンサ・計測システム	センサの種類、またそのその使い方は多種多様であるが、それらに共通して見られる特性を考える。制御との関連で特に重要な信号の伝達という面を線形性、たたみこみ、伝達関数などの説明を加えて述べる。	同　上	同　上
5	制御システム	ここでは制御システムについてその概要を述べる。まず“制御”について説明した後、制御信号の伝わり方、それにかかわる伝達関数について述べる。	中野道雄（拓殖大学教授）	中野道雄（拓殖大学教授）
6	ブロック線図とその応用	制御システムを図的に表現する手段としてよく用いられるブロック線図について述べる。	同　上	同　上
7	制御システムの基本特性	この章ではまず制御システムの特性について概説したのち、定常状態の特性と過度状態での特性について検討する。さらに安定問題で重要になる周波数特性についても触れることにする。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	制御システムの分類	制御システムを様々な観点から分類する。その中で制御量に注目して分類した結果、位置もしくは速度、力を制御量とする制御システムをサーボ機構とよんでいる。ここではこのシステムについて述べる。	中野道雄	中野道雄
9	プロセス制	プロセス制御とは温度、レベル、流量、圧力、成分などのプロセスの重要な諸量を適切に操作する制御を言う。まず主なプロセスの例と特徴を示す。次にセンサ、制御装置及び操作機器を述べる。またこれらの要素で構成される制御システムの調整法を示す。	香川利春（東京工業大学教授）	香川利春（東京工業大学教授）
10	ロボットの計測と制御	ロボットは人間の五感に相当する受容器、手足に相当する効果器そして頭脳にあたる知能から構成され、これを実現するためには高度な計測・制御技術を駆使する必要がある。ここでは、種々の計測・制御の統合化技術、知能化手法などに焦点を当て解説する。	高瀬國克（電気通信大学教授）	高瀬國克（電気通信大学教授）
11	ロボットの応用	ロボットの応用範囲は工場での工業応用、建築などのフィールド応用、最近では、アミューズメント、医療福祉、警備等にもどんどん拡大している。ここでは、種々の応用例を紹介し、そこに使われる応用技術を概観するとともに将来を展望する。	同上	同上
12	画像による計測(1) デジタル画像とフィルタリング	近年、計算機の能力が飛躍的に向上するにつれ、ＣＣＤカメラなどで撮影した画像を用いて、そこからさまざまな情報を獲得する機会が増えてきた。ここでは、その際必要となる画像処理の基本と、画像を用いた計測について、応用例を交えながら解説する。	奥富正敏（東京工業大学教授）	奥富正敏（東京工業大学教授）
13	画像による計測(2) 対象の２次元計測と識別	人間は視覚を通じて非常に多くの情報を得ている。同様に視覚情報処理は、コンピュータ（ロボット）にとっても貴重な外界の情報獲得手段となる可能性がある。ここでは、その際重要となる「画像からの３次元情報（世界）の獲得（把握）」等を中心に解説する。	同上	同上
14	画像による計測(3) ３次元構造の復元 人間の視覚とコンピュータビジョンの挑戦	計算機による視覚情報処理としてのコンピュータビジョンの応用例（例えば、３次元計測、ロボット、バーチャルリアリティ等）を紹介すると同時に、それらを通じて、元になる理論の説明、技術的意味の考察等を行う。	同上	同上
15	まとめ	ここでは、各講師がこれまで講義してきた内容について補講し、全体のまとめを述べる。	森政弘 森田矢次郎 中野道	全員

＝ 21世紀への技術発展（’９９）＝（R）

〔主任講師：森谷　正規（放送大学教授）〕

全体のねらい

21世紀に技術はいかに発展するか、社会、生活、産業をどのように変えていくのかを、総合的、体系的に展望する。まず20世紀の技術は何であったかを明らかにして、21世紀の新しい発展方向を示し、各分野について発展の可能性を述べ、それがいかに実現するか、21世紀はいかなる時代になるかを洞察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	技術は変わる	20世紀後半に、エネルギー・物質・情報の技術の基本三要素が出揃って、爆発的な技術発展が生じた。したがって、技術はある意味で成熟に達した。情報技術は急速に進むか、応用が広がるか。これからは「社会」に技術を向ける時であり、21世紀の技術は変わる。	森谷正規（放送大学教授）	森谷正規（放送大学教授）
2	自然を知り、地球環境を守る	技術は、「社会」「人間」「自然」の複雑系に向かうが、まず「知る」ことがきわめて重要になる。地球、大気、海洋などをいかに「知る」ことができるか、地震予知はできるのか、地球温暖化は正しく把握できるのかなど展望する。	同上	同上
3	環境保全とエネルギー	地球温暖化、酸性雨などの地球環境問題は主として化石燃料消費のエネルギー問題である。核融合は期待できるのか、自然エネルギーはいかに伸びるか、新しい発電システム、コジェネレーションはいかに発展するかを展望する。	同上	同上
4	廃棄物のリサイクルへ	静脈産業としての廃棄物処理は、多様に発展し始めた。都市ゴミ処理は新しい方向に進んでおり、プラスチックや廃家電製品など難しかったリサイクルも進み始めた。理想的なゼロ・エミッションにいかに近づきうるのかを展望する。	同上	同上
5	都市を保つ	都市の新技術としては、大深度地下利用や超々高層ビルなどがあるが、現実には、都市が抱えるさまざまな問題を解決していくことが求められている。防災、美観・アメニティ向上、住まいの向上などが大きな課題であり、そうした技術がいかに発展するか。	同上	同上
6	都市内交通の改善へ	ＳＳＴ,リニアエキスプレスなど高速化のシステムは難しい。より重要な技術は、都市内交通であり、とくに自動車がいかに変わるかに最大の関心が集まる。無公害自動車にいかに進むか、事故、渋滞問題を緩和する道路システムはいかに整備されていくのか。	同上	同上
7	人間とバイオテクノロジー	人間を「知る」のは医学によって進められてきたが、遺伝子の解明によって、一段と進み始めた。しかし、なお「知る」べき課題はきわめて多く、いかに進んでいくか。また、農業や工業へのバイオテクノロジーの応用はいかに進むのかを展望する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	医療と福祉の充実へ	医療は、遺伝子治療などにより新たな方向に進み始めている。人間を「知る」ことの寄与も多い。診断機器はさらに進んでいく。また、いよいよ高齢化社会に入り、福祉はいっそう重要になる。それらの技術はいかに進展していくのかを展望する。	森谷正規	森谷正規
9	情報技術は大きく進むが	情報技術は大きく進むが、応用がいかに開けていくのかが、現実の技術発展を左右することになる。まず、その急速に進む技術を、半導体、光ディスクメモリ、通信ネットワーク、コンピュータについて展望する。技術としてはギガを越え、テラに進む可能性がある。	同上	同上
10	家庭の情報化は大きく進むのか	これまで進んだのは一次の情報化であり、これから高次の情報化に進むのだが、それは容易ではない。目的情報、手段情報に分けてネットワーク、パッケージ、放送のそれぞれにおいて、インタラクティブで働きかけを要する高度の情報化がいかに進むかを展望する。	同上	同上
11	産業、社会の情報化はいかに進むか	産業も高度の情報化に進むが、その核となるパソコンはいかに変わるか。また、産業は社会と情報化において深く結びつくが、その一つがＥＣ（エレクトロニック・コマース）であり、一つの画像の駆使であり、それらがいかに進むかを展望する。	同上	同上
12	進めるべき医療と教育の情報化	教育の情報化は遅れているが、カギはコンテンツにあり、その充実を目指すべき時だ。医療にも遠隔診断、電子カルテなどなすべきことは多い。情報化のまとめとして、農業社会、工業社会に対する情報社会の将来像を深く考えてみる。	同上	同上
13	産業はどう変わるのか	技術は成熟したように見える製造業が進む新しい方向は何か。やはり環境問題はきわめて大きい。また、サービス産業はどう変わるのか。農林水産業が技術によって新しい方向に進むのか。技術の担い手としての産業の将来を展望する。	同上	同上
14	新しい技術の時代へ	きわめて高度な人工物を創り出すよりも、非常に複雑な「社会」「人間」「自然」に対する技術を進めていく時代となった。また、「個」の技術から「場」の技術へのパラダイム転換が生じる。技術の基本的な性格が変わり、新しい技術の時代に入る。	同上	同上
15	技術をいかに進めるか	20世紀には、技術はもっぱら企業とくに大企業が進めてきた。しかし、21世紀には、ベンチャー企業の活躍が期待され、また、企業を超えて、政治あるいは広く社会が、技術推進の大きな担い手となる。技術の進めようが21世紀には変わってくる。	同上	同上

＝イノベーション経営（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：亀岡秋男（北陸先端科学技術大学院大学教授）〕
〔主任講師：古川公成（中村学園大学教授）〕

全体のねらい

如何にしてイノベーションを促進し、新産業・新技術を創出するかが現代日本にとって最大の課題である。この課題の解決には、創造的な目標を構想し、イノベーションを起動させ、これを積極的に推進する技術マネジメントが不可欠である。本講座の目標は、技術イノベーションを促進するプロデューサーの養成にある。画期的な技術を開発し、これを事業化し、世界経済の発展に寄与する新産業の創出につなげるという、重要な役割を担うプロデューサーに求められる基本的な知識や考え方を指摘し、イノベーションの推進にチャレンジする意欲の抑揚をはかることに本講座の狙いがある。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	イノベーションとは －イントロダクション－	技術立国日本の産業にとって、技術的なイノベーションを推進する人材の育成が急務である。この章では、技術的なイノベーションが小さく芽生え、徐々に開花して大きな産業に発展するまでのプロセスの全容を概観し、この科目の構成を鳥瞰する。	亀岡秋男 古川公成 講師陣全員	亀岡秋男 古川公成 講師陣全員
2	イノベーションと科学技術 －その歴史的展望－	産業革命以降、今日に至るまで、世界経済の発展は産業技術の進歩に依存するところが多かった。新しい技術が新たな産業の創出につながった歴史上の具体例をいくつか分析しながら、イノベーション推進の条件を考察する。	原陽一郎（長岡短期大学教授・東レ経営研究所顧問）	原陽一郎（長岡短期大学教授・東レ経営研究所顧問）
3	イノベーションのプロセス －最近のイノベーション理論とマネジメントの意義－	新たな技術が大きな産業に発展するまでの長期的かつ広範囲にわたるプロセスを代表的な幾種かの実例について分析し、イノベーションを促進する要因、阻害する要因を指摘し、望ましいマネジメントのあり方を考察する。	同上	同上
4	科学知識の創成プロセス －イノベーションの基盤としての科学知識－	イノベーションの基盤となる科学知識の創成について、大学の役割、研究を支える社会組織や制度、産学連携など、日米欧で比較する。企業が新知識を導入し、これを事業化や産業の育成に役立てる際の選択肢を分析する。	霍見芳浩（ニューヨーク市立大学教授）	霍見芳浩（ニューヨーク市立大学教授）
5	アントルプレナーの創出 －起業家／企業家をどう創るか－	新事業の創出が経済発展に寄与する重要要因として改めて認知されている今、起業家の創出を支援する社会システムや新事業の存続と発展を支える企業や人材のあり方について、経営的および技術的な視点から考察する。	小林喜一郎（慶應義塾大学講師）	小林喜一郎（慶應義塾大学講師）
6	技術・市場の予測と新コンセプト創出 －イノベーションは市場発見とその需要表現が鍵－	産業の基盤技術、需要構造、企業間競争などに変化の潮流を察知し、画期的な新製品や新産業のコンセプトを提示してみせる、ビジョナリー・リーダーがいる。そうしたリーダーの発想と新産業創出のプロセスを分析する。	亀岡秋男	亀岡秋男
7	新製品・新事業の創出 －需要開拓から製品・技術競合、企業競争を経て成長－	画期的な新製品には、忍耐強く、その需要をゼロから開拓する努力が必要になる。新製品が新事業を支える主力製品に成長するまでには、既存製品との競合があり、代替技術との競争があり、新規参入企業との競争もある。	古川公成	古川公成

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	経営戦略と技術戦略 －戦略ドメインとコア・テクノロジー－	自社が得意とする技術力をどのようにして効果的に企業経営に活かすかについて、事業戦略ドメイン、コア・コンピタンス、コア・テクノロジー、および事業活動の組み合わせ（ポートフォリオ）などの視点から考察する。	小林喜一郎	小林喜一郎
9	技術戦略推進のプロセス －画期的新技術と既存製品・技術との抗争過程と新技術の地位確立－	画期的な産業技術が出現すると、新技術に置きかえられるおそれがある既存製品や既存技術の市場地位を守る努力が始まる。市場での、変化への抵抗に対処しながら、新技術の市場地位を確立する方策の選択肢を考察する。	古川公成	古川公成
10	研究開発投資とリターン －Ｒ＆Ｄ生産性の向上－	Ｒ＆Ｄ投資の経済効果や、投資リスクはどんな基準で評価できるかについて、定性的および定量的な考え方を比較検討する。さらにＲ＆Ｄ投資の効果を高める工夫と、Ｒ＆Ｄ活動を管理運営する際の幾通りかの考え方を探る。	許斐義信（慶応義塾大学教授）	許斐義信（慶応義塾大学教授）
11	知識創造の科学 －個人・グループ・組織の知の創造－	知識創造（Knowledge creation）がイノベーションの源泉である。科学技術にも経営にもナレッジマネジメントが重要となる。野中理論を中心に、個人、グループ、組織の知の創造、特に暗黙知と形式知との転換プロセスとその場を理解し実践に生かす。	山之内昭夫（大東文化大学教授）	山之内昭夫（大東文化大学教授） ゲスト 野中郁二郎
12	知的財産の戦略 －世界戦略の主軸に－	技術的な知的財産にかかわる蓄積と管理の仕方は、技術立脚型企業の存続と発展に直接の影響を与える。知的財産権の確立に伴う国境を越えた熾烈な競争と、画期的新産業技術を巡る国際標準化の競争の代表例を分析する。	許斐義信	許斐義信
13	国際競争力 －イノベーション力が鍵－	産業競争力の源泉はイノベーションの力である。国際競争力の定義を明確にした上で、最近米国、欧州諸国、および日本で実施した競争力評価結果を比較し、競争力の要因を分析する。産業競争力強化に向けた政策や企業戦略についても概略を述べる。	山之内昭夫	山之内昭夫
14	ナショナルイノベーションシステム －イノベーション促進への政府の役割－	経済のグローバル化が進む中で、競争のある企業の立地には極端な偏りがある。この状況をナショナルイノベーション・システムという考え方に沿って分析し、技術革新の促進に政府が果たす役割の重要性を考察する。	霍見芳浩	霍見芳浩
15	イノベーションのマネジメント －総集編－	グローバルに展開する技術イノベーションを効果的に推進するイノベーターに求められる考え方や知識、資質や能力、発想や行動パターンを概観する。そうした技術プロデューサーに期待される発想・思考形態や意志決定・行動様式を総括し、この科目の目的を整理する。	亀岡秋男 古川公成 講師陣全員	亀岡秋男 古川公成 講師陣全員

＝ 現代産業組織論（’０１）＝（R）

〔主任講師：井手　秀樹（慶應義塾大学教授）〕
〔主任講師：廣瀬　弘毅（福井県立大学助教授）〕

全体のねらい

産業組織論は、もともと現実・政策指向的な学問である。そこで、本講義では産業組織論の理論的な理解だけでなく、それらが具体的にどのように現実の経済に適用されうるのかまた政策に対してどのような指針を提供しうるのかについても紹介する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	産業組織論の課題と方法	一般には聞き慣れない「産業組織論」の課題と方法、そしてその分析領域について解説する。そして、産業組織論において基本的な概念である「市場構造」「市場行動」「市場成果」の概念について、正しく理解を深めさせる。	井手　秀樹（慶應義塾大学教授）	井手　秀樹（慶應義塾大学教授）
2	市場組織と経済厚生	市場組織と経済厚生を考える上で、基準となる「市場」について解説する。「完全競争市場」、次に「独占市場」を理解させた上で、現実の経済でもっともよく見かける。「寡占市場」の特徴を明らかにする。また、寡占市場の分析に固有の難しさも解説する。	廣瀬　弘毅（福井県立大学助教授）	廣瀬　弘毅（福井県立大学助教授）
3	市場構造	産業組織論の分析の出発点となる「市場構造」の概念について解説する。特に、市場構造の要因である「集中度」、「製品差別化」、「参入障壁」、「規模の経済性」などの概念を、具体的な分析にも生かせるように解説する。	井手　秀樹	井手　秀樹
4	寡占理論（1）	産業組織論における理論的分析の焦点である「寡占理論」を２回にわたって取り上げる。第４章では、寡占市場において、前章で見たような市場構造要因が、企業行動にどのような影響を与えるのかを中心とした理論的な分析を展開する。	廣瀬　弘毅	廣瀬　弘毅
5	寡占理論（2）	本章では、寡占市場における企業行動の典型的なものである、「カルテル・談合」や「プライスリーダーシップ」を理論的な分析をした上で、具体的な事例も挙げながら理解を深めさせる。この際に、市場構造と市場成果との関連をわかりやすく解説する。	同上	同上
6	垂直的取引制限	本章では、垂直的取引制限を扱う。ここでは、どのような場合に垂直的取引制限が生じやすいのか、そしてこのような取引制限行為がどのような市場成果をもたらしうるのかを解説する。	井手　秀樹	井手　秀樹
7	産業の事例研究（1）	本章では、ここまで学んできた産業組織論の基本的な枠組みをもとに、具体的な産業分析の事例研究を行う。まずはじめは、典型的な素材型産業である鉄鋼業を扱う。鉄鋼業では、設備が巨大となり、設備稼働率が重要であることなどを解説する。	村田　修造（神戸大学講師）	村田　修造（神戸大学講師）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	産業の事例研究(2)	本章では、耐久消費財産業の典型事例として自動車産業を取り上げる。自動車産業においては、世界的なメーカーの再編の嵐が吹き荒れている。その背景にある巨額にのぼる技術開発費負担の問題などに焦点を絞り、自動車産業の今後を展望する。	廣瀬　弘毅	廣瀬　弘毅
9	産業の事例研究(3)	本章では、消費財産業でありながら、少し変わった市場行動を強いられるタイヤ産業を取り上げる。タイヤ産業は、その市場のパイの大きさが自動車の台数に限られてしまう一方、巨額の設備投資が必要なので、市場シェア獲得が死活問題になっている点などを解説する。	竹内　規浩（福井県立大学教授）	竹内　規浩（福井県立大学教授）
10	産業の事例研究(4)	本章では、典型的な消費財産業である食品産業を取り上げる。食品産業では、日常的に購買が行われる財であるが、加工度が高いほどブランドなどによる製品差別化が働きやすい。一方、加工度が低いものは価格弾力性が大きくなるなど、大きな特徴を有している。	廣瀬　弘毅	廣瀬　弘毅
11	独占禁止政策	本章では、主にアメリカにおける独占禁止政策（反トラスト政策）の展開を解説する。特に、世界で最初にこの政策が導入された経緯や、昨今の独占禁止政策を巡って行われている論争などを、新たな経済の変化とともに理解させる。	竹内　規浩	竹内　規浩
12	産業政策	（ドイツ歴史学派を除き）産業政策の理論的な分析の歴史は、実はそれほど古くはない。そこで、本章では、産業政策の理論を、重要な概念である「学習効果」と「規模の経済性」を軸に解説する。その上で、この政策の持つ政治的な困難さ・限界を理解させる。	廣瀬　弘毅	廣瀬　弘毅
13	直接規制政策(1)	直接規制政策は、昨今の規制緩和の潮流の中でも中心的な分野となっている。そこで、本章ではまず直接規制の必要性を理論的に明らかにし、さらに実際の規制がどのように行われているのかについて、規制の持つ問題点とともに解説する。	井手　秀樹	井手　秀樹
14	直接規制政策(2)	本章では、直接規制の規制緩和が叫ばれるようになった背景を理論的に示す。そして、その上で、実際にどのように規制緩和が進められてきたのか、そしてそれらがどのような成果を生みだしてきたかを検証し、規制緩和問題を広く理解させる。	同　上	同　上
15	これからの産業組織論	本章では、これまでの議論で取り上げられなかった範囲について、補足的に解説する。さらに、産業組織論における最近の理論的な発展や範囲の拡大についても展望する。そして、産業組織論を総括する。	同　上	同　上

＝ ベンチャー企業論（’０１）＝（R）

〔主任講師：藤川　彰一（（株）ジャフコ産学連携チームシニアーマネージャー）〕
〔主任講師：柳　　孝一（　早　稲　田　大　学　教　授　）〕

全体のねらい

21世紀はベンチャー企業の時代であると期待されている。ベンチャー企業とは何かから始まり、ベンチャー企業の現状を日米の比較をしながら明らかにする。さらにベンチャー企業を支援するベンチャーキャピタル等についてもふれながら、ベンチャー企業について、体系的な理論、知識、見識を身につけてもらうことがねらいである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ベンチャー企業の時代へ	ベンチャー企業の定義を示し、中小企業との違いを明らかにする。産業構造が大変革する中でなぜベンチャー企業が注目されるのかを明らかにする。さらに既存の大企業や中小企業が、新規事業への多角化のために起こす、企業革新型ベンチャーについても言及する。	柳　孝一（早稲田大学教授）	柳　孝一（早稲田大学教授）
2	日本のベンチャー企業の歴史	戦後生まれたソニーや松下電器もベンチャー企業から出発した。今まで日本では、３回のベンチャーブームがあった。今回は95年に制定された「中小企業創造法」が契機となっている。今までの歴史をふりかえりながら、今後の展開方向を探りたい。	同　上	同　上
3	ベンチャー企業経営論（Ⅰ）（構造的アプローチ）	ベンチャー企業は、新規事業への挑戦を行うためリスクが高い。リスクを下げるためには成功したケースから、体系化された経営理論を構築し、それを学ぶ必要がある。まず成功時点に立って、当該企業の主要成功要因を集め一般化して「四面体理論」を形成した。	同　上	同　上
4	ベンチャー企業経営論（Ⅱ）（成長ステージ別アプローチ）	ベンチャー企業は、昆虫の“変態”に例えられるほど、成長ステージごとにマネジメントを変革する必要がある。成長ステージ別に変革するには、経営要素の内容を変えると共にウエイトも変化させなければならない。その変革の力は、経営資源の自己回転力による。	同　上	同　上
5	米国のベンチャー企業の歴史	第二次世界大戦後、米国に輩出したベンチャーの代表企業を紹介する。革新的な技術、新しいコンセプト等に基づいて起こされた企業の殆どがベンチャーであったことを明らかにする。	藤川　彰一（（株）ジャフコ投資開発チームシニアーマネージャー）	藤川　彰一（（株）ジャフコ投資開発チームシニアーマネージャー）
6	米国のベンチャー活躍の現状	1990年代に入って、ベンチャー企業への投資が飛躍的に拡大した。その背景とベンチャーが活躍するインターネット分野の歴史と具体的な企業を紹介する。インターネット以外の分野のベンチャーについても説明する。	同　上	同　上
7	米国のベンチャーキャピタル	米国でベンチャー企業の発展を支えた最大の要因の一つであるベンチャーキャピタルの歴史を紹介する。また、ベンチャーキャピタルの資金フローのしくみ、ベンチャーキャピタリストとベンチャー企業の関係をも明らかにする。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	日本のベンチャーキャピタル	日本のベンチャー企業の資金調達の現状を紹介する。日本のベンチャーキャピタルの歴史を記し、ベンチャーファイナンスに占める役割を明らかにする。米国との比較から、21世紀のベンチャーキャピタルの方向をしめす。	藤川　彰一	藤川　彰一
9	ベンチャー企業の現状	ベンチャー企業が期待されるにしたがって、多くのベンチャー企業が生み出されてくる。全体として、どのような事業や業種、業態が多いのか。又支援制度との関係や問題点なども明らかにしたい。またインターネット関連等最先端の働きも紹介してみたい。	柳　孝一	柳　孝一
10	ベンチャー企業の経営者	ベンチャー企業の成功要因で最も重要なことは、起業家の能力、すなわち「起業力」ということになる。ここでは、ベンチャー企業で成功した経営者の能力を分析し、これからの起業家に役立つ内容としたい。起業力を身につけるにはどうするかについても含めたい。	同上	同上
11	ベンチャー企業と株式公開	ベンチャー企業にとっての株式公開の意味ーメリットと義務ーを明らかにする。日本のベンチャー企業の株式公開に大きな役割を果たしてきた店頭市場の歴史を紹介する。90年代末の新しい市場の動きをしめす。	藤川　彰一	藤川　彰一
12	ベンチャー支援政策・制度	90年代後半に打ち出されたベンチャー支援政策の概要をしめし、制度について説明を行う。また、ベンチャー企業にとって，支援制度の活用の方法と注意点を明らかにする。ベンチャー支援制度だけではなく、社会全体の変革の必要性についても記す。	同上	同上
13	日本のベンチャー企業 ケーススタデイ	最近注目されているベンチャー企業について業種等を考えながら３社ほど取り上げ、ケーススタデイを行う。起業の動機、成功要因、起業力の自己評価、経営的な危機、支援制度の活用等について、可能であれば、起業家の話を直接聞きながら構成したい。	柳　孝一	柳　孝一
14	米国のベンチャー企業のケーススタディ	米国でベンチャー企業が活躍しているインターネット関連の企業をとり上げ、その起業から公開、その後の成長の歴史を紹介する。	藤川　彰一	藤川　彰一
15	ベンチャー企業の将来	21世紀の日本経済の突破口は、相変わらず見えていない。突破口のひとつがベンチャー企業の輩出である。政府、地方自治体、大学、民間等の支援制度も整って来た。大企業の人員削減から起業家になる人や、大学生の意識も変わって来ている。将来への展望を述べる。	柳　孝一	柳　孝一

＝ 材料工学と社会（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：東　千秋（放送大学助教授）〕

全体のねらい

環境保全は人間社会の最も緊急で重要な課題である。その環境破壊の根源は、物質文明にあり、それは科学・技術の弊害であるとの批判がある。しかし、21世紀の望ましい社会すなわち環境に調和し持続可能な資源循環型社会の創成とさらなる高度情報社会の構築および高度医療福祉に支えられる高齢社会の構築など、その実現は、社会の成立基盤である科学・技術の貢献なしには成し得ない。その科学・技術の3要素は情報、エネルギー、材料であるから、脱物質化をはかりながらも、材料の役割は本質的には欠かせない。この講義では、社会の成立基盤である科学・技術の要としての材料工学を社会との関わりから学習する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	I. 技術の革新と材料・その光と影 1. 社会の発展	科学・技術の革新は社会の発展のための鍵である。産業や社会の発展における技術革新の役割とその原動力である材料の革命をたどる。	東　千秋（放送大学助教授）	東　千秋（放送大学助教授）
2	I. 技術の革新と材料・その光と影 2. 限界に達した地球	科学・技術がもたらした環境の破壊と限界に達した地球を考察し、環境調和社会の創成の必要を知る。	同　上	同　上
3	II. 環境に調和する社会の要件 1. 化学物質のリスク管理	環境保全は人間社会の最も重要な緊急課題となった。環境に調和し持続可能な資源循環型社会の創成のために、有害科学物質の情報と対策を取り上げ、環境への安全対策について考える。	東　千秋 大島　輝夫（化学品安全管理研究所）	東　千秋 大島　輝夫（化学品安全管理研究所）
4	II. 環境に調和する社会の要件 2. 環境マネージメントとエコデザイン	環境に調和する社会の創成のためには、エコデザインの発想による環境マネージメントが鍵となる。ここでは、エコデザインの概念とそれにもとづくエコマテリアルの開発の実例について解説する。	東　千秋 山本　良一（東京大学教授）	東　千秋
5	II. 環境に調和する社会の要件 3. 環境マネジメントとライフサイクルアセスメント(LCA)	環境マネジメントにおいて、材料は使用された後の廃棄処理をも含めたトータルなライフサイクルの中で評価されなければならなくなった。ここでは、材料や製品のライフサイクルアセスメント(LCA)の概念と手法を知る。	同　上	同　上
6	II. 環境に調和する社会の要件 4. LCAの実際	LCAは実際にどのように行われるのか、いくつかの例を取り上げ検証する。	同　上	同　上
7	II. 環境に調和する社会の要件 5. エネルギーのクリーンな利用	エネルギーのクリーンな利用が環境保全のために急務になっている。太陽光発電や実用化が迫る燃料電池さらに水素の貯蔵、電気エネルギーの貯蔵などエネルギー貯蔵技術、また送電によるエネルギー損失がゼロの超伝導材料の開発など、これらの現状と材料技術との関わりを知る。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	II. 環境に調和する社会の要件 6. コンピュータの利用	コンピュータの利用は、環境に余分な負荷を与える実験を低減でき、省資源、省エネルギー、廃棄物ゼロエミッションの観点からも重要である。材料技術におけるコンピュータ・シミュレーションなど、その利用を展望する。	東　千秋 山本　良一	東　千秋
9	III. 高度情報社会と有機フォトニクス 1. 情報の処理	21世紀のさらなる高度情報社会の構築は、省資源、省エネルギー社会の構築でもある。そこでは、再生可能な資源である有機材料をもとにした光技術(フォトニクス　)が大きな期待を集めている。ここでは、演算と変調のための非線形光学材料、光屈折材料、光電変換材料など情報の処理に利用できる材料について解説する。	雀部　博之(千歳科学技術大学教授)	雀部　博之(千歳科学技術大学教授)
10	III. 高度情報社会と有機フォトニクス 2. 情報の伝送と表示	有機フォトニクスによる情報の伝送と表示について、光ファイバー、光導波路、液晶、EL発光、レーザー発光を取り上げ、解説する。	同　上	同　上
11	III. 高度情報社会と有機フォトニクス 3. 情報の記録	有機フォトニクスによる情報の記録技術について、光メモリー、光ディスク、ホログラム、光導電性材料(静電写真材料)を取り上げ、解説する。	同　上	同　上
12	IV. 未来医療とバイオメディカルエンジニアリング 1. 医療技術の進歩	21世紀の先進社会における市民の高齢化に応えるべき未来医療とその基盤技術となるバイオエンジニアリングを取り上げる。ここではまず、過去数十年の医療技術の進歩とその意義について概説し、医療が科学技術化したことについて考察する。	桜井　靖久(東京女子医科大学名誉教授)	桜井　靖久(東京女子医科大学名誉教授)
13	IV. 未来医療とバイオメディカルエンジニアリング 2. ハイテク医療技術の現状	ハイテク医療技術の現状の現状について、人工臓器などを含めたバイオメディカルエンジニアリングの最先端を、検査、診断(情報)、治療、福祉工学を通じて、概説する。	同　上	同　上
14	IV. 未来医療とバイオメディカルエンジニアリング 3. 未来医療の展望	高齢社会、健康重視QOL(Quality of Life)時代に向けて、未来の医療とヘルスケア・パークを含むヘルスケアのあり方を探る。	同　上	同　上
15	V. 材料工学のこれから	環境に調和する脱物質社会と高度情報社会さらに高度医療福祉社会などの構築による21世紀の先進社会の実現は、先端科学・技術をなくしてはあり得ない。この講義の総括として、このような最先端科学・技術は環境とどのように調和し資源の循環システムと整合すべきか、その要の材料技術はどうあるべきかを考える。	山本　良一 雀部　博之 桜井　靖久 東　千秋	雀部　博之 桜井　靖久 東　千秋

＝ バイオテクノロジー（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：軽部　征夫（東京大学教授）〕

全体のねらい

この講義のねらいは、急速に進展するバイオテクノロジーに注目し、これの基盤となっている技術、この技術の農林水産、医療、工業、資源、エネルギー、環境などの分野への応用の最新の情報を提供し、バイオテクノロジーの社会への影響、これのもつ倫理的問題などについて講義する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	遺伝のしくみ	顔や体つきが親に似ていることから遺伝に気がつく人が多い。長い間謎に包まれてきた遺伝に初めて科学的な説明を加えたのはメンデルである。20世紀になると多くの研究者によって少しづつ遺伝のしくみが解き明かされてきた。	軽部　征夫（東京大学教授）	軽部　征夫（東京大学教授）
2	ＤＮＡと遺伝子	遺伝の本質を担っているのはＤＮＡであることがわかり、これの構造や化学成分が明らかにされた。また、ＤＮＡの暗号によってタンパク質が作られる機構が解明された。また、高等生物ではＤＮＡが全て遺伝子ではないこともわかった。	同　上	同　上
3	組換えＤＮＡ技術	ＤＮＡを切断したり、結合させる酵素が発見され、特定のＤＮＡを細胞に運ぶベクターと呼ばれる小さなＤＮＡも開発された。これにより、特定のＤＮＡを切り出してベクターにつなぎ込み、細胞に導入することができるようになった。	同　上	同　上
4	細胞操作	細胞と細胞を融合させて雑種細胞を作る細胞融合技術が開発された。また、細胞に特定の遺伝子を導入する技術が開発されている。さらに、生殖細胞を操作する技術によって胚性幹細胞（ＥＳ細胞）や始原生殖細胞由来の幹細胞（ＥＧ細胞）が作られた。	同　上	同　上
5	組換えＤＮＡ技術を応用した作物	植物に組換えＤＮＡ技術を応用すると害虫耐性遺伝子や除草剤耐性遺伝子を導入することができる。これらの作物は農業生産の効率を上げるためには極めて重要であるが、安全性、生態系への影響などを考えなければならない。	同　上	同　上
6	クローン・キメラ動物	卵分割による一卵性双生牛の形成はすでに行われていたが、イギリスでは羊の体細胞からクローン羊を形成することに成功した。また、異なった種の胚を融合させて仮親の子宮内に移植してキメラ動物を作ることもできる。	同　上	同　上
7	海洋生物の応用	魚類の性操作によってメスあるいはオスのみの生産が可能になっている。水産資源は重要なタンパク源であり、バイオテクノロジーの応用が期待されている。また、海洋生物から医薬品や工業原料、エネルギーを取る研究も行われている。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	バイオ医薬	組換えＤＮＡ技術を巧みに利用すると、ヒトホルモンや免疫関連物質などの医薬品を微生物により大量に生産することが可能である。特にヒトゲノムの解析が進んでおり、ゲノム情報から創薬する研究開発が盛んになると予想される。	軽部　征夫	軽部　征夫
9	高度先進医療	ヒトゲノムの解析が進み、遺伝病の原因となる遺伝子が多数発見されている。遺伝病の一部は遺伝子治療によって治すことが可能である。また、ガンなどの難治性疾患の治療にも遺伝子治療が応用されている。さらに、診断にゲノム情報が大いに活用されるようになる。	同　上	同　上
10	医用工学	細胞の組織培養技術によって皮ふや耳などを再生することができる。また、ＥＳ細胞を応用すると臓器の再生も可能になると思われる。一方、生体適合性材料を用いる人工臓器の研究が進んでいる。	同　上	同　上
11	バイオエレクトロニクス	生物の機能を巧みに応用したバイオセンサーが注目されている。バイオセンサーは酵素、微生物、抗体などの生体分子や細胞を分子識別素子として用いており、医療や環境計測に応用されている。また、脳と同様な機能をもつニューロコンピューターの研究もある。	同　上	同　上
12	資源・エネルギーの生産	銅の湿式精錬に微生物が利用されている。これは、バクテリアリーチングと呼ばれている。銅以外にウラニウムの精錬も試みられている。また、再生産可能なバイオマス（生物資源）を利用したアルコール、メタンなどのエネルギー物質の生産も行われている。	同　上	同　上
13	環境の保全	微生物を利用して有機物を分解して水を浄化する方法がよく知られている。微生物の機能を巧みに利用して環境負荷物質の原油類、有機塩素化合物などを分解する技術の開発が進んでいる。また、バイオセンサーによる環境のモニタリングも行われている。	同　上	同　上
14	生命倫理	クローン技術の開発によってクローン人間の問題がクローズアップされた。また、ＥＳ細胞などによる臓器再生、移植の問題、生殖補助技術など生命倫理に関わる問題が多い。これらの問題について十分議論をすることが求められている。	同　上	同　上
15	未来のバイオテクノロジー	21世紀はバイオテクノロジーの時代だと言われているが、この技術によって生活の質がどのように変わるであろうか。特に医療分野などにおいては大きな変化が起こるであろう。バイオテクノロジーの可能性について解説する。	同　上	同　上

＝情報工学と社会（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：赤木　昭夫（放送大学教授）〕

全体のねらい

ユーザーのための情報工学－これからの情報通信のあり方について的確な視点と見識を持てるようにするため、必須の基本知識を養うことをめざす。各ハードウエアについては概念的説明にとどめる。どのように情報（データ）が伝達・処理・記憶され、またそのためソフトウエアがどう働くかの理解に主眼を置く。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	アナログ対デジタル	いま光ファイバやコンピュータをめぐるのはデジタル・データである。それにたいし旧来の電話では、アナログ・データをやりとりした。アナログとデジタルの差異と得失を知り、なぜ今デジタル時代を迎えつつあるかを理解する。学習方法についても案内する。	赤木　昭夫（放送大学教授）	赤木　昭夫（放送大学教授）
2	電子記録媒体	磁気によるもの、プラスティック円盤の凹みによるもの、半導体によるものがある。記憶されるデータの形、また容量や読み出し速度などの性能をもとに、電子記録媒体の過去と未来を見る。データの記憶や伝送の効率を飛躍的に高める圧縮と伸長の原理にもふれる。	同　上	同　上
3	プロトコル－通信の規約－	デジタル通信では、コンピュータ処理に適したデータの書き方や送り方、さらには受けられるサービスの種類などを規則（プロトコル）として定める。それにしたがって文字・音・画像を送受する。これについてインターネットのプロトコルを例に解説する。	同　上	同　上
4	ネットワークの構成	従来の電話では、通信線を短くするため、交換局をはさみ階層的なネットワークをつくってきた。それにたいし携帯電話やインターネットのネットワークはどうなっているかを考察する。それらを通じて、目的と技術水準と経済から見て最適な構成について論ずる。	同　上	同　上
5	ネットワークの進化	目的と技術水準と経済に応じて、さまざまな通信ネットワークが併存し、そして新旧の交代が生じ、全体として進化していく。そのプロセスを明らかにし、ネットワークの育成策、情報弱者をつくらぬための施策など、あるべき通信政策を立てるための視点を探る。	同　上	同　上
6	インターフェース：その１	どんな道具や装置でも、使いやすいもの、使いにくいものがある。コンピュータは知的な仕事をする装置であるだけに、使いやすくするためのインターフェース（人間とコンピュータとの接面）が重要である。この回では道具一般の使い勝手を中心に検討する。	同　上	同　上
7	インターフェース：その２	この回では、入力装置－コンピューター出力装置のループを通じて、いかに使い勝手を高めていくかを、とくに出力の表示や命令の与え方などを中心に見ていく。そのためのソフトウエアをつくる原理として、対応付け・可視化・一貫性・直接操作が挙げられる。	安村　通晃（慶應義塾大学教授）	安村　通晃（慶應義塾大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	マルチメディア	双方向のマルチメディアの実現には、コンピュータ、とくにソフトウエアとして、どんな機能が要求されるか。テキスト・音声・画像のデータの形式、それらのデータの圧縮と伸長、画像と音がずれないようにする同期など、マルチメディア技術の進歩をたどる。	安村　通晃	安村　通晃
9	オペレーティングシステム	コンピュータの処理と、その結果の配置などを統括するソフトウエア、オペレーティングシステム（ＯＳ）の骨格をつかむ。とくにファイル管理、プロセス管理（平行処理）、マルチメディアのためのＯＳとして必要なカーネル、資源の確保と解放を解説する。	同　上	同　上
10	ＣＡＤとＣＡＭ：その１	機械製作メーカーにおける実例をもとに、コンピュータによる設計（ＣＡＤ）と、コンピュータによる加工（ＣＡＭ）におけるデータの処理と流れを知る。この回では、コンピュータで図面を描く方法、それをもとに設計の適否を確かめるシミュレーションを扱う。	槌屋　治紀（（株）システム技術研究所所長）	槌屋　治紀（（株）システム技術研究所所長）
11	ＣＡＤとＣＡＭ：その２	設計が固まると、そのデータを設計室と工場現場を結ぶネットワーク（ＬＡＮ）を通じて数値制御工作機械へ送り、自動的に製品をつくる。どのようにしてコンピュータ・データによって工作機械が制御されるか、併せてシステム設計の基本的心得についても学ぶ。	同　上	同　上
12	ソフトウエア産業の課題	通信やコンピュータ処理では、機能の点でもコストの点でも、ソフトウエアの比重が高まる一方である。ところが、規模の大きなソフトウエアとなると、きわめて複雑になるため、欠陥のないものを納期通りに仕上げるのがむずかしい。その解決策はあるのか。	赤木　昭夫	赤木　昭夫
13	データの保護	通信ネットワークやコンピュータの中のデータが盗まれるようでは、安心できない。それを防ぐための工学的な対策として、ファイアウオール、暗号、パスワードなどについて解説する。印判や署名に代わる電子認証や電子マネーも暗号の応用にほかならない。	同　上	同　上
14	システムの信頼性	全ての社会活動が、コンピュータ・ネットワークへの依存の度合いを高める一方である。コンピュータ・ネットワークの故障による機能麻痺をどうやって防ぐかについては、社会全体として取り組まねばならない。情報システムの事故例を分析し対策を提案する。	同　上	同　上
15	経済からの評価	シリーズのまとめとして、日米における情報通信の経済への寄与を評価する。新しいビジネス・チャンスとそれにともなう雇用の創出と、社会全体の生産性向上の二つの面から検討する。前者について著しいことは明らかだが、後者については見解が分かれる。	同　上	同　上

＝ ギリシャ哲学（’９９）＝（R）

〔主任講師：天野　正幸（東京大学教授）〕

全体のねらい

この講義のねらいは、語源的にも歴史的にも「哲学」の故郷と言うべき古代ギリシャにおいて哲学という学問がどのように生まれ成長していったかを解き明かし、哲学とはいかなる学問であるかをその原点に立ち返って理解するための手懸りを提供することにある。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ソクラテスの「知恵」（『ソクラテスの弁明』）	「哲学」を意味するギリシャ語「フィロソフィアー」の原義である「知恵の愛求」としての「哲学」を実質的に確立したのはソクラテスである。彼の「知恵」概念を手懸りに、彼にとっての「知恵の愛求」について考察する。	天野正幸（東京大学教授）	天野正幸（東京大学教授）
2	ソクラテスのエレンコス（プラトン初期対話篇）	ソクラテスの「知恵の愛求」の活動は他者との議論を通して遂行される。彼の議論はいつでも相手を論駁して相手の無知を暴露する（「エレンコス」と呼ばれる）。その議論を手懸りに、彼の「知恵の愛求」について考察する。	同上	同上
3	プラトンは超越的イデア論者か	プラトンのイデア論は「超越的イデア論」と一般に考えられている。そのような理解は彼の弟子のアリストテレスから始まる。だが、プラトンのイデア論を「超越的」イデア論と理解するのは誤解のもとである。	同上	同上
4	仮説的イデア論（『パイドーン』）	プラトンのイデア論は、イデアの存在を仮説する仮説的理論であり、「仮説的イデア論」という名がむしろ相応しい。それは『パイドーン』において初めて、一個の理論として確立された。	同上	同上
5	善のイデア（『国家』）	『国家』において、仮説的イデア論の仮説を正当化する究極の根拠として「善のイデア」が導入され、それが「太陽」・「線分」・「洞窟」の譬喩によって説明される。その説明の目的は真の哲学者を規定することにある。	同上	同上
6	イデア論の再検討（『パルメニデス』）	『パルメニデス』において、プラトンは自らイデア論を批判する。その批判はイデア論にとって、致命的とは言えないまでも、少なからぬ打撃を与えるものと思われるが、プラトンにとってはどのような意味を持つのだろうか。	同上	同上
7	「エピステーメー」概念の再検討Ⅰ（『テアイテートス』）	『パルメニデス』のイデア論批判は「エピステーメー」概念についての再検討をプラトンに促し、『テアイテートス』において、エピステーメーを獲得する方法が根本的に考察し直される。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	「エピステーメー」概念の再検討Ⅱ（『テアイテートス』）	「エピステーメー」は最終的には「ロゴスを伴った真なるドクサ」と定義される。この定義も結局は批判されるが、エピステーメーは「他のすべてのものとの差異の認識」であるということが積極的な成果として確保される。	天野正幸	天野正幸
9	分割法（『ソフィステース』『ポリーティコス』）	『ソフィステース』『ポリーティコス』において、「他のすべてのものとの差異」を体系的に認識する方法として、「分割と統括」という方法が導入される。この方法について考察する。	同上	同上
10	イデアのコイノーニアー（『ソフィステース』）	『ソフィステース』において、虚偽の言明がいかにして成立し得るかを説明するために、イデアのコイノーニアー（結合あるいは分有）という考え方が導入される。この考え方について考察する。	同上	同上
11	アリストテレスにとっての「哲学」（『形而上学』）	アリストテレスは『形而上学』の冒頭で「知恵」を「原理・原因についての知」と規定している。これは彼にとって「哲学」の根本規定である。それでは、アリストテレスにとって「哲学」とはどのような学であったのか。	同上	同上
12	「ト・オン・レゲタイ・ポラコース」（『形而上学』）	「ト・オン・レゲタイ・ポラコース』（「あるもの」は多義的である）というテーゼがアリストテレスの存在論の根本前提となっている。このテーゼの意味と意義について解説する。	同上	同上
13	本質をめぐる議論Ⅰ（『形而上学』）	アリストテレスは『形而上学』第７、８、９巻において、実体の存在の原因について論じている。それは彼の形而上学の精髄と言っても過言ではないが、極めて難解である。それをできるだけわかりやすく解説する。	同上	同上
14	本質をめぐる議論Ⅱ（『形而上学』）	存在の原因としての本質を知の対象という観点から見ると、例えば「本質は個別か普遍か」、「類と種差（という二つのもの）からなる本質がなぜ単一なものであり得るのか」など、様々な問題が生じる。これらの問題について考察する。	同上	同上
15	論証理論（『分析論後書』）	最後に、アリストテレスの「知」の概念について解説する。彼は、最も厳密な知は論証に基く知だと考える。それについて、主として『分析論後書』における論述に基いて解説する。	同上	同上

＝ 西洋近世哲学史（’９９）＝（R）

〔主任講師：量　義治（東洋大学教授）〕

全体のねらい

ルネサンスの哲学からヘーゲル哲学にいたる西洋近世哲学史は、西洋哲学史全体のなかできわめて重要な位置を占めている。全体のねらいは二つのねらいから成っている。一つは、近世哲学全体の流れを正確に把握することである。もう一つは、基本的な諸概念を厳密に理解することである。精選された西洋近世哲学史の客観的な叙述を試みたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	近世哲学の概観	二つのことを考えている。一つは古代・中世哲学との関係である。もう一つは近世哲学自体の流れである。後者は、具体的には、揺籃期の哲学、大陸合理論、イギリス経験論、批判哲学、そしてドイツ観念論として展開する。	量　義治（東洋大学教授）	量　義治（東洋大学教授）
2	揺籃期の哲学Ⅰ ルネサンスの哲学	「ルネサンス」とは「再生」を意味する。すなわち、キリスト教以前のギリシア・ローマの文化を再生しようとするものである。具体的には、クザーヌス、エラスムス、ポンポナッツィの哲学を取り上げて考察する。	同　上	同　上
3	揺籃期の哲学Ⅱ 宗教改革	16世紀の宗教改革は狭義の近世哲学史の範疇には入らない。しかし近世初頭における思想の変革の一つとして、また、その後の影響史を考え合わせるとき、欠落させることはできない。具体的には、ルターとカルヴァンの思想を取り上げる。	同　上	同　上
4	揺籃期の哲学Ⅲ 科学革命	「科学革命」という言葉は二とおりの意味で使われる。一つは英語で大文字で書かれる科学革命であり、もう一つは小文字で書かれる科学革命である。前者は近代自然科学の基礎となった16世紀半ばから17世紀後半にかけての自然科学の興隆のことを指す。	同　上	同　上
5	合理論の哲学Ⅰ デカルト	「われ思う、ゆえにわれ在り」という言葉によって知られるデカルトは、単に大陸の合理論の祖であるだけではなくて、人間というものを哲学の中心に握えたという意味で、近世哲学の祖である、ということができる。したがって、当然、今日にまで及ぶ影響史がある。	同　上	同　上
6	合理論の哲学Ⅱ スピノザ	「神即自然」という言葉によって知られるスピノザの哲学は汎神論である。デカルトは精神と物体という二つの実体を認めたが、神のみが唯一の実体であって、精神と物体はこの唯一の実体である神の様態ある、としたスピノザ哲学は、デカルト哲学の徹底である。	同　上	同　上
7	合理論の哲学Ⅲ ライプニッツ	ライプニッツの実体は「単子」と呼ばれる。その数は無数である。単子の本性は作用にある。しかし単子と単子との間には相互作用はない（「単子は窓をもたない」）。けれども、被造物としての単子の全体は創造者が定めた「予定調和」の秩序のなかに置かれている。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	経験論の哲学Ⅰ ベーコンとホッブズ	中世以来もともとイギリスには経験論的傾向の伝統があったが、近世における経験論の哲学はF・ベーコンをもって始まる。ベーコンに続くホッブズは徹底的に機械論的な自然観を樹立した。そしてそれを道徳や社会の分野にまで拡張しようとした。	量義治	量義治
9	経験論の哲学Ⅱ ロック	ベーコンやホッブズを先駆とするイギリス経験論はロックをもって確立する。経験論はすべての認識は経験をもって始まるのであって、経験に先立っては、われわれの心は「白紙」または「暗室」である、と主張する認識論上の立場である。	同上	同上
10	経験論の哲学Ⅲ バークリとヒューム	バークリとヒュームはロックの経験論を継承発展させた。バークリの「存在することは知覚されることである」というテーゼは有名である。ヒュームは、経験論を徹底させていった結果、いっさいの認識の確実性を疑う懐疑論に陥ってしまった。	同上	同上
11	批判哲学Ⅰ 形而上学	カント哲学は批判哲学と称される。すなわち、理性による理性の批判、つまり、理性の自己批判の哲学である。批判哲学はそれ以前の全哲学を批判し、真の哲学を構築しようとした。カントは西洋哲学史上最大の哲学者である、といってもけっして過言ではない。	同上	同上
12	批判哲学Ⅱ 道徳と宗教	理性には三つの関心がある。すなわち、(1)「わたしはなにを知ることができるか。」(2)「わたしはなにをなすべきであるか。」(3)「わたしはなにを望むことを許されるか。」第一の関心は形而上学、第二の関心は道徳、そして第三の関心は宗教にかかわる。	同上	同上
13	ドイツ観念論の哲学Ⅰ フィヒテ	ドイツ観念論の哲学の起点は批判哲学である。批判哲学の特徴はその二元論にある。この二元論の一元論化、つまり体系化の試みがドイツ観念論の哲学の基本的意図である。フィヒテの「知識学」はその最初の体系的哲学である。	同上	同上
14	ドイツ観念論の哲学Ⅱ シェリング	フィヒテにおける二元論の克服は不徹底に終わった。というのは、その絶対者は自我と非我との根底にあるというよりは、むしろ自我の根底にあるものであったからである。これにたいして、シェリングの「同一哲学」は文字どおり絶対者の哲学である。	同上	同上
15	ドイツ観念論の哲学Ⅲ ヘーゲル	ヘーゲルによれば、実体は客体ではなくて主体である。そして主体の本質は自由にある。「精神」は自由を本質とする実体としての主体である。精神はその自由に基づいて、自己を自己の外に発現しつつ運動する主体である。ヘーゲル哲学をもって近世哲学は終焉する。	同上	同上

＝ 美と詩の哲学（’９９）＝（R）

〔主任講師：渡邊　二郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

本講義は大きく2部に分かれる。前半の7回は「美について」考え、後半の8回は「ロマン主義的詩情について」考察を行う。私たちは日頃、自然と人生のなかの美しいものによって魅惑され、心慰められる。そうしたところから、ロマン主義的な心情も生まれてくる。こうした「美と愛と生命」礼讃の思想と文学を追ってみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	美の根本問題に向けて	私たちは、自然の美しい風物に感動し、また美しい人に魅せられて、恋心に捕らわれる。実在の生命の輝きが、私たちを美的感動へと誘う。芸術作品の美よりも、自然的生命の美のほうが、より根源的にある。美とは、私たちに贈られる深い感銘と感激である。	渡邊二郎（放送大学教授）	渡邊二郎（放送大学教授）
2	美の問題性とプラトン	こうした実在するものの美しさを深く掘り下げたのが、西洋古代中世の美の思索である。美の本質を秩序や調和のうちに見るピュタゴラスのあとに、プラトンが出て、美が、善を背後に秘めつつ、光輝きとなって私たちを魅惑するものである点を明らかにした。	同上	同上
3	プロティノスの衝撃	古代末期のプロティノスに至って、秩序や調和のうちに美を見る考え方は徹底的に批判される。その代わりに、美の本質は、光輝く形相のうちにあるとされ、それを魂の高揚において捉えることが大切とされる。そこに忘我奪魂の恍惚の境地が出現する。	同上	同上
4	中世の開始とアウグスティヌス	しかし、中世キリスト教の開始とともに、再び、秩序や調和のうちに美の本質を見る考え方が復活する。それがアウグスティヌスの場合である。アウグスティヌスとともに現れたキリスト教的世界観の特色や、アウグスティヌスの美に関する思想を追ってみる。	同上	同上
5	光のなかで呼ぶものとしての美（その1）	けれども、紀元6世紀初めに著された、偽ディオニュシオス・アレオパギテースの『神名論』という書物のなかで、否定神学の立場から、究極の絶対者が、善でありつつ、光輝きとなって立ち現れ、万物を自分のほうへと「呼ぶ」ところに、美が成立するとされた。	同上	同上
6	光のなかで呼ぶものとしての美（その2）	この偽ディオニュシオス・アレオパギテースの美論のなかで、最も決定的に、秩序や調和としての美を超えて、光輝きのなかで「呼び」かけてくれるものとしての美の究極的本質が明らかにされた。そして人は、そうした美を「愛」さずにはおれなくなるとされた。	同上	同上
7	中世から近世にかけての美論	中世後半の多くの美論はみな、この偽ディオニュシオス・アレオパギテースの思想に立脚して可能となったのである。トマス・アクィナスの美の思想その他の、西洋中世最盛期の美論が、省みられる。そして近世初頭のフィチーノなどの美と愛の思想が考察される。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ドイツ・ロマン主義の位置	この回より、本講義の第2部「ロマン主義的詩情」が始まる。西洋近代の美と詩をめぐる思潮のなかから、本講義では、ドイツ・ロマン主義、しかもフリードリッヒ・シュレーゲルのそれを考察する。まずディルタイの近代美学史により、ロマン主義の位置を見る。	渡邊二郎	渡邊二郎
9	ドイツ・ロマン主義成立の背景	ドイツ・ロマン主義の成立の背景となった諸事情について考察を加える。とりわけカントからシラーを経て、人間の美学的教養の大切さが自覚され、理論と実践とをつなぐ人間の全面的なあり方の根源が、美的な遊戯に求められた点をたどってみる。	同上	同上
10	フリードリッヒ・シュレーゲルについて	フリードリッヒ・シュレーゲルは、ドイツ・ロマン主義運動の旗手であった。この哲学者にして文学者、美学者にして評論家であった人物の生涯と思想の歩みを概観してみる。そのことによって、前期から後期にかけてのドイツ・ロマン主義の流れが明らかになる。	同上	同上
11	ロマン主義的なものの方法的基礎	ロマン主義とは何か、どうしてシュレーゲルはこの考え方に到達したのか、といった問題を考え、シュレーゲルの前期ロマン主義の思想の成立過程に光を当てる。『アテネーウム』断章116番の考察も行う。シュレーゲルのロマン主義の方法的基礎が明らかにされる。	同上	同上
12	『ルツィンデ』（その1）	シュレーゲルは、みずからのドロテア・ファイトとの恋愛・結婚という一大事件を基礎にして、『ルツィンデ』という長編物語を著した。なんらの筋もない、思想的文学的断想の集積に成るこの『ルツィンデ』という作品に即して、ロマン主義的詩情の本質を捉える。	同上	同上
13	『ルツィンデ』（その2）	『ルツィンデ』の前半の3分の1ほどに盛られた「愛と生命」讃歌の断章を、順次、解きほぐし、解明してゆく。前回の冒頭の書簡体の断章の考察に続いて、本章では、幻想的覚え書きを中心として、シュレーゲルの愛と結婚の思想の意義を探ってみる。	同上	同上
14	『ルツィンデ』（その3）	さらに『ルツィンデ』には、少女ヴィルヘルミーネの記述を介して、自由と大胆不敵さを讃えるシュレーゲルの文学的理想が表白される。そしてシュレーゲルは、暖かさのある健やかな自然の愛を大切と見なしていることが看取される。	同上	同上
15	『ルツィンデ』（その4）	『ルツィンデ』は、続いて、「ゆとりのある生き方」を讃美し、文明社会の進歩のなかにあって、愛に恵まれた静かな生命の享受を喪失してはならないと説く。また「誠実」と「戯れ」の入り混じった、愛の多様な情熱についても、シュレーゲルは理解をもっていた。	同上	同上

＝ 現象学入門（’００）＝（R）

〔主任講師：千田　義光（國學院大学教授）〕

全体のねらい

20世紀の哲学を特徴づける思想運動の一つとして挙げることができるのは、フッサールを創設者とする現象学である。本講義においては、その思索の展開を同時代の生きた思想として考え直して、この哲学的理念そのものの自己運動に聴講者とともに肉薄していきたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現象学の前史	現象学は西欧哲学の伝統のなかに立ちながらも、この知的伝統をいわば内側から解体し乗り越えようとする試みである。ギリシア以来の、とりわけ近代哲学の流れにおいて、それがどのように位置づけられるかを考察する。	千田義光（國學院大学教授）	千田義光（國學院大学教授）
2	現象学運動	20世紀初頭以来のゆるやかな知的運動としての現象学は、創設当初よりさまざまな展開をみているが、それらの運動を先ず最初に概観して、全体的な見通しを立てるとともに、本講義のすすむ方向を明らかにする。	同上	同上
3	超越論的主観性の現象学（1）——現象学の現象学	フッサールによる超越論的現象学は彼独自の方法論をもっているが、さらにはその方法論にたいする自己批判そのものが現象学の展開それ自体と不可分な関係をもつ。現象学的方法論としての「現象学の現象学」は、現象学そのものである。	同上	同上
4	超越論的主観性の現象学（2）——意識の一般構造	意識の本質的構造としての志向性と内的時間性は、現象学にとって中心となる問題である。この概念に立脚しながら、現象学的にさまざまな種類の意識作用とそれらの遂行様態が分析され、それにのっとって、フッサールの現象学が展開する。	同上	同上
5	超越論的主観性の現象学（3）——世界の意味的構成	フッサールは、意識の一般構造の分析と現象学的方法論に基づき、多様な体験の具体的統一化という問題を、さまざまな身近な世界の意味的構成、ひいては万人に共通する一つの世界の構成の問題として解明する。	同上	同上
6	超越論的主観性の現象学（4）——自我と相互主観性	彼の自我論は方法論的に独我論から出発して、相互主観的な共同体の構成の分析にすすむ。孤立した認識主観からの解明は多くの批判にさらされることになったが、しかし彼の議論の途上において何が哲学的問題として問われるのかを考える。	同上	同上
7	超越論的主観性の現象学（5）——生活世界と歴史の現象学	ガリレイ以来の客観主義的な近代科学によって忘れられた、主観的かつ相対的なわれわれの生きて体験されている感覚的世界を、彼は生活世界とよぶ。生活世界論のもつ射程と意義を彼の歴史観とともに検討する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	事実的人間存在の現象学（1） ――存在論的現象学	フッサール現象学の根本的批判者はハイデガーである。超越論的現象学がハイデガーによって存在論的現象学として批判されつつ展開されることによって、現象学が新たに切り開いた哲学的次元が何であったのかを考察する。	千田義光	千田義光
9	事実的人間存在の現象学（2） ――世界内存在としての人間の存在	ハイデガーは人間の存在を現存在とよび、さらにそれを世界内存在としてとらえかえす。世界に超越的な主観ではなく、みずからの存在をみずからのその充全な具体性において生きる事実的な人間の存在が問題とされる。	同上	同上
10	事実的人間存在の現象学（3） ――本来的人間存在の分析論	現にある事実性へと投げいれられた存在としての実存する人間の存在は、たえず存在するものを配慮しつつ解釈し、理解している。存在論に先立つこの存在理解が、ハイデガーによって本来的な人間存在の分析論という哲学的問いへと深化される。	同上	同上
11	事実的人間存在の現象学（4） ――日本文化論としての解釈学	ハイデガーの現象学的解釈学は、当時留学した日本の留学生たちによって日本文化の解釈学として豊かに結実した。現象学的に見ることの生産性と、その一つの日本的変様と意義を考える。	同上	同上
12	実存的現象学（1） ――自由と実存の現象学	ハイデガーの現象学はまたフランスにも影響をあたえ、サルトル、メルロ＝ポンティらの実存的現象学へと展開した。特にサルトルにおいて、それは自由と実存の思想として第2次大戦後の時代を強く彩った。	同上	同上
13	実存的現象学（2） ――受肉した身体の現象学	メルロ＝ポンティにとって、世界の意味は、他に還元することのできない、この世界の具体的な内容に拠っており、無数の異質な経験の交点に現れる意味として理解される。このような理解は、判断に先立つ、感覚的な受肉した身体に固有な意味をとらえることとされる。	同上	同上
14	現象学の多様な進展	1950年代以後、フランスやドイツにおいて、西欧近代思想の自己批判として、他の現代哲学思想と結びつきながら、これまで看過され軽視されてきたさまざまな側面に、哲学的分析が加えられていった。	同上	同上
15	現象学の意義	現象学は20世紀の哲学的運動としてすでにその生命力を枯渇させ、存在意義を失っているのであろうか。現在にとっての現象学のもつ意味を、あらためて再考することによって、さらに哲学そのものの意味をも考察する。	同上	同上

＝ 人生の哲学（’９８）＝（R）

〔主任講師：渡邊　二郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

人生の根本問題を改めて考え直し、生きる支えとなる人生観を探究してみたい。全体で五つの部分より成る。「生と死を考える」、「愛の深さ」、「自己と他者」、「幸福論の射程」、「生きがいへの問い」が、それである。全体として、人生体験を直視しながら、しかも過去の大思想家の知恵に学びつつ、考察を進める。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生と死を考える（その１） －問題への接近－	生と死を考える態度に、まず、東洋と西洋では伝統的に大きな違いのあることに眼を向ける。とりわけ、仏教は十分かが問われる。そのあと、無常観や厭世観が省みられる。そして老境の問題が取り上げられる。	渡邊二郎（放送大学教授）	渡邊二郎（放送大学教授）
2	生と死を考える（その２） －死を見つめる－	死とは何かを鋭く見つめた、エピクロス、ハイデッガー、サルトル、モンテーニュ、ヤスパースの見解を取り上げ、死の哲学的分析を行う。それによって、人生を十全に生き抜く覚悟を覚醒させることが狙いとなる。	同上	同上
3	生と死を考える（その３） －永遠性の問題－	死にさらされた人生のなかで、切実な問いとして浮かび上がるのは、永遠性の問題である。カント、プラトン、ニーチェ、ヘーゲルに即して、不滅のものに眼を向ける思想の意義を問い直す。	同上	同上
4	愛の深さ（その１） －愛と、呼びかけてくるもの－	愛は、まず人生への愛として見定められる。フィヒテに即して、人生への愛ということが確認されたあと、それが具体的に現れてくる場面として、美による呼びかけと、良心による呼びかけを論ずる。	同上	同上
5	愛の深さ（その２） －葛藤を秘めた人間－	愛の葛藤は、古くから、アガペー的愛と、エロース的愛という、二つの形の分裂として知られていた。キリスト教的アガペーと、ギリシア的エロース（プラトンの『饗宴』）とを、詳しくたどり直す。	同上	同上
6	愛の深さ（その３） －愛の諸相－	愛の諸相として、まず最初に、アガペー的な自己滅却と、エロース的な自己拡充との二つの調停を図ったあと、とりわけエロース的愛の姿をいろいろの点から、「愛の憧れ」のありさまとして、追究する。	同上	同上
7	自己と他者（その１） －交流と対立－	愛の問題は、おのずと、自己と他者の問題に発展する。まず、「我と汝」の思想の流れをたどり、そのあと、人間のあいだに「争い」を不可避とみた思想の意義を明らかにする。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	自己と他者（その2） －世間と役割－	しかし、争いだけでなく、人間は「世人」として共同存在のなかを、「役割」をもって、「組織」のうちで生きるものである。この面への思想史的照明を当てる。	渡邊二郎	渡邊二郎
9	自己と他者（その3） －他者認識と相互承認－	自己と他者の問題は、やがて、「他者認識」の可能性の問題に及び、最後には、自己と他者のあいだの「相互承認」の問題に極まってゆく。この重要な局面の考察を企てる。	同上	同上
10	幸福論の射程（その1） －老年と、幸福への問い－	人生の幸福とは何かという問いは、誰もが心の底で気にしながら、容易には答えられぬ疑問をなす。老年の意味を問い、老境が、幸福を問う思索の時であることを明らかにする。そのあと、幸福の三義を問題にする。	同上	同上
11	幸福論の射程（その2） －幸福論の教え(1)－	世に多くある幸福論のうちから、まずアランの社会的儀礼の勧めを見、次にラッセルの外向的活動の勧めを省みて、それらの幸福論の教えの長短を考え直す。	同上	同上
12	幸福論の射程（その3） －幸福論の教え(2)－	次に、さらにエピクテトス、ショーペンハウアー、セネカによる内省と諦念の勧めを省み、さらにヒルティと三谷隆正による揺るぎない信仰の勧めを考え直す。これらの幸福論の長短を考える。	同上	同上
13	生きがいへの問い（その1） －必然性を生きる自己－	生きがいへの問いこそ、私たちの人生の核心をなす。ここでは、生きがいの意味を考え、それを必然性を生きる自己のうちに求め、ニーチェを視野に入れて、それを補強する。	同上	同上
14	生きがいへの問い（その2） －時代の現実のなかで－	必然性を生きる自己は、しかし、けっして悪を犯してはならず、また時代の現実のなかにあって、広く世界の出来事に知的理解をもたなければ、成立しないことを論ずる。	同上	同上
15	生きがいへの問い（その3） －意味と無意味の間－	生きがいへの問いは、東西における人間観の系譜への問いとなり、さらには、人さまざまの現実から、人間の性格論、タイプ論にまで広がる。最後に、意味と無意味の間を生きる人間の姿が描き出される。	同上	同上

＝ 宗教の哲学（’００）＝（R）

〔主任講師：量　義治（東洋大学教授）〕

全体のねらい

「宗教の哲学の課題」を発見するために現象学的方法を採る。具体的には、仏教、キリスト教、イスラム教という三大世界宗教とこれらに基づく特殊的宗教の哲学の考察をとおして、宗教の哲学の課題の発見、そしてその解決に迫る。特定の宗教および宗教の哲学に偏ることなく、できるだけ普遍的・客観的に述べることを旨とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	課題と方法	「宗教の哲学」を現象学的方法によって省察する。すなわち、最初に代表的な世界宗教を取り上げ、つぎに特定の宗教の立場を背景にした宗教の哲学を取り上げる。こうしてはじめて「宗教の哲学の課題」を見出すことができる。	量　義治（東洋大学教授）	量　義治（東洋大学教授）
2	宗教Ⅰ仏教	ゴータマ・シッダールタを開祖とする仏教にはキリスト教やイスラム教の神に相当する絶対者は存在しない。また、聖書やコーランに相当するような正典というものもない。それだけに、あまたある経典のなかからどの経典を尊重するかということが問題となる。	同　上	同　上
3	宗教Ⅱキリスト教	キリスト教は聖書の宗教である。聖書には旧約聖書と新約聖書とがある。両聖書は一体不可分の全体を成している。その中心に位するのがイエス・キリストである。キリスト教は、端的にいえば、イエス・キリストの宗教なのである。	同　上	同　上
4	宗教Ⅲイスラム教	ムハンマドを開祖とするイスラム教では、正典コーランとともにハディース（伝承）およびシャリーア（イスラム法）が尊重される。イスラム教においては、モーセもイエスも預言者と見なされるが、ムハンマドが最後最大の預言者とされる。	同　上	同　上
5	特殊的宗教の哲学Ⅰ仏教的宗教の哲学	世界的に著名な日本の代表的仏教学者、鈴木大拙をとおして考察する。そのさい、宗教の地平としての「霊性」と霊性の論理としての「即非の論理」に注目する。	同　上	同　上
6	特殊的宗教の哲学Ⅱキリスト教的宗教の哲学	日本の代表的キリスト教哲学者、波多野精一をとおして考察する。「超越的・実在的・絶対他者」「神の愛」「永遠の生命」等のテーマを取り上げる。	同　上	同　上
7	特殊的宗教の哲学Ⅲイスラム教的宗教の哲学	世界的に著名な日本のイスラム学者、井筒俊彦をとおしてイスラム神秘主義「スーフィズム」を考察する。具体的には十三世紀のイブン・アラビーの「存在一性論」を省察する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	宗教批判	現代において、宗教の哲学の構築を試みようとする場合には、宗教批判の哲学に一顧を与えておくことは不可欠である。これなしには、この時代においては宗教の哲学の構築は砂上に楼閣を建てるようなことになりかねないであろう。	量義治	量義治
9	宗教批判に対する批判	フォイエルバッハとマルクスの宗教批判は、要約すれば、神は実在ではなくて虚構であるというものである。また、ニーチェの場合は、それは「神は死んだ」という衝撃的な言葉で表される。これらの宗教批判を反駁する。	同上	同上
10	宗教哲学の課題	基礎作業を了えたいま、われわれは、「宗教の哲学の課題」を確定することができる。それは「救済の問題」と「絶対者の問題」と「信仰と行為の問題」とに要約することができる。これらの問題のなかで中心的な問題は「救済の問題」である。	同上	同上
11	救済の問題	救済は単に個人の救済ではなくて、全人類の、いな全宇宙の救済でなければならない。救済の方法としては、他力、自力、自力・他力の方法があるが、全宇宙の救済のためには絶対他力が必然的である。	同上	同上
12	絶対者の問題	救済とは、それが自己であれ、他者であれ、絶対者による救済である。したがって宗教の哲学において、絶対者の問題はきわめて重要である。さまざまな絶対者観を考察するが、アブラハムの神と哲学者の神との対置は思想史上有名である。	同上	同上
13	信仰と行為の問題	宗教の中心問題である救済は絶対者による救済であるが、そのさい人間の側が一切問題にならないのではない。人間の信仰が問われる。そして、その信仰とは意識の問題ではなくて実存の問題である。ここからして信仰は必然的に行為と深く関わる。	同上	同上
14	宗教における真理の問題	世にはさまざまな宗教がある。いったいどの宗教が真理なのであろうか。そもそも宗教における「真理」とはなんであろうか。イエスを尋問した総督ピラトもイエスに向かって「真理とはなにか」（ティ・エスティン・アレーテイア）という問いを発したのである。	同上	同上
15	宗教の哲学と現代	宗教的真理はわれわれ自身が「そのために生き、かつ死ぬことを願うような実存的真理」でなければならない。したがって理論的・傍観的立場に終始することは許されない。この無神論・ニヒリズムの時代の只中にあって、われわれはいかにして信仰を持ち続けうるのか。	同上	同上

＝ 老荘思想（’００）＝（R）

〔主任講師：池田　知久（東京大学教授）〕

全体のねらい

老荘思想、すなわち中国古代の思想家である老子や荘子の思想は、中国だけでなく日本を含む東アジアの諸地域の文化にとって、近代に至るまできわめて重要な思想の一つであった。それだけでなく、現代社会の典型である今日の日本の中に生きる我々にとっても、顧みるに値する重要な思想の一つである。

この講義では、従来の老荘思想の研究成果を十分にふまえながら、それらとは異なった新しい観点に立って、老荘思想の主な内容を解明するとともに、近年の出土資料をも利用して、戦国時代より六朝時代に至るその歴史的な展開を大ざっぱに跡づけてみたいと思う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	最初の思想家たちとその生きた時代	老荘思想の誕生した背景にある、戦国時代～前漢時代の社会状況を考察し、その中における老聃・荘周・劉安といった思想の担い手たちの生き方について考察する。	池田知久（東京大学教授）	池田知久（東京大学教授）
2	テキスト編纂の歴史（その一）――『荘子』	老荘思想を記した代表的な書物の一つである『荘子』に関して、その成立・由来・構成などについて述べ、あわせてこの書物の正しい取り扱い方を解説する。	同上	同上
3	テキスト編纂の歴史（その二）――『老子』と『淮南子』	老荘思想を記した代表的な書物である『老子』と『淮南子』に関して、それらの成立・由来・構成などについて述べ、あわせてこれらの書物の正しい取り扱い方を解説する。	同上	同上
4	「黄老」から「老荘」を経て「道家」へ	「老荘」という概念は、老荘的な諸思想をグルーピングするために、後代になって作られた人工的な概念である。「黄老」「道家」などをも考慮しながら、諸概念の変遷の中に見られる老荘思想についての歴史的事実と、後代における学者の机上の整理との乖離について分析する。	同上	同上
5	老荘思想の誕生とその先駆者たち	老荘思想は、戦国時代中期の紀元前300年ごろ、人間疎外の克服や人間の主体性の獲得をめざして誕生したが、その時代背景を考察するとともに、老荘思想の誕生に影響を与えた先駆者たちについて究明する。	同上	同上
6	「万物斉同」の哲学	戦国時代中期の紀元前300年ごろ、老荘思想がこの世に初めて誕生した時、彼らが抱いた思想は、「万物斉同」の知識―存在論であった。中国古代の諸思想の中でも、最も難解なこの哲学について、その理論構造や目的などを解明する。	同上	同上
7	「道」の形而上学	老荘はまた道家とも呼ばれる。それは、彼らにとって「道」が最も重要なキー・コンセプトだったからであるが、この回は、人間をも含めた「万物」を存在させ変化させている窮極的根源的な実在としての「道」に関する哲学を分析する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	「物化」・転生・輪廻の思想	老荘思想の「物」という存在者に関する哲学、すなわち「物化」・転生・輪廻の思想について解明する。これらの思想は単なる存在論の一つではなく、同時に人間の死の意味づけでもあったのである。	池田知久	池田知久
9	「万物一体」の思想と宇宙生成論	老荘思想は戦国時代後期に至って「気」の思想を他から取り入れた。また、それに基づいて「万物一体」や宇宙生成論を論じた。この回は、これらの諸思想の内容と意味について考察する。	同上	同上
10	「天」の立場と「仁孝」の否定	老荘が「天」を重んずる立場に立っていたことは、戦国末期の『荀子』によっても確認できる。「天」の立場は儒家などの言う倫理や政治を「人」として批判することと表裏の関係をなすが、この回は、以上の諸問題について解明する。	同上	同上
11	「養生」の説と「遊」の思想	老荘の「養生」説は、「気」の理論とともに他から取り入れたものであり、また「遊」とは、人間が世間的な単なる存在者から真の実在の世界に飛翔していくことである。これらには思想家たちの自由や独立の願いが伴っている。この回は、以上の諸問題について考究する。	同上	同上
12	三つの政治思想――政治の拒否、ユートピアの思想、中央集権の現実	老荘思想の中にはあい反する三つの政政思想がある。一つは、原理的な政治の拒否。二つは、万民平等のユートピア思想。三つは、一君万民の中央集権的な専制主義の黄老思想である。この回は、三者の内容と由来について考察する。	同上	同上
13	聖人の「無為」と万物の「自然」――新たな思想の展開	老荘にとって「無為」や「自然」は、当初から抱いていた思想ではなく、当初の道の形而上学を修正するために唱えるに至ったものである。この回は、人間や万物の自律性を主張する「自然」の思想について解明し、あわせて魏晋南北朝時代の老荘思想への展開を論述する。	同上	同上
14	「無知」「不言」の提唱と弁証法的な論理	無言の提唱、矛盾律の否定などを始めとして、老荘思想はことば・論理・知識について重要な思索を行っている。この回は、中国古代の知識論の歴史における老荘思想の位置と意義に関して論述する。	同上	同上
15	諸子百家に対する批判と中国思想史の構想	老荘もまた諸子百家の一つであり、先行する諸子百家の思想を批判的に摂取しながら自己を形成していった。しかし、前漢初期の老荘はむしろ諸子百家の統一・総合に努力を傾注している。これらの問題を解明しつつ、あわせて老荘思想の後世に与えた影響について考究する。	同上	同上

＝仏　教　思　想＝（R）

〔主任講師：末木　文美士（東京大学教授）〕

全体のねらい

仏教は日本人にとって身近な宗教であるが、その思想となるとなかなか解りにくい。その理由の一つは、インドに発して以来、さまざまな文化圏で多様な展開を遂げ、焦点を絞りにくいことにある。ここでは、歴史的な事情も勘案しながら、日本という場を原点としてその思想を解体、再構成してみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	いまなぜ仏教か	仏教は古代のインドに発して、東南アジア・チベット・東アジアなどのさまざまな文化圏で多様に展開した。その多様な思想をどのような視点から見てゆくことができるのか。方法論的な問題を研究史を振り返りながら考察する。	末木文美士（東京大学教授）	末木文美士（東京大学教授）
2	歴史的概観	仏教思想史のさまざまな問題を見てゆくにあたって、一通りインド以来のさまざまな文化圏における仏教の歴史的展開を頭に入れておく必要がある。最近の研究に基づきながら、最低限必要な知識を概観する。	同　上	同　上
3	テキストの森	仏教の聖典は三蔵（経・律・論）とか大蔵経とか呼ばれて膨大な量にのぼる。また、その言語もパーリ語・サンスクリット語・チベット語・漢文など多様である。それらの成立や特徴、扱い方について論ずる。	同　上	同　上
4	解釈のパラダイム	膨大な仏典を整理し、体系化するために、教判と呼ばれる方法が工夫された。また、近代になると、大乗仏教はブッダの説でないとする大乗非仏説論などが現れ、議論を呼んだ。こうしたさまざまな仏典解釈の方法について考えてみる。	同　上	同　上
5	苦悩としての存在	ブッダの教説は人生を苦と見るところに出発点を持ち、その原理を求めて、無常・無我・縁起などの教説が展開された。原始仏教に由来しつつ、大乗にも生きているそれらの根本原理の意味を探る。	同　上	同　上
6	言語と存在	大乗仏教の一つの特徴は、存在の問題を考えるのに、言語論の立場から考察する点にあり、日常的言語の世界の無根拠性を鋭く突いた。その典型的な発想をインドの中観派の理論、及び中国の禅思想を中心に考察する。	同　上	同　上
7	象徴としての世界	日常言語を超えれば、そこには沈黙しかないのだろうか。果敢にもその恐るべき領域に踏み込み、世界を象徴として言語化したのが密教であった。マンダラとして展開される壮大な世界解釈の体系を読み解いてみる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	心の深層	大乗仏教における人間論は、心の理論として展開される。心を清浄なものと見る如来蔵系と、汚れたものと見る唯識系の思想があり、また、中国の天台では心を観察する止観と呼ばれる行法が展開した。これらの理論を考えてみる。	末木文美士	末木文美士
9	他者と関わる	内的な心の観察は独我論に陥りはしないか。他者はどのような形で必然性を持つのか。大乗における菩提の理想は他者との関わりを我々に迫るものであり、その極限に『法華経』が位置する。他者論としての大乗の意味を考える。	同上	同上
10	コミュニティの形成	以上考察してきた原理論に対して、以下では実践思想を扱う。具体的な他者との共存はサンガ（僧伽）と呼ばれる共同体において実現される。その共同体を支える規律が戒律である。さまざまなサンガのあり方を比較検討する。	同上	同上
11	超脱の道	苦なる世界を超脱するためにさまざまな修行法が開発され、悟りに至る道筋が示された。それに対して、瞬時に悟りに至る密教の即身成仏や禅の頓悟も主張された。そもそも悟りとは何か、修行とは何か、考えてみたい。	同上	同上
12	来世と救済	自力の修行に対して、仏・菩薩の力に頼って救済を受けるという道も考えられた。特に来世における救済を説く浄土教（阿弥陀仏信仰）は東アジアで大きな勢力を得た。浄土経典から親鸞にまで至る思想の系譜を考える。	同上	同上
13	楽観論の陥穽	東アジアの仏教の大きな特徴は、我々に仏性（仏になる可能性）が内在すると考えるところにある。この思想はさらに発展して、本覚（我々は本来的に悟っている）という立場にまで至る。余りに楽観的なこのような思想傾向の問題点を考える。	同上	同上
14	差別と平等	仏教はすべての生命ある存在は平等に尊重されるべきであると説く。だが、同じ仏教がもう一方で社会的な差別を認め、むしろ差別を積極的に生み出してゆく一面も持った。差別の原理となる業と輪廻の思想などを取り上げる。	同上	同上
15	思想史の中の仏教	仏教はそれぞれの文化圏において、それぞれ土着の思想と交渉しつつ展開した。土着の思想から影響を受けた面も、逆に土着の思想が発展するのに寄与した面もある。仏教をより広い思想史の中でどう位置付けるか、最後に考えてみる。	同上	同上

＝日本語の変遷＝（R）

〔主任講師：山口　明穂（中央大学教授）〕

全体のねらい

日本語の現在の姿をよく知るために、これまで日本語がどのように変化して来たかを知る。主要な要素の面から、時代の面からと二方面から観察し、理解を深めることを求める。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	概説	日本語の変遷の全体の流れを概観し、どのように時代区分するか等の問題を含めて、日本語の全体像を考えることを目指す。	山口明穂（中央大学教授）	山口明穂（中央大学教授）
2	漢字の移入	漢字が中国から移入されて来た後、どのように日本語の中に定着したか、音と訓との関係を含めて、初期の漢字の使われ方を考える。	杉浦克己（放送大学助教授）	杉浦克己（放送大学助教授）
3	漢字の働き	漢字が日本語の中に定着した後、どのような発展を遂げたか、日本語の文字文化を形成する上での漢字の果たした役割、西欧文化の流入に際して漢字をもとに過去の人々がどのように対処したかを考える。	山口明穂	山口明穂
4	五十音図の成立	五十音図は日本語の発音体系を示したものであるが、成立の過程、その後の日本語の中で果した役割を考える。	月本雅幸（東京大学助教授）	月本雅幸（東京大学助教授）
5	仮名の成立	独自の文字を持たなかった日本語で、漢字をもとに日本語に適した文字体系である仮名文字が作られるが、成立の過程を始め、それが日本語の言語生活の中で果した役割を考える。	同上	同上
6	文法の変遷	日本語の文法はどのように変化したか、その変化の中側にある日本語をもとにした人々の考え方の変化をも含めて考える。	山口明穂	山口明穂
7	擬古文	平安時代の仮名文が成立した後、後の時代の人達は、仮名文で出来上った体系を模す形で、書記生活を送るようになる。平安時代の言葉を研究し、それに従った言葉を綴る生活をしたのである。その擬古文の実態、変らざるように見えながらも、そこにどのような変化があったかを考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	奈良時代の言葉	奈良時代の言葉は『万葉集』を中心に考えられるる言葉であるが、その実態を考える。	杉浦克己	杉浦克己
9	平安時代の言葉（仮名文）	平安時代の言葉は、大きく分けて仮名文と漢文訓読文とに分けることができる。仮名文は、『源氏物語』を始めとして多くの文学作品に綴られた言葉であるが、その実態を考える。	山口　明穂	山口　明穂
10	平安時代の言葉（漢文訓読文）	経文を始め、漢籍を読む言葉は平安時代に独自の世界を作り上げた。同じ時代の仮名文との関係を含めて、平安時代の漢文訓読語の実態を考える。	月本雅幸	月本雅幸
11	鎌倉時代の言葉	武士の時代となる鎌倉時代に於いても、文化の中心には前代と同様に京都の公家を中心とした人達がいた。言葉も京都を中心とした言葉となる。しかし、前代と変らないように見えるこの時代の言葉にも、少しずつ新しい傾向が見られるようになる。その実態を考える。	山口明穂	山口明穂
12	室町時代の言葉	室町時代には、キリシタン資料を中心に新しい言葉が見られるようになる。そこに使われている言葉は現在我々の周囲の言葉と似た点が多く見られる。一つの考え方で、この時代を近代語の始りとする考えがあるが、そのようなこの時代の言葉を考えての結果である。その実態を考える。	同上	同上
13	江戸時代前期の言葉	江戸時代の言葉は、前期上方を中心にした時代と後期江戸を中心にした時代とにわけることができる。ここでは、前期上方語を考える。	坂梨隆三（東京大学教授）	坂梨隆三（東京大学教授）
14	江戸時代後期の言葉	18世紀半ば以降、文化の中心が上方から江戸に移り、江戸を中心にした地域の言葉が分るようになる。その実態を考える。	同上	同上
15	明治以降の言葉	幕末から明治時代にかけて西欧文化が流入し、日本語も大きく変わろうとするが、その実態を考える。	鈴木英夫（白百合女子大学教授）	鈴木英夫（白百合女子大学教授）

＝日本語教育概論＝（TV）

〔主任講師：水谷 信子（明海大学教授）〕

全体のねらい

この講義は日本語教育の基礎知識を与えることを目的とする。具体的にはコミュニケーション能力をつけるという学習目的に合った教育方法を考察するとともに、日本語を客観的にとらえる態度を養うことを主眼とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	日本語教育の意義	日本語教育の現状。日本国内・海外の学習者の数や学習目的など。学習目的に合った教育の重要性。外国語教育としての日本語教育のためには、日本語そのものの知識と学習者に対する態度が大切であることを確認する。	水谷信子（明海大学教授）	水谷信子（明海大学教授）
2	日本語の教室	日本語の実際を少しでも体験するために、日本語の教室に身をおいたと仮定して、入門期の授業、初級の文型練習、中級の読解、討論の練習などの典型的な教室作業を見て、教育上の問題点を考える。	同上	同上
3	入門期の指導	入門期から初級の指導項目、授業計画、目的に合った教授法、教科書、最初の授業の前の準備、基本的な練習方法と基本的な語彙の導入、教材・教具の使い方、指示の与え方、発音練習の方法など、入門期の指導を考える。	同上	同上
4	音声の指導	日本語の音声の指導法を具体的に考察する。拍感覚の重要性、母音・子音の中で気をつけるべきもの、母音の連続、促音、「ん」の発音、口蓋化、有気と無気、無声化、アクセント、プロミネンス、イントネーションなど。	同上	同上
5	「こそあど」等と場面性	「こそあど」の体系、「こそあど」の提示と練習、「こそあど」の場面性の考察。場面から来る「省略」と「完全文」、単文と談話の違い、構造練習と談話練習、具体的な練習方法から、自然な日本語を教えることを考える。	同上	同上
6	動詞を中心として(1)	動詞を中心とした指導項目についての考察。国文法との違い、動詞と助動詞、「～ます」から始める方法、普通形への移行、動詞の活用の型、「～て形」と補助動詞、「～ている」の導入、「た」の用法などを考える。	同上	同上
7	助詞と接続	外国人にとって習得しにくいとされる助詞の指導法。助詞と動詞をむすびつけて練習させる方法と助詞の用法の理解。助詞と動詞・形容詞・形容動詞の接続の誤用。「頭が痛いんです」の「ん」の用法。文と文の接続など。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	動詞を中心として(2)	願望を表す「～たい」と「～たがる」、可能形、使役形、受け身形の用法と指導法の考察。日本語の受け身表現は外国人学習者にとって習得が困難とされるが、人間関係を中心として具体的に動作を伴って考える方法を考える。	水谷信子	水谷信子
9	「やりもらい」と待遇表現	「やりもらい」表現の特殊性と効果的な指導法の考察。補助動詞としての用法。尊敬表現・謙譲表現。家族の呼称。語彙による待遇表現。親愛表現・内と外。身体表現。話し手と聞き手との距離などを考える。	同上	同上
10	話し方と聞き取りの指導	話し方と聞き取りの向上のための実際的な指導方法。あいづちの理解。文完成練習の効果。わくの中での練習と自由会話。録音による話し方指導。ミニマルペアを利用した聞き取り指導。文構造と音声の両面から指導。	同上	同上
11	語いと表記の指導	日本語の語彙と表記の特徴と指導法を考える。語彙と文体。語彙の与えかた。基本語彙と基本漢字。類義語の説明能力の養い方。外来語の指導。擬声・擬態語の基本的な傾向。表記の指導法などを考察する。	同上	同上
12	読解と総合練習	中上級の指導法と読解。文体の違い。学習者の準備方法。理解の確認方法。読んだことを話させる、聞かせる、書かせる、応用練習をさせるなどの総合練習によって全般的な能力の向上を図ることを考える。	同上	同上
13	補助動詞と形式名詞	中上級の段階で特に必要な補助動詞と形式名詞についての考察。「ている」と「てある」、「てくると」「ていく」の対応：「こと」「わけ」「ため」「もの」「ところ」「はず」等の用法説明と例文作成の方法を考える。	同上	同上
14	人間関係と言語生活	日本人の話し方の特徴。感謝の表現と謝罪表現、「やっぱり」の用法。「お茶でも」「お茶をのんだり」などの例示表現と間接表現。「おかげさまで」など理解しにくい挨拶。性別・地域・世代の違い、学習者のアイデンティティの問題の考察。	同上	同上
15	評価と指導	教育の上での評価の意義。試験と評価の関係。試験の目的と利用法。試験問題の作り方。作文や話し方の評価等。講義全体の結びとして、これまで学んだ基本的な教授法の応用法と、今後の研究課題や研究方法を考察する。	同上	同上

＝ 書誌学（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：杉浦　克巳（放送大学助教授）〕

全体のねらい

文献資料（書籍）を扱う書誌学は、歴史学や文学のための基礎となるばかりでなく、書きことばの変遷の具現した姿をとらえる学でもある。様々な時代の書籍の実例を、形状や書き表わし方によって整理して示し、その特色を考えながら、実際に個々の資料を読みとることで、古文献資料を扱う基礎的な知識を概説しようとするのが本講義の主なねらいである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	書誌学への扉	書籍さらには文字書写物一般の歴史の概略を振り返り、古文献資料を扱う書誌学の主な項目やその意義を概説し、より古い時代の書籍の代表的な形状や装丁の実物例を挙げて紹介し、講義全体への導入とする。	杉浦克巳（放送大学助教授）	杉浦克巳（放送大学助教授）
2	書籍の形状と料紙	書籍の形状や書函などの付随物についての基本的な事項を実物例を示して概説する。また料紙の材料や製法とその変遷、装飾などについて各々の特色を実際例を挙げて概説する。	同上	同上
3	書籍の取り扱いと保存・修補	書籍の取り扱いを様々な装丁や付属物について概説する。また保存方法や修補の実際例を紹介し、保存と利用の関係を考えることで閲覧の際の注意事項を併せて概説する。	同上	同上
4	平仮名の読み方(1)	平仮名の発生・発達を概説し、いわゆる異体仮名の読み方について、主に版本の平仮名文の実例を用いて、類型的な字形・字体の平仮名の読み方を概説する。	同上	同上
5	平仮名の読み方(2)	主に古筆和歌資料や散文古写本の実例を用いて、字母漢字を考えながら読むことによって、いわゆる異体仮名をある程度読みこなす方法を概説する。	同上	同上
6	仮名文の読み方	主に漢字仮名交じりの古筆和歌資料や散文古写本の実例を用いて、平仮名文・漢字仮名交じり文の表記方法としての特色を考え、文章の内容や前後関係等も考慮した上での平仮名文の読み方を概説する。	同上	同上
7	漢字の読み方(1)	主に行書の版本資料の実例を用いて、類型的な字形・字体を部首などによって整理して把握することで個々の文字を読みとるための参考とするための要点を概説する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	漢字の読み方(2)	主に行書の資料の実例を用いて、筆跡を辿りながら漢字を判読するための要点を概説し、複数の伝本を互いに参考にしながら読む実例を示す。	杉浦克巳	杉浦克巳
9	漢文の読み方	基本的な漢文の句法や助字などの漢文中での働きを整理して示し、漢文・変体漢文の表記方法としての特色を考え、返点や送り仮名がなくてもある程度基本的な文意を把握するための要点を概説する。	同上	同上
10	訓点資料と片仮名文	漢文訓読の歴史を辿り、漢文の訓読の仕方の変遷と基本的な訓点資料の読み方を概説すると共に、漢文訓読と共に発達してきた片仮名文の代表例を紹介する。	同上	同上
11	書状と文書	書状の代表的な様式を、仮名・漢文各々の実例を挙げて紹介すると共に、公式令に挙げられた基本的な文書の様式を、公文書の実例によって概説する。	同上	同上
12	辞書の利用	古辞書の発達の歴史を、「読むための辞書」と「書くための辞書」という観点から整理して概説すると共に、その性格を活かして古文献資料の読解に役立つ実例を示す。	同上	同上
13	書写の経緯	古文献資料の書写の経緯を、奥書や周辺資料から辿る実例を示すと共に、複数の本文を比較検討してあるべき本文を考える校合の基本的な方法を実例を挙げて概説する。	同上	同上
14	古筆	古筆資料の実際例を時代やジャンルで整理して挙げ、書風だけではなく文字や用字法の変遷という観点からも比較対照して、各々の特色を整理し概説する。	同上	同上
15	出版と書籍	近世頃から盛んになった印刷の歴史を整理概説し、印刷によって出版業や書籍の流通経路が整備されていった跡を辿る。さらにこの変遷の最先端としての現代の印刷・出版・流通の実際例を紹介する。	同上	同上

＝ 上代の日本文学（’００）＝（R）

〔主任講師：多田　一臣（東京大学教授）〕

全体のねらい

文学の誕生から平安遷都のころまでを上代とする。この講座では、その主要な作品、古代歌謡、『万葉集』『記紀』『風土記』などを読み解きながら、その展開を文学史的な観点から説明してみたい。上代日本文学の全体像を把握することがここでの目標となる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	文学の発生	文学の言葉は、日常的な言葉、事務的な言葉などとは異なる、幻想的な言葉、情緒的な言葉である。それは、古代では特別の言い方をもっていた。したがって、そういう言葉の成立をさぐるのが文学の発生になる。	古橋信孝（武蔵大学教授）	古橋信孝（武蔵大学教授）
2	古代歌謡の世界	古事記、日本書紀などに記されている歌謡は、古くから歌い継がれてきたものである。古いものゆえ、むしろ歌の構造をはっきりともっている。その構造を、同じ日本語文化圏の沖縄の古謡まで含めて考える。	同上	同上
3	万葉集の成立	万葉集が古代歌謡と違って、どの地域の人々にも理解しうるのは、都市的な言葉、いうならば共通語でよまれているからである。それゆえ、時代を超えて、われわれにも鑑賞することができる。そういう言葉の成立を考える。	同上	同上
4	初期万葉の世界	舒明天皇の時代から壬申の乱までの、中央集権体制が確立される激動の時代の和歌を初期万葉と呼ぶ。万葉の夜明けにふさわしく清新でのびやかな歌が多い。額田王の作品を中心にその世界をながめてみたい。	多田一臣（東京大学教授）	多田一臣（東京大学教授）
5	柿本人麻呂1	柿本人麻呂は万葉集最大の歌人である。宮廷歌人の第一人者として、多くの讃歌や挽歌を残している。長歌の様式を完成させたのも人麻呂である。そうした人麻呂の作品世界をながめつつ、その詩的達成について考えてみたい。	同上	同上
6	柿本人麻呂2	前回に引き続いて、柿本人麻呂の作品世界をながめる。さらに、人麻呂と並称される歌人である山部赤人についても考えてみたい。	同上	同上
7	旅人と憶良	万葉の盛時を築いた二人の歌人、大伴旅人と山上憶良について考える。脱俗的な風流の中に人生の哀感をうたった旅人、人生の苦悩や社会の矛盾をうたった憶良。対蹠的でありつつどこか重なりあう二人の生のありようを探っていく。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	大伴家持 1	大伴家持は万葉集の編纂者に擬せられている。憂愁に満ちた感傷を繊細な表現でうたいあげて、独自な境地を開いたとされる。次代の和歌への橋渡しを果たした点も高く評価されている。その家持の作品を具体的にながめていく。	多田一臣	多田一臣
9	大伴家持 2	前回に引き続いて、大伴家持の作品世界をながめる。さらに、家持が紀女郎と交わした贈答歌を対象に、和歌を通じた当時の社交生活のありようについても考えてみたい。	同上	同上
10	東歌と防人歌 ——都と鄙	東歌も防人歌も、どちらも東国の衆庶の肉声を伝えた歌とされる。しかし、なぜ万葉集に東国の歌が収められたのかという理由は未解明のままである。ここでは、都と鄙という観点から、右の問題を考えてみたい。	同上	同上
11	漢詩文の世界	古代の官僚貴族たちにとって漢詩文は必須の教養だった。ここでは最初の漢詩集『懐風藻』を取り上げ、その作品世界をながめてみたい。中国詩学の影響を受けて成立した歌学書『歌経標式』についても触れてみたい。	同上	同上
12	歴史書の成立 ——記紀の世界1	八世紀の初めに成立した『古事記』と『日本書紀』は、大和朝廷が国家としての装いを整えるために要請された歴史書である。それはどのような過程を経て成立し、なぜ必要であったのか、そこには何が描かれているかということを考えてみたい。	三浦佑之（千葉大学教授）	三浦佑之（千葉大学教授）
13	神と人の物語 ——記紀の世界2	記紀には、神々の物語と歴代天皇の事績や系譜が語られている。ここでは、具体的な伝承を取り上げながら、記紀の神話や説話に描かれた世界がどのようなものであったのかということを論じていく。皆さんがよく知っている話も見つけられるはずである。	同上	同上
14	古代の民間伝承 ——風土記の世界	大和朝廷の命令を受けて、各国がそれぞれの土地に伝えられた伝承をまとめたのが『風土記』である。その成立の経緯を踏まえながら、現存風土記のいくつかを紹介する。そこには民間で語られていた伝承世界の多様性を見出すことができるはずである。	同上	同上
15	古代の説話 ——日本霊異記	説話文学は、貴族を中心とする古代文学の世界のいわば周縁に位置している。最古の説話集である『日本霊異記』を取り上げながら、説話文学誕生の史的意義を考える。	多田一臣	多田一臣

＝中古の日本文学＝（R）

〔主任講師：小町谷　照彦（東京経済大学教授）〕

全体のねらい

平安京という都の環境の中で宮廷貴族を中心にして営まれ、男性を主体とした漢文学を基盤としつつも、女流による仮名文学が盛んであった平安時代の文学の特質を念頭に置きながら、ジャンル別に文学史の流れをたどると共に、顕著な存在であった人物や事象を取り上げて、幅広い見地から当時の文学活動の実態を明らかにしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	文学史の流れ　1 漢文学	勅撰三集（凌雲集・文華秀麗集・経国集）、藤原明衡の本朝文粋などの撰集、空海、菅原道真、慶滋保胤、大江匡房などの文人を中心に、具体的な作品に即して、漢文学の流れを展望する。本朝一人一首、日本詩史、日本詩紀など、後世の著述にも触れる。	小町谷照彦（東京経済大学教授）	小町谷照彦（東京経済大学教授）
2	文学史の流れ　2 和歌	三代集（古今集・後撰集・拾遺集）、後拾遺集、金葉集、詞花集などの勅撰集を中心に、歌壇活動にも注目しながら、具体的な個々の詠歌に即して、和歌史の展開を追う。新撰万葉集、新撰和歌、古今六帖などの私撰集、主な歌合や歌学書にも及ぶ。	同　上	同　上
3	文学史の流れ　3 前期の作り物語	竹取物語、うつほ物語、落窪物語など、源氏物語以前の物語を取り上げ、作品の内容や主な作中人物を紹介しながら、個々の作品の特色などを論じる。三宝絵序、蜻蛉日記序、源氏物語、蛍巻の物語論などを通して、物語の実態や本質についても目を向ける。	同　上	同　上
4	文学史の流れ　4 歌物語の周辺	皇統、美貌、和歌の名手、奔放不羈の愛、流離放浪など、いわゆる色好みを主人公とする伊勢物語や平中物語を典型として、歌物語の本質を考える。歌語りに関心を持つ大和物語は、和歌説話集的と見る。豊蔭、伊勢日記、篁物語、多武峰少将物語などにも及ぶ。	同　上	同　上
5	文学史の流れ　5 源氏物語	光源氏に、藤壺、六条御息所、紫の上、明石の君などが関わって展開する光源氏物語、薫と匂宮に宇治の女君たちが関わって展開する宇治の物語を、愛と栄華、人間不信と宗教的救済の主題や、語りや和歌という方法の問題をからめて、読解の方向性を探っていく。	同　上	同　上
6	文学史の流れ　6 後期の作り物語	狭衣物語、浜松中納言物語、夜の寝覚、堤中納言物語などの作品の内容に触れながら、源氏物語の影響のもとに深化した主題や方法の特色について注目したい。過渡期の作品であるとりかへばや物語や有明の別れ、また、関連する無名草子や風葉集などにも触れる。	同　上	同　上
7	文学史の流れ　7 日記文学と枕草子	身の上を語るのが女流日記の本質と見て、蜻蛉日記や更級日記を中心に取り上げ、和泉式部日記、紫式部日記、成尋阿闍梨母集、讃岐典侍日記などにも及びたい。また、日記、随想、類聚の章段より成る枕草子の性格を、日記という面に重点を置いて考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	文学史の流れ 8 歴史物語と軍記	源氏物語を意識しながら編年体の形をとる栄花物語、対話形式で紀伝体の形をとる大鏡の作品としての特質に注目しながら、歴史の渦中を生きた人間像を取り出すようにする。また、中世の軍記物語の萌芽として、将門記や陸奥話記などの軍記文学にも触れたい。	小町谷照彦	小町谷照彦
9	文学史の流れ 9 説話文学	日本霊異記、今昔物語、古本説話集などを中心に、説話文学に見られる、多様な階層の人々の生き方に目を向けたい。散逸した宇治大納言物語、また、三宝絵、日本往生極楽記、続本朝往生伝などの往生伝、法華験記、江談抄、打聞集、唐物語などにも触れる。	同上	同上
10	紀貫之	古今集・新撰和歌の撰者、貫之集に集成された屏風歌の作者、古今集仮名序・大堰川御幸和歌序・新撰和歌真名序の執筆、土佐日記の執筆など、多様な文学活動をした貫之の業績を、時代的な背景を視座に置きながら、具体的な作品の読解を通して跡づけする。	同上	同上
11	源順	和名類聚抄の著者で、戯作的な無尾牛の歌など異色の漢詩文の作品を多数残し、梨壺の五人の一人として、万葉集の訓読や後撰集の編纂に従事し、あめつちの歌・双六盤の歌・碁盤の歌など特異な歌を詠んだ多才さを、和歌に傾倒する男性歌人の系譜に位置づけする。	同上	同上
12	藤原公任	拾遺集に発展した拾遺抄、和漢朗詠集の撰者で、三十六歌仙の基になった三十六人撰など秀歌撰を編纂し、歌学書の新撰髄脳や和歌九品、有職故実書の北山抄などを著わし、三舟の才を称されたその活動をたどり、当時の文学状況の中での存在の意味を考える。	同上	同上
13	女性たちの文化圏	一条朝の大斎院選子・皇后定子・中宮彰子を中心とする文化圏、後冷泉朝の六条斎院?子内親王・祐子内親王・四条宮寛子の文化圏で女房たちや風流な殿上人たちによって営まれた、王朝文学の粋ともいうべきサロン的な文学活動の実態を作品を通して明らかにする。	同上	同上
14	女流歌人と女歌	小野小町、伊勢、斎宮女御、和泉式部などの女流歌人の歌を読解しながら、女性独自の発想や表現の特徴を探ってみる。また、男性との贈答歌を取り上げて、女歌といわれる、歌垣以来の応酬の方法に注目する。和泉式部日記に見られる独特の形態の贈答歌にも触れる。	同上	同上
15	歌謡の世界	神事や遊宴の場で歌われた神楽歌や催馬楽、また、今様の集成である梁塵秘抄に収められた歌謡を読解しながら、神仏信仰や庶民生活の具体相に触れてみたい。また、源氏物語などに引用された歌謡を検討して、和歌とは異なる表現性に注目する。	同上	同上

＝ 中世日本文学の風景（’００）＝（R）

〔主任講師：久保田 淳（白百合女子大学教授）〕
〔主任講師：島内 裕子（放送大学助教授）〕

全体のねらい

この科目は、日本の中世文学を地理に焦点をあてて概観する。各地を舞台にした作品やゆかりの文学者たちを取り上げ、中世文学を風土や時代性などの面から考察し、各地域の文学性を浮び上らせる。名歌や名場面を原文で紹介するとともに、それらの意味や背景をわかりやすく解説し、中世前後の時代の文学とも関連付けて論じる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	西日本と東日本・京の都	はじめに日本史学でもしばしば議論される、西日本と東日本の違いについて考え、次に「愚管抄」「保元物語」「平治物語」「平家物語」などの作品に言及しながら、中世初頭における王城の地―京の都の文学史的意味を論ずる。	久保田 淳（白百合女子大学教授）	久保田 淳（白百合女子大学教授）
2	鎌倉	中世において鎌倉が果たした役割を、政治と文化の両面から考察する。源実朝・源光行・宗尊親王などの歌人・学者、「とはずがたり」などの作品、鎌倉武士たちに歌われた早歌などを取り上げる。	島内裕子（放送大学助教授）	島内裕子（放送大学助教授）
3	瀬戸内・西国	瀬戸内海は、京と四国、中国、九州地方を結ぶ交通の要路であり、また、日宋貿易で富を築いた平家のように、海外へ通じる海でもあった。歌枕や霊場を訪ねる旅人の往来や遠流の貴人も少なからず、海賊も出没し、港には遊女も集うたこの地方の文学を考える。	木下資一（神戸大学教授）	木下資一（神戸大学教授）
4	山陰道	配流の地である隠岐を中心に、後鳥羽院に関連して「新古今和歌集」「増鏡」などを扱い、後醍醐天皇に関連して「太平記」にも触れる。他に、中世における人麿影供や説話などにも言及したい。	村尾誠一（東京外国語大学助教授）	村尾誠一（東京外国語大学助教授）
5	陸奥	二度陸奥を旅した西行を中心に、この「辺境」の地の持つ問題を考える。他に、「義経記」や「御伽草子」などにも触れる。	村尾誠一	村尾誠一
6	東海道	京と鎌倉を結ぶ幹線道路である東海道を舞台とする中世文学の中から、主として紀行文を取り上げる。「海道記」「東関紀行」「十六夜日記」などの鎌倉時代の作品、および中世後期の漢詩文「梅花無尽蔵」などにも触れる。	島内裕子	島内裕子
7	東山道	東山道は古代以来、都と東国、陸奥を結ぶ重要な交通路であり、歌枕や霊場なども多いが、山岳地帯を通るゆえ旅の難所も少なくなかった。ここでは主として、信濃以西の国々を取り上げる。	木下資一	木下資一

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	北陸道	木曽義仲は北陸道を都に攻め上り、一方「義経記」や能「安宅」語るところの義経は、この道をたどり、陸奥へ落ちのびたことになっている。この地方には、親不知などの難所も知られる。また流人の島として知られる佐渡に身を留めた歌人、宗教家、芸能者もいる。	木下資一	木下資一
9	大和・吉野	「平家物語」と「太平記」を軸として見て行く。中世始発期における南都の炎上と復興、南北朝期の吉野が中心となるが、他にもこの地の持つ豊かな文学的な問題にも言及する。	村尾誠一	村尾誠一
10	南海道	紀伊国や四国の中世文学における意味を考える。中世文学に関わる人物としては、明恵・一遍・心敬など、文学の問題としては、補陀落渡海・道成寺縁起などを取り上げる。	久保田淳	久保田淳
11	関八州	鎌倉時代になりその重要性が飛躍的に増したこの地について考える。実朝をはじめ、「太平記」「神道集」など、さらには、宗祇や心敬などにも触れる。	村尾誠一	村尾誠一
12	叡山と高野	天台宗の総本山比叡山延暦寺と真言宗の総本山高野山金剛峯寺が中世の文学や文化で果した役割について考察する。作家としては慈円・西行など、作品としては「拾玉集」「山家集」「平家物語」「高野物語」「三人法師」説経「かるかや」などに言及する。	久保田淳	久保田淳
13	筑紫	主として中世後期における筑紫の文学的位置付けを考える。浄弁の筑紫下向や宗祇の「筑紫道記」など歌人・連歌師の活動、細川幽斎の文武にわたる活躍、および木下長嘯子などの戦国武士について取り上げる。	島内裕子	島内裕子
14	異郷・異界	中世文学の舞台は、日本の国土に限らない。天竺・唐土などの異郷やまた神仏や鬼・天狗・龍神などの住む異界もその舞台であった。中世の日本人は外国をどのように捉えていたか、その宇宙観・世界観はどのようなものなのか考える。	木下資一	木下資一
15	京	中世から近世への時代の転換を、京およびその周辺に焦点をあてて考察する。主として兼良・宗祇・実隆・守武・幽斎などを取り上げ、新しい文学の展開を眺望する。	島内裕子	島内裕子

＝ 近世の日本文学（’９８）＝（R）

〔主任講師：長島　弘明（東京大学教授）〕
〔主任講師：清登　典子（筑波大学助教授）〕

全体のねらい

中世までの文学は、貴族や武家などの支配層によって作られ享受されていたが、近世（江戸時代）の文学は、被支配層である町人が作者・読者として大きな役割を果たすようになり、前代とは異なった様々なジャンルの作品が生まれた。その多様な近世文学の成立・展開の様相を、作家・作品に即して具体的に見てゆく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	近世文学の特徴	前代の文学と比較した時の近世文学の顕著な特徴を、出版文化の成立と大衆化、雅俗の並立・混淆の様相、滑稽と教訓の要素、上方と江戸の地域的な対比等々、様々な観点から考察する。	長島弘明（東京大学教授）	長島弘明（東京大学教授）
2	仮名草子から浮世草子へ	近世初期の小説である仮名草子の諸相に触れ、その特徴を明らかにする。また、仮名草子に代わる新しい小説形式である浮世草子の初作、井原西鶴の『好色一代男』の出現の意義について説明する。	同上	同上
3	西鶴の文学	西鶴の伝記を略述し、好色物・武家物・町人物等の西鶴浮世草子の各作品について、それぞれのテーマ的特色等を考察する。あわせて、八文字屋本等の西鶴以後の浮世草子について通覧し、浮世草子の展開の様を探る。	同上	同上
4	貞門・談林から蕉風俳諧へ	俳諧の源流から、近世俳諧の形式を定めた貞門俳諧、新風としての談林俳諧、さらに芭蕉の登場までを扱う。主要俳人と作品について触れながら、各派の特色を説明する。芭蕉については、深川隠棲までの時期を対象とする。	清登典子（筑波大学助教授）	清登典子（筑波大学助教授）
5	芭蕉の文学	天和期以降の芭蕉の俳諧について考察する。俳風（連句・発句）の時期的な変遷、蕉風俳諧の理念と表現、俳文と紀行の意義等、多方面から考察する。必要があれば、門人についても適宜触れることにする。	同上	同上
6	浄瑠璃と近松門左衛門	浄瑠璃の歴史を、近松門左衛門を中心に概観する。浄瑠璃の成立、古浄瑠璃、近松の人と時代物・世話物の各作について、また海音・宗輔・出雲・半二、江戸浄瑠璃等、近松以後の浄瑠璃の展開について解説する。	池山晃（大東文化大学助教授）	池山晃（大東文化大学助教授）
7	国学と和歌	伝統的な歌学から国学への学問的革新と平行する形で、堂上派から古学派・江戸派、あるいは蘆庵・桂園派など、様々に展開して行った近世和歌の歴史を説明する。幕末の良寛・元義・言道・曙覧らにも触れる。	鈴木健一（日本女子大学教授）	鈴木健一（日本女子大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	漢学と漢詩文	朱子学・古義学・徂徠学の文学観をとりあげ、儒学各派の詩文に対する見解を押さえつつ、文山・元政から古文辞派の擬古主義、反古文辞の江湖社、幕末の個性的な詩人たちまでの、漢詩文の変遷を解説する。文人の概念についても触れる。	鈴木健一	鈴木健一
9	前期読本と上田秋成	前期読本成立の背景に触れ、都賀庭鐘・建部綾足の読本、さらに上田秋成の文業を、『雨月物語』『春雨物語』を中心にして考察する。浮世草子との相違、また後期読本との相違等にも言及する。	長島弘明	長島弘明
10	中興期俳諧と蕪村	芭蕉没後の享保期俳諧から説き起こし、蕉風中興運動の経緯について概説し、この時期を代表する文人風の俳人である、与謝蕪村の人と作品について考察する。蕪村の俳論俳詩等にも言及する。	清登典子	清登典子
11	一茶と雑俳・川柳	蕪村以後の俳諧大衆化時代の後期俳諧を、一茶調と呼ばれる個性的な句を多く残した小林一茶を中心に概観する。また、雑俳について略述し、特に川柳について、その庶民詩としての本質について解説する。	同上	同上
12	笑いと舌耕の文学	笑いを旨とした文学形式である狂歌・狂詩・咄本の流れをそれぞれ概説し、近世的な笑いの質について考える。また、仏教談義・講談と密接な関係を持つ、舌耕の小説ともいうべき仏教長編小説・実録体小説について略述する。	板坂則子（専修大学教授）	板坂則子（専修大学教授）
13	江戸の戯作　(1)	文運東漸後、江戸で盛んになった小説類について概説する。本章では、江戸小説の草分けといってよい『当世下手談義』以下の談義本、遊里を舞台とする洒落本、画文が同等の比重を持つ黄表紙、洒落本の流れを引く滑稽本を取り上げる。	同上	同上
14	江戸の戯作　(2)	江戸中心の小説の続き。後期読本の展開を、山東京伝・曲亭馬琴の作品を中心に概観する。また、市井の男女の恋愛を描いた人情本、黄表紙の後継ジャンルである合巻について解説し、それぞれの小説としての特徴を検証する。	同上	同上
15	歌舞伎と南北・黙阿弥	歌舞伎の歴史を、後期を中心に概観する。歌舞伎の成立、元禄歌舞伎、丸本物の時代、正三・五瓶・治助、特に鶴屋南北・河竹黙阿弥の作に比重をおいて解説する。歌舞伎役者についても、適宜言及する。	池山晃	池山晃

＝近代の日本文学 （’０１）＝（R）

〔主任講師：野山 嘉正（放送大学教授）〕
〔主任講師：安藤 宏（東京大学助教授）〕

全体のねらい
明治期から現代に至る近代の日本文学の全体像を描くのがねらいである。通常の文学史の枠に必ずしもとらわれることなく叙述し、主としてジャンル別に流れを辿り、さらに、相互の関連を意識しつつ考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	はじめに	本講義の目的と方法について述べる。年代順に整理せずにジャンル別に構想したことの説明から始めて、全体の配置を紹介する。最後に近代文学とは何であったのかを考えるのが目的であることを明らかにする。	野山 嘉正（放送大学教授）	野山 嘉正（放送大学教授）
2	詩歌Ⅰ 詩歌の新時代	詩歌における旧時代から新時代への変化を叙述し、漢詩・和歌・俳諧が漢詩・新体詩・短歌・俳句へと姿を変える様相を描写する。こういう推移の過程から、日本の近代文学の方向が規定されることを論ずる。	同上	同上
3	詩歌Ⅱ 口語詩の確立と短歌・俳句	明治末期から大正期・昭和期戦前における、口語詩の確立と短歌・俳句の変貌を、それぞれのジャンルごとに素描しつつ、詩歌としての文学状況を把握する。	同上	同上
4	詩歌Ⅲ 戦後詩歌へ	昭和十年代の、いわゆる戦時下の詩歌のありかたから、敗戦による反省と回生をまず総括する。次いで第二芸術論による打撃からの短歌・俳句の立ち直りの過程を辿り、現代詩歌考察の手がかりを提示する。	同上	同上
5	小説Ⅰ 文明開化と「文学の変容」	西洋文明の移入、言文一致運動の動向、メディアや出版形態の変化などに留意しつつ、現在「小説」と名付けられているジャンルがどのように成立したのかについて考察する。明治の初頭から、二十年代の尾崎紅葉、幸田露伴までを中心に扱う。	安藤 宏（東京大学助教授）	安藤 宏（東京大学助教授）
6	小説Ⅱ 日清、日露戦争期の文学	日清、日露戦争期にあって、ナショナリズムの台頭、浪漫主義的な傾向、社会の現実を直視して行く傾向が、それぞれ小説にどのような形で表れてくるかを考察する。樋口一葉、国木田独歩、泉鏡花らを中心に、明治二十年代、三十年代を扱う。	同上	同上
7	小説Ⅲ 自然主義文学と漱石・鴎外	明治二十年代から四十年代にかけて、西洋の自然主義文学がそのような形で受容されたのを、島崎藤村、田山花袋を中心に考察する。これらに関連して、「写生文」の動向、大正初頭にかけての夏目漱石、森鴎外の活動状況について考察する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	小説Ⅳ 大正文壇の成立	明治の末期、反自然主義的な文学動向が表れ、それがどのように大正文壇を形成して行くかについて考察する。大逆事件の影響、永井荷風、谷崎潤一郎ら耽美派の動向、白樺派の活動、芥川龍之介のデビューなどを扱う。	安藤　宏	安藤　宏
9	小説Ⅴ マルキシズムとモダニズム	大正後半から昭和初頭にかけての状況を、ソビエト文化とアメリカ文化の受容に注視しつつ考察する。心境小説の成立、関東大震災の影響、メディアの変容と大衆文学の成立、新感覚派の文学運動、プロレタリア文学の展開などを扱う。	同　上	同　上
10	小説Ⅵ 第二次世界大戦と文学	モダニズム文学の消長、転向文学、昭和十年前後の「文芸復興」などについて触れた上で、第二次世界大戦との関わりを、ナショナリズム、ファシズムの日本的な形態の特色、アジアの中の日本文学、といった観点から考察する。	同　上	同　上
11	小説Ⅶ 戦後文学の展開	昭和二十年代から三十年代にかけての文学状況を、「無頼派」の作家たち、第一次戦後派の動向、「第三の新人」たちの作風などについて叙述することから開始する。三十年代以後の展開も流れとして解明し、文学にとって「戦後」とは何であったのかを考える。	同　上	同　上
12	演劇Ⅰ 旧劇から新劇へ	近世演劇から近代演劇の発生への過程を辿り、大正期に至る多彩な演劇運動の特質を解明する。さまざまな層位の活動を、文学と演劇との関連をも包摂しつつ、近代における演劇全体の様態を展望する。	林　廣親（成蹊大学教授）	林　廣親（成蹊大学教授）
13	演劇Ⅱ 戦前から戦後へ	思想運動としての演劇が盛んであった、昭和期戦前から戦後にかけての、新劇の流れを辿り、さらに戦後社会の発展にともなう演劇状況全体の推移を描写し、文化論への展望をも開く。	同　上	同　上
14	評論Ⅰ 近代批評の成立	西洋文化の移入と文学の内外についての自覚が深い関係にあることから説き起こし、坪内逍遙・森鷗外らの立場を中心に考察する。これが昭和初期に至る西洋文学研究の進展につれて変化していくさまを叙述する。	野山　嘉正	野山　嘉正
15	評論Ⅱ 近代批評の展開	小林秀雄の位置から戦後批評に至る流れを全体として把握し、その後の変質についても素描を試みる。昭和十年代の古典復興が文壇や学界を支配したさまや、その戦後への影響をも論じ、近代文学の全体像への基礎を提示する。	同　上	同　上

＝ 清少納言と紫式部（’９８）＝（R）

〔主任講師：鈴木 日出男（成蹊大学教授）〕

全体のねらい

平安時代に、女流の手になるいわゆる女流文学がおこった。本講義では、その女流文学全体相への展望のもとに、日本文学史上に屹立する清少納言と紫式部の文学に照明をあててその本質に近づくことを目的とする。女流文学全体をも展望するために、道綱の母・和泉式部・孝標の娘などにもふれることになる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	女流文学の担い手たち	平安時代に開花する女流文学はどのようなものであったか、またどのような人々によって、なぜそのような文学営為がおこったかを考えることをもって、全体の序説とする。	鈴木日出男（成蹊大学教授）	鈴木日出男（成蹊大学教授）
2	『蜻蛉日記』とその作者	『蜻蛉日記』は、女流によって書かれた最初の長大な散文文学である。その作品と作者を通して、女流文学の一つのあり方を考える。	同上	同上
3	清少納言伝	『枕草子』の作者である清少納言がどのような環境のなかでいかに生涯を生きたかを浮き彫りにする。	同上	同上
4	『枕草子』とその成立	『枕草子』の本性にふれながら、清少納言がこの作品をどのような環境や条件のもとで作りえたかを考える。	同上	同上
5	『枕草子』の類聚章段	『枕草子』作品研究①として、この作品を最も特徴づけている類聚章段（ものづくしの段）をとりあげる。	同上	同上
6	『枕草子』の類聚から随想章段へ	『枕草子』作品研究②として、随想章段をとりあげる。また、ここでは特に前回の類聚章段との関連について考えることになる。	同上	同上
7	『枕草子』日記回想章段	『枕草子』作品研究③として、作者の体験見聞にもとづく日記回想章段をとりあげる。いわゆる日記文学とも異なる点に注意したい。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	『枕草子』の文体と本質	『枕草子』の表現のあり方を通して、この作品の文体と本質を考える。これをもってこの作品論のしめくくりとしたい。	鈴木日出男	鈴木日出男
9	和泉式部の文学	平安時代屈指の女流歌人の和泉式部は、清少納言や紫式　部と同時代の人。その和歌と『和泉式部日記』をとりあげ、その本質に迫る。	同　上	同　上
10	紫　式　部　伝	『源氏物語』『紫式部日記』『紫式部集』をのこしたこの作家が、どのような人生を歩んだか、を浮き彫りにする。	同　上	同　上
11	『源氏物語』への道	この作者の精神生活のありように注意しながら、物語創作の必然や意義について考える。	同　上	同　上
12	『源氏物語』の世界(1)	虚構の人物、光源氏の創出をはじめとして、この物語のさまざまな特性にふれながら、作品世界の本質に迫る。	同　上	同　上
13	『源氏物語』の世界(2)		同　上	同　上
14	『紫式部日記』の文体と本質	この作品の表現のあり方を通して、紫式部の文体、思想、本質を考える。	同　上	同　上
15	女流文学の本性	菅原孝標の娘の『更級日記』にも触れながら、それぞれの作家・作品をあらためて考え、本講義のまとめとする。	同　上	同　上

＝ 徒然草の遠景（’９８）＝（R）

〔主任講師：島内 裕子（放送大学助教授）〕

全体のねらい
徒然草下巻の世界を辿りながら、そこで展開される批評の達成について遠望するとともに、徒然草を随筆として捉える従来の考え方を再検討し、日本文学の中で、徒然草とは何であったのかという、新しい位置づけを提示する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	内景から遠景へ	徒然草上巻の世界を振り返り、下巻への展望を示す。	島内裕子（放送大学助教授）	島内裕子（放送大学助教授）
2	王朝の余薫	第１３８段・１３９段を中心に、王朝文学の余韻が、なぜここに書かれているかを探る。	同上	同上
3	人間観さまざま	第１４０段から１４６段までを中心に、人間観の描かれ方を考える。	同上	同上
4	外界と内界	世間とのかかわりについて、兼好がどのように捉えていたかを考える。	同上	同上
5	筆法の変化	上巻と比べて、下巻の書き方には、どのような特徴がみられるかを探る。	同上	同上
6	時間の遠景	徒然草に多数みられる有職故実の章段を、新しい視点から捉え直す。	同上	同上
7	批評の達成	徒然草における批評の到達点について考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	個性と普遍	徒然草に登場する個性的な人物群像と、人間の普遍性について考える。	島内裕子	島内裕子
9	兼好の憂愁	徒然草末尾の数段に現れる兼好の心情を探る。	同上	同上
10	八つになりし年	徒然草最終段をめぐって、なぜここで擱筆されたのかを考える。	同上	同上
11	晩年の兼好	徒然草執筆終了後から最晩年までの、兼好の事跡を辿る。	同上	同上
12	徒然草の復活	室町時代から近世にかけて、徒然草が再発見される過程と、徒然草研究の開始について概観する。	同上	同上
13	近世における徒然草	芭蕉や宣長たちにみる徒然草の影響力について考える。	同上	同上
14	近代における徒然草	近代における徒然草研究史、および近代の文学者への影響力について考える。	同上	同上
15	徒然草とは何か	日本文学における徒然草の位置付けを、文学史の中に遠望し、徒然草とは何であったのか、その新しい文学像を提示する。	同上	同上

＝中国古典詩学＝（TV）

〔主任講師：佐藤　保（お茶の水女子大学長）〕

全体のねらい

中国の伝統的な詩（古典詩）について、その基本的な詩観・形式・技巧・主題等いわゆる「詩法」の基礎を学習し、豊かな内容をもつ中国の詩を享受する具体的な方法を習得するのが本講義のねらいである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	中国詩概観　(1) 『詩経』から南北朝まで	中国の詩の歴史を概観しながら、併せて中国人の詩に対する考え方を説明する。第１回は唐以前の時期について講義する。	佐藤　保（お茶の水女子大学長）	佐藤　保（お茶の水女子大学長）
2	中国詩概観　(2) 隋・唐詩から文学革命まで	前回に引きつづき、唐以後、新しい近代詩が出現する20世紀初頭の文学革命の時期までの詩の流れと詩観について述べる。	同　上	同　上
3	中国詩の形式(1) 韻律と句法	中国の詩の媒体である漢字の特色、漢字の音に基づいて生まれた詩の韻律・句法等、形式の基礎となることがらを講義する。	同　上	同　上
4	中国詩の形式(2) 古体詩と近体詩	前回の学習をもとに、中国の伝統的な詩形の分類とそれぞれの特徴・規則等をまとめる。	同　上	同　上
5	中国詩の技巧(1) 対句法	中国詩の形式と関連して、以下の４回にわたって詩の技巧について考察する。最初は対句の意味及び種類を検討する。	同　上	同　上
6	中国詩の技巧(2) 双声・畳韻	詩の用語のうちから、双声・畳韻及び畳語を取り上げて検討する。	同　上	同　上
7	中国詩の技巧(3) 省略法・倒置法	省略法・倒置法等によって詩句がどのように構成されるか、またなぜそのような手法が用いられるのかを検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	中国詩の技巧(4) 典故・詩語	詩の内容を豊にする典故と詩語の実際、それらの用法等を検討する。	佐藤　保	佐藤　保
9	中国詩のテーマ(1) 政治と仕官	以下４回にわたって、中国詩の重要なテーマ（主題）について検討する。最初は政治とのかかわりの検討である。科挙と詩の関係等についても言及する。	同　上	同　上
10	中国詩のテーマ(2) 隠棲と自然	政治社会への参加とは対極的に見える隠棲への志向、自然への憧憬をテーマとする作品や詩人について検討する。	同　上	同　上
11	中国詩のテーマ(3) 行旅と別離	旅と必ずそれに伴う別離について、旅する人と残された者の情感がどのように詩に表現されるかを検討する。	同　上	同　上
12	中国詩のテーマ(4) 書画・音楽と詩	書画・音楽等、詩は諸芸術と深いかかわりをもつが、詩の効用・役割についての考察も含めて、中国詩のテーマをまとめる。	同　上	同　上
13	詩人の生活	中国の伝統的な詩人のありかたを歴史的に概観すると同時に、女性詩人の活躍についても考察する。	同　上	同　上
14	詩のテキスト	詩集の成立・伝承、テキストと解釈の問題、歴代の詩を研究する場合の参考文献等について述べる。	同　上	同　上
15	中国詩の広がり	本講義のまとめとして、中国詩と日本文学等との関係、さらには伝統的な詩が今日においても生き続けている現状について考察する。	同　上	同　上

＝ 中国における小説の成立 ＝（R）

〔主任講師：竹田　晃（明海大学教授）〕

全体のねらい

中国においては、唐代８世紀末になって初めて小説らしい小説――伝奇――が出現した。本講義では、この伝奇が発生するまでのいわば中国小説前史ともいうべき流れを講じ、さらに唐の伝奇の発生と流行の情況、及び伝奇の特徴を説明する。これによって受講者が中国小説史の基礎的な問題点を理解してくれることを期待する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	〈序章〉 中国の小説	3000年にわたる中国の文化の歴史の中に小説らしい小説が現れるのは８世紀末になってからである。しかし、このような作品群は突然出現したわけではない。中国小説史を構想する場合には、このような作品群を生み出すに至った豊かな伝統に配慮する必要がある。	竹田　晃（明海大学教授）	竹田　晃（明海大学教授）
2	〈小説前史１〉 神話と伝説	まずわれわれは、〈小説〉という話がが中国でいかなる概念で用いられてきたかを考えると同時に、小説らしい小説を生み出すに至った伝統を追求するという意味で、民族的なエネルギーとロマンを包含する神話・伝説の類を小説史の中に位置づけて考えてみたい。	同上	同上
3	〈小説前史２〉 虚構文学の伝統	近代小説の特徴の一つとして、〈虚構〉の中で作者の思想を展開することがあげられる。中国では、小説の成立以前にすでにこのような虚構文学の伝統が存在している。このような観点から、先秦の思想家の文章に用いられた寓話、漢代の賦について考えてみたい。	同上	同上
4	〈小説前史３〉 史伝の小説的特徴	古代中国には『春秋左氏伝』『史記』『戦国策』などいくつかの歴史書が著されている。これらはいずれも単なる無味乾燥な記録ではなく、個性ある人物像を形成し、感動的に伝える歴史文学としての特徴を備え、小説史の中にも位置づけることができる。	同上	同上
5	（怪異を語る伝統１） 子は怪力乱神を語らず	現実的な実践倫理を説く儒家思想に支配されていた古代中国の知識人のあいだでは、人間にとって不可知な怪異を口にすることをタブーとされていた。にもかかわらず人びとは怪異を語ることを好み、その痕跡は文献資料にきわめて数多く遺されている。	同上	同上
6	（怪異を語る伝統２） 六朝志怪の流行	後漢王朝滅亡後、政治的社会的には混乱の時代を迎えたが、文化の面では清新で活発な状況を生じた。その中で、知識人のあいだに怪異を語り、記録する風潮が盛んになり、いわゆる〈六朝志怪〉の流行を見るに至った。仏教の影響もこの風潮に拍車をかけた。	同上	同上
7	（怪異を語る伝統３） 仏教の影響	志怪に語られる怪異の内容は多様であるが、人間の死後の魂、つまり幽霊及び霊界に関する話が比較的多く、そして面白い。これらの話は本来中国独自の観念や宗教的信仰にもとづくものであるが、六朝後半には仏教の因果応報・転生輪廻の観念の影響が顕著になった。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	〈人間を見つめる確かな眼〉『世説新語』の世界	中国では人間を描く伝統は主として歴史書の列伝という形で形成されてきたが、六朝時代になって、それとは一風変わった趣きの、実在の人物のエピソード集が著された。劉義慶の『世説新語』がそれであり、小説史上にユニークな役割を果している。	竹田　晃	竹田　晃
9	〈唐代伝奇１〉伝奇発生の背景	唐は南北両朝の文化を総合し、スケールの大きな、また多彩な独特の唐文化を花開かせた。小説史の流れの中においても、８世紀半ばになって初めて個人の創作と言える作品群が著された。なぜこの時期にこのような作品が出現したのか。その文化的社会的背景を考える。	同　上	同　上
10	〈唐代伝奇２〉記録から物語へ	六朝志怪の基本的特徴は、怪異を事実として認識し、それをそのまま記録に留める点にある。唐代に入ると、題材は同じく怪異に取りながら、それを単なる記録ではなく、物語として読者に面白く読ませようとする工夫の見られる作品が出現した。	同　上	同　上
11	〈唐代伝奇３〉夢幻的で華麗な『遊仙窟』の世界	中国には古くから人間と神仙界との交流に関する話が数多く伝えられている。唐になってこれら先行の説話を踏まえて新しい仙境訪問の物語が出現した。張鷟の『遊仙窟』がそれである。夢幻的かつ華麗な、いかにも唐代らしいこの物語の雰囲気に浸ってみたい。	同　上	同　上
12	〈唐代伝奇４〉唐都長安と伝奇	唐都長安は国際的な大都会であった。この花の都は伝奇のような物語にとっては格好の舞台となる。この長安にくりひろげられるさまざまな人間模様を、情愛（「任氏伝」）・仙（「杜子春伝」）・侠（「無双伝」）という三つのテーマについて捉えてみたい。	同　上	同　上
13	〈唐代伝奇５〉物語による抽象的な観念の追求	安禄山の大乱後も唐の政情は安定しなかった。このような情況の中で有為転変を身をもって体験した官僚の中に、社会や人生の問題を伝奇の形で追求しようとする者が現れた。彼らは名利の空しさ、人生のはかなさという抽象的な観念を密度の濃い物語の中に盛りこんだ作品に完成させた。「枕中記」（沈既済）がそれである。	同　上	同　上
14	〈唐代伝奇６〉怪異からの脱却	唐の伝奇が怪異に取材しながら物語性に富んだ作品に昇華していることはすでに述べた。ところが、伝奇の中にまったく怪異の要素のない物語がついに出現した。白行簡「李娃伝」・元稹「鶯鶯伝」がそれである。これは中国小説上実に画期的なことであった。	同　上	同　上
15	伝奇以後の中国小説史の展開	伝奇のような文言小説は唐以後の知識人の文学として書き続けられるが、宋代になると市民も文化を享受できる情況が生まれ、その中から白話小説が出現する。白話小説は明代に大いに発展し、『水滸伝』や『三国志演義』のような雄大なロマンも世に現れた。そして中国の小説史の流れは、近代文学へと導かれてゆく。	同　上	同　上

＝ 発掘された古代日本（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：白石　太一郎（国立歴史民俗博物館教授）〕

全体のねらい

考古学は、人びとが生きるために大地に働きかけた跡である遺跡や、そこから出土するさまざまなモノ、すなわち遺物から人間の歴史を考える学問である。日本列島の各地で進められている発掘調査によって、考古学が旧石器時代から中世に至る日本列島の歴史をどこまで明かにしたかを紹介し、あわせて文献史学とはまた異なる歴史学としての考古学の役割を考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	考古学への招待	考古学は、もの言わぬ遺跡や遺物からどのようにして歴史を読み取るのか。考古資料の特質、年代決定法、時期区分論、考古学による歴史の復元法など、考古学とはどのような学問であるかを解説する。	白石太一郎（国立歴史民俗博物館教授）	白石太一郎（国立歴史民俗博物館教授）
2	旧石器時代の日本列島	数十万年前に遡る原人の存在を明らかにした前期旧石器時代の遺跡や、日本列島固有の後期旧石器文化の成立など旧石器時代の研究の現状を紹介する。人類の進化についてもふれる。	岡村道雄（文化庁主任文化財調査官）	岡村道雄（文化庁主任文化財調査官）
3	縄文文化の成立と展開	縄文文化の成立過程から１万年間にも及ぶ縄文時代の展開過程を概観し、世界史的な立場から日本列島に展開した特異な新石器文化の意味を考える。	同上	同上
4	縄文人の生活と文化	集落や貝塚などの発掘調査の成果にもとづき、食料採集民としてはきわめて豊かな生活文化であったとされる縄文人の生活の実態にせまる。実証的な研究成果によって縄文文化の実像を示す。	同上	同上
5	弥生文化の成立と展開	稲作農耕文化に基礎を置く弥生文化の成立過程とその後の展開過程を、東アジア史的視点で考える。弥生人の成立や縄文人との同異の問題や、西日本とは異なった東日本の弥生文化にもふれる。	設楽博己（国立歴史民俗博物館助教授）	設楽博己（国立歴史民俗博物館助教授）
6	弥生人の生活と文化	最近の考古学的調査・研究の成果にもとづき、弥生時代の人びとの生活と文化の実相をわかりやすく示す。銅鐸などの青銅製祭器から想定される弥生人の宗教や精神生活にもふれる。	同上	同上
7	古墳の作られた時代	古墳とは何かを、その出現の経過を跡づけることによって明らかにし、古墳造営の背後にある首長連合としてのヤマト政権の構造を考える。また各地の古墳のあり方の変化からヤマト政権の変質の過程を明確にする。	白石太一郎	白石太一郎

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	古墳時代の社会と文化	豪族の居館や民衆の集落、さらに古墳のあり方などから古墳時代の社会の仕組みとその変化を追求する。また中国や朝鮮半島からの人や文物の流入が日本の社会や文化をどう変えたかを考える。	白石太一郎	白石太一郎
9	律令社会の成立とひろまり	7世紀末葉頃、日本は中国にならった中央集権的な律令国家を完成する。その成立の経緯とともに、出来上がった律令国家の構造や支配の仕組みを、考古学の成果をもとに考える。律令国家の世界史的位置づけやそれがその後の日本の歴史に与えた影響についてもふれる。	宇野隆夫（国際日本文化研究センター教授）	宇野隆夫（国際日本文化研究センター教授）
10	律令社会の産業と文化	最近の考古学の研究成果にもとづき、律令時代におけるさまざまな生産活動や流通の仕組み、さらに生産に従事する人びとがどう組織されていたのかなど、この時代に生きた人びとの生活の実態や文化のあり方を考える。	同上	同上
11	中世の町と人々の暮らし	考古学の立場から、中世を特徴づける都市をめぐるさまざまな問題、さらに東国と西国といった視点に立って、人びとの生活の舞台や生活文化から中世という時代を考える。	小野正敏（国立歴史民俗博物館助教授）	小野正敏（国立歴史民俗博物館助教授）
12	中世の富と権威	中世における経済や政治のあり方を博多、京都、越前一乗谷、鎌倉の発掘調査など、最近著しく進展した中世考古学の成果にもとづいて考える。東国政権の成立と展開や中世的世界の終末、近世への動きにもふれる。	同上	同上
13	北日本の考古学－教科書にない日本史－	北海道が本州とは異なった歴史を歩みはじめた縄文時代以降の続縄文文化の時代から、擦文文化とオホーツク文化の時代を中心に、北海道考古学の研究成果を概観する。北方文化との交流やアイヌ文化の成立についてもふれる。	菊池徹夫（早稲田大学教授）	菊池徹夫（早稲田大学教授）
14	琉球王国への道－琉球列島の考古学－	琉球列島が本州や九州の歴史とは違った歩みを明確にしはじめた貝塚時代から11～13世紀のグスク時代を中心に、琉球考古学の研究成果を概観する。また琉球王朝の成立や中国や東南アジアとの交流についてもふれる。	安里進（浦添市教育委員会文化課主幹）	安里進（浦添市教育委員会文化課主幹）
15	考古学と現代－人と環境のかかわり史－	最近進展の著しい環境考古学の研究成果を紹介するとともに、21世紀の人類が直面する環境問題などの大きな課題に考古学がなにをなしえるのか、現代社会における考古学の役割や課題を考える。	辻誠一郎（国立歴史民俗博物館助教授）	白石太一郎 辻誠一郎（国立歴史民俗博物館助教授）

＝日本の古代＝（TV）

〔主任講師：青木和夫（お茶の水女子大学名誉教授）〕
〔主任講師：吉田　孝（青山学院大学教授）〕

全体のねらい
日本の原始・古代を概観する。おおむね前回の「日本古代史」と同じ範囲を扱うが、近年いちじるしい古代遺跡の発掘の成果の紹介は、平成７年度開始の科目「歴史考古学」にゆずり、この科目では政治・経済・文化の展開を述べ、歴史上の人物にも重点を置く。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	研究の歴史と方法	①考古学と文献史学 ②素材と工具 ③研究の実例	青木和夫（お茶の水女子大学名誉教授）	青木和夫（お茶の水女子大学名誉教授）
2	列島文化の形成	①旧石器時代 ②縄文時代 ③列島外との交流	鷹野光行（お茶の水女子大学教授）	鷹野光行（お茶の水女子大学教授）
3	耶馬台国から統一国家へ	①稲作の受容と広がり ②弥生時代の社会 ③統一国家への道	同上	同上
4	ヤマト政権と飛鳥文化	①ヤマト政権 ②隋唐帝国 ③飛鳥時代	青木和夫	青木和夫
5	大化改新と壬申の乱	①大化改新 ②白村江の敗戦と天智朝 ③壬申の乱と天武・持統朝	同上	同上
6	律令国家の構想	①大宝律令と「日本」 ②大宝律令の構造 ③文書行政のシステム	吉田　孝（青山学院大学教授）	吉田　孝（青山学院大学教授）
7	奈良時代の政治	①女帝と藤原氏 ②律令制の浸透と社会の激動 ③揺れ動く天皇の正当性	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	天平文化	①遣唐使 ②国分寺と東大寺 ③正倉院宝庫	青木和夫	青木和夫
9	新しい王朝の成立	①光仁朝の改革 ②桓武と革命思想 ③薬子の変と嵯峨天皇の宮廷	吉田孝	吉田孝
10	摂関政治	①藤原北家の進出 ②公営田と富豪 ③延喜・天暦の治	梅村恵子(川村学園女子大学教授)	梅村恵子(川村学園女子大学教授)
11	都の人々	①御堂関白記と小右記 ②儀式と政務 ③承平・天慶の乱	同上	同上
12	古代 ～家族とくらし	①外戚と国母 ②竹取・宇津保から源氏・蜻蛉へ ③浄土の救済	同上	同上
13	受領と地方支配	①承平・天慶の乱 ②尾張国解文 ③時範記	上杉和彦(東京大学助手)	上杉和彦(東京大学助手)
14	院政の成立とその基盤	①院政の成立 ②荘園の類型 ③武士の成長	同上	同上
15	日本古代の歴史的特質	①日本史上の古代 ②世界史上の日本古代 ③時代区分論	吉田孝	吉田孝

＝ 日本の中世（’９８）＝（R）

〔主任講師：五味 文彦（東京大学教授）〕

全体のねらい

日本の中世社会の歴史とその特質を明らかにすることを第一のねらいとして、さらにそれが現代社会とどう関わっているのかを考えることとする。中世社会のあり方は混迷する現代社会を考える手がかりともなる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	中世という時代	中世社会の時代区分やその特徴について通観する。中世社会の歴史を学ぶための史料や学習・研究の意義についても考える。	五味文彦（東京大学教授）	五味文彦（東京大学教授）
2	幕府の誕生と成長	源平の争乱や、朝廷との交渉を経て、以降７００年存続する“武士の政権”が誕生する。鎌倉幕府の歩みを追いながら、武士とはいかなる存在なのかを考えてゆく。	本郷和人（東京大学助手）	本郷和人（東京大学助手）
3	廟堂の群像	鎌倉幕府の成立は朝廷のありように多大な影響を与えた。幕府と共に歩もうとする者、激しく対立する者。個性豊かな朝廷の指導者たちに言及しながら、朝廷の政治・経済を概観する。	同上	同上
4	文書と日記の世界	中世社会を知る手がかりになる史料には、文書と日記がある。両史料を読みこむことにより、人々のいぶきにふれる。また文書、日記の残存状況を考慮しながら、文学史料の可能性にも言及する。	同上	同上
5	都と鄙の遊びとくらし	京の都では朝廷の文士が優雅に文化空間を生成し、地方では武士を中心に新しい文化が育くまれてた。彼らの日常を復原しながら、鎌倉文化の特質に迫る。	同上	同上
6	蒙古来襲	モンゴルの来襲は日本社会に大きな衝撃を与えた。御家人制はゆらぎ、それを抑えるために幕府は専制へと歩み始める。幕府の姿勢と在地領主たちとの矛盾は増大し、また悪党が活発な行動をみせる。	同上	同上
7	再生する仏教	天台・真言両宗は朝廷と深く結びつき、“仏法と王法は車の両輪”といわれた。両宗は貴族化し、人々の救済はなおざりにされていたが、やがて天台宗の中から新しい仏教が誕生する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	中世社会の転換	蒙古襲来の打撃、貨幣経済への対応に苦しむ幕府に対して、朝廷は承久の乱の敗北後、着実に力を蓄えていった。やがて朝廷は後醍醐天皇の指導のもとに討幕を成功させる。朝幕の関係を述べながら、中世社会が転換していくさまを述べる。	本郷和人	本郷和人
9	『太平記』の時代	建武の新政から南北朝動乱期にかけての政治・経済・社会の動向を、この時代を活写した軍記物語『太平記』に拠りながら概観する。国人一揆の形成や荘園の生活、請負代官の活動といった地方の動向にも言及する。	櫻井英治（北海道大学助教授）	櫻井英治（北海道大学助教授）
10	室町殿と守護大名	室町幕府の最盛期であり、また将軍専制化の時代ともいわれる義満・義持・義教の三代から応仁・文明の乱にいたるまでの政治過程を、将軍と守護大名との対抗関係や家の企業体的性質等に着目しながら概観する。	同上	同上
11	「日本文化」の生成	日本の伝統文化の原型といわれる室町文化（南北朝・北山・東山文化）の実像を、室町幕府の財政体質や唐物好みの盛衰、世阿弥・心敬の芸術論等に着目しながら明らかにし、その後の戦国～桃山文化との系譜関係を考える。	同上	同上
12	村と町の誕生	室町～戦国時代に形成され、その後の日本社会を長く規定してゆくことになった村（惣村）と町の成立過程とその構造・特質等について検討し、日本における自治の系譜のついて考える。	同上	同上
13	戦国大名と地域社会	戦国大名の権力としての先進性を、法思想や政治理念、権力基盤などの諸側面から解明するとともに、戦国大名の分国をはじめ、国一揆、一向一揆など、さまざまな地域的権力によって国土を分断された戦国期日本の歴史的位置を考える。	同上	同上
14	アジアの中の中世日本	中世日本が当時のアジア世界の中で経済的、文化的にどのような位置を占めていたのかを、中国銭・手形の流通や倭寇の活動、貫高制から石高制への移行の問題などに触れながら、また中国や朝鮮、蝦夷地、琉球など周辺の諸国・諸地域の社会にも目を配りながら検討する。	同上	同上
15	中世から現代に	中世社会が現代社会とどのように関わっているのか、歴史的にどう位置づけられるものなのか、これらの点をこれまでの講義の上に立って明らかにしてゆく。	五味文彦	五味文彦

＝ 日本の近世（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：大口勇次郎（お茶の水女子大学教授）〕
〔主任講師：高木　昭作（放送大学教授）〕
〔主任講師：杉森　哲也（放送大学助教授）〕

全体のねらい

豊臣秀吉が全国を統合した1590（天正18）年から、徳川慶喜が政権を朝廷に返還した1868（慶応４）年までを近世といい、その支配のしくみを幕藩制という。この講義では、幕藩制の成立から解体に至るまでの歴史的諸事象を素材としながら、近世または幕藩制が日本史・世界史のなかでどのような特質をもつのかを考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	近世とは	第二次大戦直後の「民主化」の時期、近世（江戸時代）とは「封建性」の時代であり、それだけで否定されるべき時代であった。この「封建的」の内容が、門閥制すなわち家格制に他ならないことを、福沢諭吉『旧藩情』などを通じて紹介するとともに、また最近の江戸時代観をも紹介して導入部とする。	高木昭作（放送大学教授）	高木昭作（放送大学教授）
2	将軍の軍隊	「家格制」の「格」とは、家老・組頭・物頭・組士・足軽などをいい、近世軍隊の編成における武士の位置づけ、役割りを意味する。すなわち近世大名の軍団は家老を大将（指揮者）とするいくつかの備（そなえ）からなるが、各備は、物頭が率いる鉄砲、弓、槍の足軽隊、組頭が率いる騎馬の武士（組士）の組、農民からなる小荷駄（輜重隊）で構成されていた。兵糧を大名が準備し、大名が編成した小荷駄に運ばせるのは、戦国大名の軍隊にはないシステムであり、これによって、近世大名の軍隊は戦国大名のそれにはない機動性を獲得した。	同上	同上
3	「惣の無事」令と近世の軍隊	一五八五（天正一三）年、関白となった秀吉は、全国統合を開始するにあたって、「叡慮」を背景として戦国大名たちに交戦を即時停止し、領土の帰属を秀吉の裁定に委ねるよう命令した。これを拒否した九州の島津氏や小田原の後北条氏を「征伐」した。このような「征伐」戦の結果、諸大名や土豪が武力により領土を争う戦国時代が終熄し、秀吉による全国の統合が完成した。	同上	同上
4	近世の神国観	近世の軍隊を構成する上で不可欠な小荷駄隊は、農民「役」として駄馬と人夫（陣夫）を徴発することが不可欠であったが、そのために秀吉は天皇から任命された関白の地位を十二分に利用し、戦国の世に終止符を打って国土に平和をもたらすという名目で「惣の無事」令を施行した。その「惣無事」令が国民的に受容された素地として、天皇の存在を前提とした神国観があったことを述べる。	同上	同上
5	下克上から門閥へ	以上1～4の知識を前提に、下克上の凍結（「惣の無事」令）に始まった近世の社会と国家が、どのようにして伝統化したのかについて、初期御家騒動を通じて考える。	同上	同上
6	描かれた近世の都市　(1) －「洛中洛外図」の成立と展開－	戦国末期から近世初頭にかけて、都市の諸相を描いた屏風絵が出現する。洛中洛外図に代表されるこれらの屏風絵は、美術史のみならず都市史の上でも貴重な研究史料であるといえる。本章では、洛中洛外図を主たる素材として取り上げ、その成立と展開の過程を見るとともに、絵画史料分析の方法についても検討を試みる。	杉森哲也（放送大学助教授）	杉森哲也（放送大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	描かれた近世の都市(2) －幻の「安土図屏風」－	本章では、前章に続き「描かれた近世の都市」というテーマを取り上げる。前章では洛中洛外図を中心として都市図屏風の成立と展開の過程を見たが、本章では安土の城と城下町を描いた一つの屏風絵を取り上げる。この安土屏風について、関連史料から詳細を明らかにするとともに、そ の歴史的意義について検討する。	杉森哲也	杉森哲也
8	町（ちょう）	町（ちょう）は、近世の都市における最も基礎的な自治・支配の単位である。町人たちによって構成される町中をその中核とする身分的な共同体でもあり、村と並んで近世における最も基本的な社会集団であるといえる。本章では、町が最も早期に成立した京都の町を事例として取り上げ、その特質について検討する。	同上	同上
9	巨大都市・三都	三都とは、江戸・京都・大坂の三つの都市を意味する。これら三つの都市は、人口規模をとっても、江戸が約100 万人、京都・大阪が約30～40万人にも達する巨大都市であった。そして、いずれも幕府の直轄都市であるとともに、幕藩制の中で固有の機能を有していた。本章では、三都が持つ機能の特質の一端について検討する。	同上	同上
10	近世の考古学	近年の近世史研究の新しい動向の一つとして、近世の考古学を挙げることができる。これまで日本考古学は、原始・古代を主たる研究対象としてきた。しかし、近年は中世さらには近世をもその対象に含めるようになりつつある。本章では、江戸を中心に都市考古学として急速に進展している「近世考古学」の現状について紹介する。	同上	同上
11	幕府政治の改革	以下の5回では18世紀以降の近世社会が変質していく過程を検討していくこととしたい。まず本章では、社会の矛盾が表面化した時点で、幕府がどのような対応を示したかを、享保の改革を通じて見ていくこととする。	大口勇次郎（お茶の水女子大学教授）	大口勇次郎（お茶の水女子大学教授）
12	開発と緊縮と	18世紀の中葉は、徳川幕府の政治にほころびが生じ、これをどのように繕うのかという新しい課題を抱えた転換期の時代である。幕府政治では田沼政権が登場し新しい手法によって殖産と開発の政策を展開したが、飢饉と一揆・打ちこわしの中で倒れ、代わった松平定信の主導する寛政の改革は、その反動として伝統維持と緊縮政策の途を歩んだ。その態様を見ていくこととしたい。	同上	同上
13	漂流と海防	本章では、江戸時代後期における対外関係について考えていきたい。江戸時代は鎖国の時代とされているが、決してすべての交流が途絶えていたわけではなく、長崎をはじめいくつかの窓口を通じて世界と接していた。鎖国政策を採用してから100年以上を経過し、わが国を取り巻く国際的環境も大きく変化しつつあった。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	女大学の時代	これまで近世史の歴史を13回にわたって述べてきたが、振り返ってみるとその中に登場するのは男性ばかりであった。政治や経済の面ではもとより、文化的面においても女性はほとんど歴史の表舞台には登場してこないのはなぜなのだろうか、本章ではこの点を堀り下げて考えてみたい。	大口勇次郎	大口勇次郎
15	幕藩体制の動揺	本章では、幕藩体制の内部から生まれた体制批判を考えていきたい。まず、天保飢饉を契機に大坂市中で起こった大塩の乱において、儒学の言葉で峰起の思想が説かれたことの意義を考えたい。次いで幕府（将軍）と藩（大名）の関係について、天保期に生起した知行替えをめぐる二つの出来事の問題点を探ることによって、幕藩体制下の大名知行の性格を明らかにし、あわせて最後に幕藩体制の終末を見通しておきたい。	同上	同上

＝ 19世紀日本の歴史（’００）＝（R）

〔主任講師：三谷　博（東京大学教授）〕
〔主任講師：山口　輝臣（高知大学助教授）〕

全体のねらい
いままでの日本の近代は、たとえば明治から太平洋戦争までを対象に、同じ体制下での発展や変化といった観点から述べられてきた。この講義は逆に、変化にまず着目して、日本の近代の意味を考える。明治維新の前後で何が変わり、それが我々に何をのこしたのか、主に政治に関わる側面から観察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	19世紀の意味	19世紀は人類にとって大きな転換点であった。西洋は国民国家、工業文明、そして地球規模の交通網を創りだし、世界を一体化した。各地域は西洋への従属や適応を通じて大きく変貌していった。	三谷　博（東京大学教授）	三谷　博（東京大学教授）
2	近世後期の構造1―国際環境	歴史始まって以来、東アジア世界は中華帝国を中心に世界秩序を形作ってきた。中国と周辺と二つの視点の複合した秩序像とその中での日本の位置を、西洋がふたたびこの地域に登場する以前、19世紀初頭の時点で、輪切りにしてみておく。	同　上	同　上
3	近世後期の構造2―複合国家	近世の日本国家は、明治以降と異なって、公儀と禁裏という二つの中心と二百数十の小国家からなる複合的な構造を持っていた。その個々の特徴と、相互関係を検討し、その上位に立つ「日本」というイメージがどのような形で存在したかを考える。	同　上	同　上
4	近世後期の構造3―社会結合	近世の日本は、身分的にも多元的な社会であった。主に庶民や盲人に注目し、職能的結合や国家との関わりを中心に身分制の動態を考え、さらに身分制や地域性を越える水平な社会結合を創りだした様々なメディアを観察する。	同　上	同　上
5	19世紀前半の変化―国際環境と知識人	日本は19世紀の東アジアでもっとも早く西洋の世界制覇への警戒を始めた国であった。西洋の東アジアとの関わりの変化、日本知識人のその認識、新たな世界像と国内改革論などを概観し、「予知された危機」に対する様々の態度を見てゆく。	同　上	同　上
6	幕末の変革（一）―対外関係	19世紀の半ば、日本は西洋諸国に強制されて、西洋が築きつつあった新たな世界秩序に加わった。隣国の清がイギリスに敗北し、東アジアに西洋の軍事的・経済的拠点ができたアヘン戦争から、日本が西洋諸国に「開国」し、さらに日本人の海外渡航が始まるまでの政策の変転を見てゆく。	同　上	同　上
7	幕末の変革（二）―政治体制	ペリーの来航は政治体制に内在した様々の不整合を矛盾に変えた。西洋の圧力に対する「富国強兵」策、「尊皇攘夷」と「公議」を通ずる政治参加の運動、それらによる「幕府」専制体制の崩壊、「王政」と「公議」を柱とする新体制の成立までを見る。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	明治前期の変革1 ―武士の解体	明治初年に矢継ぎ早に出された数々の施策は、維新という体制転換を大規模な社会変動へと導いた。秩禄処分とそれに対する旧武士の対応などを素材に、変革の実態を明らかにし、あわせて明治維新の比較史的特徴を考えてみたい。	山口輝臣（高知大学助教授）	山口輝臣（高知大学助教授）
9	明治前期の変革2 ―近隣関係の再組織	維新後の日本は西洋の国際法に準拠しつつ、樺太、北海道、対馬、朝鮮、琉球などとの関係を再組織した。維新直後の試行錯誤と危機をへて近隣関係や境界領域の内国化が安定するまでを観察する。	三谷博	三谷博
10	明治前期の変革3 ―政治体制	明治憲法により確立する立憲君主制は、「王政」と「公議」という新政権の柱の制度化であり、また「公議」分裂の一翼を担った自由民権運動をも有効に権力へと組み込みうる政治体制であった。立憲君主制の創出過程をあとづけていく。	山口輝臣	山口輝臣
11	近代前期の構造1 ―「中央」と「地方」	天皇という単一の中心への移行や画一的な地方制度の施行により、近代の日本国家は、近世と比較するとその構造はかなり単純なものとなった。そうした構造が形成されていく過程の検討を通じて、近世国家とは異なる近代国家の特質を見ていきたい。	同上	同上
12	近代前期の構造2 ―国民形成	近代の日本は、多元的な身分制を解体し、国民を生み出した。学校・軍隊などを介して国民意識が形成されていくとともに、地方に対する明敏な意識も並存していた。両者の複雑な関係を、主にメディアへと焦点をあてながら考察していく。	同上	同上
13	東アジア国際秩序の変化	中華帝国を核とした東アジアの国際秩序は、日本の朝鮮半島への関与、およびフランスのヴィエトナム植民地化を皮切りに、大きく変化する。日本の対外態度および東アジア国際秩序の変化を、日清戦争までの時期を中心に概観する。	同上	同上
14	20世紀へ1 ―「内地」と「外地」	対外戦争は、明治初期に一旦確定した「日本」の外に新たな領土＝植民地、台湾・遼東半島・樺太・朝鮮を付け加えた。近代前期には予期されていなかったこうした事態の出現と、それにともなう「日本」や「日本人」の変容を探る。	同上	同上
15	20世紀へ2 ―「政党化」と「都市化」	19世紀から20世紀にかけての社会の変動は、明治前期に形作られた政治構造に変容を迫る規模のものであった。世紀転換期の変動を、「政党化」と「都市化」との絡みとして考察し、激動の20世紀を展望する。	同上	同上

＝ 朝鮮の歴史と社会（’００）＝（R）

〔主任講師：吉田　光男（東京大学教授）〕

全体のねらい

日本にもっとも近く関係も深い地域である朝鮮の歴史を、古代から現代に至るまで、時代を追いかけながら政治・社会・文化的な特色に焦点をあてて概観する。時代ごとの特徴に注目することにより、朝鮮史理解の基礎を形成し、あわせて現代の朝鮮半島に対する理解も深める。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	朝鮮史を学ぶために	日本列島にとって朝鮮半島は、長い歴史を通じて密接不可分な存在であった。私たち日本に暮らしている人々にとって、このような朝鮮の歴史を学ぶことがどんな意味をもっているのか、現代的な視点からとらえて講座全体の方向付けを行う。	吉田光男（東京大学教授）	吉田光男（東京大学教授）
2	神話から歴史へ	朝鮮半島に興亡した古代国家の建国神話や、変容を重ねながら後世に伝わった建国伝説を通じて、朝鮮古代の歴史と文化を論じる。また、後世の史家たちの朝鮮古代に対する系譜観にも言及する。	李成市（早稲田大学教授）	李成市（早稲田大学教授）
3	古代国家の形成と展開	古朝鮮から新羅の滅亡までの1000年にわたる古代国家の形成と展開過程を論じる。中国大陸や日本列島の動向に留意しながら、朝鮮半島に展開した古代国家の歴史と文化の特質に力点を置きたい。	同上	同上
4	高麗時代の政治と文化	中世王朝高麗500年間の歴史を、政治過程と文化的特色を中心にして論じる。高麗は周辺勢力から圧迫をうけ、13世紀にはモンゴル（元）の支配をうけることになるが、一方で高度な仏教文化が花開いた。この高麗の独自性について見てみる。	六反田豊（九州大学助教授）	六反田豊（九州大学助教授）
5	朝鮮王朝の建設と発展	14世紀末の李成桂による王朝創設から15世紀までの朝鮮時代前期の歴史について、政治過程を中心において論じる。朝鮮が独特の文字ハングルを作り出し、中国・日本など周辺地域とも安定した関係を築いた点などに焦点をあて、時代の様相を概観する。	同上	同上
6	朝鮮時代後期の政治	16世紀から19世紀前半までの朝鮮時代後期＝近世の歴史的特色を、政治過程を中心にすえて論じる。日本軍と女真軍侵略によって国家的・社会的危機をむかえた時期から、政治と財政の改革で安定をむかえるころまでを展望する。	吉田光男	吉田光男
7	朝鮮時代後期の社会と文化	朝鮮時代後期＝近世の社会関係や文化の特色について論じる。身分・血縁などを手がかりとして近世朝鮮社会の性格を考え、この時代に生きた人々の作り出した文化を、儒学などに注目しながら見ていく。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	開国と開化	1876年に日本と条件を結んで開国した朝鮮が、開化政策によって変貌していく姿を、東アジア世界の近代的再編成という脈絡の中で見ていく。朝鮮半島をめぐる日本と清国の対立が日清戦争となる時期までを論じる。	月脚達彦（東京外国語大学専任講師）	月脚達彦（東京外国語大学専任講師）
9	近代化の模索と民族運動	日清戦争から日露戦争までの時期を、近代国家形成過程を中心として論じていく。上からの改革は挫折を余儀なくされ、地方では民衆反乱が頻発して不安定な時代をむかえるが、近代化政策と民衆の動きからこの時代の姿を描いてみる。	同上	同上
10	植民地化への道	1905年、第2次日韓協約によって保護国とされ、1910年、朝鮮はついに日本の完全な植民地と化してしまう。日露戦争以後の時期について、日本の侵略とそれに対する朝鮮側の反応を、義兵などの抵抗運動に焦点をあてながらみていく。	同上	同上
11	植民地時代の社会	1910年の併合により「武断政治」として開始された植民地支配は、三・一運動という全民族的な抵抗を経てより巧妙な「文化政治」に転換する。異民族支配下で「近代」をむかえた朝鮮社会について、民族運動の展開にも配慮しつつ考える。	並木真人（フェリス女子大学助教授）	並木真人（フェリス女子大学助教授）
12	戦時体制下の朝鮮	昭和恐慌や満州事変により動揺する朝鮮に対して朝鮮総督府は支配を強化し、戦時期には人的・物的資源の動員を図る「皇民化」政策を実施した。日本の戦争遂行のために変容した社会の実相に関して、民衆の対応を含めて明らかにする。	同上	同上
13	解放から現代へ	朝鮮人が待望した植民地支配からの解放は、冷戦の中で南北分断、朝鮮戦争という新たな苦難を招いた。以後南北は独自の国家建設を推進し、統一は現在も民族の悲願となっている。現代史の歩みを国際情勢の変化と併せて論じる。	同上	同上
14	朝鮮の民俗世界	中華の周辺にありながら独自の文化を形成してきた朝鮮社会の多様な民俗について、大伝統と土着の伝統を対比させながら、年中行事・通過儀礼・宗教などを中心として現代社会におけるその在り方を述べる。	秀村研二（明星大学助教授）	秀村研二（明星大学助教授）
15	現代韓国人の社会関係	現代の韓国人は、儒教によって意味付けられた父系血縁を程度の差はあれ社会関係の基盤としながらも、一方ではさまざまな横の関係を結ぶことによって活動の幅を広げている。この点について、家族・親族とインフォーマルな関係を中心にして述べる。	同上	同上

＝　中国の歴史と社会（’９８）＝（R）

〔主任講師：斯波　義信（国際基督教大学教授）〕
〔主任講師：浜口　允子（放送大学教授）〕

全体のねらい

中国の歴史は長い。その歴史は、すべて刻々と変容し生成を重ねてきた生きた社会から生みだされた。本講は、その歴史と社会の全体性をトータルに示し、あわせて、現在の中国問題や、アジアの世紀の中に立つ中国の理解をも深めようとするものである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	中国社会の特徴	中国人性（チャイニーズネス）を考える 風土の特色 人種・言語そして民族 漢字というボンド剤 農業と家族	斯波義信（国際基督教大学教授）	斯波義信（国際基督教大学教授）
2	都市国家連合と中華の世界	「中華」世界のおこり 殷・周の都市国家連合 鉄器時代へ 諸子百家 天下、天命、天子	同上	同上
3	統一国家の幕あけ	郡県制の登場 中央の強化 財政ベース 武帝の遺産 後漢の社会	同上	同上
4	地方の時代	遠心トレンド 散村と結社 通俗道教 仏教の吸収 集権の再生	同上	同上
5	隋唐帝国の意義	中華帝国の蘇生（一）－華夷の融合－ 中華帝国の蘇生（二）－集権の再建－ 中華帝国の蘇生（三）－仏教、大運河、科挙 開かれた中国 新しい秩序のはじまり	同上	同上
6	宋型社会文化へのシフト	南方中国の優位 農業と商業 開発地主・形勢戸・士大夫 王安石と朱熹 都市と郷鎮	同上	同上
7	世界との出会い	元朝の遺産（一）征服王朝 元朝の遺産（二）東西世界の直接交渉 東南中国の成長 朱元璋の課題 海上発展の顛末	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	明後半代の中国社会	北京遷都のインパクト 銀経済への傾斜 西洋大帆船の登場 郷紳の役割り 明から清へ	斯波義信	斯波義信
9	清朝の光と影	政権の特色（一）伝統保守の清政権 政権の特色（二）その内陸重視 資源と人口 思想の流れ 衰微の前兆	同上	同上
10	近代のはじまり	アヘンと外国 内なる危機 たて直しの担い手たち 日清戦争が顕らかにしたもの 辛亥革命	浜口允子（放送大学教授）	浜口允子（放送大学教授）
11	国民国家への模索	共和国建設の方式 第一次大戦とナショナリズムの興起 企業家たちの活動 国民革命の時代 南京国民政府の諸相	同上	同上
12	戦いの20年	満州国 囲剿と長征 日中戦争（一） 日中戦争（二） 戦後の内戦と中華民国の終焉	同上	同上
13	社会主義の選択	中華人民共和国の成立 集団化と公有化 人々の生活 文化大革命 毛沢東時代の特質	同上	同上
14	「現代化」追求の時代	改革と開放 平等主義の放棄 一人っ子政策 一国二制度 90年代：鄧小平時代の諸相	同上	同上
15	20世紀の中国	王朝体制との訣別 国民国家建設の課題 統一とその担い手 富強、民主、そして次の課題 歴史をかえりみる	斯波義信 浜口允子	同上

＝ 南アジアの文化を学ぶ（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：辛島　昇（大正大学教授）〕

全体のねらい

この講義では、南アジアの歴史の概説ではなく、遺跡、刻文、陶磁器、絵画、映画、新聞といったいろいろの具体的な「史料」を取り上げ、そこから何をどのようにして「学ぶ」かという視点で、南アジアの文化を見るようにしたい。宗教、社会、歴史、文化といったテーマの面でも、新しさをだすようにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「ラーマーヤナ」をめぐって ―多様な物語の発展とその歴史的意味	「ラーマーヤナ」は有名な古代インドの叙事詩で、仏教・ジャイナ教を含むインド文化全般に大きな影響を与えている。それを狭義のヒンドゥー教の聖典として政治に利用しようとする動きは、その歴史性を無視するものである。物語の広がりに注目しよう。	辛島　昇（大正大学教授）	辛島　昇（大正大学教授）
2	言語・民族問題 ―ドラヴィダ運動を中心に	インド亜大陸には系統を異にする多数の言語が見られる。北部では主としてアーリヤ系諸言語が、南部ではドラヴィダ系諸言語が話されている。その状況が現代の政治に及ぼす影響を、南インドの「ドラヴィダ運動」を例にして見てみよう。	同　上	同　上
3	カーストとは何か ―その発生と行方	古代のインド亜大陸で成立した身分制度としてのヴァルナ制度と、それを大枠として中世に出来あがったより細かなジャーティ制度が、長い間ヒンドゥー教徒の社会生活を縛ってきた。それはどのようにして発生し、今後はどうなっていくのだろうか。	同　上	同　上
4	新聞の求婚広告 ―バラモン社会の変動	インドの大新聞の日曜版には、毎週数多くの求婚広告がのる。真剣な広告で、最近では数も増え、それによって結ばれる人も多い。南インドの広告の分析は、バラモン社会の変動の様を明らかにする。それによってカーストの実態を探ろう。	同　上	同　上
5	インダス文字の謎 ―コンピューターによる解読	印章に刻まれて残るインダス文字は、未だに解読されていない。種々の困難な条件があるのだが、最近のコンピューターを用いた分析によって、その文字で書かれた言語がドラヴィダ語ではないかとされるようになってきた。解読の現状を探る。	同　上	同　上
6	石造ヒンドゥー寺院壁の刻文 ―王朝史・社会史を解く	南インドの石造ヒンドゥー教寺院の壁面には数多くの刻文（碑文）が残る。刻文は、いわゆる歴史書の存在しないヒンドゥー王朝期の歴史研究に、欠くことのできない根本史料である。それによって何が判るのか、刻文の研究史とともに見てみよう。	同　上	同　上
7	菩提樹の蔭にて ―インドとスリランカの仏教	仏教はインドでは滅びたのに、スリランカではなぜ今日なお人々に信仰されているのか。インドでは何が起こったのだろうか。インドにおける歴史の展開と、スリランカにおける菩提樹信仰やピリットと呼ばれる儀礼を通して、両者の違いを見てみよう。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	デリー・スルタン朝の遺跡―ムスリム政権とインド社会	13世紀のデリーに政権を打ち立てた奴隷王朝を初めとするデリー諸王朝は、初めてのイスラーム政権として、インド社会に新しい要素をもたらした。デリーに残る都城遺跡やヴィジャヤナガル王国の宮廷衣装を手がかりに、「イスラーム化」の意味を考える。	辛島　昇	辛島　昇
9	海のシルクロードとインド―胡椒・陶磁器・馬	インドの半島部は、東西海上交通路の中央にあり、諸地域の文化交流に役割を果たしてきた。胡椒を求めたローマ帝国。陶磁器を輸出した宋代以降の中国。そして、一三世紀以降のインドはアラブの馬を求めた。そのような交流の状況を見てみよう。	同　上	同　上
10	カレー文化論―南アジアの統一性	南アジアの人々は毎日カレーライスを食べているのであろうか。カレーとは一体何なのだろうか。その歴史はどこまでさかのぼるのか。それらの問いに答えることによって、インド文化に見られる「多様の中の統一」という問題に光を当ててみよう。	同　上	同　上
11	ベンガル派の絵画と日本―タゴールと岡倉天心の交わり	詩人タゴールの甥で、ベンガルで新しい美術運動を起こしたアバニーンドラナート・タゴールは、岡倉天心の始めた日本美術院の運動に共鳴し、20世紀初頭、両者の交流が行なわれた。ベンガル派と呼ばれた彼らの絵画によって、交流の意味を探ろう。	同　上	同　上
12	映画にみるインド社会―映画と政治の関わり	映画大国インドの映画産業はいかにして発展したのか。政治家に俳優出身者が多いのはなぜか。日本でも、歌と踊りを主体としたインド映画についての関心が高まってきたが、最近は、カーストや宗教上の対立を扱った作品も見られる。その将来は？	同　上	同　上
13	ティプ・スルタンの理想―イギリスとの戦い	18世紀後半、イギリスに対して戦いを挑み、最後には敗れたマイソール王国のティプ・スルタンは、世界情勢についてどのようなヴィジョンをもち、どのように戦ったのか。それを見ることによって、当時の在地社会と植民地化の問題を考えてみよう。	同　上	同　上
14	南アジアのフェミニズム―ヒンドゥー教における女性蔑視と女神崇拝	故インディラ・ガンディー首相を初めとして南アジアでは女性首相の活躍が目立つ。他方、南アジアでは、女性に対する差別、搾取もいまだに多くみられる。その二つはどう結びつくのか、フェミニズムの問題とともに、その点について考えてみよう。	同　上	同　上
15	マハトマ・ガンディーの試み―糸車をまわす	第二次世界大戦後、南アジア諸国は、独立を達成した。ガンディーがそれに果たした役割は大きい。しかし、ガンディーが目指したのは、単なる国家の独立ではなく、社会の改革、人々の意識の改革であった。彼はどのような社会を創ろうとしたのだろうか。	同　上	同　上

＝ イスラーム世界史 ＝（R）

〔主任講師：後藤　明（東京大学教授）〕

全体のねらい

イスラームが勃興・発展した中東は、世界最古の文明を発生させた地で、またユダヤ教・キリスト教というイスラームの兄弟宗教を育んだ地域である。そのことを意識しながらイスラームを軸に、中東を中心にして、イスラーム世界の歴史を現代まで述べる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代とイスラーム	19世紀以来、ヨーロッパ文明が世界を覆ったかにみえる。しかし、20世紀の末えの現在、ヨーロッパ文明以外の体系的な文明が滅び去ったのではなく再生していることが露になった。イスラームがその一つである。今日のイスラームの有り様を多角的に述べる。	後藤　明（東京大学教授）	後藤　明（東京大学教授）
2	中東の自然と歴史	イスラームが勃興・発展した中東地域の自然環境の特色と、そこに興った古代文明の特質を、地球規模の人類史を背景に述べる。	同　上	同　上
3	一神教革命	紀元前１千年紀から、中東の文明は地中海全域に普及していった。そこではさまざまな神々が活躍し、人間の知的活動の大半は神に捧げられた。その中でユダヤ教・キリスト教という一神教が発展し、地中海世界を制覇していく過程　を、イスラームの前史として述べる。	同　上	同　上
4	アラビアの預言者ムハンマド	地中海世界での一神教の普及をうけて、７世紀にアラビアでイスラームが勃興した。当時のアラビア社会の実情と、そこでイスラームを説いたムハンマドの生涯を述べる。	同　上	同　上
5	アラブの大征服	アラビアの住民であるアラブ人はイスラームを奉じて、中東全域を征服し、巨大な帝国を建設した。帝国建設の過程と変遷を述べ、その世界史的意味を考える。	同　上	同　上
6	イスラームの確立	征服者となったアラブ・ムスリム（イスラーム教徒）は、被支配者であったユダヤ教徒・キリスト教徒と自らを区別して、次第にイスラーム独自の神学・儀礼体系を整えていった。このようにして確立されたイスラームについて述べる。	同　上	同　上
7	シーア派の隆盛	10世紀後半から約 100年間、イスラーム世界ではシーア派が優越していた。シーア派の起源からその特色について述べる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	スンナ派の復興	11世紀後半になると、スンナ派がシーア派の勢力を押えて、政治的多数派としての地位を確立する。それと同時にスンナ派のウラマー（イスラーム知識人）を養成するマドラサ（高等学院）の制度が確立してイスラームは固定化していく、その過程を述べる。	後藤　明	後藤　明
9	民衆のイスラーム	イスラーム法学の確立・固定化と並行して、民衆の間では神秘主義教団が根を下していく。そして聖者廟参拝や聖者聖誕祭などが盛んになる。このような民衆の間のイスラームについて述べる。	同上	同上
10	モンゴル帝国とマムルーク朝	13世紀のモンゴル人の西征以来、東方イスラーム世界では遊牧民の勢力が卓越するようになった。一方西方イスラーム世界でもベルベル人が政権をつくるようになる。これらの政権の性格とイスラーム世界の有り様について述べる。	同上	同上
11	拡大するイスラーム世界	12・3世紀ごろから、インド、東南アジア、黒人アフリカ社会などへ、イスラーム世界は拡大していった。当時の世界の構造的変化を背景に、この拡大について述べる。	同上	同上
12	イスラーム世界の大帝国	14世紀から、オスマン帝国のもとでイスラーム世界は、東欧を含めて政治的に統合された。オスマン朝の統治の特徴について述べる。	同上	同上
13	イスラーム世界の再編	18世紀からヨーロッパ勢力の世界侵略が始まる。この時期まではイスラームに対抗できる理念はなかった。ここではじめてヨーロッパ文明という対抗物をもった。そのことによってイスラームはイスラームであることを自覚してゆくが、その様子を述べる。	同上	同上
14	国民国家とイスラーム	20世紀は、全地球が「国民国家」によって分割された時代である。「国民国家」はそれ独自の理念をもち、自己成長していくが、それはイスラームの理念と矛盾する場合が少なくない。「国民国家」とイスラームの関係について述べる。	同上	同上
15	民族運動からイスラーム運動	1979年のイラン・イスラーム革命は、イスラームが現代政治のイデオロギーであることを立証した。革命は湾岸地域の力関係を激変させて、イラン＝イラク戦争と湾岸戦争　の引き金となった。現代国際政治とイスラームの関係について述べる。	同上	同上

＝ 古典古代の歴史（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：伊藤　貞夫（放送大学教授）〕

全体のねらい

古代ギリシア・ローマの歴史を、自由な市民たちが築き上げた、その独自な社会と文化に焦点を合わせつつ辿る。ギリシアとローマを対比しながら、同時に古典古代全体が世界史上に占める位置を明らかにし、その歴史を学ぶ意義を伝えたい。古典古代を受講者にとり身近なものとするよう努めるとともに、先端的な研究状況にも触れる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	古典古代史を学ぶために	ギリシア・ローマと現代とのかかわりを糸口に古典古代史を学ぶ意味を考えるとともに、歴史展開の場である地中海周辺地域の風土を眺め、且つ通史的枠組を時期区分により明らかにする。19世紀以来の研究史、史料の伝存状況にも言及する。	伊藤貞夫（放送大学教授） 周藤芳幸（名古屋大学助教授）	伊藤貞夫（放送大学教授） 周藤芳幸（名古屋大学助教授）
2	先史としての青銅器文明	前史をなす青銅器時代の社会について、シュリーマン以来の考古学調査の成果を基に検討する。青銅器文明は前12世紀に破局を迎えるが、それに続く混乱の中からいかにしてポリスが形成されたのか、その過程についても考古学的見地から推論を及ぼす。	周藤芳幸	周藤芳幸
3	ポリスとは何か	古典古代本来の特徴は、都市を核とする独立の国家の多数分立にある。その様相を最も純粋な形で具現したのが前8～4世紀のギリシアであった。ポリスと呼ばれるこの種の小国家の外観、住民構成、人的結合の状況を盛期アテネをモデルに再現する。	伊藤貞夫 周藤芳幸	伊藤貞夫 周藤芳幸
4	民主政への歩み	盛期ポリスで具現された世界史上稀有の徹底した直接民主政は、一挙に成立したものではない。ポリスの初期には貴族政が布かれ、それが長い年月をかけ、いくつかの節目を経て民主政に移行する。その過程をアテネとスパルタを例にとり説明する。	伊藤貞夫	伊藤貞夫
5	直接民主政のしくみ	前462年から前322年にかけてのアテネは、アリストテレス『アテナイ人の国制』のパピルス写本の発見によって、国政運営のしくみが細部にわたり明らかにされている。立法・行政・司法について制度の詳細を述べるとともに、その運用の実態にも言及する。	同上	同上
6	ポリス市民の生活	民主政のもとで市民たちはどのような生活を送っていただろうか。家の中で営まれる日常生活、戸外でのスポーツ、家とポリスとを共に支える経済活動などに論及する。ペロポネソス戦争後、市民たちの意識や行動に変化が生ずる点にも留意したい。	同上	同上
7	アレクサンドロスと後継者たち	ヘレニズム時代の政治史。前338年マケドニアのフィリポス2世によるギリシア本土制覇ののち、アレクサンドロスの東征と後継者たちによるエジプト・シリア両王国の建設で、ギリシア世界は遥か東方に拡がる。ローマのヘレニズム世界への進出も見逃せない。	大戸千之（立命館大学教授）	大戸千之（立命館大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ヘレニズムの社会と文化	ヘレニズム時代のいわゆる東西文化融合の実態とはいかなるものか、マケドニア人・ギリシア人の支配は古代オリエントの故地にどれほどの社会的変容をもたらしたかにつき、西は小アジア・エジプトから東は中央アジアまでを視野に入れて論及する。	大戸千之	大戸千之
9	都市国家ローマの成り立ち	イタリア半島では当初エトルスキの諸市が優勢で、ローマもその影響下にあった。エトルスキ研究の現状を述べるとともに、ローマ人貴族の政権奪取に始まる共和政の成立と、その後のローマ国制の発展とを僅かな史料を基に再構成する。	平田隆一（東北学院大学教授）	平田隆一（東北学院大学教授）
10	共和政から帝政へ	ローマでは共和政下、有力貴族間の角逐と外征とが絡み合い、結局オクタウィアヌスによる地中海世界統一と帝政の樹立へと至る。ギリシアの場合との対比を念頭にその経緯を述べ、この時期の相次ぐ戦争と一般市民とのかかわりに論及する。	同上	同上
11	ローマ市民の世界	ローマは多くの民族を漸次包摂し、それら諸民族の文化を吸収しつつ発展した。共和政末期から帝政初期に焦点を合わせ、ローマ人はいかなる社会に生き、いかなる文化を育んだかを、キリスト教成立以前の宗教、ポンペイ市民の生活など、具象的に述べる。	同上	同上
12	「ローマの平和」	五賢帝の時代はローマ帝政の安定期であり、属州都市にローマ風の生活様式と古典文化が広くゆきわたる。しかしそれはローマによる諸民族支配の進展をも意味していた。「平和」と「繁栄」の実態を史料に即して考察する。	松本宣郎（東北大学教授）	松本宣郎（東北大学教授）
13	帝国とキリスト教	ギリシア文化と同じく、キリスト教もローマ帝国を媒体として、のちのヨーロッパに伝えられる。キリスト教は当初、異教徒や帝国側の迫害に遭いながら、遂に国教化する。ローマ社会における異教徒とキリスト教徒とのこのような関係を新しい研究を基に述べる。	同上	同上
14	時代の転換	3世紀以後、帝国の危機的状況は専制君主政を生み、自由な市民たちの世界は閉塞へと向かう。中世社会形成への胎動が始まるが、この古代末期の様相を浮き彫りにするとともに、なぜローマ帝国は滅んだかを、諸説を紹介しつつ考える。	同上	同上
15	古典古代の歴史的位置	ギリシアとローマの相違を考えるとともに、両者が世界史の上でどのような位置を占めるかを論ずる。古典古代の特殊な社会と文化が近代ヨーロッパに受け継がれ、本来は対極的位置にありながら、私たちの生活をも半ば規定している事実を指摘したい。	伊藤貞夫	伊藤貞夫

＝ ヨーロッパの歴史 ＝（ＴＶ）

〔主任講師：樺山 紘一（東京大学教授）〕

全体のねらい

西ヨーロッパの歴史を中心として、その全体的構造を解説しようとするものである。平成７年度に開設される古典古代の歴史、および将来において開設が期待される近代・現代についての講座との連携を念頭において、中世と近世における西ヨーロッパの歴史を政治・社会・文化など広範な角度から論じようとする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ヨーロッパの歴史を考える－総論	ヨーロッパ史の舞台となる地域の自然環境や人文的状況を解きあかし、また中世から近世にかけての時代変遷を区分して全体としての見通しを明らかにする。ヨーロッパにおける現地ロケーションを中心に講義する。	樺山紘一（東京大学教授）	樺山紘一（東京大学教授）
2	ゲルマン人諸国家の成立	東西のゴート王国、フランク王国の成立と旧来のローマ文明との連続および断絶を念頭におきつつ、あらたな社会的構造原理の登場について、当時の記述史料にもよりつつ論ずる。	高山博（東京大学助教授）	高山博（東京大学助教授）
3	封建社会の構造	9世紀以後、12・3世紀にかけてのヨーロッパにおける封建制社会の成立をあつかう。戦士集団の構造原理をはじめ、その経済的基礎としての荘園制の形成と変容をも視野にくわえる。	河原温（東京都立大学助教授）	河原温（東京都立大学助教授）
4	都市の出現	古代の伝統をうけた都市が、中世の展開のなかでいかに存続したか、またあらたな環境のなかでいかに新生したかをみとおしながら、中世に固有の自治都市をうみだしてゆく過程を追跡する。	同上	同上
5	国家と王権	封建社会の無政府的状況のなかから、行政上の主権をもった国家と王権が自立してゆく道を、イギリス・フランス・ドイツなど個々の事情を参照し、また比較史的視野をも導入しつつ論ずる。	高山博	高山博
6	中世の地中海世界	北方のヨーロッパにおける封建社会の形成に並行して、十字軍や商業などによる東方イスラム世界などとの接触をとおして、あらたな文明の刺激をうけながら成長するヨーロッパ世界を描く。	同上	同上
7	キリスト教会とその文化	キリスト教の浸透とその成熟過程をみながら、西欧的文化の核心が形成されてゆくありさまを、修道院・大学などの施設の成立と機能をとおして解明する。現地のロケーションによる検証を中心に講義する。	樺山紘一	樺山紘一

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	中世世界の展開と終焉	14・5世紀以降のヨーロッパ世界が、疾病・凶作さらに戦乱・暴動など困難な状況のなかで、次第に再編成への機軸をみいだし、あらたな時代への原理を作りだしてゆく過程を描写する。	河原　温	河原　温
9	ルネサンスの開花	イタリアに始まるルネサンス運動が、固有のヨーロッパ的内在力と外世界からの衝撃をうけつつ成熟するありさまを、現在まで伝承された文化遺産の解読をとおして、現地ロケーションを中心に講義する。	樺山紘一	樺山紘一
10	ヨーロッパ世界の拡大	インド航路とアメリカ航路の開発によって急速に世界各地での植民活動を開始するヨーロッパ諸国の拡大活動と、それにより受けとることになった外世界の商品や情報のインパクトについて扱う。	高澤紀恵（国際基督教大学準教授）	高澤紀恵（国際基督教大学準教授）
11	絶対王政期の国家Ⅰ イギリス	集権的国家としてのイングランドが16世紀以降、国家としての緊密さと社会的な成熟とを進行させ、ついには２次にわたる革命によっていちはやく近代社会への道筋を発見する道程をたどる。	青木　康（立教大学教授）	青木　康（立教大学教授）
12	絶対王政期の国家Ⅱ フランス	大国フランスの王権が特権的貴族集団の抵抗を相手にしながら、徐々に集権的国家機構を整備し、ついには行政的な絶対権力を構築する経過をたどりつつ、近世社会の本質的な強さと弱さとを明らかにする。	高澤紀恵	高澤紀恵
13	絶対王政期の国家Ⅲ ドイツと東欧	領邦の分裂になやみつづけるドイツと、さらに新生のスラブ国家の樹立に挑ぶ東欧の諸国とが、絶対王政への道を開発する特異な機軸を追求し、中央・東ヨーロッパ世が構築されるありさまを描く。	青木　康	青木　康
14	近代文化への道	キリスト教における改革、科学と哲学における近代啓蒙への道、さらに芸術や学術の諸分野における発展が、西欧の精神的基礎をうみだし、ついには伝統的文化の刷新に到達する過程をたどる。	高澤紀恵	高澤紀恵
15	近世ヨーロッパの終焉	17・8世紀のヨーロッパ世界を全体として概観し、絶対主義国家がその基盤において揺らぎながら、あらたな社会への萌芽を形成してゆく過程を問題とする。フランス大革命の直前までを対象とする。	青木　康	青木　康

＝ ヨーロッパと近代世界 ＝（R）

〔主任講師：川北　稔（大阪大学教授）〕

全体のねらい

現代世界はひとつだといわれる。そのような一体としての世界は、どのようにして成立してきたのか。南北格差はなぜ生じたのか。なぜ、ヨーロッパが中心となり、資本主義が発達したのか。このような問題に、歴史的な観点から解答を与える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	世界システムという考え方	近代世界を一つの巨大な生き物のように考え、近代の世界史をその展開過程として捉える見方を世界システム論という。この講義の基本的な視角として、世界システム論の要点を解説し、従来の一国史的な見方との違いを説明する。	川北　稔（大阪大学教授）	川北　稔（大阪大学教授）
2	近代への序曲	15世紀のヨーロッパ封建社会は、経済的にも、社会的にも、危機の状態にあった。この危機への対応策として、世界システムの形成が進むことになる。なぜ、ヨーロッパが対外進出に危機の解決策を求めたのかを検討する。	同　上	同　上
3	キリスト教徒と香料を求めて	十字軍と国土回復運動の延長として対外進出に乗り出したポルトガルの事情と、ポルトガル人到来以前のアフリカの状況、アジアの諸交易圏の繁栄ぶりをまじえて検討する。ヨーロッパ経済圏とアジアのそれのつながりかたをみる。	同　上	同　上
4	スペイン帝国の成立と世界システムの確立	スペイン国王カルロス一世による世界帝国形成の企図とその挫折、フェリーペ二世の下でのアメリカ開発の進行を論じ、ラス・カサスの見解をもとに、先住民“クリオージョ（現地生まれの白人）”スペイン人の関係について検討する。	同　上	同　上
5	17世紀の危機	17世紀はヨーロッパをはじめ世界全体が危機的な状況にあったとされ、世界システムは収縮の局面に入った。この時期に英・仏・蘭三国が、スペイン・ポルトガルに挑戦し、オランダがヘゲモニーを確立することを論じる。	同　上	同　上
6	環大西洋経済圏の成立	16世紀末から経済的危機に陥ったイギリスが、北米における植民地形成にむかい、その結果、貿易の爆発的な展開をみたこと（商業革命）を論じる。また、この現象が、イギリスの社会構造を転換させ、産業革命の展開の前提となったことをも論じる。	同　上	同　上
7	ヨーロッパの生活革命	商業革命が展開するにつれて、アジアやアメリカの新奇な商品が流入した。これに伴って、ヨーロッパ人の生活が一変したことを、イギリスにおける綿織物の消費や紅茶の普及を例にとりあげて説明する。こうして近代ヨーロッパ人の生活様式が成立し、生活必需品となったアジア商品の国産化の過程として、工業化が進行することを示唆する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	砂糖王と煙草貴族	植民地に基礎をおく富裕な階級の成立を、プラッシーの戦い以後のインドの状況やカリブ海・北米植民地の事情を中心に検討する。同時に、北米・アジア・ラテンアメリカのヨーロッパとの関わりかたの違いを、それぞれの地域の現況との関係を念頭におきつつ検討する。ヨーロッパ人のアジア観の転換にも言及する。	川北　稔	川北　稔
9	奴隷貿易の展開	トリニダード・トバゴの首相でもあった歴史家エリック・ウィリアムズの生涯とその学説を紹介しながら、イギリスの産業革命が黒人奴隷制度との深い関係のもとに展開したことを論じる。	同上	同上
10	だれがアメリカをつくったのか	イギリスから北米植民地への移民の出自を分析し、アメリカ植民地が貧困・犯罪・家庭崩壊などの、本国の社会問題の解決の場とされたことを指摘する。この傾向は、はるかのちの時代まで継続することをも説明する。	同上	同上
11	二重革命の時代	産業革命とフランス革命の歴史的意味を、世界システム論の立場から再検討する。産業革命はなぜフランスではなく、イギリスに起こったのか。フランス革命とは、結局、何であったのか。アメリカ独立革命やハイチやラテンアメリカ諸国の独立を含めての環大西洋革命論にも触れる。	同上	同上
12	奴隷解放と産業革命	イギリスの工業化や都市化が、世界システムの展開とどのように結びついていたかを、生活史の側面から説明する。砂糖関税が引き下げられ、穀物法が廃止され、東インド会社の特権が制約されていく過程（「自由主義的諸改革」）を、ひろく論じる。	同上	同上
13	ポテト飢饉とアメリカへの移民	アイルランドにおけるポテト飢餓を契機に、大量の移民がアメリカに渡ったが、イギリス帝国を中心に19世紀における労働者の地球規模での移動に焦点をあわせる。アメリカやオーストラリアにおける人種主義思想の形成にも言及する。	同上	同上
14	パクス・ブリタニカの裏表	イギリスの繁栄の象徴といわれた1851年のロンドン万国博と、1877年のインド帝国式典を象徴的なイヴェントとしてとりあげつつ、大英帝国の繁栄とその陰り、とくにアジア支配のありかたについて論じる。	同上	同上
15	ロンドンのカーニヴァル	旧植民地各地からの大量の入移民によって、多民族国家となりつつあるイギリスの現状を中心に、ヨーロッパにおける移民労働者の問題を、生活文化の側面から検討し、あわせて世界システムのゆくえをさぐることで、講義全体のエピローグとする。	同上	同上

＝ アメリカの歴史（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：紀平 英作（京都大学教授）〕

全体のねらい

近代の初頭に、ヨーロッパ人の植民によって様相を一変した「新大陸」社会は、その後、18世紀から20世紀にかけて独自の国家群を形成していった。本コースは、ヨーロッパ人の進出から始まる近代以降の南北アメリカ大陸の歴史を、現代まで概観する。アメリカ合衆国のほかに、中南米諸国、カナダにもふれる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	新旧両世界の出合い	（1）アメリカ史の特質、（2）新大陸「発見」の思想史的な意味、（3）アメリカ大陸の文明（アステカ・インカ）とスペイン人征服者による征服、（4）銀の採掘とヨーロッパ経済への影響、（5）英・仏・蘭のカリブ海地域への進出、についてみる。	清水忠重（神戸女学院大学教授）	紀平英作（京都大学教授）
2	北米大陸の植民と合衆国の独立	（1）最初期の移民の生活、（2）本国と植民地の対立と独立への道、（3）連邦体制の再編（連合規約から合衆国憲法）、（4）対外政策と政治制度の特徴、（5）建国期の領土膨張の思想、についてみる。	清水忠重 紀平英作（京都大学教授）	清水忠重（神戸女学院大学教授）
3	中南米植民地の独立	（1）砂糖プランテーションと大西洋奴隷貿易、（2）独立運動の背景、（3）独立運動の展開、（4）合衆国の対応（「モンロー主義」）、についてみる。	清水忠重	同上
4	合衆国における民主政治の展開	（1）政治的民主化の進展、（2）「改革の時代」の諸相、（3）異人種の抑圧と排除（自由黒人の植民と先住民の強制移住）、（4）大陸国家の実現、についてみる。	同上	同上
5	合衆国における南北対立の激化	（1）交通革命、産業革命の進展と地域利害の対立、（2）ミズーリ論争以後の新領土における線引きの問題、（3）南北の思想的対立（北部の反奴隷制・反黒人の論理と、南部の奴隷制擁護論・少数派擁護論）、についてみる。	同上	同上
6	南北戦争と再建の時代	（1）南北戦争の勃発、（2）南北戦争と奴隷解放、（3）南北戦争下のアメリカ合衆国社会、（4）南北戦争と国際社会、（5）南部の再建、についてみる。	横山良（神戸大学教授）	横山良（神戸大学教授）
7	19世紀末の合衆国社会	（1）フロンティアの時代の終幕、（2）技術開発と工業化および「独占」の発生、（3）移民と都市化、（4）「ギルディッド・エイジ」の政治と文化、（5）労働者・農民の抵抗、（6）1890年代の意味、についてみる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	中南米諸国の「近代化」の苦悩とカナダ自治領の形成	(1) 国民国家形成の苦悩、(2) 中南米諸国と国際社会、(3) 輸入経済の発展と従属化、(4) 近代化と都市化、(5) カナダ自治領の形成、についてみる。	横山　良 紀平英作	紀平英作
9	革新主義と海外進出	(1) 「帝国」への道、(2) 革新主義運動の進展、(3) 「新しい社会」の理念と現実、(4) 第一次世界大戦と合衆国社会、についてみる。	横山　良	横山　良
10	中南米諸国と合衆国の影	(1) 中南米諸国における民衆の登場と変革の時代、(2) 汎米主義と反米主義、(3) メキシコ革命、(4) メキシコ革命への合衆国の干渉、についてみる。	同上	同上
11	戦間期の合衆国と第二次世界大戦	(1) 「新時代」の到来、(2) 大恐慌の嵐、(3) フランクリン・ローズヴェルトの登場、(4) ニューディール政治の展開と帰結、(5) 変動する国際政治と合衆国、(6) 第二次世界大戦、についてみる。	紀平英作	紀平英作
12	中南米諸国による自立の試み	(1) 戦間期の米州関係、(2) 世界恐慌と中南米諸国、(3) メキシコの動向、(4) ブラジル、中南米の動向、(5) 第二次世界大戦と中南米諸国、についてみる。	同上	同上
13	冷戦開始から1960年代	(1) 世界政治の覇者として、(2) 冷戦の開始、(3) 朝鮮戦争と冷戦の激化、(4) 豊かな社会とアメリカ的生活様式、(5) 60年代の改革の潮流、についてみる。	同上	同上
14	苦悩する中南米諸国	(1) 冷戦と中南米諸国、(2) キューバ革命と社会主義への動き、(3) 軍事政権の台頭、(4) 輸入代替工業化政策の内実とその帰結、(5) 失われた10年間、についてみる。	同上	同上
15	パクス・アメリカーナの時代をこえて	(1) 泥沼化するヴェトナム戦争、(2) 世界経済における合衆国の覇権の後退、(3) 冷戦の終息、(4) 苦悩を抱える合衆国社会、(5) 世紀をこえて、についてみる。	同上	同上

＝ 芸術の古典と現代 ＝（ＴＶ）

〔主任講師：青山 昌文（放送大学助教授）〕

全体のねらい

芸術とは何か、芸術が分かるとはどういうことか、という問いから始めて、絵画・彫刻・音楽・文学・演劇・映画・建築の各々の本質を探り、それらの代表的な古典作品と現代作品を例に挙げて、具体的にその基本性格を明らかにする。特に私達が現に生きている現代社会との関わりを重視して、現代芸術の意味の解明に力点を置く。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	芸術とは何か	1. 芸術について考えるということの意義 2.「芸術」という概念の歴史	青山昌文（放送大学助教授）	青山昌文（放送大学助教授）
2	自然美と芸術美	1. 自然美の本質－自然美学の歴史 2. 自然美と芸術美－その相違性と同一性	同上	同上
3	芸術の分類	1. 古典的諸分類－アリストテレス、カインツ等による分類 2. 現代的諸分類－スーリオ、竹内敏雄等による分類	同上	同上
4	絵画・平面の古典	1. 絵画・平面の基本的性格 2. 絵画・平面の古典作品の基本的性格 3. ミケランジェロのシスティナ礼拝堂天井画 －トルナイ等によるその美的解明 4. フラ・アンジェリコやシモーネ・マルティーニの『受胎告知』等の作品 －ルネサンス美術研究家によるその美的解明 5. シャルダンの静物画－ディドロによるその美的解明	同上	同上
5	絵画・平面の現代	1. 絵画・平面の現代作品の基本的性格 2. ウォーホルの『マリリン・モンロー』等の作品 －現代の批評家によるその美的解明 3. キーファー『イカルス』等の作品 －現代の批評家によるその美的解明 4. 森村泰昌の『批評とその愛人』等の作品 －現代の批評家によるその美的解明	同上	同上
6	彫刻・立体の古典	1. 彫刻・立体の基本的性格 2. 彫刻・立体の古典作品の基本的性格 3. ギリシア彫刻『ポセイドーン』等の作品 －古代美術研究家によるその美的解明 4. ミケランジェロやドナテッロの『ダビデ』等の作品 －トルナイ等によるその美的解明 5. 鎌倉彫刻の作品－日本美術研究家によるその美的解明	同上	同上
7	彫刻・立体の現代	1. 彫刻・立体の現代作品の基本的性格 2. シーガルの『ゲイ・リベレーション』等の作品 －現代の批評家によるその美的解明 3. アバカノヴィッチの『ワルシャワ』等の作品 －現代の批評家によるその美的解明 4. キーファーの『革命の女たち』等の作品 －現代の批評家によるその美的解明 5. 工藤哲巳の『連鎖反応』や土屋公雄の灰作品等の作品 －現代の批評家によるその美的解明	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	音楽の古典と現代	1. 音楽の基本的性格－古典と現代 2. モーツァルトの『フィガロの結婚』や『レクイエム』等の作品 －デント等によるその美的解明 3. リゲティの『レクイエム』等の作品 －現代音楽研究家やベンヤミン美学によるその美的解明	青山昌文	青山昌文
9	文学の古典と現代	1. 文学の基本的性格－古典と現代－ 2. ホメロスの『イリアス』オデュッセイア』作品 －古典文学研究家やプラトンによるその美的解明 3. ジョイスの『ユリシーズ』等の作品 －現代文学研究家によるその美的解明	同上	同上
10	演劇の古典と現代	1. 演劇の基本的性格－古典と現代－ 2. ソフォクレスの『オイディプス』等の作品 －アリストテレスによるその美的解明 3. ブレヒトの『ガリレイの生涯』等の作品 －現代演劇研究家によるその美的解明	同上	同上
11	映画・映像の古典と現代	1. 映画・映像の基本的性格－古典と現代－ 2. キューブリックの『2001年宇宙の旅』等の作品 －映画研究家によるその美的解明 3. 河口洋一郎の『GIGALOPOLIS』等の作品 －CGアート研究家によるその美的解明	同上	同上
12	建築の古典	1. 建築の基本的性格 2. 建築の古典作品の基本的性格 3. パルテノン神殿・アファイア神殿 －ウィトルウィウスやギリシア美術・建築研究家によるその美的解明 4. シャルトル大聖堂－ゴシック美術・建築研究家によるその美的解明	同上	同上
13	建築の現代	1. 建築の現代作品の基本的性格 2. ボフィルのアブラクサス館－現代建築研究家によるその美的解明 3. ヤノブスキーの『ピカソ・アリーナ』 －現代建築研究家によるその美的解明 4. 安藤忠雄の『水の教会』－現代建築研究家によるその美的解明	同上	同上
14	古典芸術と社会	1. 芸術と社会の基本的関係 2. 古典芸術と社会の基本的関係 3. ミケランジェロの『ダビデ』とルネサンスのフィレンツェ社会 －トルナイ等による分析	同上	同上
15	現代芸術と社会	1. 現代芸術と社会の基本的関係 2. クリストの『ライヒスターク・プロジェクト』とベルリン・ライヒスタークの現代史－クリスト自身等による証言と分析	同上	同上

＝ イメージの歴史（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：若桑 みどり （千葉大学教授）〕

全体のねらい
1. イメージが人類の歴史のなかで果たした多様な作用についての理解
2. 視覚表象としてのイメージの解読と分析の方法論についての理解
3. 権威となって崇拝され伝承されるイメージの権力作用についての理解
4. 共同体の心性を創りだすイメージの社会的なはたらきの理解
5. 他者（女性、外国人、異人種、植民地人）に対する差別を産み出すイメージの政治性についての理解
6. イメージは歴史が生み出すものであると同時に歴史を創り出すものであることを理解し、その研究の重要性を理解する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	イメージの歴史とは何か	この講義の内容についてその基礎論を語る。まずイメージの歴史が既存の美術史と異なる点について3点説明する。第一点はこれが大芸術のみを研究対象とせず、マンガや版画、宣伝ポスター、貨幣、メダルなどの複製・大衆文化を含む広範なイメージを問題とすること、第二に美術史的方法論のみではなく、アカデミックな学問の領域を越え、歴史、社会史、宗教史、文学史など成果を包含しながら、社会史と連携した文化史をめざすこと、第三にポストコロニアルとジェンダーの視点に立ってイメージの歴史を再解釈することを説明する。	若桑みどり（千葉大学教授）	若桑みどり（千葉大学教授）
2	社会と文化の関係について	「社会」とは、経済的、社会的、政治的な構造の総称であり、特定の場所と時間に特有の社会的諸関係のパターンとして現れる目に見えない構造である。いっぽう、「文化」とは「基本的に書物や美術品や歌舞演劇に現れた態度・価値観、そしてそれらが表現「想像的なものや象徴的なものの領域」すなわち表象であることを説明する。さらにこの表象の生産と消費のメカニズムについて前近代と近代の構造の相違についてふれながら具体的なイメージをあげて説明する。	同上	同上
3	イメージ（image）生産の目的	人類が社会の中でイメージをどのような目的で生産してきたかについて6項目について説明する。(1)「呪術的目的」。イメージはそれ自体が表象されたものの魔力を分け持つものであったこと。(2)不可視のものの喚起。宗教的、道徳的な理念の強化のみならず「想像の共同体」である国家の表象の重要性。(3)表現されたものの権威化・栄光化と永続性。(4)歴史意識の増幅。歴史と神話の創出。(5)他者の創出。社会の下層や周縁、外部にいる集団の否定的イメージの生産による社会秩序の維持のメカニズム。(6)欲望の喚起または昇華。(7)社会批判。	同上	同上
4	イメージの生産方法－定型図像について	イメージは文法や語彙と同様にある文明のなかで歴史的に伝承され、変形をうけながら幾たびも再解釈されつつ継承されるものであることを西欧のイメージの歴史を貫く定型的図像を例にあげて具体的に説明する。(1)古代ギリシャ・ローマで創造された定型図像とその伝承。(2)古代哲学倫理から発生し中世に隆盛した倫理哲学的定型図像。(3)キリスト教的定型図像。(4)オカルト哲学の定型図像。(5)民衆文学と民間伝承の定型図像。(6)定型図像の崩壊としての現代美術。	同上	同上
5	イメージの表現様式	図像は通時的に伝承されるが表現様式は共時的に共有される。「最後の晩餐」という共通の図像が時代とともにいかに異なった様式で表現されたかを具体的に検証する。さらにイメージは図像と様式の独自な結合であると同時に、その結合を引き起こす独自の文化的状況についての総合的な研究であるイコノロジーの必要について説明する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	カノン「正典」の成立－古代社会のイメージと心性	西欧文明においてはギリシャで生成されたイメージが権威あるカノンとなって伝承されたことについて具体的に説明する。まずアテネのパルテノン神殿の破風彫刻を例にとって、そのテーマが、ギリシャ文化と国家の優越を象徴するオリュンポスの神々の栄光化と異民族の武力による制圧であったことを示し、イメージのカノンとしてのアテナ女神と英雄ヘラクレス、他者のイメージの典型としての「巨人族」と「アマゾン族」の制圧、また「レイプ」のイメージのカノン化について説明する。	若桑みどり	若桑みどり
7	中世西欧のイコン－聖母像	西欧には理想的身体の崇拝というギリシャ的カノンのほかに、肉体の否定というもう一つのカノンがある。イエス・キリストに人間の体を与えた聖母マリアの身体をとおして、霊魂を上位におき、身体を下位におくキリスト教思想がいかに聖母マリアの身体表現をとおして表象されたかを見る。また肉の堕落の象徴であるエバと処女にして母である聖母マリアの二項対立を検証し、この区別によってキリスト教がいかに女性の性を統御してきたかを見る。	同　上	同　上
8	古代カノンの復活－ルネサンス	フィレンツェの市庁舎前の広場に建てられた公共彫刻の変遷を探りながら、ルネサンスの自治都市国家から君主制国家への推移につれて広場の公共彫刻がどのように変遷したかをみる。共和政の象徴であるドナテッロの「ダヴィデ」、「ユーデイット」からミケランジェロの「ダヴィデ」にピークを迎えた共和国的イメージが君主制の確立とともに「ヘラクレス」へと変貌し、女英雄「ユーデイット」が、「殺されるメドウーザ」「サビニ族の女のレイプ」に変質する。	同　上	同　上
9	女英雄ユーデイット像の変遷	祖国を救った女英雄ユーデイットが中世、ルネサンス、16世紀、19世紀という時代の推移のなかでどのように再解釈され新しい意味を与えられたかについての講義。女性戦士への家父長的視線をうけて、女英雄ユーデイットから男殺しの運命の女へと堕落してゆく歴史を、具体的作例に即して検証。女性の役割を逸脱した女性戦士の格下げが家父長制社会における女性役割の差別化を象徴することをあきらかにする。	同　上	同　上
10	フランス革命と公共彫刻	新しい国家・体制は民衆の忠誠心をつくりだすために新しい国家的象徴をつくりだす。革命後のフランスは共和国の象徴を多数うみだすが、その基本的な図像はギリシャ的古典にものづいていた。共和国の象徴となったヘラクレスとマリアンヌについて、革命後100年間の、王政、帝政、共和政の体制変化に伴う国家的表象の変遷を探る。	同　上	同　上
11	フランス革命と民衆の漫画	革命と共和国、ナポレオン、ルイ・フィリップ、ナポレオン三世など体制の権力を美化する公的な大芸術の下で、民衆は民衆がみた革命、ナポレオンの政治、第三共和制、第二帝政の政治を批判し、笑った。オノレ・ドーミエの漫画を中心にして、下層の大衆の視線からみた政治・国家・権力を笑う漫画、風刺画に注目する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	ファシズムのイメージ戦略	ヒトラーとムッソリーニの文化政策と彼らが生産した多数のイメージを分析し、これらのイメージによって国民がいかに全体主義に扇動されていたかを考える。古典主義的秩序と画一性がファシズムの様式原理であった。ドイツではギリシャ人と同じ人種である「アーリア人」の身体をもつ男性全裸像が公共彫刻として優先される。イタリアでは古代ローマ帝国の図像伝統が繰り返され、帝国の継承者としてのムッソリーニが神格化された。古代ローマ皇帝の騎馬像や鷲の紋章の復活など「創られた伝統」の典型をそこに見ることができる。	若桑みどり	若桑みどり
15	日本の公共彫刻	東京都内に現在立っている公共彫刻を探訪して、現代日本における公共的イメージがどのような性格をもっているかを検証する。その結果、それらの大多数が女性裸体像であることがわかった。戦前の男性武装像を撤去したあとで戦後の日本は政治的、社会的意味をもたない女性裸体を選択したが、その理由はどこにあるのか。パルテノン神殿の彫刻からはじまったイメージの歴史の終わりはわれわれ自身のまわりにある日常のイメージの研究に終わる。	同上	同上

＝ 西洋音楽の歴史 ＝（ＴＶ）

〔 主 任 講 師 ： 笠 原　潔（放送大学助教授）〕

全体のねらい

西洋音楽の歴史を辿りながら、その背景となった西洋文化全般について学ぶ。前半では、西洋音楽文化の基盤となった音楽観や諸制度、各時代の音楽に影響を及ぼした政治・社会状況の解明に重点を置き、後半では近代の代表的な作曲家を取り上げて、その表現法を具体的な作品に即して分析する。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	西洋音楽の時代区分と様式	西洋音楽史の流れを追いながら、各時代の音楽の様式的特徴を明らかにする。	笠 原　潔（放送大学助教授）	笠 原　潔（放送大学助教授）
2	古代ギリシャの音楽	西洋の音学観の根底にある古代ギリシャの音楽観を、「ムーシケー」という概念の分析を中心に概観する。	同　上	同　上
3	ユダヤ教からキリスト教へ	キリスト教が、母体となったユダヤ教からどのような音楽上の諸制度を継承し、それをどのように発展させて西洋音楽の枠組みとなる諸制度を構築していったかを明らかにする。	同　上	同　上
4	キリスト教の聖歌	西洋中世前半の時代を彩るローマ・カトリック教会聖歌の成立と展開の歴史を追いながら、フランク王国とローマ教会の関係、修道院の果たした役割などの点を明らかにする。	同　上	同　上
5	世俗音楽の隆盛	西洋中世後半の時代における世俗音楽隆盛の様子を紹介しながら、その背景にある西洋文化とアラビア文化の接触、都市文化の繁栄、恋愛観の変化、など当時の西欧文化の新動向を紹介する。	同　上	同　上
6	十四世紀からルネサンスへ	十四世紀から初期ルネサンス時代に至る作曲様式の変化を追いながら、こうした変化をもたらした当時の西洋の政治状況を紹介する。	同　上	同　上
7	盛期ルネサンス	十六世紀の盛期ルネサンス時代の西洋音楽の様相を紹介するとともに、宗教改革が音楽に投げかけた波紋についても論ずる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	南蛮音楽到来	前八章のまとめとして、キリシタン時代の洋楽流入の問題を取り上げ、当時の日欧交渉の様子を紹介する他、イエズス会文書などの日本側資料を通じてのルネサンス音楽研究の可能性を探る。	笠原　潔	笠原　潔
9	初期バロック時代	オペラの誕生など、初期バロック時代の音楽活動の中から生まれ、その後の時代に受け継がれていった音楽語法、楽曲形式について解説するほか、音律の問題についても触れる。	同　上	同　上
10	J.S.バッハの音楽表現	J.S.バッハの『マタイ受難曲』を取り上げ、その表現技法を紹介する。	同　上	同　上
11	W.A.モーツァルト	W.A.モーツァルトのオペラの中のアリアや重唱を教材に、彼の表現技法を紹介する。	同　上	同　上
12	ベートーヴェンとその時代	ベートーヴェンの生涯をバッハやモーツァルトの生涯と比較して、三者が生きた十八世紀から十九世紀前半にかけて、音楽を取り巻く状況に大きく変化が生じたことを示すとともに、音楽の資本主義化の進捗に伴う楽器の変化の様子を紹介する。	同　上	同　上
13	シューベルトの『冬の旅』	シューベルトの歌曲集『冬の旅』を題材に、この歌曲集の背景にある西欧の社会構造の民俗文化を紹介するとともに、この歌曲集の描いた実存世界の様相を解明する。	同　上	同　上
14	ヴァーグナーから現代へ	ロマン派から現代に至る西洋音楽史の流れを追いながら、調性が崩壊し、新たな音楽語法が生まれてきた経過を紹介する。	同　上	同　上
15	楽譜の問題	現在の五線記譜法に至る西洋の記譜法の歴史を辿りながら、記譜体系は固定したものではなく、時代とともに変化してきたものであることに注意を喚起する。	同　上	同　上

＝ 日本音楽の基礎概念（’００）＝（R）

〔主任講師：竹内 道敬（元国立音楽大学教授）〕

全体のねらい

日本の音楽はつまらない、わからない、というので、片隅に追いやられている。そんなことはない。その基礎的な考え方を探ってみると、面白いことがたくさんある音楽で、日本とはなにかということも見えてくるのである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	日本音楽と楽器(1)	我が国は稀にみる高温多湿の国である。そこでは金属楽器は錆びてしまう。楽器の材料も呼吸する必要があったから、木、竹、革などになった。 したがって楽器は生き物であり、生きていなければならない。案外寿命は短いが、日本の楽器は作り替えることで生き続ける。今一番演奏しやすい楽器が名器なのである。	竹内道敬（元国立音楽大学教授）	竹内道敬（元国立音楽大学教授）
2	日本音楽と楽器(2)	三味線音楽には、実にさまざまな種類がある。これは音色を追求してきた結果である。それにはどんな音色があるか、どこを変えてきたのか。上方と江戸には大きな差がある。	同上	同上
3	楽器演奏者と発声	楽器演奏者が声を出すのは、我が国独特の習慣である。なぜ声をだすのか。なぜ邪魔とは感じないのか。あれでも音楽といえるのだろうか。考えてみよう。	同上	同上
4	流派と特色	日本音楽もいいけれども、なにを歌っているのかわからないという意見がある。なぜわからないのか。日本語の特色から考え直してみよう。	同上	同上
5	発声のきまり	同じように、歌の語尾をふるわせるからわからないという。なぜふるわせるのか。理由はあるはずである。	同上	同上
6	日本音楽と指揮者	日本音楽には、西洋音楽のような指揮者はいない。聴衆に背をむけている演奏家はいない。全員お客のほうを向いている。でも揃っているのはなぜだろうか。	同上	同上
7	日本音楽と形式	苦しそうな歌を聞くことがある。男が女の声の真似をする。パート分けをすれば楽なのに、そうしないのははぜか。また声楽四部合唱曲のような形式は、なぜ生まれなかったのか。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	調弦・調律	三味線には本調子、二上り、三下りという調弦がある。演奏途中で変更する。箏曲でも琴柱を演奏中に動かす。こんな忙しい演奏は日本だけらしい。	竹内道敬	竹内道敬
9	入門曲・練習	日本音楽にはピアノのバイエルのような練習曲がない。初心者が習う曲をききながら、「学ぶ」とはなにか。その理由を考える。	同上	同上
10	演奏の姿勢	正座して演奏するのは、現代では（たぶん昔も）苦痛である。それはいつごろ誰がきめたのか。なぜ変えないのか。無理な姿勢でいい演奏はできないはずだが。	同上	同上
11	流儀の区別	能には五流ある。箏曲も生田と山田というおおきな流派がある。三味線音楽には長唄、常磐津、清元、義太夫、新内などの流派がある。なぜこの流派が生まれたのだろうか。どうしたら聞き分けられるのだろうか。	同上	同上
12	名人・上手	録音技術のなかった時代でも、一世を風靡した美声家、名人上手がいた。昔の人はどんな声を美声と感じたか。想像してみるのも楽しいことだろう。	同上	同上
13	リズム・メロディー・ハーモニー	日本音楽の基本は二拍子である。なぜワルツは生まれなかったのだろう。またなぜすてきなメロディーがなかったのだろう。そしてなぜあんなにもゆっくりしているのだろう。	同上	同上
14	伝統芸能	伝統音楽の危機が叫ばれている。後継者がいないという。なぜいないのか。ものの考え方が変わったのだろうか。なぜ魅力がなくなったのだろうか。音楽だけではなく、伝統芸能とはなにかを考え、その解決方法を探ってみたい。	同上	同上
15	まとめ・日本音楽の特色	雅楽は1300年以上、能は600年以上、箏曲、三味線は300年以上の伝統がある。それらを通していえることは、伝承と創造との巧みなバランスである。それらを考えながら、日本の音楽の将来のあり方を見極めてみよう。	同上	同上

＝ 応用音楽学（’００）＝（R）

〔主任講師：山口　修（大阪大学大学院教授）〕

全体のねらい

音楽と社会の関係において両者が見せる相互作用のダイナミクスに焦点を合わせ、それを「応用音楽学」と総称して新しい音楽学の理論と方法を提示する。歴史的な記述を目指すのではなく、現代社会の多様な様相に着目し、従来の「民族音楽学」的な観点を重視しながら日本や東アジア全体から人類文化を眺望する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	社会に開かれた音楽学	社会と音楽を対置したときに、音楽を「鳴り響く音」や「楽譜」のかたちで独立したものとして捉えるのではなく、社会のなかに組み込まれたものとして、また、音楽が社会を変えてゆくといったように両者の関係を重視して、以下の章で順次述べてゆく問題意識を総合的に鳥瞰する。	山口　修（大阪大学大学院教授）	山口　修（大阪大学大学院教授）
2	社会から学ぶ音楽学	音楽学は特定の社会と結びついて発展した。しかし、激動の現代と未来においては、特定の社会に束縛されない観点が一般に必要とされるようになってきた。そこで一つは、大きな社会変動が起きたときにどうなるのか、もう一つは、中心ではなく周縁から何を学ぶかを考察する。	同　上	山口　修 ゲスト 渡辺　裕（東京大学大学院助教授）
3	多元文化主義の現代と音楽	好むと好まざるとに関わらず、文化が多元的であるということを意識しなければならない時代になった。国や地域の大小を問わず、また社会のどのレヴェルであれ、多元文化があることを知ることになる。この章では、価値の問題をおもに扱う。	同　上	山口　修 ゲスト 志村　哲（大阪芸術大学助教授）
4	国際化社会の音楽	多元文化主義の一つの現れとしての国際化社会は、近代的な産業構造の産物として考えられがちだった。日本音楽もその悪影響を受け、国際化が西洋化と混同されていた。真の国際化を考えるために、音楽創作の現場と聴き手の好みの変化、そして人間の移動にまつわる問題を扱う。	同　上	山口　修 ゲスト 吉崎清富（東京学芸大学教授）
5	地域社会の音楽	「国際」とか「多元」といった外への方向だけでなく、自分の住んでいる地域や集団の方へも関心を保つ必要がある。人びとの音楽生活の中心はあくまでも地域にある。であれば、地域社会の音楽をもっと詳細かつ厳密に調べなければならない。	同　上	山口　修 ゲスト 田井竜一（京都市立芸術大学附属日本伝統音楽研究センター助教授）
6	音楽における脈絡変換	音楽は、必ず脈絡があって成立してきた。しかし、近代化、国際化、多元文化主義の波は、脈絡の変更を余儀なくしてきた。現代から未来への脈絡変換に影響される「鳴り響く音響」としての音楽、それを伝承する媒体としての身体の問題を考察する。	同　上	山口　修 ゲスト 月溪恒子（大阪芸術大学教授）
7	異文化理解と音楽	現代社会では、遠近の異文化に対してどのような態度をとるべきか、選択を迫られている。異文化への道を閉ざす文化は必ず衰弱するものである。そこで、異文化理解に関わる基本的な立場をここで整理し、最近の成果を紹介する。	同　上	山口　修 ゲスト 小西潤子（大阪音楽大学講師）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	学校教育と生涯教育における音楽	人間は生まれおちてからすぐに音楽学習を始め、生涯を通じて発達をとげてゆく。従来の音楽教育学は、制度化された学校に限定される傾向があったが、教育を人びとの生活一般に関わる問題として位置づけるために、応用音楽学の枠のなかで、音楽学習と自己形成の問題を考察する。	山口　修	山口　修 ゲスト 加藤富美子（東京学芸大学教授）
9	フィードワーク概念の拡大と音楽	地域社会であれ国際化社会であれ、対人認識、他者の認識という側面が音楽活動とは切っても切れない関係にある。これをある程度組織的におこなうのがフィールドワークである。そのあり方は近年大きく変化しつつあるので、そこから何が見えてくるのかを検討する。	同　上	山口　修 ゲスト 田中健次（佐賀大学教授）
10	音楽現場の多様化とアートマネージメント	人類音楽の多様な形態のなかで我々が接近し得る音楽は、全体の5分の1だと言われている。人びとの耳に音楽がとどくためには、アートマネージメントといわれる操作が必要となってくる。このことを明らかにしないかぎり、現代社会の音楽生活の問題点は解明されない。	同　上	山口　修 ゲスト 中村　透（琉球大学教授）
11	文化行政と音楽	国や、県、市町村といったレヴェルで、音楽をどのように考えるかをリードする文化行政は、我々がさまざまな音楽に接近できるかどうかを決定する力を有している。公的な財源をつかって公平に体験できる場を提供する問題を考えるのが、この章である。	同　上	山口　修 ゲスト 徳丸吉彦（お茶の水女子大学教授）
12	音楽における環境問題	かつては、特定の目的のために人びとが衆知をあつめて音楽が演奏されていた。最近では、メディアが大きく変化するにつれ音楽のあり方が拡がり、環境との関係が多様化してきた。すなわち、自然環境のみならず、人為環境が以前にも増して問題となる。	同　上	山口　修 ゲスト 中川　真（京都芸術大学助教授）
13	映像音楽学の展開のために	映像技術の発展は、視覚情報をともなって音楽を再生することを可能にした。音楽にもともと備わっていた身体性がここで復権する。音楽のあり方を他者に伝えるうえで映像がはたす役割や、新しい表現手段としての映像といった現代的課題をこの章で扱う。	同　上	山口　修 ゲスト 高橋光則（映像作家）
14	「わざ」の世界と音楽	映像にせよ、音楽そのものにせよ、特定の人間の集団が伝承し形成してきた目に見えない「わざ」の領域に多くを負っている。「わざ」はどのように現場で伝承され、新しい「わざ」はどのようにつくられてゆくのかを具体例とともに考察するがこの章のねらいである。	同　上	山口　修 ゲスト 岡田節人（ＪＴ生命誌研究館館長）
15	人と人をつなぐ音楽	音楽は、たとえ一人で演奏するものであれ、多くの人びととの関わりが反映している。個人から集団へ、はては地球レヴェルの仲間たちへと人間的精神を拡大すべきであるという基本的な命題を研究の骨幹に据える応用音楽学の立場を、音楽哲学的に総括するのがこの章である。	同　上	山口　修

＝演劇を読む＝（TV）

〔主任講師：渡邊　守章（放送大学副学長）〕
〔主任講師：渡辺　　保（淑徳大学教授）〕
〔主任講師：淺田　　彰（京都大学助教授）〕

全体のねらい

演劇を読む操作には、「舞台を読む」ことと「テクスト〔戯曲〕を立てて読む」ことの二つの方向がある。どのような演劇でも、舞台の様々な表現は、ある＜決まり＝コード＞に従って組織されている。しかし、その＜決まり＝コード＞が厳密で、しかもかなり長い歴史的な時間にわたって伝承されている舞台芸術と、そうではなく、戯曲というテクストが常に出発点にあって、舞台の具体的な形象は時代によって変わるものとがある。大雑把に言って、日本の伝統演劇は前者であり、西洋演劇は後者である。前者は我々日本人の劇場的・舞台的想像力について、教えてくれることが多いだろう。後者の場合、戯曲を具体的に「立てて読む」作業を分析することにより、舞台芸術としての一般コードと、その作品固有のコードとの弁証法的な働きを見ることが出来　よう。いずれの場合も「演劇を読む」ことは、舞台表現とテクストの間の創造的な往復運動の実践である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	演劇を読むとは	演劇を読むとはどのような作業か。「舞台を読む」は、日本の伝統演劇の具体的な例（歌舞伎と能）によって、意味的に組織された舞台空間の分析を、また「テクストを立てて読む」は、戯曲における「ト書き」の問題に焦点を当てて、近代劇と古典劇の新演出の例を分析する。	渡邊守章（放送大学副学長）	渡邊守章（放送大学副学長）
2	引用のゲーム『かもめ』／『ハムレット』	日本でも新劇のレパートリーとしてよく知られているチエホフ作『かもめ』を取り上げ、戯曲のテクストとそれ　を取り巻くテクスト（下敷きとしての『ハムレット』とその変形の仕方、演出と解釈、メタシアターの諸相）について考える。	同　上	同　上
3	歴史の劇作術ミュッセ作『ロレンザッチョ』の場合	フランス・ロマン派の詩人アルフレッド・ド・ミュッセの長編歴史政治劇『ロレンザッチョ』は、19世紀ヨーロッパの戯曲のなかでも、20世紀に最も評価の高い作品である。この戯曲の本邦初演の舞台を素材に、「シュークスピア・モ　デル」（人物と構成、４つの筋、演劇における歴史の語り方）、権力と幻想の＜装置＞（「壁」と「照明」）、同化と異化などの問題を考える。	同　上	同　上
4	ごっこ芝居、あるいは『女中たち』の演技	現代フランスの前衛戯曲のうちで、現在でも世界中で最も上演頻度の高いジャン・ジュネの『女中たち』の舞台（本木雅弘主演）を取り上げ、舞台表現の分析における記号論の手法（パラダイム変奏）、演技と情念と身体の関係、イメージとドラマ、ジェンダーの演劇等の問題を考える。	同　上	同　上
5	能の詩法　(1)叙景と憑依	２回にわたって、能における舞台の幻想と言語の関係を考える。１回目は、元来田楽系の能とされる『松風』と世阿弥作の『井筒』を取り上げ、「叙景」の意味、衣装による「憑依」、「詰めどころ」の設定（「松に取りつく」／「井戸をのぞく」）を、二作について対比的に分析する。	同　上	同　上
6	能の詩法　(2)風景の装置	前回に続き、『松風』と世阿弥作の『融』の対比を中心に、演劇的な詩を保証する「風景」の作用を考える。『融』における２段構成の意味、「風景」と「汐汲」、風景の呪力と庭園装置、ならびに詞章のパラダイム変奏の分析が中心である。	同　上	同　上
7	歌舞伎の論理	『積恋雪関扉』は、多くの歌舞伎のなかでも最も「歌舞伎らしい」演目である。しかし「歌舞伎らしい」というのはどういうことか。「歌舞伎らしさ」の精神の＜かたち＞と、そのかたち＞のもつ論理を見ていく。	渡辺　保（淑徳大学教授）	渡辺　保（淑徳大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	踊りの世界	日本の古典舞踊の本質とは何か。そしてそれを支えてきた「芸」とは何か。歌舞伎舞踊の代表作である。『京鹿子娘道成寺』を踊る中村歌右衛門を分析する。	渡辺　保	渡辺　保
9	歌舞伎と文楽	『仮名手本忠臣蔵』は義太夫狂言の典型であり、最も上演頻度が高く、根強い人気をもつ。その構造はホーム・ドラマであり、士農工商のうち、士農商の三つの階級にわたって、ほとんど社会の上層から下層にまで及ぶ。文楽と歌舞伎の『仮名手本忠臣蔵』を通して、義太夫狂言の世界を考える。	同　上	同　上
10	世話物の技法	『三人吉三廓初買』は河竹黙阿弥の代表作である。それは単なる因果話しではない。そこに隠された時代の実相、そこに潜む人間の歌には、私たちの官能を揺さぶる普遍的な何物かがある。『三人吉三』を通して、世話物の世界を見ていく。	同　上	同　上
11	演劇的女体～女形の文法～	舞台の上で男性が女性を演じるとはどういうことなのか。京劇における女形＝男旦（歌舞劇における虚構の女体）の例を取り上げ、それを能における女体（女体の美的観念）、歌舞伎における女形（様式化された女）、新派における女形（芸者という典型）などとを対比しつつ、現代の舞台芸術における「虚構の女体」やジェンダーの問題も視野に入れ、分析する。	渡邊守章	渡邊守章
12	オペラのアルケオロジー	オペラは19世紀ヨーロッパで完成を見た舞台芸術の典型である。バロック時代のオペラに遡りつつ、西洋型音楽劇を成立させている論理と美学を考える。	淺田　彰（京都大学助教授）	淺田　彰（京都大学助教授）
13	総合芸術としての楽劇	20世紀後半には、19世紀型オペラの様々な新しい演出・演奏がなされて今日に至っている。「全体芸術」を目指したワーグナーの楽劇以降、全体演劇としてのオペラは、現代においてどのように生きつづけているのか。舞台芸術における音楽と舞台の関係を分析する。	同　上	同　上
14	クラシック・バレエとその解体	いわゆる「クラシック・バレエ」は、19世紀ヨーロッパのロマン派の運動と深い関係を持って生まれた。踊りと舞台の幻想の関わりを、クラシック・バレエを中心に考えてみる。	同　上	同　上
15	現代における舞踊芸術	20世紀は舞踊の世紀だとも言われる。舞台芸術として、舞踊がこれほど重要な位置を占めたことは、歴史的にも珍しいのではないかと思われる。現代の舞踊における様々な実験を展望しつつ、舞台における身体性の問題を考える。	同　上	同　上

＝ 文化人類学（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：江渕　一公（放送大学教授）〕

全体のねらい

現代の人類の生活は、産業化と資本主義経済のグローバル化によって、否応なしに世界経済システムに緊密に組み込まれ、それに伴って文化のグローバル化が急速に進んでいる。文化人類学初学者のための入門として、まず前半において、文化人類学の伝統的（古典的）視角・方法・知見についての基礎的理解をはかると共に、それを踏まえて、後半では、人類が直面している諸問題をグローバルな視野で捉える新しい“地球人類学”の視角と課題について考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	文化人類学とはどのような学問か	文化人類学の発展の歴史を振り返りながら、文化人類学の学問的特質、範囲、ねらい、視角と方法、国による人類学の構成の違い、応用人類学の諸分野、人類学と隣接科学の関係について概説し、とくに今期の授業で重点をおく地球人類学的視座とテーマについて述べる。	江渕一公（放送大学教授）	江渕一公（放送大学教授）
2	人類学の理論的進化と現代的課題	前世紀の進化主義、伝播主義理論に始まる文化人類学は、今世紀には構造・機能主義、文化相対主義理論等により飛躍的発展を遂げたが、80年代以降、唯物論的文化理論、解釈学・象徴主義理論、政治生態学理論等の登場により更に大きな変化を見せていることを論述する。	同上	同上
3	システムとしての文化	文化の定義に関する諸説を概観しつつ、「人間性と文化」の視点から、文化の意味と特質、主要構成要素、人類文化の多様性と共通性・普遍性、文化の可変性、文化相対主義等、人類学の視角を提示するとともに、文化を「システム」として捉える本授業科目の基本的立場について述べる。	同上	同上
4	文化化のメカニズム －心理人類学の諸問題－	「文化とパーソナリティ」学派の主要研究、心理人類学・教育人類学の成果を基に、文化化（文化の伝達と習得）のメカニズムを明らかにし、文化と性、文化と認知・情動、自文化中心主義、国民性理論など、「人間性と文化」に関わる諸問題について考察する。	同上	同上
5	適応戦略と経済システム	所与の環境における適応方法・戦略として形成された文化の特質を、食料獲得のための生業の形態と食料その他の物資の分配・交換のシステムの視点から捉え、採集・狩猟・漁労、鍬農耕、犂農耕、灌漑・水利システム、産業化の各段階の特徴について経済人類学的考察を加える。	同上	同上
6	環境統制のシステム －道具と技術－	主として産業化以前の段階の人類社会が蓄積してきた人間の生物的必要を満たすための環境統制の装置とシステム、エネルギー利用の道具・技術、ものを製作する技術と技能等について、体温調節と身体保護、水と食料、食材の貯蔵と調理、情報伝達と貯蔵、輸送など多面的に考察する。	同上	同上
7	社会的協力のシステム －家族・親族・年齢集団・利益集団－	人間集団の形成原理と主要形態に関する文化人類学の基本的概念・理論を、性と婚姻、家族、親族と出自、性・年齢・利益集団等について、それらを社会的協力のシステムと見る立場から概観するとともに、それらの現代的変化の状況について社会人類学的考察を加える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	信仰と価値のシステム －宗教・儀礼・神話－	人間の由来、自然界・超自然界の秩序と人間との関わりをめぐる宇宙論的懐疑は、各民族独自の神話、呪術（病理観や治療技術を含む）、宗教、儀礼を生み出し、真善美に関わる信仰と価値観、世界観を形成してきた。人間の内面統制システムの多様な側面について考察する。	江渕一公	江渕一公
9	社会統制のシステム －バンド・部族社会・首長制社会・国家－	原初的社会組織としてのバンド、部族の社会組織、より高度化・複雑化した社会組織としての首長制社会、灌漑農耕文明国家の政治的・経済的・宗教的機能、国家の起源とその促進要因について検討するとともに、それらの組織の基盤をなす諸原理について考察する。	同上	同上
10	産業化・コロニアリズム・世界システム	重商主義政策のもとで拡大したヨーロッパ諸国の世界進出競争は産業革命によって一段と激化し、世界の「周縁」社会の植民地化を増大させた。コロニアリズムを通して、「周縁」社会が産業化・資本主義経済の世界システムの中に組み込まれていく過程について概観する。	同上	同上
11	エスニシティと社会運動	コロニアリズムの崩壊後、多くの新興独立国家が誕生したが、民族抗争と地域紛争が絶えず、西側諸国でも歴史に根ざす民族紛争が続いている。先住民の人権運動を軸とした新しい社会運動、ディアスポラ現象が創り出す新しいエスニシティ状況など、民族共生の課題について考察する。	同上	同上
12	越境の人類学 －トランスナショナリズムとグローバリズム－	ヒト・モノ・情報・メディアのトランスナショナルな流動化と文化的覇権競争を含む世界システムのポストモダン的状況によって特色づけられる現代人の文化環境について、ディアスポラ現象、文化のグローバル化とローカル化等の視点から検討する。	同上	同上
13	異文化接触と文化の生成 －地球時代の文化のダイナミズム－	現代の異文化接触と文化変化の諸相、とくに伝統文化と外来文化のせめぎ合い、ツーリズムと文化の生成、新しい文化生成のメカニズム、新しい人間類型の出現過程等について、文化人類学における文化変容理論の批判的検討をとおして考察を加える。	同上	同上
14	表出的文化の人類学	社会の諸制度と文化的諸価値の維持・強化・挑戦の表明装置としての表出的文化の構造的特質と諸側面（身体装飾、美術工芸などの視覚的芸術、神話・伝説・民話の語り、音楽・舞踊、演劇・スポーツ・祭礼等の演技・競技芸術など）について、現代的視点から考察する。	同上	同上
15	転換期の文化人類学の課題と展望 －応用人類学と人類学者の役割－	今日の人類が当面している最大の課題である自然との共生の問題について、応用人類学の新しい分野として注目されている開発人類学・環境人類学の成果を踏まえながら、開発に伴う文化の諸問題について概観するとともに、転換期の文化人類学の新たな課題について展望する。	同上	同上

＝ 世界の民族（’９８）＝（ＴＶ）

〔 主 任 講 師 ： 原 尻　英 樹（放送大学助教授）〕

全体のねらい

「世界の民族」は、文化人類学者を中心とした世界の諸「民族」の研究をする第一線の研究者によって制作される。学問の研究方法論としては、「民族」概念の再検討をねらいとしているが、放送授業の教育効果としては、「民族」の多様性のみならず、「民族」へのアプローチの多様性についての紹介も意図している。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「民族」へのアプローチ	この回では、これからはじまる各講義の全体的な紹介とともに、「民族」という概念の恣意性を明らかにする。この恣意的な概念の形成は近代と密接に関わっているので、　各講義の担当者のアプローチがこの基本的主題である　「『民族』形成と近代」へどのような回答を与えられるかを概観する。	原 尻 英 樹（放送大学助教授）	原 尻 英 樹（放送大学助教授）
2	ウチナー 沖縄へのこだわり ～大阪・大正区～	沖縄の近現代史の中からいくつかの歴史的事件や社会運動をとりあげ、そこで「同じ沖縄人（ウチナーンチュ）」という主張がなされていることの意味を、生活史にかかわらせながら考える。	冨 山 一 郎（大阪大学助教授）	冨 山 一 郎（大阪大学助教授）
3	「アイヌ」－その再認識	『アイヌ新法（仮称）』の制定運動に伴い、あたかも一民族としての「アイヌ民族」の歴史が形成されてきたかのような理解の仕方が広められた。しかし、「アイヌ」は言語上の共通性が認められるにせよ、生活様式についてみると地域差が非常に大きく、それがかつて一社会的集団を形成していたわけでもない。このような点を再検討することによって「アイヌ民族」と「和人」との二者対立的な歴史的理解の危険性を指摘し、誤った「アイヌ」観がつくられてきたことに警鐘を鳴らす。	河 野 本 道（北海道教育大学非常勤講師）	河 野 本 道（北海道教育大学非常勤講師）
4	国境をこえる「民族」 ～済州島人のネットワークコミュニティ～	済州島人のネットワークコミュニティの分析を通して、近代前の「共同体」アイデンティティ、済州島人アイデンティティ、それに近代国民アイデンティティの重層化の過程を明らかにする。この重層化の過程には日本による朝鮮の植民地化、それに「日本人」という言説の形成が関わっており、以上についての考察は個体・要素主義的な「アイデンティティ」形成論にはならない。	原 尻 英 樹	原 尻 英 樹
5	日 本 「 民 族 」	(1)Nationという概念の示す世界像と「民族」という訳語の持つ世界像のズレについて、(2)大和という世界認識と日本という世界認識の違い、(3)さまざまなイデオローグ達が創造した「『日本民族』の歴史」の虚構性について（中国の「皇帝」支配と日本の「天皇」支配の社会構造上の違い）、(4)理論的問題（「聖／俗」二分法的世界観の再検討、日本的二重聖性原理、「ケガレ」を巡る民族学の言説の持つ意味、あるいは学問の名による差別の隠蔽）、(5)結び（現代社会を支配している神話としてnationalism概念について）。	笠 井 正 弘（西日本短期大学教授）	笠 井 正 弘（西日本短期大学教授）
6	多 様 性 の 日 本	（日本国内の各回のまとめ） 「日本」の多様性について、これまでの各講師の講義を振り返り、各講師への質問とその応答から始まり、次にゲスト対談者とのトークにうつる。	原 尻 英 樹	原 尻 英 樹
7	近代メキシコ人の文化的自画像	1821年に独立し国民国家の建設に着手したメキシコは、どのような歴史意識のもとで自国文化の育成に努めてきたのか。近代メキシコの〈文化的自画像〉の生産と消費のプロセスを文教政策・造形芸術等の展開のなかに追跡し、〈メキシコ人である〉とは何かを考える。	落 合 一 泰（一橋大学教授）	落 合 一 泰（一橋大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	統合と分裂のヨーロッパ ～文化と民族の視点から～	ヨーロッパは、経済統合から社会・政治統合へと向かい、そのなかで文化も大きな影響をうけている。他方、こうした新たな文脈のなかで、民族マイノリティの主張やイスラムの覚醒が生じつつある。このような統合と分裂の二側面から、今日のヨーロッパの民族・文化状況を分析する。	梶田孝道（一橋大学教授）	梶田孝道（一橋大学教授）
9	中国の漢族 ～世界最大の「民族」とその内部的多様性～	中国漢民族の内部的多様性を、いくつかの具体的事例を通して考察し、フィールドワークの実践で今まで語られてきた「民族」と現実に生活する「民族」とのズレの意味を明らかにする。	瀬川昌久（東北大学教授）	瀬川昌久（東北大学教授）
10	東南アジアにおける民族の移動 ～ボルネオ島を中心として～	東南アジアの海域および島嶼世界は古くから人の移動のはげしい世界である。この移動は、今日でも国境を越えた広がりをもって持続している。本講義では、島嶼世界で最大のボルネオ島を舞台とする民族の移動と、それにともなう民族間の関係を探求する。	内堀基光（一橋大学教授）	内堀基光（一橋大学教授）
11	現代社会を生きる先住民 ～カナダ・イヌイット～	アザラシ猟を事例に、カナダ・イヌイットの社会における狩猟がもっている現在的な意義をとり上げる。その視点から、彼らの文化がどのように継承されているか、または変化しているかを考察して、現代社会に生きる先住民の実態に迫る。	スチュアート・ヘンリ（昭和女子大学教授）	スチュアート・ヘンリ（昭和女子大学教授）
12	島の歴史と海の歴史 ～ポリネシアの民族と文化～	南太平洋ポリネシアのハワイイ（「ハワイ」ではない）、ニュージーランド、タヒチ、クック諸島などを対象に伝統復興や主権回復を巡る動きについて述べ、閉鎖系としての島に生まれた「伝統文化」という語りと、海とカヌーで繋がれた開放系を生きる「ポリネシアン」としての名乗りの間に生じる文化的アイデンティティーの葛藤を考察する。	棚橋訓（慶應大学助教授）	棚橋訓（慶應大学助教授）
13	部族・宗派・民族 ～北スーダンの事例～	主にアラブの事例に基づき、近代におけるアラブ「民族」の生成。その中における部族（カビーラ）集団の位置を考える。またユダヤ教・キリスト教・イスラームなどの各宗派が「民族」のように扱われることを、近年のイスラーム主義の動向を絡めながら論じる。	大塚和夫（東京都立大学助教授）	大塚和夫（東京都立大学助教授）
14	民族紛争の深層 ～アフリカの場合～	アフリカでは現在民族紛争が激化しているが、実はこの紛争のもととなる「部族」の概念は、ヨーロッパ植民地支配者によってつくり出されたあるいは名づけられたものである。近代前のアフリカの人々のアイデンティティは浮遊する無定形のそれであり、現在の「部族」あるいは「民族」は植民地支配およびその後の国民国家形成のためにつくり出されたものである。以上の「アイデンティティ」の検討を通して、その多重的性格を浮きぼりにする。	松田素二（京都大学助教授）	松田素二（京都大学助教授）
15	「民族」再考	（最終回のまとめ） 日本国外についての各講義の講師への質問とその応答でそれらの全体的構成を明示し、ゲスト対談者とのトークを通して、「民族」へのアプローチをまとめる。	原尻英樹	原尻英樹

＝ 博物館概論（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：石森 秀三（国立民族学博物館教授）〕

全体のねらい

この講義のねらいは、世界と日本における具体的な事例にもとづいて、多様な博物館のあり方を紹介することによって、博物館に関する基礎的知識を概説することにある。とくに、現代社会における博物館の多様な展開を具体的に取り上げることによって、博物館が担う現代的役割を多面的に講義する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	博物館入門	現代世界において、博物館の多様化が急速に進みつつある。各種資料の収集・保管・展示・調査研究のあり方から、生涯学習や文化創造の拠点としての博物館の役割などを入門的に明らかにする。また、博物館関係法規や博物館倫理の問題についても概説する。	石森秀三（国立民族学博物館教授）	石森秀三（国立民族学博物館教授）
2	博物館の歴史	近代博物館の原型は17世紀のヨーロッパでエリートによって形づくられた。米国では、18世紀に大衆教育のために博物館づくりが進展した。日本では欧米博物館の影響を受けつつ、独自の発展を遂げてきた。博物館の歴史を通して、その役割の変遷を明らかにする。	同上	同上
3	自然と生態の博物館	地球の多様な自然と生態をテーマにした博物館は数多くある。自然界における動植物の生態などの展示を通して、自然との共生の重要性を学ぶことができる。具体的事例を通して、自然生態系博物館の多様な役割を明らかにする。	同上	同上
4	科学と技術の博物館	人類がうみだした科学技術をテーマにした博物館は数多くある。科学技術系の博物館では、科学技術の歴史の展示だけでなく、現代における科学技術を遊びながら学べる工夫もなされている。具体的事例を通して、科学技術系博物館の役割を明らかにする。	同上	同上
5	芸術の博物館	芸術をテーマにした博物館は多様である。美術館は、代表的な芸術系博物館の一つである。そのほか、演劇や演芸をテーマにした芸術系博物館もある。さらに、科学技術と芸術文化を融合させたメディア・アートを扱う博物館なども紹介する。	同上	同上
6	歴史の博物館	近年、日本では、歴史遺産の重要性がとみに高まっている。世界遺産の登録が相次ぐとともに、新しい歴史遺産の発掘が行われている。歴史をテーマにする博物館の役割を多面的に取り上げるとともに、歴史的追体験の場を提供する具体的事例を紹介する。	同上	同上
7	民族の博物館	欧米諸国では、世界の諸民族文化をテーマにした博物館が重要な役割を果たしてきた。日本における民族博物館の歴史は浅いが、民族問題がグローバルな課題になる中で、その重要性が増している。具体的事例を通して、民族博物館の役割を明らかにする。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	大学の博物館	欧米諸国では、大学附属の各種博物館が重要な役割を果たしている。米国では、1,158の大学のうち、526大学に博物館がある。それに対して、日本では大学附属博物館がいまだに未発達である。具体的事例を通して、大学博物館の役割を明らかにする。	石森秀三	石森秀三
9	企業の博物館	企業はその利益を社会に還元するために、さまざまな文化的貢献を果たしている。日本では現在、約400館の企業博物館が存在しており、社会的・文化的貢献をなしている。具体的な事例を通して、企業博物館が果たす多様な社会的役割を明らかにする。	同上	同上
10	途上国の博物館	近年、世界の数多くの開発途上国で博物館づくりが進められている。国家の歴史や諸民族の伝統文化を学ぶための教育施設だけでなく、新しい文化創造拠点としての役割も担っている。多様な役割を担う開発途上国の博物館の現状を紹介する。	同上	同上
11	エコミュージアム	欧米諸国では、1960年代からエコミュージアム（生活・環境博物館）という新しいタイプの博物館づくりが展開されてきた。1つの地域における人間と環境の関わりを一体的に表現する博物館をめざす「エコミュージアム」の役割を具体的に紹介する。	同上	同上
12	地域社会と博物館	日本では近年、地域社会の活性化を図るために、博物館の役割が見直されている。博物館は、地域文化の活性化だけでなく、観光客誘致による地域経済の活性化にも貢献している。具体的事例を通して、地域社会における博物館の役割を明らかにする。	同上	同上
13	生涯学習と博物館	欧米諸国では、博物館が生涯学習の場として機能している。子どものための博物館や美術館などにおける具体的事例を通して、生涯学習拠点としての博物館の役割を明らかにするとともに、日本における問題点を多面的に検討する。	同上	同上
14	文化創造と博物館	博物館は、各種資料の収集・保管・展示・調査研究だけを目的にした施設ではなく、新しい文化の創造拠点としても重要な役割を果たしている。国内外における具体的事例を通して、文化創造拠点としての博物館の役割を紹介する。	同上	同上
15	博物館の未来	情報通信やマルチメディアの高度な発展によって、世界的に博物館のあり方が大きく変貌しつつある。21世紀を視野に入れて、デジタルミュージアムなどの新しい博物館の動きを取り上げ、博物館の未来を展望する。合わせて、文明資本としての博物館の役割についても言及する。	同上	同上

＝ 博物館資料論（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：石森　秀三（国立民族学博物館教授）〕

全体のねらい

この講義のねらいは、世界と日本における具体的な事例にもとづいて、博物館資料の収集、整理保管、展示、調査研究などに関する理論や方法を多面的に紹介することにある。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	博物館資料の意義	博物館は、資料を収集保管し、展示して教育的配慮のもとに市民の利用に供し、あわせて資料に関する調査研究を行う機関である。そのような博物館の根幹をなす「資料」の意義や博物館資料のワイズユースなどについて概説を行う。	石森秀三（国立民族学博物館教授）	石森秀三（国立民族学博物館教授）
2	自然系資料の事例	各種の博物館資料のうち、人間を取り巻く自然界の天地万物に関する資料について、東京大学総合研究博物館における具体的な事例にもとづいて紹介する。	同上	同上
3	理工系資料の事例	各種の博物館資料のうち、科学と技術に関する資料について、米国のエクスプロラトリウムや英国の近代産業遺産などの具体的な事例にもとづいて紹介する。	同上	同上
4	人文系資料の事例	各種の博物館資料のうち、考古、歴史、民俗、芸術などに関する資料について、世界各地の美術館や歴史博物館などにおける具体的な事例にもとづいて紹介する。	同上	同上
5	民族資料の事例	各種の博物館資料のうち、世界の諸民族に関する資料について、スイスのバーゼル多文化博物館や米国のアク・チン・インディアンの博物館などにおける具体的な事例にもとづいて紹介する。	同上	同上
6	マルチメディア資料の事例	各種の博物館資料のうち、マルチメディアやデジタル・アーカイヴスに関する資料について、ドイツのカールスルーエにあるＺＫＭ（芸術メディア・テクノロジーセンター）などにおける具体的事例にもとづいてを紹介する。	同上	同上
7	博物館資料の整理と保管	博物館は、展示による普及教育、文化財の保全・保護、学術研究などのために資料の収集を行う。収集された資料は、分類・整理されてから保管される。資料収集の方法や資料保管の方法などについて概説を行う。	宇野文男（福井大学教授）	宇野文男（福井大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	博物館資料の情報化	博物館は、各種の資料を収集・保管するとともに、それらの資料を有効に活用するために情報化を進めている。具体的事例の紹介をとおして、博物館資料の情報化に関連する諸問題について概説する。	鈴村　明（国立民族学博物館情報管理施設専門官）	鈴村　明（国立民族学博物館情報管理施設専門官）
9	博物館資料の保存	博物館資料にはさまざまな種類のものがあるために、資料の性質によって保存の方法が異なる。博物館資料損壊の原因とその対応のあり方、資料保存の実際などについて、日本とフランスの事例を比較しながら紹介する。	園田直子（国立民族学博物館助教授）	園田直子（国立民族学博物館助教授）
10	博物館資料の修復	博物館資料は古い時代からつたわるものが多いために、修理・修復を必要としている。資料の修理・修復の目的や方法などについて、日本とフランスの具体的事例を比較しながら紹介する。	同上	同上
11	博物館における調査・研究	博物館は、資料の収集・保管、展示・教育などとともに資料の調査・研究という機能を有している。博物館における調査・研究の位置づけおよび調査・研究活動の具体的事例の紹介をとおして、博物館における調査・研究の重要性を概説する。	石森秀三	石森秀三
12	博物館における展示の形態と種類	博物館の多様化が進むなかで、博物館における展示の重要性が以前にもまして、問われるようになっている。博物館における展示の形態と種類について、具体的事例にもとづいて概説を行う。	宇治谷恵（国立民族学博物館情報管理施設専門員）	宇治谷恵（国立民族学博物館情報管理施設専門員）
13	博物館における展示計画	博物館における展示の実施にあたっては、周到な計画を必要としている。展示基本計画の策定から実施計画にいたるまでのプロセス、魅力ある展示と環境などについて、具体的事例にもとづいて概説を行う。	同上	同上
14	博物館における展示技術	博物館における展示の実施にあたっては、各種の展示技術を必要としている。展示の配置計画、動線計画、空間構成、展示のデザイン、展示備品など、博物館における展示技術の諸相を具体的事例にもとづいて紹介する。	同上	同上
15	博物館資料の未来	博物館の多様化が地球的な規模で進展するなかで、博物館資料についても、その収集・保管、展示・教育、調査・研究のあり方が大きく問われる時代になっている。貴重な文化資源としての博物館資料の未来について総括的に講義を行う。	石森秀三	石森秀三

＝ 博物館経営・情報論（’００）＝（R）

〔主任講師：石森　秀三（国立民族学博物館教授）〕

全体のねらい

この講義のねらいは、世界と日本の博物館における具体的な事例にもとづいて、博物館経営・博物館における教育普及活動、博物館における情報の意義とその利用方法などについて概説することにある。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ミュージアム・マネジメント入門	博物館の多様化が進展するなかで、博物館の財政制度、組織、人材配置、施設管理などについて、博物館経営の改革が求められている。博物館利用者に感動を与えるための経営手法であるミュージアム・マネジメントについて概説を行う。	石森秀三（国立民族学博物館教授）	石森秀三（国立民族学博物館教授）
2	博物館の組織と職員	博物館は単なる建物を指す施設ではなく、組織としての主体性をもって活動する機関である。博物館における諸活動を円滑に進めるための組織のあり方、人材配置のあり方、学芸員の役割などについて概説を行う。	同上	同上
3	博物館人材の養成	博物館は、館長を中心にして学芸員や事務系職員などからなっている。日本における学芸員の養成を中心にして、フランスや英国や米国などの各国の事例と比較することによって、博物館における人材養成について多面的に概説を行う。	同上	同上
4	博物館の行財政制度	博物館経営で最も重要なのは、博物館に関わる行財政制度である。博物館に関わる行政の役割、博物館の財政・予算、各種の事業資金などについて、具体的な事例にもとづいて概説を行う。	同上	同上
5	生涯学習と博物館教育	近年、生涯学習への関心が急速に高まっている。学校教育や社会教育などとの関連にもとづいて、博物館における生涯学習のあり方や博物館教育の意義について、具体的事例にもとづいて概説を行う。	宇治谷恵（国立民族学博物館情報管理施設専門員）	宇治谷恵（国立民族学博物館情報管理施設専門員）
6	博物館における教育プログラム	博物館は、生涯学習や学校教育の面で重要な役割を果たしている。博物館が実施している各種の教育プログラムを具体的事例にもとづいて紹介するとともに、博物館ボランティアの役割についても概説を行う。	同上	同上
7	博物館と利用者	博物館の多様化に伴って、利用者のあり方も多様化している。日本の博物館はこれまで利用者の立場で博物館が抱える諸問題を検討することが少なかった。博物館に対するイメージや期待や不満などについて、利用者の側から検討を加える。	諸岡博熊（中京女子大学客員教授）	諸岡博熊（中京女子大学客員教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ミュージアム・マーケティング	博物館は従来、公的な性格が強かったために、市場調査を行うことがほとんどなかった。近年、博物館においても運営の効率化が求められており、博物館をめぐるマーケティングが重要になっている。具体的事例にもとづいてミュージアム・マーケティングを紹介する。	諸岡博熊	諸岡博熊
9	博物館のサービス	博物館は、資料の収集、整理保管、展示、調査研究を行う機関であるが、それらに関して各種のサービスを利用者に提供している。博物館サービスの諸相について、具体的事例にもとづいて紹介する。	同上	同上
10	博物館施設の運営と管理	博物館は、展示場だけではなく、収蔵庫、研究室、図書室、ミュージアムショップ、ホールなど、さまざまな施設から成っている。危機管理の問題も含めて、博物館諸施設の運営・管理について概説を行う。	宇野文男（福井大学教授）	宇野文男（福井大学教授）
11	博物館の連携と国際協力	国際化の進展に伴って、博物館においても各種の国際協力や連携を図ることが求められている。国立民族学博物館における具体的事例を中心にしながら、博物館の国際協力・連携について概説を行う。	石森秀三	石森秀三
12	博物館における情報の意義	情報技術革命が進展する中で、「博物館資産としての情報」という考え方が重要になっている。博物館における情報の体系化、情報の質、メディアの多様化と情報など、博物館における情報の意義について、具体的な事例にもとづいて概説を行う。	鈴村明（国立民族学博物館情報管理施設専門官）	鈴村明（国立民族学博物館情報管理施設専門官）
13	博物館活動の情報化	博物館にはさまざまな情報が存在する。各種の博物館情報の収集、情報収集のメディア、情報化の推進、情報化の経費、情報化の基準、情報の保存とデジタル化、メディアの変化への対応など、博物館活動の情報化について、具体的事例にもとづいて紹介を行う。	同上	同上
14	情報の展示と情報サービス	近年、資料展示ともに、情報展示が重要になっている。またインターネットの活用、データベースの形成、情報ネットワークの構築、バリアフリーへの対応など、情報サービスの多様化が進展している。それらの諸問題を具体的事例で紹介する。	同上	同上
15	ミュージアム・マネジメントの未来	社会のニーズの多様化に伴って、博物館はさまざまな革新を行う必要に迫られている。博物館経営論および博物館情報論の成果をふまえつつ、今後のミュージアム・マネジメントに求められている重要な諸点について、総括的な講義を行う。	石森秀三	石森秀三

＝ 言語学（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：大江　孝男（東京外国語大学名誉教授）〕

全体のねらい

人間活動は言語による伝達活動によって組織され，社会的連帯を生み分業と協業を可能にする。どの社会でも言語の担う総体的な役割はほぼ同じである。伝達活動は内容を表現形式（言語）に変換し，表現形式によって諒解する。どのような構造をもち、どのようにして機能を果たすのか、考え方と研究方法の基礎について学ぶ。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	言語と言語学（一）言語学の研究対象	言語活動では、伝えたいと思う表現内容が発音行動を通じて音声に置き換えられて空中を伝わり、聴覚を刺激して理解される。発話行為を中心とするこの過程の中から研究対象を取り出して、その特質を考察し、研究分野について紹介する。	大江孝男（東京外国語大学名誉教授）	大江孝男（東京外国語大学名誉教授）
2	言語と言語活動	言語活動は、人間が伝達内容を他に理解させる活動である。表現と諒解は個人のレベルで別々に行われる心理活動であるにもかかわらず、共通の理解が成立する。言語が相互理解を媒介し得る機構とその機構が成立する理由とについて考察する。	同上	同上
3	言語と言語集団	伝達活動が効率よく成立するには言語の構造が等質的であるのが望ましいが、広がりをもつ社会では「ことば」の違いがみられるのが常識である。同じ社会の中で、違いの生ずる原因、方言の発生と共通語の成立について考える。	同上	同上
4	音声と音声記号	言語表現の外形である言語音声をどのようにして観察し記述するのか。音声の発音機構と聴覚印象との相互関係を考察し、実在の音声と可能な発音とについて正確に観察する方法と記録する方法とについて解説する。	同上	同上
5	世界と諸言語	地球上には何千という言語が話されておりよく知られてた言語はそのなかのごく少数である。世界の言語の分布をアジアから、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカ、オーストラリアへと、概観する。（巻末：世界の「言語分布地図」「共通語地図」）	同上	同上
6	言語の構造	音声と意味の結合した単位としての言語記号のもつ特質について考察する。音声面の構成単位、意味の面の特質、単語の機能、語順の役割などについて概観する。	同上	同上
7	音声と音韻（一）音素分析	音声資料から，記号の音形を構成する機能的単位である音素を抽出するための分析方法とその弁別素性をめぐって考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	音声と音韻（二）音節とプロソディー	音素が互いに結合して記号の音形を構成するには、各言語に特有の結合規則に従ってまず音節を構成し、音節が単位となって音形を構成する。音節を構成する音素の結合規則，音形を構成する音節連結に音調律動を与えるアクセントや声調の規則について考える。	大江孝男	大江孝男
9	形態構造（一）曲用と活用	動詞は活用するといい、名詞は曲用するというが、それぞれ、音形が一部は異なるが同じ形と意味を共有し形の違いが文中での機能の違いに並行的に対応してセットをなす単語の集合である。形の違いと機能の違いとの関係を追求する。	同上	同上
10	形態構造（二）派生と合成	構成成分として別の単語を内部にふくむ単語は意外に多い。構成は単語を土台に小形式との接合構造をなしているものと、単語同士の結合構造なすものとがある。このような単語の構造と構成について考察する。	同上	同上
11	統辞構造と統合型	単語が統合されて文の構成成分をなし、構成成分が統合されて文をつくる。統合される形式の文法的関係，機能，規則などを考察する。	同上	同上
12	文型と文構造	規則に従って統合された形式が発話されて文としての機能を果たす。文が連続してまとまった内容を表現する。文は、文全体に関わるイントネーションを持って発話され同じ構文でも意味が異なることがある。構文，イントネーションと文の種別について考察する。	同上	同上
13	言語の変化（一）比較方法の基礎	個人のレベルでみると安定している言語も長い期間をかけて変化し、いくつかの言語に分かれることもある。言語変化の原因について考察し、規則的な音変化のもつ意義について考える。	同上	同上
14	言語の変化（二）変遷の諸相	言語の変化は音変化だけではなく、形式の形はいろいろな要因によって変化する。いろいろな変化とその要因について考える。	同上	同上
15	言語と言語学（二）20世紀の言語学	言語学は、19世紀の歴史研究の発達を契機に方法論をもつ近代科学として発展し、今世紀にいたって構造体系の研究へと展開してきた。これらの言語研究の特徴と現在の研究の動向について概観する。	同上	同上

＝ ギリシャ・ローマ文学（’００）＝（R）

〔主任講師：逸身　喜一郎（東京大学教授）〕

全体のねらい

古典ギリシャ・ローマ文学の世界において、後代はつねに先行する作品の様式を規範と仰いだ。本講義では古典文学のうち散文ではなく韻文で書かれた主な作品を、時代順によらず分野（ジャンル）毎にたどりつつ紹介する。各ジャンルの特質を知れば作品の理解がいっそう深まるだろう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序論	古典古代は一千年以上にわたる。その間に社会の有様は著しく変化した。こうした歴史の簡単な把握と、韻文（詩）の定義、ギリシャ語・ラテン語の特徴、ジャンルとは、神話とは、など基礎知識を概説する。	逸身喜一郎（東京大学教授）	逸身喜一郎（東京大学教授）
2	エポス:叙事詩(1)	『イーリアス』は西洋最古の文学であるとともにその後の古典文学に絶大な影響を与えた。その構成と成立の問題を中心に、英雄叙事詩の特質、ならびに口誦叙事詩という概念について説明する。	同上	同上
3	エポス:叙事詩(2)	同じホメーロスの名で伝えられていても、『オデュッセイア』は物語の内容も構成も『イーリアス』と異なっている。両者の比較を通して英雄叙事詩の別モデルの有り様を考える。	同上	同上
4	エポス:叙事詩(3)	ローマ建国を描いたラテン語の叙事詩を作るにあたり、ウェルギリウスは『イーリアス』『オデュッセイア』双方をともども規範にすえた。ラテン文学の最高峰である『アエネーイス』には、ギリシャ文学の伝統とラテン文学の独自性との葛藤がうかがえる。	同上	同上
5	エポス:叙事詩(4)	偉大な作品の模倣と対決から新しい作品が生まれてくる。ホメーロス・ウェルギリウスとの対比により、アポッローニオス『アルゴー号冒険物語』オウィディウス『変身物語』ルーカーヌス『内乱記』の異質さを明らかにする。	同上	同上
6	エポス：教訓詩	英雄叙事詩だけがエポスではない。ヘーシオドスは世界の成り立ちを神々の系譜という形にし、かつ農夫の日々の努めを説いた。古典文学にはこうした様々な知識や知恵を披瀝する、一群の作品が脈々と続いている。	同上	同上
7	エポス：牧歌とエピュッリオン	大都会アレクサンドリアの発展は田園への憧れを生み出した。テオクリトスに始まり、ローマのウェルギリウスが一層洗練させた牧歌もまた、エポスの韻律であるヘクサメトロスで書かれている。あわせて「小さな物語詩」とでもいうべきエピュッリオンをあつかう。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	エレゲイア（1）	エレゲイアとは、エポスという本流に対する傍流として、古典文学を貫いて用いられた韻律である。アルキロコスとカッリマコスを重点において、この詩型の発展の歴史をたどる。	逸身喜一郎	逸身喜一郎
9	エレゲイア（2）	ラテン文学は恋愛詩という独自のジャンルをうちたてた。その韻律はエレゲイアであった。恋愛詩の特徴や背景を、その代表としてプロペルティウスを中心にして説明する。	同　上	同　上
10	抒情詩（1）	「抒情詩」と訳されることばは、元来、弦楽器リラの合わせて歌われた歌を意味した。サッフォー・アルカイオス・アナクレオーンは独唱詩の代表である。そこには個人の感性が、独自の言葉遣いで表されている。	同　上	同　上
11	抒情詩（2）	ギリシャの叙情詩はしばらく優れた後継者を生み出さなかったが、ホラーティウスはそれをラテン語世界に取り込むことに成功した。その歌の対象は幅広く、抒情詩という日本語の訳語はとりわけこの詩人には不適切である。	同　上	同　上
12	抒情詩（3）	オリンピック競技をはじめとする競技祝勝歌をピンダロスは作った。競技での優勝とは、はかなき存在である人間が、栄光の高みに到達する機会なのである。この世界観はホメーロスと悲劇との間をつなぐ。	同　上	同　上
13	演劇（1）	ギリシャ悲劇と喜劇は、アテナイのディオニューシア祭において催されるポリスをあげての行事であった。そのため特殊な約束事にいろいろ縛られている。それらの知識は、一見、普遍的内容をもつ演劇理解に必須である。	同　上	同　上
14	演劇（2）	いわゆる3大悲劇詩人（アイスキュロス・ソフォクレース・エウリーピデース）の特色を、具体的な作品に即してたどる。悲劇は英雄神話を題材に選ぶが、その扱いは詩人の裁量に委ねられていた。	同　上	同　上
15	演劇（3）	アリストファネースの想像力に満ちた突拍子もない喜劇は後継者をもたない。1世紀のちのメナンドロスの人情喜劇はプラウトゥスによってローマに移入され、ついにはヨーロッパ演劇の基礎となる。アリストファネースのおかしみについて説明する。	同　上	同　上

＝ イギリス文学（’９８）＝（R）

〔主任講師：高松　雄一（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

文学作品は、一方で神話伝説や幻想などの非日常的な世界を素材に取り入れるが、他方ではそれぞれの時代の風俗習慣や社会のあり方と密接に結びついている。信仰表明の場となることもある。イギリス文学の流れのなかから、各時代ごとにその具体的な現れをとりあげて考えたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	イギリス文学の流れ	序論として、イギリス民族と言語の成立や初期の文学のあり方など、基本的な問題について概観する。	高松雄一（東京大学名誉教授）	高松雄一（東京大学名誉教授）
2	ルネッサンス期の詩と散文	シドニーからシェイクスピアにいたるソネット集、スペンサーの寓意物語詩『妖精女王』、その他、牧歌物語、モア、ベーコンの散文などを中心に、イギリス・ルネッサンス期文学の特質を探る。	川西　進（フェリス女学院大学教授）	川西　進（フェリス女学院大学教授）
3	ルネッサンス期の演劇	シェイクスピアの演劇作品を中心に、エリザベス朝演劇からジェイムズ朝演劇への変化、ピューリタンによる劇場閉鎖から王政復古後の演劇の復活にいたる推移を、時代思潮の変遷と絡めて考察する。	同上	同上
4	宗教と革命と文学	ピューリタン革命から王政復古にいたる激動の時代における文学とキリスト教の係わりを、英訳聖書、ダン、ハーバートら形而上派詩人の宗教詩、ミルトンの叙事詩『楽園喪失』などを中心に検討する。	同上	同上
5	イギリス小説の成立	18世紀になると、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』スウィフトの『ガリヴァー旅行記』を先駆として、リチャードソン、フィールディング、スターンらが出現し、小説というジャンルが確立する。これらについて考察する。	海老根宏（東洋大学教授）	海老根宏（東洋大学教授）
6	ロマン主義の特質	18世紀末にイギリスのロマン主義運動が興る。ここではロマン主義想像力の基本的な特質をさぐり、その意義を考える。	高松雄一	高松雄一
7	18世紀詩人および前期ロマン主義詩人	18世紀の詩を概観し、さらにロマン主義詩人の第一世代に属するブレイク、ワーズワース、コールリッジらの作品をとりあげて、具体的に特徴を論ずる。	笠原順路（名星大学教授）	笠原順路（名星大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	後期ロマン主義詩人	ロマン主義詩人の第二世代のバイロン、シェリー、キーツらの作品をとりあげて、ロマン主義の変移をみる。	笠原順路	笠原順路
9	近代社会と小説	19世紀に入って、オースティン、およびヴィクトリア朝のブロンテ姉妹、ディケンズ、ジョージ・エリオットらによって、本格的なリアリズム小説が確立する。これについて考察する。	海老根宏	海老根宏
10	ヴィクトリア朝詩人	テニスン、アーノルド、ブラウニング、およびラファエル前派のロセッティなど、ロマン主義以後の詩人たちのあり方を見る。	笠原順路	笠原順路
11	唯美主義と世紀末	19世紀後半の批評家ラスキン、ペイター及びワイルドの立場を中心において、唯美主義と世紀末文学の関連を考察する。	富士川義之（駒澤大学教授）	富士川義之（駒澤大学教授）
12	イギリス小説の変貌	19世紀末から20世紀の、リアリズムからモダニズムへの橋渡し役となったハーディ、コンラッドらの意義を考察し、E.M.フォースター、ウルフ、D.H.ロレンス、ジョイスにいたる20世紀小説を論じる。	海老根宏	海老根宏
13	モダニズム文学の意味	1910年前後から、新しい技法による新しい文学の確立をめざす動きが現れ、やがて20世紀前半の文学の主流を占めるにいたる。ここではイェイツ、ジョイス、ウルフ、T.S.エリオットらを念頭におき、その全体的な特徴をさぐる。	高松雄一	高松雄一
14	1930～40年代の文学	モダニズム以後の文学の諸相を見る。30年代の社会派詩人として出発したオーデンら、ディラン・トマスなどの詩人や、グリーン、ウォー、オーウェルらの小説家の出現がある。	富士川義之	富士川義之
15	現代の文学	第二次大戦後から現代にいたるイギリス文学の状況を、とくに小説と詩を中心にして展望する。	同上	同上

＝　ドイツ文学（’９８）＝（R）

〔主任講師：神品　芳夫（明治大学教授）〕

全体のねらい

ドイツ文学は苛烈な歴史を生きた人間たちの真実の声の集合である。その観点に立ち、中世から現代までのドイツ文学の成果を、社会の流れとの相関関係に留意しながら、自由に語ることにしたい。各担当講師が受持つ３回のうち、２回は分担する時代の文学を概観し、１回は「特論」としてテーマを絞って問題を掘り下げたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	中世の文学	ゲルマン諸族の移動と神聖ローマ帝国の成立・分裂によってヨーロッパが生まれるが、ドイツではドイツ語そのものが成立してゆくと共に、教会主導のキリスト教文学、ゲルマンの伝統をひく英雄文学と、フランス渡りの宮廷文学とが展開してゆく。その諸相を紹介する。	松浦　純（東京大学教授）	松浦　純（東京大学教授）
2	宗教改革からバロック	活版印刷の発明のメディア革命としての意義は特に宗教改革期になって発揮されたが、なかでもルターの著作と聖書翻訳は新たな文学の基盤となる標準的なドイツ語をも準備した。その時代の文筆活動、続いて三十年戦争を経たバロック時代までの文学について概観する。	同　上	同　上
3	（特論） 知られざるルター	マルティン・ルターは宗教改革のリーダーとして、また聖書翻訳者として知られているが、その思想像は多分に図式化されている。時代背景を描きつつ、己と他者についての彼の思索がもっていた特質を考えてみたい。	同　上	同　上
4	ゲーテ時代の文学	ドイツ文学の隆昌期であるゲーテ時代とは、啓蒙主義と「若いドイツ」に前後を挟まれた時期に当たり、いわゆるシュトゥルム・ウント・ドラング、古典主義、ロマン主義を包括する。人間性の時代である十八世紀を起点として、その流れを追いつつ、古典文学の意義を問い直す。	木村直司（上智大学教授）	木村直司（上智大学教授）
5	ゲーテとロマン派	古典主義のあとにロマン主義が始まったわけではなく、両者はかなりの期間平行して進行した。初期ロマン派が活躍した時代はゲーテの長い生涯と重なり合い、ゲーテ自身にもそれら両面が認められる。現実的なものと理念的なものとの相互関係を中心に、両者の関わりについて解明したい。	同　上	同　上
6	（特論） ゲーテ像の変遷	ゲーテの特徴は、詩人から自然研究者、政治家にまで及ぶ多面性である。それはまた若いゲーテ・古典主義者・晩年のゲーテに分けられる。どれに焦点を合わせるかに従って多様なゲーテ像が生じてくることを示したい。ゲーテ像の変遷が十八世紀以降のドイツ精心史の反映であることにも注目したい。	同　上	同　上
7	後期ロマン派	ホフマン、アイヒェンドルフを中心に後期ロマン派の特性を分析し、さらにリュッケルト、ミュラーやハイネの詩、グリルパルツァーの演劇やウィーン民衆喜劇にも触れて、ロマン派の視野から十九世紀前半のドイツ文学の魅力を総括的に捉える。	光野正幸（武蔵大学教授）	光野正幸（武蔵大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	リアリズム文学	ゲーテの死からドイツの国家統一に至る時代の文学の主潮はリアリズムである。その中核をなすシュティフター、ケラー、シュトルム、ラーベらの小説手法を探るとともに、メーリケ、ドロステの詩、ビューヒナー、ヘッベルの演劇にも触れ、「詩的リアリズム」の文学の諸相を概観する。	光野正幸	光野正幸
9	（特論） ドイツ・オペラ文学	十九世紀におけるドイツ・オペラの自立の過程を、モーツァルト／サリエリの時代からヴェーバー／スポンティーニを経てヴァーグナーの「楽劇」、さらに二十世紀のリヒャルト・シュトラウスまで音声資料をまじえて辿り、「音楽と文学の結びつき」の文化史的文脈を明らかにする。	同上	同上
10	世紀転換期から表現主義	政治上ではヴィルヘルム２世の対外拡張政策と第一次世界大戦の時期。一方文化的には国際交流が進み、ドイツ文学が世界の流れに合流し、ホフマンスタール、マン、カフカらが輩出、二十世紀文学の視座を開いた。郷土文学とモデルネの文学の対立の構図を示したい。	神品芳夫（明治大学教授）	神品芳夫（明治大学教授）
11	亡命文学	1920年代に現代文学の基礎が築かれたあと、ナチの時代になって、ドイツ文学は決定的に国内と国外に分裂した。亡命文学者には大別して、ユダヤ系、左翼系、リベラル系があり、それぞれの例として S. ツヴァイク、ブレヒト、Th. マンの場合を見たい。国内亡命者にも言及する。	同上	同上
12	（特論） リルケと現代詩	ドイツ的土着性とは無縁のリルケは、ロシヤからスペインに至るヨーロッパの空間と詩伝統をふまえて多様な詩作を展開した。他方でブレヒトなどの社会派の詩が優位を占めるなか、リルケの詩がどのように受容されてきたかを考える。さらにドイツに独特の自然詩の系譜にも触れる。	同上	同上
13	第二次大戦後の文学	国土荒廃のなかでまず声を上げたボルヒェルトら戦中派の作品を紹介し、47年グループの成立事情を説明する。 Th. マンほか亡命作家の受容とともに、50年代におけるバッハマンやツェランの登場、そしてフリッシュとデュレンマットの仕事に触れる。	藤本淳雄（東京大学名誉教授）	藤本淳雄（東京大学名誉教授）
14	東西ドイツ並立の文学	帰国したブレヒトをはじめ社会主義の東ドイツ国家におけるさまざまな立場の作家の活動を紹介する一方、西でもエンツェンスベルガーやベル、グラス、さらに東から「移住」したヨーンゾンらの活躍、P・ヴァイスらによるユダヤ人問題との対決、東欧バルト海地域を舞台とするボブロフスキーの作品にも触れる。	同上	同上
15	（特論） 東西統一の前後	1968年の「学生の反乱」以降の社会状況を背景とするハントケ、ヴァルラフ、B. シュトラウスらの仕事と、東ドイツ末期の文学状況を概観したあと、近作『メーデイア』に至るCH. ヴォルクの仕事とヨーンゾンの大作『記念の日々』を考察したい。	同上	同上

＝フランスの文学（’９８）＝（R）

〔主任講師：渡邊 守章（放送大学副学長）〕
〔主任講師：塩川 徹也（東京大学教授）〕

全体のねらい

国民文学としてのフランス文学の成立は、17世紀の絶対王政の成立と密接に結びついている。フランス人と対等に話が出来るためには、17世紀以降の「古典的な文学」に、フランス人並に通じている必要があると語ったのは、ドイツの評論家クルチウスであった。それは、フランス語とフランス文化における文学の重要性を指摘したものであり、その事情は、現在でも基本的には変わっていない。この講義では、17世紀から現代までのフランス文学を、主としてジャンル毎に、その代表的な作家と作品について考えてみる。同時代の社会や文化との関わりを視野に入れておくことは言うまでもないが、ただ、日本では、フランスの歴史の基本的な様相も局面も、十分に知られているとは言いがたいので、その点にも配慮する。対象にするテクストは、原則として日本語訳のあるものを念頭におくが、特に韻文の場合は、原文を引用することもありうる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	総説	何故17世紀から現代か。「古典主義の時代」に何が起きたか。近代性の時代。17世紀と現代を通底するもの（制度と文学）。	渡邊守章（放送大学副学長） 塩川徹也（東京大学教授）	渡邊守章（放送大学副学長） 塩川徹也（東京大学教授）
2	古典主義時代の劇文学 (1)	文学言語の厳密化と洗練。ピエール・コルネイユとその時代。モリエールの喜劇。ラ・フォンテーヌあるいは寓話詩の劇場。	渡邊守章	渡邊守章
3	古典主義時代の劇文学 (2)	ラシーヌ、ボワロー、マリヴォー、ボーマルシェ、古典主義の頂点、ラシーヌ喜劇。喜劇の変質、マリヴォー喜劇。ディドロと市民劇（演劇美学の拡大・変貌）。	同上	同上
4	古典主義時代の小説	ジャンルとしての小説。デュルフェ『アストレ』、ラ・ファエット夫人『クレーヴの奥方』、プレヴォー『マノン・レスコー』、ラクロ『危険な関係』	塩川徹也	塩川徹也
5	モラリストの系譜	「モラリスト」とは何か。モンテーニュ。ラ・ロシュフーコー。パスカル。ラ・ブリュイエール。	同上	同上
6	「フィロゾフ」の文学	「フィロゾフ」とは何か。モンテスキュー。ヴォルテール。ルソー。ディドロ。	同上	同上
7	近代詩 (1)	ロマン派の詩と詩人（ベランジェ、ラマルチーヌ、ミュッセ、ヴィニー、ユゴー、ネルヴァル、ゴーチエ）	田村毅（東京大学教授）	田村毅（東京大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	近代詩 (2)	ボードレール。ヴェルレーヌ。ランボー。マラルメ。詩の危機。	渡邊守章 松浦寿輝（東京大学教授）	渡邊守章 松浦寿輝（東京大学教授）
9	近代小説 (1)	ロマン派からレアリスムへ（ノディエ、ネルヴァル、ユゴー、バルザック、スタンダール）	田村毅	田村毅
10	近代小説 (2)	レアリスム以降（メリメ、デュマ・フィス、フローベール、モーパッサン、ゾラ）	同上	同上
11	近代劇	ロマン派革命。同時代風俗劇あるいは近代劇の成立。世紀末のパラダイム（演劇における前衛の出現）	渡邊守章	渡邊守章
12	現代詩 －言語とイメージの冒険	アポリネール。ヴァレリー。『NRF』派とモダニズム。ダダからシュルレアリスムへ。ブルトン。シュルレアリスムの内と外。第二次対戦後の詩。	松浦寿輝 渡邊守章	松浦寿輝 渡邊守章
13	現代小説 －プルースト以後	プルースト。ジッド。セリーヌとマルロー。サルトルとカミュ。 映像への越境、あるいは文学の危機。	松浦寿輝	松浦寿輝
14	現代劇	演出家の世紀（アルトーの影）。演劇における前衛?（クローデルの演劇的宇宙）。「30年代演劇」とその系譜（ジロドゥーから実在主義演劇へ）。 演劇における前衛?（「不条理劇」以降）	渡邊守章	渡邊守章
15	思想と文学	危機と文学。構造主義の地平。文学とその外部。	渡邊守章 松浦寿輝	渡邊守章 松浦寿輝

＝仏教思想（'０１）＝（R）

〔主任講師：末木　文美士（東京大学教授）〕

全体のねらい

仏教は日本人にとって身近な宗教であるが、その思想となるとなかなか解りにくい。その理由の一つは、インドに発して以来、さまざまな文化圏で多様な展開を遂げ、焦点を絞りにくいことにある。ここでは、歴史的な事情も勘案しながら、日本という場を原点としてその思想を解体、再構成してみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	いまなぜ仏教か	仏教は古代のインドに発して、東南アジア・チベット・東アジアなどのさまざまな文化圏で多様に展開した。その多様な思想をどのような視点から見てゆくことができるのか。方法論的な問題を研究史を振り返りながら考察する。	末木文美士（東京大学教授）	末木文美士（東京大学教授）
2	歴史的概観	仏教思想史のさまざまな問題を見てゆくにあたって、一通りインド以来のさまざまな文化圏における仏教の歴史的展開を頭に入れておく必要がある。最近の研究に基づきながら、最低限必要な知識を概観する。	同上	同上
3	テキストの森	仏教の聖典は三蔵（経・律・論）とか大蔵経とか呼ばれて膨大な量にのぼる。また、その言語もパーリ語・サンスクリット語・チベット語・漢文など多様である。それらの成立や特徴、扱い方について論ずる。	同上	同上
4	解釈のパラダイム	膨大な仏典を整理し、体系化するために、教判と呼ばれる方法が工夫された。また、近代になると、大乗仏教はブッダの説でないとする大乗非仏説論などが現れ、議論を呼んだ。こうしたさまざまな仏典解釈の方法について考えてみる。	同上	同上
5	苦悩としての存在	ブッダの教説は人生を苦と見るところに出発点を持ち、その原理を求めて、無常・無我・縁起などの教説が展開された。原始仏教に由来しつつ、大乗にも生きているそれらの根本原理の意味を探る。	同上	同上
6	言語と存在	大乗仏教の一つの特徴は、存在の問題を考えるのに、言語論の立場から考察する点にあり、日常的言語の世界の無根拠性を鋭く突いた。その典型的な発想をインドの中観派の理論、及び中国の禅思想を中心に考察する。	同上	同上
7	象徴としての世界	日常言語を超えれば、そこには沈黙しかないのだろうか。果敢にもその恐るべき領域に踏み込み、世界を象徴として言語化したのが密教であった。マンダラとして展開される壮大な世界解釈の体系を読み解いてみる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	心の深層	大乗仏教における人間論は、心の理論として展開される。心を清浄なものと見る如来蔵系と、汚れたものと見る唯識系の思想があり、また、中国の天台では心を観察する止観と呼ばれる行法が展開した。これらの理論を考えてみる。	末木文美士	末木文美士
9	他者と関わる	内的な心の観察は独我論に陥りはしないか。他者はどのような形で必然性を持つのか。大乗における菩薩の理想は他者との関わりを我々に迫るものであり、その極限に『法華経』が位置する。他者論としての大乗の意味を考える。	同上	同上
10	コミュニティの形成	以上考察してきた原理論に対して、以下では実践思想を扱う。具体的な他者との共存はサンガ（僧伽）と呼ばれる共同体において実現される。その共同体を支える規律が戒律である。さまざまなサンガのあり方を比較検討する。	同上	同上
11	超脱の森	苦なる世界を超脱するためにさまざまな修行法が開発され、悟りに至る道筋が示された。それに対して、瞬時に悟りに至る密教の即身成仏や禅の頓悟も主張された。そもそも悟りとは何か、修行とは何か、考えてみたい。	同上	同上
12	来世と救済	自力の修行に対して、仏・菩薩の力に頼って救済を受けるという道も考えられた。特に来世における救済を説く浄土教（阿弥陀仏信仰）は東アジアで大きな勢力を得た。浄土経典から親鸞にまで至る思想の系譜を考える。	同上	同上
13	楽観論の陥穽	東アジアの仏教の大きな特徴は、我々に仏性（仏になる可能性）が内在すると考えるところにある。この思想はさらに発展して、本覚（我々は本来的に悟っている）という立場にまで至る。余りに楽観的なこのような思想傾向の問題点を考える。	同上	同上
14	差別と平等	仏教はすべての生命ある存在は平等に尊重されるべきであると説く。だが、同じ仏教がもう一方で社会的な差別を認め、むしろ差別を積極的に生み出してゆく一面も持った。差別の原理となる業と輪廻の思想などを取り上げる。	同上	同上
15	思想史の中の仏教	仏教はそれぞれの文化圏において、それぞれ土着の思想と交渉しつつ展開した。土着の思想から影響を受けた面も、逆に土着の思想が発展するのに寄与した面もある。仏教をより広い思想史の中でどう位置付けるか、最後に考えてみる。	同上	同上

＝現代の哲学（’０１）＝（R）

〔主任講師：渡邊　二郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

ここでは、現代の日本に生きる私たち自身の立場に立って、現代哲学の諸問題を、やさしく、その基本から考え直してみたい。初めに、東西の思想史の流れとその伝承を振り返ってみる。次に、現代哲学の主要な諸傾向を概観してみる。最後に、現代の哲学的問題を、科学、人間、倫理、芸術、宗教の五分野に即して考え直す。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	哲学の現在と日本	日本人は、東洋思想の伝統のなかで育ち、しかもいまやグローバルとなった世界文明のなかで、西洋哲学の考え方からも深く影響されている。その上、現代は科学技術の時代である。今日、人間はいかに生きるべきかという人生観・世界観の根本知が必要である。	渡邊　二郎（放送大学教授）	渡邊　二郎（放送大学教授）
2	東洋思想と西洋哲学	東洋の思想には、仏教、儒教、道教などの人生の知恵がある。ただし、大事なのは、東洋思想は、科学を生まなかった点である。科学は、西洋哲学のなかから、西洋17世紀に生まれた。そうした西洋哲学の特色と、その歴史的歩みの全体をよく心得ねばならない。	同　上	同　上
3	古代中世哲学と現代	西洋古代の哲学の大枠をまず省みる。それは、古い時代の思想だが、現代性を持っている。次に、西洋中世の哲学の大筋を振り返る。とくに普遍論争に注意を払う。いずれにしても、古代ヘレニズムと中世ヘブライズムの思想が二千年にわたって存在していた。	同　上	同　上
4	近代哲学の登場とうねり	西洋の近代哲学は、ルネサンスの哲学とともに始まる。豊かな現実を前にした人間中心主義の思想、ヒューマニズムの思想の開始である。そのあと、17世紀に近代科学が登場する点が大切である。そして、イギリス経験論と大陸合理論の二潮流が台頭する。	同　上	同　上
5	科学的認識と人間的生き方（その１）	近代の経験論と合理論の二潮流は、総合されねばならない。それをなし遂げたのが、18世紀後半にドイツに出た大哲学者カントである。カントは、科学的認識を基礎づけるとともに、その限界をも明らかにした。そのカントの理論哲学の基本をやさしく捉え直す。	同　上	同　上
6	科学的認識と人間的生き方（その２）	カントは、理論哲学をも越えて、実践哲学を樹立した。ここでカントは、人間の人格性の尊厳を基礎づけたのである。自然の衝動を抑え、理性の道徳法則に従って、自由において、自律した人格として行為してこそ、ほんとうの人間性が成り立つ。この点を詳説する。	同　上	同　上
7	ドイツ観念論から現代哲学の胎動へ	カントのあと、ドイツ観念論の哲学が登場する。フィヒテ、シェリング、ヘーゲルらがその代表である。ここに、カントで始まった自由の理想主義が大規模に展開されて、近代哲学の完成が打ち立てられる。ヘーゲルの急逝（1831年）以後に現代哲学が始まる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	現代哲学の生成（その1）	19世紀の中葉に、ヘーゲル左派からマルクス主義が現れ、フランスにコントの実証主義が登場し、デンマークにキルケゴールが出て、実存主義の萌芽が形成される。19世紀後半には、種々の思想が出るが、新カント学派とディルタイにおける歴史科学の問題を見る。	渡邊　二郎	渡邊　二郎
9	現代哲学の生成（その2）	19世紀後半から20世紀にかけて、とくに重要なのは、まず生の哲学である。ショーペンハウアーの意志の哲学を承けて、ニーチェの思想が出て、ニヒリズムの状況のなかでの人生の肯定を打ち出す。そのあと現象学を介して、実存哲学が出現する過程を追う。	同　上	同　上
10	現代哲学の生成（その3）	現象学の流れのなかから、ハイデッガーの哲学が現れる。その『存在と時間』の基本思想と、後期思想の特色を振り返る。一方、英米哲学には、早くからプラグマティズムの思想があり、20世紀に成立する論理実証主義や分析哲学の特色を省みる。	同　上	同　上
11	科学技術と自然および歴史の問題	さて、これ以後、現代哲学の主要問題を横断的に取り上げる。まず、科学的認識の本質と限界について、科学哲学的考察を加える。技術の問題にも眼を向けたあと、自然についてどう考えるべきかを省みる。そのあとで、歴史の流れとその意味について考察を企てる。	同　上	同　上
12	人間の本質論と自己の問題	歴史のなかに生きる人間とは何かという問題意識から、人間の本質論が浮かび上がってくる。しかし、ここで何よりも肝要なのは、たんに客観的な人間の規定ではなく、そのあり方において、いかに自分自身を形成すべきかと態度決定をする自己の実存の問題である。	同　上	同　上
13	他者との共同存在と倫理の問題	その自己の実存の問題を考えるとき、同時に、他者とともに生きる人間の共同存在の場面が、問題性をはらんで登場してくる。現代には、さまざまな他者論がある。それらを振り返ったあと、共同存在における倫理の問題、とりわけ善と悪の問題に考察を加える。	同　上	同　上
14	美的情念と芸術の問題	人間は、知性のみならず、情意を持つ。とりわけ、意志とも連動した感情の問題は、人間にとって大きな意味を持つ。情意の充足は人間の幸福と結びついている。とくに美的情念とその感動は、人間の心を震わせる。美の本質や、自然美、さらには芸術の意義を見直す。	同　上	同　上
15	運命の力と生存の意義の問題	人間は、人生の途上で、苦悩に見舞われ、挫折にみちた人生行路を歩む。人生のすべては見通せず、非力な自己を越えた運命の力に人間は勝てない。こうした自己を越えたものを思うところに、宗教的観念の登場する根源がある。そこでは生存の意義が問題になる。	同　上	同　上

＝ 日本語の歴史（’０１）＝（R）

〔主任講師：坂梨　隆三（東京大学教授）〕
〔主任講師：月本　雅幸（東京大学助教授）〕

全体のねらい

古代から現在に到る日本語の変遷の実態を明らかにし、過去の日本語に対する基本的な知識と理解を与えることを目的とする。そして現在の日本語の諸問題や広く日本文化全体の理解にも資するように配慮する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	漢字の移入	上代の日本に漢字が伝わることによって、初めて日本語を文字によって記録することが可能になった。漢字移入の時期・実態・影響について実例を挙げながら述べ、併せて他の言語の文字を日本語に適用する際の問題点についても考える。	杉浦　克己（放送大学助教授）	杉浦　克己（放送大学助教授）
2	奈良時代の日本語音韻・語彙・文体	奈良時代には中国の影響を受けて文化が発展し、『万葉集』所収の歌が詠まれ、また『古事記』『日本書紀』などの文献が編まれるようになる。これらの文献から奈良時代の日本語の姿を見ると、そこには後世と大きく異なった点があることが分かる。音韻などについてそれを考える。	同　上	同　上
3	奈良時代の日本語文法	奈良時代の日本語の文法体系は平安時代のものとは大きく異なっており、形容詞の活用など、まだ十分に発達していないものもあった。実例と共にその実態を概観する。	同　上	同　上
4	平安時代の日本語文字・音韻	平安時代に入ると次々に日本語の歴史にとって重要な変化が発生する。平仮名・片仮名の発生がその一つであり、また種々の音韻変化は表記の多様性をもたらして仮名遣いの問題が発生する。これらについて考える。	月本　雅幸（東京大学助教授）	月本　雅幸（東京大学助教授）
5	平安時代の日本語語彙・文体	平安時代には奈良時代と比べると和語による表現が多彩になり、漢語も急速に浸透して行った。また、平仮名・片仮名による新しい文体が作り出され、多様な文体によって多くの文章が書かれるようになった。そのあり方を概観する。	同　上	同　上
6	平安時代の日本語文法	平安時代には形容詞の活用の完成、助動詞の発達など文法上の重要な変化が起こった。長く後世から規範とされた平安時代語の文法の特徴を明らかにする。また、高度に発達した敬語についても考える。	近藤　泰弘（青山学院大学教授）	近藤　泰弘（青山学院大学教授）
7	鎌倉時代の日本語文字・音韻・語彙・文体	鎌倉時代には貴族中心の時代から武士の時代となって、言葉の上でも大きな変化が生ずる。和漢混淆文が盛んに行われ、新しい語形の登場、漢字音の日本語化などが顕著であり、これについて見て行くことにする。	月本　雅幸	月本　雅幸

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	鎌倉時代の日本語 文法	文法事項においても鎌倉時代の言葉は平安時代のものから大きく変化しつつあった。終止形と連体形の合一化、係り結びの混乱などがそれである。また敬語においても「候ふ」の発達などが見られる。これらの変化を論ずる。	近藤　泰弘	近藤　泰弘
9	室町時代の日本語 文字・音韻・語彙・文体	室町時代には「抄物」や「キリシタン資料」と呼ばれる資料があり、当時の口頭語の姿をよく記録している。これらの資料を見ながら当時の発音の状況を初め、室町時代の日本語の実態を概観する。	坂梨　隆三（東京大学教授）	坂梨　隆三（東京大学教授）
10	室町時代の日本語 文法	室町時代語はますます中世語としての性格を強め、係り結びの衰退、可能動詞の発生、各種助動詞の消長など、重要な変化が次々に起こって江戸時代の言葉への橋渡しをしている。これらの諸相について述べる。	近藤　泰弘	近藤　泰弘
11	江戸時代前期の日本語	江戸時代の日本語は、上方語と江戸語という方言差、武士と町人という階級差など、種々の対立によって特徴付けられる。江戸時代前期の文化の中心であった上方の言葉について、音韻・文法など種々の面から見て行く。	坂梨　隆三	坂梨　隆三
12	江戸時代後期の日本語	１８世紀も後半になると、文化の中心は江戸に移り、文学作品である「洒落本」「滑稽本」には江戸の言葉が生き生きと記録されている。ここに見られる江戸語のありさまを概観する。	同　上	同　上
13	明治時代以後の日本語 文字・音韻	明治時代になると、日本語を書き表すための文字についての議論が起こり、それはやがて漢字制限へと向かうこととなる。また、急速に入ってきた外国語の影響でそれまでの日本語にはなかった音節も使用されるようになった。これらについて論ずる。	鈴木　英夫（白百合女子大学教授）	鈴木　英夫（白百合女子大学教授）
14	明治時代以後の日本語 語彙・文体	明治時代には西洋から大量の文物が流入し、それらの概念を日本語で表すための翻訳語（新漢語）が作られた。また、話し言葉を基本とした言文一致の口語体が成立した。このような大きな変化の跡をたどって行く。	同　上	同　上
15	明治時代以後の日本語 文法	明治時代以後の文法体系は基本的には前代のものを引き継いでいるが、それでも種々の面で変化が数多く見られ、それは現在の我々が明治の文章を読む際にも感じられることである。この変化を実例と共に概観する。	同　上	同　上

＝ 平安朝の文学（’０１）＝（R）

〔主任講師：小町谷　照彦（東京経済大学教授）〕
〔主任講師：鈴木　日出男（成蹊大学教授）〕

全体のねらい

平安朝の文学とは、平安京開都（794年）から鎌倉幕府成立（1192年）以前までの、約400年間に及ぶ期間の文学のことである。ここには、漢詩文・和歌・物語・日記文学・説話など、多岐にわたる文学形態を通してきわめて豊穣な文学が出来ました。これらの特徴を、とりわけ重要な作品を通して、具体的に考えようとする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	唐風から国風へ	平安時代初頭、人々は中国的な文化に徹底的になじむところから、やがて自国の文化を導き出すようになる。そのような唐風から国風への転換期に、仮名文字の発明・和歌の再興・物語文学の成立などの文学史上の諸問題を考える。	鈴木日出男（成蹊大学教授）	鈴木日出男（成蹊大学教授）
2	菅原道真とその周辺	歴史の転換期と目される九世紀末、すぐれる漢詩を作りあげた菅原道真の詩と思想について考える。また彼は死後、天神信仰としても民衆から支持されることになるが、それをも視野におさめながら、文化史上の道真の位相を明らかにする。	藤原　克巳（東京大学助教授）	藤原　克巳（東京大学助教授）
3	『古今集』の成立	十世紀初頭、最初の勅撰和歌集として成立した『古今集』は、王朝和歌の規範的な位置を占めるようになる。ここでは、「心」と「詞」の調和が重んじられているが、和歌の表現を解析しながら、その新しい詩としての和歌の本性をを明らかにする。	小町谷照彦（東京経済大学教授）	小町谷照彦（東京経済大学教授）
4	『竹取物語』と『伊勢物語』	十世紀初頭、文学史上はじめて、仮名散文によってつづられる物語文学が登場する。これは、平安朝文化を特徴づける重要な文学形態であるともいわれる。ここでは、その最初期の作品である『竹取物語』『伊勢物語』を通して、物語文学の本質を考える。	鈴木日出男	鈴木日出男
5	文人たちの文学	十世紀ごろから、詩文のすぐれた教養をもって独自な人生を生きようとする個性が多く輩出する。文人的ともいわれるこれらの人々は、漢詩はもとより和歌・物語の制作にも手を染めた。十世紀末のすぐれた作品『うつぼ物語』をも視野に含め、彼らの活躍を考える。	藤原　克巳	藤原　克巳
6	日記文学の成立とその系譜	十世紀はじめに成立した紀貫之の『土佐日記』は、文学史上に日記文学という新しい形態を生み出した。そして十世紀末の『蜻蛉日記』以後、女性によって多くの作品が書かれるようになる。日記文学とは何かを考えながら、その系譜をたどってみる。	小町谷照彦	小町谷照彦
7	女流文学の隆盛	『古今集』時代の小野小町・伊勢など、いわゆる女流歌人の登場以来、女性たちが文学制作の重要な担い手になる。そして彼女たちは、和歌のみならず、日記文学や物語文学の分野でもすぐれた活動をみせる。そのような女流文学の本質を、さまざまな側面から考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	『枕草子』の世界	十一世紀初頭、清少納言によって書かれた『枕草子』は、今日、随筆文学と呼ばれている。しかし、この時代には類例の作品は前にも後にもなく、孤立する存在である。王朝女流文学として『源氏』と並び称されるこの作品について、その独自な文学世界を考える。	藤原　克巳	藤原　克巳
9	『源氏物語』の世界	十一世紀初頭に紫式部によって書かれた『源氏物語』は、物語文学の最高傑作であるばかりでなく、日本文学史上屹立する存在である。それがいかに驚異的な作品であるかを、物語の構造や作中人物のあり方などを解析しながら考え、その本質に迫る。	同　上	同　上
10	和歌と物語	和歌という文学形態は、それ自体のみならず、多様な文学形態と深い関わりをもつ。とりわけ物語文学にとって和歌は必須の要件となっている。和歌とは何か、物語とは何かを考えるためにも、この課題は重要である。この問題を通して、平安朝文学の本質に迫る。	小町谷照彦	小町谷照彦
11	和歌文学の新風	十一世紀後半の『後拾遺集』の時代が、和歌史の転換期とされる。和泉式部の斬新な歌風が高く評価され直すのもそのころである。以後、次代の『新古今集』の時代に向かって胎動する和歌史の動向をとらえ、注目すべき歌人たちやその述作に注目する。	同　上	同　上
12	『狭衣物語』と『夜の寝覚』	『源氏物語』以後も物語が盛んに作られ、その伝統は鎌倉時代にまで続く。そうした平安朝後期以後の物語はおおむね『源氏物語』の影響下にあるところから源氏亜流の物語とみられがちだが、その中で卓越した二作品をとりあげ、その物語としての魅力を考える。	同　上	同　上
13	歴史と歴史物語	平安時代のはじめ六国史と総称される官制の国史が編纂されたが、やがてその伝統も絶えた。そこで制作されたのが、貴族の家々で記される記録の類であり、また十一世紀後半には歴史物語という新しい文学形態も成立する。こうした述作を通して、歴史意識の問題を考える。	藤原　克巳	藤原　克巳
14	説話文学の展開	平安朝初頭、仏教説話集として『日本霊異記』が編まれ、以後、仏教の布教活動との関係などから多くの説話集が成立した。なかでも後期の『今昔物語集』はさまざまな階層にわたる人間の生き方を描き、中世的なるものをも含んでいる点で注目される。これを考える。	鈴木日出男	鈴木日出男
15	歌謡の諸相	宮廷の儀礼や宴と深く関わりながら、神楽歌・催馬楽・今様など、多様な宮廷歌謡が出来した。それらのなかには、地方的・庶民的なるものを汲みあげたものも少なくない。末期の『梁塵秘抄』には、中世的なるものも含まれている。そうした歌謡の多様性を考える。	同　上	同　上

＝近代の日本文学 （’０１）＝（R）

〔主任講師：野山 嘉正（放送大学教授）〕
〔主任講師：安藤 宏（東京大学助教授）〕

全体のねらい
明治期から現代に至る近代の日本文学の全体像を描くのがねらいである。通常の文学史の枠に必ずしもとらわれることなく叙述し、主としてジャンル別に流れを辿り、さらに、相互の関連を意識しつつ考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	はじめに	本講義の目的と方法について述べる。年代順に整理せずにジャンル別に構想したことの説明から始めて、全体の配置を紹介する。最後に近代文学とは何であったのかを考えるのが目的であることを明らかにする。	野山 嘉正（放送大学教授）	野山 嘉正（放送大学教授）
2	詩歌Ⅰ 詩歌の新時代	詩歌における旧時代から新時代への変化をと叙述し、漢詩・和歌・俳諧が漢詩・新体詩・短歌・俳句へと姿を変える様相を描写する。こういう推移の過程から、日本の近代文学の方向が規定されることを論ずる。	同上	同上
3	詩歌Ⅱ 口語詩の確立と短歌・俳句	明治末期から大正期・昭和期戦前における、口語詩の確立と短歌・俳句の変貌を、それぞれのジャンルごとに素描しつつ、詩歌としての文学状況を把握する。	同上	同上
4	詩歌Ⅲ 戦後詩歌へ	昭和十年代の、いわゆる戦時下の詩歌のありかたから、敗戦による反省と回生をまず総括する。次いで第二芸術論による打撃からの短歌・俳句の立ち直りの過程を辿り、現代詩歌考察の手がかりを提示する。	同上	同上
5	小説Ⅰ 文明開化と「文学の変容」	西洋文明の移入、言文一致運動の動向、メディアや出版形態の変化などに留意しつつ、現在「小説」と名付けられているジャンルがどのように成立したのかについて考察する。明治の初頭から、二十年代の尾崎紅葉、幸田露伴までを中心に扱う。	安藤 宏（東京大学助教授）	安藤 宏（東京大学助教授）
6	小説Ⅱ 日清、日露戦争期の文学	日清、日露戦争期にあって、ナショナリズムの台頭、浪漫主義的な傾向、社会の現実を直視して行く傾向が、それぞれ小説にどのような形で表れてくるかを考察する。樋口一葉、国木田独歩、泉鏡花らを中心に、明治二十年代、三十年代を扱う。	同上	同上
7	小説Ⅲ 自然主義文学と漱石・鷗外	明治二十年代から四十年代にかけて、西洋の自然主義文学がそのような形で受容されたのを、島崎藤村、田山花袋を中心に考察する。これらに関連して、「写生文」の動向、大正初頭にかけての夏目漱石、森鷗外の活動状況について考察する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	小説Ⅳ 大正文壇の成立	明治の末期、反自然主義的な文学動向が表れ、それがどのように大正文壇を形成して行くかについて考察する。大逆事件の影響、永井荷風、谷崎潤一郎ら耽美派の動向、白樺派の活動、芥川龍之介のデビューなどを扱う。	安藤　宏	安藤　宏
9	小説Ⅴ マルキシズムとモダニズム	大正後半から昭和初頭にかけての状況を、ソビエト文化とアメリカ文化の受容に注視しつつ考察する。心境小説の成立、関東大震災の影響、メディアの変容と大衆文学の成立、新感覚派の文学運動、プロレタリア文学の展開などを扱う。	同　上	同　上
10	小説Ⅵ 第二次世界大戦と文学	モダニズム文学の消長、転向文学、昭和十年前後の「文芸復興」などについて触れた上で、第二次世界大戦との関わりを、ナショナリズム、ファシズムの日本的な形態の特色、アジアの中の日本文学、といった観点から考察する。	同　上	同　上
11	小説Ⅶ 戦後文学の展開	昭和二十年代から三十年代にかけての文学状況を、「無頼派」の作家たち、第一次戦後派の動向、「第三の新人」たちの作風などについて叙述することから開始する。三十年代以後の展開も流れとして解明し、文学にとって「戦後」とは何であったのかを考える。	同　上	同　上
12	演劇Ⅰ 旧劇から新劇へ	近世演劇から近代演劇の発生への過程を辿り、大正期に至る多彩な演劇運動の特質を解明する。さまざまな層位の活動を、文学と演劇との関連をも包摂しつつ、近代における演劇全体の様態を展望する。	林　廣親（成蹊大学教授）	林　廣親（成蹊大学教授）
13	演劇Ⅱ 戦前から戦後へ	思想運動としての演劇が盛んであった、昭和期戦前から戦後にかけての、新劇の流れを辿り、さらに戦後社会の発展にともなう演劇状況全体の推移を描写し、文化論への展望をも開く。	同　上	同　上
14	評論Ⅰ 近代批評の成立	西洋文化の移入と文学の内外についての自覚が深い関係にあることから説き起こし、坪内逍遙・森鷗外らの立場を中心に考察する。これが昭和初期に至る西洋文学研究の進展につれて変化していくさまを叙述する。	野山　嘉正	野山　嘉正
15	評論Ⅱ 近代批評の展開	小林秀雄の位置から戦後批評に至る流れを全体として把握し、その後の変質についても素描を試みる。昭和十年代の古典復興が文壇や学界を支配したさまや、その戦後への影響をも論じ、近代文学の全体像への基礎を提示する。	同　上	同　上

＝ 中国明清時代の文学（’０１）＝（R）

〔主任講師：大木　康（東京大学助教授）〕

全体のねらい

この講義では、中国の明・清両代の文学について、その中国文学史上の特色を概観し、個々の代表的作品をとりあげてその魅力を探ってみたい。あわせて、日本文学への影響についても考えたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	明清の時代とその文学的特徴	まずは背景となる明（1368－1644）および清（1644－1911）の時代の状況について概観し、多様なジャンル、数多くの作者・作品、作品のヴォリュームなどの点からその文学的特徴を概観する。	大木　康（東京大学助教授）	大木　康（東京大学助教授）
2	明代の詩と詩論（1）－擬古主義の流れ	今日の目から見れば、明代には必ずしも唐代の李白、杜甫に匹敵するような作者はいないが、この時代は文学理論の時代といってもよく、さまざまな主張が現れた。まずは明代中期に一世を風靡した擬古流（古文辞派）について述べる。	同　上	同　上
3	明代の詩と詩論（2）－反擬古主義	明代の後期に至って、擬古派に反対の主張を唱えるグループが現れた。この講義では、その中から袁宏道らの公安派を中心に考える。彼らの主張はまた、明一代を代表する文学ジャンルである通俗小説の成立にも関連している。	同　上	同　上
4	明代の小説（1）－『三国志演義』	明代に完成した白話小説の代表的作品の一つ、『三国志演義』について紹介する。ここでは白話小説ジャンルの源流である宋代の「説話（講談）」、元代の先駆的作品など、主としてそのジャンルの前史について考える。	同　上	同　上
5	明代の小説（2）－『水滸伝』	日本でもよく知られる白話小説の一つ、『水滸伝』は、明代末期の人々にとりわけ好まれた作品である。アウトローの世界を描いたこの作品のどこが当時の人々の心をとらえたのか、李卓吾や金聖歎などによる批評を材料にして考えてみたい。	同　上	同　上
6	明代の小説（3）－『金瓶梅』	『金瓶梅』は、いくつかの意味において、中国の通俗小説の一大転換点に位置する作品である。人々の日常生活を微細に描き、人間の欲望を描き出したこの作品について考える。作者や成立事情についても解説する。	同　上	同　上
7	明代の戯曲－湯顕祖の『牡丹亭還魂記』	多様なジャンルの一つとして明代にたいへん盛んだったのが、戯曲である。その中から、明代の末期における元曲『西廂記』の流行現象、そして当時の作品、湯顕祖の『牡丹亭還魂記』を取り上げて考えてみたい。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	馮夢龍と通俗小説	従来は俗なるものとして軽視されていた通俗小説が、なぜこの明代の末期になって大量に刊行されるようになったのか。こうした疑問に、当時の通俗文学の旗手とされる馮夢龍という人物にスポットをあてて考えてみたい。まずは主として精神的背景について。	大木　康	大木　康
9	馮夢龍の出版活動	馮夢龍は、幅広いジャンルにわたる多くの著作を残しているが、当時の出版業との密接な関係がその活動を解明するための一つのカギになる。前回に引き続いて、馮夢龍の生涯を概観し、当時の文学者をとりまく状況について考えてみたい。	同　上	同　上
10	清代の詩と詞	清の時代にあっても、やはり文学の中心は詩文であった。銭謙益、呉偉業、王士禛などの詩人の作品を取り上げて鑑賞する。明から清への時代の変化、また清代に盛んに作られた詞についても論じたい。	同　上	同　上
11	清代の戯曲 －『桃花扇』と『長生殿』	清の時代を代表する戯曲の二作品、『桃花扇』と『長生殿』を紹介する。とりわけ『桃花扇』は明末清初の歴史に取材した歴史物の戯曲である。この作品にこめられた意義などについて考える。	同　上	同　上
12	清代の小説（1） －蒲松齢と『聊斎志異』	怪異小説集として蒲松齢の『聊斎志異』は名高い。蒲松齢は当時の官僚登用試験である科挙に落第を続けた。その不平のはけ口がこうした怪異の話を聞き集め、書きつづることだった。その生涯と作品について考える。	同　上	同　上
13	清代の小説（2） －呉敬梓と『儒林外史』	『儒林外史』は科挙制度を批判した作品としてよく知られる。そこには当時のあらゆる種類の知識人の生態が生き生きと描かれている。呉敬梓はなぜこうした作品を著すにいたったのであろうか。その生涯と作品を概観する。	同　上	同　上
14	清代の小説（3） －曹雪芹と『紅楼夢』	わが国の『源氏物語』にも比せられる長編の恋愛小説が『紅楼夢』である。その作品について概観する。この作品がなぜ生まれたか、それは作者曹雪芹の悲劇的な生涯とも密接に関わっている。	同　上	同　上
15	明清の文学と日本	明清時代の文学作品は、室町から江戸にかけての日本、とりわけ江戸時代の文学に大きな影響を与えている。明清時代の中国文学がわが国の文学作品にどのような影響を与えたかについて考えてみたい。	同　上	同　上

＝古代日本の歴史（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：佐藤　信（東京大学教授）〕

全体のねらい

日本の古代史像は、最近の発掘調査成果をふくむ様々な新資料の出現によって豊かになりつつある。また国際関係、各地域の歴史や古代都市像などの解明が進み、一元的は古代国家中心の史料は見直されつつある。こうした研究動向に焦点をあてながら、あたらしい古代史をたどってみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	あたらしい古代史	文献史料や出土文字史料その他の古代史が取り扱う様々な歴史資料を紹介し、学際的な視野の必要性を提示するとともに、中央と地方の関係、国際関係、古代都市像などをめぐる古代史研究の新動向を整理する。	佐藤　信（東京大学教授）	佐藤　信（東京大学教授）
2	邪馬台国の時代	中国文献が伝える列島の様相を改めて整理し、魏志倭人伝が伝える３世紀前後の古代社会像と、集落、戦い、祭祀をめぐる発掘調査成果とつき合わせて、（邪馬台国の所在はともかく）弥生時代の社会像を提示する。	倉本　一宏（駒沢女子大学教授）	倉本　一宏（駒沢女子大学教授）
3	大王と地方豪族	古墳時代の鉄剣銘文などの出土文字史料や宋書倭国伝が語る世界を明らかにし、磐井の乱などの反乱伝承にも焦点をあてて、５～６世紀の大王と地方豪族の関係を、王権中心ではなく複眼的に整理する。	同　上	同　上
4	飛鳥の王権	７世紀前半の大王推古時代を中心に、蘇我氏の権力、厩戸王（聖徳太子）の実像といった政治の在り方と、仏像（百済大寺）など文化の動向とを明らかにし、官司制整備に向かう倭王権の支配構造を整理する。	同　上	同　上
5	律令国家への道	7世紀後半～８世紀にかけて、「大化改新」から天武・持統天皇時代の藤原京の造営、律令の導入などを経て律令国家が確立する過程を、木簡から知られる７世紀の地方豪族のあり方とともに整理する。	佐藤　信	佐藤　信
6	奈良時代の政治動向	奈良時代の変乱があいつぐ政治史を、皇位継承を軸にしながら藤原氏その他各氏族の動向とともにたどり、この時代が貴族たちにとって決して安穏な時代ではなかったことを明らかにする。	同　上	同　上
7	古代の宮都と地方官衛	平城京や長屋王邸宅における生活や経済基盤などを、木簡などの史料から明らかにするとともに、国司による地方支配のあり方に注目しつつ、国府・郡家などの地方官衛と在地の社会との関係についての最近の研究成果を紹介する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	遣唐使と天平文化	遣唐使の困難な行程を吉備真備などの人物に焦点をあてながらたどり、彼らがもたらした政治・文化の位置づけを行うとともに、中央の正倉院や地方の寺院遺跡などの文物からその文化的広がりを考える。	佐藤　信	佐藤　信
9	平安王朝への道	奈良時代の天武系にかわる天智系の新しい皇統の登場、桓武天皇による対蝦夷戦争と新都造営、そして桓武晩年の徳政論争による両者の停止など、平安新王朝確立への歩みを概観する。	同　上	同　上
10	平安京とその文化	嵯峨天皇による新政治文化の展開と平安京の確立をみた上で、平安京の都市としての成熟とともに、平安新仏教やカナの展開など、その後の日本文化に影響を与えた平安初期の文化の意義について明らかにする。	同　上	同　上
11	藤原氏の台頭	9世紀半ばからの藤原北家の台頭を相次ぐ他氏排斥事件の順に整理し、天皇と「前期摂関」との関係を軸としながら、宇多天皇時代の政権構造や菅原道真左遷事件など、摂関政治に至るまでの政治過程を整理する。	同　上	同　上
12	摂関時代の政治と文化	摂関政治の構造を地方支配のあり方をふくめて概説し、摂関時代の貴族の政務のあり方を紹介する。そして摂関と天皇との関係の実情を説くとともに、国風文化の意義について明らかにする。	佐々木恵介（聖心女子大学助教授）	佐々木恵介（聖心女子大学助教授）
13	受領と地方社会	10世紀からの地方支配の要となった受領に焦点をあて、受領の任国支配、受領と地方豪族との関係や受領の任国往来などのあり方を明らかにしつつ、院政期まで含めて、中央と地方との関係を概観する。	同　上	同　上
14	院政の時代	後三条天皇から院政に至る政治過程を整理し、院政期の院・天皇・摂関の関係に焦点をあてながら政治構造を明らかにするとともに、この時代の文化について考える。	同　上	同　上
15	北と南の古代史	日本列島の古代史を律令国家一元論で見るのではなく、蝦夷・北海道の歴史や琉球における統一国家の形成を視野に入れた上でとらえ直す観点を提示する。そして、講義全体のまとめを行う。	佐藤　信	佐藤　信

＝ ヨーロッパの歴史（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：樺山　紘一（東京大学教授）〕

全体のねらい

ヨーロッパの歴史を、その全体的構造において捉え、基盤の確立と、たえざる革新という様相のもとで考察しようとするものである。別途開設されている古典古代史を承け、また、19世紀以降の近・現代史への導入という趣旨も加えて、ヨーロッパの中世・近世史をできるだけ広い視野から論じようとする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ヨーロッパを考える視点	ヨーロッパ史の舞台となる地域の自然や地理、人間の諸条件を概観する。ことに、古典古代とは異なった歴史世界としてのヨーロッパの成立基盤を明らかにすることをめざす。	樺山　紘一（東京大学教授）	樺山　紘一（東京大学教授）
2	ゲルマン人諸国家の形成	西ローマ帝国崩壊をうけて登場したゲルマン諸国家、つまり東西ゴート王国、ランゴバルド王国、フランク王国の成立過程を、それぞれ通観する。そのうえで、古代社会の諸要素がいかに継承されたか、また新たなゲルマン的要素がいかに結実したかを論ずる。	高山　博（東京大学助教授）	高山　博（東京大学助教授）
3	封建社会の基本構造	初期から中期にかけての中世世界にあって、その基盤をなす封建社会の原理を考える。諸侯、騎士といった戦士集団の構成をはじめ、その経済的基盤としての農業・農村と荘園制の変化とを中心のテーマとする。ヨーロッパにおける現地ロケーションによる講義を予定している。	河原　温（東京都立大学助教授）	河原　温（東京都立大学助教授）
4	都市の出現と成熟	古代の伝統と新たな環境のなかで、都市が成立し、封建社会と向き合いつつ成熟してゆく過程を考察する。ヨーロッパ都市の固有の特質を明らかにするために、現在も残存する中世都市の遺構をさぐりながら、現地ロケーションにより現実味のある展開を試みる。	同　上	同　上
5	国家と王権の成長	封建諸勢力との対抗のなかから王権が自立し、強化されてゆくプロセスを跡づける。フランス、イングランド、ドイツを中心に、それぞれ異なった国家的特質が生まれる理由を探り、近世以降の展開への見通しをも試みる。	高山　博	高山　博
6	中世の地中海世界とヨーロッパ	西ローマ帝国崩壊以後も健在なビザンツ世界や、7世紀以降に抬頭した東方のイスラム世界が、ヨーロッパにたいしていかなる刺激をあたえ、どのような関係を築いたか。また十字軍や地中海交易によって、ヨーロッパが地中海においてどのような飛躍のきっかけを把んだか。これらを概観する。	同　上	同　上
7	中世キリスト教の確立	カトリック教会がヨーロッパ世界に浸透する過程を幅広く考察する。教皇と教会制度、修道院、日常生活における儀礼など社会の諸分野を覆うにいたるさまを描き、ヨーロッパ社会とキリスト教の不可分の関係を解きあかす。	樺山　紘一	樺山　紘一

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	中世世界の終焉に向けて	封建社会の成熟から分解へと、急速に動く13～15世紀のヨーロッパ世界を扱うが、ことに、疾病、飢餓、反乱、戦争などなまなましい社会現実の証言を手がかりとする。また、そこにみられる、新しい社会へ向けての力の抬頭をも視野に入れる。	河原　温	河原　温
9	中世文化からルネサンスへ	キリスト教によって育まれた大学や神学、教会建築などの中世文化から、世俗的色彩の強いルネサンス文化への移行を通観する。ルネサンスがたんにヨーロッパ内部での成長によってではなく、外部世界との接触の結果でもあることを指摘する。	樺山　紘一	樺山　紘一
10	世界へ拡大するヨーロッパ	東方へのアジア航路、西方へのアメリカ航路の開発により、ヨーロッパ勢力が急速に世界へ進出する様相を取り扱う。その結果生まれた植民地との関係、流入した商品や情報がヨーロッパに与えた影響について論じ及ぶ。	高澤　紀恵(国際基督教大学準教授)	高澤　紀恵(国際基督教大学準教授)
11	絶対王政の時代Ⅰ―イギリス	イングランドが、スコットランドなどと合体、併合を重ねて強大な集権国家となり、植民地をもつ帝国へと成長する過程をたどる。また社会の成熟が市民の力量を増大させ、革命による変革や、議会政治の拡充を実現させる様相を描く。	青木　康(立教大学教授)	青木　康(立教大学教授)
12	絶対王政の時代Ⅱ―フランス	フランス王権が、国内の特権貴族との激しい対抗関係を克服して、強大な官僚行政国家を建設する経過をたどる。その中で、近世絶対主義国家がかかえる本質的な問題点が明らかにされる。	高澤　紀恵	高澤　紀恵
13	絶対王政の時代Ⅲ―ドイツと東欧	神聖ローマ帝国のもとでも諸領邦の分立を克服しえないドイツと、新生の帝国の成長によって急速にヨーロッパの枢軸に加わるロシアとを対比する。この両者のもとに成立する中欧・東欧世界の歴史的特質が解明される。	青木　康	青木　康
14	近代文化への道	宗教改革によって開かれたキリスト教会の新しい体制、科学・思想の展開による啓蒙主義、また芸術・学術の諸分野における発展を通観する。世界に普遍性を要求するヨーロッパ文化の精神基盤が説明される。	高澤　紀恵	高澤　紀恵
15	近世ヨーロッパの終幕	絶対王政下の諸国の角逐によって、全ヨーロッパの国際秩序が変容し、またそれぞれの国家の内的基盤が動揺するなかで、新たな社会体制の出現が不可避であることを考案する。フランス革命の直前までが対象となる。	青木　康	青木　康

＝ ヨーロッパと近代世界（’０１） ＝（R）

〔主任講師：川北　稔（大阪大学教授）〕

全体のねらい

現代世界は一体化しているといわれる。とすれば、一体としての世界は、どのようにして成立したのか。南北格差はなぜ生じたのか。なぜ、アジアやアフリカでなく、ヨーロッパが中心となったのか。このような問題に、歴史的な観点から解答を与える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	世界システム論とは何か	近代世界を一つの巨大な生き物のように考え、近代の世界史をその誕生・成長をへて、死にいたる過程として捉える見方を世界システム論という。この講義の基本的な視角として、世界システム論の要点を解説し、従来の一国史的な見方との違いを説明する。	川北　稔（大阪大学教授）	川北　稔（大阪大学教授）
2	アジアに憧れたヨーロッパ人―大航海時代へ	15世紀のヨーロッパ封建社会は、経済的にも、社会的にも、危機の状態にあった。この危機への対応策として、世界システムの形成が進むことになる。なぜ、ヨーロッパが対外進出に危機の解決策を求めたのかを検討する。	同　上	同　上
3	キリスト教徒と香料を求めて	十字軍と国土回復運動の延長として対外進出に乗り出したポルトガルの事情と、ポルトガル人到来以前のアフリカの状況、アジアの諸交易圏の繁栄ぶりを含めて検討する。ヨーロッパ経済圏とアジアのそれのつながりかたをみる。	同　上	同　上
4	スペイン帝国の成立と世界システムの確立	スペイン国王カルロス一世による世界帝国形成の企図とその挫折、フェリーペ二世の下でのアメリカ開発の進行を論じ、ラス・カサスの見解をもとに、先住民・クリオーリョ・スペイン人の関係について検討する。	同　上	同　上
5	「17世紀の危機」とオランダのヘゲモニー	17世紀はヨーロッパをはじめ世界全体が危機的な状況にあったとされ、世界システムは収縮の局面に入った。この時期に英・仏・蘭三国が、スペイン・ポルトガルに挑戦し、オランダがヘゲモニーを確立することを論じる。	同　上	同　上
6	環大西洋経済圏の成立	16世紀末から経済的危機に陥ったイギリスが、北米における植民地形成にむかい、「財政革命」をつうじて、軍事力を強化する。その結果、貿易の爆発的な展開をみた（商業革命）ことを論じる。また、この現象が、イギリスの社会構造を転換させ、産業革命の展開の前提となったことをも論じる。	同　上	同　上
7	ヨーロッパの生活革命	商業革命が展開するにつれて、アジアやアメリカの新奇な商品が流入した。これに伴って、ヨーロッパ人の生活が一変したことを、イギリスにおける綿織物の消費や紅茶の普及を例にとりあげて説明する。こうして近代ヨーロッパ人の生活様式が成立し、生活必需品となったアジア商品の国産化の過程として、工業化が進行することを示唆する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ネイボップと砂糖王と煙草貴族	植民地に基礎をおく富裕な階級の成立を、プラッシーの戦い以後のインドの状況やカリブ海・北米植民地の事情を中心に検討する。同時に、北米・アジア・ラテンアメリカのヨーロッパとの関わりかたの違いを、それぞれの地域の現況との関係を念頭おきながら検討する。	川北　稔	川北　稔
9	奴隷貿易の展開	トリニダード・トバゴの首相でもあった歴史家エリック・ウィリアムズの生涯とその学説を紹介しながら、イギリスの産業革命が黒人奴隷制度との深い関係のもとに展開したことを論じる。	同　上	同　上
10	だれがアメリカをつくったのか	イギリスから北米植民地への移民の出自を分析し、アメリカ植民地が貧困・犯罪・家庭崩壊などの、本国の社会問題の解決の場とされたことを指摘する。この傾向は、はるかのちの時代まで継続することをも説明する。	同　上	同　上
11	世界システムの構造転換―「二重革命の時代」	アメリカ独立革命と産業革命とフランス革命の歴史的意味を再検討する。産業革命は、なぜフランスではなく、イギリスに起こったのか。フランス革命とは、結局、何であったのか。アメリカ独立革命やハイチやラテンアメリカ諸国の独立を含めての環大西洋革命論を展開する。	同　上	同　上
12	プランテーションと産業革命	イギリスの工業化や都市化が、世界システムの展開との関係を、生活史の側面から説明する。砂糖関税が引き下げられ、穀物法が廃止され、東インド会社の特権が制約されていく過程を、ひろく論じる。アジア物産の確保手段としてみれば、産業革命プランテーション経営は、近代世界システムの双子児であることを論じる。	同　上	同　上
13	ポテト飢饉とアメリカへの移民	アイルランドにおけるポテト飢餓を契機に、大量の移民がアメリカに渡ったが、イギリス帝国を中心に19世紀における労働者の地球規模での移動に焦点をあわせる。アメリカやオーストラリアにおける人種主義思想の形成にも言及する。	同　上	同　上
14	パクス・ブリタニカの裏表	イギリスの繁栄の象徴といわれた1851年のロンドン万国博と、1877年のインド帝国式典を象徴的なイヴェントとしてとりあげつつ、大英帝国の繁栄とその陰り、とくにアジア支配のありかたについて論じる。	同　上	同　上
15	アジアの時代か？―世界システムのゆくえ	アジアの生活文化へのヨーロッパ人の憧れから始まった近代世界の一本化、すなわち、近代世界システムの誕生・成長の歴史は、20世紀末以降、逆に、ヨーロッパの生活文化への憧れを原動力として、東アジアの経済成長をとげることによって、ふたたび大転換をとげつつある。世界システム論の立場から、21世紀の世界を予想する。	同　上	同　上

＝ 西洋音楽の歴史（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：笠原　潔（放送大学助教授）〕

全体のねらい
西洋音楽の歴史を通じて西洋の音楽文化に触れるとともに、日本と西洋音楽との接触について学ぶ。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	西洋音楽の流れ	西洋音楽の歴史を概観し、それぞれの時代の音楽の特徴を学ぶ。	笠原　潔（放送大学助教授）	笠原　潔（放送大学助教授）
2	古代ギリシャの音楽	西洋音楽文化の根底にある古代ギリシャの音楽観ならびにそれを生み出した古代ギリシャの音楽文化について学びながら、言葉と音楽が融合した状態にある「ムーシケー」の理念が今日まで西洋の音楽文化を導いてきたことを明らかにする。	同　上	同　上
3	「音楽」という言葉をめぐって	西洋の音楽文化を導いてきた「ムーシケー」という概念に対して、中国で生まれ、日本で使われてきた「音楽」という言葉は何を意味してきたかを明らかにし、併せて幕末の日本人がどのような言葉で西洋音楽を捉えたかについて触れる。	同　上	同　上
4	ユダヤ教からキリスト教へ	西洋音楽の基盤となったキリスト教の音楽文化がユダヤ教から引き継いだ遺産を明らかにすると同時に、キリスト教音楽文化の諸制度について述べる。	同　上	同　上
5	中世キリスト教聖歌	西洋中世のキリスト教諸聖歌の成立と、その後の時代の展開を明らかにする。	同　上	同　上
6	世俗音楽の隆盛	西洋中世後半の時代における世俗音楽の隆盛について述べ、その中で誕生した新しい人間観を明らかにする。	同　上	同　上
7	ルネサンス時代の音楽	中世末期からルネサンス時代にかけての音楽上の変遷を明らかにしながら、ルネサンス音楽の特徴を、特に音楽と言葉との関わりの視点から明らかにする。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	キリシタン時代の音楽	前８章のまとめとして、日本が西洋音楽と初めて出会ったキリシタン時代を取り上げ、キリシタン時代に流入した西洋音楽の様相とこの時代に伝えられたキリスト教聖歌が今も隠れキリシタンの人々の間に伝承されている現状について述べる。	笠原　潔	笠原　潔
9	初期バロック時代	ルネサンス末期から初期バロック時代に引き継がれた新しい表現様式について述べ、併せて音律の問題に触れる。	同　上	同　上
10	バッハの『マタイ受難曲』	バッハの代表作として『マタイ受難曲』を取り上げ、そこに見られる言葉と音楽をめぐるバッハの表現技法を明らかにする。	同　上	同　上
11	モーツァルトのオペラ	モーツァルトのオペラから数場面を取り上げ、人間心理の表現に関するモーツァルトの技法を分析する。	同　上	同　上
12	ベートーヴェンとその時代	ベートーヴェン時代に進行した音楽の資本主義化の様相を明らかにし、その動きと併行して楽器に加えられた改良の様相について述べる。また、江戸時代の日本人が、そうした新しい楽器に接していた事実も紹介する。	同　上	同　上
13	シューベルトの『冬の旅』	シューベルトの歌曲集『冬の旅』を題材に、この歌曲集の社会背景や、西洋文化の中の民俗的文化要素を紹介する。	同　上	同　上
14	自筆楽譜の問題	音楽史料としての自筆楽譜の問題を取り上げ、自筆楽譜からどのようなことが読み取れるかを明らかにし、ショパンやメンデルスゾーンの新しい作品像について触れる。	同　上	同　上
15	西洋の楽譜	西洋の楽譜の歴史を追いながら、西洋の楽譜は作品の姿を忠実に書き留めたものではなく、その書記法は時代性を帯びている事実を明らかにする。	同　上	同　上

＝ 応用数学（’９９）＝（R）

〔主任講師：藤田　宏(東京大学名誉教授・東海大学教授)〕

全体のねらい

最近のコンピュータによる数値的手段の進歩や対象領域の拡大を遠望しつつ、応用数学の基本的な発想法、概念、方法を解説する。数学的な明快さと具体性による納得にもとづいて展開し、数学による自然の理解と自然への働きかけを任務とする応用解析学への平易な入り口からの、しかし、現代風の誘いとしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	増殖の数理	最も初歩的な発展系である増殖の数理モデルから入り、１階微分方程式の基礎およびその豊かな応用について学ぶ。	藤田　宏（東京大学名誉教授・東海大学教授）	藤田　宏（東京大学名誉教授・東海大学教授）
2	振動の数理	微分方程式の最も重要な応用は力学における発展系の解析である。簡単な調和振動子から入り、特性根の方法を含め、２階微分方程式の初期値問題およびその応用の初歩について学ぶ。	同　上	同　上
3	競合の数理	量的に表される二つの勢力の間の時間発展をともなう競合の数理モデルは、簡単な場合については、連立微分方程式で与えられる。軍備拡張競争のモデルを扱うこの章は連立微分方程式への初期値問題への入門でもある。	同　上	同　上
4	惑星運動の数理（その１）	ニュートンによる力学と解析学の同時誕生のとき以来、惑星の運動の解析は数学による自然の理解の最大の成功例の一つである。特殊な非線形連立微分方程式の初期値問題に帰着するこの現象の数学モデルとその解析の理解に挑戦することは感激にあたいする。	同　上	同　上
5	惑星運動の数理（その２）	前回に引き続いて解析をすすめ、惑星の軌道が楕円などの円錐曲線になることを導く。デカルトによる解析幾何が自然の理解に顕著な貢献をした例であることも学ぶ。	同　上	同　上
6	弦のつり合いの数理	多くの安定な発展系は時間が立つにつれてつり合いの状態、すなわち、定常状態に到達する。この定常状態の解析は数学的には境界値問題に帰着する。簡単な弦のつり合いを通じて境界値問題の基礎とその応用について学ぶ。	同　上	同　上
7	熱伝導と波動の数理（その１）	状態が時間のみならず空間変数にも依存する発展系、いいかえれば、分布定数系の時間発展の数学モデルは偏微分方程式の初期値問題になる。現象的にも数学的にも典型例である熱伝導と波動の数理を通じて、応用解析のハイライトであるこの問題と取り組む。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	熱伝導と波動の数理（その２）	前回に引き続き、当面の問題の扱いの基礎であり、応用数学の柱の一つであるフーリエ級数の概念および方法について学ぶ。	藤田　宏	藤田　宏
9	熱伝導と波動の数理（その３）	前回および前前回に引き続き、フーリエ級数およびフーリエの変数分離法を用いて、針金の熱伝導（１次元放物型方程式）および弦の振動（1次元双曲型方程式）の問題を解決する。	同　上	同　上
10	発展系の数値解析（その1）	現在の科学技術における、偏微分方程式の、すなわち、分布定数系の実際的な応用は、コンピュータによる数値解法を抜きにしては成り立たない。そのための普遍的な方法である差分法による数値解法の基礎をすでに学んだ熱伝導の問題等について解説する。	桂田祐史（明治大学助教授）	桂田祐史（明治大学助教授）
11	発展系の数値解析（その２）	前回に引き続き、差分法による発展系の数値解法の考察を行い、かつ、定常状態への移行問題、非線形問題への拡張について学ぶ。	同　上	同　上
12	フーリエ変換；出会いとなじみ（その１）	フーリエ級数の威力を、変域が無限区間におよび場合に拡張しようとすれば、フーリエ変換あるいはフーリエ積分に到らねばならない。この趣旨どおりにフーリエ変換を導入しその基礎について学ぶ。	藤田　宏	藤田　宏
13	フーリエ変換；出会いとなじみ（その２）	前回に引き続き、理論的にも応用的にも全前空間を変域とする偏微分方程式の解析の基本であるフーリエ変換の性質および応用について学ぶ。	同　上	同　上
14	超関数；出会いから応用へ（その１）	δ関数を典型とする超関数の概念の理解は解析の自由な応用の支えである。その解説に当たっては、数学的な明快さは尊重しながらも、超関数との友好的な出会いと応用志向のなじみの構築を目的として展開していく。	同　上	同　上
15	超関数；出会いから応用へ（その２）	前回に引き続き、超関数が自由な解析操作を許す寛大な世界であることを学ぶ。	同　上	同　上

＝ 対称性の数学（’９８）＝（R）

〔主任講師：高橋　礼司（元放送大学教授）〕

全体のねらい

平面図形の対称性の考察を通して群論的思考への入門をはかる。平面の結晶群の分類が一つの目標である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	対称性（シンメトリー）とは何か	シンメトリーという言葉の語源、左右対称、回転対称	高橋礼司（元放送大学教授）	高橋礼司（元放送大学教授）
2	平面の運動群（Ⅰ）	平行移動と回転	同　上	同　上
3	平面の運動群（Ⅱ）	反転、鏡映、ずらし鏡映	同　上	同　上
4	平面の運動群（Ⅲ）	平面の合同変換の分類について述べる。	同　上	同　上
5	正多角形とその対称群	正二面体群について述べる。	同　上	同　上
6	文様の対称群（Ⅰ）	有限な対称群をもつ文様に関するレオナルド・ダ・ヴィンチの定理	同　上	同　上
7	文様の対称群（Ⅱ）	帯状文様の対称群について述べる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	文様の対称群(Ⅲ)	２次元の結晶群とその分類について述べる。	高橋礼司	高橋礼司
9	文様の対称群(Ⅳ)	続き	同上	同上
10	群の作用、軌道、固定群	定義と物質的性質	同上	同上
11	バーンサイドの定理	軌道個数の数え上げに関するバーンサイドの定理	同上	同上
12	空間の合同変換	３次元の運動群について述べる。	同上	同上
13	プラトンの正多面体	５個の正多面体について述べる。	同上	同上
14	回転群の有限部分群	バーンサイドの定理の応用	同上	同上
15	対称性の数学	まとめとこの後の発展について述べる。	同上	同上

＝ 解析学（’００）＝（R）

〔主任講師：熊原 啓作（放送大学教授）〕

全体のねらい

微分積分学では変数が実数の関数についての解析学の基礎を学んだ。本講義ではそれに続く課程として、複素変数関数と微分方程式の初歩を学ぶ。複素変数で考えると単なる算法を越えて関数についての新しい理論が展開される。微積分の算法は微分方程式の解法としてさらに勉強することになる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	複素数	実数の性質、複素数の導入、複素平面、リーマン球面、直線と円。	熊原啓作（放送大学教授）	熊原啓作（放送大学教授）
2	複素微分	領域、複素関数、微分係数、コーシー・リーマンの方程式、整級数。	同上	同上
3	初等関数	指数関数、三角関数、オイラーの公式、双曲線関数、主値、リーマン面、対数関数。	同上	同上
4	1次分数変換	円円対応、非調和比、1次分数変換群、円対称、鏡像、上半平面と単位円板。	同上	同上
5	複素積分	曲線、線積分、不定積分、グリーンの公式。	同上	同上
6	コーシーの積分定理	コーシーの定理、コーシーの積分公式、モレラの定理、リウヴィルの定理、代数学の基本定理、回転数。	同上	同上
7	正則関数の性質	テイラー展開、一致の定理最、大値の原理、正則関数列、等角写像。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ローラン展開	ローラン展開、特異点、ワイエルシュトラスの定理、有理型関数の級数。	熊原啓作	熊原啓作
9	留数定理	留数、留数の計算、偏角の原理定積分の計算への応用、フーリエ変換、フレネル積分。	同上	同上
10	無限乗積	無限乗積、ガンマ関数、ガウスの公式、ウォリスの公式、リーマンのゼータ関数、オイラー積。	同上	同上
11	1階微分方程式	微分方程式とその解変数分離形、同次形、1階線形微分方程式、全微分方程式、初期条件。	同上	同上
12	線形常微分方程式	付随する同次方程式、重ね合せの原理、基本解、定数係数線形微分方程式。	同上	同上
13	ラプラス変換	ラプラス変換、指数型関数、収束座標、フーリエ変換、ラプラス逆変換。	同上	同上
14	演算子法による解法	ラプラス変換の性質、ヘヴィサイドの展開定理、ラプラス変換による解法。	同上	同上
15	級数解	解のベキ級数表示、ルジャンドルの微分方程式、エルミートの微分方程式、ベッセルの微分方程式、チェビシェフの微分方程式、ガウスの超幾何微分方程式。	同上	同上

＝ 数学基礎論（’９９）＝（R）

〔主任講師：隈部　正博（放送大学助教授）〕

全体のねらい

論理学の基礎を数学的立場から解説する。目標はゲーデルの不完全性定理の理解である。予備知識は特に要求しない。自然の理解専攻以外の学生向けでもある。数学的論理学の概要を理解するのがねらいである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	準備	この印刷教材を読むにあたって必要な予備知識について述べる。	隈部正博（放送大学助教授）	隈部正博（放送大学助教授）
2	命題論理	命題論理とは何かについて述べ、論理式の定義、真偽値について述べる。	同上	同上
3	トートロジー	論理式の真偽値についてさらに考察し、トートロジーの概念について述べる。	同上	同上
4	論理記号について	論理記号の完全性について述べる。	同上	同上
5	コンパクト性定理	命題論理のコンパクト性定理の証明をする。	同上	同上
6	一階述語論理	述語論理とは何かについて述べる。対象式と論理式を定義する。	同上	同上
7	構造	構造を定義し、述語論理における論理式の真偽について考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ロジカルな満足性と演繹計算	述語論理におけるロジカルな満足性という概念について述べる。その後の演繹計算とはどういうものか簡単に述べる。合わせてゲーデルの完全性定理のもつ意味について述べる。	隈部正博	隈部正博
9	論理公理	論理公理について述べる。	同上	同上
10	演繹計算についてのいくつかの定理	演繹計算についてのいくつかの定理を述べる。	同上	同上
11	自然数論	自然数論について述べる。	同上	同上
12	表現可能性と計算可能性	自然数上の関係や関数の表現可能性、計算可能性について述べる。	同上	同上
13	ゲーデル数と証明の算術化	ゲーデル数の定義をした後、自然数論における証明の算術化とはどういう事かについて述べる。	同上	同上
14	不完全性定理その1	ゲーデルの第一不完全性定理の証明をする。	同上	同上
15	不完全性定理その2	ゲーデルの第二不完全性定理の証明をする。	同上	同上

＝ 計算の理論（’９９）＝（R）

〔主任講師：野崎 昭弘（大妻女子大学教授）〕
〔主任講師：仙波 一郎（ 茨城大学教授 ）〕

全体のねらい

いろいろな具体例を通して、異なる型の計算問題に触れさせ、関連する技法の紹介や、効率の比較を行う。全体をⅠ．計算の基礎、Ⅱ．計算の効率に分ける。Ⅰでは入門を兼ねて親しみやすい問題を多く入れ、解をさがす技法や「解がない」ことの証明の技法、Ⅱでは実用的な問題についての技法と効率の比較を行う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	数学的帰納法について①	数学的帰納法の考え方を説明し、具体的な問題を解きながら理解を深める。ハノイの塔問題について、その解法手順を詳しく考察する。	仙波一郎（茨城大学教授）	仙波一郎（茨城大学教授）
2	数学的帰納法について②	数学的帰納法の考え方を説明し、具体的な問題を解きながら理解を深める。ハノイの塔問題について、その解法手順を詳しく考察する。	同上	同上
3	背理法について①	背理法の考え方を説明し、具体的な問題を解きながら理解を深める。解が無数にあることや、解が存在しないことを示すときなどに有用である。とくにピタゴラス数と素数について、その性質や生成法などを詳しく考察する。	同上	同上
4	背理法について②	背理法の考え方を説明し、具体的な問題を解きながら理解を深める。解が無数にあることや、解が存在しないことを示すときなどに有用である。とくに、ピタゴラス数と素数について、その性質や生成法などを詳しく考察する。	同上	同上
5	部屋割論法	部屋割論法の考え方を説明し、具体的な問題を解きながら理解を深める。ある条件を満たす解を具体的に求めることなく、解の存在を示すときに有用な論法である。	同上	同上
6	2値化	2値化の考え方を具体的な問題を通して説明する。解が存在しないことを示す場合にその切れ味を味わってほしい。	同上	同上
7	1対1対応	1対1対応の考え方を説明し、具体的な問題を解きながら理解を深める。うまい対応づけによって、解が求められていく過程に注目してほしい。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	バックトラック①	バックトラックの考え方を具体的な問題を通して説明する。パズル問題（川渡り問題、はかり分け問題など）、数学的問題（集合分割問題、整数分割問題など）、フラクタル図形などを取り上げる。具体的な解をすべて求める場合に、汎用的かつ強力な方法である。	仙波一郎	仙波一郎
9	バックトラック②	バックトラックの考え方を具体的な問題を通して説明する。パズル問題（川渡り問題、はかり分け問題など）、数学的問題（集合分割問題、整数分割問題など）、フラクタル図形などを取り上げる。具体的な解をすべて求める場合に、汎用的かつ強力な方法である。	同上	同上
10	順列の生成	順列を生成するいろいろな方法を紹介する。興味ある応用例を示す。	同上	同上
11	計算の効率	電卓を使って、複利計算 10万円×1.05×……×1.05 を実行する方法について考えてみます。こんな簡単な問題でも、計算の上手・下手によって、効果がずいぶん違うことに、注目して下さい。	野崎昭弘（大妻女子大学教授）	野崎昭弘（大妻女子大学教授）
12	方程式の解法	5次以上の代数方程式には解の公式がありません。しかし数値計算で解の近似値を求めることなら、もっと複雑な方程式でもできます。そのことを具体的な例で説明し、効率の観点も加えて検討します。	同上	同上
13	表の検索	コンピューターに記憶された大量のデータから、目あての情報をさがすことを「検索」といいます。ここでは基本的な「表の検索」について、簡単な工夫で所要時間をずっと短くできることを説明します。	同上	同上
14	旅行計画	東京、名古屋、金沢、新潟、大阪の各都市を訪問したいのですが、どんな順序で、どんなコースを通ればいいでしょうか？２都市間の最短コースをさがす問題から始めて、いくつかの計算問題とその解法を紹介します。	同上	同上
15	計算の理論の歴史	ギリシャ時代の工夫、たとえば「ユークリッドの互除法」から始まって、現代の最先端をゆく並列計算の理論まで、いくつかのポイントをひろいながら概説してみたいと思います。	同上	同上

＝ データとデータ解析 ＝（R）

〔主任講師：栗原 考次（岡山大学助教授）〕

全体のねらい

データ解析では、データに含まれるばらつきを客観的に分析し、不規則の中での法則性を見つけ、得られたデータから有効な情報をより多く引き出すことが必要である。

講義ではデータ解析のために各分野で共通に利用される統計的解析法の中から代表的な解析法を取り上げ、その考え方と利用方法について解説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現象とデータ	現象の解明などのために種々の情報が日々蓄積されている。これらの情報を正しくデータ解析するためには、観測する尺度およびデータの属性や構造に対する知識を身につける必要がある。講義では、こうしたデータに関わること全般について概説する。	栗原考次（岡山大学助教授）	栗原考次（岡山大学助教授）
2	データの分布	データに含まれるばらつきの分析のためには、統計グラフの有効的な利用やデータの分布の特性について知る必要がある。講義では、各種データの統計グラフ化の方法および種々のモデルをあてはめた場合の統計量の分布について概説する。	同上	同上
3	統計的推測法	対象とする母集団を解明するためには、母集団を特徴づける平均や分散などの母数についての推定や統計的仮説検定が不可欠である。講義では、推定を行う際に望まれる性質や仮説検定の手順や考え方を例題を含みながら概説する。	同上	同上
4	ノンパラメトリック検定法	対象とする母集団の分布形を仮定せず、ゆるい仮定でのモデルに基づき推測を行うのが、ノンパラメトリック法である。講義では、その中で最も利用されている２標本のノンパラメトリック検定について概説する。	同上	同上
5	相関分析	変量間の関連を調べるには、関連性を指標を用いて表す相関分析が行われる。講義では、量的データ、質的データおよび順序データについて、各々の指標の作成法とその利用法について解説する。	同上	同上
6	回帰分析	ある変量が他の変量にどのように依存しているかのように、変量間の因果関係を解明するためには回帰分析が用いられる。講義では、最もよく利用されている重回帰分析の考え方とその利用法について解説する。	同上	同上
7	主成分分析その1	各個体について多変量のデータが観測される場合、構造を単純化するために、次元を縮小することが望まれる。講義では、そのための一つの方法である主成分分析を取り上げ、その考え方および利用法について概説する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	主成分分析その2	前の章の続きである。多くの変量をなるべく情報を失わずに少数の総合的な指標で代表させる観点から考える。講義では、具体的な例題を取り上げ、その解析結果の解釈なども含めて解説する。	栗原考次	栗原考次
9	判別分析その1	判別分析は、データをいくつかのグループに分けたり、新しくデータが観測された場合、そのデータがそれまでに分けられたどのグループに入るかを判別する解析法である。講義では、判別分析の考え方について変量数が少ない場合を例に概説する。	同上	同上
10	判別分析その2	前の章の続きである。講義では、２つ以上の変量の場合を取り上げ、判別の概念および誤判断確率や期待損失などについて具体例とともに解説する。	同上	同上
11	クラスター分析その1	得られたデータをいくつかのグループに分ける分類は古くから行われてきた。これらの分類手法を総称してクラスター分析と呼んでいる。講義では、クラスター分析の概念およびその利用法について概説する。	同上	同上
12	クラスター分析その2	前の章の続きである。講義では、分類を行うためのデータおよび変量間の類似度、非類似度さらに分類手法について具体例とともに解説する。	同上	同上
13	寿命データの解析	寿命データの特徴として、観測中の中途打ち切りデータなどの不完全データが多数含まれ、さらに関与する要因が複数であることがあげられる。ハザードや競合リスクの基本的概念とともにこれらのデータに対する解析法について解説する。	同上	同上
14	多段推測	データ解析の過程では逐次的に得られる情報の活用を行い、必要であれば標本を追加し、種々の統計的解析法を系列的に適用することも多い。講義では、統計的推測法の系列的適用に対する総有意水準、検出力、平均期待個数などの理論特性について解説する。	同上	同上
15	時系列分析	株価や空気中の二酸化炭素の量など時間の経過とともに順序をもって観測されるデータは時系列データとよばれる。こうしたデータの解析法は時系列に内存する統計的性質および将来の予測に使われる。講義では具体的な時系列データを通じて方法論を解説する。	同上	同上

＝ 統計の考え方（’００）＝（R）

〔主任講師：松原　望（東京大学教授）〕

全体のねらい

統計学の考え方を、エッセンスそれもエッセンスのみに集約し、わかりやすく、興味深く、かつためになる方法で解説する。そのためには、実例から説きおこし、逐次、本質へ入り、理論を導入し、再び問題への適用・応用へもどるものとする。実例は基本的には自然科学から取るが、かならずしもそれにはとらわれず、また数学は、数学的すぎず、かつ必要に応じて適度のレベルの数学を自由に用いる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	統計の考え方	本音のねらいを具体的に解説し、次章以降の準備を行う。	松原　望（東京大学教授）	松原　望（東京大学教授）
2	誤差と最小二乗法	すべての統計的方法は、数量の観測とそのばらつきから何を引き出すかを考えることから生まれる。	同　上	同　上
3	相関関係	現象の多元的側面は相関関係からとらえられる。統計学の歴史でも、大きな発展の役割をはたした。	同　上	同　上
4	クロス表	日常しばしば出会う形のデータであり、前章と同様、現象の多元的側面をとらえるためにその扱いに慣れる必要がある。	同　上	同　上
5	時系列のデータ	時間によって取られたデータは実に多い。その分析法の基礎と方法のいろいろ（長期傾向、周期性、予測など）。	同　上	同　上
6	確率と確率分布	統計を「推論」として考えるための最小の数学的必要知識。	同　上	同　上
7	あてはまりのよさ	データを仮説や理論と関係させて考える統計推論の基礎入門。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	仮説と対立仮説	統計的意思決定。統計的方法の理論中心と考えられてきたもっともよく知られた方法である。	松原　望	松原　望
9	パラメータ推定と信頼区間	パラメータとはその現象について知りたい中心的な数（定数、値）のことで、推定はその値をデータで知る方法。	同上	同上
10	分散分析	実験データの分析法、あるいは逆にどのようなデータをとるべきかの重要な導き手。	同上	同上
11	0-1型変数の統計	投入量（例：薬）から反応の有無を予測するなど、質的変数（0-1型）が量から決まるタイプの問題を扱う。確率が必要。	同上	同上
12	ベイズ的意思決定	確率分布の期待値の考え方を利用して、日常の意思決定の問題を解く。統計的決定理論、ベイズ統計学の入門。	同上	同上
13	多変量解析の考え方（1）	重回帰分析（多くの変数を用いて目標の変数を予測）	同上	同上
14	多変量解析の考え方（2）	判別分析（多くの変数を用いて対象を分類・判別）	同上	同上
15	多変量解析の考え方（3）	主成分分析とその応用（多くの変数の背後の要因探求）	同上	同上

＝ カオスの数理と技術 ＝（ＴＶ）

〔主任講師：合原　一幸（東京大学教授）〕

全体のねらい

本講義では、今世紀の科学における大きな発見の一つであるカオス（Ｃｈａｏｓ）を取り上げ、その数理的基礎及び応用技術について、様々な側面から解説する。本講義によって、カオス数理と技術に関する基本的知識を得るとともに、自然観・世界観を深め、さらにはカオス工学の将来を展望することを目的とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	カオスとその研究の歴史	カオスの理解が大きく進展したのは、最近二十年間のことであるが、その源流はニュートン力学が確立された十七世紀までさかのぼることができる。カオスの典型例を紹介するとともに、カオスの発見とその理解の深まりの背景と歴史を概説する。	合原一幸（東京大学教授）	合原一幸（東京大学教授）
2	離散時間力学系のカオス	カオスの基本的性質を理解するために、１変数の写像（離散時間力学系）であるベルヌーイ写像、ロジスティック写像、テント写像を取り上げ、その力学構造を解説する。さらに、より高い次元のカオス写像の例も紹介する。	同上	同上
3	連続時間力学系のカオス	連続時間力学系であるローレンツ方程式、レスラー方程式、ダフィング方程式などのカオスについて解説する。さらに、離散時間力学系と連続時間力学系との関連について考察する。	同上	同上
4	カオスと分岐	離散時間力学系や連続時間力学系において、パラメータ値の変化に伴なって、解の定性的性質が変化する分岐現象について解説する。さらにこの知識をふまえて、カオスが生成されるプロセス、すなわちカオスへ至る道すじについて考察する。	同上	合原一幸 上田哲史（徳島大学教授）
5	カオスとフラクタル	カオスの幾何学的性質は、自己相似すなわちフラクタルの概念で特徴づけることができる。フラクタルの典型例であるカントール集合を取り上げ、その直観に反した不思議な性質を明らかにするとともに、カオスとの関連を議論する。	同上	同上
6	カオスの特徴	カオスはその現象の底の深さゆえに、今だに数学的に厳密な定義はない。しかしながら多くのカオスが共有するいくつかの基本的性質は、明らかになってきている。これまでの講義の内容を基にして、カオスの数理的性質を整理する。	同上	合原一幸
7	リアルワールドのカオス	この世の中に実在するほとんどすべてのシステムは、人工システム、自然システムを問わず非線形性を有している。したがって、非線形システムの典型的振る舞いであるカオスも、世の中に広く見られる。これらの多様なカオスを実例を含めて紹介する。	同上	合原一幸 村重淳（運輸省船舶技術研究研究官） 宮野尚哉（住友金属工業㈱未来技術研究所主任研究員）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	カオスと脳神経系	脳神経系は、２１世紀科学の最大研究テーマとされ、現在世界中で大規模な研究計画が進行中である。他方で脳神経系においては、ミクロレベルからマクロレベルに至る様々な時空間スケールでカオス的現象が観測される。脳神経系のカオスについて概説する。	合原一幸	合原一幸
9	カオスニューラルネットワーク	脳神経系の高度情報処理機能を工学的に実現する人工的ニューラルネットワークが、新並列分散処理原理として注目を集めている。他方で脳を構成するニューロンは、一種のカオスデバイスである。カオスの人工的ニューラルネットワークへの応用について概説する。	同上	同上
10	カオスと計算	ある種のカオスは、計算能力を潜在的に有しており、現在のコンピュータの原型であるチューリングマシンと対応づけることも出来る。このようなカオスの複雑な性質を解説するとともに、カオスの計算の本質的困難さについても議論する。	同上	同上
11	カオスと制御	カオスと制御との関連について、はじめにカオスを抑制して周期状態を実現するカオス制御手法について解説する。次に、カオスをむしろ積極的に活用する制御原理であるハーネシングおよびホメオダイナミクスの考え方について議論する。	同上	合原一幸 安達雅春（理化学研究所フロンティア研究員）
12	カオスと時系列解析	世の中には不規則に変動する時系列データが、あふれている。これらの時系列データをカオスの立場から解析するカオス時系列解析について、アトラクタ再構成、フラクタル次元解析、リアプノフスペクトラム解析など基礎的解析手法を概説する。	同上	合原一幸 池口徹（東京理科大学助手）
13	カオスと予測	カオスはしばしば、単純な非線形法則に従って極めて複雑な振る舞いを生み出す。このことは逆に、複雑な時系列データの将来を、単純な非線形法則を用いて予測できる可能性を示唆している。カオスを予測する決定論的非線形予測手法について解説する。	同上	同上
14	カオスと電子回路	単純な非線形法則によって生成されるカオスは、その原理の単純さゆえに電子回路で容易に実装することができる。カオスを作る電子回路技術について解説するとともに、その多様な応用可能性を議論する。	同上	合原一幸 堀尾喜彦（東京電機大学助教授）
15	カオス・複雑系と科学技術	工学の立場からカオスを研究するカオス工学の概要を整理するとともに、その将来を展望する。さらに２１世紀の科学技術に向けて、高次元カオスや複雑系の研究の重要性とその工学的意義について考察する。	同上	合原一幸 田仲広明（宇宙環境利用推進センター客員研究員）

＝ パソコンによる解析学（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：森本　光生（国際基督教大学教授）〕

全体のねらい

パーソナルコンピュータを利用して、数値実験を行い、グラフを描き、解析学、（数列、級数、微分、積分、微分方程式）について解説する。解析学は無限を前提として成立しており、コンピュータは有限のシステムである。この差異を十分に注意しながら、パソコンによる数値計算という観点より、解析学を見直してみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	パソコンによる計算	パソコンによる数値計算の手段として、ＵＢＡＳＩＣという言語を学ぶ。基本的には、加減乗除をくりかえして数値計算はなされるが、誤差の累積の危険性を避けるために、収束のスピードが問題になる。遅い収束をする数列と、速い収束をする数列の例をあげたい。	森本光生（国際基督教大学教授）	森本光生（国際基督教大学教授）
2	反復による平方根の求め方	aを正の数とするとき、$x \mapsto \frac{1}{2}(x+\frac{a}{x})$ の反復で x は $\sqrt{a}$ に収束する。この収束は、“２乗収束”と呼ばれ、高速である。今回は数列の収束の概念を復習し、上記のニュートン法について学ぶ。パソコンによる数値計算も行う。	同　上	同　上
3	ライプニッツの級数とマチンの公式	ライプニッツの級数は、緩慢に円周率に収束するが、遅すぎて円周率の数値計算には適さない。通常、円周率の数値計算は、マチンの公式により、逆正接関数のテイラー展開を利用する。今回はマチンの公式を証明し、その威力をパソコンによって確かめてみる。	同　上	同　上
4	パソコンによるグラフィックス	モニターのグラフィックス画面は方眼紙である。この方眼紙の枡目は、標準的には640×400である。今回は、ここに描画するためのＵＢＡＳＩＣの命令を学び、$y=f(x)$のグラフを描いて見る。また描画の例として、モンテカルロ法を視覚化してみよう。	同　上	同　上
5	フーリエ級数のグラフ	フーリエ級数は三角級数とも呼ばれる。周期関数はすべてフーリエ級数に展開される。無限級数はグラフに描くことはできないが、有限和のグラフを描いてみて、極限の関数の様子を探ってみたい。連続だが微分できない関数もフーリエ級数で表わすことができる。	同　上	同　上
6	テイラー展開のグラフ	関数のテイラー展開について説明する。例えば、$y = sinx$のテイラー展開のはじめの数項のグラフを描いてみて、テイラー展開の意味を探る。テイラー展開を利用して、ネピアの定数や三角関数の値の精密な近似値を加減乗除だけで計算してみる。	同　上	同　上
7	数値積分の公式Ｉ	$f(x)$を増加（減少）関数とした時、$\frac{1}{2}f(0)$は定積分 $I=\int_0^1 f(x)dx$の不足（過剰）近似値で、$\frac{1}{2}f(1)$はＩの過剰（不足）近似値である。したがってその平均値はＩの近似値として適当である。これを台形公式という。これを改良してシンプソンの公式が得られる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	数値積分法の誤差解析	滑らかな関数の台形公式による数値積分の誤差解析は詳しく実行することができる。オイラーマクローリンの公式を紹介しよう。シンプソン公式の誤差解析や、より高度の数値積分の公式（ロンバーグ法）についても触れてみたいと思う。	森本光生	森本光生
9	関孝和の円周率計算	正方形の周の長さから出発して、辺の数を倍々に増やしていく。　正2^n角形の周の長さは整数から出発して加減乗除を開平算を組み合せて求めることができる。$n\to\infty$とすれば円周率が求まるが、収束は遅い。和算家の関孝和は、巧妙な加速法を発見した。	同上	同上
10	建部賢弘の円周率計算	建部賢弘（たけべかたひろ）は、単位円に内接する正４角形、正８角形、正16角形、…、正1024角形の周の長さを計算し、この9個の数値から、43桁の円周率を求めた。彼は、いったいどのような方法で計算したのであろうか探ってみたい。	同上	同上
11	微分方程式の意味	簡単な微分方程式により、微分方程式の表わす自然現象について解説する。流れの図をパソコンに描かせて、微分方程式とその解の数学的な関係について考える。微分方程式の一般解は曲線群を表すことと、適切な初期値を持つ解は一意的に定まることを確認する。	同上	同上
12	微分方程式の求積法	変数分離型、同次型、一階線形微分方程式など、積分を実行することにより微分方程式の解が具体的に求められる場合がある。今回はこのような微分方程式の実例をいくつか取り上げ、計算例をみることにする。	同上	同上
13	微分方程式の数値解法	最も簡単な微分方程式 $\dot{x} = f(x,t)$を考察する。ここで、$\dot{x} = \frac{dx}{dt}$ は関数 $x(t)$の時間パラメータtによる導関数を表わす。初期値 $x(0)= x_0$を与えた時の近似解を折れ線近似で求めることを、オイラー法という。オイラー法を改良することについても述べよう。	同上	同上
14	２次元線形自励系	$\dot{x} = ax+dy, \qquad \dot{y} = cx+dy$ という２次元の自励系は、$\dot{x}= A\ x$という行列形で記述できる。パソコンが描く解軌道図を眺めながら、この自励系の軌道の様子と行列Ａの固有値の関連について考察しよう。	同上	同上
15	２次元自励系の定常解	$\dot{x} = f(x,y), \qquad \dot{y} = q(x,y)$ という２次元の自励系の解　$x=x(t)$，$y=y(t)$の軌道をパソコンに描かせながら、定常解の安定性について説明する。いわゆる極限円もパソコンで容易に描くことができる。	同上	同上

＝ 力　　学 ＝（ＴＶ）

〔主任講師：堀　源一郎（富山国際大学教授）〕

全体のねらい

力学は物理学の基礎をなし、力学で使われる概念や法則は物理学の全分野に現われて、物理学そのものが力学から発展した歴史を示している。本講では、このような視点から、物理学入門としての力学の基本概念・法則を解説し、合せて日常身近かな力学現象から天体の運動まで、興味ある力学的話題を取り上げる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	落下の法則	物体の落下現象を力学的に理想化すると“質点の自由落下”となる。日常の最もありふれたこの現象を通して、質点、速度、加速度、自由落下などの力学量や概念を導入する。なお質量と重量の違いを明確にし、宇宙飛行士の体験する無重量状態にも言及する。	堀源一郎（富山国際大学教授）	堀源一郎（富山国際大学教授）
2	平行四辺形の法則	曲線運動を論ずる基礎として、ベクトルとしての変位、速度、加速度、力の合成・分解（平行四辺形の法則）を解説する。大きさと方向をもつ量でも、平行四辺形の法則に従わないものはベクトルではない。２つの運動の合成として放物運動を論ずる。	同上	同上
3	等速円運動	面積速度の法則を導入し、等速円運動の加速度が円の中心に向かうことを示してv^2／ｒの式を導く。次に非等速円運動を経て、曲率円を援用して一般の曲線運動に進む。その例として等速楕円運動、調和運動、惑星運動を取り上げる。	同上	同上
4	運動の法則	ニュートンの運動の法則には、力、運動量、力積などの力学量が現われる。これらもベクトルであり、運動の法則はベクトル式で表される。２つの物体の間に働く力は作用・反作用の法則に従う。なおここでベクトル算法の基本を解説する。	同上	同上
5	単振動	単振り子の小振動やフックの法則に従うバネの伸縮運動を単振動という。質点に働く力が平衡点からの変位に比例するときの運動であって、振動の周期は振幅によらない（等時性）。一般に平衡点の周りの小振動が単振動であるとき、その平衡点を安定という。	同上	同上
6	運動量と運動エネルギー・位置エネルギー	力学の創成期に争われた“活力論争”を紹介し、運動量と運動エネルギーを対比する。運動物体は停止するまでに仕事をし、高所の物体は落下によって仕事をする。仕事に変換される量としてエネルギーを導入する。なお運動量に関連してロケットの運動を論ずる。	同上	同上
7	衝突現象	２つの粒子の衝突の前後で粒子系の運動量は保存する。その際に系の運動エネルギーが保存するか減少するかで、それぞれ弾性、非弾性衝突という。前者の例として“カチカチ玉”を取り上げる。等質量粒子の衝突についてのホイヘンスの思考実験を紹介する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	万有引力	ニュートンの万有引力の法則は２つの質点間の引力として与えられ、広がりのある物体間の引力は物体を質点（質点要素）の集まりとして求める。ここでは薄い球殻と質点間の引力から始めて、均質球と質点の引力・ポテンシャル、自己重力ポテンシャルを求める。	堀源一郎	堀源一郎
9	慣性力と潮汐力	ダランベールの原理を解説し慣性力を導入する。遠心力は身近かな慣性力である。また潮汐力も慣性力によって理解が容易になる。さらに慣性力の例として、太陽と地球に引かれる月の運動、および太陽と木星に引かれるトロヤ群小惑星の運動を解説する。	同上	同上
10	回転座標系とフーコー振り子	ニュートンの運動方程式を回転座標系に移すと、慣性力として遠心力とコリオリ力が現われる。地表の物体には地球の万有引力と遠心力とが働き、その合力を重力という。一方のコリオリ力は大気や海水の流れに影響し、またフーコー振り子の振動面を回転させる。	同上	同上
11	剛体に働く力とその釣合	物体に働く力の効果は物体の変形と運動に現われるが、変形しない物体を考えて剛体という。剛体の重心を導入して、剛体の運動を、重心の運動（並進運動）と重心の回りの回転運動に分解する。剛体に幾つかの力が働いて並進も回転も起きないとき力は釣合っている。	同上	同上
12	固定軸の回りの回転	物体の固定軸の回りの回転は質点の直線運動に対比される。後者の速度、加速度、力、運動量にそれぞれ前者の角速度、角加速度、トルク、角運動量が対応し、特に質量に対するのは慣性モーメントとなる。また運動エネルギーも両者で類似の形に表される。	同上	同上
13	コマの運動	一定の角速度で回転し、回転軸が首振り（歳差運動）をするコマは、質点の等速円運動に対比される。後者で速度の方向が刻々変るのが前者の首振りに対応する。地球の自転もコマの運動であり、歳差運動を伴う。そのため生ずる天の北極の移動を歳差という。	同上	同上
14	束縛のある運動	天体の運動を除いて、地上で目にする運動は大方が束縛運動である。自動車は地面に、電車は線路に、ジェットコースターはその軌条に束縛されている。これらの束縛が実現されるのも力によるものと考えて束縛力を導入すれば、自由運動として扱える。	同上	同上
15	摩擦のある運動	天体の運動を除いて、地上で目にする運動は大方が摩擦を伴う運動である。摩擦のためにアリストテレスは力と速度が比例すると観察した。しかし摩擦がなければ人も車も進めない。クーロンの法則に基づいて静止摩擦、滑り摩擦、転がり摩擦を解説する。	同上	同上

＝ 光 と 電 磁 場 ＝（ＴＶ）

〔 主 任 講 師 ： 阿 部　龍 蔵（放送大学教授）〕

全体のねらい

光は、私達の日常生活と密接な関係をもつだけでなく、大は宇宙から小は分子・原子にいたるまで、物理学上の重要な対象である。本講義では、光が電磁波であるとの前提に立ちその性質を調べるとともに、光を理解するための基礎ともいうべき電磁場を支配する基本的な物理法則について学んでいく。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	光 と 光 線	1．光線 2．光の反射・屈折 3．光の分散 4．レンズと光学器械 5．幾何光学と波動光学	阿部龍蔵（放送大学教授）	阿部龍蔵（放送大学教授）
2	波の性質 (1)	1．進行波 2．正弦波 3．波動方程式 4．ホイヘンスの原理	同 上	同 上
3	波の性質 (2)	1．反射の法則 2．屈折の法則 3．干渉と回折 4．光の干渉	同 上	同 上
4	光と電磁波	1．振動電流と電磁波 2．偏光 3．電磁波の分類 4．原子の出す光 5．レーザー	同 上	同 上
5	電 流	1．電流のキャリヤー 2．オームの法則 3．電流密度 4．ジュール熱	同 上	同 上
6	電荷と電場	1．クーロンの法則 2．電場 3．ガウスの法則 4．ガウスの法則の応用	同 上	同 上
7	電 位	1．電位 2．電位と仕事 3．導体 4．コンデンサー	同 上	同 上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	誘電体中の電場	1．誘電体 2．電気双極子 3．電気分極 4．電束密度	阿部龍蔵	阿部龍蔵
9	ベクトル解析	1．ベクトル積 2．発散と回転 3．ガウスの定理 4．ストークスの定理	同上	同上
10	磁石と磁場	1．磁石と磁荷 2．磁気双極子 3．磁化 4．磁束密度	同上	同上
11	電流と磁場	1．電流が磁場から受ける力 2．電流の作る磁場 3．小さな長方形回路の作る磁場 4．アンペールの法則	同上	同上
12	時間変化する電磁場	1．電磁誘導 2．ファラデーの法則 3．マクスウェル・アンペールの法則 4．変位電流 5．自己インダクタンス	同上	同上
13	電磁場の基礎方程式	1．積分形の諸法則 2．マクスウェルの方程式 3．電場に対する境界条件 4．磁場に対する境界条件	同上	同上
14	電磁波の性質	1．マクスウェルの方程式の特別な場合 2．1次元の電磁波 3．電磁波の反射と屈折 4．光学的な疎密と位相変化	同上	同上
15	電磁場のエネルギー	1．電場のエネルギー 2．磁場のエネルギー 3．エネルギー保存則 4．ポインティングベクトル	同上	同上

＝ エネルギーと熱（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：阿部　龍蔵（放送大学教授）〕
〔主任講師：堂寺　知成（放送大学助教授）〕

全体のねらい

エネルギーとか熱という言葉は、日常生活でもよく使われる。本講義の目的は、エネルギーと熱の物理学としての正しい理解を提供することである。このため、豊富な映像を学習の一助とするとともに、CGを駆使し分子の熱運動などを視覚的に把握できるよう試みる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	各種のエネルギー	1．エネルギーとは 2．各種のエネルギー 3．エネルギーの変換とエネルギー保存則 4．仕事	阿部龍蔵（放送大学教授）	阿部龍蔵（放送大学教授）
2	力学的エネルギー	1．運動方程式と運動エネルギー 2．力学的エネルギー保存則 3．力学的エネルギーの例 4．力学的エネルギーの散逸	同上	同上
3	温度と熱	1．温度と熱平衡 2．圧力 3．ボイル・シャルルの法則 4．理想気体の状態方程式 5．熱量と比熱 6．熱と仕事	堂寺知成（放送大学助教授）	堂寺知成（放送大学助教授）
4	熱力学第一法則	1．エネルギーの保存（熱力学第一法則） 2．熱力学第一法則の応用 3．カルノーエンジン	同上	同上
5	熱力学第二法則(1)	1．可逆過程と不可逆過程 2．クラウジウスの原理とトムソンの原理 3．可逆サイクルと不可逆サイクル 4．クラウジウスの不等式	阿部龍蔵	阿部龍蔵
6	熱力学第二法則(2)	1．エントロピー 2．不可逆過程とエントロピー 3．第二法則の応用 4．各種の熱力学関数 5．化学ポテンシャル	同上	同上
7	分子の熱運動	1．ブラウン運動 2．分子運動論	堂寺知成	堂寺知成

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	マクスウェルの速度分布則	1．平均自由行程 2．ガウス積分 3．マクスウェルの速度分布 4．マクスウェルの速度分布の応用	堂寺知成	堂寺知成
9	統計力学の基本的な考え方	1．ほとんど独立な粒子の集まり 2．位相空間 3．エルゴード仮説 4．最大確率の分布	阿部龍蔵	阿部龍蔵
10	マクスウェルーボルツマン分布	1．マクスウェルーボルツマン分布 2．ボルツマンの原理 3．理想気体への応用 4．固体の比熱（アインシュタイン模型）	同上	同上
11	熱とエントロピー	1．配置のエントロピー 2．混合エントロピー	堂寺知成	堂寺知成
12	相転移の熱力学	1．相転移 2．多成分系の熱力学 3．相平衡 4．臨界現象	阿部龍蔵	阿部龍蔵
13	気相－液相の相転移	1．ファン・デル・ワールスの状態方程式 2．ファン・デル・ワールス気体の性質 3．格子気体 4．平均場近似 5．格子気体の気相－液相相転移 6．イジング模型	同上	同上
14	量子統計力学入門	1．スピンと量子統計 2．ボース分布とフェルミ分布 3．分子の振動・回転	同上	同上
15	理想フェルミ気体と理想ボース気体	1．理想フェルミ気体 2．電子比熱 3．デバイ模型 4．固体の比熱	同上	同上

＝ 相対論（’９９）＝（R）

〔主任講師：藤井 保憲（日本福祉大学教授）〕

全体のねらい

この講義では、相対性理論全般にわたって平易な解説を目指す。数式の使用は必要最低限にし、直観的な説明を心がける。重要な点については、時間をかけて丁寧な説明をする。また相対性理論が現在の基礎研究や技術にどのように役立っているかにも焦点をあてる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	相対性理論とは何か	特殊、および一般相対性理論とはどんなものか、詳細にはいる前に概観と現代の姿を与える。次に特殊相対性理論の成り立ちにはいる。以後の説明の準備として座標系、慣性系、またガリレイ変換などを解説し、また電磁気学における光速度との関連にもふれる。	藤井保憲（日本福祉大学教授）	藤井保憲（日本福祉大学教授）
2	同時刻とはどういうことか	光速度不変の原理から出発し、直感的な議論によって同時刻の相対性や動いてる時計のおくれを示す。絶対時間概念の崩壊を強調し、ローレンツ変換を紹介する。それによって新しい速度の合成則を導く。	同上	同上
3	時空とは何か	ローレンツ変換の作用する場所としてミンコフスキー時空、その中の世界点、世界線、固有時について述べる。2次元から出発し、時代のおくれなどの現象を再現する。光円錐を説明する。4次元ベクトル、スカラー、ローレンツ不変量を解説する。	同上	同上
4	特殊相対性理論によって何がわかったか	4次元エネルギー・運動量ベクトルから$E=mc^2$を導き、原子核エネルギーについて説明する。さらに速度とエネルギーの関係も議論し、加速器の原理を述べる。ディラック方程式、それに関連してスピンについても述べる。レーザージャイロなど、最近の応用にもふれる。	同上	同上
5	パズルはいかが	特殊相対性理論にかかわるいくつかのパズルに挑戦してみる。これまでに習ったことの練習問題にもなるし、さらに深い理解の為にもなるだろう。	同上	同上
6	一般相対性理論への道	一般相対性理論に導くいくつかの概念について説明する。特に非慣性系、慣性力、2種類の質量などを通じてニュートン力学の微妙な点にふれ、等価原理を理解する。エトヴェッシュの実験もとりあげる。	同上	同上
7	曲がった時空	加速度運動をあらわす曲がった世界線から、曲がった時空への着想について述べる。曲がった空間の幾何学の話しにはいる。計量、平行性、曲率、測地線などの概念を説明する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	すべては計量から	前章で説明した諸概念を、もう少し数学的な形で提示する。つまり、計量（テンソル）、線素、接続、曲率など、リーマン幾何学の道具立てを説明するが、できるだけ直感的な方法で、一般相対論の本質の理解を助けることに重点をおく。	藤井保憲	藤井保憲
9	重力は力ではない	運動方程式としての測地線の考え方を述べる。ニュートン的極限で、計量が重力ポテンシャルと解釈できることを示す。また回転座標系における円心力の例も考察する。等価原理のさらに深い到達点として、単なる慣性力と真の重力との違いについて説明する。	同上	同上
10	重力による時計のおくれ	等価原理の適用例として重力的赤方変位を導く。Pound-Rebkaの実験、およびVessotの実験、さらにはこれを利用した重力計にも触れる。また最近の地球的規模の時計合わせの話題も含める。	同上	同上
11	アインシュタイン方程式	基本的考え方と結果を簡潔に述べる。またその苦心談も交える。ニュートン理論との関係、またその非線形性を強調する。その解として、線形解、静的厳密解、宇宙論的解があることを説明する。時空と物質との相互関係についても述べる。	同上	同上
12	ブラックホール	シュワルツシルトに関する挿話を交えながら、解の特徴を説明する。ついでブラックホールの説明にはいる。地平線の性質、またそれへの落下の様子を解説する。またブラックホールの実現性についても語る。超新星との関連にも触れる。	同上	同上
13	太陽系	水星の近日点移動、太陽のまわりの光の曲がりについて、歴史的挿話と共に説明する。ついで最近の太陽系実験について述べる。さらに連星パルサーに関する話題も含め、実験重力の発展について語る。	同上	同上
14	宇宙論	膨張宇宙の解を提示する。宇宙定数の挿話とハブルの発見について語る。赤方変位について説明し、現代のビグバン宇宙観について解説する。宇宙背景輻射、暗黒物質や宇宙定数などに関する話題も含める。	同上	同上
15	統一理論	素粒子物理学との接近について述べる。アインシュタイン理論のさらに奥にある統一理論について概説する。	同上	同上

＝量子力学＝（TV）

〔主任講師：阿部　龍蔵（放送大学教授）〕
〔主任講師：川村　　清（慶應義塾大学教授）〕

全体のねらい

分子、原子、電子などの挙動は量子力学の法則に従っている。したがって、素粒子、原子核、物性論などの現代的な物理学を理解するのに量子力学は必須の学問である。本講義では、量子力学の初等的なレベルから出発し、その基礎的な事項、応用面などに言及し、量子力学の全体像を紹介する予定である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	量子力学はなぜ必要か	1．古典物理学の破綻 2．ラザフォードの原子模型の欠点 3．水素原子のスペクトル 4．光電効果	阿部龍蔵（放送大学教授）	阿部龍蔵（放送大学教授）
2	波と粒子の二重性	1．アインシュタインの関係 2．ド・ブロイ波 3．ボーアの水素原子模型	同上	同上
3	シュレーディンガー方程式	1．古典的な波動方程式 2．シュレーディンガー方程式	同上	同上
4	シュレーディンガー方程式の簡単な例	1．波動関数 2．固い壁間の一次元粒子 3．水素原子の基底状態	同上	同上
5	一次元調和振動子	1．一次元調和振動子 2．エネルギー固有値 3．エルミート多項式	同上	同上
6	量子力学の一般原理	1．物理量と演算子 2．エルミート演算子 3．確率の法則 4．固有関数の完全性 5．行列による表現	同上	同上
7	量子力学と古典力学	1．波束 2．エーレンフェストの定理 3．不確定性原理 4．不確定性関係と交換関係	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	水素原子	1．シュレーディンガー方程式 2．球面調和関数 3．水素原子のエネルギー	阿部龍蔵	阿部龍蔵
9	角運動量	1．角運動量と角運動量保存則 2．角運動量演算子 3．角運動量保存則の証明 4．角運動量の固有値と交換関係	川村清（慶應義塾大学教授）	川村清（慶應義塾大学教授）
10	スピンと量子統計	1．スピン角運動量 2．スピン演算子とその固有値 3．スピン演算子の行列表現 4．フェルミ粒子とボーズ粒子	同上	同上
11	摂動論 (1) 時間に依存しない場合	1．摂動論とは 2．縮退のない場合の摂動論 3．縮退のある場合の摂動論 4．摂動論の応用	同上	同上
12	摂動論 (2) 時間に依存する場合	1．量子状態の時間変化 2．遷移確率 3．エネルギーの不確定性 4．原子による光の吸収と放出	同上	同上
13	変分法	1．変分原理 2．ラグランジュの未定係数法 3．ハートレー・フォック近似 4．パウリの原理と原子の構造	同上	同上
14	散乱問題 (1) 1次元系	1．1次元の散乱問題 2．ポテンシャル障壁とトンネル効果 3．電流連続の法則	同上	同上
15	散乱問題 (2) 3次元系	1．ド・ブロイ波の散乱 2．遠方での漸近形 3．入射波の波長と散乱角の関係 4．散乱断面積	同上	同上

＝現代物理学＝（TV）

〔主任講師：小沼　通二（武蔵工業大学教授）〕

全体のねらい

自然現象は、すべて基本的な法則に従っている。物理学は基本的な法則を次々に明らかにしてきた。20世紀の物理は特に大きな発展を遂げた。その成果は、興味深く、今日の技術に、そして生活に密接に関わっている。この講義では、現代の物理学の基本的な問題を丁寧に取り上げる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代の物理学	力学や電磁気学を中心にして確立したと思われた19世紀までの物理の限界を明らかにして、大きな飛躍を遂げた20世紀の物理の特徴を概観する。	小沼通二（武蔵工業大学教授）	小沼通二（武蔵工業大学教授）
2	相対性理論とは	アインシュタインはどのようにして相対性理論を作ったか。それまでの時間の概念はどのように変更されたか。その結果何が起こったか。	同上	同上
3	4次元の世界	相対性理論では、時間と空間の4次元の世界を扱わなければならない。その分析から、質量とエネルギーのアインシュタインの関係を導く。	同上	同上
4	重力と相対性理論	重力のある場合に拡張された一般相対性理論によれば、重力の影響で、光も曲がる。密度が極端に大きい天体であるブラックホールの近くでは重力がきわめて強くなっている。	同上	同上
5	量子の世界	20世紀の開幕とともに光が粒子のような性質を持つことが明らかになった。続いて粒子も波の性質を持つことがわかった。この二重性はなにを意味したのか？　量子力学への道をたどる。	同上	同上
6	量子力学では	量子力学の波動の特徴を、いくつかの例を使って明らかにする。元素の周期表は量子力学によって理解できる。	同上	同上
7	反粒子の存在	極微粒子の世界では、質量その他の性質が同じで、電荷などの量子数が逆の符号を持つ反粒子が存在する。特に電子の反粒子である陽電子は、研究用だけでなく、社会においても有効に利用されている。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	加速器の物理	電磁気の力で微粒子を加速し、激しい衝突をさせてこれらの粒子の内部構造を調べたり、衝突の際に作られる粒子を分析することができる加速器が発明された。今日の加速器は広い科学技術の分野で応用・利用されている。	小沼通二	小沼通二
9	原子核とは	原子の芯の原子核は陽子と中性子が集まってできている。原子核の性質を調べ、原子核の構造を分析する。	同上	同上
10	原子核の変化	中世の錬金術の失敗以来、不変と思われてきた元素は、加速器を使って人工的に、また放射能を利用して天然に変化させることができるようになった。人類はプルトニウムなどの天然に存在しない元素も作り出した。	同上	同上
11	素粒子とは	自然界のあらゆるものは、素粒子からできている。かつては陽子や中性子が基本的な素粒子とされていたが、今日ではクォークとレプトンが基本とされている。	同上	同上
12	基本的な力	19世紀までに知られていた電磁気力と重力に、強い力と弱い力を加えた4つの力と、これらの力を媒介する粒子によって、自然界のすべての相互作用は説明できる。	同上	同上
13	宇宙の現在の姿	最近のいろいろな観測によって明らかになった現在の宇宙の姿を調べる。地球・月・太陽から太陽系・恒星・銀河に目を広げていこう。	表實（慶應義塾大学教授）	表實（慶應義塾大学教授）
14	宇宙の過去と未来	宇宙は不変でなく、進化している。これは観測によって裏付けられている。宇宙の年齢と今後について学ぼう。	同上	同上
15	物理と社会	物理は他の科学や技術に大きな影響を与え、技術の発展の成果が物理の研究にも貢献してきた。20世紀は、物理が 国際社会の政治・経済・軍事などに深く関わった時代であった。これからの科学はどうあるべきだろうか。	小沼通二	小沼通二

＝ 物性物理学入門（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：藤原　毅夫（東京大学教授）〕

全体のねらい

多様な物質のミクロな構造やマクロな諸性質を物理学の立場から理解し、物理的な物の見方を身に付けるとともにそれらを支配する物理法則を理解する。現代の日常生活のすみずみにまでいき渡っている物性物理学の、技術としての一端も理解されるように努める。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	物性物理学とは	物性物理学は力学、電磁気学とは違い開いた体系である。このような側面から説明し、物性物理学が自然科学の最先端をリードしていることを概観する。さらに物性物理学を学ぶ際の単位の重要性を強調し、ＳＩ単位系で物質系の諸量を見る。	藤原毅夫（東京大学教授）	藤原毅夫（東京大学教授）
2	物質の構造・結合	固体のミクロな構造が原子の周期的な配列であることを知り、原子配列と固体結合のメカニズムとの関係を理解する。さらに結晶構造を記述するいくつかの概念を説明する。	同　上	同　上
3	物質の構造とＸ線・粒子線構造学	物質の構造やその乱れを観察する手段であるＸ線・粒子線構造学について述べる。物質の構造の乱れの概念を把握し実際に観察する。	同　上	同　上
4	固体の弾塑性	物質の力学的性質について学ぶ。弾性、塑性、破断という過程を理解し、フックの法則を考える。固体の変形、歪み、応力の概念を理解し、結晶の対称性と歪みテンソルの関係を学ぶ。	同　上	同　上
5	固体の動力学と格子振動	物質の動力学的性質を原子論的立場から理解する。特に原子間相互作用を調和振動として取り扱い、音波の伝搬について理解し、また熱膨張と原子間相互作用の非調和性との関連、格子比熱とフォノンについても学ぶ。	同　上	同　上
6	結晶中の電子の振る舞い１．量子力学	固体中の電子性質を理解するための準備として、量子力学の復習を行う。シュレディンガー方程式、球対称ポテンシャルの場合の解（s, p, d, f, ...）、スピン、電子とフェルミ統計、交換相互作用、パウリの原理、電子相関など。	同　上	同　上
7	結晶中の電子の振る舞い２．電子のエネルギーバンド	固体中の電子の性質を周期ポテンシャルとの関連で理解する。ブリルアンゾーンと結合・反結合軌道について知り、電子のエネルギーバンドの概念を理解する。バンドギャップについて学び、金属と絶縁体の区別を明確にする。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	固体の光学的性質	光物性の基本について学ぶ。物質の色（金属、絶縁体、宝石の色）がどのように現れるかの問題意識を実際の物質に即して理解し、ローレンツモデル、ドルーデモデルおよびエキシトンについて学ぶ。	藤原毅夫	藤原毅夫
9	金属と電子輸送	金属の物性について電子論の立場から学ぶ。特に弾塑性と金属結合、バンド構造、フェルミ面の概念を理解する。フェルミ、ディラック分布から電子比熱を理解する。さらにドルーデモデル、電気伝導、熱伝導、金属の帯磁率にも触れる。	同上	同上
10	半導体	半導体の物性について電子論の立場から学ぶ。特に構造と共有結合、バンド構造、電子とホール（キャリア）および真性半導体と不純物半導体、キャリアドーピングの概念を理解する。半導体伝導、簡単なp-n接合、トランジスタについても述べる。	同上	同上
11	磁性	物質の磁気的性質についてミクロな立場から学ぶ。反磁性と常磁性の区別、スピン、スピン間相互作用を電子的な立場から説明する。協力現象（強磁性、反強磁性）の概念と磁化、磁化率について学ぶ。	同上	同上
12	相転移	強磁性を例に相転移の現象論を学ぶ。物質の相、自由エネルギー、平均場近似の取り扱い、1次転移と2次転移、オーダーパラメター、ランダウの相転移理論について述べる。	同上	同上
13	超伝導	超伝導とは何か、現象の理解とその熱力学を説明し電子間相互作用とフェルミ面の不安定性について学ぶ。電子波動関数の位相の重要性とジョセフソン効果についても触れる。	同上	同上
14	ソフトマターの構造	新しい材料として注目されているソフトマターについて、構造の階層性、高次構造、共重合とマクロ相分離、体積排除効果を学び、その多様性を理解する。	同上	同上
15	ソフトマターの物性	ソフトマターの物性の基礎である分子鎖の形態、ゴム弾性、ゲルを学び、粘弾性（レオロジー）などの物性を概観する。	同上	同上

＝ 物質の科学・量子化学（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：朽津　耕三（城西大学教授）〕
〔主任講師：濱田　嘉昭（放送大学助教授）〕

全体のねらい

物質の織りなす様々な現象を理解し、特に化学的な知識と技術で物質を調べ、あるいは新しい物質を創造するには分子およびその集合体の性質を量子論に基づいて理解することが必要である。この自然科学の重要な分野である量子化学の基礎をわかりやすく講義するとともに、日常の自然現象の理解あるいは様々な物質研究への量子化学の適用例を紹介する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序論－物質の個性と分子の個性	物質の基本単位である分子は非常に小さく、軽いばかりでなく、マクロの物質の性質とは異なった独特の個性を持っている。われわれが見たり触れたりするマクロの物質の性質は、それを構成する分子の個性によって決められている。その関連について説明する。	朽津耕三（城西大学教授）	朽津耕三（城西大学教授）
2	ミクロの世界の記述	分子の不思議な性質・挙動を理解するには、ミクロの粒子の運動と性質を正しく記述する量子力学を学ぶ必要がある。分子に適用する量子力学として、波動関数とエネルギー固有値という考え方の基本について説明する。	同上	同上
3	原子の電子構造	分子は原子が結合してできたものである。分子の成り立ちを理解するには原子の性質、特に原子の中の電子の性質を知る必要がある。電子のエネルギーと電子が運動する空間＝オービタルについての考え方を量子力学に基づいて説明する。	同上	同上
4	原子から分子へ－化学結合のなりたち	原子と原子が結合して分子を形づくる理由を原子価結合法と分子軌道法の考え方で説明する。分子軌道の対称性、ポテンシャルエネルギー曲線、および量子状態の考え方について説明する。	同上	同上
5	二原子分子の結合と電子構造	いくつかの典型的な二原子分子をとって、分子軌道の性質、電子の配置、軌道エネルギーなどを説明する。電荷分布の偏り、結合の強さと分子軌道の関連について説明する。	同上	同上
6	多原子分子の結合と電子構造	有機化合物の結合を考える場合に重要な混成軌道について述べ、分子の化学的性質を理解する上で重要な分子軌道の考え方と使い方について説明する。	濱田嘉昭（放送大学助教授）	同上
7	ミクロの世界の観測	分子を実験的に測定する方法の特徴を解説し、特に量子化されたエネルギー準位の間の遷移を測定する分光法の原理を詳しく説明する。分光法の特徴を利用した分子構造研究の例を紹介する。	同上	濱田嘉昭（放送大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	π電子系の電子構造	電子のエネルギー準位を測定する可視・紫外スペクトルについて述べる。電子遷移は物体の色に直接の関連した現象であることを説明し、実例としてカラー写真およびカラーコピーの原理と実際を解説する。	濱田嘉昭	濱田嘉昭
9	d電子系の電子構造	第4周期以降の原子からなる分子の化学結合にはd電子が関与する。また金属と有機分子を含む化合物でもd電子が関与しており、複雑な色合いや反応の原因となっている。分子構造を決める有力な実験手法の一つであるX線回折法について、錯体の構造と電子密度を例にとって説明する。	齋藤太郎（神奈川大学教授）	齋藤太郎（神奈川大学教授）
10	分子の振動	分子の結合は微小な周期的振動をしている。この振動運動のエネルギーを赤外線スペクトルとして測定することにより、結合の強さを決定できる。振動分光法とその応用について解説する。	濱田嘉昭	濱田嘉昭
11	分子の回転	分子の回転運動のエネルギーも量子化されており、そのスペクトルをマイクロ波あるいは遠赤外線領域で測定することにより分子構造を決めることを実例によって示す。	同上	同上
12	電子スピンと核スピン	電子スピンや核スピンが関係するスペクトルについて説明する。電子スピン共鳴法や核磁気共鳴法を利用した分子構造決定の例を紹介し、分子磁性を利用した将来の発展性を考える。	濱田嘉昭 工位武治（大阪市立大学教授）	濱田嘉昭 工位武治（大阪市立大学教授）
13	分子の動的構造	非常に短い時間スケールで分子の構造や結合の変化はレーザーにより追跡できる。レーザーの発振の原理と特徴について解説し、それによって明らかにされた分子の姿の例を紹介する。	佐藤博保（三重大学教授）	佐藤博保（三重大学教授）
14	分子間相互作用	マクロの物体は多くの分子が積み重なってできあがっている。この分子同士を結びつけている弱い力の原因について述べる。マクロとミクロを結ぶ分子集合体として注目を集めているいくつかの物質系とその性質および実験について紹介する。	朽津耕三	朽津耕三
15	量子化学の最前線	分子の構造と性質を測定する実験手段と理論の現在の展開を概観し、新しい物質の個性を創造する化学の将来の見通しを述べる。	同上	同上

＝ 物質の科学・反応と物性（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：土屋　荘次（日本女子大学教授）〕
〔主任講師：平川　暁子（　放送大学教授　）〕

全体のねらい

この講義では、物質の示すさまざまな状態・性質と化学変化を熱力学と反応速度論という２つの方法論によって探求する。方法論の原則を実験事実を通して理解し易く解説することを念頭におく。なお、これらの原則がどのように現代の先端的な問題に関連しているかの解説にも留意する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序論：物質探究の方法論	本講義の目標と背景、その概要を説明する。物質の科学は、物質のもつさまざまな特性を原子・分子のレベルで探求する学問である。この講義では、主として熱力学と反応速度論に基づいて物質の反応と物性を解き明かす予定である。	土屋荘次（日本女子大学教授）	土屋荘次（日本女子大学教授）
2	物質のもつエネルギー	物質はそれを構成する原子分子の運動による固有なエネルギーをもっている。エネルギーの大きさを規定しているのは温度であり、また、エネルギーの変化は、熱や仕事として認識される。この章の目標は、物質のエネルギーの根源とその変化について学ぶことである。	同上	同上
3	熱化学	物質の化学変化にともなってエネルギーの吸収、または放出がある。この章では、物質の構成成分について標準状態エネルギーを定義することによって、結合エネルギーなど物質固有なエネルギー、および反応にともなうエネルギー変化を考察する。	同上	同上
4	物質のエントロピー	物質の状態を規定するには、エネルギー以外にエントロピーという物質固有な物理量を必要とする。この章では、エントロピーの物理的な意義とそれが何故物質の状態を支配するのかを説明する。	同上	同上
5	化学平衡	物質の化学変化や状態変化は、最終的には平衡状態となる。この講義では、平衡状態がギブスエネルギーが最小となる条件で達成されることを説明し、化学平衡への応用を考察する。	同上	同上
6	相平衡	物質は、固体、液体、気体の3つの状態のいずれかをとる。純物質について、どのような条件でどのような状態をとるかを論ずるのが本章の課題である。	同上	同上
7	溶液	2つの成分物質の混合系のとりうる状態を論ずるのを目的とする。組成によって平衡状態がどう違って来るのか、また、「溶ける」とはどういうことなのかも論ずる予定である。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	相転移	物質の気体、液体、固体の3つの状態間の相の変化の他に、結晶や液体状態で様々な相変化（相転移）をする物質が数多く存在する。相転移がなぜ起こるのかを、エネルギーとエントロピーの立場から、いくつかの例で解説する。	徂徠道夫（大阪大学教授）	徂徠道夫（大阪大学教授）
9	高分子の構造	高分子物質の多彩な性質は、それがとり得る複雑な構造とその分子運動に起因している。ここでは高分子の構造を、単量体の一次構から始めて、高分子鎖の一次構造、二次構造、高次構造を主として熱力学の立場から、説明する。	西敏夫（東京大学教授）	西敏夫（東京大学教授）
10	高分子の物性	高分子に特徴的な物性として、ゴム弾性やゲルの物性、高性能繊維、粘弾性などを取り上げ、構造と物性の関係を説明する。また、機能性高分子の例として、光学的特性、導電性、圧電性などを示すと共に、これからの高分子の可能性について述べる。	同上	同上
11	化学反応のしくみ(1)	物質の化学変化、つまり、反応の速度をどう表現するのか、その速度を支配しているものは何かなど、反応速度の基本を学ぶ。	土屋荘次	土屋荘次
12	化学反応のしくみ(2)	化学反応は、原子分子同士の衝突によって起こる多くの素反応から組み立てられる複合反応の形式をとる。その場合、反応を推進する機構がどうなっているかを燃焼や爆発反応などの例について学ぶ。	同上	同上
13	大気の科学	地球の大気は太陽光をエネルギー源とした光化学反応の場である。この章では、オゾン層の生成などの自然大気で起っている光化学反応と、人間活動によって大気中に放出された汚染気体が起す光化学反応を学び、同時に人間活動が自然に与える影響を考える。	鷲田伸明（国立環境研究所部長）	鷲田伸明（国立環境研究所部長）
14	エネルギーの変換の化学	電子のやりとりで進むプロセスのあらましを説明し、エネルギー変換の原理を解説する。とくに、人間社会にとってもっとも重要なエネルギー変換である光合成をとり上げ、光エネルギー変換のメカニズムを検討する。	渡邊正（東京大学教授）	渡邊正（東京大学教授）
15	触媒の化学	われわれの生活は、さまざまな有用な合成物質に支えられている。それらの大部分は、触媒という特定の化学反応を媒介する機能物質によって合成される。この章では、触媒のもつ反応メカニズムを学び、その多様な可能性を探る。	御園生誠（東京大学名誉教授）	御園生誠（東京大学名誉教授）

＝　物質の科学・有機化合物（９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：徳丸　克己（筑波大学名誉教授）〕

全体のねらい

有機化合物は吾々の衣食住の数多くの材料として、自動車や電気製品などに、また半導体、情報表示機器、高度の医薬など先端的産業に不可欠の物質として数多く使用されている。このような産業の基礎物質の有機化合物を主題として、その製造の流れ、特徴、その反応や物性に及ぼす構造の効果を分子レベルで述べる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	有機化合物の世界～化学原料としての石油～	有機化合物とは、有機化合物と人間生活とのかかわりあい、エネルギーとしての炭素資源：炭素、都市ガス、炭水化物等、有機化合物の原料としての炭素資源、石油から多様な有機化合物の製造：石油化学工業、産業における化学工業の役割	徳丸克己（筑波大学名誉教授）	徳丸克己（筑波大学名誉教授）
2	都市ガス、ロウソク、ポリエチレン	種々の形の炭化水素：アルカン、シクロアルカン、アルケンと幾何異性、アルキン、芳香族炭化水素（アレーン）、炭化水素分子の構造：電子の原子や分子における軌道と結合の形成、種々の炭化水素とそのポリマー：種々のアルカン、回転異性、エチレンの特徴	同上	同上
3	香りのもとの酸素化合物	エチレンの高い反応性、エチレンと塩素の反応：ポリ塩化ビニル、フロン、エチレンと酸素の反応：アセトアルデヒド、オキシラン、エチレングリコール、エチレンと水の反応、アルコール、酸素化合物、香料	同上	同上
4	反応の進み方	アルケンへの酸解媒下の水の付加と塩化水素の付加：共役と超共役、遷移状態と反応の中間体、ハロゲン化炭化水素の加水分解：２分子的および１分子的求核置換反応、光学異性体、立体化学、カルボカチオンとその観測	同上	同上
5	油脂と洗剤	カルボン酸とその酸性、酢酸、水素結合、エステル、天然の油脂、飽和および不飽和カルボン酸、油の酸化、界面活性剤（陰イオン性、陽イオン性、非イオン性）	同上	同上
6	合成繊維と炭素材料	ポリエステル(PET)、ポリ（アクリロニトリル）（通称アクリル）、さまざまな炭素：グラファイトとダイヤモンド、炭素繊維、ダイヤモンドの合成、フラーレン（通称サッカーボール）	同上	同上
7	染料と芳香族化合物の反応の進み方	ベンゼン環とその安定性、共鳴（非局在化）エネルギー、芳香環のニトロ化、オルト・パラ配向とメタ配向、パイ電子系の分子軌道、スチレン、ポリスチレンとフェノール、アニリン、ポリウレタン、染料（天然、合成）と顔料	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	プラスチック、ナイロンと絹	絹とポリアミド：ナイロン（繊維、エンジニアリングプラスチック）、繊維の構造、人工皮革と吸水性高分子（おむつの材料）、熱可塑性樹脂：有機ガラス	徳丸克己	徳丸克己
9	高性能ポリマーと酸素による劣化の抑止	分子内回転と立体規則的高分子、アタクティック、アイソタクティック、シンジオタクティック、天然ゴムと合成ゴム、機能性高分子・複合材料、酸化劣化、フリーラジカルと酸素、酸化防止剤、種々の酸素：一重項酸素	同上	徳丸克己 桜木宏親（筑波大学）
10	光による物質の変化	光励起状態の特徴、光の吸収と発光（蛍光と燐光）、化学反応による励起状態の生成（化学発光）、励起状態の行う結合の開裂（光リソグラフィ、ナイロンの原料製造）、光による結合の組み替え：異性化、光による電子移動（緑色植物の光合成、水の分解、太陽電池）	同上	徳丸克己 荒川裕則（工業技術物質研究所） 村田重夫（工業技術物質研究所）
11	光・電子有機機能材料の化学	光の作用による化学変化：発色、フォトクロミズム、画像形成：銀塩写真、電場の作用による励起分子の生成：エレクトロルミネッセンス、電場と光の作用によるイオンの形成と移動：電子写真（コピー）、電気を導く高分子	同上	徳丸克己 入江正浩（九州大学） 城田靖彦（大阪大学）
12	調味料、医薬、農薬	化学調味料とキラリティ、立体異性体、鏡像異性体、キラリティの発言、農薬、ビタミンと医薬	同上	徳丸克己
13	天然有機化合物の世界	イチョウの成分ギンコライド、昆虫の脱皮ホルモン、昆虫の幼若ホルモン、イソギンチャクとクマノミの共生物質、発ガン物質と制ガン剤、視覚と視物質ロドプシン、キラリティと生物活性、アメリカゴキブリの性興奮フェロモン	中西香爾（米国、コロンビア大学教授）	中西香爾（米国、コロンビア大学教授）
14	有機ケイ素化合物の世界	ケイ素と有機ケイ素化学、シリコーン工業と種々のケイ素材料（高弾性のシリコーンゴム、コンタクトレンズ、新幹線の変圧器の油等）、有機ケイ素化合物の構造と反応	櫻井英樹（東京理科大学教授）	櫻井英樹（東京理科大学教授）
15	拡がりゆく有機化合物の世界	ナノメートの化学の世界：走査型トンネル顕微鏡等による分子とその配列の直接観察、分子とその集合体：フリーラジカルと有機強磁性体、有機化合物の機能の光と影、物質の科学と産業の創造と発展	徳丸克己	徳丸克己 F.C. DeSchryver（ベルギールーバン大学）

＝　物質の科学・分析（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：一國　雅巳（東京工業大学名誉教授）〕

全体のねらい

科学技術の進歩に伴って多種多様な化学分析法が開発されてきた。それに伴って化学分析に対する要求も高度化し、分析法の選択に当たっては、それぞれの分析法にどのような特徴があるかを知らなければならない。この講義の目標はそのための基礎知識を与えることにある。環境分析を例に具体的問題を取り扱う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	化学分析とはなにか	現代の化学分析は機器を用いた定量分析が主流である。化学分析に要求される条件として正確さ、迅速性、コストがある。機器の高度化、コンピュータの導入はこれらの要求を満足する上での当然の帰結であり、この進歩を支えているのが化学分析の基礎研究である。	一國雅巳（東京工業大学名誉教授）	一國雅巳（東京工業大学名誉教授）
2	容量分析	滴定を例に化学分析でどこまで正確な結果が得られるかを考察する。試薬の秤量、標準溶液の調製、滴定量の測定、終点の判定、妨害成分の共存など誤差の原因となる事項を個別的に検討する。終点の決定に機器分析を導入することの利点についても述べる。	同上	同上
3	重量分析	重量分析は正確さが要求されるときに用いられる分析法である。重量分析の核心部分は溶液中の化学種の沈殿分離にあるが、その研究は溶液中のイオン種の挙動の解明と沈殿分離法の開発に大きく貢献した。重量分析を原理と実用性の両面から解説する。	同上	同上
4	吸光光度分析	着色した溶液が光を吸収することを利用した吸光光度分析は古典的機器分析である。原理は簡単であるが、実用面では発色条件の最適化、検量線の作成、共存成分による妨害の除去などの問題がある。この分析法を例に機器分析の基本的事項について解説する。	一國雅巳 吉村和久（九州大学教授）	同上
5	原子吸光分析	金属元素の分析法として広く利用されている原子吸光分析の原理・応用とその限界について述べる。この分析法では試料中の成分の原子化と共存成分による干渉の除去が重要である。フレーム、電熱による原子化を比較し、この分析法の高感度化について解説する。	一國雅巳	同上
6	発光分光分析	標題分析法の原理、その発展の歴史と現状について述べる。古典的アーク、スパーク光源を用いた分析、フレーム光源の実用化によるアルカリ金属定量、近年におけるプラズマ光源の導入が実現した高感度・多元素同時分析について解説する。	同上	同上
7	試料の採取と調製	与えられた試料が大量である場合、そこから全体を代表するように、一部分を取り出し、それを分析に適した形態、たとえば溶液に変える操作が必要となる。試料の採取における問題点、分析データ処理の方法、固体試料の溶解法について述べる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	分離と濃縮	マトリックス成分から特定の成分を分離・濃縮する方法について述べる。沈殿、溶媒抽出は古典的分離法であるが、分離に関与する因子の影響を定量的に解析することができる。分離・濃縮法と定量法が密接に関連していることを例をあげて説明する。	一國雅巳	一國雅巳
9	電気分析	電気分析を物性特性（電気伝導度など）と電気化学反応を伴う測定（電位差、電流など）に分け、それぞれの方法の原理、特徴、装置、応用例について述べる。ガラス電極などのイオン選択電極を用いた電位差測定と他の分析法との組み合わせにも言及する。	同上	同上
10	質量分析	高感度分析法としての質量分析の重要性について述べる。試料をイオン化し、イオンを質量／電荷比に従って分離し、電気的に検出するまでの過程について説明する。目的に応じて使用される各種の質量分析計とその応用例（同位体存在比の測定など）を紹介する。	同上	同上
11	放射化分析	試料を中性子で照射し、生成した放射性核種が放射するγ線のエネルギーと強度を利用して定性、定量分析を行う方法、とくに機器中性子放射化分析について解説する。実際の操作を説明し、環境試料の分析で得られた結果を紹介する。	一國雅巳 松尾基之（東京大学助教授）	同上
12	ガスクロマトグラフィー	分離手段としてのクロマトグラフィーの重要性を述べ、用語の解説を含めてその種類、原理、装置に関する基礎的事項を説明する。ガスクロマトグラフィーを例に試料中の成分の定性、定量法を示し、この方法の実用面における重要性を探る。	一國雅巳	同上
13	液体クロマトグラフィー	ガスクロマトグラフィーと比較しながら液体クロマトグラフィーの特徴を述べる。多様な検出器の利用、高速液体クロマトグラフィーによる分析の迅速化について解説する。無機陰イオンの分析手段として重要なイオンクロマトグラフィーを紹介する。	同上	同上
14	状態分析	複雑な混合物中の特定の元素の存在状態を調べるための方法について解説する。非破壊的な方法として結晶相を調べるX線回折法、鉄の化学的状態を調べるメスバウアー分光法について述べる。複雑な混合物中の元素に適用される分別溶解法についても言及する。	一國雅巳 松尾基之	一國雅巳 松尾基之（東京大学助教授）
15	環境分析	環境試料を例に試料からできるだけ多くの化学的情報を取り出すための化学分析について考える。非破壊的分析の必要性を述べ、その例として蛍光X線分析その他の方法を紹介する。環境分析を通じて今後の化学分析のあるべき姿を議論する。	一國雅巳	一國雅巳

＝ 化 学 熱 力 学 ＝（R）

〔主任講師：池上　雄作（東北大学名誉教授）〕

全体のねらい

物質の状態の変化や化学変化はつねに発熱や吸熱といった熱の移動を伴う。化学熱力学は熱の存在や移動に関してあらゆる物質系を通して統一的、体系的に解釈する基本的学理である。その基礎の理解に向かって学習する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	物質の理解	多様な化学物質や構成をどう理解するかについて述べ、原子・分子・イオン・モルの概念を簡潔にまとめる。さらに物質の三態や変化について熱力学と関わりの深いことがらに重点をおいて解説する。	池上雄作（東北大学名誉教授）	池上雄作（東北大学名誉教授）
2	気体の性質	化学熱力学の理解にとって気体の性質を知ることが一つの基本となる。Boyle の法則からはじめ、理想気体の状態方程式などをまとめたあと、P、V、Tの意味を含めて気体の一般的性質を学習する。	同上	同上
3	エネルギーと熱	広い視野から“仕事をする能力”としてのエネルギーのいろいろな姿と相互の変換について整理する。つづいて、エネルギー、熱、温度について述べたあと、物質に内在するエネルギーに関する考え方を概説する。	同上	同上
4	物質の状態と熱	熱力学における系の概念、系のエネルギー、内部エネルギー、熱力学第一法則を解説する。そして可逆過程と非可逆過程、状態量、状態関数、容量因子と強度因子について詳しく説明する。	長谷部亨（福島大学教授）	長谷部亨（福島大学教授）
5	熱化学方程式とエンタルピー	熱容量とエンタルピーを導入してその関係を説明する。さらに化学変化とエンタルピーの関係を学び、熱化学方程式の理解を深める。Hessの法則を含む。	同上	同上
6	物質の変化とエンタルピー	標準エンタルピーを定義し、物質の変化に伴うエンタルピー変化を学ぶ。さらにBorn-Haberのエネルギーサイクルを理解し、格子エンタルピーや結合エンタルピー等を求める方法を説明する。	同上	同上
7	物質変化の方向 (1)	自発的に起こる変化について、前章までに学んだ概念では説明できないことを取り上げる。熱力学第二法則を導入し、自発変化の説明に“乱雑さ”の関数が必要であることを解説し、エントロピーの定義と求め方を学ぶ。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	物質変化の方向(2)	分子１個の場合のエネルギーと分子集団のエネルギーの比較から乱雑さとエネルギーの関係を説明し、エントロピーの統計論的定義を解説する。さらに、熱力学第三法則と絶対エントロピーを導入する。	長谷部亨	長谷部亨
9	物質変化の方向と自由エネルギー	自由エネルギーの概念（Gibbs とHelmholtz の自由エネルギー）を導入する。系のエンタルピーおよびエントロピーと自由エネルギーの関係を説明し、自由エネルギーの求め方を述べる。	同上	同上
10	自由エネルギーと化学変化(1)	具体的な化学変化と自由エネルギーの関係を理解し、圧力、温度との関係を学ぶ。実在気体の自由エネルギーを用いた取扱いについても解説する。	同上	同上
11	自由エネルギーと化学変化(2)	熱力学の関係式を理解し、化学ポテンシャルの概念と自由エネルギーとの関係を解説する。化学熱力学の基礎方程式にも触れ、化学変化の終点である平衡状態におよぼす外的条件を論考する。	同上	同上
12	物質の相平衡および溶液	前回までに解説してきた化学熱力学の基本的な学理を物質系の性質により具体的に拡張する。最初に水を、そして物質の相の安定性、相移転、つづいて溶液を取りあげる。	同上	同上
13	化学平衡	自由エネルギーと平衡定数を中心に詳しく解説する。平衡に及ぼす温度や圧力の影響、ル・シャトリエの原理、自発変化の方向に対する温度の効果等が取り上げられる。	同上	同上
14	化学反応の速度	化学反応の速度や反応機構は熱力学的数値と密接な関係をもつ。化学反応速度論と結びつけて解説する。反応座標とエネルギーの関係、活性化エネルギーおよび遷移状態理論が対象となる。	同上	同上
15	まとめ	物質変化と化学熱力学の総合的理解にとって基本的な事項をまとめる。つづいて、応用例として凝固点降下と中和エンタルピーの求め方を解説する。	同上	同上

＝ 光と物質（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：伊藤　道也（金沢大学名誉教授）〕

全体のねらい

「我々は光の中に生きている」ということが出来る。これは我々が「光と物質の関わり」のもとで生きていることを意味している。本講義では、「光と分子の関わり」の基本的理論と、これから生まれたレーザーなど新しい研究方法による成果を講義する。またこれを基礎として、我々の生活に最も重要なテーマの先端的成果を紹介する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	光について	光の性質すなわち波長、振動数などについての概説と、光のエネルギーと分子のエネルギーとの対応を説明する。また、分子軌道と電子エネルギー準位と、ボルツマン分布からみた、各準位の分布について講義する。	伊藤道也（金沢大学名誉教授）	伊藤道也（金沢大学名誉教授）
2	光と分子の関わり	分子による光の吸収の原理と意義を説明する。光の吸収における遷移モーメントと吸収強度、フランク・コンドン原理と吸収スペクトルの振動構造などの一般的性質について講義する。	同上	同上
3	光により励起された分子の性質　Ⅰ	励起状態の分子がどのようにエネルギーを失うかを講義する。そのエネルギー消失の主な過程である蛍光スペクトルとその減衰過程について説明する。また蛍光スペクトルと蛍光励起スペクトルや吸収スペクトルとの鏡像関係について講義する。	同上	同上
4	光により励起された分子の性質　Ⅱ	芳香族化合物の三重項励起状態の生成と三重項状態分子の特異な性質について講義する。一重項や三重項励起状態分子のエネルギー移動とその簡単な理論、これを利用した増感現象などについて講義する。我々の生活に最も重要な、酸素分子や活性酸素などについても講義する。	同上	同上
5	光により励起された分子の性質　Ⅲ	電子励起状態における幾何構造の変化、とくに二つのπ電子系をつなぐ結合のねじれ、シス－トランス異性化反応、フォトクロミズムなどについて講義する。それと関連して化学発光（“ひずみ”のある分子の熱分解反応）や、生物発光（ほたる類やおわんくらげ）についての最近の研究成果も紹介する。	同上	同上
6	レーザーと超高速分光	光の化学現象における閃光光分解法から超高速レーザー分光への発展をたどる。レーザーの原理とレーザー光の性質を概説するとともに、ナノ秒からピコ秒フェムト秒パルスレーザーの現状を紹介する。超高速分光の基礎として、連続反応や励起状態の反応の解析法や、時間分解蛍光分光法について講義する。	同上	同上
7	レーザー光で光化学反応を追う　Ⅰ	超高速分光としての時間分解吸収スペクトルの測定法と解析法について概説する。これをもとに、光励起状態の反応の典型的な反応である励起状態プロトン移動について、代表的化合物を例として解説する。とくに、励起状態プロトン移動を、溶液中から超音速ジェット（冷却気相）中の水素結合クラスターの構造と反応について、最新の研究成果も含め講義する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	レーザー光で光化学反応を追う　II	芳香族化合物における分子間、分子内励起状態電子移動を超高速分光の立場から概説する。とくに励起状態分子錯体における電子移動を、溶液中と超音速ジェット中のファンデルワールス錯体やクラスター中の電子移動について講義する。さらに、励起状態電子移動に関連する反応に対する、外部磁場効果について最近の現状も紹介する。	伊藤道也	伊藤道也
9	光合成　I	地球上で最大の光反応である植物の光合成をとりあげ、その人間生活における意義を述べ、光合成体の構造と機能について講義する。光合成生物の進化についても述べる。	吉原經太郎（北陸先端科学技術大学院大学教授）	吉原經太郎（北陸先端科学技術大学院大学教授）
10	光合成　II	光合成による太陽エネルギーの補足と、クロロフィル間のエネルギー移動がいかに効率的に起っているか、電子リレー系における電子移動についての先端的成果を講義する。 これらの理解の基礎として電子移動の理論を解説する。	同上	同上
11	視覚：高効率の光情報変換系	目の中で光を最初に吸収するタンパク質（視物質）の分子構造や光化学的な性質を基に、我々の視覚がなぜ高感度なのか、なぜ色を見ることが出来るのか、また、明るさの極端に違うところでも、なぜ物を見ることが出来るのかを講義する。	七田芳則（京都大学教授）	七田芳則（京都大学教授）
12	光と環境科学	地球規模の大気環境問題から都市大気汚染まで、大気環境の多くの問題は太陽光による光化学反応や光化学過程に関係している。本講では光化学と大気環境問題の関わりについて講義する。	鷲田伸明（国立環境研究所部長）	鷲田伸明（国立環境研究所部長）
13	太陽光紫外線とからだ	太陽光短波長紫外線（ＵＶＢ）の我々のからだに対する影響を講義する。すなわち、細胞致死、突然変異誘発、ＤＮＡ損傷の波長依存性を講義する。さらに紫外線損傷と修復の分子機構の最近の進歩を述べる。	二階堂修（金沢大学教授）	二階堂修（金沢大学教授）
14	光触媒反応	固体表面の光触媒効果が注目されている。本講では、酸化還元反応の光誘起効果をとりあげる。具体的には、チタン表面における特異な性質、すなわち異常な親水性や親油性の最近の研究とその利用について講義する。	橋本和仁（東京大学教授）	橋本和仁（東京大学教授）
15	光と磁性	有機化合物材料をベースとした磁性の研究が盛んになって来ている。本講では、有機金属錯体の磁性特性の光制御について講義する。とくにカラー磁性体の光制御、光誘起強磁性体について講義する。	同上	同上

＝ 生 命 と 物 質 ＝（ＴＶ）

〔 主 任 講 師 ： 中 澤　透（放送大学教授）〕

全体のねらい

生物の構造や機能を支えるしくみについて、物質との関連を生化学や生理学の知識に照らして通覧する。生体物質、反応、かたち、生物機能、外界との対応、がん、など生物学の基礎的問題を整理し、考察する。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生物の生存－環境と進化	地球上の生物の多様性は環境と生物自身の物質的な条件によってつくられてきた。生物にとって生命維持に必要なしくみについて、進化とも関連して全般的に考察する。	中澤　透（放送大学教授）	中澤　透（放送大学教授）
2	生体物質の多様性	生体物質は数種の元素が主成分であるが、結合様式などによって細胞内で多様である。生体内の低分子は大部分が　高分子の構成要素であるが、低分子の組み合わせなどによっても性質が異なる。生体物質のはたらきについて説明する。	同　上	同　上
3	生体高分子	ＤＮＡ、ＲＮＡ、タンパク質の構造上の特徴とはたらき、ＤＮＡ→ＲＮＡ→タンパク質という情報の流れについて説明し、ウイルスを例にとって互いの関係を具体的に説明する。タンパク質の立体構造と機能の関係、かたちを決める原理などを考察する。	小林芳郎（東邦大学教授）	小林芳郎（東邦大学教授）
4	酵　　素	以下の４項目に分けて解説する。 １．酵素の発見とその研究の歴史（リボザイムまで） ２．酵素の働き（リボヌクレアーゼＴ１を例として）とその特長 ３．酵素利用（日常生活の中の酵素、酵素診断）、酵素工学とタンパク質工学 ４．酵素の種類、酵素の進化、酵素から描く系統進化	大島泰郎（東京薬科大学教授）	大島泰郎（東京薬科大学教授）
5	生物と酸素	大部分の生物は大気中の酸素に依存して生きている。細胞では、ミトコンドリアの呼吸によるエネルギー生産や、小胞体の薬物代謝などの反応がある。しかし、酸素は活性酸素のかたちになると強い毒性もある。	中澤　透	中澤　透
6	細胞間の情報交換と物質	生体の細胞はそれぞれの機能を営みながら、細胞間の化学的情報交換によって個体全体としてのまとまりを保つことを概観する。また、他個体とのコミュニケーションや、他種生物を含めた環境の認識などと、その情報を担う物質の化学構造や性質についての知識を解説する。	星　元紀（東京工業大学教授）	星　元紀（東京工業大学教授）
7	ホルモンと神経	ウグイスは春になるとさえずり繁殖する。日が長くなるとホルモンが分泌されて交尾をし卵を産むようになる。どこで光を感じそれがどのような仕組みでホルモンの分泌を引き起こすのだろうか。外部からの刺激、神経系での受容、内分泌系の切換えなど胎内で何が起こるかを見ていこう。	石居　進（早稲田大学教授）	石居　進（早稲田大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ホルモンは何故効くか	あるホルモンはある決まった細胞にしか作用しない。また、ホルモンに対する細胞の感受性はいつも同じとは限らない。哺乳類のホルモンは魚類には効きにくい。ホルモンが細胞にどのようにして作用を及ぼすことが出来るのかという問題を調べよう。	石居　進	石居　進
9	細胞の情報伝達	ホルモンなどの細胞外シグナルは、細胞膜表層上に存在する受容体と結合してそのシグナルを細胞の内側に送っている。この細胞膜を横切るシグナルの伝達機構を中心に、細胞における情報伝達のしくみを解説する。	堅田利明（東京大学教授）	堅田利明（東京大学教授）
10	発生に関わる物質	受精から初期発生に至る過程においては、細胞間認識や細胞間相互作用がきわめて重要である。これに関わる細胞表面物質、細胞間物質あるいは分化誘導因子などの構造と機能を概観する。	星　元紀	星　元紀
11	生物のかたちをつくる	生物自身が自分の体（姿・形）を再構築する方法を、変態や再生を例示しながら説明する。次に、これに学びながら、人工的に生物の体を再構築することができるのかという問題設定のもとに、研究の現状を具体的に説明する。また、このような研究に、この目的には一見関係ないような基礎研究が、いかに重要であるか解説する。	吉里勝利（広島大学教授）	吉里勝利（広島大学教授）
12	免疫のしくみ	予防接種を例にとって、体液性免疫と細胞性免疫、免疫担当細胞（Ｔ細胞とＢ細胞）、細胞間相互作用について説明し、Ｔ細胞の抗原認識機構とそれが成立する過程およびその異常としての自己免疫病についてふれる。	小林芳郎	小林芳郎
13	植物の物質	生物の生産する物質のうち植物でしか合成されない有機物がある。この物質が動物に不可欠の場合、動物は食物連鎖により補充する。一方、限られた植物で合成され、その植物にとってもはたらきが不明な有機物がある。これらの有機物とその生合性について考察する。	山田晃弘（放送大学教授） 西村弘行（北海道東海大学教授）	山田晃弘（放送大学教授） 西村弘行（北海道東海大学教授）
14	生物毒	代表的な海洋生物毒であるフグ毒のテトロドトキシンを例にとり、毒の細菌起源、フグにおける機能、Ｎａ＋チャンネル阻害作用、生化学試薬としての利用、フグの耐性機構等について説明する。	安元　健（東北大学教授）	安元　健（東北大学教授）
15	がんと物質の関わり	がんはＤＮＡの病気である。環境中の物質が細胞内に入り込んでＤＮＡに傷をつけ、がん化がはじまる。その結果変異遺伝子から、細胞のがん化に関与する質的あるいは量的に異常なたんぱく質が作り出される。これらの物質、がんの予防、治療への寄与が期待される物質について解説する。	関谷剛男（国立がんセンター研究所腫瘍遺伝子研究部長）	関谷剛男（国立がんセンター研究所腫瘍遺伝子研究部長）

＝ 植物の生理（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：山田　晃弘（放送大学教授）〕
〔主任講師：菊山　宗広（放送大学助教授）〕

全体のねらい

高等植物に注目し、植物という生命体の特徴を学ぶ。「植物の営み」「植物の成育」そして「植物のかたちづくり」にどのような特徴がみられるだろうか。さらに、植物と他の生物との関係、植物と環境の問題に照明をあてる。そこに提起された現象のしくみを生命体の基本となる遺伝子の発現と発現分子のはたらきの面からも考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	植物の特徴	植物は動物や微生物とは異なった生命体として地球上で進化し、高等植物はその頂点に立っている。移動性を失い、統御中枢を持たない高等植物がどのように成育し、子孫を繁栄させるかを学び、高等植物の植物界における位置づけを考察する。	山田晃弘（放送大学教授） 菊山宗弘（放送大学助教授）	山田晃弘（放送大学教授） 菊山宗弘（放送大学助教授）
2	植物の細胞と体制	植物体を組み立てている生命の基本単位は細胞である。この植物細胞内には、細胞核の他、色素体、ミトコンドリアなど様々な小器官からなる細胞社会がある。この植物細胞社会がどのように誕生し、発展したかについて述べる。	黒岩常祥（東京大学教授）	黒岩常祥（東京大学教授）
3	光合成（1） 光エネルギーの利用	植物は太陽光を生物が利用できるかたちの化学エネルギーに変える能力を持っている。この章では、葉緑体で光合成色素に吸収された光エネルギーがＮＡＤＰＨやＡＴＰに変換される過程について述べる。	加藤　栄（東京大学名誉教授）	加藤　栄（東京大学名誉教授）
4	光合成（2） CO_2固定反応と環境	光合成でCO_2が固定される経路（C_3およびC_4光合成と光呼吸）について学び、ついで、光合成に対する環境要因（光、水、CO_2濃度等）の影響について考察する。	同上	同上
5	植物の代謝	植物は、植物に依存して生活する動物や微生物では見られない特有の代謝を行っている。それらは植物細胞にのみ存在する葉緑体の炭素代謝、窒素代謝が中心となり、さらに、2次代謝へ発展している。これらの代謝経路を考察する。	山田晃弘	山田晃弘
6	物質輸送	植物の代謝は、体内のあらゆる場所で進行し、これに伴って、物質の移動が、細胞内ばかりでなく、細胞間、組織間そして器官の間でも起る。植物体内でおこる物質移動の現象とそのしくみを学ぶ。	菊山宗弘	菊山宗弘
7	種子から種子へ	高等植物は、種子の発芽に始まり、栄養成長期を経て、生殖成長期に入り、次世代の種子を形成すると、老化して、生活環を完成する。植物の生活環がどのように進行し、どのような機構によって調節されているかを学ぶ。	保尊隆亨（大阪市立大学助教授）	保尊隆亨（大阪市立大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ホルモンによる調節	高等植物の生活環の進行は体内で合成される植物ホルモンのはたらきによって調節されている。はたらきの異なる植物ホルモンがどのように植物の成育を調節しているかを学ぶ。	神阪盛一郎（富山大学教授）	神阪盛一郎（富山大学教授）
9	環境による調節	植物は、種子発芽後の栄養成長、生殖成長の過程で、光、温度、重力等の環境要因により調節される。環境要因を受容し、それから遺伝子発現に至る情報伝達の過程、さらに、この過程とホルモンのはたらきとの関係について学ぶ。	蓮沼仰嗣（横浜市立大学教授）	蓮沼仰嗣（横浜市立大学教授）
10	細胞形態形成	植物の茎が細長いのは、茎の細胞が細長いからである。茎の細胞が細長いのは、茎の細胞が茎の軸方向に偏った伸張をするからである。細胞の形の決定に重要な役割を果たしている細胞伸張方向の調節機構について学ぶ。	柴岡弘郎（大阪大学名誉教授）	柴岡弘郎（大阪大学名誉教授）
11	器官形成	葉、茎、根、花弁、雄しべ、などの器官では、さまざまに特殊化した細胞がきちんと並んでおり、まとまった機能を持っている。この章では、器官の成り立ちと、それを支える遺伝子のはたらきについて述べる。	岡田清孝（京都大学教授）	岡田清孝（京都大学教授）
12	分化全能性	植物の細胞は分化の柔軟性をもつ。植物の体細胞は適当な条件下で個体へと分化し、分化した細胞は別種の細胞へ比較的容易に分化することができる。このような植物の分化の能力について学ぶ。	福田裕穂（東京大学教授）	福田裕穂（東京大学教授）
13	植物と微生物の相互作用	植物は多様な微生物の囲まれて生活している。免疫系をもたない植物はどのようにして微生物の感染を防いでいるのだろうか。その一方で、豆科植物と根粒菌のように親密な関係を営んでいる場合もある。植物と微生物の相互作用の分子機構を学ぶ。	庄野邦彦（日本女子大学教授）	庄野邦彦（日本女子大学教授）
14	生態系のなかの植物	野外にはさまざまな植物が生存している。比較生理生態学はこの現象を解明する有力な武器となる。その代表例を紹介する。また、個体植物の生理のしくみをもとに生態系における植物群の生理に照明をあてる。	寺島一郎（大阪大学教授）	寺島一郎（大阪大学教授）
15	植物と人間社会	生態系の要として地球上に繁栄する植物とヒト社会とはどのような関係にあるのだろうか。これまでに、ヒトは植物を利用して生活し、さらに、一層の利益を植物から引き出そうとしている。その展望とそれに伴う警告を生物学の視点から考える。	菊山宗弘 山田晃弘	菊山宗弘 山田晃弘

＝ 生態学（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：藤井　宏一（筑波大学教授）〕

全体のねらい

生物群集の構造は個体、個体群、群集のレベルからなっている。本講義では各レベルでの、生物と無機的環境、生物と生物との関係を理論的に、そして具体例をあげながら講義し、生物集団の構造と機能、生物群集や生態系の多様性、全体性およびそれらの動態についての理解を深めることを目的とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生態学とは	生態学は生物学の１分野として存在し、その中心課題は生物の分布と個体数の変動を理解することにある。生態学の成り立ちと歴史、現在の研究の中心課題、人間生活との関わりなどについて述べる。	藤井宏一（筑波大学教授）	藤井宏一（筑波大学教授）
2	環境と生態系	生物の活動は、生活場所の地学的条件で決まる無機的環境に大きく規制される。生物の活動に大きく影響する物理・化学的要因ならびに生物にとっての生活必要資源について解説し、あわせて気候など無機的環境条件に対する生物の応答について考える。	同上	同上
3	光合成－葉から群落へ	生態系における一次生産者の役割を担う植物の光合成と微気象・環境要因によるその制御や、環境への生理的・形態的馴化について述べる。一枚の葉の光合成から群落の物質生産までのスケールアップについても触れる。	鷲谷いづみ（東京大学教授）	鷲谷いづみ（東京大学教授）
4	消費者と食物網	すべての動物と大半の微生物は緑色植物が生産した有機物を直接・間接に消費して生活する。食う－食われるの関係で網目状に結ばれている生物どうしの関係について考え、この網の構造とそれを構成する物質とエネルギーの流れに見られる法則を探る。	藤井宏一	藤井宏一
5	物質とエネルギーの流れ	生物世界と非生物世界とを包含する複雑な物質とエネルギーの流れの場を生態系と呼ぶ。地球全体はひとつの生態系複合である。生物を構成する主要な元素に着目して、系内外におけるそれらの挙動を追うとともに、系を出入りするエネルギーの流れをたどる。	同上	同上
6	さまざまな生態系	生物間相互作用を介した生物群集／生態系のなりたち、大きな空間的スケールで捉えた生態系として世界のバイオーム、日本のバイオームについて述べる。また、いくつかの代表的な生態系を取り上げてその特徴を紹介する。	鷲谷いづみ	鷲谷いづみ
7	自然選択と適応	自然選択にもとづく進化、それによってもたらされる適応について述べる。いくつかの具体的な適応の例を紹介するとともに、理論的なアプローチの有効性についても述べる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	植物の生活史戦略	植物の生活史の進化の主要な選択圧について考察し、C－R－Sモデルを紹介する。さらに、植物の栄養成長期の適応として、可塑的な形態形成と被食適応について述べる。	鷲谷いづみ	鷲谷いづみ
9	植物の繁殖戦略	植物にみられるきわめて多様な種子繁殖の様式について、開花・授粉、結実、種子分散、種子の休眠・発芽、実生確立のそれぞれの生活史ステージごとに概説し、それぞれの生態的意義について考える。	同上	同上
10	個体数の成長と調節	生物集団（個体群）の個体数は、有限の環境においては無限に増加することはできない。このような環境下において、生物種はどのように対応しているのか、まずその機構について理論的に述べ、ついで実例を見ながら密度効果、”なわばり”などについて論じる。	藤井宏一	藤井宏一
11	種間競争	同じ資源を利用する異なった生物間には種間競争が存在しうる。種間競争とは何か、まずその機構について理論的に取り扱い、さらに種間競争の結果として起こる諸現象（”すみわけ”、形質置換など）について、観察例を用いて説明する。	同上	同上
12	食うものと食われるものの関係	食うものと食われるものの関係（捕食－被食関係）は、生物間の相互作用の中でも一番重要な関係のひとつである。まず捕食－被食関係にある生物種の動態の理論について述べ、次に実例を用いて自然界における捕食－被食関係のはたす役割について説明する。	同上	同上
13	動物の生存戦略	生物はなんのために存在するのか、またその目的を達成するために、無機的環境、そして他の生物に対して如何に適応してきたかについて、まず理論的考察を行ない、ついで動物の採餌戦略、繁殖戦略などを例にとりながら説明する。	同上	同上
14	生物多様性の保全	現代の生物多様性の急速な喪失の主要な原因は、乱獲・過剰採集とともに生育場所の分断・孤立化および生物学的侵入といった「生態的」なプロセスである。ここでは生物多様性の保全のための生態学を紹介する。	鷲谷いづみ	鷲谷いづみ
15	生態学と人間	これまでに学んできた生物の生き方の知識と、我々人間の今後の生存との関わりを議論する。生態学の知識が、人口問題、食料問題、環境汚染など現在我々が直面する諸問題の解決にどんな示唆を与えられるのか、どのように貢献できるのかを論じる。	藤井宏一	藤井宏一

＝分子生物学＝（TV）

〔主任講師：三浦　謹一郎（学習院大学教授）〕

全体のねらい

分子生物学は生命体の構造やはたらきを分子、原子のレベルで解明しようという科学であるが、まず生物に共通な遺伝の現象を解明するため遺伝子の研究が盛んに行われた。昨今は遺伝子がもつ情報を知ることが可能になり、それを契機として分子生物学は大きな発展を遂げつつあるので、その概要を述べ、将来の課題についても触れる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	遺伝子の本体	遺伝形質の情報を荷っていると考えられる生物学的単位は遺伝子と呼ばれていた。細胞核の中の染色体上にあるとされていた。染色体は核酸と蛋白質からできているが、種々の実験から遺伝子はデオキシリボ酸（DNA）であることが明らかにされた。	三浦謹一郎（学習院大学教授）	三浦謹一郎（学習院大学教授）
2	DNAの構造(1) 二重らせん構造	DNAは化学者の研究では塩基と糖デオキシリボースとリン酸基からできたヌクレオチドが重合したものであることがわかった。DNAの糸をX線解析した結果などから、DNAは規則正しい塩基対をもった二重らせん構造をとる分子であることが明らかにされた。	同　上	同　上
3	DNAの構造(2) 塩基配列の分析	DNAは巨大な分子であるが、これをきまった塩基配列の場所で切断することができる制限酵素が発見されて以来、DNAの小断片を得ることができ、DNA分子の中で一本の鎖の上に塩基がどのような順序に配列しているかを調べることが可能になった。	同　上	同　上
4	DNAの複製	DNAが複製するとき、二本の鎖がそれぞれ鋳型になって、正確な塩基対によって親と同じ構造をもった子DNAの鎖が合成される。DNAの複製過程はDNAポリメラーゼ（合成酵素）などの働きによって進められる。	同　上	同　上
5	遺伝情報の発現機構 (1)　転写	DNAの情報発現はまずDNAの二本の鎖のうち情報をもった鎖のコピーであるRNAをつくることから始まる。この過程は転写と呼ばれ、RNAポリメラーゼ（合成酵素）によって進められる。DNAの鎖にRNA合成の開始、終了、調節などの信号がある。	同　上	同　上
6	遺伝情報の発現機構 (2)　翻訳	遺伝情報発現第二の段階はメッセンジャーRNA（mRNA）を鋳型にしてアミノ酸を定まった順序に結合させて蛋白質を合成する階段で、この過程は翻訳と呼ばれる。蛋白質の合成はリボソーム上で転移RNAが順次アミノ酸を運びこむことによって進行する。	渡辺公綱（東京大学教授）	渡辺公綱（東京大学教授）
7	遺伝の情報 (1)　暗号の解読	遺伝情報は主として蛋白質の情報（アミノ酸配列）である。細胞内の蛋白質合成系を試験管内に組み立て、mRNAの塩基配列とアミノ酸の対応関係が調べられ、遺伝暗号が解読された。３塩基の配列が１個のアミノ酸を指定する。	三浦謹一郎	三浦謹一郎

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	遺伝の情報 (2) 暗号と実証	試験管内で解読された遺伝暗号表は、mRNAあるいはDNAの塩基配列と指定される蛋白質のアミノ酸配列を対応させることによって、生体内でも同様に使われていることが判明した。DNA中では一つの蛋白質の情報が分断されている場合もある。	三浦謹一郎	三浦謹一郎
9	遺伝の情報 (3) 転移RNAによる情報変換	蛋白質が合成されるとき、アミノ酸移転RNA（tRNA）は特定のアミノ酸1ケを末端に結合し、tRNA中のコドン読みとり部位（アンチコドン）により正確にmRNA上の暗号通りにアミノ酸を運びこむ。tRNAの構造と機能の関係が詳しく研究されている。	渡辺公綱	渡辺公綱
10	ウィルス－最小の自己増殖系	最小の遺伝子はウィルスにみられる。このためウィルス遺伝子とその情報発現の研究は分子生物学の発展に大きく貢献してきた。ウィルスの遺伝子は二重らせんDNAの場合だけでなく、一本鎖の場合もあり、RNAの二本鎖、一本鎖の場合もある。	三浦謹一郎	三浦謹一郎
11	突然変異・がん	放射線をはじめ種々の突然変異誘起剤はDNAの主として塩基に変化を与えることにより生物に変異やがんをひき起こす。一方、生体はDNAに損傷を与えたとき修復する機能も具えている。それらの機構についての研究が進んでいる。	関口睦夫（福岡歯科大学教授）	関口睦夫（福岡歯科大学教授）
12	遺伝子操作	遺伝子の構造を調べるために発達した技術は遺伝子を特定の場所で切断し、特定の遺伝子断片を得ることを可能にし、さらにそれを増殖させ、保持している遺伝情報を発現させる方法を産み出した。さらに遺伝子の特定部位を変換させることも可能にした。	百瀬春生（東京理科大学教授）	百瀬春生（東京理科大学教授）
13	蛋白質の構造と機能 (1) 基礎	遺伝子の研究の進展により、遺伝子がもつ情報としての蛋白質が注目されている。蛋白質は生体の機能にとって最も重要な物質であるが、蛋白質の構造についての研究も物理科学的研究方法の発達によって大きな進展がみられる。その基本を述べる。	小島修一（学習院大学助教授）	小島修一（学習院大学助教授）
14	蛋白質の構造と機能 (2) 蛋白質工学	遺伝子操作法の発展によって蛋白質の改造が可能になった。蛋白質の構造と機能の相関関係の研究が大きく進み始めた。そこで得られた原理に基づいて高機能蛋白質を設計することが可能となり、基礎生物学のみならず、応用生物学や工学の分野への貢献が期待される。	同上	同上
15	分子生物学の今後の課題	遺伝子研究を軸として分子生物学は大きな発展を遂げ、さらに高次の生物現象の解明に立ち向っている。細胞調節、免疫、発生分化、神経系などへの挑戦について専門家を交えた座談会を行なって分子生物学の将来への展望を試みる。	三浦謹一郎	三浦謹一郎

＝ 生物の進化と多様性（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：森脇 和郎（総合研究大学院大学副学長）〕
〔主任講師：岩槻 邦男（放送大学教授）〕

全体のねらい

生物の示す性質には、すべての生物に共通の普遍的な性質もあるが、数多くの種に分化している生物の種が個別に示す多様な性質も知られている。生物の示す多様性は、30数億年に亘る生物の進化の歴史を刻んだものであり、この多様な生物の姿を系統と進化を軸にして理解しようとするのがこの科目の目的である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生物多様性と生物の進化	地球上に150万種認知されており、実際は千万を超えるかも知れないと推定されるほど多くの種に分化している生物の多様性とは何か。歴史的な存在である生物多様性の由来を進化の視点で総説し、主な分類体系を紹介する。	岩槻邦男（放送大学教授）	岩槻邦男（放送大学教授）
2	分子レベルの進化と中立説	表現型レベルの進化は生存と繁殖に有利な突然変異の蓄積によって起こり、分子レベルでの進化は主に自然選択に中立な突然変異遺伝子が偶然的に種内に蓄積することによって起こる。進化学における中立説の意義を講ずる。	高畑尚之（総合研究大学院大学教授）	高畑尚之（総合研究大学院大学教授）
3	生物の分子系統樹	脊椎動物の個体発生をモデルとして作られた古典的な系統樹と並んで、近年研究が進んでいる分子レベル、特にタンパク質のアミノ酸配列や核酸の塩基配列における差異を指標に動物の起源と系統進化を明らかにする手法を紹介する。	堀寛（名古屋大学教授）	堀寛（名古屋大学教授）
4	動物ゲノム進化の道筋	全生物の究極の祖先は、原核生物シアノバクテリウムであったが、動物細胞は、その先祖と思われる原真核動物以来、各種細菌の細胞質内寄生によって小器官を獲得し、それらの細菌の有効な遺伝子を核内の染色体上に集めることによって進化を続けてきた。	大野乾（元Beckman Research Indstitute of the City of Hope）	
5	動物の系統樹	ダーウィン以来生物が進化することが広く受け入れられるようになり、この視点をふまえた系統樹が作られている。系統分類学の立場から、現在の多様な動物たちの進化の過程と起源を概説する。	白山義久（京都大学教授）	白山義久（京都大学教授）
6	化石が語る動物の進化	過去の生物の記録である化石を通じて、動物の巨視的な形態的進化や多様性を紹介する。生物が地球環境の変化や共存する他の生物種との相互作用の中で、時間とともに進化してきたことを、主に脊椎動物を例に講ずる。	冨田幸光（国立科学博物館室長）	冨田幸光（国立科学博物館室長）
7	動物のかたちの起源と進化	多細胞動物の体づくりはすべて１個の細胞である受精卵から始まる。したがって、動物の形の起源と進化を考えるためには発生のメカニズムを理解することが必須である。最近になって、動物の体づくりを制御する遺伝子の働きが明らかになりだしている。そうした遺伝子の働きから体制の進化に至るまでを概説する。	佐藤矩行（京都大学教授）	佐藤矩行（京都大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	種の遺伝的分化	種分化は生物進化の基本となる過程である。生物学的「種」の概念に準拠すれば、種の遺伝子構成には特異性がある。遺伝子分析のもっとも進んだ哺乳動物であるマウスを対象に、種の遺伝的分化の実体を探る。	森脇和郎（総合研究大学院大学副学長）	森脇和郎（総合研究大学院大学副学長）
9	陸上植物の種分化	陸上に生活する植物は20数万種に分化しているが、そのためには特有の多様化の過程を踏んでいる。遺伝子突然変異だけでなく、染色体突然変異が、植物の種形成にどのように現れ、具体化されているかを、実際の例を挙げながら概説する。	伊藤元己（東京大学助教授）	伊藤元己（東京大学助教授）
10	藻類の系統と進化	真核生物の進化は具体的にどのような過程を経ていたか、新たに真核生物となった藻類の多様性はどのように形成され、維持されているか。現生の藻類の多様性の基づく研究成果から、藻類の系統と進化を紹介する。	井上勲（筑波大学教授）	井上勲（筑波大学教授）
11	陸上植物の起源と多様化	陸上植物は4億年あまり前に、緑藻類の１群が、陸上に進出してきたものである。植物が陸上へ進出してくる背景と、陸上へ進出してどのように多様化したのか、陸上植物の系統を、葉の形成を具体的な指標としながら紹介する。	岩槻邦男	岩槻邦男
12	種子植物の系統と進化	現生の陸上植物の多様性の大部分は種子植物で占められる。陸上植物のうちから、種子植物はどのような過程を経て形成され、何故このように多様化することができたのか。種子植物の起源と多様化について、とりわけ花と実の進化を紹介する。	西田治文（中央大学教授）	西田治文（中央大学教授）
13	菌類の系統と進化	菌類は動物でも植物でもない生物の世界の第３の群を作る。菌類の起源と進化について、現生の菌類の多様性を整理しつつ、その進化の過程を追跡する。菌界にまとめられる真菌類と、変形菌類、ツボカビ類、卵菌類などの原生生物との比較も試みる。	土居祥允（国立科学博物館室長）	土居祥允（国立科学博物館室長）
14	人類の起源と進化	ヒトが類人猿と共通な祖先から進化してきたことは疑う余地はない。しかし、いつ、どのようにして今日のヒトができたかは充分に解明されてはいない。化石と分子時計の両面から進められているこの問題へのアプローチを解説する。	長谷川政美（統計数理研究所教授）	長谷川政美（統計数理研究所教授）
15	種の多様化と滅失	自然界における主の分化の実態はすでに紹介されているが、種形成と逆に、種には絶滅が必然である。さらに、ヒトの営為が地球環境を変貌させたことによって、種の絶滅は新たな問題を生み出している。種の形成と滅失について概説する。	岩槻邦男	岩槻邦男

＝ 動物の行動と社会（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：日高 敏隆（滋賀県立大学長）〕

全体のねらい

動物たちは、ローレンツ時代に考えられていたように集団や種を維持するためにではなく、それぞれの個体がそれぞれ自分の適応度を高めようと努力しているのだという見かたが、研究者たちの基本的認識になった。そうなると、動物たちの行動も動物たちの社会も、これまでとはまったく違ったものとして、われわれの目に映ってくる。われわれ人間自身の行動や社会を見る目も、おのずと変わってくる。この講義では、この新しい視点から“動物の行動と社会”をとらえてみようと思う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	動物行動学――エソロジーとは	エソロジーの始まり 遺伝的組みこみ いくつかの例 遺伝的パターンとリリーサー	日高敏隆（滋賀県立大学長）	日高敏隆（滋賀県立大学長）
2	エソロジーの基本概念	行動の生得的解発機構　ＩＲＭ エソロジーの4つの柱 目標は種族維持か？ 適応度という概念 適応度増大	同上	同上
3	動物の外界認識	動物によって異なる外界認知 環世界・Umwelt 意味づけられた空間や時間 意思決定 環世界と動物の保全	櫻井一彦（成城大学短期大学部教授）	櫻井一彦（成城大学短期大学部教授）
4	ディスプレーとコミュニケーション	信号とディスプレー 信号が伝える内容 ディスプレーの由来 儀式化 信号の進化 信号のねらい	同上	同上
5	行動のおこるしくみ――神経行動学	神経行動学（ニューロエソロジー） 動物の色覚 渡り鳥の太陽コンパス 昆虫の太陽コンパスと偏光受容 生物時計の役割	沼田英治（大阪市立大学教授）	沼田英治（大阪市立大学教授）
6	行動の進化と遺伝	共通祖先からの由来 行動の進化的変化 ダーウィンの自然淘汰説 行動の遺伝	近雅博（滋賀県立大学助教授）	近雅博（滋賀県立大学助教授）
7	適応戦略	戦略とは 最適戦略 ESS（進化的に安定な戦略）	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	行動の多型	戦術と戦略 代替戦略とは 頻度依存の代替戦略 地位依存の代替戦略	中嶋康裕（宮城大学教授）	中嶋康裕（宮城大学教授）
9	利他行動	利他行動とは 包括適応度 互恵的行動 囚人のジレンマ しっぺがえし戦略	近雅博	近雅博
10	社会構造	群れとなわばり 群れの経済学 なわばりとは何か なわばりの経済学	中嶋康裕	中嶋康裕
11	配偶システム	配偶システムとは 子育てと配偶システム 一夫一妻の社会 一夫多妻の社会 一妻多夫の社会 真社会性動物	同上	同上
12	性淘汰	性淘汰と自然淘汰 雄どうしの争い（性内淘汰） 配偶者選択（性間淘汰） 魅力的だと得をする？ なぜ雌はより好みするか	同上	同上
13	家族とそのジレンマ	家族内の矛盾 親子の対立 兄弟の対立 親と子のかけひき	同上	同上
14	学習とプログラム	遺伝か学習か？ 学習の遺伝的プログラム プログラムは種によってちがう 刷りこみ プログラムとその具体化	日高敏隆	日高敏隆
15	エソロジーから見た新しい視点	生態学・心理学との関係 競争と調和・共生 人間という動物 老い・老化 遺伝的プログラムと社会・文化	同上	同上

＝ 細胞生物学（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：石川 春律（群馬大学教授）〕
〔主任講師：藤原 敬己（ロチェスター大学教授）〕

全体のねらい

生命はさまざまな分子が特殊な環境の中で反応しあって成り立っている。細胞は生命現象が認められる最小単位で、生命維持に必要なすべての分子を持っている。それらの分子の多くは細胞内で無秩序な溶液状態としてあるのではなく、いろいろな構造に組み込まれている。ここでは細胞の構造やはたらき、それらを支える生命の科学について学ぶ。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	細胞とは	細胞は生物を構成する基本単位であり、生命の最小単位でもある。生命の始まりは、35億年前にさかのぼる。無機質から作られた有機質が地球の原始の海で小塊を作り、生命を持つ細胞へと進化した。細胞の種類や、基本的形態と機能から細胞像をイメージする。	石川 春律（群馬大学教授） 佐藤 英美（名古屋大学名誉教授） 藤原 敬己（ロチェスター大学教授）	石川 春律（群馬大学教授） 佐藤 英美（名古屋大学名誉教授） 藤原 敬己（ロチェスター大学教授）
2	生命を狙う分子	生命はさまざまな分子間の複雑な反応により維持されるが、細胞は生命の最小単位であり、それに必要な分子を備えている。細胞を構成する主な分子の基本的性質や機能、それらが形成する細胞の構造などについて学び、細胞の分子構築をイメージする。	藤原 敬己	藤原 敬己
3	細胞のしらべ方	細胞の構造や機能、生命現象の機構などを研究するためにはいろいろな方法が用いられる。顕微鏡による細胞の観察、細胞の培養法、電気泳動法、遺伝子操作法など、細胞生物学分野の研究によく使われる解析技術について、その基本原理と得られる情報について学ぶ。	尾張部克志（名古屋大学助教授）	尾張部克志（名古屋大学助教授）
4	細胞膜のはたらき	細胞表面には外界から境する細胞膜がある。細胞膜は、隔壁としての役割、物質の透過や輸送、取り込み、分泌、細胞同士の接着やコミニケーション、情報の受容など多様な機能を果たす。細胞膜の構造や細胞表面の特殊化について機能と関連させて学ぶ。	石川 春律	石川 春律
5	細胞内小器官のはたらき	細胞内部にも細胞膜と同じような膜が存在し、動物の器官のような働きをする構造を作っている。これらの構造は細胞小器官と呼ばれ、小胞体、ゴルジ装置、リソソーム、ペロキシソーム、ミトコンドリア、葉緑体がある。それぞれの形態的特徴と機能について学ぶ。	同上	同上
6	細胞を支える骨組	細胞質には蛋白質から作られた線維成分が存在し、細胞骨格と総称される。主として微小管、アクチンフィラメント、中間径フィラメントの３種類からなり、細胞の形を支える骨組みや、細胞の運動装置など、多様な役割を果たす。ここでは細胞骨格の構造と機能について学ぶ。	同上	同上
7	細胞の動き	筋細胞は収縮を目的に分化した細胞で、細胞質内は収縮装置で満たされている。筋細胞以外の細胞にも運動能があり、細胞全体の移動や細胞内の動きなど、さまざまな運動がみられる。いろいろな細胞の収縮や運動を引き起こす構造、動きの分子機構などについて学ぶ。	尾張部克志	尾張部克志

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	細胞分裂と染色体	生物の発生や成長は、１個の細胞が分裂して２個になることから始まる。細胞分裂には核内で複製したDNAが凝集して染色体を形成し、紡錘体によって正確に娘細胞に分配される。ここでは紡錘体の構造や動態、染色体の構造、数、形状などについて学ぶ。	佐藤英美 黒田行昭（国立遺伝学研究所名誉教授）	佐藤英美 黒田行昭（国立遺伝学研究所名誉教授）
9	遺伝のしくみとDNA	遺伝のしくみはメンデルの法則を基本とする。これに合わない現象として遺伝子の連鎖、連鎖を破る遺伝子の乗り換えなどがある。その頻度を利用して染色体地図が作成される。その遺伝子の本体はDNAでる。ここではDNAの構造、タンパク質の合成のしくみなどについて学ぶ。	黒田行昭	黒田行昭
10	生殖と発生	生殖細胞形成、増殖、成熟、そしてそれに引き続く受精、発生という一連の変化は、真核細胞に共通するパターンである。この章では卵や精子の形成過程と構造変化、受精の分子機構、初期発生と変態のしくみなどについて学ぶ。	佐藤英美	佐藤英美
11	細胞内情報伝達	生体の統合的制御には神経に加え、ホルモンなどいろいろな細胞が産生する生理活性物質による液性制御機構が働く。こうした液性情報が特定の細胞にだけ働く機構について、細胞にある受容体、その特異性、細胞内情報伝達などの機構を中心に学ぶ。	藤原敬己	藤原敬己
12	細胞間情報伝達－神経のはたらき	神経細胞は情報の伝達や処理を行う特殊な細胞で、その性質は遺伝的に与えられているが、環境によって変化する性質（可塑性）としない性質がある。神経細胞が個体の生命の営みの情報処理を行う脳の主要構成要素であるという立場から、その特殊性について学ぶ。	松本元（理化学研究所グループディレクター）	松本元（理化学研究所グループディレクター）
13	生体防御－免疫のはたらき	生物は環境中の多くの危険因子から自己を守るため、さまざまな防御機構を備えている。免疫は最も高度に発達した、いわば最後の砦ともいえる生体防御機構である。この機構の主役である抗体の産生や構造、体液性免疫と細胞性免疫のしくみなどについて学ぶ。	藤原敬己	藤原敬己
14	細胞の変異とがん	生物の遺伝子ＤＮＡは安定なものであるが、化学物質や放射線など環境因子によって突然変異が起こる。これが遺伝病や老化、がんなどの原因となる。がんは正常細胞が多くの段階を経て生じるが、特にがん遺伝子やがん抑制遺伝子の関与が最近明らかになった。	黒田行昭	黒田行昭
15	細胞の老化と死	個体の老化や死には、個体を構成する個々の細胞の老化や加齢が深く関わっている。これら細胞のＤＮＡにプログラムされた遺伝情報によるか、または環境因子によるＤＮＡ損傷の蓄積によると考えられる。その証拠として老化遺伝子やテロメアの存在が見出された。	佐藤英美 黒田行昭	佐藤英美 黒田行昭

＝ 太陽系の科学（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：小尾 信彌（元放送大学長）〕
〔主任講師：吉岡 一男（放送大学助教授）〕

全体のねらい

惑星や小惑星、衛星、彗星など非常に多数の天体が太陽の重力を受けて集団をなしているのが、われわれの太陽系である。本科目では、惑星などの運動や個々の天体の性質等について、最近の惑星探査などによる研究成果もふまえて講義し、現代の太陽系像を習得する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	研究の歴史	古代やギリシア時代から太陽系天文学の発展の歴史を概観し、最近の探査機による成果や研究にいたる。現代の宇宙観形成までにおける太陽系天文学の果たした意義も考える。全15回の講義の展開についても述べる。	小尾信彌（元放送大学長）	小尾信彌（元放送大学長）
2	太陽系の概観	太陽系の全体像について述べる。太陽を中心とした諸天体の配位や分布、運動等の特徴について述べ、太陽系に見られる全般的特徴を学び、太陽系の起源に及ぶ。	同上	同上
3	地球と月の運動	自転や公転およびそれにかかわる地球の運動の様子を、それらが解明されてきた歴史とともに学ぶ。さらに、地球のまわりの月の運動についても学ぶ。	吉岡一男（放送大学助教授）	吉岡一男（放送大学助教授）
4	天球座標と時間・時刻	天球上での位置を表わす天球座標および時刻の決定は、地球の自転や公転と深くかかわっている。ここでは、これらの決定がどのようにして行われ、どのような種類の天球座標や時間・時刻が定められているかを学ぶ。	同上	同上
5	惑星の視運動と月の現象	天球上の惑星の動きすなわち視運動は、太陽系のモデルの観測的基礎となってきた。ここでは、惑星の視運動がどのように説明されるかについて学ぶ。また、月の運動に関連して、日・月食などの現象についても学ぶ。	同上	同上
6	惑星運動の法則	16世紀後半のチコ・ブラーエの惑星位置の観測をもとに、17世紀初めにケプラーが惑星運動に関する3法則（ケプラーの法則）を発見した。ここでは、観測結果から法則が導かれたいきさつや手順について学ぶ。	堀源一郎（富山国際大学教授）	堀源一郎（富山国際大学教授）
7	面積速度の法則	17世紀後半にニュートンは万有引力の法則を発見し、それに基づいてケプラーの3法則は理論的に導かれた。ここでは、面積速度の法則（第2法則）について、その諸側面を学ぶ。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	楕円運動の性質	万有引力の法則からは、2体の運動の軌道として、楕円、放物線、双曲線が得られる。ここでは、太陽系でふつうに実現している楕円運動について学ぶ。	堀源一郎	堀源一郎
9	第3法則と万有引力	万有引力の法則からは、2体の運動について、公転の平均距離と公転周期の間にいわゆる第3法則が導かれる。ここでは、その導き方を通じて2体運動を考え、また天文学における第3法則の応用等も学ぶ。	同上	同上
10	惑星以外の天体運動	地球をまわる月やより一般には惑星をまわる衛星の運動も2体の運動として考えることができる。ここでは衛星の運動などや、さらに彗星のような小天体の運動について述べる。	同上	同上
11	摂動	現実の太陽系においては、惑星の衛星等の運動を論ずる場合に2体運動は理想化されたものにすぎない。小惑星の運動をはじめ現実の太陽系の力学を論ずるため18世紀以降に発展した摂動について学ぶ。	同上	同上
12	地球型惑星	水星、金星、地球、火星さらに月など地球型の諸天体について、地球からの観測や最近の直接探査で得られた結果をもとに、それらの地形的特徴や物理的な性質を学ぶ。	松井孝典（東京大学教授）	松井孝典（東京大学教授）
13	木星型惑星	木星、土星、天王星等についての知識は、最近の直接探査の結果によって格段に進んだ。ここでは、それらの成果をふまえて、これら大型の惑星の諸性質を学ぶ。	同上	同上
14	太陽系の小天体	太陽系には、惑星のような比較的大型の天体の他に火星と木星の軌道内を公転する非常に多数の小惑星や、さらに数の多い彗星などの小天体が知られている。これらの小天体についても、最近の分光観測や直接探査により多くの知見が得られている。これら小天体について学ぶ。	同上	同上
15	太陽系の起源	太陽系の諸天体は、およそ46億年以前に銀河系内の星間雲の中で太陽が形成されるのに伴って誕生した。惑星をはじめとする太陽系の天体の誕生については18世紀中ごろ以来多くの説が出されている。ここでは最近の考え方を中心に太陽系の起源について学ぶ。	同上	同上

＝ 天体物理学入門 ＝（ＴＶ）

〔主任講師：吉岡　一男（放送大学助教授）〕

全体のねらい

本科目では、天体についての知識がどのような観測や理論にもとづいて得られるのかの理解を目ざしている。そのために、主として恒星の可視域の観測を実例にとって、その運動や質量や表面温度・圧力あるいは内部構造を得る具体的過程を、演習を交えて解説する。これらの知識は、他の天体の解析の基礎にもなっている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	天体の位置の表示と年周視差	まず、15回の講義の全体の流れについて概説される。ついで、天球の概念と天球上での天体の位置の表し方を学ぶ。そのあと、恒星とはどのような天体かが説明され、最後に、恒星の直接的な距離を与える年周視差とその測定法について学ぶ。	吉岡一男（放送大学助教授）	吉岡一男（放送大学助教授）
2	天球上での天体の動きと視線速度	天球上での天体の動きとその原因について学ぶ。ついで、天体の視線上の動きを表す視線速度とその測定法について学ぶ。さらに、天体の宇宙空間内での運動が説明され、最後に、太陽およびその近傍の星々の運動を学ぶ。	同上	同上
3	恒星の集団の距離の決定	年周視差を直接に測定することのできないより遠い距離の測定法として、ここでは恒星の集団に適用されるいくつかの方法について学ぶ。	同上	同上
4	天体の明るさの測定と等級	天体の明るさは、等級で表される。ここでは、等級の定義とその測定法について学ぶ。等級には、見かけの等級と絶対等級の区別があり、また、測定される波長域による区別もされているが、それらについても学ぶ。	同上	同上
5	連星とその種類	かなりの恒星が、連星として存在している。連星は、質量をはじめとして恒星のさまざまな物理量の貴重な情報源となっている。ここでは、連星の頻度とその種類について学ぶ。また、連星を構成する星の公転運動についても学ぶ。	同上	同上
6	連星の解析	連星を観測して星の物理量を得るのに、いくつかの方法がある。すなわち、天球上で動きを観察したり、視線速度や光度の変化を観測する。ここでは、これらの方法について学ぶ。	同上	同上
7	天体物理現象の解析のための基礎的法則	これまでは、天体の運動や明るさ等の知識で間に合う現象を扱ってきた。以後は、温度や圧力等の物理量もかかわる現象を扱うので、ここではその準備として、それらの概念やそれらの間で成り立つ法則について、基礎的なものを学ぶ。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	天体の温度の決定とスペクトル	天体の温度は、主に天体からの放射とスペクトルをもとに求められる。ここでは、それらの決定法をその基礎となる物理的知識とともに学ぶ。さらに、温度決定のいくつかの例も学ぶ。	吉岡一男	吉岡一男
9	恒星の表面温度とスペクトル型・色指数	恒星は、スペクトルをもとにスペクトル型に分類されているが、スペクトル型は星の表面温度や色指数と密接な関係にある。ここでは、それらの関係について学ぶ。	同上	同上
10	ＨＲ図と恒星の分類	横軸に表面温度を示す量を目盛り、縦軸に光度を示す量を目盛ったＨＲ図は、恒星の研究に重要な役割を演じてきた。ここでは、ＨＲ図が導かれた歴史も交えて、ＨＲ図にもとづく恒星の分類について学ぶ。	同上	同上
11	太陽の年齢とそのエネルギー源	太陽は46億年もの間、現在とほぼ同じ明るさで輝いている。ここでは、このエネルギー源が核融合のエネルギーであることを、太陽の年齢が推定された過程とともに学ぶ。さらに、他の恒星のエネルギー源についても学ぶ。	同上	同上
12	恒星の内部構造の決定	現在、恒星の内部構造について、かなりのことが知られている。ここでは、恒星の内部構造がどのような原理にもとづいて決定されているかを学ぶ。また、それらをもとに、恒星の中心部の物理量が概算される。	同上	同上
13	恒星の表層構造の決定	われわれが直接に受け取る恒星からの放射は、恒星の表層から来たものである。ここでは、これらの表層の構造がどのような原理にもとづいて決定されているかを学ぶ。この原理は、星間雲など恒星以外の天体にも適用できる。	同上	同上
14	天体の化学組成の決定	ここでは、前章で学んだ知識も用いて、恒星をはじめとする天体の化学組成や温度・圧力などの物理量がどのようして求められるかを学ぶ。	同上	同上
15	太陽の世界	ここでは、われわれに最も身近な恒星である太陽で観測される現象について学ぶ。さらに、これまで学んだ表面温度や表層構造や内部構造などの決定法を太陽に適用し、具体的な結果を得る。	同上	同上

＝ 天体と宇宙の進化Ⅰ＝（ＴＶ）

〔主任講師：杉本　大一郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

天体とそれらすべてを包含する大局的宇宙について、現代の理解と解釈を述べる。宇宙が誕生し、いろいろな天体が生まれ、多様な階層構造をもつに至った過程を明らかにする。最前線の研究成果に重点をおくが、歴史と、それらを理解するための基礎も述べる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	近代宇宙観への道	1．天上の運動と地上の運動 2．天上の物質と地上の物質 3．物質世界の歴史	杉本大一郎（放送大学教授）	杉本大一郎（放送大学教授）
2	宇宙の広がりとその認識	1．距離の測定 2．銀河の世界 3．膨張宇宙	同上	同上
3	宇宙からの情報	1．可視光線による観測 2．宇宙観測のチャンネル	同上	同上
4	星の誕生と主系列星	1．恒星の世界 2．星の誕生と原始星 3．星の内部はなぜ分かる 4．星のエネルギー源 5．主系列星とその寿命 6．太陽からのニュートリノ 7．白色矮星と褐色矮	野本憲一（東京大学教授）	野本憲一（東京大学教授）
5	赤色巨星と進化の終末	1．赤色巨星への進化 2．散開星団の進化と年齢 3．小質量星の進化と球状星団 4．炭素の合成 5．質量放出と惑星状星雲 6．大質量星の進化と元素合成	同上	同上
6	超新星爆発と元素合成	1．超新星とは 2．大マゼラン雲に出現した超新星1987A 3．大質量星の進化と重力崩壊 4．ニュートリノ・バースト 5．超新星1987Aの光度曲線 6．超新星からのＸ線・ガンマ線と物質混合 7．超新星での元素合成と固体微粒子の形成 8．超新星での対流不安定と混合	同上	同上
7	連星の進化	1．新星 2．Ｉａ型超新星 3．連星と超新星の多様性 4．Ｘ線連星 5．中性子星連星と重力波 6．中性子星 7．元素の起源と太陽組織	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	銀河系と銀河	1．銀河宇宙 2．銀河の観測 3．銀河系内での星の運動 4．銀河系の概観	岡村定矩（東京大学教授）	岡村定矩（東京大学教授）
9	銀河の構造と銀河進化モデル	1．いろいろな銀河 2．自己重力系としての銀河 3．銀河内での物質とエネルギーの循環 4．銀河進化モデル 5．銀河の力学進化	同上	同上
10	銀河進化と宇宙環境	1．宇宙の階層構造とダークマター 2．銀河の形態－密度相関 3．銀河の光度関数 4．ブッチャー・エムラー効果と不規則銀河 5．楕円銀河とバルジの力学特性	同上	同上
11	銀河から宇宙へ	1．宇宙の構造を決める宇宙論パラメータ 2．宇宙の距離はしご 3．遠方銀河の距離決定法とハッブル定数 4．密度パラメータの決定 5．さらに遠くさらに広く	同上	同上
12	宇宙論の観測的基礎	1．ハッブルの法則 2．軽元素の存在量 3．宇宙マイクロ波背景輻射	須藤靖（東京大学助教授）	須藤靖（東京大学助教授）
13	ビックバン宇宙モデル	1．一様等方宇宙モデルの進化 2．宇宙論パラメータ	同上	同上
14	暗黒物質と宇宙の大構造	1．暗黒物質：観測的示唆 2．暗黒物質の候補 3．暗黒物質と宇宙の構造形成	同上	同上
15	初期宇宙の進化	1．膨張宇宙の年譜 2．4つの相互作用の分化 3．インフレーション理論 4．宇宙論の展望	同上	須藤靖 杉本大一郎

＝ 天体と宇宙の進化Ⅱ＝（ＴＶ）

〔主任講師：杉本　大一郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

同じ天体でもいろいろな波長の電磁波など異なる観測チャンネルによって、また異なる観測技術によって、それぞれに特有の側面を見せる。また、特定のチャンネルや技術をとおして初めて観測出来る現象もある。宇宙の探究は、広い意味での視野の拡大をとおして進む。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	新しい技術が開く新しい天文学	1．視野を広げる 2．詳細に見る 3．情報を引き出す。	杉本大一郎（放送大学教授）	杉本大一郎（放送大学教授）
2	電波天文観測Ⅰ	1．電波天文学の誕生 2．電波の発生機構 3．電波望遠鏡のしくみ	石黒正人（国立天文台教授）	石黒正人（国立天文台教授）
3	電波天文観測Ⅱ	1．電波天文観測の方法 2．干渉計型電波望遠鏡 3．ＶＬＢＩ（超長基線電波干渉計） 4．その他の電波望遠鏡	同上	同上
4	電波で見る太陽および星の誕生と死	1．電波で見る太陽 2．星間ガスから星へ 3．原始惑星系 4．超新星残骸とパルサー	同上	同上
5	電波で見る銀河系および銀河	1．銀河系の大局構造 2．銀河系中心部 3．電波で見るさまざまな銀河の姿 4．活動銀河中心核と巨大ブラックホール	同上	同上
6	大気圏外から観測するＸ線	1．見える宇宙 2．Ｘ線とは 3．Ｘ線と大気 4．Ｘ線天文学の始まり 5．わが国のＸ線天文学 6．ロケット	牧島一夫（東京大学教授）	牧島一夫（東京大学教授）
7	銀河系からのＸ線	1．Ｘ線で見た太陽 2．超新星の残骸 3．かに星雲とパルサー 4．連星Ｘ線パルサーと中性子星の磁場 5．中性子星の半径とＸ線バースト現象 6．中性子星の質量とブラックホール 7．この章のまとめ	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	銀河系の外から来るX線	1．X線を反射させる 2．X線で見た銀河 3．銀河の中心の巨大ブラックホール 4．銀河団と暗黒物質 5．宇宙の物質量と構造形成 6．宇宙の生い立ちを探る	牧島　一夫	牧島　一夫
9	可視光・赤外線観測の原理	1．天体からの光 2．光を集める 3．光を分ける 4．光を記録する	家　正則（国立天文台教授）	家　正則（国立天文台教授）
10	光・赤外線観測の新技術	1．望遠鏡大型化と能動光学 2．大気ゆらぎの克服 3．国際観測所 4．スペースと地上	同　上	同　上
11	光・赤外線で見る星、星雲、銀河	1．赤外線観測 2．惑星の観測 3．原始星・惑星系形成 4．スペクトル線診断 5．銀河の活動現象	同　上	同　上
12	深宇宙の観測	1．銀河の分布と宇宙の大構造 2．銀河の形成 3．銀河の進化	同　上	同　上
13	天文学における理論とその役	1．総合科学としての天文学 2．宇宙における極限状態 3．宇宙における形態形成と進化	杉本大一郎	杉本大一郎
14	計算機という理論天文台	1．シュミレーションがひらく宇宙像 2．宇宙の流体現象 3．宇宙の多体現象 4．超高速計算とその将来	同　上	同　上
15	21世紀の天文学	1．人類の宇宙認識 2．宇宙像の拡大と観測手段 3．「発見の時代」の天文学 4．宇宙認識の拡がり 5．２１世紀へ向かう観測の展望	同　上	天体と宇宙の進化Ⅰ・Ⅱの講師全員

＝固　体　地　球＝（ＴＶ）

〔主任講師：濱田　隆士（放送大学教授）〕

全体のねらい

固体地球という術語は、大気圏と水圏を除いた地球部分を指す。しかし、実はその固体地球の本質は、大きな時間スケールが必要であることを条件でみると、むしろ流体運動が支配的な、美しい成層構造をなす球体であることを概説する。地球時間の長さと目前の物体が今示す挙動との落差の大きさに、地球の偉大さが示されよう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	特異な成層惑星	太陽系の惑星の中で、唯一の水惑星地球は、外観としてブループラネットであるばかりでなく、内部まで“水浸し”の、しかも美しく密度成層した特異な惑星であるとの認識を深める。成層単位内、あるいはそれらの間で大規模な、ゆっくりとした循環が成立している。	濱田隆士（放送大学教授）	濱田隆士（放送大学教授）
2	鉱物の世界	地球物質を構成している、地球科学的な最小単位とされる鉱物を、さまざまな角度から捉えてみる。結晶という秩序体系が、地球内部や表層での多様な環境条件に応じて形成されていくかを示し、大きな意味で、地球科学的環境示標物質としての存在を解説する。	同上	同上
3	岩石・地層の世界	岩石や地層は、すでに複雑な構成をもつ地球表層近辺の物質である。鉱物ほど局所的ではないが、環境支配のもとに、それなりに特有の岩石・地層が形成されることを示し、さらにその性質を逆に利用して、現存する岩石・地層から地球の過去の状態を知る手段とする。	同上	同上
4	化石の世界	生命を持つ水惑星の歴史をたどる一つの大きな柱は、生命を形として残している化石の研究である。化石は生命環境の示標であると同時に、地球上で生起した進化の道にのった、地球時間の指示者でもありうる。増大してきた種の多様性の特性も化石によって語られる。	同上	同上
5	地球物質の循環	地球は一つの巨大なオープン・システムと考えてよい。太陽エネルギーと共に、地球内部エネルギー、天体としての回転エネルギーが相互に関わり合う場には、様々な理論と時間スケールでの物質循環が生起している。地球事象は物質循環で語られるといってよい。	同上	同上
6	地殻変動と地形	地球は生きている、あるいは休みなく動く地球という表現を地球科学の立場から描写してみる。現在の地形は、さまざまな過去の積算された結果であるから、地殻変動や気候変化などを地表（海中を含め）形態からたどる糸口になりうることを示す。	同上	同上
7	地史－1 先カンブリア時代	地球46億年の歴史のうち、最後の僅か6億年弱が生物史をフルに活用して復元される地史である。それ以前の40億年には、いったい何事が進行していたのか、生物史のみならず、火成史・変成史を含む地殻変動史をひもとき、地球史の理解を深める。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	地史－2 古生代	数多くのビジュアルな化石記録を成すようになった顕生塁代のうち、最初の6億～2.3億年間の歴史を概観する。この間に、さんご礁の形成・魚類の出現、生物の上陸など、生命史上の大事件が含まれている。日本列島の歴史もこの頃から詳しくなってくる。	濱田隆士	濱田隆士
9	地史－3 中生代	中生代といえば、恐竜やアンモナイトの全盛時代、という印象が深い。しかし、それらの発展やいわゆる大絶滅事件は、実は大局的にみると発展していく生命世界のほんの１エピソードであり、生物危機の意味を再考する必要もあることを説く。	同上	同上
10	地史－4 新生代	人類の出現も含み、現在に到る約6500万年間は、一言では哺乳類時代と通称される。若い地史であるだけに、環境はより複雑化し、生物種も多様性を益々増大させ、地域特性が著しくなってくる。日本列島の形成史も詳しく理解できる時代となり、未来予測にもつながる。	同上	同上
11	生物の大進化と絶滅	生物界の多様性増大が、まぎれもない生物大進化の不可逆特性であるとされるが、そのメカニズムは単純ではない。化石素材から見えてくる繁栄と絶滅のくり返しには、周期性らしき様相も認められ、種々の解析が進んでいる。恐竜の絶滅仮説にもふれる。	同上	同上
12	人類の足跡	人類の起源はまだ確定していない。がしかし、かつて予想されたよりもはるかに古く、少なくとも 500万年前に遡ることとなり、 200万年以降の第四紀を“人類紀”と呼ぶことはできなくなった。人類の進化の特徴は、知的社会の創成にあるが、地球環境の破壊も起こした。	同上	同上
13	新しい地球像の形成に向けて	文化の進展、科学の興隆につれて、人類の地球に対する考え方は大きく変わってきた。それは、単に地球史の詳細が解明されてきたことのみによるのではなく、ヒトと地球自然環境との相互作用やそれについての認識が遷り変わってきたことにもよる。	同上	同上
14	プレート・テクトニクス	プレート・テクトニクス理論誕生への道は、科学史に大きく記されるべき経過である。ウェゲナーの大陸移動説にも言及しながら、科学の協同作業が解き明かす、ダイナミック地球像の流れを浮き彫りにする。動かざるごと大地の如し、の認識は音を立てて崩壊した。	同上	同上
15	プリューム・テクトニクス	プレート・テクトニクス仮説にも解決できない地殻～地球内部運動メカニズムがある。それを成層構造の再調査や地史的ないきさつからのプレート成長記録の新しい解析法を組み合わせ、より可能性の大きなグローバル・テクトニクス理論がいま展開されつつある。	同上	同上

＝ 日本列島の地球科学（’９９）＝（ＴＶ）

〔 主 任 講 師 ： 濱 田　隆 士（放送大学教授）〕

全体のねらい

日本列島の形質は、地球の歴史の中で育てられてきた。しかも地殻の激動の場からの産物である。赤道直下に近い熱帯サンゴ礁地帯であった部分が、プレート・テクトニクスによって北上し、アジア大陸の東縁と衝突して誕生した結果であることを、周辺の海域を含めた幅広い地球科学の眼でたどってみる。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	列島の特徴	日本列島とその周辺の、海水をとり去った結果の大地形を概観し、プレート・テクトニクスによる変動帯として成長してきた諸々の特徴を、グローバルな構造論の立場を通して理解する。	濱田隆士（放送大学教授）	濱田隆士（放送大学教授）
2	列島の地質構造	日本列島は、複雑な地殻変動の重なりとして形成されたので、現在見られる地質構造も複雑である。プレート衝突場の特徴として、変成帯と非変成帯とが繰り返し配列していたり、火山が帯状に連なるなど、豊かな歴史を反映したものであることを理解する。	同　上	同　上
3	列島の気象	現在の日本列島は、北半球中緯度で西に日本海を隔ててアジア大陸に向かい合い、ほぼ南北に細長くのび黒潮・親潮という二大海流に囲まれ、さらに東は太平洋に面しながら、北半球の偏西風帯に位置する。この配置が季節毎に特徴的な気象をもたらすことを理解する。	同　上	同　上
4	列島をめぐる海	日本は、海洋国・臨海国家と呼ばれるのに相応しい。海洋とは、ただ単に水をたたえた広大な低地というだけはない。地球の自転運動により、太平洋の西縁に当たる日本列島近辺の海水は特異な運動をとるようになっていることを理解する。	同　上	同　上
5	島弧プレート運動	日本列島は、グローバル・テクトニクスとしてのプレート運動によってでき上がった。地球表層部にはプレートがどのように配置され、どのような動きをしてきたのか、列島形成の原動力になった地殻運動のモデルを検証する。	同　上	同　上
6	列島周辺の海底	海の歴史は、海底の地形と地質、そしてその形成年代が語ってくれる。海底の歴史は、プレートのどの位置を占めるかで大きく異なる。列島地形や地質構造との調和のとれた配列が、海底の相対的な動きを示していることを理解する。	同　上	同　上
7	地震活動	変動帯に位置する日本列島には、過去・現在そして未来を通じ、地震・断層運動が激しい。地震とそれによって起こされる地震災害は、日本列島のもつ宿命であることを理解し、地震対策の現況をも併せ理解する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	火山活動	伊豆大島や雲仙普賢岳だけが火山ではない。日本列島は、プレートの接し合う場として、地震帯と火山帯とが併存しているので、地質時代から現在に至るまで、多数の火山活動が起こって現在の地形・地質を形成していることを理解する。	濱田隆士	濱田隆士
9	地史（1）古生代	日本列島の基礎をつくり上げた古生代やそれ以前の地層が語る歴史はまさにグローバルで、アジア大陸の要素と、今は消え去った南海のパシフィカ大陸要素との出会いにある。化石の語る古生代地理を考え、ダイナミックな列島形成史前半を理解する。	同上	同上
10	地史（2）中生代	日本列島形成史に占める中生代の位置は特別である。かつては古生代のものと思われてきた秩父帯のかなりの部分が中生代前半の形成によることが明らかとなり、列島史は大きく塗りかえられてきている。恐竜化石の産出は、大陸とのつながりを示すものと理解できる。	同上	同上
11	地史（3）新生代	日本列島がほぼ現在の姿になる、いわば仕上げの時代であり、火山活動、隆起・沈降運動も激しかった。したがって侵食力も強く、堆積作用も大きかったので、山脈・半島・平野の形成期となり、海流系も安定化してきた時代であることを理解する。	同上	同上
12	地下資源	小さな島国の日本は、多種大量の資源を外国に依存している。そのような中で、日本の地史を反映した鉱化作用・地下資源鉱床の形成もあった。石灰岩やヨードなどのみが完全自給型地下資源であることを理解し、エネルギー資源には乏しい実情をみつめる。	同上	同上
13	多島海型自然環境	日本は島国といわれるが、それはただ列島をなしているということだけでなく、大小様々の島々を抱えた多島海的自然環境下にある、ということに他ならない。わが国の気候・風土・産業・文化へもその影響が大きいことを理解する。	同上	同上
14	日本の地球科学の進展	日本列島の歴史が複雑な分、その研究史も多彩である。輸入文化として始まった系統的な日本の地球科学を認識し、それが時と共に消化・吸収され、今では日本からならではの地球科学が、世界に向けて発信される時代となった発展の経緯を概観する。	同上	同上
15	人と暮らし	日本列島の歴史の主役が大陸系と南方系であったことに似て、日本列島での人類発展史・生活型にも、南方型と大陸型とがある。自然環境に見合った風土が形づくられてきた縄文・弥生時代以降、次第にグローバル化も混じ、現在ではヒトと自然の接点が変容を遂げた。	同上	同上

＝ データの科学（’０１）＝（R）

〔主任講師：栗原　考次（岡山大学助教授）〕

全体のねらい

様々な分野で収集されるデータに対して、データに含まれる不確定要素やばらつきを客観的に分析し、データに含まれる真実をより多く引き出すためには、データを科学的に分析する必要がある。講義では、前半では各分野で共通に利用される分析法の中から代表的なものを取り上げ、その考え方と利用方法について解説する。後半では、環境に分野を絞り、データの収集から分析さらに解釈に渡る一連の分析手順について解説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	データの科学	各分野で日々収集・蓄積されているデータを科学的に分析するためには、分析の目的を明確にした上でデータの収集、分析、解釈の一連の手順を客観的に行う必要がある。講義では、分析の手順を解説するとともに、データの属性や構造などデータに関わること全般について概説する。	栗原　考次（岡山大学助教授）	栗原　考次（岡山大学助教授）
2	データの記述とグラフ化	得られたデータを正しく分析するためには、データを整理集約しデータが表す性質を簡潔かつ明確に記述表現する必要がある。講義では、データを代表値として集約する方法とデータを視覚的に表現するグラフ化について概説する。	同　上	同　上
3	データに基づく推測（その１）	データに基づきデータが得られた集団の性質を解明するためには、集団を特徴づける平均や分散などの母数の推定や検定を行う統計的推測の概念が不可欠である。講義では、推定や検定の手順や考え方を例題とともに解説する。	同　上	同　上
4	４章 データに基づく推測（その２）	前の章の続きである。講義では、前の章で解説した検定の概念を、計量データのように比率尺度で与えられるデータに加え、分割表や順序のように名義尺度、順序尺度で与えられるデータに適用し、その利用方法について解説する。	同　上	同　上
5	データの間の関連（その１）	２つの変量間の関連性の分析は、その構造と解釈により大きく２つに分けられる。１つは変量間が対等な関係である相関分析であり、他方は変量間に因果関係がある回帰分析である。講義では、変量間での相関指標の作成法及び回帰分析の最も単純な場合である単回帰分析について解説する。	同　上	同　上
6	データの間の関連（その２）	前の章の続きである。回帰分析において１つの変量と複数の変量間の因果関係を調べる重回帰分析の考え方とその利用法について述べる。さらに、データが質的なデータの場合に適用される数量化Ｉ類についても例題とともに解説する。	同　上	同　上
7	データの判別（その１）	データの判別では、データをいくつかのグループに分けたり、新しくデータが観測された場合、そのデータがどこのグループにはいるのかを判別する。講義では、判別分析の考え方を例題とともに解説する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	データの判別（その２）	前の章の続きである。講義では、変量の数が複数個の場合について、誤判断確率や期待損失などの概念とともに解説する。さらに、データが質的なデータの場合に適用される数量化Ⅱ類についても取り上げる。	栗原　考次	栗原　考次
9	データの次元の縮約（その１）	データが多くの変量について観測される場合、構造を単純化するために、変量の次元を縮約することが望まれる。講義では、１つまたは少数個の総合的指標で代表させる主成分分析を取り上げ、その考え方および利用法について解説する。	同　上	同　上
10	１０章 データの次元の縮約（その２）	前の章の続きである。講義では、変量の数が複数個の場合について、具体的な例題とともに解説する。さらに、データが質的なデータの場合に次元の縮約法の１つとして適用される数量化Ⅲ類についても取り上げる。	同　上	同　上
11	データの分類（その１）	得られたデータをいくつかのグループに分ける分類は各種の分野で行われているが、これらの総称はクラスター分析と言われる。講義では、クラスター分析の概念およびその利用法について階層型のクラスター分析を中心に概説する。	同　上	同　上
12	データの分類（その２）	前の章の続きである。講義では、変量の数が複数個の場合について、例題に基づき階層型クラスター分析の手法の特徴を解説する。さらに、空間データの分類法及び構造分析についても取り上げる。	同　上	同　上
13	寿命データの解析	寿命データの特徴として、観測中の中途打ち切りデータなどの不完全データが多数含まれ、関与する要因が複数であることがあげられる。講義では、ハザードや競合リスクの基本的概念とともにこれらのデータに対する解析法について解説する。	同　上	同　上
14	環境データの解析（その１）	環境保全や環境リスク評価等のために、近年リモートセンシングデータの解析法が注目されている。講義では、リモートセンシングデータのようなイメージデータの特徴及び簡単な解析法について具体例とともに解説する。	同　上	同　上
15	環境データの解析（その２）	前の章の続きである。講義では、ランドサットＴＭデータの可視光と赤外線のセンサから得られる具体的なリモートセンシングデータに基づいて、土地被覆の分類法、時系列的な比較、土地被覆の構造分析などについて解説する。	同　上	同　上

＝ カオス学入門（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：合原　一幸（東京大学教授）〕

全体のねらい

本講義では、20世紀科学の大きな発見の一つであるカオス（Chaos）を取り上げ、その基礎理論及び応用技術について、様々な側面から解説する。また、自然システムや人工システムに遍在する多様なカオスの実例を紹介するとともに、カオスと密接に関連するフラクタルや複雑系などの諸概念についても説明する。本講義によって、カオス学の理論と応用に関する基礎的知識を得るとともに、自然観・世界観を深め、さらには21世紀の非線形科学技術を展望することを目的とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	カオス学の歴史	カオスの理解が大きく進展したのは、ここ四半世紀のことであるが、その源流はニュートン力学が確立された17世紀までさかのぼることができる。カオスの具体例を紹介しながら、カオスの発見とその理解の深まりの背景と歴史を概説する。	合原　一幸（東京大学教授）	合原　一幸（東京大学教授）
2	離散時間力学系のカオス	カオスの基本的性質を理解するために、離散時間力学系のカオスを取り上げる。まず、カオスの典型例として、1変数の写像であるベルヌーイシフト写像、ロジスティック写像、テント写像のカオスについて、その力学構造を解説する。さらに、より高い次元のカオス写像の例も紹介する。	同　上	同　上
3	連続時間力学系のカオス	微分方程式で表される連続時間力学系であるローレンツ方程式、レスラー方程式、ダフィング方程式などのカオスについて解説する。さらに、離散時間力学系と連続時間力学系との関連について考察する。	同　上	同　上
4	カオスと分岐現象	離散時間力学系や連続時間力学系において、パラメータ値の変化にともなって、解の定性的構造が変化する分岐現象について解説する。さらにこの知識をふまえて、カオスが生み出される分岐過程、すなわちカオスへ至る道すじについて考察する。	同　上	同　上
5	カオスとフラクタル	カオスの幾何学的性質は、自己相似性すなわちフラクタルの概念で特徴づけることができる。フラクタルの典型例であるカントール集合を取り上げ、その直観に反した不思議な性質を明らかにするとともに、カオスとフラクタルをめぐる様々な話題を紹介する。	同　上	同　上
6	カオスの数理構造	カオスはその現象の底の深さゆえに、今だに数学的には厳密に定義されてはいない。しかしながら多くのカオスが共有するいくつかの基本的性質は、明らかになってきている。これまでの講義の内容を基にして、カオスの数理構造を整理する。	同　上	同　上
7	リアルワールドのカオス	この世の中に実在するほとんどすべてのシステムは、自然システム、人工システムを問わず非線形性を有している。したがって、非線形システムの典型的振る舞いであるカオスも、世の中に広く見られる。これらの多様なリアルワールドカオスを、実例を示しながら紹介する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	カオスと脳	21世紀は「脳の世紀」とも言われ、現在世界中で脳研究が活発に行われている。他方で脳は非線形システムの典型例でもあるため、脳においては、ミクロレベルからマクロレベルに至る様々な時空間スケールでカオス的現象が観測されている。これらの脳のカオスについて解説する。	合原　一幸	合原　一幸
9	カオスニューラルネットワーク	脳を構成する神経細胞（ニューロン）は、一種のカオスデバイスである。カオス的素子から成る人工的ニューラルネットワークである「カオスニューラルネットワーク」によって実現されうる新しい脳型情報処理システムについて、その集積回路技術を含めて解説する。	同　上	同　上
10	カオスと計算	ある種のカオスは、計算能力をそのダイナミクスの中に潜在的に有しており、現在のコンピュータの原型であるチューリングマシンと対応づけることもできる。このようなカオスの複雑な性質を解説するとともに、カオスの計算の本質的困難さやその応用可能性についても議論する。	同　上	同　上
11	カオスと複雑系	科学やモデル学の歴史を踏まえて複雑系の概念を解説するとともに、その解析のための数理モデルを紹介する。さらに、カオスニューラルネットワークモデルなどを例にして、複雑系研究の理論的基盤としての高次元カオスの重要性を論じる。	同　上	同　上
12	カオスとシステム制御	カオスと制御との関連について、はじめにカオスを抑制して周期状態を実現するカオス制御手法について解説する。次に、カオスをむしろ積極的に活用する制御原理であるハーネシングおよびホメオダイナミクスの考え方を紹介するとともに、生体システムの制御原理との関連についても論じる。	同　上	同　上
13	カオスと時系列解析	世の中には、不規則に変動する時系列データがあふれている。これらの時系列データをカオスの立場から解析するカオス時系列解析について、アトラクタ再構成、フラクタル次元解析、リアプノフスペクトラム解析、リカレンスプロットなど基礎的解析手法を解説する。	同　上	同　上
14	カオスと予測	カオスはしばしば、単純な非線形法則に従って極めて複雑な振る舞いを生み出す。このことは逆に、複雑な時系列データの将来を、非線形法則を用いて予測できる可能性を示唆している。カオスの振る舞いを予測する決定論的非線形予測手法の基礎理論と応用例について解説する。	同　上	同　上
15	カオス学と科学技術	これまでの講義内容を振り返りながら、カオス学と科学技術さらには哲学との関係を概観するとともに、カオス学の理論と応用の将来、21世紀の非線形科学技術を展望する。	同　上	同　上

＝ 運動と力（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：阿部 龍蔵（放送大学教授）〕
〔主任講師：堂寺 知成（放送大学助教授）〕

全体のねらい

運動と力との関係を調べる学問は力学とよばれ、これは物理学の基礎分野の１つである。本講義では、日常生活との関連、映像の活用などに重点をおき力学の基礎的な事項をなるべくやさしく解説する。数学の準備として微積分学、線形代数などの習得が望ましいが、それを前提とせず講義中で適当な説明を加えるつもりである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	位置・速度・加速度	物体の運動を記述するにはその位置を指定する必要がある。このためには空間中に適当な座標系を導入し、物体の座標を決めればよい。あるいは位置ベクトルを決めるといってもよい。ここではベクトルの性質、物体の速度や加速度について説明する。	阿部 龍蔵（放送大学教授）	阿部 龍蔵（放送大学教授）
2	運動の法則	ニュートンは著著プリンキピアにおいて運動の法則を述べ、力学の体系を確立した。ここでは運動の第一、第二、第三の法則について説明する。それらの法則の応用として等速度運動、等加速度運動、放物体の運動、抵抗のある運動を決める基礎方程式を導出する。	堂寺 知成（放送大学助教授）	堂寺 知成（放送大学助教授）
3	単振動・強制振動・減衰振動	振動は日常的によく見られる運動の一種であるが、その内もっとも簡単なものは単振動である。ここでは単振動の性質を学び、その延長線として強制振動、減衰振動について触れる。	阿部 龍蔵	阿部 龍蔵
4	非線形力学	単振動を記述する方程式は線形微分方程式であるが、非線形性を入れると運動の情況は一変しカオスが出現する。カオスを示す振動子を観察しカオス運動を実感する。カオスの特徴である初期値に関する敏感性を凹凸斜面での落下の計算機実験を見ながら理解する。	堂寺 知成	堂寺 知成
5	仕事と力学的エネルギー	仕事とかエネルギーという言葉は日常的にもよく使われるが、その厳密な定義は力学で与えられるものである。これらについて触れるとともに力が保存力の場合、なめらかな束縛の場合などに力学的エネルギー保存則が成立することを示す。	阿部 龍蔵	阿部 龍蔵
6	運動量と力積	自動車事故では自動車の質量が大きいほど、また速さが大きいほどダメージがひどくなる。このようないわば運動の勢いを表す量として運動量を導入し、これと密接な関係のある力積について学ぶ。	同上	同上
7	計算機の応用	運動方程式を数値的に解くための基礎を学ぶ。解析的に解ける例題ではあるが、直感を裏切る振る舞いを示す非線形振り子、電磁場中の電子の運動などの例を示す。印刷教材にプログラムを例示し、パソコンを所有する学生には種々の演習問題を提供する。	堂寺 知成	堂寺 知成

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	流体の運動	気体と液体を総称して流体という。力学の対象は固体だけでなく流体にも及び、流体の運動を論じる力学を流体力学という。ここでは流体の基本的性質を学び、次に力学的エネルギー保存則の延長としてベルヌーイの定理を導き、その応用例をいくつか学ぶ。	堂寺　知成	堂寺　知成
9	構造力学	地震で建物が崩壊したり、橋梁が落ちたりする。物体に力が加わると、力が小さいうちは物体の変形の大きさは力の大きさに比例しフックの法則が成立する。力がある限界を越えると物体の破壊が起こる。この章では力の釣り合い、弾性体の変形、橋の構造といった構造力学の基礎を学ぶ。	同　上	同　上
10	万有引力	ニュートンのりんごの話はあまりにも有名だが、ここでは万有引力について学ぶ。点状の物体間の万有引力を説明した後、有限な形の物体同士に働く万有引力を論じる。とくに、一様な球同士の場合、具体的な計算を行う。	阿部　龍蔵	阿部　龍蔵
11	惑星の運動	太陽と地球との間には万有引力が働くが、この２つだけに注目した場合の問題を二体問題という。二体問題は基本的に一体問題に帰着するが、このような観点から惑星の運動を調べ、ケプラーの法則が導かれることを示す。	同　上	同　上
12	相対運動	慣性の法則が成立するような座標系を慣性系という。慣性系に対して相対運動を行う座標系では、一般に見かけ上の力が現れこれを慣性力という。ここでは並進運動、回転座標系などを考察しガリレイの相対性原理、コリオリ力、遠心力などについて学ぶ。	同　上	同　上
13	剛体と慣性モーメント	力を加えても変形しないような理想的な固体を想定し、それを剛体という。剛体の運動を記述する基本的な物理量は慣性モーメントであるが、その具対例をいくつか扱う。また、剛体の簡単な運動として固定軸をもつ場合と平面運動について述べる。	同　上	同　上
14	剛体の回転	固定点の回りで回転するような剛体を考え、その全角運動量、運動方程式、全運動エネルギーなどについて考えていく。また、このような回転を記述する数学的な方法として、オイラー角を導入し、それに伴う座標変換について論じる。	同　上	同　上
15	重力場中の対称こま	こまの運動は、力学の各種の課題の中でとくに興味のある問題である。ここでは重力場中の対称こまを扱い、オイラー角を利用してその代表的な各種の運動について論じていく。とくにオイラー角θが０となる場合（眠りごま）が実現されるための条件を導く。	同　上	同　上

＝光と電磁場　（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：中山　正敏（九州大学名誉教授）〕
〔主任講師：櫻井　捷海（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

現代文明は、光、電波、電流、磁気などによって支えられている。光は実は電気と磁気の波、すなわち電磁波の一種である。本講義では、光や電磁気現象を電場と磁場という2種類の場と、その基本法則によって理解することを目指す。身近な例から出発して電磁場のイメージを作り、さまざまな現象や応用例を体系的に説明する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	光と電磁気	光、電波、電気、磁気の諸現象は、身の回りにあふれ、現代文明を支えている。これらは、互いに関連しあっており、空間の中に広がった電場、磁場によって表わされる。光、電気信号の速度を測る。光のエネルギーの伝播の様子を、点・線・面光源について学ぶ。	中山　正敏（九州大学名誉教授） 櫻井　捷海（東京大学名誉教授）	中山　正敏（九州大学名誉教授） 櫻井　捷海（東京大学名誉教授）
2	波の性質	光や電波などを波として捉える準備として波の一般的な性質を学ぶ。水面波を例として、波と振動の関係、位相、正弦波を説明する。波の重ね合わせの原理、干渉、回折格子について述べる。波の伝播についてのホイヘンスの原理を紹介する。	同上	同上
3	光の波	ＣＤが色づいて見えることから、光が波であることを理解する。回折格子により、光の色と波長の関係を知る。光の伝播について、光線の意味を知り、光線の直進、反射、屈折の諸法則を、ホイヘンスの原理によって説明する。レンズの原理と簡単な応用を述べる。	同上	同上
4	電波と光	電波と光が電磁波であることを、説明する。電磁波の波長による分類、その特徴、応用を概観する。電磁波が偏光を持つことを説明する。光が吸収や放出などで原子とエネルギーを交換するときは、光量子を単位とすることを学ぶ。レーザーの原理を述べる。	同上	同上
5	電荷と電場	静電気現象の基本概念を説明する。電荷間のクーロン力と、それを媒介する電場について述べる。電場を電気力線で表わし、それがガウスの法則にしたがうことを示す。ガウスの法則から、対称性のよい場合の電場を計算する。	同上	同上
6	電位と電気エネルギー	静電気現象を、エネルギーの観点から考える。電気力のなす仕事は、電位を用いて表わされる。電位と電場の関係を説明する。応用として、導体の静電誘導、コンデンサーについて述べる。静電気エネルギーが、電場によって担われていることを示す。	同上	同上
7	誘電体と電場	不導体である誘電体と電気現象の関係を述べる。微視的な電気双極子の集まりによる巨視的な電場が、分極電荷を用いて表わされることを説明する。電気分極の場、電束密度の場を導入し、それを用いて誘電体がある場合のガウスの法則を表わす。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	電流	電流は電荷粒子の流れであることを説明する。オームの法則について述べる。ジュール熱、電池の起電力を、エネルギーの転換過程として説明する。空間に分布している電流を、電流密度の場で表わす。電荷の保存則から、電流密度の場の形が決まることを示す。	中山　正敏 櫻井　捷海	中山　正敏 櫻井　捷海
9	磁石と磁場	磁石による静磁気現象について述べる。磁石は単独の磁荷に分けられず、磁気双極子が要素となる。磁気のクーロンの法則、ガウスの法則が成り立ち、誘電体の場合と平行した記述ができる。磁束線は源を持たず、閉曲線としてのみ存在する。	同上	同上
10	電流と磁場	電流は磁場から力を受ける（ローレンツの磁気力）。その反作用として電流が作る磁場は、ビオ＝サバールの法則にしたがう。電流コイルと磁気双極子の対応関係を述べる。電流の作る磁束密度は閉曲線をなし、アンペールの法則にしたがうことを示す。	同上	同上
11	電磁誘導	磁場と電流コイルが相対的に動くとき、コイルに起電力が誘導される。それを表わすファラデーの法則を説明する。コイルの相互誘導、自己誘導について述べる。電流のエネルギー、磁場のエネルギーについて学ぶ。発電機など電磁誘導の応用例について述べる。	同上	同上
12	ベクトル解析と静電磁場の法則	これまで積分形式で電磁場の法則を説明してきた。同じ法則を各点での場の微分量の関係として記述できると、近接作用の場の立場によりふさわしい。はじめにベクトル解析について学んだ後に、静電場、静磁場に関する法則の微分形式について説明する。	同上	同上
13	マクスウェル方程式の導出	電位のポアソン方程式、静磁場を表わすベクトルポテンシャルの方程式を導く。電磁誘導の法則と、変位電流の導入により拡張したアンペールの法則の微分形式を説明する。これまで述べてきた電磁場の法則をマクスウェルの方程式（微分形式）としてまとめる。	同上	同上
14	マクスウェル方程式と電磁波	マクスウェル方程式から電磁波の波動方程式を導く。電磁波の性質についてしらべる。マクスウェル方程式を解くときの境界条件や電磁波の反射屈折などにも触れる。また、伝送線に沿っての電気信号の伝搬についても考える。	同上	同上
15	電磁波の発生と検出	ベクトルポテンシャルとスカラーポテンシャル（電位）に対する波動方程式を導く。電磁波の発生について述べる。ポインティングベクトルについて説明する。アンテナアレイ、放射パターンなどの実用例について述べる。また、電磁波の検出について説明する。	同上	同上

＝ 量子力学（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：大西　直毅（山梨大学教授）〕
〔主任講師：市村　宗武（法政大学教授）〕

全体のねらい

20世紀の最初の四半世紀、物理学ではそれまでの概念や描像を根本から覆す転回が相次ぎ、我々の自然認識が大きく変革した。その一つの柱が量子力学である。この講義ではその変革の歴史を踏まえ、現代物理学の核心に触れながら、量子力学の基本的な考え方や法則の理解に努める。あわせて、原子、分子の構造、光や物質との相互作用になどについての理解を深める。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	物理学と量子力学	20世紀の物理学発展における量子力学の位置付けについて述べ、先端技術などで果たしている役割を初めに紹介する。量子論の発端は光の性質の解明にあった。光学は、波動説の復活と電磁波説により、古典物理学の一つの柱である電磁気学に集約される。	大西　直毅（山梨大学教授）	大西　直毅（山梨大学教授）
2	量子の登場	吸収率と放射率の比は振動数と温度のみで決まる普遍関数であり、これを決めるのが量子論の誕生に繋がる。黒体放射のT４乗則から、ヴィーンの変移則を経てプランクの放射公式に至る経緯を紹介し、光の粒子性の概念の変遷と波動性・粒子性の二重性について学ぶ。	同　上	同　上
3	原子論と電子	量子力学はミクロの世界、特に電子の運動を司る法則であるので、現代原子論の成立と重なる。化学で確立した元素の概念、原子論・分子論を経て、電子の発見、分光学でのゼーマン効果の電子論による説明、原子核の発見、など、原子構造の解明の基礎的知見となる。	同　上	同　上
4	量子力学前夜	ボーアはラザフォードの模型を踏襲しながら、定常状態と対応するエネルギー準位間の遷移の概念で、古典電磁気学の帰結を不問にして、困難を避け水素原子のスペクトルを説明した。ゾンマーフェルトは作用積分から、古典量子化でより一般的な量子数を提唱した。	同　上	同　上
5	量子力学への２つの道	ハイゼンベルグは電子の軌道運動の古典的描象をすて、遷移振幅の解析から交換関係に依る正準量子化の道を拓く。ドゥブローイは物質波を提唱し、それを受けシュレーディンガーは電子の波動力学に到達し、異なる２つの道を経て量子力学の成立に向かう。	同　上	同　上
6	量子力学の成立	２つの道を別々に進んだ方法は、それぞれ独り立ちはできなかったが、同等性が証明され変換理論で完成へと向かった。調和振動子は最も基本的な力学系で、交換関係から波動関数を生成する演算子を導入して解く。1次元の井戸型ポテンシャルの波動方程式を解く。	同　上	同　上
7	球対称性と角運動量	中心力は球対称性のために、角運動量が保存し、極座標の導入によって、動径と角度の座標へ変数分離できる。角度の部分は角運動量演算子の交換関係から解け、波動関数が球面調和関数で表せる。動径部分は遠心ポテンシャルを含んだ、一次元の問題に帰着する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	水素原子	水素原子は電子が一つで、一体問題として解け、中心力であるので動径部分を解いて、エネルギー準位と波動関数を示す。多電子の原子の場合にも、電子の量子状態を指定するのに、水素原子の電子軌道の量子数が活かせるので、詳しく説明する。	大西　直毅	大西　直毅
9	粒子性と波動性	量子力学では時間発展を記述するのに波動関数の変化と捉える見方と演算子の変化とする見方がある。両者の関係を明らかにする。ついで、粒子性と波動性の両面性を波束の概念で理解するとともに不確定性関係を導き、量子論の理解を深める。	市村　宗武（法政大学教授）	市村　宗武（法政大学教授）
10	スピンおよび多粒子系	静止した電子でもスピンという半整数の角運動量を持ち、磁石になっている。このような内部自由度の概念を学ぶ。ついで、複数の同種粒子は互いに区別できず、相互の置換に波動関数が対称か反対称という統計性を持つことを学び、統計性とスピンの関係を見る。	同　上	同　上
11	原子・分子の構造	まず変分法という近似手法を学ぶ。次いで、多体系取扱いの基礎例として２電子を持つヘリウム原子を考察する。つぎに周期律表の理解を中心に平均場近似を用いて原子の構造を定性的に考察する。終りに分子が形成する機構の１つとして水素分子を考察する。	同　上	同　上
12	非束縛状態 ―反射・透過・散乱	まず１次元の散乱問題を取上げ、反射、透過現象を考える。特に古典論と量子論の本質的違いであるトンネル効果を理解する。ついで３次元の散乱問題についても考え方とその取扱い方の基礎を学ぶ。	同　上	同　上
13	摂動論 I ―定常状態	系の主要部分（解ける問題）に弱い付加的力（摂動）が加わったとき、その摂動の取扱い方を考える。まず定常状態について、縮退がない場合とある場合に別けて考察する。原子の分極率、ゼーマン効果などを取り上げる。	同　上	同　上
14	摂動論 II ―遷移過程	時間に依存する摂動を取扱い、黄金律と呼ばれる、現象の理解にも、実用にも極めて有用な公式を導く。応用として原子核の大きさを測る電子散乱、光の吸収、放射の問題を考察する。	同　上	同　上
15	現代の自然像	現在、物質は原子→原子核→陽子・中性子→クォークおよび電子という階層構造を成し、基本粒子間には光子、グルーオン等の交換による力が働いていると考えられている。こうした自然像の発見の歴史と現在の課題について述べる。	同　上	同　上

＝ 微生物機能に学ぶ化学（’０１）＝（R）

〔主任講師：別府　輝彦（日本大学教授）〕
〔主任講師：髙木　正道（東京農業大学教授）〕

全体のねらい

地球上の最先住民である微生物の持つ遺伝子、構造、化学反応の多様性及びその地球エコシステム維持に働いている機構を理解し、更にこの多様性を発酵生産や環境保全に利用してきている人間の営みの歴史や実績を知る。そして通常あまり意識されない微生物化学反応の恩恵の大きさを納得し、微生物機能に学ぶ姿勢を身につける。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序論（1） 微生物細胞の構造と化学反応	進化の過程で、微生物の遺伝子の変化に伴って、細胞構造や細胞増殖機構などが多様化し、それが現存の微生物に見る多くの化学反応を可能にした。微生物分類学はこの多様性を整理しており、微生物の理解に重要である。	髙木　正道（東京農業大学教授）	髙木　正道（東京農業大学教授）
2	序論（2） 地球上での生命の誕生と歴史	45億年の地球の歴史の中で、化学進化により生物が誕生した。まず原核細胞である細菌が誕生、これが様々に進化し多様化して現在の細菌になってきたが、一方酵母・糸状菌などの真核微生物や高等動植物も誕生した。	同　上	同　上
3	序論（3） 微生物遺伝子の構造と機能及び進化と適応の機構	微生物の多様性の謎はその遺伝子に書き込まれている。その構造や働きを理解することによって、遺伝子の変化による進化の機構や遺伝子の発現制御による環境への適応制御機構をも理解することが可能になる。	同　上	同　上
4	地球エコシステム維持の機構（1） 炭素の循環と有機物の分解	地球は一つのエコシステムであるが、これを大切に維持しなければならない。この維持のためには、炭素の循環が正常に進行することが大変に重要である。この点で微生物の果たしている重要な役割を理解する必要がある。	同　上	同　上
5	地球エコシステム維持の機構（2） 変わり者の微生物達	微生物の仲間には、様々な代謝系を持つものがいる。無機物の代謝、光合成、窒素固定、特殊な構造の化合物の分解などの能力を持つこれら微生物により地球上での炭素、窒素、硫黄などの正常な循環系が維持されている。	同　上	同　上
6	地球エコシステム維持の機構（3） 極限環境微生物など	通常の生物が生存できないような極限環境の中で生育できる微生物が数多く見いだされてきている。これら微生物の働きが地球エコシステムの維持に果す役割も解明されつつあり、微生物の多様性の恩恵は予想以上に大きい。	同　上	同　上
7	発酵化学（1） 微生物利用学の歴史	人類が微生物の存在に気づいたのは17世紀であるが、それ以前から微生物の機能を利用する技術を発展させてきた。また、現在でも微生物の存在を意識せずに利用していることもある。これら歴史に学ぶことも多い。	別府　輝彦（日本大学教授）	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	発酵化学（2） アルコール発酵と有機酸発酵	現代の発酵工業においては、微生物の行う化学反応やその制御機構を十分に理解して利用している。最も古から生産されてきたアルコールや有機酸の発酵の化学的基礎と共に、微生物の管理や発酵産物の処理も重要である。	別府　輝彦	髙木　正道
9	発酵化学（3） アミノ酸発酵と核酸発酵	日本で大きく発展したアミノ酸や核酸の発酵生産は、微生物の生理や生化学の基礎研究に負うところが大きい。これら発酵の基礎と生産の現状とを理解し、新たな発酵分野の開発の将来を展望したい。	同　上	同　上
10	発酵化学（4） 抗生物質と酵素の生産、その他の発酵	これらも日本の発酵工業が世界に誇る分野である。抗生物質ではその生産微生物の特性や使用した抗生物質への耐性菌出現に対抗する新規抗生物質開発の努力を、酵素では生産した酵素の応用分野の開発の工夫を学びたい。	同　上	同　上
11	発酵化学（5） 遺伝子工学とその利用・蛋白質生産と代謝工学	遺伝子工学により、微生物の遺伝子を操作し、新規な機能を持つ微生物を計画的に育種することが可能になった。この技術を理解し、これが実際に利用されている分野、特に蛋白質の生産や代謝工学を学ぶ。	髙木　正道	同　上
12	環境保全の化学（1） 元素循環の人工的促進	地球エコシステム維持に微生物は重要な機能を果している。一方、人口の増加や人間活動の多様化によりこのエコシステムに異常が生じつつある。微生物の機能を利用し、元素循環を人工的に促進する必要が指摘されている。	中村　剛 （三菱重工業株式会社基盤技術研究所）	同　上
13	環境保全の化学（2） 難分解性物質の分解	有機化学工業の発展により人類は多大の恩恵を受けた。しかし地球環境の悪化をも引き起こした。その重要な要因は、生物によって簡単には分解されない化合物の残留である。微生物を利用してこれを分解する必要がある。	同　上	同　上
14	環境保全の化学（3） 組換え生物の利用	遺伝子工学により生物の育種技術が大きく進歩した。この技術と微生物遺伝子とを組み合わせて用い、害虫や植物病原菌に耐性な遺伝子組換え作物を農薬の使用量を抑えながら生産するなどの環境に優しい農業が期待される。	髙木　正道	同　上
15	微生物と高等生物との共存と直接的な相互作用	人類や地球環境に欠くことのできない大切な微生物の中でも、ある種のものはヒト、動物、植物の病原菌となる。人類にとってこのような悪玉としての微生物との共存も、微生物との避けて通れない付き合いの一つである。	同　上	同　上

＝分子生物学 （’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：石川 統（東京大学教授）〕

全体のねらい

地球上に棲む生物たちの大きさ、形、行動はきわめて多様であるが、彼らの生命は共通の原理に基づいて営まれている。その共通原理を着々と解明しつつあるのが分子生物学である。本講義は、分子生物学の成果を平易に解説することを目的としている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生命現象と分子生物学	生物学にはさまざまな研究分野がある。その中で、生物の営みを分子と分子の相互作用として説明しようとする分野が分子生物学である。ここでは、おもに、分子生物学とその他の生物学諸分野の関係について考える。	石川 統（東京大学教授）	石川 統（東京大学教授）
2	生体を構成する分子	生命現象は、細胞や生体を構成するさまざまな分子の働きによって支えられている。細胞の内外に存在する分子について述べ、核酸、タンパク質、糖質、脂質など生命活動に特有な生体高分子を中心に、その構造と機能を概説する。	藤原 晴彦（東京大学助教授）	藤原 晴彦（東京大学助教授）
3	タンパク質と酵素	生体を構成する高分子の代表であるタンパク質は、生体の構造をつくるだけでなく、酵素としてすべての生体反応を触媒したり、遺伝子発現の調節や外敵からの防御などに重要な役割を果たしている。このタンパク質の構造と機能の関係を解説する。	石浦 章一（東京大学教授）	石浦 章一（東京大学教授）
4	遺伝と遺伝子	遺伝現象の根本にある遺伝子の存在の予測、遺伝子の化学的本体がＤＮＡであることの発見、さらに、ＤＮＡの三次元構造の解明など、今日の分子生物学の基礎となった研究とその周辺を概説する。	東江 昭夫（東京大学教授）	東江 昭夫（東京大学教授）
5	ＤＮＡとＲＮＡ	遺伝情報の発現にさいしてのＤＮＡとＲＮＡの役割分担について解説する。機能的ＲＮＡの種類と作用を整理し、あまり知られていないＲＮＡの側面も紹介する。また、ＲＮＡを遺伝子とするウイルスの複製機構についても述べる。	同上	同上
6	ＤＮＡの複製	原核生物と真核生物の中から適当な数種を選び、ＤＮＡの複製のしくみを解説する。細胞周期とどのように連動して制御されているか、また、ＤＮＡをめぐる動的な代謝がＤＮＡ複製の正確さを保証していることについても言及する。	同上	同上
7	遺伝情報とは何か	ＤＮＡが発見されてから、それが遺伝子の本体であることがわかるまで、ほぼ80年かかった。どのようにして、それが明らかにされたかを紹介する。また、遺伝暗号とは何であり、それがどのようにしてタンパク質の性質を決めているかを解説する。	石川 統	石川 統

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	遺伝情報の発現１転写	遺伝情報が細胞内で利用されるためには、ＤＮＡがいったんＲＮＡにコピーされる必要がある。この過程は転写と呼ばれ、遺伝情報の発現量や発現時期を調節する重要なステップである、転写機構、転写に関わる酵素、転写を調節する因子などについて述べる。	藤原　晴彦	藤原　晴彦
9	遺伝情報の発現２プロセシング	真核細胞では、転写されたＲＮＡがそのまま働くことは少なく、核の中でさまざまな修飾や加工（プロセシング）を受ける。スプライシングやキャッピングなどの真核細胞に特有なｍＲＮＡのプロセシング、さらにｒＲＮＡやｔＲＮＡのプロセシングのしくみについて解説する。	同　上	同　上
10	遺伝情報の発現３翻訳	翻訳は、遺伝情報がタンパク質に写しとられる最後の過程であり、この正確さが生命の源になっている。ｔＲＮＡをかいしてリボソーム上でｍＲＮＡの情報に従ってアミノ酸がつながれていく機構を、原核生物と真核生物の違いをもとに解説する。	石浦　章一	石浦　章一
11	遺伝子操作	すべての生物がもつ遺伝情報の発現にいたるしくみに基づいて行われる遺伝子操作技術およびその研究を紹介する。ある生物の遺伝子ＤＮＡを、ベクターというＤＮＡをかいして他の生物ないしはもとの生物へ導入すると、増殖や発現をさせることができる。	渡辺雄一郎（東京大学助教授）	渡辺雄一郎（東京大学助教授）
12	突然変異と分子進化	ふつう遺伝子は正確に子孫に伝えられるが、まれにはさまざまの原因で、その構造が変わる突然変異が起こることがある。このような変異が選択により、あるいは偶然に、１つの生物集団に拡がる現象が分子からみた進化である。これらのしくみについて解説する。	石川　統	石川　統
13	タンパク質工学	現代では、遺伝子を改変することによって、思うままにタンパク質の構造と機能を変化させることができるようになった。ここでは、寿命や基質特異性の改変などの実際の応用例をもとに、タンパク質改変技術と得られた結果を紹介し、将来を展望する。	石浦　章一	石浦　章一
14	ゲノムとゲノミックス	生物がもつ遺伝情報すべてを解読する研究が進んでいる。すべてが解読されると、その生物の何がわかるのであろうか。遺伝情報がいつ、どのような時期に発現されるかなどの総合的な解析について、今後必要とされるゲノミックスの考え方を紹介する。	渡辺雄一郎	渡辺雄一郎
15	分子生物学と社会	ヒトゲノムがほぼすべて読みとられ、私たちの身体のブループリントも解読できるようになると、遺伝子（胎児）診断に伴う治療法の選択、寿命予知と介護など、社会と関わる問題も多くなった。これら生命科学の将来と私たちの未来について対談する。	石川　統 石浦　章一	石浦　章一 石川　統

＝ 宇宙の進化（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：杉本　大一郎（放送大学教授）〕
〔主任講師：吉岡　　一　男（放送大学助教授）〕

全体のねらい

宇宙にはどのような天体があるのだろうか。それらはどのようにして、われわれが現在見るような宇宙の構造を形成するようになったのであろうか。この科目ではその進化のドラマを語る。それらは実証的自然科学としての探求によって得られたものである。ここでは、ビッグバンから始まった時間の経過に沿って述べるのではなく、より身近な概念から始め、科学として理解しやすい順序に話を展開する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	進化する宇宙	ビッグ・バンで始まった宇宙は進化し、構造と秩序に富んだコスモスに発展した。銀河団と銀河が生まれ、銀河の中には星団と星が生まれた。星の中には惑星系を持つものが現れ、地球では生命が発生した。この進化のドラマを概観し、この科目へのプロローグとする。	杉本大一郎（放送大学教授）	杉本大一郎（放送大学教授）
2	宇宙からの情報	宇宙の進化の研究は、宇宙の観測と理論の比較を元に行われる。ここでは、宇宙の観測をいろいろな視点から概観し、後の章の観測の話のための基礎的知識を提供する。	吉岡　一男（放送大学助教授）	吉岡　一男（放送大学助教授）
3	宇宙を探る道具	宇宙を探るための理論的道具立てを学ぶ。すなわち物理的概念や法則を具体例を交えながら説明し、後の章の理論の話のための基礎知識を提供する。さらに、ＨＲ図等、観測データと理論的研究の仲介の役割を果たす図表等を説明する。	同　上	同　上
4	星の誕生と主系列星	星はどのようにして生まれ、何をエネルギー源として光っているのか、星の内部はどのようにして分かってきたか、星はなぜ進化するのか等、星の進化の基礎を解説し、太陽ニュートリノ問題や主系列星とその寿命などの解説を行う。	野本　憲一（東京大学教授）	野本　憲一（東京大学教授）
5	赤色巨星と進化の終末	星の内部での原子核反応と元素合成の進行、星が進化する理由、星団の進化と年齢などを解説し、大質量星における重力崩壊と超新星爆発・小質量星における白色矮星の形成など星の質量によって異なる進化の終末段階を迎えることを解説する。	同　上	同　上
6	超親切爆発と元素合成	大質量星や白色矮星が超新星爆発を起こすメカニズムは何か、どのような元素を合成し放出するかなどを解説する。大マゼラン雲に出現した超新星1987Ａのニュートリノ やＸ線・ガンマ線による観測、高赤方偏移の超新星の観測で分かってきたことも解説する。	同　上	同　上
7	惑星系とその起源	地球や木星など、惑星の運動と内部構造について概観する。ついで、原始太陽系の誕生、太陽系星雲の形成ついて簡単に述べた後、「太陽系形成標準モデル」に基づいて、惑星系形成のシナリオを紹介する。	中澤　清（東京工業大学教授）	中澤　清（東京工業大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	系内小天体・系外太陽系	わたしたちの太陽系には、惑星のほかに小惑星や衛星などいろいろな小天体が知られている。これら小天体の特徴を簡単に概説し、それらの起源について考える。また、近年発見が相次いでいる系外太陽系についても紹介し、「標準モデル」と比較する。	中澤　清	中澤　清
9	銀河の発見	人類が銀河を発見した過程ほ振り返り、銀河からなる宇宙という現代の宇宙像と宇宙の広がりのスケールを確認する。もっとも身近な銀河としての銀河系の性質とその探求方法を解説する。さまざまな銀河の形態とその分類法にも触れる。	岡村　定矩（東京大学教授）	岡村　定矩（東京大学教授）
10	銀河の構造と性質	銀河とはどのような天体で、どのような性質を持つかを概観する。銀河の基本構成要素、光度関数、形態－密度相関、中心核の活動性などを学ぶ。銀河に付随するダークマターの存在を指摘する。銀河のスペクトルを合成する銀河進化モデルを解説する。空間分布の階層構造にも触れる。	同上	同上
11	銀河から宇宙へ	銀河を観測することが宇宙の構造を探る上でどのような関わりをもつかを概説する。銀河の距離決定の基礎を解説する。銀河の観測から、宇宙論パラメータを決定するさまざまな方法を概観する。高赤方偏移にある銀河の観測が進み、銀河の進化が見え始めたことについても触れる。	同上	同上
12	ビッグバン宇宙モデル	ハッブルの法則、宇宙マイクロ波背景放射、軽元素の存在量という３つの観測事実から出発して、ビッグバン宇宙モデルの必然性とその物理的な意味を説明する。また、膨張宇宙論の年譜を俯瞰する。	須藤　靖（東京大学助教授）	須藤　靖（東京大学助教授）
13	宇宙の階層構造と暗黒物質	宇宙初期の密度ゆらぎが膨張宇宙における重力的進化によって階層的構造に形成するに至る道筋を概説する。最新の宇宙論的シミュレーションの結果を可視化したものを使いながら視覚的に理解できるように配慮する。	同上	同上
14	観測的宇宙論	宇宙の大構造という最もマクロな存在形態を研究することが、宇宙を特徴づけるパラメータの決定を通じて、宇宙の初期条件を推定する最も重要な方法論であることを紹介しながら解説する。さらに今後の観測的宇宙論を展望する。	同上	同上
15	宇宙はなぜ進化する	これまでの章で、宇宙は「どのように」進化してきたかを学んだ。一方で、熱統計力学は閉鎖系のエントロピーは増大し、系は熱平衡に至るという。宇宙の場合にも構造が消失し、一様で何も起こらない熱的死の状態に至るのではないかと心配された。しかし、現実の宇宙は多様性に満ちている。両者の関係はどうなっており、宇宙は「なぜ」進化するのかを考え、この科目のエピローグとする。	杉本大一郎	杉本大一郎

＝宇宙の観測 （’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：吉岡 一男（放送大学助教授）〕

全体のねらい

宇宙の観測にはどのような種類があるのだろうか。それらの観測はどのようにして行われるのだろうか。観測の結果、どのような情報が得られるのだろうか。この科目ではこれら観測のイメージを与える。電磁波以外の手段による観測にも触れる。また、技術の発展が観測にもたらした変貌についても述べる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	宇宙の観測とは	宇宙の観測全般に関わる一般的内容を説明し、次章以降の準備とする。宇宙の観測はどのような特色をもち、どのような方法があり、どのような方法が使われ、その結果どのような情報が得られるかを、いくつかの実例を交えて解説する。	吉岡 一男（放送大学助教授）	吉岡 一男（放送大学助教授）
2	可視光観測の歴史	可視光での宇宙の観測は、古くから行われてきた。ここでは、光学望遠鏡等可視光での観測装置や観測方法について解説する。さらに、観測データの解析方法についても解説する。解説は主として歴史の流れに沿って行う。これらの知識は、他の波長域の観測にも応用がきく。	同上	同上
3	観測の現場	いろいろな分野での観測の間の類似点や相違点は何だろうか。観測が実際にどのようにして行われており、観測技術の進歩によりどう変わってきたのだろうか？ ここではこれらの点を担当講師が集まって議論する中で明らかにする。	同上	同上
4	光・赤外線観測の原理	天体からの光や赤外線の放射過程・伝搬散乱過程を説明する。そして、連続スペクトルや線スペクトルについて説明し、それらを観測する意義について解説する。また、光検出器や補償光学や光干渉計の原理についても解説する。	家 正則（国立天文台教授）	家 正則（国立天文台教授）
5	光・赤外線観測の実際	ハワイとチリの天文台のロケ画面などを用いて、望遠鏡と観測装置、制御計算機などを説明し、天体の導入から露出まで実際の観測を追体験してもらう。観測環境、観測限界などについても解説する。また、得られたデータの解析法についても説明し、体験してもらう。	同上	同上
6	光・赤外線で見た天体	元素分析の方法を説明する。また、可視画像と赤外画像の違いを示す。さらに銀河の形態と運動、クェーサー、重力レンズ、宇宙の大規模構造などについて得られた観測結果について解説し、教育的観測データの意義についても触れる。	同上	同上
7	電波天文学の始まりと発展	電波天文学は、今世紀の初頭から急激に発展してきた天文学の中でも若い分野である。数多くの発見がなされてきた。ここでは、その歴史を振り返りながら、特に観測装置の発展と関連させて、その特徴を解説する。	川辺 良平（国立天文台教授）	川辺 良平（国立天文台教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	電波で探る宇宙の爆発活動現象	電波天文学により、宇宙における様々な爆発現象、活動的な現象が明らかにされ、ダイナミックな宇宙の描像が得られ、宇宙の認識が深まってきた。ビッグバン宇宙の証拠となる宇宙背景放射や超新星残骸、電波銀河、太陽活動などの観測例について解説する。	川辺　良平	川辺　良平
9	ミリ波サブミリ波で探る天体の形成史	最近のミリ波サブミリ波での観測により、星惑星形成領域の観測や原始銀河の観測が飛躍的に発展してきた。ここでは、星・惑星系や銀河などの天体の形成に関連する最近の観測結果について解説する。また、惑星や銀河の形成過程の解明にとって重要なサブミリ波の本格的な観測にも触れる。	同　上	同　上
10	X線で見る宇宙	X線天文学の歴史を概観し、X線から宇宙のどのような情報が得られるかを説明する。そして、太陽コロナや超新星、パルサー、ブラックホールあるいは銀河団や暗黒物質について得られた知見を述べる。	牧島　一夫（東京大学教授）	牧島　一夫（東京大学教授）
11	ガンマ線で見る宇宙	ガンマ線がどのような機構で発生するかを説明する。ついで、宇宙線を形成する機構と考えられている粒子加速について説明する。そして、衛星や大気チェレンコフ光などによるガンマ線の観測について述べ、日豪共同によるカンガループロジェクトにも触れる。	同　上	同　上
12	電波波を用いない宇宙の観測手段	宇宙の観測として、電磁波以外の観測も盛んになってきている。ここでは、ニュートリノや重力波について、それらの検出方法やどのような成果が得られてきたかを解説する。また、現在進行中の観測計画についても述べる。	同　上	同　上
13	地球型惑星	水星、金星、地球、火星さらには月など地球型の太陽系天体について、地球からの観測や直接探査で得られた結果をもとにそれらの地形的な特徴や物理的な性質を学ぶ。また、他の天体では不可能な直接探査の方法の特質も論ずる。	松井　孝典（東京大学教授）	松井　孝典（東京大学教授）
14	巨大ガス惑星と小天体	木星、土星、天王星、海王星など巨大ガス惑星の知識は直接探査により格段に進んだ。ここではそれらの成果を学ぶ。太陽系には小惑星や彗星など多数の小天体も知られている。分光観測や直接探査により多くのことが知られるようになった。それらの成果も学ぶ。	同　上	同　上
15	これからの宇宙の観測	担当講師が集まって、これまでに学んだことをまとめる。さらに、将来の宇宙の観測がどのような方向に沿って行われるかの予測、また、行われるべきかの希望を話し合う。	吉岡　一男	吉岡　一男

この冊子に掲載した講義内容のうち、最新の開設年次の科目は、教材の原稿等を作成する時点で主任講師等が執筆しており、実際に印刷教材及び放送教材を制作する時点で内容等を組み替えていることもあり、必ずしも最終的な印刷教材・放送教材と一致していない部分がありますので、ご容赦ください。